
リリカル銀魂 Strikers ~銀女神鎮魂歌~

真王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル銀魂 Strikers 〈銀女神鎮魂歌〉

【Nコード】

N7600P

【作者名】

真王

【あらすじ】

『リリカル銀魂 Strikers』のさらにもう一つの物語。なのは達リリカル組とよるず屋コンビ+桂 小太郎+エリザベス+月詠に加え、ある世界から4人の女神が舞い降りた。そんなハチャメチャメンバーの前に、武装集団『鬼兵隊』のリーダー、高杉晋助と、世界を破壊しようとする”元”女神、マジエコンヌが現れ、世界を破滅に導くロストロギア”ダークソウル”ですべてを無にする気であった。そんな彼らのたくらみを阻止するために立ち上がり、さらに、銀時たちは新たな仲間とともに彼らを阻止するのであった。

リリカル銀魂 Strikers 銀の侍と4人の女神、始めるぞ
コラアアアアアア!!!注：キャラ崩壊の可能性あり!それがいや
なら回れ右!『リリカル銀魂 Strikers 銀の侍と4人の
女神』からタイトルルチェンジしました。現在の使用作品：リトルバ
スターズ、angel beats、スプラッターハウス、HOD、
コープスパルティイ、Tolover、涼宮ハルヒの憂鬱、史上最
強の弟子ケンイチ、クレヨンしんちゃん、らき すた、マリオ、W
ORKING!、ロックマンX、スマブラ、インフィニットストラ
トス、マリオ&ルイージRPG3、魔界戦記ディスガイア、東方、
スーパーマリオギャラクシー、ピクミン2、フェアリーテイル、ア
ルカナハート、ニードレス、ハイスクールDxD、DOGDAYS、
ドラッグオンドラグーン、戦国乙女、インフィニティ・ブレード

まずはじめ

こんにちは。作者の真王です。

初のこの小説をだしたのですが、まだまだ新参者なため、駄文、字の誤りなどある可能性があります。が、私としては、この小説を書くことにいいことがあると信じているわけでした。この先もすごいことがあると思ってください。（ちなみに更新は不定ですけど）

「おーい。」

まず、よろず屋組とリリカル組に現れるキャラ達ですが、いろいろいますよ。たとえば、変わった学生集団とか、ドクロ面の大男とか、変わった店の従業員達とか、きのこの国n「おおーい！！きこえるかー！！」って、だれっすかこんな時に。

がちゃっ

????「やつとあいたぜ。待たせんじゃねーよ作者。」

あれ？銀さん、主役がここに来るなんて珍しいな。

銀時「うっせーな。暇だったからここに来たんだよ。」

そつつすか。でもちようどよかったよ。

銀時「何がだ？」

俺の作った小説に銀時ともう一人のことを紹介しようとしてたんだよ。

銀時「まじでか！……って、ん？もう一人？」

そっか「コンッコンッ」「あゝゝあいてますかー？」つとききたきた。

ガチャっ

「???」あれ？僕たちの出番は？」
「???」『物語が進んだら出してやる』ってな。」
「???」おいおい・・・おれたちも保留かよ。」
「???」『切ないな、それは。』
「???」出番が来るまで待つか。」
「???」おにいちゃん・・・。」
「???」我が輩の出番はまだか~~~~!!!!」
「???」出番がほしいわ・・・。」
「???」だっ大丈夫っすかね〜・・・。」

まずはじめ（後書き）

初投稿です。

気になるところがあったらかんそうをおねがいます。

第一訓：物語にはいくつものルートがある（前書き）

真王「記念すべき第一話。」

ネプテューヌ「リリカル銀魂 S t r i k e r s 銀の侍と4人の
女神。」

銀時「始まるぜ。」

第一訓：物語にはいくつものルートがある

ここは第一世界の魔法都市”ミッドチルダ”、その町のビルの屋上に一人の男が夜空を眺めていた。

????「この世界の月は綺麗じゃねえか」

その男は、赤い浴衣に左目は隠れており、キセルを吸っていた。

????「あんたもそう思わねえか？」

そういう男の後ろには、黒いローブを身に纏う人物がいた。

????「ふんっそんなもの興味などないが血のような赤い月と闇のような黒い月なら好きだな」

謎の人物は、吐き捨てるようなことを言う。

謎の人物「そういうお前にも変わった趣味があるのではないのか？
高杉晋助」

謎の人物は男・・・高杉晋助をちらかす。

高杉「変わった趣味とはご挨拶だな」

っと、高杉は軽く流す。

謎の人物「・・・まあいい。お前と私は目的が同じ者同士だからな」

i n 歌舞伎町

ここは歌舞伎町とよばれる町、その町では、天人あまんとと呼ばれる巫人がおり、さらにその町のとある店、”スナックお登勢”の二階にある”万事屋 銀ちゃん”がある。

その万事屋のオーナー・坂田銀時と宇宙最強の戦闘種族「夜兔族」の神楽は、暇を持て余していた。ゾーマとの闘いから数カ月。平和な毎日を過ごしている。相変わらず依頼はあんまり来ないが、装置を使つてたまにフェイト達が遊びに来る。

銀時はため息をついた。

銀時「暇だな…」

神楽「そうアル…」

ボソツと小さく呟いた。

???「おはようございまーす」

そう言つて現れたのは、万事屋の働き者・志村新八である。地味な存在かつツッコミ役という悲しい役につけられた人物である。

新八「余計なお世話じゃ!!…っとうしたんですか銀さん」

新八が銀時に聞くと

銀時「どうしたもこうしたも暇で暇でヤル気でねえんだよ」

神楽「マジ退屈ネ。何も無いままってというのは銀魂として面白くないネ。もっといいことしたいアル」

銀時・神楽「はあ〜」

再び銀時と神楽はため息をついた。
どうしたものかと考えた。
そこで思いついた。

神楽「銀ちゃん、私達がなのはちゃん達の世界に行けば良いアル！
」

銀時「おおー、そうだよそれだよ！何故それに気付かなかったんだ
！？」

新八「ええっ！なのはちゃんのところですか?!」

新八は驚きとうれしさが両方出た。

銀時「よし！そうときまればじじいのもとに行くぞ。」

銀時は椅子から立ち上がり、ジャンプを片手に歩きだした。新八は準備を済ませ、そして神楽も傘を持ち出す。
玄関を出て、目指すは源外の工場。

????「む…銀時とリーダーではないか」

源外の工場へ向かう途中、後ろから声をかけられた。

銀時は立ち止まって、振り返った。

そこにいたのは、攘夷志士の集団の1人であり、『狂乱の貴公子』
桂小太郎とペット（!?!）のエリザベスだった。

神楽「あ…ツラとエリー」
ツラ？「ツラじゃない桂だ」

神楽にツラ呼ばわりされて突っ込む桂。そして銀時に話しかける。

桂「銀時、これから何処に向かうんだ？」

銀時「ああ、ちよいと暇だからフェイト達の世界に向かうんだよ」

つと銀時は軽く答えると……。

桂「なら……俺とエリザベスも連れて行ってくれないか？」

銀時・神楽・新八「……は？」

銀時達は片眉を上げた。

桂「向こうの世界に行けば、しばらくの間は真選組の追っ手から身を隠す事ができるからな」

などと言う桂らしい理由に、断つてもしつこくついて行くだろうな。断るのメンド癖さくなつたのかか、動向を許す。

まあ居ても邪魔になるわけでもないし。

桂とエリザベスを加え、源外の工場へ向かう。
すると、

銀時「月詠？」

月詠「銀時」

銀時達の前に、一人の女性が現れた。

顔に傷があり、口に煙管をくわえていて、黒い着物を着ている。地

下都市『吉原』の自警団『百華』の頭・月詠である。

新八「月詠さん！どうしたんですか、こんな所で？」

月詠「いや、日輪に”少しは外で休んできたなら”と言われてな」

銀時「ああ、そう」

確かに月詠は、ほとんど休まず吉原を見回っている。

日輪が月詠に休みを与えるのもわかる。

銀時がそんな事を思っていると、月詠は桂とエリザベスに気付いた。

月詠「そっちの男と天人は誰だ？」

銀時「俺の知り合いのヅラとエリザベスだ」

桂「ヅラじゃない桂だ」

桂が銀時の言葉を訂正する。

月詠「わっちは月詠でありんす。以後よしなに」

桂「俺は桂小太郎。好物はそばだ」

神楽「なんでいちいち好物を言うあるか！！」

好物を言い出す桂に神楽の突っ込みの拳が炸裂して、桂は血を吐いて倒れる。

苦い顔で哀れみする月詠にエリザベスがプラカードを出して挨拶する。

エリザベス『初めまして、エリザベスです』

月詠「……ああ、こちらもよろしく」

不気味そうにエリザベスを見て挨拶する月詠。月詠との挨拶を済ませ、桂は銀時に小さく声をかけた。

桂「銀時、貴様も随分と罪な男になったものだ。フェイト殿達以外にもこんな可憐な娘と付き合っ……」

銀時「オーイ。誤解を招く発言はやめてくれ、ツラ君」

桂「ツラ君じゃない桂だ」

五人と一匹は源外の工場の前に到着した。なんやかんやで、月詠も一緒に来る事になった。中には、何やら機械を弄ってる老人がいる。

銀時「おい、じーさん」

神楽「生きているあるか、老いぼれ」

新八「何言ってるんの神楽ちゃん！」

銀時と神楽が老人を呼んで、新八が神楽の言葉に突っ込んだ。

「???」「ん？」

老人が振り返った。

赤いゴーグルを付け、白髭をたくわえた老人は、平賀源外。江戸一番の機械技師であるが、ある事件を起こして今は指名手配されている。

銀時「ちよいと装置動かしてくんねーか？」

神楽「なのはちゃん達に久し振りに会いたいアル。」

源外「そりゃ構わねーが……」

源外は桂とエリザベスと月詠を見た。

銀時が源外に近づいて、小声で話し掛けた。

銀時「ツラとエリザベスはじーさんと同じ指名手配犯だから安心しな」

源外「そうか？まあそれならいいんだが、あの娘っ子は誰だ？また別品連れてきたな」

月詠を見ながら言った。

顔に傷があるとは言え、月詠はなかなかの美人である。

源外「まさか銀の字、お前の…」

銀時「違ーよ」

即座に銀時は否定した。

銀時「んな事より、とっとと装置動かしてくれ」

源外「わかったよ」

源外は移動した。

銀時、神楽、新八、桂、エリザベス、月詠の五人と一匹は装置の中に入った。

初めて装置の中に入った月詠は、珍しそうに中を見ている。向こうに行くのは久しぶりだな。

銀時がそう思っていると、装置の中が赤くなった。

すると、スピーカーから源外の声が聞こえた。

源外「銀の字。装置の中に赤いボタンがあるだろ？そのボタンを押すと」

銀時は嫌な予感がした。

そして予感的中した。何も知らない月詠が、ボタンを押した。

源外「装置の出力が最大になって制御出来なくなる。絶対に押すな」
銀時「ジジー！そっちを先に言えエエエ！！それに何でオメーがボタン押してんだ！？」

源外に向かつて怒鳴った後、月詠にも怒鳴った。

月詠「いや、すまん……気になってしまっ……」

月詠は素直に謝った。

銀時「つかこんなボタン、前までなかったぞ！これじゃ白夜叉鎮魂歌と攘夷戦争鎮魂歌と同じパターンじゃねーか！」

銀時が怒鳴っていると、装置内の赤い色は濃くなり、電気がビリビリする。

源外「まあ行き先は、なのはの世界だから大丈夫だろ」

装置の外にいる源外は、呑気にそう言った。

神楽「ヘルペス！ヘルペスミーシー！！」

神楽が頭を抱えて叫ぶ。

新八「ヘルプミーだよ神楽ちゃん」

神楽に突っ込む新八。

桂「武士たる者どんな状況でアレ、常に冷静でなければならぬ」

エリザベス『うむ、その通り!』

桂、エリザベス、月詠は冷静だった。

銀時・神楽・新八「落ち着けるかアアアア!!!」

ありったけの声で、銀時と神楽と新八は怒鳴った。

直後、赤い光は強くなり、バチツと強烈な閃光を放った。

光が収まり、源外は装置の扉を開けて中を見た。五人と一匹の姿はなかった。

源外「まあ銀の字なら大丈夫だろ」

in ????

銀時たちが装置でワープしているころ、この世界でも同じことが起きた。

この世界は、四つの大陸が宙に浮いていた。

近代未来都市のような紫の大地”プラネテューヌ”、ごつごつして工場の多い黒の大地”ラステイション”、雪が降り積もる白の大地”ルウイ”、自然いっぱい緑の大地”リーンボックス”、その大陸達の天にいちする”天界”があった。これを総じて、ゲーム業界と呼んでいる。

そのゲーム業界のプラネテューヌのある場所で

????「イースン遅いな」

などという白のパーカーワンピースに、ピンクよりの紫の髪の女の子・ネプテューヌが退屈そうにしている。

「???」我慢しなさい。呼ばれているのにとっと帰るのはダメでしょ?」

つと黒い髪に赤いリボンでツインテールにして、クリアドレス(スカートが短い)とガーターベルトを身につけている少女・ノワールが注意する。

「???」なにかあったの?」

つと白い帽子に白い服をきて、周りから見れば、『かわいい』が一言に出てきそうな少女・ブランが心配そうに聞く。

「???」あらあら・・・一体どうしたのでしょうか」

つと腰まで伸びた金髪にグラマーな体をもつ女性・ベールも心配している。

この四人は、イースンことイストワールに『面白いものがある』と呼ばれてきたのだが、彼女が姿を現していないのだ。数分待っていると、

「???」お待たせしてすみません」

つと四人が声のしたほうへ向くと、本に座っている妖精のような少女が現れた。

ネプテューヌ「も〜イースン!すぐつく待っちゃったよ〜!」

ネプテューヌはぷりぷりに怒る。

ノワール「どうしたんですか？」

ノワールが尋ねると

イストワール「すみません。最終調整に手間取ってしまったんです
<(^ - ^ ;)」

イストワールが少し焦って答える。ちなみに彼女の語尾の顔文字は、
彼女曰く”仕様です”らしい。

ブラン「最終調整？」

ベール「それって、あなたが言ってた面白いものですか？」

そう聞くと

イストワール「ハイそうです(、ー、)b」

つとやってグツ！つと親指を上げる。

イストワール「それにあなた方以外にも呼んでおきました。」

ネプテューヌ「え？それはだ」「ねぶねぶ〜〜！」「ってこんぱっ？
！」

振り返るとこのアクセサリーのついたヘアバンドにピンクのセータ
ーと背中にまで伸びた髪少女・コンパがやってきた。

????「わたしもいるわよ」

つというのは、緑のリボンに青ジャージと黒い服の少女・アイエフである。

ネプテューヌ・ベール「アイちゃんも?!」「」

つと二人は驚く。

ちなみになぜベールがアイエフと知り合っているかというところ、ゲーム友関係だからである。

イストワール「これで全員揃いましたね」

ネプテューヌ「ところでそのおもしろいものってなに?」

イストワール「ではまず私についてきてください(^^)ノ」

つと六人はイストワールについていった。

イストワール「つきました」

イストワールの案内でついでにきたネプテューヌ一行は目の前にある赤い布の中が気になった。

ノワール「まさか面白いものって」

ノワールが気になって尋ねると

イストワール「そう!この私、イストワール作の転送装置です!!」

「ばーん」と出てきたのは数人入れそうなスペースがある大きな機械”転送装置”である。

ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール・コンパ「すごーい
いー!!!」

アイエフ「すごいわね」

五人は目を光らせるほどすごく感動しており、アイエフはそこそこ感動している。

イストワール「ではみなさん、準備をするので中で待ってください」

つと指示を出し、装置をいじり始める。

ネプテューヌ「それにしてもイースン一人でこれを？」

ネプテューヌの問いにそうですよとイストワールが答える。そして、

イストワール「では・・・始めます!!」

イストワールはスイッチを押した。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

つと装置が作動している。すると、

コンパ「イースンさん。これはなんですか？」

コンパは赤い目盛が気になった。

イストワール「ああっそれは出力調整装置でしてそれを勝手にいじ

ノワール「どうすんのよ」

ブラン「諦めが肝心だ」

ベール「切実ですね・・・」

直後、赤い光は強くなり、バチツと強烈な閃光を放った。

光が収まり、七人の姿はなかった。

銀色の魂を持つ侍と女神たちが出会うとき物語は動き始めるのであった。

第一訓：物語にはいくつものルートがある（後書き）

真王「ひとつで数時間かかるとは思いもよらなかったよ……」

銀時「次回『子供は助けた人に憧れを抱く』 テイクオン……ちがった、テイクオフ」

第二訓：子供は助けた人に憧れを抱く（前書き）

真王「スバル登場！・・・そして銀時とネプテューヌが接触！さて
どうなる！

リリカル銀魂 S t r i k e r S 銀の侍と4人の女神 始めます」

第二訓：子供は助けた人に憧れを抱く

0071年4月29日。

ミッドチルダ臨海第8空港。

ロストロギアによる大火災が起こっていた。オレンジ色の炎が空港を包み込む。消防隊が消火活動をしているが、炎が収まる気配はない。

消防隊員1「ダメだ！これ以上は無理だ！引き上げよう！」

一人の消防隊が叫んだ。

消防隊員2「だが、まだ中に子供がいるんだぞ！」

仲間に振り返りながら、消防隊が叫んだ。

目の前に広がるのは、赤い空。

アレ？なんだコレ？空が真っ赤だ。

彼は床に倒れていて、うつすらと開けた片目で、真っ赤な空を見ている。

アレ？なんか蒸し暑くねえ？

彼の周りの風景には火に包まれている壁や窓、つまり火事の光景である。

アレ？何で俺、こんなことになってんだっけ？アレ？こんな前の方も、やらなかったっけ？アレ？

銀時「ん……？」

銀時は両目を開けて、ゆっくりと上体を起こした。頭を、くしゃくしゃと掻く。

銀時は周りを見回した。どこかの建物の中のような。しかも炎に囲まれていて、幾つか柱が倒れて、壁も崩れて道を塞いでいる。

銀時「何だ？ 火事か？ つーか、どこだ此処？」

銀時は記憶を辿る。

確か源外の転送装置に乗って、変な赤いボタンを月詠が押しして、そしたら訳分からなく転送して………気がついたら此処にいた。

銀時「よっこいしよう。」

とりあえず、銀時は立ち上がった。

座って考えていても、何もわからないし、解決策も思いつかない。

銀時「神楽ー、新八ー、ツラー、エリザベスー、月詠ー、おーい。……いねえのかよ。とりあえず此処から出るか。このまま此処にいたら、丸焼きになっちゃうからな」

銀時は出口を求めて、適当に歩き出した。

出口を求めて、炎が燃え盛る建物の中を歩き回る。炎の勢いが増していき、建物内の暑さが増していく。大量の汗を流しながら、取りで通路を進んでいく。

銀時「そろそろ出口、見つけねーと……マジでヤバイんだけど……」
危険な状況になると、途中で銀時は足を止めた。キョロキョロと周りを見る。すると……

銀時「!?!?!今、声が聞こえたような……」

銀時は、声がしたと思われる方へ歩き出す。
少し歩くと、広い場所に出た。その中心辺りにある石像の前に、女の子がいた。顔を俯きながら、泣いている。

????「お父さん……お姉ちゃん……!」

泣きながら父親と姉を呼ぶ女の子。
顔や服は、すでに所々黒くなっている。炎の熱さで大量の汗をかき、息苦しそうになっている。

銀時「親とはぐれたのか?」

銀時が呟いた時だった。

女の子「……痛いよ……怖いよ……こんなの嫌だよ……帰りたいよ……」

顔を俯きながら、泣き続ける。

声を聞いて女の子は、ゆつくりと目を開けて顔を上げる。緑色の瞳をしている女の子は、銀時の顔を見た。

女の子「……おじさん……誰……？」

銀時「おじ……！？」

おじさん、と呼ばれて銀時はショックを受けた。

一旦、女の子を床に降ろして、銀時は自分の右腕の匂いを嗅いだ。女の子は、不思議そうな顔で銀時を見つめている。

銀時「あのさ……俺、加齢臭とかする？」

右腕から顔を離して、やや落ち込みぎみに女の子に尋ねた。すると女の子は突然、驚愕の表情を浮かべる。

銀時「……あのさ、『おじさん』って呼ぶのやめてくんない？せめて『お兄さん』って呼んでくんない」

真顔で銀時が言った。

銀時の年齢は、まだ二十代前半……いや、二十代後半……あれ？どつちだっけ？まあとりあえず二十代なので、おじさんと呼ばれるのは、まだ早い。

おじさんと呼ばれるのが納得いかず、小さくブツブツ文句を呟きながら、銀時は、再び女の子を抱き上げた。

その時、

ガラガラガラガラッ

天井から大きな瓦礫が降ってきた。

銀時「なっ!!」
女の子「ひィッ……」

絶体絶命と思ったその時だった。

???「クリティカルエッジ!!」

ドゴ~~~~ン

女性の声とともに紫色の光が通った。銀時たちを助けた女性は、蝶のような羽(?)と黒っぽいタイツに腰の部分にトレードマークと思われる”N”の文字、結んだ二つの三つ編みが足までいくような紫色の髪で、蒼い瞳の顔はまるで女神のように美しかった。

ネプテューヌ「う……うっん……?」

ネプテューヌは(若干)寝ぼけながらも起きた。どこかの建物のようだが、あちこちに炎がまわっていた。

ネプテューヌ「え?え?なにこれ?火事?」

ネプテューヌはここに来る前を思い出す。

イストワールが転送装置を作った 装置作動 コンパが勝手にいじる 暴走して転送 現在。

ネプテューヌ「とりあえずどうしよう……」

ネプテューヌは悩んだ後、仲間たちを呼んだ。

ネプテューヌ「コンパー、アイちゃくん、ノワール、ブラン、ベール、どこなの？」

ネプテューヌは叫ぶも、返事はなかった。

ネプテューヌ「……しかたない、みんなをさがそう」

ネプテューヌは仲間たちを探すために、中に入って言った。

あたりを探すものの、炎の勢いは増し、暑さで大量の汗を流している。

ネプテューヌ「うう……熱い……なんかやばいかも」

暑さで熱中症になってしまいそうな時、

????「待て待て待て待て待て待て待てエエエエ!!」

男の声が聞こえた。

ネプテューヌ「え？何々？」

声のしたほうへ向くと、銀髪の男と青い髪の女の子がいた。

ネプテューヌ（さっきの声はあの人かな？）

ネプテューヌは男・銀時を見ていた。途中、銀時の変なりアクションがあったが。

ピシッ

ネプテューヌ「!!!?!」

音が聞こえ、上を向くと天井がいかにも抜けそうであった。そして、

バガッ

崩れおちた。

ネプテューヌ「いけない!変身!!」

突然ネプテューヌが光った後、紫髪の女性へと姿を変えた。

実はネプテューヌは紫の大地”プラネテューヌ”の守護女神であり、変身時の彼女はパープルハートと呼ばれている。後、ノワール、ブラン、ベールもネプテューヌと同じ守護女神である。

パープルハート「間に合え!はあああああああああああ!」

パープルハートはダッシュで銀時のところへ行き、

パープルハート「クリティカルエッジ!!」

ドゥ〜〜〜ン

彼女の十八番の技で瓦礫を吹き飛ばした。

パープルハート「大丈夫？」

パープルハートが銀時と女の子に向かって言う。

銀時「あっああ、まあな」

銀時は服に付いたごみを払い落とす。

銀時「っーかお前、そんな恰好して恥ずかしくねえのか？」

つと聞くと

パープルハート「ほっときなさい。それと私は”お前”ではなくてネプテューヌという名前があるのよ。・・・まあこの姿ではパープルハートって呼ばれるけども」

パープルハートは呆れて言う。

銀時「そうかい」

銀時が納得すると、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

建物が揺れ始めた。

銀時「つと、やべえな・・・さっさと脱出しよっせ」
パープルハート「・・・それもそうね」

パープルハートはひびの入った壁を見つめる。

パープルハート「あそこの壁から突き進むわよ！」

銀時「わーっ たよ。」

銀時は女の子を担ぐ。

銀時「今からあそこを蹴破って、外に出る。しっかりと俺につかまってろ。」

女の子は頷くと、銀時の体を強く抱いた。

自分につかまったのを確認して、銀時とパープルハートは壁に向かって走り出す。勢いを落とさずに壁に迫る。

銀時「うおりゃアアアア!!」

パープルハート「はあああああああ!!」

力強く床を蹴り、壁をぶっ飛ばした。

壁の先に、出口と思われる穴を見つけて、銀時とパープルハートは走る。

炎の中を駆け抜け、建物の外へと出た。

銀時「ふう……どうやら外に出れたみてエだな」

パープルハート「そうね」

外に出たのを確認して、銀時は女の子を床に降ろした。

女の子「お兄さん。お姉さん。助けてくれて、ありがとう!」

銀時「おお」

パープルハート「ええ」

女の子のお礼に、銀時とパープルハートは短く応えた。火災はおさまってないので、三人は建物から離れた。

離れた所から見て、燃えているのが空港である事がわかった。

銀時は、これからどうするか、ぽりぽりと頭を掻きながら考える。

パープルハートもどうするべきか悩んでいる。

すると、銀時を見つめながら女の子が言った。

女の子「……お兄さん達、凄いなア」

銀時・パープルハート「「ん？」」

銀時とパープルハートは考えを中断して、女の子に顔を向けた。

女の子「私……弱虫で……ずっと泣いてばっかで……何にもできなかった……」

自分の情けなさや悔しさで、女の子は泣き出す。

パープルハート「違うわ」

女の子「え？」

女の子は涙を流しながらパープルハートをみた。パープルハートは、女の子の頭に手を乗せ、

パープルハート「あなたが弱虫で泣き虫なら……ずっとその場で泣き続けていた。けど、あなたは”家族を探す”という勇気があったのよ」

銀時「そうだ。泣きながらでもいい。ボロボロでみっともなくとも、諦めねエで進み続けたんだ。恥じる事なんてねーぜ」

二人の励ましに、女の子は泣きやんだ。

女の子「わたし、スバル・ナカジマって言うんだよ。お兄さんたちは？」

女の子の名はスバルと言い、銀時とパープルハートも名前を言う。

銀時「俺は坂田銀時、『侍』だ」

パープルハート「私はネプテューヌ、プラネテューヌの『^{ハイド}守護女神』よ」

スバル「侍？^{ハイド}守護女神？？」

三人が話で話し合っていると、空に誰かの声が聞こえたのか、スバルが振り向いて空を見上げた。

こちらに向かってくる、白い点を見つけた。段々近づいてきて、白い点が人である事がわかった。デバイスを持って、白いバリアジャケットに身を包んでいる。

スバル「お兄さん！お姉さん！助けが来たよ！」

スバルは後ろを振り返った。

スバル「……あれ？」

だが、そこに銀時とパープルハートの姿はなかった。

今さっきまで居たのに、忽然と消えてしまった。辺りを見回すが、やはりいない。

スバルは、少し淋しげな表情になるが、すぐにそれは消えた。そし

て決心する。

私も、あの銀髪のお兄さんと紫髪のお姉さんのように、強くて誰かを助けられる人になる。

そして4年後に銀時とネプテューヌとスバルは再会することになる。

第二訓：子供は助けた人に憧れを抱く（後書き）

真王「そういえばスバルって助けてくれた人に影響されているようだね。銀時では刀で、ポーポポではハジケをつかってたな・・・なら、私なりのスバルのポジションを考えるか」

スバル「次回『アクシデントは大乱闘の予感』 テイクオフ！」

第三訓：アクシデントは大乱闘の予感（前書き）

真王「感想があんまないOTL」

コンパ「あつあの…しっかりしてください」

ネプテューヌ「アハハ・・・『リリカル銀魂』始まるよ」

第三訓：アクシデントは大乱闘の予感

0075年。5月。

ミッドチルダ。第3起動高層ビル。

そこで数多くのガジェット達が大暴れしているという奇妙な事件が発生している。幸いにも閉店してあった為か誰一人もいなかった。そんな中でツインヘアーの栗色の髪の女性が多くのガジェットと戦っている。

高町なのは。19歳。機動六課の教導官を務めている。

レイジングハートを構えて、そこから大量の魔力を収束して一気に放つ。

???「デイベイン・バスター!!!!」

桜色の閃光が放たれ、無数のガジェットたちが一斉に消えた。これで大抵数多くのガジェット達を倒したにもかかわらず、まだ山ほど存在する中、もう3時間近く戦っている為、魔力の限界を感じた。

そしてパスを通してフェイトに援護要求を求める。

なのは フェイトちゃん、そっちはどう？

なのははフェイトにパスを通して話しかけると、フェイトのほうも苦しそうな状況であった。

フェイト ダメ、こっちのほうのガジェットたちも異常なまでの多さに苦戦している！シグナル達とフォ

ワード部隊の皆で戦っているから、もう少し時間がかかる！それまで辛抱して

なのは うん、わかった

パスを終え、フェイト達のほうも苦しい状況に追い込まれている。ガジェットたちが襲来して来たのは2ヶ月前であり、それまでは大した数は無かった上にそんなに強いわけじゃなかった。しかし、今回のガジェットの数は異常なまでに多かった。一体何が起きているのかわからないまま、なのはは悩む。

なのは「…こんなとき、銀さん達がいてくれたら…」

なのはは銀時の名を言い出す。この世界では銀時の存在は世界的に有名である。

坂田銀時。

『ジュエルシード事件』、『闇の書・ゾーマ事件』を魔法を使わず、剣だけで解決した男。

その鬼神の如き強さから『白夜叉』と呼ばれ、管理局内でも有名で、知らない人は殆どいない。

魔導師としてのランクで言えば、間違いなくなのは達と同じくS+は入る。

そしてゾーマを剣の腕だけで倒した銀時はまさに世界を救った英雄的な武神であった。

だが、実際に銀時の戦いの様子を見た者は、当時の事件の関係者やアースラの局員と、極僅かな人数である。だから本当に銀時がそんなに凄い人なのか、まだ信じられない人が多い。

だが、フェイト・シグナム・リインフォームからはゾーマと戦った銀時の鬼神の戦いっぷりの話を聞かされ、もしかすればなのはでも勝ってしまうのではないかと思ってしまうほどである。

なのは「フェイトちゃん、アルフさん、シグナムさん、リインフォ
ーさんの4人は銀さんの強さを知っているから…: どんだけ強いん
だろう?」

何故か銀時の事を考え出すのは。

魔術が使えないのにも関わらずにその鬼神のごときの強さを持った
武人が想像できないため、その眼で確かめたい気持ちであった。

シユルルルルルルル!!

なのは「何!?!」

奇妙な音に、なのはは後ろを向くと、そこから数多くの緑色の爪ら
しき刃のある触手がなのはを襲う。魔力が半端じゃなく付きかけて
反応が遅く魔法を唱える事ができなかつた。そして……

なのは「きゃあああああああああああ!?!?!?!」

無数の触手に体全体を巻かれて捕まり、その奥に引き込まれてしま
うのである。

銀時「……あれ?…: ここは? スバル?」

突如、またもや景色が変わった事で驚きだす銀時。周りの光景は何やら見慣れない町の景色を高速ビルの屋上から見えるのであった。一体どうしてなのか頭の中で混乱する中、神楽、新八、桂、エリザベス、月詠が銀時に駆けつける。

神楽「銀ちゃん！いつの間に来てたアルか！？」

新八「銀さん！大丈夫ですか！？」

神楽と新八は心配したのか銀時に駆けつけると、銀時は神楽と新八の姿を見て安心するかのうな表情で叫ぶ。

銀時「神楽、新八、無事だったか！…それに、ツラ、エリザベス、月詠！！」

桂「ツラじゃない桂だ！」

相変わらずツラ呼ばわりされて突っ込む桂を尻目に、銀時はこの状況が一体何なのかを考える。

銀時「ま、何とか無事に面子は揃ったわけだし…とりあえずこの状況が一体なんなのか考えようか。」

月詠「わっちらはあの転送装置によってこの異世界に来たようで、ここが何処だか分からん。」

桂と月詠は無事にメンバーが揃った事で安心しているが、訳の分からない場所に飛ばされて不自然に感じている。

神楽「銀ちゃん！ここ海鳴町じゃないアル！？」

銀時「え…マジで！？」

神楽は不安げに銀時に言うと、銀時は驚きだして周りを見ている。確かにそこはビルがばかり立っており、海鳴町とは全然雰囲気が違う。

一体どうしてこんな場所に付いたのか、本当にここがフェイト達の世界なのか理解できない銀時に、エリザベスがボートを出す。

エリザベス『まあ…無事に揃ったから良いんじゃない？』

神楽「うっさいネ！何どうでもいいような言い方するアルか!？」

銀時「おいおい、まさかこれもしかしたらまた別のアニメか漫画の

」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオンン！！

全員「!!!??？」

突如の大爆発で5人＋1匹は驚きだす。それはビルから何かが大暴れしている感じで暴れているようであった。

月詠「な…なんじゃ、今の爆発は!??」

月詠が驚く中、床から突如、緑の化け物が銀時達を囲んだのである。

銀時「何なんだよこいつらはー!??」

つと銀時は大きく叫ぶ。

新八「こっこれは…銀さん!」

神楽「銀ちゃん、こいつら何者ネ!」

神楽と新八は警戒しながらも傘と木刀を取り出して構え、月詠もクナイを構えだす。

銀時「知るかよ！こんな奴あの馬鹿皇子がなんか拾ってきたのか？」

銀時は怒鳴る。ちなみに馬鹿皇子とは、銀時の世界の八咫皇子のことである。

桂「何はともあれ、江戸の平和を乱すものは誰であろうと、この『狂乱の貴公子』桂小太郎が天誅を下す！」

エリザベス『お仕置き開始じゃ！』

桂はそう言いながら刀を抜いて構え、エリザベスがプラカードを構える。

銀時「いや・・・ここがどこであるかどうかもわかんねえよ。つうか、新小説が始まっていきなりバトル展開かよ」

新八「そんなこと言ってる場合ですか?!」

つとつじうじと文句言いながら銀時は、腰に差している『洞爺湖』と彫られている木刀『幼刀・星砕』を抜いて構える。

神楽「ちょうど良いアル、最近運動不足だったから相手をしてやるネ」

神楽も両手をボキボキと鳴らしてやる気満々であった。

月詠「来るぞ！」

月詠が叫ぶと、異形達は一斉に銀時達を襲い掛かる。

ミッドチルダ 第3起動高層ビル・エントランスエリア

ネプテューヌ（・・・あれ？）

ネプテューヌが目を覚ますが、なぜか周りが真っ暗である。

ネプテューヌ（何これ?! 暗いし動けない!・・・・・・・・あれ? 足だけ動く）

体中が金縛りにあったように動くことができないネプテューヌ（足は動くが）

ネプテューヌ（どうしよう・・・・・・・・このままじゃ・・・・・・・・ん? 足に何か違和感が）

ネプテューヌの足が掴まれていることに気づき・・・・・・・・引っ張られている。

ネプテューヌ（イダダダダダダ! ちぎれるちぎれるちぎれる〜!）

ネプテューヌはずっと足を引っ張られつづけ、

スポンッ!!

引っこ抜かれた。

ネプテューヌ「ウワツッ!!」

????「キヤアッ!!!!」

引っこ抜かれたネプテューヌはしりもちをついた。

ネプテューヌ「イタタタ・・・一体何g「気がついた?ネプ子」ってアイちゃん?!」

ネプテューヌは友達であり、仲間でもあるアイエフと再会出来た。

????「私たちもいるわよ」

そういったのは、女神仲間であるノワール、その後ろにはブランとベールがいた。

ネプテューヌ「よかった、みんな無事なんだ」

ネプテューヌがホッとしていると

コンパ「私は無事じゃないですううう~~~~~」

ネプテューヌのしたで気絶しているコンパがいた。

ネプテューヌ「うわっ!!!コンパ!大丈夫!?!」

ネプテューヌはすぐさま降りる。

コンパ「うう・・・大丈夫です」

と言って、埃を払い落とす。

ネプテューヌ「よかった・・・っというか「コドコ」？」

イストワール「ここは異世界なんですよ」

っといつからいたのか、イストワールが説明した。

ネプテューヌ「ええ!!? ってことはここはゲーム業界じゃないの!?!」

イストワール「はい」

ネプテューヌ又驚いて聞くと、イストワールは普通に答えた。

ネプテューヌ「じゃあここはどういう世k」

ドゴオオオオオオオオオオオオ

????「グオオオオオオオオオオ~~~~ン!!!」

全員「!!!!!!?」

突然の破壊音とモンスターの鳴き声为上から聞こえた。

モンスター「オオオオオオオオオオオオ!!!」

現れたモンスターは、緑の皮膚に数本の触手、大きな口を持ち、蠍のような赤い尻尾(?)が特徴を持っているが、ネプテューヌ達はこのモンスターに見覚えがあった。

ネプテューヌ「アバババン!?なんでこんな世界に!?!」

ネプテューヌのいうアバババンとは、リンボックスのダンジョンに住み着いた凶暴なモンスターである。だが彼女たちは、イストワールの協力でモンスターをすべて消滅させたのだが、そのモンスター・アバババンがここにいるのだ。

アバババン「グウオオオオオアアアアアアア!?!」

アバババンが咆哮を放って、上へと登って行く時、アバババンの触手に女性が捕まっているのが見えた。

ノワール「!考えている余裕はないわ・・・追いかけてあいつを倒すわよ」

つとと言って、懐からショートソードを取り出す。

ネプテューヌ・ブラン・ベール・コンパ・アイエフ

「うん!ノわかったノええノハイです!ノ任せなさい」

つと、それぞれ木刀・ハンマー・パイク・大きな注射器(ついか武器なのか?しかもどこから?)・カタールを構える。

イストワール「・・・ではみなさん、がんばってくださいね(´・`ノ」

ネプテューヌ・コンパ・アイエフ・ノワール・ブラン・ベール

「あんたも戦えよ!!!!!!(イースンさんも戦ってください!!!

!!!!!!)(怒)(怒)」

イストワール以外の全員が怒鳴る。

イストワール「……………非戦闘員でごめんなさい……………(T O T)」

イストワールは泣きながらも後をついて行った。

ミッドチルダ臨海第7空港

ここではフェイト達が成群のガジェット達の破壊をしていた。そしてようやく全てのガジェットは壊滅し、ツインヘアーの金髪の女性『フェイト・テストアロツサ』は陸に降り、四人の男女がフェイトに駆けつけた。

フェイト「皆、大丈夫!？」

????「はい!」

フェイトの心配の声に、三人の男女が応えた。

オレンジ髪のツインテールの少女。ティアナ・ランスター。16歳。

赤髪の男の子。エリオ・モンディアル。10歳。

ピンク色の髪の女の子。キャロル・ルシエ。10歳。

ちなみにキャロルの隣には、使役竜フリードリヒ。通称フリードという小さな竜がいる。

三人とも機動六課の新人フォワード部隊である。

そして、赤い衣装を着たハンマーを持った少女ヴィータと、剣を持

ったピンク色のポニーテールの女性シグナムが駆けつけてきた。

フェイト「ヴィータ、シグナム！」

フェイトは安心したかのような顔で2人の名を呼ぶ。しかし、数が多すぎたのかさすがの2人も魔力を使い果たして、もう飛ぶことが出来ない状況になっている。

ヴィータ「こっちのほうも何とか片付いた。」

シグナム「だが・・・さすがに数が多すぎた・・・今までの3倍・・・いや4倍はあった。一体何がどうなって・・・。」

突如の急激なガジェットの増幅に理解できないヴィータとシグナムだが、最優先すべき事ははなのはの援護である。

フェイト「ここも無事に解決したし、後はなのはの援護に向かうよ。

フォワード
F「はい！」

フェイトは急いでなのはの援護に向かう報告をするが、パスを通じても全然返事が来なかった。

フェイト（返事が無い！？…一体なのは何が…）
????「た…大変ですー！」

つと、空からヘリが現れ、その中にはシャルがいた。

何やら慌てている様子であり、フェイトはシャルに聞き出す。

フェイト「シャル、どうしたの！？一体何が……」

シャル「第3起動高層ビルに、意味不明の異種生命体が突如ビル

に現れたそうです！」
全員「!?!」

そこは、なのはが大量のガジェットと1人で戦っている高層ビルである。なのはとのパスが通らないのも、そこでなのはに何かが起こった事である。

フェイト「なのは!」

フェイトは驚愕してなのはの名を呼んで叫んだ。

ヴィータ「ちい…なのはに何かあったのかもしれない!」

ヴィータは嫌な予感が嫌というほど想像する。

エリオ「フェイトさん!」

キャロ「早く、なのはさんの救出を!」

つとエリオとキャロがフェイトに言うと、迷いも無くなのはの救出に向かう。

フェイト達はヘリに乗って、なのはのいる第3起動高層ビルに向かっている。早く向かってでも大抵は1時間までかかる。

フェイトは飛んで一足先になのはを助けたいが、魔力がもうほとんど無い為、今はせめて体力の回復をするしかなかった。

そしてシャマルはモニターをだすと、そこには第3起動高層ビルに強大な異種生命体と小さなものが映し出されているのが分かる。

それを見たフェイト達は信じられないような表情をする。

しかも、魔導師達のデバイスによる魔法攻撃もびくともせず、さらに拡大し続けて刃の生えた触手の化け物が暴れている。そして、数多くの魔導師達が返り討ちされて叩き落されたりと言う恐ろしい光景を眼にする。

ティアナ「こ……こんな化け物染みた生命体がいたなんて……」

つとティアナは恐ろしく感じる。見たこともない生命体に拡大し続ける為、まさに化け物しか言いようがない。拳化け物は体から卵を出して、増殖しているのだ。だが、その化け物・アババンの触手の一つに見覚えのあるものが見えた。

フェイト「!?!? なつなのは!?!?」

そう、彼女の親友なのではあった。

ヴィータ「なつなんてなのはが」

シグナム「クツこんなときに高町が捕まるなんて」

ヴィータは驚き、シグナムは拳を握る。

フェイト、シグナム、ヴィータ、ティアナ、エリオ、キャラは残り少ない魔力でアバババンに勝てるのか心配になってきた。だが、その時シャルはモニターを見てある異変に気づいた。それは、アバババンの子供アババンチャイルドが次々と倒されていくのだ。

シャル「え……いきなり異種生命体がやられていく!?!?」

シヤマルがそう言うと、フェイト達も驚きだしてモニターに注目する。

確かに誰かがアババンチャイルドの体を踏み台扱いとして接近戦で戦っている所が映し出されている。

シグナム「一体誰がこんな無謀な事を……まさか！」

シグナムはある人物に気が付く。

それは、魔力を持たなくても鬼神の如くの強さを持った伝説の『白夜叉』の存在であった。

銀時「てえやあああああああああ……！！！！」

銀時は木刀をアババンチャイルドに向けて何度も大きく振り、次々アババンチャイルドを真つ二つに斬る。

銀時「はいイイイ！次イイイ！！」

銀時は首が飛ばされたアババンチャイルドの頭を踏み台としてアババンチャイルドの中に飛び込みながら、さらに木刀を振るった。アババンチャイルドは次々と斬られていく。

桂「おおおおおおおおおおお……！！！！」

桂も銀時に劣らない剣技を炸裂させ、アババンチャイルドを真つ二つに両断した。

休まず刀を横薙ぎに振るって数多くのアババンチャイルドを次々と切り離す。伊達に銀時と共に攘夷戦争に参加してなかったの様な

強さを炸裂させる。

神楽「ほあちゃああああああああああああああああああああ
！！！！！」

神楽は、傘を振り回してアババンチャイルドの首を一斉に切り落とす。時々時には、拳で殴ってアババンチャイルドを粉碎し、傘からマシンガンのように弾を発射して蜂の巣にする。

新八「うおおおおおおおおおお！！！！！」

新八も木刀でアババンチャイルド達をなぎ倒していく。

エリザベス「うおりゃあああ！！！」

そうかかれたボードを振り回してエリザベスもアババンチャイルドを粉碎し、時には口からキャノン砲を出して攻撃し、数多くのアババンチャイルドを吹飛ばす。

月詠「後ろがガラ空きじゃ」

アババンチャイルドの後ろから、月詠の声が聞こえ、同時にクナイが放たれた。

クナイはアババンチャイルドの後頭部を貫き、アババンチャイルドは破裂する。接近戦では2つの小刀で素早いスピードで一瞬で2匹のアババンチャイルドを斬る。

『白夜叉』・『狂乱の貴公子』・『夜兎族』・『宇宙生物』・『死神太夫』

まさに銀魂の5大超戦士とも言えるようなメンバーの人離れした戦いぶりは、アバババンチャイルドをも勝っていて次々とアバババンチャイルドを倒す。

新八「なんで僕だけ二つ名がないんですか!!!?」

新八はむなしく叫ぶが、あるとしても『ツッコミマスター』しかない。

ティアナ「す……すごい……!」

鬼神の如き強さで暴れ回る6人の姿を見て、ティアナは思わず口に出す。

ハッキリ言っ、フェイト達が到着する前にすでに解決しそうである。

そして、モニターに映し出されている銀時の姿を見てフェイトは…。

フェイト「銀…時…?」

フェイトが口を開いた。

眼をこすってもう一度モニターを良く見ると、間違いなく銀時の姿が映し出されていた。

フェイト「やっぱり銀時だ!」

ヴィータ「マジかよ!それに、神楽・桂・エリザベスもいるぞ!」
シグナム「やはり銀時か!」

間違いなく銀時達の姿である事にフェイト・シグナム・ヴィータが

驚きだす。

銀時だけじゃなく神楽、桂、エリザベスの3人の強さはあいも変わらずであり、始めてみる月詠の実力はもかなりの手練だとフェイト達は思った。

シヤマルも銀時がまさかこの世界に来ていたことに驚きを隠せなかった。

一方のフォワード隊のティアナ・エリオ・キヤロの3人は銀時の名を聞き、驚きを隠せなかった。

ティアナ「ふ…フェイト隊長、銀時って…まさか、あの武神・坂田銀時ですか？」

つとティアナは質問すると、フェイトは縦に頷く。

エリオ「『ジュエルシード事件』と『闇の書・ゾーマ事件』で、魔法を使わずに剣だけで解決し、さらにはその強さはなのは隊長とフェイトさんに匹敵するS+級に入る剣豪。そして世界を救った英雄で、人々からは「白夜叉」もしくは「エース・オブ・シルバーサムライ」とも呼ばれる伝説の武神」

銀時の噂を聞かされたことを改めて言い出すエリオ。

キヤロ「魔法を使わずに活躍したって噂は、本当だったんですね」

キヤロは、改めて銀時達が凄い人であると認識した。

そして銀時と桂は次々とアババンチャイルドを斬り倒すと、背中を合わせる。

銀時「よお…くたばってねえか、ツラ」

桂「ツラじゃない桂だ。伊達にお前と共に攘夷戦争に生き残ってはいない」

つと、桂は息切れしそうで溜息を吐くと、窓側に向く。そこにはアババンチャイルドの大群がいた。

桂「あそこに穴を空く。その隙に中に侵入して奴らの親玉を潰すぞ。」

……エリザベス、あれを！！」

エリザベス『了解！』

つと書かれたボートでアババンチャイルドを次々と粉碎しながら向かってくるエリザベス。

そして口から鋼鉄のスケッチ2つと、いつも桂が持っている爆弾の5倍の大きさを持つ爆弾を出す。

銀時「お前、エリザベスにこんな物騒な物を持たせたのかよ！？」

下手したらエリザベスの中でその爆弾が大爆発してとんでもない事が起こると銀時は突っ込むが、

桂「ぐずぐずしている暇はない！」

つと言いながら銀時に1つのスケッチを渡すと、2人はスケッチを構える。

桂「化け物共、見るが良い！！！！」

銀時「これが本当の……」

銀時と桂は一斉同時にスケッチをタイミングよく振り、2人のスケッチが巨大爆弾に直撃する。

銀時・桂「ゲートボールじゃ~~~~~!!!!!!」

飛ばされた巨大爆弾は、アババンチャイルドのいる窓側に向かう。そして直撃した後、巨大爆弾は大爆発して出口のように穴が開かれた。

月詠「銀時、桂、ここはわっち等が食い止める！だから主等は先に行け！」

神楽「銀ちゃん、ツラ、行くヨロシ！！」

新八「銀さん、桂さん、後は頼みます！！」

エリザベス『どうか、ご無事で！！』

神楽、新八、エリザベス、月詠の4人は銀時と桂アババンチャイルドの親玉の討伐をたくし、外にいるアババンチャイルドを次々と倒していく。

銀時「行くぜ、ツラ！」

桂「ツラじゃない桂だ！」

アババン「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

銀時と桂はそれぞれ刀を握って占領された第3起動高層ビルに侵入して突撃する。

物語が始まって、すぐにド派手なバトルが始まったのであった。

第三訓：アクシデントは大乱闘の予感（後書き）

真王「次回で銀時とネプテューヌがまた接触します。けど早く感想来ないかな〜」

ネプテューヌ「次回『息がそろつとどんなボスもへっちら』テイクオフだよ」

第四訓：息がそろつとどんなボスもへっちら（前書き）

真王「実は、黒神さんから4つのリクエストが欲しいというコメントをいただきました。かなえてあげると許可をもらえるというので、考えようと思います。」

銀時「つーか、許可もなくこの小説を作ったのはお前だろうが」

真王「・・・否定できない・・・」

コンパ「『リリカル銀魂』始まるです」

第四訓：息がそろつとどんなボスもへっちら

ミッドチルダ 第3起動高層ビル・10F

突如現れたアババンとアババンチャイルドに侵略された第3起動高層ビルの中に侵入する銀時と桂は、元を立つ為に親玉を討伐しに行く。次々と現れるアババンチャイルドを次々を斬り倒していきながら2人は下に向かっている。

桂「どけえ〜〜〜!!」

銀時「小便かけるぞ、このやる〜〜!!」

2人の侍の力により、次々とアババンチャイルドが斬り倒されていく。・・・つつか銀さん、小便って言うなや。

天人との戦いに慣れている2人にとっては朝飯前のような存在である。

眼の前に見えた扉は何やら頑丈に固まっており、アババンチャイルドの軍勢が続々と囲んでいる。

銀時「ちい・・・まだいやがるか!」

桂「だが、先ほどまでとは違うあの守りの塊から考えれば間違いないくあそこに親玉がいるはずだ! 一気に行くぞ!」

銀時と桂は刀を構えて強行突破しようとするが、突如2人の後ろから走っているかの様なローラー音が聞こえる。

銀時・桂「!？」

2人は後ろを向くと、1人の少女が素早く駆けつける。

「????」はあああああああああああ!!!!!!」

少女はアババンチャイルドの軍勢に飛び込むと、右手に装着した黒くて金属的なグローブでアババンチャイルドをすべてなぎ倒していった。

銀時「な………1人でえいりあん共を全て倒しやがった!」
桂「大した戦法と技だ。この世界にも銀時のような強いものが存在したか」

予想外の事に驚く銀時と桂。
そして、少女は後ろを振り向く。

「????」やっぱりまだ逃げ遅れがいたんだ。良かった、無事に見つか………て………?」

少女は銀時の顔を見て啞然とする。
少女の容姿は青い髪でショートカットのボーイッシュな少女で、頭に白い鉢巻をかけていて、何やら白いロングコートを着ていて緑色の瞳をしている。

「????」まさか………銀時さん!」

少女が、銀時の名を言い出すと、銀時は思わず驚きだす。

銀時「お前、何で俺の名前を?」

銀時が少女に尋ねると、少女は嬉しそうに銀時に抱き抱える。

「???? やつぱり銀時さんだ〜!!」

銀時「のあ〜!! ちょ……. ちょつとまてえ〜!!
何でお前が俺の名前を知っているんだ〜!!??」

大胆に抱かれて慌ててしまう銀時。彼の胸元には少女の大きな胸が押しかけられてしまい、動揺を隠せない。

それを見た桂はニヤニヤと笑い出す。

こいつ、絶対に後でぶっ飛ばす! と銀時はその時そう思った。

しかし、少女のほづを良く見ると、どこかで見たような感じで見る。

銀時「あれ? ちよつと待って……何か見覚えがあんだよな……どこかで会ったっけ?」

首を傾げる。

そして少女は銀時に名を言い出す。

スバル「お久し振りです、銀時さん! 私です、スバル・ナカジマです!」

少女がスバル・ナカジマと名乗ると……銀時はしばらく啞然とする中、我に返ってスバルの名を叫ぶ。

銀時「…………え…………嘘…………スバルウウウウ!??」

銀時の大声に、スバルはビクツと体を震わせた。

スバル「え……あ……はい」

マジでかアアア!?

銀時は頭を抱えて、今は真つ暗なビル内を仰ぐ。

銀時（え・・・いや、さつき会ったスバルは、まだ小学生位じゃなかったんじゃない!? てえええ!?!）

何がなんだか分からない銀時に、スバルは嬉しそうに声をかける。

スバル「本当にお久しぶりです。まさかここで4年ぶりの再会が出来て私、感激です」

銀時「4年ぶり?」

スバルの「4年ぶり」という台詞に銀時はあの光景がなんなのかわかった。

銀時（オイイ~~~~!! まさかあれは4年前の光景だったの!? え・・・銀さんだけタイムスリップしちゃったの!?!）

つと銀時は慌てる中、原因は装置の制御不能により、銀時だけ4年前の世界に飛ばされ、そして何故か予想外にすぐに神楽達の場所に飛ばされたのである。

スバルは桂を見ると、驚きだしてはしゃぎだす。

スバル「ああー!!」「狂乱の貴公子」桂小太郎さんだ!」

つと尊敬するかのような叫びにスバルは桂を見ると・・・

桂「む・・・俺の事も知っているのか。」

桂も、この世界では有名な存在である。

桂小太郎

『闇の書・ゾーマ事件』で銀時と同じく魔法を使わずに剣と爆弾で解決して活躍した侍。

かなりのクールボケで、しかも人妻好きと言うかなり変なところが印象的に大きい。その強さは銀時に引けをとらない強さを持っており、剣の腕もかなり高く、爆弾の使い手でもある。

しかも『んまい棒混捕駄呪』や『んまい棒鎖羅魅』などデバイスではない特殊な道具を使いこなす戦いぶりは、「狂乱の貴公子」・または「狂乱の騎士」とも呼ばれる。

スバル「はい、何せあの時空管理局遺失物管理部機動六課のはやて課長が最も信頼する、ヴィータさん、シグナムさん、シャマルさん、ザフィーラさんと同じ、5人目の騎士とも言われた伝説の侍です！」
桂「はやて……八神殿の事か!？」

銀時「スバル……まさか、この世界にフェイト達がいるって事か!？」

スバルがはやて、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラの名を言い出すと、銀時と桂はこの世界は間違いなくフェイト達の世界であると確信した。

そしてスバルは2人の質問に正直に答える。

スバル「はい……フェイトさんの事は知っていますけど？」

つとスバルは答えだすと、2人は間違いなくこの世界がフェイト達の世界であると確信する。

桂「何はともあれ、今はこの状況を何とかしないと。スバル殿、お主はこのビルに侵略している生物が何者なのか知っているか？」
スバル「え！？いついや私に聞かれてもわかりませう」「ビキビキビキ
ビキツ」「！？」

上からひび割れる音が聞こえ、そして、

バカアアアアアアアアン！！

????「ゴオオオオオオオオオオ！！??」

????「キヤアアアアアア~~~~~！！！！！！」

天井が崩れ、巨大生物と約6人ぐらいの少女たちが降ってきた。
だが、銀時は運悪く、少女達の下にいた。

銀時「へ???・・・ウゴツ!!!」

銀時は少女達の下敷きになってしまった。

ネプテューヌ「イタタタタタ・・・みんな生きてる？」

落ちてきた少女達の一人はなんと、ネプテューヌだった。

ノワール「いつつ・・・なんとかね」

ブラン「こんなのかすり傷程度よ」

ベール「汚れてしまいましたわ」

イストワール「私もなんとか無事です」

アイエフ「コンパ・・・大丈夫？」

コンパ「はうとうとう~~~~~」

さらに、ノワール・ブラン・ベール・イストワール・アイエフは無事のようにだが、コンパは目を回している。

銀時「おいちよっと」

ネプテューヌ「ん？」

下から声が聞こえるので、下を見ると

銀時「早く下りてくんねえか」

銀時がいました。

ネプテューヌ「あっごめんなさ……」

下りようとしたネプテューヌは銀時をまじまじと見つめている。

銀時「えっ？何見てんの？やめてくれないその眼差し」

銀時がやめてくれというが、

銀時「……あれ？何か見覚えのあるような……」

ネプテューヌを見て何かに引っ掛かり、考えていると、

ネプテューヌ「……あなたは坂田銀時？」

ネプテューヌがそういうと、

銀時「……なんでおれの名前を……」

声を上げた。

その大声に、ネプテューヌを含む全員が耳をふさいだ。

銀時「ちよっおまつ嘘つくんじゃねえーよ!!!どう見たってガキじやねーか!」

スバル「そうだよ!!!ネプテューヌさんっていったらもう少し背が高かったよ!!!」

銀時とスバルが目の前にいる少女をネプテューヌだとは信じてないらしい。

アイエフ「ネプ子・・・あんた一体何をしたの?」

ネプテューヌ「なっ何したって、目が覚めたら周りが火の海でちっちゃいスバルちゃんと銀さんがいて変身して一緒に脱出したただだよ〜」

アイエフの問いにどきまぎにこたえる。

銀時「あん?変身?」

スバル「変身って何?」

つと二人が変身という単語に興味を持った。その時、スバルの目が早く見たいと言っているようだ。

ネプテューヌ「それはこうだよ。変身!!!」

ピカ~~~~~ン

突然ネプテューヌから強い光が出て、おさまるとスバルを助けた頃と同じパープルハートになっていた。

凶暴だから」

つと説明するネプテューヌ。

銀時「あ？阿波馬場？何だそれ」

ノワール「アババンよ。あいつの名前」

銀時の間違いをノワールが訂正する。

アババン「グガアアアアアアアア！！！」

アババンが突然口から卵を出した。そして、

アババンチャイルド「ギユアアアアアア！」

5体のアババンチャイルドが生まれた。

銀時「ちっ！早くあいつをたおさねえとキリがないぜ」

銀時は木刀を構える。

ネプテューヌ「私たちもあいつを倒そうとしてるけど人質もってるから迂闊に手が出ないの」

ネプテューヌの言葉に銀時はアババンを見ると、白い服の女性が捕まっていた。

銀時「くそ！どうすれb「私にまかせてください！！」ってスバル！？」

つといきなりスバルがアバババンのほうへ向かっていった。

アバババン「！！グガガア！！！！」

アバババンチャイルド×5「ギャアアアア！！」

突進してくるスバルに気づいたアバババンがアバババンチャイルドに指示を出し、アバババンチャイルドが一斉に飛びかかる。

アイエフ「何やってんのよあの子！！死ぬつもり！！？」

コンパ「スバルさん！！」

二人はスバルを助けようとするが、

銀時「待てよ」

銀時に止められた。

アイエフ「何で止めるの！？」

アイエフの問いに銀時が、

銀時「あいつは・・・きつと強いぜ」

つと笑みを浮かべて、スバルを見ていた。

飛びかかったアバババンチャイルドが近づく中、

スバル「（・・・・・・・・・・・・いける！！）ハアツ！！」

スバルがカクツと右に曲がり、アバババンチャイルドの攻撃をかわ

す。

アバババン「!!!?ガルウ!!!」

近づいてきたスバルにアバババンが攻撃するが、ジャンプでかわされる。だが、

アバババン「(ニヤツ)ガアアア!!!」

見逃さなかったアバババンが尻尾でスバルを狙うが、

スバル「ふんっ!!!」

バシッ!

アバババン「ガア!??」

右手に装備したグローブで尻尾の軌道をずらした。これにアバババンは驚いてしまい、隙を作ってしまう。

スバル「(いまだ!)ハアアアアア!!!」

ズバンッ!!!

アバババン「ギイイイイイイ!!!??」

隙をついたスバルが、アバババンの触手を切り落とし、女性を助け出した。

スバル「これはおまけだよ!ハアッ!!!」

ズガンッ！！

アバババン「グバアッ！！？」

さらにスバルからの一撃をもらい、アバババンはたたきつけられ、のびてしまう。

アイエフ・コンパ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人はスバルの活躍に唾然としてしまった。

ネプテューヌ「スバルちゃんすご〜〜い」

ネプテューヌは感激し、

ノワール「なかなかやるわね」

ノワールは感心し、

ブラン「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ブランは無表情だが、驚いており、

ベール「あらあらあら・・・」

ベールは驚きながらも感心していった。

イストワール（あの人はかなりの魔力と運動能力を持っていますね。・・・彼女のことをもう少し調べる必要がありますね）

つと、イストワールはスバルの並はずれた身体能力と力に興味を持ち始める。

イストワール（しかし、彼女は人とは違う気を感じます。ネプテユ
ー又さんのような女神ではないのに・・・あれは・・・）

つとイストワールは何かを考えたが、やめた。

銀時「よう。おわったか」

つと銀時がスバルに声をかける。ちなみに、スバルに飛びかかった5体のアババンチャイルドは、銀時たちが倒して、死骸になっている。

スバル「はい。・・・つと」

スバルはアババンに捕まった女性をおろす。が、スバルはどこか
で見たような顔に考える。

スバル「この人・・・どこかで見たような・・・」

そして銀時は気絶している女性が無事なのか声をかける。

銀時「おい、大丈夫か！？返事をしろ！」

????「・・・・・・・・・・う・・・・・・・・・・う・・・・・・・・・・？」

女性はゆっくりと眼を開けると、銀時の姿が眼に映ると・・・なのは少し驚いたような表情で銀時の名を言い出す。

なのは「銀・・・さん?」

見知らない女性に名を呼ばれて、銀時はポカンとしている。

銀時「あの・・・どちら様で?」

と、銀時は目の前の女性が、銀時も良く知っている人物であると気付かずに言った。
だが、ジッと見ていると何か気になる。

銀時「あれ?ちょっと待って・・・何か見覚えがあんだよな・・・どこかで会ったっけ?」

首を傾げる。

しかし、女性の持っているデバイスを良く見ると、ボロボロに壊れかけていてもはっきりと分かる「レイジングハート」である。
そして銀時は気付いた。

銀時「お前っ!まさか・・・なのはか!?!」

驚きながら銀時は言った。

なのは「・・・ああ、やっぱり銀さんだ!」

なのはも銀時である事にはっきりとわかって銀時の名を言いだす。

銀時「えっ!?!?ちよっ・・・マジでか!?!」

驚いた銀時は、マジマジとなのはを見つめた。

なのは「私、19歳になりました!」

銀時「19!!?」

銀時は更に驚いた。

確かに今のなのはは、大人だ。元々可愛かったが、大きくなって大人の魅力的なモノもあつて綺麗だ。

銀時「あらら、すっかり大きくなっちゃって………ってちょっと待てエエエエ!!」

急に立ち上がって、銀時は叫んだ。

後ろにいる桂とスバル・さらにはネプテューヌ達も驚いて、体を震わせた。

銀時「おかしい！絶対おかしい!!だって…お前この前まで、まだ小学生……えええっ!?何これ?どうなってんだ!？」

目の前の事が信じられず、銀時は混乱した。

なのは「落ち着いてください、銀さん!」

なのはの言葉にピタリと混乱を止める銀時。

ネプテューヌ「……あれ?銀さんこの人と知り合い?」

ネプテューヌが二人の会話に入る。

銀時「知り合いにも何も、あの時のなのははまだ小学生だったんだぞ。」

銀時の答えにネプテューヌがキラーンと眼を光らせる。

ネプテューヌ「へえ〜。でもその年なら銀さんと結婚できるんじゃないかな〜?」

銀時・なのは「!!!? / / / / /」

ネプテューヌのセリフに銀時となのはが顔を赤くする。

それだけでなく、コンパとアイエフとスバルも顔を赤くし、ノワールの顔が真っ赤に染まり、ブランはそのネタいただきっというような顔をし、ベールはクスクスと笑い、桂はニヤニヤと笑っている。

その時スバルがなのはという名前を思い出し、正気に戻る。

スバル(って・・・なのはさんってあの『機動六課』の隊長の1人であり、『エースオブエース』の異名を持っているあの高町なのはさん?)

まさかの人物に会ったスバルは内心に驚き出している。

そして桂も一緒であった。

桂「高町殿!?!?!?!いつの間にかここまで・・・」

なのは「桂さん、お久しぶりです」

桂に気が付くと、なのはは親しそうに桂に挨拶する。

桂「うーむ、随分と大きくなったな。おこづかいに五十円あげようなのは「あ...いえ、結構です」

なのはは、やんわりと断った。

ネプテューヌ「何言ってるの! お金をもらったら自分の物にs」
「ソ泥かあんたは!!!」

ネプテューヌの発言にアイエフが突っ込む。
そして、なのはの隣にいるスバルに気が付く。

なのは「え……とう……君は？」

つとなのははスバルに名を訪ねると、スバルは名乗りだす。

スバル「ス……スバル・ナカジマです」

名のりだすと、なのはは驚きだす。

なのは「え……スバル・ナカジマって……まさか時空管理局陸士108部隊長、ゲンヤ・ナカジマさんの娘!？」

なのははスバルにそう聞き出す。

実はスバルには、魔導士達でもちよつと有名な新人魔導士。

4年前の事件でスバルは銀時とネプテューヌに助けられ、その後父であるゲンヤに銀時の事存在を知らされた。

魔法が使えない代わりに剣だけで鬼神の如くの強さを持った武神であることを聞かされる。

銀時の存在を知ったスバルは、その一週間後に魔法を習い始める。

銀時のように誰かを護れる武神になりたい・ネプテューヌのように誰かを助けられる人になりたいと言っ一心で、人一倍……いや人十倍的努力で、強力な魔法と技を得た。

他にも、姉のギンガにも、もしもの為に武術を学んでいた。

その翌年に時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校に入學すると、魔導士としては良い線を行くという程度だが、鍛え上げ

られたその力は誰よりも注目を浴びすでに？1の優秀な魔導士とも評価されていた。

その為、スバルの魔力は自分自身でも予想外の事にランクは陸戦AAA+となっている。

銀時のような、そしてネプテューヌのような心強い人間になりたいと言う理由で父・ゲンヤは納得して許した。

銀時「・・・え・・・スバルって、俺を目的にそれほどスゲー成績を残したの？やべえよ、なんかメツチャ照れるんだけど？どうすればいいんだ、ツラ」

桂「ツラじゃない桂だ。・・・しかし、魔導士とは思えないやり方だが、スバル殿のやり方はまさに侍の魂を持った魔導士とも言えよう。君のその信念に感動した。そんなスバル殿には攘夷志士タオルを上げよう」

つと桂は何処から出したのか、攘夷と書かれたタオルをスバルに渡す。

スバル「あ・・・ありがとうございます」

苦笑しながらも、スバルは攘夷志士タオルを受け取る。

なのは「二ヶ月間の間、どこかで修行していると聞いたから、ギンさんは心配していたよ。何でスバルがここに？」

姿を消したはずのスバルがどうしてこの第3起動高層ビルにいるのか、なのはは質問する。

スバル「実h「バガアアアアアアアアアアアアアアアア！！」なっ！！

？」

スバルが説明しようとした時、気絶していたアバババンが復活した。

ネプテューヌ「ああっ！しまった、忘れてた！」

ネプテューヌ「又達もなのは達の会話を聞いていたため、アバババンの存在を忘れてしまったようだ。」

アバババン「グヴヴヴヴウウウウ……」

アバババンは、銀時達を睨んでいる。相当お怒りのようだ。

銀時「何だ？無視されて怒ってんのか？ああん？」

銀時もアバババンを睨む。

アバババン「ヴヴヴヴヴウウウウウ……」

アバババンは数秒間睨み続けた後、

アバババン「……グアッ……！」

窓に向かって走り始めた。

全員「えっ！！！？/なっ！！！？」

突然のアバババンの行動に驚く。そして、

バリ~~~~ン！！

アバババン「グヴオオオオオオオオオオ!!!」

窓を破ったアバババンが、触手を使ってビルを登っていく。

銀時「逃げる気があいつは!」

ネプテューヌ「早く追いかけよう!逃したら大変なことになるよ」

イストワール「・・・行き先は多分屋上です。・・・急ぎましょう」

屋上へと逃げだしたアバババンを追いかけるため、銀時達も後を追う。すると、

なのは「あっあの・・・」

銀時「ん?」

なのはが銀時を止める。

なのは「わっわたしも屋上に行ってもいいかな?」

今のなのはは魔力も尽きてボロボロであるのに突然行きたいと言い出す。すると銀時は、

銀時「・・・いいぜ。だがあいつは俺が倒してやるからな。安心して見届けてろ」

っと言ってなのはの頭をなでる。

なのは「あっ／／／／／」

なでられたなのはは顔を赤くする。すると、

ネプテューヌ「銀さん。」俺”じゃなくて”俺達”じゃないの?」

ネプテューヌが間違いを訂正させる。

銀時「うっせえな!行くぞなのは」

なのは「はい!」

銀時は屋上へ行き、なのはは銀時を追いかけた。

ミッドチルダ 第3起動高層ビル屋上・ヘリポートエリア

アバババン「グルルルルルルル・・・」

屋上へと這い上がったアババンはその身を休めようとしたが、

バァン!

ネプテューヌ「やつと追い付いた!」

銀時「もう逃がさねえぜ!」

アバババン「!??グウウウウウウウウウウウ・・・」

やって来たネプテューヌ達に追いつかれ、来た道に戻ろうとするが、

ノワール「逃がさないわ」

スバル「ハアアアッ!!!」

ズシンッ!!!

アバババン「ガッ!!!?」

スバルの攻撃で頭が埋もれる。

その後、アバババンへのラッシュは続く。

ネプテューヌ「ほいな」バキッ! アバババン「グアッ!!!」

銀時「おら!!!」バコッ! アバババン「ガブッ!!!」

スバル「デヤッ!!!」ドガッ!!! アバババン「ゴオオッ!!!」

まさに袋叩きである。

アバババン「・・・グヴヴヴヴガアアアアアアアアア
ア」!!!」

完全にぶち切れたアバババンが触手を振り回す。

銀時「てめえと付き合うのはここまでだ」

ネプテューヌ「とどめといくよ!!!」

つと二人はいつせいに走り出し、

銀時「おらおらおらおらおら!!!」

ネプテューヌ「無駄無駄無駄無駄!!!」

アバババンの触手を切り落とす。つつか二人ともなんでジヨ○ヨな

んだ？

なのは（す……すごい……間近で見ると、銀さんってこんなに強かったんだ。）

初めて間近で見る銀時の戦いっぷりになのはは驚きを隠せなかった。

なのは（銀さんだけじゃない！ネプちゃんの剣さばきや、それに劣らずスバルの魔法攻撃……けど何よりも銀さんが凄い！剣術の『型』がないって言うよりも……『型』が変化する剣技だ！）

あの魔導生物兵器『ゾーマ』を剣だけで倒し、変化自在の豪快なる剣を振るう『白夜叉』坂田銀時。

とても普通の少女とは思えない動きと身軽さを持つネプテューヌ。

魔法と力パワーで新人魔道士？1の実力を持つと言われる、スバル・ナカシマ。

なのは（でも……銀さんはやっぱり凄い）

なのはが銀時の実力に感心していると、

アバババン「ゴッ!?ゴオオオ!?!?!?」

アバババンの触手がすべて無くなっていた。

銀時「さ〜て、エイリアン野郎。覚悟はいいか」

ネプテューヌ「どうせなら思い切ってドンッ!っていくよ」

銀時「いいね。そのほうが気持ちいいな」

アバババン「グゴ・・・」

触手のないアバババンでは成すすべもなかった。そして、

銀時「はい！せくの」

銀時・ネプテューヌ・スバル「でやつ！！！！」

バキイイイン！！！！

アバババン「ガアッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ アッ
アアア・・・」

三人にぶつ飛ばされたアバババンは、屋上から落下していき、

ズドオオオオオオオン！！！！

地面に落ちた。

アバババンチャイルド「アアアアア・・・」

それと同時に、アバババンチャイルドが全員息絶えた。

なのは達「やった~~~~~！！！！」

アバババンを銀時達が倒したことにより、なのは達は喜びを出した。

銀時「やるじゃねえか」

ネプテューヌ「銀さんもやるじゃん」

銀時とネプテューヌはお互いの手をたたき合った。

スバル「あれ？わたしは！？」

第四訓：息がそろつとどんなボスもへっちら（後書き）

真王「長く作ってしまった。．．．次回はフェイトと銀時が再会、そして向かうのは彼女たちの本部『機動六課』、そしてネプテューヌは．．．」

ティアナ「ちよつと作者、今回のスバルあんま変わんないじゃない」

真王「まあ、変わってないように見えるが彼女の技がチートにしておきました」

ティアナ「何それ！！？技がチートってどういふつもりよ！！」

真王「おちつけ．．．スバルだけチートにするのはかわいそうだからフォワード全員にもチートを上げますよ」

ティアナ「え！？マジで！？」

真王「フォワードのチート化ですが、物語が進むまで保留にしておきますので待っててくださいな」
「チャキツ」．．．なにしてるんですか」

ティアナ「今すぐ私をチートにしないで。頭に風穴をあけられたくない」
「ジエノサイドブレイバー！！！！」
「キヤアアアアアアアア！！！！」

真王「全く、俺を脅すなんて命知らずな（ため息）。．．．まあいいや、なのは、たのむ」

なのは「ハッハイ！！次回『長つたらしい話はみんないや』 テイク
オフ！（ビクビク）」

第五訓：長ったらしい話はみんないや（前書き）

真王「ZZZ・・・ZZZ・・・ZZZ・・・」

銀時「おいこら作者！何寝てんだ！」

真王「ん？・・・おっと時間か。みんな、位置について」

ネプテューヌ「2011年、新年明けまして」

全員「おめでとございま〜〜す！」

真王「ついに始まった2011年、ここから先はハチャメチャ入りのストーリーがスタートします。というわけで、『リリカル銀魂』」

全員「始まります！！！」

第五訓：長つたらしい話はみんないや

ミッドチルダ 第3起動高層ビル・入口付近

神楽「何アルか!？」

外で戦っていた神楽・新八・エリザベス・月詠の4人はアバババンが屋上から降ってきたことに気づいた。慌ててその場を離れ、アババンが地面に激突したと同時に、アババンチャイルドが全員揃って息絶えたのだ。

月詠「どうやら、銀時と桂は無事に親玉を討伐したようじゃな」

煙管きせつを加えて口から煙を放つ月詠は少し笑って安心する。

エリザベス「さすが桂さん」

つとエリザベスはそう書かれたポートを出す。

神楽「とにかく、銀ちゃんとツラも無事って事ね。早く2人を迎えに行くアル。」

エリザベス「そうだった!」

神楽・新八・エリザベス・月詠の4人は急いで2人を探しに行こうとするが、突如巨大なヘリの音が聞こえ出す。

4人はその音の方向を振り向くと、そこにはフェイト・ヴィータ・シグナム・シャマル・ティアナ・エリオ・キャロがいた。

ヴィータ「おおい、神楽ー、エリザベスー!」

ヴィータが嬉しそうに声をかけると、神楽も返事をするかのように叫ぶ。

神楽「おおー、シグナム・ヴィータ・シャマルある！元気だったアルか！」

見慣れた3人の姿を見て神楽は喜びだす。

そしてフェイトがヘリから降りてバリアジャケットの衣装に変身して神楽に近づく。

フェイト「神楽、エリザベス、久し振り！」

10年後の姿のフェイトであるとは知らず、神楽と新八とエリザベスはポカンとする。

新八「・・・あの・・・誰ですか？」

つと新八はそう言つと、エリザベスはフェイトの持っている『バルディッシュ』である事を気づく。

エリザベス『あれって、バルディッシュじゃない？』

そうか狩れたボートを神楽に見せるエリザベスに、神楽は

神楽「あ・・・本当ネ。」

つと言い出す。そして3人は10年後のフェイトが自分達の知っているフェイトであることを確信する。

神楽「まさか・・・フェイトアルか!？」
新八・エリザベス「え・・・マジ!？」

2人がフェイトであることを驚きだし、フェイトは苦笑して顔を頷く。

ミッドチルダ 第3起動高層ビル屋上・ヘリポートエリア

銀時「あゝっく々に運動した気分だ」

ネプテューヌ「え?私はまだ余裕だけど?」

アバババンを倒した銀時は、肩をぐるぐる回しているが、ネプテューヌはまだまだ余裕である。

銀時「俺とお前じゃこの疲れなんてわかるわけね〜よ」

ネプテューヌ「へえ〜、つまり銀さんは年寄りなんだね」

銀時「違げ〜よ!」

年寄りという単語に反応し、怒鳴る銀時。

銀時「ま、それにしても」

つと銀時はスバルを見て、

スバル「銀時さん?」

銀時「強くなつたな、スバル」

銀時がそう言うと、スバルは晴れたかのような顔で嬉しく感じた。

銀時「何かを守る為にここまで強くなれるなんて、大したもんじゃないか。その信念に胸にはってもっと強くなれ。」

スバル「・・・はい！」

憧れた人物にも認められ、スバルは嬉しさで一杯だった。

なのは「・・・あ・・・あのう・・・銀さん／／／」

突如、なのはは顔を真っ赤にして銀時を見つめると、銀時はなのはの顔に振り向く。

なのは「その・・・えっとう・・・ありがとうございます／／／」

テレながらも助けしてくれた事に礼を言うなのはに、銀時は意外そうな顔で少し驚くが、すぐに笑い出す。

銀時「おいおい、さっきまでのきつそうな顔よりも、綺麗な笑顔で笑っているじゃねえか。そっちの方が似合っているよ」

なのは「ふえ？／／／」

綺麗といわれてドキッとなったなのは。

桂は銀時にまた女が出来るのではないかと笑い出し、スバルは何やらなのはの反応に意外そうに見る。

ネプテューヌ（・・・銀さんもしかしてわざとなの？・・・いや、性格上そうはないとしたら天然？・・・それともただの鈍感？）

ネプテューヌ又は銀時となのはのやり取りを見て、うらやましそうに見ていた。

突如、隣から数多くの足音が聞こえてきて、銀時はその音が聞こえる方法を見て見ると、1人の金髪の女性と顔合わせすると、女性は思わず銀時の名を口にすする。

フェイト「銀・・・時・・・？」

名前を言われて思わずポカンとなる銀時だが、女性の髪形に持つているデバイス『バルディッシュ』を見ると、その女性がある人物である事を分かった。

銀時「まさか・・・フェイトか!？」

フェイト「ああ!!」

銀時に名を呼ばれて喜びだすフェイトは嬉しくなり、思わず『バルディッシュ』を落として銀時に駆けつける。

フェイト「銀時ー!!」

フェイトは銀時に飛びかかって、銀時の胸の中に飛び込んだ。銀時は思わずフェイトを抱いた。

銀時「お...おい、フェイト...」

フェイトが突如抱きついてきて、銀時が戸惑っていた。

フェイト「クス・・・銀時・・・会いたかったよ...」

フェイトは腕に力を入れて、銀時を強く抱いた。

銀時は物凄く動揺している。子供の頃のフェイトならそうでもないが、今のフェイトは大人だ。大きくなった胸が背中当たると、さすがの銀時も、これには動揺を隠せない。

銀時「ちょ……フェイト……!!」

一体どうすればいいのか分からないまま戸惑う銀時に、シグナムが現れた。

シグナム「銀時……なのか……。」

名前を呼ばれて銀時はシグナムを見ると、少しヤバイ表情をする。この状況をシグナムに見られたら間違いなく殺されると恐怖を感じたからだ。

銀時「シ……シグナム!?!……ひ……久し振りだな……その……あれだ……何と言うか……。」

シグナム「銀時いいい!!」

シグナムも思わず駆けつけて銀時に立ちついてくる。

銀時「お前もかいいいいい!!」

フェイトに続いてシグナムまで銀時に抱きついてきて、腕に力を入れて抱きつく。

シグナム「会いたかった」

シグナムは頬を赤く染める。

大きな胸が銀時に当たる。

フェイトとシグナム、2人の大きな胸に押しつぶされそうな感じで銀時は顔を真っ赤にして大量の汗を出す。

なのはとスバルは顔を赤くし、桂はニヤリとからかいがいがありそんな笑みを浮かべだす。

ネプテューヌ（銀さん・・・なのはさんに飽き足らず、金髪の人とピンクの人に抱かれて、しかも胸がでかいし、・・・むかつく！）

ネプテューヌは、フェイトとシグナムに嫉妬している。後ろにいるブランは

ブラン（・・・あのでか乳野郎共・・・「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」）

つと、フェイトとシグナムに殺意をむけている。（主に胸）
そばにいる4人は、ブランの殺意にビクビクしている。

銀時「ま…待て待て、フェイト、シグナム！と・・・とりあえず何がどうなっているのかを説明してえええ！！」

予想外の展開に銀時は、動揺を抑えられなかった。

銀時のいた世界には、見た目は綺麗だが、中身が強暴だったり性格に問題がある者ばかりで、まともな女性がない。

だがフェイトやシグナムは、見た目も綺麗で中身も普通の本当に綺麗な女性だから、こんな事をされると余計に銀時は動揺してしまうのだ。

そんな様子を、後から来た神楽と新八は不機嫌そうな顔をして、エリザベスと月詠は興味深そうに三人を見ていた。

そして、ヴィータ・シャマル・ティアナ・エリオ・キャロはなの
とスバルと同じく、顔を赤くしていた。

スバルはティアナの姿を見て何かやばそうな顔をした。
そしてヴィータとシャマルは桂の姿を見て驚く。

ヴィータ「ああー、ツラだ！」

桂「ツラじゃない桂だ」

ヴィータにツラ呼ばわりされて突っ込む桂に、ヴィータとシャマル
が駆けつける。

シャマル「お久しぶりです！まさか貴方もいつの間にかこの世界に
来ていたなんて・・・。」

桂「ヴィータ殿にシャマル殿、お主らも元気そうで何よりだ。」

久しぶりのヴィータとシャマルとの再会に桂も笑い出す。

かつては共に、『闇の書』の蒐集に強力をしあった仲間同士であり、
桂にとっても掛け替えのない仲間である。

ヴィータ「はやてもツラと会ってないから悲しそうな顔をしていた
ぞ。せつかくだから会いに来てやれよ。」

ヴィータは桂にはやてに会わせる事を言いだす。

はやてにとつて、桂も自分の為に力を貸してくれた恩人の1人であ
り、最も信頼する人物であった。

桂「ウム、八神殿もさぞかし成長をしているから、お小遣いに50
円をやらなければな。」

ヴィータ「やらんで良いわあー!!」

ドカ！

桂「ごふおおおー!!」

桂のクールボケに、ヴィータがグラーファイゼンで桂の頭を叩いた。

シャマル「落ち着いて、ヴィータちゃん！」

エリザベス「暴力はよくない！」

怒り任せのヴィータを抑えるエリザベスとシャマルだが、モロにグラーファイゼンを喰らったのが、桂の頭からは大量の血を出していた。

ティアナ、エリオ、キャロの新人フォード隊は見慣れない光景に苦笑して呆れるしかなかった。

ネプテューヌ組（ネプテューヌ除く）「何やってんだあの人は・・・」

ネプテューヌ除くネプテューヌ組も呆れる。

そんな中、ティアナは後ろでスバルの姿を見てスバルを呼ぶ。

ティアナ「スバル?・・・アンタ、スバルなの!？」

スバル「ギク!？」

ティアナに呼ばれて驚きだすスバル。

フェイト、シグナム、ヴィータ、シャマル、エリオ、キャロもスバルの方を注目すると、スバルはやつちやつたかのような顔で苦笑いする。

スバル「あちゃ〜、ばれちゃった・・・かな？」

ティアナ「スバル！どうして、アンタがここにいるのよ！？」

まさかの再会にスバルもティアナも驚きを隠せなかった。

スバル「あゝ．．．なんとというかね。町でアイスを食べたら第3起動高層ビルに謎の生物が暴れてるって聞いてここにいるっていうか．．．」

つとスバルは曖昧に答える。

ティアナ「あんだね．．．」

ティアナは呆れてため息を突く。

するとフェイトがネプテューヌ達に気づいて、

フェイト「．．．ところで、あなたたちはいったい？」

つと質問すると、

ネプテューヌ「あ．．．え．．．えっと」

何を説明すればいいのか分からないネプテューヌに、

アイエフ「ここで話すより別のところで話したほうがいいんじゃない？」

アイエフが助け船を出した。

フェイト「．．．そうですね。では、『機動六課』へご案内します」
銀時「おし、じゃあそこへいこうぜ」

はやて「桂さん、銀ちゃん！ホンマに桂さんと銀ちゃんや！」

銀時の姿を見たはやては、思わず立ち上がった。

リインフォース「銀時！」

リインフォースも銀時を見た。会えた嬉しさで笑顔になる。

桂「おお、八神殿ではないか！随分と大きくなって・・・お小遣いに60円をやるう」

シグナム「いちいちやらんで良い！」

フェイト「それとなんで10円増えているの？」

早速の桂のクールボケにフェイトとシグナムは突っ込みだす。

エリザベス『桂さん・・・せめて100円に上げてあげましょうよ』

とエリザベスはポートを出すと・・・

フェイト・シグナム「増えれば良いって問題じゃない（よ）！」

2人の声がピツタリに会い、突っ込みだす。

銀時はリインフォースを見て久し振りに声をかける。

銀時「リインフォースは変わってねーな」

リインフォース「私は、年はとりませんから」

リインフォースは笑顔で返事をした。

すると、

「????」わあ！銀さんと桂さんです！」

三十センチくらいの小さな少女が、銀時と桂の前に現れた。長い水色の髪で、見た目はリインフォースにそっくりだ。

銀時「うおっ！なんだコイツ！？リインフォース！？ちっさいリインフォースだ！」

桂「何と！？」

小さなリインフォースを見て、銀時と桂は驚いた。

はやて「その子は『リインフォース・ツヴァイ』って言うてな。リインフォースの妹や」

はやてが銀時に教えた。

銀時「え？妹？マジでか！？」

リインフォースを見ながら、銀時は尋ねた。

リインフォースは、少し照れた感じで頷いた。

リイン「よろしくです、銀さん！桂さん！」

無邪気な笑顔で、リインフォース・ツヴァイは挨拶した。

銀時「お…おお」

桂「うむ、こちらもよろしく頼む」

少し戸惑いながら、銀時は返事をし、桂はすっかりとした態度で返

事をする。

リインフォースの妹？性格が全然違うんですけど。めっちゃ明るいんですけど。

まじまじとリインフォース・ツヴァイを見つめる。

はやて「その子の事は”リイン”って呼んであげてな」

はやてが言った。

二人がごっちゃにならないためか。て事はリインフォースの方は、そのままリインフォースでいいワケか。

銀時は納得して頷いた。

はやて「まあ立ち話もなんやし、座ろうか」

はやてが、デスクの前にある来客用のソファーに座るよう促した。

銀時達はソファーに座った。

はやて「それにしても、桂さんと銀ちゃん全然変わつとらんな」

ソファーに座りながら、はやてが言った。

フェイト「銀時達は過去から来たみたいなんだ」

フェイトが答えた。

はやて「過去から？」

なのは「装置が制御不能になったみたいで、誤ってこの時代に来ちゃったみたいなの」

今度はなのはが説明した。

なるほど、とはやては頷いた。

桂「それにしても八神殿、此処は何処か教えてもらいたいのだが？」

桂は、来たときから疑問に思っていた事を聞いた。

フェイト達が制服を着ているところから推測すると、管理局か何かの部隊みたいだ。

はやて「ここは古代遺物管理部 『機動六課』。ロストログア関連の危険な任務を扱う部隊や」

はやてが答えた。

フェイト「はやてが立ち上げたんだよ」

銀時「えっ！？はやてが！？」

フェイトの言葉に銀時は驚いた。

銀時「って事は、お前が一番偉かったりするんのか？」

はやて「うちは機動六課の部隊長や」

はやてが胸を張って言った。

銀時は驚いた。まさかはやてが隊長とは。世の中わからないものだ。

桂「おお、それは大した者だ！八神殿の努力と仲間力が合わさった結果というわけか！」

感心したかのように驚く桂に、はやては少し顔を真っ赤になる。

はやて「ふふ・・・おおきに、桂さん／＼」

凄く嬉しそうな顔をするはやてに、フェイトとなのははポカンとなる。

そして銀時はシグナムに小さな声で話しかける。

銀時「おいおい、はやてつてもしかすればヅラの事を……（ニヤリ）」

ニヤニヤと笑い出して話し出す銀時にシグナムは、

シグナム「ああ、銀時の考えているとおりだ。主は『闇の書・ゾーマ事件』以来、桂に対する思いが恩人以上になっている。最も、人妻好きである桂に、ヴィータ・シャマル・ザフィーラは知らないだろうがな」

シグナムはどうやら桂に対するはやての思いを気づいたようである。しかし、桂自身は気づいてはいないようだ。

銀時「知ったら、3人はヅラに何かするかもしれないかもな。とりあえずヅラ達には内緒しておこうぜ」

シグナム「そうだな。特にヴィータが知ってしまったら桂が恐ろしい目に合うかもしれないな」

2人は、はやてが桂に好意を持っている事を誰にも言わないことを決意する。

はやて「それよりスバル。私の方からも聞きたい事があるんだけどええか」

さっきまでとは違って真剣な表情ではやてはスバル声をかけた。

スバル「あ……はい！」

思わず返事をするスバル。

はやて「なのはちゃんから聞いたんやが……相当の活躍をしたよ
うやな。」

スバル「あっはい」

新人魔道士でも？1の実力を持つと言うスバルだからこそできたこ
とである。

はやて「もし良かったら フォワード部隊に入らへん？」

スバル「え？」

まさかのスカウトにスバルは啞然とする。

はやて「もちろん、ただ訓練を受けるだけじゃなく、ウチのフォワ
ード部隊の新人達の起爆剤として欲しいんや」

ライン「スバルさんのようにスバ抜けた実力者がいれば、他の人た
ちも負けられない勢いで成長しますしね」

はやてとラインはそう言う考えでスバルにフォワード部隊に入るこ
とを進める。

フェイト・シグナム・なのはも賛成のようであり、スバルは迷わず
に賛成する。

「分かりました……私でよければ」ねえ……まだなの……」

スバルがしゃべっているとセリフを被るネプテューヌ。

ネプテューヌ「話が長いよ。待ちくたびれちゃうよ。」

まるで子供のように（実際そうだが）駄々をこねるネプテューヌ。ちなみに彼女は、壁の隅っ所で座っている。

フェイト「ちょっと部隊長室で座っちゃだめだよ！」

フェイトはネプテューヌに注意するが、

ネプテューヌ「や〜だ〜。立つのも長い話聞くのもや〜！」

フェイト「だからダメだって。あなたたちもこの子を止めて！」

もはや手がつけられないので、フェイトは彼女の知人に止めてもらうよう頼むのだが、

アイエフ「話しかけないで。このパ〇ロス解くの難しいんだから」

コンパ「わあ〜。チヨウチヨが飛んでるです〜」

ノワール「ほつれかけてるわ・・・早く整えないと」

ブラン「・・・うるさい。集中できない・・・（本を読みながら）」

ベール「・・・次のステージは確かあのあたりですわね・・・し

かしラスボスへ行く前にアイテムを取り損ねてはいないか確かめないと・・・（ブツブツ）」

全員揃って自由にやってきました。（笑）

はやて「何やっとなんじゃあんたらはー！ー！ー！ー！！！！（怒）」

はやては怒鳴り、周りにいる銀時たちは、呆れるしかなかった。

「イストワール」……今回の私は空気ですね……（――）

第五訓：長ったらしい話はみんないや（後書き）

真王「『機動六課』に協力することになった銀時たちとネプテュー
又達とスバル、そしてなのははある決意を……」

コンパ「次回『人間告白するなら今のうち』テイクオフです」

くつぶやき

真王「……そろそろ銀八先生を始めようかな……」

第六訓：人間告白するなら今のうち（前書き）

真王「アクセス確認したら5000以上のPVが来ました。それほど『リリカル銀魂』が人気があるという証拠なんですね、わかります。っというわけで、『リリカル銀魂』」

モナー「始めるモナー」

真王「あっ！セリフとられた！」

第六訓：人間告白するなら今のうち

機動六課・食堂

ティアナ達フォワードメンバー、ヴィータ、シャマル、神楽、新八、月詠は一緒に食事をしていた。

既に互いの自己紹介は済んでいる。

エリオ「神楽さんって、銀時さんと一緒に『ジュエルシード事件』と『闇の書・ゾーマ事件』を解決した、あの神楽ですか!？」

神楽の名前を聞いたエリオは驚いた。

神楽「そうアル。」

つと、神楽は軽く返事をして山盛りのご飯をおかわりした。

キャロ「す・・・凄い人なんですね」

キャロも驚いてる。

新八「いや、すごいってもんじゃないですよ。すごいって言うのは戦つてるときだけで、日常だとあまりよろしくないんですから」

神楽「んだよ駄目ガネ。私の威厳にケチつけるアルか」

新八「バクバク食つてくるくせに威厳は関係ないだろ!?!」

つと新八は突っ込む。するとティアナが、

ティアナ「えつと・・・あなたは・・・」

新八「あつすいません。僕は志村新八つて言います」

新八が自己紹介すると、

ティアナ「ああ！噂であつた”江戸一番のツッコミ使い”って貴方！？」

新八を指差して、ティアナが叫んだ。

新八「えっ！？いや、そりゃあ、まあ…一応僕はツッコミ役ですけど…」

綺麗な女の子から”江戸一番”と言われて、新八は少し照れた。

神楽「新八のくせに照れてんじゃねーヨ。ツッコミ以外地味のくせに」

新八「んだとコラアアア！僕らの世界でツッコミ役は、物凄く重要なんだぞオオオオ！！」

神楽の発言にキレル新八。

みんなが楽しんで話していると、銀時達がやってきた。

はやて「みんな、事件解決お疲れ様。明日の訓練も頑張つてな」
F「はい！」

はやての言葉に、フォワードの三人が応えた。そして、新しく仲間に入る銀時達を紹介した。

はやて「今後、ウチらの仲間になる新しい新人等と、知つてのとお

りうち等の世界を救った英雄を改めて紹介するな」
銀時「どーも。坂田銀時です。趣味は糖分摂取で、キャプテンを志望してます」

緊張した様子もなく、ダラけた声で自己紹介する。
次に桂が挨拶する。

桂「俺は桂小太郎。好物はそばだ」
神楽・新八・ヴィータ「だからいちいち好物をいうんじゃない（ないアル）！！」

神楽と新八とヴィータが、桂の顔面に飛び蹴りを食らわせた。
ティアナ・エリオ・キャロの3人は銀時のだらけた挨拶と桂のクルボケに自分達の中の英雄のイメージが崩れ落ちていく。

次はネプテューヌ組の紹介で、

ネプテューヌ「今からここに協力することになったネプテューヌだよ、よろしく〜」

つと、元気よく挨拶するネプテューヌ。

コンパ「わ・・・わたしはコンパって言います・・・よ・・・よろしく願います（ドキドキ）」

つと緊張いっぱいに挨拶するコンパ。

アイエフ「私はアイエフ、とりあえず協力者になるわ」

つと右手を腰にあてて、挨拶するアイエフ。

ノワール「ノワールよ。よろしくね」

っと短く終わらせるノワール。

ブラン「私はブラン・・・あまり気安く話しかけないで・・・」

っと避け気味に話すブラン。周りは苦笑いを浮かべる。

ベール「ベールと申します。よろしく願いますね」

っとお辞儀をするベール。お辞儀をするとき胸が揺れた気がした。

イストワール「私はイストワールです。はじめまして（＾　＾）」

っと普通に挨拶するイストワール。

そして最後にスバルが挨拶する。

スバル「わ・・・私、スバル・ナカジマです！新しくフォワード部隊に入りましたので、これからもよろしく願います！」

銀時と桂とは違って丁寧に挨拶をするスバルに、エリオとキャラも挨拶する。

エリオ「エリオ・モンディアルです。よろしく願います！」

キャラ「わ・・・私はキャラ・ル・ルシエです！こちらは使役竜のフリードです！」

フリード「きゅいい。」

そして最後にティアナが立ち上がって、挨拶をする。

ティアナ「ティアナ・ランスターです。どうぞよろしく願いします。」

普通に挨拶をすると、はやては銀時達に3人の新人フォアード隊の説明をする。

はやて「桂さん、銀ちゃん、スバルに言っておきな。この3人もスバルに劣らない優秀な新人なんやで。エリオはまだ10歳にも関わらずに魔導師ランクは陸戦Bで、階級は三等陸士。使用デバイスは槍型のアームドデバイス「ストライダー」。そこでキャラも階級は三等陸士。使用デバイスはグローブ型のブーストデバイス「ケリユケイオン」。レアスキル「竜召喚」を持つ召喚魔導師なんや」

キャラの竜召喚に驚きだす銀時。

銀時「マジでか！？え・・・何、キャラって竜を召喚できるの！？」
キャラ「は・・・はい」

竜を召喚する事ができるキャラに、銀時はある頼みをする。

銀時「お願い、キャラ！今すぐ竜召喚で「ドラゴンボール」の「龍」を召喚して！そうすれば「かめめ波」が撃てる願いが叶える！」
キャラ「ええー！？」

突如、無茶な頼みに驚きだすキャラに、ティアナが立ち上がる。

ティアナ「なんですか、その「龍」って！？それより「かめめ

波「つてなんなんですか!？」

訳分からないティアナは銀時につっこみだす。キャラは銀時の無茶なお願いに戸惑っている。

その光景をなのは達は啞然とし、なのは達は苦笑するしかなかった。

神楽「それは良いね!私も卵がけご飯を100杯は食べたいアル」

新八「まだ食べる気か!」

今度は神楽に新八が突っ込みだすと、続く桂が話に参加する。

桂「ちなみに俺は最高級のそばを頂きたい。」

ティアナ「どんだけそばが好物なのよ!!!!!!」

ティアナは額に血管を浮かべて、ツツコミだす。

エリザベス『定春に負けないようにもつと目立ちたい』

新八「アンタもいちいち願い事を言うな!」

新八は怒鳴った。ティアナはエリザベスの存在に突っ込みたくなりそうだったが、あえて関わらないほうが良いと考えた。

月詠「わっちは金剛石で作られた超最高級の煙管おんせつを頼んで見たいもんじゃない」

新八・ティアナ「それもはや煙管おんせつの常識を破っているじゃねえかないの!!!」

とてもボケキャラとは思えない月詠のボケに反応するかのよう怒鳴って突っ込む新八とティアナ。

しかし、意外とコンビネーションの良いツツコミである。

笑いながらも、はやてはティアナの紹介をする。

はやて「そんでティアナの階級は二等陸士で、使用デバイスは拳銃型のインテリジェントデバイス「クロスミラージュ」。陸士訓練校での成績は首席卒業をしておるんや」

銀時「は・・・首席卒業って何？」

なにやら首席卒業の事を知らない銀時に、

桂「なんだ銀時。首席卒業の事も分からぬのか？首席卒業というのは成績が誰よりも優秀であり、頂点に立った生徒が卒業する事だ。」

つと、桂が説明する。

ネプテューヌ「・・・何を言ってるのかよくわかんない」

ネプテューヌは頭を抱えている。

アイエフ「・・・あんたももう少し学習しなさいよ」

呆れて愚痴をこぼすアイエフ。ネプテューヌは学習能力が女神の中で低いらしい。

そしてはやて、リインフォース、リインは初めて見る月詠に近づいて挨拶する。

はやて「はじめまして。機動六課部隊長、八神はやてです」
リインフォース「部隊長補佐のリインフォースです」
リイン「リインフォース・ツヴァイです！」

三人が自己紹介した。

月詠「わっちは月詠じゃ」

月詠も自己紹介した。

そしてエリオは何か話したい事があるのか銀時に近づく。

エリオ「あの、銀時さん！」

銀時「ん？」

エリオ「少し…いいですか？」

遠慮がちに銀時に聞いた。

ネプテューヌ「？」

外へ行こうとする二人を、ネプテューヌは見ていた。

銀時とエリオは外に出た。

エリオ「銀時さん、貴方の噂はフェイト隊長から聞いています！」

銀時「噂？」

一体どんな噂なのか銀時は聞いて見ると、エリオはその噂を銀時に言った。

エリオ「魔法が使えないけど、『ジュエルシード事件』、『闇の書』

『ゾーマ事件』を剣だけで解決し、その剣術は稲妻の如く変化して相手を翻弄し、その鬼神の如き強さから『白夜叉』もしくは『エース・オブ・シルバーサムライ』と呼ばれ、管理局内でも有名で知らない人は殆どいない、伝説の武神。」

銀時「え？何？俺ってそんなに有名なの？」

真剣に説明するエリオに、銀時が尋ねた。

エリオ「はい！なにせあのオーバーSランクを超える強さを誇ったゾーマを倒して、世界を救った英雄ですから！」

興奮しながらエリオは答えた。

両拳を握って、興奮を抑えられないでいる。そんなもって、銀時に尊敬にも似た眼差しを向けている。

銀時に尊敬の眼差しを向ける者が、この世にいたとは驚きである。

銀時「え？マジで？ちょっと…その目やめてくんない？あんまり見つめられると、照れちゃうから」

銀時は嬉しいような困ったような、複雑な表情を浮かべた。

エリオ「それに、銀時さんの強さは先ほどの奇妙な異性生命体との戦いで見させていただきました。銀時さんだけじゃなく、桂さんに神楽さん、エリザベスさんにあの月詠さんって言う女性も魔法なしであんだけ凄い戦いつぶりをしましたから、今度いつか銀時さんの世界に行って見たいです。」

もしかすれば、銀時の世界に行けば真の強さとはなんなのかを理解できると確信してなのか、銀時の世界に少し憧れを持つエリオ。・・・あつ新八がのってねえ。

だが、銀時はそれは辞めた方が良いと考える。

銀時「エリオ君、確かに俺の世界の人物は曲者ぞろいが多いかもしれないけど……でも時にはおっかねえ人物が山ほどいるんだぞ。例えば、卵で『ダークマター』と呼ばれる『可愛そうな卵』を作れる殺人料理人の極悪女。料理にマヨネーズをかける異常な味覚を持ったニコチンマヨラー。警官なのにしつこく女にストーカーをするゴリラストーカー。相手が困っているのにそれをどす黒く楽しむドS。何度職業を取ろうと、落とされるもしくはクビにされ続けるマダオ。しつこく名前を間違えて何度も仕事をサボる大ボケ馬鹿。さらには家賃払え払えっとしつこく言ってきて常識を超えた身体能力を持つスナックババアなど……。他にも常識を破った人物だって俺の世界じゃ当たり前のようにいるんだぞ」

エリオ「そ…それは凄いですね…」

銀時達の世界の説明を聞くエリオは、銀時の世界が予想以上に凄いつて事に苦笑する。

エリオ「でも……なんだか楽しそうな感じですね」

銀時「そうか？」

普段、色々と巻き込まれてトラブルを起こされる上、酷い目に何度も合ったため、それが楽しそうである事に不思議に思っ銀時。むしろ辛いとしか言いようがないのである。

エリオ「……それと……僕は銀時さんに話しておきたい事があるんです。」

ちょっと悲しそうな表情をするエリオは銀時に重大な事を話し出す。

銀時「なんだ、話したい事があるなら言ってみろ。」

銀時は聞くだけ聞いてみようと考えてるが、それはとんでもない事である事に気が付く。

エリオ「・・・実は僕、フェイトさんと同じプロジェクトFによって生み出された人造生命体なんです。」

銀時「な...!？」

銀時は目を見開いて驚愕した。額から汗が流れる。

フェイト以外にも、人造的に作られた生命体が存在したなんて事に。

エリオの話からすれば、モンディアル家の病死した一人息子のクローンである。

。ある時両親と引き離されたが、その際に事実を突きつけられた途端に両親が抵抗をやめてしまったこと、また研究施設での非人道的な扱いから一時期重度の人間不信に陥っていた。

その為、当時のエリオは誰も信頼することができず、自分自身も信じる事が出来なかった。

誰にも信頼することができなくなったエリオの前に現れたのが、フェイトだった。

フェイトによつて救い出され管理局の保護を受けてからも荒みきっていたが、魔法を行使して暴れるエリオに対して行ったフェイトの体を張つての真摯な説得と献身をきっかけに急速に立ち直っていく。そして、フェイトから銀時の話を何度も聞かされた。

自分が最も愛した男であり、『プロジェクトF・A・T・E』の前者の方の産物として生み出されたクローンである自分でも、命を張つてまで守ってくれて、自分だけじゃなく母・プレシアをも救つて

くれた恩人である事を。
そして自分自身も銀時に尊敬する気持ちを持ったのであり、一度会
つてみたくなつたのである。

エリオ「だから、僕も銀時さんみたいに、大事なモンを護るとい
う信念を持って強くなりたいです。クローンとしてじゃなく、1人の
エリオとして。」

真実を話したエリオ。

当時は自分自身をも信じる事が出来なかったが、それでもフェイ
トに出会ったことで人間のような心を取り戻したエリオを見て、銀
時はエリオならその思いが出来ることを確信した。

銀時「出来るさ、お前なら。」

銀時は軽くエリオの頭に右手を乗せ、笑いながら言い出す。

銀時「エリオもフェイトがいたから、誰かを信じる気持ちを取り返
して強くなっているんじゃないか。・・・だから、誰かや自分も信
じる気持ちさえ失わなければ、絶対にテメエ自身の大事なモンを護
れると思つぜ」

エリオ「・・・銀時さん」

銀時「それによ・・・俺の知り合いであるチンピラ警察共の中に、
1人お前と同じ思いをした奴がいるんだぜ」

当時のエリオは誰も信じられない事を聞いて、銀時はある人物を思
い出してエリオに話し出す。

いとうかもたろう
伊東鴨太郎

真選組に入隊してからまだ浅いが、文武両道で能力的にかなり優れているため参謀の地位を任されており、北辰一刀流免許皆伝の凄腕剣剛であり、その実力は土方に匹敵する程の実力を持っている。

近藤をはじめ真撰組の約半分は『先生』と呼ばれている。

だが鬼兵隊と手を組んで新撰組を乗っ取る計画をしていたが、その真の目的は自分を認めてもらう為である。『理解されない』事であると考えており、真撰組に入ったのは自分の『器』を人々から認めってもらう為であった。

そして本当に欲しかったものは、仲間と一緒にいられる『絆』であるのだが、それをも忘れていた。

それは幼少時代、学問・剣術も見事で『神童』とも呼ばれていたが、双子の兄の病ばかりに関わっていた両親からは構ってもらえず、誰にも認めてもらえなかった。

それでも誰かが自分を認めてもらえると信じ、ひたすら努力をし続けていたのだが、そんな鴨太郎の気持ちや周囲の者達は理解するどころか、ますます鴨太郎に逆恨みに等しい妬みを抱くばかりであった。

このトラウマから、『孤独』と『一人』を嫌うようになり、自分や誰にも信じる事が出来なかった。

それは、別の意味でエリオに似ている感じであった。

その為、近藤と土方を暗殺するために『鬼兵隊』と手を組んだが、真選組を壊滅させる為の捨て駒として利用されたのである。

だが裏切ってもなお、己に救いの手を差し伸べる近藤達の姿を目の当たりにした事で、本当に欲しかった『絆』の事を思い出す。

だが死の寸前まで追い込まれ、土方との決闘により倒され、裏切り者ではなく真選組の隊士として、後悔も無くこの世を去る。

銀時「結局そいつは死んじまったけど、結果的には孤独に死ぬことは無かったわけだ。それに比べりゃ、エリオはまだ幸せ者だと思っぜ。」

空を見上げてエリオは伊東と比べてまだマシであると良い出す。

銀時「大きな事件を起こす前にフェイトに会ったお陰で、今もこうして立派に生きているしよ。・・・だから、お前はお前自身として頑張って生きろよ。」

エリオにそう言い、中に向かうなか、エリオは銀時の後ろ姿を見て銀時の名を叫ぶ。

エリオ「銀時さん！」

エリオに呼ばれて足を止める銀時。

エリオ「僕、頑張ります。その伊東さんの分まで生きて、大事な人を護れるぐらいに強くなります！」

エリオはそう言うと、銀時は笑って振り向かず手を振るいながら去っていく。そしてエリオの中で、また1つ強くなる目的ができたのであった。

機動六課の草葉で、複数の影が二人の話を聞いていた。

「????」うう……いいはなしだね……」
「????」本当です……私……感動したです」

草葉の陰でエリオと銀時の話を聞いてたのは、ネプテューヌ・コンパ・アイエフ・ノワール・ブラン・ベールだった。ネプテューヌとコンパは泣いていた。

ノワール（『お前はお前自身として頑張って生きる』……か……きつとあの子なら、できるかもしれないわね。がんばりなさい）

ノワールは、陰から微笑み、エリオを応援した。

中に戻った銀時は、フェイトに部屋へ案内された。

泊まるアテがないので、銀時達は機動六課の隊舎に泊まる事になった。

そしてフェイトは案内を終えた後、自分の部屋に入ると、そこにはベットに座っているのがいた。

フェイト「なのは、どうしたの？」

いつもと様子が違うなのはにフェイトは声をかける。

ちよつと顔を真っ赤に染まっている為、何か様子がおかしくなったようである。

なのは「フェイトちゃんに、どうしても話しておきたいことがあるんだノノノ」

なのは「・・・あの『闇の書・ゾーマ事件』以来・・・私はその時の銀さんがゾーマとの戦いをシグナムさんとリインフォースに聞かされて・・・フェイトちゃん達は知っていて、私の知らない銀さんはどんな姿なのか想像し続けたんだ。それ以来、時々銀さんの事を何故か頭の中で浮かびあがっちゃうの。」

実際、ゾーマと戦って鬼神の如くの強さを発揮した、『白夜叉』銀時の事を知っているのは、実際にこの眼に焼き付けたフェイト・シグナム・リインフォースの3人だけである。その為、なのはを始め、銀時の『白夜叉』としての強さを知らないものは数多い。

しかし、なのははあのアババン戦で見た白夜叉と化した銀時の姿を見てようやく分かった。

それ以来、なのはの頭の中には銀時のことしか浮かばなかった。

フェイト「でも・・・なのはにはユーノがいるんじゃない？」

フェイトはユーノの事をなのはに聞き出す。

かつて、なのはのパートナーとしてなのはのサポートに入った少年、ユーノ・スクライア。

遺跡の発掘を生業とするスクライア一族の出身で、自らが発掘した「ジュエルシード」が事故によって散らばってしまったことに責任を感じ、独自にその回収を行っていた。封印に失敗して重傷を負ったところをなのはと出会い、一命を取り留める。

その後の成り行きから彼女に協力を申し出、「レイジングハート」を託した。

なのはを魔導士として導かせた張本人である。

そんな彼は、今ではなのはを1人の女性として愛しているようだ。

だが、なのは自身は親しい友人程度であった。

なのは「ユーノ君は大切な仲間で友達なんだけど……別に好きって程じゃないかな？」

とんでもなく残酷な事を無意識に言い出すなのは、フェイトはユーノがそれを聞けばどれだけのショックを受けるのだろうか想像できなかつた。ちなみに新八もどうなるのかなんて知るよしもない。

フェイト（ユーノには……黙っておこう）

なのは「だから……今日からライバルって事だね／＼／」

その意味は、なのはも銀時争奪戦に入ってしまう意味である。

まさか、なのはが銀時に好意を持つ事は予想できなかったフェイトはどういえば良いのか、分からないままであるが……彼女の口からは思わず……

フェイト「わ……私だつて負けないもん」

その言葉しか口にだせなかつた。

第六訓：人間告白するなら今のうち（後書き）

真王「今回は銀時たちが模擬戦に参加。するとシグナムがある人を指定するが……」

桂「次回『バトルはスリルを求めるもの』活目せよ……違
った……テイクオフ！」

第七訓：バトルはスリルを求めるもの（前書き）

真王「この話はシグナムとの対戦相手が誰だかわかります。では、『リリカル銀魂』」

ギコ「始まるぞゴルア！」

しい「始めます」

モララー「始めるからな！」

真王「ああっ！またセリフとられた！」

第七訓：バトルはスリルを求めるもの

機動六課・訓練場。

沢山のビルが並ぶ所に、ティアナ達はいた。

訓練の内容は、自律行動型のロボット『ガジェットドローン』をフォワードの三人で倒すというものだ。

ティアナは銃型のデバイス『クロスミラージュ』で狙い撃ちする。キャロは、錬鉄召喚で鎖を出してガジェットの動きを止める。エリオの槍型デバイス『ストラダー』がガジェットを貫く。フリードも炎を吐いてガジェットを攻撃する。

フォワードの三人は、それぞれの魔法を駆使してガジェットを破壊していく。

銀時達とネプテューヌ達は、なのは達と一緒に屋上から訓練の様子を見ている。

スバルも、新人としてティアナ達はどんな訓練を受けているのかをまずは見学している。

やがて銀時が口を開いた。

銀時「うん。これ魔法じゃねーな」

神楽、新八、桂、エリザベス、月詠以外の全員が、思わずコケそうになった。

なのは「えっと…一応魔法なんですけど」

ハハハ、と苦笑しながらなのはが言った。

神楽「いや機械使っているアル。あれ見ても、魔法ですって言われ
てもピンとこないネ。」

呆れた表情で神楽が言った。
すると桂がカメラ目線になり、

桂「次回から『機動少女メカニクなのは』スタート。皆、刮目せ
よ」

キリッとした顔で言った。

月詠「いや、勝手にタイトルを変えたらマズイだろう」
ヴィータ「それにカメラはねえよ」

月詠とヴィータがツッコんだ。が、

ネプテューヌ「桂さん、もう少し下がってくれない？」

何時から持ってたのかネプテューヌがカメラを回していた。
隣にいるブランは、マイクを持っていた。

新八「あんたらなにやってんの……!!」

新八は怒鳴った。

なのは達は力無く笑った。

なのは「そうだ！」

なのはが何かを思いついた。

みんなの注目がなのはに集まる。

なのは「銀さん達も訓練してみませんか？」
銀時達「は？」

なのはの提案に、銀時達は片眉を上げた。

銀時「んなメンドくせー事やってられっかよ」

と心底メンドくさそうに断った。

だが、銀時の性格を知っているなのは達は、これくらいでは諦めなかった。

ちゃんと奥の手を用意してある。

なのはがフェイトに目配せし、フェイトは頷いた。

フェイト「ねえ銀時」

フェイトが声をかけた。

銀時「何だ？」

銀時は、絶対に訓練なんてやらねーぞ、というような顔をする。

銀時「訓練してくれたら、私がチョコレートパフェを好きだけ奢ってあげるよ」

銀時「テメーらア！俺達の活躍、目に焼き付けとけ！」

と、わずか一秒で銀時は心変わりした。

桂、神楽、新八、エリザベス、月詠は呆れてため息をついた。

桂「武士たる者他人の誘惑に負けるとは……銀時、貴様も堕ち

たな」

桂は銀時の誘惑の弱さに強い呆れ感を持った。
そんな桂の前にはやてが言う。

はやて「まあまあ。桂さんも訓練してくれたら、うちがそばを好き
なだけ奢ってあげるし」

桂「魔導士達よ！武士の魂、その眼で刮目せよ！」

銀時に負けない誘惑の弱さで、わずか一秒で心変わりした。
4人とネプテューヌ達は銀時と桂の誘惑につられたその姿に強く呆
れた。

なのは「ネプちゃんも参加してみる？」

なのはがネプテューヌを誘うとすると、

ネプテューヌ「イヤ、めんどくさい」

たった一言で拒否した。

チヨンチヨン

アイエフ「ちょっといいですか」

なのは「なに？」

アイエフがこっそりとなのはに耳打ちをする。

アイエフ「……っというわけよ（ひそひそ）
なのは「わかった（ひそひそ）……ネプちゃん」

ネプテューヌ「な〜に？」

ネプテューヌはいやいやそんな顔をする。

なのは「訓練してくれたらおいしいスイーツをごちそうするけど」「ネプテューヌ「よし！、みんなはりきつていこ〜！！」

と、一秒もたたないうちに心変わりした。

ノワール・ブラン・ベールは呆れてため息をついて、アイエフはやっぱりっという顔をしていた。

フォワード一同の訓練を終わりにし、銀時達もガジェットを倒す訓練をする事になった。

スバル達は、なのは達と一緒に屋上に来ている。

スバルは内心わくわくしていた。これから、あの憧れの銀時の訓練が見られるのだ。

スバル「楽しみだな！」

スバルは、本当に楽しそうな笑みを浮かべてる。

実際、スバルはあのアババン戦で銀時とネプテューヌと共に戦っていたが、そんなにその眼に活黙しておらず、ちゃんとこの眼で見て見たいと思っている。

エリオとキャロも、銀時達の訓練がどのような者なのか楽しみにしていた。

一方ティアナは、それほどテンションは高くはなかった。

下にいる銀時達は、なのはからの開始合図を待っていた。

月詠「何故わつちまで、訓練に参加しなければならんのじゃ？」

月詠は一人納得がいかなかった。

銀時「ままま。いいじゃねーか。訓練すればチョコレートパフェが食えて、みんなが幸せになれんじゃねーか」

桂「うむ、そばも食い放題となれば、まさに極楽の幸せの瞬間である」

ネプテューヌ「スイーツ食べほうだ〜〜い」

月詠「それは、ぬしらしか幸せになつたらんぞ」

銀時と桂とネプテューヌを睨みながら、月詠がツッコんだ。

神楽「でも見ているだけじゃつまないアル。私も付き合ってるね」

エリザベス「たまには運動するのも良いですし」

神楽も拳をボキボキと鳴らし、エリザベスは桂の隣でボートを構える。

ノワール「まあ運動不足にならないだけましね」

ブラン「私は嫌なのに・・・」

ベール「いいじゃないんですか。たまには」

ノワールは準備を整え、ブランはいやいやながらも参加し、ベール

これ!!? 何この四面楚歌!!? 俺なんか悪いことした!!??

周りから痛い言葉を受け、汗を流す銀時。

コンパ「み・・・みなさん。私は別に気にしてないですから」

泣きやんだコンパは、まわりのみんなを安心させる。

アイエフ「そう? でももし銀さんがまたコンパを泣かせたら呼んで

半殺しで反省させるから」

銀時「お前何物騒なこと言ってるの!??」

コンパ「は・・・半殺しはダメですよ!」

アイエフの物騒なセリフに突っ込む銀時とコンパ。

なのは「・・・みなさん。準備はいいですか?」

屋上にいるなのが聞いてきた。

銀時「いつでもいいぜ」

神楽「かかってくるアル」

新八「オツケイですよ」

桂「こちらの準備は万全だ」

エリザベス「OK!」

月詠「不本意だが、まあよかろう」

ネプテューヌ「ワンタンキルでいくよ」

アイエフ「さて、はじめますか」

コンパ「き・・・緊張するです・・・」

ノワール「こっちもOKよ」

ブラン「早くして・・・」

ベール「いきますよ」

十二人は返事をした。

すると、十二人の前に百体のガジェットが現れた。

「襲い掛かるガジェットを10分以内に破壊。それじゃ、ミッションスタート！」

なのはが開始の合図をする。

百体のガジェットが、一斉に銀時達に襲い掛かる。

三体のガジェットが銀時に向かって、中心にある黄色いレンズから光線を放った。

銀時はガジェットの前から消えた。

銀時「遅せえ」

一瞬でガジェットの横に移り、木刀『洞爺湖』をガジェットに向かって、横薙ぎに振りぬく。

三体のガジェットは一瞬で横真つ二つに斬られた。

すかさず銀時は、近くにいるガジェットを縦に斬った。

F「早い!？」

フォアード部隊達は驚いた。

動きが素早く、ガジェットを木刀だけで切り裂いているのだから。

銀時「はいイイイ!次イイイ!！」

銀時は次々とガジェットを破壊していく。

桂「動きが鈍い！」

エリザベス『なめとんのかゴルアア!!』

桂もガジェットの攻撃を避け、銀時に続くかのように複数のガジェットを次々と斬り、その隣でエリザベスもボートで剣を振り回すかのような勢いで桂に遅れないようにガジェットを破壊する。

神楽「ほあちゃあああああああああああああ!!」

その反対側に、神楽は傘を豪快に振り回してガジェットを粉碎し、時には殴ったり蹴ったりとしてガジェットを破壊し続ける。

そしてガジェットを踏み台にして高くジャンプし、落下加速を利用して傘を大きく振るうと、一気に五体のガジェットを押しつぶすかのように破壊する。

新八「うおおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

奥のあたりから、新八はガジェットを木刀で次々と破壊する。心なしか新八の動きがすごく速い気がする。

新八「（なのはちゃんが僕を見ている。ここで活躍しないで何が男だ。）おら、かかってこい鉄屑ども————!!!!!!」

愛の力で潜在能力を発揮するとはまさにこのこと。しかし後日に、その愛が碎けるなども知らずに。

月詠は複数のクナイを五体のガジェットに向けて放った。ガジェットは障壁を張ってクナイを防ぐ。

月詠「後ろがガラ空きじゃ」

ガジェットの後ろから、月詠の音が聞こえ、同時にクナイが放たれた。
クナイは障壁が張られていないガジェット達の背中を貫き、中の動力炉を破壊した。

ネプテューヌ「やあああああああ！！！！」

銀時達とは別の場所で、ネプテューヌは次々とガジェットを破壊していった。

すると、後ろから十体のガジェットがネプテューヌを攻撃するが、いつの間にか消えた。

ネプテューヌ「どこ見てるのかな？」

後ろに回ったネプテューヌは、十体のガジェットを薙ぎ払った。

F「あつちも早い！？」

体格差などモノともせず、三体のガジェットを破壊する。

ネプテューヌ「どんどんいくよ〜〜！」

ネプテューヌは、次のガジェットを破壊しに行った。

ノワール「はあ！！！」

別の場所で、手に持つショートソードで、ガジェットを破壊するノワール。

すると、七体のガジェットが現れるが、

アイエフ「この攻撃が見切れる？」

ダッシュで動いて、ガジェットを次々とガジェットを破壊していく。

コンパ「い・・いくです！」

アイエフが飛び出したと同時に、コンパは注射器をガジェットに向け、

コンパ「発射です！！！」

ズドドドドドドドドドドドドドドド！！

注射器からマシンガンのように発射し、ガジェットを破壊するが、

銀時「うわっ、たたたたたたたた！」

新八「うおわ！」

エリザベス「あぶな！」

アイエフ「コンパ！！銀さん達にまで狙ってどうすんの！？」

射程内にいる銀時達にまで狙われてしまった。

コンパ「ご、ごめんなさいです！！！」

その後も、銀時と桂が三体のガジェットを斬り、その反対側に神楽、新八、エリザベス、月詠がガジェットを5体破壊する。

ネプテューヌ達も、コンボとバトンタッチで、次々とガジェットを破壊していき、訓練が始まって一分も経過しない内に、百体のガジェットは全て破壊された。

訓練の様子を見ていたスバル達は呆然となる。
銀時達は武器をしまった。

銀時「チョコレートパフェゲットだな」

銀時は満足そうに笑っている。

神楽「私も後でなのはちゃん達にすこんぶを奢ってもらおうアル」

後ですこんぶを奢らせようと神楽は考える。

新八（やった！これでなのはちゃんは僕を！）

新八はなのはと抱き合うことを妄想する。

桂「えいりあんに比べればガジェットもたいした事はないな」

エリザベス『全くです』

桂とエリザベスは物足りないと言った感じである。

月詠「だからわっちは乗り気じゃなかったんじゃ」

月詠は再び煙管を口にくわえる。

ネプテューヌ「スイーツゲット〜〜〜！」

ネプテューヌはうれしそうだ。

アイエフ「腕は衰えてないわね」

アイエフは肩を回す。

コンパ「怪我が無くてよかったです」

コンパは安心している。

ノワール「このくらい余裕よ」

ノワールはまだ足りないと言っているようだ。

ブラン「やっと休める・・・」

ブランはとつとと帰りたがってる。

ベール「楽勝ですわ」

ベールは肩を回しながら言う。

十二人とも、まだまだ全然余裕である。

なのは「やっぱり、これくらいじゃ簡単すぎたね」

なのはが言った。

フェイト「銀時と神楽の強さは相変わらずだね」

はやて「桂さんの剣術も良^え腕やったな」

ヴィータ「ああ、にしてもエリザベスって、あんなに強いんだな」

シグナム「それに、以前の異種生命体との戦いで見せた月詠という女性の実力、やはりかなりの手練だ」

リイン「5人とも凄いです」

フエイト、はやて、ヴィータ、シグナム、リインも、それぞれの感想を言った。

シグナム（それにしても、ネプテューヌか……）

シグナムが、ネプテューヌをみて、何かを考え込んでいる。

エリオ「あの！」

エリオが声を上げた。

エリオ「銀時さん達が攻撃した時、『AMF』が効いてなかったみたいなんですけど……」

『AMF』とは、攻撃魔法を掻き消すシールドみたいなものである。

フエイト「銀時達は魔法を使っていないんだ。だから『AMF』は、銀時達には何の効果もないんだよ」

キャロ「えっ！？ そうなんですか！？」

キャロが驚きの声を上げる。

一分もかからずに、百体のガジェットを倒したのも驚きだが、魔法を全く使っていない事にも驚いた。

キャロ「……ってあれ？ ベールさんは魔法を使ってたような気がする」「この魔法と、私たちの使っている魔法と違うので効果がないのではないのでしょうか」
キャロ「そうなんですか？」

キャロの疑問をベールが答えた。

スバル「銀さん、スゴイ！」

スバルは興奮してはしゃいでいる。

リン「では次h「待て」ってシグナム!？」

シグナムがいつの間にかバリアジャケットを展開して、銀時達のところへいく。

銀時「?どうした」

シグナム「いやなに、戦いを見ているうちに私もあいつと戦いたいと思ったのでな」

シグナムが誰かと戦いたいと言っている。まわりがざわめく。

銀時「・・・それって誰だ？」

シグナム「それは・・・お前だ！」

シグナムが相手を指差した。その相手とは・・・

ネプテューヌ「え？私？」

ネプテューヌ「まただった。」

ネプテューヌ「えっと・・・なんで？」

そう聞くと、

シグナム「お前の戦い方を見て戦いたいという言葉が出たのだ。光
栄に思え！」

まったく理由になつてない答えだった。

後ろでヴィータが、

ヴィータ「また始まったよ。あのバトルマニア」

と、つぶやいたそうだ。

だが、なのは達はシグナムの行動にすごく驚いた。

なのは「シグナムさん！本気ですか！」

フェイト「いくらネプテューヌが強いとはいえ子供相手にそんな
ネプテューヌ「きこえてるよ!!」」

フェイトが、子どもといたので突っ込む。

シグナム「そんなことなどどうでもいい！私と戦え！」

なのは達の話を見殺しして、ネプテューヌと戦おうとするシグナム。

銀時「おいおいシグナム。子供相手に戦うだなんて大人げないな」
シグナム「……………」

銀時の痛い一言に、黙るシグナム。

エリオとキヤロは複雑な気持ちになる。

シグナム「……………」とにかく私と戦え!!」

全員「誤魔化した!!!!??」

ネプテューヌ「いいよ」

全員「いいの!!!?!」

ネプテューヌは、なぜかシグナムの誘いに乗った。

シグナム「そうか!では準備ができたら訓練場に来い!!」

ネプテューヌ「オッケー!」

シグナムは訓練場へと飛んで行った。

新八「ちょっとネプテューヌちゃん。なんでシグナムさんの申し出を受けたの?あの人本気ですよ」

新八は心配してやめさせようとするが、

ネプテューヌ「ふん、そうなんだ」

それがどうかしたの?とでも言いたそうな顔をしていた。

ティアナ「そうなんだ、じゃないわよ!シグナム副隊長は強いんだよ」

「！」

つとティアナが怒って言う。が、

銀時「まあ受けてやっても良いんじゃないか？」

つと銀時が言う。

桂「うむ。ネプテューヌ殿の実力を見るにいい機会だ。やらせてやれ」

エリザベス「右に同じく」

月詠「わっちもじゃ」

桂・エリザベス・月詠も賛成している。

ネプテューヌ「よし、いくよ」

ネプテューヌはシグナムのいる訓練場へと向かった。

ネプテューヌ「おまたせ」

訓練場に待たせているシグナムのところについたネプテューヌ。

シグナム「おそい！何時まで待たせるつもりだ！」

シグナムは仁王立ちで待っていた。

ネプテューヌ「そんなことより早くやる」

シグナム「おっと、そうだったな。」

シグナムはレヴァンティン、ネプテューヌは木刀を構える。

イストワール「今回は私が合図を出します。準備はいいですか」
シグナム・ネプテューヌ「当然(だ)！」

イストワール「それでは………始め!!！」

イストワールの合図とともに、シグナムが先に動いた。

シグナム「ハアアアアアアアアアアア!!!!！」

レヴァンティンを振り上げ、ネプテューヌに切りかかるが、

ヒョイツ!

シグナム「何!?!」

かわされる。

シグナム「なら!！」

避けた方向にレヴァンティンを振るが、ネプテューヌがいなかった。

シグナム「一体どk」どこ見てるのシグナムさん?」な!!!?!」

ネプテューヌはレヴァンティンの上に乗っていた。

ネプテューヌ「そんなんじや全然張り合いにならないよ!」つと」

シグナムから距離を離れるも、まだまだ余裕である。

一方、遠くで見ているなのは達は、

フェイト「うそ、シグナムの攻撃をかわしてる」

なのは「ネプちゃん・・・すごい」

銀時「やるじゃねえか」

フェイトが驚き、なのはと銀時は感心している。

ノワール「驚くのは早いわよ。ネプテューヌはまだ本気出してないから」

エリオ「あれで本気じゃないんですか!?!」

ノワールに説明に、エリオは驚く。

シグナム（本気ではないといえ、私の攻撃をかわすとは・・・しかもあの表情からすると奴は本気を出していない）

本気を出さず余裕なネプテューヌに対し、シグナムは焦っている。

シグナム「（ここからは本気でいくぞ!）レヴァンティン!カート
リッジロード!..!」

ガシャン

カートリッジを1つロードする。

直後、レヴァンティンの刀身が炎に包まれた。

ネプテューヌ「うわ! 剣から炎が!」

ネプテューヌは驚く。

シグナム「紫電一閃!!!」

ドゴオオオオオオオオオオオン!!!

シグナムの十八番である紫電一閃が炸裂した。

ヴィータ「あーあ」

なのは「ああ！ネプちゃん！」

神楽「おおーい！ねぷっちゅー！大丈夫あるかー!!!」

シグナムをよく知っているものは呆れ、そうでない人はネプテューヌを心配する。

ノワール「あんたたち馬鹿なの？」

いきなりノワールが言い放つ。

新八「え？どういうことですか」

ノワール「あいつが簡単にやられはしないわ。よくみてなさい。」

彼女のライバルをやっているからこそわかること。

少なくとも、ノワールとブランとベールは分かっているのだ。

煙がはれると、最初にシグナムが現れる。だが彼女は驚いた顔をしている。

シグナム「なん・・・だと・・・」

????「・・・びっくりして思わず変身してしまったわ」

「……つて、え？」

神楽「ちよつと待つネ！あれがねぶつちアルか！」

まわりのみんなは、シグナムと戦っている女性・パープルハートを見る。

桂「そうだ。それに彼女はエイリアン……アバババンといったか？銀時と手を組んで倒したらしいぞ」
エリザベス『マジっすか！』

桂の言葉に、周りは驚いた。

パープルハート「……さて、反撃開始よ！」

ガキイン！！

シグナム「グウツ！！」

パープルハートの攻撃に、吹き飛ばされるシグナム。

シグナム「くっ！レヴァンティン！カートリッジ」「させると思ったの？」「ズドツ！」「グあッ！」

紫電一閃を出そうとした矢先に、回し蹴りを受けるシグナム。

シグナム「ば……ばかな……いつのm「遅いわよ！」「くっ！！」

ダメージを受けたシグナムに、追い打ちをかけるパープルハート。

パープルハート「さらさらさらさらさら……！」

シグナム「くうう・・・」

シグナムは連続攻撃に苦戦する。

ヴィータ「マジかよ、シグナムが追い込まれていやがる!？」

信じられないような表情でヴィータは驚く。

そしてはやては感心するかのような感じでパープルハートを高く評価する。

はやて「大した子や。スピードだけはシグナムを上回ってる。」

はやてだけじゃなく、神楽、月詠もパープルハートの強さに感心する。

神楽「うおはー!ねぷっち、凄いアル!」

月詠「かなりの鍛錬を包んでおるな、魔法なしでもかなりの実力じや。」

そして、フォアード部隊はシグナムと互角に戦っているパープルハートの強さに啞然と驚いている。

特に驚くべきはパープルハートの刹那のごとくの瞬間移動であった。あれも魔法の一種だと最初はだれもが思ったが、パープルハートの刹那の瞬間移動は魔法ではなく独自の運動神経と身体能力によるものである。

シグナム「くっ!ならば!」

シグナムは、パープルハートからかなり離れる。

シグナム「レヴァンティン!!!」

シグナムが叫んだ直後、レヴァンティンは連結刃形態『シユランゲ
フォルム』となった。

パープルハート「連結刃・・・鞭のような剣かしら」

パープルハートが不思議そうに見ていると、

シグナム「飛竜一閃!!!!!!」

炎を纏った連結刃をパープルハートに放った。

パープルハート「・・・鞭の弱点って知ってる?」

シグナム「・・・?」

パープルハートが、こんなことを言い出す。

パープルハート「リーチが長く、敵を一掃するにはもってこいの武器・・・だけどその武器には弱点がある・・・それは」

襲ってくる連結刃をかわして、

ガシッ!

掴んだ。

シグナム「何!!!?」

パープルハート「掴まれたらその鞭が動かなくなるの」
炎を纏った連結刃を素手でつかんだパープルハート。手には血がに
じんでいる。

パープルハート「お礼に私の必殺技を見せてあげるわ」
連結刃を捨て、刀を構える。
すると、みるみる刀に紫のオーラが纏っている。

シグナム（なんだあれは・・・すさまじい魔力だ。）
何時でも防御できるように構えるシグナム。しかし表情は焦ってい
る。

パープルハート「これが私の必殺技…全力でいくから、覚悟して」
ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

刀から発するオーラと音に、シグナムは後ずさりする。
すると、パープルハートがきえた。

シグナム「ど・・・どk「ザァン！」「グァ！」

いきなり切られたが、これはパープルハートの攻撃だと理解した。
だが、パープルハートのラッシュはまったく止まらなかった。
すると、

パープルハート「こっち見なさい」
シグナム「何！・・・くっ！」

なんて……」

キャラも驚きを隠せないまま感心する。

エリオとキャラがパープルハートの強さに騒いでる中、ティアナは複雑な顔をしていた。

ティアナは悔しそうに拳を強く握った。

ノワール「……………」

そんなティアナを、ノワールはただ黙ってみていた。

第七訓：バトルはスリルを求めるもの（後書き）

真王「っというわけで、対戦相手はネプテューヌでした。さあ次回は、なのはが銀時に告白！だけどそれを気に食わないものが・・・」

アイエフ「次回『男の嫉妬と趣味は醜い』 テイクオフよ」

く 広告く

真王「同作の『魔王と聖王と狭間の混沌』カオス もお楽しみください」

第八訓：男の嫉妬と趣味は醜い（前書き）

銀八「3年Z組ー！」

生徒全員「銀八先生ー！」

銀八「はーい。ホームルームをやる前に、転校生を紹介する」

ネプテューヌ「はじめまして ネプテューヌだよ」

コンパ「わ・・・私はコンパです」

アイエフ「アイエフよ。よろしく」

ノワール「私はノワール。みんなよろしく」

ブラン「・・・私はブラン」

ベール「ベールと申します。はじめまして」

銀八「よし、六人は適当に席につけ。今回紹介だけだから何もない。以上ー！」

イストワール「『リリカル銀魂』 始まります（＾ロ＾）」

第八訓：男の嫉妬と趣味は醜い

訓練が終わって夕食の時間。

食堂に集まって、みんなで夕食を食べている。

銀時は、デザートチョコレートパフェを食べていた。

フェイト「銀時。今日の訓練、お疲れ様」

スバル「お疲れ様です！」

銀時「おお」

フェイトとスバルの言葉に、銀時は短く答えた。

銀時「そういや、フェイト。アルフとプレシアはどうしてんだ？」

フェイト「母さんは、本局で働いてるんだ。アルフは母さんの仕事の手伝い」

銀時「そうか。二人とも元気か？」

パフェを口に運びながら、銀時は尋ねた。

フェイト「うん。元気だよ。銀時の事を教えたら、二人とも嬉しそうだったよ」

銀時「そうか」

銀時はパフェを食べ終えた。

おかわりのパフェを頼もうとした時、

????「銀時い!!!」

声と共に背中に衝撃が走った。

銀時「おわっ！」

ビックリした銀時は後ろを見た。
そこには、

銀時「アルフ！」

人型の姿になつてるアルフがいた。

アルフ「銀時い、久しぶり！会いたかったよ！」

アルフは、銀時に抱き付いた。

周囲の注目が銀時達に集まる。

銀時「ちよっ…離れろ、バカ犬！」

アルフ「素直じゃないな」

嬉しそうな顔をしてるアルフは、なかなか離れない。

銀時「つーか何でおめエが此処にいるんだ？本局でプレシアの手伝いしてたんじゃないのかよ？」

アルフ「銀時に会いたくて来たんだよ」

フェイトからの知らせを聞いて、本局から来たらしい。

銀時「とりあえず離れろ！」

銀時が叫んだ。すると、

ネプテューヌ「銀さん、その子誰？」

アリスを頼張っているネプテューヌがアルフを見る。

フェイト「紹介するね。私の元使い魔の」

アルフ「アルフだよ！」

元氣よく挨拶するアルフ。

ネプテューヌ「そうなんだ。わたしはネプテューヌだよ。よろしく」

と、いいながらアルフの頭をなでる。

アルフ「////////」

なでられて気持ち良かったのか、顔を赤くする。

ネプテューヌ「……アルフちゃん、お手！」

アルフ「ワン！……はっ！」

ネプテューヌに犬の扱いをされ、はっとなる。

フェイトは苦笑いを浮かべ、銀時はニヤニヤと笑っている。

アルフ「ちよつとなん「おすわり！」ワン！……」

またもや、つられる。

ネプテューヌ「よしよしよい子だね」

ムツ〇ロウのような口調で、アルフをなでるネプテューヌ。
アルフはなでられてるせいか、怒る気もせず、むしろ気持ちいらしい。

アイエフ「・・・あの子、将来トップブリーダーになれそうじゃない？」

コンパ「ねぶねぶは動物に懐かれやすいんじゃないんですか？」

遠くで、ふたりはネプテューヌとアルフのやり取りを見ていた。
ちなみに、ノワールはアルフを見て胸キュンしたらしい。

一方の桂は、はやてと二人っきりでそばを食べていた。
エリザベスとリインは桂とはやての関係に気づいて、2人っきりにさせる為に銀時達と食事をしていた。

桂「全く、銀時も随分と罪な男になったものだ」

笑いながら桂はそう言つと、はやても面白がつて笑い出す。

はやて「そうやな。銀ちゃん、あの調子だとジャンジャンと女に好意を持たされるかもな」

桂「ふ・・・違うない」

何やら二人っきりで言い雰囲気話す桂とはやて。

そしてはやてはフォワード部隊の事を桂に聞き出す。

はやて「そう言えば、桂さん。桂さんから見て、新人達の訓練はどうや？もちろんスバルは除くけどな」

桂「・・・そうだな・・・エリオ殿とキャロ殿ははっきり言って相性が良い相方同士だ。おそらく、2人の力は今後の成長しだいで大

きくなるであろう」

桂から見て、スバルと比べれば2人はまだ未熟だが、チームワークとしてはそこら辺よりはかなり良い。

コンビネーション的な実力は間違いなく副隊長級は良くであろう。

桂「だが・・・訓練と言えば・・・ティアナ殿には不自然な感じがする」

桂がそう言い、ティアナのほうを向くと、ティアナはあんまり食事を進んでおらず、銀時とスバルとネプテューヌを複雑そうな顔で見つめる。

はやて「やつぱりそう思うか？」

桂「ああ、実力は単独的にはエリオ殿とキャロ殿より上である事は分かる。だが・・・何か無理をしているようだ。・・・まるで・・・自分の体を壊すかのような行為のようなその様な・・・」

2人と比べてティアナには何か不自然を感じる桂だが、1つだけ確信した事がある。

桂「いずれにせよ、今のティアナ殿のやり方では、成長する事はないだろう。」

現実的に言う桂だが、今は放っておいた方が良いと確信する。

夕食を食べ終え、みんなそれぞれの部屋に戻り、眠っていた。ちなみにアルフは、フェイトの部屋と一緒に寝ている。

銀時はベッドに横になっている。元気なアルフの姿が見れて、銀時は安心した。

だが、銀時の中には少し不安があった。

前に新八達と一緒に『A's編』を見た。

そして物語にゾーマが出ていない事に気付いた。プレシアの時もそうだったが、どうやら銀時達が介入した事で、原作のストーリーとは違う展開になっているようだ。

だとしたら、今回も違う展開になる可能性がある。

まあ原作の内容は知らねーけどな。

銀時はため息をついた。

何も問題が起こらなきゃいいが。

すると、扉がノックされた。

銀時「開いてるぞ」

軽く返事をする。

なのは「お・・・オジヤマ・・・します。」

声が出た後、扉が開かれた。

入ってきたのはなのはだった。

銀時は起き上がって、なのはに体を向けた。

銀時「んで？何の用だ？」

銀時が尋ねた。

なのは「できれば・・・外で・・・」

機動六課・展望スペース

銀時となのはは外に出て、お互いを向き合っているが、

なのは「あの……その……／＼／」

なのはは顔を赤くし、銀時から目をそらしながら呟く。

え……あれ？この展開、どっかで見たような感じがするんだけど？
なのはの顔ってこんなに赤かったっけ？

あれ、これって……いや……それはあり得ない……。だって、
なのはにはユーノがいるんじゃない……

なのは「銀さん！……わ……私……／＼／」

これ以上ないくらい顔を真っ赤にし、なのははついに銀時に告白をする。

銀時「私……銀さんの事が好きです／＼／」

銀時の予想が当たり、なのははついに銀時に告白をした。

10年前の『闇の書・ゾーマ事件』以来、心の奥底で芽生えた初めての思い。

それは銀時に恋をしたなのはの初恋であった。

銀時「……………マジでか？」

沈黙を破って、銀時が尋ねた。

なのは「……………はい……………」

小さな声で返事をしながらも顔を真っ赤に染めてなのは言う。

告白した事で吹っ切れたのか、なのはは歩き出し、銀時に抱き付いた。

なのはの豊満で柔らかい胸が、銀時に当たる。

なのはもまた、10年たつて魅力ある女性へと成長したので、胸もかなりでかいのである。

銀時は、どうしたらいいかわからず、首を左右に振りながら動揺する。

こつという状況に慣れていない銀時は、どうしたらいいかわからず、首を左右に振りながら動揺する。

銀時（おiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!何これええええ!!え?何?俺つてこんなにも罪な男だっけ!?マジでどうすんの!?ユーノは?ユーノはどうするの!?つうか銀さんとんでもない事をしちゃったんだけどおおお!!)

自分が一体何をしたのかと考える銀時。

一体何処でなのはは自分にほれてしまったのか考える中……

なのは「……………銀さん……………」

なのはは両手を銀時の顔に添えた。

そしてゆっくりと顔を近づけ、自分の唇を銀時の唇に重ねた。

なのはにキスされ、銀時の体は固まった。

なのは「……………ん……………」

もはや心がすでに絶望しきっていた。

銀時となのはは、どうしよう、と悩んでいたら、

パンー！！

全員（ノワール以外）「！！！！？」

突然ノワールが新八を平手打ちした。

ノワール「しっかりしなさい！あんたそれでも男なの？！」

ノワールが、新八に説教し始めた。

ノワール「失恋して絶望したから何？八つ当たりなんて外道がすることよ！それに、彼女は彼女なりの道があるなら、それを支えるつてのが男の役目でしょ！」

新八「！！！」

ノワールの言葉に、ハツとなる新八。

ノワール「そう、男なら・・・大好きな女性のためにサポートしてやりなさい」

ノワールの言葉で、新八に心が突き刺さるような衝撃が走った。

新八（そうだ・・・そうだった！僕は初めてなのはちゃんと出会ってかわいいと思った。なのはちゃんのために僕は守り続けた。でもそれはなのはちゃんに恋をしたからだ。銀さんに取られて殺したいほどだったけどそれは間違いないんだ！、ああっ！！・・・僕はなんて馬鹿なんだ！僕の浅はかなことでのなのはちゃんの幸せを踏みにじる

新八は、ノワールのところに歩み、

新八「すみませんでしたノワールさん」

あやまった。

ノワール「いいのよ。すきでいったわけだし」

ノワールは気にしてないらしい。

ブラン「ま、改心しただけでもいいし」

ベール「いつもの新八君のままのほうが良かったりしますしね」

ブランとベールは言う。

新八「ありがとうございます。では、」

新八は、自室へと戻って行った。

銀時「・・・やっとあいつも卒業したのかね」

と、いつものようにだらける。

なのは「にはは・・・さあ、もどろ」

銀時達も、自室へと戻って行った。

翌朝。

一応、なんやかんやでスバルが新しく加わって、フォワードのみならず個別訓練を受ける事になった。

ちなみに、スバルはティアナと同じくなのはのスターズ分隊に入り、実力がすでに副隊長急に入っているため、フォワード部隊の中で唯一シグナムとヴィータと同じく、『能力限定』の魔力リミッターがかかっているが、それでも強さはフォワード部隊の中でも一番強いってぐらいである。

それぞれの個性を活かすための訓練に、スバル達は頑張る。

ヴィータがいつもどおりに新人を鍛える中、シグナムもまたエリオの訓練に付き合っている。

いつもなら、シグナムが新人の訓練には参加しないのだが、エリオが「銀時さん見たいに大事なものを護れるほど強くなりたい」と言う信念に興味を持って、エリオの特訓を付き合っている。

銀時の様な強い男になれるのかその眼で確かめたいからである。

銀時達は訓練の様子を見守っている。

そこへアルフがやってきた。

アルフ「ここにいたんだ」

銀時「ああ。暇だからな。つーかお前は仕事しなくていいのかよ？」

答えた後、銀時はアルフに言った。

アルフ「ちゃんとプレシアからは、休みを貰ってるもーん」

気軽にアルフは答えた。

月詠「ふむ。アルフは天人に似ているな」

アルフを見ながら、月詠が言った。
一方の桂は真剣な眼差しでティアナを見ると、隣にいるエリザベスに話しかける。

桂「エリザベス。エリザベスから見て、ティアナ殿はどう見る？」
エリザベス『そうだね・・・何か無理をしている感じがします。時々だけどもキになっているような、なんか分からないけど』

桂は昨日、はやてに新人フォワード部隊の様子を聞かされて以来、ティアナの慌てっぷりを気になっていた。

エリザベス『なんか、強さだけを求めているようにしか見えない』

そう書かれたポートをだしてエリザベスは感想を言い出す。

桂「やはりそうか。・・・武士であろうと魔導士であろうと・・・人はみな、強さだけを求めても・・・『真の強さ』は得られぬ」
月詠「同感じゃ。」

桂がエリザベスと話していると、隣で煙管を加えて口から煙を吐く月詠が話しかけてきた。

桂「月詠殿」

月詠「桂の言う通り、ティアナの今の行為は強くなる為じゃなく、強さだけを求めて抗っている行為にしか見えぬ。あれではいくら訓練を続けても強くはなれぬ」

桂「うむ、・・・このままでは、ティアナ殿の体はいずれ内部から崩壊してしまうであろう」

どうすれば良いか迷ってしまう桂、エリザベス、月詠の3人。

ヴィータ「よし。午前の訓練は終わりだ！」

ヴィータがスバル達に告げた。

訓練を終えたスバル達は、それぞれストレッチをした。

銀時「こんな訓練毎日やんのか。大変だな？」

ジャンプを持ちながら、銀時は他人事のように言った。

ネプテューヌ「銀さん、それ何？」

ネプテューヌがジャンプを指差す。

銀時「勇気と萌と心の詰まったジャンプだ」

銀時は答える。

ネプテューヌ「みせて。……………うわっ、すごい」

ネプテューヌは、ジャンプ愛読者になった。

昼食を食べるため、銀時達は食堂にいた。

そこでティアナ達は顔をしかめていた。原因は銀時とフェイトにある。

二人は、真っ白いご飯の上に『ある物』をかけているのだ。意を決して、エリオが聞いてみた。

エリオ「あの……お二人とも何をかけてるんですか……？」
銀時「これか？」

銀時はエリオに顔を向けた。
片手で丼を掴み、顔の前まで持ち上げた。

銀時「小豆テンコ盛り『宇治銀時丼』だ」

ご飯に小豆を乗せるといふ、銀時特製の宇治銀時丼。

ティアナ達は顔を歪め、嫌悪感を露にする。

宇治銀時丼自体にも驚いたが、更に驚きなのが、隣に座ってるフェイトがそれを美味しそうに食べているのだ。

フェイトの意外な食の好みに、ティアナ達はア然とした。

シグナム、ヴィータ、リインフォースは、宇治銀時丼を始めて見るが、とても好きにはなれないと思った。

銀時「食うか？」

銀時がスバル達に尋ねた。

ティアナ「え…遠慮しときます！」

慌ててティアナ達は断った。

だが、スバルは…

スバル「じゃあ…一口だけ頂いてみます」

つと箸を掴んで宇治銀時丼を近づいた。

それを見たなのはも…

銀時は少し身を乗り出す。

スバル「はい！凄くおいしいです！」

なのは「全く新しい珍味だよ、銀さん！フェイトちゃん！」

スバルとなのは目を輝かせている。

銀時とフェイトはリンディ以外の同志が見つかって大喜びした。

それを見たティアナ達の口からは……

ティアナ達「な……なんだそりゃ——————」

「——————！」

だった。

月詠「あんなのを好きになれる者があるなんて……」

神楽「世の中は広いネ」

新八「なのはちゃんまで……」

神楽と月詠と新八の3人も、銀時の宇治銀時井を気に入る者はそうはいないと考えてたが、フェイトだけじゃなくスバルとなのはも気に入った事に不思議に感じた。

ネプテューヌ「銀さん、何食べてるの？」

ネプテューヌが銀時の持つ『宇治銀時井』をさす。

銀時「小豆テンコ盛り『宇治銀時井』だ」

と、ネプテューヌに見せる。

アイエフ「ちょ、なにこれ！小豆ばつかじゃないの！」

コンパ「銀さん！糖尿病になるですから、控えてくださいです！」

アイエフは嫌がり、コンパが注意するが、

ネプテューヌ「私の分はない？」

アイエフ・コンパ「ネプ子！？／ねぶねぶ！？」

いきなりのネプテューヌの言葉に驚く二人。

銀時「あるぞ」

何時から作ったのか、宇治銀時井を置く。

銀時「さあ、遠慮なさらずにたいらげなさい」

ちゃらけた口調でネプテューヌを試しているが、

ネプテューヌ「わかった」

パクッ！

一口で平らげた。

全員「って一口かよ……！！！」

宇治銀時井は、一口で平らげられるものではないのだが、ネプテュー

第八訓：男の嫉妬と趣味は醜い（後書き）

真王「今回はホテル・アグスタの警備。しかしそこで事件が起きた。

」

ノワール「次回『どんなところでもトラブルはつきもの』テイクオフ！」

（予告）

ナレーション「ホテル・アグスタに危険なロストログニアが運び込まれたようです」

第九訓：どんなところでもトラブルはつきもの（前書き）

真王「そろそろ本編終了も近くなってきたな」

パープルハート「たしかに。『リリカル銀魂』始めるわよ」

第九訓：どんなところでもトラブルはつきもの

戦隊舟の中

そこには、何やら赤紫色に輝く数多くのカプセルの中にはある凶悪な兵器が眠っている。

それを不気味に笑い出す高杉と1人の大男が話している。

???「おおー、これが高杉が言っていた例の機械兵器か」

高杉「ああ。すでに1本は完成されているからそいつは俺の部下にやったさ。いずれお前さんの部下にも使わせてやるよ」

高杉はククク・・・と不気味な笑い方をすると、男も面白そうに笑い出す。

???「ふははははははは！人間が作ったとは言え、ふれた瞬間に凶器を感じるわ！我等天人と手を組んでまで世界を潰すと聞いた事があるが・・・本当にその様な？」

愉快そうに笑い出す大男に、高杉の顔は獣を狩る脅威の笑顔を浮かぶ。

高杉「ああ、だからアンタの計画に手を貸してやったんだ。異次元だろうと元の世界だろうと・・・俺は全てを壊してやるのさ」

世界の全てを憎み、この手で破壊すると誓った黒い獣の脅威は収まることはない。

大男は高杉が宇宙海賊『春雨』より脅威の人物であると改めて知る。

「???」「春雨」と手を組んだのも、世界を潰す為の利用って訳か」
高杉「まあな。世界を壊す為なら、『春雨』だろうがなんだろうが
邪魔するものを殺すだけさ。・・・そんなことより、お前さんあ
いつをみなかったか？」

煙管を加えて高杉は大男に聞くと、男は答える。

「???」「あいつ? ああ、あの女か?」ちよつとした仕掛けをして
く『とかいってどつかいつちまったぞ?』

高杉「・・・なるほどな。だがその前に、実は数日後に、ホテル・
アグスタで骨董オーディションが行われる。その為、機動六課がそ
のホテルの警備をするらしく、お前達は大量のガジェットを襲わせ
るつもりだろ。そいつ等を実験台にさせて例の機械兵器からくりの威力、そ
の眼で確かめて見るといいぜ」

高杉はその兵器を部下に使わせて計画の為に溜めさせる。

「???」「元は実験用とはいえ、あれもかなり凶悪な代物だろ?」

高杉「ククク・・・ああ、もしかすればあんな駄作品でも機動六課
を全滅させる力はあるだろ?」

強力な兵器を駄作品扱いする程まで、高杉の計画している兵器はと
んでもなく凶器ともいえるであろう。

高杉「ククク・・・さあ、祭りの始まりだ」

高杉の中に眠る黒い獣の闇が今、動き出す。

キヤロは、シャマルの隣に置いてある五つのカバンを指差した。

シャマル「ああ、これ？隊長達と銀さんと桂さん・それにノワールちゃんとベールさんのお仕事着」

ニッコリ笑いながら、シャマルは答えた。

キヤロ達は首を傾げた。

ついでに銀時と桂とノワールとベールも、意味がわからず首を傾げた。

ホテル・アグスタ・エントランスホール

到着したスバル達は警備を始めた。

オークションが行われる会場の入口では、チケットを受付の男に見せて次々と人が入っていく。

一人の女性がチケットではなく、機動六課の身分証を見せた。

受付人「あつ！」

身分証を見た受付の男は驚いた。

はやて「こんにちは。機動六課です」

はやて、フェイト、なのはが綺麗なドレス姿で受付前に立っている。その三人の後ろには、

銀時「何で俺達まで、こんな恰好なんだ？」
桂「仕方がないであろう。これを引き受けなければ、銀時はビッグサンダーチョコレートパフェを食べられないんだぞ？それに俺も最高級特上天ぷらそばを見過ごす事になる」

スーツ姿の銀時と桂が愚痴っていた。

普段の着物を脱ぎ、黒いスーツを着ている。

ちなみに銀時の木刀と桂の刀はシヤマルに預かってもらっている。

フェイト「よく似合ってるよ、銀時」

なのは「ぐつと来るよ、銀さん」

フェイトとなのははニコツと微笑んだ。

はやて「いやー、ほんま両手に花って言うのはまさにこの事やな」

銀時、フェイト、なのはを見ながら、はやてが言った。

フェイト「も、もう、はやて！／＼／」

なのは「からかわないでよ、はやてちゃん！／＼／」

二人は頬を赤くした。

なのは「・・・ど・・・どう、銀さん？わたしとフェイトちゃんのドレス姿は？／＼／」

なのはが銀時に尋ねた。

銀時はドレス姿のフェイトとなのはを見つめた。色っぽい黒のドレスと綺麗なピンクのドレス。大人になったフェイトとなのはの魅力

をさらに上げている。

銀時に見つめられ、二人の顔がみるみる赤くなっていく。

銀時「よく似合ってんじゃん。綺麗だよ」

銀時は見た感想を言った。

フェイト「うん、ありがとう／＼／＼」
なのは「にゃはは／＼／＼」

フェイトとなのは嬉しそうに微笑んだ。

三人の姿を見て、桂とはやてはニヤニヤと笑い出す。

桂「銀時も大変だろうな・・・この先に待ち構える試練を受けねばならぬ事を知らぬ用だしな」

はやて「それもそつやな」

この先に待ち構える試練。

それは口にしなくて想像しながら楽しむ2人。

そしてはやてはテレながらも桂を見る。

はやて「そ・・・それと桂さん・・・その・・・私はどうかかな？
／＼／＼」

顔を赤く染めながらはやては桂を訪ねる。

美しき水のドレス。はやてもまた、フェイトとなのはにひけをとらないほどの魅力が上がっていた。

桂「見事に似合っている。美しくなったな、八神殿」

桂も見た感想を言い出す。

はやて「うふふ、ありがとな桂さん／＼」

はやても嬉しそうに笑い出すと、はやては桂の右腕を自分の絡めさせる。

それを見たフェイトとなのはも銀時の腕に自分達の腕を絡めさせる。

ノワール「・・・見ててこっちが恥ずかしいわ・・・」

ベール「まあまあ。いいではありませんか」

そんなら人に黒いドレスを着たノワールが愚痴をこぼし、緑のドレスを着たベールが制する。

ドレス姿のベールは、まわりから見れば美しいお嬢様のようなオラがあるため、ほとんどの男性が彼女を見ている。

ベール「どうですか桂さん」

ベールが桂に自分の姿を聞き出す。

ちなみに、はやてはベールを見たときピシッ、と音を立てた。なのはとフェイトも同じくピシッ、と音が鳴ったらしい。

桂「おお！どんな美女でも引けを取らない美しさだ」

銀時「そんなんなら男がいつぱいできるんじゃない？」

2人は見た感想を言う。

ベール「うふふ」

ベールはうれしそうだ。

える強さを誇ったゾーマを倒し、その実力は間違いなくオーバーS級は行く『白夜叉』坂田銀時。

坂田銀時に勝るとも劣らない戦闘能力を誇り、剣だけじゃなく爆弾やデバイスとは全く違う特殊な道具を使いこなす『狂乱の貴公子』桂小太郎。

宇宙最強戦闘種族『夜兔族』つと言う胡散臭い種族だが、戦闘力だけなら機動六科を含めても最強を誇る神楽。

桂のペットだが、桂に劣らない戦闘力を誇り、特殊な武装を使いこなすエリザベス。

クナイと言う飛び道具を使いこなし、素早い動きで相手を翻弄する月詠。

さらに隊長格全員がオーバーS、副隊長でもニアSランク。

他の隊員達だって、前線から管制官まで未来のエリート達ばかり。あの年で、もうBランクを取ってるエリオと、レアで竜召喚士のキヤロ。

そして最も凄いのが、潜在能力と可能性の塊で、魔術はすでにAA+級の實力を持ち、新しく入ってきたフォワード部隊のスバル。そして、銀時のような素早い動きと変身能力を持つネプテューヌ。

やっぱり……うちの部隊で凡人は私だけか……………。

ティアナは静かに目を閉じる。

でも、そんなの関係ない。

しばらくして、ゆっくりと目を開けた。

私は、立ち止まるワケにはいかないんだ。

ティアナが改めて決意した時、不気味な光景を見た。

それは、何処から出したのか突っ込みたくなるような刀を地面に付け、頭に『打倒・ガジェット』と書かれた鉢巻をかけているエリザベスがいた。

ティアナ「……あのう……随分と張り切っています……」

シュン！！

ティアナ「きゃあああああー！！」

突如、エリザベスが刀を回転に振りだし、ティアナは思わず叫んでギリギリに避けて、地面に尻をつけて転ぶ。
後少し、反応が遅れていたなら間違いなく斬られていた。

ティアナ「何するんですか！？」

ティアナが怒鳴ると、エリザベスは鉢巻に『エリゴ13』と書かれており、葉巻をくわえたまま目付きをかの「ゴル」の様に、

エリザベス『俺の後に立つな』

そうか書かれたポートを出す。

ティアナ「うっさいわー！！どっちが前だか後ろだかわからない体をしているくせにー！！」

ティアナが、額に青筋を浮かべて怒鳴りながらツッコんだ。

ホテルを囲む森。

森の中を走る集団があった。

ホテルへ向かって、真っ直ぐに森の中を移動してるのは、ガジェット
トの集団だった。

屋上で警備をしているシャマルのクラールヴィントが反応した。

シャマル「シャーリー！」

シャマルが叫んだ。

シャーリー「はい！」

管制室にいるロングアーチのメンバーのシャリオ・フィニーノ、通
称シャーリーが返事をした。

管制室でも、ホテルに接近しているガジェットを感知した。

ティアナがシャマルの近くまで駆け上がった。

ティアナ「シャマル先生！私も状況を見たいんです。前線のモニタ
ーもえませんか？」

シャマル「了解。クロスミラージュに直結するわ」

シャマルはモニターを回した。

モニターをもらったティアナは、エリザベスの所に戻った。
だが、エリザベスは、ガジェットがいる方へ向かって走り出した。

エリザベス「ここは任せた！」

ティアナ「ちょっ…エリザベスさん!？」

そう書かれたボードをティアナに見せて、エリザベスはティアナに
勝手にホテルの守備を任させた。

エリザベスは森の中に入っていった。

スバル、神楽、月詠、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、ネプテユ
ーヌ、ブラン、アイエフ、コンパの10人が迎撃に向かう。あと勝
手に動いてるエリザベスも。

神楽「おおー、でかいアル!めっちゃ倒しがいがアルね」

神楽は傘を構えて大型と対峙する。

そして神楽は素早く突撃して、傘を豪快に振り回しながら小型ガジ
エットを次々と破壊していく。

神楽「ほわちやあああああああああああああ!！」

隙が出来たと確信し、大きくジャンプする。

そして体を回転させて大型に手刀を炸裂させ、大型ガジェットは押
しつぶされて大爆発した。

シグナム「左側は私が何とかする。スバルは右側を」

スバル「はい！」

シグナムとスバルは数多くのガジェット達を左右に分けて倒す事に決めた。

スバル「行くよ、マツハキャリバー！！」

スバルは、凄まじい勢いでガジェット達に向かって飛び出した。技を炸裂させ、一気に4体以上のガジェットを破壊した。続けて周りにいるガジェットを次々と破壊していく。

シグナム「レヴァンティン！」

シグナムが叫んだ直後、レヴァンティンは連結刃形態『シユランゲフォルム』となった。

スバルに続くかのように、スバルの反対側にいるガジェット達を連結刃で攻撃した。

連結刃は蛇のように動き、次々とガジェット達を斬る。

ヴィータ「行くぞアイゼン！」

空中にいるヴィータは、八個の鉄球を出した。

ヴィータ「まとめて、ぶち抜けエエエ！！」

グラーフアイゼンを振り、八個の鉄球を打ち放った。全ての鉄球は命中し、ガジェットを破壊した。

ザフィーラの前にもガジェットが居て、光線を放つが、ザフィーラは防御フィールドで防ぐ。

ザフィーラ「ここは通さん!!」

ザフィーラの声の後に、地面から光の柱が現れ、ガジェット達を貫いた。

エリザベスは偶然にも月詠と合流して、2人でガジェットの撃墜をしていた。

エリザベス『チェストーーーーー!!』

そう書かれた鉢巻を頭にかけているエリザベスは、刀を上段に振り、豪快にガジェット達を次々と一刀両断する。遠距離で攻めてくるガジェット達には口からキャノン砲を出して攻撃し、ガジェット達を吹飛ばす。

月詠「動きが鈍すぎじゃ!」

月詠は大量のクナイを一斉に放ち、10体以上のガジェット達を串刺しにし、ガジェット達は大爆発する。

ネプテューヌ「ザコはいくら来ても無駄だよ」

銃を取り出したネプテューヌは次々とガジェットを撃ち抜く。

ちなみに、ネプテューヌ達の持つ銃を質量兵器かとなのは等は思っ
て没収したが弾はなく、魔力で撃つという説明で納得したらしい。

ブラン「消えて」

ハンマーを振り回してガジェットを次々と破壊するブラン。

ブラン「ぶっ飛びやがれ!!」

と言って、大型ガジェットをハンマーで飛ばし、ボウリングのピンのように途中にある木々とガジェットを弾き飛ばす。

別の場所では、アイエフが舞い踊るようにガジェットを破壊し、コンパが注射器をマシンガンのように撃ち続けてガジェットを破壊するが、

ネプテューヌ「わわわわわわわわわわわわわわわわっ!!」

ブラン「あぶね!どこ狙ってやがる!!」

神楽「ぎいやあああああああ!!!!」

またもや味方を狙ってしまった。

コンパ「ご、ごめんなさ〜〜〜い!!!!」

ティアナは、モニターで戦いの様子を見ている。

ティアナ「これで、能力リミッター付き……神楽さん、エリザベスさん、月詠さん、ネプテューヌ、ブランも、まだまだ本気じゃない……」

ティアナは自然と強く拳を握った。

焦りと苛立ちが生まれる。

中にいる銀時はトイレにいた。用を足し終えて、手を洗っている。ガジェットが来たみてーだが…あいつら大丈夫かなんやかんやで、スバル達の心配をしてる銀時。

銀時「まあ神楽、エリザベス。月詠の3人がいれば、大丈夫だろ。それにあいつも・・・」

手を拭いて、トイレから出ようとした。

その時、トイレに入ってきた人と肩がぶつかった。

銀時「おつと悪い」

???「いえ、こちらこそ…」

二人は互いに顔を見た。

すると銀時にぶつかった男は目を見開いた。

???「ぎ…ぎ…銀さん!?!」

男は銀時の名を叫んだ。

銀時「…どこかで会ったか?」

銀時は首を傾げた。

ユーノ「僕ですよ!ユーノ!ユーノ・スクライアです!」

自分を指差しながら、男は名乗った。

名前を聞いて銀時は思い出した。

銀時「ユーノ！？えっ？マジでユーノ！？」

思い出した銀時は驚いた。

ユーノは長い髪を後ろに束ねていて、少し面影が残っている。

銀時「マジでビックリしたぜ。え？お前、今何やってんの？」

ユーノ「今は考古学者で、無限書庫の司書長をしています」

銀時「お前も偉くなったな」

10年でみんな見間違える程に変わったな。変わってねーのは俺だけか。

何か先を越されたと言うか、置いてかれたみたいで、銀時は軽く落ち込んだ。

そして、この再会が新たな反乱の開幕である事を知らずにいた。

桂とはやては会場内でのデート・・・もとい監視をし続けてる頃、

ノワール「・・・派手にやってるみたいね」

ノワールが外を見ながら言う。

ベール「……………何か気になることが？」

ベールがきくとノワールが答えた。

ノワール「……ティアナのことよ」

ホテル・アグスタの外

キャロ「召喚・来ます！」

キャロが敵召喚師の召喚を察知して紫色の四角い魔法陣が4つ現れ
中から1型9と3型一つが出て来る

ティアナ「迎撃いくわよ！」

エリオ「はい！」

ティアナの言葉にエリオ達が応えた。

ティアナは、ガジェット達にクロスミラーージュを向ける。

今までと同じだ。証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して、
私はそれでいっただってやってきた。

バン！ バン！

魔力弾を撃つがAMFのせいで当たりが浅い。更に撃つが有人操作
に成ったらしく私の攻撃は避けられてしまう。

ティアナ「ちっ！」

ガジェットがミサイルを撃つと、ティアナは冷静に全て撃ち落とす。

キャロ「ティアナさん！」

キャラロが叫ぶ。

すると、ガジェット1型が光線を私に撃つて来て、ティアナはジャンプして回避する木を盾にしてガジェットの様子を見る。

シャマル（防衛ライン！もう少し持ちこたえてね！ウィータ副隊長が、すぐに戻ってくるから！）

シャマルが念話で、スバル達に伝えた。

ティアナの表情が険しくなる。

ティアナ「守ってばっかじゃ行き詰まります！ちゃんと全部倒します！」

シャマル（ちよつと…ティアナ大丈夫？無茶はしないで！）

ティアナ「大丈夫です！毎日朝晩、練習してきてんですから！」

そう言いながら、クロスミラージユを構える。

ティアナは、エリオに顔を向けた。

ティアナ「エリオ、ガジェット達の注意を引き付けて！その隙に私が一気に破壊する！」

エリオ「は、はい！」

言われた通り、エリオは素早い動きでガジェット達の注意を引き付ける。

その隙にティアナは、カートリッジを四発もロードした。

証明するんだ。特別な才能や凄い魔力がなくなつて…どんなに危険な戦いだつて。

ティアナの周りに、複数のオレンジ色の魔力弾が現れる。

ティアナ「私は…ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！」

クロスミラージユを構える。

ティアナ「クロスファイヤー」

エリオは、ガジェット達の攻撃を避け続ける。

ティアナ「シユート!!」

オレンジ色の魔力弾が、一斉にガジェット達に迫る。次々とガジェット達に魔力弾が当たり、倒していく。だが、魔力弾が一発反れて、エリオに迫る。

キャロ「エリオ君!!」

キャロが叫びながら走り出す。

エリオ「えっ!?!」

エリオが振り返るが、今からでは避けられない。

魔力弾がエリオに当たるかと思われた時、白い影が魔力弾を防いだ。

エリオ「え!?!」

エリオは自分を守った白い影を見た。

赤い目に肩まである水色の髪（長いものだど腰あたり）と水着のような白いボディースーツ、手には変わった斧が握られていたが、シグナムと戦ったパープルハートのような雰囲気があった。

ヴィータ「うるせエ、馬鹿ども!！」

エリオが言い訳をするが、ヴィータが怒鳴った。

ヴィータ「もういい!後はアタシがやる!三人まとめてすっこんでる!！」

怒鳴られた3人は、啞然とした。

ヴィータ「……………わりいな。エリオを助けてくれて」

ヴィータはホワイトハートに感謝する。

ホワイトハート「……………別にいい」

気にしてない、と付け加えて言う

ホワイトハート「そんなことより……………敵をほっといていいの?」

ヴィータ「!つと、ヤベエ!!!急ぐぞ!」

ヴィータは先に飛んで行き、ホワイトハートは後をついていった。

ホテル内。

銀時とユーノは、トイレから出た後も話をしていた。

銀時「そっいや、お前まだフェレットになれんの?」

ユーノ「はい。なれますけど?」

ユーノは首を傾げながら答えた。

銀時「フェレット姿で、まだ女湯覗いてたりすんのか?」

ニヤニヤ笑いながら、銀時は聞いた。

ユーノ「だから!それは誤解ですってば!」

ユーノが必死に弁解する。

???「司書長」

ユーノ「ん?つと時間か。じゃあ銀さんまた今度」

銀時「おお」

男に呼ばれ、ユーノは仕事に戻り、銀時は手を振る。

ホテル・アグスタ・会場

司会者「レディース・アード・ジェントルマン、お待ちせしましたみなさん。これよりオークションを開催いたします。」

司会者の言葉に、出席者は拍手する。

ノワール「・・・なんとまあすごいこと」

ノワールはこんなことを言う。

司会者『そんなわけで、骨董品を紹介してくれるのは考古学者且つ無限書庫の司書長・ユーノ・スクライアさんです』

ユーノが現れると同時に、観客が盛大な拍手を送る。

なのは「あれ？ユーノくん」

なのはが声を上げる。

ベール「たしか、あなたの幼馴染でしたわよね？」
なのは「ハイ」

ベールの問いになのはは答える。

司会者『それでは、最初の品はこちらです！』

そう言ってステージに現れたのは、黒くてひし形の宝石だった。

すると、ノワールとベールが顔を険しくする。

ノワール「（なにあれ・・・いやな予感がするわ・・・ベール！）

ベール「（わかりましたわ）・・・すみません。ちょっとお手洗いを」

はやて「ん？なんや、はよ済ませとき」
ノワール「ごめんね」

とはやて等にいったって、2人は会場を出る。

桂（2人があの宝石を見た瞬間、険しい顔をしたが、あれはいつた
い？）

桂も黒い宝石を見て、表情を険しくする。

司会者が説明を終えて、オークションがはじまるうとしたその時、
ガタガタガタガタガタガタガタガタ！

黒い宝石の入ったケースがガタガタ揺れ始めた。

司会者「な、なんだ!？」

司会者も観客も驚いていると、

ガシャン！

ケースが壊れた。・・・にもかかわらず、宝石が宙に浮いている。
そう、浮いているのだ。

桂（何!?! 浮いているだと!）

桂を含め、なのは達も驚く。すると、

ビシャーーーーーーン!

宝石から雷が発生した。

それだけでなく、雷から人の形をしたモンスターが現れた。
赤い四つの目に青いメタルなボディ、両腕と背中に金色の大きな

爪のある・ヘカントケイルが現れた。

ヘカントケイル「?、??」

しかし、ヘカントケイルはここはどこだと言わんばかりにきよろきよろ見回している。

桂（馬鹿な！宝石から化け物が現れるだと？）

現れたヘカントケイルに驚く桂たち。

すると、ヘカントケイルがユーノのところへ歩み寄った。

ヘカントケイル「……………」

フェイト「大変！ユーノが危ない！」

フェイトがそういうが、間に合わない。

ヘカントケイルが爪を振り上げたその時、

???「待ちなさい！」

ヘカントケイル「!!」

声が聞こえ、ヘカントケイルは振り向く。

そこにいたのは、

ブラックハート「あなたに好き勝手させないわ」

黒のボディースーツと銀色になびく髪と緑色の瞳の少女・ブラックハートと、

グリーンハート「覚悟はよろしくて？」

ポニーテールにした緑の髪と、胸と下半身しか布面積がない女性・グリーンハートが現れた。

なのは「なにあれ!？」

なのはは現れた2人に驚く。

フェイト「……あれ?……気のせいかな、変身後のネプテューヌと似てるような……」

フェイトの言葉に、なのはとはやてがああ、という顔になる。

はやて「ってゆうかな……あれ、目のやり場に困るんちゃうん？」

はやてはグリーンハートに注目する。

なんせ彼女は七割がた肌を露出しているため、ほとんどの男が顔を赤くしている（桂は除く）。

ヘカントケイル「……………」

ヘカントケイルは、右腕の爪でブラックハートを狙うが、

ブラックハート「遅いわよ」

ゴスツ!

ヘカントケイル「!!!?」

ヘカントケイルは蹴りをくらい、ひるむ。

しかし、負けじと今度はグリーンハートを狙う。しかし、

グリーンハート「遅いですわ」

と言って、右腕に装備している槍でヘカントケイルをきる。

ヘカントケイル「……………」

ヘカントケイルはやけくそになって、2人を狙うも、

ブラックハート「消えなさい」

グリーンハート「さようなら」

返り討ちにされ、ヘカントケイルは倒れた。

まわりから歓声上がる。しかし、あの黒い宝石がなくなっている。

桂（……………なんなんだ？あの宝石は）

桂は険しい顔で、黒い宝石のことを考えていた。

ガジェットをすべて破壊した外では、

人気のない所で、ティアナは1人落ち込んでいた。証明出来なかったからである。

あの時、ホワイトハートがいなければエリオに直撃していたのであり、何も出来ず、結局自分は何も残せてないのだ。

ティアナ「うううっ！ 私・・・は」

ティアナの眼から、涙が大量に出る。

ティアナ「うあああああああ！」

堪らなく悔しかった。

自分のミスショットが許せなかった。

何度も悔やみ、何度も泣き叫び、ティアナはそのくり返しをする事しか出来なかった。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

銀八「はーい。始めましたこのコーナー。この小説の気になるところを答えていく『教えて！銀八先生』のじかんです」

ネプテューヌ「先生！さっそく来た質問を答えましょうよ」

銀八「わかった。・・・って一つだけかよ。まあいいや。ペンネー

△『あああ』さんからの質問。『銀さんとネプテューヌ勢で誰が一番強いですか？』

僕的には銀さんがいちばんであってほしいです。』、だそうだ。どうなんだ？』

真王「それは私が答えましょう。銀時とネプテューヌ達の強さを式で表すなら、

銀時⇨ネプテューヌ⇨ノワール⇨ブラン⇨ベール>(コンパ⇨アイエフ)

といった感じでした。銀時とネプテューヌのガチバトルならほぼ互角ですが、変身状態のネプテューヌだったら、銀時は少し苦戦するようです。」

銀八「というわけで、『あああ』さん廊下に立ってなさい」

ネプテューヌ「ひとつだけだとさびしいね」

銀八「そうだな。そんなわけで、この質問コーナーはここで終了しますが、質問がある人はジャンジャン来てください。あと黒神さんのところに人気投票があるらしいのでこっちも人気投票を応募してください。」

第九訓：どんなところでもトラブルはつきもの（後書き）

真王「と、言うわけでコメントと人気投票を応募しておきます。投票するさいは一言コメントに書き、そのキャラに対する感想を書いてください。あ、投票は一人五票です。さて今回は、ホテル・アグスタから帰還した銀時達。しかしティアナの様子が変だが・・・」

パープルハート「次回『過去には意外すぎる思い出がある』テイクオフ」

（応募）

銀八先生の質問と、人気投票をお願いします。

第十訓：過去には意外すぎる思い出がある（前書き）

真王「アクセス確認したらもう10000PVを突破しました。」

銀時「マジでか！」

神楽「おお！すごいネ！」

桂「なんと・・・ここまで人気があるとは」

真王「私もうれしいです。では、『リリカル銀魂』」

銀時・神楽・桂「始まるぞ（アル）」

第十訓：過去には意外すぎる思い出がある

ガジェットとの激戦を終え、現場では調査班が現場検証をしていた。フェイト達も現場検証の手伝いをしている。

ティアナは、エリオ達から少し離れた所で、なのはと話をしていた。ガジェットとの戦いでミスショットの事で、なのはに少し怒られた。

話が終わり、ティアナはゆっくりとした足取りで、スバルの所へ向かった。

神楽と月詠は事後処理をキャラとエリオとやっている。

キャラは銀時、フェイト、アルフ、ユーノと話しているのを見て神楽に聞く。

キャラ「神楽さん、フェイトさんと話している人って考古学者のユーノ先生ですよね？」

神楽「ん？たしか無限なんたらリーダーぽくて、なのはちゃん達の幼なじみね。淫獣だからキャラは近づいちゃダメね。エリオもあんな大人になっちゃダメアルよ」

エリオ「はい？」

キャラ「わ・・・分かりました」

フリード「きゅーー！」

エリオ、キャラ、フリードは神楽の説明に納得して返事をする

月詠「ちよつと待て！今の説明はなんじゃ！？特に最後！！」

月詠が呆れてツッコミをすると、神楽は呆れたような表情でユーノの事を言い出す。

神楽「ユーノは以前、子供の時になのは達の裸をフェレットの姿で見た野蛮な男だったね！自覚はないとは言え、女の敵アル」

神楽はそう言いだす。

以前、海鳴温泉でフェレット姿でなのはと一緒に女湯に入った事がある。

それがきっかけで、フェレット姿の話をされるといつもそのネタでからかわれてしまう事が多いのである。

そして銀時とフェイトに呼ばれて、神楽達は向こうに行く。

なのはがティアナとの話しを終え、銀時達に駆けつけ、銀時、フェイト、アルフは、ユーノの護衛をなのはに変えてこの場を去る。

銀時「ユーノも大人になつたし・・・そろそろなのはに告白すんじやねエ？」

銀時はニヤニヤと笑いながら面白そうに言い出すが、フェイトは苦笑して銀時に話し出す。

フェイト「そんなことをすれば・・・ユーノは心を痛むかもね」

苦笑してフェイトはそう言うと、その意味を理解した銀時は、「あ！」と叫んで思い出した。

なのはは銀時に好意を持っていてユーノには友達としか見ていないことに。

神楽、月詠、アルフ、エリオ、キャラは銀時の叫びに驚きだす。

銀時「ヤベーよ、そんな事になつちまったら俺、ユーノに殺されそっうだよ！？どうしよう！！」

ガクガクと震える銀時。

ネプテューヌ「新八君の一件もあるしね」

それを見て、面白そうな顔をするネプテューヌ。

すると、フェイトは銀時の片腕を両腕で掴む。

フェイト「大丈夫だよ。何かが会った時には私が銀時を守るから
／／／」

顔を真っ赤に染めて銀時にそう言うフェイト。

腕にフェイトの胸の谷間が少し挟んでいる事で、銀時は物凄く動揺している。

2人の光景に神楽とアルフとネプテューヌは不機嫌そうな顔をして、月詠は興味深そうに二人を見て、エリオとキャロにいたっては顔を真っ赤に染めている。

ノワール（・・・今のモンスター・・・あれはヘカントケイルだったわ。なぜあのモンスターが・・・それとあの宝石は・・・）

ノワールは黒い宝石のことを考えていたが、答えは導けなかった。

なのははユーノと久しぶりに話す。

やっぱり友達と話すのは楽しいようであった。

そしてユーノが真剣な表情をする。

ユーノ「なのは、君に言いたい伝えたい事があるんだ！」
なのは「ふえ！？なっ何をですか？」

なのははユーノの真剣な表情に驚くと、ユーノは顔を真っ赤にして
なのはに伝える。

10年間のなのはに対する思いを今こそ彼女に伝える為に。

ユーノ「なのは！僕は君が好きだ！／／／」

なのは「……………ふえー！？」

突如の告白になのはは驚くと、ユーノはさらに言い出す。

ユーノ「僕と付き合ってください！／／／」

恋人として付き合う事をなのはに伝える。

全て言い切ったから彼は、なのはの返事を待つが……

なのは「……………ユーノ君……告白はうれしいんだけど……
ごめんなさい！／／／」

ガーン！！

その返事を却下するのはにユーノは振られてしまったことに絶望
する。

なのは「実は私、10年前から銀さんの事が気になって、今は銀さんの事が好きになっちゃったみたいなの／＼」
ユーノ「ええー!?!」

なのはの告白に驚きを隠せなかったユーノは驚きを隠せなかった。
なのはが銀時の事を思っていたなんて知らなかった。

ユーノ「ぎ・・・銀さんだって!?!だって、銀さんにはフェイトにアルフ、それにシグナムだって・・・」
なのは「分かっているよ!・・・でも・・・あの『闇の書・ゾーマ事件』以来、銀さんの事が気になって気持ちがもやもやしていたんだ／＼」

気持ちを抑えられないなのはは銀時の事が好きであった事を知り、以前に告白したのである。

なのは「だから・・・ユーノ君、ごめんなさい!!--」

もう一度頭を下げて誤るなのはに、ユーノは・・・

ユーノ「い・・・いや、そのう・・・大丈夫だよ!自分の気持ちを伝えられたからそれで十分だよ」

苦笑しながらもユーノはなのはにそう言った。

どんなに足掻いても振られた事には変わりはないのである。

ユーノ「じゃ・・・じゃあ、僕はそろそろ行くね」

ユーノ君は建物に向かうと・・・

なのは「ユーノ君！」

なのはが呼ぶと振り向き私は笑顔で言う

なのは「私達はこれからもずっと友達だから！だから、ユーノ君も頑張ってね！」

ユーノも笑顔でなのはに手を振り建物の中に入った。
その後、なのはに振られた事に強いショックを受けてかなり落ち込んでしまった事には言うまでもない。

ブラン「・・・・・・・・・・・・・・・・見なかったことしておくか・・・」

なのはとユーノのやり取りを見てしまったブランがいた事も言うまでもない。

ホテルアグスタから帰って来たところだ

なのは「じゃあ今日はもう解散」

フェイト「しつかり休んで今日の疲れを取ってね」

F『『はい...』』

なのは達は隊舎にフォワード達は宿舎に戻って行く。

スバル「銀時さん、ちょっと言いかな？」

スバルが話したい事があると云いスバルの部屋に向かう銀時。
桂、神楽、新八、エリザベス、月詠、リンフォースも銀時について行く事になった。

ノワール「あれは・・・？」

ノワールは、スバルたちの方へと見つめていた。

そこは、スバルとティアナが寝泊りする部屋。

全員椅子に座り、スバルはティアナの事を話し出す。

スバル「実は、ティアの事で話があつて呼んだんだ。」

桂「ティアナ殿の事か？教導の時も時々だが、ティアナ殿は無茶する事が多い・・・力を求めるのは珍しくはないが……ティアナ殿の度は過ぎてる事が多い」

月詠「一体ティアナに何があつたと言っんじゃ？」

桂と月詠はティアナの無茶な行動に、もう言われずにはおれなかった。

銀時、神楽、新八、エリザベスも、同じ気持ちである。

リンフォースも同じく気になっていた。

スバルは顔を暗くしてある局員のプロフィールを出す。

出たのはティアナの兄、ティード・ランスター。

首都航空隊所属の一等空尉で執務官志望のエリート魔導師だったが、ティアナが10歳の時に殉職している。享年21。

スバルは彼の経歴を話し、彼が違法魔導師に手傷を負わせけど逃が

してそして殉職した事を話し顔を更に辛そうにする。

スバル「その時ね、心無い上司が死んでも捕まえるべきだった・
最後に役たたずで無意味って言ったんだ」

そう言うつと銀時、桂、月詠、リインフォースは無言に黙りこむ。

神楽「酷いアル！命をかけてまで真剣に戦った部下に対する台詞じゃないね！」

エリザベス「全くだ！」

新八「そうですよ！お兄さんの頑張りを無意味だなんて！！」

神楽とエリザベスと新八は怒りを表している。

スバル「その時ティアはまだ10歳、沢山傷付いて、沢山悲しんだ・
・・・」

話しは終わり銀時達もそれぞれの場所へ行く。

話を聞いた銀時はスバルを連れてティアナの所に向かうつと、

ノワール「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ノワールがいた。

それだけでなく、ネプテューヌ達もいた。

銀時「・・・・・・・・まさと思うがお前ら・・・」

銀時がきくと、ノワール達がうなずく。

銀時「・・・行くぞ」

といつて、銀時とスバルとノワールたちは、ティアナのところへ向かった。

ティアナは一人訓練をやっていた。

すでに4時間もやってた。

ティアナは訓練を続けていた。辺りはすっかり暗くなり、夜空には綺麗な星が輝いている。

途中でティアナは息が荒くなり、地面に膝をついた。

汗を拭いて呼吸を整え、立ち上がった時、

銀時「いや、精が出んなあ」

のんびりとした声が聞こえた。

後ろを見ると、そこにはニヤニヤと笑っている銀時とスバル、それとノワール達がいた。

ティアナ「銀時さん！スバル！それにノワールさん！」

ティアナは驚いた。

ティアナ「い、いつから見てたんですか？」

ネプテューヌ「ついさっき」

銀時「それより、ここら辺で終わりにすりゃどうだ？」

私の事を心配して？

ティアナは少し戸惑った。

ティアナ「だ、大丈夫です。まだもう少し続けます！」

慌てて銀時とスバルとネプテュー又達から顔をそらす。

銀時「ツラ達から聞いたぜ。俺がいねえ間に、なんかいろいろ大変だったそうじゃねえか」

ティアナ「……………」

ティアナは、少し顔を俯いた。

ノワール「ミスショットがそんなにショックなの？」

ノワールが尋ねた。

ティアナは黙ったまま答えない。銀時とスバルとネプテュー又達に背を向けて、クロスミラージユを構えて訓練を再開する。

ノワール「朝晩の訓練を見てて思ったんだけど、ティアナは無理してるんじゃない？」

訓練してるティアナを見つめながら、ノワールは言った。

ティアナは動きを止めた。

ティアナ「訓練の様子…見てたんですか？」

少し驚いた感じでティアナは尋ねた。

ノワール「たまにだけど」

ノワールは答えた。

銀時「お前の無茶な特訓はヅラ達も知ってやがるぜ。無茶してまで強くなりたいんかよ？」

ティアナ「…詰め込んで練習しないと上手くなんないんです。凡人なもので」

そう答えて、ティアナは訓練を再開した。

銀時「俺から見りゃ、魔法が使えるっただけで凄エと思うがよオ」

少し羨ましそうに銀時は言った。

もし、銀時が魔法を使えばかめはめ波を撃てると考えている。

ティアナは再び動きを止めた。

ティアナ「ただ魔法が使えるだけじゃ…ダメなのよ……」

背を向けたまま、ティアナは言った。

ティアナ「私には……スバル達みたいな才能もないし…キャロみたいなレアスキルもない…」

スバル「ティア……」

クロスミラージュを握る手に力が入る。

銀時は黙って、ティアナの話聞いてる。

ティアナ「だから私は…少しぐらい無理をしないと、強くなれないんです!!」

ティアナの大きな声が庭に響いた。

ティアナの様子を見て、銀時はため息をついた。

銀時「お前の兄貴の事は、スバルから聞いたぜ？」
ティアナ「!？」

兄の事を口に出す銀時に、ティアナは後ろを振り向く。
何故、兄の事を銀時が話し出すのかを聞こうとする前に、銀時は話し出す。

銀時「災難だったな。残酷な上官に無能扱いされた上に亡くなつちまったんだ、二重の悲しみを背負ってしまったもんじゃねえか」
ティアナ「・・・何が・・・言いたいんですか？」

深刻な顔でティアナは銀時を睨みつける。

銀時「まあ、他人の事は言えた義理じゃねえが・・・俺もお前と一緒に家族がいねえんだよ」

ティアナ「え？」

睨みつける事を辞めて、ティアナは驚きだす。

スバルもネプテュー又達も銀時に家族がないことを始めて知った。
銀時は少し自分の過去を話し出す。

銀時「俺がまだガキの頃、戦争が繰り返され、両親は死んでしまった。親の顔はろくに覚えていねえで、どう生きれば良いのか分からなくてよオ・・・んで、命を落とした者の所有物をはぎ取りながら生活するしかなかった訳だ」

初めて聞かされる銀時の過去にスバルとティアナとネプテュー又達は黙って聞くしかなかった。

小さい頃でも、銀時は屍を食う鬼として恐れられており、生きていく為にはこれ以外の方法しかなかった。

銀時「まあ、それでもお前さんの兄貴にやあ関係ねえ事だが・・・俺が言える事はただ一つ。・・・お前の兄貴、ティーダは望んでんのはお前が強くなる事や立派な魔導士なる事じゃねえ」
ティアナ「それは、どういう事ですか!？」

兄・ティーダが望んでいるのが妹であるティアナが強くなる事と立派な魔導士になることでもない事にティアナは銀時にそれがどういう意味かを聞きだすと、銀時ははつきりと言いだす。

銀時「てめエ自身の幸せだ」
ティアナ「!？」

銀時がそう言うのとティアナは何かを打ち遂げたかのような感じで深刻な顔を消す。

銀時「無茶して苦しんでまで強くなるなんざ、兄は求めているのか?いくらお前が強くつたつて、兄は戻つては来れねえんだぜ?」

ティアナ「でも・・・私は!」
銀時「分かってりゃ!兄の魔法の強さを証明してえんだろ?」

ティアナの言いたい事を銀時は理解している。

銀時「確かにお前の兄貴の上司は無能であると言っちゃまっが、現にここにいるスバルやお前の上司であるフェイト達はそう思っているのか?」

ティアナ「!？」

銀時の言葉にティアナはスバルを見る。
スバル自身はティアナの兄が無能であるとは一度も思っていないかった。

銀時「確かにお前には家族はいねえ・・・けど現に家族の絆と同じぐらいの固い絆で結ばれている仲間がいるだろ？」

銀時はそう言いながらスバルの頭に手を載せると、スバルは少し顔を真っ赤に染める。

銀時「俺が言っていてえ事わかるか？」

銀時はティアナに尋ねた。

ティアナは黙って考えた。

少し考えて、ティアナは銀時に顔を向けた。

ティアナ「…自分を心配してくれてる人がいるって事ですか？」

銀時「その通り」

今度はティアナの頭を撫でると、ティアナは恥ずかしがる。

銀時「人間ってのは脆い生き物なもんだ、誰かに支えられてやらねえと行けねエもんだ……それがマヨラーでも」

銀時のそのマヨラーの事は、真選組の『鬼の副長』である土方十四郎の事であった。

銀時の話を聞いて、ティアナは考えた。

私が傷つけば、心配したり悲しむ人がいる。なのはさんやスバル、他にも沢山の人が。

ティアナ「……………」

私は悔しかった。兄さんが教えてくれた魔法は役立たずじゃない。それを証明したくて。兄さんの執務官になる夢を叶えたかった。でも、銀時さんの話を聞いて、スバルや皆に心配させてまで、仲間を危険な目に遭わせてまでする事じゃない気がする。

ティアナ「あの…銀時さん……………」

銀時「ああ？」

ティアナ「ごめんなさい！私…自分勝手に…銀時さんやスバル、みんなに心配ばかりかけて……………」

目を固く閉じて、大きな声で銀時に謝った。

銀時さんの言葉で気がついたのだ。

私は一人じゃない。私の事を想ってくれる人達がいる。

銀時「どうやら分かったようだな……………それによお、現にお前の事を心配してくれてる仲間は、目の前にいるぜ？」

銀時がそう言うと、スバルの方を向く。

スバル「ティア」

スバルは優しい声でティアナの名を呼ぶ。

そしてティアナはゆっくりとスバルに近づいてきて抱きつく。

ティアナ「スバル…ご免…心配かけて本当にご免ね」

ティアナは、涙を流しながらスバルに謝罪する。

そしてスバルはそんなティアナを優しく撫でて励ます。

コンパ「うう~~~~~」
アイエフ「あらら・・・コンパ泣いちゃってるよ」

銀時の過去を聞いて泣いているコンパを、アイエフが慰める。

ノワール「・・・まあ、私たちのと比べたらこっちのほうがましかもね・・・」

ノワールがこんなことをつぶやいた。

銀時「アあん？何の話だ？」

ノワール「・・・昔の話よ」

そう答えるが、表情が少し暗い。

ネプテューヌ「銀さん」

銀時「ん？」

ネプテューヌ「・・・特別に私たちの過去を教えてくださいよ」

ネプテューヌの言葉に、銀時は片眉を上げた。

アイエフ「・・・いいの？ネプ子」

アイエフが心配そうに言う。

ネプテューヌ「私はいいよ・・・みんなもいいよね」

ノワール「ええ・・・」

ブラン「・・・（コクっ）」

ベール「いいですわ」

三人は肯定する。

ネプテューヌ「……イースンも」

ネプテューヌは、木の陰に隠れているイストワールに言う。
イストワールがゆっくりと現れて、

イストワール「……それではみなさん……彼女達の過去をお話しします。」

イストワールは過去を話した。守護女神戦争のこと。4人が殺し合いをしていたこと。ネプテューヌが記憶喪失になったこと。すべての元凶“マジエコヌ”が仕組んだことなどすべて話した。

銀時「……そうか」

過去を聞いた銀時が感想をだす。
スバルとティアナはショックを受けている。
まさか仲のいい4人が殺し合いをするなんて思いもよらなかったのだ。

ネプテューヌ「どう……かな……銀さん」

ネプテューヌは暗い顔をしながらも銀時に聞く。

銀時「だからどうしたんだ？」

ネプテューヌ達「え!？」

銀時の発言に驚くネプテューヌ達。

銀時「守護女神戦争だかなんだか知らねえが、お前らはお前らで生きていけばいいんじゃないかねえのか？」

あとな、と銀時は続ける。

銀時「俺から言えることはな・・・どんなことがあっても自分の魂を失うなっことさ」

とって、ネプテューヌの頭をなでる。

ネプテューヌ「あっ／＼／＼／＼」

頭をなでられたネプテューヌは顔を赤くする。

ネプテューヌ（銀さんの手・・・暖かい／＼／＼）

その後ろでは、ノワールは羨ましそうに、ブランは物欲しそうに、ベールはあらあらと笑いながら2人を見ていた。

コンパ「わあ〜。銀さん大胆です〜」

アイエフ「・・・あの様子だと惚れたんじゃないかしら。ネプ子」

コンパは顔を赤くし、アイエフはやれやれとした顔になる。

すると、ティアナは銀時を見て顔を赤くして何かもじもじすると、ある事を言い出す。

ティアナ「あの・・・銀さん・・・もし宜しければ・・・兄さんって呼んでいいですか？」

銀時「・・・・・・・・・・は？」

スバル「へ？」

ネプテュー又達「え？」

銀時とスバルとネプテュー又達は豆鉄砲食らったような表情をする。そして銀時は頭を右手でごしごしとこすって・・・・・・・・

銀時「まあ、別に良いけど？」

そう答えるとティアナは嬉しく感じて銀時に抱きつく。その様子を見てスバルは羨ましそうにティアナを見る。

銀時「んじゃ、一件落着と言う事だし、帰るぞ」

スバル・ティアナ『はい！』

2人は力強く返事をする。

寮に帰ろうと9人は歩き出す。

だが、すぐに銀時が足を止める。スバルとティアナとネプテュー又達は銀時の顔を見る。銀時は驚いた顔で目を見開いていた。

スバルとティアナとネプテュー又達は銀時の視線の先を見た。

一人の男が銀時達に背を向けて道の先に立っていた。

派手な着物を着て、腰に刀を差している。

口にくわえている煙管を離し、フーツと白い煙を吐いた。夜風に吹かれて、白い煙は消えていった。

そして男は顔を上げた。

「????」この世界にも随分と、デケー月が出てるな」

夜空に輝く月を見上げて、男が言った。

後ろに誰かいると分かっているながら、不気味な雰囲気すら漂う。

「????」かぐや姫でも降りてきそうな夜だと思ったが…随分と懐かしい奴が降りてきたな」

男はゆっくりとこちらを振り返った。

振り返った男は左目を包帯で覆い、口にはキセルをくわえている。

銀時「高杉…!?!」

銀時が目を見開いて驚く。

高杉「よお。久しぶりだな銀時イ」

口元を歪めて不敵に笑う。

世界を救った英雄、『白夜叉』坂田銀時と、攘夷浪士の中でも、最も過激で危険な男、高杉晋助の再会の瞬間であった。

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!」

銀八「はい。また始めましたこのコーナー。今回アシスタントをするのは」

ネプテューヌ「はい。ネプテューヌだよ」

銀八「そんじゃあいくぞ。ペンネーム『月光閃火』さん。『どうも』
『月光閃火げっこうせんかという。』

『作者に質問。ホテル・アグスタに行くのに、何で新八が留守番だったんだ？新八もあれで十分に強いはずだが…。』

輝刃「確かに…新八も武士の端くれだ。銀時達程では無いにしろ、そこら辺の一般ピーポーな魔導師相手にも十分にイケると見たからな。』」だそうだ。新八曰く、なのはちゃんに頼まれたらしいぞ」

ネプテューヌ「そうなんだ。『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい。次の質問は、ペンネーム『鳴神ソラ』さん『マリオ』ってか…ちゃんと話してるのか?」

唐突だね；

マリオ「だってよ…ちゃんと話してなきやあ今回の様な事が起きたんだよ…ヴィータも怒ってないで何でこんな事したのかを聞けば良いのに…もうちょいフレンドリイに行けよな(ため息)」

ルイージ「それにしても…前回現れたのってネプテューヌさんの所のモンスター？」

スネーク「2人の様子から見るにそうじゃないか？」

フォックス「だが…仮にそうだとしても…なぜ彼女達の世界のがあるんだ？」

マリオ「そこが疑問だな…真王に質問『銀時やネプテューヌ達を含めて現代の機動六課を強さの順位で表すならどんな感じになる？』」

ルイージ「僕も質問…『銀さんはネプテューヌさん達を最初に見た印象はどんな感じですか？』」

『だって。作者さん、どうなの？』

真王「これは難しいですけどこんな感じかな？」

一位：銀時、ネプテューヌ

二位：ノワール、ブラン、ベール、神楽、桂、スバル

三位：なのは、フェイト、はやて、シグナム、アイエフ、コンパ、エリザベス、月詠

四位：ヴィータ、ティアナ、エリオ、キャロ、リインフォース、ザフィーラ

五位：新八

ランク外：イストワール、リイン、シャマル

です。」

銀八「つておい！なんでランク外まであるんだよ！」

真王「イストワールは非戦闘員、リインはユニゾン担当、シャマルはサポーターだからです。」

銀八「・・・ま、いいや。次の質問は銀時、出番だ。」

銀時は立ち上がる。

銀時「そうだな。ネプテューヌは生意気なガキンチョだが根はいい奴だったぜ。アイエフは真面目な奴だが新八のようなツッコミの素質がありそうだし、コンパは純粹すぎる女の子って感じだったな。ノワールは一目見た瞬間ツンデレか？って思っちまたし、ブランは静かだけでも怒らせてはいけないって思っただし、ベールはみんなの優しいお姉さんって感じだったな。」

銀八「そうかい。そんなわけで、『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい。」

ネプテューヌ「次の質問。・・・あつ！この人いろいろとお世話になってる『黒神』さんだ。え〜つと『皆さんに質問。』

僕の小説『攘夷戦争鎮魂歌』では貴方は魔導士として目覚めました。そのバリアジャケットが『ブレイブルー』の主人公、ラグの衣装と一緒にするので、みんなから見てどう思いますか？
軽い感想でも構いません。」

全員が立ち上がり、
全員「かっこいいからいいんじゃない？」
と、答えた。

ネプテューヌ「ありがとうございます『黒神』さん。廊下に立ってね」

銀八「はい。今回はここまで。次回もジャンジャン来てくれよ。以上！」

第十訓：過去には意外すぎる思い出がある（後書き）

真王「次回は高杉の登場！そして、ネプテューヌと因縁があるあい
つも……」

ブラン「次回『ライバルの因縁は切っても切れない』テイクオフ・
」

（予告）

ナレーション「ネプテューヌが何かに襲われるようです」

第十一訓：ライバルの因縁は切っても切れない

ティアナの過去の苦しみを解放した銀時とスバルは寮に戻ろうとするが、そこに銀時は思わぬ人物と再会する。

攘夷浪士の中でも、最も過激で危険な男、武装集団『鬼兵隊^{きへいたい}』のリーダー、高杉晋助。

かつて銀時と桂と共に攘夷戦争で天人と戦った仲間だが、憎しみで変わり果ててしまった今、銀時と桂の因縁の相手である。

スバル『ティア・・・この人』

ティアナ『分かっている。・・・この男・・・ヤバイ！とてつもなく危険な存在だわ！』

スバルとティアナも念話で話をする。

この男・・・危険な感じがする。

二人は、そう直感した。

ネプテューヌ（なんだろ・・・この人）

ノワール（・・・危険な予感しかしないわ）

ブラン（何？・・・あいつ）

ベール（この方は・・・一体？）

アイエフ（なんか・・・やばくない？）

コンパ（こ、怖いです）

ネプテューヌ達は、高杉を警戒している。

アバババンと言う奇妙な異種生命体を見てきた。

だが目の前にいる男は、それがちっばけに思える程の危険な感じを放っていた。

分かっている事はただ1つ。

高杉と呼ばれるその男は銀時の因縁の関係であるようである。

銀時「…何でテメーがこんな所にいやがる？」

銀時が敵意をむき出して高杉に聞く。

これほどまでに敵意をむき出しにした銀時をスバルとティアナは初めて見た。

高杉「おいおい、そんな物騒な怖い顔をするなよ。そこの9人の譲ちゃんが怖がつているぜ？」
「???」譲ちゃんじゃない」

高杉後ろから、声が聞こえた。

声を聞いた高杉は、笑いを止める。

この声は……！

高杉は後ろから1人の人の人の気配を感じた。

鬱陶しい黒い長髪に着物姿。右手に刀を握っていて高杉に向ける。

桂「桂だ」

高杉を見据えながら、桂小太郎が名乗った。

スバル・ティアナ『桂さん!!?』

桂の登場にスバルとティアナが桂の名を呼ぶ。

高杉「ククク……ツラも随分と久し振りだな」

高杉の声を聞き、桂は高杉に睨みつける。

桂「やはり、貴様もこの世界に来ていたか…何で貴様がここにいる！」

桂も銀時と同じく敵意をむき出して高杉に聞く。

高杉「何：数カ月前、攘夷浪士の間で妙な噂が流れてな。その噂が”桂小太郎がアニメの世界に行った”っていう事だよ。いてもたってもいられなくなつて来ちまったよ」

スバル・ティアナ「!!!」

ネプテューヌ達「？」

スバルとティアナが驚く。

自分達の世界がアニメの世界であると言う事に。

ネプテューヌ達はチンプンカンプンだが。

高杉は煙管を加える。

高杉「俺達はその噂の真相を調べた。そしてあの、源外つてじーさんに辿り着いた。あのじーさんが作った装置で、別の世界に行くとは……ククク。お前等相変わらず馬鹿やってるなア」

可笑しそうに高杉は笑った。

高杉「だが、この世界に来た俺も馬鹿かもな」

高杉が笑い出す。

高杉「おい、そこの紫の譲ちゃん」

高杉がネプテューヌを指名する。

高杉「お前に会いたって奴がいるぜえ」

そう言つて、高杉の横からフードをかぶっている人物が現れる。

????「・・・久しぶりだな」

声からすると女性のようだが、イストワールはわなわな震えている。

イストワール「ま・・・まさか、あなたは・・・」

ネプテューヌ達「??」

ネプテューヌ達はわけがわからないらしいが、イストワールはフィードの人物がわかるようだ。

????「ほう?・・・さすがに何年も一緒にいたお前なら分かるらしいな」

ネプテューヌ「イースン!あの人のことわかるの!??」

ネプテューヌは言うが、イストワールは答えない。

????「覚えてないなら教えてやろう」

と言つて、フードつきの服を脱ぎ捨てた。

ノワール達「なっ!!!」

ノワール達はその人物を見て驚いた。肌は青白く、派手な魔法の服を着て、帽子には茨が飾り付けられていた。

ネプテューヌはその人物を見て、

ネプテューヌ「お、お前は……………」

驚きながら、

ネプテューヌ「……………誰？」

爆弾発言を投下した。

ガシャーーーーーン!!! ガラガラガララ!!! ドド~~~~ン!!!

ネプテューヌの爆弾発言に、銀時達はおろか高杉や謎の人物までもがずっこけ、まわりの建物もろとも崩れ落ちました。(爆笑)
(ギャグ補正だから元に戻るが)

銀時「おいーーーーー!!!!!! せ
つかくのシリアスな展開になっちゃってんだーーーーー
!!!!!!!!!!!!!!」
アイエフ「ネプ子ーーーーー!!!!!! あん
た戦ってた相手を忘れるってどういことよーーーーー
!!!!!!!!!!!!!!」

銀時とアイエフは怒鳴る。

????「……………まあいい。お前の記憶力のなさは想定
していたがな」

謎の人物は咳払いをする。

マジエコンヌ「私の名はマジエコンヌ。わけあってこの男とともにしている」

マジエコンヌはフン、鼻を鳴らす。

ノワール「……ありえないわ。あなたはたしか「死んだはず、か？……」

マジエコンヌ「そう、確かに私はあの時死んだ……だが、こいつのおかげで復活したのさ」

そう言つて、取り出したのは黒い宝石だった。

桂「っ！それはオークションの！」

ノワール「なんなのよそれは！」

桂が驚き、ノワールがマジエコンヌの持つ宝石を指す。

ティアナ「ま、まさか……それはロストロギア!？」

マジエコンヌ「そう、これは”ダークソウル”と呼ばれるものでな。闇を力に変えるというものだ」

マジエコンヌが説明する。

イストワール「……まさか、あのビルのアバババンは」

マジエコンヌ「そのとおり。こいつがモンスターを召喚したのさ」

マジエコンヌは自慢げに笑う。

ネプテューヌ「……よくわかんないけど、そのダークソウルを壊せばいいんじゃない？」

ネプテューヌがこんなことを言い出す。

スバル「ちよつと、ネプテューヌちゃん！」

スバルが止めようとするが、高杉が突然言い出す。

高杉「クツクツク……言い忘れてたが、銀時とツラに再会したい男を連れてきたぜ？」

桂「俺と銀時に？」

高杉の言葉に意味不明さを感じる桂だが、突如後ろからとてつもない殺気を感じて後ろを振り向くと、思わず刀を振り出すが、相手の攻撃とぶつかってしまったのである。

???「おやおや、以前は上手く行ったと言っのに、今度はそうは行かなかったようだな」

男の顔を見て、銀時と桂は驚きを隠せなかった。

右手には鏢のない刀を持っていて、左手にはその鞘を持っている。さらにグラサンをかけていて、眼は盲目のようである。

その男は死んだと思われたが、現に桂の目の前にいた。

桂「ば……馬鹿な！お前は……」

銀時「人斬り……似蔵！」

その男は『人斬り似蔵』こと おかだにそう岡田似蔵であった。

『鬼兵隊』の一員であり、以前は『紅桜』の暴走で銀時と対決した

が、あえなく敗北。

その後は行方不明とされており、死んだかどうか分からない。

そんな男が何故ここにいるのか知らないが、桂は似蔵の刀を防いでバックすると、銀時に駆けつける。

仁蔵「随分と久し振りだねえ。『白夜叉』坂田銀時に『狂乱の貴公子』桂小太郎。一度に会いたい人物と一気に会えるなんて嬉しくて笑いだすねえ」

ふふふつと笑い出す似蔵に、スバルとティアナも似蔵から危険性を感じた。

スバル「銀さん、桂さん！あの男を知っているのですか！？」

スバルは似蔵の事を聞き出す。

桂「奴は・・・岡田似蔵！『人斬り似蔵』と恐れられた『鬼兵隊』の一員。以前、『紅桜』を使って俺や銀時に襲ってきたが、『鬼兵隊』との戦いで行方不明になったはずだが・・・まさか生きていたとは」

厄介な人物が生きていた事に驚く桂。

ブラン「・・・その右手は何？」

仁蔵「こいつが気になるかい？」

ブランは仁蔵の右腕に違和感があるのを感じ、仁蔵はその右腕を見せる。

銀時「！！そいつは！」

桂「ばかな！妖刀『紅桜』だと！！」

ピンク色に光り、機械でできているのにまるで生きているような刀・紅桜があつた。

そして高杉は、以前に紅桜の工場を破壊されたことを桂に話し出す。

高杉「ツラ、以前にお前が紅桜の工場に大量の爆弾を仕掛けて破壊したことを覚えているだろ？実はな、お前がしくじってくれたお陰で、一本だけが残ったんだよ」

桂「ぐ！」

まさか全て破壊し切れなかったことに悔やむ桂。

高杉「しかもな、本物をベースに、『鬼兵隊』と剣煉の部下達に『紅桜』を大量に作らせたわけだ」

アイエフ「・・・その一本は量産型ってこと？」

高杉「察しがいいじゃねえか」

全ての元凶は高杉にあつた。

銀時は今でも木刀を抜き出すような怒気を放っている。

銀時「まさかアニメの世界で、テメェと会うことになるとはなア」

桂「貴様の野望も、ここで沈ませてもらう！」

銀時と桂は高杉にそう言うが、高杉はクククつと笑いだす。

高杉「銀時、ツラ、お前等本当にこの世界の事を誤解してるな」

桂「誤解だと？」

桂が目を細めた。

高杉「この世界は、アニメの世界なんかじゃねエ」

高杉が衝撃の一言を言った。

銀時、桂、スバル、ティアナの4人は、驚愕な表情を浮かべた。
ネプテューヌ達は首をかしげているが。

高杉「考えてみる。どうして三次元の世界で生きてる俺達が、二次元の世界に行ける？」

銀時「何って、源外のジーさんの装置で…」

高杉「そこだよ」

高杉が銀時の声を遮った。

高杉「そもそもジーさんが作った装置は、二次元の世界に行く為の装置じゃねエ。あくまで別の場所へ移動する装置だ。二次元の…架空の世界に行くなんて不可能だ。ならこの世界は何なのか？答は簡単だ。ここは架空の世界なんかじゃなく、実在する本物の世界なんだよ」

高杉の言う事に間違いはない。

確かに源外が作った装置は、二次元へ移動する為の装置ではない。

高杉は説明を続ける。

高杉「いわゆる『並行世界』ってヤツだ。様々な可能性の世界。この世界も、その無数の可能性の中の一つ。装置が『リリカルなのは』のDVDの内容を読み取り、俺達は『リリカルなのは』と酷似したこの世界へ移動した。こういう事だ」

説明を終えて、高杉は煙管を離して煙を吐いた。

銀時達は、動揺を隠せなかった。今まで、フェイト達は架空の存在で、この世界も架空の世界だと思っていた。だが真実は違った。

フェイト達もこの世界も、実在する一つの世界。

ここにいるスバルもティアナも実際に存在するのである。

高杉「それにしても、異次元の世界でも銀時とゾラも有名人になったらしいじゃねえか」

再び口に煙管をくわえる。

高杉「まあ攘夷戦争で『白夜叉』と恐れられた銀時なら、ゾーマって言う化け物に勝つのも当たり前なわけだな」

スバル「攘夷戦争？」

高杉の言葉にスバルがひっかかる。

先ほどの桂から『攘夷戦争』の事は聞いたが、銀時が『白夜叉』と呼ばれてたのはずっと前であった事は知らなかった。

ティアナ「『白夜叉』って、兄さんがゾーマを倒すほどの強さを持ったから、そのあだ名がつけられたんじゃないの!？」

ティアナが高杉に話しかけると高杉は煙管を口から放して煙を吐く。

高杉「おいおい、譲ちゃん達は銀時の『白夜叉』の異名をそんなちっぽけなモンだと思ってたのか？」

ティアナ「ちっぽけ？」

銀時がゾーマを倒した事で『白夜叉』と呼んだ事がちっぽけである

事を高杉が言い出す。

高杉「その様子だと、話してねエようだな銀時？」

銀時はなにも返さない。

高杉「『攘夷戦争』の事は銀時かヅラに聞いた事があるだろ？宇宙から来た天人との戦において鬼神の如き働きをやったのけ、敵はおるか味方からも恐れられた伝説の武神。それが『白夜叉』と呼ばれた男、坂田銀時だ」

スバルとティアナ、そしてノール達が驚いた顔で銀時を見る。自分達の知っている「白夜叉」とは全く違う本当の「白夜叉」の意味を始めて知った。

ネプテューヌ「ふん。そうなんだ？」

だが、ネプテューヌだけは違った。

高杉「・・・そりゃどういうことだ？」

高杉が目を細めて言う。

ネプテューヌ「だってそうじゃん。ここにいるのはミッドチルダの英雄の銀さんでも『白夜叉』の銀さんでもない唯の「仁蔵」それ以上は黙っててもらいますかねえ？」

仁蔵がネプテューヌに向かって切り落とそうとする。

バギャンー！！

刀が壊れた音が聞こえた。壊れたのは……紅桜だった。

仁蔵「ば……馬鹿な……紅桜を……一瞬で……」
パールハート「……唯の私達の仲間の坂田銀時よ」

ネプテューヌ「……否、パールハートは紅桜を一撃でたたき割った。
仁蔵は倒れた。

高杉「……『模造品』とはいえ、一撃で壊すなんてやるじゃねえの」

無表情で言ってるが、本心は驚いている。

マジエコンヌ「……だからなめてかかるなと言っただろう」

マジエコンヌはため息を突く。

パールハート「……あなた達を好き勝手にさせるわけにはいかないわ」

刀を高杉とマジエコンヌに向けて言う。

マジエコンヌ「だったらどうするのだ？」

パールハート「こっずするのよー！」

マジエコンヌのところまで瞬間移動して、手に持つダークソウルを
はじく。

マジエコンヌ「何!?!」

マジエコンヌは驚く。ダークソウルは宙を舞う。

銀時「よし!いいぞネプテューヌ!」

パープルハートは後退し、ダークソウルをキャッチする。

ドクンッ!!

全員「!!!?」

どこからか、心臓の鼓動音が聞こえた。
すると、ダークソウルから黒い光と触手が現れた。

パープルハート「な、何?」

パープルハートが驚いていると、ダークソウルから黒い腕が現れ、

パープルハート「グアッ!」

パープルハートを鷲掴みにした。

ノワール「ネプテューヌ!!!」

ノワールが叫ぶ。

銀時が思わず大声を出してその名を言い出す。

桂、スバル、ティアナも九兵衛の存在に驚きだしている。

パープルハート「ケホツケホツ……どなたか知らないけど
ありがとう」

九兵衛「お礼は後だ……気をつける!!」

九兵衛はうずもれた影に警戒する。

???「……………!!!!!!!!!!
!!!!」

すると影が復活し、銀時達のところまで奇声を上げながら這いずり
まわして向かってくる。

はたから見ると、真っ黒なテケテケが銀時達を狙ってるようである。

コンパ「きゃあああああ!!!!怖いです~~~~~!!!!」
パープルハート「うるさい奇声をあげちゃって…….黙らせ
てあげるわ!!!!」

パープルハートは刀を構える。

ブラックハート「手伝うわよ。ネプテューヌ」

後ろから、ブラックハート・ホワイトハート・グリーンハートが出
てきて、それぞれ武器を構える。

???「……………!!!!!!!!!!」

銀時「・・・何だったんださっきのは？」

桂「分らん」

桂はそう言っつて、九兵衛に近づいて話しかける。

桂「にしても九兵衛殿。お主までこの世界に来ていたとは」

九兵衛「桂小太郎か：その様子だとこの世界の事を知っているようだな。宜しければ詳しく教えてくれないか？」

桂「・・・・・・・・・・・・・・・・」

桂は少し沈黙に黙ったが、九兵衛に全てを話すことにした。

この世界は『リリカルなのは』の世界であり、しかも10年後である事に。

しかもアニメの世界と言う架空の世界ではなく、実際にある本物の世界であった事を。

さすがの九兵衛も驚きを隠せなかったのか信じられない表情をする。

九兵衛「つまり、この世界は実際に存在する世界であり、しかも僕

達だけじゃなくなのはの世界とは全く違う世界であるか？」

桂「信じられないようだが、実際は現実どおりだ」

桂が嘘を言っていないと確信して九兵衛は信じる事にした。

桂「それよりも、どうしてお主がこの世界に？」

不思議そうに桂は言い出す。

九兵衛「実は妙ちゃんに銀時と神楽殿と新八殿が行方不明と訊いて

…源外の転送装置を使いなのは達の世界に行ったと考え、僕は源外の所に行ったんだ。所が装置は何者かに破壊されていて…修理になり時間が掛かると言われ、仕方なく一旦道場に戻ろうと思い、その帰り道で変な光に包まれてしまった。気付いた時には既にこの場所に飛ばされていたんだ。」

桂「光にだど!？」

九兵衛が光に包まれてこの世界に飛ばされた事を聞いて驚く桂。この世界は転送装置がなければこれないのではないかと考える。

桂「とにかく、俺は今回の事と九兵衛殿の事を八神殿に話してくる。九兵衛殿、すまぬが一緒に来てくれぬか？」
九兵衛「承知した。僕自身も話しておかねばならないことが多いからな」

桂と九兵衛はこの場を去る。

2人の後姿をスバルは見終えると、銀時に話しかけた。

スバル「銀さん…あの九兵衛さんって、もしかしてあの『闇の書・ゾーマ事件』を銀さん達と一緒に解決したあの柳生九兵衛ですか？」

銀時「んん?…ああ、そうだが？」

銀時自身も、九兵衛がこの世界に飛ばされた事に驚く。

パープルハート「銀時」

銀時「んあ?どうしつ!！」

いきなりパープルハートが銀時にキスした。

スバル・ティアナ「あーーーーー!!!!」

スバルとティアナはパープルハートを指差して、大声を出す。
ブラックハートは呆れ、ホワイトハートは興味なく、グリーンハートはクスクスと笑っている。

パープルハート「私を撫でたお礼よ。銀時」

と言って、この場を去った。

銀時「・・・なんでこうなるの?」

銀時はそう言うが、誰も答えてくれなかった。

こうして色々と大変な事が起こった一日は終わるのであった。

翌朝

銀時はぐっすりと寝ている。

その笑顔は何やらいい夢を見ているかの様な感じであるが、眼を覚ます時には不幸が起こることになる事を、この時まで知らない。

なのは「それじゃあ銀さんを起こそうか!」

フェイト「うん!」

なのはとフェイトは友達関係である以上に銀時をめぐる恋のライバ

ル関係でもあるが、2人仲良く銀時を起こす事にした。
そして、銀時のいる部屋に入る。

なのは「銀さん、朝だよ……!?!?」
フェイト「一緒に朝食た……!?!?」

なのはとフェイトは時間が止まりだすかのように凍りつく。2人の眼に映った物は信じられない表情であった。

銀時「んだよお?もうちょっと寝かせてく……」

銀時は寝起きは悪いので、すぐに起き上がらないが、

銀時「何か殺気を感じるんだけどおー!?!?!」

眠気が一瞬で消え失せた。

部屋の入口の所でなのはとフェイトが無言、無表情でこちらを睨んでいた。

あれは憎しみ、又は視線で人を殺れる。

銀時(何で二人とも怒ってんの!?!銀さん何かしたあー!?!?)

銀時は2人に何をしたのかを考える中、周りを良く見て見るとある事が分かった。

それは、銀時の隣にスバルとティアナ・さらにはネプテューヌ(現在パープルハート)までもが銀時の隣で寝ている事であった。

実は昨晚、スバルとティアナとネプテューヌ又は銀時の部屋にこっそりと侵入してベットに潜り込んで来たのである。

3人はまだ寝ている。

それはもう、幸せそうに。

銀時「……ふえっフェイトさん、なのはさん！違うんだよ！これはねえ、その2人がさあ!？」

銀時は誤解をされないように2人に説明をする。

なのは・フェイト「……………」

無言で目が単色で銀時を見つめる二人。

銀時の顔が青ざめており、大量の汗が流れている。

スバル・ティアナ・パープルハート「うーん」

スバルとティアナとパープルハートが起き……てなかった。

そして寝転がって銀時に近づき……

スバル「銀さん、大好きです。スウ〜」

ティアナ「兄さん、大好き。スウ〜」

パープルハート「銀……時……スウ〜」

3人は寝言を言ってギュッて銀時を抱き付く。

ブチイイイ!!

なのは・フェイト「銀時（銀さん）の馬鹿あ……………」

2人は『レイジング・ハート』と『バルディッシュ』から極大な桜色の閃光と極大な金色の閃光を銀時に向けて放つ。が、

「パープルハート」……うるさーーーーーい!!!!!!」

「バゴツ!!」

なのは・フェイト「ヴェゴオツ!!」

2人の放つ閃光ごと殴り飛ばし、そのまま眠りにつくパープルハート。

ちなみに2人はのびている。

銀時は結果オーライか?、と思った。

なんやかんやで銀時達の元の日常が戻ったのである。

くおまけ

銀八「教えて!」

全員「銀八先生!!」

銀八「はい。3回も始まりましたこのコーナー。んじゃ、今回の

アシスタントは、」

コンパ「私、コンパと」

アイエフ「アイエフがアシストするわ」

銀八「それじゃあいくぞ〜。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ』やはり出て来たか高杉…」

フォックス「そしてネプテューヌと因縁がある奴も出て来たな…」

ルイージ「不安が高まるね…」

スネーク「奴は油断ならない相手だからな…」

ネス「ってか銀さんタイムは凄いやね〜」

リュカ「うん…だけどユーノさんはどうなるのやら…」

だよな〜；

ソニック「そんな訳で質問『ネプテューヌにリインフォースがユニゾンするって事あるのか?』」

ネス「銀さんに質問『魔法使えるならどんな技を使いたい?ちなみにかめはめ波以外でね』」

マリオ「真王に質問『ティアナ達をどう言う感じに強化するんだ?』」

」

ちなみに人気投票ですが銀さん、スバル、ネプテューヌ、ティアナ、新八さんの5人に投票します〜

マリオ「次回を待ってるぜ!」だ。投票ありがとう!まず最初の質問なんだが、可能性あるんじゃないか?

コンパ「ねぶねぶとリインフォースさんならできるんじゃないでしょうか?」

アイエフ「変身後のネプ子ならもっと強くなれるんじゃない?」

銀八「だよな。じゃあ銀時、2つ目答える。」

銀時が立ち上がる。

銀時「かめ〇め波以外か?うん・・・あっ!BRE〇CHの『月牙〇衝』がいい!」

銀八「はい、ありがと。次は作者」

真王「ティアナ達の強化?秘密です。でも後に分かるかもしれないよ?」

銀八「はい、というわけで、『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

アイエフ「次の質問ね。ペンネーム『月光閃火』さん。『よお…月光閃火だ。』

俺は5票全掛けで新八に投票だ!

輝刃「いいのか？」

ああ…今のアイツ（新八）なら、いい感じに活躍出来ると確信してるからな。それに、アイドルオタクな所を除きや結構いい奴だからな…またいい娘が現れるだろ。ま…アイドルオタクだった…事が含むとアイツの強さは半端ねえけどな（苦笑）。

輝刃「ハハハ…確かにな。あ…俺から質問だ。」

『高杉に質問だ。アンタは世界をぶっ壊す気でいるが、正直に言う…アンタこの世界で興味が湧いた食べ物とかあるか？あと、アンタや銀時達の慕う『先生』みたいな人に出逢ったら…どんな反応を示すんだ？あ…ちなみに、後者の質問はアンタの他に銀時と桂…それとまだ出番が無いであろう辰馬にも答えてもらおうぞ？』

あ…確かに、その質問は俺も思ったぜ。特に後者の質問はかなり気になる所だな…新八君が来たわね」

銀八「なんでだよ！！なんであんなオタクが5票なんだよ！！」

コンパ「せ、先生！どうしたんですか！？」

銀八「…すまん、なんでもねえ。最初の質問は高杉に聞いたところ”ねえよ”だそうだ。2つ目の方はみんな昔のことを思い出してんじゃねえか？」

コンパ「そうなんですか？あ、『月光閃火』さん。廊下に立ってくださいです」

銀八「次だ。ペンネーム『黒神』さんからの質問。『フェイトへ

なのはが銀時の事を好きになった事についてどう思います？
やっぱり強敵ですか？

スバルとネプテューヌ側へ

僕の小説『リリカル銀魂Strikers』攘夷戦争鎮魂歌』に
登場するスバルは侍の魂を持つ魔剣士として活躍しています。

彼女の剣の腕を見て、皆さんはどう思いますか？

具体的に聞かせてください。』」

フェイトが立ち上がる。

フェイト「なのはには絶対負けない！／／／／」

銀八「なんで赤くなってるんだ？・・・ま、いいや。次の質問はスバル、ネプテューヌ」

スバルとネプテューヌが立ち上がる。

スバル「これわたしですか！？って思いました」

ネプテューヌ「このスバルちゃんつよいね。私が変身して勝てる

第十一訓：ライバルの因縁は切っても切れない（後書き）

真王「新八が6票だなんてな……。さて次回は、なのは達が銀時
争奪戦開始！？そして銀時はパワーアップする！？」

ベール「次回『男を奪う女は気が荒い』テイクオフですわ」

（予定）

真王「本編終了あたりにモンスター解説図鑑を開きます」

第十二訓：男を奪う女は気が荒い（前書き）

真王「『あああ』さんから銀時に5票出されて、銀時と新八が6票と並びました。」

銀時「・・・なんか納得いかねえのは気のせいかな？」

真王「我慢しろ。『リリカル銀魂』はじまるよ。」

第十二訓：男を奪う女は気が荒い

朝からドタバタと騒ぎ出した中、新しく入ってきた九兵衛とユーノとフォワード隊の挨拶は終わり、それが嘘のように銀時達は朝食をしていた。

なのは・フェイト「」

銀時の左右にフェイトとなのはが抱き付いていた。

フェイトならともかく、いつの間にかなのはにもここまで懐かれた事に月詠が意外そうに驚き、銀時に話し出す。

月詠「銀時…主はいつの間にか、なのはにも好意を持たれたんじゃないな」

銀時「・・・まあな」

銀時はげんなりと答えた。

月詠は続いて銀時にフォワード隊の事を聞き出す。

月詠「フォワード達との訓練どうじゃ？」

銀時「良い感じに強くなってるぜ。特にティアナが気持ちに余裕が出来てんのか今フォワードの中で一番伸びてんだとよオ…スバルとのコンビネーションも相性良いみてえだぜ」

つと銀時は安心したかのように説明すると、

なのは・フェイト「あゝん」

なのはとフェイトが「あゝん」として来た。

銀時はこれ以上刺激したく無いので素直に応じる。

銀時「あ〜ん」

フェイトとなのはの差し入れを口にしてゆっくりと噛む。

少し照れくさいなのか顔を少し真っ赤に知る。

実際こう言う事はされた事がないからだ。

フェイトとなのはは凄く幸せそうな顔で笑顔たっぷりである。

後ろのスバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リインフォースが、何かブツブツと言って黒い憎悪を放っているがそれは気にしなかった。

一方のスバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リインフォースの5人が、何やらとてつもないどす黒い気を放っている。

神楽と九兵衛と新八はそんな5人に恐怖の余り、青ざめてガタガタ震えている。

神楽（な・・・なんかスバル達が怖いアル!!!）

九兵衛（こ・・・これが修羅場って言う物なのか!?この僕が怯えるなんて!!!）

新八（なのはちやああああああん!!!にげてええええええええええ!!!）

「パープルハート」……………（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ）

パープルハートである。手に持つ刀をギリギリと握りしめ、いまにも相手を殺りそうである。

アイエフ（なんか・・・ネプ子がすごく怖いんだけど？）

コンパ（い、いつものねぶねぶじゃないです・・・）

ノワール（あんなに殺意を放つネプテューヌは初めてだわ・・・）

ブラン「……………（ベールの後ろで震えている）」

ベール（……………よほど銀時さんが好きなんですわね・・・）

パープルハートの殺意に、5人はビクビク震えている。

一方の桂とはやては一緒に朝食を頂き、銀時争奪戦が大きくなる事に面白がりながら笑っていた。

ユーノはそんな銀時を羨ましそうに睨んでいた。

訓練場では凄い事になっていた。

フェイト、なのは、スバル、ティア、シグナム、アルフの6人の戦争……………もどい模擬戦らしきもので激しい展開になっていた。なのはの『ダイバイン・バスター』を連発、フェイトが『バルディッシュ』を『ライオットザンバー・カラミティ』と言う大剣で接近してきてスバルも『マツハキヤリバー』を『ウィングロード』と言う水色の魔法道で対抗し、シグナムとアルフもその2人を一気に倒

すかのように接近し、ティアナはすかさず『クロスファイヤーシート』を連発。

ちなみにネプテューヌは参加してない。

フェイト「二度と銀時に近づけないようにしてやる！」

なのは「にやはははは、身の程を知らなの！」

スバル「隊長だからってやって良い事と悪い事がありますよ！」

ティアナ「兄さんを汚すな！」

シグナム「敵は一人残らず斬る！」

アルフ「一気にお邪魔虫を蹴散らしてやる！」

などと銀時をめぐった争奪戦が始まっていた。

それを見た銀時はどうすれば良いのかわかなかった。

桂は面白がり、月詠にシヤマルとザフィーラは呆れている。

神楽、新八、エリザベス、グイータ、ウイン、エリオ、キャロ、フ

リードは6人の異常な暴れっぷりに怖がっている。

ノワール「・・・あんたは参加しないの？」

ネプテューヌ「うん。めんどくさい」

ネプテューヌはそれだけの理由で、参加しなかったようだ。

銀時「何でこうなるの？」

自分がどうすればこうなるのかと唖然して考える。

後ろからはユーノの嫉妬心を籠った眼線が銀時を突く。

そんな中、桂は面白そうに笑い出す。

桂「はっはっはっはっは！銀時、お前本当に罪な男になったな？どうせ罪になるなら今こそ攘夷志士になると……」

銀時「お前は黙ってるオオオオ！！」

銀時は額に青筋を浮かべて怒り任せに桂にとび蹴りをする。

桂「ごふぁー！！」

吹飛ばされて倒れる桂。

そして九兵衛が銀時に話しかける。

九兵衛「安心しろ。君がそのつもりで女を落した事は承知している」

銀時「何？その落すって？何か誤解されそうない方しないでくれねエ！？」

九兵衛「だが、そんな君に同じ武士として1つ言っておこう」

何やら真剣な眼差しで銀時を見て何かを伝えようとする九兵衛。

銀時はそれは武士の事で関係しているのではないかと思……

九兵衛「女の価値は胸の大きさではない事だー！」

つたが、思いっきり予想外な一言に銀時は思わずずっとこける。

銀時「おいー！ちょっとおかしくないイイイイ！？何でお前の口からそんな言葉が出てくるのオ！？何、その武士にメツチャ関係ない台詞！？お前そう言うキャラじゃねえだろオ！！」

胸の大きさなんてどうでもいいと思われていた九兵衛。

月詠「何をやっとするんじゃあやつらは？」

神楽「ツツキー、あんまり気にしないほうが良いね」

煙管を加えて呆れる月詠と呆れる神楽。

そして2人は、先ほどから少し顔を真っ赤に染めて神楽と月詠を見ていたエリオの姿に気づく。

月詠「どうした、エリオ？わっちらの顔に何かついておるのか？」

エリオ「い……いえ！そうではありません！ただ……／／／」
神楽「ただ？」

もじもじとエリオは両手の指をくっ付けながら神楽と月詠を見る。

エリオ「……神楽さんと月詠さんって魔法を使わなくても凄く強いし……それに……神楽さんは時々酷い事を言う事があるけど……本当は優しくて可愛いし……月詠さんは顔に傷があるけど闘う姿は月の様に美しく……それに普段の姿も綺麗だし、美人だなあって思っちゃって／／／」

エリオに思わぬことを言われて照れる2人の女性。

実際、以前の銀魂の第二回人気結果でベスト10以内に入ったのも、女性キャラの中ではこの2人だけであった。

エリオの周りにも美人な女性、可愛い女性など数多く存在するが、神楽と月詠のような見たこと無い容姿と魔法を使わなくても美しい女を見た事が無いからである。

神楽「そ……そう言われると照れるね／／／」

月詠「ふふ」

神楽ら顔を赤くし、月詠は少し笑い出してエリオを見る。

顔がトマトのように赤くなるエリオに、キヤロはムツと来てエリオの頬っぺたを引張る。

エリオ「あいたたたたたたたたたたたたたたたたた！！」

いきなり引張られて驚くエリオはかなり痛がる。

キヤロは頬っぺたを掴みながらエリオを引っ張り出して神楽と月詠から離れる。

ひとまず、まだ戦いを続けているフェイト達を放って置いて、今日の訓練は中断し、銀時は部隊長オフィスに呼び出されたのだ。

銀時「何か用か？」

目の前のはやてに尋ねた。

はやて「実は、銀ちゃん的能力アップをしたいと思つとるんや」

銀時「能力アップ？」

はやての言葉に銀時は片眉を上げた。

はやて「昨日、桂さんから似蔵とか言う男が恐ろしく強うなって生き返った訊いてな。もしかしたら、その似蔵はゾーマ並の実力かもしれない」

ゾーマ並みの実力者。

確かに銀時から見ても、昨晚の似蔵のあの強さは尋常ではなく、もしかしたら一対一でゾーマと戦えば勝てるのではないかと考える。しかもその男に対戦艦用機械機動兵器である『紅桜』を使わせたら間違いなくゾーマ以上の強敵となる。そうになると今のままでは正直キツイ。

はやて「そこで、銀ちゃん的能力アップをやるうと言う事になったんや」

はやてが右手の人差し指を立てながら言った。

銀時「具体的にどうすんだ？」

本当にそんな事が出来るなら、やらない訳にはいかない。

はやて「詳しい事はシャーリーが教えてくれるから、デバイスルームに行つてな」

はやてに言われ、銀時は部隊長オフィスを出て、デバイスルームへ向かった。

廊下を歩き、銀時はデバイスルームの前に着いた。扉を開けて部屋の中に入った。

シャーリー「あっ。銀さん」

部屋の中にシャーリーと、

リインフォース「来ましたか」

リインフォースがいた。

銀時「何でリインフォースもいんだ？」

シャーリー「銀さんの能力アップに、リインフォースさんが必要なんです」

リインフォースの代わりに、シャーリーが答えた。

銀時「どういう事だ？」

自分の能力アップに、何でリインフォースが必要なのかわからない。

シャーリー「リインフォースさんは、『融合型デバイス』なんです」

銀時「『融合型デバイス』？」

シャーリーの言葉に銀時は片眉を上げた。

シャーリー「その名の通り、他者と融合するデバイスです。適合率の高い者と融合する事で、飛躍的に能力を向上させるん事ができるんです」

シャーリーが説明した。

銀時「おいおい！ドラゴンールのフュージョンみてーじゃねエか！ヤベツ。テンション上がってきちゃったよ！」

シャーリーの説明を聞いた銀時は興奮した。

シャーリー「ただし、適合率が低いと融合事故が起こる可能性がある
るので、気をつけてくださいね」

シャーリーは、テンションが上がってる銀時に注意した。

銀時は不安げにシャーリーを見た。

銀時「それって……デブになったり、ガリガリになったりするんのか
？」

銀時はゴクリと唾を飲み込んだ。

シャーリー「まあ外見に変化が現れたり、能力がおかしくなったり
いろいろだと思います」

銀時「思いますって……」

急に銀時は不安になった。

だが他に方法がないのなら、ユニゾンとやらをやるしかない。
諦めたように、銀時はため息をついた。

シャーリー「それじゃあ、早速始めましょう。リインフォースさん、
お願いします」

リインフォース「はい」

シャーリーに言われ、リインフォースは銀時に近寄った。

リインフォースの胸が銀時に当たる。銀時は少し戸惑った。

リインフォース「では銀時。これからユニゾンをします。ジツとし
てください」

そう言って、リインフォースは目を閉じた。

リインフォース「ユニゾン・イン！」

リインフォースが叫んだ直後、二人は白い光に包まれた。光の強さに、シャーリーは目を閉じた。数秒の輝きの後、光は消えておさまった。

シャーリーはゆっくりと目を開けた。目に入ったのは銀時だった。リインフォースの姿はない。銀時とユニゾン出来たみたいだ。シャーリーは銀時を観察した。瞳が蒼くなっている所以外、特に外見に変化は見られない。どうやら一応ユニゾンは成功のようだ。

シャーリー「あの…どうですか銀さん？」

ユニゾンした感じを尋ねてみた。

銀時はシャーリーには答えず、手足を動かして自分の体を見ている。すると突然、銀時は驚愕の表情をした。

銀時「おおおっ！何だこいつア！？体の中から力が溢れ出てくるみてエだアアア！！」

両手で拳を握って、銀時は興奮した声を出す。

リインフォース【シャーリー。銀時とのユニゾンに成功しました】

銀時の中にいるリインフォースが、シャーリーに報告した。

シャーリー「よかった」

シャーリーはユニゾン成功に一安心した。

一方、銀時は内側から漲る力にまだ興奮していた。おいおいおい、マジでか。これヤバイよ。どれぐらいヤバイかって言うと、マジヤバイ。

今ならあの夜王鳳仙と一対一で闘り合っても勝てる気がする。かめめ波が出せる気がする。

最初はフュージョンの失敗版みたいな、デブやガリガリにならないか不安だったが、そんな不安は完全に消えていた。

シャーリー「リインフォースさんとユニゾンしている状態なら、魔法を使う事も可能だと思います」

銀時「マジでか!?!」

シャーリーの言葉に銀時は更に興奮する。

試しに手を前に出して、障壁を張ってみる事にした。フェイト達が出してるような障壁をイメージする。

すると手の前に、銀色の障壁が展開した。

銀時「うおおおおお!!」

銀時は驚きと興奮の声を上げた。

リインフォース【見事です、銀時】

リインフォースが褒めた。

銀時は障壁を消した。

マジでスゴくね?それじゃあ空とかも飛べんのか。

タイトル『魔法侍リリカル銀ちゃん』に変更するか?

なんて事を考えていると、

リインフォース【ああ……銀時の中……気持ちいい……】

リインフォースが艶かしい声を出した。

銀時「何言ってるんのお前？気持ち悪いんだけど……」

銀時は若干引いた。

リインフォース「好きな人と一体化するのが、こんなに気持ちいいとは……」

銀時「え……？」

今のリインフォースの言葉に、銀時は目を細めた。

銀時「お前、今何て言った？」

リインフォース「ですから、好きな人と一体化……あっ！！／＼／

リインフォースは、しまったと言うような声を出した。

銀時「ええええええええ！！？」

銀時の叫び声が、デバイスルームに響いた。

銀時「おま……お前まで俺の事……！？ええええええええ！！」

銀時は動揺がおさまらない。

リインフォースは黙ってしまう。

シャーリー「あの……どうかしたんですか？」

シャーリーが心配そうに尋ねた。

どうやら今の会話は、聞かれてなかったみたいだ。

銀時「いやいやいや！何も問題ねーぞ！うん、問題なし！」

動揺しまくりながら、銀時は答えた。

銀時「そ…それじゃあユニゾン解くか！」

銀時の声に応えるように、体から光が発した。

光はおさまり、銀時の前にリインフォースが現れた。

リインフォースは、顔を真っ赤にして俯いている。

シャーリー「リインフォースさん。大丈夫ですか？」

シャーリーが尋ねた。

銀時「ああ！じゃあ俺が医務室まで連れてくわ！」

そう言つて銀時は、リインフォースの腕を掴み、急いでデバイスルームを出た。

シャーリーは不思議そうに首を傾げた。

デバイスルームを出た銀時とリインフォースは、屋上にいた。

銀時「リインフォース。お前さっき言った言葉、マジなの？」

急いで屋上に来たので、銀時は肩で息をしている。

リインフォースの顔は赤いままである。

顔が真っ赤で反応なし。

うーん。こいつアマジか？

と、銀時は思った。

両者口を閉じたまま沈黙が続いた。

銀時が頭を掻いた時、

リインフォース「十年前、貴方は私に言いました」

リインフォースが口を開いた。

銀時は頭を掻くのを止め、リインフォースの話を聞いた。

リインフォース「『笑ったお前の顔も見てーし』。人にあんな言葉を言われたのは初めてでした」

懐かしむようにリインフォースは語った。

リインフォース「嬉しかった。その時まで、私は道具としてしか扱われなかった」

リインフォースは、胸に手を当てた。

リインフォース「あの時から、私の心の中には銀時がいた。貴方の事を考えると、胸が熱く、苦しくなる」

俯いてた顔を上げる。

赤い瞳が真っ直ぐに銀時を見つめる。

思わず銀時は唾を飲み込んだ。

この緊張感、何度目？

リインフォースがゆっくり歩み出す。そつと銀時に抱き付く。

リインフォース「銀時。貴方が好きです」

リインフォースは頬を赤くして、銀時に告白した。

銀時は、体が固まって動けなくなっていた。

フェイトやシグナム達からも告白されたが、やっぱり慣れない。

リインフォース「銀時」

リインフォースが顔を上げて、銀時を見つめた。

リインフォース「フェイト達には負けません」

銀時を見つめながら、リインフォースはハッキリと言った。

リインフォース「貴方のユニゾンのパートナーとなり、貴方を護ります」

決意と想いを銀時に伝える。

護られてばかりでなく、私も銀時を護りたい。

愛する貴方の力になりたい。

銀時「…リインフォース」

銀時はリインフォースの両肩を掴んだ。

リインフォースの顔が更に赤くなった。

銀時「この先、ゾーマ以上にヤベー敵が現れるかもしれねエ。もしかしたら、俺一人じゃ手に負えねエようなヤベー敵が」

真剣な表情でリインフォースに語る。

銀時「だから、その時は…俺に力を貸してくれ」

銀時がそう言った瞬間、リインフォースの顔が明るくなった。

リインフォース「はい。喜んで」

頬を赤くし、リインフォースは嬉しそうに頷いた。

銀時は『ユニゾン』という新たな力を手に入れた。

リインフォースの心もゲットした。心の方は、十年前に既にゲットしてるんだけど。

リインフォース「では戻りましょう、銀時」

リインフォースは銀時と腕組をした。

銀時「何で腕組？」

銀時が尋ねるが、リインフォースは気にせず嬉しそうに腕を組んだまま、銀時と屋上を出た。

銀時はため息をついた。まさかリインフォースからも告白されるとは。

フェイト、スバル、なのは、ティアナ、シグナム、アルフ、リインフォース。銀時に好意を持った女性は、さらに増えた。ちなみにネプテューヌも。

これからどうするか、銀時は悩んだ。

一方、機動六課・訓練場付近

ネプテューヌ「なのはちゃんたちまだやってるよ。ハムッ」

ネプテューヌは、アイスを頬張りながら言う。

ノワール「それほど銀時が好きってことよ」

ノワールは、自分の髪をくしでときながら言う。

ブラン「・・・嫉妬と恋愛は紙一重」

本を読みながら、何やら意味深なことを言うブラン。

ちなみに九兵衛は、ブランにぼこぼこにされてボロ雑巾状態である。

ベール「世も末ですわね」

まるで他人事のように言うベール。

ネプテューヌ「ん？ベール、何持ってんの？」

ベール「これですか？」

ベールは、抱えている箱を見せる。

ベール「このミッドチルダで発売された『OWee』オウエーですわ」

と、自慢げに言うベール。

『OWee』とは、銀時の世界の発売中止になったはずのゲームなのだが、なぜかミッドチルダで発売されていたようだ。
ちなみに『OWee』を見たブランは、複雑な顔をしたらしい。

すると、

アイエフ「っ！危ない！！伏せて！！」

訓練場から流れ弾が飛んできて、サツ、と伏せる。

ネプテューヌ「あいたた・・・みんな大丈夫・・・」

ノワール「どうしたのネプテユ・・・」

ブラン「一体何・・・」

ベール「どうかなさいまし・・・」

ネプテューヌ達が場所を見て・・・固まった。

そこにあるのは、流れ弾によって焦げた跡だけでなく、無残な姿になったアイスとくしと本と『OWee』があった。

ネプテューヌ達は女神モードになり、

パープルハート「・・・殺るわよ」

ブラックハート・ホワイトハート・グリーンハート「ええ（おう）」

殺意のオーラを出しながら、なのは達のところへと向かった。
コンパとアイエフは、なのは達に合掌した。

パープルハート「ネプテューンブレイク！！」

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生ー!!」

銀八「はーい。もうすでにレギュラーになって来ましたこのコーナー。じゃあ今回のアシスタントは」

イストワール「こんにちは。私、イストワールがアシストします（^^）／」

銀八「よしそれじゃ……ってまた1つかよ。まあいいや、ペンネーム『鳴神ソラ』さん。

『マリオ』すげえ……ネプテューヌの奴、あの高杉を転ばせるとは……」

フォックス「物凄いシリアスプレイヤーだな……」

ルイーダ「と言うか……僕と兄さんにクッパが主役のゲームのBGMが出て来たね……」

スネーク「俺的に最後らへんのパープルハートがなのはとフェイトを攻撃ごと殴り飛ばしたのが印象深かったぞ今回……」

ネス「確かに：」

リュカ「凄いですよね：」

僕からネプテューヌ達に質問「変身してても装着してるの外せれるの？」

マリオ「俺から真王に質問「美味しい料理は出るか？」」　ちなみに内のマリオは××料理を簡単に完食します。

ルイーダ「（それって××料理の奴になりそうだな…）…僕から高杉に質問「ネプテューヌさんの発言にこけた際、どう言う心境だった？：」」

そんな訳で次回を楽しみにしてます

ネス「そして銀さんのハーレムを楽しみにしてます」

リュカ「ネス：：」　「ずばり、最初の質問はイストワールさん、答えなさい」

イストワール「可能です。その状態から私服になれますよ」

真王「次の質問ですが、できますよ。そんなマリオさんに、バイオエリンギヤーのソテーとモスマンの佃煮、そしてレッドモンスターケーキをプレゼント」

銀八「待て待て待て待て待て！明らかに食べられるもんじゃねえよ！しかも最後のは完全に料理じゃねえし！」

第十二訓：男を奪う女は気が荒い（後書き）

真王「実はインフェルノマター激辛物質はあるプロからつくられてるんですよ。」

イストワール「そうですか・・・次回『女運の悪い奴はろくなことがない』テイクオフ」

第十三訓：女運の悪い奴はろくなことがない（前書き）

真王「次回から我がオリジナル物語がスタートします！それでは『リリカル銀魂』」

???「始めるでゲソ！」

真王「コラコラ！あんたの出番はまだ！」

???「ちえっ」

第十三訓：女運の悪い奴はろくなことがない

機動六課の食堂。

引きつった顔で席についてるのは銀時。その銀時の右側にフェイトとなのは、左側にシグナムとアルフ、その前にスバル、ティアナ、リインフォースが座っていた。

七人とも、なんかこう…負のオーラの的なモノを放っていて、近寄り難い雰囲気が出来ている。実際、フェイト達が座ってる席に近寄ろうとする者はいなかった。

そんな負のオーラの中心に座ってる銀時は、冷汗をダラダラ流している。

気のせいかな、胃が痛くなってきた気がする。

実は銀時とリインフォースの事をフェイト達の耳にも入り、こんなことになっていた。

原因は偶然にその様を見ていた桂とはやてがフェイト達にその時の様子を話していた。

腹の辺りを摩りながら、銀時は思った。

周りの人達は、フェイト達が放つ負のオーラに当てられて、食があんまり進んでいない。

そんな中、桂とはやてだけは笑みを浮かべて、楽しそうに様子を見ている。

ヴィータ「はやて、ツラ…アレ、何とかしなくていいの？」

桂の隣に座ってるヴィータが、フェイト達を指差しながら小さな声で言った。

桂「これも銀時の罪深さが原因だ。ほうっておけ」

はやて「銀ちゃんがあんなに女たらしになるメツチャおもろいからな、そうっとしとき」

ヴィータ「お前ら、何か楽しんでいないか!？」

心底今の状況を楽しんでる桂とはやてに、ヴィータは怒鳴った。
エリザベス、シャマル、ザフィーラ、リインは戦場では感じられない修羅場に恐怖を感じていた。

神楽「銀ちゃん、もしかしたらとんでもない事に巻き込まれているアル」

九兵衛「いや、いや、既になっているぞ」

平然な顔で言う神楽にツツコム九兵衛。

ユーノ「銀さんもなのは達にスタボロにされればいいんだ。」

新八「ユ、ユーノさん……」

ボソリとユーノも銀時に負の感情を込めた言葉を言い出す。

エリオとキャラも、銀時の心配をしていた。

エリオ「月詠さん。銀さん達……あのままにして、いいんですか？」

月詠「下手に手を出したら火傷するだけじゃ。放っておけばよい」

月詠は気にせず食事続けた。

ネプテユーナ「修羅場だね」

アイエフ「修羅場ね」

コンパ「修羅場です」

ノワール「修羅場よね」

ブラン「修羅場だ」

ベール「修羅場ですわ」

イストワール「……あなた方はほかに言うことはないんですか？」

イストワールは頭を抱えた。

フェイト「まさかリインフォースさんまで、銀時が好きだったなんて予想外でした」

フェイトが沈黙を破った。

リインフォース「言っておきますが、銀時は私のモノです。譲る気はありません」

毅然とした態度で、リインフォースは言った。

銀時「いや…俺、お前のモノでも誰のモノでもないから…」

銀時が少し弱々しく言った。やはり、いつもの勢いはない。

シグナム「悪いがリインフォース。私も譲る気はない。銀時とユニゾンが出来るからと言って、調子に乗ってもらっては困る」

銀時の言葉をスルーし、シグナムは目を鋭くして言った。

アルフ「銀時との付き合いは、あたしとフェイトの方が長いんだ！つまり銀時は、あたしのモノだ！」

大声でアルフが言った。

銀時は顔をしかめた。

コイツら俺の話、聞いちゃいねエ。

フェイト「アルフ。私の事、忘れてるよ？」

ニッコリと、フェイトは黒い笑みを浮かべた。

なのは「悪いけどフェイトちゃん！銀さんは渡さないよ」

なのはは笑いながらそう言いだすと、眼だけは笑っていないかった。

ティアナ「なのはさんだつて、兄さんに手は出させないよ！」

ティアナも上司関係なくなのはにつつかかる。

スバル「そくだよ！銀さんは誰にも渡しませんよ！」

スバルがそう言いだすとティアナはスバルに睨みつける。

ティアナ「スバル！それはつまり私も含まれている訳！？」

スバル「そくだよ！ティアにも渡さないんだから！」

以前、仲が良くなったばかりの2人もここだけは互いに譲れなかった。

互いににらみ合っている2人を見て銀時は2人を止めようとする。

銀時「いや、だから…お前等までそう睨み合わなく…」

シグナム「銀時は私の男だ！誰にも渡さんぞ！」

銀時の言葉を遮って、シグナムが六人に言った。

七人の口論はヒートアップし、ギャーギャー騒ぎ始めた。

銀時はため息をついた。

何で俺の周りにいる女は、みんな人の話を聞かないんだ？

俺、何か悪い事したか？

ネプテューヌ「銀さんって女運ないの？」

ネプテューヌ組「なさそうね（だな）（です）（ですわ）」

遠くでこんな会話が聞こえた。俺泣いていい？

銀時「あ…あの…、なんか俺邪魔みたいだから、向こう行ってよ
うか…？」

ゆっくりと席を立ちながら、恐る恐る七人に聞いてみた。
すると、

フェイト「逃げないで銀時！」

なのは「銀さんがいないとダメなの！」

スバル「銀さんの事で話しているんですよ！」

ティアナ「兄さんもちゃんとして！」

シグナム「お前もここにいろ！」

アルフ「あたしを置いて行かないで！」

リインフォース「銀時と合体したい！」

七人は銀時に向かって叫び、無理矢理イスに座らせた。

歴戦の侍『白夜叉』も、七人の修羅には勝てなかった。
再び七人の白熱した口論が始まる。

諦めた銀時は、黙って見守る事にした。
ふと桂とはやての方を見る。銀時の困ってる様子を笑いを堪えながら楽しそうに見てる。

あのバカツプル共。いつかヤキ入れてやる。
2人を睨みながら、銀時はそう思った。

フェイト「銀時は私のだよ！」

なのは「私のだよ！」

スバル「私のです！」

ティアナ「私の兄さんだよ！」

シグナム「いや、私の男だ！」

アルフ「あたしのだ！」

リインフォース「私のモノです！」

七人の口論は続く。

なかなか終わらない口論に終止符を打つため、フェイトが勝負に出た。

フェイト「私は小さい頃に、銀時に裸を見られた事があるんだよ！」

フェイトが爆弾発言した直後、周りのみんなが口から飲み物やら食べ物やを噴いた。

銀時「おいイイイイ！何言っちゃってんのお前！？」
慌てて銀時は叫んだ。

エリオ「は…裸を…！？」

キヤロ「小さい頃の…フェイトさんの…！？」

エリオとキヤロは顔を赤くした。

神楽と九兵衛も顔を真っ赤に染めている。

しかもシグナムは火に油を

シグナム「甘いな、テストロツサ。お前も見ていただろ？銀時は私の胸の谷間に顔を埋め、しかも手で胸を揉んだ」
少し誇らしげにシグナムは語った。

銀時「お前も何言っちゃってんのオオオオ！！？」

テーブルを叩きながら銀時が叫んだ。

リインフォース「む…胸を揉んだ…！！？」

リインフォースの顔が赤くなつていく。

ヴィータ「シグナム、何で他人の前でそれ軽々しくいえるんだ！？

／／／

あり得ないとヴィータは大きく怒鳴りだす。

月詠「わっち以外にもそんなことをしたのか銀時？」

煙管を加えて呆れる月詠。

実際に月詠も、偶然とは言え銀時に胸を2回も揉まれたことがある。

銀時「テメーらア！何、昔の恥ずかしい出来事語ってんだ！？」

マズイ。

銀時は思った。

このまま二人を放っておいたら、大変な事になる。

フェイト「私は裸を見られただけじゃなくて、銀時の手料理を食べたり、一緒に寝たりしました！」

トドメとばかりに、フェイトが言い放った。

スバル「て…手料理！？」

ティアナ「い…一緒に寝たア！？」

スバルとティアナは、ショックを受けて愕然とした。

二人は力無くうなだれた。

銀時は口を大きく開けて固まった。

するとコンパが、
コンパ「え？フェイトさんの料理がまずいから銀さんが料理したんじゃないですか？」

こんなことを言い出した。

フェイト「いや違うからね！！別に料理が下手で銀時に作ってもらったわけじゃないからね！／／／／」

フェイトは誤魔化しているのだろうが、全然誤魔化し切れてません。

アルフ「あたしは混浴で、一緒に温泉に入ったー！」

手を挙げながらアルフが言った。

リンフォース「こ・・・混浴！？」

リンフォースもショックを受け、テーブルに突っ伏した。

銀時「ちよーつとまってえー！ー！ー！ー！」

さらに状況が悪化して青ざめていく銀時だが、なのはがこの中でもない事を言い出す。

なのは「みんな小さすぎるよー！」

銀時達はなのはのほうに注目すると、銀時は嫌な予感をしてしまう。
なのは「私なんか銀さんに自分のファーストキスを授けたんだよ！
／／／」

今までの衝撃的に誰もが大爆発するかのような衝撃を受け、口に入っていた飲み物と食べ物も噴射するように吐きだす。

ある者は鼻血を出したり、ある者は大ショックを受けたり、ある者は「うそだあー！ー！」と叫びだす。

ちなみに新八は知ってるため、あまりショックは受けなかったが、ちよっぴりダメージはあるらしい。

銀時「言っちゃったよこの子あー！ー！ー！ー！ー！ー！他人の前では
はいえない恥ずかしい事を言っちゃったよー！」
フェイト「な・・・なのはの・・・」

スバル・ティアナ・アルフ・リインフォース「ファーストキスううう！？」

スバル、ティアナ、アルフ、リインフォースは驚きだした。ユーノは衝撃のあまり白目を剥いている。

ネプテューヌ「安くない？それ」

アイエフ「ネプ子。それは言うだけ野暮、てもんよ」

ネプテューヌのつぶやきに、アイエフが止める。

シグナム「己のファーストキスをだど？・・・そんなの10年前に私もしているぞ！／／／」

突然シグナムの火に油をかけるような発言をしてさらに衝撃的に知る。

ヴィータ「シグナムうー！お前もやったんかいー！ー！／／／」

ヴィータは顔を真っ赤に染めて突っ込みだす。

はやて、シャマル、ザフィーラ、ウインの4人はシグナムの大胆さに顔を真っ赤に染める。

なのははシグナムに驚きだしているが、フェイトは平然としている。なぜなら彼女が先に・・・

フェイト「ふふふ・・・まだまだ甘いわね、シグナム」

シグナム「何？」

シグナムはフェイトを睨みつけると、フェイトがここ一番的な衝撃発言を言い出す。

フェイト「私なんかシグナム達が来る前に銀時に授けたんだよ！」
さらに上に行くかのようにフェイトは大胆に言い出す。

シグナム「何だとおおお！？」

シグナムも驚くかのように驚きだす。それはつまり・・・

フェイト「私は銀時にファーストキスを授けただけじゃなく・・・
銀時のファーストキスを頂いたんだよ！／＼」
のはや暴走としかいえない大胆すぎた発言に誰もが（特に男性）が
信じられない衝撃が襲いだす。

6人「ぎ・・・銀時（銀さん）（兄さん）のファーストキスう
ーーーーー!?」

なのは、スバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リインフォースの
6人は衝撃的に驚きだし・・・そして。

6人「そ・・・そんなああああああああああ！！」

6人はショックを受け、テーブルに突っ伏した。

銀時「だアアアア！！お前大胆すぎるのも、程がありすぎるだろお
！！」

怒鳴った後、銀時はチラツと周りを見た。

周りのみんなは、軽蔑の眼差しを銀時に向けていた。

小さな女の子の裸を見て、一緒に寝た。しかもシグナムの胸を揉ん
だり、アルフと一緒に温泉に入ったりした。さらにはフェイト、な
のは、シグナムのファーストキスを奪った。みんなの頭の中で、銀
時はロリコン、エロオヤジであると認識された。

神楽「銀ちゃん、マジで最悪アル。新八じみよりメツチャ女の敵ね。し
ばらく私に声をかけるなアル」

新八「・・・なんか神楽ちゃんに突っ込みたいことがあるけど、銀
さんがそんな人だなんて思いませんでした」

エリザベス「七股はやばすぎでしょ？」

月詠「銀時・・・いくらなんでもそれはやりすぎじゃろ？」

神楽と新八は軽蔑し、エリザベスと月詠は呆れる。

エリオ、キャロ、リインは苦笑しながら銀時から下がっていく。

ヴィータ「テメエがそんな男とは思わなかったよ」

そう言うと同時に銀時に抱きつく。

銀時「うおー！」

パープルハート「銀時は誰のものでもないわ。銀時は銀時で進むのよ」

と、パープルハートは言う。

銀時「ネプテユーン……」

銀時はちよつと驚く。

ブラックハート「要はあなたがしつかりやれってことよ」

グリーンハート「でも銀時さん、たまには皆さんのために支えてあげてくださいね」

ホワイトハート「……………（銀時に寄り添う）」

銀時「お前ら……」

4人から励ましを受けた銀時は、不思議と気持ちが楽になり、自然に笑みが出る。

なのは達「ちよつと（まで）！！銀さん（銀時）は私n「ああ？」

ナンデモナイデス、ゴメンナサイ」

なのは達は何か言いかけたが、威圧されて片言になる。

パープルハート「それで銀時、この後どうする？」

パープルハートが銀時を見る。

ブラックハート達もアイエフもコンパもイストワールも、そして新八と神楽、九兵衛、月詠、桂、エリザベス、はやて、ヴィータ、シヤマル、ザファイラ、リインフォース、リイン、シグナム、アルフ、スバル、ティアナ、エリオ、キャラ、フリード、なのは、フェイトが銀時を見る。

そして、銀時はある事を決意した。

銀時「……………とりあえず、この世界でも万事屋すつか」

今、フエイト達の世界で万事屋が再開される。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!!」

銀八「はい完全にレギュラーになりましたこのコーナー。そしてアシスタントをするのは、」

ノワール「『ラストイション』の女神・ノワールと」

ブラン「『ルウィー』の女神・ブランと」

ベール「『リンボックス』の女神・ベールがお送りしますわ」

銀八「よし、いくぞ」。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。

『鳴神ソラ&ルイージ&リュカ』（ガタガタブルブル）。A。；）

「

フォックス「こええ〜〜」；」

スネーク「教訓『彼女達ネプテューヌの好きな物には手を出すな』だな。；」

ネス「だね。；」

マリオ「何が？（しい〜しい〜）」送られて来た料理を全て完食した所で歯を磨き中

∴ ホント××料理を平然と食べれるなあんだ；

ソニック「それにしても∴銀時とユニゾンすると目の色が変わるけどマジでネプテューヌとユニゾンした時はどうなるんだろうな∴」

髪の色が変わるんじゃない？

フォックス「ネプテューヌ達に質問『平然と料理を食べた内のリィダーを見てどう思った？』；」

ルイージ「ネプテューヌさん達に質問『それぞれ好きな物ってなんですか？』今回それぞれ出てたけど確認の為にね∴」

スネーク「俺からも質問だ『ネプテューヌ達は今持つてる武器以外に他にも何か武器はあるのか？』」

まあ∴そんな訳で次回を楽しみにしています

マリオ「料理美味かったぞ」
「b」って食いやがったのか
!?あの料理を!？」

ノワール「ありえないわ・・・どんな胃袋してんのよ・・・」

ブラン「・・・怪物？」

ベール「いや、その例えはどうかと・・・」

ネプテューヌ「わたしはあそこまではちょっと・・・」

銀八「だな；あ、最初の質問は以上のとおりだ。次の質問はこうだ」

ネプテューヌ「食べ物！特にスイーツが好き!!」

ノワール「わたしは・・・そうねえ・・・猫が好きだわ・・・

(声優も好きだなんて言えないわ)ノノノノノ

ブラン「・・・小説の本」

ベール「もちろんゲームですわ。スーパーファミコンから始まって
WiiとPS3などを持っていますわ」

真王「最後の質問ですが、私が答えましょう。彼女達の持つてる武器以外にもネプテューヌには龍刀・桐生、ベールにはグングニル、ノワールにはカリバーン、ブランにはブレイドハンマーという最強武器を持っています。」

銀八「すげえな。そんじゃ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい。

銀八「つてそりゃ最強キャラじゃねえか！……まあいいや、『黒神』さん、廊下に立ってなさい」

ノワール「次の質問はペンネーム『あああ』さんからよ。『ネプテュー又達が滅茶苦茶強いですけど、なのは達はネプテュー又達と同じ位、強くなれますか？

ここの銀さんもブレイシルバーみたいなデバイスで強くなりますか？』多分そうなるんじゃない？」

真王「2つ目は多分そんな感じで強くなると思います」

銀八「2人揃って多分って……まあいいや。『あああ』さん、廊下に立ってなさい」

ベール「最後ですわ。ペンネーム『f y f g y f』さんからの質問『ネプテュー又と夜王、どっちが強いですか？

ネプテュー又でも屁怒紹さんは怖いですか？

銀時に3票。なのはに1票。フェイトに1票』はい。ありがとうございます」

ネプテュー又「1つ目は強そうだけど負ける気はしないよ！2つ目は……屁怒紹さんって誰？」

銀八「あ、ああ……屁怒紹さん……いや、屁怒紹様はこう言う方だよ」

屁怒紹さんの写真を見せる。

ノワール・ベール・ブランは顔を青くする。

ネプテューヌ「へえ〜。この人が屁怒紹さんなんだ」

ネプテューヌは平気らしい。

銀八「・・・え〜。ネプテューヌの反応は以上です（ビクビク）。

『f y f g y f』さん。屁怒紹様に気を付けてください（汗）」

真王「人気投票を発表します。

銀時：9票

新八：6票

スバル・ティアナ・ネプテューヌ・なのは・フェイト：1票

・・・になってます」

ネプテューヌ「ぶ〜。原作じゃ主役なのに〜」

ネプテューヌはいじける。

真王「さて、『鳴神ソラ』さんのところに『メガハニーケーキ』を密封してプレゼントするか」

銀八「おっ偉くまともなもんを出すな。・・・ってなんで密封するんだ？」

真王「一度開けると何処からともなく蜂が来るだけでなく、スズメバチ系までやってくるんだよ」

第十三訓：女運の悪い奴はろくなことがない（後書き）

真王「次の章に入る前に番外編が始まります。海からの侵略者が現る!？」

新八「次回『イカの踊り食いあまり良くない』テイクオフ！」

予告

ナレーション「ミッドチルダの海で、イカな少女が目撃されているようです」

番外訓：イカの踊り食いはあまり良くない（前書き）

真王「今回は番外編です。では『リリカル銀魂』スタートです」

番外訓：イカの踊り食いはあまり良くない

機動六課の訓練場付近

そこで1人の少女・ネプテューヌが釣りをしていた。

ネプテューヌ「早くかかんないかな〜」

銀時「お〜い。なにやってんだ〜」

銀時が朝の寝起きのような口調で言う。

新八「あれ？ネプテューヌちゃん。何か釣ってるんですか？」

ネプテューヌ「それがまだなんだよ〜。何かかかってくれないかな〜」

釣竿を動かして魚を狙うネプテューヌ。すると、

クイクイツ

釣竿に反応があった。

ネプテューヌ「おお！かかった！」

銀時「よし！早く釣りあげる！」

竿をぐいぐいと引つ張り続け、そして、

ネプテューヌ「・・・捕ったど〜〜〜！！」

大物を釣り上げた。

銀時「おお！いい獲物が釣り上げ・・・」

????「いはははははは！はひふふへへほ！（いたたたたた！何
するでゲソ！）」

イカ（な少女）を釣り上げた。

ドゴッ！

「????「ゲフエツ！」

イカ（な少女）は蹴り飛ばされた。

ネプテューヌ「ああっ！せっかく釣り上げた獲物が……」

銀時「ネプテューヌ、お前は何も見てなかった、何も釣り上げなかった。そういうことにしとけ」

新八「いや、銀さん。……さっきの女の子、人じゃなかったですか？」

新八がさっき見た者に対しての疑問を言う。

銀時「馬鹿野郎、新八。人が海から来るわけねえだろ。あれだよ。

エイリアンかなんかだよ」

新八「なるほど、そうですね。人が海で居続けられるわけないですもんね」

さつき釣り上げられたものをエイリアンと決めつけ、納得する。

銀時「さくで。さつさと自分の部屋にもd「ちよつと待つでゲソ！」
グオツ！」

後ろからとび蹴りをくらい、倒れる銀時。

銀時を蹴り飛ばした少女は、白い服にイカの頭（多分帽子だろうが）と水色の触手のような髪の毛、手首足首に水色のリングがついていた。

イカ娘「このイカ娘様に対して蹴り飛ばす拳句、無視するとはいい度胸でゲソ！」

銀時を指差して、堂々と語るイカ娘。

銀時「あいててて……まったく、おめえのようなガキにつき合うようなことはねえよ。とつと家に帰れ」

銀時は言うが、イカ娘は食い下がらない。

イカ娘「うるさいでゲソ！蹴られた借りはそのまま返すでゲソ！」

すると、触手のような髪が伸び、銀時に襲いかかる……と

思ったら、

新八「たらばっ!!」

なぜか新八を狙った。

銀時「・・・おい君。なんで新八を狙ったんだ？」

銀時がきくと、イカ娘は答える。

イカ娘「そこにいる男はサンドバックで十分でゲソ」

銀時「ああ、そうか」

新八「あんたらひどくない!!」

サンドバック扱いされた新八が怒鳴る。

ネプテューヌ「・・・ところで、イカ娘ちゃんはどこから来たの？」

イカ娘「それは海から来たんでゲソ」

ネプテューヌが質問して、イカ娘は答えるが、

銀時「はいはい。そういう嘘は親の前でやっつけよ」

銀時は信用しなかった。拳句、

イカ娘「何するでゲソ!放さなイカ!」

服をつかまれ、そのまま六課に連れて行かれた。

機動六課・食堂

神楽「・・・で、銀ちゃんはこの迷子を拾ってきたアルか？」

イカ娘「迷子とは失礼でゲソ!」

イカ娘は神楽に喝を入れる。

現在イカ娘は、六課組とネプテューヌ組に質問を受けている。

ベール「つまりあなたは海の世界の住人っというわけですか？」

イカ娘「そうでゲソ」

と言って、フェイトを揺さぶる。

フェイト「大丈夫！私達管理局がイカ娘のいた世界を見つけて帰してあげるから」

イカ娘「ほんとでゲソか！」

イカ娘は嬉しそうだ。

銀時「安心しろ。フェイト達は約束を守るぜ」

イカ娘「ありがとうでゲソ！」

その後、フェイト達がイカ娘のすんでいる場所を探している間、

ネプテューヌ「イカ娘ちゃん見つけ！」

イカ娘「み、見つかったでゲソ」

ネプテューヌ「缶ふん「させないカ！」うわ！」

缶けりして遊んでました。・・・つか触手使って倒すな。

かくれんぼ

イカ娘「何処に・・・・・・・・・・！、見つけたでゲソ！」

ドゴツ！

銀時「テメツ！触手で木をなぎ倒すな！」

だるまさんが転んだ

新八いじめ？

イカ娘「いつもより多くまわってるでゲソ」

新八「あわわわわわわわわわ」

コンパ「あの・・・そろそろ止めてくださいです」

イカ娘「サンドバックはこれで良いんでゲソ」

新八「僕はサンドバックじゃない！」

そして、イカ娘の世界が見つかった。

イカ娘「やっと帰れると思ったんでゲソが・・・さびしいでゲソ・・・」

自分の世界に帰れると言う嬉しさが来るが、たった一日なのに後から別れのことですユンツとなる。

ネプテューヌ「イカ娘ちゃん・・・」

銀時「・・・そんなにしょげんじゃねーよ」

銀時が言う。

銀時「別れが来たとしても、最後には笑顔でいけばいいじゃねえか」
イカ娘「銀時・・・」

銀時だけでなく、まわりのみんなも言う。

ネプテューヌ「そうだよ！イカ娘ちゃんはよく遊んでくれたし」

ベール「私達とゲームしてくれましたし」

神楽「私と付き合ってくれたアルし」

なのは「いろいろと面倒を見てくれたし」

桂「俺のそばを台無しにしたことがあったし」

はやて「うちが始末書を書かされる羽目になったしな」

イカ娘「ネプテューヌ、ベール、神楽、なのは、桂、はやて・・・」
イカ娘とともに過ごした思い出を語るなのは達。
唯、桂とはやての場合は恨みごとのようだが。

新八「だから、元気でいてくださいってことですよ」

イカ娘「・・・サンドバックに言われると癪でゲソ」

新八「オイイイイイイイイイイ！！！！結局あんたは僕をサンドバックしか見てないのかーーーー！！！！」

最後の最後までサンドバック扱いされた新八。

周りは苦笑いする。

イカ娘「・・・みんなのおかげで帰れることができるでゲソ
！みんなはもう友達でゲソ！」

ネプテューヌ「うん！私たちはもう友達だよ！」

涙交じりだが、元気よく別れのあいさつをする。

銀時「じゃあまたな。元気でやれよ」

イカ娘「また会場でゲソーーーー！！！！」

シュンツ！

開いていた时空ゲートは消え、イカ娘はいなくなった。

銀時「・・・あゝあのやかましいガキがいなくて清々するぜ」

ネプテューヌ「そんなこと言って、ほんとはさびしかったんじゃないの？（ニコニコ）」

銀時「ちげーよ！」

そんなこと言っても、やっぱり寂しかったりする銀時であった。

イカ娘の世界・海の家・れもん

イカ娘（・・・帰って来たんでゲソな・・・）
海を眺めて、銀時達を思いだすイカ娘。

???「おゝい、イカ娘。そこでなにやってんだ？」
遠くでイカ娘を呼ぶ声が聞こえた。

イカ娘「・・・何でもないでゲソ~~~~~!!」
もう彼女は侵略よりも今の生活が好きのようだ。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!」

銀八「はゝい。番外編だけど質問コーナーを始めます。」

ネプテューヌ「今回のアシスタントは私達がするよ！」

ブラン「・・・さっさと始めて」

…個性豊かなメンバーだなと思ったと同時に…女神姿凄い服だな…
って思った…

一同「どれどれ…」

(ネプテューヌの公式サイトを見ています)

ルイーダ「…確かにこれは…」

マリオ「4人とも動き易い服だな」 純粹な感想です。

スネーク「最初は戦いあっていたのか？」

フォックス「サイトを見るだけではそうじゃないのか？」

ネス「面白い名前の人もいるね」

リュカ「そうだね…この2人も出るのかな？」

マリオ「さあ？…ネプテューヌ達に質問『真王が知ってるアニメ、
漫画、ゲームの中でこれは使ってみたい技はあるか？』」

ルイーダ「銀さんに質問『ネプテューヌさん達が持つてる武器で使
いたって思う武器はありますか？』」

ソニック「スバルに質問『銀時やネプテューヌ達から見習いたい所
はあるか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしています。

マリオ「応援してるぞ〜」『・・・もはやこいつモンスター以上か？』

女神たち「だったら直接たたきに行こうか（な）（しら）？」

銀八「嫌、怖いからやめてくれ・・・（汗）」

ネプテューヌ「最初の質問はね〜。私、『超マツ八次元斬』がいい！」

ノワール「私は『暗黒剣Xの字斬り』を使いたいわ」

ブラン「・・・『プラズマ昇天激』がいい」

ベール「私は『魔砲流星群』というのを使ってみたいですわ」

銀八「って全部『デイスガイア』の技じゃねーか！！」

銀時「落ちつけて。2つ目はネプテューヌの刀が相性がいいぜ」

スバル「3つ目は2人の強い心です」

銀八「はい、ありがとう。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ネプテューヌ「次の質問。ペンネーム『スカル』さんからの質問『皆さんに質問、今週の銀魂を見てどう思われますか？銀さん6股してますよ？』」

全員が立ち上がる。

全員「ごめん。まだ見てません」

銀八「『スカル』さんごめんなさいね。廊下に立たなくていいから」

ベール「では最後の質問ですわ。ペンネーム『月光閃火』さん。『よお…月光閃火だ。』

しかし…銀時も大変だよな。モテる男つつーのも、見方によっちゃ精神的に地獄だもんな。

輝刃「だな…ただでさえ、銀時は糖尿病抱えてるのにその上鬱病まで抱えてしまったら始末に負えないぞ？」

だよな…あ、質問書き記しておくぜ？

『作者に質問だ。銀時の奴はフラグ立ちっぱなしだが、他の銀魂キヤラ達は何らかのフラグとかカップリングはあるのか？特に新八とか近藤とか。あ…一緒に長谷川さんとかも教えてくれ。』

輝刃「確かに…かなり銀時ばかりがフラグフィーターチャイアされてばかりだからな…。この際他の銀魂キヤラ達のフラグとかカップリング総ざらい…というのも悪くはないな…。『…どうなのですか？』

真王「答えましょう。銀時×フェイトがありますが、銀時×ネプテユーも悪くありません。新八と近藤は分かりませんが、長谷川だつたらベールがあつかと」

銀八「何でベールなんだ？」

真王「いや、特に意味は………ん？」

落ちている紙を拾う。

【銀時×桂もよしですBY西園】

真王「……………美魚、BLはほどほどにしとけ」

銀八「誰だよ？美魚って？」

真王「きにするな。『月光閃火』さん。廊下に立ってくれ」

ネプテューヌ「そういえば『鳴神ソラ』さんのマリオさん、どんなものでも食べるんだね」

銀八「あの様子じゃ食べ物の中に植物が入ってようが、爆弾が入ってようが、ウィルスが入ってようが、ピーチ姫が入ってようが問答無用で食べそうだな」

真王「あ！ピーチで思い出したんだけど彼女ここに訪れてケーキを作ってたぞ。そしてそのケーキは『鳴神ソラ』さん宛てに運ばれていったぞ」

銀八「恋人にプレゼントか？羨ましいじゃねえか畜生！」

真王「あっそ……（そう言えばケーキ作つてるときにイガイガしたものと黒い爆弾と赤・青・黄色の生物っぽいものがそれぞれ入ってたな。それに一瞬ピーチ姫が裸になってもうひとつにケーキの中に入れていったように見えたがあれはいつたい？）」

ブレイド「ぐぷあっ！」

真王「こらー！ゲストをぶっ飛ばすな！・・・というわけで」

女神たち＋ブレイド「次回をお楽しみに（まってるぜ）」！

番外訓：イカの踊り食いはあまり良くない（後書き）

真王「以上。『侵略！イカ娘』からイカ娘でした。次回は短編集
ですので気軽に見てみてください」

（募集）

真王「番外編に載せたいキャラがいたら、一言コメントに書いてく
ださい。そのキャラが現れることがあります。（決めるのは私だが）

┌

超短編集1 (前書き)

真王「ここはネプテューヌ風にアレンジした短編集です。それでは
スタート」

超短編集1

〈彼女の胃袋〉

六課の食堂で銀時は小豆いっぱい入れてるご飯『宇治銀時丼』を食べていた。

なのは、フェイト、スバルも食べていた。

ヴィータ「・・・お前ら、よくそんなものを平気で食べられるなため息交じりに言うヴィータ。」

銀時「バカヤロー、ヴィータ。これはすごくうまいんだぞフェイト」そうだよヴィータ。とても美味しいよ

スバル「ヴィータ副隊長はこの味が理解できないんですか？」

なのは「一緒に食べようよ。ヴィータちゃん」

ヴィータ「お前らの舌おかしいんじゃないのか!？」

ヴィータは怒鳴る。

ネプテューヌ「ヴィータ」。一度食べてみたら?きつとおいしいよネプテューヌは宇治銀時丼を食べながら言う。

ヴィータ「あんな気持ち悪いもん絶対食う気はしな...って、てめえは何杯食ってた!?!」

ネプテューヌの傍には、宇治銀時丼のタワーがあった。

銀時達は見た瞬間ブー!、と吹いた。

ネプテューヌ「ん...9杯かな?」

新八「いやいやいや!それを含めると10杯目ですよ!」

1つのタワーに9杯の井ぶりがあり、今食べてるもので10杯目である。

ネプテューヌ「おいしいからいいも〜ん。今度これの大食い大会があつたら参加してみよっかな」

銀時「絶対にあるかそんなもん!!」

いくら宇治銀時丼が好きでも、10杯以上食べるのは無理だと思つた銀時であつた。

ちなみになのはとスバルは、負けじと宇治銀時丼をもつと食べるが、さすがに無理のようで、トイレで戻したという。

〜2人目の白い悪魔?〜

ある日、銀時達はニユースを見た。

アナウンサー「次のニユースです。ミッドチルダの〇〇地区で強盗軍団『シエイパー』の一味全員が逮捕されました。」

新八「へえ〜、強盗が全員逮捕されたんですか〜」

新八がニユースの感想を言う。するとフェイトが、

フェイト「おかしいわ。『シエイパー』はS級犯罪組織の部隊なのにこつもあつさりだなんて……」

何かを考えるしぐさをする。

アナウンサー「しかし、発見された時の『シエイパー』の本拠地は、何者かに壊され、一味全員ボロボロの状態で見られたようです」

フェイト「え?」

ニユースの内容に、フェイトは驚く。

アナウンサー「一味のほとんどは、うわごとで『悪魔が……白い悪魔が……』などと言っておりますが、詳しい情報はありません」

白い悪魔って言う単語に、全員がなのはを見る。
なのは「・・・何でこっち見るの？私悪魔じゃないから！」
なのはは否定するが、視線が絶えない。

すると、ブランがやってきた。

ブラン「なにやってんの？」

ネプテューヌ「あ！ブランおかえり。……………ってどうしたの？ほっぺに赤いの付いてるよ」

ブランの右ほほに、赤いものがついていた。

ブラン「ああ、レストランでケチャップの料理を食べてたからそのせいじゃない？」

ネプテューヌ「そうなんだ」

ネプテューヌは納得する。すると、

アナウンサー「一味の生き残りの証言によると、『白い服で、斧を振り回してた』との事で、全滅する前に『ちっさい』といった瞬間に暴れだしたとの事です」

白い服で……………斧を振り回してた……………。

全員がブランを見る。

全員（あれ……………ほんとにケチャップなのか！？）

冷や汗を流して、考えないことにした。

（遠慮します）

ヴィータ「なあ、ベール。頼みたいことがあるんだ」

突然ヴィータがベールに頼みごとをする。

ベール「どうしたのですか？」

ベールがきくと、いきなりヴィータが土下座した。

ヴィータ「頼む！あたしに胸を大きくする方法を教えてください！！」

・・・実にどうでも「ああ？」実にどうでもいい内容だった。

ヴィータ「言い切りやがった！！」

ベール「・・・誰に向かって言ってるのですか？」

ヴィータが突然怒鳴ったことに、ベールは聞く。

ヴィータ「いや、すまん。何か電波が頭に通ったんだ。それよりも胸を大きくする方法を教えてください！！」

バン！

神楽・九兵衛「私（僕）も教えるネ（てくれ）！！！！」

たまたま通りかかった神楽と九兵衛が、話に乗り出す。

ベール「・・・分りましたわ」

ヴィータ・神楽・九兵衛「ホント（アル）か！！」

ベール「ええ。ただし、条件がありますわ」

ベールは教えようとする代わりに、条件を言おうとする。

ベール「この私と20時間ゲームと付き合ってくれたら教えますわ」
ベールの条件内容に3人は固まる。

ヴィータ「・・・それって、遠回しに廃人になれって言ってねえか

「？」
ベール「はい」
笑顔で答える。

ウィータ・神楽・九兵衛「謹んで遠慮させていただきます（くアル）
・・・」
胸の件をあきらめることにする3人であった。

（はやてのおっぱい万歳記（ベール編））

はやて「そんでな、フェイトちゃんの胸は大きくなって行くもんや」
ベール「まあ、そうなのですか」
はやてとベールは、2人して変な話し合いをしていた。

ベール「・・・ところではやてさん。さっきから何を見ているのですか？」

はやての視線が気になるベール。

はやて「決まってるやん。あんたのそのマシユマロや」！

ベール「きゃ！」

いきなりはやてが、ベールの豊満な胸をもむ。

はやて「おお〜。シグナムとは違う見事な弾力と柔らかさ。これはすごいわ」

ベール「は、はやてさん・・・」

顔を赤くしながらはやてを睨む。

はやて「ん？」

ベール「やめてくださ~~~~い!~!~!」

バシィーーン!~!~!

はやて「ぼふぁ~~~~!~!~!」

強烈ビンタを受け、5メートルくらいぶっ飛ばされた。

ベールはどこかへ逃げてしまった。

はやて「ふっ、いい乳だったぜ~~~~ガクッ」
最終的に台無しなセリフを言うはやてなのであった。

〜はやてのおっぱい万歳記（コンパ編）〜

はやて「フッフ~~~~獲物発見や〜」

はやては、壁の隅っこである獲物を狙っていた。コンパである。

はやて「それじゃあ~~~~いただきま〜す!~!」

コンパの胸をがっしりとつかむ。

コンパはどんだん顔を真っ赤に染めて、

コンパ「~~~~キャアアアアアアア!~!~!~!」

悲鳴とともに、はやてに注射器で刺す。

はやて「いたっ!」

刺されたはやては注射器を外す。

コンパはすでにいなくなってる。

はやて「~~~~今回は作戦失敗見たいやなあ~~~~」

はやては自室へと戻っていった。

翌日、

はやては緊急入院された。

顔中にブツブツのデキモノができて、触ろうとすれば激痛が走るのである。

銀時「……………んで、一体何を仕出したらそうなったんだ？
はやて「……………言わんとして……………（もうコンパちゃんを驚かすの
やめよ……………）」

はやては二度とコンパに悪戯をすることはなかったそうだ。

〈謎の幽霊の正体〉

六課でこんなうわさが流れた。『六課の訓練場で女の叫び声が聞こえる』と。

銀時「そんな噂、デマに決まってんだろ？近所迷惑にもほどほどにしとけっつーの」

銀時が切り捨てるように言う。

ネプテューヌ「怖いの？銀さん」

銀時「ば、馬鹿野郎……………この俺が怖いわけないだろ
などと否定しているが、冷や汗がダラダラと出ている。

ノワール「……………」

そんな中、ノワールは微妙な表情を浮かべていた。

夜。

ティアナ「・・・あの噂が本当なら・・・確かめない」と
ティアナが一人で、幽霊の正体を突き止めようとする。
???「・・・」

何処からか女性の声が聞こえた。

ティアナ「・・・ほんとに訓練場から聞こえるわ」

ティアナは訓練場へと向かった。

機動六課・訓練場

???「・・・あなた・・・つ・・・えなさい!・・・」

謎の幽霊のいる訓練場にやって来たティアナ。その幽霊は何かに叫んでいるようだ。

???「先に言っておくわ。私はかゝなり強い!」

よく聞くと何かの決め台詞を言っているようだ。

しかし心なしか、どこかで聞き覚えがある。

ティアナ(この声・・・どこかで聞いたような・・・?)

そう考えていると、幽霊が見えた。それは銀色になびく髪の毛、

ブラックハート「世のため人のため!悪の女神の野望を打ち砕くブラックハート!この漆黒の輝きを恐れぬのなら、かかってきなさい!」

ブラックハートだった。

パキッ!

ティアナ「あつ」

ブラックハート「!誰!」

ずっこけかけたところで枝を踏んでしまい、見つかってしまった。

ブラックハート「テイ、ティアナ……あんたまさか……」
ティアナ「あ……その……ごめんなさい」
ティアナが白状すると、ブラックハートはへたれ込んだ。
ブラックハート「見られてしまった……変身後の決め台詞
を言ってるのを見られてしまった。」
ものすごく気まずい。

ティアナ「あ、あの……私、何も見なかったことにします
から」

ブラックハート「……本当？」

ブラックハートは顔を上げる。

ティアナ「はい」

ブラックハート「ありがとう！」

ブラックハートはガシツ！、とティアナの手を握る。

ブラックハート「あ！もうこんな時間。じゃあね」

ブラックハートは、六課の自室へと戻っていった。

ティアナ（……もしかしてノワールさんは……）

ティアナは考えたが、やめておくことにした。

〈薬物注意！〉

イストワール「これをこうして……あとはこれを入れれば……
できました！」

イストワールは、緑色の液体の入った瓶を2つ作った。

神楽「何がアルか？」

すると、神楽・九兵衛・ヴィータがやってきた。
ついでに銀時、新八、ネプテューヌ、ブランもやってきた。

イストワール「あなた方はお身体を気にしているそうなので私が体を大きくする薬を作りました。」

ヴィータ・神楽・九兵衛「マジでか!」

3人は驚く。

ヴィータ「よし!じゃあそら」ウオリヤアアア!!!」つておまえら!」

神楽と九兵衛が、薬を横取りし、飲んだ。

ポポーン!

何と2人は、グラマティックなボディーになった。

神楽「キャツホオーーーーーウ!!!!!!これで私は大人ネ!」

九兵衛「ついに・・・ついに僕は手に入れた!」

2人は大人になった体に興奮している。

ヴィータ「おい!おまえら!せつかくあたしが飲もうとしてたところを!」

ヴィータは2人を睨む。

神楽「フン!世の中は弱肉強食ネ!」

九兵衛「その通りだ」

二人は自慢げに語る。

イストワール「お二人方、うれしいことは分かりますがくれぐれも「イヤツホオーーーーーウ!!!!!!」つて、ああ・・・」
イストワールが何かを説明しかけたが、神楽と九兵衛はどっかへ行ってしまった。

ネプテューヌ「・・・イスン。何言おうとしてたの?」

イストワール「これです」

とって取り出したのは、体が大きくなる薬の使用説明のメモだった。だが、問題は後半の内容だった。

銀時「『なお、使用して24時間過ぎると腹痛および下痢を引き起こしますのでご注意ください』……………」

新八「……銀さん、これって」

銀時「何も言うな」

銀時は自室へと戻っていった。

ヴィータは危なかった、と安心したそうだ。

後日、あの2人がトイレに立て籠もったことは言うまでもない。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「はい。短編集でも始めますよ。さあ今回のアシスタントは、」

イカ娘「番外編からこのイカ娘様がアシスタントするでゲソ！」

銀八「よしいくぞ！ペンネーム『月光閃火』さん。『よお…月光閃火だ。』

しかし…長谷川さんにはベールか…何かこう『優しい父親と、構ってくれて嬉しいけどなかなか素直になれないツンデレ娘』って感じが頭の中に浮かぶな…。

輝刃「確かに…そう思えてならないな。あ…今回は俺から質問だ。」

『女神達に質問だ。リリカルなのは勢と銀魂勢の男性キャラ達の中で「この人となら付き合ってもいいかな」ってキャラは居るか？』

女神組が立ち上がる。

ネプテューヌ「銀さんがいい！」

ノワール「土方かしら」

ブラン「…いない」

ベール「私は桂さんですわ」

銀八「はいありがと。『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

イカ娘「次の質問に行くでゲソ！ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ』あはは…何言ってるんだよ…ピーチ姫は友達で大切な人であ

って恋人じゃないぞ〜後、姫、料理は体を張って作るのは止めとこうな、後、流石に俺は料理されてないのや生きてる動物（動く料理は除く）は食べられないって」 埋め込まれていた物を除いて全て完食

言って置きます。内のマリオは超×100倍鈍感です。他にも鈍感メンバーはたっぷり

フォックス「色々とフラグ立ててるよな…自分の世界にいる女の子やオリキャラの神様や家設定の今はいないマリオの師の奥さん」

ルイージ「兄さんが××料理に慣れてるのよそれだよね…」

スネーク「それにしても…俺達が出るのとかマリオのゲーム出たな…」

ソニック「番外編だったんだな〜」

ネス「しかも何時の間にかミッドチルダに着ていたと言っただね〜」
どうせなら…家のマリオを出して欲しいもんだ。

ルイージ「無理でしょ…」

フォックス「無理だろ…」

ソニック「Hey質問だぜ！『ネプテュー又達は自由に世界行けるならどんな世界に行きたいんだ？』」

ネス「僕からもネプテュー又さん達に質問『真王さんが知ってるア

二メ、漫画、ゲームの中でこれは使ってみたい能力はある？」

フォックス「俺はな…」ネプテューヌ達はスマブラでどんなキャラを使うんだ？」

そんな訳で次回を楽しみにしてます』でゲソ！」

また女神組が立ち上がる。

ネプテューヌ「学園都市がある世界かな？能力は『電撃を操る程度の能力』で、マリオを使うよ。」

ノワール「オリンポスコロシムに行ってみたいわ。後、『瞬時に移動できる程度の能力』にシークが好きだわ」

ブラン「…グリーングリーンズってある？能力は『衝撃を操る程度の能力』でドンキーコングを使うわ」

ベール「たまには幻想郷というところへ行ってみたいですわ。それから『技を駆使する程度の能力』にマルスを使いますわ」

銀八「能力は全員『東方』かよ！！」

イカ娘「私は『水分を操る程度の能力』が欲しいでゲソ！」

銀八「オメーも張り合うな！…ま、そんなわけで」

全員「銀八先生をお楽しみに〜！」

超短編集1（後書き）

真王「いかがでしょうか。さて次回は、万事屋とネプテュー又達に意外な人たちがやってきた。一体彼らは……」

イカ娘「次回『友達を思ってこそ仲間』テイクオフでゲソ！」

（警告）

真王「更新が遅れることがあります。なので温かく見守ってください」

第一回、モンスター解説図鑑

真王「第一回、モンスター解説図鑑のコーナー！」

ワーーーーー！！パチパチパチパチ！

銀時「・・・おい作者。何だこれは」

真王「この章の初めから終わりまで現れたモンスターを紹介するんですよ」

ネプテューヌ「ようは私を襲ったあいつも紹介するんだね」

真王「そういうこと。まずはじめは、こいつだ！」

くアバババンく

第三訓から登場。

ゲーム業界のリンボックスに生息するモンスター。緑色の皮膚と爪のついた触手に大きな口と赤っぽい尻尾が特徴。もとはある勇者が封印したらしいが、解き放たれてしまったらしい。ネプテューヌ達に倒されたが、ダークソウルの力で第3起動ビルに姿を現した。

真王「こんな感じです」

銀八「なるほどねえ」

ノワール「次ね」

〈アバババンチャイルド〉

第三訓から登場。

アバババンから生まれた子供。数の多さに銀時達を苦戦させた。しかし、生みの親が死ぬと同時に、生まれた子供たちも一緒に死ぬうだ。

銀時「あれはうざかったな」

桂「同感だ」

真王「次行くよ」

〈ヘカントケイル〉

第九訓に登場。

ダークソウルから召喚されたモンスター。青いメタリックなボディと金色の爪が特徴。ラストেশヨンの工場に生息している。

ブラックハート「ま、結局ザコだったけど」

銀時「そうかい。次はネプテューヌを襲った奴だな」

アンソウン
「正体不明」

第十一訓に登場。

ネプテューヌに襲いかかった謎の敵。ネプテューヌがダークソウルにふれたときに現れた影のような敵。高杉やマジエコンヌには反応はなかったのに守護女神ハイドには現れたことから、何か関係があるらしいが詳細不明。

真王「物語が進むと正体がわかるかも？」

銀時「そうかい。それじゃあ」

全員「ばいばい」

第一回、モンスター解説図鑑（後書き）

いかがでしょうか。それではまた。

（予告）

ナレーション「ある学生集団が六課に流れ着くようです」

第十四訓：友達を思っでこそ仲間（前書き）

真王「物語は進み、新たな章がスタートしました。そして現れるキ
ヤラはいつたい？」

ネプテューヌ「『リリカル銀魂』始めるよ」

第十四訓：友達を思っでこそ仲間

僕は何が何だか理解できなかった。

それが起こる前まではみんなな修学旅行で楽しくやれると思ってた。けど、僕らの乗ってたバスが道を外れ、横転しかけるときだった。

不思議な光が僕らを包み込んできたような気がした。

アナウンサー「ニュースをお伝えします。先日、地区で横転事故が発生しました。クルマをよける際に横転したと思われませんが、奇怪なことに生徒が行方不明になつてるとの情報があります。なお、行方不明になつてる生徒は直枝 理樹さん、棗 鈴さん、井ノ原 真人さん、宮沢 謙吾さん、神北 小穂さん、三枝 葉留佳さん、能美 クドリヤフカさん、来ヶ谷 唯湖さん、西園 美魚さんと、3年生の棗 恭介さんです」

ネプテューヌ「ん〜、はあ〜気持ち良い朝だな〜」
ネプテューヌは、外で背伸びびして、新鮮な空気を吸っている。
ネプテューヌ「でもなんかこう・・・何か事件が起きたらこの退屈
感も解消できるかな〜」
と、肩を振り回して上を見上げると、

・・・白い渦のようなものがありました。

ネプテューヌ「・・・なにあれ？」

ネプテューヌは、白い渦をじーっと眺めていると、

ドサツ！

何かが落ちてきた。

それは、数人の少年少女だった。

ネプテューヌ「・・・なんだろう？この人たち・・・」

気を失っている彼らを見ると、ある一人の男子が腹部にけがを
していた。

ネプテューヌ「！大変だ！銀さ〜ん！！みんな〜！！！！！！」
！！！！！！

機動六課・医療室

????「・・・あれ?・・・ここは・・・」

温厚な性格で童顔である少年・直枝理樹が目を覚ます。

理樹（確か僕はバスに乗って・・・そう言えば途中で
光が見えた気がしたけどあれは・・・）

理樹が考え込んでいると、

シヤマル「あ！気がつきましたか」

白衣を着たシヤマル、そしてネプテューヌと銀時がやってきた。

ネプテューヌ「よかつた」。大事に至らなくて」

銀時「あたりまえじゃねえの？」

ネプテューヌはホツとして、銀時は普通に答える。

理樹「あの・・・あなた達は・・・」

ネプテューヌ「あ！自己紹介がまだだったね。私はネプテューヌ」

銀時「俺は銀時だ」

シヤマル「私は機動六課の医療士・シヤマルです」

と、それぞれ自己紹介する。

理樹「機動・・・六課？」

理樹は頭をかしげる。するとあっ！、と思いだして

理樹「そうだ！他のみんなは!？」

ガバツ！と起き上がるが、

シヤマル「動いちゃだめです。安静にしてください」

シヤマルに止められた。

理樹「でも僕「うるさいな・・・」ってこの声は」

理樹の隣から聞き覚えのある凜とした声が聞こえた。

????「うるさいぞ理樹。一体何を騒いでる？」

猫の尻尾のような茶色い髪の少女・棗鈴が起き上がった。

理樹「鈴！」

銀時「おっ、おめえも起きたか」

鈴「!!」

鈴は銀時を見るなり、歯を見せて警戒している。

ネプテューヌ「・・・銀さん、嫌がられているよ」

銀時「なにそれ、俺なんか悪いことしたのか？」
銀時はシヨックを受ける。

理樹「すいません。鈴は人見知りが激しい性格ですから・・・」
理樹が説明して銀時を慰める。

鈴「理樹！こんなおっさん天パと話してたらアホになるぞ！」

鈴が銀時に対する文句に、銀時がキレる。

銀時「んだと！このガキ！おっさんは許せるが俺を天パって言いやがって！」

鈴「うるさい！黙れ天パ！」

フカーッ！、と猫の威嚇のように鈴は怒り、両者は一步も譲らないようだ。

????「・・・んだよ鈴。うるさくて眠れねーぞ！」

????「一体何を騒いでるんだ？」

????「やれやれ・・・何をやっておるのやら」

別のベッドで、バンダナを付けた筋肉ムキムキそうな男と白髪で剣道着を着た男と黒のロングヘアの女性が目を覚ました。

理樹「真人！謙吾！来ヶ谷さんも！」

理樹は三人を呼ぶ。

真人「おう！理樹じゃねーか」

謙吾「鈴、お前は何をやってるんだ？」

来ヶ谷「まあいいではないのか」

真人があいさつし、謙吾は鈴に呆れ、来ヶ谷は謙吾をなだめる。

????「う~~~~ん・・・何〜？」

????「むっ、はるちんの面白センサー反応ありか？」

????「わふっ、なんなのですか？」

????「面白いことが起きてますね」

続いて、のほほんとしてセーターを着た少女と紫のかなり変わったツートールの少女と子犬っぽくて蝙蝠の髪飾りを付けた少女と青い髪に赤いヘアバンドの少女も起き上がる。

理樹「小毬さん！葉留佳さん！クド！西園さん！」

鈴「何！小毬ちゃん！」

小毬という名前が出てきて、反応する鈴。

小毬「あつ、鈴ちゃんだ〜」

葉留佳「おやおや、理樹くんもいますよ」

クド「わふっ、皆さん無事ですか」

美魚「私もいますよ」

みんなそろって無事のようだ。

鈴「ところで理樹、ここどこだ？そしてその天パはだれだ？」

銀時「テメツ！また天パって言いやがったな！」

銀時が怒鳴る。

理樹「あはは……この人は銀時さんでここは機動六課の医療室だよ」

理樹は説明する。

真人「んだあ？そりゃ？」

謙吾「なるほどな」

来ヶ谷「ほう」

小毬「銀時さんって言うんだ〜」

葉留佳「医療室！つまりここは病院か」

クド「銀時さんなのですか？」

美魚「はじめまして」

鈴「……………」

それぞれ別々の反応をした。

ネプテューヌ「……ところでシヤマルさん。あの人はどうだった？」

シヤマル「傷もふさがって安静にしているわ」

ネプテューヌ「そうなんだ」

理樹「あの……一体何を話しているんですか？」

理樹は2人の会話が気になった。

シヤマル「実はあなた達を見つけてここまで運んだのはネプテューヌ又ちゃんのおかげなの」

ネプテューヌ「えっへん！と胸を張った。

シヤマル「それでね、あなた達と同じ制服を着た男の子がいて腹部を怪我してたらしくて今治療しているわ」

理樹「僕たちと同じ制服？」

理樹はもう一人の生徒が気になった。

理樹「あの……その人の特徴は分かりますか？」

シヤマル「ええ、オレンジ色の髪で名札に『棗恭介』って書かれてたわ」

理樹・鈴「！！」

理樹と鈴が驚いた顔をした。それだけでなく、真人、謙吾、小毬、葉留佳、来ヶ谷、クド、美魚も驚いていた。

理樹「恭介！？恭介がいるの！？」

鈴「あの馬鹿兄貴がいるのか！？」

2人はシヤマルに聞いた。

シヤマル「え……ええ。でもここじゃなくて別の部屋「誰か俺を呼んだか？」」

男の声が聞こえた。理樹達にとって、懐かしい声が聞こえた。

理樹達「恭介（さん）！！」

恭介「よう」

壁に寄り添っているのは鈴の兄であり、みんなのまとめ役である棗
恭介である。

シヤマル「ちよつとあなた！部屋から出てはいけないって言ったで
しょ！」

と、恭介に叱るが、

恭介「いや、さっきイストワールってやつが俺に薬をくれてもう元
気ハツラツなんだ。ホラ」

そう言っておなかを指差す。傷が完全になくなっていた。

シヤマル「だからって勝手に部屋を出てはいけませ」大丈夫ですよ。
私が保証しますから」・・・イストワールさん」

扉からイストワールが現れて、シヤマルを制する。

理樹「え？女の子？」

鈴「理樹！こいつ浮いてるぞ！」

子毬「わあ、妖精さんだ」

クド「わふっ！かわいいです」

来ヶ谷（クドリヤフカ君もかわいいんだがな）

理樹達はイストワールを見て反応する。

ネプテユーン「ところで、理樹君達はどんな関係なの？」

恭介「俺達か？」

恭介がニイツ、と笑ってこう言い放つ。

恭介「悪を成敗する正義の味方」リトルバスターズ」さ」

恭介率いるリトルバスターズは、万事屋組、ネプテューヌ組、六課組と楽しく話し合っていた。

恭介「でだ、そこからこう進み、そしてバンっ、と登場してポーズを決めるとかつこいいだろ？」

ネプテューヌ「へえ〜。なるほど」

恭介は何かの講座をネプテューヌに話している。
陰でノワールがメモを取っている。

ブラン「……………」

美魚「……………」

ブランと美魚は本を読んでいる。

小毬「ガペペ……これしょっぱいよ」

神楽「当たり前前。酢昆布はしょっぱいからこそ美味しいんだヨ
神楽と小毬は酢昆布を食べてるが、しょっぱいらしい。

銀時「ドヘッ！」

葉留佳「や〜い、引っ掛かってやんの〜」

銀時「テメツ、待ちやがれこのクソガキ〜!!」

ビー玉で転がされた銀時は、葉留佳を追いかける。

来ヶ谷「……………」

キャロ「あ…あの、私に何か用ですか？」

来ヶ谷「何でもない、気にするな（かわいいな……）」

来ヶ谷はキャロを見て、心の中で妄想している。

クド「エリオさんは強いのですか？すとろんぐぼ〜いなのです！」
エリオ「クドリヤフカさん。それってStrong boyでしょ

うか」

クド「わふっ！そうなのでした」

クドの間違いを、エリオが訂正させた。

桂「謙吾殿、そばを食べてみるか？」

謙吾「いただくでしょう」

ベール「でしたらわたしも」

桂・謙吾・ベールはそばを食べ始めた。

真人「298・・・299・・・300！よし！さらに筋肉に磨きがかかったぜ」

鈴「唯キシヨイだけじゃないかボケー！！！！！」

真人「グプア！！」

月詠「・・・なかなかの蹴りじゃな」

鈴と真人のやり取りを、月詠は眺めていた。

新八「なんか・・・すごい馴染んでませんか？」

理樹「ごめん・・・これが日常だったりするんだよ」

新八「ですよね」

新八と理樹は半ばあきらめたような気分である。

はやて「みんな仲ようやつとるか？」

はやてがやって来た。

フェイト「どうだった？はやて」

フェイトの問いにははやては「・・・首を振った。」

はやて「理樹君達の住んでた町と学校がどこにもなかったそうや」

理樹達「ええ！？」

理樹達は驚いた。

イストワール「・・・でしたら彼らは別次元の地球から来たという

ことになりますね」

イストワールが説明するが理樹達は分からないらしい。

恭介「簡単に言うとな、俺達の住んでた地球とは別の場所、つまりパラレルワールドってことさ」

恭介が補足して、みんな納得したようだ。

理樹「でもこれからどうしようか」

理樹達リトルバスターズがうーんと考えていると、

ネプテューヌ「だったらここに住んでみる？」

ネプテューヌがこんな提案をした。

理樹「え？でも皆さんに悪いよ・・・」

銀時「俺は別にかまわねえぜ」

銀時は、葉留佳をしめながら賛成している。

なのは「私もオーケーだよ」

桂「うむ、おれもだ」

エリザベス『わたしも』

神楽「私も賛成ヨ」

スバル「あつわたしも」

ティアナ「私もいいわよ」

ノワール「こっちもね」

ブラン「別にいい」

ベール「私もですわ」

すでにほとんどが賛成した。

銀時「はい、というわけで今日からおめえらはここに住むことになりましたっ」と

若干適当なことを言う銀時。

理樹「ほ、本当にいいんですか？みんなは」

理樹はメンバーに聞くと、

鈴「あたしは理樹と一緒にがいい」

真人「帰れねえんならここに住めばいいんじゃないか？」

謙吾「それしかないしな」

小毬「私は何でもいいよ」

葉留佳「遠慮なく住みますヨ」

クド「皆さんは親切なのです。だからここに住むです」

来ヶ谷「うむ、私も異論はない」

美魚「私もOKですよ」

恭介「どうやら全員決まったようだぞ。理樹はどうする？」

恭介が理樹に聞く。

そして理樹は決めた。これは理樹達の、

理樹「わかりました。よろしくお願いします」

リトルバスターズの新たな道なのだから。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!！」

銀八「は〜い。もうすでにレギュラーになりましたこのコーナー。さあ今回のアシスタントは、」

ネプテューヌ「また参上!ネプテューヌだよ」

銀八「いくぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『…バカテス?」

ルイーダ「何いきなり言ってるの?」

いや…学生集団と聞いてね…

スネーク「他にもあるだろ学生集団がある作品は…」

フォックス「だよな…それにしてもネプテューヌが『とある〜シリーズ』の学園都市でノワールがデイズニーシリーズのヘラクレスの舞台…と言うかキングダムハーツか?…その1つか」

カービィ「それでブランちゃんは僕の所だね」

リュウケンドー（ソラ）「んでベールは霊夢達のいる東方だね」

撃龍剣「しかし…神楽や九兵衛は悲惨だな…」

マルス「ただで得する事はあんまりないって事だね…まあ…ドクターのならデメリットなしの薬を作れちゃうけど…と言うかもうあるね」

ドクター「いきなりだね…と言うか私の作った胸が大きくなる薬は

子供がいる女性用のだからね。」

マリオ「と言う訳でネプテューヌ達に質問『女神姿にネプテューヌ達は変身出来るけどもし真王の知ってる真王さんが知ってるアニメ、漫画、ゲームの中にある変身ヒーロー&ヒロイン系でなるならどんな奴になる?』」

ネス「僕は皆に質問『真王さんが知ってるアニメ、漫画、ゲームの中でこれは着て見たいキャラの服ってある?ちなみに自分とこの服以外で答えてね』」

ソニック「俺は作者である真王に質問『もしかしてネプテューヌ達のパワーアップも考えてるか?』ちなみに前俺が聞いたリインフォースとのユニゾン以外のな」

そんな訳で次回を楽しみにしてます

ルイージ「流石に今回は兄さんに向けての料理はこなかったね」

スネーク「と言うか毎回俺達が被害に遭いそうな料理は来て欲しくないぞ……」
「……気にしてんのかよ」

ネプテューヌ「そうだね……あ、最初の質問はね、わたしはプリキュアかな?」

ノワール「私は仮面ライダーディケイドよ!!」

ブラン「……魔法少女リリカルブラン」
「……フッフ」

ベール「私は特にありませんわ」

銀八「はいありがと。次の質問」

全員が立ち上がる。

銀時「『ドラゴンボール』の孫悟空の恰好がいいな」

新八「僕は特にありません」

神楽「『東方』のメイリンの服が着たいネ」

桂「『黒執事』の執事服だ」

エリザベス「『プリニースーツ』はないでしょうか？」

月詠「わっちは忍者じゃから『デイスガイア』のクノイチの恰好を試してみたいもんじゃ」

九兵衛「僕は………駄目だ、出てこない」

なのは「私は『マリオシリーズ』のピーチ姫のドレスが着てみたかったんだ」

フェイト「私はゼルダのドレスかな？」

はやて「うちは『うみねこの鳴く頃に』のベアトリーチエのドレスや」

シグナム「私はアイクの戦士服だ」

ヴィータ「一度でいいから『ディスガイア』のラズベリルってやつ
の服を着てみようかな」

シャマル「私は『うたわれるもの』のエルルウの服かしら」

ザフィーラ「私は必要ない」

スバル「『ディスガイア』のアデルさんの恰好を試みたいですよ！」

ティアナ「私はなぜか『ひぐらしの鳴く頃に』のレナの私服が着た
いって思ったわ」

エリオ「僕は『NEEDLESS』のクルスさんの服です」

キャロ「私は『WORKING!』のぼらさんのセーラー服が着
てみたいです」

ネプテューヌ「私は『マリオシリーズ』のマリオがいい！」

ノワール「『ファイナルファンタジー』のクラウドって人の恰好を
してみようかしら」

ブラン「・・・『ゼロの使い魔』の魔法服」

ベール「私は『ワンピース』のハンコックさんの服ですわ」

真王「そして最後の質問ですがそうなる可能性がありますよ」

銀八「はい。そんなわけで、『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさ
い」

真王「『鳴神ソラ』のこのマリオさん。そんなあなたにメタルケーキとメロンケーキをプレゼントします」

銀八「まてまて！明らかに悪意がありそうな料理じゃねーか！！」

真王「失敬な！メタルケーキは『クラナド』の早苗さんのパンの材料から抜き取って加工しただけのものだぞ」

銀八「思いつきり駄目じゃねーか！！それとメロンケーキってなんだよ！！？」

真王「中に夢魔が10体入ってるんですよ。しかも最強レベルの」

銀八「危険な予感しかねー！！！！！！」

真王「あと言い忘れてたがメタルケーキの中に丸くてすごく硬い犬さんが隠れております」

銀八「作者——————！！！！お前『鳴神ソラ』さんに恨みでもあんのか！？」

真王「違うよ。そのマリオさんには『これは無理だわ』というリアクションをしてくれなきゃ面白くないと思って」

銀八「あつそ。あいつの苦しみそうな顔が見てみたいもんだ」

真王「さらに追加で言うがメタルケーキの中の犬は無敵アイテムでも効かない体質らしくて、アナゴさんは10匹飼ってたそうだ。それにもしその犬を傷つけたらアナゴさんが魔王化してくるそうだ」

銀八「マリオさー……………ん……………!!…!!…!!逃げて
……………!!…!!…!!世界が壊れる……………!!
……………!!…!!…!!」

真王「これは追加しますがマリオ以外に被害が出ないようにしまし
た。なので安心してください」

第十四訓：友達を思ってこそ仲間（後書き）

真王「何とリトルバスターズが参戦！この先どうなることやら…。
次回は六課に居候することになった理樹達。しかし何もやることも
ないので理樹達はあることをしようとする」

理樹「次回『借りができたら返すのが礼儀』 テイクオフだよ」

第十五訓：借りができたら返すのが礼儀（前書き）

真王「リトバス編の第二話目。理樹達はどつするのやら」

理樹「・・・『リリカル銀魂』始まるよ」

第十五訓：借りができたら返すのが礼儀

銀時やなのはさん達の許しにより、六課に住むことになったリトルバスターズのメンバー達。

そのメンバー達は今、

理樹達「…暇だ」

退屈な状況であった。

理樹「せっかくここに住むことになったんだけど・・・何も無いのはちょっとね・・・」

理樹はこの状況をどうするか考えている。

恭介「ここに住むことになったんだ。遊んだ方がいいんじゃないのか」

恭介が提案する。

理樹「いや、遊ぶって・・・」

恭介「もちろん、ただ遊ぶだけじゃないぞ」

鈴「なんだそれは。もったいぶらず話せ」

そして恭介はこう答えた。

恭介「六課のみんなの手伝いだ」

シヤマル「ごめんね～。手伝ってくれて」

理樹「いえ、別にいいですよ」

恭介の提案により、理樹達・リトルバスターズは六課の手伝いをす

ることになった。

今理樹は、シャマルの医療道具を運んでいる。

真人「ったく、何でおれがこんなもんを・・・」

謙吾「我慢しろ。これも少しの恩返しみたいなものだ」

後ろにいる真人と謙吾も手伝いをしているが、理樹の持つてるものよりも重いようだ。

恭介「お？理樹か」

理樹「あ！恭介」

理樹と真人と謙吾の反対側からやって来たのは、大量の紙を運んでいる恭介とクドと小毬と来ヶ谷だった。

小毬「これ重いよ〜」

クド「わふ〜：べり〜へび〜なのです・・・」

来ヶ谷「しっかりするんだ二人とも（苦痛の表情を浮かべるのもかわいい〜）」

理樹「2人とも大丈夫：〜ところで恭介、それは？」

恭介「部隊長さんの始末書さ」

ああ…なるほど、と理樹は納得する。

ちなみに鈴はさぼり、美魚は体力がないので休んでおり、葉留佳は、

ガシャーーーーーン！！

銀時「テメツ！待ちやがれこのクソガキー！！」

葉留佳「あはは〜。ここまでおいで〜」

サボるどころか迷惑をかけていた。

理樹「……………」

理樹はこの先大丈夫なんだろうかと不安になった。

銀時「あれ？そのお菓子どうしたんだ」

小毬「えへへ。実はこれ自作なんだ」

銀時「え？マジ！」

自作と聞いて、銀時は驚く。

銀時「・・・ところで、お前らの日常ってこんな感じか？」

銀時がまわりの雰囲気のことを問う。

小毬「いつもってわけじゃないけどそうなんだよ」

銀時「そうか」

小毬の答えに銀時は少し笑った。

機動六課・訓練場付近

銀時が、暇なのでそこら辺を散歩していると、

ガアンツ！！

銀時「イテツ！！」

何かが頭に当たった。

銀時「いててて・・・なんだこれ？」

銀時は、地面に落ちてる野球ボールを拾った。

恭介「おゝい！そのボールをこっちに渡してくれ！」

訓練場から恭介が走りながらながら銀時を呼んでいる。

彼の左手にグローブがはめられていた。

銀時「・・・なにやってんの？おまえら」

恭介「何って、野球をやってるんだよ」

ネプテューヌ「なにになに」。私も混ぜてくれな〜い」

野球をやっていることに、ネプテューヌが参加したいと乗り出す。

恭介「いいぜ。何時でも大歓迎だ」

ネプテューヌ「わ〜い！みんなにも話してこよ〜！」

そう言つて、六課へ戻っていく。

恭介「あんたもどうだ？」

恭介が銀時を誘う。

銀時「・・・しゃーねーな」

銀時も参加することにした。

ネプテューヌ「でやっ〜！」

スカッ！バン！

謙吾「ストライク！バッターアウト！」

銀時達は恭介の野球に参加することにした。現在、ネプテューヌは空振り三振をした。

ノワール「だらしないわね、ネプテューヌ」

ノワールのきつい指摘に、ネプテューヌはシュンツとなる。

銀時「ま、次にがんばらばいいじゃねーか」

そんなネプテューヌを、銀時が励ます。

ネプテューヌ「銀さん」

ネプテューヌは、少し元気が出た。

銀時「あゝ、疲れた」

ネプテューヌ「あゝ、楽しかった」

銀時は肩を回し、ネプテューヌはご機嫌である。

恭介「そいつはよかったな」

理樹「ネプテューヌさん、機嫌いいね」

鈴「まるで子供だな」

理樹達リトルバスターズはとても楽しかったそうだ。

すると、

ネプテューヌ「ねえ…あれ何？」

空を指差し、指差した方向を見ると………白い渦がありました。

理樹「あれって確かバスの時の」

九兵衛「そうだ！、僕はあれに飲み込まれてここに来たんだ」

九兵衛の言葉に、銀時達が驚く。

そして渦から5つの物体が落ちてきました。

鈴「な、何だこのキシヨイのは？」

鈴が身構える。落ちてきたのは、緑色でペラペラな板のようなものが四枚ある体のモンスター・ヒンニャー4体と、オレンジ色で頭にとげの付いた亜種らしきモンスター・ハンニャーだった。

IBGM：バトルbyペーパーマリオRPG

(Paper Mario：The Thousand Year
r Door Music Extended - Battle

Theme)

ネプテューヌ「こいつらまさか!」

イストワール「いえ!このモンスターたちは、別次元の世界のモンスターです!」

別世界のモンスター・ヒンニヤーとハンニヤーを見て違つという。

真人「何だ?このペラッペラな奴は」

理樹「ちょ、真人!」

真人はふいに近づく。

一匹のヒンニヤーが、真人に攻撃してきた。

真人「どわっ!」

理樹達「真人!」

こつげきをつけたまさとはたおれ、理樹達がかけよる。

真人「いててて・・・にやる!やってくれたな!」

真人は怒る。するとまたヒンニヤーが攻撃してきた。

真人「くらえ!こんにやる!」

ドゴツ!!

真人の拳がヒンニヤーに直撃。打ちどころが悪いせいか、ヒンニヤーがたおれた。

真人「へへっ、どうだ参ったか!」

ネプテューヌ「うわ、真人って強いんだね」

真人の強さにネプテューヌが感心すると、

一斉に3匹のヒンニヤーが襲いかかった。

来ヶ谷「フッ、一匹は任せろ」

来ヶ谷はそう言って、1匹にヒンニヤーを、

来ヶ谷「ハアツー!!」

刀で切り倒した。ちなみに刀は偽物です。

謙吾「マーーーーーン!!!」

謙吾は、1匹のヒンニヤーを木刀でタタツ切る。

鈴「邪魔じゃどけーーーーー!!!」

鈴はハイキックでヒンニヤーを撃沈させた。

ネプテューヌ「……………すげえ」

ネプテューヌは啞然とし、銀時達も驚いている。

恭介「すごいだろ、あいつらは」

恭介はなぜか誇らしげに言う。

すると理樹が、

理樹「!危ない!」

ネプテューヌ「キャツ!」

突然ネプテューヌ抱きついたと思ったら、

ドガッ!

理樹「うあっ!」

何と隙を突いて襲いかかるハンニヤーからかばったのだ。

銀時・恭介「なっ!」

来ヶ谷・謙吾・真人「っ!?!」

鈴「理樹!?!」

銀時達とリトバス組は驚く。

銀時「こんのやる!!!」

銀時はハンニヤーを攻撃し、ハンニヤーは倒れた。

恭介「理樹！しつかりしろ！」

恭介は理樹を抱え、リトバス組は理樹にかけよる。

理樹「いっつつ．．．．．」

ネプテューヌ「大丈夫？理樹君」

理樹「．．．よかった。無事なんだね」

理樹は自分よりもネプテューヌを心配する。

銀時「まったく、無茶しやがるぜ」

銀時は皮肉なことを言うが、

銀時「けど、ネプテューヌを助けたんだ。許してやるよ」

ネプテューヌ「ありがとう。理樹君」

銀時とネプテューヌはお礼を言った。

理樹「．．．．．どういたしまして」

恭介達が理樹を医療室へ連れて行ってる頃、イストワールは考え事をしていた。

イストワール（今のモンスターは別次元の世界のモンスター．．．
いっちなにが起こったのでしょうか？）

そう考えるが、その答えを導けることはなかった。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

銀八「はーい。今回のアシスタントは」

理樹「こんにちは。直枝理樹です」

銀八「そんじゃいくぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ』よーしよしよし、良い子だなー」 犬を手懐けて後ろにはぷすぷすとこげてる夢魔10体が積み重なっていた。なお、ケーキは全て完食

ルイージ「流石兄さん……」

スネーク「俺達の中で一番強くて自分に悪意あるチートを無効化するからな……」

フォックス「それにしても……リトルバスターズのキャラが加わったな……作者少しか知らないがどうなるのやら……」

だね……けれど、何か起きそうだね……

ネス「確かに」

リュカ「どうなるかな？」

マリオ「よし、真王に突撃」

犬「わうっ」

ルイージ「あつ、あっち行ったよ…」

スネーク「そんな訳でそっちのメンバーに質問『家のリーダーを見てどう思った？素直な感想を頼む』」

カービィ「はいはい僕からも皆に質問！『スマブラメンバー（DXでのキャラも含む）でコンビ組むなら誰と組む？』」

リュウケンドー「俺からも質問『真王が知ってるアニメ、漫画、ゲームの中でこれは使って見たい武器はあるか？勿論自分のところ以外のを頼むぜ』」

そんな訳で次回を楽しみにしています

マリオ「後、ちゃんと食べれるのを頼むぜ、もし食べれないのや生きている奴を入れたらマリオファイナルだからな」『』

リトバス組が立ち上がる。

リトバス組「・・・あんたほんとに人間？」

銀八「俺もそう思う。二つ目と三つ目の質問は」

理樹「僕はヨッシーかな？あと、ホームランバットがなんか馴染む

うわあああああああ』と怒りの形相であなたのとこへ向かって
行きましたよ?」

銀八「でもよ。あいつ確かチート無効化があるんだろ?無理じゃ
ね?」

真王「噂だけどアナゴさんは新技を身につけたらしいよ。『チート
なんぞ消してんじゃねえ!!』っと言うカウンター技で問答無用で
殴ることができるそうだ」

銀八「……………あいつ死んだな……………(合掌)」

第十五訓：借りができたら返すのが礼儀（後書き）

真王「今回はネプテューヌがもつと変わった遊びがしたいと言い出す。そして恭介は、ある遊びを提案した」

恭介「次回『地味なものでも立派な武器になるゲームがある』『ミッションスタートだ！』」

第十六訓：地味なものでも立派な武器になるゲームがある（前書き）

真王「今回は『リトルバスターズ！』に欠かせないあのゲームが始まります！」

クド「わふっ！『リリカル銀魂』始まるなのれひゅ……あううゝ」

真王「あらら……噛んじゃったか……」

第十六訓：地味なものでも立派な武器になるゲームがある

リトルバスターズが六課に住んで五日がたった。

ネプテューヌ「ねえ。なんか面白いのない？」

ネプテューヌが何か面白いことがしたいと言いだした。

理樹「え？面白い事って言われても」

理樹は対応に困っている。

ネプテューヌ「たまには野球以外でもやりたいことないの？」
すると恭介が何かをひらめいたようだ。

恭介「面白い事なら俺に任せろ」

そう言つて、部屋から出て行った。

ネプテューヌ「一体何の準備をしてんのかな？」

ネプテューヌがそう考えていると、恭介が戻ってきた。

恭介「ネプテューヌ、ちよつと外へ出てくれ」

機動六課・入り口付近

そこにはたくさんの人だかりがいた。

その中心には真人とネプテューヌがいた。

ネプテューヌ「・・・これから何が始まるの？」

ネプテューヌが聞くと、

恭介「まだ特別ゲストが来てないから待て」と、待ったをかける。すると、

フエイト「ちよつとちよつと！これはいったい何！？」

銀時「一体何の騒ぎだ？」

フエイト達六課組と、銀時達万事屋組が来た。

恭介「お！来たな」

なのは「来たな、じゃないですよ！一体何をしようとしてるんですか！」

なのはが恭介に怒鳴るが、恭介は怯まず、

恭介「まあまあ。まず説明を聞いてくれ」

恭介は咳払いをする。

恭介「よし！今から真人とネプテューヌのランキングバトルを開始する！」

銀時達「ランキングバトル？」

恭介が言ったことに、銀時達は首をかしげる。

恭介「ルールは簡単だ。これから周りにいる観衆から武器になりそうな物を投げてもらう。お前達はその中から好きな道具を一つ選び、そしてそれを使って敵を倒す……ただし、直接相手の身体を自らの拳で殴るとかの行為は禁止だからな？」

さらに、と恭介は付け加える。

恭介「負けた者は勝った奴から称号をつけられる。後、女性はハンデとして落ちた物を拾っていいぞ」

恭介の説明は終わる。

真人「へっ俺が勝つてお前に恥ずかしい称号を付けてやるぜ！」

ネプテューヌ「それはこっちのセリフだよ！」

真人「よしおめえら！武器よこせ！」

真人の声に、野次馬たちは武器になるものをいつせいに投げ込まれた。

ネプテューヌ「よし！……これだ！」

ネプテューヌが投げ込まれた武器から選んだのは、

ネプテューヌ「……ハリセン？」

お笑いなどでよくあるハリセンだった。

一方、真人は、

真人「またこんなしょぼいのかよ……」

割り箸を持っていた。

真人「まあいいや。コッペパンよりかはちょうどいい。これで勝負だ！」

コンパ「コッペパンで戦ってたんですか!？」

コンパが違う意味で驚く。

恭介「……なにがともあれ、バトルスタートだ！」

恭介の合図とともに、火ぶたが切って落とされた。

スイーツ大好き小学生

ネプテューヌ

V S

憎めない筋肉マン

井ノ原真人

ネプテューヌ「何さ！小学生って！」

新八「ネプテューヌちゃん、誰に言ってるの？」

ネプテューヌ「私からいくよ〜〜!」

ネプテューヌの攻撃。

ネプテューヌ「なんでやねん!」

真人に突っ込んだ。

真人「ぐはっ!」

真人に100のダメージ!

はやて「なんかあんまピンとこーへんな〜」

真人「今度はこっちから行くぜ!」

真人の攻撃。

割り箸で頬をつまんだ。

ネプテューヌ「いたっ!」

ネプテューヌに80のダメージ!

銀時「つーかやってること地味じゃね?」

恭介「こっから先が面白いんだよ」

ネプテューヌ「いくよ!」

ネプテューヌの攻撃。

ネプテューヌ「アホか!」

真人に突っ込んだ。

真人「ドオウ!」

真人に200のダメージ!

はやて「・・・少しキレがつかめてきたんか?」

真人「くらえ！」

真人の攻撃。

割り箸で鼻をつまんだ。

ネプテューヌ「ふがつ！」

ネプテューヌに200のダメージ！

ノワール「鼻をつまむって…！」

ネプテューヌ「なんの！」

ネプテューヌの攻撃。

ネプテューヌ「お前の血は何色だ！！！」

真人に突っ込んだ。

真人「ぐわああ！！！」

クリティカルヒット！

真人に1000のダメージ！

新八「どんどんキレが良くなってますね・・・」

真人「負けるか！」

真人の攻撃。

ネプテューヌ「おっと！」

ミス！

ネプテューヌはハリセンで防いだ。

ティアナ「ガードもありなのね」

ネプテューヌ「これでとどめ！」

ネプテューヌの攻撃。

真人「ぐわつ！」

真人に300のダメージ！

恭介の指摘に、シグナムをしぶしぶ従う。

ノワール「それじゃ、みんな！武器頂戴！」

シグナム「私のもだ！」

野次馬たちは武器になるものをいっせいに投げ込まれた。

シグナムが手にしたのは、

シグナム「く…黒ひげ…だと…」

樽にナイフを刺して、中にいる黒髭のおっさんを出してしまった人の負けという、よくパーティーかなんかで使われるようなおもちゃであった。

そしてその武器は…シグナムにとってはまったく役にたたないような武器でもあった

ノワール「私のは…」

ノワールが手にした武器は…威力が強い方の部類に入る水鉄砲だった。

しかも、満タン。

変えタンク付き（もちろんこちらも満タン）。

シグナム「一応聞いておくが、これは本来通りの方法でしか使ってはいけないのか？」

シグナムが、もう一度恭介に確認をとる。

恭介は笑顔を崩さず、むしろ面白そうな表情を見せて、こう言った。
恭介「もちろん！黒髭危機一髪なら、ナイフを刺して中にいるおっさんを飛ばさないといけない」

シグナム「…変な武器を手にしてしまったか…」

恭介「何がともあれ…バトルスタート！」

シヨックを受けるシグナムを無視して、恭介は戦闘開始の合図を告げた

夢見る歌姫

ノワール

V S

荒ぶる戦闘狂

シグナム

ノワール「何この恥ずかしい称号!!?!?」
シグナム「私は荒ぶれてなどない!!!」

シグナム「まずは私だ」

シグナムの攻撃。

シグナムは樽に剣を一本さした。

しかしおっさんは飛び出さない!

桂「運との勝負だな」

ノワール「今度は私よ」

ノワールの攻撃。

ノワールは引き金を引き、水鉄砲を放った。

シグナム「冷たっ!そして痛っ!」

シグナムに300のダメージ!

スバル「水鉄砲っていたいの?」

シグナム「こちらの番だ！」

シグナムの攻撃。

シグナムは樽に二本の剣をさした。
しかしおっさんは飛び出さない！

エリザベス『2本さしたのに・・・』

ノワール「これ弾こめなきゃいけないの？」

ノワールは水鉄砲の準備をしている。

コンパ「隙ができてるです〜！」

シグナム「いまだ！」

シグナムの攻撃。

シグナムは樽に三本の剣をさした。
しかしおっさんは飛び出さない！

銀時「またハズレかよ・・・」

シグナム「ぬあああああああああ！！！！！！！！！！」

ノワール「自分に不運に呪いなさい」

ノワールの攻撃。

ノワールは水鉄砲を二回撃った！

シグナム「ぐっ！がっ！」

シグナムに300のダメージ！

シグナムに400のダメージ！

ブラン「二度撃ちってありなの？」

シグナム「これで・・・どうだ！」

シグナムの攻撃。

シグナムは樽に剣を二本さした。

勢いよくおっさんが飛び出した！

ノワール「ちっ！」

ノワールに500のダメージ！

真人「やっときたぜ」

ノワール「もう一回詰め直さないと・・・」

ノワールは水鉄砲の準備をしている。

シグナム「これは取りに行かないと次の攻撃ができないのか!？」

シグナムは転がっていったおっさんを回収し、樽にセットした。

ノワール「もう終わりよ」

ノワールの攻撃。

ノワールは水鉄砲を二回撃った！

シグナム「っ！ぐっ！」

シグナムに300のダメージ！

シグナムに400のダメージ！

シグナム「馬鹿な・・・この私が・・・」

シグナムは倒れた。

ノワール「なかなかの相手だったわよ」

ノワール、WIN!!

ノワール「さ、あなたにこの称号を与えるわ」

小さな小説家
ブラン

VS

狸部隊長
八神はやて

ブラン「小さいは余計・・・」
はやて「誰が狸や!!」

はやて「まずはうちや」
はやての攻撃。
ブラン「っ!!」
ブランに150のダメージ!

フェイト「あれ?割と普通だね」

ブラン「いく・・・」
ブランの攻撃。
はやて「無駄や」
ミス!

はやてはハリセンでガードした。

なのは「負けてないね、はやてちゃん」

はやて「こんどはうちや」

はやての攻撃。

ブラン「いた！」

ブランに200のダメージ！

はやて「少しコツをつかんだで〜」

はやてはハリセンの使い方のレベルが上がった。

桂「コツをつかむと戦況が変わるのか」

ブラン「きいて」

ブランの攻撃。

はやて「いたっ！」

はやてに300のダメージ！

ブラン「・・・そういうことね」

ブランはピコピコハンマーの使い方のレベルが上がった。

ネプテューヌ「ブランも負けてないよ」

はやて「みてみい、うちの攻撃を」

はやての攻撃。

はやて「なにやっとなねんな〜！！！！」

ブランに突っ込んだ。

ブラン「ぐう！きやう！」

クリティカルヒット！

ブランに800のダメージ！

ブランに800のダメージ！

ブラン「覚えてるよ・・・」

ブランは倒れた。

はやて「うちの圧勝や〜」

はやて、WIN！！

はやて「そんじゃ、ブランちゃんはこれをつけようか」

ブランは、『エターナルロリータ』の称号を手に入れた。

ブラン「~~~~~!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ブランは顔を真っ赤に染めて、

ブラン「死にやがれ!このぼけ狸が~~~~~!!!!!!」

!!!!!!!(怒)「」

はやて「ぎゃああああああああああああ!!!!!!!!!!!!」

!!!!!!」

はやてをハンマーで殴り飛ばした。

端っここで、ヴィータは泣きながら親指を立てた。

銀時達が押さえ、元に戻るまで数時間かかったそうだ。

くおまけ

銀八「教えて!」

全員「銀八先生!!」

銀八「はい。今回のアシスタントは」

恭介「よう。この恭介さまがアシストするぜ」

銀八「んじゃいくぞ!ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ』これをどうぞ」

アナゴ「あっ、どうもすみません」

ルイージ「…普通に和んでるよ」

スネーク「『正気に戻れ!』と叫んだ後にハリセンで一閃したら普通のアナゴに戻ったな…」

マリオ「それにしても…なぜ俺が戦った敵があそこに…(ずずず)」

アナゴ「おかしいですね(ずずず)」

ルイージ「ちなみに兄さんは常識離れな事をしてますが人間です」

マリオ「あっちに行きたいが…俺が行けるかどうか分からんしな…」

ルイージ「ネプテューヌさん達や銀さん達に質問『家の兄さんを四字熟語で表現するならどんな感じ?』」

スネーク「リトバスのメンバーに質問だ『銀時達を初めて見た際はと言う印象だった?』」

フォックス「真王に質問『もしかしてリトバスメンバーもレギュラーに入るのか？それとも今の章だけか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます

ネス「どうなるのやら…」

全員が立ち上がる。

全員「・・・奇奇怪怪？」

銀八「そう思うよね・・・んじゃ次の質問」

リトバス組が立ち上がる。

理樹「まず銀時さんだけど、いつもだらけてた人だったね」

鈴「あの眼鏡は存在が薄いのか？」

小毬「神楽ちゃんはやちょっとあれだけどいい子だったな」

来ヶ谷「桂氏は面白い方だな」

クド「エリザベスさんは私と同じマスコットの匂いがするです」

美魚「月詠さんは顔に傷がありますがいい人でした」

理樹「なのはさんは優しそうな方でしたよ」

クド「フェイトさんも親切でした。でも少し私に対して過保護性があるのは気のせいでしょうか？」

恭介「はやては面白そうな奴だな」

謙吾「シグナムは修羅を乗り越えた者って感じがしたな」

小毬「ヴィータちゃんをあまのじゃくだけど可愛かったな」

理樹「シャマルさんは厳しいけど優しい医療士さんでした」

クド「ザフィーラさんがしゃべるオオカミとは驚きましたです！」

真人「俺の筋肉が叫んでるぜ！スバルは強い奴だったな」

葉留佳「ティアちゃんはツンツンだったね」

来ヶ谷「エリオ少年とキャロ君はかわいかったな（キュンキュン）
／／／／／」

理樹「ネプテューヌは元気な子だったね」

鈴「あたしには生意気なガキにしか見えん」

小毬「ノワールちゃんはティアちゃんみたいにかわいかったな」

美魚「ブランさんは静かな方でしたね」

クド「ベールさんは大きい人なのです！（違う意味で）」

第十六訓：地味なものでも立派な武器になるゲームがある（後書き）

真王「次回は、銀時がグラナガンで散歩しに行った。が、銀時はト
ラブルに巻き込まれるのであった」

鈴「・・・次回『狙われた子供はほっとけない』テイクオフだ」

（予告）

ナレーション「生体ポットを積んだトラックが横転事故を起こした
模様です」

第十七訓：狙われた子供はほっとけない

今日は機動六課の休日。

銀時「さくて、どうしよつかなく」

銀時は、グラナガンの街の中で散歩している。

グラナガンに来る前は、なのは達がじゃんけんで勝負していたが、銀時がこっそりと抜け出して現在の状況にある。

ちなみにネプテューヌ達は、銀時とは別のところにおり、恭介はどこかで遊んでいる。

銀時がいろいろとまわっていると、

ズルズルズル・・・

何か物音が聞こえた。

銀時「ん？」

銀時は物音が聞こえた方を見た。

不審に思い、物音が聞こえた所へ向かった。人気のない路地裏に入った。

そこで銀時は、以外なモノを目にした。

小さな少女がいた。ボロボロの服を着ていて、左腕には鎖が巻かれていた。その鎖の先には、二つの黒いケースが繋がれていた。

銀時「オ…オイ！」

銀時は少女に駆け寄った。

そつと少女の肩に手を乗せる。

少女は顔を上げて、銀時を見た。

????「…だ…れ…？」

首を傾げながら、銀時に尋ねた。

銀時は改めて少女の状態を見た。

ボロボロの服に鎖に繋がれた二つのケース。

どう見ても普通ではない。銀時は厄介事の危険を察した。確か元の世界でも、同じような事があつたような。

そう、勘七郎の事件である。あの時は万事屋の前に、勘七郎という赤ん坊が置かれてあつて、橋田屋の後継ぎ騒動に銀時は巻き込まれたのだ。

しかもその赤ん坊が、やけに俺に似てたんだよな。それで俺の隠し子疑惑が浮上しちまって酷い目にあ……。そこまで考えた銀時は、思考を止めた。

ちよつと待て。もしこんな所をフェイト達に目撃されたら……。

そう思つた瞬間、銀時は冷汗を流した。

銀時「お……俺は殺される!!」

ガタガタ体を震わせる。

アイツらきつと、俺を幼女誘拐犯とかと勘違いするに違いない。いや、前回と同じく隠し子だと勘違いされる可能性もある。そうなつたら間違いなく、俺は殺される。

銀時は顔を歪ませ、冷汗を流し続ける。

少女は、不思議そうに銀時の顔を見ている。

銀時は緊張して、唾をゴクリと飲み込んだ。

落ち着け、俺。

そつだ、親を探せ。

この迷子少女の親を探して見つければ、全て解決だ。

そう決意して、銀時は少女に笑いかけた。

銀時「なアお嬢ちゃん。パパ、ママって呼んでみ」

少女「パ…パ。マ…マ？」

少女が、銀時の言った言葉を口にした。すると、路地裏の入口に何かが現れた。

銀時は顔を上げて、路地裏の入口に現れたソレを見た。

???「グウウウウウウウウウ…」

鳥の頭にライオンのような体のモンスター・グリフォンが現れた。

銀時「おいおい…ずいぶんと変わったお父さんだな」

銀時はグリフォンを見て笑う。

グリフォン「グオオ!!」

グリフォンは右手の爪で、銀時をひつかこうとする。

しかし銀時は少女を抱え、回避する。

銀時「ちつまた面倒なことになったな」

銀時はグリフォンを睨みながら舌打ちする。

少女が狙いとは考えにくい。それなら、少女の鎖に繋がれている二つのケースと考えるのが自然だ。

グリフォンがゆっくりと銀時達に近づく。

さて、どうしたものかと考える。

すると、下から着物が引つ張られた。銀時は下を見た。

グリフォンに怯えて、少女が銀時の着物を掴んでいる。

銀時は真剣な表情になった。

銀時「まったく、どうすりゃ「伏せなさい!!」!!」

突然女の声が聞こえ、銀時と少女は伏せる。

グリフォンに丸いものが投げられた。銀時は瞬時に爆弾だときづいた。

ドガアアアン!!

グリフォン「グオオオオオオオオ!!??」

グリフォンは爆発に巻き込まれ、壁に叩きつけられた。

銀時と少女は起き上がる。

銀時「・・・なんだ? 一体」

???「無事見たいね」

後ろから声が聞こえたので、振り返ると、紫色の髪は肩よりも少し上の位置で切りそろえられており、頭に黒のヘアバンドをつけており、黄緑色のリボンもつけている少女だった。少女の着ているセーラー服の左肩あたりに、『SSS』というシンボルマークらしきものがあつた。

銀時「あ...ああ。あんたは?」

ゆり「私はゆり。SSS団の戦線リーダーをやってるわ」

銀時「は?SSS団?」

少女・ゆりは、SSS団と名乗るが、銀時には意味がわからないらしい。そこへ、

???「お〜い!ゆりっぺ〜!」

???「ゆり、こんなところにいたのか」

と言って現れたのは、恭介と同じようなオレンジの髪の少年と、青い髪で若干バカっぽいような少年だった。

ゆり「あら?来たの。音無君、日向君」

日向「ゆりっぺ、それひどくないか?・・・まあいいや、他の奴らもきたぜ」

そう言つと、ゆり達の後ろから大柄な男と眼鏡をかけた男と若干貧弱な少年とハルバードを持った男とやさぐれあんちゃんな男と忍者っぽい少女とバンダナを付けた外国人っぽい男と小悪魔のような衣装を着た少女と黒帽子をかぶった少年がやって来た。

そして遅れて、銀色の髪と金色の瞳の天使のような少女がやって来た。

ゆり「あらあら、みんなも奏ちゃんもきたんだ」

日向「いやだからそう言うのはひどくないか？」

日向が突っ込む。

銀時「・・・あの・・・おたくら誰？」

ハルバードの男「キサマア・・・ゆりっぺにその口のききかたは何だ！」

ゆり「落ちつきなさい」

ゆりがチョップでハルバードの男をおとなしくする。

ゆりを含む全員が自己紹介をする。

ゆり「さつきも言ったけど私はゆりよ」

音無「俺は音無だ」

奏「私は奏」

日向「日向って呼んでくれ」

松下「俺は松下。柔道五段をやっている」

高松「私は高松です」

野田「フン・・・野田だ」

椎名「・・・椎名」

藤巻「藤巻だコラ」

ユイ「ユイです！はじめまして」

TK「TKダヨ！レッツダンス？」

大山「あ：僕は大山です」

直井「最後は僕だな。直井文人様だ」

ゆり「あとここにはいないけどメンバーはいるわ。それであなたは？」

今度は銀時の番である。

銀時「俺は坂田銀時。『万事屋銀ちゃん』をやっているぞ」

大山「・・・万事屋？」

高松「なんでも屋ということですよ」

高松が大山に万事屋のことを説明する。

銀時「それにしてもおめえら良く派手なことをしたな」

銀時は路地裏の破壊後を見る。

ゆり「しかたないじゃない。そうでもしないとあなたその子を抱えては戦えないでしょ？」

ゆりの言うことももつともだった。少女を抱えてはグリフォンに勝てるかどうかも疑わしかった。

???「譲ちゃんの言うとおりだぜ」

また別の声が聞こえた。銀時にとってすごく聞き覚えがある声。

銀時「この声は・・・・・・・・・・まさか大串君！」

大串君? 「ちげーよ!!!土方だこのやろ!!!」

大串く・・・・・・・・ゲフン、チンピラっぽい瞳孔が開いた男・土方は銀時にキレル。

沖田「ありゃ?旦那じゃねーですかい」

山崎「あ、ホントだ」

その奥から、腹黒くてドSな沖田と、地味な密偵員・山崎が現れた。

山崎「地味は余計だ!・・・・っと、旦那はいつたい何をやってたんですか?」

銀時「つーかそんなことよりなんでオメーらがここにいんだよ」

銀時は山崎に聞くと、

山崎「いや、実は俺達不思議な光に巻き込まれてここにいるんですよ」

土方「クオラ!山崎!ばらすな!」

土方が山崎をけりつぶす。が、銀時は驚いた顔をして、

銀時「不思議な光ってお前ら・・・まさか」

銀時がきくと、土方があきらめた顔して答える。

土方「ああそうだ。ちなみに近藤さんもだ」

銀時「あのゴリラもか・・・」

真選組三大勢力＋ が不思議な光に巻き込まれたことを知った銀時。

山崎「ちよつと待て！！何でおれが　なの！！？」

ゆり「そこ、黙りなさい」

隣で山崎が何か言ってるが、ゆりが踵落として沈める。

銀時「・・・一応聞いておくがこいつらは」

銀時がゆり達をさして土方に聞く。

土方「ああ、こいつらも光に巻き込まれたとこのことでここにいるんだが、・・・なぜそんなことを聞くんだ？」

銀時「実は俺のここにも光に巻き込まれたってのがいるんだ。九兵衛とリトルバスターズってんだが」

土方「・・・あの柳生のか」

リトルバスターズは知らないが、九兵衛という名前に眉をひそめる土方。

くいくいつ

銀時「ん？」

誰かが銀時の着物を引っ張っている。少女だ。

銀時「どうした？」

銀時は様子を見ると、少女はプルプル震えていた。

少女「オシッコ・・・」

全員「げっ！！」

少女はトイレに行きたがっているが、ここにトイレはない。

銀時「やべえよ。こんなところで漏らしちまったら俺達いろんな意味でおしまいだよ」

土方「何で俺達まで巻き込まれるんだよ」

沖田「土方さん。もうあきらめてくださいえ」

日向「近くに公園があつてそこにトイレがある。早く行くぞ！」

銀時達は、トイレのある公園へ走った。

少しして、路地裏にガッツ！と音が聞こえた。

グラナガン・公園

何とかトイレに間に合った銀時は、少女のようを済ませている。

外で土方とゆり達は待機している。

ゆり「にしてもあんたの知り合いつてああいうチャランポランなわけ？」

ゆりがため息混じりで土方に聞く。

土方「あいつと一緒にすんな。・・・知り合いなのは当たってるが」
タバコを吸って答える土方。

土方「んで、お前はとうすんだ？」

ゆり「情報収集が必要だからね。あいつに言つといて。』しばらく坂田銀時のいる機動六課にいる』って」

土方「そうかい。伝えてやるよ、あのマッド野郎によ」

ゆりの答えに承諾する土方。

日向「正直あんな恰好した奴らと一緒にいんのはウンザリだったしな」

音無「目のやり場に困ったしな」

大山「見てるの恥ずかしくって寝てられなかったよ……」

日向は愚痴をこぼし、音無はうんうんと頷き、大山は顔を赤くする。

すると銀時と少女が戻ってきた。

銀時「あゝ間に合った間に合った。あんがとな」

ゆり「どうってことないわ」

銀時はお礼を言い、ゆりは遠慮している。

ゆり「そうだ。私たちあなたのところに泊まりたいんだけど」

ゆりがいきなりこんなことを言い出す。

銀時「は？なにいつてんの？お前らあのゴリラのところにいるんじゃないの？」

ゆり達は近藤たちの家があるからそう言うが、

土方「安心しろ。近藤さんから許可をもらったぞ」

その近藤が許可したようだ。

銀時はため息を吐いた。

銀時「ハア……ところで」

銀時は少女と向き合う。

銀時「名前はなんて言うんだ？」

ヴィヴィオ「ヴィヴィオ……」

少女はヴィヴィオといった。

銀時「そっか。ヴィヴィオはあんなところでどうしたんだ？」

と、ヴィヴィオに聞くと、

ヴィヴィオ「ママ……」

銀時「ん？」

ヴィヴィオ「ママとパパ、いないの・・・」
ヴィヴィオは親がないと言った。

銀時「・・・」

銀時は無言でヴィヴィオを見る。

銀時は昔から親がいない。まるで自分と同じ孤独なものなんだと、そう思った。

銀時「・・・そうか」

銀時の返事はそれだけだった。

ゆり「・・・」

一方ゆりは、2人の様子を見て痛感していた。自分と弟と妹の4人の仲良しな光景と重ねているのだ。

しかし、それも長くは続かなかった。

IBGM：危機一髪！b y スーパーペーパーマリオ

グリフォン「グオオオオオオオオオオ！！！」

上空からグリフォンが降りて来たのだ。

ゆり「・・・人がせつかく感傷してるって時に」

ゆりはいらだち、グリフォンを睨む。

???「ガルルルルルウウウ・・・」

後ろからモンスターのうなり声が聞こえた。

大きな爪と羽をもつ竜のようなモンスター・ワイバーンが現れた。

藤巻「もう一匹いやがったのか!？」

椎名「いや・・・あと一匹!」

椎名が叫ぶ。

撃に消耗している。

ゆり「あなたは大人しくしてなさいっ！」

ゆりは手に持つナイフで、

グリフォン「グオ！・・・ゴオ・・・」

グリフォンの息の根をとめた。

デスサイズ「ハハハハハハハハハハ・・・」

銀時はデスサイズと対峙している。

銀時「全く、はははは笑いやがって」

銀時はため息を突く。

ヴィヴィオ「おじさん・・・」

銀時「安心しろ。パツパとかたはずけてやるからな。・・・てかおじさんじゃなくてお兄さんって呼べよな」

銀時はヴィヴィオを安心させる。

デスサイズ「ハハハハ・・・ソノガキトイツシヨニアルモノヲヨコシナ」

なんとデスサイズがしゃべった。

銀時「何だしやべれるじゃんかよ。てつきり笑うだけかと思っただぜ」
デスサイズ「ズイブントヨユウダナ？ソノケースヲワタセバミノガシテヤツテモイイガ？」

銀時「見逃す？隙を突いて殺す気だるテメー」

銀時は睨む。

デスサイズ「スルドイナ。ソノケースノナカミニハオオキナエネルギータイガアルンダ。ソノチカラニハダークソウルノチカラヲゾウフクサセルニチガイナイトオモウノダガナ」

デスサイズの言葉に、銀時は耳を疑った。

銀時「ダークソウル！？何でテメーが知ってんだ！」

デスサイズ「カンタンダ。ワタシハダークソウルカラウマレタノダ」
銀時「なっ！」

デスサイズはダークソウルから生まれたと言った。

パープルハート「その話本当なの!？」

上からパープルハートがやってきて、他の女神たちやコンパとアイ
エフもやって来た。

デスサイズ「メガミカ、チヨウドイイ。ダークソウルカラウマレタ
ノハホントウダ。コノカラダハアルアクマラベースニカタチツクラ
レ、ソシテイマノワタシガイルノダ」

デスサイズは説明した。

パープルハート「・・・あなたがダークソウルから生まれたのは分
つたわ。そして、あなたはここにそんざいしてはいけないわ!!」
パープルハートは刀をデスサイズに向けて言う。

銀時「そう言うこった。だからテメーは」

銀時とパープルハートが武器を構えて、

銀時・パープルハート「さっさと消える(なさい)!!!」
デスサイズを切り捨てた。

デスサイズ「グウツ!.....ワタシヲケソウガ、イツカアノ
オトコトアノオンナガダークソウルデセカイガコワレルダロウヨ」
パープルハート「それでも・・・私たちは立ち止まらないわ」
デスサイズ「・・・ソノイキゴミガドレダケツツクノカナ?.....
サラバダ！」

デスサイズは砂のように消えていった。

パープルハート「.....」

パープルハートは無言になる。

銀時「・・・ネプテューヌ」

パープルハート「……ごめんなさい。ぼーっとしてたわ」
パープルハートは銀時に謝る。

パープルハート「……ところで銀時、その子は？」

パープルハートはヴィヴィオを指差す。

銀時は大量の汗を出している。

パープルハート「銀時……」

銀時「いやいやいや違うからね！別にさらったんじゃないからね！
！」

銀時は必死に弁解する。

するとアイエフは、ケースを開けた時驚く。

アイエフ「ちよつと！これ『レリック』じゃない！」

アイエフの言葉にパープルハート達が驚く。

ブラックハート「……何かわけありみたいね。回収しましょ」

グリーンハート「銀時さん。そしてあなた方も六課に来ていただけ
ますか？」

グリーンハートが銀時とゆり達と土方達に言う。すると土方が、
土方「わりの、近藤さんを一人にさせるのは無理なんだ。そいつら
だけでいいぞ」

グリーンハート「……わかりましたわ」

グリーンハートは承諾し、土方達は帰っていった。

パープルハート「銀時、なのは達が待ってるわよ」

銀時「できれば嫌なんだけどな」

銀時は頭をかきながら六課へ戻っていった。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!!」

銀八「はい。今回のアシスタントは」

鈴「……………鈴だ」

銀八「おいおい……………まいつか。ペンネーム『sibugaki』さんからの質問。『読みましたいやぁオモロイ勝負ですねえ見ておなか痛かったです何時か自分もやってみたいです……………ボーボボであいつら最強ですからねえ

んじゃ時代に合わせてこちらも質問させて頂きます

パチ美

「やつほぐ、sibugakiが書いてる小説「リリカルボーボボ」の真のヒロインのパチ美が質問させて貰うわよお。この中でもしバ

リユカ「そんな事言ってる場合じゃないよ!! 作者がデビルランチ
ヤーやら色々と凄いものの果てに世の中に出てる全ての××料理の
集大成な(こっちでの)ピーチ姫の××料理を出しちゃってるよ!
!」

フォックス「誤れ! 早く誤らないとそっちに色々行くぞ!」

マリオ「凄い称号ばつかな…俺、そんなに奇奇怪怪か?」

ソニック「Hey、良く凄い料理を食べてるからじゃないか?…ま
ありトバスマンバーに質問『俺を四字熟語で表現するならどんな感
じになるんだ?』」

スネーク「マリオと組んだら最強のコンビだからな作者のスマブラ
だと…ネプテューヌ達に質問『自分達的に戦いたくない相手はいる
か?』」

フォックス「俺からも質問『今回不名誉な称号を付けられたメンバ
ーは戦った相手に勝ってたらどう言う称号を付けてた?』」

ネス「まあ…作者が今暴走中なので僕が代わりに…次回を楽しみに
してます」

ふおおおおおおおおお!!…!!…!!…!!…!!…!! (怒×100)

フォックス「落ち着け作者!」

マリオ「…何で作者暴走してるんだ?」

ソニック「さあ?」『ってやっぱ前回のが駄目だったじゃん!どうしてくれるんだよ作者!』

真王「スキマですべて消した」

銀八「対応早っ!・・・まいつか。最初の質問は」

リトバス組が立ち上がる。

リトバス組「電光石火!」

銀八「即答かよ!しかもポケモン!?!」

理樹「ごめん。これしか思いつかなくて」

ネプテューヌ「2つ目は私達気持ち悪いものは嫌なんだよ」

銀八「そうか。じゃ3つ目は」

真人・シグナム・ブランが立ち上がる。

真人「俺が勝つたらあいつを『貧弱者』にしてやったぜ」

シグナム「私なら『ツンデレ娘』にしてやったぞ」

ブラン「・・・あいつを『ちびグソ狸』にしてやりたかった」

銀八「ブランちゃん!?!?年頃の女の子が汚い言葉を使っってはいけませんよっ!?!?!」

鈴「・・・『鳴神ソラ』。廊下に立ってる」

銀八「は〜い。きょうの銀八先生はここで終わら〜ちよつとまった
〜〜〜!〜!〜!」ってなんだ?」

葉留佳「いや〜。間に合いましたネ。もう少しで終りかけましたヨ」

銀八「はあ? 一体何する気なんだ?」

葉留佳「私とクド公が『鳴神ソラ』さんにちよつとした疑問を答え
てもらおうと思ひましてネ」

クド「では質問です。『マリオさんと当麻さんはどつちが強いです
か?』」

理樹「当麻さんって』とある魔術の禁書目録^{インデックス}』の主演の人だね」

銀八「何でそいつが出てくんだ?」

理樹「推測だけど、当麻さんは幻想殺し（イメージブレイカー）を
持っているからマリオさんと互角に戦えるんじゃないかって」

葉留佳「そう! マリオさんの持つ『チートブレイカー（葉留佳、命
名）』があつても当麻はそれを効果なく消せるって思ってるんです
ヨ」

銀八「てかそのチートブレイカーが幻想殺し（イメージブレイカー）
を消すんじゃない?」

恭介「いや、その幻想殺し（イメージブレイカー）は彼の右手に固

定しているから消えないぜ」

葉留佳「そういうこと。あ、わたしから質問『マリオとボーボボがハジケ勝負をしたらどっちが勝つんですか？そしてマリオさんは『サービスマン』と勝負したら勝てますか？』」

恭介「ボーボボのハジケはすごいからな。さすがのマリオでもちよつとは参るんじゃない？」

銀八「いやしらねーよ。つてかサービスマンってあの絶対に見てはいけない技を持つあいつか。作者、どっちが勝つと思っただ？」

真王「シラネ」

第十七訓：狙われた子供はほっとけない（後書き）

真王「六課に住むことになったゆり達、そしてさらに意外な客が現れる？」

ゆり「次回『ペットの扱いは計画的に』オペレーション・スタート」！

（予告）

ナレーション「ミッドチルダで大きな犬の目撃情報があります」

（つづやき）

真王「ネタづまりで遅れてしまったな・・・」

第十八訓：ペットの扱いは計画的に（前書き）

真王「…最近ネタ詰まりで更新が遅くなってきたな」

銀時「おいおい…しっかりしろよ」

ネプテューヌ「『リリカル銀魂』はじまるよ」

第十八訓：ペットの扱いは計画的に

機動六課

銀時とネプテューヌがレリックとヴィヴィオを見つけた事で、機動六課の休日は強制終了。全員制服に着替えて、機動六課隊舎に集まった。

部隊長オフィス

はやて「まさかレリックを見つけてくるとは驚きやな」

はやてが驚き半分、呆れ半分で言った。

はやて「しかも…」

視線を銀時の隣に向けた。

ヴィヴィオが、銀時の着物を掴んでいた。

はやて「小さな女の子まで連れて」

銀時「しょうがねーだろ。あのまま置いてく訳にもいかねーし」

メンドくさそうに銀時は答えた。

なのは達がやってきた。

なのは「さつき陸士108部隊のギンガから連絡があつて、銀さんがその子を見つけ近くの場所で、トレーラーの横転事故が発生してたの」

フェイト「その現場で、中身が空っぽの生体ポッドと、何か重い物を引きずっていった痕を発見したって」

なのはとフェイトが報告した。

リンフォース「では、その生体ポッドの中に入っていたのは、この少女だと？」

リインフォースがヴィヴィオを見つめた。
フェイト「そうだと思います。さっきこの子の体を検査してみたら、
人造生命体である事がわかりました」
最初は検査を嫌がったヴィヴィオだったが、銀時の説得で何とか検査を受けてくれた。

桂「ここ最近の貴様のハーレム生活には面白半分で見えていたが、まさか幼き少女までナンパされるとは」

銀時「おーい、どのように見ればこの子が俺にナンパしたと確信したんだツラ君？」

桂「ツラじゃない桂だ」

銀時「で？このガキどうすんだ？」

銀時がみんなに聞いた。

銀時「此処で保護するに決まってるやる？その子、銀ちゃんに懐いてるようやし」

はやてが当然とばかりに言った。

銀時の中でイヤな予感がした。

銀時「ちよつと待て。え？まさか俺がこのガキの保護者になんのか？」

この流れでいくと確実にそうなる。

何とかそれだけは阻止したい。これ以上の面倒事は、ハッキリ言って御免だ。

はやて「当たり前や。今日から銀ちゃんは、その子のパパや！」

ビシイ！と銀時を指差して、はやてが言った。

ヴィヴィオ「パパ？」

ヴィヴィオは銀時を見上げながら呟いた。

銀時「じょ…冗談じゃないぜ！俺はガキの面倒なんて見ねエぞ！」

銀時は声を荒げて断った。

すると、ヴィヴィオが銀時の着物を引つ張った。銀時が下を向くと、ヴィヴィオが着物を掴みながら銀時を見上げてる。

ヴィヴィオ「パパ」

上目使いで銀時を見つめる。

銀時「う……」

うるうるとう潤んでるヴィヴィオの瞳に、銀時はたじろいだ。

銀時「よ……止せ！そんな無邪気な瞳で俺を見るんじゃねエ！」
上目使いをやめるように言う。

だがヴィヴィオは、上目使いをやめない。

はやてと桂は、ヴィヴィオの上目使いにたじろいでる銀時を見て笑っている。

そして銀時は、ヴィヴィオの上目使い攻撃に耐えられなくなり、

銀時「わかったよ！俺が面倒見ればいいんだろ！？やってやるよ」
ノヤロー……！」

ヴィヴィオの面倒を見る事になった。

ヴィヴィオは嬉しそうに、銀時に抱き付いた。

はやて「決まりやな」

リン「頑張ってください、銀さん！」

リンが応援した。

銀時「ったく。あ、そう言えばあいつらはどうしてるんだ？」

はやて「あいつら？ああ、その子と一緒に連れて来たあの子たちやな」

ヴィヴィオと一緒に連れてきたゆり達のことだと考える。

銀時「そいつらはいったい何やってるんだ？」

銀時は、ゆり達の様子を聞く。

はやて「ちよつと待つてえな」

はやては、ゆり達戦線メンバーとネプテューヌ達とリトルバスターズの様子を見るためにモニターを開くと、

ゆり「待ちなさいよあんだ！」

恭介「待てと言われて待つ馬鹿がいるか！」

ネプテューヌ「わゝ助けてゝゝ！」

野田「テメゝ、やんのかクソガキ！」

ヴィータ「それはこっちのセリフだ！後あたしはガキじゃない！」

神楽「好きなものは酢コンブに限るヨ」

松下「俺は肉うどんだな」

真人「お前はいい筋肉を持ってるじゃないか」

高松「フツ分りますか」

ユイ「センパイ。新技かけさせてくださいよ」

日向「イヤに決まってんだろぅが！」

ブラン「……………」（2人の様子を眺めている）

エリザベス「こんにちは」

椎名「……あさはかなり」

来ヶ谷「ふむ」

直井「音無さん！もっと僕を慕ってください！」

音無「いやだからわかったから！っーかお前ら何見てんだ？」

奏「別に」

美魚「何でもないです（……音無×直井もよしです）」

TK「マイネームイズTKダヨ！OK？」

クド「クドリヤフカなのです！ないすとうみ〜とう〜」
ノワール「変わった会話ね・・・」

藤巻「テメつまちやがれ〜！！」

葉留佳「あははは〜〜〜！！」

カオスが広がっていました。

銀時「・・・・・・・・・・・・・・・・なにこれ？」

隊舎のロビー。

ヴィヴィオを連れた銀時と、フェイト達が集まっていた。

スバル「ええっ！？銀さんがその子の面倒見るんですか！？」

スバルが驚いた声を出した。

周りのみんなも驚いている。確かに銀時が子育てなんて、想像もできない。

ちなみにゆり達は、すでに自己紹介を終えている。

神楽「マジ最悪ネ。少女にまで手を出すなんて侍の欠片も全然ないアル」

銀時「誤解する言い方辞めてくんねエ？手を出したっと言うより出されたから」

誤解する言い方をする神楽に銀時は軽くツッコむ。

月詠「しかし、ぬし一人に子育てなど出来るのか？」

月詠が銀時に尋ねた。
ちなみに、今は煙管をくわえていない。さすがに小さな女の子の前では煙管は吹かせない。

フェイト「大丈夫ですよ。私が一緒に面倒を見ますから」
そう言ったのはフェイトだった。

なのは「何を言っているのフェイトちゃん？ ヴィヴィオの面倒は私と銀さんが見るんだよ？」
対抗意識を持って、なのはが言い出す。

ティアナ「いやいや、大人だからって出来るとはかぎりませんよ？
ここは妹である私が兄さんと……」

リインフォース「妹が兄の妻になるなんてあり得ないから！！」
ティアナがヴィヴィオの母になると言い出すが、リインフォースがそれを否定する。

リインフォース「ここは、銀時と一体化できる私こそ母親になるべきだ！」
リインフォースが高々と宣言する。

シグナム「貴様等では任せられない。ヴィヴィオの面倒は、私と銀時が見る」
腕を組んで、シグナムが言った。

アルフ「あたしが銀時と一緒に面倒見る〜！」
ハイハイ！と手を挙げてアルフも言った。

ヴィータ「どうすんだ、銀時？」
ザフィーラ「ここはお前が決めるべきだと思うが？」

ヴィータとザフィーラは銀時にどうすべきかと言い出す。
銀時は困ったように頭を掻いた。

そこに……

ネプテューヌ「へえ、ヴィヴィオちゃんって言うんだ」

ヴィヴィオ「そうだよ、お姉ちゃん」

ネプテューヌがヴィヴィオと話し合っていました。

ネプテューヌ「あはは、私はネプテューヌって言うんだよ」

ヴィヴィオ「ネプト……ネプ……ねね……」

まだ幼いヴィヴィオでは、ネプテューヌとはつきり言えないようだ。ネプテューヌ「あ、呼びづらいたらネプ姉ちゃんって呼んでもいいよ」

ヴィヴィオ「ネプ……姉ちゃん」

ヴィヴィオがネプテューヌを呼ぶ。

ネプテューヌ「何？ヴィヴィオちゃん」

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん！」

返事をしたネプテューヌに、ヴィヴィオはぱあっと明るくなって抱きつく。

銀時「……何かあいつ、子供の扱いうまくね？」

銀時のつぶやきに、なのは達はうなずく。

ノワール「ずいぶんとかわいくやってるじゃない？ネプテューヌ」

ブラン「……」

ベール「あらあら、かわいらしい子がいますね」

ヴィヴィオとじゃれ合っていると、ノワールとブランとベールが来た。

ヴィヴィオ「!？」

ヴィヴィオは三人を見た瞬間ネプテューヌの後ろに隠れた。

ネプテューヌ「大丈夫だよヴィヴィオちゃん。この人たちは怖い人たちじゃないから安心して」

と、ヴィヴィオの背中を撫でて安心させる。

ヴィヴィオ「……」

ヴィヴィオは3人を見ている。

ノワール「こんにちは。ノワールって言うのよ」

ブラン「……ブラン」

ベール「ベールと申しますわ」

ヴィヴィオに対して自己紹介する3人。

するとヴィヴィオが、

ヴィヴィオ「ノワール……お姉ちゃん……？」

ノワールの眺めて言う。

ノワール「お……お姉ちゃん!？」

ノワールはお姉ちゃんと呼ばれて驚く。

ネプテューヌ「あれ?いやなの、呼ばれるの」

ノワール「い……嫌なわけないわよ!というかもっとお姉ちゃんって呼ばれたいって言うか……って何言ってるのよ私は――

ノワールは恥ずかしさで頭をガンガン壁にぶつける。

次はブランを見る。

ヴィヴィオ「ブランお姉ちゃん?」

ブラン「何?」

ブランはヴィヴィオに天使のような笑顔で返事をする。

ブラン自身はお姉ちゃんと呼ばれるのがうれしいようだ。

来ヶ谷「ハア……ハア……あそこに見えるのは天使たちなのか? / / / / /」

来ヶ谷が息を荒くして、鼻血をボタボタ流している。

恭介（やべっ！来ヶ谷の病気だ！）

理樹（来ヶ谷さん！それじゃ危ない人ですよ！）

ゆり（な・・・何？あの人すっごい鼻血出してるけど）

ユイ（あれ？なんかいやな予感が・・・）

銀時（何あの人・・・すっげー鼻血出してるんですけども・・・）

神楽（なんかいろんな意味でやばいネ・・・）

キャロ（あれ？なんだろ？ものすごい悪寒が・・・）

フェイト（エリオとキャロがえらい目に会いそう・・・そして私達も・・・）

鼻血を出している来ヶ谷に、周りの人はみんな引いている。

最後にヴィヴィオはベールを見た。

ヴィヴィオ「ベールお姉ちゃん？」

ベール「はい」

ベールは笑顔で返事をした。

ネプテューヌ「ん？」

ネプテューヌは何かを見つけて、外へ出た。

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん？」

ヴィヴィオも外へ出た。

銀時「なんだ？」

銀時達は、ネプテューヌとヴィヴィオの後を追った。

外に出た銀時達は、ネプテューヌとヴィヴィオを探していると、

ネプテューヌ「あはははは、よしよしい子だね」

ヴィヴィオ「わ〜い」

大きな犬「ワンっ」

ネプテューヌ達は、人間2人くらい乗せられそうな犬に乗っかっていました。

銀時・神楽・新八「定春!？」

銀時達のペット・定春だった。

理樹「うわっ!何これ!」

真人「デケえ!」

クド「わふ〜。大きな犬さんなのです」

小毬「ホントだ」

音無「な、何だこの犬!」

ユイ「おお〜。でかいですね」

椎名「あ、あさはかなり」

みんなも定春に驚いている。

銀時「定春!お前なんでここ」ワンっ「ギャアアアアアアア!
!!!」

銀時が近付いたら、定春がかみついてきた。

ネプテューヌ「定春くん駄目だよ。はなしなさい。メ〜」

ヴィヴィオ「メ〜だよ」

定春「ワフツ」

ネプテューヌが命令すると、定春は放した。

銀時「だ〜ったく相変わらなみつきやがって」

????「よくやられるんですか?」

銀時「やられるにも何もこいつは何でもかんでもかみついてえええ

ガルデモ』は4人の女子でありながらミッドチルダで大熱狂を博したアイドルメンバーなんですよ！」

ユイ「そう！クールビューティーな岩沢さんを筆頭にギターのみさ子さん、ドラムの入江、ベースの関根が演じるガルデモですよ！ミッドチルダで知らないものなどほとんどいません！」

新八とユイが、ガルデモについて説明する。アイドルと呼ばれた岩沢たちは照れくさそうなくさをする。

ユイ「特に『Crow Song』は私にとっては大好きな曲ですが、『Alchemy』もまた捨てがたいですし後……」

銀時「だ〜！！分つたからもういいって！」

銀時は耳を押さえる。

銀時「あつ……っ！かおまえら何で定春と一緒に？」

銀時がきくと、

ガルデモ『拾った』

即答した。

銀時「……にしてもあいつら仲良く懐いてんなア」

銀時は、定春に懐いているネプテューヌ達に目を向ける。

ネプテューヌ「ホラホラッ、よしよし」

ヴィヴィオ「わ〜い」

クド「わふ〜っ！」

小毬「かわいいね〜」

ブラン「……（寄り添っている）」

定春「ワンっ！」

ネプテューヌ達はとても楽しそうだ。

椎名「……」

椎名が近付いて、定春に触ろうとしたら、

どうやら、こっちの世界でもいつもみたいだ、……いや、いつも以上
に騒がしくなりそうだななんて思いながら、やっぱり助けには入ら
なかった。

そして椎名を放したのは1時間に及んだらしいが、椎名は腑に落ち
ないような顔をしたそうだ。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!」

銀八「おし！そんじゃ始めるぞ。まずアシスタントは」

ゆり「SSS団戦線リーダーゆりがアシストするわ」

銀八「そんじゃ行くぞ。ペンネーム『sibugaki』さんから
の質問。『何と新撰組全員集合ですか
こりゃ楽しみだ』

んじゃ質問

作者「どうも、今回は質問にご返答頂き有難う御座います。懲りずに質問致します。

まず銀さんに質問ってか・・・もういつそのこと一夫多妻制の国に行っちまえば？そうすりゃあなたに惚れてる子全員と未永く暮らせるよお（ニヤニヤ）
んでもう一つ

黒神さんのところだと銀さんは魔道士化しましたが、もしかして此処だと土方、沖田も魔道士化しますか？ってかして欲しいと思います・・・以上です「『」

銀時が立ち上がる。

銀時「いや・・・そんなところ行ったら俺どの道いやな目に会っただけれども・・・」

真王「2つ目ですが、しません」

ゆり「七股かけた男って・・・最低ね」

銀八「同感だ。『sibugaki』さん。廊下に立ってなさい」

ゆり「つぎはペンネーム『鳴神ソラ』さんからね。『マリオVS当麻なら普通にマリオが勝ちます。理由は能力あってもなくても2人の戦いの経験では家のマリオは能力が使えなくても当麻より経験が豊富なのと技も沢山あるので勝てます・・・そしてポーボボとなら・・・引き分けだな・・・後、サービスマンとなら楽勝でマリオの勝ちです。」

フォックス「だよな…と云うか…また新しい作品の出たな…」

スネーク「他にも色々と敵でモンスターが多いな…んで土方達はあの博士の所にいるようだな…」

ルイージ「それにしても…ダークソウルって一体なんなんだろうね…」

ソニック「確かに…モンスターを呼ぶ以外は謎の奴だよな…」

ネス「んで来るんだね…神楽さんのペットが…」

リユカ「どうなるんだろう…」

ルイージ「それでリトバスの皆に質問『僕を四字熟語で表現するならどんな感じになる?』」

スネーク「今回出てきたゆり達に質問だ『銀時達を初めて見た際はど言う印象だった?』」

フォックス「皆に質問『真王が知ってるアニメ、漫画、ゲームの中でこれは出て来て欲しくない敵キャラはいるか?ちなみにチートキヤラとかバグキャラと呼ばれるのは省いてくれ』」

マリオ「させ…次回はどうなるのやら…」

スネーク「平和だな…」

ルイージ「そうだね…何もこないから平和だよ」

うむ…

ネス「だね」『ズバリ答えてあげましょう』

リトバス組が立ち上がる。

リトバス組「・・・付和雷同？」

銀八「あ〜っマリオがさきさき進むからかもしれんなア。んじゃ次は」

ゆりを含む戦線メンバーが立ち上がる。

ゆり「まず銀時はグータラのチャランポランよ」

藤巻「あの眼鏡は若干俺と同じような雰囲気をするのは気のせいかな？」

ユイ「神楽さんはアホな人ですね」

椎名「桂 小太郎・・・あいつはできるな」

大山「エリザベスさんはちょっと不気味な人（？）だったね」

椎名「月詠・・・彼女はいい忍者だな」

音無「なのはさんはしっかり者だったな」

日向「フェイトさんもだったな」

関根「はやてさんは悪戯好きな人なんだね」

ひさ子「シグナムさんはすっげえ強そうだな」

野田「俺はちっこくて生意気なヴィータってやつが気に食わん！」

入江「シャマルさんは看護師さんなんだね」

高松「ザフィーラさんはよい男気がありますね」

松下「スバルはなかなかの腕力を持ってそうだな」

直井「あのティアナって子はかなりの射的能力を持っているようだ」

音無「エリオは小さいながらも強そうだな」

日向「俺はキャラよりも隣のフリードってやつに驚いたな」

ユイ「ネプちゃんはいいい友達になれそうだな」

関根「そうだね」

入江「ね」

ゆり「ノワールは・・・まあ頑張り屋さんね」

松下「ブランがあんな重たそうなハンマーを軽々と持ち上げられるのが正直驚いたぞ」

TK「イツツ、パワードガールツ！」

ユイ「ベールさんは大きい人だ！（違う意味で）」

銀八「ありがと。んじゃ最後の質問だ」

リトバス組、SSS団以外の全員が立ち上がる。

銀時「正直オレはゴースト系は来ないでほしい……（ビクビク）」

新八「僕もです……」

神楽「私もイヤネ！」

桂「俺は苦手な奴などいない」

エリザベス『同じく』

月詠「わっちは苦手なものなど克服しておるぞ」

なのは「私はお化けが苦手なの……（ビクビク）」

フェイト「うねうね動くのはちょっと……」

はやて「台所の黒い悪魔が嫌いや！」

シグナム「どうも触手系が好きになれん」

ヴィータ「あたしは気持ち悪い虫が嫌いだっ！」

シャルル「私もです！」

ザフィーラ「私はない」

スバル「虫が嫌い！」

ティアナ「私も虫は無理よ！」

エリオ「実は八神部隊長から怪談を聞いて以来、怖くなっちゃったんです」

キャロ「わ・・・わたしも」

ネプテューヌ「野菜のお化けは嫌いだよ！」

ノワール「ぬるぬるした気持ち悪いのは嫌よ！」

ブラン「お化け嫌い・・・」

ベール「触手の魔物は嫌ですわ」

銀八「ハイそんなわけでここで終了しますが、ゆりが『鳴神ソラ』さんに質問があるようです」

ゆり「それじゃ、『もしマリオが幻想郷に喧嘩売っても余裕で勝てるの?』それと、『皆はマリオの苦手なものを知っているの?』よ」

銀八「それじゃ、また次回会いましょう」

第十八訓：ペットの扱いは計画的に（後書き）

真王「次回は六課にモンスターが現れてクドリヤフカとヴィヴィオがさらわれた！銀時達は追いかけることに・・・」

音無「次回『どこかの国ではよくさらわれる奴がいる』テイクオフ」！

（報告）

真王「先にいいますが、キャラのほとんどがうる覚えです」

第十九訓：どこかの国ではよくさらわれる奴がいる（前書き）

真王「リトバス編のオープニングは『とある科学の超電磁砲^{レールガン}』の『only my railgun』が似合つと思いますかね。それでは始め！」

第十九訓：どこかの国ではよくさらわれる奴がいる

クド「ヴィヴィオさ〜ん！こっちにパスするです〜！」
ヴィヴィオ「うん！」

六課の庭で、ヴィヴィオとクドがフリスビーで遊んでいた。

銀時達は六課でゴロゴロしているか、遊びに付き合っているか、熱心に仕事している。

すると、

ドシ〜〜〜〜〜ンツ！！！！

クド「わふっ！！！」

ヴィヴィオ「ひゃっ！！！」

突然の地鳴りと振動に2人は尻餅を突く。

銀時「なんだなんだ？」

なのは「一体何があったの？」

銀時達も、異変を感じて外に出た。

ネプテューヌ「うわっ！なにあれっ！？」

恭介「こ…こいつはっ！」

地鳴りを発生させたのは、黒色が主だが、全長3メートルで体中どれもこれもバラバラなボディの人型の機械のようなモンスターだった。

銀時「おいデカブツ！テメー一体何だ？」

銀時はモンスターを指差して呼ぶ。

ジャンクゴーレム「おれか？俺はジャンクゴーレム、ダークソウル

に作されたものだ」

全員「っ!!!?」

ダークソウルという言葉に、銀時達は驚きを隠せない。

ジャンクゴーレム「お前達と話す余裕なぞない。そこのガキをいた
だくぞっ!」

ヴィヴィオ・クド「きゃあああああ!!!!!!」

ジャンクゴーレムは、近くにいたクドとヴィヴィオを捕まえる。

なのは・フェイト・銀時「ヴィヴィオ!？」

理樹・鈴「クド!!!」

ジャンクゴーレム「こいつらを返してほしければこの俺を追いかけ
てみるっ!!!」

と言つて、足の部分がローラーに変わり、逃げだした。

銀時「あつ!!! テメっ待ちやがれ!!!」

フェイト「ちよっ! 銀時!？」

銀時と神楽と新八は、定春に乗ってジャンクゴーレムを追いかけた。

恭介・ゆり「俺達（私達）もいくぞ（わよ）!」

リトルバスターズ・戦線メンバーズ「うん! / わかった! / 了解!
/ おう!」

恭介とゆりの指示に、リトルバスターズとSSS団のみんなが行動
を開始するが、

フェイト「ちよっと! あなたたちどこへ行こうとしてるの!? 危険
だからやめなさい!」

ティアナ「そうよ! あなた達は死ぬつもり!？」

フェイト達に止められる。恭介達は立ち止まってこう言った。

恭介「悪いがそれはできない相談だ。目の前で能美がさらわれちま
ったつてのを見逃すようじゃ、俺達リトルバスターズの名折れだ」
ゆり「そういうことよ。仲間がさらわれてハイそうですかって簡単

にあきらめるようじゃリーダーとしてのメンツが立たないわ」

理樹「ごめんなさい！けどクドを見捨てるわけにはいかないんです！」

鈴「クドは友達だっ！」

来ヶ谷「うむ。クドリヤフカくんを助けに行くのだ」

野田「俺はゆりっぺに指示に従っただけだ」

日向「なんだかんだいって、俺らはただ助けに行くだけだがな」

リトルバスターズも戦線メンバーズも、どちらも一步も譲らないようだ。

するとネプテューヌ達が、

ネプテューヌ「よくいったよっ！皆っ！」

ノワール「いい心構えじゃない」

ブラン「評価に値する」

ベール「よいことを言いましたわ」

と、リトルバスターズと戦線メンバーズにエールを送った。

フェイト「ネプテューヌっ！！？何を考えているの！？」

なのは「ネプちゃん！やめさせてあげてっ！」

なのはとフェイトがリトルバスターズと戦線メンバーズ達に注意するように言うが、

アイエフ「なのはさん、この子たちは本気よ」

コンパ「できるだけ無茶はしないでくださいです」

アイエフがあきらめると言い、コンパがとりあえず注意をした。

理樹「……ってああっ！手間取ってる間に銀さんも見えなくなっちゃった！」

理樹が叫ぶと、すでに銀時どころか、ジャンクゴーレムでさえ見えなくなつた。

ネプテューヌ「あらら……行っちゃった」

理樹「う、うわあああああ！！！！！！」

パープルハート達は理樹達をつかんだ後、ビルを軽々と越えるジャンプ力でまるで忍者のように銀時達を追いかけ始めた。

ちなみに、パープルハートには、理樹、鈴、恭介、ゆり、音無、日向、奏。

ブラックハートには、真人、謙吾、来ヶ谷、野田、藤巻、高松、TK。

ホワイトハートには、小毬、葉留佳、美魚、松下、椎名、ユイ。

グリーンハートには、桂、エリザベス、月詠、直井、コンパ、アイエフを連れている。

すると桂が、

桂「あの・・・ベール殿。背中に何か当たってるようだが……」

桂の背中に、グリーンハートの柔らかいマシユマロが当たっていることを聞く。

グリーンハート「あら？そうでしょうか？」

グリーンハートはうふふと笑う。

直井（この女……もしかしてわざとやってるのではあるまいな……）

直井はグリーンハートの企みに不審に思った。

直井（そういえばあの八神という女は桂に好意を寄せていたらしいが……まさかっ！！（汗））

直井はグリーンハートの考えを確信し、冷や汗をかいた。

グリーンハート（うふふふ……あの狸さんには良いリアクションが取れるような気がしますわ）

グリーンハートは、心の中で黒い笑みを浮かべていた。

はやて「はっ！」

なのは「ど、どうしたのははやてちゃん!?!」

はやてがいきなり声を出したので、なのは達がびっくりする。
はやて「い、今うちは何かを取られた気がする」
フェイト「いや知らないよ！はやての事情なんて」
そんな六課美女三人組のやり取りなのであった。

F「あれ？私（僕）達は？」

後ろでフォワードが忘れ去られていることは言うまでもない。

ミッドチルダのはずれ・廃墟工場

その場所で、銀時、神楽、新八、定春はパールハート達を待つていた。

神楽「あ！・・・銀ちゃん来たネ」

神楽が銀時を呼ぶ。

すると、理樹達を連れたパールハート達がやって来た。そして理樹達をおろした後、それぞれネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールに戻った。

銀時「おいコラネプテューヌ、何でこいつらまで連れてくんだよ」

銀時がジト目で理樹達を睨む。

理樹「違うんです！これは僕達の勝手に来たんです！」

理樹は銀時に必死に弁解する。

理樹「僕達は、クドを助けるためにここに来たんです！危険なことだって言うの分っています、それでもクドは僕達の、リトルバスターズの仲間なんですよ！！」

銀時「・・・・・・・・・・・・・・・・」

理樹の必死な説得を、銀時はただ黙って聞いている。

鈴「・・・連れて行かなかつたら蹴りくらわすぞ」

銀時「ちよっ！武力行使で脅すのやめてくんない！！」

鈴の脅しに、銀時は突っ込む。

銀時「・・・っだゝゝゝったく」

銀時は頭をかきながら、理樹達にこう言った。

銀時「・・・足を引っ張るような真似だけはすんなよ」

理樹「！・・・ハイ！」

銀時の許しに、理樹は元気よく返事をした。周りのみんなもうれしそうに顔をする。

銀時「おし！行くぞおめーら！」

全員「おーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！！！！！！」

銀時の言葉に、リトルバスターズと戦線メンバーズが大きく返事をして、工場の中に入っていった。

新八「皆さん、クドちゃんを助けるために」

桂「そうだな。自らの仲間のためにたとえどんな困難が待ち受けていおうとも決して振り返らず、まっすぐ進む。直枝殿、主は立派な侍のはしくれかもしれん」

新八「いや、理樹さんは普通の人間なんですけれども・・・」

なんやかんやで、新八、神楽、桂、エリザベス、月詠、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、アイエフ、コンパは中に入っていた。

廃墟工場・ガラクタ広場

IBGM:ジャンク工場bYロックマン?

(Mega Man 7 : Junk Man's Stage)

ジャンクゴーレム「よく来たな」

ゴミ溜め広場の中央で、ジャンクゴーレムがたっていた。

銀時「よう。あの2人はどこにいるんだ?」

ジャンクゴーレム「フツ、安全のために上から眺められる場所に閉じ込めているぞ」

パチッ!

ジャンクゴーレムが指で鳴らすと、つりさげられた檻が降りてきた。その中にはヴィヴィオとクドが入っていた。

ヴィヴィオ「パパっ!助けてっ!」

クド「皆さ〜ん!へるぶなのです〜!」

2人は銀時達に助けを求める。

銀時「安心しろオメーら。今からこいつをぶっ飛ばしてやっからよ」
理樹「クド!絶対に助けてやるからね!」

銀時は2人を安心させる。

ジャンクゴーレム「そろそろ覚悟はいいか?・・・行くぞっ!」

IBGM:ボス戦bYロックマン?

(Mega Man X Music Extended - Boss theme)

ジャンクゴーレム「まずはこちらから行くぞ」

ジャンクゴーレムは銀時達に接近し、右手でパンチを繰り出す。

銀時「ちっ!」

ネプテューヌ「おっと!」

銀時とネプテューヌはそれをかわす。しかし、地面に当たったパンチがへこんでいた。

ネプテューヌ「うわっ…当たったら無事じゃすまなさそ…」

ジャンクゴーレム「その余裕なセリフが言い続けられるかな?」

ジャンクゴーレムは、高さ7メートルにまで飛び上がり、ネプテューヌを潰そうとした。

ネプテューヌ「避ければおしまいだよ」

ジャンクゴーレム「どうかな?」

ネプテューヌはよけ、ジャンクゴーレムは地面を踏んだ。

ズシ~~~~~ン!!!!!!

ネプテューヌ「うわっ!」

銀時「うおっ!」

ジャンクゴーレムは地面を踏んだと同時に、突然地震が発生し、ネプテューヌ達はすっ転んだ。

ジャンクゴーレム「隙ができたな!」

ジャンクゴーレムはネプテューヌに右手を振りおろす。

ネプテューヌ「やばっ!」

ブラン「伏せてるネプテューヌ!」

神楽「ホワチャアアアアアアアアアア!!!!!!!」

ジャンクゴーレム「ぬっ?グアッ!」

ブランはハンマーを、神楽は蹴りを炸裂させ、ジャンクゴーレムを退けさせた。

ジャンクゴーレム「ぬうう…なかなかやるな」

銀時「今度はこつちから行くぜっ!」

ジャンクゴーレム「ぬおっ!」

銀時がジャンクゴーレムに接近し、木刀で攻撃する。ジャンクゴーレムはそれを両腕で防ぐ。

ジャンクゴーレム「なるほど・・・よくうわさで白き羽衣の夜叉がいると聞いたが、お前がその坂田銀時だな」

銀時「ほめても何も出ねーぞっ!」

木刀のラッシュ攻撃に、ジャンクゴーレムはひたすら防ぐ。

桂「こつちを忘れてもらっては困るぞ」

ジャンクゴーレム「ぬっ!」

後ろから桂の奇襲を左腕で防ぐ。

ジャンクゴーレム「ほう、『狂乱の貴公子』か」

桂「桂って呼んでほしいのだが・・・」

月詠「援護するぞ」

エリザベス『助太刀!』

月詠はクナイを、エリザベスは刀を構え、ジャンクゴーレムに接近する。

ジャンクゴーレム「させるか!」

そう言うと、なんと胴体が開き、大砲が出てきた。

銀時「オーーーーー!体から何か出てきたぞ!」

月詠「むっ!いかん!」

エリザベス『ヤヴェツ!』

ジャンクゴーレム「くらえ!」

大砲が発射し、月詠とエリザベスのところに向かうが、2人はギリでかわす。

アイエフ「グリーンハート様……もしかしてわざとやっ
ない？」
コンパ「はやてさんがいたら間違いなく怒るです……」
ベールの行動に、アイエフは呆れ、コンパははやてがキレることを
想像して、怯えている。

煙がはれて、ジャンクゴーレムが現れる。

ジャンクゴーレム「ぬうう……少しお前達を甘く見ていたようだ

……」

ジャンクゴーレムは立ち上がる。

ジャンクゴーレム「ここからは……本気でいかせてもらおうぞっ！

……」

そう言うと、両手を上げ始めた。銀時達は警戒する。

ジャンクゴーレム「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

！！！！」

ジャンクゴーレムがうねりを上げる。すると、金属のガラクタが宙
に浮き、ジャンクゴーレムに向かって集まって来た。

ネプテューヌ「な……何あれ！？」

ジャンクゴーレムの頭上に集まったガラクタがグルグルと回ってい
る。

そして、ガラクタは塊になり、

ジャンクゴーレム「くらえっ！！ジャンクバスターー！！！！」

かめはめ波のように、ガラクタの塊が発射された。それどころか周
りに浮いていたガラクタも飛んできた。

銀時「ちっ！」

銀時は木刀でたたき落とし、神楽は傘で防ぎ、新八、桂、エリザベ
ス、月詠、アイエフ、コンパはガラクタの陰に避難し、ネプテュー

又も木刀でたたき落とし、ノワールはショートソードで切り落とし、ブランとベールはハンマーとバイクを回して防いでいる。理樹達はガラクタの陰に避難している。

ジャンクゴーレム「どうだ！この俺のジャンクバスターの力は！」
ジャンクゴーレムは、自慢げに笑う。

銀時「ちいっ！地味な技のくせに相当厄介だぜ」

銀時は舌打ちする。

すると、またガラクタが、ジャンクゴーレムの頭上に集まって来た。

ジャンクゴーレム「フハハハ。さあ、覚悟するがいい！！」

ジャンクゴーレムの高笑いが、工場に響き渡っていった。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!」

銀八「どうも、坂田銀八先生です。さあ今回のアシスタントは」

奏「立華 奏がアシストするわ」

銀八「んじゃ行くぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ』喧嘩を売るとかは別に俺は幻想郷のメンバーとは仲が良いぞ。んでまあ：1人なら余裕、メンバーによるけど数人では半々だな。ちなみに苦手な物はないが：ちょっとオリキャラで苦手な人がいる。：それと俺はこっちだとオリジナルの仮面ライダーに変身出来るんだ」

ルイージ「それで定春や色んな子が出たね」

スネーク「それで早速被害が出てるな」

ネス「それで次回は攫われるようだね」

リユカ「どうなるんだろう…」

マリオ「させ、銀時やそっちにいる全員に質問だ『次の俺が10代の時に実際にやった修行でどれをやりたい?』

1・逆さ吊り1時間+全方位からの魔法攻撃

2・1時間大岩から逃げる耐久レース

3・マンモス100頭分の重りを付けて腕立て+腹筋100回

『

ルイージ「後に加わった angel beats! の皆に質問」家の兄さんどう思う?」;

フォックス「美魚に質問」女メンバー同士のカップリングはどう考えてる? ちなみに正直に答えてくれ」

次回も頑張ってください!

ネス「どうせなら…銀魂やネプテューヌに出たネタを此処でアレンジして見たらどうですか?」

ルイージ「平和だ…」

スネーク「何も来ないのは良い事だ…」…ズバリお答えしましよ
う」

全員が立ち上がる。

全員「全部イヤっ!!」

ネプテューヌ「私は2番と3番やるけど」

ノワール「私は1と2番ね」

ブラン「1番と3番…」

ベール「逆さづりを除いて1番ですわ」

銀八「やんのかよっ! お前ら! …まあいいや。次の質問は」

戦線メンバーズが立ち上がる。

戦線メンバーズ「……もはやあなたはモンスターを超えているよ」

銀八「だよな；んじゃ次」

美魚が立ち上がる。

美魚「女性の方など興味ありません」

真王「彼女は男と男のカップリングにしか興味ないらしいよ」

銀八「ああ…そう…。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってくれ」

奏「次のペンネーム『黒神』さんから質問。『1：奏、出て来るかなア？』」

2：ユリへ、原作アニメの貴方は奏に比べるとぜんぜんヒロインぽさがありませんでしたけど、気にしていますか？（黒笑い）

3：銀時の白夜叉化はいつ見られますか？

以上です。

『……私出てるのに…』」

銀八「まあ向こうが気付かなかっただけだな。では2つ目の質問は」

ゆりが立ち上がる。なぜか拳銃を持って。

ゆり「ちよつと『黒神』さんのところに行つてくるわ（黒い気を発している）」

真王「待てやめろ。3つ目の白夜変化はまだ先です。もう少しお待ちください」

銀八「はい。そんじゃ奏、ゆりを止ま「ハンドソニック」ぎゃあ
あああああああ！……！！！」

奏「ゆり、いくよ」

ゆり「脳天ごとぶつ放してあげるわ」

真王「あゝらら。彼女達行っちゃった。あつ！そうそう東和馬（焼きたて！！ジャぱんより）さんが『鳴神ソラ』さん宛てにジャぱん135号（リアクション効果：故郷のおふくろの味を思い出すようです）を送り出したようです。ついでに皆さんの分もあります。では」

日向「あ…言い忘れてたが『黒神』さん。廊下に立つ前にゆりっぺ達から逃げてくれ」

第十九訓：どこかの国ではよくさらわれる奴がいる（後書き）

真王「今回は、銀時達とジャンクゴーレムに決着が。そして理樹達は・・・」

奏「次回『希望という名の光は願いの一つである』テイクオフ」

第二十訓：希望という名の光は願いの一つである

IBGMボス戦byイレギュラーハンターエックス
(Maverick Hunter X OST, T20 :
Boss Battle)

銀時「うわったたたたたたたたたたたたた！」

ネプテューヌ「うわわわわわわわわわわわわわ！」

ジャンクゴーレム「ハハハハハハ。どうしたどうした！」

ジャンクゴーレムのジャンクバスターによって、銀時とネプテューヌは逃げ続けている。

ジャンクゴーレム「どうしたっ！まだまだいくぞっ！」

ジャンクゴーレムは銀時達に向かって、ジャンクバスターを連射する。

理樹「僕が合図をしたら、一気に発射してください」

ブラックハート「わかったわ」

ホワイトハート「おう」

グリーンハート「よろしいんですの？あなた方も狙われることもあるのですよ？」

一方では理樹達が作戦を立てていた。

それは銀時達がジャンクゴーレムの注意をひきつけさせ、クドとヴ

イヴィオを救出する作戦なのだ。

しかし、檻はどのくらい硬いか分らず、失敗するとジャンクゴーレムが理樹達に襲いかかるといいうリスクがある。

理樹「それでも・・・やる価値はあります！」

理樹は自分を、そしてみんなを信じて答える。

恭介「フツ、よしお前ら！」

ゆり「あんだ達！」

恭介・ゆり「ミッションスタートだっ！！オペレーションスタートっ！！」

リトルバスターズ・戦線メンバーズ「おうっ！！」

恭介とゆりが、リトルバスターズと戦線メンバーズに言い、全員が行動を開始した。

銀時「おいノロマ野郎！オメーの攻撃なんてあたらねーよ！」

ネプテューヌ「べ〜だ。当ててみる〜！」

ジャンクゴーレム「ヌウウウ・・・そんなに死にたいならすぐに死なせてやるっ！！」

銀時とネプテューヌがジャンクゴーレムに挑発し、ジャンクゴーレムはその挑発に乗せられ、銀時達に集中している。

真人「ここで良いのか？」

ヴィヴィオとクドが閉じ込めている檻の真下に、真人と謙吾と松下と高松とTKが配置についた。

理樹「いいよ！ノワールさん、ブランさん、ベールさんお願いします！」

ブラックハート「任せなさいー！！」

ホワイトハート「いくぜっ！」

グリーンハート「いきますわっ！」

ブラックハート達は銃で檻をつないでいる鎖に向かって、

パパパンっ！！ガガキツ！

撃った。そして鎖に命中。そして、

パキツ！

鎖が外れ、檻が落ちてきた。

ヴィヴィオ・クド「ひゃああああああああ！！！！！」

ジャンクゴーレム「ぬっ！？」

ヴィヴィオとクドの悲鳴にジャンクゴーレムがきづいた。が、

銀時・ネプテューヌ「でやあああ！！！」

ジャンクゴーレム「グウワアアアアアアア！！！！！」

余所見をしたことにより、銀時とネプテューヌの攻撃を受けてしまい、倒れた。

真人達は落ちてきている檻を、

真人・謙吾・高松・松下・TK「どわっ！！（オウツ！！）」

体を使つて、受け止めた。

理樹「みんなっ！大丈夫！？」

理樹達が駆け寄る。

真人「どうつてことねえよ。それよりホラ」

真人達は大丈夫だと言う。

檻は落下した衝撃で壊れ、ヴィヴィオとクドが解放されている。

クド「わふ〜。皆さんののおかげで助かりました！」

ヴィヴィオ「ありがとうお兄ちゃん！お姉ちゃん！」

理樹「どういたしまして」

鈴「ど・・・どういたしまして・・・／＼／＼／＼」

お礼を言われ、理樹は返事をする。

鈴はお姉ちゃんと呼ばれて、恥ずかしながらも返事をした。

ジャンクゴーレム「ごおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

理樹達「！？」

突然ジャンクゴーレムが起き上がり、理樹達の方へ向かい、

真人達「ぐわっ！」

理樹「真人っ！」

真人達を吹き飛ばした。

ジャンクゴーレム「ハア・・・ハア・・・あの2人を囷にガキどもを助ける…ハア・・・なかなかやる考えじゃないか・・・」

ジャンクゴーレムは理樹を睨んでいる。理樹、クド、ヴィヴィオはジャンクゴーレムの怒りの目に動かなくなった。

ジャンクゴーレム「だが貴様は調子に乗ったな・・・・・・死ぬがいい！！！！」

ジャンクゴーレムの右手が理樹達をとらえた。

恭介「理樹っ！！！！」

桂「いかん！早く助けねば！」

月詠「無理じゃ！わっちのクナイではあやつを倒せん！」

エリザベス「おまけに理樹さん達との距離が近いから巻き込まれるよ！！！！」

桂「くそっ！！」

月詠のクナイでは、ジャンクゴーレムのボディにはあまり傷つかず、かと言ってバズーカでも撃ったら理樹とクドとヴィヴィオが巻き込まれてしまうのだ。

ジャンクゴーレムは右手を構えたまま、理樹に問う。

ジャンクゴーレム「小僧、殺す前に遺言を聞かせてもらおうか？」

理樹「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クド「リキー！駄目です！！」

ヴィヴィオ「理樹お兄ちゃん！！」

無言の理樹に、クドとヴィヴィオがしつかり理樹の手を握る。

理樹「・・・・・・・・・・・・・・・・めない」

ジャンクゴーレム「ん？」

理樹「僕はあきらめない！！僕はお前になんか殺されない！！」

理樹は、ジャンクゴーレムに力一杯言い切った。

ジャンクゴーレム「・・・・・・・・この状況でよくそんなことが言えるな小僧。それとも、小僧共には光が見えるか？」

ジャンクゴーレムが理樹に問う。

理樹「光は光でも、僕らには希望という名の光がある！お前でも撃ち破れない光が！」

ジャンクゴーレム「・・・・・・・・ならばその光がどれほど強いのか試してよ」デュエルエッジ！！」「グウオアアツ！！」

ジャンクゴーレムが攻撃を繰り出す前に、ネプテューヌがデュエルエッジで吹っ飛ばす。

そしてパープルハートに変わる。

パープルハート「そう、希望の光は願いをかなえる力でもある！そしてその願いは、あなたを倒すことよ！！」

ジャンクゴーレム「ぬっ！グボアツ！」

パープルハートはダツシユでジャンクゴーレムに接近し、刀で切った。

ジャンクゴーレム「オオノオレエ~~~~~！！」

ジャンクゴーレムは、両腕をふり回すが、パープルハートは軽々と

避ける。

パープルハート「もうあなたと長くいる時間はないわ。消えなさいっ！！」

ザンツ！ザンツ！ザンツ！ザンツ！ザンツ！ザンツ！ザンツ！ザンツ！

ジャンクゴーレム「グッ！ガッ！ゲアッ！ゲオッ！ガフッ！ゴハッ！ガッ！ドアッ！」

パープルハートの華麗なる剣さばきに、ジャンクゴーレムは切られる切られる。

その光景は、まるで舞い踊る女神のようだった。

理樹「すごい……」

恭介「ああ……確かにすごいぜ」

クド「わふ〜。ネプテューヌさんまるで踊ってるようです〜」

ゆり「なんてきれいなのかしら……」

リトルバスターズと戦線メンバーズは、パープルハートの剣さばきに目を奪われていた。

ヴィヴィオ「……」

その中でヴィヴィオは、パープルハートの華麗な姿に酔いしれていた。

誰よりも美しく、誰よりも強い彼女の姿に、そして誰にも媚びることのない強い眼差しに、ヴィヴィオは彼女を、パープルハートを強く憧れていく。

ジャンクゴーレム「調子に乗りおって〜〜……」

ボロボロのジャンクゴーレムは、パープルハートから離れ、ジャンクバスターを発動する。

機動六課

銀時とネプテューヌ達が帰って来た。

なのは「銀さん！」

フェイト「銀時！」

銀時「よう、帰って来たぞ」

なのはとフェイトが銀時に駆け寄る。

ネプテューヌ「たっだいま」

理樹「帰ってこれた……」

恭介「何だ理樹。出られない空間から出れたような感想は」

ネプテューヌはちゃらけて、理樹は苦労したような感想を漏らし、

恭介は理樹に突っ込む。

フェイト「……ってちょっとっ！砂だらけじゃないっ!?!」

理樹の制服が砂と埃だらけになっているのに気付き、理樹はバツが悪そうな顔をする。

理樹「ああ……えと……すいません」

なのは「すいませんじゃないよっ！よく見るとみんな怪我してるしっ！」

リトルバスターズや戦線メンバーズのほとんどが砂が着いたり怪我をしていた。

真人「こんなもん傷のうちにはいんねーよ」

謙吾「これは転んで怪我したレベルだ」

野田「これはかすり傷だ」

ユイ「ちよつと汚いだけですよ」

しかしほとんどは大したことないと言う。

フェイト「だからってあなた達は傷だらけよ！！早く医務室に」駄

目……ってヴィヴィオ？」

フェイトが理樹達を連れて行くことしたら、ヴィヴィオが前に立って止めた。

ヴィヴィオ「お兄ちゃん達をいじめたら駄目……」

ヴィヴィオは涙目でなのは達に訴えた。

なのは・フェイト・シグナム・リインフォース「ヴッ！」

なのは達は精神にダメージを負った。

するとネプテューヌが、

ネプテューヌ「大丈夫だよヴィヴィオちゃん。なのはちゃん達はもう理樹君達をいじめないからね」

と言って、ヴィヴィオの頭を撫でて慰める。

ヴィヴィオ「本当？」

ネプテューヌ「そうだよ」

ネプテューヌは笑顔で答える。

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん……」

ネプテューヌ「ん？」

ヴィヴィオ「私、ネプ姉ちゃんみたいになりたい！」

突然のヴィヴィオの言葉に、周りにいるみんなが驚いた顔をした。

ネプテューヌ自身も驚いたが、気を取り直してヴィヴィオに聞いた。

ネプテューヌ「私みたいになりたい？」

ヴィヴィオ「うん！」

どうやらヴィヴィオはパープルハートの戦いに憧れを抱き、パープルハートのように強くなりたいと言っているようだ。そしてネプテューヌはこう言った。

ネプテューヌ「それはいいけど、強くなりたいならそれ相当の覚悟がいるんだよ」

ヴィヴィオ「かくご？」

ヴィヴィオは首をかしげた。

ネプテューヌ「そう、強くなるんだったらそれは相手と戦う、もしくは苦しい思いをするってことになるんだよ。相手を傷つけることもあるし、殴られたら痛いし、戦争だったら人が死ぬということがあるんだよ。」

ネプテューヌの説明を聞いているヴィヴィオだが、銀時達はネプテューヌの説得力に驚いている。ネプテューヌはノワール達とお互い戦い合っていたからこそ知っているのだ。

ネプテューヌ「もし力が欲しいなら相手と戦う、痛い思いを乗り越える、その覚悟をヴィヴィオは守れる？」
ヴィヴィオはうんと考える。

ヴィヴィオ（ネプ姉ちゃんみたいになるには人を傷つけたり痛い思いをするってことなの？・・・それは嫌だよ。けどネプ姉ちゃん・・・なんだか悲しそうな眼をしていた気がした。強くなる・・・それは苦しい思いを乗り越えること。・・・ネプ姉ちゃんは試してるんだ。私が戦うという覚悟があるかどうかを。適当なことじゃ無理なんだ。ネプ姉ちゃんたちみたいになるにはどんなことがあっても決して挫けないことなんだ！だから・・・）

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん！ヴィヴィオ頑張るっ！」

ヴィヴィオは力一杯答えた。その時のヴィヴィオはまっすぐな目をしていた。

ネプテューヌはにっこりと笑い、

ネプテューヌ「よく言ったねヴィヴィオ！イースン！」

イストワール「ハイ。出来てますよ」

ヴィヴィオを撫でた後にイストワールを呼び、そのイストワールが手にウサギのぬいぐるみを持っていた。

ヴィヴィオ「それは？」

イストワール「ヴィヴィオさんが強くなると言った証です」
そう説明し、ヴィヴィオに渡す。

イストワール「完成仕立てですので名前は決めていただけませんか？」

名前を決めると言われ、ヴィヴィオは考える。

なのは「ねえイストワールさん」

なのはが呼ぶ。

イストワール「はい、なんでしょう」

なのは「あのぬいぐるみって？」

イストワール「はい、あれはデバイスです」

イストワールが即答した。

スバル「ええっ！？あれイストワールさんが作ったんですか!？」

イストワール「そうですよ」

イストワールの答えには達は驚いた。

ティアナ「一体何をしたの？」

ティアナがきくと、

イストワール「秘密です」

笑顔で答えた。

ティアナ（シャーリーさんならすごく喜びそうね・・・）

デバイスメーカーのシャーリーが、イストワールのデバイスを見た
らすごいよろこび方をするんじゃないかとティアナは想像する。

ヴィヴィオ「・・・あっ！決まったよ〜！」

手をポンツと叩き、イストワールを呼ぶ。

イストワール「それではまずマスター認証、次にその正式名称、

それからその呼びやすい愛称マスターネームを付けてください」

それを聞いて、ヴィヴィオは分ったと言い、認証を開始する。

ヴィヴィオ「マスター認証　ヴィヴィオ

術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリッド

私の愛機デバイスに個体名称を登録

愛称は『クリス』

正式名称『セイクリッド・ハート』

いくよ、クリス

セイクリッド・ハート

セーリット

アーリーープ

《ヴィヴィオセットアップ中》

セットアップした姿は全身黒いタイツに腹部は鎧の一種がつけられているがバリアジャケットは白い部分があり、なのはバリアジャケットとやや似ている。ただ、そこはあまり問題はないが、一番の問題は何とヴィヴィオの姿が大人になっているのだ。胸はボイン！ウエストはキュッと引き締まっており、傍から見れば美しい美女に

ガシィッ！！

ネプテューヌ達がなのは達をつかんで、
ネプテューヌ「ドオオッセイッ！！」
投げ飛ばして、

なのは・フェイト・シグナム・リインフォース・ティアナ・スバル・
アルフ

「ああああああああああああああああああ！！！！！！」

チャポンッ！

海へと落ちた。

なのは「ちよつと！なにをするの！？」

ずぶ濡れのなのはがネプテューヌに問い詰める。濡れてるせいか、
服が透けているため、新八含む男性陣が顔を赤くしている。

ネプテューヌ「暴走寸前だったから頭を冷やしてあげたんだよ」

シグナム「むっ、それは謝るが銀時の妻になるのは私なのだからな
！」

シグナムが妻になると言ったせいで、なのは達が突つかかる。

フェイト「違うよ！銀時とヴィヴィオの妻になるのは私だよ！」

なのは「フェイトちゃんそれは絶対に渡さないよ！」

リインフォース「銀時の妻は私だ！」

スバル「隊長達だけはずるいです！あたしも」

ティアナ「兄さんの妻は私よ！」

アルフ「あたしだ〜！」

ま〜たなのは達は言い争いを始めた。

銀時「ま〜た始めやがったよこいつ等」

ネプテューヌ「みんな後見人になるって選択をあると思うんだけどな〜」

銀時はため息をつき、ネプテューヌは不安を漏らす、

なのは・フェイト・シグナム・リインフォース・ティアナ・スバル・アルフ

「後見人！？それだ！！」

後見人という言葉に、なのは達がひらめいた。

フェイト「銀時！私たちがヴィヴィオの後見人兼銀時のママとしてやっていくよ！」

銀時「後見人はいいとしてもそこだけは限定かよ！？」

まあそんなこんなでなのは・フェイト・シグナム・リインフォース・ティアナ・スバル・アルフはヴィヴィオの後見人となった。そしてヴィヴィオはなのは達をママと呼ぶようになった。（スバル、ティアナ、アルフは除く）

理樹「楽しそうですね銀さん」

理樹は銀時に歩み寄って言う。

銀時「ま〜な。オメエも楽しい仲間がいるじゃねえか」

理樹は恭介達リトルバスターズを思い浮かべ、クスツ笑う。

理樹「はい」

ゆり「私達も忘れないですよ〜」

こうして理樹達リトルバスターズとゆり達SSS団は六課の協力者になり、銀時達と過ごすことになった。

く余談く

来ヶ谷「あは…あははははは…ヴィヴィオ君は大人じゃない…あははははは」

小毬「ゆいちゃくくくくくくくんッ!!!戻ってきてくくくくくくくくくく!!!」

大人化したヴィヴィオを見て、来ヶ谷が精神崩壊寸前だったことは言うまでもない。

くおまけく

銀八「教えて!」

全員「銀八先生!!!」

銀八「どうも…。さあ今回のアシスタントは」

ユイ「ユイにゃんがアシストしますよ」

銀八「ユイにゃんつて…まあいいや。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『フォックス』（良かった…もしそう言うの考えてたら質問した側としてどうしたもんかと思ってたぞ；）」

マリオ「ああ…美味しいのは美味いけどなぜか師匠とヘキサさんと
の修行の日々を思い出す（涙）」

…苦勞した日々を思い出して哀愁の涙を流してるよ；

ソニック「けどマジで美味しいな」

リュカ「……（ず～～～ん）」

ネス「ああ！リュカが良い思い出を振り返ってたけど大切な人を出出して沈んだ！！」

ルイージ「それにしても相手は厄介だね…」

スネーク「そしてちゃっかりと桂にアピールするグリーンハートも
といべールだな…」

マリオ「？…それよか…お前らの原作の日常よりかマシじゃないかな？」
Angel Beatsの答えにちよつと不満げ

ルイージ「そう言えば…気になった事があるから真王さんに質問『Angel Beatsのメンバーもレギュラーですか？』」

スネーク「Angel Beatsのメンバーに質問だ」マリオに称号を付けるならどんな感じのだ？ちなみにリトバスメンバーが言ったの以外で頼む」

フォックス「と言うか…俺の前々回の質問がちゃんと答えられてないからもう一度…」真王が知ってるアニメ、漫画、ゲームの中でこれは出て来て欲しくない敵キャラはいるか？ちなみにチートキャラとかバグキャラと呼ばれるのは省いてくれ…ちゃんとキャラの名前で答えて欲しい。系とかうねうねと体を動かしてる動作で表すのはなしだからな」

そんな訳で次回を楽しみにしています

マリオ「パンは美味かったぞ」…ズバリ答えましょう。angel beats組はレギュラーの仲間入りです。んで次はあいつらがマリオの称号を考えた結果こうなりました。」

紙に、「赤き貴公子」「烈火の拳闘者」「クツパより強い」「レッツドグラトニー」「天然なるアホ」と書かれている。

銀八「そして最後は」

全員が立ち上がる。

銀時「正直オレはキングダムハーツのファントムがいやだ…（ビクビク）」

新八「僕もです…」

神楽「私もイヤネ！」

桂「俺は苦手な奴などいない」

エリザベス『同じく』

月詠「わっちは苦手なものなど克服しておるぞ」

なのは「私はテレサがちょっと無理なの……（ビクビク）」

フェイト「ゲッソーはちょっと……」

はやて「ゴキモンが嫌いや！」

シグナム「モルボルは……嫌だな」

ヴィータ「あたしはドラクエのミイラ男が嫌いだった！」

シャマル「私はボスパックンがいやです！」

ザフィーラ「私はない」

スバル「フロウスが嫌い！」

ティアナ「私も無理よ！」

エリオ「実は僕もです」

キャロ「わ……わたしも」

ネプテューヌ「私はないかな」

ノワール「モルボルは嫌よ！」

ブラン「テレサ嫌い……」

ベール「ゲツソーは嫌ですわ」

銀八「ハイ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ユイ「次ですね ペンネーム『sibugaki』さん。『何か強敵っぽいのが出てきましたねえ
こりゃ次回が楽しみですなあ
つてあれ？新撰組は？
此処で質問です」

天の助

「この物語に出てくる全てのキャラに質問だ！
ズバリ、俺を食ってくれ！」

は〜い、だそうですので適当にあしらって下さい
んじゃそう言う事で『…』って言うか」

全員「いらないよ」

銀八「だよな」

ネプテューヌ「え〜。心太を焼いて食べたらおいしいんじゃないの
？」

銀八「食う気かお前！？……はい『sibugaki』さん。廊

下に立ってなさい」

真王「その前にマリオに言いたいことがあるという方がいますよ」

ゴジラ「『鳴神ソラ』とその仲間たちよ。『我と勝負しろ！』以上だ」

銀八「ゴジラあ~~~~~~~~~~~~!!?!?みんなにげて~~~~~
~~~~~!!!!!!」

**第二十訓：希望という名の光は願いの一つである（後書き）**

真王「リトバス編が終了！…けどその前に番外編が始まります」

ユイ「次回『変身すると姿が変わるだけでなく性格も変わる』テイ  
クオフですよ」

番外訓：変身すると姿が変わるだけでなく性格も変わる（前書き）

真王「銀時がちょっと災難な目にあっ？」

銀時「何で疑問形？」

真王「成り行き」

## 番外訓：変身すると姿が変わるだけでなく性格も変わる

### 機動六課・訓練場

銀時「あゝ〜かつたるいな〜…」

ある日、銀時が肩を回して散歩していた。

銀時「ん？」

すると、銀時は木の陰でイストワールを見つけた。

銀時は気になって呼んだ。

銀時「お〜い、イスン何やってんだ？」

イストワール「あ、銀さん」

???「おお、銀時か」

銀時の呼び声にイストワールと腰まである青い髪の美女が返事をした……あれ？

銀時「……あれ？なあイスン…そいつ誰だ？」

銀時は、イストワールと一緒にいる金色の目に腰まである長くて青い髪で、着ている服は何やらパープルハートみたいな感じの美女を指差す。

???「ひどいな〜。あたしだよ、スバル」

少女はスバルと名乗った。

銀時「……ハア？スバルう？嘘をつくのはよくないぞオメー」

この女頭でもいかれたか？みたいな顔で言う。

銀時「あれ？待てよ……今の声スバルだよな〜…」

美女の声が何だかスバルみたいな声だったので、銀時は考え込む。

イストワール「……スバルさん、一度変身を解除してくだ





そう言うスバルの右腕に確かに腕輪があった。

銀時「イースンイースン？・・・これはいったい何だ？」

イストワール「それは私が作った『女神の腕輪』です。それを装備して変身を望むと文字通り変身するんです」

銀時がスバルが付けている腕輪についてイストワールに聞くと、答えた。

銀時「・・・あゝ、なるほど」

銀時はなんとか納得した。

するとネプテューヌ、なのは、フェイト、ティアナ、エリオ、キャラがやって来た。

ネプテューヌ「あれ？銀さん、スバル、何やっているの？」

銀時「ああ、この腕輪のことを話してたんだよ」

銀時は、スバルの付けている腕輪を指差して言う。

エリオ「何なのでしょつかその腕輪」

イストワール「それはですね」

イストワールは腕輪のことを説明「・・・そして、

ティアナ「ふゝん。スバルちよつと貸して」

スバル「え？うん」

スバルは腕輪を外し、ティアナはその腕輪を装備する。

ティアナ「(ぱつと見唯の腕輪みただけど...やってみよっかな)変身っ！」

ティアナが叫ぶと突然光りだし、収まるとそこにいるのはオレンジロングヘアの青い瞳の美女がいた。

なのは「・・・え？ティアナ？」

ティアナ？「何ですかなのはさん」

なのはが美女に聞くと、美女は答えた。しかも声がティアナそのものだった。

フェイト「ティアナ!? 本当にティアナなの!?!?・・・でも確かに声はティアナだけだ」

ティアナ? 「姿が変わってますから私だとは分らないですよ。でもこの姿は一応シューティングハートって名前ですが」

ティアナ・・・シューティングハートは自分の姿を見て言う。

銀時「シューティングハート? 普通にティアナで良いだろ」

シューティングハート「私はこの姿をシューティングハートって呼ぶことにするのよ。でもやっぱり呼びやすいティアナでもいいわ」

スバル「あっ!、私はキャリバーハートってつけたんだよ」

銀時「そうかい」

変身時のティアナはシューティングハートと、変身時のスバルはキャリバーハートと名づける。

ネプテューヌ「どうせならなのはちゃん達もやる?」

いきなりネプテューヌが提案しだした。

なのは「え?」

フェイト「私達も?」

ネプテューヌ「うん。ティアナもいいよね?」

シューティングハート「・・・まあいけど」

シューティングハートはそう言うと、ティアナに戻った。

ネプテューヌ「それじゃあ、なのはちゃんから」

ネプテューヌはなのはに腕輪を渡す。そしてなのはは装備する。

なのは「どんな感じなのかな・・・変身!」

なのはが叫ぶと光りだし、晴れるとそこには蒼い瞳に白髪ロングの美女がいた。

なのは？「わあ、すごいなの！」  
ネプテューヌ「それじゃあ、なのはちゃんはその姿はどんな名前にするの？」  
エンジェルハート「うん・・・エンジェルハートにするなの！」  
なのは・・・エンジェルハートはネプテューヌから名前を聞かれ、名乗る。

フェイト「エンジェルハート・・・『天使の心』って意味だね」

銀時「天使だあ？魔王で充分だろ？って言うか『なの！』って思いつきり時代遅れ」

ズドンッ！！

エンジェルハート「何か言ったなの？銀さん？」

銀時「ハイ。言ッテマセン」

銀時は思いつきり言っただけを言ったため、エンジェルハートに脅され、青くなる。

地面はえぐれ、そばにいるフェイト達はガタガタ震えている（ネプテューヌは除く）。

ネプテューヌ「次はフェイトだよ」

エンジェルハート「・・・分ったなの・・・」

ネプテューヌの指示に、エンジェルハートはしぶしぶ従い、なのはに戻ってフェイトに渡し、フェイトは装備する。

フェイト「それじゃあ・・・・・・変身！」

フェイトが叫ぶと光りだし、晴れると金色の目の金髪ロングの黒い服の美女がいた。しかも露出度はグリーンハート並である。

なのは「わあ／＼／＼／＼／」



る。

そして光がはれると、美しいロングの銀髪に蒼い瞳、シグナム級のバストをもち、右手には名刀らしきものが握られている美女がいた。

なのは「・・・え?・・・銀さん?」

フェイト「銀・・・時・・・?」

なのは達は美女に話しかける。

???「・・・ってなんじゃこりゃああああああああああああああああ!!!」

美女は突然叫びだし、なのは達はびくつ!となる。

???「なんだよこれ!?俺女になってるう~~~~っ!?!?」

美女は自分の姿にパニクっている。しかも声は銀時の声だ。

ネプテューヌ「わゝ、かわいいじゃん銀さん」

銀時?「オメゝに可愛いなんて言われたくねえよっ!」

銀時?はネプテューヌにからかわれて怒鳴る。

イストワール「銀さん、一応その姿の名前はシルバーハートにしますがどよろしいですか?」

シルバーハート「おっ!なんかそれかっこよくな?・・・ってちげーよ!!!何で俺女になっただよっ!!!」

銀時・・・シルバーハートは、自分が女になってることへの不満を言うが、

イストワール「それは仕様です(´、`)(´、`)」

シルバーハート「腹立つ!!!顔文字も含めてメツチャ腹立つ!!!」  
サラッと流される。

ムニムニッ

シルバーハートがイラついているところに、ネプテューヌが・・・シ

ルバーハートの胸を触っていた。

ネプテューヌ「わあ、銀さん柔らかい」

シルバーハート「ちよっ、おま・・・何胸触ってんだよっ!？」

ネプテューヌに胸を触られて、あたふたするシルバーハート。ちなみになのは達は2人のやり取りに顔を赤くしている。

ネプテューヌ「ホント銀さん柔らかいね。コンパとは違った柔らかさと触り心地だよ」

自分の顔をシルバーハートの胸に埋まりながら揉んでいる。

シルバーハート「オイイイイイイイイイ!!お前それ唯の変態じゃねーかアアアアアアアア!!!!」

シルバーハートは怒鳴り散らす。

シルバーハート（まずいつ!非常にまずいつ!!こんな姿を誰かに見られたら・・・(汗)）

シルバーハートは冷や汗を流している。こんな姿を見られたらとてもではないが、生きていけない。周りからは痛い男として見られるのがおちだ(この場にいる全員を除く)。

特にはやては人の胸を揉みに来るやつだからシルバーハート(銀時)の貞操の危機が来るし、九兵衛は胸の大きな人を嫌うやつだから命の危機が来る。

そんなことを考えていると、

はやて「何しとるんや」

九兵衛「君らは何をしているのだ？」

タイミング悪く2人が来てしまった。

シルバーハート(ゲッ!)

なのは「あ、はやてちゃん」

はやて「なのはちゃん、そのネプちゃんが抱きついてるんはだ







シルバーハート「・・・おお・・・」

グライダーのように飛んでいる自分に驚くシルバーハート。

ネプテューヌ「どう？銀さん。始めて飛んでみた感想は？」

ネプテューヌがきくと、シルバーハートはにっこりと笑う。

シルバーハート「スゲーゼネプテューヌ。他にもできるのか？」

ネプテューヌ「もちろん。まあ、ためしてみて」

ネプテューヌが指示すると、シルバーハートはその指示通りに動いたり飛んだり武器を使って攻撃したりした。

シルバーハート「サンキューな。いい経験をしたぜ」

ネプテューヌ「どういたしまして」

シルバーハートは感謝し、ネプテューヌは返事をする。

シルバーハート「っかもうこんな恰好はウンザリだ」

ネプテューヌ「また飛びたいんだったらその恰好だけど・・・」

シルバーハート「ああ・・・そう・・・ハア・・・」

シルバーハートはもう変身したくないと言い出すが、ネプテューヌに言われ、ため息をついた。

余談だが、ミッドチルダ全域に『六課の銀の美女』と呼ばれる噂があり、世界的に大人気を博したのは言うまでもない。なお、その美女に正体でもある人物は若干胃が重くなってきたことも言うまでもない。



ルイージ「やっぱり…」

(溜息を付いた後にコスモブラックを取り出し…)

ルイージ「コスモス!!」

(言うと同時にコスモブラックが光り、ルイージはウルトラマンコスモスへ変身する)

またまたおiiiiiiiiiiii!!!

スネーク「させ…叫んでる作者を無視して感想だが…OPがとある科学の超電磁砲レールガンだったのは置いといて…ジャンクゴーレムの戦いは終わったな」

フォックス「ああ…見事なコンビネーションだったな」

ネス「それはそうと…まさかのこれより後のVividで出るヴィオの奴が出たね」

リユカ「これが一番の驚きだよね…」

ピット「と言うか称号の中で凄いのあるね…」

ソニック「だな…皆に質問だけど…『現代いる六課のメンバーを足が速い順で並べたらどうなる?』」

Uゼロ「これで決まりだ!ファイナルウルティメイトゼロ!…」

コスモスFM「御免ね、コスモストライク！」

ゴモラ「ぐおおおお！！」ドカーーン！

スネーク「倒したか：メンバーに質問だ：『家のルイージに称号を付けるならどんな感じだ？』」

フォックス「ヴィヴィオに質問、『デバイスを手に入れて今後どう言う技を作ってみたいんだ？真王が知ってるアニメ、漫画、ゲームの奴を参考にしても良いぞ』」

ネス「次回を楽しみにしてます」

『ズバリ作者が答えましょう』

真王「ハイ。早さ順で並べるならこんな感じですよ。」

紙に、フェイト<エリオ<なのは<スバル<シグナム<リインフォース<ヴィータ<ザフィーラ<はやて<ティアナ<シャマル<キヤロ、と順番に並んでいる。

真王「2つ目は、彼らはこう書きました。」

紙に、『緑の貴公子』『永遠の二番手』『英雄の弟』『幽霊嫌い』

『お化けの掃除人？』と書かれている。

真王「そして三つ目は…ヴィヴィオ、答えなさい」

ヴィヴィオ「私は原作通りの技を使うけどパパとネプ姉ちゃんからオリジナルを作ろうと思ってるんだ」

銀八「くうく。羨ましいぞ畜生。『鳴神ソラ』。廊下に立て」

岩沢「何で命令形？まいつか。ペンネーム『sibugaki』さんからの質問。『ランド』いよ、大将モテモテじゃねえか羨ましいねえ、俺はランド・トラビス。人読んでザ・ヒートだ！（キラリン）んじゃ俺から質問行くぜ。ズバリ！どうやったたら大将みたいにボインで美人な姉ちゃん達にもてるんだ？教えてくれ！……つて、やべ！メールが来た！んじゃ俺はこれで……つてぎやあああああ！待てメール！俺が悪かった！だからそれで殴るのは……頼むからガジェット？型を投げるのは勘弁つてぎやあああああ！」

ブツン……『……何がしたいんだこいつは？』

銀八「知らねえよ」

銀時「俺もなんで持てるかなんてしらねーよ」

岩沢「じゃあ『sibugaki』さん。廊下に立て。次はペンネーム『黒神』さんからの質問。『音無へ』

僕の小説『リリカル銀魂strickers』攘夷戦争鎮魂歌』を見て、感想をお願いします。

ネプテューヌ又全員へ

『劇場版 銀魂 新訳紅桜編』と言う映画ですが、見てみます？見たら具体的に感想をお願いします。

キャラロへ

神楽と月詠の事をどう思っていますか？

黒神

「以上です。」「一つ目は音無、答えてくれ」

音無が立ち上がる。

音無「シリアスを除くともうグダグダだよ・・・」

ネプテューヌ「2つ目は私達暇があったら見るよ」

真王「んじゃ三つ目。キャラロは？」

キャラロ「・・・むかつきます」

銀八「・・・『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

真王「あつ！そつだ、『鳴神ソラ』にこの『女神の腕輪』（女神に変身できます。男キャラは女体化します）をプレゼントしますよ」

銀八「ちよつとまてや。誰につけさせるんだよ」

真王「誰でもいいよ。ピーチでもいいし」

銀八「・・・まあいいか」

番外訓：変身すると姿が変わるだけでなく性格も変わる（後書き）

真王「次回はやっぱり短編集。それではまた会いましょう」



## 超短編集2（前書き）

真王「この短編集にエロい表現が含まれています！それでも見るのならあなたは勇氣ある紳士です。それではご鑑賞あれ」

## 超短編集2

「仲間が増えた」

機動六課の食堂で、銀時達はまた宇治銀時井を食べていた。

ヴィータ「・・・まゝたお前らは食べてんのか？」

ヴィータは片眉をあげて言う。

銀時「当たり前だ。甘いもんとらねえと俺いらいらするから」

フェイト「ヴィータも食べてみたらこのおいしさがわかるのに・・・」

ヴィータ「絶対お断りだ」

ヴィータは宇治銀時井など絶対食べないと誓った。

ネプテューヌ「な〜んでヴィータはこのおいしさが分らないんだろ  
うね〜」

小毬「これおいしいのにね〜」

クド「どんとみ〜とはダメなのです〜」

ユイ「味が理解できない人はアホですね」

ヴィヴィオ「パクパクパク・・・」

ヴィータ「あんなもんあたしは食べる気がしな〜って増えてるう！

!？」

ヴィータがネプテューヌの方へ向くと、何と宇治銀時井を食べている小毬とクドとユイとヴィヴィオがいた。

小毬「一度食べてみたら甘くておいしいから私好きになっちゃった  
?」

クド「ネプテューヌさんに勧められたのですがこれはでりーしゃす  
なのです!」

ユイ「実は私だけでなく岩沢さんも食べてますよ」

ヴィヴィオ「おいし〜！」  
ヴィータ「・・・まさかどんどん増えていくんじゃないだろうな・・・」

ヴィータはこの先が不安になってきた。

〜椎名と定春〜

ある日、椎名は定春の前に立っている。

椎名「・・・・・・・・・・・・・・・・」

定春「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お互い見つめ合って・・・そして、

椎名「とうっ！」

定春「ワン！」

椎名が定春に向かって走り出し、定春は椎名を・・・・・・・・バックリと口に入れた。

椎名「ああ・・・・・・・・やっぱり幸せだ」

頭から噛みつかれても、血を流してもなお離れない椎名。

銀時達が見つけて抜き取るまで5時間続いた。





！」

クロノ「原因は何だ!？」

局員「分りません!」

クロノ「質量兵器の誤爆か？」

ネプテューヌは『かめはめ波』を習得した。

く出ちゃった!2く

ネプテューヌ「でね・・・ここをこうやってこうして・・・」

ヴィヴィオ「えつと・・・ここをこうして・・・」

ネプテューヌ「そうそう!そんな感じ!」

ネプテューヌとヴィヴィオは、2人してかめはめ波の練習をしていた。

なのは「あれ?ネプちゃんにヴィヴィオ」

後ろからなのは・フェイト・はやて・シグナム・ヴィータ・リイン  
フォース・神楽・新八・桂・エリザベス・月詠・銀時が来た。

ネプテューヌ「あ!銀さんになのはちゃん」

ヴィヴィオ「なのはママ!」

2人は振り向いて答える。

フェイト「2人して何をやっているの?」

フェイトがきくと、

ネプテューヌ「ヴィヴィオにちょっとした教導をやってるんだよ」

ヴィヴィオ「だよ」  
ネプテューヌが教え、ヴィヴィオはネプテューヌのセリフの語尾を言う。

なのは達は意外そうな顔をしたが、銀時だけは複雑な顔をした。なぜなら銀時はネプテューヌのやつてることが理解できたからだ。

ネプテューヌ「それじゃあヴィヴィオ！本番行くよ！」  
ヴィヴィオ「うん！」

ネプテューヌの指示に、ヴィヴィオは構えをとる。かめはめ波の構えを。

銀時（あれ？なんかいやな予感しかしねえ・・・）  
銀時は不安を抱く。

ネプテューヌ・ヴィヴィオ「かーめーはーめー  
！！！！」

2人が言うと同時に、ネプテューヌは紫色の、ヴィヴィオは虹色の光の玉が現れ、

ネプテューヌ・ヴィヴィオ「波——————！！！！」  
ドキュウウウウウウウウウウウウッ！！！！

一斉に砲撃が空に放たれ、

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

爆発して・・・星が消えた。

全員「……………（@□@）」

なのは達だけでなく、万事屋組と桂、エリザベス、月詠までもがあらんぐり状態になった。

銀時は一度見たが、ヴィヴィオまで出すとは思ってもよらなかったらしい。

ネプテューヌ・ヴィヴィオ「どうかなみんな（なのはママ）！！」  
全員「ハハハハ……ホ……本当ニスゴイデスネ……」  
やっぱりみんなは驚きのあまり片言しゃべりになった。

時空管理局本部付近・クラウディア

局員「クロノ艦長！！惑星　　が消滅しました！！」

クロノ「なんだとっ！？原因は何だ！？」

局員「分りません！！」

クロノ「……一体何が起こったって言うんだ！」

ヴィヴィオは『かめはめ波』を習得した。

（はやてのおっぱい万歳記（小毬編））

はやて「およ？小毬ちゃん」

小毬「あ！はやてさん」

はやてが廊下をうろろろしていると、小毬とであった。



はやて「何処に行くん？」

小毬「鈴ちゃんとお菓子を食べようとしてるところなんです」

小毬は鈴の部屋に向かい、一緒にお菓子を食べようとしていくようだ。

はやて「さよか。けどな、うちにはそのマシユマロをいただくで！」

小毬「キヤアッ！」

はやては小毬の胸を揉み始めた。

はやて「おおっ！なかなかの柔らかさと大きさをもつとるな」

小毬「ふえええ〜」・・・「はやてさ〜ん〜、やめて〜」

小毬はやめてほしいと言うが、はやては止める気なしだった。

はやて「嫌や。このマシユマロはうちが頂くんや」

小毬「そんな〜」・・・「私お嫁もらえないよ〜」・・・

小毬は涙目で訴える。

はやて「うふふ・・・そろそろ本食w」小毬ちゃんに何すんだ〜

「ガボガアアアアア!!!」

揉んでる間に後ろから鈴のハイキックをくらい、吹き飛んだはやて倒れたはやては凜々しい顔をしていたそうだ。

〜はやてのおっぱい万歳記（リベンジベール編）〜



ベールの胸をひたすら揉むはやて。逆にベールは顔を赤くして、はやてを見続けている。

ベール「……………はやてさん」

はやて「ん？」

はやてが見上げると、ベールはグリーンハートに変わる。

グリーンハート「……………お楽しみはこれからですよ？」

はやて「え？」

なのは「はやてちゃん遅いな〜」

一行に現れないはやてを心配し、なのはは迎えに行った。が、はやての部屋にははやてはおらず、たまたま通りかかったネプテューヌがベールの部屋にいたと言うことで、ベールに部屋に向かった。

なのははベールに部屋の前に着いた。

なのは「はやてちゃん〜ん。いるー？」

なのはは呼ぶが、返事がない。仕方なく扉の前で耳を澄ますと、

ギシ…………ギシ…………ギシ…………ギシ…………

ベッドの音が聞こえる。それどころかなぜか嬌声が聞こえる。

なのははこっそり扉を少し開け、中を覗くと、

はやて「ハア…………ハア…………アフツ…………そんなに動かんとい  
てえ…………」

グリーンハート「アンツ…………まだまだ…………ん…………終わリませ

んよ・・・ん・・・」

とっつてもいけないことをやっていた。それも全裸で。

はやてはグリーンハートの胸を揉み、グリーンハートは腰を動かしている。

なのは「//////////」

なのは扉をしめ、見なかったことにした。

後日、はやてとベールがなぜ仲良くなっていました。

〔来ヶ谷の幼年観察日誌（クド・ネプテューヌ編）〕

来ヶ谷「さて・・・クドリヤフカ君の様子を見てくるか・・・」

来ヶ谷はそう言ってクドの部屋に向かう。

その扉の前で、少し開けて中を覗くと、

ネプテューヌ「よいではないか〜よいではないか〜」

クド「わふう…それ以上はやめてくださいです〜」

ネプテューヌがクドをこしょばしていました。

ネプテューヌ「クドちゃんはここが苦手なの？そうでしょ？」

クド「わふう！？そ、そこは・・・駄目なのねす〜〜！！」

あるうことがネプテューヌは、クドの胸を触り始めて、百合っぽくなってきました。

来ヶ谷「ブシューアアアアアアアアアアア！！！！」（鼻血）「

すごい光景（来ヶ谷にとって）をみて、廊下一面に盛大な鼻血を出す来ヶ谷。その時の表情はとても幸せそうだった。

理樹「く、来ヶ谷さああああああああん！！！！？？？いたいながあつたのおおおおおおおお！！！！？」  
たまたま通りかかった理樹が見つけて、来ヶ谷は貧血からまぬがれた。

「それはダメだろ」

ネプテューヌ「椎名さ〜ん。何か遊ばない？」

椎名「・・・あさはかなり」

ネプテューヌが椎名と一緒に遊ぼうとしているが、

ネプテューヌ「し・い・なさ〜ん。何かやろうよ〜」

椎名「あさはかなり」

椎名はあさはかなりのひとつ走りで、遊ぶ気ではないようだ。

ネプテューヌ「ぶ〜。つまんないの〜。……………そうだ  
！」

ネプテューヌは何かを思い出し、部屋から出て言った。

椎名「？」

椎名はネプテューヌの行動が理解できないが、とりあえず待つことにした。そして、

ネプテューヌ「じゃーん！！これ似合っ？」

頭に犬耳、犬の手袋と犬の尻尾、そして露出度の高い犬の毛皮を着たネプテューヌが戻ってきた。

椎名「ゴフウツ!!!（吐血＋鼻血）」

そんなネプテューヌを見た瞬間、椎名が吐血と鼻血を同時に出し、倒れた。

ネプテューヌ「え?どうしたの?椎名さん!？」

ネプテューヌ自身は、唯、椎名を驚かせる為に犬の衣装を着たのだが、まさか吐血と鼻血を出して倒れるなんて思いもよらなかったのだ。

ノワール「なによ!今の音!」

来ヶ谷「一体何があったのだ?」

ネプテューヌ「あ…ノワール、来ヶ谷さん」

音を聞きつけ、ノワールと来ヶ谷がやって来た。そしてネプテューヌの姿を見た瞬間、

ノワール・来ヶ谷「ガハアツ!!!（吐血＋鼻血）」

椎名と同じように、吐血と鼻血を同時に出し、倒れた。

ネプテューヌ「…と…え」と…これ私が悪いの?」

倒れた3人に、ネプテューヌはただ啞然とするだけだった。

「ゆいちゃんと呼ばないで」

小毬「ゆいちゃん〜ん」

来ヶ谷「だからゆいちゃんと呼ぶのはやめてくれ・・・」

何やら小毬が来ヶ谷にゆいと呼んでいるが、来ヶ谷は嫌がっているらしい。

銀時「何やってんだお前ら？」

銀時とネプテューヌがやって来た。

小毬「実は私ゆいちゃんと一緒に菓子食べようと思って」

来ヶ谷「そう言うことだ。あと小毬君、ゆいちゃんと呼ばないでくれって」

来ヶ谷はまたゆいちゃんという単語に突っ込む。

ユイ「誰か私を呼びました？」

すると、ユイが来た。

小毬「う〜んとね、『ユイちゃん』に用があつたわけじゃなくて…

…『ゆいちゃん』に用事があつたの〜」

ユイ「……へ？ それって変わらないじゃないですか」

小毬「あれ？ えっと……」

来ヶ谷「つまり、君にはなく私に用があつたということだ」

小毬の説明だと、いつまで経っても誤解が解けないと考えた来ヶ谷は、ユイにそう言ったのだった。

するとユイは、

ユイ「ああなるほど！ 来ヶ谷さんは名前が『唯湖』だから、小毬さんに『ゆいちゃん』って呼ばれてるんですね？」

来ヶ谷「うう……だからその名前で呼ぶのはやめてくれ。あまり慣れてなくてな……」

ユイにまでゆいちゃんと呼ばれ、歯がゆくなる来ヶ谷。  
ネプテューヌ「呼ばれるの恥ずかしいの？ゆいちゃん？」  
来ヶ谷「ね・・・ネプテューヌくんまで・・・」  
ネプテューヌにまでゆいちゃんと呼ばれる始末。

銀時「そうなのか？ だったら俺が呼んでやるよ……ゆいちゃん……」  
来ヶ谷「死ぬがいい」

銀時「ぎゃあああああああああああ……！！！！」  
銀時がゆいちゃんと呼ぼうとすると、来ヶ谷は腰にぶら下げている模造刀を使って……一閃。

銀時はそのまま気絶し、恐らくしばらくの間は身体を動かすことはできないだろう。

ネプテューヌ「あら」。銀さんみたいなむさい男はダメなのか」  
ユイ「（うわあ、この人を敵に回すのだけは絶対にやめよう）」  
ネプテューヌは倒れた銀時を眺め、ユイは、心の中で逆らうのはやめようと誓ったのだった。

（ヴィヴィオの修行）

ヴィヴィオ「フツ・・・ハツ・・・とう！」  
パープルハート「その調子よ」

機動六課の訓練場で、ヴィヴィオはパープルハートと修行をしていた。ちなみに現在ヴィヴィオは大人化している。





ヴィヴィオ「あ…はい」  
割れた地面など気にせず、ヴィヴィオにほめるが、ヴィヴィオ自身はちよつと罪悪感が残った。

グリーンハート「まずは防御力から行きます。ハアツ！」  
ヴィヴィオ「くっ！」

次の修行は魔法に関しての修行である。担当はグリーンハート。  
ヴィヴィオはシールドを展開し、グリーンハートの攻撃を防いだ。

グリーンハート「まだ終わっていませんよ!!」  
槍でシールドをガンガン攻撃するグリーンハート。

グリーンハート「ハアアツ!!」  
ヴィヴィオ「きゃあああああああ!!……!!」

最後の一撃に、ヴィヴィオは後退された。シールドを展開しながら。

グリーンハート「…よくここまで登りつめましたね」  
ヴィヴィオ「ハハハ…ありがとうございます」

グリーンハートはほめて、ヴィヴィオはボロボロになりながらも笑いを浮かべる。

グリーンハート「次は砲撃魔法ですが…撃てますか？」  
ヴィヴィオ「大丈夫!任せて!!」

ヴィヴィオは砲撃を撃つ構えをとり、  
ヴィヴィオ「デバインバスターー!!!!」

なのはの十八番でもあるデバインバスターを撃った。

グリーンハート「…合格です。なかなかの威力でしたよ」

ヴィヴィオ「ありがとうございました」  
こうして、ヴィヴィオの一日の修行は終わるのだった。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「短編集なのに、やっちゃいました。ではアシストは」

ヴィヴィオ「ヴィヴィオだよ」

銀八「よし！いくぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『フォックス』  
「これは良い物を貰った（黒い笑顔）」

ルイージ「（フォックスがドSモードになってる！）」

スネーク「（この時のフォックスの餌食になるのは…）」

フォックス「ファールコ俺たちの中で思いっきり女体化してるお前が装着してくれ」と言うかしろおおおおお！！！！！！」

ファルコ「おまつ！やめ！ってエンジエやエイン！俺を掴むな…やつ、ヤメロオオオオオ！！！！！！」

させ…あつちは置いて…まさかのスバルやティアナ他、なのはやフェイトまで女神か！

マリオ「銀時もなったな…」愁傷様、後、なのは（冥王）は砲撃女神だろ？」

ついに言ってもうたこの人！

ルイージ「退避だよ退避！！」

スネーク「またか」

ネス「と言うか銀さん飛ぶと言う夢が叶ったけどなんとも言えないだろうね…皆に質問『作者が『月夜に舞う龍』で投稿してる作者の小説の感想を聞かせてくれませんか？なお、鳴神を取った『ソラ』で投稿してるので』」

フォックス「ふはははははは！！見よ！ファルコもとい不動の女神姿を！（黒い笑顔）」

不動「つゝゝゝ／／／」腰まで伸びた青髪に前髪一房が赤くなっていて、青い目、スタイルはそちらの女神化した銀時より上、背中に青い鳥の羽を模した翼を装着している。

エンジエ「あつ、姉貴凄い／＼／」

エイン「萌えですね／＼／」

フラン「ふわ〜〜不動凄〜〜い」

お空「うにゅ〜」

フォックス「ホントこの時のファルコは弄り易いで（黒い笑顔）皆に質問『内のファルコの女神姿はどうだ？』」

ルイージ「∴そっちの途中参戦のリトバスメンバーとSSS団の皆に質問『この時のフォックスはどう思う？』∴∴ズバリ、1つ目を答えましょう」

全員が立ち上がる。

全員「微妙・・・に面白い？」

銀八「何で疑問形？・・・まあいいや。2つ目は」

銀時「こりゃすごいことになってんな・・・」

全員「何かすごいね・・・」

銀八「ハイありがと。そして三つ目は」

リトバス組とSSS団が立ち上がる。

リトルバスターズ・戦線メンバーズ「キモイ」

理樹「フォックスさんがそんな人だなんて知りませんでした（軽蔑）」

音無「俺達に近寄るな（拒絶）」

銀八「同感だ。フォックスに100スラットの重りを真上に投下。そして『鳴神ソラ』さん。フォックスを亡きものにしてください」

ヴィヴィオ「ねえ『スラット』って何？」

真王「スライム（ドラクエ）の重さだよ。1スラットはスライム一匹、5スラットはスライム五匹で持ち上げられるんだよ」

ヴィヴィオ「ふ〜ん」

## 超短編集2（後書き）

真王「リトバス編が終わり、次の章は『コープス&スプラッター編』に突入！銀時やネプテューヌ達にウエスト博士と呼ばれるものから招待状が送られて、その博士がいるウエスト館へと足を踏み入れるが、そこは化け物の魔窟と化していた。そこで、力を宿したマスク、『ヘルマスク』をつけているリック・テイラーとその恋人ジェニフアーと出会い、ネプテューヌ達は彼らの協力の元、再びウエスト館へ向かい、ウエスト博士の野望を阻止するのであった」

ヴィヴィオ「次回『招待されても絶対不気味な屋敷に入るな』てい  
くおふ！」

## 第二回、モンスター解説図鑑

真王「第二回、モンスター解説図鑑!!」

ワーーーーー!!!!!!

理樹「って何なのこれ？」

恭介「リトバス編に登場したモンスターを紹介するってコーナーさ」

理樹「成程・・・」

真王「納得できたならいくぞ！」

（ヒンニヤ）

第十五訓に登場。

緑色のペラペラな四枚板のモンスター。一体どういう原理で誕生したのかは謎。体を回転させて体当たりをする。マリオの世界のモンスター。

真王「いかがですか」

理樹「成程、理解できました」

真王「よろしい。次だ」



くハンニヤーく

第十五訓に登場。

ヒンニヤーと同じく、ペラペラ四枚板のモンスター。体はオレンジで、頭にとげがあるのが特徴。読み方が微妙に『般若』のようである。また、ピンク色で歯がとがっているヘンニヤーという亜種が存在する。マリオの世界のモンスター。

鈴「こいつだな。理樹を傷つけた奴は」

恭介「落ちつけよ鈴」

ゆり「次よ」

くグリフォンく

第十七訓に登場。

鷹のような頭と、ライオンの体が合わさったようなモンスター。上空から獲物を求め、鋭い爪で決して逃がさないのが特徴。ドラクエシリーズをモデル。

ネプテューヌ「確かこういうのってキメラって言うんじゃないかってっけ？」

恭介「それもあつたが、こつゆうモンスターにはこついう名前が決まつたのさ」

くワイバーンく

第十七訓に登場。

緑色の鱗に大きな爪と羽があるのが特徴のモンスター。唯一ドラゴンと違うのは、炎が吐けないことである。

土方「蜥蜴にしてはザコだったな」

沖田「そりゃあ俺と土方さんが同時にやりましたからね」

くデスサイズく

第十七訓に登場。

血の付いた鎌を持つ死神のようなモンスター。ダークソウルによって生み出され、レリックを狙ったが銀時達に倒される。銀時達にこの先のことを言い残し、消滅した。モデルは、『DMC』のヘル・ヴァンガード。

銀時「こいつはよく分らんかったな」

ネプテューヌ「あれ？銀さんはゴースト系が苦手じゃなかったっけ？」

真王「銀さんはデスサイズをゴーストとしてではなく、モンスターとして認識したから怖がらなかつたんだよ」

ベール「それでは、最後のですわね」

（ジャンクゴーレム）

第十九訓と第二十訓に登場。

体中どれもこれもガラクタでできたようなモンスター。外見とは裏腹に、かなりの防御力と攻撃力を持っているため、油断はできない。また、必殺技の『ジャンクバスター』は周りのガラクタで相手に発射させる。一見地味っぽいのが、危険な技である。顔はドラクエシリーズのゴーレムを機械化し、ボディはロックマン7のジャンクマンをイメージ。

ネプテューヌ「このリトバス編のボスって感じだね」

アイエフ「ある意味ボスなんだけどね」

真王「それでは第三回も会いましょう」

第二十一訓：招待されても絶対不気味な屋敷に入るな（前書き）

真王「ついに新章『コープス&スプラッター編』がスタート！活目してください！」

ヴィヴィオ「『リリカル銀魂』はじまります！」



・青白く・・・半透明だった。

### 機動六課・ネプテューヌの部屋

ネプテューヌ「う〜〜ん・・・よく寝た〜〜・・・」  
機動六課の朝。ネプテューヌは起き上がる。

ネプテューヌ「今日は何しよっかな〜〜・・・ん？」  
何して遊ぶか考えていると、机に見慣れない手紙があった。

ネプテューヌはその手紙を手にとって見ると、こう書かれていた。

『拝啓 ネプテューヌさま。

あなたは屋敷に招待されることになりました。我が屋敷・ウエスト館で豪華な料理とおもてなしをさせていただきます。場所は〇〇〇の〇〇でございます。是非こちらにいらしてください。

ウエスト博士より』

ネプテューヌはこの手紙が招待状だと理解すると、  
ネプテューヌ「よしっ！食べ物いっぱいごちそうするぞ〜〜！！」  
食べることだけを考えて、いろいろと準備をした。

ネプテューヌ「……で、銀さん達も行くことになったの？」

銀時「そうだよ。悪いか？」

実は銀時達も、ネプテューヌと同じ招待状をもらっていた。

招待状をもらったのは、銀時・新八・神楽・桂・エリザベス・月詠・ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール・コンパ・アイエフ・ヴィヴィオの13人である。

新八「それにしても……なんで僕らにこんな招待状なんか」

アイエフ「確かに……そのウエスト博士などとして私達に名前が知ってるのかもへんよ」

新八とアイエフは、招待状をあやしく睨む。

ちなみになのは達はもらっていない。そしてリトルバスターズも戦線メンバーズももらっていない。

アイエフ「きつとこれは罠よ」

新八「そうですね。銀さん、この招待状はあまりのも不自然ですよ。やめといた方がいいんじゃないですか？」

罠じゃないかと悟ったアイエフと新八は、銀時達に言うが、

銀時「その料理にはパフェがあんのかね」

桂「俺はそばが用意されていると信じているぞ」

神楽「ご馳走食べ放題ネ！」

ネプテューヌ「スイーツスイーツ！」

ベール「どんな料理が待っているのかしら」

コンパ「食べすぎはダメですよ」

ヴィヴィオ「わっい。食べ物いっぱい」

もうすぐに行く気満々だった。

新八「オイイイイイイイイイイイイイイイイイ！薄っすら予想はしてただけだな！！もう少しこの手紙のことも怪しく思えよオオオオオオオオオオ！！」

新八が怒鳴り、アイエフはダメだこりゃ、と諦めた。

とある世界のとある町

なのは達に許可をもらい、ウエスト館のある世界へとやって来た。

ネプテューヌ「うわ。良い街並み」

ヴィヴィオ「すごい」

銀時達は町を眺めていると、町の住人らしき老人に話しかけられた。

老人「あんたら見ない顔だけど観光に来たのかい？」

アイエフ「観光というより招待状を送られたからここに来たのよ」

老人「は？招待状？」

アイエフが老人に説明する。

老人「・・・よう分らんが、場所なら分かるぜえ」

銀時「ホントか？」

銀時がきく。

老人「ほれ、あそこに島があるじゃろ？あの島に大きな屋敷があつてな、そこにウエストって言うやつ館があるんじゃ」

老人の指差す方向を見ると、確かに島があつた。しかも一ヶ所部分に青っぽい色が見える。



銀時「あそこか…」

ネプテューヌ「船乗ってかないと無理だね」

銀時達はウエスト館のある島を眺める。

「???」おいお前ら!

すると男の声が聞こえた。いかにも漁師さんをやってそうな人だった。

漁師「あの島に行きたいんだったら乗せてやってもいいぞ?」

新八「え!? いいんですか?」

乗せてやるという一言に銀時達は驚く。

漁師「いいつて。俺は非番だからな。特別に乗せてやるよ」

ネプテューヌ「わ〜い、やった〜」

神楽「キャツホオオオオオウウウウウウ!!!」

ネプテューヌ、ヴィヴィオ、コンパ、神楽は嬉しそうだ。

ネプテューヌと銀時達は船に乗り、ウエスト館の島へ行くのだが、

銀時・神楽・ヴィヴィオ「オボ□□□□□□□□□□□□□□□□  
~~~~」

船で十分早々銀時達が吐きました。(、口、)

新八「オイイイイイイイイイイ!!!十分しか経ってないのに何で吐いてんだアアアアアアアア!!!それとなんでヴィヴィオちゃんまで吐いちゃったのオオオオオオオ~~~~!!!」

銀時と神楽が吐くことに突っ込むが、まさかヴィヴィオまで吐くことに驚いた。

ヴィヴィオ「この船に乗るの初めてだから・・・だから気持ち悪くて・・・うつう・・・」

ヴィヴィオは顔を青くして言う。さすがに慣れない船にはまいっているようだ。

銀時「バカヤローヴィヴィオ、慣れないで吐くんだったら強い奴にはなねーぞろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ」

神楽「そうネ・・・私たちは慣れっこだからとても強いんだよろろろろろろろろろろろ」

新八「オイイイイイイイイイイイ！！！！小さな女の子の前で吐くなっつってんだろー！！！！それと全然強くなーしっ！！！！全然慣れてねーじゃねえかアアアアアアアア！！！！」

言ってる事とやっている事が全く矛盾している銀時と神楽に、新八は怒鳴る。

桂「情けないな銀時。船に乗るだけで酔うとは」

銀時「うるせーよツラ。オメーにこの苦しみが分るかよ」

桂「ツラじゃない桂だ」

桂からの一言に、銀時は顔を青くしながらも言う。

ネプテューヌ「銀さん達大丈夫かな」

コンパ「多分・・・大丈夫・・・じゃない・・・と・・・思う・・・です・・・」

アイエフ「・・・コンパ・・・あんたが大丈夫なの？」

そう言うコンパはというと、顔が銀時よりも青い。相当乗り物酔いに弱いようだ。

コンパ「大丈夫・・・じゃ・・・ないです。・・・うう・・・
もう・・・限界・・・です」

アイエフ「ヤバツ！読者の前で悪いけど思いつきり吐いて！」

銀時「お前何言っちゃってんのっ!？」

コンパはもう限界に達したようで、船の端っこで出そうとしたら、

コンパ「ん・・・ガボロシャアッ!!!」

銀時達よりも盛大に一気に吐いてしまった。

銀時「オイイイイイイイイイ!!!ものすっげー出しちゃった
よこの子オオオオオオ!!!」

コンパの爆発的な○口吐きに青ざめる銀時。今コンパが吐いた量は
5リットル分ぐらいあった。

コンパ「・・・あゝ、一気に吐いたらスッキリしたです（キラキ
ラ）」

出し切ったコンパは表情がスッキリして煌めいていました。

銀時「ああ・・・そう」

コンパと漁師さん（見てないから）を除く全員は、顔を引き攣らせ
た。

漁師「お前ら！もうすぐ着くぜ！降りる準備をしとけ！」

漁師さんの言葉を聞き、銀時達はいろいろと準備をした。

漁師「さあ着いたぞ！」

漁師「ん？・・・っ！！お前は！！！」

声が聞こえてそちらに向くと漁師は恐怖の混ざった驚きをした。そこにいたのは青い服に、骸骨っぽいマスクをつけた大男。その隣には、赤いロングの髪の毛の白のちょっとポロポロのワンピースを着た女性がいた。

大男「悪いが船はそのままにしておらおうかっ！！！」

漁師「ギャアッ！！！」

大男のパンチに漁師は殴り飛ばされた。しかし漁師の血は赤ではなく緑色をしていた。

大男「ちっ！あいつらを脱出させるために用意したのはいいが・・・この後どうするかだな・・・」

大男が考えるしぐさをする。

女性「彼らの後追いましよ。そのあとで説得して脱出させるわ」
女性は大男にどうするかを説明する。

大男「よし！行くぞ！」

大男は銀時達を追いかけた。そして空からゴロゴロと雷が鳴り、雨が降り始めた。

ネプテューヌ「うわーん！なんでこんな時に雨が降るわけ〜！？」
銀時「知るかよ！んなことよりさっさと館まで走るんだよ！」
突然の雨が降り出し、ウエスト館までダッシュで走る銀時達。

そして、ウエスト館の前に着いた。

銀時「何これ？なんだかル〇ージマ〇ションみたいなんですけど…」

新八「銀さんメタな発言はやめてください!!!」

周りは暗く、雷が鳴っているため、思わずそんな感想を漏らす銀時に新八が突っ込む。

そして銀時達は中に入った。

ウエスト館・エントランスホール

ノワール「やっと着いたわね」

ブラン「濡れちゃった…」

コンパ「早くしないと風邪ひいちゃうです」

桂「エリザベスは大丈夫か？」

エリザベス「濡れてますけどなんとか」

ウエスト館に辿り着き、何とか雨をしのげた銀時達。しかし、中の様子が変である。

アイエフ「ちょっと・・・みんな周りを見て」

アイエフが言う。中はどれもこれもボロボロで、荒らされた跡らしきものがいっぱいあった。

ネプテューヌ「何これ？豪華料理はいつたいたいどこに？」

新八「あんたはいい加減料理から頭放せっ!!!」

銀時「オイオイこりやどいうことだ？」

????「そりやここが畏だつてことなんじゃないか？」

銀時が疑問に思っていると、第三者の声が聞こえた。銀時に取って聞き覚えにある人の声が。

銀時「何だ大串君か」

土方「土方だっつってんだろ！！しかもその態度もメツチャむかつく！！」

沖田「あゝ、旦那じゃないですかい？」

そこに現れたのは土方と沖田と、その奥から山崎とゴリラっぽい男・近藤がいた。

桂は見た瞬間、にがい顔をした。すると土方が気づいて、

土方「テメーは桂っ！！タタっ切つてやる！！」

案の定、土方は刀を振り回して桂を追いかけ、桂は土方から逃げている。

新八「あれ？近藤さん？」

近藤「おお！新八君！久しいな」

近藤が新八に手を振る。

ネプテユー又「あれ？知り合い？」

銀時「まあ知り合いつちゃあ、知り合いだな」

ネプテユー又が土方達を見て銀時に聞き、銀時は肯定する。

近藤「譲ちゃん達は初対面だな。俺は真選組局長・近藤 勲だ」

土方「その副長・土方だ」

沖田「1番隊隊長の沖田です」

山崎「僕は密偵担当の山崎です」

近藤と、桂を捕まえて戻って来た土方と、山崎はあいさつし、沖田は若干めんどくさそうに挨拶する。

ネプテューヌ「あ、私たちは・・・」

少女自己紹介中・・・

近藤「なるほどな。よろしく頼むぞネプテューヌ殿」

新八「つて、ちよつと待ってください！！何であれだけで自己紹介終わったことになったの!？」

新八が『少女自己紹介中・・・』の部分に突っ込みだす。

銀時「馬鹿野郎、新八。自己紹介なんてなげーから作者が手をきかせて省いてあげたんだよ」

神楽「読者はみんな長い自己紹介は苦手ネ。いちいちめんどくさいのは嫌アルから」

新八「オイイイイイイイ！！メタな発言はやめてくださいよオオオオオオ！！！」

言っではいけないような発言を新八は突っ込む。

ベール「あと土方さん。桂さんを放してあげませんか？ここで逮捕しても意味などありませんこと？」

土方「・・・ここじゃ法律が違うからなあ・・・ハア・・・」
土方は世界が違ったため、桂を逮捕しても意味がなかった。

山崎「あっ！そう言えばあの子たちは元気にしてますか？」

山崎が言う。あの子たちとはゆり達戦線メンバーズのことである。

銀時「元気すぎて困るほどだけだな」

銀時はそう返事した。すると、

ギィィ・・・

ドアの開く音が聞こえた。

ノワール「やれやれ・・・ようやくお出まし・・・って」
ノワールが開けた者を見て固まり、ネプテューヌ達も固まった。
ドアを開けた人物・・・否、もはや人ではなかった。

異形「ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴ・・・」
異形がこちらに近づいてくる。

コンパ「な・・・何なのですかこの人は!？」

ネプテューヌ「いやいやいや!どう見たって人じゃないよ!」

コンパが異形を見てそんな言葉を出し、ネプテューヌが突っ込む。

ブラン「・・・あそこ見て」

ブランが指差すと、異形の仲間がたくさんいて、囲まれている。

銀時「おいおい、手厚い歓迎を受けられてんな俺達は」

銀時は少し笑いながら言う。

土方「んで、オメーらはこの後どうするんだ?」

銀時「知るか」

土方がどうするか聞き、銀時は即答する。

ブラン「まとめて倒す...」

ブランがハンマーを構え出す。

ネプテューヌ「おお!でるか?ブランの技が!」

ヴィヴィオ「ブランお姉ちゃん!!」

ブラン「任せな! ウオオオオオオオオオ!!」

ブランはハンマーを振り上げ、地面に叩きつけて衝撃波を出し、異形達をなぎ倒した。が、

ビキビキビキビキ・・・

全員「え?」

床がひび割れてきて・・・そして、

バゴツ!!

全員「あああああああああああああ~~~~~!!」
崩れさつて、銀時達は落ちた。

銀時「おい~~~~~!! なんてことしてくれたんだテム
ーは~~~~~!!」

土方「何で俺達まで巻き込まれなきゃいけないんだよ~~~~~!
!!」

ブラン「うるせ~~~~~!! あたしが知るかアアアアア
アア!!」

銀時達は怒鳴り合うが、何も意味もなく、そのまま落下していくのであった。

ウエスト館・地下

ネプテューヌ「うっ……うん……」

女性「あ！気が着きましたか？」

ネプテューヌが目を覚ますと、赤い髪の女性が写り込んだ。

ネプテューヌ「えっと……私達は確か落ちて……あなたは？」

ジェニファー「私はジェニファー、あなた達を助けたのよ」

ネプテューヌは気絶する前に何が起こったのかを思い出し、女性に聞くとジェニファーと名乗るようだ。

ネプテューヌ「ジェニファーさんですか……あ！、そう言えば銀時S「何だネプテューヌ」って銀さん！」

銀時がどこにいるのか聞こうとすると、その銀時が近くにいた。

それだけでなく、新八に神楽にヴィヴィオ、桂とエリザベスと月詠、コンパ達に土方達もいた。

コンパ「ねぶねぶ……。無事でよかったです」

ヴィヴィオ「ネプねえちゃん」

コンパとヴィヴィオは泣き顔でネプテューヌに抱きつく。

銀時「まったく、誰のせいでこうなったんだかね……」

土方「……何で俺達まで巻き込まれたんだか……」

ブラン「おい、喧嘩売ってんのか？」

銀時と土方が愚痴をこぼし、ブランがキレ気味になる。

????「お?…どうやら無事のようにだな」

ジェニファー「あら、リック」

男の声が聞こえ、ジェニファーとネプテューヌ達が振り向く。骸骨のようなマスクをつけた大男・リックが来た。

リック「始めはしてだな。俺はリック・テイラーだ」

ネプテューヌ「あ！私はネプテューヌだよ」

銀時「キャプテン志望の坂田銀時です」

リックはあいさつすると、銀時達もあいさつし返した。リックは驚いた顔（マスクをかぶってるため見えない）をする。

リック（こいつらこのマスクのことを怖がってない。普通に接しているな）

リックは不思議そうにネプテューヌ達を見つめる。

新八「あれ？ちょっと皆さん、何であのマスクのことをきかないんですか？」

が、新八は気になっただけらしく、銀時達に聞く。その時リックの表情（マスクをかぶってるため見えない）はやっぱりか、となるが、

ネプテューヌ「それはリックさんの趣味で着けたからじゃないの？」
新八「いやありえねーよっ！！あんなマスクを趣味で着ける奴いるわけないだろっ！！！」

リック「趣味じゃないんだが・・・ここにいるんだけどな・・・」
ネプテューヌの素っ頓狂な回答に、リックはガクツと倒れそうになる。新八はありえないと突っ込むが、リック自身は複雑な気分になる。ちなみにジェニファアは苦笑いをしている。

????「いろいろと面白いことやってんな、リック」

ネプテューヌ「え？」

何処からか甲高い男の声が聞こえた。リックは頭を支えるしぐさをする。

リック「・・・もう少し大人しくできないのかお前は」

????「ハンツ！そういうのはお断りだ！」

声の元はリックから・・・リックのマスクから聞こえる。

桂「リック殿、そのマスクはいつたい？」

リック「ああ…こいつは『ヘルマスク』、意思を宿したマスクだ」
ヘルマスク『仲良くやろうぜ！クッククク…』

リックのかぶっているマスク・ヘルマスクが小馬鹿混じりにあいさつする。

銀時「何かイラツとくんない…。つかお前らは何でここにいるんだ？」

銀時はリック達は何でここにいるのかを聞こうとすると、

リック「…今は言わなくてくれ…」

リックが遠く悲しそうな顔（しつこいようですが、マスクのせいで見えません）をしていた。ジェニファーも表情が暗い。

銀時「…そうか。聞かなかったことにするぜ」

リック「それは助かる。あとお前らにこのことを話さなければな」

リックはウエスト博士のこと、銀時に襲いかかった異形・デッドマンのこと、招待状が罠だということなどを説明する。

ネプテューヌ「そんなああああ！！せつかく豪華料理を食べられると思ったのに…！！」

新八・アイエフ「あんたはいい加減に食べ物から離れるー！！！！」

ネプテューヌは別の部分にショックを受け、新八とアイエフはそんなネプテューヌに怒鳴る。

リック「船はそのまま放置させてある。早く脱出した方がいいぞ」
リックは銀時に警告し、脱出するように言うが、

銀時「そいつは出来ねー相談だな」

銀時がはつきりと拒否した。

リック「・・・どういうことだ?」

銀時「俺はなあ、さっさと逃げろと言われてハイそうですかっつて諦めると思ったら大間違いだぜ」

ネプテューヌ「そうだよ! 私達をだましたからにはバキッ!、とぶん殴らないと気が済まないよ!」

リック「お前ら・・・」

リックは銀時とネプテューヌが帰る気はないと確信する。それどころか周りにいる全員もそうであった。

銀時「・・・ところでお前等はどつするんだ?」

リック「・・・俺らはここに残ってケリをつけなければならないことがある」

リックは拳をギリギリと握る。

銀時「・・・だったら手伝おうか?」

ジエニファー「え?」

リック「何だと?」

リックとジエニファーは耳を疑う。

銀時「だからお前らの手伝いをするんだよ」

新八「リックさん達だけで残るだなんて水臭いですよ」

神楽「そうネ!あの腐れ野郎にギャフンと言わせてやるアル!」

桂「俺もリック殿に協力しよう」

エリザベス「ちなみに私も」

月詠「わっちもじゃ」

ネプテューヌ「食べ物への恨みは恐ろしいよ」

ノワール「私達も手伝うわ」

ブラン「私も」

ベール「私もですわ」

コンパ「私も見捨てられないです！」

アイエフ「乗りがかった船よ。手伝うわ」

ヴィヴィオ「ヴィヴィオも」

近藤「我ら真選組も協力しよう！」

土方「俺は別に手伝う気はねーが、ウエストってやつをしょっ引かなければならんからな」

沖田「めんどくせーけど俺も」

山崎「あ！俺も」

銀時達はもうすでにリック達を手伝うつもりらしい。

リック「・・・こりゃ説得しても無駄だな」

ジェニファー「リック・・・」

リックはやれやれとなる。

ヘルマスク「そのわりにはお前嬉しそうじゃないか？俺、ああいうやつらが好きだぜ」

リック「うるさい」

ヘルマスクを一喝する。リックは立ち上がり、

リック「もう後戻りはできないぞ。それでもいいのか？」

リックは銀時に言うと、

銀時「そんなもん愚問だ」

銀時はそう答えた。

リック「そうか。ならいくぞー！」

全員「おうっ！！」

リックの言葉に、全員が大きく返事をした。

リック（待つてるよ。今すぐに決着をつけてやるからな）
リックはその思いを胸に、ウエスト館へ向かった。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

銀八「新章始まって早々始めますよ。まずアシスタントは」

リック「『スプラッターハウス』の主人公、リックだ」

銀八「よし！んじゃペンネーム『鳴神ソラ』さんからいくぞ。『フォックス』だつてな。こう言う時のファルコは弄りたくなるもんだ」
「全て避けた。」

スネーク「まあ…フォックスがこうなったのはある意味作者がとあ

るサイトにあつたイラストの中にムカ風に言った擬人化フォックスのイラストがあつて、それでなのか影響受けたんだろうな……」

フォックス「と言うか……ヴィヴィオとネプテューヌ！かめはめ波出した……！！」

ルイージ「驚きの連発だね」

ふむ……微妙に面白いか……精進せねばな……

マリオ「だな……」

ネス「皆に質問『作者が『月夜に舞う龍』で投稿してる作者の小説でどれか気に入ったのある？』」

フォックス「銀時に質問、『今回の短編集でヴィヴィオとネプテューヌがかめはめ波を出した時はどう言う心境だった？』」

スネーク「真王に質問だ……スバル達の女神状態では武器は変わらないのか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしています

フォックス「どうなるのやら……」『……スバリー1つ目を答えましょう』

全員が立ち上がる。

全員「大乱闘スマッシュハーツブラザーズです」

銀八「ハイありがと。2つ目は」

銀時が立ち上がる。

銀時「……………俺、置いてかれた気分だ」

真王「最後ですが武器の形状が変わるだけで、武器自身は変わりません」

リック「それじゃ、『鳴神ソラ』。廊下に立て」

真王「最近思うんだが、『鳴神ソラ』さんはよく質問来るね」

銀八「だよな。『黒神』さんに『黒龍』さんのも出てるぞ」

真王「だから私は『鳴神ソラ』さんに質問します。『マリオと『魔法少女リリカルなのは』とある兄妹の転生物語』の神とではどちらが勝つと思いますか？』もう一つ、『私が言った『黒神』さん・『黒龍』さん以外にも感想を書いている方がいますか？』の2つです。では」

第二十一訓：招待されても絶対不気味な屋敷に入るな（後書き）

真王「いかがでしょう？ちなみにヘルマスクは、2010版をモデルにしています。もちろんしゃべり方も。ちなみにリックは髪の毛がありますよ」

リック「次回『ホラーゲームにはチェーンソーが必須』テイクオフだ」

第二十二訓：ホラーゲームにはチェンソーが必須（前書き）

真王「今回はトラウマキャラがやってきます。それではスタート」

第二十二訓：ホラーゲームにはチェインソーが必須

銀時達はリック達とともに、ウエスト館のどこかにいるウエスト博士に会いに行くのであった。

現在銀時達は地下から出て、ウエスト館へ続く道へときた。

- ・・・え？原作では途中で拷問部屋があったんじゃないかって？
- ・悪いがそこはキングゲクリムゾンだ。

コンパ「うう……暗くて怖いです……。幽霊が出そうです」

コンパは、真夜中の森におびえている。

銀時「バカヤローコンパ。そんな非科学的な奴なんているわけねーだろ」

銀時はそういうが、若干冷や汗が出てるようなのは気のせいだろうか。

リック「こういうところに限って出るんじゃないか？それが」

銀時「テメツ、何怖いこと言ってるんだっ！！」

リックのセリフに銀時は怒鳴り、コンパはさらに震える。実際リックは、頭蓋骨を投げて邪魔する女幽霊『ジョーカー』のことを思い出して言っているのだが。

ガンッ！

ネプテューヌ「ん？」

ネプテューヌの足に何かが当たった。足元を見ると、長い筒状の銃・ショットガンだった。

ビに向けてボタンを押した。
すると画面が現れて、ゾンビの姿が映し出された。

ネプテューヌ「うわっ！」

銀時「なんだ!？」

桂「なんと！」

ジエニファー「これって!？」

全員がネプテューヌの持つ機械に驚いた。画面にはゾンビと、そのゾンビの名前と特徴が映し出されていた。

『マーク』

『一般的なゾンビ』

『頭が弱点』

銀時達を襲ったゾンビはマークと呼ばれるらしく、マークの弱点まで書かれてあった。

ヘルマスク『すごいアイテムを拾ったな。俺は『エネミーサーチャー』と名づけておくぞ』

ネプテューヌの拾ったアイテムは、『エネミーサーチャー（以下、ES）』と名付けるヘルマスク。

ネプテューヌ「ねえ。ヘルマスクさんはこれを知っているの?」

ヘルマスク『いや、詳しくは知らんが相手の情報を読み取るらしいんだ』

ネプテューヌ「ふん」

ネプテューヌがヘルマスクに聞くと、ヘルマスクはあまり知らないと答え、ネプテューヌはESを眺める。

ネプテューヌ「…えい」

銀時「ちよつ、こつち向けんなつ!!」

ネプテューヌがESを銀時に向け、ボタンを押した。すると、ESに銀時が映し出された。

『坂田 銀時』

『『万事屋銀ちゃん』のオーナー。銀色の天然パーマが特徴。普段はやる気なく、死んだ魚のような目をしているが、本気になると目は侍の目に変わる。攘夷戦争に参加し、敵でも味方でも恐れられたことから『白夜叉』と呼ばれている。甘いもの全般だが、パフェが好き。パチンコでよく金をなくす。ジャンプ愛読者』

『朝起き。積極的な女。怪談・スタンド幽霊が嫌い』

新八「うわ、銀さんのことが書かれていますね・・・」

神楽「おまけに嫌いなものとかもあるアル」

ネプテューヌ「へえ〜(黒)」

ノワール「すごい内容ね」

土方「全くだな」

みんなはESに感心する。しかしネプテューヌは少し黒い笑みを浮かべた気がするが…

銀時「オiiiiiiiiiiiiiiii!!何だこの恥ずかしい内容は!?!」

銀時は書かれた内容にシャウトする。

ネプテューヌ「・・・銀さん。後ろに貞子さ「ギィエアアアアアアアアアアア!?!?!」」

ネプテューヌが貞子さんと言いつ切る前に、銀時がどこかの盗賊の『おっさん何時の間につ!?!』なポーズをする。

しかし、なぜか土方、近藤までもが同じポーズをする。

ネプテューヌ「……何やってんのみんな？」

銀時・土方・近藤

「イエ、ナンデモナイデス」

ネプテューヌ「何で片言？」

ネプテューヌは追及することをやめたが、銀時達は幽霊が苦手なんじゃないかと思っただ。

ヘルマスク『おしゃべりはここまでだ。先へ行った方がいいぞ』

ノワール「……そうね」

神楽「私は銃なんて必要ないネ！」

桂「うむ。まずは館へ向かおう」

銀時達はゾンビ達を蹴散らしながら、ウエスト館へ向かったら、

ザバアアアアアアンツ！！

溜池から緑色のゾンビが現れた。

ヴィヴィオ「ひゃうっ！」

ノワール「っ！なにこいつ！」

コンパ「何か臭いです！」

ネプテューヌ「え〜と……出たよっ！こいつは『エビタン』ってやつだよ」

ネプテューヌは池から現れたゾンビをESで調べた。そのゾンビはエビタンというらしい。

銀時「……また妙な奴が来やがったな」

銀時はエビタンを見て顔を強張る。

桂「ならばこいつをプレゼントだ」

と、桂は爆弾を取り出し、エビタンに投げつけ、爆発した。巻き込まれたエビタンは体がドロドロに溶けた。

桂「よし、これで…」

コンパ「きゃあああああ！！！足に何かいるです~~~~~！！！！」

桂が安心していたら、コンパが足に何かが掴まれて、パニックになっていた。

コンパの足をつかんだのは、ミイラのようなゾンビだった。

ネプテューヌ「コンパを放してっ！！！」

ネプテューヌはミイラゾンビを踏みつぶした。

ノワール「ネプテューヌ、さっきのは？」

ネプテューヌ「あれは『カゲオ』って言うんだよ。………つて、あそこっ！」

ミイラゾンビ・カゲオを説明していると、奥から別のゾンビが現れた。

そこにいたのは、マークとエビタンと、先ほどのミイラゾンビ・カゲオ。そして、両手に斧を持ったゾンビと、筋肉質なゾンビと、体のでかいデブなゾンビがいた。

ネプテューヌ「斧を持っているのが『ジヨニー』。あの筋肉質なのを『アステカ』。そしてあのデブゾンビは『チャールズ』だよ！」

ネプテューヌが見慣れない三体を説明する。

しかし、もうすでに沢山のゾンビ達に囲まれている。

ヘルマスク『へへっ！、こういう場合はある決め台詞があるんだぜ。

知ってるかい？」

突然ヘルマスクが言いだす。

銀時「・・・どんなんだ？」

銀時は気になって聞くと、ヘルマスクはこう叫んだ。

ヘルマスク『This party is getting crazy! (イカれたパーティーの始まりだ!)』

新八「オイイイイイイイイイイ!! それもろパクリじゃねえかアアアアアアアア!!」

ある魔剣士の決め台詞なので、新八が怒鳴る。が、銀時達にはやりと笑う。

銀時「確かにクレイジーな展開だな」

土方「俺はそういうのは嫌いじゃないぜ」

神楽「久々の大暴れネ!」

エルザベス『活躍しましょう』

ネプテューヌ「ゾンビ無双だよ!!」

ノワール「正直嫌だけどね」

ヴィヴィオ「ヴィヴィオ、頑張る!」

全員はすでにやる気らしい。

銀時『テメーら!!、全部まとめて叩つ切つてやるぜ!!!!』
全員「うおお~~~~~!!!!」

銀時の掛け声で全員が答え、ゾンビの群れに突入した。

銀時「ハイハイイイ!! 次いいいい!!」

銀時は木刀で、次々とゾンビの群れをなぎ倒していく。

土方「テメーにおいしいところ取らせてたまるか!」

土方も負けじとゾンビの群れを切り捨てて行く。

リック「俺も負けてらんねーなっ!!」

ジエニファー「私も!」

リックとジエニファーはショットガンでゾンビ達を倒していき、近づいてきたゾンビはリックがパンチで倒す。

ネプテューヌ「どんどん行くよ〜!」

ネプテューヌは木刀で次々とゾンビ達をなぎ倒していく。

神楽は体術と傘でアステカやチャールズを殴り飛ばし、近藤と桂は刀で切り捨て、沖田はバズーカでぶっ飛ばし、エリザベスはプラカードで殴り飛ばし、月詠はクナイでゾンビの首を切り落とし、ノワールはショートソードで切り、ブランはハンマーでチャールズを潰し、ベールはパイクでマークやエビタンを切り捨て、アイエフとコンパは銃と注射器で援護し、山崎はミントン(なんで!?)でゾンビを攻撃し、ヴィヴィオは大人化してネプテューヌ達から習った体術でゾンビを倒していく。

始めは躊躇したヴィヴィオだが、ネプテューヌ達の修行のおかげで戦うことができたようだ。ちなみにヴィヴィオが大人化したことに土方達がすごく驚いたことは余談である。

新八「うおおおおおおお!!」

新八は木刀を使ってアステカを攻撃する。が、アステカは木刀を簡単に受け止め、アップパーカットで新八を殴り飛ばした。

新八「何で僕だけエエエ!?!」

吹き飛ばされながら、新八は叫んだ。その時、新八のメガネが外れた。

銀時「新八イイイ！大丈夫か！？」
ゾンビを倒しながら、銀時は新八に駆け寄る。

ネプテューヌ「新八君！大丈夫！？」
ネプテューヌ達も、新八に駆け寄った。

新八「う・うん。大丈夫だよ」
安心させるように、笑って答えながら新八は立ち上がった。

銀時「どうやら無事みてーだな」
屈んで銀時が声をかけた相手は、地面に落ちた新八のメガネだった。

新八「新八こつちイイイ！！」
額に血管を浮かべながら、新八が怒鳴った。

アイエフ「銀さん。ソレは新八さんのメガネなんじゃ・・・」

銀時「いやいや、違っぞ」
コンパ「え？違っのですか？」

銀時は首を横に振りながら言った。落ちてる新八のメガネを拾う。

銀時「よく覚えとけお前ら。新八の成分の95%はメガネだ。つまりこつちが新八だ」

メガネを持ちながら銀時が説明する。

ネプテューヌ「え？そうなの？」

新八「違っ違っ！違っからね！！普通に僕が志村新八だから！僕が本体だから！！」

新八は全力で否定した。

コンパとノワールとベールとジェニファアは、少し困ったような笑

みを浮かべながら、二人の様子を見ていた。

するとネプテューヌが驚愕な顔して叫んだ。

ネプテューヌ「あっ！銀さんの後ろに！！」

銀時「え？なにが？」

銀時は後ろを振り返ると、

ネプテューヌ「アステカが」

バキッ！！

銀時「ゴフッ！！」

アステカにアツパーカットを喰らった。その拍子にメガネを落とす。

ネプテューヌ「そっちに行ったらチャールズ…」

ズドンッ！！

銀時「ゴハッ！！」

さらにチャールズの体当たりを喰らい、

ネプテューヌ「そこにはエビタン…」

銀時「ギヤアアアアアアアアアアア！！！！」

池に落ちてはエビタンにつかまれました。(笑)

ちなみにメガネは新八が拾った。

土方「おい、テメーら」

土方が声をかけた。

土方「いつまでふざけてんだ。さっさと先に行くぞ」

見ると既に、ゾンビの群れは全滅していた。……銀時を捕

まえているエビタンを除いては。

ネプテューヌ「よし！それじゃあ行こう！」

全員「おう！！！」

銀時「ちよつと待てエエエエエエエエエエ！！！！俺を助けるオオオオオオオオオオ！！！」

ウエスト館・入り口前

ゾンビの群れを全滅させた銀時達は、ようやくウエスト館にたどり着いた。

ちなみに銀時を捕まえていたエビタンは、銀時にやられました。

銀時「まったく。俺を置いていきやがって」

服が汚れて、銀時は苛立ちの混ざった声で言う。

ネプテューヌ「あはは・・・ごめんね銀さん。さぁ中に入ろっ！」

ネプテューヌは銀時に謝罪し、中へ入ろうとすると、

ブヴヴヴン！！ブヴヴヴン！！

何処からかチェーンソーの音が聞こえた。

リック「この音……まさかっ！！！」

リックは後ろを振り返ってみると、頭からすっぽりと被った布袋に、異常に発達した全身の筋肉が特徴。そして両腕にチェーンソーがつ

けた怪人がいた。

それだけでなく、顔には赤く光る暗視レンズに、全身を青いラバースーツやプロテクターで固め、巨大なチェーンソーを持つ謎の敵がいた。

IBGM：危険なボスbyハウス・オブ・ザ・デッド4
(House of the dead 4 boss them
e (Boss Raid))

リック「あいつはピギーマン!? 何でここに!」

リックは驚愕な顔をする。

銀時「あ? どつちがだつて?」

ネプテューヌ「あの布袋をかぶっているやつだよ!」

布袋をかぶった怪人・ピギーマンを指差すネプテューヌ。

新八「じゃああいつの隣にいるあれは何ですか!」

ネプテューヌ「えつと... ちよつと待って」

新八は、ピギーマンの隣にいる敵を指差して、ネプテューヌはESで調べると、その敵の正体が明らかになる。

『エンプレス』

『顔には赤く光る暗視レンズに、全身を青いラバースーツやプロテクターで固めたヒューマノイド』

WEAK POINT

顔

近藤「ヒュ... ヒューマノイドだどつ!」

近藤はエンプレスがヒューマノイドということに驚く。

銀時「っていうか『エンプレス』って女帝って意味だよな? あいつ

女なのか？」

銀時がエンプレスという名前を気にしていると、

ブヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴン！！！！

いきなり二体が切りかかって来た。

銀時「ウオワツ！！！」

ネプテューヌ「危ない！！！」

リック「ちっ！！！」

銀時達はギリギリで避けたが、分れてしまった。

ピギーマンはリックとジェニファー、エンプレスは銀時達とわかれた。

リック「ピギーマンは俺達に任せる！！お前らはそっちを頼むつ！！！」

ネプテューヌ「リックさん！！！」

ネプテューヌはリックに叫ぶが、それも虚しく戦闘が開始される。

銀時「ちっ！早いとここいつを片づけて行くぞっ！！！」

銀時は舌打ちして、木刀でエンプレスに攻撃する。

エンプレス「……………」

エンプレスは、お返しと言わんばかりにチェーンソーを振って反撃する。

銀時「危ねえっ！！避けるっ！！！」

新八「うわっ！！！」

桂「くっ！！！」

ブラン「ちっ！！！」

銀時達はチェーンソーをギリギリでかわす。

銀時「テメーと付き合う暇はねーよっ!!」

ネプテューヌ「私達の前から消えてっ!!」

銀時とネプテューヌは、木刀でエンプレスの顔をたたきつけた。

エンプレス「っ!?・・・（顔を押しえて痛がっている）」

これは効いたらしく、片手で顔を押しえて痛がっているが、大きく隙を作ってしまったている。

銀時「おし!このまま!旦那あ、退いてくださいませ!」って、え?」

追い打ちをかけようとした時、沖田がバズーカを取り出して、エンプレスに向けて発射した。

バシユツ!

銀時・ネプテューヌ「おわっ!」

ドガアアアアアン!!

エンプレス「ツツ!!!!??!!!!?」

沖田が放ったバズーカは、エンプレスの顔に命中し、エンプレスは倒れた。

銀時「・・・お前もう少し周りの人を気にして撃つてくれない?」

銀時は沖田をジト目で見て言う。

沖田「やだな。俺はそんな余裕なんてないんでさあ」

銀時「・・・」

ネプテューヌ「・・・まあ敵も倒したことだし、結果オーライだよ

ね

沖田のセリフに納得いかない銀時だが、ネプテューヌが宥める。

銀時「…しゃーねーな。早くリックを助けようぜ」

そう言っただけでリックの援護に向かおうとしたら、

ブヴヴヴヴヴヴヴヴヴン！！！！

銀時「っ！！！！？ちっ！！」

横からチェインソーの音が聞こえ、銀時は避ける。それは、倒したはずのエンプレスがチェインソーで攻撃してきたからだ。しかも、エンプレスの持つチェインソーが2つになっていた。

桂「馬鹿なっ！！あれを喰らって生きていただと！？」

新八「おまけになぜかチェインソーが2つになってますよ！！」

ノワール「…あのチェインソーはダブルセイバー型みたいね」

新八と桂が驚き、ノワールはエンプレスのチェインソーがダブルセイバー型だと推測した。

エンプレス「……………（殺気立っているようだ）」

ブヴヴヴヴヴヴヴヴヴン！！！！ブヴヴヴヴヴヴヴヴン！！！！

エンプレスはチェインソーを振り回して暴れまわった。

銀時「あぶねっ！！」

ネプテューヌ「うわあっ！！」

コンパ「きゃっ！！」

月詠「まずいっ！！」

ノワール「くっ！！」

銀時「……………（動いてない）」
ネプテューヌ「……………（動いてない）」
リック「……………（動いてない）」
全員「……………（動いてない）」

さっさと動きやがれこの馬鹿共！！！！（怒）（#、口、）

全員「ハイハイ！！！！！！」

銀時達は慌ててウエスト館の中へ入っていった。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

銀八「へい。いきなりにアシストを紹介するよ」

ジェニファー「先生、そのグータラ紹介はやめてください。ジェニ

「ファーです」

銀八「だってそんなのメンドクス「ナニカ？」スイマセン、調子に
乗りました」

ジェニファー「分ればいいわ」

銀八「よし、ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ』あいつか
……半分半分だな……相手が自分で作り出したのや誰かから力を貰っ
たのなら無効化出来るけど、見るからに何個かは無効化出来るけど
まだまだ本気を見せてないからゼロでも勝てるかどうか分らないか
ら半々だ……」

私が感想を書いているのは真王さんと黒神さんに黒龍さん以外だと……
ウツソ・エヴィンさんにまあさん、光闇雪さんにsibugaki
さん、暮灘雪夜さん、JACKさん、充さんに琥珀さんですね。時
たま龍牙さんの所にも書いてます。

スネーク「ちなみにこの中でフォックスが写真を送ってるのは黒龍
に光闇雪さんにsibugakiに暮灘雪夜の所だ……ちなみにどん
な写真かは自分の目で確かめてくれ」

マリオ「それにしても俺達のが入れられてるのが良いな」

ルイーダ「だね……まあ話は変わるけど……新八君、ホント良かった……
オタクから抜けて（涙）」

フォックス「最近出番が増えてるからルイーダは嬉しそうだな」

スネーク「そりゃあ作者が見て来たスマブラ小説の中で似た様な扱

いを受けてるからな… 並行世界のあいつ（ルイーダ）は…」

ネス「それにしても… ルイーダマンションとバイオハザードが混じった様な展開だね」

リユカ「こつ、怖いな（ガタガタ）」

スネーク「軽くヤフーで調べたが… 今回の大ボスなウエスト博士や今回出たリックにジェニファーは『スプラッターハウス』のキャラクターらしいな… 前のコープスは『コープスパーティー』だと思っが… ホラーだな」

おおつ「ホラー系は苦手だ… 体中がブルブルだよ」

マリオ「作者はルイーダのはともかくな（苦笑）」

それでどう言う風になるのやら…

マリオ「皆に質問だ」『月夜に舞う籠』で投稿してる作者の小説で作者が考えたオリジナルライダーでどれが好きだ？理由も言ってくれ』

スネーク「俺も皆に質問だ、内の作者が書いてる小説に出るユーノはどう思う？』

ファルコ「俺からも全員に質問だ… スマブラXで使える最後の切り札をもし使えるならどれを使って見たいんだ？』

そんな訳で次回を楽しみにしてます

マリオ「頑張れよ銀時にネプテューヌにリック！」『1/2を答えましょう」

全員が立ち上がる。

全員「1つ目は仮面ライダーディブレイカーで幻想殺しがあるところ、2つ目は………シラネ」

銀八「それ酷くね？まいつか。最後は順番に答えましょう」

銀時「俺は『かめはめ波』を出すぞ！」

新八「お通ちゃんの『お前の母ちゃん何人だああ！』を歌います！
ジャイアンリサイタルになるが

神楽「『夜兔の覚醒』ネ！」

桂「『カッターラボンバー』を使うぞ！」 自爆ではない

エルザベス「『グランドバズーカ』を発射します！」

月詠「師匠の技を取って『月蜘蛛の舞』をやるつかの」

ネプテューヌ「『ネプテューン・ブレイク』だよ！」

ノワール「『インフィニットスラッシュ』よ」

ブラン「……『ハードブレイク』」

ベール「『スパイラルブレイク』ですわ」

コンパ「『注射器大暴走』なのです!？」

アイエフ「私は特に思いつかないわ」

九兵衛「刹那の見切り。『柳生切り』だ」

なのは「私は『スターライトブレイカー』なの」

フェイト「私は『真・ソニックフォーム』かな」

はやて「うちはラグナロクを超えた『グラウンド・ラグナロク』や」

シグナム「私は『ファルコンストライク』を撃つ!」

ヴィータ「あたしは『ギガブレイク』だ!」

シャマル「私なら『神秘の癒し』かな?」

ザフィーラ「私は『絶対無敗の盾』だな」

スバル「私は『デイバインストライク』かな?」

ティアナ「私はなのはさんと同じ『スターライトブレイカー』よ」

エリオ「僕は『雷王一閃』がカッコイイと思います」

キャロ「私は『ヴォルテール召喚』です!」

ヴィヴィオ「私もなのはママのように『スターライトブレイカー』」

直井「僕は特にないな」

ユイ「『ライブ・オン・デストロイ』じゃあああああ！！！！！」

松下「俺はないな」

高松「失礼ですが、私ありません」

野田「俺は『ハルバード無双』だ！」

藤巻「俺は……………駄目だ。全然思いつかねえ」

大山「僕はなにもないよ」

TK「『ダンシング・カーニバル』！！」

椎名「『闇夜の瞬殺』……」

岩沢「私は『Mysong』で戦意を失わせる」

銀八「長いな…、まいつか。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

第二十二訓：ホラーゲームにはチェンソーが必須（後書き）

真王「ピギーマンとエンプレスを倒した銀時達。しかし、鏡の間でさらなるトラップが銀時達に襲いかかる」

ジェニファー「次回『たまには鏡に映ってカッコ良くなりたい』テイクオフよ」

〈予告〉

ナレーション「どこかで女の子が生者に助けを求めています」

第二十三訓：たまには鏡に映ってカッコ良くなりたい（前書き）

真王「今回はリック達の過去が明かされます」

ヘルマスク『後アクセスが50000とユニークが50000を突破したらしいぞ』

全員「おお~~~~~!!!!!!」

真王「それからコープスからキャラが一人現れます」

????「え？まさか俺が？」

????「もしかして私かな？」

????「いんや？私かもしれないよ？」

真王「お前らじゃね？よ！では『リリカル銀魂』」

全員「始まるよ!!!」

????「私の出番~~~~!!」

真王「うるさい黙れ」

バキイイイイイン!!!!

????「ウギヤアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

第二十三訓：たまには鏡に映ってカッコ良くなりた

ピギーマンとエンプレスを倒し、ウエスト館へ侵入した銀時とリック達。回転刃トラップやデッドマンがゆく手を阻むが、難無くクリアした。

現在ウエスト館の廊下にいる。

銀時「ったく。あれで俺達を止めようだなんてなめられてんな」

沖田「そうですね。俺は全然足りないんでさあ」

ネプテューヌ「まだまだ余裕だよ！」

銀時達は余裕そうに廊下を歩く。リックは少し感心する。

リック「その様子だとたとえどんな奴でも倒せそうだな」

リックが言うと、銀時が答える。

銀時「あつたりまえだ。俺は天下無双の男だぜ」

新八「天下無双かどうかは知りませんがまあ銀さんは強いですね」

新八は一応銀時の強さを認めている。

シクシクシクシク・・・

・・・どこかで女の子の声が聞こえる。

ネプテューヌ「あれ？…ねえ、どこかで声が聞こえなかった？」

銀時「え？なにが？」

リック「俺にも聞こえるぞ」

ヘルマスク『廊下に響いてんなあ…。どの部屋にいるのかわらんぞ』

ネプテューヌとリックとヘルマスクは声が聞こえたらしいが、彼ら以外は聞こえなかったらしい。

しかも廊下には扉がいくつもあ

10番目。・・・不気味な雰囲気がある部屋。

ヘルマスク『声の発生源はこのようだぜ。調べてみるよ』

ヘルマスクの指示に周りを見渡す。この部屋にあるのは、ボロボロのクローゼットと壊れた机。

そして、部屋の隅っこで泣き崩れている少女の幽「ボタンッ！」

ネプテューヌ「…どうしたの銀さん…？」

いきなり銀時が閉めたのでネプテューヌがきく。

銀時「いやいやいやいや…ありえないありえない、あんなところにスタンドがいるわけがない」

銀時はすごい汗を流してブツブツ言い始める。

ネプテューヌ「銀さん？」

ヴィヴィオ「パパ？」

ネプテューヌとヴィヴィオは心配そうな顔で銀時を見る。

銀時「きつと気のせいだ。うん。もう一回開けよう」

銀時は再度扉を開ける。すると少女の幽霊が目の前にいた。

幽霊「あ、あの・・・」ボタンッ！！

銀時はまた閉めた。

コンパ「ぎ、銀さん…今、何かいたですよね・・・」

コンパは顔を青くさせ、冷や汗を流す。声も若干震えている。

後ろにいる全員（ネプテューヌ、ヴィヴィオ、リック、ジェニファ―を除く）も顔を青くし、冷や汗を流している。

アイエフ「も、もしかして…あの鳴き声はさっきの幽れ「違ーよ！

！！！」

銀時はアイエフの言葉を途中で、いつにもなく必死な顔で否定する。

近藤「ネプテューヌ殿オオオオオオオオオオ！！そいつはきつと悪霊に違いないぞオオオオオオ！！！」

銀時達はリックの後ろに隠れて、ネプテューヌに離れるよう大声を出す。

リック「・・・さつき天下無双って言っただけか？」

リックは銀時をジト目で見て言う。

ネプテューヌ「も、皆んなそんなに幽霊が怖くって言うな！！スタンドだ！！！」

ネプテューヌが呆れて言う。銀時は幽霊ではなくスタンドと呼ばせる気らしい。

ネプテューヌ「・・・ねえ、君は何て名前なの？」

ネプテューヌは銀時達をスルーして少女の幽霊に聞く。

由香「あ、はい…私は持田由香です」

幽霊は由香という。

ネプテューヌ「由香ちゃんだね。よろしく」

ネプテューヌは、由香の頭を撫でる。

銀時「待って待って待って！！ネプテューヌ！そのスタンドと一緒にいたら呪わらバキツ！！」ぐはっ！！

銀時はネプテューヌに瓶をぶつけられる。

ネプテューヌ「いい加減この子を馬鹿にするのをやめてくれない？
かわいそうでしょ？」

ヴィヴィオ「そうだよ！かわいそうだよ！」

由香を抱き寄せてネプテューヌが怒る。

銀時「イヤだからそいつはスタンド「バキッ！」ぶっ！」「ドガッ！」
ぐはっ！」「ザクッ！」ぎゃあああああああああああ！！！！」
銀時が反論しようとしたら、瓶、石、とがった板を順番に投げた。

ネプテューヌ「ごめんね。ああいつてるけどホントはいい人だから安心してね」

由香「は、はい…」

ネプテューヌは由香を撫でて安心させる。リック達はネプテューヌを少し危ないんじゃないかと思った。

ネプテューヌ「ところで、由香ちゃんは何でここに？」

ネプテューヌがきくと、由香はアッ！！、と思いついたような顔をした。

由香「そうだった！由香はお兄ちゃん達を助けようとしてたんだっ
た！」

由香の言葉にネプテューヌ達は驚く。

ネプテューヌ「由香ちゃんのお兄ちゃんがどうしたの！？」

由香「お兄ちゃん達は私を逃がすために変なおじさんに捕まったの
！」

リック「変なおじさん……ウエストか！」

由香の必死の説明に、リックはウエストだと確信する。

ネプテューヌ「じゃあ由香ちゃんのお兄ちゃん達を助けに行こう！」
ネプテューヌの言葉に、全員がおっっ！、と答え、由香の兄達を助
けに行く。

新八「…ところで思ったんですけど、由香ちゃんは何であそこに？」

銀時「どうせ逃げてる間に迷子になって泣いてたんじゃねーの？」
由香「……………」

新八が、ふと疑問に思い、銀時が冗談交じりに言つと、由香はなぜか顔をそらした事は追加しておく。

ウエスト館・鏡の間

由香の兄達を助けるために前を進むネプテューヌ達。今現在、沢山の鏡がある鏡の間にいる。

ネプテューヌ「うわ、此処鏡が多いね」

ネプテューヌは部屋のところどころにある鏡を見て、感想を言う。

リック「気をつける。ここにも敵が潜んでいるからな」

コンパ「ええ！？ここにもですか!？」

リックの一言に、全員が周りを警戒する。すると、

新八「うわっ！この鏡なんか変ですよ!!」

新八が1つの鏡を見て言う。その鏡に映っている新八が、変なポーズをしていたのだ。

銀時「新八、鏡のお前も地味だったみたいだな」

神楽「存在が地味だけで鏡のお前も地味アルか。私等を見るネ、立派に映っているアル」

銀時と神楽が、新八に皮肉を言つて鏡を見る。鏡に映っている銀時は、ドラゴンボールのスーパースァイヤ人のようになっており、鏡に

映っている神楽は、二年後神楽みたいになっていた。

新八「映ってねーだろっ!!!鏡と現実が全然違うじゃねえかアアアアアア!!!」

新八は、額に青筋立てて2人に怒鳴る。

近藤「何やってんだお前ら!その鏡は全然お前達が映ってないではないか!俺の方がもっと立派に映っているぞ!!!」
そういう近藤の鏡には、ゴリラが映っていた。

銀時・新八・神楽「オメーが一番映ってねーよっ!!!」

鏡に映っているのがゴリラだと言うのに映っているという近藤に、3人は怒鳴る。

???「リッく、リッく、リッく、リッく、リッく」

部屋全体に不気味な声が聞こえた。

コンパ「ひゃっ!な、なんですか!?!」

由香「な、何?」

リッく「…現れたか」

リッくはそういうと、1つの鏡を見た。すると、

バライイン!!!

その鏡から何とリッくが出てきた。そのリッくは肌が青く、かぶっているマスクは血のように赤かった。

新八「うわっ!リッくさん!?リッくさんそっくりのが出てきた!」

銀時「何あれ?あれお前のドッペルゲンガーか!?!」

桂「ネプテューヌ殿!前に拾ったES^{エネミーサッチャー}で調べてくれ!」

リックは、アッパーカットでミラーリックの頭を吹っ飛ばした。ミラーリックは倒れ、体が溶けて血だまりができた。

アイエフ「……やっぱり慣れないわ……」

ベール「アイちゃん……」

アイエフは血だまりを見て気持ち悪そうな顔をし、ベールはアイエフを心配する。

リック「まだ終わってない！来るぞ！！」

リックが銀時達に警告する。すると3つの鏡から敵が出てきた。

先ほどのミラーリックだけでなく、青い肌をした銀時とネプテューヌがいた。

銀時「え？俺？」

ネプテューヌ「わ、わたし？」

銀時とネプテューヌは目の前にいる偽物に驚く。

ヘルマスク「いや、まだいるぞ！」

ヘルマスクが言うのと、またもや鏡から敵が現れた。

何と神楽、新八、桂、エリザベス、月詠、ヴィヴィオ、コンパ、アイエフ、ノワール、ブラン、ベール、土方、近藤、沖田、山崎、ジエニファアの偽物が現れた。

新八「うわっ！僕らのまで！」

土方「自分と戦うってのはどうかと思うが、相手にとって不足はねえな」

コンパ「み、皆さん顔色が悪いです！」

ノワール「いや、あれはあいつらの皮膚の色だから」

神楽「あれ？由香のいないネ」

由香「由香は幽霊だから無理だったんじゃないかな」

ヴィヴィオ「メンドクサイもん」

新八「オイイイイイイイ！！メンドクサイで済むかアアアアアアアア！！！」

メンドクサイなどという2人に新八は怒鳴る。

????「ヴァアアアアアアア！！！」

全員「つ！！??」

新八とネプテューヌが話し合いをしていたら、土煙からジェニファ―
―そっくりの偽物・・・ミラージェニファ―が突っ込んできた。

銀時「なにイツ！！生き残りがいたのか!?!」

桂「まさかあの者以外は全員盾になって守ったと言うのか!?!」

新八「ああつ！！ジェニファ―さん危ない!!」

ミラージェニファ―「キシヤアアアアアアアアア！！！」

ミラージェニファ―はジェニファ―に切り裂こうとした。

ジェニファ―「・・・・・・・・・・・・・・・・」

対してジェニファ―は無言でミラージェニファ―を見つめ、右腕を上げた。

するとジェニファ―の右腕が、茶色い大きな腕に変わった。その腕は骨と赤い血が見え、鋭い爪があった。

全員「つ！！?」

ジェニファ―の腕が変わったのを見て驚く銀時達。

ジェニファ―「ああああああああああああああ！！！」

ジェニファ―は右腕でミラージェニファ―を引き裂いた。

ミラージェニファ―「ギヤアアアアアアアアア！！！！！」

引き裂かれたミラージェニファ―は、血だまりへと変わった。

ミラージェニファーを倒したジェニファーは、右腕を元に戻して腕を見つめた。

リック「ジェニファー・・・お前・・・」

ジェニファー「仕方ないわ・・・こうするしかなかったの」
化け物のような腕で殺した自分を嫌そうにして言う。

銀時「おい」

銀時がリックを呼ぶ。

銀時「さっきのは一体何だ？オメーらは知ってるみたいだが？」

新八「ちよつと銀さん！」

銀時はジェニファーの腕のことを聞き、新八は止めようとする。

リック「・・・・・・・・・・」

リックは無言になる。

ヘルマスク『どうせ何時かはばれるぜ。白状した方が楽だ』

ヘルマスクが話した方がいいと言う。しかしいつもより元気がない。

リック「・・・分かった、話してやるよ。俺達のことを」

リックは過去を語り始めた。

（回想）

ウエスト館にいる前のリック達は、とある家に住んでいた。

そこで、リックとジェニファー、そして息子のデイビットの3人暮らしだった。

その時のリックはヘルマスクを被っていなかった。

3人は幸せそうに暮らしていた。だがそれは長く続かなかった。

ガシヤアアアアン!!!

デッドマン「グオオオオオオオオ!!!」

デッドマンの大群がリック達の襲いかかったのだ。

デイビット「うわああっ!!!」

ジェニファー「リ、リック!!!」

リック「なっ!!!、何でこいつらがここに!?!」

ジェニファーがデイビットを抱きしめ、リックは2人を守ろうと盾になる。

実はリックは今の五年前にデッドマンなどの敵を倒したのだが、それが今この場にいるのだ。

デッドマン「リック、ハカセ、ヨンデル、ツレテ、イク」

一匹のデッドマンが、言葉を発して言った。

リック「っ!?それは一体どういう「ゴッ!」「うっ!」

ジェニファー「リック!!!」

デッドマンに聞こうとしたり、後ろからもう一匹のデッドマンがリックの頭を殴った。

リックはそのまま気絶した。

デッドマン「ツレテイク、ハカセノタメニ、オマエラモ、ツレテイク」

???

リック「……っ……ここは一体？」

リックは目を覚ました。ここはどこかの実験室のようだ。

???'ほう、目覚めたか」

リック「なっ!? お前はウエスト!!!」

リックの目の前に現れたのは5年前に死んだはずのウエストだった。
(原作ではゾンビらしいが)

リック「何でお前が「生きているか」か?」

ウエスト「そう、私は復活したのだ。こいつのおかげでな」

そう言って取り出したのは、真つ黒な宝石だった。しかしその宝石は禍々しい雰囲気が漂っている。

ウエスト「こいつは『ダークソウル』というものでな。負の力を具現化させるそうなのだ。私が復活したのはこれのおかげなのだ」
ウエストはダークソウルを眺めながら言う。

リック「…お前が復活したのはいいとして、ジェニファーとデイビットはどうした!」

リックは怒気を放つ。リックが気絶してから2人がどうなったかなんて知らないのだ。

ウエスト「…それはそこにあるやつらのことか?」

リック「?…?…ツッ!!!??」

リックはウエストがさした方向を見て、絶望した。そこにあるのは、デイビットの亡き骸と、デッドマンに実験されているジェニファー

がいた。

ウエスト「子供はようはないから殺したが、女の方はいい実験材料になるからな」

リック「あ……あ……ああ……」

リックは絶望のあまり、ウエストの話を耳に入らなかった。

ウエスト「……まあいい、お前にはこいつをプレゼントしよう」
そう言って取り出したのは、白い骸骨のようなマスクだった。リックにとって見覚えのあるマスクである。

リック「!!、ヘルマスク……なぜおまえが」

ウエスト「クッククク……やつの砕けた欠片から調べて作り出したのさ。そしてこれと適性のあるやつはお前なんだよ」

リックの驚きをよそに、ウエストはヘルマスクのことを語る。実際リックは3回もヘルマスクをかぶっていたが。

ウエスト「さあ茶番はここまでだ。お前は私の奴隷となれ!!」

ウエストはヘルマスクをリックの顔にあてた。

リック「う、ウオオオオオオオアアアアアア!!!!」

ヘルマスクをつけられたリックはもがき苦しんでいる。

やがておさまり、リックの体は筋肉質になった。

ウエスト「フッフッフ……さあ、私のためにやってもらおうか!!」

ウエストは両手を広げてヘルマスクに命令する。

ヘルマスク『やなこつたね』

リック「は？」

ウエスト「なに？」

が、ヘルマスクは命令を拒否した。

ヘルマスク『俺は誰かに命令されて縛られるのまっぴら御免なんだよ！ファックユーオーケイ？』

リック「へ、ヘルマスク？何かしやべり方が違うぞ？」

リックは引き気味になる。昔のヘルマスクは冷静で残虐的な感じだったが、今は口が軽そうなるミスターになっていた。

ヘルマスク『久しぶりだなリック。5年前に俺を倒して以来か？』

リック「…その様子だと5年前までのことを覚えているようだな」
リックはヘルマスクに言う。

ヘルマスク『ああ、覚えているさ。あの時の俺はすべてを支配するためにお前を利用していた。そしてお前に倒されたがコイツが俺を蘇らせたんだ。けどな、俺は利用されるのは大っ嫌いなんだ。あんな奴の命令なんぞ一つたりとも聞きはしねーよ』

ヘルマスクは吐き捨てるように言う。

リック「ヘルマスク…」

ヘルマスク『それに俺の野望はもうとつくに無くなつてんだよ。何の計画も無え。だから俺といっしょに行こうぜ！相棒！』

リック「・・・おう！」

ウエスト「……私が蘇らせたというのに逆らうのか？」

ウエストは苛立ちを立てて言う。

ヘルマスク『ああ、逆らうさ。俺はお前のものじゃねえよ』

ヘルマスクはウエストを嫌そうに言い放つ。

ウエスト「…残念だ。では死ぬがいい！！」

ウエストは銃を取り出し、リックとヘルマスクに向けた。避けよう

としても間に合わない、そう思ったら、

ビュウウウウウバシッ！！

ウエスト「なに！？」

リック「！？」

横から茶色く伸びた腕がウエストの銃を弾き飛ばした。弾いたのはなんと実験されてたジェニファーだった。

ジェニファー「リック！！」

ジェニファーは叫ぶと今度は左腕を変化させ、あたりを壊し始めた。

ウエスト「壊すでない小娘！！止める！！」

ウエストはデッドマン達に命令し、ジェニファーを止めようとしたら、

リック「オラアアッ！！！！」

デッドマン「ギャアアア！！！！」

リックがデッドマン達をなぎ倒した。

ウエスト「小娘…なぜ制御できるのだ」

ジェニファー「前に一回実験された経験があるからそのせいじゃない？」

ジェニファーはウエストにニヤツ、と笑う。その笑い方がなぜか殺意と黒さがあった。

リック「（うわ…ジェニファーが実験された恨みで怒ってる）…ウ

エスト、また会ったらぶっ飛ばしてやるよ」

ヘルマスク『首洗って待ってるよ！！』

そう言っつて、リック達は部屋から逃げだした。

新八は額に青筋立てて3人に怒鳴る。

ネプテューヌ「……………」（無表情）
するとネプテューヌは、無言で3人に近づいて、

ドガッ！バキッ！ゲシッ！ズドッ！バコッ！ベキッ！

ネプテューヌ「今度からちゃんと話を聞いてね？わかった？（殺意全開）」

銀時・神楽・沖田「ジュ、ジュビバゼンデジダ……」

無表情かつ殺意全開のネプテューヌが注意し、顔全体に痣とたんこぶが出来た銀時、神楽、沖田は謝った。

それを見たリック達はネプテューヌにおびえていた。只、ジェニフアーはあらあらと笑っていた。

そんなこんなでリック達は由香の兄を探していくのであった。

（余談）

緑のヒゲ「ハア……ハア……死ぬかと思った……ハア……」

緑の男が、掃除機で部屋のデッドマンをすべて倒したのは追加しておく。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!！」

銀八「おゝし。アシストを紹介するぞ」

ヘルマスク「よう！ヘルマスクがアシストするぜ？」

銀八「よし！始めるぞ。ペンネーム『sibugaki』さんから
の質問。

『ボーボボ

「おう、今回はこの俺が質問だ！つつう訳で質問、なのは、フェイト、シグナム、ティアナの四人に問う。ぶっちゃけ俺達のコラボ見てどう思う？率直な感想を頼む」

なのは・フェイト・シグナム・ティアナが立ち上がる。

なのは・フェイト・シグナム・ティアナ「絶対いやです！」

ヘルマスク「相当嫌われてんなあ……。『sibugaki』。廊下に立ってくれ。次は『鳴神ソラ』からだ。『ルイージ』出たよ…新八君の本体はメガネネタが…orz」

フォックス「それもあるが…うわあ…」

スネーク「銀時の…当たり前過ぎたる…」

マリオ「それにしても今回出て来たチェンソー使いのゾンビは厄介だな」

スネーク「まあ、無事に倒せたのが良かったな…それで今回はコープス側のキャラが出るようだな」

マリオ「そうだな…皆に質問だ」『月夜に舞う龍』で投稿してる作者の小説で作者が考えたオリジナルライダーでどれに変身したい？ちなみに全員同じのは簡便してくれ』

ルイージ「僕も気になったのを質問」キャラちゃんが女神化したらどう言う感じになるの？』

ファルコ「俺からまた全員に質問だ」『スマブラXで俺達スマブラメンバーの最後の切り札をもし使えるなら誰のを使つて見たいんだ？』

ネス「けどホントやばいよね…」

リユカ「ホントだね…」

次回はどうなるのやら…』…一つ目はまあ分けるなら『仮面ライダーハーツ』は万事屋とSSS団一行、『仮面ライダーディブレイカー』なら女神組とリトルバスターズだな。六課組はしないぞうだ』

真王「2つ目はキャラ口はヴィヴィオのように大人になります。赤い

瞳とロングピンクヘアとフェイトのようなスタイルで武器は杖になります。ちなみにボデイの服は白です」

銀八「最後のは長えな。順番に答えるぞ」

銀時「俺はマリオのだ」

新八「僕はディディーさんのです」

神楽「私はソニックが無敵になるところネ！」

桂「マルス殿だ！」

エルザベス『ピカチュウのボルテッカーですね！』

月詠「メタナイトじゃの」

ネプテューヌ「私はマリオだよ！」

ノワール「ゼルダとシークのね」

ブラン「・・・カービィ」

ベール「ピーチさんのですわ」

コンパ「プリンさんのをやってみたいです！」

アイエフ「私はメタナイトね」

九兵衛「僕はアイクだ」

なのは「サムスさんの」

フェイト「私はソニックかな」

はやて「うちはルカリオや」

シグナム「私はアイクを使う！」

ヴィータ「ハンマー繋がりでアイスクライマーだ！」

シャマル「私はヨッシーかしら？」

ザフィーラ「波動を極めるルカリオだ」

スバル「マリオさんです！」

ティアナ「サムスさんね」

エリオ「マルスさんのが似合いますね」

キャロ「私はヨッシーさんです！！」

ヴィヴィオ「マリオさんだよ」

恭介「俺はマリオだ」

鈴「あたしはヨッシーだ！」

理樹「僕はネスさんカリユカ君のPKスターストームかな？」

真人「俺はクツパにするぜ！」

謙吾「マルス殿だな」

小毬「カービィさんのにするよ〜」

来ヶ谷「私はマルスだな」

クド「ピカチユウさんなのです！」

葉留佳「ゲーム&ウォッチさんで葉留佳オクトパスですよ」

美魚「ルイーჯさんですね」

ゆり「フォックスのランドマスターよ！」

音無「俺はファルコか？」

奏「…メタナイト」

日向「俺はウルフだ！」

直井「神の僕ならピットのだな」

ユイ「ドンキーさんのタルコンガで倒すんじゃない!!」

松下「カービィなら肉うどんを作れるのか？」

高松「私なら美しき筋肉を見せるためにフリオマンのようになりた

いすね」

野田「俺はリンクだ！」

藤巻「マルスってかつこいいな！」

大山「スネークさんかな？」

TK「カーニバル・デデデ、ダンシング・デデデ！」

椎名「…メタナイトだ」

岩沢「ドンキーのタルコンガを挑戦してみるか」

銀八「ホント長いな…、まいつか。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ヘルマスク「そうだマリオさんよ。『エンドレス組み手の相手もシミラーエネミーズだったらどの位の数を撃退できるんだ？』」

銀八「マリオだからミラーマリオだな。本物よりも劣るが本物と同じ技を持つてるんだろ？」

ヘルマスク「そのとおり。マリオ、どれくらい余裕で倒せるか想像してくれよ。じゃあな」

第二十三訓：たまには鏡に映ってカッコ良くなりたい（後書き）

真王「ミラーエネミーズを倒し、リック達の過去を聞いた銀時達はなぜか協会のような場所に着いた。そこで銀時達に新たな敵が現れた」

ヘルマスク「次回『逆さまの十字架は不吉な意味がある』テイクオフだぜ！」

第二十四訓：逆さまの十字架は不吉な意味がある（前書き）

真王「今回はコープスキャラが全員でできます」

由香「『リリカル銀魂』が始まります」

第二十四訓：逆さまの十字架は不吉な意味がある

銀時達は、由香の兄達を助けるために奥へと進んだ。
ちなみに本来の目的であるウエストのことは忘れておりません。

銀時達は奥へ進むと、ある場所に着いた。その場所は、聖なる場所
と行ってもふさわしく、ステンドグラスと並ぶ蝋燭がある教会みた
いなところだった。

銀時「何だここ？協会か？」

土方「ウエストってやつは懺悔なんてすんのか？」

銀時と土方が見た感想を言う。

????「う…う…う…」

奥から少年の声が聞こえた。銀時達は奥をよく見ると、半透明の少
年が苦しそうにしていた。

由香「っ！！お兄ちゃんっ！！」

由香が少年に向かって叫んだ。どうやら少年は由香の兄らしい。

由香の兄「ゆ、由香…」

由香の兄は苦しそうに由香を見る。

由香の兄「由…香…、早く…逃げ……うあああああああ！！
」

由香「お、お兄ちゃんっ！！？」

由香の兄が奥へ引きずり込まれた。

そして、奥から真っ黒な逆さまの十字架と、由香の兄と一緒に回っ

ている11人の少年少女の霊が、鎖のようなもので苦しそうに縛られ、十字架の周りを回っていた。

IBGM:Vシービルクロスbyスプラッターハウス
(Splatterhouse - The saint come
s marching in)

銀時「あああああ!!なんだよあれ!!れ・・・すすす、スタンドがいつぱいいる~~~~!!!!」

銀時は幽れ・・・。スタンドを見て指をさしながら声を震わせ
て言う。

近藤は白目むいて固まり、土方は平常心を保っているように見える
が足がガタガタ震えており、新八と山崎はすごい顔で固まり、コン
パ、ヴィヴィオ、ブランは抱き寄せて震えている。ネプテューヌは
そんな銀時達をほつといて、目の前の敵をESで調べた。

『ダーククロス』

『もとはイービルクロスという霊が宿った十字架だが、ダークソウ
ルによつてパワーアップされている。周りにいる霊たちは、ダーク
クロスに縛られた守護霊とされている』

『ダーククロス自身が弱点』

ネプテューヌ「またダークソウル!何でこんなところにダークソウル
があるわけ!?!」

ネプテューヌはダークソウルという単語に嫌気がさす。

桂「おそらくダークソウルはウエストというものが持っているかも
しれんな」

桂が推測する。

由香「そんなことよりお兄ちゃん達を助けてよ！」
由香が涙目でネプテューヌの服をつかんで言う。

ネプテューヌ「大丈夫！由香のお兄ちゃん達は必ず助けるから！」
ネプテューヌは親指をあげて、由香に安心させる。
するとダーククロスが突っ込んできた。

ネプテューヌ「っ！？危ないっ！！！」

由香「キャッ！」

ネプテューヌは由香を抱きかかえて避けた。

銀時「くそ！」

霊「ハアッ！」

銀時「うおっ！」

銀時がダーククロスへ向かおうとしたら、少女の霊がハサミで銀時に襲いかかった。

霊「ケッケッケッケッケ」

霊「フヒハハハハハハ」

新八「うわあああああああ！！！」

新八は追いかけてくる幽霊から必死に逃げている。

土方「だくそ！」

土方はやけになって、幽霊に攻撃する。

スカッ

が、すり抜けてしまった。

土方「うおふおおおおおおお！！！」

土方は逃げだした。

ノワール「ああ、もう！うっとおしいわね！」

ノワールはいらだって、ダーククロスに銃を向け、発砲した。

ノワール「喰らいなさい！」

パンツ！カントツ！

しかし幽霊がハサミで銃の軌道を変えた。

霊「キャハハハ」

ノワール「ちっ！」

笑う幽霊にノワールは舌打ちする。

桂「ちっ！部が悪い。エリザベス、逃げ続けるぞ」

エリザベス「御意！」

桂とエリザベスは、幽霊から逃げ続けている。

霊「キイエアアア！！！」

すると目に前に大きなハサミを持った幽霊が現れ、

スパンツ！

エリザベスの体を切った。

桂「エ、エリザベスウウウウウウウウウ！！！」

桂が悲痛の声を上げる。

エリザベス「何か？」

しかしなぜかエリザベスが首一（？）からニユツと出てきた。

月詠「カメかお主はっ!!」
月詠はエリザベスに突っ込んだ。

銀時「まったく、これじゃ近寄れねーぜ!」
ネプテューヌ「なんとかあいつに近づいて叩き壊せばいいけど」
銀時は吐き捨て、ネプテューヌは由香とヴィヴィオを抱きかかえている。

するとダーククロスが銀時とネプテューヌに突進してきた。

銀時「やべっ!」

ネプテューヌ「……………」

ネプテューヌは強く抱きしめ、目を瞑った。

……しかし何も来ない。ネプテューヌは目を開けると、

由香の兄「くううう……………」

由香の兄が、ダーククロスを止めていた。

由香「お兄ちゃんっ!?!」

銀時「お前!」

由香の兄「由香を……………傷つけてなるものか!」

由香を傷つけないために、体を張ってダーククロスを止めたようだ。

するとダーククロスから手のようなものが伸びて、由香の兄の頭をつかんで、

由香の兄「うわああああああ!!!!」

黒い電撃を出して、由香の兄を苦しめた。

由香「お兄ちゃんっ!!!!」

由香が悲痛な声を出す。

由香の兄「は、早く・・・早くこいつを」

由香の兄は苦しみながら、銀時とネプテューヌにダーククロスを倒すように言う。

銀時「分ったぜ。てやあああああああ！！！！」

ネプテューヌ「ハアアアアアアアア！！！！」

銀時とネプテューヌはダーククロスに向かって走り出し、ダーククロスを叩っ切った。

バキヤアアアアン！！！！

ダーククロスは壊され、由香の兄達を苦しめた鎖が消滅した。

由香「お兄ちゃん！！」

由香は由香の兄に駆け寄る。

由香の兄「う・・・っ・・・」

由香の兄は少しずつ目を開けた。

由香「お兄ちゃん」

由香の兄「由香……………無事みたいだな。よかった」

由香の兄は由香を見て、安心した顔をする。

由香の兄「由香と俺らをご迷惑をかけてしまったみたいですね」

由香の兄が銀時達に謝罪する。

銀時「別にいいぞ」

ネプテューヌ「気にしてないよ」

桂「良い兄妹だな」

エリザベス『全くです』

ノワール「あなた達には何も悪くないわ」

ベール「気にすることではありません」

土方「ま、俺からも許してやるよ」

リック「俺もだ」

銀時達は気にしてないと言う。

胸の大きな少女「うん…あれ?…ここは?」

ロールな少女「なな!何事ですか?」

目つきの悪い少年「何だ一体?」

ツインテールの少女「私達何やってたんだっけ?」

変わった髪 of 少女「あれ?ここどこ?」

銀時達が話をしていると、周りにいる霊たちが起き上がった。

由香の兄「あ、直美!」

直美「え?哲志?」

由香の兄・哲志が少女・直美を呼び、直美は哲志に振り向く。

ロールな少女「お〜。感動の再会ですね〜。この場で告白しちゃいなさい」

直美「ちよつと世以子!」

哲志「篠原!そういう冗談はやめてくれ!」

世以子「つれないな〜もう」

ロールの少女・世以子は2人に冗談交じりで言うが、哲史と直美は、顔を赤くして否定した。

銀時「あの…お宅等誰?」

漫才をやってるような哲志達に、銀時が聞いてみた。

哲志「あ、すみません。俺は持田哲志です」

直美「私は中嶋直美よ」

世以子「私は篠原世以子だよ」

良樹「俺は岸沼良樹だ」

あゆみ「私は篠崎あゆみ。怪談好きなの」

繭「私は鈴木繭です」

哲志達はそれぞれ自己紹介した。

銀時「そんじゃあ次は俺達だな。俺は…」

自己紹介中・・・

銀時「というわけだ。よろしくな」

哲志「あ、はい」

哲志達はお辞儀をした。

新八「ってちよつと待ってください。あれで自己紹介を済ませ」新八君、少し黙ってて」

キーーーーー！バタツ！

ネプテューヌから金的を喰らった新八は、口から泡を出して、そのまま倒れた。ほとんどの男達は、顔を青くして、前かがみになった。

ネプテューヌ「さあ、早く奥に行こうかみんな」

何事もなかったかのように、ネプテューヌは奥へ行った。

ネプテューヌ「ん？」

のだ。

全員が驚きのあまり、目玉が飛び出た者や、吹いた者までいた。

ネプテューヌ「フンッ！」

ゲシッ！

子供の霊たち「ゲフウッ！！」

殴り飛ばされた子供の霊たちは、山積みになれ、起き上がるうとしたらネプテューヌに踏まれてしまい、降参の白旗が出た。

ネプテューヌ「いい？何あって相手を殺そうとしたか知らないけど、勝手に人を殺さないの！」

ネプテューヌは4人の子供幽霊を正座させて、説教している。傍から見れば少女が幽霊に説教している光景はシニールである。

銀時「すげえ。ネプテューヌの奴、スタンドを説教してやる」

桂「すごい心の持ち主だな。幽霊なんてものともしてない」

銀時達はネプテューヌに関心と驚きを抱いた。

只、哲志達の場合は、あれが俺達を苦しめた子たちなのか？と顔をひきつらせていた。

ネプテューヌ「ということだよ、分った？」

子供の霊たち「……………」

ネプテューヌ「返事は？（殺気）」

子供の霊たち「ハイイ！」

ネプテューヌ「よろしい」

説教し終えたネプテューヌは、霊たちに聞いてみると、返事がないので殺気を放つてみると、霊たちは背筋をピンっ！、と伸ばして返事をした。銀時達はいいつ幽霊より強いんじゃないかと思った。

ネプテューヌ「ところで、あなた達は何て名前なの？」

ネプテューヌは霊たちの名前を聞いた。

サチコ「・・・篠崎サチコ」

遼「僕は吉沢遼」

雪「私は管乃雪です」

時子「私は辻時子」

ネプテューヌ「ふくん。サチコちゃん、遼君、雪ちゃん、時子ちゃんだね。私ネプテューヌだよ」

名前を聞いて、ネプテューヌも自己紹介をした。

ネプテューヌ「そしてあっちにいるのが・・・」

少女説明中・・・

ネプテューヌ「というんだよ」

ネプテューヌの説明に、サチコ、遼、雪、時子は、銀時達を眺める。

新八「いやだからそうやって略すのはやめて「ガンツ！」「グファッ
！」

復活した新八がネプテューヌに突っ込みを入れるが、瓶を顔に当てられた。

った。

時子「頭が見つかってよかった」

時子は嬉しそうだ。

ネプテューヌ「嬉しそうだね」

時子「うん！みんなありがとう」

時子はお礼を言った。

ポトツ

頭が外れた。

銀時・新八・土方・近藤・哲志「ぎゃあああああああああ
あ！！！！」

コンパ・直美・あゆみ「いやあああああああああ！！！！」

時子の頭が外れて、銀時達は絶叫した。時子は慌てて頭を戻した。

????「まるで修学旅行のような騒ぎ方だなリック」

リック「！？この声は！」

奥から老人の声が聞こえた。そこにいるのは白衣を着た老人、ウエストだった。

リック「まさかこんな所に現れるとはなウエスト！！」

ネプテューヌ「え？ウエスト？」

銀時「おいウエストってまさか」

桂「リック殿やジェニファー殿を苦しめた張本人だ！」

リックは殺気と怒気を放ち、銀時達はウエストを警戒する。

由香「ヒッ……」

哲志「あ、あの人は……」

直美「思い出した！私達をさらった奴よ！」

哲志達も驚いて、銀時達の後ろに隠れた。

ウエスト「まさか貴様らがここまでやってくるとは予想外だったよ」
ウエストは銀時達を過小評価していたらしい。

銀時「へっ、そりゃオメーは俺達を舐めてんだよ」

ネプテューヌ「リックさん達をひどい目にあわせたあなたはすぐに倒す……」

リック「ウエスト……！すぐにこの因縁を断ち切ってやるぞ……！」

ヘルマスク『そのいきだぜリック……！』

銀時達は構える。

ウエスト「……フッ、きさまらがここまでこようが、この私のとこまでたどり着けん。せいぜい私の手下たちと遊んだいるがいい」
リック「待て！、ウエスト……！」

ウエストがこの場を去り、リックと銀時とネプテューヌは、ウエストを追いかけると、

デッドマン「シャアアア……！」

デッドマンが襲いかかった。

リック「邪魔だ……！」

が、リックと銀時とネプテューヌは、デッドマンをなぎ倒した。しかしウエストはすでに奥へ消えていった。

リック「くそっ……！」

ヘルマスク『落ちつけリック。ああいうラスボスに限って決着にい

い場所にいるだろうよ。』

新八「ヘルマスクさん、メタな発言はやめてください！」

銀時「んで、どうすんだ？」

銀時はリックに聞く。

リック「もちろん追いかける！あいつとの因縁を断ち切ってやるよ

！」

ヘルマスク『俺もやるよ』

リックは力いっぱい答えた。すると、

哲志「俺らもいきます！」

哲志達が突然行くと言い出した。

銀時「おいおい、オメエらが来たって巻き込まれるだけだぞ」

ネプテューヌ「いや銀さん、哲史君達は幽霊だから効かん」霊って言うな！！スタンドだ！！」

ネプテューヌのセリフをかぶらせて、冷や汗流してスタンドと呼ぶ銀時。

ネプテューヌ「それじゃみんな行くよ！」

ネプテューヌが全員に先導しようとすると、

銀時「何でお前が指導者なんだよ。ガキにリーダーは務まらねえよ」

神楽「マジ駄目アル。ねぶつちじゃ失敗するのがオチネ」

桂「失礼ながら俺もリーダーに賛成だ」

銀時、神楽、桂がバツサリと切り捨てた。

ネプテューヌ「……………サチコちゃん」

サチコ「何？」

ネプテューヌが、サチコ達に向いて、言い放った。

ネプテューヌ「……………殺れ」

サチコ・遼・雪・時子「ハイ……………（呪文唱
え中）」

サチコ達は、手を合わせてブツブツと呪文を唱え始めた。

ボウツ！

大きな牙の生えた人魂が現れた。そして銀時達を追いかけ始めた。

人魂「ガウガウガウガウツ！！」

銀時「ギヤアアアアアアアアこっちに来るなアアアアア！！！」

神楽「ギイヤアアアアアアアアアア！！！」

桂「ウワアアアアアアアアアアア！！！」

銀時達は人魂から逃げ続けるはめになった。

で、結局なんやかんやで、リックがリーダーとなりました。

リュカ「うん！（怒）」

ソニック「まったくくだな…皆に質問だ、『月夜に舞う龍』で投稿してる作者の小説で作者が考えたオリジナルライダーで誰と戦ってみたい？理由を頼むのと別々に頼むぜ」

スネーク「リリなのメンバー以外に質問だ『もしバリアジャケットを作るならどう言うのにしたいんだ？』」

フォックス「新八に質問、『ボケとツツコミを10割で例えるところ言う割合になる？ちなみに表現はツツコミ：ボケな』」

次回を楽しみにしてます『…え〜。1つ目は、全員がまとめてみたらこうなっていました』

『仮面ライダーハーツ：銀時・神楽・桂・エリザベス・月詠・シグナム・ヴィータ…接近戦にちょうどいいから。』

仮面ライダーディブレイカー：ネプテューヌ・ノワール・ブランベール・アイエフ・コンパ・なのは・フェイト・はやて…魔法を打ち消す力があるから。』

銀時「2つ目は俺はそのままだ」

新八「寺門通親衛隊の服です！」

神楽「私はそのままネ！」

桂「キャプテン・カッターラスーツだな」

エリザベス『私はそのままになるけど』

月詠「わっちはこの姿が気に入ってる」

ネプテユーン「私は成長してパープルハートの服だね」

ノワール「ブラックハートの服ね」

ブラン「・・・ホワイトハート」

ベール「グリーンハートのですわ」

コンパ「ナース服です」

アイエフ「私はそのままがいいわ」

新八「それから3つ目ですけど多分7：3分けじゃないかなあ・・・」

銀八「はい。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

由香「次はペンネーム『黒神』さんからの質問です。『銀時へ

もし僕の小説の様に魔導士になれるなら、どんなデバイスがほしいですか？

オリジナル的をお願いします。

神楽と月詠へ

由香「何か…大丈夫かな。お姉ちゃん達…」

第二十四訓：逆さまの十字架は不吉な意味がある（後書き）

エトナ「ダークソウルを使って世界を手に入れようとするウエスト博士。が、その時ウエストの前に世界の美少女・エトナが現れた」

銀時「あれ？次回予告じゃねえのか？」

エトナ「しかし、多種多様のモンスターが現れ、エトナにピンチが迫って来た！」

リック「偽次回予告か？」

エトナ「けど安心して！正義のヒーローは最終的にパワーアップして、どんなラスボスでも倒せるようになってるのよ！」

ネプテューヌ「私がヒーローだよ！」

ノワール「そこ、張り合わないの」

エトナ「次回『魔界スプラッターエトナ』最終話：闇夜に舞う少女みんな、絶対見てね」

真王「ハイエトナさん。帰ってください」

エトナ「ちよつとオオオオオオ！！」

真王「本当の次回は『体がでかくても頭が馬鹿なのはお約束』です。では」

くつぶやき

真王「たまには銀魂的短編を作ってみるか…」

特別番外訓：鬼が出たら豆をまけ（前書き）

真王「今回は節分の日になんで、この作品を作りました。『リリカル銀魂』スタートです」

餌を揺らしてみる。ぴくぴく動いている。

もっと揺らす。ぴくぴく動いている。

口に近付ける。ギランツ！と眼が光った。

ネプテューヌ「フイ〜〜〜〜〜〜〜〜ツシュッ！！」

2人は肉にかじりつき、それをネプテューヌは釣り上げた。（地面の上だが）

ネプテューヌ「さ、早く銀さんのところへ行く」

ネプテューヌは2人を引きずって六課へ帰った。

機動六課・食堂

バクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバクツ！！×2

ネプテューヌに連れてこられた（引きずられてきたと言うべきか）
2人は相当空腹だったらしく、買ったばかりの食材を含めバクバク
食べていました。

銀時「どれだけ食うんだこいつ等は・・・」

スバル「よほどお腹が空いてたんですね・・・」

銀時とスバルは2人の食いつぶりに啞然とする。

ネプテューヌ「私が拾ったんだもん。感謝してほしいよね」

勇儀「あゝ、それはだなゝ・・・」

萃香と勇儀はなぜか齒切れが悪い。何やら顔をそらしている。

萃香・勇儀（スキマの奴が持っていた酒を飲んでしまった揚句怒らせてここに飛ばされたことは言えないな・・・）

ある賢者妖怪の持っていた酒を飲んだことで、ミッドチルダに飛ばされたことを話すのが無償に恥ずかしく思う萃香と勇儀。

新八「何言ってるんですか銀さん。大方、どっかの知人を怒らせて無理やりあんなところに飛ばされたんじゃないんですか？」

萃香・勇儀「ギクウツ！！！」

新八のほぼ的中なセリフに萃香と勇儀は半端ない汗を流す。

ネプテューヌ「…あれ？2人と、何でいっぱい汗かいてんの？」

銀時「しかもお前らさつき『ギクウツ！！』ってしたよね？」

新八「え？…まさか当たってるんですか？」

ネプテューヌと銀時は萃香と勇儀のリアクションに不審を抱き、新八はまさかと冷や汗を出す。

とうとう萃香と勇儀はハアツとため息をつき、白状した。

銀時「馬鹿だなゝ。そんなことするからそんな目にあうんだよ」

勇儀「・・・面目ねえ」

萃香「・・・反省してます。」

2人はネガティブ気味になる。

ネプテューヌ「ねえ、勇儀さん達をここに泊めない？」
ネプテューヌ「がこんな提案をしだす。」

コンパ「そうです！このままじゃ2人は一文無しです！」

銀時「ちよつとコンパちゃん？一文無しってやめてくんない？その言葉敏感だから」

コンパのセリフに、銀時は突っ込む。

勇儀・萃香「ホントか!？」

勇儀と萃香が乗り出す。

銀時「……あゝ分ったよ。ここに泊めてやるよ」

勇儀・萃香「ありがとう!!!」

銀時は許し、勇儀と萃香は土下座した。

コンパ「……ところで、勇儀さんと萃香さんは何で頭に角があるんですか？」

コンパは2人の角を見て言う。

勇儀「これか？この角は鬼の証なんだ」

全員「お…鬼イツ!!」

銀時達は勇儀と萃香が鬼ということに驚き、コンパは銀時の後ろに隠れた。

コンパ「み…みなさん気を付けるです!!鬼はへそを抜き取ってしまつです!!」

ネプテューヌ「ええ!?本当!？」

勇儀「出来るか!出来たとしてもしねーよ!!」

コンパの鬼に対する認識にネプテューヌは信じてしまつが、勇儀が全力で否定する。

なのは「コンパちゃん。それは雷のことでしょ」

コンパ「え？……………
……………ああ！そうでした！！」

新八「いや長げーよ！！思い出すのにどんだけ時間かかったんだよ！！」

なのはがへそを取るのが雷だと言い、コンパは思い出すが、長かつたため新八が突っ込んだ。

ネプテューヌ「まあそれはいいとして、とりあえずよろしくね勇儀さん」

勇儀「おう」

萃香「あたしも忘れないですよ」

とりあえず、勇儀と萃香は、六課に居候することになった。

ネプテューヌ「はやてさーん！買い物買って来たよ」

はやて「ご苦労さーん」

ネプテューヌが買い物から帰って来た。さらにその後ろには、

勇儀「やれやれ…最初の仕事がこれとはね」

萃香「まー暇じゃなかったからいいじゃん」

勇儀と萃香が大きな買い物袋を持って帰って来た。助けてくれた恩返しとして、手伝っているのだ。

はやて「おおきにな。そないしてもえらい力持ちやな」

大きな袋を背負っている勇儀を見て言うはやて。

勇儀「あたしら鬼は力自慢だからな。これくらい朝飯前だ」
勇儀は自信満々に言う。

はやて「さよか。ほんなら次の仕事を手伝ってくれるか？」

萃香「あたしらに出来ることならね」

勇儀と萃香は次の仕事に向かった。

荷物運び

勇儀「やっぱこっちの仕事がしつくりくるよな」

萃香「物運びなら負けないけどね」

勇儀と萃香は、いろいろな大きな荷物や道具を運んでいた。

子供と遊び

ネプテューヌ「それいい」

ヴィヴィオ「わいい」

萃香「ホレホレ」

勇儀と萃香は、現在子供たちと遊んでいた。

はやて「楽しそうやな」

桂「そうだな八神殿」

ベール「微笑ましいですわ」

はやて、桂、ベールは勇儀達を眺めている。すると、

勇儀「ちよっ、おいこら！どこ触ってんだ！」

ネプテューヌ「いや、勇儀さんって本当におっきいなって」

ネプテューヌが、勇儀の豊満な胸を揉んでいた。

はやて「んなつ！？ネプテューヌちゃん！！そのおっぱいを揉むのはうちの特権や～～～！！」

はやてはダッシュで勇儀のそこへ向かうが、勇儀ははやてを海へ投げ飛ばした。

休憩

勇儀「ごくごくごくごく……ぷは、やっぱり酒が一番だわ」

萃香「のんどののんどのん／＼／＼／＼」

勇儀と萃香は、二人で焼酎を飲みあっていた。萃香はすでに酔っ払いになっていた。

新八「あんたら一体どんだけ飲んでるんだっ！！！」

新八が2人に怒鳴る。2人の後ろには、100本の酒瓶が散らかっていた。

そのあとも、勇儀と萃香はいろいろ手伝いしたり、ドジって何か壊したり、銀時達に無理やり酒飲ましたりとハチャメチャな感じになっていました。

そんなある日、

金髪の女性「ハ〜イ。勇儀と萃香はいる？」

銀時「うおっ!？」

なのは「え!？」

ネプテューヌ「？」

金髪で紫の服を着た女性が六課にやって来た。ただ、その女性の後ろにはスキマのような穴があり、中は複数の目玉がギョロツとこちらを向いていた。

勇儀「お？紫じゃないか」

萃香「数日ぶりだね〜」

勇儀と萃香は女性・八雲紫と知り合いらしく、いつも通りのな挨拶をする。

ネプテューヌ「勇儀さん、誰なのあの入」

ネプテューヌは紫を指差して言う。

勇儀「八雲紫、妖怪の大賢者って呼ばれてるんだってさ」

全員「妖怪い!?!？」

勇儀は紫のことを説明し、全員（ネプテューヌ除く）が驚く。

ネプテューヌ「ふ〜ん。要するに偉いおばさ〜ヒュンツ!」「」

ネプテューヌが何かを言い来る前に、スキマの穴に落ちた。

新八「ああああああああ!!!ネプテューヌちゃあああああああ
ああん!?!?!」

紫「あらごめん遊ばせ。イラツと来ちゃってつい落としちゃったわ
」

紫「……………ま、いいわ。あなたはちょっと非常識な子って言うことにしとくわ」

銀時「ちよつとというより実はかなり「ドガツ!!」「ボゲアツ!!」」

紫がつぶやき、銀時は何か補足しようとしたら、ネプテューヌから消火器をぶつけられた。

ネプテューヌ「ところで勇儀さん、萃香ちゃん、帰っちゃうの？」

ネプテューヌは、勇儀と萃香を見ていいだす。

勇儀「ん？ああ、まあな。けどそんなに落ち込むな、またいつか会えるさ」

ネプテューヌ「ホント？」

萃香「本当だよ／＼／＼／＼」

勇儀と萃香は答える。…てか萃香！またあなたは酔っ払っているのか！

ネプテューヌ「そつか。勇儀さん萃香ちゃん、いろいろと楽しかったよ」

ヴィヴィオ「また遊びに来てほしくな」

ネプテューヌとヴィヴィオは言う。

はやて「その前にあんたらにはこれを済まसानあかん」

はやてがそう言って取り出したのは、お酒の請求書だった。

勇儀・萃香「それじゃさよなら〜〜〜」

はやて「あ！、こちら！」

紫「うふふ…それじゃ」

勇儀と萃香は、冷や汗流して逃げるようにスキマへ消えた。そして紫もスキマに消え、スキマは閉じた。

ネプテューヌ「……行っちゃった」

幻想郷・地獄

帰った勇儀と萃香は、嬉しそうに酒を飲んでいた。

パルスィ「あら？勇儀。嬉しそうだけど何かあったの？」

勇儀の知り合いの嫉妬姫・パルスィが勇儀に聞いた。

勇儀「いんや。面白い奴にあつてな、これが嬉しくなくなっているか」

パルスィ「…なにがあつたか知らないけどなんか妬ましいわ…」
そんな怪力鬼と嫉妬姫の会話だった。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「節分の日にやりますよこのコーナー。そしてアシスタントはこの二人」

勇儀「山の四天王・勇儀と」

萃香「同じく四天王の萃香がアシストするよ」

銀八「んじゃ行くぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ』ついに決着か？」

ルイージ「だね…と言うか新八君…不埒な」

スネーク「それにしてもダークソウルで作られたモンスターが出て来たな…」

ネス「と言うかネプテューヌさんすごっ！」

リュカ「うん…どんだけ〜」

ある意味銀さんと同じだな〜

マリオ「それにしてもハーツとディスプレイカーが多いな…」

まあ…ダブルオーとかは紹介の奴がまだBBSの方だけにあるからね（苦笑）

マリオ「んじゃま質問、『前回のソニックの質問で答えたオリジナルライダー以外に2番目に変身したいライダーは何だ？』」

ルイージ「今回のコープス&スプラッターで出た人たちに質問『内の兄さんどう思う？』」

フォックス「真王に質問『今やってる編で出たメンバーは準レギュラーになるのか？』」

マリオ「そんな訳で銀時にネプテューヌとリック！頑張れよ！」「
そんじゃまず一つ目から」

全員が立ち上がる。

銀時「俺は剣を使える剣だな」
フレイド

新八「僕も銀さんと同じで」

神楽「私は電王のモモタロスがいいネ！」

桂「ミラーワールドへ行ける龍騎だな」

エリザベス「私はクウガです」

月詠「わっちはキバじゃの」

ネプテューヌ「私はディケイドがいいな」

ノワール「全部よ!!!（欲張り）」

ブラン「・・・響鬼」

ベール「オーズがいいですわ」

コンパ「私はないです」

アイエフ「私もよ」

銀八「んじゃ2つ目」

リック、ジェニファー、如月学園組、ゴーストチルドレンが立ち上がる。

リック「…正直どうだろうな」

ヘルマスク『人間か?って思えるよな』

ジェニファー「よく分からないわ」

哲志「俺達が言うのもなんだけど」

如月学園組「あなたは人間じゃないです」

ゴーストチルドレン「…普通のおじさんだけど?」

真王「3つ目は彼らはレギュラーかどうかわかりませんが、リトル

バスターズよりも出番が少ないという感じです」

銀八「だそうだ。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

萃香「次はペンネーム『黒龍』さんからだよ。『黒龍』リリカル銀魂ライダーの作者の黒龍です。小説全話読ませてもらいました。面白かったです」

ソラ「つうか前回の話はスタンドが出すぎだろ」

銀時「まったくだな」

アリス「まったくあれは幽「違うスタンドだ!!!」、まったく」

アリスは頑なに幽霊だと認めない銀時に呆れる。

アリス「それにしても、ブランは本当に面白いチビだなくくく(笑い)」

銀時「お前・・・どうなっても知らねえぞ」

ソラ「とりあえず質問いくぞ。俺から女神四人に質問だ。『黒龍の小説に出ているキャラで対戦してみたいキャラはいるか?』」

黒龍「俺は真王さんに質問です。『たくさんの作品キャラが登場していますけど、やっぱり捌くは大変ですか?』最後にリリカル勢と銀魂勢と女神勢に質問です。」

『筋肉となのはを愛するマッチョ男ケン八になった真八を見て皆さんはどう思いますか?』」

銀時「そつちの俺、まあ頑張れよ」「『」

女神組が立ち上がる。

ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール「銀さんかソラさんで」

銀八「あれ？他の奴らは？」

ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール「あんなザコと戦う理由はない（よ）（わよ）（ですわ）」

きっぱりと言い捨てた4人。

真王「・・・2つ目は、そりや大変ですよ。沢山キャラをかいてたら、あれ？でてたつけ？みたいなことになりますから」

銀八「そうか。んじゃ3つ目は」

全員が立ち上がる。

全員「キモイ」

新八「皆さん揃ってひどくありません！？そりや確かにこれ僕ううううううううう！？？って思いましたけど」

銀八「そんなもんだ。んじゃ『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

勇儀「これが最後か？ペンネーム『sugita』からだ。『ネプテューヌ』は最強ですね。

ガチバトルの場合、白夜叉銀さんとパープルハート、どっちが強い

ですか?』」

真王「互角くらいでしょうか?でもこの2人が手を組んでいたら最強だろうね」

勇儀「そうなのか?だったらあたしはあいつらと勝負してえ!」

真王「骨は拾ってやるよ」

勇儀「あたし何されるの!?!」

真王「それじゃ『s u g i t a』さん。廊下に立ってなさい」

萃香「一度でいいからパープルハートと白夜叉の銀時と戦いたいよ!」

勇儀「そうだぜ!あたしも戦うぞ!」

真王「欠片は拾ってやるよ」

勇儀・萃香「あたしらどうなるの!?!」

真王「それではさよなら」

特別番外訓：鬼が出たら豆をまけ（後書き）

真王「いかがでしょうか？それでは本編に戻ります」

第二十五訓：体がでかくても頭が馬鹿なのはお約束（前書き）

真王「ハア・・・免許習得生活がしんどいな」

銀時「まあ、頑張れ！」

直美「・・・『リリカル銀魂』が始まります」

第二十五訓：体がでかくても頭が馬鹿なのはお約束

持田哲志達を助けた銀時とネプテューヌとリック達。そこでウエストと出会い、銀時とネプテューヌとリック達は、ウエスト館の奥へと進んでいった。

ウエスト館・図書室

ガタガタガタガタツ

ヒュウウウウウウウ!

銀時「だ〜!も、うっとおしい!〜!」

銀時は苛立って本と椅子を叩き落とす。

なぜ苛立って本と椅子をおとすと言うと、実は本と椅子は、ポルターガイストによって、動いているのだ。

ネプテューヌ「こんだけ邪魔されるとエイッ!、ホントイライラするよ、ねっ!」

ネプテューヌも、歩きながら本を叩き落とす。

コンパ「き、気をつけて進むです…キヤッ!」

コンパは飛んできたナイフを本で防ぐ。ちなみにコンパの持っている本はただの本である。

新八「早いとここを抜けないといけませんね…オプッ!」

新八は本に打撃を喰らった。

リック「出口までもうすぐだ」

そうして、リック達はポルターガイストの領域を抜けた。

ウエスト館・ボロボロの廊下

銀時「だ〜〜!!もうホントしつげえよ!!」

ネプテューヌ「ああん!もう放してよ〜!」

銀時達は掴みかかってくる手を払いのけて進んでいる。

しかもその手は、ウツデイと呼ばれる意思を持った手である。しかもこの場所はウツデイの巣である。

クイクイツ

ウツデイ達は中指を動かして挑発している。

銀時「新八、挑発に乗るな。冷静を保つんだ」

銀時はウツデイの挑発を無視して進む。

ベール「ああノノノそこを触つてはいけませんわノノノノ
後ろからベールの嬌声が聞こえた。

銀時「あん?ベール何やって、っ!!!!!!??」

銀時と新八は後ろを見ると、すごい形相をした。そこにいるのは、

リック「よし。みんな行くぞ」

リックの一言に全員立ち上がり、次の場所へ向かおうとしたら、

銀時「ええ〜。もう少し休ませてくれよ〜。俺眠いんだから」

銀時は動こうとせず、その場で眠りに入った。

ネプテューヌ「……………サチコちゃ「おし！！みんな早く行くかっ！！」」

ネプテューヌがサチコを呼ぼうとしたら、銀時は冷や汗流して素早く立ち上がって先へ進んだ。

ネプテューヌ（分かりやす…）

ネプテューヌは表情を隠して笑った。

銀時「……………（汗）」

銀時は顔を青くして進んでいる。なぜかと言うと、銀時の周りにサチコ、遼、時子、雪がいるからだ。

コンパ「ところで銀さん。何でサチコちゃん達をいやがるんですか？」

コンパが銀時にこんなことを言い出した。

銀時「嫌がる？何言ってるの？銀さんがスタンド共と「ギロツ」イ

ヤ、ナンデモナイ」

銀時がスタンドと言ったらサチコ達が睨み、銀時は片言になった。

ネプテューヌ「…そういえばベールの漫画であるスタンドがいた気がするけど」

銀時「え？どんなの？」

銀時が興味を示した。

ネプテューヌ「えと、確かスター……何だっけ？」

銀時「そりゃスタープラチナだろ」

銀時がスタープラチナという。

ネプテューヌ「そうそう。頭が三角形でブラジャーつけたスタープラチラ」

銀時「スタープラチラって何！？それブラジャーつけた只の変態じゃねえか……！」

ネプテューヌの全然違う答えに、銀時は怒鳴り、周りは苦笑いする。

桂「ん？銀時、何か来たぞ」

銀時「あん？」

桂は奥から足音が聞こえ、銀時達を呼ぶ。奥から来たのは、デッドマン……のようだが、なぜかほとんどのデッドマンが筋肉質である。

リック「なんだあいつらは？」

ヘルマスク『ありやデッドマンなんだが、何か別の力を感じるぞ』

ネプテューヌ「別の力？だったらESで調べよう」

ヘルマスクが別の力があると言い、ネプテューヌがESで筋肉質のデッドマンを調べた。

『メガデッドマン』

『ダークソウルから力を与えられたデッドマン』
『主に格闘技を使う』

ネプテューヌ「…もう三回目だよダークソウルが出るのは」
ネプテューヌはウンザリそうに愚痴をこぼす。

リック「その愚痴をこぼすのはこの状況を突破してから言えよな！」
リック達は行動を開始した。

IBGMステージ1 byスプラッターハウス3

(Splatterhouse 3 Music - Stage
1)

リック「オラッ！」

リックはメガデッドマンを殴り飛ばす。

メガデッドマン「ゴオオオオー!!」

メガデッドマンは負けじと立ち上がって、リックに攻撃するが、避けられる。

リック「おらよ！」

ドゴッ!

メガデッドマン「ゴオオオオオプシュウッ!!」

メガデッドマンは倒れ、緑の血だまりになった。

銀時「テエエエヤアアアー!!」

銀時は木刀でメガデッドマンをなぎ倒した。

メガデッドマン「ゴオオオオプシュウッ！」
なぎタオ押されたメガデッドマンは、緑の血だまりになった。

銀時「つーかこれファイナルファイトじゃね？」

新八「言ってる場合ですか銀さん！」

銀時のつぶやきに、新八が突っ込む。

近藤「奥に扉があるぞ！」

ノワール「みんな！早く行くわよ！」

奥の扉へ向かって、銀時達は走り出した。

銀時「あのさあ。奥に行けたのはいいけどさあ」

銀時は深呼吸して、言い放つ。

銀時「スッゲー囲まれてるんですけどオオオオオオオオオオオオ！！！！」

銀時達の周りには数多くのデッドマンデッドマンデッドマン…もはやデッドマンの大群だった。

リック「…さすがの俺でもこれはこたえるぞ…」

ヘルマスク『こりゃ1000体はいそうだな』

リックはデッドマンの大群を警戒する。

ヴィヴィオ「あ！、あれ！」

ヴィヴィオは何かを指差した。その先には黒いひし形の…

全員「ダークソウルっ!?!」

そう、ダークソウルが、グルグル回って浮いていた。

???「美しいものだろうか?ダークソウルは」

リック「この声は!ウエスト!」

上から老人・・・ウエストの声が聞こえた。ダークソウルはウエストの周りをまわっている。

ウエスト「ダークソウル…私を復活させたもの…実にすばらしいものだな」

ダークソウルを手に載せて、クツクツと笑う。リック達は怒りが込みあがってくる。

ウエスト「お前達に見せてやろう。ダークソウルのさらなる力を!」

ウエストが言うと、ダークソウルの輝きが増した。

リック「くっ、なんだ?」

ネプテューヌ「うわー、目がー!、目がー!」

銀時「チッ、これじゃ見えねえぜ」

ダークソウルが輝きだして、銀時達は手で覆う。

すると、ダークソウルを中心にブラックホールのようなものが現れ、吸い込み始めた。

ネプテューヌ・ヴィヴィオ・コンパ・由香「きゃあああああああああああ!?!?!」

土方・近藤・哲志・良樹「うおおおおおおおおお!?!?!」

銀時「吸い込む量半端ねえ〜!?!?!一家に一台ほしいくらいだ!」

銀時達は、地面でこらえている。

対して、周りのデッドマンはブラックホールに吸い込まれていく。デッドマンが全員吸い込まれたら、吸い込みがなくなった。

ヘルマスク『オイオイやばいぞ。なんかすげーのが出そうだぜ？』
ヘルマスクがダークソウルを見て言う。

ウエスト「さあ！ダークソウルよ！お前の力を奴らに見せつけるのだ！！」

ウエストが叫び、ダークソウルの下から魔方陣が展開された。その魔方陣から大きな右手が現れ、さらに左手と来て、ついに体が出た。それは、全長3メートルはあるデッドマンだった。

ヘルマスク『うわwでけえ！ものすつげえデケえ！』

ヘルマスクは大きなデッドマンに驚く。

ノワール「ネプテューヌ！」

ネプテューヌ「やってるよ！」

ノワールがネプテューヌを呼び、ネプテューヌはESで大きなデッドマンを調べた。

『ギガデッドマン』

『沢山のデッドマンを融合させた大きなデッドマン。凶暴故、注意が必要』

『頭が弱点』

ウエスト「では貴様らはそのおもちゃと遊んでいるがいい」
リック「待て！ウエスト！」

リックは呼ぶが、奥へと消えてしまった。

IBGMボスbyスプラッターハウス3
(Splatterhouse 3 Music - Cannibal Boss Intro)

ギガデッドマン「ギガアアアアアアアア!!!」

リック「うおっ!」

ギガデッドマンが右腕を振りおろしてリックを攻撃する。リックはギリギリかわす。

ギガデッドマン「グオオオオオオオオオオ!!!」

両腕を振り回して、暴れまわっている。

銀時「あんにやる!我武者羅に暴れやがって!」

新八「でもあれじゃ近づけませんよ!」

ネプテューヌ「でもさ、ああいうやつに限って実は馬鹿なんじゃないの?」

銀時・新八「お前が言うな!!!」

ネプテューヌの一言に怒鳴る。

ヘルマスク『漫才やつてるとこ悪いが、ヤベエの来るぞつ!!!』

ヘルマスクが突然叫ぶ。ギガデッドマンを見ると、巨体とは全然似合わないスピードで突進してきた。ショルダーチェッキングのように。

リック・銀時・土方・近藤・桂「ぐわっ!」

ネプテューヌ・新八「うわっ!」

コンパ・アイエフ・ノワール「きゃっ!」

ギガデッドマンの突進に、銀時達は吹き飛ばされた。

ネプテューヌ「いたた!!!?サチコちゃん危ない!!!」

銀時「バカヤロー新八。ボスはさっさと倒す方がいいんだよ。手間省けるし」

新八「結局それかいイイイイイ!!!」

銀時の答えに、新八は怒鳴る。

ギガデッドマン「ウガアアアアアアアアアア!!」
すると、ギガデッドマンが起き上がった。

桂「なかなかしぶとい奴だ」

銀時「おいサチコ! もう一回囿になつてくれ」

サチコ「銀時が私達と付き合ってくれるなら」

銀時「ガンダラの如くお断りじゃアアアアアアアアアア!!!」
(汗)

桂が愚痴り、銀時がサチコに囿になるよう言うが、サチコの条件に銀時は冷や汗流して断固否定した。

ネプテューヌ「だったら私になるよ!」

銀時「っおい!」

アイエフ「ちよっ、ネプ子!」

ネプテューヌが囿になると言い出し、銀時とアイエフが止めようとするが、もう行ってしまった。

ネプテューヌ「そのデカ物! こっち向けえ!!」

ギガデッドマン「ゲウ?」

ネプテューヌが叫び、ギガデッドマンは振り向く。

ネプテューヌ「……ベエ」

ギガデッドマンに向かってあっかんべをした。

新八「オイイイイイイイ!!! そんな下らないことするんじや

ギガデッドマン「グヴウツ!!」
ネプテューヌが高くジャンプし、ギガデッドマンの頭を殴り潰した。
ギガデッドマンは跪いた。

銀時「お前やるじゃねえか!」

ネプテューヌ「まだ油断しちゃダメ!」

ヘルマスク「その通り、こいつはまだ動けるぜ」

ギガデッドマンはグググ、と体を起こそうとしている。

由香「ど、どうすればいいの?」

サチコ「……………」

サチコがリックに近づく。するとヘルマスクが何かに気づく。

ヘルマスク「おい、リックとゴースト共」

哲志「誰がゴーストだ…って俺達か」

直美「一体何?」

直美達がヘルマスクに聞く。

ヘルマスク「俺が今思いついた賭けがあるんだが…乗るか?」

哲志「賭け?」

良樹「なんだそれは?」

哲志と良樹が聞くと、意外な答えだった。

ヘルマスク「全員揃って俺らに力をくれないか?」

哲志達「…はい?」

リック「なんだそのいきなり過ぎる展開は?」

リックは呆れる。

ヘルマスク「まあ話は最後まで聞け。お前らは俺の中に入ればリッ

クをパワーアップすることができると確信できたんだ」

直美「な、何でそこまで確信できるの？」

直美は聞く。

ヘルマスク『赤服の譲ちゃんが近づいた時に何かピンと来たのさ』

リック「…よく分からんが、やらないよりはマシだろう」

ヘルマスク『そう言うこつた。早くしてくれよ、あいつが暴れまわる前に』

哲志達「……………」

哲志達は向き合う。

哲志「リックさん達のためにも、みんなで力を合わせよう！」

直美達「うん！（おう！）」

ヘルマスク『よくいった！そんじや入れい！』

哲志達はヘルマスクの中に入っていった。

リック「くあつ！、こ、これはなんて力だ」

ヘルマスク『すげーぜ！俺の考えに狂いはなかったぜ！！これならいけるぞ！』

リックは体に変化を感じ取る。

リック「ウ、グッ！、……ウオオオオオオアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

リックが叫んだら体中に大量に血が噴出した。

それと同時に両腕から骨が出てクローのようになり、背中からとげとげした骨が出てきた。そして体はギガデッドマンほどではないが、大きくなっている。

リック「ハア…ハア…こ、これは？」

ヘルマスク『ヒュ〜！なんていかした姿なんだ！』

リックは自分の姿に驚き、ヘルマスクはすごく喜んでいる。

哲志『リックさん!』

リック『!その声は!』

頭に哲史の声が聞こえ、リックは驚く。

哲志『ハイ!どうやら僕達はリックさんと会話できるみたいですよ!』

直美『なんでもいいけど早くやつつけちゃいなさい!』

ギガデッドマン『グアアアアアアア!』

哲志と直美と会話してたら、ギガデッドマンがリックに襲いかかって来た。

パシッ!

ギガデッドマン『ガアッ!?!』

何とリックはギガデッドマンの攻撃を止めた。それも片手で。

ズバンッ!!

ギガデッドマン『グギャアアアアア!?!』

リックは腕の爪みたいなのを伸ばし、ギガデッドマンの右腕を切り落とした。

リック『スツゲエ…なんて力なんだこれは』

ヘルマスク『Hey Hey!すっごいもんだろこれ!』

リックは自分の力に驚いている。

ギガデッドマン『ギガアアアアア!!!』

ギガデッドマンは力任せに片方の腕を振り下ろそうとしている。

リック「お前はもうおしまいだ。消え失せろっ!!」
リックはギガデッドマンに飛び込んで、両腕でギガデッドマンをみじん切りにした。みじん切りにされたギガデッドマンは、そのまま血だまりへと変わった。

ヘルマスク『終わった終わった。出してやるぞ』
ヘルマスクがそう言うのと、哲志達が出てきた。

哲志「なんとかなりましたね」

直美「私はなんかいやだけど」

世以子「まあまあ直美は素直に慣れないツンデ」「なに世以子?」
いえ、なんでもありません」

哲志達は何ともなかったようだ。

銀時「よかったなあいつら」

桂「うむ、その通りだ」

サチコ「銀時」

銀時「近寄るな~~~~!!」

銀時はサチコから逃げだした。

???「…チヨウシ…ノリ…テ」

全員「っ!」

上から声が聞こえ、上を向くと、ウエストと一緒にいたはずのダークソウルがあった。

ダークソウル「…キサマラ…ユル…ヌ…キサ…ラ
ハ…シヌ」

銀時「あん?途切れ途切れで聞こえねえよっ!」

銀時は怒鳴る。

銀時「オイオイなんかヤベエんじゃねえの!?!」
突然の地震にパニックになる銀時達。

ダークソウル「インネン・・・ソトニイル、インネン・・・キサマ
ラマツテイル」
ダークソウルは消えた。

リック「不味い!お前ら!早くここから脱出するぞ!」
銀時「言われるまでもねーよ!」
銀時達は、ウエスト館から脱出することにした。

くおまけく

銀八「教えて!」

全員「銀八先生!!」

銀八「おし!今からアシスタントを紹介する」

哲志「あ、はい。哲志です」

直美「あたしは直美よ」

銀八「と言うわけで、このヘタレとツンデレがアシストします」

哲志「ちよっ、誰がヘタレですか！」

直美「誰がツンデレですか！」

銀八「わーたよ！ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『今回は今日が節分だからそれにちなんだ番外編だったな』

マリオ「それで東方の鬼2人が出たな〜後紫」

ルイーダ「と言うか…今回のネプテューヌちゃんがチートって思ってたんだけど…」

スネーク「確かに、落ちたらほぼ100%自力では出れないからな…」

マリオ「ちなみに俺はただの冒険好きな配管工の人間だぞ」

フォックス「（まあ、普通じゃないと言うのが付くけどな…）」

ソニック「Hey！メンバーに質問だ『俺に称号を付けるならどんな奴になるんだ？』」

スネーク「リリカルなのはメンバー以外に質問『もしデバイスが手に入るならどんなデバイスが良いんだ？ちなみに種類も言ってくれ』」

「
フォックス「真王に質問」コープス&スプラッターが終わった後は
どんな作品のキャラが出るんだ？」」

そんな訳で次回を楽しみにしてます！

ネス「銀さん、今回悲惨だな…」

リユカ「うん…」：「ある意味ネプテューヌはすげえよな…」

哲志・直美「うん…」

銀八「ま、それはともかく一つ目はこれだ」

紙に、「スマブラの青き閃光」 「青ハリネズミ」 「マツハスピード
ー」 「スピード狂？」 「アホなカナヅチ」と書かれている。

銀八「次は2つ目だ」

銀時「俺は刀型だ」

新八「僕もです」

神楽「ナツクル型ネ！」

桂「刀型デバイスだ」

エリザベス「私も」

月詠「わっちはクナイのデバイスじゃ」

ネプテューヌ「剣型デバイスがいい！」

ノワール「ショーソード型はあるかしら？」

ブラン「…ハンマー型だ」

ベール「私は槍型デバイスですわ」

コンパ「注射器です」

アイエフ「カタール型ね」

銀八「ハイ、次は3つ目」

真王「ネタばらしするつもりはありませんが、特別にお見せします」

紙に、『ワグナリア編』 『魔道機人編』 『不明（宇宙へ行くかも？）』と書かれている。

銀八「ハイ、『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

哲志「えっと、次はペンネーム『黒龍』さんから。『銀時』たく、酷い目にあっただぜ」

アリス「仕方ない。これ以上不毛な争いが起こらないために、こう言おう、痛かった」

黒龍「そんだけ!？」

アリス（フツ、黒龍からこっそりスターを奪っておいたからな）

銀時「それにしても、ソラの奴どうしたんだ？なんかスッキリした顔してんだけど？」

黒龍「さ、さあ？（い、言えない！サチコとドッキングしてたんなんで！それが知れ渡れば、フェイト達は間違いなく、般若になる！）」

ソラ（やべーよ。あんな事があつてから、全然サチコの事が怖くない。どうすればいいんだ？）

黒龍「ま、まあ、そんな事より、全員に質問です。こっちの小説でかなりのキャラ崩壊をしたフェイトをどう思いますか？次に、皆さんはソラの事をどう思いますか？

そして、ネプテューヌ達は？？機関のゼロに勝てると思いますか？」

銀時「あ、それと、これ復讐とかそんなじゃなくて、純粋な気持ちで、フェイトの物体X贈っておくから」

銀時はカオス色のシチューを贈った。

黒龍「ちよつ！あんなの食べられるのつて、ネプテューヌしかいないでしょー！！」

銀時「いいじゃん、別によ」『…何これ？』

直美「見、見ちゃだめよ哲志！」

銀八「あのガキ一体何しやがったんだ！？つてか物体Xつてあの激

銀八「…3つ目」

「ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール」楽勝で勝てる（ますわ）

銀八「即答かよー！」「黒龍」さん。一応廊下に立ってなさい」

第二十五訓：体がでかくても頭が馬鹿なのはお約束（後書き）

真王「次回はウエストとの決着がつくぞ！」

哲志「次回『ラスボスは最終的に凶暴な姿になる』テイクオフ！」

第二十六訓：ラスボスは最終的に凶暴な姿になる（前書き）

真王「今日で『コープス&スプラッター編』が終了いたします」

銀時「やっとあんなところから出れるぜ」

真王「それではスタート」

第二十六訓：ラスボスは最終的に凶暴な姿になる

ダークソウルが心臓みたいなものを壊したら、ウエスト館が崩れ始め、銀時達がウエスト館から脱出していた。

そしてウエスト館から出た。しかし山火事が発生していた。

銀時「今度は火事かよ!？」

リック「言ってる場合か!船まで走るぞ!」

銀時達は船まで走った。

ゴロゴロゴロ!

燃えている丸太が転がり込んできた。

リック「そいつはジャンプでかわせ!」

銀時達はジャンプでかわす。

ネプテューヌ「あ、あれ!」

????「ワッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ」

ネプテューヌが何かに指をさす。悲鳴の混ざった声をあげてピョンぴょん飛び跳ねている奴がいた。

銀時「おい、あれデッドマンか?」

桂「そのようだが…」

コンパ「なんか可哀想です…」

銀時達は燃えているデッドマンを見て言い、船まで急いだ。

海岸付近

やっと船のどこまでついた銀時達。ところが、

ウエスト「待ってたぞ」

ウエストがたちはだかった。その上にダークソウルがグルグル浮いている。

リック「ウエストオ……」

リックは殺気を放って言う。

ウエスト「貴様らのおかげで私の研究が台無しになってしまっ！もはや一刻も猶予もない！この私が成敗してくれる！」

リック「そりゃ好都合だ。お前を殺して俺達は解放される！」

リックはウエストを指差して言い放つ。

ウエスト「ならば貴様らに教えてやる！ダークソウルよ！貴様の力をすべて私に与えるのだ！！」

ウエストがダークソウルに叫ぶと、ダークソウルは黒い霧のようなものを出して、ウエストを包み込んだ。

ウエスト「う、おお！！……力が湧いてくる！これだ！この力だ！！」

ウエストが叫ぶと、紫の雷がウエストに当たる。晴れるとそこにいるのは、白い肌に、右手に大きな爪をもった怪物がいた。

銀時「え？ちよつと待てえええええい！！それまんまタイラントじゃん！！」

銀時が突っ込む。

ウエスト「ハッハッハッハ…素晴らしイ姿ダロウリック！コレゾ私ノ新シイ姿！コレデ私ハ最強ニナツタノダ！」
タイラント姿になったウエストは高々と言い放つ。

リック「…あいにくメエの変わった姿見るためにここに来たわけじゃないぞ」

ウエスト「ナニイ？」

ウエストはリックの言葉に顔をゆがませる。

リック「俺はなあ、お前とのけりをつけるために、ここにくたばってもらっぞ！」

リックは覚醒モードになり、ウエストに向かう。ちなみに哲志達はヘルマスクの中に入っている。

ウエスト「イダロウ！望ミ通りニキサマヲ葬ツテクレル！！」

IBGM：大王星の決戦byスーパーマリオギャラクシー
(Super Mario Galaxy Music Extended - Boss - Final Bowser Battle)

ウエスト「喰ラウガイイ！」

ウエストは爪でリックに攻撃する。

リック「爪なら爪で返すぜ！」

リックはかわし、ウエストを爪で切った。

ウエスト「グアッ！キサマア！」

ウエストは負けじとまた爪で攻撃する。

リック「……………」

リックは難なく爪を使ってウエストの攻撃を防ぐ。

ウエスト「ナゼダリック。私ハダークソウルノカヲ身ニ付ケ、オマエヨリモ遙カニパワーガ上ナノニナゼ私ガ押サレルンダ!!」

ウエストはリックに問う。

リック「簡単だ。テメエの軟弱な体でダークソウルを全て制御できねえし、何よりある物がないからな」

ウエスト「ナ、ナンダトツ!! 一体ナンナノダソレハツ!!」

リックはウエストに答えを教えた。

リック「それはな、何も心もない強化なんてこれっぽっちもへでもねえよっ!!」

ゴスツ!!

ウエスト「グハツ!!」

リックはウエストを殴り潰す。

リック「ヘルマスク!!」

ヘルマスク『派手にぶっ潰すぜえ〜〜い!!!!』

リック「うおおおおおお!!!!」

リックの両腕に力が集中する。

リック「ウエストオオオオオ!!!!」

ウエスト「ガハツ!!」

ウエストは這いずりながら抱くソウルに近づく。

ダークソウル「……………ラナイ」

ウエスト「エ？」

ダークソウル「オマエ、モウイラナイ」

ダークソウルはウエストに近づいて、ウエストを吸い込み始めた。

ウエスト「グワアアアアアアア！ナ、ナゼ！」

ダークソウル「オマエ弱イ、弱イノイラナイ、イラナイモノ食ベル
それだけの理由でダークソウルはウエストを吸い込み続けている。

ウエスト「ヤ、ヤメロ！私ニハマデヤルベキコトガ！！」

ダークソウル「ヨワイ、イラナイ、ヨワイ、イラナイ、オマエノヨ

ウナ“クズ”ハエサニナレ」

ウエスト「ヤメロツ！ヤメロオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
！！！！！！」

ウエストの叫びも虚しく、ダークソウルに喰われた。

リック「……………哀れな末路だなウエスト。自分が使ってたものに餌
にされるなんてさ」

ジエニファー「リック……………」

リックは喰われたウエストに言い、ジエニファーはリックに寄る。

ネプテューヌ「そんなことより！早くダークソウルを捕まえるよ！
エイッ！」

ネプテューヌはダークソウルを捕まえようとするが、上に逃げられ
る。

ダークソウル「バカナオマエラ、ツカマエラレナイ。オマエラゴト
キ、ツカマエラレナイ」

銀時・土方「んだと！」

銀時と土方が切れる。

ダークソウル「オマエラゴトキ、カナワナイ。オマエラゴトキ、シンノワレ”ニハカナワナイ”

ダークソウルはそう言って、消えた。

銀時「・・・何だったんだあいつは」

銀時が愚痴る。

桂（『真の我にはかなわない』・・・あれは一体どういう意味なんだ？）

桂はダークソウルのセリフに引つ掛かっていた。

リック「・・・終わったな」

リックは周りを見て言う。

リック「あなた達のおかげでウエストの企みを阻止できた。礼を言う」

ジェニファー「ありがとうございます」

リックとジェニファーがお礼を言う。

新八「いやいやいや、リックさん、ジェニファーさん頭下げなくていいですよ」

銀時「俺達はお前らの手伝いをしたただけだ」

リック「それでも礼は言わなきゃいけないからな」

???「父さんの言うとおりだよ」

何処からか男の子の声が聞こえた。

リック「その声はデイビット!? 何処にいるんだ!?!」

ヘルマスク『やつと思い出してくれたのかよ畜生…』
・・・そんなこんなで全員帰りました。

数日後・・・

ミッドチルダ・機動六課

銀時「だからよお、いつも言ってるだろ。俺たちひどい目にあっただけだ」

なのは「嘘だよ！私達に内緒でいっぱい食べてたでしょ！」

フェイト「銀時達だけじゃないよ！私達もいきたかったのに」

銀時は2人に分けを説明しているにもかかわらず、2人は信じてなかった。

はやて「なんや騒いどるなのはちゃん達」

桂「大方我々が嬉しそうに食べてたと想像してたのだろう」

ベール「世も末ですわ」

別の場所で桂、はやて、ベールが銀時達を眺めている。すると、

ネプテューヌ「銀さん。連れて来たよ」

ネプテューヌがドアから出てきて言った。その後ろにリックとジェニファーが来た。

なのは「あれ？あなた達は？」

リック「どうも。リック・テイラーです」
ヘルマスク「リックのかぶってるマスクは俺、ヘルマスクだ」
ジェニファー「私はジェニファーです」
なのは「あ、こちらこそ。私は」

少女達自己紹介中・・・

新八「だからこれはもういいって!!」
アイエフ「諦めなさい新八」
騒ぐ新八にアイエフが制する。

リック「そうだネプテューヌ。一応友達連れてきたぞ」
ネプテューヌ「え？本当？」
なのは「ネプちゃんに友達？誰だろ？」
なのは達はネプテューヌの友達に会うのを楽しみにした。しかし銀時だけは冷や汗をかいた。

銀時（オイオイオイオイ…友達つてまさか）
そして銀時の予想は的中した。

哲志「えつと・・・ここであつてるよね」
直美「しつかりしなさいよ哲志」
世以子「いやいや、立派な建物ですわ」
良樹「…なんかすごいとこだなここ」
あゆみ「たしかに…」
繭「ネプテューヌちゃん3日ぶり」
サチコ「銀時」
遼「遊びに来たよ」

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!!」

銀八「は、は、はい元気かな。きよ、今日はこのアシスタントです…」

サチコ「サチコです。みんなよろしく」

銀八「では始めようか、うん（ビクビク）。ペ、ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『投票リセットするんですか？』

スネーク「唐突だな…」

ソニック「それにしても最後の称号酷くないか…」

ルイージ「まあ…カナヅチは合ってるしね…」

マリオ「むっ!?!この物体ZX…!なんて美味さなんだ!」

フォックス「ってかそれ黒龍の方に送られてたの!!!何時の間にこ

「つちに来てて！しかも食べてるんだよ！！」

「マリオ「さあ？けどマジ美味しい！」

ネス「（汗）…それにしても…もしかして屋敷とダークソウルが合体するの!？」

ルイーダ「展開的にありえそうだね…」

リュカ「と言うか喋れたんだね…」

フォックス「メンバーに質問『内のファルコはどう思う?』」

ルイーダ「皆に質問『後ろにとてつもなく怖い物があつたらどう言う反応する?』…ちなみに僕は全速力で逃げます…」

マリオ「ルイーダも慣れて来たが流石に後ろにいたらな…」

スネーク「メンバーに質問だが…『ポケモンでパートナーにしたいポケモンは何だ?』」

マリオ「そんな訳で銀時にネプテューヌにリックに皆！頑張れよ！」

ルイーダ「…今更だけど…キーワードに百合付けといた方が良くないかな…」

スネーク「ああ…短編集2であつたあれでか…」

フォックス「そして俺の質問での奴で…とてつもない戦いが待って

そつだな…」』ではまず1つ目」

全員が立ち上がる。

全員「ご愁傷様です；」

銀八「それしかいえんな。2つ目は」

全員「全力で逃げる！！」

サチコ「なにが？」

銀八「いや、知らなくていいんだよ（ガタガタ）。次3つ目」

銀時「俺はテラキオンだな」

新八「僕はジャロードです」

神楽「私はゼブライカネ！」

桂「ドリュウズ殿だな」

エルザベス『タブンネですね！』

月詠「わっちはペンドラーじゃの」

ネプテューヌ「私はレシラムだよ！」

ノワール「ゼクロムね」

ブラン「・・・キュレム」

ベール「私はメロエッタですわ」

コンパ「ビリジオンです！」

アイエフ「私はケルディオね」

九兵衛「僕はハハコモリだ」

なのは「私はクリムガンなの」

フェイト「私はウォーグルかな」

はやて「うちはコジョンドや」

シグナム「私はナゲキとダゲキだ！」

ヴィータ「あたしはローブシンだ！」

シャマル「私はドレディアかしら？」

ザフィーラ「シンボラーだな」

スバル「私はバオツキーです！」

ティアナ「私はケンホロウね」

エリオ「僕はアーケオスです」

キャロ「私はゴルグです!!」

ヴィヴィオ「クリームガンだよ」

恭介「俺はエンブオーだ」

鈴「あたしはレパルダスだ!」

理樹「僕はゾロアークかな?」

真人「俺はロープシンにするぜ!」

謙吾「ダゲキだな」

小毬「ドレディアにするよ」

来ヶ谷「私はデスカーンだな」

クド「アバゴーラさんなのです!」

葉留佳「ランクルスですよ」

美魚「スワンナですね」

ゆり「私はシュバルゴよ!」

音無「俺はギギギアルか?」

奏「…レシラム」

日向「俺はオノノクスだ！」

直井「神の僕ならポルトロスだな」

ユイ「チラチーノですね」

松下「シビルドンか？」

高松「私ならランドロスですね」

野田「俺はゼノセクトだ！」

藤巻「ワルビアルだ！」

大山「ヒヒダルマかな？」

TK「ダンシング・アギルバー！！」

椎名「…サザンドラだ」

岩沢「コバルオンだな」

銀八「ブラック・ホワイトじゃん。それでは『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

サチコ「次はペンネーム『sibugaki』さんからだよ。『何か偉い事になってるうっうっうっうっうっ！』

大丈夫なのか銀時達は？

ってな訳で図々しい質問です

以前「ボーボボ」とのコラボはリリカルメンバーには大不評でしたのででしたら僕が今書いている「マジンガー」とのコラボはどうですか？皆さんの率直な意見をお願いします
ではでは『…ぶっっちゃけ言っとね〜』

全員「興味ない」

サチコ「そんなわけで『sibugaki』さん。廊下に立ってゴースト達と遊んで？」

銀八「『sibugaki』さん。ゴーストから逃げてください（激汗）」

サチコ「最後にペンネーム『黒龍』さん。『ソラ』アリスの奴、なんで黒龍の所に物体ZXを贈ったんだ？」

銀時「それ、たぶんお前が他の女性の料理を食べるのを嫌がったからじゃねえか？」

ソラ「いや、良く分からなんだが・・・」

銀時「はあ、相変わらず鈍感だな」

ソラ「？」

ソラは銀時の言っていることが分からずに首を傾げる。

アリス「私は何もしていな」

銀時「アリス！？お前ラクーンシティーから帰ってきたのか！？」

アリス「ああ、簡単に事件解決ができた」

そう言うアリスの体には返り血一つなかった。

銀時（こいつ、人間？）

ソラ「それよりも、さっきのはどういう意味だ？」

アリス「言葉の通りだ。私はあんな不気味な料理に何かするほど悪かではないぞ。それと、あの時の真王達の攻撃は全て避けた」

銀時「いや、だってお前悲鳴上げてたじゃん」

アリス「一つ言っていなかったが、私は何をされても悲鳴は上げないんだ。あれは、やれた振りをするために演出だ」

銀時「お前ってほんとにクールキャラだな」

ソラ「それよりも誰が鳴神ソラさんに物体Z_Xを贈ったんだ？」

銀時「ん？黒龍？何お前どこ行こうとしてんだ？」

黒龍「え！？ちよつちよつとトイレに……」

ソラ「あ、そう言えばお前、前に必死で何かを小布袋に包んでいたな」

黒龍「ギクツッ！！」

ソラ「それでおわびだが、俺が作ったハンバーグ、スパゲッティ、カレー、シチュー、ラーメン、他にも色々作った料理を食ってくれ」

銀時「ソラの料理はまじでうまいぞ」

ソラ「そして、これは黒龍がするはずだった質問だ。

『全員に質問と言うか頼みですが、マッチョ新八であるケン八をそっちに送っておいたから、倒してみてください』・・・ってなんだこれは？」

銀時「質問じゃねえなこれ・・・」

ソラ「次だ。『女神四人以外に質問。前に言ったゼロを楽勝に倒せるといいましたが、口で言うほどゼロは簡単に倒せんのであしからず。それで、女神四人以外の人はゼロを倒せると思いますか？それと、ゼロはなのは全力の砲撃を防げるほど強いです』・・・なんかしつこいな」

銀時「それよりも最後の質問」

ソラ「ああ、そうだな。『最後にもしゼゼルがそちらに来たら皆さんはどうしますか？』っだ、そうだ」

銀時「ま、自分の作り出したキャラが簡単に倒されるとか言われたのはショックだったんだろうな」

ソラ「それで、あんな行動に走ったと？」

銀時「さあ？もう送っちゃったしわかんねえ」

第二十六訓：ラスボスは最終的に凶暴な姿になる（後書き）

真王「コープス&スプラッター編が終了し、次はワグナリア編に入入……………の前にちょっと短編を開始します」

サチコ「次回『怖いものがあつたら全力で逃げる』テイクオフ」

（緊急報告）

真王「申し訳ありませんが、此処で更新をストップします。ネタの整理をしなければいけないので。そして一から1人5票投票していただきます。では」

第三回、モンスター解説図鑑

真王「第三回、モンスター解説図鑑!」

イエー……イ……イ……!

リック「……確かここはこの章に現れたモンスターを紹介するんだったっけ?」

真王「話が早いね。そのとおり。ではいくよ」

〈デッドマン〉

第二十一訓から登場。

ウエスト博士が作り出した異形。しかしはっきり言ってザコ。数が多いが、量産型だと思われる。中には体力の高い緑色のグリーンデッドマンもいる。

リック「こいつらには苦労したな……」

真王「そうか?次行くよ」

〈マーク〉

第二十二訓に登場。

上半身裸にジーパンを着ただけのゾンビ。特にこれといった特徴は

ないが、噛みつきをする。中には頭がなくなっても体当たりをする。

リック「これシリーズが違うくないか？」

真王「『ハウス・オブ・ザ・デッド』のゾンビですから」

リック「おいおい……」

ヘルマスク「次もそいつのどこからだぞ」

くエビタンく

第二十二訓に登場。

長時間水につかっているせいか、体中が腐敗し、ヘドロ状になってしまったゾンビ。水辺付近に多く出現する。中には、通常のエビタンよりも小さいコエビタンや、体力の高い黒いエビタンもいる。

ジエニファー「絶対に触りたくないわ」

リック「だな。次もか」

くカゲオく

第二十二訓に登場。

ミイラ状のゾンビ。通常のゾンビと比べて体力が小さい。中には下半身が崩れて上半身だけのものもあり、仮面とカギ爪をつけたケンとい

う改良版もいる。

銀時「仮面はファッションのつもりか？」

真王「違つと思つぞ」

（ジョニー）

第二十二訓に登場。

顔に割れたような赤色があり、両手に斧を持つゾンビ。銃で攻撃しても防がれるが、攻撃する際に撃てばいい。

ネプテューヌ「あれはちょっと焦つたね」

真王「慣れればどつってことないが」

（アステカ）

第二十二訓に登場。

通常のゾンビと比べて体が大きく、体力が高い。主にアツパーカットやストレートやリアットなどの格闘技で攻撃する。さらに、重い鉄骨や木の棒を持って殴ることができる。

リック「筋肉ゾンビというやつか？」

銀時「知るか」

「チャールズ」

第二十二訓に登場。

通常のゾンビの2倍はある巨漢ゾンビ。体力は高く、分厚い脂肪は穴があいても動く。ドラム缶を投げることもある。

ネプテューヌ「これは厄介だったね」

ブラン「私もそう思う」

リック「次はあいつだな」

「ピギーマン」

第二十二訓に登場。

両腕にチェインソーがつけられ、顔に布のかぶり物をかぶっている怪人。巨体に似合わず、かなりの運動能力をジャンプ力を持つ。また、腕がちぎれてもチェインソーが動いているが、ピギーマンの腕にチェインソーを入れ込んだと思われる。

ネプテューヌ「激しくトラウマキャラってやつかな？」

リック「だろうな」

くエンプレスく

第二十二訓に登場。

顔には赤く光る暗視レンズに、全身を青いラバースーツやプロテクターで固めたヒューマノイド。巨大なチェーンソー（着脱可能なダブルセイバー型）を使って攻撃する。一定のダメージを与えると、チェーンソーを両手に持ち替えて振り回してくる。名前は訳すと『女帝』という意味だが、実は女性という噂も？

銀時「んで？あいつは女なのか？」

真王「あれはオスです」

銀時「……………そうか」

くミラーエネミーく

第二十三訓に登場。

ウエスト館の鏡から現れる敵。映った相手と同じ姿で襲いかかってくる。リックの場合はミラーリックであり、銀時ではミラー銀時、ネプテューヌではミラーネプテューヌとなる。

銀時「ま、俺達の方が強かったしな」

新八「あれネプテューヌさんが倒したんですけどね」

由香「次のモンスターはこれです」

〈ダーククロス〉

第二十四訓に登場。

ダークソウルの力によって真っ黒になった逆さまの十字架。もとは十字架に霊が宿り、ナイトメアという生首の守護霊が守っていたが、ダークソウルでパワーアップして、哲志達を苦しめ利用した。

哲志「あのときはどうなる事かと」

直美「銀さん達が助けられなかったら私たちあいつに苦しみ続けてたわ」

真王「だね。ハイ次」

〈ポルターガイスト〉

第二十五訓に登場。

霊が宿り、侵入者に対して、しつこく攻撃する。椅子、本、瓶、ろっそく、ナイフなどがある。

銀時「あれはうざいわ」

真王「そうだな。ハイ次」

くウツデーく

第二十五訓に登場。

意志を持った手。這いずりまわったり、挑発したり、飛び跳ねたりといるいるな動きをする。どこかの口先の魔術師の『ウツデー』ではない。数が多いのでしつこい。

真王「次行くよ」

くメガデッドマンく

第二十五訓に登場。

ダークソウルによって、筋肉質になったデッドマン。その影響か、格闘技ができるようになった。

真王「ファイナルファイト的な」

銀時「何言ってるの？」

くギガデッドマンく

第二十五訓に登場。

1000体のデッドマンを融合させた巨大なデッドマン。しかし力を制御できず、がむしゃらに暴れまわるだけになってしまった。得意な攻撃は突進だが、急には止まらず、顔がぶつかってしまつのが

しばしば。

銀時「でかい図体して頭はアホってことだ」

真王「だね。ハイ次」

〈ファイヤーデッドマン〉

第二十六訓に登場。

炎に焼かれて悶え苦しんでいるデッドマン。ピョンピョン飛び跳ね、リック達の行く手を阻んでいるように見えるが、実は炎が熱くて跳ねてるだけである。こちらから攻撃できない。

真王「障害物扱いされているな」

銀時「そんなもんだろ」

〈ウエスト〉

第二十六訓に登場。

リック達を襲い、銀時達を畏にはめた張本人。ダークソウルを使って支配しようとしていたらしいが、逆にダークソウルに裏切られ、喰われてしまった。

真王「哀れな奴だな」

リック「同感だ」

真王「第四回も会いましょう」

第二十七訓：怖いものがあつたら全力で逃げる（前書き）

真王「やっと更新できました。銀魂的オリジナルを楽しんでください」

銀時「って言うか更新が遅れた原因はなんだ？」

真王「前回にも言ったようにネタ整理ですが何か？」

銀時「……いやなんでもねえ」

第二十七訓：怖いものがあつたら全力で逃げる

機動六課・銀時の部屋・夜

銀時はベッドで寝ている。しかし顔がなぜか苦しそうである。

銀時「……………」

表情がすぐれず、金縛りにでも巻き込まれたかのような苦しみをしている。

銀時「……………ハッ！」

銀時が目を覚ます。

銀時（な、なんだ？この体中に重く感じる感覚は？それに動けねえ……ってもしかしてこれ金縛り？金縛りなの？）

金縛りにあつたことに慌て始める銀時。

銀時（しかし何かホント体が重い。何か重いものが押し掛かった感じだ。一体何が？）

苦しみなながらも、布団の中を覗き込むと、

夜

はやて「何かよく分らんこと見たいやけど、うちには関係ないわな」

はやては自室で寝始める。

はやて（・・・なんや？この重くるしい感覚は・・・）

はやては違和感を覚えた。

はやて（なんかお腹が重いな・・・）

はやては布団の中を覗き込むと・・・

2つの目はやてに向いて・・・

朝

ネプテューヌ「も、駄目だよいたずらしちゃ」

ネプテューヌはサチコ達に叱っている。

はやては寝不足なのか、目に隈が出来ている。

はやてだけでなく、なのは、フェイト、シグナム、リインフォース、
銀時、新八、スバル、桂も目に隈が出来ている。

銀時「あのガキどもよくも俺達をこんな目にあわせやがって」

なのは「お仕置きが必要なの」

フェイト「ウフフフフフフフフフフ・・・」

銀時はサチコ達に怒りを表し、なのはとフェイトは魔王化している。

新八（怖エエエエエエエエエエ！！！！なのはちゃん怖いよオオオオオオオオオオオオオオ！！！！）

シグナム（今の高町とテストロッサが一番怖いな）

はやて（うちの怖さ思い知らせたる）

リインフォース（覚悟するがいい）

新八はなのは達の殺意におびえる。

なのは「サチコちゃん…（殺気）」

サチコ「何？」

ネプテューヌの叱りが終わったサチコは食事していたので、口に肉を頬張りながら後ろを振り向く。

なのは達ビジョンでは、人肉を喰らうサチコの光景が・・・

なのは・フェイト・はやて・シグナム・リインフォース「スイマセ
ンデシタァ！！」

サチコ「なにが？」

新八・銀時「屈するの早っ！！」

ビジョンを見たなのは達は土下座し、サチコはわけが分からず、新八と銀時は驚いて突っ込む。

夜

はやて「『第六回、チキチキ、サチコちゃん達を驚かせよう大作戦』
！」

なのは達「いえ〜い！」

いきなりな展開である。ネプテューヌの部屋の前にいるのは、なのは、フェイト、はやて、シグナム、リインフォース、銀時、新八、スバル、ティアナ、桂、である。

説明すると、驚かされ続けたはやて達は、サチコ達に仕返ししようという魂胆なのだ。

はやて「今現在うちらはネプテューヌちゃんの部屋の前におる。なぜかと言うとサチコちゃん達はネプテューヌちゃんと一緒に寝てるからや」

桂「そこで我々は悪戯をしかけるのだ」

銀時「よし、そんじゃ入るぞ」

なのは達はネプテューヌの部屋に入った。そこにいるのは寝ているネプテューヌと、一緒に寝ているサチコ達だった。

はやて「寝ておる寝ておる」

スバル「それじゃ始めますか」

なのは達はサチコ達に悪戯をしかけようとする。

ネプテューヌ「う〜〜ん・・・」

バキッ！

はやて「ぶっ！」

桂「八神殿!？」

ティアナ「部隊長!？」

ネプテューヌがはやてに殴りかかった。

ネプテューヌ「どうだ〜！参ったかモンスターめ〜・・・ムニャムニャ」

どうやらモンスターを退治している夢を見ているようだ。

はやて「あかんあかん、うちは大丈夫や」

はやては顔を押しさえながら言う。

はやて「さて、どんな悪戯をしようかな〜」

はやては部屋の置物に手を出そうとする。

カッ

後ろから視線を感じた。

はやて（な、なんや？視線？これは視線？ネプテューヌちゃん寝てるはずなんやけど…）

視線を感じたはやては後ろを振り返ると、

そこには目ん玉開いてぐっすりベッドで寝ているサチコがいた。

はやて（どんな寝顔オオオオオオオオオオ！！！！??）

いくらなんでもあり得ない寝顔にはやては心の奥から盛大にツッコ

いびきが出て大きくなっていく。

その様子に銀時はサチコの顔を見て青ざめている。

銀時達（……あれ？やっぱコレ起きてねえ？……コレ本当は寝たフリをして起きていねえ？やっぱ起きてない？）

スバル「……サ……サチコちゃん？」

サチコ「う……うーん？」

スバルが呼んでみて、サチコは目をこすって顔をネプテューヌに寄せる。

はやて（よし！あの様子やと寝てるな！驚かしてくれるわ！）

はやては標的をサチコから雪に変える。

はやてが雪の顔を覗き込むと、おめめバツクリ開いて寝ていた。

はやて（だからどんな寝顔オオオオオオオオオオ！！！！？）

はやてはまた心の中でシャウトした。

さらに雪以外でも、遼と時子の目はバツクリ開いているが、寝ているらしい。

はやて「ぜ……ぜぜぜ全軍撤退準備っ！！！」

銀時「さ、賛成だ！……こ、こここんなところ早く出ようぜ！！！」

なのは「ここここここ怖くてもう耐えられないの！！！」

シグナム「も、もうこんなところからオサラバする！！！」

寝てるのか起きてるのか分からない且すぐく怖い寝顔で銀時達は恐

怖に達し、部屋から出ようとする。

はやて「…あれ？」

桂「ど、どうした八神殿？」

はやて「あ、開かへん！」

全員「ええ!？」

部屋から出ようとしたら、トビラが固くなって動かなくなっている。

銀時「そ、そんなわけあるかよ!ぬおおおおお!!!」

桂「ぬっっっっっっっっ!!!!」

銀時と桂が扉を引っ張るが、ビクともしない。

なのは「も…もしかして私達…閉じ込められたの？」

なのはの一言に全員が青ざめる。

銀時「嫌だアアアアア!!!俺はこんなところで死にたくねエ
エエエエエエ!!!」

フイト「嫌アアアアア!!!誰か助けてエエエエエエ
エエ!!!」

桂「誰か救助呼んでくれエエエエエエ!!!」

はやて「ヘルプミイイイイイ!!!」

なのは「ノワールちゃあああああん!!ブランちゃああああ
あん!!ベールさあああああん!!誰でもいいから来てエエエ
エエエエエエ!!!」

銀時達はパニックになり、開かない扉をバンバン当てたり大声出し
たりしていた。しかし銀時達以外は全員グッスリ眠っており、銀時

達に大声なんて聞こえてないのだ。

ポンッ

銀時達の後ろから肩を叩かれた。

叩かれた銀時達はビクッ、となり、ギギギ、と機械のような感じに振り向くとそこには……

パール
「パープルハート・サチコ・遼・雪・時子」……
「イッペン死ンデミ

…翌朝

ネプテューヌ「おっはよう！みんな」
サチコ・遼・雪・時子「おはよう」

ネプテューヌとサチコ達が挨拶する。

アイエフ「おはようネプ子。あれ？銀さん達来てないけど？」

ネプテューヌ「あれ？部屋にいないの？」

ノワール「ちよつと探しに行つてくるわ」

アイエフとノワールは、なのは、フェイト、はやて、シグナム、リ
インフォース、銀時、新八、スバル、ティアナ、桂が来てないこと
に疑問を抱き、探しに行つた。

そしてネプテューヌの部屋に来て・・・・・・・・・・大惨事
を見てしまった。

ネプテューヌの部屋は真っ赤な色になり、銀時達は吊るされた血だ
らけの死体のようにぐったりしていた。

アイエフ・ノワール「な、何があつたのオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
？」

2人は只それを叫ぶしかなかった。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生ー!!」

銀八「どうも。一週間ぶりのこのコーナー。んじゃアシストする方は」

サチコ「また私だよ」

銀八「そ、それでは始めるか(ガタガタ)ペ、ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ』真の我?ダークソウルはまだ不完全なのか?」
ソニック「言葉通りならそうだろうな…きっと負の感情で力を蓄えるんじゃないか?」

スネーク「ありえそうだな…」

ネス「それにしても…ちょっとした休憩に入るんだね…」

こっちは気長に待ってますので!!

マリオ「皆に質問『俺達とスポーツやるなら誰と組みたい?』」

が欲しいネ！」

桂「マルス殿だな。爆弾を作れる能力だ」

エルザベス『ピカチュウですね！能力は特にいりません』

月詠「わっちはアイクじゃの。能力はいらぬ」

ネプテューヌ「私はマリオと組むよ！どんな剣でも作れる能力がいー！」

ノワール「私はメタナイトね。スピードの能力よ」

ブラン「・・・ピカチュウ。破壊の能力」

ベール「私はマルスで砲撃能力を持ちたいですわ」

コンパ「ピーチさんです！治癒能力はあるですか？」

アイエフ「私はメタナイトね。能力は…斬撃かな？」

九兵衛「僕もメタナイトだ。欲しいのは体を変える能力だ！！」

なのは「私はどちらかと言うとスポーツはやらないの。運動能力が欲しいな〜」

フェイト「私はソニックかな。そして電撃能力が欲しいかな」

はやて「うちはゼルダや。とりあえずなのはちゃんと同じや」

シグナム「私はアイクと組み、炎の能力が欲しいぞ！」

ヴィータ「あたしはディディーだ！衝撃（攻撃な意味で）の能力が欲しい！」

シヤマル「私はスポーツしないわ。もっと強い治癒能力が欲しいけど」

ザフィーラ「ルカリオだな。そして絶対防御能力を望む」

スバル「私はマリオです！特に能力は要りませんが」

ティアナ「私はフォックスね。飛行能力が欲しいわ」

エリオ「僕はファルコです。ソニックさんのように音速を超えるスピードが出したいです」

キャロ「私はリザードンです！！魅力の能力を！！」意味無い

ヴィヴィオ「マリオだよ。あらゆるパワーを操作する能力が欲しい」

銀八「はいそんじゃ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

サチコ「次はペンネーム『黒龍』さんから『アリア』次そっち……」

ヤミ「中々乗りごちがいいですね」

ラオシャンロン「ぎゃお」

山崎「局長おおおおおおお!!!」

黒龍「あははは(苦笑)」

銀時「近藤はダメなんだな」

黒龍「じゃあ質問します。奏は原作ではバリバリヒロインとして活躍していたのに今全然目立っていないですね。そこんどこどう思いますか(黒笑)」

銀時「いかなり怒りに触れる質問したな」

黒龍「次、サチコ達ゴーストチルドレンで実際美少女なんですか？ サイト見てみたんですが、サチコ達の画像が無くて分からなくて・・・」

銀時「全然知りたくないんだけど」

黒龍「それと、ゴーストチルドレンのサチコだけじゃなく、真王さんの小説の他の女性キャラにもフラグを『ソラ』に立てさせようと思っっているんですが、どうですか？」

銀時「何それ！？嫌がらせ!？」

黒龍「それではまた次回も楽しみにしています。後、別に更新が遅くて構いません。真王さんは真王さんのペースで進めてください」
…奏ってこっちの?」

奏(オリ)「いやいや、Angelbeatsの奏だよ」

奏（A）「黒龍を殺していい？（殺気）」

真王「駄目だつて。2つ目は美少女かどうか知りませんが、暗い霧
囲気を取ったらかわいい女の子になりますね。見たいならPIXI
Vでサチコと検索すれば出ますけど」

銀八「成程な」

真王「それと3つ目ですが皆さんどうですか？」

女性陣「全力で断る！」

ネプテューヌ「私は別にいいけど」

真王「いいのかよ……」

奏（A）「ねえ、黒龍を殺していい？」

サチコ「だったら私がやるっか？」

奏（A）「よろしく」

銀八「『黒龍』さん！！サチコから逃げる準備をしてください！！
！」

真王「おつとそうだ！実はキャラ台詞ボタンをしようと思いましたが
ので見てください」

『「キャラクターバトン」

目にタコができそうなルール
最近のゲームのキャラクターは何か行動起こすたび台詞が用意されててなかなか凝ってるモノがあります。

このバトンはあなたのキャラクターにゲームのように台詞考えてみようというモノです。

台詞じゃなくとも掛け声や叫び声でもOK。

どんな状況かを妄想しながら考えると台詞出てきやすいかも？
結構多めですががんばってください。

ちなみに一つの答えに二つ以上の回答をしてもOKです！

指定 銀時（上）、新八（中）、神楽（下）

0・キャラクター選択時

「俺の番か？」

「僕の番ですね」

「私の出番ネ！」

1・エンカウント・通常

「おし、始めるか」

「行きますよ！」

「勝負ネ！」

2・エンカウント・格上

「あれ？なんかやばくね？」

「か、勝てるでしょうか…」

「強そうアル…」

3・エンカウント・格下

「ザコ倒すのメンドクセ！」

「これなら楽ですね」

「運動不足にちょうどいいアル」

4・勝利

「よし。け〜るぞ〜」
「僕達の勝ちです!」
「歌舞伎町の女王・神楽アル!」
5・楽勝
「あれ?弱くねこいつ等」
「これくらいなら楽勝ですね」
「なんか物足りないアル…」
6・辛勝
「チツ、やばかったぜ」
「な、何とか勝てました…」
「まだ私は立ち上がるね」
7・戦闘不能
「ぐ…くそ…」
「そ、そんな…」
「私が…負けるアルか?」
8・戦闘復帰
「どっこいせつと」
「ありがとうございます!」
「私は不死身ね!」
9・エンカウント・奇襲
「テメツ!卑怯だぞ!」
「いきなり奇襲ですか!」
「正々堂々勝負するアル!」
10・アイテム使用・自分
「これ使ってみるか」
「これ使えるでしょうか…」
「このアイテムの出番ネ!」
11・アイテム使用・相手
「おい、これを使え」
「これ使ってください!」

「このアイテムを使うね」
12・宝箱・普通
「お！いいもんゲットだ」
「宝箱ですか」
「お宝ゲットアル！」
13・宝箱・レア
「おお！こりやすげーぜ！」
「こ、これは！」
「凄いのゲットネ！」
14・宝箱・レジェンド
「うおおおおおおお！！！億万長者の気分だ！！！」
「す、すごい！！これは夢じゃないですよね！？」
「凄過ぎて言葉が出ないネ！！！」
15・弱攻撃
「ほれ」
「えい！」
「ほい」
16・中攻撃
「おらっ！」
「でやあ！！！」
「ホワタア！！！」
17・強攻撃
「てえやああああ！！！」
「ウオオオオオオ！！！！！」
「ホワチャアアアアアア！！！！！」
18・コンボリンク
「ハイ次いいいい！！！」
「まだ行きます！！！」
「まだ終わってないネ！！！」
19・バトンタッチ

「んじゃ後は任せるわ」
「すいません！交代します！！」
「誰か私と代わるね」
20・弱ダメージ
「いてっ！」
「おぷっ！」
「アウチッ」
21・中ダメージ
「ぐはっ！」
「ゴフウツ！！」
「グア！！」
22・強ダメージ
「ぐあああああ！！！」
「ぎゃあああああ！！！」
「ギャウツ！！？」
23・ダウン起き上がり
「やったなこのやる！！！」
「負けませんよ！！！」
「許さんね！！！」
24・受け身
「おっと」
「うわっ」と
「まだまだいけるネ！」
25・瀕死
「くっ、まずいな……」
「うっう……まずいです」
「力が入らないネ……」
26・回復
「サンキューな」
「ありがとうございます」

「元気をもらったアル！」
27・自己回復
「めんどくせーけどやるしかねえか…」
「か、回復します！」
「元気パワーを溜めるネ！」
28・味方回復
「つたく、手間かけさせんじゃねえよ！！」
「今回復してあげます！！」
「私の元気をあげるネ！」
29・防御
「ほれ」
「うわつと！」
「効かないネ！」
30・完全防御
「効かんなく」
「全然だめですね」
「全然効かないネ！！」
31・回避
「ちっ」
「うわたつた！」
「緊急回避ネ！」
32・完全回避
「遅えよ！」
「何処狙ってるんですか？」
「あくびが出るネ」
33・毒、DOT状態
「ウエ…：気持ち悪…」
「う！、毒ですか…」
「なんか吐きそうね…」
34・スタン、ピヨリ状態

「なんか暇アル…」

42・挑発

「なんだ？オメーはその程度か？」

「どうしましたか？もう終わりですか？」

「さつさとかかってくるヨロシ」

43・必殺技

「こいつでしめーだっ！！」

「僕の必殺技を受けてみてください！！」

「まとめて潰してやるネ！！」

44・クエストクリア・ランクE

「うわマジ最悪だわ…」

「今月の会計大丈夫かな…」

「納得いかないネ！！もつと上に行くアル！！」

45・クエストクリア・ランクD

「Dなんてまだだっつーの！」

「何か物足りませんね」

「まだ納得しないネ！」

46・クエストクリア・ランクC

「まあまあレベルか？」

「なんか地味ですね…」

「半々ね」

47・クエストクリア・ランクB

「やるじゃねえか。もつと上をいけるかもな」

「いい感じですね。頑張ってください」

「一応納得できる範囲ね」

48・クエストクリア・ランクA

「ランクAってやるなあ」

「凄いですね！おめでとうございます！」

「なかなかの評価アル！私も文句ないネ！」

49・クエストクリア・ランクS

「え？嘘、マジでSランク！？いよっしゃー……！！！！」

「す、すごい！！ランクSおめでとうございます……！！」

「凄いアル！！文句なしのSランクゲットアル……！！」

50．回す人

「『黒龍』さんの俺だ」

「同じくのソラさんです」

「3人目は誰でもいいネ」

どうでしょうか？ではまたお会いしましょう。』

真王「いかがでしょうか？活動報告にも載せてありますので見てください」

銀八「ところで『鳴神ソラ』さんは活動報告見れるのか？」

真王「イヤ、分からん」

第二十七訓：怖いものがあつたら全力で逃げる（後書き）

真王「今回はワグナリア編始まります！」

繭「それじゃあ私が。次回『店が個性的なら店員も個性的』テイク
オフだよ！」

第二十八訓：店が個性的なら店員も個性的（前書き）

真王「ワグナリア編スタート！この時ネプテューヌに悲劇が？」

ネプテューヌ「『リリカル銀魂』始まるよ」

第二十八訓：店が個性的なら店員も個性的

ここは地球の北海道のとある店・ワグナリア

パープルハート「…なかなかの店の食べ物ね、いい」

そこでパープルハートが食事をしていた。

なぜパープルハートがここにいるのかというと、なのはが地球のチラシを持ってきて、ネプテューヌがワグナリアの人気メニューを見てさっそくここに来たのだ。ちなみになのは達から許可をもらっている。

そしてパープルハートはいつもの戦闘服ではなく、青いフード付きジャンパーと胸部に紫のNのトレードマーク付きの白いTシャツに青いジーパンと言うなかなかクールな服装を身に着けていた。

なぜパープルハート姿かと言うと、本人曰く、子供扱いされないからだと。しかし、

男1「お？あんたスッゲー美人じゃねえか。俺らと付き合わない？」

ガラ悪そうな男達にナンパされてしまった。

パープルハート「…悪いけど間に合っているわ。それどころかあなたたちじゃ私と付き合えると？」

男2「面白いこと言うな。って言うか俺らと付き合えよ」

男達はパープルハートをしつこくナンパする。

男達を店の壁ごと殴り飛ばした。
周りから歓声上がる。

パープルハート「・・・フウ」

????「おいそこのお前」

パープルハートは後ろから女性の声が聞こえ、振り向く。
その女性は他の従業員と違う服を着ているようだ。

白藤「私は店長の白藤だが、お前それ」

白藤はある場所を指差す。

パープルハートは冷や汗流して振り向く。

そこにあるのは壊れたテーブルとガラスと壁、つまりは、

白藤「お前弁償な」

パープルハート「NO~~~~~!!!!!!」

パープルハートは頭を抱えて絶叫した。

ワグナリア・着替え室

パープルハート「何でこんなこと!」

パープルハートはテンション低く言う。

そりゃ店を壊して弁償させられるからテンション下がるよね。

ちなみにパールハートは今作業服を着ている。

背の小さな店員「ま、まあまあ元気だしなよ」

メガネの店員「そうですね。あなたはあのやさぐれ達を倒したただけで十分ですから」

2人の店員がパールハートを慰める。

パールハート「……………まあいいわ。ところで…えっと…」

ぽぷら「あ！私は種島ぽぷら、17歳、高校生です！」

宗太「小鳥遊^{たかなし}宗太です。あとたかなしって言っても『高梨』じゃなくて『小鳥遊』ですよ」

2人の店員・ぽぷらと宗太は自己紹介する。

パールハートも自己紹介する。

パールハート「ふうん。あ、私はパ…ゲフン、ネプテューヌよ。よろしく」

宗太「ネプテューヌさんですか。よろしくお願いしますね」

ぽぷら「よろしくね！ネプトウ…ねぼ…ネ…えっとお…」

ぽぷらはネプテューヌと呼び辛いらしい。しかし隣の宗太はなぜかぽぷらを見て顔を赤くしているが。

パールハート「……………あなたの呼びやすい呼び方でいいわ」

ぽぷら「ホント？じゃあえっと……………ねぶねぶちゃん
で！..」

ぽぷらはパールハートをねぶねぶちゃんと呼ぶことにした。パールハートは少し複雑な顔をしたが、コンパからねぶねぶと呼ばれ

ているので気にしなかった。

パープルハート「それじゃあなた達を宗太、ぼぶらと呼ぶことにするわ」

宗太「いいですよ。あ、先輩、ネプテューヌさんにいろいろと教えましょう」

ぼぶら「わかったよかたなくん！」

パープルハート「・・・小鳥遊じゃなかったの？」

宗太「あはは：先輩はそれで良いんですよ」

パープルハート「・・・」

パープルハートはここでやっていけるのか不安になった。

ぼぶら「それじゃあまずこの食器をかたずけることを教えるよ！」

パープルハートはぼぶらと宗太に店でやっていくことを教えてもらっている。

ぼぶらは手に持つ食器を棚に戻す作業をするのだが、

ぼぶら「うっっっっん！」

全然棚に届いてなかった。

パープルハートはとりあえずその食器を棚に戻した。

ぼぶら「次はこのケースを運ぶよー！」

今度は食器の入ったケースを運ぶ作業なのだが、

ぽぷら「ぬぐぐ・・・うう~~~~ん!!」

全然持ち上げられてなかった。

パープルハート「ぽぷら、あなたもしかして力無いの？」

パープルハートの一言にぽぷらはグサツ！と心にダメージを受け、ヨヨヨと涙を流してへたり込んだ。

パープルハート「あ…言っではいけなかったのかな…って宗太はなぜ赤くなっているの？」

宗太「い、いえ何でもありません！（先輩かわいい！）」

パープルハートは深く追求しないようにした。

????「お？新人か？」

厨房から金髪の男が顔を出した。

パープルハート「新人じゃなくて借金返済人かしら」

佐藤「ああ、あれか。俺は佐藤潤、よろしくな」

????「へえ〜？君がそう？」

今度は青髪の青年が鍋を持って顔を出す。

相馬「僕は相馬博臣、よろしく」

パープルハート「私はネプテューヌよ」

パープルハートはとりあえず挨拶する。

相馬「外国人なんだね。男に絡まれて拳句に弁償させられたみたいだけでも」

パープルハート「・・・あなた何時から知ってたの？」

相馬「さあ？」

パープルハートはなぜ相馬が知っているのか疑問に思った。

佐藤「ところで相馬、出来たのか？」

相馬「え？あ、まだだよ」

佐藤が相馬を呼んで、相馬は鍋の中を覗いて言う。

ポーン

37番の呼びだしベルが鳴った

ぽぷら「あ、私お客さんのオーダーするからかたなし君よろしくね！」

宗太「分かりました先輩」

ぽぷらはせつせと客のテーブルへ向かった。

パープルハート「それじゃあ宗太、次は何するの？」

宗太「次はこちらで」

パープルハートは宗太の指示に従った。

パープルハート・宗太「ありがとうございました」

パープルハートと宗太は客の接待をしていた。

パープルハート「意外と簡単ねこの作業」

宗太「それならいいですが」

????「あら？あなたは新人さん？」

隣から金髪で目をつぶっているように見える女性従業員が話しかけてきた。

八千代「はじめまして、私はチーフの轟八千代です」

パープルハート「はじめまして、ネプテューヌよ」

パープルハートも挨拶する。

八千代「杏子さんから聞いたわ。あなたあの不良をやっつけて弁償させられたんでしょう?」

パープルハート「まあ、そう言うことよ。……ん？杏子?」

宗太「店長のことですよ」

パープルハート「……………ああ、あの人」

パープルハートは杏子のことを白藤と言う店長だと知った。

八千代「初めてかもしれないけど、分からないことや気になることでもあつたら私に聞いてね」

パープルハート「そうね。じゃあまずその腰にある刀はなんなの?」

パープルハートは八千代の腰にある刀を指差して言う。

宗太（うわ！この人スバツ！てチーフの刀のこと言っちゃったよ！）

宗太はズバツ！と言ったパープルハートに驚く。

八千代「あらごめんなさい。私、実家が刃物店をやってる店があるから『轟刃物店』のキャッチコピーで」

パープルハート「それと刃物は何の関係があるの？」

八千代「・・・ほら！世の中何かと物騒だから」

パープルハート「・・・あなたの頭が物騒よ」

八千代の答えにパープルハートがズバズバと言い放つ。

宗太（うわ〜…、この人もしかして怖いもの知らずでしょうか…）

宗太は顔を青くし、パープルハートにそんな位置づけをした。

八千代「あ、それはともかくあなたオーダーやってみる？」

パープルハート「え？あ、やってみるわ」

宗太「俺も手伝いますよ」

パープルハートはオーダーをやってみることにした。

パープルハート「ご注文はストロベリーパフェとハンバーグでよろしいでしょうか？」

男性客「あ、はいそうです」

パープルハート「かしこまりました」

パールハートは順調にオーダーをやっていた。それどころかほとんどの客がパールハートに集中している。

ぼぶら「ほえ〜。ねぶねぶちゃんすごい」

宗太「まだ数時間しかたっていないのに順応早いですね〜」

佐藤「熱心だな」

相馬「つて言うかほとんどネプテューヌさんに向いてない？」

杏子「ほう？なかなかなやつだな。あとで人材採用してみるか…」

宗太達はパールハートを見てそれぞれ感想を言う。

佐藤「おいネプテューヌ、ストロベリーパフェとマンゴープリンを頼んだ32番テーブルの客に運んでくれ」

パールハート「分かったわ」

パールハートはパフェとプリンを32番テーブルへ運ぶ。

パールハート「ん？」

…が、その前に32番テーブルの人を見て固まった。そこにいたのは、

銀時「なんか人気あるね〜、この店」

神楽「ホントある。この店の食べ物はおいしいネ！」

新八「神楽ちゃん、ちゃんと控えてね」

何と銀時、神楽、新八の万事屋トリオであった。

それだけではない。

桂、エリザベス、月詠、なのは、フェイト、はやて、スバル、ティ

アナ、エリオ、キャロ、ヴィヴィオ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフが席に座っている。

なのは「このファミレス始めてきたね〜。アリサちゃん達にも誘ってあげようかな〜」

フェイト「いいね。開いたらここに寄ろうよ」

スバル「ふおふおふふあふえひーほひひ〜（このスパゲティーおいしい〜）」

エリオ「ふあい、ふおいひーへふ！（ハイ、おいしいです！）」

ティアナ「あんた達食べながらしゃべるな！」

ノワール「悪くないお店ね」

アイエフ「ホントすごい人気ね」

銀時達は満足そうに食べている。

新八「それにしてもネプテューヌちゃんは何処にいるんでしょうか」

銀時「どうせどっかで食べてるんじゃないかねえの？」

銀時は鼻糞ほじりながら言う。

パープルハート「あら？私をそんな感じに見てたの銀時」

銀時「そりゃそうとしか思えね・・・って何でお前がここにイイイイイイイイ！！！！？」

銀時はパープルハートがここにいたことにビックリし、なのは達も驚く。

パープルハート「私がここにいちやまずいのかしら？」

銀時「まずいも何も何でお前がここにいんだよ！ってか何でこの作業服着てんだ？」

銀時の質問にパープルハートは顔を引き攣らせるが、諦めて銀時達に話した。

新八「…そうだったんですか」

なのは「大変だねネプちゃん…」

なのは達はパープルハートを心配した。

パープルハート「でもまあこの人たちはみんな個性的だから特に心配はないけど」

銀時「いや、個性的ってちょっと不安なんだけど…」

銀時は少し不安になる。

ポーン

呼びだしベルが鳴る。

パープルハート「あら？呼び出しが来たから銀時、また今度ね」

パープルハートは別のテーブルへ向かった。

銀時「…なんだかなあ」

銀時はひとり呟く。

パープルハートは次の仕事に取り掛かるうとした。

パープルハート「ん？」

すると、さつきからオドオドしている少女とそれを眺める少女がいた。

パープルハート「…何やっているの？」

オレンジの少女「ひゃっ!？」

濃い紫の少女「お!？」

パープルハートは声をかけると2人はビックリした。

オレンジの少女「あ、あなたはたしか…」

パープルハート「ネプテューヌよ」

まひる「あ、私は伊波まひるです」

葵「私は山田葵です」

パープルハート達はお互い挨拶した。

パープルハート「ところであなたさつきから店内見てオドオドしてたけどあれどういうこと？」

まひる「あ、えと、それは…」

まひるはなんだか歯切れが悪い。すると葵が、

フエイト「ぎ、銀時!？」

新八「銀さん!？」

桂「なんだ？」

銀時の異変に気づいたなのは達は駆け寄る。

まひる「う、ごめんなさ~~~~~い!~!~!」

まひるは逃げだした。

パールハート「…宗太、あれどういうこと?」

宗太「すいません、伊波さんは男性恐怖症で男を見るなりすぐ殴り飛ばす癖を持つちゃったんですよ」

銀時「何だその危ない癖!！」

銀時は起き上がって怒鳴る。

宗太「いや別に伊波さんは好きであの癖付けたんじゃないですよ!あれは伊波さんのお父さんのせいなんです!」

宗太は伊波の父のことを説明する。

何でも伊波の父親は、強度の溺愛者らしく、伊波に近づく男達をくつつけさせないために男嫌いにさせた張本人である。
それを聞いた銀時は、

銀時「ふざけんじゃねえよつ!~!そのせいで俺殴られたんかいイイイイ!~!」

まひるの父親に対して切れた。

しかしなのはとフェイトは、強度のシスコンの兄を思い出してしま
ったが。

宗太「まあ俺がその男性恐怖症を直すためにいろいろ努力してるん
ですがね」

パープルハート「…その努力は殴られる回数のこと？」

宗太「……………」

パープルハートの一言に、宗太は顔をそらす。

パープルハート「…………まあそれはともかく、まひる、そこで隠れ
てないで出てきなさい」

パープルハートが壁の奥にいるまひるに声をかける。

まひる「で、でも、男って大きいし、強そうだし…乱暴だもん！」

銀時・新八・アイエフ「お前（あんた）が言うなっ！！」

銀時と新八とアイエフが突っ込む。

パープルハート「大丈夫よまひる。もしそんな男と出会ったら問答
無用でなぶり殺していいから」

まひる「ええっ!？」

銀時「お前何言っちゃってんの!？」

パープルハートの物騒すぎる一言に、まひるは驚き、銀時は突っ込
む。

すると、パフェを頬張る杏子がやって来た。

杏子「まあよく分らんが、ネプテューヌ、仕事に戻った方がいい

ぞ」

パールハート「あら店長」

新八「店長っ！！？あれ店長！？」

新八が杏子を指差してパールハートに聞く。杏子は片眉をあげる。

パールハート「彼女は正真正銘の店長よ」

新八「いやこの人が店長なのは分かりましたが、この店のパフェ食べてる店長がいるわけないだろ！！」

杏子「パフェを食べて何が悪い。あ、八千代、おかわり」

八千代「は、はい、杏子さん」

杏子は八千代にお変わりのパフェをもらう。そして食べる。

新八「オイイイイイイイイ！！！！店員使ってパフェ食べてんじやねえぞあんたアアアアアアアアアアアア！！！！」

新八は傲慢な杏子に怒鳴る。が、

チャキッ

八千代「ちよっとそこのあなた。杏子さんに向かってあんたって何？（殺気）」

八千代が殺意の波動を出し、新八の首筋に刀を当てる。しかも真剣である。

新八や周りのなのは達は真っ青になる。

ただ杏子はパフェを食べているため見ていない。

そしてパールハートは本物なのねと刀を感心する。

杏子「八千代、次はイチゴを頼む」
八千代「ハイ！杏子さん！」

杏子の頼みに八千代は刀を鞘に戻し、すぐに厨房へ向かった。
新八は助かったことでへたり込んだ。

パープルハート「忠実なのねあのチーフは」
銀時「いやいやいやいや、忠実で済む問題じゃねえよ！」
桂「あの2人は何の関係があるか知らんが、仲が宜しければいいだろっ」

桂は八千代と杏子の関係を評価する。

パープルハート「どうでもいいけど、まひる後ろよ」
まひる「え？」

まひるは後ろを振り向くと、桂と眼があった。

まひる「きゃあああああああ！！！」

バキッ！バキッ！ドカッ！！

桂「ゴブアアアアアアアアア！！！」
はやて・ベール「桂さんっ！？」

桂はまひるにぶっ飛ばされ、はやてとベールが駆け寄る。

ファミリーレストラン『ワグナリア』、今日も一日平和である。

リュカ「(しちゃってるの!?)」

ドクター「…銀時君達に完治する薬をおくつとこつ…」

ルイージ「新八君…此処の君は目立ってるから気を武器に纏わせる様な能力が良いんじゃない(涙)」

マリオ「皆に質問『前回の質問で答えたキャラでどんなスポーツをやる?』」

ルイージ「銀さん達に質問『…ネプテューヌさん達にどんな目にあつてああ言う風になつたの…』」

フォックス「皆に質問『作者が『月夜に舞う籠』で書いてる作品でどれがお気に入り?ちなみに3作品答えてくれ』」

そんな訳で次回を楽しみにしています

スネーク「見るからに店番か?」『よし、まずは1つ目だ』

銀時「野球だ」

新八「僕もです」

神楽「ハンマー投げネ!」

桂「野球だ」

エルザベス『ポケモンマラソンですね』

月詠「卓球じゃの」

ネプテユーン「野球だよ！」

ノワール「スキージャンプかしら？」

ブラン「・・・バレーボール」

ベール「フィギュアスケートですわ」

コンパース「スポーツはちょっと・・・」

アイエフ「卓球ね」

九兵衛「二人三脚だ」

なのは「私はやらないよ」

フェイト「マラソンランナーかな」

はやて「スケーターやってみよっかな？」

シグナム「騎馬戦か？」

ヴィータ「ハンマー投げだぜ！」

シャル「私はしないわ」

ザフィーラ「マラソンだ」

スバル「野球です！」

ティアナ「彼と二人三脚かしら」

エリオ「100メートル走です」

キャロ「グライダー飛行です」

ヴィヴィオ「野球だよ」

銀八「なるほど。2つ目は」

ガタンツ！

なのは、フェイト、はやて、シグナム、リインフォース、銀時、新八、スバル、ティアナ、桂が白目むいて気絶した。

銀八「……え、言葉にできないほどのようです…」

宗太「ぼぶら（一体何があったんだ（のっ！？））

銀八「気を取り直して3つ目はこれです」

紙に、

『魔法少女リリカルなのはStrikerS』集まりし仮面の戦士』

『東方魔弾戦記』

『とある科学と魔術と鍵の勇者』

…と書かれている。

銀八「そんじゃ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

宗太「そ、それじゃ次はペンネーム『sdfgf asdg』さんからの質問。『銀さんはスタンド温泉の時にサチコたちも憑依できますか？』

できるとしたら、閣下になりますか？』…ってなんだこれ」

真王「私が答えます。無論サチコ達はその気になれば憑依できますよ。もしかしたら閣下のも成っちゃったり」

ぽぶら「閣下？閣下ってあのアイドルの…」

宗太「違います先輩。デーモンの方の閣下です」

ぽぶら「あ、そっか」

宗太「では『sdfgf asdg』さん。あなたはスタンドにならないでください」

ぽぶら「次はペンネーム『黒龍』さんから、『サチコ』黒龍さんい
る〜」

ソラ「ん？サチコか」

サチコ「あ！ソラお兄ちゃん！」

サチコはソラを見つける。

そしてなぜだがソラの前では暗い雰囲気なくなっていた。

ソラ「どうした？」

サチコ「黒流さんに〜お仕置きに来たんだよ〜」

ソラ「黒龍ならいないぞ。それとお前に置手紙だそうだ」

サチコ「どれどれ〜」

サチコは置手紙を見た。

『俺を捜さないでください。P・S・銀さん達も俺と一緒にです』

サチコ「ええ〜」

サチコは残念そうにする。

ソラ 俺には声が掛からなかったが、 匣か

ソラ「いないなら仕方ないだろ」

サチコ「しょうがないか〜。あ！そう言えば私が贈った料理はどうだった〜？」

サチコは期待の目でソラを見る。

ソラ「ん？ああ、あれか。気絶する程マズかったな」

サチコ「そ、そんな〜（涙）」

サチコは泣きそうになる。

ソラ「だから、今度料理の仕方を教えてやるよ」

サチコ「え!？」

ソラ「お前だって人の苦しむ姿より、喜ぶ姿で食べてもらうほうが嬉しいだろ」

サチコ「お、お兄ちゃん（涙）」

サチコは嬉しいそうな顔になる。

ソラ「だから今度教えてやるよ」

ソラはサチコの頭を撫でる。

サチコ「うん!」

ソラ「まあ、俺はこれから黒龍が聞くはずだった質問言わないといけないから、教えるのはまた今度だ」

サチコ「分かった」

ソラ「じゃあ、質問だ。『皆さんに質問です。ソラの女の姿をどう思いますか?』ってなんだこれは?」

ソラは呆れる。

ソラ「次、『あの、ロリコンエロ仙人である、洞爺湖仙人がそっちの皆さんに必殺技、ゴットハンドクラッシュを教えるてに行きまし

たがどうしますか？』また、あいつか・・・」

ソラは間を空けて最後の質問を言う。

ソラ「最後、『ゼゼルが前にザコ呼ばわりされたので、皆さんを幽霊になってふっ倒しに行きましたどうしましょっ？』・・・ろくな質問がないな・・・」

ソラは呆れる。

サチコ「じゃ〜私は帰るね〜」

ソラ「ああ、帰る前にこれを渡しておく」

サチコ「ん〜？」

ソラ「生身になれる薬と大人（しかもかなりの美人）になれる薬を黒龍からプレゼントだそうだ」

サチコ「ありがとう〜」

サチコは薬を合計二百本貰う。

ソラ「じゃあな」

サチコ「じゃ〜ね〜」『って私もその薬欲しい〜！』

宗太「駄目です先輩！先輩はそのままがいいです！てかむしろその身長のままにしてください！」

銀八「ロリコンかよ…、ま、いいや。まず一つ目」

全員「カッコ良くて綺麗だ」

真王「なかなかの人ですね」

幽香「私とどっちが強いかしら」

真王「コラコラ出てくるな」

幽香「ちっ」

銀八「…次、2つ目はその仙人は教えているにもかかわらず、全員つぎくてその仙人をぶっ飛ばしましたよ」

真王「一名はあれだけど」

ネプテューヌ「ゴッドハンドクラッシュャー!!」

ザコ敵「ぎゃあああああああああ!!!!」

巨大な黄金の手がザコ敵を潰した。

銀八「ええええええええええええええええええ!!?!マジで習得したのかあいつ!?!」

真王「3つ目だけどザコ敵に紛れて潰されましたね」

ぼぶら「（本当に大丈夫かな…）『黒龍』さん。廊下に立ってね」

真王「最後は『黒神』さんからだ。『九兵衛へ

チンクとは仲良く出来そうですか？

マヨラーへ

自分は九兵衛さんに負け、銀さんはその九兵衛を倒しましたので、銀さんに剣が劣っていると認められますか？

みんなへ（シヤマルを除く）

もしシヤマル鍋を必ず食べなきゃ行けない試練が来た場合、生きて帰れる自信はありますか？』…まず九兵衛」

九兵衛「仲良くする気はない！」

真王「・・・次土方」

土方「認められるか!!」

真王「・・・そして最後に全員」

全員「ム、無理だ...」

ネプテューヌ「え？おいしいよ？」

真王「平気なのはあんただけ。『黒神』さん。ネプテューヌに鍋の準備を。」

それと『鳴神ソラ』さんからキャラバトンを公開します」

『キャラセリフバトンですけど…こっちなら…マリオ、ルイージ、ソニックで…』

0・キャラクター選択時

「俺だな」

「あつ、僕？」

「OK、俺だな」

1・エンカウント・通常

「よし！行くぞー！！」

「出て来たよ！」

「パーティの始まりだぜ」

4・勝利

「WIN」

「やったね」

「俺達の勝利だな」

5・楽勝

「今回は楽勝だったな」

「楽勝に終わって良かったね」

「楽勝だったぜ」

7・戦闘不能

「マンマミミア」

「ゴメン、体力が…」

「ノオ〜」

8・戦闘復帰

「サンキュー！」

「助かったよ」

「センキュー」

19・バトンタッチ

「此処は任せたぜ」 () の部分は交代する仲間の名前

「任せたよ！」

「バトンタッチだ」

43・必殺技

「これで決めるぜ！」

「いつくよー！」

「決めてやるぜ！」

50・回す人

「真王の銀時にパスだ！」

「それじゃあ真王さんの新八君に回すね」

「真王のネプテューヌに回すぜ」 『』

真王「いかがでしょうか。次回もお楽しみに」

第二十八訓：店が個性的なら店員も個性的（後書き）

真王「ワグナリアでタダ働きすることになったパープルハート。そこで客のようだけど只の客と思えない人たちが」

ぽぶら「次回『個性的な客の対応は難しい』 テイクオフだよ！」

（予告）

ナレーション「ワグナリアにSOS団と達人揃いと悪魔っ娘宇宙人となのはの友達・ご両親がやってくるそうです」

第二十九訓・個性的な客の対応は難しい(前書き)

真王「何かいろいろと現れそうです」

ぽぷら「『リリカル銀魂』始まるよ!」

第二十九訓：個性的な客の対応は難しい

前回、

パープルハートはやさぐれに絡まれ、料理を倒され、怒りでやさぐれたちを倒したものの、壁ごと壊してしまい、ワグナリアでタダ働きする羽目になった。

パープルハート「はあ・・・」

パープルハートは箒を持ってため息をつく。
今、外で宗太と拭き掃除をやっているのだ。
ちなみにワグナリアは開店時間前である。

宗太「どうかしましたか？」

パープルハート「どうしたもこうしたも、何でこんなことになったのかな、って」

宗太「・・・・・・・・・・・・・・・・」

宗太は少しパープルハートに同情する。

宗太「そろそろ開店時間ですね」

パープルハート「そうなの？だったら準備しなければいけないわ」

宗太とパープルハートは、店の裏入口へ入っていった。

ワグナリア・休憩室

杏子「お？ネプテューヌ、お前に新人が来たぞ」
パープルハート「新人？」

杏子に新人が来たと言われ、中を覗き込むと、

ブラックハート「あら、ネプテューヌ」

ホワイトハート「もう来たの」

グリーンハート「お待ちしてましたわ」

作業服を着たブラックハート達がいた。パープルハートは驚く。

パープルハート「あなた達…、どうして」

ブラックハート「ネプテューヌだけだといけないから来ただけよ。

あと別に寂しいからじゃないからね！」

ホワイトハート「私は只の付き添い」

グリーンハート「店長さんにネプテューヌの知り合いって言って一
緒に借金返済をさせようと思ひまして」

どうやらパープルハートを助けるために来たらしい。

パープルハートは自然に笑みをこぼす。

杏子「挨拶は済んだか？始めるぞ」

女神組「はい店長」

ワグナリア店内

女神組「ありがとうございます」

パープルハート達は客の接待、オーダー、ウェイターなど様々な仕事をこなしていた。

そして、そんな時、

ピロピロピロピロ~~~~ン 自動ドアの開く音

パープルハート「いらっしやいませ」

ワグナリアに5人組の学生集団が来た。

リーダーっぽい少女「へえ、此処ワグナリアって言うのね」

銀時声の少年「看板に書いてあっただろハルヒ」

ハルヒ「それくらい知ってるわよキヨン」

パープルハート「(銀時? : そんなわけないよね) 5名様ですね」

キヨン「あ、はい。長門、朝比奈さん、そしてホモ野郎、早く座るぞ」

ホモ? 「ホモだなんて失礼ですね。私は古泉 一樹と言う名前がありますよ?」

何かいろいろと会話があるが、キヨンたち「ハルヒ達よ!!」・・・ハルヒ達は席に座った。

グリーンハート「それではお客様、ご注文はどうされますか？」

ハルヒ「うーん…ウーロン茶とこのスパゲティーね」

朝比奈「わ、私はハンバーグです！」

長門「…たらこスパゲティー…」

小泉「私はカルボナーラです」

キヨン「俺はこのイチゴパフェをお願いします」

グリーンハート「かしこまりました。（本当に銀さんそっくりの声ですわね）」

グリーンハートはそう思いながら厨房へ向かった。

ハルヒ「さて、我らがSOS団は、本日ここでミーティングを開始する！」

いきなりハルヒが言い出した。

キヨン「おいおい、なぜにそんな始めんだ？」

ハルヒ「このSOS団にあつてはならないのは退屈なことよ！退屈だと何をやるべきか考え込んでしまうものなのよ！」

小泉「分からない訳ではありませんね」

キヨン「だからってなんでなんだ？普通に落ち着くことができないのか？」

キヨンの一言に、ハルヒが喝を入れる。

ハルヒ「落ち着く？そんなんお断りよ！この私が黙ってじーっとしているなんて存在が許さないわ！」

ハルヒはテーブルに足を乗せて言う。

パープルハート「…お客様、ご迷惑なのでお静かにしてもらえますか？」

たまたま通りかかったパープルハートが、ハルヒを注意する。

ハルヒ「すいませんが私はこれでも忙し」

ガシッ

パープルハート「お静かにしてもらえますか？（殺気）」

もう一度ハルヒに注意するパープルハートは、後ろに鬼神が見えるくらいの殺気を放つ。

ハルヒ「ハイ、スイマセンデシタ」

ハルヒは片言になって席に座った。朝比奈と長門、そして周りの客達はガタガタ震えている。

キョン（逆らったら命が危ないな…）

キョンは殺気を放ったパープルハートを見て、冷や汗流してそう思った。

グリーンハート「いらっしやいませ」

ワグナリアに客が入って来た。入って来たのは、中高生くらいの少年と少女、そして、

何かすごそうな老人「ふむ、此処はいいところじゃの」

老体ではありえない背の高さを持つ老人とその他が入って来た。

極道顔の男「おい今その他扱いされた気がするぞ」

白目の男「うむ、私もそう思った」

中華人「おお、いいお譲ちゃんがいるね」

変わった外国人「駄目だよ剣星、手を出しちゃ」

ひ弱そうな少年「師匠達の会話がなんか気になるけど、美羽さん、どうしますか？」

美羽「何でもいいですわ。一緒に入りましょう兼一さん」

入って来た客達は、只の客とは思えない気迫を出している。(2人は除く)

グリーンハート「え〜っと、ひ〜、ふ〜、み〜……8()名様ですね」

グリーンハートは入って来た客の数を数えて、8名だと答える。しかしこの場にいるのはグリーンハートを除くと7人しかない。

兼一「え？8名？7名じゃなくて？」

グリーンハート「あなた方と上にいる方ですよ」

グリーンハートはそう言うと、箒をもって天井をつつく。

すると張り紙みたいなものが剥がれ、忍者服の女性が張り付いていた。

クノイチ？「見つかった」

兼一「し、しぐれさん！？なんでそこに!?!」
白目の男（ほう、しぐれの居場所を見破るとは、この者かなりの達人だろうな）

兼一は天井に張り付いている忍者服の女性・しぐれに驚き、白目の男・岬越寺 秋雨はグリーンハートを評価する。

グリーンハート「では、こちらへどうぞ」

兼一達は席に座る。

兼一「…この店なんかすごいですね。何時かほのかもつれて来ようかな?」

アパチャイ「賛成だよ！ほのかもきつと喜ぶよ!」
しぐれ「…コクッ」

兼一の妹・ほのかも連れて来るべきかと思う兼一に、アパチャイとしぐれが同意する。

ブラックハート「ご注文はお決まりでしょうか」

兼一「あ、それじゃあ」

以下略…

ブラックハート「かしこまりました」

ブラックハートは厨房へ向かった。

数分後：

ホワイトハート「ハンバーグ定食・・・お持ちしました」

ホワイトハートが料理を持ってきた。

兼一「え？ごども」「あ？」「いえすいません、ごめんなさい」

子供と言いかけて、ホワイトハートに睨まれ、謝る兼一。

隼人（ふむ、あの娘達は相当な強さを持つておるの）

美羽の祖父であり、彼の道場・梁山泊の主である風林寺隼人は、パ
ールハート達を見定めている。

パープルハート「いらっしやいま…あら銀時」

銀時「ようネプテューヌ」

次に入ってきたのは銀時と、新八、神楽、ヴィヴィオ、なのは、フ
イトだった。

グリーンハート「あら銀さん、なのはさん達も一緒に」

なのは「ベールさん、こんにちわ」

新八「何かいろいろ来てますね」

ヴィヴィオ「ママ、早く座ろうよ」

フェイト「フツ、もう少し待ってねヴィヴィオ」

銀時達は席に座ろうとした。

ピロピロピロピロ〜ン

パールハート「いらっしやいませ、6名様ですか？」

男「はい、そうです」

6人の客が入って来た。なのははその男の声に聞き覚えがあった。

なのは「その声、お父さん!？」

なのはの父「む?なのはか!」

なのはの母「あらあら」

なのはの兄「なのはだと?」

なのはの姉「わ、なのははお久しぶり?」

紫髪の少女「え?なのはちゃん?」

金髪の少女「なのは!？」

なのはが声をかけ、なのはのご家族と友達も気づいた。

なのは「アリサちゃん、すずかちゃんまで、何でここに?」

なのはの父「いや何、ちょっとした家族旅行なだけさ。ちなみに店は閉店にしてあるから」

アリサ「そしてこの店に着いたらなのはがいたんだもん」

すずか「ちょっとびっくりしちゃったよ」

なのはの父・士朗は答え、アリサとすずかも答える。

士朗「おや？貴方は・・・銀時さんじゃないですか？」

銀時「おお、久し振りだな」

士朗は銀時の事を知っているようである。

詳しくは赤夜叉さんの『銀魂×魔法少女リリカルなのは』魔法少女と銀髪の侍』の『第三十四訓：引越しといえは引越しそば』で。

10年前とは全然変わっていない銀時に不思議がる士朗だが・・・それは気にしないで置く事にした。

パープルハート「あら、銀時の知り合い？」

銀時「ん？まあ知り合いっっちゃあ知り合いだな」

士朗「はじめまして、なのはの父親の高町士朗です」

桃子「その妻の桃子よ」

恭也「兄の恭也だ」

美由希「姉の美由希です」

アリサ「私はアリサ・バンニクスよ」

すずか「私は月村すずかです」

パープルハート「丁寧にも、ネプテューヌよ」

パープルハートも挨拶する。

士朗「しかし銀時さんがなのはと一緒にここにいるなんて・・・今日は何様で？」

士朗がそう言うと銀時がその訳を言おうとした瞬間、なのはは銀時の関係を言いだす。

なのは「銀さんは私の未来の旦那様だよ」
なのはがそう言つと銀時とフェイトは氷づくのである。

士朗・恭也「何!？」

士朗と恭也は銀時を睨みつける。アリサとすずかと美由希は啞然とし、桃子は小悪魔のような笑いを浮かべる。

なのはは両手を顔の頬つぺたにつけて顔を真っ赤に染めてニヤける。青ざめた銀時はなのはを言い出す。

銀時「おいぃー!?!?何普通に嘘ついてんだ!」

なのは「にやはは、大丈夫だよ　これから本当になるから」

銀時「え?何?銀さんの未来はもう決まっているの!?!」

フェイト「なのは!?!なにいきなり抜け駆けしてんの!?!」

なのは「フェイトちゃん、銀さんは渡さないよ」

フェイト「なのはにも渡す気はないよ!」

なのはとフェイトは言い争いを始めた。

そしてなのはの父と兄が殺気が銀さんに突き刺さって来くる。

何?　この殺気。めっちゃ怖いんですけど!

すると二人はメツチャ早く銀時に近づきだして……

士朗・恭也「娘(妹)は、やらないぞ!」

銀時(親バカとシスコンがいたー!)

そして2人とも力いっぱいに肩を掴みだそうとした。

ガシッ

パープルハート「・・・ちょっとあなた達」

しかしパープルハートが2人の腕を掴んで止めた。

パープルハート「どういふことかしらないけど、銀時に手を出すな」

パープルハートは、まるで獲物を狙う獣の目をして、殺気を出して
士朗達を睨む。その目を見た士朗達は驚く。

士朗（この娘、只の店員ではないな。戦いに慣れている程度ではなさそうだ）

士朗はパープルハートを見てそう思った。

秋雨「おや？もしかして御神流のものかね？」

秋雨が士朗達に声をかける。

士朗「む？どうしてその名……あなたはもしかして岬越寺 秋雨さんでは!？」

秋雨「ほう、わたしをしっているとは」

銀時「え？どゆこと？」

なのは「お父さん、この人知ってるの？」

なのはが秋雨のことを聞く。

士朗「知ってるも何も、この方は『哲学する柔術家』という二つ名を持つ有名人で、しかも書画・陶芸・彫刻・演劇・音楽・茶道と何でもこなし、『書・画・陶芸・彫刻のすべてを極めた』と謳われる天才芸術家」と謳われ芸術家として著名な方なんだ」

銀時「ええ〜〜！マジでっ！!?」

なのは「そ、そんなに有名人だったの!?!」

銀時となのはと、周りの客、宗太達も驚く。

恭也「その天才芸術家と会えるだなんて、俺夢見た気分だ…」

美由希「私もそう思った」

アリサ「彼の芸術作品はすべて一位取りみたいね」

ハルヒ「じゃあ、そこに座っているのは達人揃いがあると言うっ」梁

山泊『つて人たちがしら」

朝比奈「ええ!?!」

長門「…ユニーク…」

兼一「あはは、僕はその弟子なんですけどね…」

美羽「兼一さん、それフォーローになつてませんわ」

宗太「凄い有名人を入れてしまったな…」

周りそれぞれそんなことを言う。

パープルハート「ま、それはともかく、席に座りますか?」

士朗「あ、ああ、すまない」

士朗達は席に着いた。秋雨も席に戻った。

そのあとも、いろいろとなんかやっちゃったりする。

ララ「待つてよリト！」

リト「いやだから駄目だって！」

2人の少年少女が、なんだか少年が逃げ、少女が追いかけている。

リト「うわ！つぷ！」

運悪く足を踏み外し、ブラックハートの胸にダイブ。

ブラックハート「き、きゃあああああああ！！！！」

バキッ！

リト「お！っ！」

ブラックハートは顔を赤くして、リトを殴り飛ばした。
しかもその先にはまひるが、

まひる「いやあああああああああ！！！！！！」

バキバキバキバキバキバキバキバキバキバキバキバキバキドガッ！！

リト「ぎゃあああああああ！！！！」

ララ「リトッ!？」

まひる「ごめんなさ〜〜〜い！！！」

リトを殴り飛ばしたまひるは、そのまま逃げだした。

ブラックハート「…殴った本人が言うのもなんだけど、大丈夫？」

新八「いやいや、これどう見ても大丈夫じゃありませんよ！」
パープルハート「……………あら大変。この子心臓止まってるわ」
新八「最悪だ……………!!!」
ララ「リト……………!!!」

神楽「おいテメー、その大きなもんをこっちによこせヨ」

キサラ「そうだ牛乳。てかそれ亡くせ」

美羽「なに言ってるんですか…？ってキサラさん！？何でここに？」

新島「俺らもいるぜ」、白浜「

兼一「うわ！新島!？」

新島「お前らだけ楽しもうだなんてそうはいかないぜ。『新白連合』
勢揃いだぜ？」

秋雨「兼一君の友達はホント元気がいいね」

兼一「そういう問題ですか!！」

銀時「……………」

キヨン「……………」

グリーンハート「似てますね」

ハルヒ「似てるわね、雰囲気が」

銀時・キヨン「似てねえよっ!！」

グリーンハート「ハモりましたわ」

ハルヒ「おまけに声そっくりね」

しんのすけ「綺麗なお姉さ……………ん!！」

パープルハート「あらあら、いきなりのナンパね」

ひろし「しんのすけ、失礼だろ」

パープルハート「そう言うことだから降りてくれない？」

しんのすけ「え、もっとお姉さんと」さっさと降りなさい「…ハ
イ」

殺気出してしんのすけを降りさせる。

ひろし（こ、こえ…）

みさえ（しんのすけが素直に降りたわ…）

ひまわり（たやう…）

マリオ「うめ〜！このキノコソテーうめ〜！」

ルイーダ「兄さん少しおちついて食べてよ。それじゃ喉が詰まるよ」

マリオ「悪い、そうするわ」

ゆり「……………」

ハルヒ「……………」

ガシッ

ゆりとハルヒはお互い見あった後、握手した。

キヨン「ハルヒが2人になった気がする」

音無「俺はなんだかゆりが2人に見えたぞ」

こなた「銀時っ！？本物の坂田銀時だ！！サインください！！」
銀時「・・・何だこのガキは？」
かがみ「すみません、この子オタクですから」

コンパ「・・・・・・・・・・」
朝比奈「・・・・・・・・・・」

ガシッ

コンパ「お互い頑張りましょうです」
朝比奈「はいです」
小泉「こつちも似た者同士がいますね……」

宗太「今日は大繁盛ですね」
パールハート「そうね」

ファミリールレストラン『ワグナリア』、今日も一日平和である。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

八千代「ハイ、アシスタントするのは杏子さん大好き・轟八千代と」

まひる「い、伊波まひるです」

銀八「あゝ、暴力女で有め「バギツ」ごはっ！！！」

まひるに殴られ、銀八は気絶した。

八千代「先生をほつといていきましよう。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『ルイージ』「ネプテューヌ、大変だな…」」

フォックス「良い事したけど弁償でな…と言うか今回出て着たの確かに個性あり過ぎだなおい！！！」

スネーク「それで良いのか？と突っ込まざる負えないな…」

ネス「それで男性恐怖症とは…」

リユカ「殴られた人たちご愁傷様…」

スネーク「今回（ワグナリア編）に出てきたメンバーに質問『銀時達を見た第一印象はどんな感じだった』」

ルイージ「サチコちゃんに質問だけど『ネプテューヌがいない時って普段何してるの？』」

フォックス「そんで俺から皆に質問『前回の質問で選んだ3作品の理由を言ってくれ、なお、3作品一纏めての感想じゃなく別々でおかつ長め（5文字以上）に頼む』」

させ「次回は色々来るらしいね…」

リユカ「どうなるのかな？…」『ではまず一つ目から』

宗太「銀さんは普通の人ですね」

まひる「え？あんな凶暴な人が？」

宗太「違います伊波さん。新八君はなぜか俺と同じ感じがしますね」

杏子「あのチャイナはかなりの胃袋もちだな」

佐藤「俺は桂が気になるな」

相馬「エリザベスさんって不思議だよな」

ぽぷら「月詠さんは顔に傷があるけど奇麗だったな」

杏子「私はネプテューヌと食い友達になれる気がするぞ」

相馬「ノワールさんはツンデレだね」

宗太「ブランちゃんは僕の好みに入りますね」

ぽぷら「ベールさんは大きい人だね！（違う意味で）」

八千代「コンパさんはおっとり性ね」

宗太「アイエフさんは突っ込み担当ですか？」

真王「なのは達はカットします。2つ目はサチコ」

サチコ「お姉ちゃんがないときは銀時と遊ぶか、なのはさん達を驚かすかだよ」

まひる「ものスッゴイ迷惑行為ですよね!？」

真王「最後の三つ目ですが、バラバラ答えはめんどくさいので私がすべて答えます。

まず、『とある科学と魔術と鍵の勇者』ですが、これは銀時、ネプテューヌ、新八、スバル、なのは、フェイトが選びました。主人公のヴェントウスとヴァニタスが仮面ライダーになって戦うことが印象です。あと私キングダムハーツ好きですよ。

次に『東方魔弾戦記』ですが、これはノワール、ブラン、ベール、桂、エリザベス、月詠が選びました。リュウケンドーとゼロの模擬戦で火がついたらしいそうで、ぜひ挑戦したいそうです。あとファルコ、いろいろご愁傷様です。

最後に『魔法少女リリカルなのはStrikerS』集まりし仮面の戦士』ですが、これはネプテューヌ、銀時、桂、神楽、なの

はが選びました。なのはと仮面ライダーのコラボが面白かったそう
だ。私はなのはと書かれてたから見たただけだが」

まひる「えっと・・・『鳴神ソラ』さん。ろ、廊下でお殴りしてよ
ろしいですか？」

真王「宜しくない!」

まひる「ごめんなさい!」

八千代「次はペンネーム『sibugaki』さんから質問。『質
問です

スカリエッティとナンバーズは何時出るんですか？

そして出る時は敵なのですか？それとも味方なのですか？
以上です』」

真王「ナンバーズはまだですが、スカリエッティは次回の次回で出
します。それとこう^{ストーリー}いう物語にはスカリエッティ達は味方もんです
よ」

まひる「で、では『sibugaki』さん。廊下で立って殴られ
てください」

真王「止めるっつーのっ!」

第二十九訓：個性的な客の対応は難しい（後書き）

真王「今回登場したのは、『T.O.L.O.V.E.R.』『涼宮ハルヒの憂鬱』『史上最強の弟子ケンイチ』『クレヨンしんちゃん』『らきすた』『マリオ』でした。次回は店の裏に酔っ払いが倒れていた。だが宗太はその酔っ払いとはいやな関係らしいが…」

まひる「じ、次回『いくら家族が大きくても妹まで大きいのはどうかと思う』テ、テイクオフ！」

第三十訓：いくら家族が大きくても妹まで大きいのはどうかと思う（前書き）

真王「本編が少し短いですが見てください」

第三十訓：いくら家族が大きくても妹まで大きいのはどうかと思う

八千代「ごめんね、一緒に買い物付き合っちゃって」

パープルハート「いいのよ、気にしないで」

パープルハートと八千代は買い物袋を持って歩いている。材料補給のためにワグナリアへ帰るところらしい。

パープルハート「ん？」

八千代「どうかしました？」

パープルハート「あそこで何か動いたような…」

パープルハートは草場を指差す。しばらく見ていると、

ガササツ！

パープルハート・八千代「!？」

草場から手が出た。

ワグナリア・休憩室

そこでパープルハートやぽぷら達が集まっている。そこで宗太が遅れてやって来た。

宗太「おはようございまーす。ってどうしたんですか？」
ぽぷら「あ、かたなしくん」

パールハート「小鳥遊、酔っ払いが近くで倒れてたのよ」

宗太「酔っ払い…」

宗太が酔っ払いと聞くと、少し元気がなくなってきた。とりあえず宗太はその酔っ払いを見ると、オレンジのロングではしたない恰好をした女性が寝ていた。そして徐背は目を覚まして宗太を見た。

女性「宗太…！…！…！…！」

宗太「うわっ！」

いきなり女性が宗太に抱きついた。

パールハート「…知り合いなの？」

宗太「あ、いえ、この人は俺の親戚ですから。酔っ払うと何かいろいろあれになっちゃうんですよ」

ブラックハート「あれってなにっ!？」

宗太「それはともかく、この人は俺が何とかしますから、仕事に戻ってくださいませんか？」

パールハート達は一応従い、仕事場に戻った。そして宗太は酔っ払いの女性へ向いて、怒気混ざりに聞いた。

宗太「何でこんなところにいるんだよ…」

女性「だってだって、彼氏に振られちゃって宗太に慰めてもらいたかったんだもん」

宗太「帰れよ、梢姉さん」

酔っ払いの女性・梢は泣きながら言うが、宗太は冷めた口調で言う。

パープルハート「へえ、その人あなたの姉さんのね」

宗太「ええ、うちの……ってネプテューヌさん！？それにノワールさん達もいつから!？」

パープルハート「一応気になったから戻って来たのよ」

パープルハート達は宗太達の話聞いてたようだ。

梢「宗太の姉の小鳥遊梢です」

宗太「ちよっ！なんでいきなり自己紹介…グオワ！」

宗太が止めようとしたら、梢が後ろをついてサブミッションで絞めた。

梢「全く、何で宗太はこんなに冷たくなったのかな。昔はこんなに可愛かったのに…」

梢が一枚の写真を取り出して見ている。ところが宗太は顔を青くした。

宗太「ちよっ待て！それは「それ」「ああっ!!！」

梢がパープルハート達へ写真を飛ばす。拾ったパープルハート達は写真を見ると、1人の女の子が映っていた。

グリーンハート「あらあらこれは」

ホワイトハート「幼女時の写真か？」

ブラックハート「け、結構かわいいわね」

梢「そうでしょう？それ宗太」

女神組「っ!!!??？」

映っている女の子が宗太と言われ、ありえないような顔をする。

宗太「ネプテューヌさん！」

梢「あら？いつの間に」

いつの間にかサブミッションから抜け出した宗太が、汗流してパープルハート達に言う。

宗太「このことは誰にも言わないでくださいよ！姉のこととか、この写真のこととか！」

宗太は必死な顔で言う。相当嫌な思い出らしい。

パープルハート「…わかったわ」

パープルハート達は承諾し、酔いがさめた梢は家に帰った。

宗太「全く、何で梢姉さんが来るんだよ…」
パープルハート「よほどあなたの姉が嫌いみたいだけど何かあったの？」

皿洗いをしているパープルハートは、宗太に聞いてみた。

宗太「嫌いと言うよりあの人は超が付くほど飲んだつくれですよ！
！それどころか俺の居ぬ間に大量の酒買いやがって！ハア…今月の

会計大丈夫かな・・・」

パープルハート（何か・・・いろいろ大丈夫かしら？）

パープルハートは心配になった。

夜

パープルハート「閉店時間ね」

ぽぷら「それじゃあみんなさようなら〜！」

宗太「さようなら先輩！伊波さん、来ましようか」

まひる「う、うん・・・」

そう言う宗太とまひるの手には、マジックハンドが握られていた。

ブラックハート「・・・なにそれ？」

ホワイトハート「新手の遊び？」

グリーンハート「あらあら…あなた達その様な趣味が」

宗太「違います！伊波さんは男性恐怖症だからこれを使ってるだけです！」

女神たちはジト目で宗太を見て言うが、宗太は否定する。

パープルハート「・・・直接は駄目なの？」

まひる「ごめんなさい・・・そう言うのはとても・・・」

パープルハート「あゝはいはいわかったわ」

パープルハート達は一応承諾した。

宗太「それではまた明日」

まひる「そ、それじゃあ……」

宗太とまひるは帰った。

パープルハート「……やっぱり心配だからおうわよ」

ブラックハート「大丈夫よネプテューヌ、私達もそう思ったから」

女神たちは宗太とまひるを追いかけた。

まひる「ありがとう小鳥遊君。また明日」

宗太「伊波さんもまた明日」

宗太とまひるが別れた。まひるは実家へ帰った。

グリーンハート「まひるさんは無事に帰りましたわね」

パープルハート「ついでだから宗太の家にお邪魔しようかしら」

パープルハート達は宗太を追いかけた。

宗太「ただいま」

宗太はある一軒家に帰った。どうやら宗太の家らしく、名札に小鳥遊と書かれている。

パープルハート「ここなのね」

ブラックハート「見る限り普通の家みたいだけど…」

グリーンハート「それではお邪魔しましょうか」

女神たちは宗太の家にお邪魔しようとする。

ピンポ~~~~ン

入る前にベルを鳴らす。

???「は〜いどちら様ですか〜?」

扉から宗太と同じくらいの少女が出てきた。

宗太「なずな、誰か来…ってネプテューヌさんっ!?!」

パープルハート「どうも」

宗太が来て、パープルハート達が来たことに驚く。

なずな「あれ?お兄ちゃん知り合い?」

宗太「ああ、紫の髪の人がネプテューヌさんと、銀髪の人がノワールさん、水色がブランさん、緑色がベールさんだよ」

なずな「へえ〜、はじめまして、妹の小鳥遊なずなです」

パープルハート「ご丁寧にどうも。ネプテューヌよ」

ブラックハート「私はノワールよ」

ホワイトハート「…ブラン」

グリーンハート「ベールと申しますわ」

なずなとパールハート達は自己紹介した。

梢「あら〜、あなたたちこの間のじゃない〜」

奥から宗太の姉・梢が出てきた。

しかし足取りが悪く、顔も赤い、つまり酒酔いしている。

宗太「また飲んでたのかよ！梢姉さん！！」

梢「何言ってるの〜！二日酔いには酒が一番よ〜！」

宗太「何処が一番だ！！それどころか余計悪化するわっ！！」

宗太が新八みたいに、梢に突っ込みを入れる。

???「何だ？誰か来たのか？」

奥から宗太と同じように眼鏡をかけた女性が出てきた。

宗太「か、一枝姉さん」

梢「あら〜、一枝じゃなくい」

一枝「…お前まだ酒飲んでるのか？」

一枝は酒酔いしている梢にジト眼で見る。

梢「いいじゃない、飲んだって〜。あなた達もそう思うよね〜」

女神組「黙れ飲んだっくれ」

梢「即答っ！？しかも酷いっ！」

女神組のピツタリなハモリと冷たい一言に梢は泣く。

ホワイトハート「…寒い」
なずな「寒い?…あゝ、ドアが開いてるからだね。お茶あげよっか?」

ホワイトハート「ありがとう」

ホワイトハートが優しくそんな笑顔でお礼を言った。

一枝・宗太（か、可愛い・・・／＼／＼）

その笑顔を見た2人は顔を赤くした。

ホワイトハート「ん?」

ホワイトハートはある一つの扉を見た。“開けないで”と書かれた扉が。

ホワイトハートは気にせずその扉を開けると、紙の雪崩と、黒い服の女性が出てきた。

宗太「・・・何やってるんですか泉姉さん」

泉「原稿…終わらない…」

どうやら宗太の姉らしいが、なんだか黒くなっているし、やつれて
いる。

泉「一生懸命と言う物の・・・周りにあるのは失敗作・・・
けれど私は諦めない・・・なぜなら私は恋愛小説家だから・・・」

夢のなさそうな生活を送っているような泉。

ホワイトハート「立派な頑張りね。私も応援するから」

ホワイトハートが励ましの言葉を言うと、泉はホワイトハートと手を握った。

泉「ありがとう！おかげで自信が付いたわ」

ホワイトハート「ええ！」

2人の絆がここに芽生えた。

パープルハート「…何？この状況…」

ブラックハート「2人に何か共通点があるのかしら？」

只、パープルハート達や宗太達は何が何だか分からなかった。

とりあえず、パープルハート達は小鳥遊家に居座っている。

パープルハート「え〜と、一枝さんは長女で弁護人を役職、次女の泉は恋愛小説家、三女の梢は無職で飲んだっくれね」

梢「ちよつと飲んだっくれはないでしょ」

梢は突っ込む。

なずな「まあまあお姉ちゃん、はいお茶」

パープルハート「あらありがとう」

グリーンハート「なずなさんは偉いですわね。宗太さんとは同じ感じですわね」

なずな「あはは、なずなはこう見えて小学生なんだよ？」

女神組「……………は？」

一瞬なずなは何か言った気がしたが、もう一回聞いてみた。

グリーンハート「なずなさん？さっきなんて言いました？」

なずな「だから私は小学生なんだよ？」

なずなは自分を小学生と言った。宗太とほぼ同じ身長なのに。

パープルハート「なずな、きっとあなた頭が壊れているわ。直さないと」

なずな「え？」

パープルハートはナズナの頭を持って殴る準備を、

宗太「待て待て待て待て！！なずなはこういうなりだけでもれっきとした小学生だから！」

宗太はパープルハートを止める。

パープルハート「そうなの？分かったわ」

宗太はそれを聞いて安心した。

パープルハート「じゃあ頭を解体しなきゃ」

なずな「ええっ！？」

宗太「分かってねえ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！」

宗太はシャウトした。

泉「…個性豊かね…宗太の友達って」
一枝「豊かにもほどがあると思うが…」
梢「楽しそうね」

小鳥遊姉妹はそれぞれ感想を漏らした。

グリーンハート「お世話になりました」
一枝「いやいや、どうってことないから」

女神組はそろそろ帰ることになった。

なずな「ネプテューヌさん、お元気で」
パープルハート「ええ」
なずな「あゝ、早く支度をしなくっちゃ」

なずなはパープルハートに別れをいった後、まるで子供のような口調で部屋に戻った。

女神組（…ホントに小学生ね（だな））

パープルハート達はなずなを見てそう思った。

ホワイトハート「泉、夢をあきらめないでね」
泉「分かったわ」

ホワイトハートと泉は握手した。

パープルハート「それじゃ」

小鳥遊家「さよなら」

パープルハート達は小鳥遊家を後にした。

グリーンハート「いいご家族でしたわね」

パープルハート「ホントにね」

ブラックハート「宗太はなんだかいやいやそうみたいだったけど……」

ホワイトハート「ま、早く戻ろう」

そんな四人の小鳥遊家に対する感想だった。

くおまけ

銀八「教えて！」

フォックス「銀時に質問『今回出たキヨンと出会ってどう思った？』」

ルイージ「皆さんに質問『作者が書いてる小説でこの人と対話してみたいって言う人はいますか？いるなら答えてください』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます。『ズバリ一つ目を答えましょう』

恭也・美由希・アリサ「…ホントに人間か？」

すずか「あの人の血は何味なんだろ…」

士朗「修羅を乗り越えたものかもしれんな」

桃子「あらあら、面白い方」

なずな「一部危ないセリフを言った人がいた気がする…」

銀八「スルーしとけ。2つ目だ」

銀時が立ち上がる。

銀時「声がそっくりなところはムカついたが、何か苦労してるなって思った」

なずな「中の人繋がりには嫌なのかな？それじゃあ3つ目」

全員「ない」

ネプテューヌ「私は誰でもいいよ」

サチコ「わたしも」

銀八「はい、『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

なずな「次はペンネーム『レイガン』さんからの質問だよ。『1ネプテューヌ』達に質問です。

銀時をどう思っていますか？

2 銀時に質問です、今の状況をどう思いますか？』」

ネプテューヌ「私、銀さん大好きだよ」

ノワール「チャランポランだけど、まあ許す程度よ」

ブラン「・・・面白い人？」

ベール「それなりに強いと思ってますわ」

銀時「今の状況か？嬉しかったり忙しかったりひどい目にあったり俺疲れたぜ」

なずな「・・・苦勞してるのかなあ・・・？あ、『レイガン』さん。廊下にたってください」

銀八「次はペンネーム『sibugaki』さんからだ。

『甲児

「あのアパチャイっての俺と同じ声だったな」

何呟いてるんだこの人は

関係ないので質問行きます

ぶつちやけた事言います

リリカルメンバー此処だと影薄いね

このまま主役の座をネプチューン達に取られるのかなあ？

楽しみです（ニヤニヤ）

では次回も頑張つて下さい」・・・・・・・・・・・・・・・・

銀八は青ざめる。なぜならなのは、フェイト、はやて、シグナム、
ヴィータ、シャマル、スバル、ティアナ、リインフォース、アルフ
がものすごい殺意のオーラをまとっているからだ。
なずなは教室の隅っこで真っ青になって震えている。

銀八「『sibugaki』さん！！彼女達を怒らせるようなこと
はやめてください！」

真王「俺が殺ろうか？」

銀八「いや駄目だつて！」

真王「冗談だ。おっとそつだ。読者のみなさんにアンケートを取り
ます」

銀八「アンケート？」

真王「次の章『魔道機人編』の次に始める章はどれにするかってこ
とでアンケートを取ります」

銀八「なるほどな」

真王「そんなわけで、アンケートは以下のとおりです」

1：パンドラ編

福引で宇宙旅行のチケットを買ったネプテュー又は、銀時達と一緒に宇宙旅行へ向かう。しかしテロリストのおかげで惑星・パンドラへ墜落してしまった。銀時達は助かったものの、ネプテュー又は行方不明になってしまう。ネプテュー又はパンドラのナヴィと呼ばれる住民に出会い、共に過ごすことになる。

(クロス元：アバター)

2：銀河編

ミッドチルダに巨大宇宙生物が襲撃した。襲撃後、ネプテュー又は星の子・チコと出会う。そしてネプテュー又は達はチコとともに宇宙の平和を取り戻しに行くのだ。

(クロス元：スーパーマリオギャラクシー (2も有り))

3：ネプ銀編

ある日ネプテュー又は、謎の商人に不思議なキノコを買い、それを

食べて自我を失い、銀時達を吸い込んでしまった。吸い込まれた銀時はネプテューヌの体の中に入ってしまった。そして目覚めたネプテューヌはキノコを食べさせた張本人・ゲラビッツの目的を知り、体の中の銀時達とともにゲラビッツの目論みを阻止するのだった。

(クロス元：マリオ&ルイージRPG3)

真王「そんなわけで募集しております。ちなみにどっちでやるかは順番に決めてください。私的には3 1 2がじっくりきますが」

銀八「そんなわけで、質問コーナー終わります」

第三十訓：いくら家族が大きくても妹まで大きいのはどうかと思う（後書き）

真王「アンケート募集しております！活動報告にも載せます！さて
次回は、ワグナリアに危機が迫る！？そして杏子のライバル登場！
？そして始まるはパフェ大食い対決だ！」

なずな「次回『パフェの食べすぎにご用心』テイクオフだよ」

第三十一訓：パフエの食べすぎに「用心（前書き）」

真王「これは長いです。それでは」

第三十一訓：パフェの食べすぎにご用心

今日のワグナリアはやっぱり平和・・・・・・・・・・ではなかったりする。

なぜなら、

パープルハート「お客さん来てないわね・・・」

ワグナリアに来ている客が激低しているのだ。

宗太「そうですね。どうしたんでしょう？」

なずな「お客さん来ないね」

パープルハート「そうね。……ってなずな？何でここに？」

なずな「私はお手伝いできてるんだよ」

パープルハートはそうなの…と言って納得する。

杏子「ま、私のパフェが食えるならまだいいが」

宗太・新八「もう食うなっつうのー!!」

宗太と新八が同時に怒鳴る。

なずなは新八を見て、お兄ちゃんそっくりだね、と思ったそうだ。

ホワイトハート「みんな、ちょっとこれ・・・」

ホワイトハートが一枚のチラシを持ってこっちにくる。
すると、誰かが入ってきた。

????「オッホッホッホ、久しぶりですわね杏子さん？」

新八「屈辱つて何これエエエエエ！！！？他人の食べ物盗み取ってるだけじゃねえかアアアアアアアアアアアア！！！」

宗太「店長オオオオオオオオオオオオ！！！あんだ昔一体何をしたんだアアアアアア！！！？？つか三つ目明らかに不法侵入してるじゃねえかアアアアアアアアアア！！！」

宗太と新八が杏子に怒鳴る。

なずなはやっぱり似てるよね、と宗太と新八を眺めてそう思った。

蓮香「あなたに与えられ続けたこの屈辱の恨み！きっちり払って差上げますわ！」

杏子「食べ物以外など興味はない」

蓮香「・・・フ、フン！その余裕なことを言うのは今のうちですわ。後どうでもいいことですが年増のあなたは今の私にいませんでしてよ！」

蓮香は余裕そうに言い、杏子は年増と言う単語に青筋を立てる。

宗太「何言ってるんですか。店長と同級生の時点であんたも年m」ズドツ！！」ゴバアツ！！」

なずな「お兄ちゃん！？」

宗太が言っではいけないことを言い、杏子と蓮香に蹴られた。

蓮香「さあ、このわたくしの『レバイアタン』と勝負ですわ」

宗太「れ、レバイアタンですって！？」

ブラックハート「復活早っ！！」

銀時「てかレバイアタンって何？」

銀時が聞くと、宗太は説明する。

宗太「ファミリーレストラン・レバイアタン、それは世界中の料理を集め、そのまま喫茶店にした人気の店。そしてそれを経営しているのは、先代レバイアタンのオーナー・宇野宮 健八。今思い出しただんですが、その方は宇野宮健八の一人娘でレバイアタンの後取り、宇野宮 蓮香さんですよ！」

蓮香「説明ありがとう。この私はあなたに復讐するためにレバイアタンの後お次、そしてあなたを陥れるために、決闘を申し込みますわー！」

蓮香は杏子を指差して決闘を申し込んだ。

杏子「・・・八千代、バット持ってきてくれるか？」

宗太「いやいやいやいや店長！決闘ってそっちじゃないからー！」

宗太はバットを持つととする杏子を止める。

蓮香「・・・ちょっと説明不足でしたわね。決闘内容はチラシに載せてありますからそれを見てくださいね。それではまたごめん遊ばせー！！おほほほほほほほほー！！！」

蓮香は高笑いをあげながらリムジンに乗ってどこかへ去った。

パールハート「・・・さてさて、面倒な物を申し込まれたわね」

杏子「私は別にどうってことないぞ」

ホワイトハート「そう言うわけにもいかない」

ホワイトハートがさっき持ってたチラシを見せる。

宗太達はそのチラシの内容をみてみた。

背景に雷が落ちたようにショックを受けた。

杏子「い、いかん！それだけは何としてでも阻止せねば！！」
八千代「そ、そうですわね杏子さん！！」

食べモノ好きな杏子にとってそれだけは痛い事らしい。八千代も同意する。

銀時「なあ、ネプテューヌ」

パールハート「なに？」

銀時がそのチラシを見てこう思う。

銀時「それってさあ……パフェ食い放題って訳じゃねえ？」

銀時がそう言うと、座っていた神楽が目を輝かせた。

とある神社・イベント会場

そこではある大会が行われる。

それは『レバイアタン』と『ワグナリア』のパフェバトルコロシアムが始まるのである。

『ワグナリア』では杏子と宗太達とパールハート達がいて、たくさんさんのパフェを並んでいる。

しかし、なぜか行列はなかった。

そして一方の『レバイアタン』には『宇野宮 蓮香』を率いるパフエ職人5人がいる。
しかもパフエは見たことがない珍味のパフエばかりで行列がたくさん出ている。

蓮香は勝ち誇ったかのように高笑いする。

蓮香「おーっほっほっほ！杏子さん！貴方の食べ物もどうやら飽きてしまわれましたわねえ」

その言葉に杏子の額に血管が浮かび上がる。

蓮香「まあ、今日はあれですわ。攻めての最後の情けに貴方の店を守る最後のチャンスを上げましたし、敵に塩を送るとはまさにこの事ですわ」

さらに桃子を見下す言葉に杏子は怒り出す。

蓮香「でも、貴方のような二流のパフエに私の一流のパフエに叶えるとは・・・相当思えません。せいぜい最後まで醜く抗うと良いですわ。おーっほっほっほっほっほ！」

言いたい放題の守子に杏子の額には大量の血管が浮んでくる。

宗太と八千代とまひるも殴りかかりそうな感じで怒り出しており、相馬と佐藤とぼぶらと葵はそれ以上に杏子の怒りに恐怖している。

宗太「伊波さん、普通はやってはいけません、完膚なきまでに叩きのめしていいですよ」

まひる「確かに駄目だけど、本当に殴ってもいいよね？」

八千代「あの女あ…、切る！」

相当なまでに答えている3人も我慢の限界である。

杏子はなんとしてもこの勝負は絶対に負けられないのである（食べ物死守のために）。

だが、肝心な客が1人もいないのであれば・・・勝負にはならない。

蓮香の部下「蓮香様・・・『ワグナリア』の所には列が無いどころか1人もいませんね」

部下らしき者が蓮香と話して『ワグナリア』を見縊っている。

蓮香「ふふふ・・・この勝負は杏子の人生を完膚なきまでに破壊するための儀式なもの。しかしこつも圧倒的な差があると、これはもう勝負が始まる前に勝ったのも当ぜ・・・」

守子がそう言うと、目の前には奇妙な連中が眼に映った。

その連中とは、銀時、桂、なのは、フェイト、はやて、スバル、神楽、新八、エリザベス、月詠、ティアナ、エリオ、キャロ、ヴィヴィオ、リインフォース、コンパ、アイエフがいた。全員それぞれ頭に糖分とかかれた鉢巻を駆けている。そして銀時達はゆっくりと『ワグナリア』に向かう。

蓮香「あんな時代遅れのファミレスに向かうなんて・・・大した食卓ね」

蓮香がそう言うと、銀時達は『ワグナリア』の目の前に立つ。

宗太「銀時さん・・・」

銀時「マジでタダだろうな」

宗太「はい、色々と世話になりました・・・思う存分食べてください」

い
」

宗太がそう言うと、銀時、スバル、神楽、エリオは眼を強く光らせる。

只、杏子とパールハートは今食べられないことに悔しがる。

近藤「えー、それでは第1回『大食いパフェ対決!』を始めたいと思います! 実況はこの俺、真撰組局長! 近藤勲と・・・」
ルーテシア「自分の暗い生活を変えたい少女、ルーテシア・アルピ
ーノ」

スカリエッティ「そして大爆笑的な面白いイベントを強く求める男、
ジェイル・スカリエッティ」

近藤・ルーテシア・スカリエッティ「俺(私)達が勤めさせていた
できます」

銀時達「色々ちよつと待てえー……………!!!!!!」

3人の実況に銀時達がツッコみ出す。

銀時「お前、何当たり前のように出ているんだ! つうかなんで実況
をしているんだ!」

銀時の怒鳴りに近藤が銀時の存在に気づく。

近藤「おお、万事屋達か。こんなところで会うとは偶然だな」

桂「うむ、それにしてもお主達とこうもめぐり合わせるとは・・・
何やらの縁があるようだ。して、近藤殿はどうしてここに?」

近藤「いやー、実はルー殿とス力殿が近々とある神社で大会らしき物が始まると聞いて、2人が興味を持って司会者を勤めさせようと来ちゃって、ついでに俺も司会者として勤めさせてもらった訳！」
神楽「お前、本当に真撰組の局長アルか？仕事を思いっきりサボる為に来たのと一緒ネ！」

桂の質問に近藤が答えると、神楽は毒舌で近藤に呆れる。

土方「…一理あるのは認めるがな…」

沖田「あきらめやしよう土方さん」

山崎「大丈夫かなあ…」

パープルハート「あ、土方達も来てたんだ」

土方達が来てたことにパープルハート達も驚く。

スカリエッティ「まあともあれ、ここで君達と会えるのは偶然だが、思いっきり楽しむと良い」

ティアナ「まあ、そうさせてもらっわ……って言うよりなんでアンタがここにいる!？」

スカリエッティの存在にティアナがツッコみだす。

リインフォース「貴方確か広域次元指名手配犯じゃないですか！何この世界で普通に実況をしているんですか!？」

リインフォースがスカリエッティにどうしてここにいいのかを聞き出す。

スカリエッティ「うむ、実はこの世界で面白いイベントが起こりそうな気をしてみれば、この大会の実況を頼まれてな……せっかく

だからやってみただ。」

面白そうに笑うスカリエッツィに銀時達は呆れる。

ティアナ「つて、貴方確か『リリカルなのはStrikers』ではボスキャラじゃなかったの？何でタダのボケキャラとして登場しているの？」

スカリエッツィ「なんか中途半端な悪役には飽きたから最初からボケキャラの方が楽で良いしね」

ティアナ「おいしいiiiiiiii！言っちゃったよ！この人自分のことボケキャラと言っちゃったよ！もう悪役の欠片も全然ないよ！」

もはやスカリエッツィは悪役の欠片がなく、ティアナはツッコむしかなかった。

なんやかんやで銀時達はワグナリアのほうに戻り、ルーテシアはコングを鳴らす。

近藤「さあ、始めました！試合開始です！」

近藤がそう言いだすと、『レバイアタン』に並んでいた客が一斉に『レバイアタン』のパフェを取り出してきた。

ルーテシア「『レバイアタン』の客が殺到！！次々と皿がなくなっ
ていきます！」

客が次々と皿を取り出して行き、だんだんとレバイアタンのパフェが無くなって行く。

近藤「一方の『ワグナリア』は……あああああああ！！
！」

白く笑う。

観客「もうこっちのは良いや！あっちのパフェを頂くぞ！」

近藤「おーっとここで『レバイアタン』の客がほとんど『ワグナリア』に向かつていく！」

近藤もこれは『ワグナリア』の勝利になると確信した・・・その時だった。

銀時「坂田家の食卓に・・・」

パールハート「手を出すなああ！！！」

銀時とパールハートが回転蹴りをして観客達を蹴飛ばす。

宗太「おいおいおいおい！！何やっているのぉ！！！」

宗太が思わず叫びだす。

ぽぷら、まひる、八千代、佐藤、葵も眼を開くかのように驚きだした。

近藤「何やっているんだあああああ！せっかくの客が来たんだよ！何追い返しているの！？」

近藤も思わずツッコみだす。

その原因を銀時とパールハートが言い出す。

銀時「ここはウチの食卓だあああ！」

パールハート「何人たりとも入らせてたまるかああ！！！」

山崎「食卓宣言かよオオオオオ！？つうかこれ皿の数が多い人の勝ちなんだよ！あんた等の食卓用じゃないんだよおおおおおお

桂とエリザベスがそう言うが、リンフォースがツツコみだす。

リンフォース「そう言う貴方達こそ何をしているんですかあ！」

リンフォースがツツコみだしたのは、桂とエリザベスが何故か、かけそばの中にケーキを入れて一緒に食べていたからである。

桂「武士たるとも、甘ったるい物だけを食しては心が腐ってしまう！」

エリザベス「常に心を強く！」

リンフォース「それ以前に理性を腐らしているでしょうがアアアアアアアア！」

宗太「見ているだけで吐き気するわアアアアアアアア！！！」

額に血管を浮かべてツツコみだして怒鳴るリンフォース。

ティアナ「あんた達、いくらなんでもおかしいでしょ！炭水化物と炭水化物を一緒にとるなんてありえないでしょ！」

新八「そうですね！体に悪いですよ！」

近藤「そう言うあんた達は何タツパーにつめこんでイクアウトしているんだああ！？」

神楽達の食べ方に呆れるティアナと新八に近藤はティアナにツツコみだす。

それはティアナと新八が無数のパフェをタツパーにつめこんでいるのである。

ティアナ「冷蔵庫に保存すればいつでも食べられるでしょ！」

新八「保存食はいつでも食べられますよ！」

銀時「そんな顔をすんな……ここまで腹ごしらえだ」

つとと言うが、銀時はお腹一杯で桂、なのは、フェイト、はやて、新八、エリザベス、月詠、ティアナ、キャロ、ヴィヴィオ、リンフオース、コンパ、アイエフは限界が来て倒れている。

宗太「って、もうダメダメモードじゃん！」

宗太がそう言うと、銀時は立ち上がる。

スバル「銀さん、ネプテューヌさん、いつでも良いですよ！」

神楽「カモーン、前菜の時間はおしまいだヨ」

エリオ「準備完了です！」

スバル、神楽、エリオは銀時達から少し離れた場所で立っている。

そして……

銀時「ネプテユウウウウウウウウヌ!!!」

女神組「はいイイイイイイイイ!!!」

パールハート達は大量のパフェを銀時の左手に持っている大きな皿に移し変え、そして銀時がスバル達に投げる。

銀時「たらふく食いやがれエエエエ！」

そして投げられたケーキはスバル、神楽、エリオの口に入り込む。

近藤「なんじゃこりゃあああああああ!? 4人は多くのケーキを1つの大皿に乗せ、1人がそれを絶妙のコントロール果断な

く少女達の口の中に放り込んでいく！つうかスゲエよ！ある意味スゲエコンビネーションじゃん！メツチャとんでもねえ速さだよ！」

近藤がそう解説すると、それを聞いたかのように力士達が負けじと食べるスピードを速める。

両陣営一步も引けをとらないせめぎ合いになった！

近藤「特に凄いのが万事屋達だ！夜兔族であるチャイナの胃袋はとんでもなく化け物並みで空腹が大きい！それに負けじとあの青髪の少女と赤紙の少年もチャイナに引けをとらない食欲をしている！力士を軽々しく超えている……ってああ……！」

今度は、神楽とエリオが白米を食べながらケーキを食べているのと、スバルはアイスを食べながらケーキを食べている。

近藤「何やっているんだア！？ケーキと一緒にご飯とアイスを食べるのはおかしいだろ！」

大食い組「欧米流なんてクソくらえじゃ（ですう）！！！！！」

近藤のツッコみに3人は良い返す。

しかしなんやかんやで力士は限界に来て次々と倒れていく。

このままではヤバイと知った蓮香は最終手段としてしょうが汁入りの水鉄砲を2つ出した。

蓮香「そうはさせないわよ！」

そして2つの水鉄砲を同時に3発放ち、絶妙なコントロールでスバル、神楽、エリオの両目に的中させる。

スバル「うあああああああ！」

神楽「眼が・・・眼がアアアア！」
エリオ「眼にタレがアアアア！」

銀時「スバルウ、神楽ア、エリオオ！」
ブラックハート「みんな大丈夫!?」
ホワイトハート「・・・あいつら...」

銀時とブラックハートは思わず倒れている3人に駆けつける。

スカリエッティ「おおーっと、眼にタレがいったアー!!これは痛い!!」

スカリエッティが白熱して解説した。

銀時「ちい!このままじゃ時間切れで敗北してしまう!!どう何すれば・・・ってネプテューヌ、何やってんの?」

どうするか焦る銀時は、携帯をいじっているパープルハートに聞いてみる。

パープルハート「フツ、頼もしい援軍よ」

パープルハートは勝ち誇った顔で言った。

????「ここが会場か?」

????「うわ!人がいっぱいだ!」

????「面白そうなところじゃない」

????「人が多いな...」

「????」「わゝ、ネプテューヌ姉ちゃんだゝ」
「????」「ここにきていいのかなゝ?、俺達」
「????」「来るしかないでしょ?」

イベント会場に聞き覚えのある声が聞こえた。そこにいたのはなんとリトルバスターズ、戦線メンバーズ、リック、ジェニファー、哲志達、サチコ達だった。ちなみに哲志達とサチコ達は実体化できる薬のおかげで触ることができる。
無論食べることもできる。

銀時「お、お前ら!」

恭介「フツ、俺達に内緒で楽しむだなんて水臭いぞ」

鈴「よく分からんがこれ食べ放題なのか?」

ユイ「おお パフェがいっぱいあるじゃないですか!」

サチコ「食べ物いっぱい!」

リック「あと来たのは俺達だけじゃないぜ?」

そして会場にまたある人達が来た。

ハルヒ「こんな面白いイベントを見逃すハルヒ様じゃないわ!」

兼一「なんだかよく分かりませんが、一応参加してもいいんですよ?」

新島「パフェ大食い大会か。ニッヒッヒッヒ」

ララ「パフェがいっぱいだゝ」

マリオ「食い放題だぜ」

士朗「失礼ながら、我々も参加しよう」

アリサ「なのはがお世話になった店が潰されてたまるもんですか」
「私達も参加するよ、なのはちゃん!」

さらにハルヒ等SOS団、梁山泊チーム、新白連合、高町家、アリ

そして……

ピィ〜〜〜

ルーテシア「終了〜〜」

ルーテシアが終了合図をすると、スカリエッティが皿の数の発表をする。

スカリエッティ「結果を発表します。『レバイアタン』は700皿。そして『ワグナリア』は1000皿！」

近藤「よってこの勝負！『ワグナリア』の勝利い〜〜〜！」

近藤の勝利宣言に誰もが騒ぎ出す。

ワグナリアメンバー「いやったー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ワグナリアメンバーは喜びに飛び上がった。

こうして、ワグナリアは勝利した。

（余談）

宗太「ところでネプテューヌさんはどうして携帯で呼んだんですか？て言うかあの人たちのメアド知っているんですか？」
パールハート「後ろの情報提供者に聞きなさい」

パープルハートは後ろを指差すと、相馬が携帯を持ってVサインをしていた。

宗太（相馬さん、もう犯罪決定ですよ…）

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「おーし、じゃあ特別アシスタントを紹介するぞく」

マリオ「よう このマリオ様がアシストするぜ」

銀八「そんじゃいくぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『マリオ』
まあ…色々と修羅場を越えてるからな…師匠……」

今はない師に思いを果ててるよ…

ルイージ「今回はわりと普通だったね」

スネーク「まあ…ちょっとした家庭と友情を見たな…」

フォックス「と言うか…最近コンパやアイエフの出番が少ないな…」

ルイージ「それでベールさん達に質問だけど…『何で女神姿でアルバイトするの？普通に行けると思っただけど？』」

スネーク「コンパやアイエフに質問だ…『最近、何してる…』」

フォックス「作者の真王に質問『前黒神にリクエストされた4つはどう言う風に書いて行くんだ？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます

マリオ「最近、あちら側の珍しい食べ物がないな…」

ルイージ「止めてよね兄さん、見てるこっちが辛くなるから…」

…なんでもネプテューヌだけじゃ不公平だから女神姿にしたって言うてたぞ」

コンパ「私は六課で医学の自習をしました」

アイエフ「私はミッドチルダを回っていたわ」

真王「最後なのですが、1はまあ、それなりとして2はこの後が目に見えているので立てません。3の場合はベールは桂に好意を寄せ、

ノワールは桂を気にしており、ブランもノワールと同じく。そして4はネプテューヌとコンパとベール(?)がボケ役でそれ以外が突っ込みということになっています」

銀八「そんじゃ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

マリオ「んじゃ次はペンネーム『sibugaki』さんからだ。

『お、いてて・・・ったく、折角の一張羅が焦げちまったじゃねえか！

んまあそんな事より今回も質問行きますか

「質問しまあす。その内きつとりリカルメンバーとネプテューヌメンバーが銀時を取り合って戦った際どっちが勝ちますか？まあ僕はリリカルメンバーが負けると思ってますが(ニヤニヤ)」「…」

真王「ハイ、その通り。リリカルメンバーは負けます」

銀八「即答かよっ!？」

マリオ「…んじゃ『sibugaki』。廊下に立て。次はペンネーム『レイガン』だ。『今回は銀時達が出ていませんでしたが、ネプテューヌメンバーメインの話ですから、いなくても大丈夫ですね。今頃なんです、スプラッターハウスを知っているのはビックリしました、そしてここに出てきたリックはスプラッターハウスシリーズのリックだったことも驚きました。

そういえばジェニファーもスプラッターハウスの時、一度モンスター(?)にされたから、モンスターにならなくて大丈夫だったんですね。

質問です。

ネプチューヌメンバー達に質問です。

自分を銀魂メンバーで例えると誰になりますか？

銀魂メンバーに質問です。

理想の自分は何ですか？』」

ネプテューヌ「私は銀さんかな？」

ノワール「土方ね」

ブラン「・・・定春」

ベール「桂さんですわ」

コンパ「新八さんのお姉さんでしょうか？」

アイエフ「九兵衛さんね」

銀時「かめはめ波を撃てること！」

新八「お通ちゃんに会いを注ぐこと！」

神楽「食べ物をたくさん食べること！」

桂「そばをたくさん食べること！」

エリザベス『定春より目立つこと！』』

月詠「黄金のキセルを手に入れることじゃ！」

銀八「理想っつーか願望じゃね？『レイガン』さん。理想の自分を見つけてください」

真王「ありがとうございます。特製のマッシュユバークをプレゼントだ」

マリオ「お！サンキューな。それじゃ」

真王「じゃあなー」

第三十一訓：パフェの食べすぎにご用心（後書き）

真王「アンケートはまだ続きます。次回はワグナリアとの別れが…」

杏子「次回『心ある料理は一番うまい』テイクオフ」

第三十二訓：心ある料理は一番おいしい（前書き）

真王「一応言っておくが、俺シリアス物はあまり好きじゃないんだよ」

銀時「そりゃ銀魂はギャグものが多いからな」

ネプテューヌ「銀魂はシリアス3割ギャグ7割でできているからね」

真王「…ハア…頑張るしかないか」

銀時「そうだ。んじゃ最後のワグナリア編始めっぞ」

ネプテューヌ「それではスタート」

第三十二訓：心ある料理は一番おいしい

大会後、スカリエツティは銀時と2人で話があると言い出し、話をすることにした。

スカリエツティ「坂田銀時君・・・私が君に話したいこと分かるであらう」

銀時「・・・高杉の事か？」

銀時は真剣な表情でかつての同士の事を言い出す。

スカリエツティの話の内容はまさにその通りであった。

スカリエツティ「察しが良いね・・・君も知っていると思うが・・・ガジェットは私が生み出した機械兵器だが・・・実はその事である覚えのない罪を着せられちゃってね。ホテル・アグスタにガジェットが襲ってきたのを知っているだろうか？」

銀時「ああ・・・」

スカリエツティ「実はそのガジェットは、私ではなく鬼兵隊が作り上げた物だ」

銀時「な!？」

衝撃の余りに驚きだす銀時。

スカリエツティが嘘を言っているのか、本当の事を言っているのかは知らない。

だが、特殊な武装を作りだす『鬼兵隊』ならあり得るであろうと銀時は考える。

スカリエツティ「あの時に襲ってきたガジェット達はまだ模造品のようだ。なぜなら我々の予想を超えた技術力で作られた『鬼兵隊』

のガジェットは私のガジェットよりも戦闘力を上回り、我等のアジトを襲ってきた」

銀時「高杉が……」

タダさえ恐ろしい兵器を作り出す鬼兵隊にガジェットの技術力を加わればとんでもない強さを誇るであろう。

スカリエッティ「その後、『鬼兵隊』の襲撃に襲われた私達は何とか返り討ちにしたが……相当なまでに酷い負けをおっってしまった。しかもわずか4機のガジェットに、私が作ったガジェット達は9割が破壊されてしまった。もし『鬼兵隊』があたのガジェットを何千機……いや何万機も作り上げられたら……ミットチルダだけじゃなく君の世界にも恐ろしい影響を齎すであろう」

まさか高杉がそこまでの技術を作り上げたとは思ってもよらなかった
銀時。

だが銀時もスカリエッティも『鬼兵隊』にはガジェットよりも恐ろしい兵器を開発しているのを知っている。
それは……。

銀時「確かにガジェットの大群は厄介だな……けどやつ等の恐ろしさはあんなポンコツなんかじゃねえ……」
スカリエッティ「『紅桜』か……あれには私も驚かされた。……だが、妖刀の名に恥じない狂的な力厄介だ」

スカリエッティはそう言いながらポケットからある者を出す。
そしてそれは銀色の剣の形をしたオブジェだった

スカリエッティ「『紅桜』の恐ろしさはある人物から聞いた」
銀時「ある人物だと？」

スカリエツティ「その人物に協力を求めて君様のデバイスを完成させた。・・・これを受け取ると良い」

銀時は剣のオブジェを受け取ると不思議そうに見る。

銀時「何だそれは？」

スカリエツティ「・・・これこそ対『紅桜』様に作られた君だけのデバイス。『銀』の魔道剣・・・通常『シルバーブレイド』だ」

銀時「『シルバーブレイド』・・・なんかスツゲーカッコ良くね？」

デバイス名に感心する銀時。

スカリエツティ「では、私は近藤君と一緒にそろそろ元の世界に戻るとしよう。・・・所でエリオ・モンディアルは元気そうだね。その様子だと・・・フェイト・テストロツサも元気にいるだろう」
銀時「お前・・・何であの2人の事を・・・」

どうして2人の事をスカリエツティは言い出すのかを銀時は説明すると、スカリエツティは全ての事を言い出す。

自分がプロジェクトFのベースとなる、基礎論理を構築した人物である事を。

ある組織がスカリエツティの研究に興味を持ってプロジェクトFを任せられたのである。

それにはさすがの銀時も驚きを隠せなかった。

まさかスカリエツティが2人の生みの親とは思っても知らずに・・・しかしスカリエツティは強く後悔をしているようであった。

スカリエツティ「あの時の私はどうかしていたようだ。己の能力に自惚れてしまったのか悪い誘いを受けてプロジェクトFのベースを

作り上げてしまった。命を作つて弄ぶ事はかなり残酷さを感じる。
・だが、それでも私の罪は消えることはないであろう・・・私は
プロジェクトFのベースを真の目的を知り、ガジェット達を生み出
して組織に反乱を起こし、残りのプロジェクトFのベースを奪い上
げた。どこかでアジトを作り上げて身を潜めさせてもらっている」

銀時「お前・・・」

スカリエッティ「とにかく、今の『鬼兵隊』は君が思っている以上
に恐ろしい軍勢になっている。必ずそのデバイスが役に立つから受
け取ってくれ。そしてフェイトとエリオが必ず君の力になるだろう。
ではこれで」

スカリエッティはそう言つて後ろを振り向いてこの場を去ろうとし
たら、その場で足を止めて言った。

スカリエッティ「ところで銀時君、彼女達は元気にしてるかね？真
つ先に突進しそうな白いベレー帽をかぶった彼女は」

銀時「…ゆりのことか？…元氣すぎて困るほどだけだな。てか何で
知つてんだ？」

スカリエッティ「彼女等は前に我々のアジトに泊まつてたからね」

銀時「…そうかい、じゃあな」

銀時は手を振つて、その場を去つた。

イベント会場

銀時はネプテューヌ達のいるイベント会場があつたところへ戻つた。

パープルハート「あら銀時」

銀時「よう、元気そうだな」

銀達が声をかける。宗太達は銀時に駆け寄ってお礼を言う。

宗太「皆さん、本当にありがとうございました」

ぽぶら「これでワグナリアは守られたよ」

まひる「お、お礼にお殴りしてもよろしいですか？」

銀時・新八・宗太・アイエフ・なのは・フェイト

「宜しくないっ!!」

まひる「ごめんなさい……」

銀時「ま、それはともかく、あれはどうなんだ？」

銀時は、ショックを受けて座り込んでる蓮香と、隣で立っている杏子を指差す。

パープルハート「あの人たちはあの人たちなりの話にしときなさい」

銀時「……そうかい」

銀時は2人を眺める。

蓮香「……どうして、どうして負けてしまったの？」

杏子「……」

蓮香「私の『レバイアタン』はどんな料理店をも凌駕するのに、あなたの店よりも上なのに、なのに、どうして!」

蓮香は顔を押しさえ、悲痛の言葉を杏子にぶつけている。

杏子「……蓮香、一応お前のところのパフェ食ってみたんだがうまくいったぞ？」

蓮香「……………」

杏子「けどな、……あゝ、あれなんて言うんだっけ？おいしいのに何か足りないんだよね？」

杏子の一言に蓮香は杏子に詰め寄る。

蓮香「足りない？何が足りないって言うのよ！！あの料理達にはすべて私の、私達『レバイアタン』のためだけのものなのよ！！調理も道具も完ぺきよ！！それなのに何が足りないのよ！！」

蓮香は怒り混ざった声で杏子に言う。そして杏子が取った行動は、

ドゴッ！

蓮香を殴った。しかもグーで。これにはワグナリアメンバーも驚いた。

杏子「よゝし、これで落ち着いたか？」

新八「あんた何やってんのオオオオオ！！！？って言うかグーで殴って落ち着く奴がいるかアアアアア！！！！」

新八は怒鳴り、宗太は同意する。

杏子「お前の話を聞いて少しわかったことがあった。お前料理を自分らだけのためにしか見てないだろ」

杏子の言葉に蓮香は目を見開く。

杏子「いいかよく聞け。確かにお前の料理はうまいし客も大喜びだ。そりゃ珍しいものやおいしいものには目がないことぐらいわかる。だが客は同じものを食べれば飽きて別のを頼むことがあるし、もしくはもう店に来なくなる」

蓮香「だ、だからなんだってんのよ!!」

パールハート「あなたの料理は心がないことよ」

疑問を答えたのはパールハートだった。

パールハート「あなたは、ただ勝ちたいという信念を抱いて料理を作っていた。そう、ただひたすら上を目指し続けて、数年もすれば世界一になれるかもしれない。けど時に飽きが来て店はつぶれる。なぜならあなたは客の気持ちより自分しか見てないから!」

蓮香「!?!」

パールハート「己の気持ちを先に立たせ、他人のことは無視して作った料理なんて飽きるわ。料理というものは、相手に心を与えるものなのだから」

蓮香「.....」

蓮香はパールハートの言葉に心を撃たれた。

自分は昔、人のために料理を作りたかった。母や他の人たちにもおいしいという気持ちを料理で伝えたかった。それがどうだこの様は。勝利に執着して、勝負を挑んだらあっさり負けてしまった。もう私に残されたものなんて何も..。

パールハート「何も無いなら作ればいいんじゃない?あなたの目指す物に」

パープルハートは蓮香に手を差し伸べた。その時のパープルハートはまるで女神様のような顔だった。・・・実際女神ですが、蓮香はその手を取ろうとすると、

??? 「...無様に落ちたもんだな、蓮香」
蓮香「っ！！？」

男の声に蓮香はビクツ、と震わせた。その男は、グラスンをかけていた。

蓮香「お、お父様...」
全員「え？」

宗太「え！？あの人が初代レバИАタンのオーナー・宇野宮健八さん！？」

誰もが驚いた。その男は、初代レバИАタンのオーナー・宇野宮健八なのだ。健八は蓮香に近づいて、

パシッ

蓮香「あうっ！」
全員「ツツツツ！！！！！！！！！！！！？」

蓮香を引っ叩いた。

健八「失望したよ蓮香。何時か君なら次期オーナーになれると期待していたのに、あるうことが無意味な挑戦でレバИАタンを廃店させるとは愚かなことを」

健八の一言に、杏子は苛立ち交じりに問い詰める。

杏子「おい、無意味という意味はどどういうことだ？」

健八「『ワグナリア』の白藤杏子か。蓮香から聞いている。いいかよく聴け、我がレバイアタンは常に世界一でなければならぬ。世界中の職人たちで作りあげるこのレバイアタンで、レストラン界の王者になるんだ。だが、一つのくだらないことでこの私に泥を塗りおつて。もう私は役立たずな者には用はない」

無意味、くだらない、役立たず、その言葉に全員は怒りを覚える。

蓮香が杏子に挑戦したことは事実だが、その戦いを下らないと言いつ張った健八を殴りたくなつた。杏子が前へ出て殴ろうかと思つたら、

パープルハート「歯あ、食い縛れええつ!!!」

バキツ!!!!

健八「ごはっ！」

全員「.....え!？」

何とパープルハートが健八の顔面をグーで殴つた。これに全員が驚く。

パープルハート「無意味?くだらない?...そんなのあなたが...蓮香の頑張りを見てないだけよ」

パープルハートが溢れんばかりの怒りと怒気を言う。蓮香は啞然とする。

パープルハート「蓮香は、世界一になることよりも、ただ作った料

理で人々を幸せにしてやりたかった。人々の笑顔を見たかった。そしてただ杏子と楽しく勝負したかった」

蓮香はパープルハートの話を聞いて、目を見開く。

杏子は納得したような顔をした。

パープルハート「その蓮香の気持ちを踏みにじる父親は、ただの下郎よっ！！！！」

倒れた健八を指差して、怒気を言い放つ。しかし健八はすでに気を失っているが。

パープルハート「……………」

杏子「よし、よく言った。お前がぶっ飛ばしたせいかこっちもすつきりしたぞ。礼に八千代がパフェ食わせてやる」

パープルハート「……………」

杏子はパープルハートの肩を叩いてお礼を言い、パープルハートはお礼をもらう。

蓮香「……………」

パープルハート「違うわ」

蓮香「え？」

パープルハート「…親子でありながら、自分のことしか見ていない奴が気に入らないだけよ」

パープルハートの手は、ギリギリと音を立てる。

杏子「ところでそっ、何やってんだ？」

杏子はエプロンをしていて頭にバンダナをかけていて、本格的にケーキを作っている銀時に言った。

ちなみに彼が作っているケーキは『銀魂特製』シヨコラ・ランド』
っというチョコをメインとしたケーキである。

スポンジはココアパウダーをタップリ入れており、中にはトロリととろけるシヨコラソースがタップリ。

しかも外側もチョコレイトクリームタップリを付けて最後はケーキの外側をい半分にスライスした苺を付けて、そして上にはアーモンドを駆けて、キャラメルソースで絵を描くかのように乗せて、しかもバナナを一口さいずにスライスした物を2つのせ、そして最後に木の形をしたチョコを4つ乗せて家の形をしたチョコを乗せて、ど真ん中に銀時の使用している木刀の形をしたチョコレイトを突き刺せば完成。

銀時「いや、一日甘い物を食べないと落ち着かないもんで」

そう言つて銀時は1人用にスライスせずにそのままフォークに刺して食べ始める。

興味を持った宗太達が近づく。

宗太「なんだかおいしそうですね。一口いいですか？」

銀時「ん？食つてみるか？」

銀時は許可を出し、宗太、ぽぶら、まひる、葵、相馬、佐藤、八千代、杏子はフォークで銀時の『銀魂特製』シヨコラ・ランド』を一口頂く。

その味の評価は・・・

宗太「う、うまい！」

ぽぶら「おいしい！」

まひる「こんなにおいしいの始めて…」

葵「しょ、将来パティシエになれるプロです！」

相馬「いや、おいしいね〜」

佐藤「メニユーに追加しておくか？」

八千代「わ、私のパフェよりおいしい…」

杏子「む！、これはいけるぜ！」

かなりの評価の良さであった。

実際に銀時は新八ヘタレメガネと最初にあつた時にケーキを作っていたり、フエイ

ト達に手料理を作った事がある。

つまり銀時はどんな料理でも作るうと思えば作れる。

それは、『万事屋やめてケーキ職人になれよ』っとツッコみたくなるぐらいである。

新八「誰だ今僕をヘタレメガネって言った奴は！！」

新八は怒鳴るが全員スルー。

すると蓮香が立ち上がる。

蓮香「・・・あなたのおかげで本当の自分を見つけられた気がするわ。ありがとう」

パープルハート「礼を言われることはしてないわよ」

パープルハートはウインクで答える。

蓮香「・・・それでは私はこれで。あ、お父様を病院に連れて行かないきゃ」

パープルハート「・・・いいの？」

蓮香は部下に指示を出して、健八を運ばせる。蓮香は言う。

蓮香「それでも、私は宇野宮健八の娘・宇野宮蓮香だから
パープルハート」・・・そう」

パープルハートは笑みをこぼす。

蓮香「今度から、勝つことにこだわらず、お客様のために料理を作るわ。そして、『ニュー・レバイアタン』の結成を宣言するわ！」
パープルハート「フツ、そのいきよ。ネーミングはいいとして」
蓮香「それではごめん遊ばせ！！オッソッソッソッソッソッソッ！」

蓮香は高笑いしながらリムジンに乗ってどこかへ去った。

杏子「・・・昔っから変わってないなあいつ・・・」

パープルハート「忘れてた本人がそれを言う？」

杏子「ほっとけ」

杏子はケーキを食べながら蓮香のことを言い、パープルハートは友達を忘れてた杏子に突っ込む。

杏子「ま、私の店を守った礼だ。自分家に帰っていいぞ？」

パープルハート「ありがとう」

パープルハートはお礼を言った。

葵「銀時さん！是非とも山田の父親になってください！」

銀時「なんでオメーの父親になるんだよ！」

ぽぶら「でもどうせならお義父さんの方が・・・」

宗太「せんぱいーーーーーい！！それはゆるしませーーーーーん！！！！」

フエイト「お、お義父さん？・・・それともダーリン？、あなた？
…は、恥ずかしい…／＼／＼」
なのは「にやはは、フエイトちゃん呼びやすい方がいいよ」
葵「銀時さん！私は銀時さんに娘に！」

なのは、フエイト、ティアナ、スバル、パープルハート
「させるかー！ー！ー！ー！ー！！！！」

銀時「テメエらしい加減にしろオオオオオオオ！！！！（怒）」
何だがグダグダな展開だが、銀時達はミッドチルダへ帰りました。

〈余談〉

北海道の病院

蓮香「お父様…」

蓮香は病室で寝ている健八のお見舞いに来ていた。ちなみに健八は目を覚ました。

健八「…蓮香」

蓮香「…はい」

健八「何者かは知らんが、殴られた時私の中の忘れられていたものが目を覚ましたみたいだ」

蓮香「！？それじゃあ」

健八「ああ、何時だったであろうな。勝つことに固執し、世界一になるだなんて」

蓮香「……………」

健八「その者のおかげで私は一からやり直そうと思っている。手伝ってくれるか？蓮香」

蓮香「……………もちろんですわ！！」

蓮香は涙を流して、父親に抱きついた。

【ワグナリア編：END】

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「『ワグナリア編』終了！そんなじゃアシスタントの紹介だ」

杏子「ワグナリア店長の白藤杏子だ」

銀八「おし行くぞ。ペンネーム『sibugaki』さん。『あてて・・・天の助ガードが効かなかったか・・・』
暫く質問は控えよう」と

首領パッチ

「質問するわよ！貴方達の中で真のヒロインは誰なの？教えなさい！あ、因みに言うけど此処、リリカルポーボボのヒロインは勿論・・・わ・た・し・よん
まあ、田舎娘達の貧相な感覚じゃ私の美貌は分からないでしょうけどね・・・オッホッホッホ」

・・・し〜らねっと『え〜と、ヒロインと言えば』

女性陣「私だよ（うちや）（あたしだ）！！」

真王「ヒロインはネプテューヌとなのはとフェイトですが？なにか？」

ネプテューヌ・なのは・フェイト「やったー！ー！ー！！！」

はやて「ちょい待ちい！！何でうちがヒロインやないねん！！！」

シグナム「納得がいかん！！私がヒロインだ！」

アルフ「あたしがヒロインだよ！！！」

ティアナ「私もヒロイン………かなあ？」

スバル「何で疑問形？」

リインフォース「私がヒロインだ！！！」

シグナム「いや私がヒロインだ！」

アルフ「あたしだよ！」

真王「さて、シグナム達を村人Aにしてやるか……」

シグナム・アルフ・はやて・リインフォース・スバル・ティアナ
「すみません！！それだけは勘弁してください！！！」

6人は真王に謝った。

杏子「ちなみにこっちのヒロインは種島と伊波だと思っが。まあいい、『sibugaki』、バケツ持って廊下に立て」

銀八「次はペンネーム『レイガン』さんからの質問だ。『質問です。』

ンネーム『鳴神ソラ』だ。『マリオ「美味い!!」』

フォックス「また出たよ;」

スネーク「しかもアシスタントでも出たよこいつ!!」

ルイーダ「いや、ネプテューヌにかけられた時は驚いたよ;」

ネス「まあ、無事に終わってめでたしめでたしだね;」

リュカ「と言うかコンパさんやアイエフさん…出たけどほとんどセリフと言うセリフがなかったな;」

フォックス「まあ…きつと次章とかで沢山喋れるだろう;」

マリオ「真王に質問『スバル達って何時位にパワーアップ予定なんだ?』」

ルイーダ「皆に質問『それぞれコンビネーション技を出すなら誰と組んでどんな奴にする?』」

スネーク「ネプテューヌに質問『マリオはどう言う風に食べてた?』後ルイーダも『』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます 『』

真王「スバルたちですか?…‥‥‥物語の進み次第でパワーアップします」

銀八「何だその他人事みたいなのは?…まいつか、次」

銀時「ネプテューヌと組んでアバババンを倒したあれでやるぜ」

新八「ぼ、僕はちよつと無理です；」

神楽「ブランと組んで巨大な衝撃波を出すネ！」

桂「エリザベスと組んで爆弾をバラまかせる！」

エリザベス『上と同じく』

月詠「わっちには連携は無理じゃ」

ネプテューヌ「銀さんと組んで技は『銀戦乱舞』って名前にするよ！」

ノワール「私はフェイトさんと組んで切り刻んでやるわね」

ブラン「ヴィータと敵をいつきに潰す」

ベール「特に相手はいませんねえ……」

コンパ「シャマルさんと回復技を出そうと思つです！」

アイエフ「私はいないわねえ……」

ネプテューヌ「マリオさんとルイーダさん？マリオさんはものすいスピードで食べててルイーダさんは普通に食べてたよ？」

銀八「そんじゃまあ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

杏子「……やっぱりパフエが一番だわ」

第三十二訓：心ある料理は一番おいしい（後書き）

真王「『ワグナリア編』終了！ミッドチルダに戻った銀時達はある依頼を受けることになった」

杏子「次回『河童寿司は魚以外の寿司があるの知ってた？』テイクオフ」

真王「アンケートはまだ続くよ」

第三十三訓：カツパ寿司は魚以外の寿司があるの知ってた？（前書き）

真王「舞台は寿司屋！ここで銀時達は何を作る？」

ネプテューヌ「『リリカル銀魂』始まるよ」

第三十三訓：カツパ寿司は魚以外の寿司があるの知ってた？

ミッドチルダに帰って5日後、銀時達はある依頼を受けた。
その依頼人は寿司職人であるそうである。

そして場所はミッドチルダのとある回転寿司。

そこに銀時、フェイト、なのは、桂、スバル、神楽、新八、月詠、ティアナ、はやて、エリザベス、エリオ、リインフォース、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフ、ヴィヴィオ、サチコ（実体化状態）が客席に座っていた。

そして店長はサングラスを賭けていて髪が白髪である。

その人物こそが、今回の依頼人の関口勝男せきぐちかつおである。

勝男「イヤー、わざわざ来てくれてありがたいねえ。依頼は言うまでも無くつい最近客が少なくなってる・・・何が原因なのか分からなくて・・・」

銀時「っで、今回は客を寄せ集めてきてこの店を行列にするほど人気店にして欲しいって訳か？・・・まあ良いぜ。とりあえずまずはアンタの寿司がどんなのかを見せてもらおうじゃねえか」

フェイト「確かに、店は綺麗だしちゃんとしっかりとしている。っとなると問題は寿司か・・・」

銀時とフェイトは問題は寿司にあると考える。

それには桂達も同感である。

桂「同感だな。店長殿、すまぬがお主の寿司にどのような物が見せてもらおう」

スバル「確かに見た眼が良くても味に問題ある料理や美味しくても

見た眼が悪すぎる料理もありますしね」

はやて「そやな。ウチはこう見えても味覚には結構な自信があるんやで」

ティアナ「それに、回転すしは時間が経つと美味しくなくなるのもあるし、人気店にするには相当に難しいと思うわ」

エリザベス「味と見た目にバランスあり！」

桂、スバル、はやて、ティアナ、エリザベスも銀時とフェイトの意見に賛成する。

コンパ「それに、久し振りの寿司です。ジャンジャンと食べられるチャンスです」

アイエフ「コンパ、少しはしたないわよ」

コンパに注意するアイエフ。

神楽は大喜びである。

神楽「きゃほー！久し振りの寿司ある！ジャンジャン食いまくるね！エリオも遠慮なく食うと良いね！」

エリオ「はい」

ネプテューヌ「早く寿司はこないの？」

ヴィヴィオ・サチコ「の？」

月詠「主ら・・・依頼である事を完全に忘れておるんな」

ノワール「ネプテューヌ、あんた食うことが目的なの？」

ワクワクして楽しむ神楽とエリオと、足をパタパタさせているネプテューヌとヴィヴィオとサチコに月詠とノワールがツッコみだす。

そして回転寿司が回りこんできた。

スバル「あ……カツパ寿司」
ティアナ「ふーん、まずは前菜って感じだね？」

スバルとティアナはそう言うと、はやてとネプテューヌはカツパ寿司を取って食べ始める。

はやて「うーん、普通って感じやな？」

ネプテューヌ「きつすぎる訳でもなく、凄すぎる訳でもない……どっちかと言うと美味くも無くて不味くもないって奴かな？」

味の感想を言い出す2人に月詠とリインフォースとベールはジーンと見つめる。

リインフォース「形に問題はありません。むしろ綺麗に切られて食べやすくしています」

月詠「確かに、形だけはちゃんとしているようじゃ」
ベール「プロレベルですわね」

見た目は合格点である。

ノワール「まあカツパ寿司は大丈夫として、次はあ……」

良く見ると、さつきからカツパ寿司しか回ってこない。

いくら待っても現れるのはカツパカツパカツパカツパ……
完全にカツパ寿司だけしかない。

全員「沙悟浄かアアアアアア俺（私）（僕）達はアア
！？（激怒）」

エリザベス「なめてんのか、ごるアアア……！！！」

調理場

そこには勝男と店員の衣装を着ている銀時、フェイト、なのは、スバル、神楽、新八、ティアナ、はやて、エリザベス、エリオ、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、ヴィヴィオ、サチコがいた。しかし桂だけは何やらレストランの店員のような衣装を着ている。アイエフとコンパは何故か店員役をしていた。

ちなみに月詠は煙管を加えていなかった。

さすがに調理場で煙はヤバイと確信したのである。

勝男「まあ、回転寿司に誰もそこまで完成度もとめてねーし、上にネタが乗ってて形さえ取り繕ってりゃなんとかごまかせるしよ」
はやて「確かにそうやな」

新八「ここは直接客の前で握る訳じゃないからごまかせられるし・
・素人の僕達も何とかなるんじゃないでしょうか？」

勝男の言う事にはやてと新八も感心する。

フェイト「勝男さん、すみませんけど最低限だけでもシャリの握り方教えてください」
リンフォース「カップパ寿司しか握れなくても、形だけは親方さんを見て知っていそうですし」
ノワール「とりあえず手本を見せてもらえるかしら？」

フェイトとリンフォースとノワールは寿司の握り方を教えてもらう事を要求する。

勝男「よっしゃ！見よう見マネだが・・・見ててくれ！」

どうしてマグロがきゅうりに変わったのか理解できないノワール。
ブランはこう感じた。

ブラン「もしかして先祖が河童を殺して呪われてるんじゃない？」

そう言い出すと誰もがそう感じる。

それとは別に勝男のやり方を見てネプテューヌ、なのはは寿司の握り方を覚える。

ネプテューヌ「でも雰囲気伝わったよ。やっぱり寿司と言えば魚類系が多かったりするよね？」

なのは「作るの初めてだけどおいしければそれでもないよ」

そう言つて2人はシャリを握り始める。

ネプテューヌ・なのは「空気を含むように握り、わさびを付ける。

ネタを乗せて一握り」

わさびを付けて、マグロのネタを乗せた後に一握りし、そして完成したのは……………ネタがケーキになっていた。

ネプテューヌ・なのは「完成だよ」

新八「だからなんでだよオオオオオオオオ！！何でマグロからケーキに変わつてんだよ！！」

ティアナ「なんでマグロからケーキに変わつてるの！？カットの間にマジックでもやったの！？」

さすがにありえないことに突っ込むが、ネプテューヌとなのはは言い切る。

ネプテューヌ・なのは「たまには自分のオリジナルを凝って作ってみただよ」

新八「凝り過ぎなんだよ！！帰れ！！今すぐ病院へ行ってください頭のっ！！」

新八は頭に血管をつかばせて怒鳴る。

銀時「テメエら、素人のくせに色気つきすぎなんだよ」

桂「我等は不味くても形さえ繕えば良い」

そう言つて銀時と桂はシャリを握つてわさびを付けてネタを載せて一握りすると・・・何故かパフェとかけそばになった。

銀時「ほら」

新八「形を守れエエエエエエエエ！！！！」

さらに新八がツッコみだす。

新八「これほとんど寿司じゃねえよ！銀さんも桂さんも完全にやる気ないでしょ！」

ティアナ「完全にサイドメニューじゃない！」

あり得ないばかりにツッコむ新八とティアナに銀時と桂は言い出す。

銀時「文句を言う前にまず食べてみてください」

桂「同じことを言えるでしょうか？」

新八「食べねえよ！」

ティアナ「何パティシエ試験みたいなカンジかもしているのよ！」

銀時と桂のパティシエボケに呆れてツッコむ新八とティアナ。

なのは「じゃあ、桂さんのかけそばと銀さんのパフェはサイドメニューに回すとしようか」

フェイト「肝心な寿司は如何するの!？」

なのはがそう言いだすとフェイトがツツコみだす。

そして神楽とエリオが何かを作っているかのようにしている。

月詠「神楽、エリオ・・・何をしているのじゃ？」

月詠が聞き出すと、神楽とエリオは振り向く。

神楽「ん？エリオと一緒に寿司を作っているネ」

エリオ「どうでしょうか？」

2人が作ったのは、まさに立派な寿司であった。

月詠「おおー、こいつは見事な寿司じゃ！」

なのは「すごいよ2人も!どう見ても立派な寿司だよ!」

ベール「見た目も良いし凄くおいしそうですよ!」

月詠、なのは、ベールは感心するかのようにはい出す。

その寿司は通常の大きさではなく・・・調理場の場を大きく埋め尽くしそうなカンジにある寿司である。

はやて「これなら行けそうやないか」

新八・ティアナ「いや、デカ過ぎじゃアアアアアアア!!!!!」

額に血管を浮かべて怒鳴りだしてツツコむ新八とティアナ。

新八「ちよつと待てエエエエエエエ！……サチコちゃんな
んですかそれっ！?!？」

新八は芋虫(?)を指差して言う。

サチコ「私の自信作だよ 食べる?」

サチコは芋虫(?)を新八にさし出す。その芋虫(?)は生きてい
るように動いている。

ティアナ「つてこれ動いているじゃないの!!その辺の芋虫拾つて
茶色く塗つたd「いただきま〜す」

全員「つてあああああああああああああああああああ
!?!?!」

ティアナが突っ込んでいる最中、ネプテューヌが芋虫を手にとって
食べる。銀時達は思わず叫び、そしてネプテューヌは、

ネプテューヌ「あ、これチョコ味だねサチコちゃん」

サチコ「えへへ〜」

おいしそうに食べてました。

新八「……え?何で平気なの?」

ネプテューヌ「何で?つておいしいよ?ホラ」

ブラン「モグツ……チョコ味がする」

なのは「ちよつと貸して……モグツ……あ、おいしい」

新八・ティアナ「マジで!?!」

まさかあの芋虫(?)がおいしいだなんて思わなかった2人。

その後も、フェイト、ティアナ、リンフォースもやったが、何故か不器用なのか形になれずに完成する時間もかなりかかる。そんなとき、コンパとアイエフが入ってきた。

コンパ「大トロ、エビ、鯛、そして蛸が入ったです！」
アイエフ「こっちはサーモンとイカと鮭が入ったわ」

そう聞くと勝男は慌て始める。

勝男「どうすんだよ！まだカップ巻きにケーキとチョコパフェ、そしてかけそばしか出来てねえよ！」

新八「あのサイドメニューも出す気か!？」

勝男の言う事にツッコむ新八。
すると……

ノワール「今度は私がやって良いかしら？」

ベール「私もやりますわ」

エリザベス「自分もやります」

月詠「まあ、仕方がないか」

はやて「こんなときこそウチの出番や！」

ノワール、ベール、エリザベス、月詠、はやてが手を上げる。

はやては料理を作れるからわかるが、フェイト達は最初はノワール、ベール、エリザベス、月詠の4人が寿司を作れるのか疑っている。しかし、銀時と桂はエリザベスならできそうな気がする。

戦闘力だけじゃなく器用であるため、もしかすれば寿司も作れるかも知れないと考える。

銀時「まあ、5人とも作ってみな」

銀時がそう言うと、5人は台所に立つ。

すると、……ノワールは眼にも映らない神速の速さで一瞬にマ
グロを作り出し、エリザベスは口から人間の両手を出し、寿司を握
ってエビを完成させ、月詠とはやてとベールは2人と違って平凡的
でそんなに早くないが、丁寧に握りだし……それぞれ鯛と蛸を作
る。

ノワール「完成よ」

ベール「完成しました」

エリザベス『出来ました』

月詠「一応……こんなカンジじゃ」

はやて「完成や」

フェイト、ティアナ、リインフォース、エリオ

「色々ちよつと待てエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

立派な寿司を完成させたノワール、ベール、エリザベス、月詠にフ
ェイト、ティアナ、リインフォース、エリオがツッコみだす。

ティアナ「ノワールさん、何でアナタがこんな立派な寿司を握りだ
すんですか!？」

フェイト「いくらネプテューヌの次に強いからってそれはないでし
よ!」

ティアナとフェイトはノワールのあり得ない器用さに言い出す。

ノワール「ちよつと料理界の達人におしえてもらって習得したのよ。
……以外にも慣れれば誰だって出来るわよ」

フェイト「屈辱的な事を言わないでよ！料理をまともに来ない人が聞くと涙が出てくるよ！」

フェイトは涙を流しながらそう言う。

どうやらまだ出来ていないようである。

そしてさらに驚くべき事を聞き出してエリオが言い出す。

エリオ「ってエリザベスさんの口から人の腕が出てきましたよ！」

そう、エリザベスが口から人間らしき両手が出てきたことに驚いているのである。

これにはフェイト達が黙っていられない。

フェイト「これ思いつきり人形を被った人じゃないですか！完全に動物じゃないよ！」

桂「人じゃないエリザベスだ」

フェイト「絶対人ですよ！よくよく考えてみればそんな生き物絶対にいませんって！時々見えてくるおっさんらしき足は幻覚だったのかと思いきや、やっぱり人じゃないですか！」

桂「それは見間違いだ！」

リンフォース「何でそこまで言えるんですか！」

フェイト、リンフォースは桂にエリザベスは実は人ではないかと疑いだす。

そして銀時と神楽は意外そうに月詠を見る。

銀時「お前、寿司とか握れたっけ？」

神楽「ツツキーもキャラ設定の崩壊アルか？」

月詠「おい・・・まさか主らはわっちが料理できないとでも思ったか？・・・まあわっちも最初は出来ぬ女じゃったが、日輪に料理の

作り方を教わって、それで多少はできるようになったんじゃが……
「
神楽「多少ってレベルじゃないアル」

確かに月詠の寿司もノワール、ベール、エリザベスと並べられるほどの出来の良さであった。

ネプテューヌ「ベールって料理できたっけ？」

ベール「昔は全然だめでしたけど料理の知識を学んで上手になりました」

ネプテューヌ「成程」。ブランは？」

ブラン「めんどくさい」

ブランはネプテューヌの問いを一蹴した。

銀時「まあ、見た目は良さそうだし……とりあえず出させてもらうぜ。オメエらもしっかり作ってるよ」

銀時はノワール、ベール、エリザベス、月詠、はやての5人にそう言つと、客席沿いに設置されたチェーンコンベアの上に5人の寿司を乗せる。

そして客室には何故か、赤い帽子と青いオーバーオールの子供男・マリオと、バンダナをつけた男・スネークが、ノワールの作ったマグロ寿司を取る。

そして1人で1つずつ取って、寿司を口に入れて食べる。

するとその味の感想は……

マリオ・スネーク「美味い!!!!!!」

2人をうならせた。

マリオ「何だここ新食感！今まで食べた事がない味だ！」

スネーク「ネタとシャリが絡み合うかのようにとろけて一心同体の如くの旨みを引き出し、力強い濃くさとあっさりとした味わい！何だこれは!？」

マリオ・スネーク「寿司の革命だア！」

予想以上の評判の良さであった。

さらにエリザベスのエビ寿司、月詠の鯛寿司、はやての蛸寿司も中々の評判であった。

客1「おい！俺にもそれをくれ！」

客2「自分も！」

客3「私も！」

客から予想以上の客からの注文にカウンターにいるコンパとアイエフは驚きだす。

コンパ「な……なんですかいきなり!？」

アイエフ「中の銀さん達は何かやったのかしら?」

「アアアア！」

結果は大成功だと思いきや……

桂「大変だ！余りの客足に材料がつかけているぞ！」
全員「何イ！？」

桂がそう言うと、勝男は壁を思いっきり殴って悔やむ。

勝男「チクシヨウ！一世一代の大チャンスなのに……俺は所詮、まるでダメなお寿司職人……マダオなのか！？」

銀時「行けよ」

勝男に銀時が声をかける。

銀時「アンタは何としても、材料をかき集めて来い。それまで俺達がこの場をもたせてみせる」

銀時がそう言うと、落ち込んでいたフェイト、ティアナ、リインフオースの3人は立ち上がる。

桂、スバル、神楽、月詠、はやて、エリオネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフ、ヴィヴィオ、サチコも銀時も勝男を見て任せるように見る。

銀時「早く、行けエエ！」

宗汰「……頼んだぜ！」

銀時達にこの場を任せた勝男は走って店を出て食材集めに行く。
そして銀時は如何すれば良いのかを考える中……

コンコン

誰かが扉を叩く音が聞こえ、フェイトはその扉を開くと……

漁師達「どうもこんにちは！親方様のご依頼の品物を届けてきました！」

全員「へ？」

何やら品を届けに来た漁師達であった。

そして車からマグロ、鯛、蛸、エビなど様々な海の幸のネタが着ていた。

それを見た銀時達は……

全員「え……何このオチ？」

つと言うしかなかった。

実はこれは入院中のこの店の親方がもうすぐネタが切れると思って注文した物ばかりであった。

もちろんお金は先払いしており、銀時達はとりあえずこれで何とかすると作業に戻る。

銀時、桂、はやて、ネプテューヌ、ブラン、は魚をさばいて寿司が握れるようなカンジで切り出す。

それを、スバル、エリザベス、月詠、ノワール、ベールは握りだして、神楽、エリオ、ヴィヴィオ、サチコはその寿司が載せられた皿をチェーンコンベアに乗せる。

かくして無事に見せも閉まり、無事に依頼を為し遂げられた。

フェイト、ティアナ、リンフォースの3人は今回は役に立てなかった事に強いショックを受ける。

そんな3人に如何声をかければ良いのか銀時達は苦笑して考える中、

ベールが突然……

ベール「……外見が良くても中身はヤバそうな存在は誰だってありますから、落ち込まないでくださいね……………」
「……負け犬」

フェイト・ティアナ・リインフォース

「うわああああああああああん！！！！」（豪泣き）
「

ベールの一言に3人はショックで大泣きしてしまう始末なのであった……………」

勝男「ウオオオオオオオオ！！！」

勝男はイカダに乗って鋸を握り、海から跳ねている黒マグロに飛び込む。

勝男「待っている皆！今すぐに行くウ！」

……店長の配達に気づくのは帰ってからだった。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ネプテューヌ「はい アシストするのはこの私ネプテューヌと」

ヴィヴィオ「銀時パパの娘ヴィヴィオと」

サチコ「幽霊なのにボケの領域に入ったサチコの」

ネプテューヌ・ヴィヴィオ・サチコ

「私達『仲良しデコボコトリオ』がアシストします！」

銀八「自分でデコボコって言うっちゃったよ！まいっか。一応始めっぞく」

ネプテューヌ「じゃあまずはペンネーム『黄色いのか』さん・
・って何このネーミング？まいいや。

『童貞眼鏡（新八）に質問です。』

なのはにふられてネプティー又達を襲わないんですか?」……………」

ネプテュー又は新八を軽蔑するような目で見る。

新八「ちょ、僕を軽蔑しないでくださいよ!!」って言うか襲うだなんて何ですか!? 僕はこれっぽっちも思っけませんからね!! 後童貞舐めんなあアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ネプテュー又「…………黄色いのか」さん。とりあえず飛び降り自殺して……」

銀八「お前何言ってるの!!?」

ネプテュー又の物騒すぎる言い方に銀八は青ざめる。

サチコ「お仲間が増えるかな? じゃあ次、ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『良かった良かった。』

マリオ「うんうん、ネプテュー又は良い事言った。俺は料理は食べて貰う人が幸せになれる様に願った物が一番美味しいと言うのが俺的考えだ」

ルイーダ「(それで僕達は撃沈されます……)」

クツパ「(吾輩達には強過ぎる……)」

フォックス「まあ、めでたしめでたしで……次は寿司関連のお話か?」

スネーク「だろうな……今まで出た一同に質問『月夜に舞う龍』で

作者が書いてる小説にもしいけるとしたらどこに行く？ちなみに1つの小説で2組までだからな」

フルコ「真王に質問だが…」銀時は戦いの中で女神モードにならなきゃ勝てない敵とか出て来るのか？」「

ルイージ「皆に質問」自分の料理の腕前を次の3つの評価で表すならどれ？ 1：凄く美味しい、2：普通、3：だめだめ」

そんな訳で次回を楽しみにしてます

フォックス「どんなハチャメチャが待ってるのやら…」

真王「『とある科学と魔術と鍵の勇者』ではリトバスメンバーと戦線メンバーが、

『東方魔弾戦記』ではリック達と如月学園組が興味があるようです。あと銀時？女神モードにならなくても強いですよ？あ、そうそう、彼らの料理の腕はこんな感じですよ」

『1：銀時・桂・ノワール・ベール・なのは・はやて・エリザベス・月詠

2：神楽・新八・ネプテユーン・ヴィヴィオ・スバル・エリオ・コンパ・アイエフ

3：フェイト・ティアナ・リインフォース・シグナム・ヴィータ・ブラン

屑以下：シヤマル

』

シヤマル「ちよつと待ってください！！私の料理が屑以下ってどう
いうことですか!？」

真王「だつたらこれ食べ！」

真王はシヤマルにシヤマル鍋を口に放り込む。

シヤマル「ぎゃああああああああああああああ！！！」

あまりの不味さに倒れる。

サチコ「また仲間が増えるかな? 『鳴神ソラ』さん。廊下に立って
ね」

ヴィヴィオ「次はヴィヴィオだよー ペンネーム『sibugaki』
さん。『ええと、今回の質問で首領パツチが何もされなかつた
ので今回あいつは調子に乗ってます」

首領パツチ

「うつぶん、銀時さんに質問

バレンタインだけど、チョコを貰うなら誰が良い?

そして、私は貴方にチョコと一緒にわ・た・し・をプレゼントして
あ・げ・る」

・・・誰かコイツに裁きの鉄槌を下してくれ
見えて吐き気がしてきた』……………」

真王「ええ…はい、あの糞パッチを絞めてください。無論殺す程度で、はい」

真王はニコニコしながら携帯で電話している。全然目が笑ってない笑顔を見て、全員超青ざめて震えている。

銀時「え、えつと…お、俺的には何でもいいんだが…って言うかも
らいたいし、チヨコ」

なのは・フェイト・シグナム・アルフ・リインフォース・スバル・
ティアナ

「だったら私の…!」

真王「静かにしてくれるか? (ニコツ)」

なのは・フェイト・シグナム・アルフ・リインフォース・スバル・
ティアナ

「ハイ、スイマセンデシタ」

銀時I o v e sは素直に席に座った。

ヴィヴィオ「し、ししし『sibugaki』さん。ぜ、ぜぜ絶対に
に作者さんを怒らせないでください…」

ネプテューヌ「そ、そそそれじゃつつ次行こうか。うん…ペ
ンネーム『レイガン』さんの質問。『質問です。』
桂さんに質問です。

一度なりたいたいのを3つ選んでください。

1. 仮面ライダーオーズ(グリードに襲われるようになります)

2. ポケ殺し（魚雷ガールの所で修行すること）
3. ウルトラマン（選ばれるか分かりません）

銀魂メンバーに質問です。

ネプテューヌ達のように女神モードになりたいですか（銀時除いて）
？
『
』

桂「俺か？1がいいな。仮面ライダーはカッコいいからな」

新八「ぼ、僕が女神！？つまり女の子になるんですか！？そ、それはちよつと無理です！！」

神楽「これなら私はなののようなボディになれるネ！」

桂「俺は別に何でもいいが…」

エリザベス『女神になったら私は人になるんでしょうか？』

月詠「わっちは興味ないぞ」

九兵衛「胸が大きくなるなら使っぞ！！」

銀八「ハイ『レイガン』さん。女神姿の奴らを想像しながら廊下に立ってなさい」

真王「ではアンケートはここまでにします。結果このようになります
ました」

ネプ銀編

銀河編

第三十三訓：カツパ寿司は魚以外の寿司があるの知ってた？（後書き）

真王「今回はスカリエツテイ達が銀時達と解釈します」

ネプテューヌ「次回『グダグダな自己紹介は最後までグダグダ』
テイクオフだよ」

第三十四訓：グダグダな自己紹介は最後までグダグダ（前書き）

真王「スカリエツティとナンバーズ達の解釈が始まります」

スカリエツティ「では、『リリカル銀魂』を始めよう」

第三十四訓：グダグダな自己紹介は最後までグダグダ

ある日、機動六課の前に銀時、桂、神楽、新八、月詠、エリザベス、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフ、ヴィヴィオ、機動六課のメンバーはもちろん、真撰組局長ごと近藤勲、土方、沖田、指名手配犯にされているはずのスカリエッティにルーテシアにアギト。そしてナンバーズ達が来ている、

ノーヴェ「おい・・・なんで私達がこの場所にいるんだ？何で初登場がこんな敵の奇襲とはほど遠い存在なんだ？」

何で自分達がこの場所に存在するのかと考えている、戦闘スーツを着た赤髪の少女、ノーヴェが言い出す。

クワットロ「仕方がないですよ。なんかこの小説の作者が私達を悪役になるより味方である方がいい、って犯罪者扱いされていないですよですよ」

つと、眼鏡をかけた女性であるクワットロが言い出す。

ノーヴェ「はあ？何を考えているんだあの馬鹿作者は？」

ウーノ「まあ、それもしょうがないでしょう？作者も色々と考えているんでしょうけど・・・」

呆れて言うのは他のナンバーズとは違って衣装が隊長服のような雰囲気をしているウーノ。

ナンバーズの姉的な存在である。

ウーノ「それに・・・妹達もあの様子だしね」

ウーノはそう言うと、隣に顔を向く。

そこには銀時達に近づいて尊敬する眼で見るセイン、セツテ、ウインディ、デイドは銀時と話をしていた。

チンクは隠れながら遠くから顔を真つ赤にして銀時を見ていた。

セイン「本物の坂田銀時だあ！」

ウエンディ「すごいっす！まさか本当に会えるなんて！」

デイド「魔法を使わずに剣だけで、数多くの事件を解決は本当ですか？」

セツテ「是非、その剣の実力見せてください！」

メツチャ尊敬しているようである。

彼女達の尊敬する眼線に銀時は少し照れて如何すれば良いのか戸惑っている。

銀時「え・・・何この歓迎？マジ・・・ちょ・・・嬉しいのか恥ずかしいのかどっちなんだろう？」

自分がいた世界とは大違いな歓迎振りに銀時は慣れていないのか如何すればいいのか分からないのである。

自分はただの万事屋だが、この世界の人物から見れば銀時はオーバーSランクであるゾーマを倒した英雄的な存在である。

その光景に、フェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リインフォースはどす黒い殺気・・・じゃなく嫉妬心を燃やしていた。

フェイト「また銀時につきまとう害虫が増えたわね・・・」(ゴ

桂「うむ、より争奪戦が大きくなるようで面白いからな」

はやて「それに銀ちゃんがこの後大変な事になるしな・・・想像するだけでワクワクしてしまうんや」

ベール「嫉妬で戦争を起こすのは面白そうですし」

トーレ「貴様ら3人は最悪だな、オイ！」

3人の腹黒さにツッコむトーレ。

ルーテシア「近藤・・・どうしてあの人は怒っているの？」

ルーテシアは近藤にフェイト達の怒りの原因を聞きだす。

近藤は左手をルーテシアの頭に乗せて、涙を流しながら言い出す。

近藤「ルー殿・・・大人になれば分かる事だ」

ルーテシアはそれがどういう意味なのか分からないが、アギトは7人を見てこう思った。

アギト「もし・・・このまま敵に回っていたら私達とんでもない眼に合っていたような・・・」

アギトは想像しただけで自分はルーテシア、ナンバーズとスカリエッティが血まみれになって倒れてるのしか思い浮かばずに青ざめる。

ネプテューヌ「まゝ、止められるのは私かサチコちゃんたちぐらいだけだ・・・」

ノワール「余計な逆鱗を触れては駄目よ」

ブラン「銀時が好きなのは分かっても、自重しない女は嫌われる・・・ククク」

ネプテューヌ「失礼だねも〜。さ、サチコちゃん。あの人たちに挨拶」

サチコ「こんにちは、サチコです」

遼「遼です」

雪「私は雪」

時子「時子だよ」

ノーヴェ「あ、ああ、こちらこそ…」

ノーヴェは怖がりながらもとりあえず自己紹介した。

理樹「ねえ、今悲鳴が聞こえたんだけど？」

真人「何だ？なんか怖いものでもあったか？」

音無「何かあったのか？」

ユイ「何事でごせーましようか？」

なのは達の悲鳴を聞きつけ、リトルバスターズと戦線メンバーが集まる。

するとゆりがスカリエッティを見つける。

ゆり「あら？スカリエッティじゃない？元気にしてた？」

スカリエッティ「仲村君かね？まあ元気さ」

新八「あれ？ゆりさん、知ってるんですか？」

ゆり「知ってるも何も私たち前にスカリエッティのところにいたのよ？」

ゆりの一言に戦線メンバーズ以外の全員が驚く。

銀時はスカリエッティから聞いたため驚いてはいなかった。

土方「そっぴや山崎とあの女は？」

沖田「もうすぐ着くと思いやすぜ？」

土方がまだ現れない山崎とナンバーズのディエチのことを沖田に聞いた。

???「いやあー、やっとついた」

???「・・・遅れて申し訳ございません」

突如、後ろから2人の男女がようやくたかのように言い出す。男の方は、山崎退やまざきひるであり、女の方は・・・何やら他のナンバーズとは違って女の子らしい服装を着ている頭に赤いリボンがついている少女・・・もどいナンバーズの1人であるディエチである。

黒と白をメインとしたマルチボーダーセーターにレギンス付の黒いスカートに靴はダークブラウン。

どこにでもいる可愛らしい少女の姿であった。

ウーノ、トーレ、チンク、オットー、ノーヴェ

「ちよつと待てエエエエエエエエエエ！」

ウーノ、トーレ、チンク、オットー、ノーヴェが怒鳴ってツッコみだす。

スカリエッティとクアットロは啞然としていた。

チンク「ディエチ！なんなんだよその格好！何でいつもの戦闘スーツにならないんだよ！」

オットー「その服は如何した!？」

チンクとオットーは理由を聞き出す。

どうしてこのような格好をしているのかを聞かれたディエチはその理由を聞き出す。

デイエチ「じ・・・実は・・・山崎さんがせつかくだからっと私の為には可愛らしい服装を選んでくれて・・・この格好をみんなに見せようかなっと思ってる・・・似合う？ノノノ」

ウーノ「うん・・・女の子っぽくて可愛いわ・・・ってそんな理由で遅れてきたんかいイイイイイイイイ！！」

デイエチの理由に噴火するかのような怒りを表して額に血管を浮かせてツツコむウーノ。

ドゥーエ「まあ良いじゃない？彼氏に買ってもらった服し・・・それに、似合っているじゃない」

ウーノの後ろからそう言いだすのは、ドゥーエであった。

ニヤニヤとデイエチを見ると、デイエチは顔を真っ赤に染めてしまっている。

ノーヴェ「おい、山崎！テメエ、デイエチになんて格好をさせてたんだ！」

ノーヴェは怒鳴って山崎の服を引張り上げて理由を聞き出す。

山崎「あ・・・いや・・・そのう・・・なんかデイエチが羨ましそうに女の子の服を見ていたから・・・何とかしてあげたいと思って今日ここに来る前に買って上げたんです！」

ノーヴェ「余計なお世話するんじゃないねエエエエ！！！！」

ドカア！！

山崎「あらぶあああああ！！」

ノーヴェは思いつきり殴って山崎を吹飛ばす。

「デイエチ」の……ノーヴェー！山崎さんにそこまでしなくても！」

暴れているノーヴェを抑えるデイエチ。

そして倒れている山崎を起こす銀時、神楽、桂は興味ぶかそうに山崎を見る。

山崎「あ……旦那……」

銀時「なあ……お前いつの間に彼女とか出来たの？」

山崎「え！？／＼／＼」

銀時が憎たらしい顔で山崎にそう言つと、山崎は顔を真っ赤にしてどのように何説明すればいいのか分からなくなった。

神楽「とりあえずお前もう地味キャラ卒業ネ。卒業おめでとうアル」

山崎「え……なんで!？」

銀時「いや、地味キャラが女出来たらおかしいだろ？だからそう言う奴は強制的に地味は卒業つとなつてゐるの。地味キャラ脱出なの」
山崎「そんな理由ですかあああああああ!？」

銀時と神楽の地味的な存在の卒業理由にツッコむ山崎。

新八「チクシヨオオオオオオオオ!!!僕だつて!僕だつてエエエエエエエ!!!」(豪泣き)

彼女の出来ない新八は頭をガンガンぶつける。その新八にサチコが新八の肩に手を置く。

愉快そうに笑う近藤が近づく。

クド「のーぷろぶれむなのです？」

ユイ「ようはアホですね」

関根・入江「ね」

ウエンディ「馬鹿は馬鹿にしか分からないっす」

セイン「そりや言えてるね」

ベール「私は嫌いではないですよ」

ブラン「……………」

そんな腹黒コンビにネプテューヌ達が言う。

はやて「…………あんたらいつの間に仲良くなったん？」

ネプテューヌ・ヴィヴィオ・サチコ・葉留佳・真人・クド・ユイ・

関根・入江・ウエンディ・セイン・ベール・ブラン

「さあ？成り行きかな？(っす)」

素っ頓狂なことを言う大ボケ組なのであった。

銀時はそれで良いのか？って思った。

フォックス「それで3人共、ベールの一言に泣いたな最後…」

マリオ「俺から皆に質問『俺のゲームで出たアイテムでどのアイテムを使って見たい物はあるか?』」

スネーク「俺は今回出てない皆に質問だが…『今回の銀時達の寿司を握るシーンを見てどう思う?』」

ルイーダ「ナンバーズに質問『内の兄さんどう思う?』」

今回はスカさんとナンバーズとの出会いだね」

ネス「どうなるのやら」『…んじゃ最初の質問だ」

銀時「俺はどちらかというとスターがいいな」

新八「こうらアイテムで身を守れますね」

神楽「ファイアーボールを打ちたいネ！」

桂「スケスケアイテムなら隠れられて便利だな」

エリザベス『スーパーキノコですね』

月詠「わっちはいらんぞ」

ネプテューヌ「巨大キノコで大きくなりたい！」

ノワール「ファイアーフラワーで燃やしてやるつかしら?」

ブラン「ネプテューヌと同じ」

ベール「スターが欲しいですわ」

コンパ「雲コンパになって空を歩きたいです」

アイエフ「私は要らないわ」

銀八「次は2つ目」

リトルバスターズ・戦線メンバーズ・リック達・如月組（サチコは除く）

「なんでそうなるのオオオオオオオオオオオ（んだアアアアアアアアアアア）（んですかアアアアアアアア）！！！！？」

スカリエッティ「ま、まあそういう反応だね…3つ目は」

ナンバーズ「あんた（あなた）ほんとに人間か（ですか）？」

銀八「……『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

スカリエッティ「次のは久しぶりに『黒龍』さんからだね。『ソラ』「久しぶりの感想だな」

銀時「黒龍のヤローのテストがやっと終わったからな」

ソラ「っで、結果はどうだったんだ黒龍？」

黒龍「……せえよ……」

ソラ「ん？なんて言ったんだ？」

黒龍「うるせえって言ってんだよ！！！！」

銀時「ええええええ！！？お前そう言うキャラだったっけ！？」

黒龍「こっちはテストの結果が悪くて追試になりかけてイライラしてんだよ！！！」

ソラ「・・・悪かったんだな」

黒龍「うるせえよ！！さっさと質問いくぞ！！」

銀時「おいおい、完全に八つ当たりモードだな」

黒龍「一つ目！！新八に質問だ！！少しは目立つように努力しろ！！」

銀時「それ質問じゃなくね！？」

黒龍「うるせえ！！二つ目！！サチコはソラのどこに惚れたんだ！！？そして三つ目！！銀時お前主役の一人なのに最近全然活躍していない！！」

銀時「つてめえー！！それどう言う意味「うるせえ！！」ぎゃああああああああああああああああああ！！」

黒龍は銀時を珍しくボコボコにした。

ソラ「はあ〜こりゃ相当キレてるな」『・・・・・・・・・・・・・・・・』

1・スカリエツティに質問だ。銀時達の寿司屋での話を見ての感想を科学者張りに答えてくれんか？

輝刃「やはりその方でいくか…では次は俺から質問だ。」

2・マジエコノヌに質問だ。初登場からあまり出番が少ないように見えるが、今の自身の状況下をどう思っているんだ？あと、俺の特製ミートパイ…食うか？味は保証するぞ？

ハハハ…輝刃は料理が得意だもんな

輝刃「まあな…一人暮らしをしてれば、自然と家事全般は上手くなるし。」『ズバリお答えしましょう』

スカリエツティ「確かにあれは不思議だが、私の科学では導けなかったよ」

マジエコノヌ「私か？そうだな、状況は特にこれといったことはないが、ボスは最後に現れるのがモットーだ。後ミートパイだが高評価だな」

銀八「はい、『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

第三十四訓：グダグダな自己紹介は最後までグダグダ（後書き）

真王「今回はシリアス章『魔道機人編』がスタート！謎のテロ集団『シグマーズ』が銀時に襲い掛かる！

実力はゾーマ越えの銀時級！？

現れるは魔道機人とイリスと呼ばれる魔剣士！

果たして銀時達は！？そしてネプテューヌは！？

銀八「次回『どんな秘密があっても優しく接する方がいい』テイクオフ」

第三十五訓：どんな秘密があっても優しく接する方がいい（前書き）

真王「『魔道機人編』 始まります！」

第三十五訓：どんな秘密があっても優しく接する方がいい

訓練所では、いつもどおりフェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、ヴィータ、リンフォース、エリオ、キャロは、朝練をする事になった。

しかしネプテューヌは美味しそうな食べ物があるかどうか見てくる！と言ってどこかへ行ってしまい、ここにはいない。

銀時は何やらスカリエッティから重要な話があると聞かされてスカリエッティのアジトに向かっていき、桂、新八、神楽、エリザベス、月詠、ノワール、ベール、ブラン、イストワールも共に向かうことにした。

そして九兵衛、コンパ、アイエフ、リトルバスターズ、戦線メンバーズは機動六課の訓練の見物をする事にした。

そんな中、陸士108部隊から1人、フォワード部隊の新人としてやってきた1人の女性が挨拶する。

その人物こそ、スバルの姉であるギンガ・ナカジマであった。

スバル「ギン姉!？」

ティアナ「ギンガさん!？どうしてここに!？」

まさかのギンガがいる存在に驚きを隠せなかったスバルとティアナ。

ギンガ「今日から私もフォワードメンバーの1人としてここに出向した訳。はやてさんの依頼で」

スバル「はやて隊長から？」

実は、はやてはスバルとギンガの父、ゲンヤに依頼を申し込んでギンガだけじゃなくマリエル・アテンザを出向する事になった。

ティアナ「それよりティアナ、久し振りだね」
ティアナ「あ．．．はい！お久し振りです！」

ティアナもギンガの存在を知っている。

陸士訓練校の頃、何度か顔見知りになったのであるからだ。

エリオとキャロはフェイトに質問する。

エリオ「フェイトさん。ギンガさんって、あの時空管理局・陸士108部隊所属の捜査官で．．．」

キャロ「スバルさんのお姉さんである．．．あのギンガ・ナカジマですか？」

フェイト「うん、母であるクイント・ナカジマの意志と格闘技法『シューティングアーツ』、そして形見である籠手型のデバイスの一つ『リボルバーナックル』を受け継いだんだって。っでその強さは魔法術式・近代ベルカ式／魔導師ランク・陸戦Aだそうだよ」

フェイトの質問に納得するエリオとキャロ。

スバルと同じく、ギンガも母の意志を受け継いで体術を習ったそう
だ。

ギンガ「それにしても、スバルは1人で修行をする為に1人旅をしていたとは聞いていたけど．．．まさか『機動六課』に入っていたなんて．．．」

スバル「あ、あははは．．．」

スバルは大切な妹の為、ギンガは最初はスバルが1人旅に出るのは
猛反対していた。

だがスバルの意志が本物と見抜いたゲンヤに許可をもらった為、反
対できなかった。

そのスバルがまさか『機動六課』に所属していたとはさすがに驚い

ていた。

ヴィータ「うっし、じゃあとりあえず新しくメンバーが加わった所だし、いつもどおりに訓練するぞ」

F「はい！」

ヴィータが張り切って言い出すとフォワード部隊ははっきりと返事をする。

ギンガ「フェイトさん。そう言えばここにある女の子がいるって聞きましたけど……」

フェイト「ネプテューヌのこと？ごめんね、今出かけているのよ」

ギンガは六課にいた女の子・ネプテューヌのことをフェイトに聞くが、ネプテューヌはいないと答える。

ギンガ「そうですか……どんな人か見てみたかったですか……」

ギンガはため息ついてあきらめた。

スカリエッツィのアジト

アジトの外は、瓦礫と化した大量のガジェットのスクラッチであった。

『鬼兵隊』の作り上げた最新ガジェットによる奇襲攻めが原因であ

った。

だが何とか追い出せたがいつ襲ってくるのかまた分からない為嚴重に見回りをしている。

中は沢山の生体ポッドが壁際にズラリと並んでいて、ポッドの中には裸の女性が一人ずつ入っていた。

原因によれば、最高評議会という連中が戦闘兵器用に作り上げた人造生命体のサンプル達と作りかけであった。

スカリエッティはそれを良しとせずとそのデータを全て奪って自分で作り出し、彼女達を1人の人間のように生まれさせようとしたのである。

それは銀時の世界の幕府の裏の連中がやる行動と同じな為、銀時はスカリエッティのやり方に納得するのであった。

銀時、桂、新八、神楽、エリザベス、月詠、ノワール、ベール、ブラン、イストワールの10人はスカリエッティから話がある為、この場に来た。

一方のナンバーズは外の警備をしていた。

チンク、セイン、セツテ、ウィンディ、デイドは銀時が来たことには喜んでいる。

クワットロは銀時の身体能力の高さを調べる絶好のチャンスだとどす黒い感情で笑っている。

そして、銀時達はスカリエッティの部屋に入りだす。

そこにはスカリエッティはもちろん、近藤に土方に沖田に山崎、それに機動六課のメンバーであるシャーリーとギンガと同じく機動六課に向出したマリエル・アテンザ、愛称はマリー、そしてスバルとギンガの父であるゲンヤもいる。

時空管理局本局メンテナンスタッフと自称『メカニックデザイナー』、さらには陸士108部隊部隊長までもを呼ぶ事は何やら重要な事があるかもしれないと確信する。

スカリエツティ「今日ここに集まってもらった君達にはどうしても話しておかなければならないのさ。特に異世界から来た銀時達と陸士108部隊部隊長であるゲンヤ殿には」

スカリエツティのいつものニヤけた表情はなく、真剣な表情である。

ゲンヤ「銀時達は構わないが、何で俺まで聞かなきゃいけないんだ？」

スカリエツティ「それは、今回話しておく事は、君の娘であるスバルに関わるスバルの事であるからさ」

ゲンヤ「スバルだと？」

なぜ、スバルの事で話があるのかをゲンヤは驚きだす。

銀時達もなぜスカリエツティがスバルの事で話があるのかを聞き出す。

銀時「おいおい、何でお前がスバルの事で話をするんだ？」

スカリエツティ「その理由は、話せば分かる事だ。今回話す事は二つ。1つはスバルのことだが・・・その事はゲンヤ殿は知っているだろう」

スカリエツティがそう言うと、ゲンヤのほうを振り向く。

スカリエツティ「ゲンヤ殿、君の娘は銀時達にお世話になっている。だから父親として、銀時達には話しておくべきだと私は思うが・・・」

ゲンヤ「・・・分かった」

スカリエツティがそう言うと、ゲンヤは父として話すことを決意す

る。

近藤「ス力殿、スバルってあの格闘技を使うお譲ちゃんのことか？」
山崎「あの子が一体なんなんですか？確かに身体能力は新人とは思えないほどの高さで……あの子に何が……」

近藤も山崎も理由を聞きだすと……

ゲンヤ「実は……スバルは、私の本当の娘じゃないんだよ」

ゲンヤの衝撃的な一言に銀魂組とノワール、ベール、ブランとシャ
ーリーは驚きだす。

スカリエツティは、やはりと思ってあんまり驚かない。

桂「ゲンヤ殿の娘じゃないだと？」

エリザベス「マジで!？」

桂とエリザベスはその真実に驚く。

月詠「じゃあ、スバルは一体誰の子じゃと言うんだ？それにどうし
て突然その事を……」

月詠もその理由を詳しく聞こうとする。

ゲンヤ「スカリエツティの周りにいるナンバーズが戦闘機人である
事は知っているだろ。スバルは彼女等と同じ戦闘機人、『タイプゼ
ロ』と呼ばれた人造生命体だ」

銀時「なあ!？」

近藤「何イイイイイイイ!？」

桂「スバル殿が人造生命体!？」

ゲンヤの口から出されたスバルの正体に驚きを隠せなかった銀時、近藤、桂。

それはフェイトとエリオのように『プロジェクトF・A・T・E』で生み出されたクローンと同じ存在である人造生命体であった。

ゲンヤの話によれば、スバルは姉のギンガ共々クイント・ナカジマの遺伝子から生み出された人造生命体。クイントが生前に追っていた戦闘機人事件の捜査過程でギンガと共に発見・保護され、その後子供の出来なかったナカジマ家に2人揃って引き取られたようである。

新八「・・・スバルさんが・・・」

神楽「スバルが・・・人造生命体だったなんて・・・」

エリザベス「そんなことが」

土方「あの譲ちゃんがねえ・・・」

沖田「道理で強いわけだ」

山崎「正直言つて信じられないな・・・」

新八、神楽、エリザベス、山崎も今でも信じられなかった。

土方と沖田はなんとなく納得したらしい。

人間のように元気で明るいスバルが、まさかの人造生命体だったとは・・・

イストワール「・・・スバルさんが戦闘機人。その姉のギンガさんも・・・ですか」

イストワールは話を聞いて、あの動きの速さと攻撃力を持つスバルに納得する。

ノワール「・・・なるほどね」

ブラン「そんなことか」
ベール「まあ、そうなのですか」

話を聞いたノワールとブランドベールは、なぜリアクションが薄い。

スカリエツティ「・・・君達リアクションが薄いね。どうして驚かないんだい？」

スカリエツティは片眉をあげてノワール達に聞く。

ブラン「簡単な話。スバルが普通と違うの知ってた」

ノワール「それにネプテューヌだったらこう言うわ。『たとえ戦闘機人であつてもスバルはスバルだよ！』ってね」

ベール「どうあれスバルさんはゲンヤさんの娘でいいじゃないですか」

ゲンヤ「・・・ありがとうございます」

“戦闘機人であつてもスバルはスバルである”という言葉に、スバルを人として接している3人にゲンヤは感謝する。

ゲンヤ「・・・ところであの紫の…ネプテューヌって譲ちゃんだが、何処にいるんだ？」

ゲンヤはネプテューヌが何処にいるか聞く。

ノワール「ネプテューヌならグラナガンでたべものを探してるんじゃない？」

ノワールの答えに、周りは啞然、苦笑いを浮かべた。

一方、ネプテューヌはというと、

ネプテューヌ「ハムハム このタイヤキおいしいな〜」

グラナガンで食べ物を食べながら歩いていました。

右手にはタイヤキを持ち、左手には勝ったものであるうお菓子がいっぱいであった。

ネプテューヌ「ん？」

ネプテューヌが六課へ帰る途中、公園のベンチで座っている一人だけの金髪の少女を見つけた。

ネプテューヌはとりあえず声をかけてみる。

ネプテューヌ「あの〜、こんなところで何やってるんですか？」

金髪の少女「私ですか？この自然の空気を感じてるんです」

少女はネプテューヌに気づいて答える。

ネプテューヌ「へえ〜、もしかして動物も好き？」

金髪の少女「好きと言えば好きですね。特にかわいい生き物が」

ネプテューヌ「そうなんだ。あ、私ネプテューヌだよ」

イリス「私はイリスです」

ネプテューヌと金髪の少女・イリスは自己紹介をする。

イリス「・・・初めてですよ。こんな美味しいもの食べるのは...」
ネプテューヌ「ふん、でもイリスさんなんで泣いてるの？」
イリス「え？」

イリスは自分の目を触る。冷たい雫、つまり自分の涙である。

イリス「あれ？どうしてかな？何で私泣いているのかな？」
ネプテューヌ「簡単だよ」

ネプテューヌがイリスの泣いている理由を答える。

ネプテューヌ「『人から温もりを貰ったことが嬉しくて泣いた』んだよ」

イリス「ぬく、もり・・・」

イリスは呟きながらタイヤキを食べる。食べてる際にどんどん涙が出る。

イリス「・・・始めて、味わいました。こんなに、こんなに温かいものだなんて...」

泣きながら食べるイリスに、ネプテューヌがイリスの背中をさする。

ネプテューヌ「よしよし、嬉しいならうれしくて泣いていいんだよ」

ネプテューヌの言葉を聞いた瞬間、イリスはネプテューヌの体に顔を入れて泣いた。

数分後：

イリス「ほ、ほんとにごめんなさい。恥ずかしい／＼」
ネプテューヌ「いいっていいって」

泣きやんだイリスは謝り、ネプテューヌは気にしてないと言う。

イリスは時間を見ると、思い出したかのようにネプテューヌに言う。

イリス「もうこんな時間ですか、ネプテューヌさん、私は行かねばなりません」

ネプテューヌ「仕事でもあるの？」

イリス「・・・ええ、とても忙しい仕事です」

イリスは少し暗く答えるが、ネプテューヌは気付かない。

ネプテューヌ「そっか。それじゃあイリスさん、またお話ししようね」

ネプテューヌ又はイリスに別れを行って、公園から去った。

イリス「・・・ありがとう、ネプテューヌさん」

イリスは一人、ネプテューヌにお礼を言い、公園から去った。

スカリエッティの話が終わった銀時達は別々の行動をしていた。

近藤と土方と沖田と山崎はスカリエッティのアジトで待機していた。桂、エリザベスは瓦礫と化したガジェットの破片を集めていた。新たな爆弾を作る為に。

イストワールと新八と神楽と月詠はせっかくだからとナンバーズと話をしていた。

そして銀時とノワールとブランドベールは、一緒に行動で散歩をしていた。

銀時「人造生命体ねえ……人間のようによく性格をしたスバルがなあ……」

とても想像できない銀時。

ナンバーズが戦闘機人である事は以前にナンバーズから聞いた事があるが、まさかスバルも戦闘機人であることは想像できなかった。

銀時「世の中物騒な事ばかり……ん？」

銀時が不思議そうに感じて散歩をしている間、楽しそうにスキップするネプテューヌを見つけた。

ネプテューヌ「あ、銀さん」

ノワール「やっと見つけたわよネプテューヌ」

ネプテューヌ「・・・ノワールウ…どこかのライバルキャラがいい
そんなセリフをよく言えるね」

ノワール「大きなお世話よ」

銀時「って言うかお前何やってたんだ？」

銀時は楽しそうだったネプテューヌに聞いてみた。

ネプテューヌ「実はこのミッドチルダに一番おいしいタイヤキ屋が
あってね。六課に帰る途中にイリスさんって言う人と話し合ったん
だよ」

銀時「へえ、そうなんだ。」

銀時とノワールとブランとベールはあまり興味ないが一応話を聞いた。

銀時「ま、六課に戻るぞ。あいつら待ってるし」

銀時がそう言い、ネプテューヌ達は六課へ帰る。

ネプテューヌ（そう言えばイリスさん、なんだか物悲しそうな顔を
してたけどあれなんだろ？）

ネプテューヌはイリスのことを考えていたが、なんなのか分からな
かった。

だが、ネプテューヌとイリスの出会いに、とんでもない事件が起こ
るなど知るよしもなかった。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ネプテューヌ「ハイ！またネプテューヌがアシストするよ」

銀八「んじゃ行くぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『フォックス』…どう反応すれば良いんだろうか？」

ルイージ「まあ、流石に銀さん達の世界以外じゃあ普通に出れないもんねフォックスは！」

スネーク「しかし…タイトル通りグダグダだったな…」

次から『魔道機人編』が始まるけど…これでスバル達が強くなるのかな？

ネス「そうじゃない？ナンバーズとスカさんに質問『内の作者が『月夜に舞う龍』で書いてる小説に出るオリジナルのライダーで好き

なのはどれ？後、なるべくライダーは全員一緒とか半分半分じゃない他オリジナルライダー2人だけと言うのは止めてください』」

リユカ「同じくナンバーズとスカリエッツィさんに質問『スマブラXでの最後の切り札で誰のを使ってみたいですか？後、自分で最後の切り札出せるならどう言う風になりますか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます

ソニック「頑張れよ！」『では答えてあげましょう』」

スカリエッツィ「私はディブレイカーが興味あるね。そしてガノンドロフ君のを使うね。後すべての敵を縛る技がいいね」

ウーノ「私もドクターと同じで。技はルイーザさんのと相手を状態異常にさせる技がいいわ」

ドゥーエ「ハーツかしら？メタナイトの技と私が相手に化けることかしら？」

トーレ「私もハーツだ！技はソニック、そして『ライトインパルス』ですべてを裂く！」

クワットロ「ディブレイカーですわ ルイーザさんの技と相手を混乱させる技がいいですわ」

チンク「キバのシュベルトフォームだな。ルカリオ殿の技と私のISですべてを吹き飛ばす技を使う」

セイン「ディブレイカーだね。ヨッシーの必殺技と相手を引きずり

こんでボンっ！！だね」

セツテ「ハーツです。リンクの技と『スローターアームズ』で敵を殲滅します」

オットー「僕はハーツ。ネスのと一緒に『メガレイストーム』を出そうかな？」

ノーヴェ「クイントフォームのキバだ。マリオのとあたしが拳を地面にぶつけて大地震を起こしてやる！」

デイエチ「ハーツ。サムスの技とそれと同じように巨大砲撃を出す」

ウエンディ「あたしはディスプレイカーっす。フォックスがランドマスターを呼びだすのと同じようにあたしもすごい乗り物に乗って大暴れしたいっす」

デイド「リーゼフォームのキバです。アイクさんの技と同じく私も『ツインブレイズ』で相手を倒します」

銀八「はい、『鳴神ソラ』さん。廊下にたつてなさい」

ネプテューヌ「次はペンネーム『sibugaki』さんだよ。『首領パッチ』……」

返事がない、只のしかばねのようだ

あんな事言うからだよなあ

さあて、それじゃ今度は誰が質問するのかなあ？

田楽マン

「今回は僕が質問するノラア

まずはこの小説に出てくるチビッコたちに質問なのら

『僕と友達になつてええええ！』」

それ質問じゃねえだろう！

お前もう帰れ！

天の助

「リリカルメンバーが目立てない理由は俺は良く知ってるぞ」

ほほう、何だよ？

天の助

「ズバリ！あいつ等はところてんを食べてないからだ！だから小説で目立ちたかったらところてんを食べるんだ！」

ありえねえ

つつう訳で作者である真王さんにはこいつらが隠れてやってた「ネプチューヌのコスプレ（天の助）写真集」を差し上げます

ではでは』とこゝろてんで目立てるわけないよ。って言うか写真いら
ないし。あと友達になつてもいいよ」

銀八「いいのかよっ!?!」

サチコ「私も」

銀八「お前もか!・・・『sibugaki』さん。一応、田楽マンの友達になれるのOKだそうです。こいつらが」

ソラ「さすがにパンチが効いたな」

ソラは口から垂れている血を吹きながら言う。

サチコ「うう・・・また失敗した（涙）」

サチコは悲しそうにする。

ソラ「これからだな」

ソラはサチコの頭を撫でる。

サチコ「ん・・・／＼／」

サチコは顔を赤くして嬉しそうに目を細める。

ソラ「俺だけの意見じゃなくて、他の奴の意見も聞いてきたらどうだ？」

サチコ「例えば？」

ソラ「やっぱり真王のところの銀時達だろ」

サチコ「分かった」

ソラ「ああ、それとフェイトの作った料理も持って行ってくれ。なんでも真王の所の銀時達の意見も聞きたいそうだ」

サチコ「うん」

サチコはフェイトの作った、もぞもぞ動くパスタを持っていきながら真王さんの所に帰って行った。

銀時「おい、大丈夫か？」

アリス「私はあいつらがどうなるのが知ったことではないしな」

アリア「・・・冥福」

黒龍「じゃ、じゃあ質問いきます。

1・ネプテューヌはどれくらい食べると満腹になるんですか？

2・女神四人の称号を考えてみました。

ネプテューヌ：暴食女神

ノワール：ツンデレ女神

ブラン：暴力女神

ベール：腹黒女神

どうですか？

3・九兵衛最近全然出番ないですけど、出てきた意味ありますか？

(黒笑)「

銀時「2と3はかなりロクな質問じゃないな」

輝刃「まあな…料理には、少しばかり自信があったしな…。」

なるほど…俺もこの世界じゃ、結構料理は得意な方だが…やっぱり輝刃のが一番だな。とりあえず、今回はまず俺から質問だ。

1・作者に質問だ。次のシリアスストーリー『魔道機人編』に関してなんだが…新八に何かしらのフラグみたいなモノは立つのか？銀魂の原作にあった『文通編』みたいな感じのフラグが…。

輝刃「ああ…あの話か。確かにあの話は新八にとって大きな心の転機みたいなモノがあった話だからな…。次は俺からだ。」

2・ネプテューヌ又達女神陣（マジエコンヌも含む）に質問だ。ウチの閃火の基になった奴（書き手）は自分なりの造語で部屋の照明の灯りをオレンジっぽい光を灯すちっこい豆電球だけの状態にする事を【赤ポチ】なんて言うのだが…ネプテューヌ又達も自分なりの造語みたいなモノを持っているか？

あゝ…確かに俺の基になった奴（書き手）って、昔っから妙ちくりんな自分なりの造語をたくさん持つてるからな…女神陣にもあるのか少し気になる所だ。』」

真王「一応はつきりいいいます。気分次第で」

銀八「ホントにはつきり言ったなおい！」

ネプテューヌ「2つ目だけど、分かんない」

ノワール「興味ないわ」

ベール「知りませんわ」

ブラン「没だ」

マジエコンヌ「しらん」

銀八「『月光閃火』さん。廊下に立ってください」

ネプテューヌ「質問タイムここで終わります」

第三十五訓：どんな秘密があっても優しく接する方がいい（後書き）

真王「イリスと別れたネプテューヌ。その後、SS級の緊急事件発生！ゾーマを超える最強の敵が銀時達の目の前に現れる！？」

ネプテューヌ「次回『奇襲を受けたら対応が難しくなる』テイクオフ！」

〈報告〉

真王「考えていた『パンドラ編』ですが、時期的にも合わないため没にしました。期待していた人すいませんm（| |）m」

第三十六訓：奇襲を受けたら対応が難しくなる（前書き）

真王「ついに起こった最大の事件！実力はゾーマ越え！？そして仮面の少女の正体が明らかに！」

銀時「『リリカル銀魂』始めるぜ」

第三十六訓：奇襲を受けたら対応が難しくなる

機動四課

そこは、はやてと同じくエリート魔導師達が新設した部隊。

ロストロギアの探索・調査・確保を任務とする部署。その任務上、選りすぐりの優秀な魔導師が所属するエリート部署の1つである。その強さは機動六課には及ばないが、数多くの成績を誇っている。

そんな機動四課の隊員は銀時達の話をしていた。

隊員「なあ、機動六課の連中にあの坂田銀時がいるって噂があったが本当か？」

隊員「ああ。しかもそれだけじゃなく桂小太郎、神楽、エリザベス、柳生九兵衛など『ゾーマ事件』を解決した伝説の人物もいるそうだぜ！」

銀時達の噂は正にミッドチルダでは知らぬものはいないと言われる程である。

しかしその半分が銀時の噂を信じない者も存在する。

隊員「けど俺達、魔導師は魔法を使って戦うのが当たり前なのに、魔法を使わずに剣だけで対決したなんてあり得ねえだろ普通？」

隊員「そうそう。それに魔法を使えないくせに良くもまあ英雄気取りができた者だ」

隊員「俺達、魔導師にとってには気に食わない存在だ」

魔法使えないのにオーバースランク級の実力を誇る銀時の存在を気

に食わないのであった。
表の感情があれば裏の感情もそんざいする。
人間には言わば綺麗な心と汚い心が存在する。
どの世界でもそれは変わりはないのであった。

???「本当に、時空管理局の裏の連中は嫌になりますね」

1人の少女の声が聞こえて隊員達はその声のほうを振り向くと、一瞬にして6人の魔導士達が真っ二つに斬られて、上半身の胴体がドスッと倒れてしまう。

そして大量の血が噴射するかのようにあふれ出ると、6人の下半身の後ろには、仮面をかけた赤い大刀を持っている1人の少女がいた。

隊員「う・・・うわあああああああああああ！」

隊員「敵襲だあああああああああああ！」

誰もが恐れて悲鳴を上げる。

そしてデバイスを出して魔法で追撃しようとした瞬間、眼にも止まらない速さで少女が大刀を超高速に振り出すと、持ち上げた大刀を思いつきり下に向けてふると、一瞬にして45人の魔導士達が斬り殺されてしまった。

隊員「ば・・・馬鹿な！」

隊員「剣技だけで、一瞬で40人以上を・・・」

恐怖を絶望が混ざりきった感じで言い出し、誰もが少女の強さを恐れる。

???「悪いけど、今日限りで機動四課は壊滅させてもらおう・・・
・『ゼロセイバー』！」

了解しました

そして『ゼロセイバー』という大刀のデバイスを持った魔導士は人間の常識を超えた速さで大地を蹴り飛ばすかのように素早く機動四課の隊員達に突進した。

30分後

訓練所

ピー　ピー　ピー　ピー

突如、緊急警報が鳴り始め、訓練中であつたなのは達が驚きだす。

フェイト「緊急警報!?!」

シグナム「一体何があつたんだ?」

フェイトとシグナムは不思議そうにそう言いだす。

アイエフ「どうやら、ただ事じゃないみたいね」

アイエフがいつもとは違った真剣な表情で言い出す。

空にモニターが映し出され、そこにはシャマルが写っていた。

シャマル【大変です！緊急事件が発生しました！】

フェイト「緊急事件！？」

ヴィータ「一体何があった！」

シャマルの異常な慌てのようにフェイトとヴィータが言い出す。

なのは「どうしたの？何か様子が変わりただけで大丈夫！？」

なのはがシャマルの慌てのように、その訳を聞き出す。

シャマル【そ．．．それが、機動四課に侵入者が現れて大量殺人事件が発生したんです！】

スバル「ええ！？」

ギンガ「何ですって！？」

大量殺人事件の発生に驚くスバルとギンガ。

フェイト達も驚きを隠せなかった。

シャマル【敵は1人でまだ少女ですが．．．見たことがない剣を持っていて、しかも異常なまでに強すぎです！このままじゃ機動四課が壊滅してしまうぐらいに．．．他の機動部隊も応援してきますので機動六課もすぐに出動をお願いします！】

シャマルが状況確認と出動要望をすると、なのはとフェイトがフォード部隊に言い出す。

なのは「皆、訓練は一旦中止！すぐに出動するよ！」

フェイト「敵は1人だけだけど、かなり手強いそうだから気を抜けないで！」

F+ギンガ「はい！」

2人の隊長が言い出すと、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガの5人は力強く返事をする。

コンパ「私達もほうっておく訳にはいかないです！」

アイエフ「全くそのとおりね！」

九兵衛「よし、僕も参加しよう」

九兵衛とコンパとアイエフもこの事件の解決の為に共に行く事を決意する。

ヴィータ「シャマル！お前はすぐにネプテューヌと銀時達を呼べ！」

シグナム「一刻も争う状況だ！」

シャマル【は・・・はい！】

ヴィータとシグナムにネプテューヌ達を呼ぶように頼まれたシャマル。

そして機動六課はすぐに出動した。

ヘリコプター内

その中にはバリアジャケット状態のスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガ、シャマル、リインとアイエフ、九兵衛もいた。コンパは乗り物酔いで横になっている。

パイロットはヴァイス・グランゼニックと言う青年である。

そして出勤してから5分がたった。

ヴァイス「それにしてもたった1人で機動四課に喧嘩売るなんて・
・自殺行為にもほどがあるだろ？」

ヴァイスが信じられないような事を言い出すと、リインはあり得ないような感じの顔をする。

リイン「そ．．．それが．．．信じられないことに、機動四課
がもう壊滅状態まで追い込まれているそうです」

エリオ「機動四課の壊滅状態!？」

まさかあの機動四課が壊滅まで追い込まれているとは思ってもよらな
かった。

エリオは思わず大叫びする。

さらに信じられない事をリインは言い出す。

リイン「しかも、他の機動部隊の援護でも次々と返り討ちにされて
．．．1500人以上の死者が出ています!」

ティアナ「な．．．何よそれ!? 思いつきりヤバイじゃない!」

キャラ「敵が．．．よほどの手誰であると考えるべきですね」

あり得ないと大きな声で言い出すティアナに冷静に判断するキャラ。

九兵衛「それで、敵の特徴的な事はなんだ？」

九兵衛が敵はどういう人物なのかを聞き出すと．．．

リイン「敵は、使用するデバイスは紅く輝く大刀、さらには金髪の
長髪で仮面をかけているそうです!」

敵の特徴を聞いて、相手は剣で戦う魔導士であると分かったフォワード部隊。

アイエフ「・・・ネプ子、早く着けばいいけど・・・」

早く来てほしいネプテューヌに心配するアイエフであった。

一方ネプテューヌと銀時達は六課へ帰る途中、シャマルから携帯が鳴った。

ネプテューヌ「はい、もしもし？」

シャマル ネプテューヌちゃん！大変なの！！

ネプテューヌ「え！？何があつたんですか！？」

シャマル そ・・・それが機動四課が何者かに襲撃されて今でも壊滅状態なの！

ネプテューヌ「ええ！？」

まさかの事件に驚くネプテューヌ。

どうして機動四課が突如襲われたか理解できないが、ただ事じゃないようなのは確かである。

シャマル 機動六課も応戦しに来たからネプテューヌちゃんも急いで！銀さんにも後で連絡するから急いで！

ネプテューヌ「分かったよ！今、銀さんと一緒にいるから機動四課に応戦しに行きます！」

シヤマル　お願い！

そして携帯を切り、ネプテューヌ又は銀時を振り向く。
何やら事件が起こったようであると銀時も思い込む。

ネプテューヌ「銀さん！機動四課が何者かに襲撃されて今、壊滅状態に追い込まれています！」

銀時「機動四課？おいおい、それって機動六課以外にも機動部隊が存在するのかわ？」

ノワール「たしか機動部隊はそれぞれ、一課、二課、三課、四課、五課、六課の六部隊があつたわよ」

ベール「それより早く機動四課を助けますわ！銀時さん！」

銀時「おし！急ぐぞ！」

銀時とネプテューヌ達は急いで走り出し、機動四課に向かう

機動四課

そこは地獄の光景へと変化していた。

炎に包まれているかの様な崩壊していく基地。

数多くのバラバラに斬られた死体に、重傷で倒れている魔導士もいた。

火事の消火活動や怪我人の治療など数え切れないしなければならぬ事が山ほど存在する。

そこにははやて、ザフィーラ、リインフォースの3人も救助活動を手伝っていた。それほどまでに人手が足りないのである。

到着したフォワード部隊のスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フ

リード、ギンガ、それにリイン、シャマル、ヴァイス、コンパ、アイエフ、九兵衛はむごい光景に残酷さを感じた。

スバル「何……これ？」

エリオ「こんな事が……起こるなんて……」
キャラ「酷い……」

スバル、エリオ、キャラの3人もあり得ないと思えるほどの信じられない表情をする。

こんな酷い事を……しかも1000以上の機動四課の魔導士達を全て1人で倒した事が尚更信じられないのである。

アイエフと九兵衛は地獄のような光景に苦しそうな表情をするが、コンパは悲しそうな眼でその光景を見る。

コンパ「なにをしているんですか……」

コンパが全員に言い出す。

スバル達はコンパに振り向くと……そこにはいつものコンパとは思えない真剣な雰囲気を表している。

コンパ「じつとしている暇があるなら、早く助けてあげます！」

スバル「は……はい！」

九兵衛「そ……そうだったな」

静けさに真剣な声で言い出すコンパ。

そしてティアナ達は急いで救助活動をした。

ヴァイスも流石に見過ごせないのか参加する。

スバル、ティアナ、エリオ、キャラ、フリード、九兵衛、コンパ、アイエフは基地内にまだ取り残されている人の救助に向かい、シャマルは怪我人達を治癒魔法で治すのであった。

リンはシャマルとユニゾンしてシャマルの治癒魔法の効力を上げていた。

ヴァイス「一体、誰がこんなことを……」

誰がこんな酷い事をしたのかは、怪我人を運びながらヴァイスは考える。

そして安全なところまで運び出すところ思い込んだ。

1人でこれほどの被害を出すこと以前にどうしてこんな卑劣な事をしたのかを考える。

アイエフ「分からないけど言えることはたくさんあるわ」

そんなヴァイズにアイエフが言い出す。

アイエフ「死体を見て調べただけど……刃物による切傷と体が切断されているのが多いわ。つまりそれは相手が剣を使う魔導士である事は間違いないわ」

ヴァイス「マジかよ？」

アイエフの予想にヴァイスが驚きだす。

だとすれば相手は剣の達人な上に相当な魔力を持っているのに違いないであろうと考える。

アイエフ「それより……どうやらさらに厄介のがくるみたいね」

アイエフが空を見上げてそう言うと、そこには数多くのガジェットがこの機動四課に襲って来ている。

そのガジェットは新型である。人型をしていてそれぞれ別々の武器

を持っているものや、二足歩行のもの、胴体部分が大きいものがない。

おそらくあれは『鬼兵隊』の作った最新兵器のガジェットであり、戦闘力はかなり高そうであった。

機動四課の隊員達は怯えだして体を震わせている。

無理もない、唯さえ壊滅状態に追い込まれたあげくにさらにガジェットによる襲来は、今の機動四課では戦力にならない。

アイエフはカタールを取り出して戦闘モードに入る。

アイエフ「ここで死んだら元の子もないわよ！」

ヴァイス「……………俺も加勢するぜ！」

ヴァイスはそう言って、狙撃銃のデバイス『ストームレイダー』を撮り出す。

実はヴァイスはヘリパイロットを勤める青年で、ヘリ操縦士としては最高位のA級ライセンスを保有している。

しかし過去に武装隊に所属しており、スナイパーとしての腕も確かであった。

だが立て籠もり犯を狙撃する任務でミスショットし、人質であった妹ラグナの左目を潰したことがトラウマとなり武装隊を辞めた過去を持つ。

今回はこれ以上の被害を食い止めるために自分もヘリパイロットではなく元武装隊のメンバーとしてガジェットの排除をすることにした。

一方の銀時とネプテューヌ達は急いで走って機動四課の基地に向かって走っている。

一般人は幸い非難している為、誰もいない。
だがもうすぐ到着する中、ガジェットが機動四課に襲ってきているのが分かる。

銀時「おい、なんかガジェットがジャンジャン襲ってきていねえか？」

ネプテューヌ「ヤバイよ！早く到着しないと！」

大急ぎで機動四課の基地に向かう5人。

????「悪いがここで通行止めだアアアアアア!!!!」

銀時・ネプテューヌ達

「っ!!!!!!??」

突如上から声が聞こえ、銀時とネプテューヌ達は瞬時に下がる。

そして一瞬何かが地面に突撃し、火柱が立った。

そして火柱がおさまると、中心に赤い髪の女性がいた。

ブラン「誰だお前！」

バーニン「あたしの名はバーニン、『業火の破壊者』のバーニンさ！」

赤髪の女性・バーニンは両手に炎を出して言い放つ。

銀時「てめー、問答無用で突っかかってきやがって、戦闘機人ですかこのヤロー」

喧嘩を売るような口調で挑発する銀時。だがバーニンは別の部分に反応する。

バーニン「戦闘機人？ちげーよ。あたしはそんなもんじゃねえ。戦闘機人よりも高度な技術で作られた『魔道機人』さ！」

銀時「魔道機人？つか戦闘機人より強いだと！？」

初めて聞く魔道機人が戦闘機人より強いということに驚く銀時。

バーニン「そのとおり！なんせ魔道機人は…魔道機人は……………」

銀時・ネプテュー又達「？」

バーニンは何か説明しようとしたら、固まった。銀時たネプテュー又達は首をかしげる。そして、

バーニン「うがアアアアアアアア！！分かるかちくしよオオオオオオオ！！！」

隣のビルにやつあたりで壊すバーニン。

銀時「おいイイイイイイ！！やつあたりで壊しちゃったよオオオオオオ！！！」

ネプテュー又「あはははは！もしかして頭が悪いのかな？あはははは！！！」

バーニン「うっせエエエエエエ！！！テメエ黙れエエエエエエエエ！！！」

銀時はやつあたりのバーニンに突っ込み、ネプテュー又は笑い、笑うネプテュー又にバーニンは顔を赤くして怒鳴る。

????「あはははは！！バーニンったらホント馬鹿だね〜」

????「本当に一方通行な奴だな。クッククク」

何処からかバーニンを馬鹿にする声が聞こえる。

バーニン「うっさい黙れ！！あたしの喧嘩の邪魔すんなよ！！」

バーニンは上に向かって咆哮を出す。

銀時達は上を見上げるとそこに水色の髪の少女と、紫髪の少女がいた。

銀時「仲間がいやがったのか！？」

????「いや、まだいるぞ」

今度は正面から声が聞こえた。

そこから、腰までである白髪で左目に眼帯をつけている軍人的な女性と、一番身長が高く茶色っぽい髪の女性と、黒い髪で装備が堅そうな女性がいた。

水色の髪の少女と紫髪の少女が降りてきて、バーニンは女性達のところへ行く。

ファルコリア「私の名は『大空の旋風者』ファルコリア。『魔道機人』のリーダーをやっている」

ランドル「わしは『歩く隕石獣』のランドルじゃ」

メーティア「『鋼鉄の重戦士』メーティアです」

バーニン「さつき言ったと思うが、『業火の破壊者』のバーニンだ」

アイシー「『絶対零度の闘士』のアイシーだよ」

シャチール「『闇夜の暗殺者』のシャチールだぜ？」

女性達はそれぞれ二つ名と自己紹介をする。

銀時「おいおい、魔道機人勢揃いですか？」

ノワール「油断しないで。こいつら強いわよ」
銀時「わーってるよ！」

銀時達は武器を構える。

だが、銀時とネプテューヌ達はある気配を感じて横を振り向いた瞬間……

銀時・ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール
「!!!??」

紅い大刀を持った仮面をかけた少女が、もの凄いスピードでこちらに襲ってきている。

銀時とネプテューヌ達は流石に驚きだしている。

そして少女はそのまま大刀を大きく素早く振ると、

ガキーン！

そのままスバルに振り下ろされた。

だがネプテューヌは木刀を少し抜いて、一太刀を受け止める。

銀時「ネプテューヌ！」

銀時はネプテューヌの名を叫びだす。

ネプテューヌ「うう!!」

しかしその一太刀は異常なまでに重かったが、苦しみながらもネプテューヌは木刀を抜き出し、そのまま大きく振ると少女は押し返されて、宙に飛ばされるが逆回転して陸に着地した。

銀時は木刀を抜いて片手で強く握って構える。

そのまま少女を見るが、銀時はある事を気づく。
とてつもない威圧感に強い闘志。
こいつは只者じゃないって言うものじゃない。

強い修羅。

とてつもない血の匂いと絶対的な覇気は夜兎族やとぞくや茶吉尼族ぢきみぞく、そして辰羅族しんらぞくにも匹敵する強い気を感じるのであった。

ただの人間じゃない、もしくはファルコリアとかバーニンとかと同じ魔道機人。

いずれにしても銀時はその少女がゾーマ以上に危険な人物である事を確信する。

一方のネプテューヌ又は只者じゃないとは知っているが、何やら親しい雰囲気を表しているのは気のせいかと思ひ込む。

ファルコリア「お戻りになられましたか」

ファルコリアが少女に言う。

どうやら少女はファルコリア達のリーダーだと思われる。
そして少女は喋りだす。

???「まさか、こんなところでネプテューヌさんにお会いするだなんて思いもありませんでした・・・」

少女が喋りだすと、ネプテューヌ又は信じられない表情をして驚きだす。

どうして少女がネプテューヌの名を知っているのか？
それに少女の声は、どこかで聞き覚えがある。

ネプテューヌ「・・・・・・なんで私の名前を・・・・・・って言

うか今の声……まさか……」

信じられないかのような表情をするネプテューヌは眼を大きく開けて恐る恐ると少女に聞き出す。

そして少女は仮面を取り出す。

その顔は、さらさらとした長い金髪に翡翠色に輝く瞳。

ネプテューヌ「……イリス……さん……？」

ネプテューヌが公園で出会った少女・イリスなのだから。

〜おまけ〜

銀八「教えて！」

全員「銀八先生……！」

イリス「こんにちは、オリジナルキャラクターのイリスです」

銀八「つーか真王、なんで悪役な奴を入れるんだ？」

真王「教えません、ネタばれだから」

銀八「……………じゃあ行くか。ペンネーム『黒龍』さん。『黒龍』どころやら報復にこなかったか」

銀時「来たらどうしたんだ？」

黒龍「そりゃあフェイトの物体X最強バージョンで撃退してた」

銀時「……………（真っ青）」

ソラ「それはそうと、サチコの料理のレベルが少し上がったみたいだ」

サチコ「そうなんだよ」

銀時「マジで！？つうか、なんか感想でサチコがレギュラーみたいになってんのもおかしくね？」

ソラ「まあそこは置いとけ」

サチコ「じゃー私は戻って皆に食べてもらっねー」

ソラ「ああ、今度こそうまいと言わせるよ」

サチコは真王さんの所に戻って行った。

銀時「なあソラ。実際食える位にサチコの腕は上がったのか？」

ソラ「ああ、一応泡吹くぐらいまでにはなったな」

銀時「あんま変わってなくない!？」

黒龍「ソラはよく意識を保っていられるな」

ソラ「なんだか最近耐性が付きつつあるようだ」

銀時「うわ・・・もう末期だな」

黒龍「じゃ、じゃ感想いきます。

1・銀時ラバーズと女神人は皆処女ですか(黒笑)

2・真王さんのフェイトもこっちのフェイトと同様に物体X級の料理を作るんですか？

3・ぶつちやけ九兵衛いらなくね?(黒笑)

どうですか？」

銀時「どれもまともな質問じゃないんですけどおおおおおおおお
おおおおお!!!(真っ青)」

ソラ「こっちに報復に来たらどうするきだ？」

黒龍「その時はフェイトの物体Xで迎え撃つ」

銀時「完全フェイトイジメだよこいつ」

ネス「予想出来ちゃうけど…」

リュカ「言っちゃ駄目だよ…」

ルイージ「ナンバーズの皆に質問『バリアジャケットを作れるなら
どう言うのにする?』」

フォックス「スカリエッティに質問『内のマリオ見てどう思う?』」

ネス「銀さんとネプテューヌ達を除いた皆に質問『真王さんが知っ
てる漫画、アニメの世界に行けるならどこに行く?』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます 『』

ナンバーズ「いらない(わ)(ぞ)(っす)」

真王「いつもの戦闘服でいいってことさ。んじゃスカリエッティ」

スカリエッティ「是非興味があるね。彼を連れて解剖させてくれる
かい?」

真王「だめ。3つ目」

新八「僕は藍藍島がいいです!」

神楽「私は何処でもいいね」

桂「俺も何処でもいい」

エリザベス『桂さんと同じく』

月詠「『天誅シリーズ』の世界じゃの」

なのは「私は銀時と同じところがいい」

フェイト「わ、私も／＼」

はやて「うちは桂さんと一緒がいいんや／＼」

シグナム「オリンポスコロシウムだ」

ヴィータ「マリオだな」

シャマル「『デイスガイア』の世界で回復魔法の修行をしようと思います」

ザフィーラ「『テンガン山やりのはしら』で修行だ」

リインフォース「わ、私も銀時と・・・ゴニョゴニョ／＼／＼」

スバル「アデルさんのところです」

ティアナ「ダンテさんのところね」

エリオ「特にありませんね」

キャロ「私もないです」

ヴィヴィオ「ネブ姉ちゃんのがいい」

イリス「いろいろありますね。では『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってください」

銀八「次はペンネーム『sibugaki』さんからの質問だ。』
返答有難う御座います

田楽マンは喜んでその辺と飛び跳ねていたので鬱陶しかったから蹴り飛ばしておきました
さてと・・・それじゃ質問です

魚雷ガール

「この小説に出てくる女の子達に質問するわ！私の後継者となってボケ殺しになりたい子は居ない？いたら先生とマンツーマンで修行してあげるわよん」

絶対に居ないと思いますよ魚雷先生

・・・さて、続いての質問は？

」

「我が名は」。貴方達に問いたい。貴方達はその両の拳で何を語っているのか？」

返答に難しい質問だなあこのタマネギ野郎は・・・
んじゃ今回はこの辺で失礼しまあす』・・・まあぶっちゃけ2ついつぺんに言つと

全員「やらないし知らない」

イリス「同意します」

銀八「んじゃ『sibugaki』。廊下に永遠に立て」

イリス「最後です。ペンネーム『黄色いのなにか』さんからです。

『ネプテューヌに質問

なのは達の目の前で銀時に濃厚なでーぶキツスとかしないんですか？そうすればより今まで以上に修羅場が見れますよww』…って
なんですかこれ？」

質問の内容に疑問を抱くイリス。

ネプテューヌ「私に喧嘩を売れと？でもいいよ。潰してやるから」

銀八「いいのかよ！？『黄色いのなにか』さん。もう少しまともな質問をしてください！」

第三十六訓：奇襲を受けたら対応が難しくなる（後書き）

真王「銀時とネプテューヌ達の前に現れたイリスと魔道機人達。彼女達の秘密にネプテューヌは……。そしてイリス達のマスターの正体が」

イリス「次回『人は怒り出したら止まらない』テイクオフです」

第三十七訓：人は怒り出したら止まらない（前書き）

真王「銀時は白夜又へと覚醒！謎の黒幕、シグマが登場！蘇る高杉
との思い出！そしてネプテューヌに異変が起きた！」

イリス「『リリカル銀魂』、スタートです」

第三十七訓：人は怒り出したら止まらない

ネプテューヌ「……………何で……………何でイリスさんが……………それにどうしてここに……………」

なぜイリスがここにいるのか理由を聞き出すと、イリスは顔色変えずにこたえる。

イリス「……………先ほど、『機動四課』の所に襲撃して数多くの魔導士達を斬り倒してきた所です」

銀時・ノワール・ブラン・ベール「な!?!」
ネプテューヌ「!?!」

イリスの質問の答えに銀時とノワールとブランとベールは驚きだして額に汗を流し、ネプテューヌはイリスの衝撃な発言に信じられない表情をする。

イリス「機動部隊は幹部と同じく裏の部分があつた。そのせいで私達の知らない所で人々は苦しんでいて数多くの者が亡くなった。そんな連中は生きていく価値はなく、『機動四課』を壊滅させようとした。それだけの事です」
ネプテューヌ「……………」

イリスの答えにネプテューヌは無言になる。

イリス「それにこの機動四課の壊滅はマスターの命令による物です」
銀時「そのマスターの命令の為なら、人を殺すのもためらわないって訳か？」

銀時が睨みつけてイリスに質問すると・・・イリスは答えだす。

イリス「ええ、その通りです。今回マスターが私に命じた任務は『機動四課』の壊滅です」

イリスは残酷に言い放つ。

ネプテューヌ「イリスさん・・・なんで・・・」

イリス「言っただけです。マスターの命令を受けただけです」

ネプテューヌは聞くものの、イリスは一蹴する。

バーニン「もしかして頭悪いのか？あん？」

アイシー「そりゃあんたじゃないの？」

バーニン「んだとお!!」

後ろで喧嘩し始めたが、全員スルー。

ネプテューヌ「あんなにやさしそうに・・・あんなに嬉しそうにしてたイリスさんが・・・なんで・・・」

ネプテューヌはプルプル震えてイリスに言い放つ。

ネプテューヌ「なんで・・・何でこんなおふざけみたいなことするの!?!?!」

・・・ものすごくどうでもいいツッコミであった。

銀時・ファルコリア・バーニン・メーティア

「いやなんでだああああああああああああああああ!!?!?!」

銀時「おい、ネプテューヌをどうする気だ!？」

銀時はその魔法陣に入ろうとするが、特殊な透明な壁が防いで銀時を入らせないでいる。

銀時は木刀を振ってその壁を破ろうとするが、見えない壁が木刀を防ぐ。

イリス「ワンウォーコロシム。一対一で戦う為の結界魔法。坂田銀時はここで見ているが良い。私とネプテューヌさんの殺し合いを……」

イリスはそう言ってゼロセイバーを構えだす。

ネプテューヌ「イリスさん、私はあなたと戦う理由はないよ……」
イリス「問答無用です。……覚悟しろ!」

IBGM:VSイリスbyロックマンX4
(Mega Man X4 OST, T27: Iris)

すると凄まじい勢いで飛び掛ってイリスはゼロセイバーを大きく振り、ネプテューヌを襲う。

ネプテューヌ(……やるしかないね!)

ネプテューヌはその一太刀を受け流す。

そしてそのまま体を回転させて木刀を峰のほうに構えて神速の速さでアーサアの後頭部を狙って振るう。

だが、

イリス「甘い！」

イリスも神速の速さで移動してネプテューヌの一太刀を交わす。背後の気配を感じて後ろを向くと・・・そこには跳躍していてゼロセイバーを構えているイリスの姿があった。

イリス「はあああああああ！」

イリスは神速の一太刀を炸裂させるが、

ネプテューヌ「甘いのはあんただよー！」

イリス「何！？、ぐあー！」

わずか数cmギリギリでかわし、イリスの顔面を殴り飛ばす。

しかしそこでネプテューヌは神速並みのスピードで木刀を振り下ろすが、イリスは持ち直してゼロセイバーで防ぐ。

イリス「やってくれましたね。『ゼロセイバー』！」

ゼロセイバー「承知した

ガシャン

イリスは反撃でゼロセイバーのカートリッジをロードし、ゼロセイバーに炎が纏う。

ネプテューヌはそれを見て防ごうと思ったが、

イリス「無駄です！烈火塵！」

ネプテューヌ「うわあっ！！！」

炎の斬撃の衝撃に吹っ飛ばされた。

銀時「まずいな。ネプテューヌを助けねえと」

このままじゃまずいと銀時は判断してスカリエッティから貰ったデバイスを使用する事を決意する。

だが突如、銀時の後ろから大量のガジェットが現れた。

銀時「!?…………こいつ等！」

突如現れたガジェットに銀時達は驚きだす。

しかも最新型であり、武器を持っている人型や、二足歩行型、胴体部分が大きいものがいた。

おそらくはスカリエッティが言っていた『鬼兵隊』が作り上げたガジェットのようである。

銀時「テメエら邪魔すんじゃねー！！！！！！」

そのガジェットが銀時を襲いだし、銀時とノワール、ブラン、ベールは仕方がなく対抗するかのようになり、木刀とショートソード、ハンマー、パイクを強く握ってガジェットの軍勢に飛び掛る。

ネプテューヌ「やあああああああああああ！！！！」

イリス「はあああああああああああ！！！！」

一方、ネプテューヌとイリスの戦いではすさまじくなっている。

ネプテューヌ「そんなの効かないよ!!」

しかしネプテューヌは木刀で野球のように撃ち返した。
そして撃ち返した物の一つ一つは、

バーニン「ぎゃあああああああああ!!!!」

全部バーニンにあたった。

アイシー「あの子なかなかやるね」

ファルコリア「うむ、余程の修行をしてきたと見えるが、イリス様はまだ強い」

ランドル「いや、まだ勝負は分からんぞ？」

バーニン「おい!すこしはこっちの心配をしるよ!!」

バーニンは怒鳴るが、みんなスルーである。

その後、ネプテューヌとイリスから爆発が起きた。

晴れると、ネプテューヌの左肩が少し斬られて血が少し出ていて、イリスの右腕の部分も浅く斬られた。

そして互いに起き上がると振り向いて見届ける。

イリス「なるほど、剣術の腕も魔力もまず隊長級は言っても良いでしょう。……ですが貴方が私に勝つ事は不可能です」

ネプテューヌ「言ってくれるね!どうしてそんなことが言えるの!」

ネプテューヌはイリスに問う。

イリス「理由は1つ。それはマスターの行っている研究の1つであ

る『プロジェクトDNA』だ!」
ネプテューヌ「『プロジェクトDNA』?」

聞いた事がない特殊な研究に頭をかしげるネプテューヌ。
その研究は恐ろしいものであった。

イリス「『プロジェクトDNA』……それはDNAと他人のDNAと合成させて、戦闘力を急激に増す強化研究の事です」
ネプテューヌ「え!?!」

そんな事が出来るのかつと云うばかりに驚くネプテューヌ。
つまりイリスはその研究によって大幅に強くなったとネプテューヌは考えるが、そんな甘い程度じゃなかった。

イリス「特殊な生体ポッドの中にいれ、他人の血液を体内に注入させ、そのまま一ヶ月ぐらい眠らせるだけで、急激に戦闘力を上げられます。その研究の実験台になった人は1000人。ですがその内成功したものは私1人。他の999人の人はその研究に耐え切れなく息絶えて亡くなった」
ネプテューヌ「なっ!?!」

まさに命を玩具のように扱ってまでの残酷な研究である。
どうしてイリスだけが研究に成功したのかをイリスは言い出す。

イリス「何故私以外の戦闘機人が研究に耐え切れずに死んだのかを、研究の実験台として成功させた私にマスターが教えてくれた。成功させるに合成させるべきDNAの持ち主は、魔力の高い者や頭が冴える者のDNAではない。人間の常識をはるかに超えた潜在能力が高い者のDNAでなければ研究が成功しない。それもあの生物型口ストロギアである魔導生物兵器『ゾーマ』をも上回る潜在能力の持

ち主のDNAが……」

イリスが研究の失敗原因を言い出すと、ネプテューヌは驚きと信じられない衝撃が交じり合ったかのような表情をする。

ゾーマを上回る身体能力の持ち主。すなわち魔法なしでゾーマを倒せる実力者。

イリス「そう、『プロジェクトDNA』の研究でマスターが私のDNAに合成させたDNAの持ち主は……貴方を守る強さを教えた尊敬すべき人物……『白夜叉』坂田銀時のDNAだ！」
ネプテューヌ「銀さんの……DNA!？」

まさかの衝撃的な真実。

銀時の潜在能力の高さはSS+級に当たり、そんなのを合成させればイリスはまちがいになくゾーマをも上回る。

ただ、一つになる事は銀時のDNAと合成させた事である。

銀時のDNAって事は、銀時の血液などを利用した事になる。

だとすれば、一体どこで銀時の血液を手に入れたのかは不自然に思うネプテューヌ。

イリス「話はここまでだ。マスターの為、今ここで私は貴方を討つ！」

イリスはそう言って、カートリッジの弾丸をゼロセイバーに2発装填させると、

イリス「『ゼロセイバー』、カートリッジロード!」

ゼロセイバー Yes sir!

ガシユンx9

アーサアはカートリッジを9発ロードする。
すると、ゼロセイバーの刀身から、真紅のまばゆい光が大きく溢れ
出る。
とても異常なまでと言えるほどに光が凄まじい勢いで輝きだしてい
る。

銀時「てやあああああああああ！」

ズバーン！

一方の銀時達は大急ぎでガジェットを破壊した。

銀時「ちい、何とか片付いたか！」

今ので最後の一体であり、全てのガジェットを破壊した銀時達はネ
プテューヌの救出に向かおうとするが、そこには魔力を最大限に収
束しているイリスがいた。

ノワール「な、何よあれ！」

ベール「何ですのこの力は……」

ブラン「嫌な予感がする……」

ノワール、ブラン、ベールはイリスの力に驚く。

ファルコリア「あれはイリス様の必殺技、『ゼロブレイカー』を放
つつもりだ」

シャチール「必殺技を出させるだなんて相当な奴だったってわけだ

な？」

銀時「テムエら、どういう意味だ！」
メーティア「みてればわかる」

イリス「これで終わりです。ゼロブレイカー！！！！！！」
ネプテューヌ「うわああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

ゼロセイバーからは極大な紅き閃光が放たれる。
ネプテューヌ又はその閃光に飲み込まれる。

イリスの張った『ワンウオーコロシウム』でさえもあっという間に粉々に破壊されて大爆発する。

やがて爆風は消え、風がおさまる。銀時達が伏せていた顔を上げた。
そこにいたのはほとんど焼け焦げていて、ふらふらと揺れているロボロボのネプテューヌだった。

銀時「ネプテューヌーーーー！！！！」

銀時はネプテューヌに叫ぶ。

イリス「驚きました。まさか、我が『ゼロセイバー』を受けてまでまだ立っていられるとは……」

いつの間にかイリスがネプテューヌの前にいる。
そして……

イリス「ですが、やはり私に勝つ事は不可能でしたね」

イリスはネプテューヌに手を出そうとした。

ブシュ！

突如、左手に木刀が刺さりだした。

銀時「オイ」

声が聞こえた。

その声の持ち主は銀時であった。

銀時「……………その手で……………触んじゃねえ」

相当な怒気を放っており、それはイリスをも圧倒する。

銀時「その綺麗に見えそうな薄汚く染まった手で、ネプテューヌに触んじゃねえ」

イリス「あ……………貴方は……………!?」

今の銀時はいつもの銀時じゃなかった。

怒りによって覚醒した伝説の白夜叉そのものであった。

そして左手を突き刺した木刀を抜き、イリスの左手から血があふれ出て来ると……………

直後、大きな打撃音と共にイリスが吹き飛んだ。

イリス「ぐはあああつ!!」

魔道機人組「イリス（様）!?」

イリスは、十数メートル先まで吹き飛ばされる。

魔道機人組はイリスに駆け寄る。

イリスが、頭を押さえながら起き上がった。

頭には血が溢れていて、相当な一撃を喰らったのである。

動揺しながら震える足で、何とか立ち上がった。

その時、

銀時「テメエ……今、自分がやった事を分かっているのか？」

銀時のドスの効いた声が聞こえた。

イリスは銀時を見た。その瞬間、銀時から凄まじい怒気を感じ、イリスは恐怖を感じながらも警戒する。

銀時「テメエはネプテューヌとどういう関係か知らんが、優しくしたネプテューヌをその手で傷つけたんだぜ？」

躊躇いもなくネプテューヌを傷つけたイリスの事を、銀時は許せなかったのである。

ネプテューヌを傷つけたイリスは、かつての戦友であった高杉と重なり合ったからである。

銀時「それがどれ程までに、とんでもない事であるかを……分かっていいるのか？」

今でも斬りかかりそうな銀時の怒り。

それは正に獲物を狩る獣の眼をしている夜叉その者である。

ノワール達も、ファルコリア達も、銀時の怒りにたじろいでいる。

銀時と双壁の実力を持ったイリスと言えども、今の状況では銀時に勝てるかどうか分からない。

いや、万全な状況でも、白夜叉として覚醒した銀時と戦う事が無謀である。

このままでは殺されると思ったその時であった。

???「ほう？これはこれは……あの有名な『白夜叉』にお眼を合わせることが出来るとは……」

突如、イリスの後ろから1人の男が現れた。

その男は、メカっぽい体にマントを羽織り、ハゲな頭で額に赤くて丸いクリスタルとケツアゴがあるが、いかにも悪人面をしていた。

イリス・魔道機人組「マ……マスター！」

イリスとファルコリア達はその男を見て、『マスター』と言い出す。それを聞いた銀時達は、この男がイリスが言う『マスター』である事を知る。

そして男は銀時に礼儀正しく挨拶をする。

シグマ「始めましてだな、坂田銀時。私はシグマだ。以後、お初めに申しよう」

銀時「……テメエか……イリスに機動四課の壊滅の命を出したのは……」

怒りに睨みつける銀時はイリスに聞きだすと……イリスは素直に答えだす。

シグマ「フッフッフ、その通りだ。……それより如何かな？私の作り出した作品を？」

銀時「作品？」

イリスの『作品』って言葉に銀時は片眉を上げた。

シグマ「イリスは私が作り出した『プロジェクトDNA』を組みこませたのさ」

ノワール「『プロジェクトDNA』？」

『プロジェクトDNA』の事を説明するシグマ。

シグマ「しかし、その子供には驚かされる。『プロジェクトDNA』を受けていないのにも関わらずにイリスと互角に渡り合えるとは……興味があるな」

ネプテューヌの身体能力に興味深そうにシグマは言って笑みを浮かべた。

その時、シグマは凄まじい怒気を感じた。

ネプテューヌから目を離し、目の前にいる銀時を見た。

怒気を放ちながら、銀時はシグマを睨んでいる。

銀時「……テメエがイリスを作品なんて呼ぶんじゃねエ」

凄みの加わった声で、銀時が言った。

シグマは、銀時の怒気に怯む事なく、真っ直ぐに銀時を見ている。

銀時「確かにイリスもそいつ等も、テメーの論理が基になってる技術で生まれた。けどな……」

シグマ「……………」

シグマは、黙って銀時の話を聞いている。

銀時「コイツらを物扱いする野郎は、俺が許さねエ」

????「同感だ！」

銀時の背後から1人の男の声が現れる。
その男はすぐにシグマに斬りかかるが、気づいたメーティアがシルドでその男の一太刀を防ぐ。
だが、右手だけじゃその男の一撃は防ぎきれずに後ろに吹飛ばされるが着地する。

銀時「ツラ、いつの間に！」

桂「ツラじゃない桂だ！」

その男、桂小太郎が現れたのであった。
だが桂の様子が全く違つたと銀時は理解した。
表情では表していないが眼を見ただけで桂の怒りが伝わってきている。

シグマ「これはこれは『白夜叉』に続いて、あの『狂乱の貴公子』ごと桂小太郎に会えるとはな……」

大物にこうも会える事にシグマは喜びだす。

桂「まさか貴様のような下種な男が、イリスとその者たちの生みの親だとは……」

シグマの様な人の命をなんとも思わない人物によってイリスが生み出された事に呆れる桂。
それと同時にシグマに対する怒りを表している。

桂「作品だろうが人造人間だろうが……貴様はその娘の父親であるうちに、作品扱いするなど……人の命を作品扱いした貴様をこの桂小太郎が天誅を下す！」

ネプテューヌ「があっ!?!」

暴走するネプテューヌをランドルが一撃で沈める。

ランドル「……………」

その時ランドルが何かネプテューヌの耳につぶやいたように見えたが、銀時達は聞こえなかった。

銀時「ネプテューヌ!?!」

ランドル「安心せい。加減して気絶させただけじゃ」

銀時達が駆け寄り、ランドルが銀時達に安心させるように言う。

桂「本当だ。腹部に軽いあざがあるだけだ」

銀時「そうか…」

銀時達は安心する。

ランドル「…………次に会うときはお主らと戦うことになるじゃろっ。さらばじゃ」

ランドルはそう言って、シグマ達と共に消えた。

銀時達はそれを追わずにネプテューヌを心配する。

神楽「銀ちゃんんんん!!」

後ろから、神楽が駆けつけてきた。

神楽だけじゃない。エリザベス、月詠、近藤、土方、沖田、山崎、スカリエッティ、ルーテシア、ナンバーズが駆けつける。

月詠「銀時、桂、大丈夫か！」
チンク「怪我はないか!？」

月詠とチンクが心配そうに声をかけると・・・

桂「俺と銀時は大丈夫だ」

銀時「それより、ネプテューヌが！」

銀時と桂はネプテューヌの事を心配していた。
傷はかなり重傷で一刻も早く手当てが必要である。

近藤「なあ！ネプテューヌ殿!!」

ウエンディ「大変です！早く治療をしないと！」

近藤やウエンディもネプテューヌの酷い怪我に驚きを隠せなかった。
その後も機動六課もすぐに援護に来たが、ネプテューヌの重傷に驚きを隠せなかった。

特にコンパは涙が流れそうな程、心配していた。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

バーニン「オツス。『業火の破壊者』バーニンがアシストするぜ？」

銀八「そんじゃ、ペンネーム『月光閃火』さんからの質問、『よお
：月光閃火だ。』

っていうか、興味無いつて：クツ：（涙）！！

輝刃「あゝあゝ：閃火の奴男泣きしてしまったな……。とりあえず、
まずは俺から質問だ。」

1・イリスに質問だ。銀魂の原作本読んでの感想は如何程だ？あと
作者よ：もし新八にデバイスを持たせるなら、ぜひV2ガンダムみ
たいな感じでプリーズだ！

クツ：（涙）！声優ネタか：悪くないな……。次は俺からだ！

2・ノワールとティアナに質問だ。二人はよく『ツンデレ』だと言
われてるが：俺は嫌いじゃねえぞ『ツンデレ』は。っていうかむし
る俺の好みのタイプにどストライクだ！（親指を立てて『Good
！』のポーズをしながら、白い歯を輝かせた左ウインクの笑顔を見
せる）

輝刃「：あまりキザなポーズはせん方がいいと思うぞ？古臭いと言

われかねんからな…（汗）。」「」

イリス「そうですね。面白かったです」

真王「新八のデバイス計画ですが、考えておきます。って言うか新八は魔力なくてもてるのか？」

銀八「知るかよ。2つ目だ」

ノワール・ティアナ「誰がツンデレよっ！！！！っーか古いわぁ！！」

銀八「だよな。『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

バーニン「本当に古いよな。んじゃペンネーム『鳴神ソラ』だ。『予想していた通りになったな…』

マリオ「だが…敵は複数だな…」

ソニック「YES！色々と曲者揃いなメンバーだな」

スネーク「実力もそうだが…口調も色々とあるな…」

フォックス「確かに！」

ルイーダ「どうなるんだろうっね…」

ネス「なのはさん達魔法使いの皆に質問『もし自分が魔法と関わってなかったら他にどう言う職業に就いてた？』」

リユカ「ナンバーズの皆さんに質問『自分の武器以外で銀さん達の

誰のを武器を使ってみたい?』」

マリオ「銀時とネプテューヌ達に質問『スーパー戦隊に変身するなら誰にする?』」

それでは次回を楽しみにしてます』」

なのは「私は翠屋で店長をやってたかな?」

フェイト「旅人かな?」

はやて「うちは保育士や」

シグナム「剣道の師だな」

ヴィータ「ゲートボールアイドルをやってたかな?」

シャマル「看護師ですね」

ザフィーラ「私は犬のままなのか?」

リインフォース「主と同じ保育士ですね」

スバル「武道家かな?」

ティアナ「軍兵をやるわね」

エリオ「環境保護家をやってます」

キャロ「私も」

ウーノ「武器は要らないわ」

ドゥーエ「アイエフのカタールね」

トーレ「アイエフが所持するクローを使う」

クワットロ「コンパの注射器を使おうかしら？」

チンク「アイエフ殿のカタールだな」

セイン「月詠さんのクナイをナイフ代わりに使うね」

セツテ「『スローターアームズ』以外、武器を握る気はありません」

オットー「武器は無理……」

ノーヴェ「スバルのリボルバーナックルだ」

ディエチ「レイジングハートで砲撃してるかな？」

ウエンディ「あたしには武器がないっす……」

デイド「銀時とネプテューヌの木刀を使います」

銀時「俺は『百獣戦隊ガオレンジャー』の方だ」

ネプテューヌ「私は『侍戦隊シンケンジャー』だよ」

ノワール「『電磁戦隊メガレンジャー』……（ボソッ）かつこ

バーニン「何やってんだ？まいつか。次はペンネーム『黒神』からだ。』質問します。」

この物語には関係ありませんが、アニメ『戦国BASARA弐』を見て、皆さんはどこら辺が一番良かったかを教えてください。』」

真王「この際はつきり言いますが、戦国BASARAなんて知りません！ごめんなさい！」

銀八「しらねえのかよ！」

バーニン「情けねえ！『黒神』、とりあえず廊下に立たなくていいから！」

真王「しかしだからと言って見る気もありません」

銀八・バーニン「オイイイイイイイイイイイイイイイイ！……！！」

第三十七訓：人は怒り出したら止まらない（後書き）

真王「倒れたネプテューヌは病院で目を覚ます。銀時と桂は高杉との過去を話す。そしてある2人が現れる」

バーニン「次回『病院で騒ぎを起こすのはよくない』テイクオフだ
！」

第三十八訓：病院で騒ぎを起こすのはよくない（前書き）

真王「今回はイリスのデバイス『ゼロセイバー』ほ秘密が明らかに
？そしてシグマのところに不安を抱くものが・・・」

ファルコリア「『リリカル銀魂』始めるぞ」

第三十八訓：病院で騒ぎを起こすのはよくない

聖王病院の一室。

窓際にベッドが一つ。その上に、ピンクっぽい紫の髪の少女、ネプテューヌが眠っていた。

ネプテューヌは意識を取り戻し、目を覚ました。

目に入ったのは白い天井。

ネプテューヌ「……ここは……?」

銀時「気づいたか、ネプテューヌ」

横から声をかけられ、その声かしたほうを振り向くと……そこには銀時とコンパがいた。

後ろには桂とエリザベス、ノワール、ブラン、ベール、アイエフもいる。

ネプテューヌ「銀さん……コンパ……桂さん……エリザベスさん……ノワール……ブラン……ベール……アイちゃん……」

コンパ「ねぶねぶ~~~~!!無事でよかったです~~~~!!!! (泣)」

ネプテューヌが眼を覚ました事に安心するコンパは同時に涙を流す。銀時もネプテューヌの意識を取り戻した事に安心感を感じた。

銀時「すまねえ」

ネプテューヌ「え?」

突如、銀時の謝罪に驚きだすネプテューヌ。

どうやら今回の件に大きな責任を持っているようである。
ガジェットの邪魔が入ったとは言え、ネプテューヌがこんなにも重傷を負ったのは自分のせいであると考ええる。

銀時「あの時、もつと手つ取り早くガジェットを倒していれば・・・
お前をこんなにも重傷を負わせる事は・・・」

ネプテューヌ「い・・・良いんですよ！・・・銀さんのせいじゃないですし！」

コンパ「そうですよ！銀時さんが自分自身を責めることはないです
！」

責任を感じる銀時に、ネプテューヌとコンパは銀時を慰める。

桂「それ以上に敵の実力が相当なまでに高かった。だからネプテューヌ殿は無傷でいらなかった。それだけのことだ」
エリザベス「そうですね」

桂もエリザベスもネプテューヌの実力は知っていた。
そんなネプテューヌをも負かす相手は相当な手誰であると桂とエリザベスは考える。

銀時「・・・しかしまさか、イリスが高杉の野朗と一緒に
しまったとはなあ」

ネプテューヌ「高杉・・・あの、『鬼兵隊』のリーダーである高杉晋介ですか？」

高杉の名にネプテューヌは驚きだす。

今までの事件の黒幕であり、銀時と桂の因縁の相手である『鬼兵隊』のリーダー、高杉晋介。

以前にその姿を見たことがあるが、とても異常なまでに危険な人物

であった。
強いとか言う次元ではない。憎悪、憎しみ、憤怒など数え切れないほどの大量の負の感情が1つの塊となった人間の姿をした黒い獣その者であった。

ノワール「銀時、桂、あの高杉って人と知り合いだったけど……
一体どういう人物なの？」

銀時「……………」

ノワールが銀時にそう言うと、銀時は黙り込む。

銀時「……………世界に喧嘩を売った大馬鹿野郎さ」

ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール・アイエフ・コンパ

「え？」

銀時がそう言うとネプテューヌ達は驚きだす。

銀時「以前、俺やヅラに辰馬が高杉と友に攘夷戦争で天人と戦った事を知っているよな？」

ネプテューヌ達は小さく頷いた。

桂「その攘夷戦争で、俺達は大事な人を失った……………最も尊敬する恩師を」

過去の記憶を思い出しながら、銀時と桂は語った。

銀時「護る事が出来なかった……………その後、俺も仲間と一緒に戦に出た。そこで、また大事な仲間を失っちゃった……………その戦で、変わっ

ちまつた奴もいる……その1人が高杉だ」

恩師である松陽の姿、かつての仲間達の姿、高杉の姿が頭に思い浮かんだ。

銀時「その恩師は俺とツラや高杉にとつてもかけがえのない人で、剣術を教えてくれた人だ。だけど、幕府によって江戸送致されて死刑されてしまった。それが始まりとなって高杉は変わってしまったかも知れねえ」

高杉が変わってしまった原因を銀時は言い出す。

銀時は自分達の事を他人に話さない。それをネプテューヌ達に話したことを桂は流石に驚いている。

銀時「その高杉とイリスが重なってしまったんだよ」
ネプテューヌ「え？」

高杉の世界に対する憎しみと、主の命だけで人を殺めるイリスの存在が一緒である。

銀時「この思いは誰にもさせるわけにはいかなかった……けど、結局ネプテューヌにもさせてしまった」

あの時、容赦なくネプテューヌを攻撃したイリスの姿が世界を憎む黒い獣に変わった高杉と同じに見えたのである。

銀時「だから……ネプテューヌに俺と同じ思いはさせたシグマの野郎だけは絶対に許せねえ」

シグマに対する怒りが芽生えた銀時。

桂やエリザベス、そしてノワール達もシグマの卑劣なやり方を許す訳には行かなかった。

ここで、機動六課のメンバーとナンバーズのメンバーが現れた。

フェイト達もネプテューヌの事が心配でお見舞いに来たのである。幸い、シャマルの治療魔法によって傷は治っており、一週間後には退院できるようである。

ギンガ「いつも妹がお世話になってます。私はスバルの姉であるギンガ・ナカジマです」

丁寧に挨拶するギンガ。
ゲンヤからスバルには姉がいると聞いたが、まさかギンガであるとは思ってもよらなかった。

銀時「どうも、坂田銀時です。趣味は糖分摂取で、キャプテンを志望してます」

あいも変わらずのだらけた挨拶にギンガは啞然とする。

桂「俺は桂小太郎。好物はソ・・・ぶあふあああああああ！」
ウィータ「だからいちいち好物言う必要があるかあ！」

ウィータは思わず桂にとび蹴りをする。
ウィータのツッコミに思わず驚くギンガ。
普段のウィータとは思えない行動に見られないのである。

エリザベス『始めまして、エリザベスです』

そう書かれたポートを出すエリザベスに気味悪く苦笑するギンガ。

ギンガ「あ……あははは……それにしても、あの有名な『白夜叉』ごと坂田銀時に『狂乱の貴公子』桂小太郎が本当に会えるなんて……」

本物の英雄に会えた事は凄くが、イメージが全く違う事に驚く。

ギンガ「それで、あなた達は……」

ネプテューヌ「私はネプテューヌだよ」

ノワール「ノワールよ」

ブラン「ブラン……」

ベール「ベールですわ」

コンパ「ねぶねぶの友達のコンパです」

アイエフ「アイエフよ」

ギンガ「スバルの姉のギンガです」

ギンガとネプテューヌ達も自己紹介した。

チンク「さて、問題なのはそのシグマって男だが……」

チンクはシグマの名を口にする。

ウーノ「確かに、今回イリスに機動四課の命令を出したのもシグマって男のようだね。彼は一体……」

ウーノはシグマが何者なのかは知らないが、考える事はただ一つ。シグマも間違いなくかなり危険な人物である事は確かである。

「???? 今回の敵もかなり厄介なようだな」

扉の外から声が聞こえてきた。

銀時達には聞き覚えのある声。

扉が開いて、ゴーグルをかけた老人が入ってきた。

平賀源外である。

銀時「じーさん！」

銀時は驚きの声を上げた。

新八「源外さん!？」

神楽「あ・・・老いぼれアル！」

桂「源外殿!？」

エリザベス「何故ここに!？」

月詠「主もここの世界におるとは・・・」

神楽、桂、エリザベス、月詠も驚きを隠せなかった。

そう、源外こそ銀時達にこの世界を飛ばした原因人物の1人である。

源外「よオ。元気が野朗共？」

源外が挨拶した。

銀時「俺達はな・・・でもここにいる奴らは・・・」

源外「分かっている。随分と派手にやられたもんだな・・・今回
の事で役に立ってるかは知らないが、あの譲ちゃんが持つ『ゼロセイ
バー』の事である重大な情報が分かった」

ザフィーラ「本当か？」

トール「それは一体！」

源外の言葉にザフィーラとトールはその事を注目する。

源外「その紫の字を負かしたあのデバイス・『ゼロセイバー』を作ったのはウェイリーと言う野郎だ」

源外は、イリスの持つ『ゼロセイバー』が作ったのはウェイリーだと言う。

ちなみに紫の字とは、ネプテューヌのことである。

源外「ウェイリーは100年前に管理局の研究者をやっていたが、ある日管理局をやめ、己の尊重を認めさせるために全力をかけてあのデバイス、『ゼロセイバー』を作りだしたそうだ」
ノール「成程、要は認められたいからあのデバイスを作りだしたのね」

ノールは源外の説明に、納得する。

源外「それで、ウェイリーの死後、その『ゼロセイバー』はロストロギア級に値する部品として管理官に保管されたんだが……10年前に奪われたそうじゃ」
銀時「10年前……まさか」

最後のデバイスが奪われたのが10年前であると聞き、その未完成品のデバイスを奪った犯人が誰なのかを銀時は理解した。

源外「銀の字、お前の感が正しければ間違いなく奪った犯人はシグマかもしれない」

フェイト「シグマが!?!?……どうして!?!」

源外「そこまでは分らん。ワシが知った情報はここまでだ」

シグマがそのデバイスを奪った犯人である事に驚くフェイト。
源外の知っている情報はここまでのようである。

銀時「それにしても爺さん……どこでその情報を……」

源外「何……俺と同じくこの世界に飛ばされたくのーに頼んで
もらい、調べさせてもらっただけよ!」

くの一って台詞に銀時は呆れる。

銀時が思い当たる自分の世界のくの一の存在は間違いなくあの人物
である。

そして……

パリーーン

????「銀さ〜ん!」

その人物が窓を破って現れた。

そして思いっきり銀時にタツクルするかのように抱きつく。

銀時「ごふあああああ!」

銀時は吹飛ばされそうだったが何とか持ちこたえる。
突如の襲撃に誰もが驚く。

特にフェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リ
インフォース、チンク、セイン、セツテ、ウインディ、ディード、
ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、アイエフ、コンパは銀

時にある人物が抱きついてきた事に驚く。
その人物は女性で、ロングヘアで眼鏡をかけているなかなかの美人
女性を見て、銀時は苦い顔をした。

銀時「げっ！お前……！」

???「ついに見つけたよ銀さん！こうして会えるなんて正に結ば
れた愛の運命だわ！」

銀時「結ばれていねえよ！」

銀時に抱きついてるのは猿飛あやめ。通称さっちゃん。

元お庭番衆のくの一で、現在は始末屋をやっている。

銀時に惚れているストーカー女である。

猿飛「照れなくても良いじゃない！私達、S Mプレイを一緒に楽し
んできた仲じゃない！」

銀時「S Mプレイなんてした覚えはねーよ……！」

勝手な事を言うさっちゃんに、怒鳴る銀時。
体から離そうとしているが、中々離れない。
幸せそうに抱きつくさっちゃんだが……

ガジ！

フェイトとなのはに、力強く背中を握られる。
そして……

フェイト・なのは「うおりゃあああああああああああああああ
あああああ！」

猿飛「あああああああああああああああああああああああ！」

フェイトとなのはは思いつきり猿飛を投げつける。
猿飛は吹飛ばされて壁に衝突した。

さらに銀時はこの光景だけはフェイト達だけには見せる訳にはいか
なつた。

なぜならフェイトとなのははどす黒い感情を表しているのである。
2人だけじゃない、ティアナ、アルフ、シグナム、リインフォース
ももの凄く怒りを表している。

スバルとコンパは猿飛の大胆な行動に顔を真っ赤に染めている。

チンク、セイン、セツテ、ウィンディ、デイドはそんな猿飛に少
し妬く。

フェイト「銀時……この人とどういう関係？」（ゴゴゴゴゴゴ
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

なのは「銀さん……また女が出来たんだ」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ
ゴゴゴゴゴゴ！

ティアナ「兄さん……その悪い癖を直してあげようか？」（ゴ
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

シグナム「銀時……この女の事を詳しく話してもらおうか？」
（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

アルフ「銀時……どんだけ女作れば気がすむんだい？」（ゴゴ
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

リインフォース「銀時……私との合体じゃ不満？」（ゴゴゴゴ
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

正に女修羅に哀れに迷い込んだ銀時。

フェイト達の恐るべきな殺気……じゃなく嫉妬に青ざめるギンガ。

ギンガ「ちょ……フェイトさん達が異常なまでに怖いんだけど！
？」

ネプテューヌ「GINGAさん……あれがいつものなのはさん達だよ」

ネプテューヌは呆れてGINGAに言い出す。

女の怒りがどれ程恐ろしいのか分かっている証拠である。

新八、神楽、月詠、エリオ、キャロ、フリード、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、源外、九兵衛、近藤、土方、GINGA、山崎、リン、ヴィヴィオ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、オッドー、デイエチ、ノーヴェ、ルーテシア、アギト、コンパ、アイエフは巻き込まれる前に病室から脱出する。

桂、エリザベス、はやて、沖田の4人は面白そうなのでここで待避する。

銀時「ち……違う、誤解するなよ。こいつはただの納豆臭い変態ストーカー女で俺はストーカー被害にあってる被害者だ」

銀時がフェイト達にそう言うと、フェイト達は安心する。

フェイト「良かったあー！」

なのは「安心したあー！」

嬉しそうに銀時に抱きつくフェイトとなのは。

そんな2人にティアナ、シグナム、アルフ、リインフォースがツッコミ出そうとするが……

猿飛「貴女等も何を土壇場でやっているのぉ！」

思いつき猿飛はフェイトとなのはにドロップキックをする。

フェイト「うあああああああああああ！」

なのは「にゃあああああああああああ！」

猿飛のドロップキックを喰らったフェイトとなのはは吹飛ばされて
気絶する！

そして猿飛はティアナ達に忠告する。

猿飛「貴女達、銀さんとはどういう関係か知らないけど、アナタ達
なんか銀さんは渡さないわ！！貴女達なんかより、私の方が銀さ
んのメ　豚に相応しいんだから！銀さんのおち　ち　は私のも…」
ティアナ・アルフ「ふざけんな、このストーリー！」

突如、ティアナとアルフが2人係で猿飛にラリアットを炸裂させて、
首を強くはさみこんで強烈に直撃する。

猿飛「ぐはあああああああああああ！」

バタリ！

これには流石の猿飛も答えて倒れる。

猿飛「ゲホツゲホツゲホツ！・・・やってくれたわね、小娘共！」
アルフ「やかましいわ！あんたのような変態女が銀時に近づくな！」
ティアナ「兄さんを汚すなストーリーカー！」

額に青筋を浮かべて怒り出す猿飛、アルフ、ティアナ。

猿飛「上等じゃない！まずは邪魔虫である貴女達を駆除してやる！」
ティアナ・アルフ「それはこっちの台詞だあ！」

そして3人は飛びかかって銀時を賭けた戦いが始まる。

その中心部にシグマとイリスがいた。

シグマは愛しそうに、大きな赤いカプセルを眺めている。

そのカプセルを繋ぐ無数のコードは別の装置と繋がっていた。

それは装置に突き刺し立っているイリスの『ゼロセイバー』であった。

『ゼロセイバー』から何やら特殊な魔力を装置に流し込むかのように注入し、しかもその魔力がコードに流れてカプセルの中に入り込む。

シグマ「いやはや、白夜叉と狂乱の貴公子がこの世界に来ていたとは・・・しかもあの小娘に驚かされたな。まさかメーティアを一撃で倒すとは・・・イリスが予想以上に深手を負ったのも分かる」

イリス「はい、マスターが来てくれなければおそらくは私は白夜叉に・・・」

シグマ「しかし、あの小娘はイリスと互角近くにまで対抗に交えるとは・・・まあ良い。メーティアが完全復活し次第、いつでも出撃できるだろう」

申し訳なさそうに言い出すアーサアに対してウゼルは愉快そうに言い出す。

シグマ「イリスよ。メーティアはどうしてる？」

イリス「ファルコリア達が診ています」

ファルコリア「大丈夫かメーティア」
メーティア「まだ痛みは残りますが、大丈夫です」

ファルコリアは治療ポッドの中にいるメーティアに声をかけ、メーティアは答える。

ネプテューヌから顔面に一撃を受け、今ここで治療を受けているのだ。

ランドル「その様子では大丈夫そうじゃが、戦闘に出れそうにないな」

メーティア「ええ、凄い一撃でした。まさか私の防御を破壊するなど……」

メーティアは体を震わせた。

ファルコリア「どうしたメーティア」

メーティア「あの子供、彼女が一瞬出したあの目……まるであの白夜叉の目でした。そう、まるで獲物を狙う獣の目を……」

ネプテューヌの目が白夜叉の目をしていたとメーティアは言う。

その目を想像すると、メーティアの震えが止まらなくなる。

メーティア「く……体の震えが止まらない。私はあの子供に恐れていると言うのか！」

必死に体を押さえるものの、あまり止まらない。
やがて、少しずつおさまる。

メーティア「ふう……お見苦しいところを申し訳ございません」

ファルコリア「いや、いいんだ。ところでランドル、例の事を彼女に伝えたのか？」

ファルコリアがランドルにあることを言う。

ランドル「ああ、あやつの耳にこっそりあの場所を教えた」

ファルコリア「そうか。彼らに託すのは少し不安があるが、シグマの企みを止められるのは彼らしかないのだからな」

メーティア「シグマは殺しても躊躇しない残虐ものですからね。あの腐った仁義にはついていけません」

3人はシグマのやることに不審を抱き、銀時達にある場所を教えたようだ。

ファルコリア（もう我々ではシグマを止められない。どうか彼女に本当の優しさを教えてください、博士…）

ファルコリアは恩師であるある研究者を思い出し、祈りを与えるのであった。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ファルコリア「魔道機人リーダー『大空の旋風者』のファルコリアがアシストしよう！」

銀八「よし、ペンネーム『黒龍』さんだ。『黒龍』一気にシリアスになってきたな」

ソラ「黒神の所スバル編と違って強そうな奴らが多いな」

銀時「約一人バカなのがいたけどな」

セイバー「あのネプテューヌ達でも苦戦をしているでしょうね」

ソラ「しかし、今回新八の奴は活躍できるのか？」

銀時「無理だろ。あつたとしてもツツコミか、ヤムチャみたいな戦いを横から解説するポジションだろ」

ソラ「いや、天津飯位は役に立つんじゃないか？」

銀時「天さんもヤムチャもあんま変わんねえだろ」

サチコ「結局の所役立たずってことだね」

サチコ（実体化）が現れる。

黒龍「うわ、いきなり現れてサラッと酷いこと言うな・・・」

ソラ「そんな事より質問いくか」

銀時「そうだな。じゃあ俺からはやて（たぬき）に質問。お前ぶっちゃけツラのどこら辺に惚れたんだ？」

ソラ「俺はツラに質問だ。少しは蕎麦以外のモノも食べたらどうだ？体に悪いぞ。折角だからフェイトの物体Xを贈っておこう」

黒龍「最後に俺からフェイトに質問。もしこっちのフェイトに会ったらどうする？それとなのは達、前はよくも一斉砲撃食らわせてくれたなあ。だったらこっちもお返しじゃー！！出てこい！オール怪人！」

オール怪人

『『きしゃあああああああああああ！！！！！！』』

黒龍「ゴー！！」

オール怪人はなのは達を懲らしめに行った。

ソラ「やってること完全に悪役だな」

銀時「しかも報復を恐れて逃げる始末」

セイバー「それにアリアとヤミとフェイトとアリスを強引に護衛に連れて行きましたよ」

銀時「真王さーん。黒龍はどうでもいいけど、フェイト達には何も
しないでくれないかー」

ソラ「俺からも頼む。お詫びに高級食材で作った中華料理フルコー
スを贈る」

銀時「アイツらソラのコスプレ写真を渡せばたぶん寝返るぞ」

サチコ「私も写真欲しいな〜」『…つておい！怪人たちとあいつ
らがくのか！？』

真王「脅して追い返しました 彼女達はソラの写真で黒龍を叩きに
行きました」

銀八「黒っ！あんた腹の中黒っ！」

ファルコリア「なんだこのカオスは・・・」

銀八「…まあいいや。質問に答えようか」

はやて「誰がためきや！つて桂さんの惚れたところか？全部や？」

真王「答えになりにくいな。次」

桂「健康のバランスはとつてあるぞ」

フェイト「とりあえずお友達になります」

銀八「ハイ、『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

ファルコリア「次はペンネーム『鳴神ソラ』から質問だ。『思いつきりロックマンXに出たボスキャラみたいなのボスキャラ出たあああああああ！！！！！！』」

ネス「そして久々発動シリアスブレイカー；」

リュカ「他にもあるよね；」

フォックス「しかし相手は複数だからそれぞれ個別に戦う事になるな；」

スネーク「だが；そいつに不満を持つてる奴がいるな；」

マリオ「俺も許さねえ；意思や命を持つ者は生み出したからにはそいつ等は1つの生命なんだ！作品なんかじゃねえ！！！」

ソニック「YES！俺も同感だぜ！」

ネス「銀さんに質問『ネプテューヌさんのシリアスをぶち壊す所はどう思いますか？』」

リュカ「真王さんに質問『イリスさん達って何を元にしたキャラなんでしょうか？』」

ファルコ「俺も真王に質問『銀時のB』はコスプレじゃなく普通のか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます

マリオ「銀時にネプテューヌ！！馬鹿な事言うシグマ（バカ）をぶつ飛ばせよ！！」

ソニック「応援してるからな！」『…ふむ、シグマを倒したい人がいるな…』

銀八「そりゃあいつは許せない存在だからだ。んじゃ答えるぞ」

銀時「…なんて表現すればいいかわかんねえ…」

真王「2つ目のイリス達はこんな感じですよ」

イリス：f a t eのセイバーをロングで胸を少し大きくした感じ

ファルコリア：ISインフィニット・ストラトスのラウラ・ボーデヴィツヒを大人な感じにした

アイシー：東方のチルノを大人にした感じ

バーニン：東方の妹紅の髪を赤くした感じ。胸はでかい

ランドル：東方の勇儀の髪を茶色くした感じ

メーティア：デイスガイア3のサファイアの髪と目を黒色にした感じ

シャチール：セインの髪を紫にした感じ。胸はでかい

真王「3つ目は…まだ出してねえよ！！」

ファルコリア「…『鳴神ソラ』よ。廊下に立つのだ」

銀八「・・・じゃあペンネーム『sibugaki』さんからだ。

『今回はマジメな質問にしますか

スバルに質問

僕が書いている「リリカルなのはDYNAMIC」で今スバルは人間
じゃなく「マジンガー」になってます

どう思います?』」

スバル「これ私イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!!
!!!???」

真王「...ツと、あんな感じに自分とのギャップについていけてませ
ん。『sibugaki』さん。廊下に立ってください」

ファルコリア「次はランドル達もアシストさせるか」

銀八「んじゃ質問タイム終わります」

第三十八訓：病院で騒ぎを起こすのはよくない（後書き）

真王「今回はシグマが使っていた研究所に潜入！そして銀時達に新たな乱入者が！」

ファルコリア「次回『戦闘中に大喧嘩すると後先が分からない』テイクオフだ！」

第三十九訓：戦闘中に大喧嘩すると後先が分からない（前書き）

真王「今回はシグマ達の研究所に突入します！あ、別の本拠地じゃないから」

アイシー「『リリカル銀魂』始めるよ」

第三十九訓：戦闘中に大喧嘩すると後先が分からない

猿飛の参戦に、フェイト、なのは、ティアナ、シグナム、アルフ、リンフォース、チンク、セイン、セツテ、ウィンディ、デイルドはある意味では最大の恋のライバルが現れたと考える。

桂、新八、神楽、エリザベス、月詠、九兵衛、近藤、土方、沖田、山崎は源外にどうしてこの世界に飛ばされたかを聞き出す。

源外からの話によると、まず自分は事故で故障した転送装置の修理をしている間に変な光に飲み込まれてこの世界に飛ばされた。

そこで同時に飛ばされた猿飛と一緒にスカリエッツィのアジトでしばらくスカリエッツィ達の厄介になる事にした。

さらに源外は猿飛からどうしてこの世界に飛ばされたかを聞くと、猿飛もまた始末屋の仕事を終えた後、銀時達が行方不明になっていると言う情報を聞き入れた。

そして猿飛は必死に銀時を探していた。愛する者が行方不明である事に凄く死ぬほど心配していたのである。

眼鏡を落として探していて、見つけた途端に変な光に包まれてしまい、この世界に飛ばされたようだ。

猿飛「銀さんがいなくなってかなり心配したから必死に追い続けていたのよ！・・・あ、でも、カレー忍者がいなくなってから攘夷志士達はかなり困ってたわ。ゴリラストーリーカーやマヨラーやドSや（元）地味もいなくなって真撰組も大慌てだわ」

桂「誰がカレー忍者だ！」

近藤「ゴリラ言うな！後、俺はストーリーカーではないぞお！」

山崎「（元）をつけるなら地味言うな！」

猿飛の発言に桂、近藤、山崎が、額に血管を浮かべてツツコム。

カレー忍者とは、以前エリザベスが捕まったって猿飛に助太刀の手伝いをさせる為に忍者の変装をして、勝手に猿飛にあだ名をつけられた桂の忍者ネーム。

ゴリラストーカーとは、ゴリラのような存在で妙にストーカーをする近藤の事。

地味は言うまでもなく元地味の山崎。

ちなみにマヨラーは土方、DSは沖田である。

猿飛「貴女もいなくなって、吉原の遊女達と『百華』はかなり心配していたわよ？」

月詠「……………そうか」

猿飛にそう言われたら、月詠は吉原に残していった日輪と晴太、そして吉原自警団『百華』や遊女達を思い出す。

自分がいなくなってからどれ程経ったのかを。

桂とエリザベスも攘夷志士達は今頃どうしているのか考え、近藤も土方も沖田も山崎も真撰組の連中はどうしているかを心配している。九兵衛も柳生道場では皆どうしているかを考えていた。

特に東城などは暑苦しく涙を流しているようである。

そして神楽も元の世界に残していった星海坊主、定春、妙、お登勢、たま、ついでにキャサリンなど様々な仲間の心配をする。

フェイト達は、そんな桂達を見て、いつも助けてばかりなのに銀時達の力になれないことに強く責任感を感じる。

だが…………

桂「だが、今すぐにもこの世界に戻れるとしても…………我々はこの世界でやらなければならぬことが山ほどある」

エリザベス『その通り!』

桂とエリザベスは自分のやるのがなんなのかは最初っから決まっていた。

はやて「桂さん」

ライン「エリザベスさん」

はやてとラインは啞然とした表情で2人の名を言い出す。

近藤「桂の言う通りだ。元の世界に戻れたとしても今の状況をほうっておく訳には行かん！」

月詠「散々世話になつた身じゃ」

九兵衛「お妙ちゃんには早く会いたいけど……この状況を黙ってみておく訳には行かないからな」

神楽「助け合うのが仲間アル！」

近藤、月詠、九兵衛、神楽も元の世界に変える前に、まずはシグマの起こした事件を解決する事を決意する。

猿飛「私には関係ない事だけど……シグマのやっている事を見逃せば外道そのもの。外道を始末するのは同じ外道を進んだもの役目。ここで会つたのも何かの縁だから私も手伝うわ」

フェイト達は恋の宿敵だが、高杉やシグマのような過激な行動は猿飛から見れば外道そのものである。

始末屋としてこの件の事件解決に協力する事を決意した。

アルフ「皆……」

シグナム「……恩にきる」

アルフとシグナムは自分達の世界の為に戦う事を決めた神楽達に強い感謝をする。

2人だけじゃない、機動六課やナンバーズもそうである。

源外「良いのか、銀の字？」

源外はそれで良いのかを銀時に言い出す。

そして銀時は……

銀時「別に良いじゃねえの？もし戻れなくてもその時はその時だ。……それにシグマの事だけじゃねえ。この世界には高杉もいやがるぜ」

源外「あの男が？」

源外は高杉の名を聞いて驚く。

そう、高杉は源外とはある知り合いであり、正確に言えば源外の息子が鬼兵隊の一員であったのである。

ひらが さげろっ
平賀二郎

江戸一番の発明家・平賀源外の息子であり父に劣らずかなりのカラクリ好きであった。

だが天人の襲来に、源外のカラクリに対する姿勢に反発して家を飛び出し、鬼兵隊に入る。

剣の腕はそれ程でもないが、機械の扱いには長けていた。

幕府により粛清され、その首は江戸の川原に晒され、それを見た源外の復讐の火種になる。

源外「野朗が行方不明になっていると聞いたが、まさかこの世界に
．．．」
銀時「ああ、このままほっっておいたらミッドチルダはとんでもな
い事になってしまう．．．」

世界を憎む高杉にとってはミッドチルダも破壊する対象としか見え
ない。

松陽を失った悲しみが、高杉を破壊を繰り返す黒い獣と変貌させた
のである。

するとネプテューヌがフェイトに言う。

ネプテューヌ「ねえフェイトさん、何か場所を調べるコンピュータ
ーとかない？」

フェイト「え？あるけどなんで急に？」

ネプテューヌ「ちょっと気になることを思い出して…」

ネプテューヌは気になることがあると言ってエリアサーチを要求。
そしてエリアサーチの装置がネプテューヌの前に置かれる。

ネプテューヌ（えつとたしか．．．）

ネプテューヌはあるエリアの場所を思い出そうとする。

それはランドルがネプテューヌを気絶させる際に言ったあの言葉、

ランドル『ミッドチルダの24地区の山脈に秘密が隠されている。
探して見るんじゃない』

ネプテューヌは思い出して、ミッドチルダの24地区の山脈地帯を調べた。

すると、そこに白い建物が映った。

ネプテューヌ「これって…」

銀時「何だこれは？」

銀時達はその建物を見て不思議に見ていると、狼を思わせるような印に の文字が刻まれていたマークが映った。

ネプテューヌ「!?!?これって!」

全員「シグマのマーク!?!?」

全員シグマのマークに驚く。

銀時「ネプテューヌ、何でこいつを？」

ネプテューヌ「えっと・・・それは・・・」

ネプテューヌは歯切れ悪くなる。

何せ教えたランドルは敵なのだからどう教えるのか分からない。

桂「なにはともあれ、シグマの研究所があるなら、そこに秘密がある筈だ」

エリザベス『まずはそこに行きましょう!』

銀時「うし!そうときまれば出発準備だ!」

銀時、桂、新八、神楽、エリザベス、月詠、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフが出かける準備を始める。
するとネプテューヌが、

ネプテューヌ「あ、あの、出来れば私も連れてつてくれないかな？」
フェイト「!? 何言ってるの! ネプテューヌは怪我してるんだよ!」
シャル「ネプテューヌちゃん! 絶対に安静にしてください!」

いきなりそこに行きたいなどと言いだすので、フェイト達は猛反対。

ノワール「何やってるのネプテューヌ! 早く準備をしなさい!」

だがノワールはネプテューヌに準備しろと言い出すのでフェイト達は驚く。

フェイト「ノワール! 本気なの!?!」

ノワール「私は至って本気よ」

ブラン「ネプテューヌは連れて行く」

ベール「もうほとんど傷は治ってますし、いいんじゃないですか?」

シャル「良くありません! なのはちゃんもコンパちゃんも止めてください!」

ノワール達は引く気はなく、ネプテューヌを連れていくつもりである。

シャルはなのはとコンパに止めてもらおうように言うが、

なのは「私はいよいよ別に」

コンパ「ねぶねぶは言い出したら止まる気はないです。て言うか私は止めないです」

2人は止める気は一切ないようだ。

フェイト「い、いいのなのは!?!」

なのは「良いんだよフェイトちゃん。ネプちゃんは銀さんみたいに
まっすぐな子だから」

ネプテューヌの目が、銀時のようにまっすぐな目をしているとそう
思うのは。

フェイトとシャマルは諦めた。

ネプテューヌ「ありがとう、行くよみんな！」

銀時・桂・新八・神楽・エリザベス・月詠・ノワール・ブラン・ベ
ール・コンパ・アイエフ

「おう！／ええ！／はい！／ハイです！／うむ！」

銀時達は病院から出た。

なのは達は銀時達を見送った。

ミッドチルダ・第24地区・山脈地帯

銀時達はシグマの研究所のある山奥へ向かった。

そしてその研究所へたどり着いた。

IBGMロボット博物館byロッキーマン7
(Mega Man 7 Robot Museum Exten
ded)

銀時「ここか…」

ネプテューヌ「かなり大きいね…」

桂「よし、潜入するぞ」

銀時達は中へ入った。

シグマの研究所・モンスタープラント

銀時達は中へ潜入したが、そこで信じられない物を見た。

アイエフ「何よこれ・・・」

コンパ「こ、怖いです」

水槽カプセルの中で眠っていると思われるモンスターがいっぱいいるのだ。

それも小さなものから大きなものまである。

銀時「シグマの奴め…こんなもんまで作ってたのか！」

桂「何ということ・・・」

新八「これは酷いというレベルではありませんよ」

銀時と桂はシグマに怒りを覚える。

何種類ものモンスターが作られていることに。

そしてそれぞれのモンスターにはいろいろな名前のプレートが書いてあった。

『スライム』 『クリボー』 『ノコノコ』 『グリフォン』 『シャドウ』
『キメラ』 『エリンギヤー』 『クレムリン』 『ボスパックン』

『ガードアーマー』 『コープス』 『アルラウネ』 『プリム』
『ファイアプリム』 『アパロイド』 『メタルギア』 『マンドレイク』
『リオレウス』 『ファフニール』 『ガーゴイル』 『ワイバーン』
『ファウロン』 『ゼグダリア』 『トゲノコ』 『バキエル』
『フロントム』 『ババコンガ』 『ラプトル』 『ワーキャット』

その他いろいろなモンスターがいた。

銀時「あの野郎！絶対にゆるさねえ・・・」

銀時はシグマに怒りを出す。

ネプテューヌ「私あっちの方を探ってみるから後お願いね」

銀時「：分かった」

新八「気を付けてください」

銀時は怒りを抑えて承諾し、ネプテューヌは別のところへ搜索する。

神楽「銀ちゃん、ツラ、こっちに扉があるネ」

桂「ツラじゃない桂だ」

銀時「どっかへの道か？」

銀時はボタンを押して扉を開ける。

その部屋はドーム状の部屋だった。

ノワール「：ここは何かの訓練場かしら？」

アイエフ「確かに、頑丈そうな構造ね」

????「そう思つかお前ら！」

銀時、桂、新八、神楽、エリザベス、月詠、ノワール、ブラン、ベ

ール、コンパ、アイエフ
「ッ!!!!!!??」

突如上から炎と氷が降ってきて、11人は何とかかわす。
攻撃を仕掛けたのはバーニンとアイシーであった。

IBGMボス登場byロックマンX
(Mega Man X OST, T19: Boss (Intro))

バーニン「ここであつたが100年目つてか？」
アイシー「悪いけどマスターがこの警備しろつて言われててね！。
あんた達を始末してやるよ！」

バーニンとアイシーがそれぞれ炎と氷の塊を出す。
もう戦闘態勢状態だ。

銀時「チッ！テメエら、さっさと片付けるぞ！」
バーニン「やれるもんならな!!」
アイシー「あははは！バトル開始だよ」

銀時達とバーニンとアイシーの戦いが始まった。

IBGMボスbyロックマンX5
(Mega Man X5 Boss Battle Music
EXTENDED)

バーニン「どうしたどうしたああ!!!?」

銀時「チイツ!!!」

新八「うわわわっ!!!」

コンパ「熱いですうう!!!」

バーニンは炎の塊を銀時、新八、神楽、ノワール、コンパに向けて発射させている。

銀時達は必死で避ける。

アイシー「これはかわせるかなあ?」

桂「まずい!避ける!!!」

エリザベス「あぶなっ!?!」

ブラン「しつこい!!!」

別のところで、アイシーが氷の飛礫を桂、エリザベス、月詠、ブラン、ベール、アイエフに発射させる。

桂達は必死で避ける。

月詠「く、これでは近づけん!」

アイエフ「向こうは遠距離の攻撃と接近戦が得意みたいだし、これはきついわ!!!」

バーニン「おしゃべるする暇があるのか!?!」

月詠・アイエフ「ツ!?!」

上からバーニンが手に炎を纏って拳を振り下ろすが、月詠とアイエフは気付いて避ける。

拳を地面に当てたら炎の衝撃波が出る。

アイエフ「うあっ!」

月詠「炎の衝撃波じゃとっ!?!」

バーニン「どうだすごいだろ？」

アイエフは巻き込まれ、月詠は驚き、バーニンは自慢する。

すると、バーニンの横から銀時が現れて、バーニンは銀時が振り下ろす木刀を白刃取りする。

バーニン「あぶねえあぶねえ…もう少しで当たるところだったぜ」

銀時「んだよ、お前なら当たらんじやないかって思ったのに…」

銀時はそう言うが、バーニンはそれを聞いて顔を引き攣らせる。

バーニン「おい、そりゃあたしがアホだって言いたいのか？」

銀時「そうだよ」

バーニン「よし！アツタマきた！まずテメエをぶちのめし…たブウアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

バーニンは銀時を殴ろうとしたら、横から来た氷の塊に当たった。

アイシー「あゝ、ごめんね…？」

バーニン「…テンメエ…あたしに攻撃するとはいい度胸だな？ああん？」

バーニンは爆発寸前でアイシーを睨む。

さっきの氷の塊はアイシーが飛ばしたものである。

バーニン「よし！テメエから先に殺つてやろうかアアアアアアアアアア！！！！（怒）」

アイシー「あははは、やれるもんならね！」

バーニンは怒ってアイシーに突進し、アイシーは氷を腕に纏う。

そして2人はいつせいに銀時達に襲いかかっていく。

???「悪いが潰されるのはお前らだ」

バーニン「あ？」

アイシー「ん？」

ピユンピユン！ドンドン！

バーニン「ぐあっ！」

アイシー「きゃあっ！」

銀時・新八・神楽・桂・エリザベス・月詠・ノワール・ブラン・ベール・コンパ・アイエフ

「っ！！？」

突然男の声が聞こえ、直後に光の球がバーニンとアイシーに直撃する。

IBGMVAVA登場byロックマンX

(Mega Man X OST, T05: Vile) Intro)

(Maverick Hunter X OST, T05: Theme of Vile) Intro)

???「クハハハ、油断大敵ってやつだなお前ら？」

バーニン「なん・・・だど・・・」

アイシー「あ、あんたは・・・」

バーニンとアイシーは体中に火花を散らして、男を見て驚愕した。その男はシグマと同じようなロボットのような体で、紫が主色で顔はT字の穴（？）があり、で右肩にバズーカ砲のようなものがあり、額部分にVのマークが描かれていた。

バーニン「お前は…V I V I…」

アイシー「なんで…あんたが…ここにいるの…V I V I…」

バーニンとアイシーは男の名を言う。

その男・V I V Iは2人を見ると笑い始める。

V I V I「クッククック…油断していたとはいえ、ずいぶん情けない恰好になったなあお前ら」

バーニン「な…に…」

V I V I「まあいずれにしろ、シグマもエグイことするよなあ？」

バーニン「何…そりやどういうことだ！」

V I V Iのつぶやきにバーニンは突っ掛かる。

V I V I「簡単だ。もしここに侵入者が入ってきたらお前ら諸共潰すように爆弾を発動させるんだとよ」

全員「つ！！！！！？」

研究所の爆破。それはつまり、銀時達だけでなく、バーニンやアイシーまでも巻き込ませるといふのだ。

バーニン「なん…だと…」

アイシー「そんな…」

バーニンとアイシーは絶望な顔をする。
慕ってくれたシグマが2人を捨てるだなんて思わなかったのだ。

V I V I「爆発で死ぬより敵に撃たれてやられたってことにしてやるから安心しろ」

V I V Iはそう言って2人にバズーカ砲を向ける。

バーニン（すまねえリーダー、あたしら先に逝っちゃいそうだ・・・）

アイシー（ファルコリア…シャチール…メーティア…ランドル…
…ごめん…）

V I V I「祈りは済んだか？では、死ねえ！！」

2人は諦め、V I V Iは2人にバズーカを発射・・・

銀時「オラアツ！！」

V I V I「！？くっ！！」

出来なかった。銀時が乱入してV I V Iに攻撃し、V I V Iは避けた。

そして銀時はバーニンとアイシーを庇う様にV I V Iの前に立つ。

バーニン「な！何のつもりだお前！」

バーニンは銀時に叫ぶ。

銀時「俺はなあ、相手さんの事情なんてどうでもいいが、人の命を簡単に捨てるような奴が気に入くわねえだけだ」

銀時はシグマの非道なやり方に怒る。

V I V I「…お前が庇っているのはその非道なことをした奴の手下だぞ？」

V I V Iはもっともらしいことを言うが、銀時は言う。

銀時「確かにな、けどな、たとえそいつが暗殺者の子供だろうが腐った権力者の息子だろうが、お尻ペンペンで更正させて拾ってやるだけだ」

コンパ「ぎ、銀さん！！！！」
ノワール「クスクス、言えてるわね」

銀時の一言にコンパは顔を真っ赤にしてツッコミ、ノワールはクスクスと笑う。

バーニン「お前…」

V I V I「…チツ、まあいい。おいお前、なんていうんだ？」

V I V Iは銀時に名を名乗れと言っているようだ。

銀時「俺は坂田銀時だ」

V I V I「銀時？あのゾーマを倒したと噂されているあの白夜叉か！成程な…」

V I V Iは銀時を見て納得する。

V I V I「クツクツク…では貴様を白夜叉と呼ぶことにしよう。白夜叉！この俺と殺し合いを始めようか！！」

銀時とV.I.V.Iの戦いが始まる。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

アイシー「今日はアイシーがアシストするよ」

銀八「いくぞ。ペンネーム『黄色いのなにか』さんからの質問だ。

『神楽に質問です。』

神楽はヒロインとしての素質が欠片も見つからないのにどうして人気があるのですか？』」

神楽「コルア、ヒロインの欠片もないってどういうことだコルア。

って言うかそんな知らないネ。嬉しいけど」

アイシー「それじゃあ『黄色いのなにか』さん。廊下に立ってなさ

い。次はペンネーム『sibugaki』さんだよ。
『皆さんに質問です

もし銀さんが「銀タマン」みたいなキャラになったらどうしますか？
それでも好きで居られますか？』：銀タマンって何？」

真王「これだ」

真王は全員に銀タマンを見せる。

全員「絶対に嫌だっ！！！！！！」

全力で拒絶した。特に女性組が。

銀八「・・・『sibugaki』さん。銀さん像を壊さないでください。次はペンネーム『鳴神ソラ』。大体の流れは黒神さんの所の小説の『スバル編』を参考にされてるから分かるけど…きつとボスキャラ戦は凄い事になるだろうな…」

スネーク「そうだな…それで、やはりいたようだな…」

フォックス「彼女達が伝えた事って…」

リュカ「何だろうね？」

ネス「銀さんLOVEズに質問『今回出て来たあやめさんを見てどう思う？』」

フォックス「源外さんに質問だ『もしデバイスを作るならどんな感じのを作る？』」

ルイージ「ヴィヴィオちゃんに質問『なのはさん達のデバイスで使ってみたいデバイスは何?』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます。』では順番に答えましょう」

銀時ラバース(猿飛除く)「私達の敵だっ!!!」

源外「そりゃデバイスを改造して醤油を出せるぞ?」

アイシー「何で醤油!?!」

源外「じゃがリクエストで醤油以外にも出せるぞ」

アイシー「だからなんで醤油にこだわるの!?!」

ヴィヴィオ「私はなのはママのレイジングハートだよ」

真王「第二の魔王降臨だね」

銀八「ちよっそれだけは勘弁してくれ...」

アイシー「...良くわかんないけど『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「次だ。ペンネーム『月光閃火』さん。『よお...月光閃火だ。』

しかし...猿飛の嬢ちゃんまで来たか...何っーか、こっち(銀魂&mp;リリなの&mp;女神陣+その他もろもろ)もドタバタな意味で波乱の予感...(汗)。

輝刃「というか…彼女（猿飛あやめ）には、少々真つ当にさせる必要がありそうだな…。」（そういつて、お仕置きモード寸前で不敵な笑みを浮かべる輝刃（汗））

あゝ…ほどほどにしとけよ？んじゃ…まず俺から質問だ。

1・魔道機人の皆に質問だ。もし自分達が最初つからシグマ側にならずに銀時達の側に居たら、誰に興味を持っていたんだ？ちなみに、恋愛・友情それぞれで答えてくれ。

輝刃「確かに、そういつたIFも考えられるな…。次は俺からだ。」

2・バーニンの嬢ちゃんに質問だ。戦闘機人の方に『ノーヴェ』というバーニンの嬢ちゃんと性格がモロ被りの嬢ちゃんが居るんだが…互いに（性格的）同族嫌悪とかあるのか？あと、『己の信念を頑なに貫く男』についてどう思っている？正直に答えてくれ。

あゝ…確かに、特に銀魂勢の男性陣つて銀時や新八を筆頭に『己の信念を頑なに貫く』所を持つ男が多いからな…。『…2つ目を答えましょうか』

バーニン「なんでだ？確かにあたしと似ちやいるが別に嫌悪を出さず気はないぞ？あと、『己の信念を頑なに貫く男』つてあるやつをスタンドだつて言い張るやつのことか？」

バーニンはそういつて銀八を見る。

銀八「…何でこつち見てんの？ていつつかその噂、誰が流したんだよ」

銀時「おお、黒龍の奴今回はかなり怒ってるようだな」

黒龍「と言うことでサチコ!」

サチコ「なに?」

黒龍「女ソラのコスプレ写真+ソラのコスプレ写真あげるから真王さんにキツイお仕置きをしてきてくれ!」

サチコ「ホント!?!?分かった!」

サチコは真王さんを呪いに行った。

銀時「結局他人頼りじゃねえか!」

セイバー「ん?そう言えばソラはどうしたんですか?まだ一言も喋っていないんですが・・・」

黒龍「ソラならあつちでムツツリーニを血祭りにあげてる」

ソラ「・・・」

ムツツリーニ「ぎゃあああああああああああ!」

ソラは無言でムツツリーニ君を木刀の餌食にしていた。

黒龍「コスプレならまだしも、全裸は恥ずかしかったらしい」

銀時「自業自得だな」

黒龍「それじゃあ質問いきます。銀時ラバーズに質問。もし銀さんが死んだらどうしますか？」

セイバー「私から女神四人に質問です。あなた達はどんな信念を持って戦っているんですか？」

黒龍「最後に俺から皆さんに質問です。ソラに称号を付けるどんなのになりますか？」

ソラ「質問終わったか？」

銀時「お前服にべつとり赤いモノが付いてんだけど・・・」

ソラ「気のせいだろ」

銀時「……………」『……って作者あああああああああ
！！！！！！何やらかしたんだーーーーー！！！！』

真王・サチコ「なにが？」

サチコはケーキを食べていた。

銀八「何でサチコはケーキ食べてるわけ！？」

サチコ「美味しいから」

真王「はいはい、質問の答えを言いましょう。まず最初は」

フェイト・スバル・なのは・ティアナ、シグナム・アルフ・リイン
フォース・チンク・セイン・セツテ・ウエンディ・ディート・猿飛

「殺した奴をぬつ殺す！！！！！！！！！！（超殺気）」

アイシー「恐っ！！この人たち恐っ！！！！（真っ青）」

銀八「ほ、本気で怖いな（真っ青）。つ、次は」

女神組「世界の平和と（食べ物／声優／小説／ゲーム）のために！」

真王「今願望が聞こえた気がした」

銀八「俺もだ。次」

紙に『青夜叉』『（一部の）ゴーストを克服した男』『甘党』『サド？』『キーブレイドに選ばれし者』『仮面ライダークウガ』『マトリックスマン？』『ハーレム男』と書かれている。

真王「はいでは『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

アイシー「次はランドルがやるよ〜」

真王「それじゃあ次回もまた会いましょう」

第三十九訓：戦闘中に大喧嘩すると後先が分からない（後書き）

真王「今回はネプテューヌが新しい武器を手に入れる！そして研究所から銀時達と脱出を開始するが…」

アイシー「次回『脱出後には必ず敵がやってくるパターンがある』
テイクオフだよ」

〈報告〉

真王「今日から『魔界戦記デイスガイア4』の発売日だ。なので私はそれ買ってやるので更新が遅くなります。申し訳ございません」

第四十訓：脱出後には必ず敵がやってくるパターンがある（前書き）

真王「今回ネプテューヌは新たな武器を手に入れた！そして変わったのも
…。さらには脱出にあるモンスターが！」

ランドル「『リリカル銀魂』始めるかの」

第四十訓：脱出後には必ず敵がやってくるパターンがある

銀時とV.I.V.Iが戦いを始めるちょっと前、ネプテューヌは、

ネプテューヌ「いや〜、まさかこんな所に落ちるなんてね〜…」

廃棄処理場にいた。

いろいろ触っている際、スイッチを押してしまい、ここに落ちてしまったのだ。

ネプテューヌ「さて早くここを…ん？」

ネプテューヌはここから脱出しようとしたら、大きな青いカプセルを見つけた。

ネプテューヌは気になってそれを触ってみると、

ブシュッ！

カプセルから音が出て開いた。

そして半透明の白いひげと髪 of 老人が映し出された。

IBGM Dr. ライトブロックマン X
(Maverick Hunter X OST, T35: Dr.
r. Light Capsule Theme 1.0.ore)
(Mega Man X OST, T31: Dr. Light
t Capsule Theme) (

レイト『わしの名は、トーマス・レイト。このメッセージを、未来に託す…』

ネプテューヌ「レイト？（この人どっかで見たような・・・）」

レイトを見てどこか引つ掛かるネプテューヌ。

レイト『このカプセルが開かれたということは…、すでに逃れられない戦いが始まったと思われる…』

ネプテューヌ「…」

ネプテューヌは黙ってレイトの話を聞く。

レイト『ワシがこのカプセルに遺した力を…正しく使ってくれと信じて授けよう…』

カプセルが光り始め、中から『ゼロセイバー』とよく似た青い大刀型デバイスが出た。

そしてそれは、鞘の部分にXのマークがあつた。

レイト『ワシが遺した希望のデバイス…、『無限の剣』、通称『エックスセイバー』だ…』

ネプテューヌ「エックス…セイバー…」

ネプテューヌはエックスセイバーを見つめる。

レイト『ワシの託した『エックスセイバー』で…未来を正しい方向へ導いておくれ…頼んだぞ、希望の者よ…！』

レイトは話し終わると消えた。

ネプテューヌはエックスセイバーを手に取る。

ネプテューヌ「…分かりました、レイトさん！必ず未来を正しくさせます！行くよ！」『エックス』！」

エックスセイバー Yes, sir!! New My master!!

ネプテューヌは新たな相棒、『エックスセイバー』と共に未来を託され、進んでいくのであった。

ネプテューヌ「まずは銀さん達を探さないと・・・」

ネプテューヌはエックスセイバーを受け取り、廃棄処理場から出て、研究所内にいる銀時達を探すことにした。

しかし広いので何処に銀時達がいるのか分からない。

ネプテューヌ「ん？ここは・・・」

ネプテューヌは映像がいつぱいある部屋に着いた。

どうやらコンピューター室らしい。

モンスタープラントがいつぱい映っているが、大きな画面にはタイマーが映っていた。

ネプテューヌ「何これ？タイマー？」

エックスセイバー おそらくタイムリミットに爆発する仕掛けになっているでしょう

ネプテューヌ「ええっ!?!」

画面に映っているタイマーが爆発までの時間だと知って驚く。
しかもタイムリミットがあと00:15:00である。

ネプテューヌ「どうしよう!あと15分しかない!銀さんは・・・いた!」

ネプテューヌは銀時を探すと、バトルドームに銀時と紫色の魔道機人・V.I.V.Iが映っていた。

ネプテューヌ「銀さんもやばいかも!早く合流しなくっちゃ!」

ネプテューヌはコンピューター室を後にして、銀時達にそこへ向かった。

シグマの研究所・モンスタープラント

ネプテューヌは銀時達に向かおうとしたら、ここで足を止めた。

ここにいる生き物たちはどうするか考えていた。

作られたものとはいえ、れっきとした生き物なのだ。

放って置くのはかわいそうである。

ネプテューヌ(なんとかしてこの子たちを助けないと………あれを使おう!)

ネプテューヌは装置らしきものを見つけ、それを操作して中のモンスターたちを解放させてあげようと考えたのだが、残念なことに、

どう操作すればいいのかわからなかった。

ネプテューヌ「……………ああ！もう！」

ネプテューヌはやけになつて装置を殴る。

プシューーーーーー！

すると装置が反応し、一つのポッドが煙を出した。

そのポッドの中にいるのは、曲がった角と悪魔のような羽と尻尾があり、まるで人間の女性のようなモンスターが入っていた。

その女性モンスターは目を覚ましてネプテューヌを見る。

そしてそのポッドの水が無くなっていき、周りのガラスが開き、女性モンスター・サキュバスは倒れこむ。

ネプテューヌ「おとと……………わぶ！」

ネプテューヌは倒れ込むサキュバスを抑えようとするが、ネプテューヌも巻き込まれ、サキュバスの豊満な胸がネプテューヌの顔に埋まる。

ネプテューヌは起き上がる。

ネプテューヌ「……………つと…とりあえず早くしないと…」

ネプテューヌはとりあえずサキュバスを持ち上げる。

サキュバスはもう寝てしまつたらしい。

あたりを探索すると、大きなものが見えた。

それは4メートル位ある大型で人型の乗り物・ガジェットウォーリアーだった。

ネプテューヌはサキュバスを連れてガジェットウォーリアーに乗り

V I V I 「白夜叉・・・クッククック・・・」

V I V I はひとりでに笑う。

V I V I 「白夜叉あ！！お前とまた会うときは必ず貴様を倒してやるからな！！クハハハハハハハハハハハ！！！」

V I V I は笑いながら紫の光となってどこかへ消えた。

ネプテューヌ「この子たちも出してあげるよ！」

ネプテューヌはウォーリアーから機関銃を出してモンスターに当たらないようにポッドうつ。

ポッドが壊され、出てきたモンスターたちは目を覚まし、興奮している。

ネプテューヌ「みんな！早く逃げるよ！！」

ネプテューヌの言葉に反応したのか、モンスターたちは研究所から逃げだした。

そしてネプテューヌ達も研究所から出た。

研究所から出て数秒後、研究所から大爆発が起きた。

ミッドチルダ・第23地区・高速道路

新八「いやー、あのままあそこにいたら僕たちどうなっていたことか」

エリザベス『まさに危機一髪』

コンパ「恐かったです」

アイエフ「はいはい」

新八とエリザベスは安心し、コンパは緊張が切れて泣き始め、アイエフはコンパを慰める。

ネプテューヌ「……ところで銀さんなんでその人たちも？」

ネプテューヌ又は銀時にバーニンとアイシーのことで聞く。

銀時「……言ったら、野暮用だつて」

ネプテューヌ「……そう」

ネプテューヌ又は銀時の言ったことを理解した。

バーニンとアイシーは捨て駒にされた。

そのことにネプテューヌのレバーを握る手が強くなる。

バーニン「……いいのか？あたしたちなんかを……」

バーニンが悲しそうな顔で銀時達に聞く。

銀時「いいんだよ。捨てられたなら面倒せえけど俺達が面倒みてやるからな」

ネプテューヌ「もうあなた達は敵じゃなくなつたんだからね」

バーニン・アイシー「……………」

バーニンとアイシーは沈黙する。

銀時「……ところでネプテューヌ、何だそれは？」

銀時はネプテューヌの傍で寝ているサキュバスをさして言う。

ネプテューヌ「あゝ、なんて言うのかな……。とりあえず連れて行くことにしたって言うか……」

銀時はネプテューヌに呆れる。
すると、

????「キイイイイイ……！！！！！！」

ネプテューヌ「うわっ！！」

桂「な、何事だ!？」

後ろから奇声が聞こえ、ウォーリアーの前に通り過ぎた。

そしてそれは蛾でも蝶でもない金属でできた紫色の機械生物だった。

IBGMアパロイド戦byスターフォックスアサルト
(Star Fox Assault Music Extend
ed - Boss 3)

バーニン「あいつは研究所にいた奴じゃないか！」

アイシー「何でここに!？」

バーニンとアイシーは声をあげる。

目の前の機械生物・ゼグダリアはシグマの研究所にいたものようだ。

しかもそのゼグダリアはネプテュー又達を睨んでいるように見える。

ネプテュー又「…ねえ、何かこつち見てない？」

桂「大方我々を餌として見ているのであるっ」

新八「冷静に言ってる場合か「キイイイー！！」「…ってうわ！！」

ノワール「危ない！避けてっ！！」

ゼグダリアから超音波のような攻撃から避けるが、ウォーリアーの右腕を掠る。

ネプテュー又「あつぶな…やってくれたね！お返したよ！」

ネプテュー又は反撃にウォーリアーの右腕から機関銃を出し、ゼグダリアの羽を攻撃する。

ゼグダリア「ギイイイイー！！！！！！？」

ゼグダリアはダメージを受けたようだ。

ゼグダリア「ギギイイイー！！！」

ゼグダリアはお返しと言わんばかりにお尻部分からオレンジのレーザー光線を出す。

光線は赤い線を描くと、その線から爆発が起きる。

銀時「ちよっ待て！あんなもん当たったらスパッと切れるってレベ

ルじゃねえぞ!!」

新八「ネプテューヌさん！避けてください!!」
ネプテューヌ「分かってるよ!!」

ネプテューヌはゼグダリアの攻撃を必死で避ける。
進みながら右へ左へしゃがんで飛んで、そしてゼグダリアは攻撃をやめた。

ネプテューヌ「待ってたよ！くらえ!!」

攻撃をやめたゼグダリアに、腕からミサイルを発射した。
ゼグダリアの羽が全部破壊された。

ゼグダリア「ギギギイイイ!!」

ゼグダリアは悶え苦しむ。

その後、ゼグダリアは銀時達から離れる。

桂「安心するのはまだ早いようだ。見る!!」

顔を強張る桂が警戒を怠るなと言うと、ゼグダリアは地面に向かってレーザー光線を出す。

するとそこから燃え盛る岩石群が火山のように吹き出てきた。
しかもネプテューヌ達の方へ落ちてきている。

コンパ「エエエエエエ!!??」

アイエフ「ちよっ!?何よあれ!?!」

エリザベス「こっち来るよ!!」

月詠「ネプテューヌ!!」

ネプテューヌ「うわわっ!!」

「????」・・・「んんん」

ガシィッ！

ゼグダリア「ギィッ！！??」

銀時達「え？」

突然濃い紫色の大きな腕がゼグダリアの超音波を止めた。

その手の正体は、ネプテューヌが連れてきたサキュバスの羽が変化したものだった。

サキュバス「うるさくて眠れない・・・・・・静かにして」

スパンツ！

ゼグダリア「ギギイイイー！！？」

サキュバスは片方の羽を刃物に変え、ゼグダリアの頭を切り落とし、ゼグダリアは苦しむ。

その時、ゼグダリアの頭にコアらしき赤い玉が出た。

アイエフ「銀さん！きつとあの赤い玉が奴の弱点よ！」

銀時「よし！そうときま」「まって銀さん」ってネプテューヌ？

銀時達が行動を起こそうとしたら、ネプテューヌが止める。

ネプテューヌ「桂さん、運転代わって」

桂「あ、ああ・・・」

ネプテューヌは桂と代わり、高いところに立つ。

ネプテューヌ「助けてあげたとはいえ、私達の邪魔するならあなたでも容赦しない。行くよ、エックスセイバー」

エックスセイバー「Yes, sir！」

ネプテューヌはエックスセイバーを取り出し構える。

銀時達はエックスセイバーを見て驚く。

銀時「ネプテューヌ・・・お前それ」

ネプテューヌ「見ててよ銀さん。エックスセイバー、カートリッジロード」

エックスセイバー「All right！（了解！）」

ガシャン！

ネプテューヌはカートリッジをロードする。

足元に魔方阵が展開し、エックスセイバーを構える。

ゼグダリア「ギ・・・ギギ・・・」

ゼグダリアは逃げだそうとするが、サキュバスに捕まれて逃げられない。

ネプテューヌ「エックススラッシュュー！！」

ネプテューヌはゼグダリアにエックスセイバーを振り下ろす。

そして、ゼグダリアの体に一筋の線が浮かび上がり、真っ二つに割れた...いや、切られた。

ドガーーーーー！！！！！

切られたゼグダリアは爆発した。

コンパ「・・・か、かつこいいです・・・」

ノワール「ネプテューヌ…その刀は一体・・・」

ノワールが聞くと、ネプテューヌは言う。

ネプテューヌ「この先の未来を正しく変えるデバイス『無限の剣』

エックスセイバー』だよ」

エックスセイバー 以後、お見知りおきを

銀時「あ、どうもご丁寧に…」

銀時達はちよつと困惑したが、一応挨拶した。

クイクイツ

ネプテューヌ「ん？」

ネプテューヌの袖を引っ張る人がいる。サキュバスだ。

サキュバス「なまえ、何？」

サキュバスがネプテューヌの名前を聞いている。

ネプテューヌ「え？私はネプテューヌだよ」

サキュバス「ネプ・・・テュー・・・又・・・」

サキュバスはネプテューヌを見ながら、

桂達は納得し、ネプテューヌは聞かれて考え込む。

ネプテューヌ「う〜〜もう分かったよ！私が責任持つよ！」

ネプテューヌはやけくそで答えた。

銀時「言ったな？ちゃんと面倒見るよ？」

ネプテューヌ「分かったよ！」

銀時はネプテューヌに言うが、ネプテューヌは少し拗ねる。

銀時「おい拗ねんじゃん」「ザクッ」ぎゃあああああああああああ
ああ！！！」

銀時が言おうとしたら頭に刃物が刺された。

サキュバス「母さん、いじめる、駄目」

サキュバスが羽を刃物に変えて銀時をさしたのだ。

銀時「何しやがるテメエ！俺を殺す気かっ！！」

サキュバス「……………」

サキュバスは無言で羽を刃物に変えて構える

銀時「スマン！悪かった！この通りだからそれ向けるのやめて！」

銀時は土下座する。

ノワール「……さっ、早いとこ六課に合流するわよ」

ネプテューヌ達は機動六課へ戻った。

だが、サキュバスのこととそのサキュバスがネプテューヌを母だと呼ぶことにまた騒ぎが起きたのは言うまでもない。

シグマの本拠地

シグマ「……なるほどな」

ファルコリア「ハイ、バーニンとアイシーは寝返り、六課軍に着いたとの事です」

ファルコリアとシグマが密会をしている。

シグマ「…大方あの馬鹿共が命を助けたということか」

ファルコリア「…そうですね（…無事でよかったです…バーニン…アイシー…）」

ファルコリアは自分の仲間が助かったことに安心する。

シグマ「報告ご苦労。下げれ」

ファルコリア「はっ」

ファルコリアは部屋を後にする。

シグマ「……フフフ、面白いことをしてくれるではないか」

シグマは誰もいなくなると、銀時達のことです笑う。

シグマ「だがもう遅い。我が計画は確実に進んでいるのだからな
????」「フンッ、誰もお前の計画など興味は無いと思うがな」

笑うシグマに吐き捨てるような声が聞こえた。

シグマ「……ずいぶんと減らず口を言う様になったなVIVI」

シグマは笑いながら振り返る。そこにいるのは研究所にいたVIV
Iだった。

VIVI「お前の『プロジェクター』はあいつらにとっちゃあまり
いいことにはおきんと思うぞ?」

シグマ「ふん、あやつらが私のことに不審を抱いておるのは知って
おるわ」

VIVIとシグマは話しあう。

VIVI「それから白夜又は俺が倒す。あいつのは興味があるんで
な」

シグマ「……好きにしろ」

VIVI「ああ、そうさせてもらおう」

VIVIはそう言って去る。

シグマ「……準備は整った。さあ、宴を始めようか！あはははは
ははははははは……!」

シグマの狂った高笑いが響き渡る。

シグマとの決戦が近くなるのだ。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

ランドル「今回はワシが担当しよう」

銀八「いくぜ、ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『させ感想だが…

マリオ「俺の怒りが…もうビッグバンまじかだぜ！！！」

きゃあああああああ！！！！！！！！！！今回出て来たV I V Iの行動が
マリオの怒りに触れた！！！！！！！！！！

マリオ「殴りて…あのV E V E Iって言うヴィヴィオが主人公の漫画の名前と被りそうな奴を殴りて…!!」

ソニック「それには俺も参加させてくれるかマリオ？」

マリオ「ああ…」

スネーク「同情出来んな…V E V E Iには」

ルイージ「マジでムカつくよねシグマは!!」

フォックス「まったくだ!」

ネス「自分で生み出した生命を何だと思ってるんだって話だね!#」

リュカ「うん!!!#」

ワリオ「主要メンバーが怒ってるから俺が変わりにメンバーに質問
『スマブラXにて出たアシストフィギュアで出て来て欲しい奴は何だ?』」

リンク「私からも皆さんに質問『スマブラで戦ってみたいスマブラ
キャラは誰ですか?』」

クッパ「我輩から皆に質問『マリオカートでレーサーになったら自分達はタイプは何級だと思っ?ちなみに女性メンバーは無理なら答えなくて良いのだ』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます

マリオ「銀時と一緒に戦いたいもんだ」

ソニック「YES」

銀時「俺はゴッドハンドを出す奴だな。相手はアイクで、重さは重量型か？」

新八「僕はハンマーブロスさんです。ルイージさんで重さは中型です」

神楽「私はメトロイドね。相手はドンキー、そして中型ネ！」

桂「俺はサムライ・ゴローだな。相手はマルス殿で、重量型だと思う」

エリザベス「私はマツハラライダーですね。ゲームウオッチさんで、重量型です」

月詠「わっちはサイボーグ忍者じゃ。メタナイトと戦うがカートの重量なぞ教えん」

ネプテューヌ「私はハンマーブロスだよ。マリオと戦って軽量型かな？」

ノワール「アンドルフかしら？相手はリンクだけど教えないわよ！／／／」

ブラン「ハンマーブロス。アイスクライマーで軽量型」

ベール「私はリンさんですね。相手はゼルダさんですけど教えるわ

銀時「いや、充分ハーレム作ってるだろ」

黒龍「自覚持った方がいいぞ」

ソラ「……………」

銀時「にしても、命を粗末にするシグマのやり方は気に入らねえな」

黒龍「さすがに俺も今回は怒りを感じたな」

ソラ「ま、ああいうタイプはロクな最後を迎えないな」

黒龍「それと真王さん。ケーキありがとうございました」

銀時「美味しく食べさせてもらったぜ」

ソラ「黒龍の怒りも収まったしな」

黒龍「ては、質問いきます。

1、アリスに称号を付けるならどんなになりますか？

2、新八対マッチョ新八（ケン八）ならどちらが勝ちますか？ケン八をそつちに送ったので試してみてください。

3、銀さんに質問。銀時ラバーズがヤンデレ化したらどうしますか？」

銀時「ん？ソラ。お前どこ行くんだよ？」

真王「いません。ユーノ、クロノ、プレシアは出てないですけど嫌
いではないですよ」

銀八「じゃ、『黄色いのかなにか』さん。廊下に立ってなさい」

ランドル「次のアシストはシャチールのするかの。ではまたな」

第四十訓：脱出後には必ず敵がやってくるパターンがある（後書き）

ネプテューヌ「研究所から脱出後、私がサキュバスのママになっちゃってさあ大変！生まれたての子供のような彼女をどう育てようとするか！」

銀時「ってまた偽次回予告かよ！！」

ネプテューヌ「ネプテューヌはやけになつて保護するものの、彼女は周りの人に迷惑かけては男のアレを取ることが日に日に起きていく！」

新八「アレってなんですか！？いやな予感しかしないんですけど！？」

ネプテューヌ「そんな時登場したのがこの『ペプシマンX』！ペプシマンXは飲めばおとなしさを取り戻す唯一の必須アイテムなの！」

フェイト「絶対ガセものだよそれっ！！」

はやて「只の炭酸やないか…」

ネプテューヌ「次回『ネプママ戦記』、第三十九話『子育ての大変さって難しい』。用意するのはまずミルクが一番！！」

サキュバス「私どちらかというと銀髪の男がいいんだけど？」

銀時「え！？俺狙われてるの？」

サキユバス「女の子でもできるよ？」

なのは「まさかの両刀使いだよ！！！」

真王「本当の次回は『宣戦布告を受けたら準備してかかれ』。ではまた」

第四十一訓：宣戦布告を受けたら準備してかかれ（前書き）

真王「シグマとの決戦の序盤のスタートです！」

シャチール「『リリカル銀魂』始まるぞ?」

第四十一訓：宣戦布告を受けたら準備してかかれ

銀時達がシグマの研究所から帰宅後、今場に緊張が走っていた。それはバーニンとアイシーである。

2人は元はシグマの部下だったため、何をするか分からないからまわりは少し警戒している。

バーニン（どうすんだよこの状況…）

アイシー（緊張するけどもこの場を乗り切るのよ。・・・まずバーニンから）

バーニン（おい！・・・まあいいか）

バーニンは勇気を持って口を開く。

バーニン「あゝ、あたしはバーニン。一応拾われたものだ」

アイシー「一応って…私はアイシーだよ」

バーニンのぎこちない答えにちよつと困惑するが、とりあえず挨拶するアイシー。

アイシー「好きな物はアイス。そして将来の夢はアイス王国を作ること！！」

一気に緊張が吹き飛ぶような答えが出た。

新八「ちよつと待てエエエエエエ！！何でアイス限定なんだよ！！」

アイシー「何を言うか眼鏡君。私は至つて真剣に言ってるんだよ。

アイス大好きの乙女心が理解できないの？」

スバル「そうだよ新八君。アイスは美味しいんだよ」
新八「理解したくないししたくもねえ！って言うかスバルさん！なんでそっち側に!？」

スバルはなぜかアイシーの隣にいる。

アイシー「君話分かるね。一緒にアイス同盟でも結ぼうか」
スバル「うん！結ぼう！」
ヴィータ「待て待て！あたしも入れてくれ！」

アイシー、スバル、ヴィータはアイスを愛してアイスを食す『アイス同盟』が結ばれました。

バーニン「全くあいつは…ちなみにあたしは強い奴と戦うのが好きだ。だからそのピンクポニーの奴！あたしと勝負しろ！」
シグナム「ほう？いい度胸だ。その挑戦受けて立つ」

バーニンとシグナムが戦闘態勢に入った。

はやて「止めんか！」

シグナム・バーニン「ツツ！」

はやてがチョップで2人を止めた。

はやて「全くあんたらはここで暴れたら六課の被害費が馬鹿にならんやで？そこ分かつとき」

シグナム「も、申し訳ありません、主」
バーニン「ちっ、わかったよ」

シグナムは謝り、バーニンは邪魔されたことに苛立つが、とりあえ

ず承諾した。

はやて「…にしてもネプちゃん、それ大丈夫なん？」

はやてがネプテューヌに心配そうな目で見る。

なんせネプテューヌの背中に研究所から連れてきたサキュバスが抱きついているのだ。

ネプテューヌ「あはは・・・ま、まあ私が責任取るんだし、それに私はリスのママになっちゃったんだからちゃんとしなくちゃいけないしね」

はやて「成程な。・・・ん？リス？」

はやては納得するが、ネプテューヌが一瞬サキュバスをリスと呼んだことに引っ掛かる。

ネプテューヌ「うんリス。サキュバスって名前じゃあんまりしっくりこないから私が名付けたの。だよねリス」
リス「うん」

サキュバス…リスは笑顔で答える。

新八はこれを見て顔を赤くしたとかしなとか。

リス「母さん、お腹空いた」
ネプテューヌ「プリン食べる？」
リス「食べるっ！！」

リスがお腹空いたといい、ネプテューヌがプリンを出して言うと、リスは目を輝かせて食べる。

まるで子供のような行いだが、傍から見てもリスは大人でネプテ

ユー又は子供なのだが。

銀時「・・・何あいつ子供みてえなことやってんだ？」

フェイト「まあ彼女は精神年齢が私達より幼いからだけど…」

銀時は呆れ、フェイトはとりあえずフォローする。

すると、源外とスカリエッティとイストワールがやってきた。

源外「おい紫の字と銀の字、面白いのが出来たぞ」

ネプテューヌ「え？面白いもの？」

銀時「どうせ碌でもないもんだろ？」

源外が面白いものが出来たといい、ネプテューヌは興味を持つが、

銀時は切り捨てるように言う。

なんせ銀時は源外の発明は碌でもないやつだと経験してるからである。

ネプテューヌ「夢が無いね銀さん。早く行こうよ、リリス」

リリス「銀髪、早く行く」

銀時「イダダダダダ行くのは分かったから髪の毛引つ張るな！！！」

銀時はリリスに髪を引つ張られて無理やり連れてこられる。

なのは達は苦笑いを浮かべる。

バーニン（こいつらこんな楽しそうにしてやがる・・・）

アイシー（私達のところには無かったな、こいつの）

バーニンとアイシーは、銀時達のやり取りに羨ましく思った。

源外達に案内され、銀時とネプテューヌとリリスは外に出た。
そして大きな風呂敷を見つけた。

銀時「爺さん、もしかして」
源外「そのまさかだ。それ！」

源外は風呂敷をめくった。
そこにあつたのはネプテューヌが乗って帰ったガジェットウォーリアーとよく似た機械だった。

ネプテューヌ「あ！、これって」
スカリエッティ「ネプテューヌ殿が持つて帰ったこのガジェットを我々が改造したのだ」
イストワール「いろいろと改良してさらに操縦しやすくなりました（＾ロ＾）／」

源外「ワシらが改良したこいつを総じてガーディアンと呼ぶぜ？」
青色だったボディが堅そうな黒に変わり、背中には飛行が可能な羽が付いている。

ウォーリアー改め、ガーディアンが完成した。

ネプテューヌ「かっこいい～～～～！！」
リリス「ホントだ！凄いかっこいい！」

ネプテューヌとリリスは目を輝かせる。
しかし対して銀時はつまんなそうな顔をする。

銀時「んだよそれ、どうせくだらないポンコツ」「バキッ!」「ゴフォアッ!」

銀時はネプテューヌとリリースに殴られた。

ネプテューヌ「それじゃあ乗ってみてもいい?」

源外「いいぞ」

源外から許可をもらい、ネプテューヌとリリースはガーディアンに乗り込む。

そして機動スイッチを押して、ガーディアンを起動させる。ガーディアンが立ち上がる。

ネプテューヌ「おお〜!すごい!」

ネプテューヌはガーディアンの操縦に興奮する。

源外「どうじゃ?ワシ等の機械からくりは?」

ネプテューヌ「もう最高だよお爺さん!」

ネプテューヌは満足したようだ。

ネプテューヌ「あ、銀さん起こさなきゃ」

ネプテューヌはそう言って、ガーディアンの右手をショットモードに変えて銀時に向ける。

銀時「あいつつ…一体なんだか…ウオオオオオオオオオオ
おおおお!…!…!…!」

銀時は目を覚まし、銃口が向けられてる事に驚いてバックする。

ネプテューヌ「あ、起きた銀さん？」

銀時「おかげさんで眠気と共に飛んでいったよ！！つーかあぶねえだろっ！！」

銃口を向けられたことに怒鳴る銀時。

次の瞬間、周りの街の電気が消えて言った。もちろん六課も。

銀時「あれ？」

ネプテューヌ「うわ暗っ！」

スカリエツティ「こ、これは一体？」

銀時とネプテューヌ達は突然の停電に不自然に感じる中……突如、モニターが現れた。

そのモニターにはビームソードを持っているシグマに、後ろには数多くの『鬼兵隊』作のガジェットとシグマ作の魔道兵士が存在する。

シグマ ミッドチルダに住む者たちよ、聞くが良い。これよりミッドチルダは我々『シグマーズ』の手によって支配される

それはシグマの宣誓布告であった。

突如の停電に驚きだし、さらにはテレビやモニターにシグマが映し出されたことで驚いたのは銀時だけじゃない。機動六課に待機していたフェイト達もである。

シグマ 君等に残された手段はただ1つ。我々に従って我々と共に生を受けるか、反抗を起こして死を受け入れるか……2つに1つだ

忠告の言葉を言い出すシグマ。

シグマ この腐りきったミッドチルダは我々の手によって全てを受け止める楽園と化すのである。我はミッドチルダの王に……いや神に等しき存在となる！

シグマは高々と宣言する。

ネプテューヌ「……銀さん、あれ私達に宣戦布告してるよ」
銀時「そうか、なら話は簡単だ。さっさと殴りこみに行くぜ」

銀時は木刀を、ネプテューヌはエックスセイバーを握りしめる。
すると、モニターが映し出されると……そこにはバーニンとアイシーが映し出されている。

バーニン おいお前ら！！空に大きなもんが見えるか！？

バーニンが慌しい表情で言い出すと、指を刺して言い出す。
指を刺した場所には天空を舞う城らしき超大型空中要塞を中心に数多くの巨大な飛行要塞が空に浮んでいる。
そこから無数のガジェットがこちらに向かってきているのが分かる。

アイシー あれはシグマの空中要塞「シグバール」だよ！シグマは無関係な一般人ごとミッドチルダに攻撃しかけて来るよ！

バーニン お前ら！一応聞いておくがどうする気だ？

アイシーとバーニンは銀時達に聞いてみると……

スカリエッティ「ナンバーズに伝えてくれ、機動六課と共に「シグ

マーズ』の侵入を阻止して全て撃墜せよ！我々はこれから銀時と共に敵の本局に向かう！」

アイシー りよ・・・了解 ！

バーニン 分かったよ！

モニターが消えると、スカリエッティは準備を始める。

スカリエッティ「ウーノはここで機動六課とナンバーズのサポートを頼む！」

ウーノ 了解しました、ドクター！

スカリエッティはウーノに機動六課とナンバーズのサポートを命じる。

彼女はナンバーズでもリーダー格である。実務指揮を執るがその戦闘力は低い。

だが彼女の持つIS『不可触の秘書』はセンサー類の探知を回避するステルス能力と、知能加速・情報処理能力を向上・チューンさせる能力である。

スカリエッティ「銀時、源外殿、イストワール殿、ネプテューヌ、一刻を争う状況になってきた。ガジェットと戦闘機人は仲間達が何とかしてくれる。その間に我々は敵本陣に突入する」

銀時「だけどどうやって行く？」

スカリエッティは5人と共にウゼルの本拠地に突入しようと考えているが、どうやって行くのか質問する銀時。

そんな銀時に源外が胸を張って言い出す。

源外「安心しろ銀の字。こんなときじゃからこそ、この江戸随一の発明家であるこの俺の出番だろ？スカリエッティ！今こそこいつの

それぞれバラバラに分かれて戦い、数多くのガジェットと魔道兵士と戦っていた。

ミッドチルダ・第4起動高層ビル

そこにはいまだ逃げ遅れていた人々が数多く存在する。

人々は怯えて慌てて逃げている。

そんな中、2人の少女が5体のガジェットに教われいく中……

フェイト「はあああああああ！」

突如、三日月型の金色の刃が5体のガジェットを切り裂く。

そう、ガジェットを破壊したのは他でもない、フェイトだった。

フェイト「ここは私達に任せて！早く逃げてください！」

フェイトがそう言い出すと、少女は安全なほうに逃げ出す。

そしてフェイトは、ガジェットとの軍勢を睨みつける。

アルフ「うりゃあああああああああ！」

アルフも加勢して魔道兵士を次々と破壊する。時には変身して狼となつてガジェットを次々と噛み砕いていく。

神楽「ほおわちゃーーーーー！！！」

神楽は傘を大きく振り回して次々とガジェットを破壊して魔道兵士

をも撃破する。その数は誰よりも多いのである。
機動六課最強の名は伊達ではなかった。

神楽「このミッドチルダは『歌舞伎町の女王』である私がいる限り
傷つけさせないアル！」

傘を敵軍勢に向け、神楽が言い放った。

それを無視して恐れず神楽を襲いだす魔道兵士とガジェットだが・
・

エリオ「サンダー・レイジー!!!」

エリオは『ストラダ』を構え、思いつきりサンダー・レイジーを
放った。これにより数多くのガジェット達は破壊される。

神楽「エリオ！」

神楽は援護してきたエリオの名を嬉しそうに呼ぶ。

エリオ「神楽さんには指一步も触れさせはしない！一緒に戦いまし
よう！」

神楽「追うアル！」

そして神楽とエリオの傘と槍の連携攻撃により、さらに次々と破壊
されていく。

月詠「綺麗な薔薇には……」

猿飛「棘があるわよー！」

月詠と猿飛は互いに数多くのクナイを一斉に放って数十体のガジェ

ツトを破壊し、接近してくる魔道兵士には月詠の小刀と猿飛の体術が連係して返り討ちにする。

月詠「流石は元お庭番衆。以前に出合ったあの忍びに衰えない素早い動きをする」

月詠は猿飛の強さを、以前に地雷亜の件で助けてくれた全蔵と双壁となる実力であると認める。

猿飛「貴方に褒められても嬉しくないし、どうせだつたら銀さんに褒められたいぐらいよ！むしろ、汚されてみたい！」

M的な発言をする猿飛に少し青ざめる月詠。

猿飛「……けど今回は貴方とは協力しなくちゃ解決できないよ。うね。あのフェイトって女はまちががなく私の最大の恋愛敵。それでも始末屋として目の前にいる外道な輩を見過ごす訳には行かない」

猿飛は今回のシグマの起こした悪党な事件を許す訳には行かなかった。

弱き者を苦しめる外道な輩を退治するためなら自らも外道の道を進むのが始末屋。

例えそれが守るものがフェイト達であろうと外道を倒すのが月詠である。

猿飛「弱き者を救う為、自ら外道の道を進むのがこの私、始末屋さっちゃん！」

そう言いながら猿飛はクナイで接近して魔道兵士を破壊し、時には納豆で魔道兵士の顔にぶっ掛けさせて気絶させる。

猿飛「たとえそれが恋愛敵でも、私が汚れて誰かを救えるというなら、喜んでこの手を地に染めるわ！」

そして魔道兵士1体を踏み台として猿飛はクナイをさらに大量に放ってガジェットを破壊する。

月詠「お主のやり方には同感じゃ！わっちも日輪を守る為に女を捨て、修羅の道を選んだ身じゃ！今回のシグマのやり方はわっちも見過ぎせぬ！」

外道を進んで民を守る為悪党を始末する猿飛と動揺に、月詠も女を捨てて日輪と吉原を守る番人となった。

月詠も援護してさらにクナイを放って魔道兵士を串刺しにする。

猿飛「貴方とはこう言う事は案外気が合うわね……だったら目の前にいる敵は1人も残さず始末しまくるわよ！」

2人の美しき女が共鳴し合うかのようにさらに暴れまくり、次々と敵をなぎ倒していく。

キャロ「フリード！」

キャロは『竜魂召還』で、詠唱と共にフリードリヒをチビ竜から真の姿『白銀の竜（飛竜）』に召喚が召喚される。

そしてフリードは口からブラストフレアを放って次々とガジェットと魔道兵士を破壊していく。

トーレ「たとえ魔道兵士でも！」

ディード「容赦はしない！」

トーレとデイドは『インパルスブレード』と赤い光の双剣で、魔道兵士を切り裂いていく。

スバル「やあああああああああああああああああ！」

ギンガ「はあああああああああああああああああ！」

ノーヴェ「おりやあああああああああああああ！」

スバルとギンガとノーヴェは関係しあって『ウイング・ロード』を放って『マツハキヤリバー』と『ブリッツキヤリバー』と『ジエツトエツジ』で滑り出し、次々とガジェットを破壊していく。

隠れていたところに2人の魔道兵士が奇襲攻撃でフェイト達を攻めようとするが、

ザクリ！

1人の魔道兵士が突如、後ろから何者かに突き刺されてからだが貫通される。

実はその正体は姿を変える変装能力「>RUBY<>RB<偽りの仮面>RT<ライアーズ・マスク>/RUBY<」で変装していたドゥーエであった。

ドゥーエ「悪いけど、貴方達『カリバン』の思っ通りにはさせないわ」

そうやってドゥーエは血に染まった『ピアッシングネイル』を構え、フェイト達の加勢に向かう。

聖王教会

この教会には数多くの避難民が地下に非難していた。

クアットロ、アギト、カリムは逃げ遅れた避難民を教会に連れて救助している。

クアットロは流石に今回のシグマのやり方が気に食わない為、救助活動を手伝っている。

幻想でスカリエツティ作のガジェットで魔道兵士とガジェットの注意を払ってその隙に避難民を連れて逃げている事が多い。

そして数多くのガジェットが中心となって襲ってきているが……

なのは「デイバイン・バスター！」

なのはが『レイジング・ハート』から桜色の魔導砲を放ち、10体以上のガジェットを破壊する。

ユーノ「チェーン・バインド！」

そこでユーノが大量の魔力の鎖を放って数多くのガジェットの動きを封じる実はようやく機動六課にタイミングよく戻ってきて、それでなのは達の援護をした。

……久しぶりの登場かもしれない。

ヴィータ「まとめてぶちこんでやるあああああああ！」

ヴィータは8つの鉄球を出し、グラーフアイゼンを振って全てを打ち放った。全ての鉄球は命中し、ガジェットを破壊した。シグナム

と九兵衛は互いに行きピッタリにガジェットを次々と切り倒す。

シグナム「レヴァンティン！」

シグナムは『レヴァンティン』を連結刃形態『シユランゲフォルム』と変形させ、ヘビのような動きで次々と切り倒す。

ティアナ「クロスファイアーシュート！！」

ティアナはクロスミラージユで魔道兵士達を打ち抜いていく。

九兵衛「貴様等の好きにはさせない！」

九兵衛も神速の剣技で次々とガジェットを斬る。

そしてガジェットは左右から大砲を表し、一気にレーザー光線を放つが……

ザフィーラ「そうはさせせん！」

シャマル「風の護盾！」

ザフィーラは方向を上げ、地面から光の柱が現れる。シャマルも大量の防壁を展開させる。

2つの壁が全てのレーザー光線を防ぐと……

セツテ「今だ、セツテ、ウエンディ！」

セイン「了解！」

ウエンディ「分かっているッス！」

ガジエツトの大群の背後からセイン、ウエンディ、セツテが現れる。セインのディーブダイバーで、地面の中を移動してガジエツトの大

群の背後の地面から出たのだ。

セツテが、ガジェットに目掛けて『ブーメランブレード』を放つ。高速で飛来してくる『ブーメランブレード』が次々とガジェットを一閃して破壊する。

そして『ブーメランブレード』は、セツテのIS『スローターアームズ』で軌道を変えてセツテの元には戻らずにそのまま追撃してガジェットをさらに多く破壊する。

ウエンディは『ライディングボード』の砲身からエネルギー砲を放ち、一気にガジェットは数体も破壊する。

ルーテシア「行って」

ルーテシアがそう一言を言うと、召喚されたガリユーは素早い動きで腕から伸びる長大な爪で次々とガジェットを破壊していく。

シャツハ「全てを駆除する！」

シャツハは『ヴィンデルシャフト』を振り回し、次々と撃墜していく。

全てのガジェットの破壊が成功したら、次のガジェットの大群が現れる。

だが……

新八「ウオリヤアアアアアアアアアア！！！」

アイエフ「せやああああ！！！」

コンパ「いくです！！！」

新八とアイエフとコンパがガジェット軍をなぎ倒した。

なのは「新八君！アイちゃん！コンパちゃん！」

なのはが驚いて3人を呼ぶ。

新八「僕等もここで活躍しますよ！うおおおおおおおおお
お！！！」

アイエフ「はいはい、そんなに慌てないの」
コンパ「皆さん命を大事にで行くです！」
なのは「分かった！」

なのは達は再びガジェット達に攻め入れる。

ミッドチルダ・臨海第2空港

空港の外には数多くの魔道兵士が桂、エリザベス、はやて、リイン、
近藤、土方、沖田を囲んでいる。

桂「ふ……この程度で我々を囲んだつもりか？」

桂は懐に手を忍ばせた。そして『んまい棒』を取り出した。

桂「んまい棒、鎖羅魅サロミ！！！」

んまい棒を床に投げ、屋上は煙に包まれた。

突然煙に包まれ、魔道兵士達は混乱する。

すると丸い玉のような物が魔道兵士達の前に投げられ、玉に表示さ
れている数字がゼロになった瞬間、

放たれる衝撃は斬るだけじゃなく数多くの魔道兵士達を吹飛ばす。

エリザベス『おるあああああああああああああああああ！』

そうか書かれたプラカードを豪快に剣のように振り回しながら、エリザベスも続くかのように次々と魔道兵士を破壊していく。後ろからの奇襲も回転蹴りをお見舞いして返り討ちにする。

はやて「リイン、私達も行くで！」

リイン「はい、はやてちゃん！」

リインは、はやての目の前に移動した。

はやて・リイン「ユニゾン・イン！」

二人の声が重なり、白い光に包まれる。

やがて光が収まり、ユニゾンしたはやてが姿を現した。ユニゾンによって、髪の色が少し薄くなっている。

そしてはやて前に魔方阵が出現する。

はやて「ラグナロク！」

その魔法陣から強大な魔導砲が放たれると、一気に数多くの魔道兵士を倒す。

そしてリインフォースも反対側から魔法を放つ。

リインフォース「デアポリック・エミッション、闇に、染まれ！」

掲げた手の上に球状の魔力を発生させ、それを一気に巨大化させて範囲内を魔力爆撃する。

その威力はかなり大きく、一気に30人以上の魔道兵士が破壊された。

ヴァイス「かぁー、旦那方やってくれるぜえ！っしや、俺も行くぞお！」

ヴァイスはかなり離れた場所から『ストームレイダー』を打ちまくり、次々と魔道兵士の頭をぶち抜いた。

オットー「哀れな者達だ。せめて安らかに眠ると良い」

オットーはそう言い、『レイストーム』を問答無用に放って次々と魔道兵士を倒しまくる。

その隣ではデイエチが『イノーメスカノン』からエネルギーを収束するしている間に10人以上の魔道兵士が襲い掛かってきた。

オットーが返り討ちにしようとするが・・・

山崎「てやああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

突如、山崎が飛びかかって二刀流を炸裂させ、デタラメに振り回す力が入っていて、襲ってきた全ての魔道兵士達をなぎ払うかの様に吹飛ばす。

両手に持っているのは、右手にミントンラケットを持っていて左手には刀を持っている。

オットー「何でミントンラケット？」

オットーは哀れみにツツコム。

だが今の山崎の強さは土方と沖田に次ぐほどの力を発揮していた。

「デイエチ「山崎さん！」

「デイエチは山崎に助けられた事で驚きだす。

普段の山崎は戦いに関してはナンバーズよりかなり衰えており、そんなに強くはないと思っていたが・・・今の山崎の姿は全くの別人に思えた。

山崎「デイエチちゃん・・・俺はこう見えても頼りがない地味な男だよ・・・けど、そんな僕でも侍だ」

山崎はミントンラケットと刀を強く握りだす。

山崎「侍は、普段では一般人と変わりはない。でも、大切なものを・・・ましてや大切な女の為に戦う為ならば・・・たとえ地味野郎でも、100倍以上に強くなれるんじゃないかあああああああああああああああ！」

そう叫びだすと山崎はミントンラケットと刀を構えて、素早い動きで次々と魔道兵士を吹飛ばす。

本来山崎は一刀流で普段は二刀流は出来ない。だがデイエチと言う女と出会い、お互いに一目惚れになった。

それと同時に山崎の中に新たな力が芽生えた。（言うなれば愛の力？）

次々と魔道兵士を倒しまくる。

山崎の魂の叫びを聞いたデイエチは少し顔を真っ赤になり、オットーは唖然としていた。

オットー「・・・なるほど、侍は強しって感じだな・・・で、

その侍に守られている人が何ボーっとしている？」

オットーにそう言われると、ディエチは我に返ってディエチは『イノームスカノン』を構えて撃つ。

ディエチ「ターゲットロックオン……発射！」

そして『イノームスカノン』から巨大なエネルギー砲が放たれた。その威力はなのはの『エクセリオンバスター』と互角であり、30体以上の数多くの魔道兵士が吹飛ばされて行く。

ノワール「なかなかやるわねあの子たち。私達も負けてられないわ！」

ブラン「まとめて潰す……」

ベール「踊りましょうか」

ノワール達も桂達に負けておらず、ノワールはショートソードで切り裂き、ブランはハンマーでなぎ倒し、ベールは槍で次々と倒していく。

シグマとの決戦はちかい。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!!」

シャチール「よう! 『闇夜の暗殺者』 シャチールだぜ?」

銀八「おし、ペンネーム『鳴神ソラ』さんから、『マリオ』『ネプテューヌ』に新しい相棒と家族が出来たな…それで…俺殴りたいから出たい」

ソニック「俺も擬人化してでも行きたいぜ」

まあ…2人共怒りが凄いな…

ルイージ「それにしても…銀さんが(性+食的な意味で)狙われているよ…」

フォックス「どうなるのやら…」

スネーク「しかしシグマの奴はどうやって別世界のモンスター達のデータを手に入れたんだ?」

ファルコ「確かに…アパロイドなんてそう簡単に手に入らないよな…」

スネーク「そんな訳でバーニンやアイシーに質問『シグマの奴はど

「うやってモンスターのデータを手に入れたんだ？」

ルイーダ「真王さんに質問。ゼロセイバーやエックスセイバーのモ
チーフはやっぱりゼロとXですか？」

クッパ「我輩は答えなくて良いのだと言ったぞ（汗）…それでネプ
テューヌに質問。家族となったサキュバスをどう言う風に育てるの
だ？」

「そんな訳で次回を楽しみにしています」

マリオ「準備は？」

ソニック「OK」

「…ソニックは無理だと思うぞ。」ズバリお答えしましょう」

バーニン「シグマは異世界へ渡る装置を創り上げて行ったんだ」

アイシー「そしてモンスターの遺伝子を取って製造していたんだよ。
あと機械生物とかはそのプログラムを取って造ったんだよ」

真王「2つ目ですが、その通り。『ゼロセイバー』と『エックスセ
イバー』は『ロックマンX』のゼロとエックスをモチーフにしまし
た」

ネプテューヌ「3つ目だけどとりあえず家族の一員みたいになろう
かと思うんだ」

銀八「はいでは『鳴神ソラ』さん。廊下に立つ前に2人を押さえて

てください」

シャチール「やり方が気に喰わないみたいだな？次はペンネーム『月光閃火』だ？『よお』：月光閃火だ。

しかし…まさかの“サキユバス”とはな…。シグマの野郎…一体何処まで手を出す気なんだ？

輝刃「全くだな…いくら科学者と言えど、生命を冒す所業は許されたモノではない…。」

とは言っても、生まれちまったもんは仕方ねえけどな…どんな過程があれど、生まれた生命はその生まれた奴のもんだからな…。あ…とりあえず、まずは俺からだ。

1・シグマに質問だ。お前いろんな分野にヒョイヒョイ手を出してるけど、正直言って『これは手こずった』って分野はあるのか？あったらその時の苦労話をコンパクトに話してくれ。

輝刃「確かに…敵と言えど、そういった話の一つや二つはありそうだな。で、次は俺からだ。」

2・作者に質問だ。4月にスパロボの新作が出るんだが…正直言ってスパロボ好きか？そうだったら、好きなバンプレストオリジナルキャラは誰なんだ？

ああ…そついや新作出るよな…『スパロボZ』の続編の前編が。俺も注目しているタイトルだ。何せ、新参戦作品が豪華だし。

輝刃「というか…『グレンラガン』の名前見た時はビックリしたぜ

∴。だつて規模がデケエし∴（汗）。」

ああ∴あの規模のデカさはヤバすぎだろ∴（汗）。『1つ目の方は確かマスターはラオシャンロンに挑戦して何とか遺伝子を手に入れた見たいだ？』

真王「2つ目ですが、嫌いです。それどころか興味ありません」

銀八「∴∴∴月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

シャチール「次はペンネーム『sibugaki』だ？』やってくれたなあ此処のお嬢ちゃんたち
おいらの質問にあんな回答するんなぞあ名指しで喧嘩売られたよう
なもんだぜい

ポーポポ

「あ、作者がドSモードになった」

つてな訳で今回はもっと凄い質問しちゃうぞお！

質問その1

ヒロインズに質問です

この中で「これならマシだな」と思う物は何ですか？

? 「Tウイルス」

? 「ブラーガ」

? 「赤い水（屍人化）」

? 「ハジケウイルス」

追伸：どれか一つは絶対にお答え下さい
でないとサービスマンを投下します

質問その2

もしも銀時が木刀ではなく鼻毛で戦っていたらそんな銀時に惚れま
すか？

惚れませんか？』・・・まず言えることは

ヒロインズ「どっちも嫌だったの！！！！」

銀八「待て待て！そんなこといったらもう遅い！！」「何！？」

サービスマンが現れた。

サービスマン「では喰らえ！サーーーービス「オリヤアッ！！！」

キーーーーーーー！！！！！！！！！！バタッ！

サービスマンは、ネプテューヌ、ヴィヴィオ、リリスから金的を喰
らって倒れた。

ネプテューヌ「もう二度と来ないでね」

サービスマン「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返事がない。もう屍になったようだ。

シャチール「・・・・・・・・」Sibugaki「これからちゃんとし

銀八「……つ、つつ次行こうか。ペンネーム『黒神』さんからの質問。』質問します。」

ベールへ、僕の小説では今『狂乱編』と言う桂を中心としたシリアスが進んでいます。

桂の活躍を見てどう思いますか？』」

ベール「相変わらずですね桂さん」

真王「はい、あんなリアクションです。『黒神』さん、廊下に立って下さい。次はペンネーム『黄色いのか』さんからの質問だ。

『ネプテューヌに質問

サキュバスの母親になって後悔とありませんか？』…で、どうなんだ？」

ネプテューヌ「後悔なんかしないよ。リリスのために精一杯頑張るんだから」

真王「『黄色いのか』さん。ネプテューヌを応援してくださいね」

シャチール「次はメーティアにさせようと思ったが、あいつ『私はそんなもの柄じゃない』って言ってほっといたそうだ」

銀八「んだよそりゃ。しゃーねえ、リリスにさせるか」

真王「それじゃあ次回会いましょう」

第四十一訓：宣戦布告を受けたら準備してかかれ（後書き）

真王「次回もまだまだ戦争じゃ」

リリス「次回『戦いにはBGMが一番』テイクオフ」

第四十二訓：戦いにはBGMが一番（前書き）

真王「今回桂達が活躍か？」

リリス「『リリカル銀魂』始まるよ〜」

第四十二訓：戦いにはBGMが一番

六課と新八たちがそれぞれ戦っている中、銀時、ネプテューヌ、源外、スカリエツティ、イストワール、リリス、ヴィヴィオはと言うと……

源外「どきやがれ、ガラクタ共お！」

源外が荒っぽく言い出すと、何やら飛行物体を運転していて次々とガジェットをひき当て破壊していく。

ネプテューヌ達の乗るガーディアンで、ガジェットと魔道兵士達をなぎ倒していく。

しかも陸戦様としても足にキャタピラーが付いており、魔道兵士達を轢いていく。

スカリエツティ「はははははははははははははははは！見たか鬼兵隊よ！君達の技術で作られたガジェットなど、私達のガジェットにかれば一撃粉碎さ！」

源外「要塞・大砲・キャタピラ……これが男の機械からくりじゃああああああああ！」

愉快そうに笑い出す源外とスカリエツティに対し……

銀時「ジジイ共オオオオオオオオオオ！男の機械からくりは結構だがもうちょっとデリケートな運転できねえのか!？」

ネプテューヌ「もう少しゆっくり運転してよ!!！」

イストワール「源外さん！私まで落とす気ですか!!！」

リリス・ヴィヴィオ「キャー……キャー……!!！」

源外の荒っぽい運転に銀時とネプテューヌとイストワールは落ちそうになっている。

しかしなぜカリリスとヴィヴィオだけは楽しそうにしている。後なぜリリスとヴィヴィオがいるのかと言うと、勝手に付いて来たのだ。

スカリエッティ「安全な運転で命が助かるなら最初からそうしているさ！でも今回ばかりは一刻も争うのだよ！だから危険を冒してまでやらないや行けない事もあるのさ！」

源外「前にも言ったが機械からくりの扱いは喧嘩と同じよ！ナメられたら終めーだ！」

2人がそう言うのと前から鬼兵隊作のガジェットが無数に現れるが、ガーディアンの右腕からレーザー光線を放って返り討ちにする。そして後ろからも現れると……

源外「銀の字！少しお前の木刀を改良させてもらった！その木刀の柄を押せエエエエ！」

銀時「おい、まさかまた醤油じゃねえだろうな！」

源外「良いから押せエエエエ！」

源外に大きく命令され、銀時は「しゃあねえ！」っと言って立ち上がり、木刀をガジェット達に向けて柄を押すと……

銀時「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

びゅー！

木刀の先から黒い液体が出る。

銀時はもちろんネプテューヌもイストワール啞然とする。

が手薄のようだ！たとえ敵が出てきてもそれほど厄介な相手はいな
．．．」

愉快そうに言い出す源外だが．．．

ネプテューヌ「おじいちゃんああああああん!?」

ネプテューヌが大きく叫びだすと、後ろから巨大なガジェット．．．
と言うより巨大ロボットがいた。ゴリラっぽい体で、その大きさは
カラクリ家政婦の参丸七號「通常」ウドちゃん」並である。

ネプテューヌ「どこが近道!?!?て言うより何なのあれ!?!」

青ざめてツツコムネプテューヌに対し、スカリエッティは巨大ロボ
ットを見て驚く。

スカリエッティ「あれは．．．対戦艦用に以前に私が作るうとし
たが、作るのを中断したはずの『コング・ガジェット』通常『ガレ
オム』。オーバーSランク級の魔法攻撃をも防げる『AMF』を装
備されている上にその強さは超大型戦艦をも破壊できる破壊魔神だ」
銀時「ガレオム!?!あんだスマ○ラやってたの!?!」

源外「まさかとは思うが、あれは『鬼兵隊』が作り上げたガジエッ
ト!?!?．．．まさかここまでガジエツト技術が進んでいるとは．．．
」

スカリエッティは『鬼兵隊』のガジエツト技術に驚きだす中、『ガ
レオム』が大暴れする如くに銀時達を襲いだす。

ネプテューヌ「うわあああああああああああああああああああ
!おじいちゃん何とかしてえ!」

絶叫して叫びだすネプテューヌ。
そして源外は……

源外「紫の字！コイツの柄を押せ！」

つと源外はネプテューヌに木刀を手渡す。

ネプテューヌ「ちょ……まさか私のほうも」

源外「安心しろ！お前さんの醤油が出るのじゃねえ！もつと面白いものだ！」

その言葉を少し信じてネプテューヌは『ガレオム』に向けて木刀を構えて柄を押す。

ネプテューヌ「ウオオオオオオオオ！」

びゅー！

出て来たのは確かに醤油じゃない。何故かグレープジュースであった。

源外「グレープジュースが出る」

イストワール「何でグレープジュースウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！？」

青筋を浮かべて怒鳴りだすイストワール。

源外「だって紫の字って紫のイメージがあったらどう？だからグレープジュースが好きかと思って……」

イストワール「別にネプテューヌさんは好きじゃないです！何の役に立つんですか！」

ネプテューヌ「そうだよ！これじゃあコップ出して飲むとき困るじゃない！」

イストワール「ネプテューヌさんそれ突っ込むところおかしいです！」

銀時達がギャーギャー騒いでいるうちに『ガレオム』が襲い掛かってくる。

源外「スカリエッツィ！」

スカリエッツィ「承知した！」

スカリエッツィはDVDらしき物を取り出してCDにセットする。すると銀時とネプテューヌの後ろからガジェットが現れる。

銀時「おおお、コイツはまさか！」

そのガジェットから特殊なレーザー光線を放つと銀時は一瞬思った……が……

パン パッパパン パパパッパパン

パン パッパパン パパパッパパン

パッパパ パパ パパーカーン

ドゥルルー ドゥルルー

ドウルルル ドウルルル ドウツドウルル

ドウ ドウ ドウ ドウ ドウ ドウ ドウルル

銀時「つて、またロッキーかい！！！！」

額に血管を浮かべて怒鳴る銀時に啞然と呆れるイストワール。

ネプテューヌ「ねえ銀さん。源外さんってこう言う人なの？」

銀時「・・・ああ、江戸随一のカラクリ師だが発明するのは大抵はどうでも良いもんばかりだ。つうかなんでまたロッキー？」

銀時が源外に聞いてみると・・・

源外「聞いているだけでやる気が出てくるだろ？」

ネプテューヌ「これただの音楽再生機だよ・・・」

ネプテューヌが呆れて言う・・・

ガジェット フェニス「もんじゃ〜！フェニス「もんじゃ〜」

ネプテューヌ「しかもこのガジェットは歌うだけ？うる覚えじゃん。ヤル気出ないよ」

銀時「なんか腹立つだけで全然戦意昂揚しないんだけど！！」

歌うガジェットにつまらなさそうにツッコむティアナと怒り出す銀時。

そんな間に徐々に『ガレオム』が近づき、そして一気に剛拳を振り下ろそうとする。

ガキイン！！

ネプテューヌ「しつこいよ！エックスセイバー！」

エックスセイバー「御意！」

ネプテューヌが受け止め、カートリッジをロードする。

そしてガレオムの上に飛んで、

ネプテューヌ「竜巻破裏剣！！」

上からエックスセイバーをさし、プロペラのようにガレオムごと回
って上へあがり、そして下に向かって思いっきり投げる。

ガレオムは叩き付けられ、爆発した。

ネプテューヌ「さ、早くいこ」

銀時「お、おう…」

銀時達はとりあえず先へ進んだ。

ヴィヴィオとリリスは目を輝かせた。

ミッドチルダ 第4起動高層ビル

一方の桂達は鬼神の如くの強さで次々と現れてくる魔道兵士を破壊
していく。その敵の数は後わずかであり、このまま行けば全滅であ
ると思ったそんなときであった。

ランドルの雰囲気が変わる。そしてランドルから膨大な威圧と魔力を感じた。

ランドル「今のワシ等の関係は敵同士じゃ。もうお主らとの慣れ合いもここまでじゃ！」

叫ぶと同時に地面がひび割れ、コンクリートなどの石礫がランドルの周りに集まる。

そしてその石礫がランドルを覆い始め、両腕と体に大きな岩の爪と岩の鎧を身につけた。

ランドル「問答無用でかかってこい。生半可な覚悟では怪我では済まぬぞ！」

ランドルは中指を動かして挑発する。

桂「・・・その挑戦、甘んじて受けよう！『狂乱の貴公子』桂小太郎、参る！」

桂はランドルの挑戦を受け、ランドルに切りかかる。

ランドル「遅いっ！！！」

ランドルは重たそうな鎧を身につけているにもかかわらず、神速級のスピードでかわす。

ランドル「喰らえ！！グランドクエイク！」

ランドルは両腕を合わせ、地面に向かって振り下ろす。

地面に当たった後、とがった石柱が連鎖して桂達に襲いかかった。

桂達はギリギリかわす。

ランドル「まだワシの攻撃はおわつとらんぞ！」
桂「くっ！」

ランドルが飛び出してきて右手を槍のようにとがらせて桂に襲いかかる。

ランドル「どうした！『狂乱の貴公子』の力はその程度か？」

ランドルのラッシュは止まる様子はない。そのとき、

ランドル「むっ！？」

横からバズーカが発射され、ランドルは気付いて身を守る。

沖田「チツ、しくじったか」

発射したのは沖田だ。

ランドル「・・・勝負に横槍を入れるとは」

卑怯なやり方をする沖田に苛立つが、ぺつのとこから魔力を感じた。

はやて「ディアボリックエミッション！！」

リインフォース「ブラッティダガー！」

ランドル「ぬ！」

今度ははやてとリインフォースがランドルに攻撃するが、防がれる。

グリーンハート「これで終わりです」
ランドル「なに！グオツ！！？」

そこに隙をついてグリーンハートが魔力のこもった突きをランドルの腹に一撃を入れ、鎧は砕け、ランドルは吹き飛ばされた。

ランドル「グフツ……見事な一撃じゃ。……ところで主らは一体何のために戦うのじゃ？」

不意にランドルがこんなことを言い出した。

はやて「何言ってるんねんや、こちらは大切な物を守るために戦うんや！」

近藤「その通りだ！」

土方「守るべきものは守るって俺達の侍魂があるんでな」

桂「刀は敵を切るものではなく、弱き己を切るためにある。そして我々はその魂を守る信念がある」

桂達は答える。

ランドル「信念…魂…か…。成程の…。ならば！」

ランドルは理解した後、魔力がドーンと上がり、空高く飛び上がる。

ランドル「その信念がどれほどのものか！そしてお主らの絆がどれほどか見極めさせてもらうぞー！！」

ランドルは両手を広げ、巨大な魔力の塊を作り、そしてそれは大きな丸い岩となる。

ランドル「メテオプレッシャー!!」

そしてランドルは巨大岩と一緒に落ちてくる。

桂「ブラン殿、ハンマーを貸してくれるか？ ベール殿、その槍を」
ブラン「やる」

グリーンハート「…何に使うか知りませんが」

ブランは桂にハンマーを渡してもう一つのハンマーを出し、グリーンハートは指示どおりに槍を構える。

桂「活目せよ!!」

ブラン「これが本当の!!」

ハンマーを構え、グリーンハートは軌道上に槍を放す。

そしてハンマーは槍の柄に当たる。

桂・ブラン「ゲートボールじゃああああああああああああ
!!!!!!」

飛ばされた槍はまっすぐ巨大岩に向かう。

槍は巨大岩に接触したが、勢いは止まることなく、巨大岩を貫通し始める。

ランドル「なんじゃとっ!?!」

ランドルは巨大岩が貫通されていくことに驚き、そして槍はランドルの体に命中した。

ランドル「ぐああああああああああああああああ!!!!!!」

「!

鎧は砕け、巨大岩も砕け散ってガラガラと崩れおちる。

やがて煙がはれるとランドルが倒れていた。

ランドル「・・・ワシが負けたか…」

桂「そうだ、負けたのだ」

桂はランドルにそう言う。

ランドル「・・・いや、ホントに負けるだ何と思わなかったの」

ランドルはなぜか軽い口調で負けを認めた。

これにはやて達はすっこける。

はやて「なんやその余裕っぷり」

桂「・・・まさか本気出してなかったのか?」

ランドル「いやいや、ワシは本気を出した。あれを壊したことは驚いたが、まあなんにせよ主らの勝ちじゃ」

ランドルは起き上がって言う。

ランドル「それに、ワシが負けたことに向こうも対処を始めたし
の」

桂「!?!まさかっ!」

ランドル「そのまさかじゃ。ワシも敵と見なされた」

ランドルと桂達の周りにはガジェットと魔道兵士たちが困っていた。
ランドルは立ち上がって桂に言う。

ランドル「お主、…桂と言ったか？この戦いを終わらせるには、まずシグマを倒さねばいかん」

桂「承知している。俺の親友とネプテューヌ殿がそちらに行った」
ランドル「あの紫の子か…」

ランドルはネプテューヌを想像する。

ランドル「…なにはともあれ、やつらが決着を付けるまで耐えるぞ！桂小太郎！」

桂「承知！！」

ランドルも戦いに加わって、桂達はガジェット達を破壊しつつけた。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

リリス「こんにちわ」ネプテューヌ母さんの養子の夜魔族のリリスがアシストします」

銀八「あ？夜魔族？なんじゃそりゃ？」

真王「相手を誘惑する女性型の魔物です。デイスガイア作法です」

銀八「・・・じゃあ始めるか。ペンネーム『鳴神ソラ』さん。『ついに始まったな

マリオ「そうだな・・・」

ソニック「YES、銀時には俺達の方もシグマに入れて欲しいぜ」

ルイーダ「それにしてもスカリエッティに源さんも凄いやね」

フォックス「そうだな、あの2人の腕が合わされば凄いのが作れそうだしな」

スネーク「それで銀時達は突入だな」

クッパ「しかし・・・銀八先生のコーナーで我輩達以外の質問は色々トゲが多い質問があるな」

ネス「・・・僕達も気を付けないとああなっちゃうね」

リュカ「（ガクガクブルブル）。A。：（）」

フォックス「そんな訳で発明家2人に質問『新しい発明をするなら

どう言う発明をする？』」

マリオ「メンバーに質問『次の内、戦うならどれにする？』」

1・アパロイドマザー（スターフォックスアサルト）

2・ゼルエル（新世紀エヴァンゲリオン）

3・Uキラーザウルス（ウルトラマンメビウス&ウルトラ兄弟）』」

ネス「なのはさん達に質問『リリスを最初に見た時どう思った？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます』」

源外「そりやまあスカリエツティと協力して巨大な機械カラクリを作るんだ。たとえばほら、ビームサーベルとシールドとファンネルとか…」

リリス「おじいちゃんガンダム作りたいたね」

真王「2つ目だけどそりや無理でしょ、大きさ的にも（1は除く）。

あ、でもネプテューヌならいけるのか？」

なのは「3つ目だけどそれは驚いたね」

フェイト「頭に角が生えてたんだもん」

はやて「あれはシグナムに引けを取らないデカさやったな（別の意味で）」

シグナム「一瞬見た時焦った」

ヴィータ「あいつすっげー恰好してたぞ！！！！」

シヤマル「あんな露出の高いの一体なんですか！／＼／＼」

ザフィーラ「私はとりあえず魔物の類だと分かった」

スバル「頭の角生えてたよ！尻尾も生えてたよ！」

ティアナ「人なのかモンスターなのか分からなかったわ」

エリオ「な、何手露出の高い人が…／＼／＼」

キャラ「なんか負けた気がします…」

ギンガ「なんですかあんなはしたない恰好は！！／＼／＼」

リリス「なんか私褒められてる？」

銀八「何処がだよ！！褒められてる要素が全然ねえよ！！」

リリス「『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってね 次はペンネーム『月光閃火』さんだよ」『よお…月光閃火だ。』

…修羅ネプテューヌ、少々ゾツとしたぞ…（汗）。しかし…まあ、それでも俺とは互角にイケそうだな…。

輝刃「…俺は知らんぞ…（汗）。とりあえず、まずは俺からだ。」

1.リリスに質問だ。今現在の銀魂キャラ達に対する好感度一覧を聞かせてくれんか？

ああ…それはちょっと気になるかも…。っていうか…新八おもしろ

きり下位じゃねえといいな…。次は俺からだ。

2. 作者に質問だ。銀魂の原作でやっていたガンムネタ…こっちでもやるのか？あとこゝ亀ネタも。

輝刃「確かに、銀魂の原作は色んな作品のパロディネタが豊富だからな…。」

というか…銀魂の2期目、4月から放送開始するよな？…何かまたパロディネタやりそうな気が…（汗）。

輝刃「いや…必ずやるだろうな…露骨なの含めて…（汗）。」「好感度？そうだね。まず銀髪さんは母さんみたいに面白い人だから仲良くなれそうかな？」

銀八「何に対して面白いんだよ…。」

リリス「それから眼鏡君はよくわかんないけど私を見るなり顔を赤くしてはなれていったよ。でもなんだかおいしそう…。」

銀八「エ…新八狙われてる？」

リリス「神楽ちゃんはなんだか私に黒い気を発しているんだけどなんだろ？」

銀八（そりゃきつとお前のボディ自身のせいだと思うが…）

リリス「後あの鬢っばい人なんかアホっばいから分かんない」

銀八「アホっばいって…ククク…。」

リリス「ペンギンさんは遊び相手！」

銀八「おもちゃ扱いだよ……」

リリス「月詠さんだったっけ？恐そうに思ったけど母さんのおかげで優しく接してくれたよ」

銀八「そりゃよかったな」

リリス「あの眼帯の子はなんで私に殺気を出してるのかわかんない」

銀八（そりゃお前の体のせいだ）

リリス「あのゴリラさん………なんだか私の本能が疼き出す……」

銀八「狙われてるウウウウウウウウウウウ！！！！！！」

リリス「あのマヨさんマヨネーズ臭いから嫌い」

銀八「あゝ、分かるわかる」

リリス「そのマヨさんをちよっかい出してる人はよくわかんない」

真王「そうですね。パロディは一応適当で」

銀八「オiiiiiiiiiiiiiiii！！！！なんで手抜きしてんだよ！！！！」

真王「パロディ教えたら面白さなくなるじゃん」

リリス「そうだね。『月光閃火』さん。廊下に立って。次はペンネーム『sibugaki』さんだよ。『どうも、前回の質問のあとこちらのツッコミ組みに半殺しにされて目が覚めた作者です。これからは少しですがマジメなものも混ぜていくつもりです。では早速」

質問

今回仲間になったバーニンとアイシーですが、これから正式に仲間になった場合、他のヒロインズみたいに誰かを好きになったりするんですか？やっぱり年頃の乙女だし

今回は以上です

では『多分なるんじゃない？』

真王「なるだろうね」

銀八「うわスッゲーむかつく。『sibugaki』さん。廊下に10年立ってる」

真王「八つ当たりかい」

リリス「次はペンネーム『黄色いのなにか』さんだよ。『真王さんに質問です。』

リリスの名前でもしかして『ヴァンパイアハンター』の『モリガン』をモデルにしているのですか？』

真王「違います。『魔界戦記ディスガイア3』の『エンプーサ』をモデルにしています」

リリス「ピンクっぽい髪と服がチャームポイントだよ」

銀八「服っつーかほとんど水着じゃねえか!!」

真王「夜魔族はそう言う服装なんだよ」

リリス「それじゃあ『黄色いのなにか』さん。廊下に立ってね」

銀八「んじゃ次のアシストはイリスに頼むわ」

リリス「名前一字しか違ってないね。それじゃあまた次回」

第四十二訓：戦いにはBGMが一番（後書き）

真王「次回はイリスとネプテューヌの一騎打ちが始まります!!」

リリス「次回『己の魂は輝くもの』テイクオフ!」

ネプテューヌはイリスに気付き、飛び降りる。

イリス「まさかあなたもここに来るとは思いもありませんでした」
ネプテューヌ「私もイリスがここにいるだなんて思わなかったよ。
普通参謀クラスがいるはずなんだけど…」

ネプテューヌは周りを見渡しながら言う。

イリス「ファルコリアは別のところへ向かいました。まあどちらに
しろ、今のあなたでは私に勝てません」

ネプテューヌ「……………」

ネプテューヌはイリスの話を聞いて無言になる。

リリス「あのんだね？」

ヴィヴィオ「ねえパパ、あのんだねなの？」

リリスとヴィヴィオが銀時に聞いてきた。

銀時「あいつはイリスって言うんだ」

銀時はとりあえず言った。

リリス「……………」

リリスはイリスを見る。

リリス「…………ツ!？」

するとリリスに頭痛が走った。

そして、荒れた荒野に立つサキュバスの映像が過ぎった。

リリス（・・・今の…私の記憶？）

今の映像がリリスの記憶なのか分からない。

リリスは無かったことにした。

ネプテューヌ「・・・ずいぶんと余裕ぶってるねイリスさん。でも
そう言う人には最終的にやられちゃうけど？」

イリス「私は負けることなどありません。しかし、白夜叉と戦え
ば少し苦戦しがちですが…」

ネプテューヌ「銀さん強いからね。でもね…」

ネプテューヌはパープルハートへと変身する。

パープルハート「私の方も断然強いわよ」

パープルハートは宣言する。

イリスはパープルハートを警戒する。

イリスはパープルハートから何かすごい気を感じ取る。坂田銀時と
同じような・・・白夜叉の気配がするのだ。

銀時「おいネプテューヌ」

パープルハート「手を出さないで銀時。この子は私が相手をするか
ら。よね？エックスセイバー」

エックスセイバー 仰せのままに

パープルハート「今度はこっちの番よ」

パープルハートはそう言った瞬間、消えた。

イリス「!? 一体どk「ズドツ!!」グアアツ!!」

イリスは消えたパープルハートを探そうとしたら吹き飛ばされた。

パープルハートは見えないほどの神速で、イリスをエックスセイバーの峰でうち飛ばしたのだ。

パープルハート「本気で来なさい、あなたのお遊びに付き合う暇はないの」

パープルハートはイリスを挑発する。

彼女は完全に本気モードである。

イリス「成程、確かに凄い力を持っているようね。なら…」

すると、イリスから膨大な魔力を感じ取った。
今までリミッターをかけていたらしい。

イリス「わたしの全力であなたを落とします」

パープルハート「・・・やってみなさい」

イリス「では、ゼロセイバー、カートリッジロード」

ゼロセイバー Yes, sir!!

ガシャン!

ゼロセイバーにカートリッジがロードされる。

そしてイリスの足元に魔方陣が展開し、ゼロセイバーに炎が纏われ

る。

イリス「烈火天衝！」

イリスの魔法剣技が炸裂する。

三日月形の炎の刃は真っ直ぐパープルハートに向かっていく。しかしパープルハートは避けようとせず、そのままエックスセイバーを構えて、

パープルハート「セエエイッ！！！」

エックスセイバーを振り下ろして炎の刃をたたき切った。

イリス「なっ！？」

さすがのイリスも、炎の刃をたたき切ったことに驚く。

パープルハート「今度はこっちの番よ！」

パープルハートはそう言うとともに消えた。

イリス（ど、どこへ………！右！）

イリスは気配を感じて右に向くと、パープルハートがエックスセイバーを構えて振り下ろそうとしているのが見えた。

ガキインッ！！！！

イリス「ぐううう！！」

イリスはゼロセイバーで防ぐが、パープルハートの重い一撃に後退させられる。

イリス（なんて重い一撃…あのデバイスのせいなの？）

イリスはエックスセイバーを見ようとしたら、いきなりパープルハートが来た。

イリス「っ！！？ぐう！！」

いきなり来たパープルハートに驚くがとっさに防ぐ。
パープルハートは防がれているのも関わらず強いラッシュを繰り出す。

その一撃一撃には、まるで大きなダイヤモンドをぶつけてきているようだ。

イリス「くっこの！！」

イリスは負けじとゼロセイバーを振うが、神速でかわされ、後ろからまた峰でうち飛ばされる。

イリス「きゃあっ！！」

イリスは飛ばされるも何とか持ちこたえる。

しかしパープルハートはそれを許すわけもなく、重い一撃を与える。

イリス「くっ……ちっ！！」

イリスはパープルハートから離れる。

イリス「少々侮っていたみたいです。ゼロセイバー、カートリッジロード！」

ガシャン！x3

カートリッジを3回ロードする。

すると、纏う炎が先ほどよりも強くなっている。

パープルハート「エックスセイバー、カートリッジロード」

エックスセイバー ALL RIGHT!!

ガシャン！x3

パープルハートもカートリッジを3回ロードする。

足元に紫の魔方阵が展開し、エックスセイバーから紫色のオーラが出ている。

イリス「何を出そうが、この攻撃はかわせまい！烈火一閃！」

イリスはシグナムとは違う一閃攻撃『烈火一閃』を放つ。

パープルハート「かわすのが駄目なら」

パープルハートは紫のオーラを放つエックスセイバーを後ろに回して、

パープルハート「その技を壊すのよ。ギガスラッシュュ!!」

一回転して大きく振る。

その時エックスセイバーから紫の大きな刃が出てきて、イリスに向

かっっていく。

そして烈火一閃とギガスラッシュが接触した後、どんどんギガスラッシュが押していき、

イリス「きゃあああああああああああああああ！！！！」

イリスは壁まで吹き飛ばされた。

源外「なかなかやりおるな紫の字」

スカリエツティ「彼女は…多分SSS級以上の実力かと思えるな」

スカリエツティと源外はパープルハートとイリスの戦いを見て驚いている。

源外も圧倒されるほどの戦いは、入り込んだら巻き込まれて唯じゃ起きないと思わせる。

スカリエツティも2人の強さは戦闘機人どころがゾーマをも瞬殺出来るほどに達成していると考える。

2人がそう考える中、銀時はこの戦いを見て…

銀時「…似ていやがるな…あの2人の戦いは」

銀時は確信したかのように何かを言い出す。

イリス「え、似ているって何かなの？」

銀時「あの2人の戦いを見て思いだしきまった。10年前、なのはの世界で全てのジュエルシードを賭けて戦い抜いたフェイトとなのはの姿を」

ヴィヴィオ「なのはママとフェイトママの？」

『ジュエルシード事件』でフェイトとなのはは、海鳴臨海公園で互いの信じる思いをぶつけ合い戦った。

パープルハートとイリスの決闘はまさに10年前のフェイトとなのはの決闘そのものであった。

2人の戦いを見て銀時の頭の中には10年前の2人の少女の決闘を思い出す。

イリス「……こんな……ことが……」

一度は倒したネプテューヌにここまで苦戦させられている事に戸惑っているイリス。

イリス（いくらデバイスでパワーアップしたとはいえ、私は白夜叉のDNAを受け継ぎ、白夜叉の力を最大限にまで出し切っているはず。それなのに、彼女のこの強さ……白夜叉に匹敵するだと？）

パープルハートの底知れない強さに戸惑い始めるイリス。

一体彼女のこの強さはなんなのか理解できないが……1つ分かった事があった。

イリス（殺らなければ……殺られる！）

地面に突き刺した『ゼロセイバー』を構える。

イリス「ゼロセイバー、カートリッジロード！」

ゼロセイバー Yes sir!

ガシユン×9

イリスはカートリッジを9発ロードすると、『ゼロセイバー』の刀身から、真紅の炎が大きく溢れ出る。

とても異常なまでと言えるほどに炎が凄まじい勢いで燃え上がっている。

ヴィヴィオ「カートリッジを9発？」

カートリッジを9発ロードしたイリスを見ると、銀時はある事を思い出す。

それはイリスの最強の魔法を炸裂させる条件である事を。

イリスからあふれ出す強大な魔力にスカリエッティはあり得ないと驚く。

スカリエッティ「この魔力は……SS……いやSSS級に達成する！」

それは機動六課の隊長であるフェイト、なのは、はやてでさえも届かない魔力数値である。

それはつまりなのはの『スターライト・ブレイカー』を上回る威力を起こる魔法を放つ合図でもあった。

銀時は助太刀をしなければと下りようとするが、イリスの究極魔法の前に臆しないパープルハートを見てここは手出しはしない事を決断する。

リリス「母さんなんだか全然恐れてない」

銀時「わかるのか？」

銀時が聞くと、リリスは肯く。

リリス「わかる。母さんは目の前のことを恐れていない。私母さん信じる」

リリスはそう言ってヴィヴィオと一緒にパールハートを見守る。

一方のパールハートはイリスがこれから放つ魔法の正体を知っていた。

全てを無にかすかのように焼き尽くすイリスの最強の魔法『ゼロブレイカー』。

その威力はなのはの『スターライト・ブレイカー』をも上回るとんでもない一撃である。

だがそれでもパールハートは決して臆せず、『エックスセイバー』を前に向けて刀身を抜く構えをする。

イリス「正気ですか、ネプテューヌさん？今から放つ魔法は貴方の最大魔法をも勝る一撃です。それでも貴方は諦めないのですか？」
パールハート「分かっているわ。その魔法がSSSランクに達成するほどの魔力を込めていても……あなたは私に劣る」

イリス「何故です！以前にも言っただけです！私の力は『プロジェクトDNA』により白夜叉のDNAを受け継ぎ、その力は白夜叉と双壁にあたる！いくら貴方でも……」

パールハート「それは違うわね、イリス」

イリスが言う事をはっきりと断言して言い出すパープルハート。

パープルハート「本当にイリスが銀時と同じくらい強いなら……すでに私は負けている……けど、イリスのその強さは銀時そのものじゃない。ただの偽りの強さ」

パープルハートの言う事にイリスは少し驚いた表情をする。

パープルハート「イリスが『プロジェクトDNA』で銀時の力を得ても、ゾーマをも倒せる力を得ても……それはイリス、あなた自身の力ではない！」

パープルハートの言葉を聞いて、イリスは顔をしかめた。

イリス「何をたわげた事を……それで私の力を偽りの強さだと言うのか？」

鋭い目つきでイリスはパープルハートに言い出す。

パープルハート「本当に銀時の意志を受け継ぐのは、剣術でも強さでもない。……誇り高い侍の魂」

それは、パープルハートが銀時の強さを分かっているからこそ言える事である。

パープルハート「切るものは敵ではなく弱き己、そして守るのは己ではなく己の魂……」

パープルハートはエックスセイバーを横に構える。

「パープルハート」あなたのような銀時の血に頼る馬鹿如きに私は負けない！」

そう言うパープルハートの目には獲物を狙う獣の目をしていて。

イリスはその目を見て驚いた。

そう、まるで坂田銀時のような白夜叉の目をしていて。

イリス「……ならば、その魂ごと倒すまで！」

すると『ゼロセイバー』の刀身を包む真紅の炎がさらに巨大に大きくなる。

それは以前にネプテューヌに放った『ゼロブレイカー』をもはるかに上回る程である。

「パープルハート」（すごい熱気と魔力ね……でもあの子もしかして……やるしかないわね）
「エクスセイバー、カートリッジロード！」
「エクスセイバー All right!! Full power mode!!」

ガシャン×10

するとあるうことか、パープルハートは7発のカートリッジをロードしただけでなく鞘からも3発のカートリッジをロードした。

するとパープルハートの足元から紫に輝きだす魔法陣がいつもの3倍は大きく浮かび上がる。

だがカートリッジを多くロードする事は、それほど強大な魔法を発動することだが負担が異常なまでにかかる。

イリスは臆せずに、

イリス「我が究極の一撃を受けてみる！」

竜王の如くの気迫で叫びだし、『ゼロセイバー』を大きく構えだし、
イリス「ゼロブレイカー！！！！」

そのまま大きく振るう。

全てを焼き尽くすかのような業火が包まれた超極大な紅き閃光が放たれる。

銀時「ネプテューヌ！！魔法ごとぶった斬れえー！！！！」

銀時がありつたけの大声で叫びだすと……

パープルハート（……銀時）

銀時の声が聞こえたかのように銀時を思い込む。

そして眼を瞑ってゆっくりと『エックスセイバー』の柄を握りだす。
そして、エックスセイバーをあげて、

パープルハート「エックスカリバー！！！！」

信じられない事に超極大な紅き閃光が巨大な紫の閃光により一刀両断される。

イリス（こ…殺される…！！！！）

修羅の目に睨まれたイリスは恐怖に支配され、動けない。
修羅の目をしたパープルハートがした行動は、

パープルハート「イリスーーーーー！！！！！！」

大きくイリスに叫び、右手を握って魔力を溜めて、

パープルハート「歯あ、食い縛れえエエエエエエエエエエ！！！！！！！！！！」

魔力の籠もったパンチをイリスの顔面に当ててぶっ飛ばした。

イリス「ぐああああああああああああああああ！！！！！！」

殴られたイリスは壁までぶっ飛ばされた。

そして殴ったパープルハートは只その場を突っ立っている。

スカリエツティ「……なんて技だ……完全にSSSは達成している」
源外「ああ、正直ワシも驚いた」

スカリエツティと源外はパープルハートの『エックスカリバー』に感心すると、ヴィヴィオとリリスは余りにもデタラメな強さに黙り込んでお驚き出す。

銀時はそれ以上にパープルハートのが勝った事に安心する。

そして『ガジエツト・ガーディアン』はゆっくりと着地すると、パープルハートは銀時達に気づく。

パープルハート「……銀時……」

パープルハートは「本当に良く戦ったなあ…自分の信じた強さで本当に勝つちまたんだ…胸を張って誇っても良い」

銀時の言葉に安心そうに少し笑うパープルハート。

その光景に微笑む源外とスカリエッティ。

イリス「う……うっ……」

突如、イリスが苦しそうに声を出す。

それに気づいた銀時とヴィヴィオとリリスが臨時体勢を構えるが、

パープルハート「もう良いわ……銀時……彼女はもう戦えないわ」

パープルハートがそう言うと3人はパープルハートの方を振り向く。するとパープルハートはイリスに近づく。

そんな近づいてくるパープルハートにイリスは、

イリス「……どうやら……私の完全なる敗北ですね……」

パープルハートに敗北したのを受け入れたようである。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

イリス「では今回、私がアシストします」

銀八「んじゃ始めるか。ペンネーム『鳴神ソラ』さんから。『マリ
オ』張り切ってるなスカリエッティに源外博士」

ルイージ「と言うか：ガレオム出て来てるし；」

フォックス「そしてジューズや醤油が出るのはデフォだな……；」

ネス「それで外では桂さん達がランドルと戦って勝利！」

リュカ「そこにシグマのガジェットの大群が！」

クッパ「とことん卑劣なのだ！：銀時に質問『科学者2人にどうせ
ならこう言うのを作ってくれと言うのはあるか？』」

フォックス「バーニンやアイシーに質問『何でランドルはあの喋り
方なんだ？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます 『ズバリお答えしましょう』

銀時「あいつらに作らせるってのはあんま信用できんが、どうせな

ら『パフエ製造機』を作ってくれ」

銀八「俺もそう思う。次だ」

バーニン「しらねえよ。もとからあのしゃべり方だよ」

アイシー「なんか年寄りっぽかったけどランドルに聞いたら『さあ分からん』だって」

イリス「ワシ口調の魔物の遺伝子でも組み込まれたのかしら？」

銀八「知らんのかよ。んじゃ『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

イリス「ではペンネーム『月光閃火』からの質問です。『よお…月光閃火だ。』

しかし…源外の爺さんとスカリエツテイ、どんどんカオスの深みに填まっていつてるような…（汗）。

輝刃「…多分、おもいつきり填まっているだろうな…。と…まずは俺から質問だ。」

1. 作者に質問だ。もし鴨太郎が生き返ってミッドチルダに辿り着くとしたら…その時にデバイスを持っていたら、やはり中の人関連のネタを放り込むか？例えば、セットアップするとデモンベインのデザインそのまんまのバリアジャケットになったりとか…。

…何だろう…作者だったら無茶を通してでもやりそう…（汗）。次は俺からだ。

2・源外の爺さんに質問：っつーか提案だ。どうせミッドチルダに来たんだしデバイスの技術と知識吸収して、オリジナルのデバイス作ってみたらどうだ？もしかしたら人気出て親しまれるかもしれんぞ？

輝刃「…いや、あの爺さんの事だ…ロクなもんしか作んねえだろ…
(汗)。」…なんですかこれ？」

イリスは質問の内容に困惑する。

真王「まあもしそいつを復活させたら……あとは知らん」

イリス「ぶつちやけましたね」

源外「そうだな、ワシのオリジナルはビームサーベルとかプラズマ砲とかだな」

イリス「それってガンダムですか？」

銀八「……『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

イリス「いまいち納得しかねますが、質問コーナーはこれで終わりです」

真王「今回は短いな…。そして次回のアシストはV.I.V.Iにします」

銀八「おいそいつ敵キャラだろ!？」

真王「成り行きです。ではまた」

第四十三訓・己の魂は輝くもの（後書き）

真王「さて次回はシグマとの戦いが近くなったよ！・・・後シグマと直接じゃないですが・・・」

VIVEE「フン…次回『怒り出した人は凄い力を発揮する』テイクオフだ」

第四十四訓：怒り出した人は凄い力を発揮する（前書き）

真王「自動車教習で仮免許の試験合格しました」

ネプテューヌ「つぎは第二段階だっけ？」

真王「はい。リリカル銀魂始めますよ」

第四十四訓：怒り出した人は凄い力を発揮する

激戦のゆえに敗北したイリスは体中から血が溢れていて立ち上がる力はない。

1 m先にある地面に突き刺さっているイリスの愛剣『ゼロセイバー』を見つめ、パープルハートに言い出す。

イリス「本当に守りたいもの……その為だけに貴方はこれほどまでに強くなっただんですね……」

敗北によって理解したパープルハートのこの強さ。

自分の大切なものを守る為ならどんな相手であろうと打ち勝つ強い心。

銀時とパープルハートにはあり、イリスにはなかった強さ。

イリス「貴方の言う通り……私のこの力は白夜叉の力を真似した偽りの力……どんなに強くなるうとも……消して私は貴方と白夜叉には敵わない……今ようやく気づきました」

パープルハートの言う事がもつともであったと理解したイリスは右手を強く握り締め、己の心の弱さに悔やみだす。

それは人造生命体としてでもないイリス自信の感情である。

パープルハート「そう……あなたは銀さんの力を持っても勝つことができない。でももう一つあなたには私に勝てない理由があるわ」

パープルハートはイリスが勝てないもう一つの理由があるという。

パープルハート「……あなた私を殺すのを躊躇っていたでしょ？」

イリス「っ!!!?!」

イリスは驚く。

パープルハートを殺すのを躊躇っていた?なぜ?

イリスはなぜなのか考えていると、

パープルハート「答えはそう、初めて会った時のアレのおかげで自分の良心が出来たのよ」

イリス「!?!」

イリスは思い出す。

初めてネプテューヌと出会ったあの日、公園でタイヤキをくれた時の嬉しさで、いつの間にか良心が出来てしまったのだ。

目的のために敵を殺すことをし続けてきたイリスに、やさしさと良心を与えてくれた彼女を殺すことを躊躇った。

それどころか殺したくないと自分の心が叫んでいた。

イリス「・・・初めて知りました。私にも…人間らしさがあるんですね…」

パープルハート「・・・生まれは違ってても、イリスもあの人たちも人と言う生き物なのよ」

パープルハートはそう言うと、イリスは泣く。

自分にも人間らしい一面があるんだと、そう思っただけ涙を流した。そんなときであった。

銀時・パープルハート「!?!」

銀時とパープルハートが何かを感じて、後ろを振り向く。
そしてパープルハートは……

パープルハート「イリス！」
イリス「!!!」

パープルハートはイリスを前に押すと、突如後ろからエネルギー弾がパープルハートに直撃する。

銀時「ネプテューヌー!!!」
ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん!!!」
リリス「母さん!!!」

銀時とヴィヴィオとリリスは思わず叫びだす。
そして『エックスセイバー』は銀時の目の前に落ちてくる。

???「これは驚いた。まさか私の最高傑作がやられるとは……これが彼女の力と言う訳か」
???「俺も少しは驚いたがな」

聞き覚えのある声に銀時とスカリエツティは声が聞こえた方を向く。そこにはシグマとさつき放たれたエネルギー弾によって大きな穴をあけたV.I.V.I.がいた。

銀時「シグマ……」
シグマ「またあつたな白夜叉君」

銀時はシグマを見て殺気を出す。シグマは平然としている。

シグマ「まさか最高傑作であるイリスがその小娘……いや、ネプテューヌに破られるとは思ってもよらなかったが、だが逆に都合がいい！彼女と白夜叉の遺伝子を使って私の『プロジェクトR』レプリロイドを築きあげ

払ってでもやるつもりか」

源外がシグマがそう言う男であると言い出すと……

銀時「ネプテユーンを取り戻し……そしてシグマの計画を止める方法を教えてやるうか？」

銀時がその問題解決法を言い出す。

銀時「シグマをぶつ殺すんだよ」

ヴィヴィオ「パ……パパ？」

突如雰囲気がいっつきり変わりだした銀時を見てヴィヴィオが一瞬だが恐怖を感じた。

ヴィヴィオだけでなく、スカリエッティやイリスも一緒である。対してリリスは銀時を恐怖しなかった。

まるでその恐怖を体験しているかのような感じに。

V I V I「おしゃべりをする暇があるか？行け！」

そして数多くのガジェットと魔道兵士が武器を構えて一斉に銀時達を襲いだすと。

ドゴオオオオオオオオオオオンン！

一瞬に木刀を抜いて思いっきり振り、一振りですべてのガジェットと魔道兵士を吹飛ばす。

正確には一振りではなく、余りの速い剣撃が7、8回は振っているのである。

そして銀時は落ちている『エックスセイバー』を拾う。

銀時「爺さん、俺はこいつをネプテューヌに返してやらなきゃいけねえ。……後、こいつ等の始末を頼んでも良いか？」

銀時が振り向かずに関心ごとをみると、イリスは『ゼロセイバー』を抜き出して構える。

イリス「承知しました。……できることなら私も助太刀する所ですが、今の私では貴方の力にはなれません。ですから……ネプテューヌさんを……彼女を助けてください」

力になれないことで悔やむイリスは銀時にパープルハートの救出を託すと、銀時は「ああ」つと一言を言い出す。

ヴィヴィオ「パパ、危険だよ！さっきのアレはとんでもなく危険だよ！さっきも見たでしょ？圧倒的な威りよ……」

ヴィヴィオは止めようとするが、木刀を握っている銀時の右手の震えを見て言つのやめる。

ヴィヴィオ「……パパ？」

いつもと様子が違う銀時にヴィヴィオは額に汗を流す。

銀時「……気にいらねえ」

銀時の中からとてつもない怒りが現れ、それと同時に小さい頃の自分を思い出す。

銀時「全くもって、気にいらねえ」

剣道の特訓をして、その銀時を見守るかのように剣道の稽古に付き合う父のような存在である松陽の姿を。

銀時「ヤローだけは……死んでも思い通りにはさせねエ」

その眼は戦場に立つ伝説の侍、『白夜叉』その者であった。

VIVI「ほう？あの時の死んだ魚の目から獣の目が変わってるな。それが白夜叉の目か」

VIVIは銀時の目を見て言う。

VIVI「あの小娘のここに行くのは構わんが、先に行きたいなら俺と戦え！白夜叉！」

銀時に指差して言い放つVIVI。

銀時「テメエと付き合う暇はねえよ!!」

銀時はVIVIなど無視して先へ進もうとするが、

ドオン!!

VIVIの放ったエネルギー弾によって阻まれる。

IBGMVAVA戦byロックマンX

(Mega Man X OST , T O 6 : V i l e)

V I V I 「先に進むなら俺と戦えよ」

銀時「邪魔すんじゃないねえ!!」

銀時はV I V Iに攻撃する。

V I V I「うおっ!?!」

V I V Iは銀時の攻撃をギリギリで避けた。

V I V Iは銀時から離れる。

V I V I「成程な。その素早い動きと能力と夜叉の目、お前が白夜叉と呼ばれるのは少し納得がいくな」

神速の如くの攻撃を一目で見たV I V Iは納得する。

イリス「・・・負けた私が言うのもなんですが、V I V I! 貴方はマスターと世界を手にする気ですか!」

イリスはV I V Iに向かって吠える。

しかしV I V Iはどうでもよさそうな顔をする。

V I V I「知ったこっちゃないね」

イリス「え?」

V I V I「世界がどうなるのが俺の知ったこっちゃない。ただひとつ言えることは俺は世界の頂点に立つことを望んでいるのだ!」

V I V Iは手を握って言う。

V I V I 「シグマは俺を利用しているつもりだろうが俺はあいつの思い通りになるのはごめんだ。俺は俺のやり方でいかせてもらう。だがその前に白夜叉！お前を倒して俺が頂点に立ってやる！」

V I V I はそう言っつて銀時にエネルギー弾を撃ち、銀時はそこから逃げる。

銀時「要はあれか？オメエホントは誰かに認めてもらいたいのか？
V I V I 「そうだ。俺は認めさせるためにあえてシグマの案に乗った」

V I V I は銀時に撃ちながら言う。

V I V I 「そして俺は世界のジョーカーになるんだ！」

銀時はそこで止まる。

銀時「オメエ……」

V I V I 「遊びはここまでだ。お前は俺に倒されるがいい」

V I V I は銀時にバズーカ砲を向けて発射させようとしたが、右足に何か掴まれた。

シャチール「捕まえたー？」

V I V I 「な！くそ放せ！」

何とシャチールが地面からV I V I の右足をつちりつかんでいた。V I V I は振りほどこうとするが、シャチールは離さない。

いし。何よりあのおっさんづざいし」

シャチールの毒舌に銀時は少し苦笑いを浮かべる。

源外「なにはともあれ、先へ進めるようになったんだ。決着^{ケリ}つけてこい」

ヴィヴィオ「パパ、頑張つて」

リリス「母さん助けて」

スカリエツテイ「頼んだぞ」

銀時「おう、任せとけ」

銀時は託されてシグマのいる最上地へ向かう。

そして銀時にぶつ飛ばされ、瀕死の状態のヴィヴィは目を覚ます。

ヴィヴィ「白……夜叉………半信半疑だったが……噂は……
……本当だった……んだな……」

身体中に火花を散らし、苦しそうにつぶやく。

イリスはヴィヴィに近づく。

イリス「ヴィヴィ、あなたは一体何がしたかったの？」

イリスが問うと、ヴィヴィは苦しみながらも答える。

ヴィヴィ「俺は……世界がどうなろうと……知ったこっちゃ……
……ない。只俺は……認められたかっただけなんだ……」

ヴィヴィはイリスの手を向ける。

ヴィヴィの視界は真っ赤に染まり、どんどんノイズが酷くなってい

く。

V I V I 「俺は・・・V I V I・・・世界の・・・頂点に・・・立つ・・・男・・・俺は・・・俺・・・は・・・」

そのまま倒れ込み、二度と動かなくなった。

イリス「・・・ごめんなさい、もっと早く気づいていればこんなことにはならなかったかもしれない」

イリスは動かなくなったV I V Iを見て悔やむ。

イリス「けれど、私達は立ち止まりません。私は信じます。坂田銀時が、彼女を救ってくれると！」

そう言って、源外達の援護に向かった。

シグマーズ空中要塞・ファイナルプラント

I B G Mシグマステージ4 byロックマンX
(M e g a M a n X O S T , T 2 7 : S i g m a S t
a g e 4 (P a l a c e H a n g a r))

シグマ「・・・私が人間を憎いと気付いたな？」

パープルハート 当たり前よ。魔道機人だの『プロジェクトR』^{レプリロイド}だの・・・あなたは彼女達を人として見ていない。それだけで人間を憎いと言ってるようなものよ

パープルハートはそう言うと、シグマは笑いだす。

シグマ「くははははは！ああその通りさ！人間とは愚か過ぎる生き物だ！人間とは己の欲を満たすためだけの存在にすぎん！」

シグマはさらにと言う。

シグマ「そして人間はよくを満たすためだけに殺戮、暴力、略奪、拳銃の果てに戦争を起こすのだ！私はそれを見て人間は不要だと悟った。だから人間をこの世から消し去り、新たな世界を築き上げるために！」

シグマは本当の計画を語る。

この世から人間の存在を消し、レプリロイドという新たな人類を作るために。

パープルハート「・・・確かに人は傲慢よ。自分の利のために罪を犯す者も沢山・・・」

パープルハートは悲しそうな顔で言う。

シグマ「話が分かるではないか。ならばなぜその人間達に加担する？人間にも何かあるというのか？」

パープルハート あるわ、それは・・・

ドカアアアン！！

突然扉が豪快に蹴り飛ばされて開けられる。

現れたのは、一人の侍……いや、攘夷戦争でも伝説の武神として名を高め、世界を救った英雄『白夜叉』こと坂田銀時であった。

パープルハート 誇り高き魂を持つ人間がね

パープルハートは銀時に対して言う。

だが、様子がおかしく感じる。

シグマには分かっている様だが、銀時からは静かな怒りを感じとる。

シグマ「良くぞここまで来た……ワザワザ私に殺される為だけに来た事に感謝しよう」

銀時「……」

ご丁寧に挨拶するシグマだが、銀時はただ単に黙り込むだけであった。

シグマ「いや、言い方を変えよう。君の存在には凄く感謝している。あのオーバーSランクであるゾーマをも上回るその身体能力のお陰で私の『プロジェクトDNA』は成功し、『プロジェクトR』を立てなくても理想の究極戦闘集団を作れる。そして……その計画の為には君は死んで貰わなければならない」

シグマは笑いを止められず、ゆっくりと『ビームソード』を構えだし……

シグマ「全ては、貴様が死ねば住む事だ！」

その剣先を銀時のほうに向ける。

シグマから見ても銀時はもはや重要なサンプルしか見えなくなつた。

シグマ「……時は来た。これより『プロジェクトDNA』の最終段階に移行する……究極の魔道機人を作り出すために！」

全ては己の理想の為、シグマはこの手で銀時を倒す事を考えているが、銀時から異様な気配を感じた。

銀時「てめエがどこで復讐しようが構いはしねエ。機動四課だろうが管理官だろうがどうぞどうぞ好きにやりゃ良い……」

ただ単に冷静に口を出して言い出す銀時に少し意外そうな表情をするシグマ。

銀時「だがその手で作り出した魔道機人共は全ててめエの子に変わりはねエじゃねえか？それにも関わらずに……てめエ……子を道具扱いしやがったな」

シグマの狂った活動原因がどうであろうと、銀時にとっては許せない光景である。

銀時「お前によって生み出されたイリス（アイツ）を……てめエ……見捨てたな」

物心を付いた時にはすでに親は亡くなり、戦場の中で自分を拾ってくれた恩師、松陽を思い出す。

銀時「そんなもん……父とは呼べねエ……そんなもん、親子とは呼ばねえ……」

絶対に認められないシグマのやり方……そして絶対に許せないシグマの非道さ。

銀時「……消えろ」

怒りを込めた一言を口にする銀時。

銀時「俺とネプテューヌの前から……さっさと消えろってんだ腐れ外道」

鋭い目つきからはとてつもない殺気が放たれている。それを見たシグマは思わず驚きだす。

シグマ（凄まじい殺気だ……！）

銀時の殺気は、最初に出会った時に放たれた殺気とは比べ物にならない程に大きい。

シグマ（なるほど、戦う前から分かる！おそらくイリスが白夜叉と戦っても確実に負けるやも知れぬ）

さらに異変に気づいたかのようにシグマは回りに刺さっている剣を見ると、剣がちよくちよくと震えだす。

シグマ（剣が……震えている？……何かの衝撃でもなく、この要塞が震えているでもない……何かに共鳴されるかのように剣自身が震え上がっている）

その異変は全て銀時の放った殺気にある。
絶対的な強大な修羅を通った銀時だからこそ放てる圧倒的な殺意の
闘志。

得物を狩る獣の眼。そして白く染まった鬼神の如く眼。

シグマ（あれは……あの眼は）

シグマはそれがなんなのかを考える中、幻想なのか……銀時の後ろ
から大きな白い獣の姿が見えた。

その獣は狼の姿をした夜叉おにのようであった。

シグマ「……！」

これはシグマも驚きを隠せなかった。

それは銀時の殺気と闘志が重なり合って生み出された幻想である。

一方のパープルハートも異常なまでの怒りを表す銀時を見て驚きだ
す。

パープルハート（凄い闘志と殺気……怒っている……銀時が本当に
怒っている……シグマのやり方に銀時が怒りだしている）

パープルハートですら見た事がない銀時の絶大な殺意に満ちた怒り。
これこそが、銀時のもう一つの姿、伝説の白夜叉である。

パープルハート（これが……銀時が白夜叉と呼ばれた姿……）

今になれば分かる。

本気を出した銀時の強さはイリスをはるかに上回る強さを発揮する。

銀時「……シグマ……殺されるのはてめエの方だ。」

そしてその殺意に満ちた目ついでシグマを見つめる。

銀時「俺の中に眠る白い獣の逆鱗に触れたからには……楽に死ぬると思うな」

そして銀時は居合いの構えで木刀を握り、

銀時「薄汚いオイルをぶち撒いて、くたばりやがれ！」

白夜叉の怒りは最大限に達成している。

シグマはニヤリと笑う。

シグマ「ククククク……成程！それが白夜叉と呼べる能力か！面白い！ならば白夜叉よ！貴様を倒してサンプルにしてやる！」

そしてシグマとの最後の戦いが始まった。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

VIVI「よう、なぜかこの俺がアシストすることになった。て言うか何で俺がやられるんだ！」

真王「それがあんたの運命さ」

VIVI「ぐううう・・・」

銀八「まあまあその辺にして。とりあえず質問行こうか」

VIVI「フン、ペンネーム『月光閃火』だ。『よあ…月光閃火だ。』

しかし…アリマも可愛いがイリスも『凛々しい美女』って感じで綺麗だよなあ…。

輝刃「…後でアリマにどやされても知らんぞ…（汗）。とりあえず、まずは俺から質問だ。」

1・イリスに質問だ。パープルハート（ネプテューヌ）との勝負に敗れた訳だが、正直言っって今の感想を答えてくれ。

確かに、その感想は気になる所だな…。次は俺からだ。

2・作者に質問だ。…新八のフラグ…全然立つどころか、フラグの『フ』の字も感じないのだが…現時点での近況を聞かせてはくれね

えか…（漆黒）？（漆黒笑×）

輝刃「…閃火…とりあえず、落ち着け…（汗）。その漆黒はあまりにも酷だ…（汗）。…主に作者が…（汗）。」新八「…新八ってあの眼鏡のガキか。とりあえずこれは笑えるな。クツクツク…」

銀八「そう思うか？イリス、出番だ」

イリス「彼女に負けて悔しかったです」

銀八「それだけかよ…」

真王「新八のフラグまいつか立てるつもりです。……………多分」

銀八「多分かい！『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

V E V E「次いいか？ペンネーム『鳴神ソラ』だ。『マリオ』勝つたなネプテューヌ…まつ、自分の中にある他人の力に合わせて成長せずにそのまま頼る奴は勝てないさ…そう言うもんは使ってる者の様に使いこなせる様に自力で修行をしなければあどんな強い力を持つていても銀時やネプテューヌに負けるな」

けれどまあ…イリスが見た記憶とは一体…

ルイージ「何だろうね？」

フォックス「疑問もあるが桂側になるみたいだな…」

ファルコ「イリス達女性陣に質問『なのは達とネプテューヌ達が使っている武器で使ってみたい者はあるか？』」

クッパ「リリスに質問なのだ。自分の父親になって欲しい男性はいるか？」

マリオ「銀時に質問。ネプテューヌとリリスをパワーとスピードで表すならどちらがどれに当てはまる？」

そんな訳で次回を楽しみにしてます。『…確かマリオってやつは俺を敵対してたな』

真王「ですね。では順番にお答えしましょう」

イリス「私はネプテューヌさんの持っているエックスセイバーです。ファルコリア「私は特にないな。しいていえば白夜叉の木刀がいいな」

ランドル「ワシはスバルのガントレット（リボルバーナックルのこと）じゃ」

メーティア「私はエリオさんかベールさんの槍です」

バーニン「あたしはシグナムの剣だ」

アイシー「スバルのリボルバーナックルだよ」

シャチール「特にないぞ？」

リリス「ん〜、銀髪の人かな？」

銀時「ネプテューヌはパワーでリリスはスピードだと思っな俺は」

真王「では『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

VIVI「次のペンネームは『黒龍』からだ。『黒龍』修学旅行から帰ってきたぜ！」

銀時「それで、ご感想は？」

黒龍「あんまり面白くなかった」

ソラ「あんた一度京都行ったからな」

黒龍「やっぱ一度見た物をもう一度見るのは面白味に欠けたな」

ソラ「まあ修学旅行の話はその辺にして、ついにネプテューヌとイリスの決着がついたな」

銀時「まあ大元はまだ残ってるけどな」

リリス「それにしても、あのサキュバスさんが、私と同じ名前になった事には驚きました」

銀時「体つきはある意味真逆だけどな」

リリス「ふえええええん！！悔しい上に銀さん酷いですううううううう！！！」（涙）」

ソラ「銀時……（ジト目）」

黒龍「銀さん・・・(ジト目)」

銀時「ちよっ！その目やめてくんない！！」

黒龍「まあこんなデリカシーのない人はほっつておいて、質問いきましよう。」

1・リリースに質問。もう誰か食べちゃいましたか？(性的な意味で)

2・リトルバスターズとangel beatsのメンバーに質問。最近まったく活躍してるとこ見てないんですけど、消えましたか？

3・銀さんに質問。ネプテューヌと恋愛的な意味で進展ありましたか？

ちなみに2の質問でキレて攻撃してきても簡単に返り討ちにできるんであしからず」

銀時「おお、作者もやられっぱなしじゃないって事だな」

黒龍「それと、お土産の生八橋と八橋をプレゼントします」『』

リリース「たべる？なにを？」

真王「この時のリリースはまだ知っていません。あと彼らは消えてませんよ！まだ存在しています！」

銀時「ネプテューヌと恋愛？知らんな」

ネプテューヌ「酷いよ銀さん」

真王「あゝ、『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

VIVI「次はペンネーム『黒神』だ。『質問します。』

音無と奏へ

2人はどのような関係まで進んでいますか（笑）

新八へ

ディエチと良い感じになっている山崎が羨ましいですか？

ネプテューヌへ

ゲストとして他の人の小説に出てみたいと言う気持ちがあれば、どこが良いですか？

以上です。『『

音無「お、おれと奏か？どつって言われてもな…／／／／」

奏「結弦…／／／／」

新八「羨ましすぎますよ！そして悔しいです！」

ネプテューヌ「どちらかと言うと黒龍さんか黒神さんのとこだね」

銀八「さり気無く1つ目ムカつく。『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

真王「あと『鳴神ソラ』さんに質問します。『自分のスキル（魔ビリテイーと言うべき）はどんな感じですか？』例えば、

真王：作者の権限（味方キャラの数によって能力が上がる）

ヴァルバトーゼ：バトルオブブラッド（倒した敵の数によって5%攻撃力が上がる）

フェンリツヒ：暴君のしもべ（ヴァルバトーゼが近くにいと、30%能力が上がる）

こんなかんじです」

銀八「なあ、俺はどんな感じなんだ？」

真王「銀八の場合は『教師指導』で生徒の能力を20%上げるそうだよ」

銀八「成程な」

真王「後V E V E I の場合は『復讐者の攻防』で自分よりレベルが高い相手に与えるダメージが50%アップするんだ」

V I V I 「ほづっすいいな」

真王「ではまた次回会いましょう。あ、次回のアシストはリリースのやらせます」

第四十四訓：怒り出した人は凄い力を発揮する（後書き）

真王「今回はシグマと銀時のラストバトルだ！！」

リリス「次回『見た目はコスプレでもすごい力が秘められている』
テイクオフ！！」

第四十五訓：見た目はコスプレでもすごい力が秘められている（前書き）

真王「地震のせいでも更新が遅くなる可能性があります」

ネプテューヌ「凄い津波だったね」

真王「そのおかげで電気使用の制限がつけられます。『リリカル銀魂』スタートです」

第四十五訓：見た目はコスプレでもすごい力が秘められている

IBGMシグマ戦byロックマンX
(Mega Man X OST, T28 : Sigma 1 s
t (Original))
(Maverick Hunter X OST, T32 : S
igma Battle 1 (Sigma 1st))

シグマはソードを振り下ろし、銀時を襲うが、銀時はなぎ払うかの
ように木刀を振ってシグマは吹飛ばされるが体を逆回転させて着地。
今度はシグマは銀時の急所を狙う感じに襲いかかるが、銀時は気付
いてそれを防ぐ。

しかしシグマは銀時を蹴り飛ばして再び襲いかかるも、銀時はすぐ
さま復帰して避ける。

シグマ「やるではないか白夜叉よ。伊達にそう呼ばれてはおらんか
銀時」……」

シグマ「だが私はこんなものではないぞ！」

そしてシグマは猛突進して銀時をおどい出す。

豪快にだが、竜巻のような素早い連続攻撃を炸裂させる。しかもそ
の一撃一撃がかなり重い。

対する銀時もその剣撃を木刀で防ぐのではなく叩き返す。

シグマ「成程な、ランクSクラスのゾーマを倒しただけのことはあ
る。ならこれはどうだ」

シグマはソードを思いつきり振って大きな閃光を出す。

それはなのはの『スターライトブレイカー』よりも強力な攻撃である。

銀時は閃光を見つめ、木刀を持ち替えて、居合いに似た構えを再び炸裂する。閃光が当たる直前、銀時は木刀を振り抜き、閃光は切り裂かれた。二つに割れた閃光は、銀時の後ろで消滅する。

シグマ「なんと！」

いくらなんでもあり得ない光景であった。

本来の銀時では不可能な行動だが、白夜叉と化したことで全ての潜在能力を30%から100%にまで引き出しているため、木刀でもSS+ランク級の魔法を切り裂く事が可能になったのである。

シグマ「……やはり白夜叉は侮れんと言っことか」

シグマは呟くと、銀時は突き刺さっている1本の剣を抜き出してシグマに向けて思いつきり投げる。

シグマ「ぬう！」

対するシグマはビームソードを振り、その剣を織り出す。

白夜叉とは思えない小細工に銀時を見ると、いつの間にか目の前にいた。

なぜなら銀時は剣を投げた瞬間に人間ではあり得ない速度でダッシュして走り出し、走りながらもう1度剣を抜き出したのである。

ザク！

シグマ「ぬう！……剣を……」

左手に持っている剣をシグマの左足に串刺しする。
そして銀時はシグマを見て、

銀時「つゝかまえた」

その一言を言い出すと、

ドゴオオオオオオオオ!!!

右手で木刀を強く握り、怒りと殺意を満ちた木刀の一太刀を浴びせる。

その一撃は下手すれば人を簡単に殺せるほどの威力を持っていた。

銀時「さア、拷問死刑の時間だ…… たつぷりと生き地獄を見せてやるよ」

剣の本当の使い方そいつをしりたきゃ付いてくるといい

敵を斬るためではない

弱き己を斬るために

己を護るためではない

己の魂を守るために

銀時の頭の中に思い出す、最初にであった時に松陽が言い出した言葉
を思い出しながら、シグマを容赦なく攻撃する。
木刀による連続攻撃が炸裂し、全てがシグマに直撃する。

銀時「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お！」

連激 連激 そしてまたも連激。

鬼の剣激をモロに喰らうシグマは深手を受けるあげくに、剣で左足を
串刺しされた為に身動き取れない。
そして銀時はその串刺しをした剣を抜き、そのまま一気にシグマを
切り裂く。

シグマ「ぐおおおおおおおおおおおおお！」

大量の血を出してシグマはもはや体の限界である。

銀時「これで、終めえーだ！」

ザァンッ！！

シグマ「ぬうおあああああああああああああああ……！！」

パープルハート ジュエルシード？

シグマの体の中には9個のジュエルシードが入っていることに驚く銀時。

以前、ユーノが発掘し、その後の事故で海鳴市周辺に漂流する。

『ジュエルシード事件』を起こしたロストロギアであり、9個が失われている。

残り12個が時空管理局に保管されている。

しかし何故、失われた9個のジュエルシードがシグマが持っているかに疑問を持つ。

シグマ「そう！この9個のジュエルシードは、2ヶ月前に『鬼兵隊』が忘れられし都『アルハザード』で全て発見された。そこで、方斎という男にその全てのジュエルシードを渡された」

銀時「あのヘッドホン野郎が……」

シグマ「そして私はこれを機会に、9個のジュエルシードを治癒能力様のロストロギアに改造し、全てこの身に移植した。その結果……

…私の体は不死身となった訳なのだよ！」

パープルハート「なんですって!？」

銀時「ちい、つまり簡単に言えばゾンビ野郎になった訳かい!!！」

舌打ちして言い出す銀時。

だとすればこれはかなり厄介な事になる。

以下に銀時がシグマを何度も倒そうとも、そのくり返しが銀時に疲労が襲いだし、下手をすればシグマに殺される。

ある意味今まで戦ってきた敵の中でも厄介かもしれない存在である。

シグマ「さあ、どこまで足掻けるかを見せてみると良い！」

シグマはソードで銀時に切りかかる。

銀時「舐めんじゃねえよ!!」

銀時はかわしてシグマに攻撃するが、シグマが消えた。

シグマ「こんなものか白夜叉よ」

ブシュッ!!

銀時「ぐおおおおおおおおおお!!!!」

パープルハート 銀時!

シグマ「フハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

シグマは後ろからソードを突き刺す。

シグマは神速級のスピードで銀時の後ろに回ったのだ。

シグマ「以下に身体能力が高くて、不死となった私には勝ぬ!もはや君が残された道はただ一つ!この場で殺されて我が研究のサンプルとなるが良い!」

勝ち誇ってソードを銀時に向ける。

確かに不死の肉体にはいくらなんでも対様できないが、それでも銀時はゆっくりと起き上がり……

銀時「うるせーよ」

シグマ「何?」

銀時「さっきからサンプルになれサンプルになれってうるせーんだよ!」

足に力を込め、傷口から血を流しながら立ち上がる。

銀時「ジジイ共！」

パールハート イースン！？ヴィヴィオにリリースも！

シグマ「…イリスまで来るか…」

銀時とパールハートは驚く。

源外「むっ、銀の字！」

スカリエツテイ「銀時君！？」

リリス「母さん！」

イリス「…シグマ」

源外達も気づく。

銀時「なんでこんなとこに来たんだよ！」

源外「うっせーな！色々とやってたらこんなとこに来ちまったんだよ！それより銀の字もうボロボロじゃねえか！」

銀時「余計なお世話だ！」

銀時と源外は怒鳴り合う。

シグマ「クッククク・・・愉快的奴らじゃないか。だがこれだけはいかん」

シグマはパチツと指を鳴らすと、ヴォーン！と上にモニターが出てきた。

シグマ「このミッドチルダ全域に私と白夜叉の戦いが報道される。そして最後に映るのは白夜叉よ、貴様の死体になるのだ」

シグマはニヤリと笑う。

銀時はどうするか悩んでいると、

スカリエツティ「銀時君！前に私達があげたデバイスを使いたまえ
！」

スカリエツティが叫ぶ！銀時はそれを聞いて懐からスカリエツティ
から貰ったデバイスを取り出す。

銀時「しゃーねえな。あんま使いたくはなかったんだが…」

銀時は決意して、デバイスを発動する。

銀時「『シルバーブレイド』、起動！！」

銀時が剣型デバイスを起動させると、

銀時「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

銀色の魔力が大量にあふれ出て、銀時の体を包むかのようにその魔
力は銀時の体に魔力を染み込ませる。

シグマ「こ、これは！？」

パープルハート これ…銀時の魔力！？

デタラメ的な魔力の高さにパープルハートとシグマは驚きだす。

しかも驚いたことに、何故侍である銀時がデバイスを…それ以上
に銀時の魔力が異常なまでに上がりだしていく。

源外「おお！何と言う力だ！」

イストワール「すごい！やっぱり私の目に狂いはありませんでした！」
スカリエツティ「出るか！？銀時君の新たな力が！」
イリス「こ、これはSSS級よりも超えている！？」

源外達も銀時の魔力に驚く。

そして銀色の魔力は消えて、目の前には銀時の姿が現れた。
背中には銀色の羽、足には銀色のフットパーツ、胴体には銀色のアーマー、そして銀色の刀が握られていた。

つというより正確に言えば銀時のバリアジャケットはISの主人公・
織斑おりむら一夏いちかが使う白式びやくしきであり、武器は同じく雪片ゆきひら式型である。
つまり銀時のバリアジャケットはまんまISの白式である。

銀時「……てこれ、バリアジャケットじゃなくタダのコスプレじゃねえかあ—————！」

自分のバリアジャケットを見てツッコム銀時。

これには流石のパープルハートやシグマやイリスも呆れている。

銀時「どうして俺が良い歳こいてコスプレしなきゃいけないんだよ！？大体武器も『IS』の剣インフイニツトストラトスだし！何か色々と言われるじゃねえかあ—————！」

取り乱してツッコミまくる銀時。

そしてはっと何かを思い出す。

銀時「ちょ、待て。確かミッドチルダ中に流れてるんだよね？つまりコスプレしてる俺が撮られてるわけ？最悪だ—————！」

自分のバリアジャケット（コスプレだと思い込んでる）を全国に映されて頭を抱える銀時。

イストワール「何言ってるんですか銀さん！もつと堂々としてください！d（＾ロ＾）」

源外「銀の字！敵は目の前だ！一気に行けよ！d（＾ロ＾）」

スカリエッティ「銀時君！是非とも頑張りたまえ！d（＾ロ＾）」

銀時「むかつく！顔文字がメツチャむかつく！」

銀時の額に血管が浮かぶ。

ヴィヴィオを見ると、スツゴイ目を輝かせている。

リリスは不思議そうに見ている。

シグマ「・・・何の小細工が知らんが、試してみるか…」

シグマは様子を見て魔力刃を飛ばす。

パープルハート 銀時！

銀時「！」

銀時は魔力刃に気づくが、爆発した。

シグマは様子をよく見ると、薄い銀色の膜につつまれた無傷の銀時がいた。

シグマ「なんと！」

パープルハート あれは…プロテクト？

銀時以外の全員が驚く。

そして銀時も驚いている。

銀時（スゲエ……体の中から力が溢れ出てくるみてエだ……これは
リインフォースとユニゾンした時と同じ……）

リインフォースの合体の時と同じく、銀時の身体能力が上がって
くる。

それだけではない、魔力もついでに完全なる魔導剣士と化
していた。

その魔力は間違いなくなのはとフェイトを上回っており、シグマは
銀時には魔導師としての素質が高まっていたと驚きだす。

シグマ「まさか……貴様が魔導師に目覚めるとはな……だが私に
は不死の力を持っている。それを突破しない限り勝ち目はないぞ？」

シグマの言うことはもつとも、ジュエルシールドによって不死の力を
持っている。

すると、銀時の腰にあるエックスセイバーが光りだす。

エックスセイバー 銀時様、シグマに勝つ方法をお教えます

銀時「本当か!？」

銀時はエックスセイバーの話を聞く。

エックスセイバー 私をマスターのところへ、お願いします

銀時「マスター? マスターって……」

エックスセイバー はい、ネプテューヌ様でございます

銀時「……しゃーねえ! ネプテューヌ! 受け取りやがれエ
エエエエエエエエ!!!」

銀時は思いっきりエックスセイバーをパープルハートまで投げる。

そしてエックスセイバーがガラスに接触した後、ガラスが割れるが、

パープルハートには当たらず、パープルハートはキャッチする。

パープルハート「ありがとね！銀時！」

パープルハートはすぐさまカプセルから出て、シグマに切りかかるが、シグマは防ぎ、パープルハートは反動を利用して銀時のとこま
で着地する。

シグマ「2対1・・・。いくら不死に私でもさすがに不利だな」

パープルハート「あら？諦めるの？」

シグマ「ぬかせ！」

シグマはソードを構える。

銀時「・・・さてと、こっからが正念場だな」

パープルハート「そうね、イリス」

イリス「はい？」

パープルハート「あなたの剣ゼロセイバーを借りるわ」

パープルハートはゼロセイバーを左手に持つ。

シグマ「二刀流か。だがそれで私を倒すと？」

パープルハート「二刀流でもあなたを倒せるけどエックスセイバー
が凄いのを教えてもらってねえ」

シグマ「なに？」

パープルハート「青の無限エックスと赤の破壊ゼロは創りは違えど、その二つを
合わせると真の力を発揮する」

パープルハートは2つのデバイスを平行にする。

そして2つを重ね合わせ、

パープルハート「デバイス融合!!」

エックスセイバー・ゼロセイバー

Extra form!!!

パープルハートが叫ぶと、赤と青の強力な光が周りを覆い尽くす。

銀時「こ、こいつは!?!」

シグマ「な、何なのだ一体!?!」

ヴィヴィオ「眩しくて見えないよ〜!」

スカリエッティ「な、なんという魔力だ!これは……………」
測定不能だ!?!」

周りの全員がまぶしさに目を覆う中、スカリエッティはパープルハートの魔力数値を見て驚いた。

測定不能：最高ランクであるSSSランクを超えたランク：EXラトリプルエスンクであるのだ。エクストラ

パープルハート「これが、エックスとゼロの二つが合わさった究極の力。その名を『ゼクスセイバー』!」

煙がはれて、パープルハートに手に黒くて大きくて、刀身の部分に金色の文字らしきものがあり、バリバリッと黒い電気らしきものが出ている刀があった。

言うなれば、『魔界戦記デイスガイアシリーズ』の最強の武器・『魔剣良綱』を刀型にした感じである。

シグマ「ぜ、ゼクスセイバーだっ!?!」

パープルハートと銀時はいつせいに駆け出す。

パープルハート「行くわよ銀時！一文字スラッシュ！」

シグマ「ぬう！？」

銀時「うおらあー！」

シグマ「ごはっ！」

パープルハートは一閃攻撃でいき、シグマは防ぐが銀時から攻撃を貰ってしまう。

パープルハート「真空ぶった切り！」

銀時「げっがぎんしょう月牙銀衝！」

シグマ「ぐおおおおおおおおおお！！！！」

パープルハートと銀時がそれぞれ紫と銀色の斬撃を飛ばし、シグマは防ぎきれずに壁まで後退させられる。

パープルハート「あとはよろしくね銀時」

銀時「まかせろ」

パープルハートは後退し、銀時に譲った後、銀時は刀を地面に突き刺し、右手が赤き血の爪が生えている悪魔の腕と化し、それが伸ばされてシグマを捕らえてつかみ出し、自分の元に引っ張り出す。

シグマ「なあ！？」

銀時の能力に驚きだすシグマに、銀時は鋭い目つきでシグマを睨みつける。

リンク「トライフォー スラッシュユ+ロイヤルストレートフラッシュ
で」

ヨッシー「擬人化&龍騎サバイブに変身してドラゴンファイヤース
トームを」

ワリオ「ワリオマンで連続ラッシュじゃ!#」

カービィ「そんな訳でネプネプに質問『もし銀さん達がネプネプ達
の世界に着たらどこを案内する?』」

リュウケンドー「真王に質問『ネプテューヌ達6人とマジエコンヌ
以外にネプテューヌ達の世界の住人は出ないのか?』」

ファルコ「(リュウケンドーに変身して言うのかよソラ(キングダ
ムハーツの方)...)イリス達に質問『今絶賛怒ってる内のリーダー
こそマリオを見てどう思う?』」

そして次回は...うん...コスプレなんだな結局...

トウーン「どんなコスプレになるんだろう...」

ネプテューヌ「私のとこのプラネテューヌだよ。あとノワール達の
ところも案内するよ」

真王「出すか出さないかと言うと出す可能性はあります」

銀八「そうか。3つ目は」

イリス「申し訳ございません」

イリス達は謝った。

真王「やったのはシグマなのにな。『鳴神ソラ』さん。とりあえずマリオ達の怒りを鎮めてください」

リリス「次はペンネーム『黒龍』さんからだよ。『黒龍』ついにシグマとの最終決戦ですね」

銀時「しかし、シグマの野郎はとんだ外道だな」

ソラ「ま、あっちの銀時が軽く倒すだろ」

銀時「けどよ、あっちの俺がスカリエッティから貰ったデバイスがコスプレじゃなきゃいいんだがな」

ソラ「……………まあたぶん大丈夫だろ」

銀時「何その間!?!」

黒龍「じゃあ質問いきます。

1・ギンガに質問。あなたは黒神さんの小説のギンガと同じように百合ですか？

2・ネプテューヌに質問。銀さんに好きになってもらうようになんらかのアプローチはしていますか？

3・スカリエッティに質問。同じ科学者として、シグマの事をどう思いますか？」

銀時「お、今回は比較的マトモな質問だな」

黒龍「毎回毎回酷い質問するほど、俺も黒くないよ」

ソラ「まあギンガの質問は正直微妙な気がするがな」

ギンガ「私は百合じゃありません！！／＼／＼」

ネプテューヌ「それなりに頑張ってるつもりだけど…」

スカリエッティ「レプリロイド技術はいいが、捨て駒にするのはよくないな」

リリス「それじゃあ『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

真王「次はファルコリアがやります。ではまた」

第四十五訓：見た目はコスプレでもすごい力が秘められている（後書き）

真王「今回は魔道機人編の最後です！」

イリス「次回『友達の絆は消えない』テイクオフ！」

第四十六訓：友達の絆は消えない（前書き）

真王「魔道機人編の最後です。そして裏では異変が起きる？」

第四十六訓：友達の絆は消えない

ミッドチルダ 第4起動高層ビル

突如、ガジェット達が逃げ去っていくように一匹残らず退場していく。

これにはフェイト達も異変に気づく。

フェイト「ガジェット達が……逃げていく!？」

アルフ「って事は、銀時達はやったんだね!」

突如の異変に驚くフェイトと喜びだすアルフは、銀時達がシグマの野望を止めたと考える。

その証拠にパスを通じてなのはとはやてが緊急報告をする。

なのは フェイトちゃん!ガジェット達が次々と撤退していくよ!
はやて こつちも魔道兵士が次々と動きが止まっていて戦闘不能になっ
てきているよ!銀ちゃん達がやってくれたんや!

2人とも嬉しそうにはしゃぎだす。

その証拠に敵陣の飛行要塞が全て停止して次々と味方の戦艦の攻撃を受けている。

神楽「よっしゃー!私達の勝利アル!」

エリオ「やりましたー!」

コンパ「ねぶねぶはやったのですー!」

神楽とエリオとコンパも大はしゃぎで喜びだしており、スバル、キヤロ、フリード、デイド、ノーヴェ、ギンガ、その他の機動六課

のメンバーも喜びだしてはしゃぎだす。
トーレとドゥーエは安堵した。

ティアナ「やったのね兄さん……」

猿飛「あああ、銀さんがやってくれたんだね。流石は私の銀さんだわ」

月詠「それ、フェイト達に聞かれたら殺されるぞ？」

銀時の事を思って自分のものと言い出す猿飛に呆れてツッコむ月詠だが銀時が無事にいることに安心する月詠は口に煙管をくわえる。

一方の源外達も逃げ去っていくガジェットと停止して動かなくなつた魔道兵士達に驚きだす。

その様子にイリスはある事を確信する。

イリス「どうやら、銀時がマスターを倒したようです。これで『シグマーズ』の恐怖は消えましたね」
ヴィヴィオ「パパ！」

イリスの言葉を聴いてヴィヴィオとリリスは喜びだす。

源外やスカリエツティやイストワールも安心してホッとする。

源外「どうやら、シグマの野望は食い止められたようじゃな」
スカリエツティ「ああ、これでミッドチルダの平和も護られただろ
う」

源外とスカリエツティは安心する。

「????」 やったじゃないか銀時!

「????」 味方ながらあっぱれだな

何処からか声が聞こえた。

と言つかこの声は恭介と来ヶ谷の声である。

「????」 わふー、らすとさむらいなのです

「????」 それ微妙に違うと思うぞ

「????」 おい天パ野郎! しっかり勝ったんだろっな!

「????」 お姉ちゃん、映ってる〜?

今度はクドと日向と野田とサチコの声が聞こえた。

銀時「天パ言うんじゃねえ! それと何処にいったよお前ら!

ゆり「ミッドチルダよ! 映像まだ?

「????」 すぐに終わります……完成です

銀時達の真上にゆり達が映った。

ゆり「はあ〜い、銀時」

理樹「銀さんいきてますか?」

鈴「あの天パが死ぬか」

銀時達は驚く。

銀時「お前ら一体何してんだ! ? ? ? か何でお前らが映像を握ってんだよ!

ゆり「簡単よ。そこら辺にあるカメラと魔道兵士達の部品で竹山君

がいろいろとハック……いろいろと改造したのよ」

銀時「おい今一瞬ハッキングって言いかけただろ」

銀時は突っ込む。

ゆり「それはともかく、まずは上々ね竹山君」

竹山「抜かりはありません。後僕のことにはクライストとお呼びください」

銀時「……………」

銀時はゆりの仲間の高松と同じ眼鏡を付けておかつぱな橙色の髪の毛の少年に、どう突っ込むべきか迷った。

フェイト「銀時!！」

銀時「うお!」

いきなりフェイトが現れて銀時は驚く。

フェイト「やったね銀時!」

なのは「銀さん大丈夫?」

新八「銀さん無事ですか!?!」

ノワール「ネプテューヌ! あんたやられてないでしょうね!」

アイエフ「ネプ子、そっちも大丈夫?」

そしてほとんどの人が映る。

イリス「これが……貴方の仲間なんですね」

ネプテューヌ「イリス?」

イリスが羨ましそうにネプテューヌに言い出す。

ちなみにゼクスセイバーはエックスセイバーとゼロセイバーに別れ、ゼロセイバーはイリスが持っている。

イリス「……私は……これからどうすれば良いのか迷っています。マスターも死んで、ネプテューヌさんをこの手で傷つけ、さらにはマスターの命令とは言え数多くの人々の命を奪ってしまった」

悲しそうにシグマの死と自分の過ちを悔やむイリス。

イリス「……これで……良かったんでしょうか？……私は……これからどうすれば良いんですか？」

もう居場所がなくなっただよように苦しそうに言い出す。

イリス「胸が苦しい……悲しみの感情しか表せません……どうすれば、この苦しみの感情が消えるんですか？」

ネプテューヌ「……苦しいほど悲しむのは、人間の感情だよ……イリス」

悲しそうに怯えるイリスに、心優しく声をかけるネプテューヌ。

ネプテューヌ「イリスがシグマがいなくなって悲しんでいるのは、それこそ人間としての感情が芽生えているからだよ」

イリス「人間の……感情？」

ネプテューヌ「シグマは私達にとっては敵でしかなかったけど、イリスにとってはかけがえのないたった1人の父親的な存在。たとえばシグマがイリス自身を愛してくれなくても、イリス自身はシグマを父のように愛していた。自分自身がそれに気づかず……」
シャチール「イリス……」

丸くて黒くて赤い目の周りには緑色の刺青みたいなものがある何かだった。

????「ギギギ・・・」

そいつは右腕をトゲ鉄球に変えると、

ドカアーーーーーンン!

全員「!?!」

装置に向かって思いっきり振りおろし、壊し始めた。
銀時達は謎の敵に気付いた。

銀さん「なんだこいつ!?!」

謎の敵の行動に驚きだす銀時。

シャチール「あれは確かウェイリーが作ったとされる『ダークデビル』ってやつだっけ?」

ダークデビル「ビギビギ・・・」

スカリエッティ「ダークデビル!?!そんなの私でも知らなかったぞ!」

スカリエッティはダークデビルという存在に驚く。

シャチール「マスターがウェイリーの研究資料を見てたからな。つてかあいつはゼロセイバーができて未完成のまま封印されてたはずだが・・・」

????「ソレハ我ガヒロツタ」

ダークソウル「・・・無駄ナアガキ。止メニイクノ八貴様ラノ仲間ヲ失ウノダカラナ。精々アガイテミセロ、コノ我ノタメニ...」

ダークソウルはダークデビルとともに消えた。

シグマーズ空中要塞・エネルギー制御室

そこは要塞のエネルギー制御室。

場所的な雰囲気はまるでターミナルの地下に似ている。

『ガジェット・ガーディアン』はゆつくりと地に下りて、銀時達は急いで制御装置に走って向かうが、あたりがエネルギーの暴発によってエネルギーが地を走りまくって囲んでいる。

銀時「ちい、これではうかつに近づけねえ!」

ネプテューヌ「どうすれば良いの!? あそこに言って暴発を防がなきゃいけないのに!」

銀時とネプテューヌも万事休すにまで追い込まれる。

するとスカリエッツィが決心して『ガジェット・ガーディアン』に下りる。

スカリエッツィ「諸君は『ガジェット・ガーディアン』に乗って逃げるんだ!」

イストワール「スカリエッツィさん!」

どうやらスカリエッツィは自分が制御システムを起動させるつもりである。
その周りはエネルギーの暴発でうかつに近づけば肉体がボロボロになって最悪の場合は消えてなくなる。
それでもスカリエッツィはこの暴発を止める責任を感じている。

スカリエッツィ「研究者が起こした事態だ。研究者が何とかしなきゃいけないだろう？」
ヴィヴィオ「無茶言わないでよ！制御装置付近は危なくて近づけないよ！」

必死に止めるヴィヴィオに死を覚悟を元に制御装置に向かうスカリエッツィだが……

ドカーン！

銀時達「!?!」

銀時達の目の前の柱が大爆発する。
すると爆破後には柱が遠く離れてしまうほど割れてしまった。
一体どうしてなのかを目の前を見ると、そこには自分たちとは別の場所にいるイリスがいた。

ネプテューヌ「い……イリス！」

ネプテューヌは驚いてイリスの名を言い出す。

イリス「マスターが引き起こした事態です。僕しもへが何とかしなきゃならないんですよ……」

そう言いだすとイリスは笑って、ネプテューヌに『ゼロセイバー』を投げ渡す。

そして『ゼロセイバー』は大剣から剣の首飾りとなる。

イリス「ネプテューヌさん、それは貴方に渡します。それとスカリエツティ、これを」

イリスは懐から無線機らしき物を取り出すとスカリエツティに投げ渡す。

イリス「無線機です。指示をお願いします」

そう言つて後ろを振り向く。

ネプテューヌ「ちょっと待って！何をやる気なの！？イリス！」

ネプテューヌは駆けつけようとする、銀時とヴィヴィオとリリスとシャチールは黙ってネプテューヌの肩を掴んで止める。

ネプテューヌ「銀さん！ヴィヴィオ！リリス！」

シャチール「イリスは覚悟を決めたんだ。何も言つな」

ネプテューヌは3人の名を言い出すと、銀時とヴィヴィオとリリスは黙りこむ。

そして銀時達は『ガジェット・ガーディアン』に乗り込む。

イリス「銀時、ヴィヴィオ、リリス、源外、スカリエツティ、イストワール、貴方達に最初で最後のお願いがあります。私の代わりにネプテューヌさんを……私の大切な友を護ってください……」

銀時「……ああ」

銀時達にネプテューヌを護って欲しいと頼みだすイストワール。その頼みを銀時は聞き入れると同時に『ガーディアン』が動き出す。

ネプテューヌ「やだよ！離して銀さん！……イリスウウウウウウ！」

涙を流してネプテューヌはイリスの名を呼ぶ。そして『ガジエット・ガーディアン』はこの場を脱出する。

イリス「護りたい気持ちは人を強くさせる。それは人間でも人造生命体でも変わりはない。マスターの魔道機人として生まれた私には理解できなかった事ですが……ネプテューヌさんのお陰で理解しました」

無線機を通じてイリスは喋りながら制御装置に向かうが、エネルギーの暴発に触れて徐々に衣装がボロボロになって行き、肉体も削り取ってしまいボロボロとなる。

イリス「私も護りたいものがあつたんです」

無線機を通じて銀時達はイリスの最後の遺言を聞きだす。

無線機を持つているネプテューヌさんは涙を流しながらも、イリスの最後の台詞を聞き逃さないでいる。

イリス「何度改造されても、実験によって体を変えられても、この身を滅ぼすと忘れない……だから」

イリスは笑いながら制御装置を起動させてシステムを作動させる。するとさらに体中がボロボロとなって内部も骨も削られていく。

イリス「だから……ネプテューヌさんも……私……のこと……忘……れない……で……くだ……さい」

涙を流しながらイリスはネプテューヌさんに言い出す。

イリス「そうすれば……私の魂は……」

悲しみながらイリスは、ネプテューヌと出会った時の話し合いと戦いを思い浮かべる。

タダの魔道機人として生まれた自分でも、人間としての思い出があったと理解した。

イリス「ずっと、貴方の中で……生き続けますから」

ネプテューヌ「イリスウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！」

涙をあふれ出し、悲しみながらもネプテューヌはイリスの名を叫びます。

無線機から親友の声を聞いて、最後のシステムを押し起動させると、徐々に下半身から体が削られるように消えて行き、もう身動きは取れない。

イリス「……ネプ……テュー……ヌ……さん……私……達の……絆……は……貴方と……共に……」

最後に笑顔で笑いながらそう言いだして、完全に消滅しようとした。

??? 「勝手に死ぬのはもったいないですよ。イリス様……」

一方の鬼兵隊の戦艦では、高杉の前にマジエコンヌが愉快そうに笑い出しながら姿を現した。

高杉「……随分と遅く帰ってきたそうじゃねえか？しかも何やら面白いもんを持っているようで……」

煙管を口から話して煙を吐く高杉は、マジエコノヌを向くと、何故かその手には何かのチップと9のジュエルシードを持っている。

高杉「まさかとは思うが、お前シグマを利用して初めからそれを奪うつもりだったのか？」

マジエコノヌ「ああ、腐りきった世界を今更支配するような輩の手など貸すつもりはない。私は他人にも厳しい性質でな？」

持っているチップと9個のジュエルシードを高杉に渡すマジエコノヌ。

実は銀時とシグマの対決を気づかれないように観察しており、銀時とネプテューヌがその場を出て行った後、そのままチップと9個のジュエルシードを取り出してその場を退散したのである。

マジエコノヌ「……まあいずれにしろ私は最初からシグマに力を貸すつもりはなかったわけだが・・・」

高杉「くくくくく……お前も随分と俺に似てきたなあ？まあ俺も同じさ。誰がどうしようかと俺には関係ねえ。『シグマーズ』もこの腐った世界を潰す為の駒にしかすぎねえからよ」

不気味に笑い出す高杉。

世界を壊す為なら『春雨』だろうと『シグマーズ』だろうと利用する。

マジエコノヌはある事を思い出して高杉に言い出す。

マジエコノヌ「そうだ、おまえに話しておかなきゃいけない事がある。何やら白夜叉も魔導師に目覚めたようだぞ？」

高杉「何？」

ピクリと高杉は表情を変える。

銀時が魔導師に目覚めた？侍であるあの男がどうして魔導師に？
高杉はマジエコンヌからその話を詳しく聞くのであった。

ミッドチルダ

あれから『シグマーズ』の要塞はエネルギーの暴走がおさまり、ア
ーストラによって破壊された。

そしてネプテューヌは六課の外で空を眺めていた。

???「ここにいたか、ネプテューヌ」

聞き覚えのある声にネプテューヌは振り向くと、銀時とフェイトと
バーニン達がいた。

銀時は申し訳なさそうな表情でスバルを見る。

あの時、イリスを止めようとしたネプテューヌを止めた結果、結局
イリスは死んでしまったからである。

そしてフェイトがネプテューヌに話しかける。

フェイト「銀時から話は聞いたよ……ずいぶんと辛い目にあったん
だね。イリスの事はお気の毒に……」

ネプテューヌ「……生きてるよ」

フェイト「え？」

突然ネプテューヌが言いだす。

ネプテューヌ「イリスは生きている。・・・何でか知らないけどそう思うんだ」

コンパ「ねぶねぶ・・・」

ネプテューヌは空を見上げる。

バーニン「あれ？思い出したんだがリーダー何処行っただ？」

ランドル「・・・あ、忘れとったわ」

スバル「リーダーってアイシーが言ってたファルコリアさんのこと？」

アイシー「そう。でも確かにリーダー何処行っただのかな？・・・まさか死んだんじゃない」

アイシーが碌でもないことを言うと、

「???」「勝手に殺すな馬鹿もの」

全員「!!!?」

バーニン達にとって聞き覚えのある声が聞こえた。

声のした方へ向くと、羽らしきものが生えているが体中ボロボロ状態のファルコリアと、もはや下半身がなくなっているボロボロの少女：イリスであった。

バーニン「リーダー!?!」

ランドル「ファルコリアと・・・イリスか!」

銀時「なに!」

ネプテューヌ「イリス...!」

銀時達は驚く。

ファルコリア「イリス様も無茶をしますね。かく言う私も人のことが言えないがな」

ネプテューヌ「イリスは…無事なの？」

ファルコリア「安心してください。かろうじて生きております」
ネプテューヌ「…良かった」

ネプテューヌは安心する。

イリス「…う…う…う…」

ネプテューヌ「！…イリス！」

イリスが目を覚ました。

イリス「…あ…私…は一体…？」

ファルコリア「お気づきになりましたか、イリス様」

イリス「ファル…コリア…」

ボロボロ状態なため、うまくしゃべれない。

そしてネプテューヌに気づく。

イリス「ネプ…テューヌ…さん…そう…私…ファルコリアに…助けられた…のね」

イリスは今の現状を把握する。

ネプテューヌ「イリス…」

イリス「…ネプテューヌさん…」

ネプテューヌはイリスに抱きつく。

ネプテューヌ「良かった…無事でよかったよイリス…」

涙交じりで言うネプテューヌ。

イリス「ネプテューヌさん…」

イリスも泣きながら右腕となくなっている左腕で抱きつく。

銀時達とファルコリア達はほほ笑む。

かくして、感情のない少女に感情を与えた女神は、その少女と泣きながら抱きあつたのであつた。

【魔道機人編…END】

???

ここは何もない空間。そしてその場所に黒い影がいた。

????「・・・生キテイタカ。マアイイ。我ノ完全ナル姿ヘトモドルニハモットアツメナクテハナルマイ……」

その黒い影は紫の少女と金髪の魔道機人を見ていた。

????「ソウイエバ我ノ欠片ヲアツメオッタバカナ奴ガイルガ・・・高杉トイツタカ？マアドチラニシロアヤツハ我ノ駒ニシテヤル」

その影は幾多の世界を見て、狂ッタヨウナ笑イヲダシタ。

????「完全ニ蘇ツタ我ヲトメルナドモハヤ不可能。ソレドコロカ我ヲ支配スルナド不可能。精々足掻イテミセロ。ダレモ我ヲトメラレナイノダカラナ！フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

ソノ影ハ・・・世界ト・・・次元ト・・・時間ヲ・・・スコシツツ・・・喰ラツテイクノデアツタ。

ソノ影ハ・・・『科学ト魔術ノ交差スル世界』ト、『星ノ戦士ノ住ム平和ナ世界』ト、『未来世界ノ猫型ロボットガイル世界』ヲ喰ラ

ツテイクノダッタ。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

ファルコリア「『魔道機人編』の終わりが来たため、私がアシストすることになった」

銀八「だったら行くぞ。ペンネーム『鳴神ソラ』さんから、『マリオ』因果応報、人を道具と見て命をなんとも感じない者の末路だな……」

ルイーダ「それにしても…黒神さんの所ではブレイブルーでこつちだとISなんだね；」

リュカ「けれど凄いですね」

ネス「それを言うならネプテューヌさんもね」

スネーク「ロックマンZのデバイス版を登場させて銀時と力を合わせて勝利だな」

フォックス「だが…これで終わった訳じゃないだろうな…何かあると俺は思う」

マリオ「確かに…ああ言う輩は自分が死んだ時に何かしてそうだな…」

カービー「イリス達に質問だよ」真王が知ってるアニメ・漫画、小説やゲームでこんな奴とは戦いたくないって奴いる？ちなみにキヤラ名で答えてね」

ネス「真王さんに質問」次の章ではリトルバスターズとangel beatsなどの他のメンバーは出ますか？」

ソニック「俺からも真王に質問」ゼロセイバーやエックスセイバー以外に他にライブメタルを模したセイバーが出るのか？」

そんな訳で次回を楽しみにしてます」まず一つ目からお答えしましょう」

イリス「私はとてもじゃありませんが、ドラゴンボールのブロリー（サイア人モード）です」

ファルコリア「私はDIEOだな」

ランドル「ワシは東方の八雲紫がどうも無理じゃな」

メーティア「私はフランドールですね」

バーニン「あたしはランドルと同じのだ」

アイシー「あたしも」

シャチール「私はいないぞ？」

真王「彼らは次の章でも出しますよ。そして3つ目は出しません。あれらだけです」

ファルコリア「では『鳴神ソラ』よ。廊下に立つのだ。次のペンネームは『月光閃火』からの質問だ。『よお…月光閃火だ。』

しかし…最後のシーンは完璧に『芙蓉編』の終盤のシーンだな…。とりあえずシグマ…来世ではまともな研究しろよ…。

輝刃「だな…。とりあえず、質問いくか…まずは俺から…。」

1・ファルコリアに質問だもし自分が『恋をしたい』と思った時、頭の中に浮かぶ男性は誰だ？

なるほど…どうなんだろうな…。次は俺からだ。

2・作者に質問だ。何か新八の出番が薄い気が…大丈夫なんだろうか(汗)?(頭力キカキ)

輝刃「確かに…何か、新八の出番が薄いな…(汗)。さすがにこの

ままフェードアウトはマズいだろう…（汗）。」

というか…他にも出番が薄い人が居そうな気が…（汗）。『…なんだこれは』

ファルコリアは1つ目の質問に呆れる。

銀八「で、どうなんだ？」

ファルコリア「答えられるわけないだろ！思い浮かぶと言えば銀髪
の…あ！」

銀八「言っちゃったよこの人！自分の好みの人を言っちゃったよ！」

ファルコリア「／／／／／『月光閃火』！！永遠に廊下にたちゆえ
．．／／／／／」

真王「あ、噛んだ。新八の出番は大丈夫と思うよ。あとで新八が主
人公のも書くか」

銀八「ファルコリアが復帰するまで俺がやるか。ペンネーム『黒龍』
さんからだ。『銀時』結局コスプレなのかよ…。」

黒龍「しかも、ミッドチルダ中に放映されてちゃったしね」

ソラ「最悪だな」

アリス「ある意味不運だな」

銀時「ちくしょう…。」

黒龍「それにしても、ブリーチとかそう言うのだと思ったけど、まさかISだったとはさすがに予想外だった」

ソラ「まあISは最近かなり話題になっているしな」

黒龍「まあコスプレでも、本格的なコスプレなんだから、元気だしなて銀さん」

銀時「・・・そう、だな」

アリア「・・・オタク」

銀時「グハツ!!」

黒龍「アリアの言葉が銀さんの心にクリティカルヒットした!!」

銀時「・・・orz」

ソラ「こうなったらほっとくしかないな」

黒龍「じゃあ質問いきます」

1・銀さんに質問。ISのコスプレして正直どうしたいですか？

2・銀さんラバーズに質問。銀さんのコスプレ姿を見て正直どう思いましたか？

3・土方に質問。なんか土方さんだけやたら、活躍シーンがカットされている気がしますけど、気のせいですか？」

ソラ「それと最後に俺から、性転換薬を贈ろう。まあ何かに使ってくれ」

黒龍「何にも使えないと思うけどね」『』

銀時「もうコスプレはコリゴリだったの！」

真王「ああいう感じに嫌がっていますが、周りのみなさんの反応はこうです」

銀時「ラバーズ」凄く…カッコ良かった(です)(っす)(」

銀時「え？なんで？」

真王「あと土方の場合は気のせいです。気にしないで」

ファルコリア「そうなのか？」

真王「あ、戻った」

ファルコリア「平常心取り戻すのに手間がかかった。では『黒龍』よ。廊下に立て」

真王「次は短編に突入し、アシストはリリースとゲスト2人を出します」

銀八「またキャラ増やすのか？」

真王「まあね。では次回会いましょう」

第四十六訓：友達の絆は消えない（後書き）

真王「次回はリリスのエピソードです。そして新たな家族も・
」

リリス「次回『ああ、やっぱり家族が一番だわ』 テイクオフ」

（予告）

ナレーション「新たにネコな女性と植物な女の子が加わりそうです」

魔道機人設定

くアイシーく

氷を使う『絶対零度の闘士』の魔道機人。肩まである水色の髪が特徴。魔道機人の中で彼女はムードメーカーな存在。大好物はアイスらしく、アイス好きのスバルと仲良くなる。バーニンをからかうことがあるが、スキンシップの一つである。

くファルコリアく

超高速のスピードを持つ『大嵐の旋風者』の魔道機人。長い白髪で左目に眼帯がある。魔道機人達の中でファルコリアがリーダー。シグマの行動に不審を抱いている。

くランドルく

土の力を持つ『歩く隕石獣』の魔道機人。膝あたりまである橙色の髪で、某怪力神の鬼級の怪力をもつ。常に落ち着いた感じで、戦闘でも冷静な行動と判断力を持つ。シグマの行動に不審を抱いている。

くシャチールく

無機物内を泳ぐ『闇夜の暗殺者』の魔道機人。アイシーとは仲がいい。こつそりと相手の部屋に入っては悪戯したり、時には弱みを握ることもあるサディストな性格を持つ。

くメーティアく

一番の防御力を持つ『鋼鉄の重戦士』の魔道機人。仁義に熱く、曲がったことが大嫌いな性格。シグマに対しては曲がった仁義に嫌気をさしているため、ファルコリアとランドルとともに不審を抱いている。

くバーニクく

戦闘大好きな『業火の破壊者』の魔道機人。赤いロングが特徴的。常に戦うことが好きで、シグナムにも負けを取らない戦闘狂。しかし頭が悪く、簡単な挑発でも反応するので逆ギレしたり八つ当たりしたりする困ったさん。何時もからかうアイシーをうざそうにしているが、実はアイシーと仲良くなりたいたいと思っている。しかしなかなか素直になれない。

くVIEVIく

破壊を好む魔道機人。気にいらぬ物は潰して自分が頂点に立つことを望んでいる。白夜叉となった銀時に敗れ、機能停止となったが、事件後、行方が分からなくなっている。

くイリスく

シグマに作り出された魔道機人最強の存在。プロジェクトDNAで

坂田銀時のDNAと融合し、さらにDr・ウェイリーが作り出した『ゼロセイバー』で最強の存在となった。だがネプテューヌとエックスセイバーに敗れ、以後人間らしく生きることが誓う。

〜シグマ〜

イリスに機動四課の破壊を出した張本人。『プロジェクトR』^{レプロジェクト}を築き上げ、すべてを我が物にしようとした。

魔道機人設定（後書き）

真王「なんか短い気がしますよね。そこは温かい目で見守って！」

第四回、モンスター解説図鑑

真王「第四回、モンスター解説図鑑!!」

YEAR!!!

ネプテューヌ「・・・なんで英語読み？」

真王「気にするな。んじゃ行くぞ」

〈ガジェットアタッカー〉

第三十六訓から登場。

鬼兵隊が作り上げた一般的な人型ガジェット。さまざまな武器を使いこなす。中には運転できる者もいる。

ネプテューヌ「次も量産型だよ」

〈ガジェットランナー〉

第三十六訓から登場。

走ることを特化した二足歩行のガジェット。最大スピードは通常の車を超えるレベルである。機関銃で攻撃するほか、キックや回し蹴りで攻撃することがある。

真王「次行くよ」

〈ガジェットタンカー〉

第三十六訓から登場。

重量型ガジェット。防御の硬さは他のガジェットよりも硬い。攻撃はミサイルと電撃玉とグレネードを出す。モデルはロックマンXのガンボルド。

真王「次はこんなガジェットだ」

〈ガジェットウォーリアー〉

第四十訓から登場。

全長4メートルある大型ガジェット。とは言ってもガジェットアタッカーが操縦する乗り物である。四十訓に登場し、ネプテューヌが乗ったガジェットウォーリアーは試作機らしいが、源外とイストワールとスカリエッティによって、ガジェットガーディアンへとバリエーションアップした。

真王「次はあいつか」

〈ゼグダリア〉

第四十訓に登場。

蝶とも蛾ともつかない機械生物。もとは“アパロイド”と呼ばれる機械状の生物だが、シグマがアパロイドのデータチップを抜き取ってアパロイドを製作した。

ネプテューヌ「次はこいつだよ」

「ガレオム」

第四十二訓に登場。

ゴリラっぽい巨大ロボット。ガッツ溢れるが故にしつこい性格なため、敵を見失うまで追いかける。しかしネプテューヌとエックスセイバーの前にあっさり破られる。

真王「なにしに出てきたんだ？は無しの方向で」

ネプテューヌ「次も載せるよ」

「ダークデビル」

もとはウェイリーが作り出したものの未完成で封印されていたが、ダークソウルがこれを見つけて命を吹き込み、今は忠実な僕となっている。ダークソウルの命令を聞き、必要とあらば世界を破壊する力を出す。

真王「これはロックマンX5のシャドウデビルをモデルにしていま

す。
では第五回も「

第四十七訓：ああ、やっぱり家族が一番だわ（前書き）

真王「リリースエピソードな感じですが。ではスタート」

第四十七訓：ああ、やっぱり家族が一番だわ

あのシグマ率いる『シグマーズ』の事件・『レプリロネアムR・S事件』のあと、機動六課の名は大きくなった。

その中でも最も注目されたのが銀時、ネプテューヌ、桂、神楽、エリザベス、月詠であった。

銀時は魔法を使わずに剣だけで活躍をした為、伝説の英雄の存在は本当であった事を確信する人物も増えた。これにより剣で戦う魔導士達が刺激されて剣術をさらに磨き上げる物が多くなった。あと銀時のバリアジャケット（銀時自身はこれをコスプレだと思っている）は、超が付くほど人気が出て、今には銀時のバリアジャケットそっくりのバリアジャケットを考える人が出たりグッズが出たりしている。当の本人は「え？何で？」と不思議になったが、とりあえず相手はあの姿をカッコいいものと認識されているようだ。

ネプテューヌ又は銀時に負けを取らない剣術と要塞と叩き切った魔法でミッドチルダ中を覆いに熱狂させた。ネプテューヌの活躍を見た人々はネプテューヌに注目し、その実力は機動六課最強と噂されて人気が高まった。中には隠れファンがネプテューヌかパープルハートなどのグッズを作っているとかいないとか。

桂は銀時同様、優れた剣術だけじゃなく特殊な爆薬を使いこなすなど、まさに『狂乱の貴公子』としての名に相応しい戦いぶりをした為、誰もが憧れる人物として注目される。

神楽もスバルと同様に潜在能力は機動六課の中でも最強と評価されており、まさに『歌舞伎町の女王』の名に相応しく、『ミッドチルダの女王』として注目を浴びせられた。

エリザベスは外見とは裏腹に、プラカードとキャノン砲を使いこなすと言う桂のペット（！？）に名に恥じない『狂乱の聖獣』として、特に子供達のヒーロー的な人気を持つ。

月詠はクナイと言う飛び道具を自由自在に操って敵を翻弄する活躍をし、その美しきさに男性は見惚れて数多くの隠れファンクラブが作られた。

あとノワール達もネプテューヌの煽り（？）でファンが出来てしまったのは言うまでもなかったりする。

ちなみに本人達は恥ずかしかったらしいが、満更でもない。

新八の場合は………目立ちたかったにもかかわらず、目立ち過ぎるのは恥ずかしいため辞退したらしい。

かくしてなんやかんやで事件は解決した。

そして事件から三日後の夜。

銀時は自室で寝ていた。

銀時「あゝ……ダリイ……」

まだ事件の疲れが残っているのか、そんな言葉を出す。すると、何か重たいものを感じた。

銀時「あれ？何か重い・・・ってまさか（汗）」

銀時は汗を流して布団をめくる。

中にいたのは赤い髪の女性。っと言いかリリスであった。

銀時「なんだリリスか。サチコかと思った。・・・てか何でこいつがここに!？」

今頃気づく銀時。

すると、リリスが銀時に這い上がってくる。

銀時（ちょ、こいつ何やってんだ!?)

銀時は焦る。もしこんな状況をなのはかフェイトが見たら確実に殺される。

銀時は慌ててリリスをどかさうと思ったら、よく見るとリリスの様子がおかしい。

銀時（なんだ?)

銀時はリリスの顔を見る。

リリスは銀時を見て、にっこりと笑い、

銀時に犬歯を立てた。

翌朝

イストワール「それは災難でしたね」

イストワールが呆れの声で銀時に言う。

銀時は体中噛まれ跡がいつぱいあった。

言うなれば不幸の幻想殺しがシスターにやられてる感じで。

フェイト達は銀時を心配し、リリスはと言うと、ネプテューヌと遊んでいる。

フェイト「それにしても何でリリスが・・・」

イストワール「それはサキュバスの性ですよ」

イストワールが説明する。

イストワール「サキュバスは夜の時にある条件を満たすと本能が出るんです。その条件は満月の日に現れます」

銀時「何それ？狼男かよ」

銀時は突っ込む。

ランドル「要はあれじゃろ？夜になったら気をつけるってことじゃ」

ファルコリア「銀時殿はある意味人気があるようだな」

イリス「少し同情しますね」

イリス達は銀時に同情する。

ちなみにイリス達は事件後、別世界でマイホームを築き、今もゆつくりと暮らしている。
イリスは体が元に戻ったが、大怪我した影響か、今車椅子に乗っている。
リハビリを行って少しずつ回復している。

銀時「同情すんのやめてくんない？何かこっち沈むよ・・・」
フェイト「ああ、銀時しっかりして」

銀時は顔を沈める。
なんやかんやでも一応平和である。

夜

真夜中で一人起きているのがいる。リリスである。

リリス「またあの夢・・・」

頭を抱えるリリス。

彼女はよく良く夢を見る。

夢の内容は、血まみれで沢山の死体を眺めるサキュバスの光景が。

リリス「私の過去の記憶と関係が・・・？」

リリスは考え込むが、答えは導けなかった。

翌朝

新八「おはようございまーす」

フェイト「おはよう銀時」

銀時「ういーすおはよう」

みんなそれぞれ朝の挨拶をする。

銀時があたりを見渡す。

銀時「あり？ネプテューヌは何処だ？」

はやて「ネプちゃんなら買い物に行かせたで？」

はやてが言つて、銀時はそうかと言う。

銀時は外を見ると、ネプテューヌを見つけた。リリスもいる。

銀時達は外に出る。

ネプテューヌ「そんで、銀さんはいろいろとチャランポランだけど
いい人なんだよ」

リリス「そうなの〜？」

ネコ？「チャランポランじゃ分らんニヤ」

植物な女の子？「なんか興味あるね〜」

ネプテューヌはリリスとリリスのようにほとんど裸に近い猫耳と尻尾の生えた女性と、全身緑色で2つのつぼみのお団子と下半身が花のような少女が話し合っていた。

銀時・新八「ちょっと待てEEEEEEEEEEEE!!!」

銀時と新八が大いに突っ込む。

ネプテューヌ達がきづく。

ネプテューヌ「あ、銀さん」

銀時「あ、銀さん、じゃねえよ!!!お前そいつらどうしたんだよ!!!」

銀時は猫な女性と植物な少女を指差す。

ネプテューヌ「拾った」

ネコ?・植物な女の子?「拾われた(ニヤ)」

新八「捨て猫かよ!!!明らかに猫っぽいのがいるけどね!!!」

新八は突っ込む。

ミーニヤ「あたしはミーニヤって言うニヤ」

アルラ「私アルラ、よろしく」

銀時「あ、どうもご丁寧に……って違う違う!そうじゃなくて!

ネプテューヌ、お前こいつら拾ったのは分かったが、一体何なんだ?」

銀時はネプテューヌに説明を求める。

ネプテューヌ「実はあの子たちはリリスと同じあそこで作られたみたいで、仕方なく私が預かることにしたの」

ネプテューヌの言うあそことは、シグマが使っていた研究所のこと。銀時は無言になる。

ミーニヤ「ニヤニヤ、ネプテューヌ、この天然はなんニヤ？」

銀時「天然って何？パーマか？天然パーマって言うてんのか？」

銀時はミーニヤの一言に突っかかる。

ネプテューヌ「あはは、この人はさっき言ったように銀時って言うんだよ」

アルラ「ふん……」

ネプテューヌが紹介し、アルラは興味深そうな顔をする。

ミーニヤ「こいつがニヤ？とても強そうには見えないニヤ」

ネプテューヌ「見た目に反してすごく強いんだよ銀さんは」

銀時「見た目に反しては余計だ」

銀時はネプテューヌにツツコム。

ミーニヤ「なるほど。強いならきつと体も頑丈そうニヤ。だからサンドバツクになるニヤ」

銀時「なんでそうなるんだよ！サンドバツクは新八でいいだろ！」

新八「オイイイイイイ！僕を犠牲にするなアアアアアアアアアアアア！」

新八はバトンを渡した銀時に怒鳴る。

ミーニヤ「誰ニヤ？その新八って」

銀時「新八とは地味な駄目ガネのことだ」

新八「何誤解を招くようなこと言うの！」

ミーニヤ「お前が新八ニヤ？」

ミーニヤは新八に顔を近づけて見る。

ミーニヤと眼が合った新八は、間近に女の子が顔を近づけてきたことに心臓の鼓動が速くなる。

新八（お、女の子の顔が僕の近くに！？落ち着け！COOLになるんだ志村新八！！）

女の子の免疫はあまり少ない新八にとって、どうするべきか戸惑う新八。

モニユ

ミーニヤ「ニヤ？」

誰かがミーニヤの胸を揉まれる。神楽だ。

神楽「おいテメエ、いい乳持ってんなあ。それこっちによこせヨ」

新八「神楽ちゃん何やってんの！？」

物干し奏にミーニヤの胸を揉み続ける神楽。

新八とフェイト達はこの光景に顔を真っ赤にする。

ミーニヤ「お前こんな脂肪の塊に興味があるのニヤ？変わったやつニヤね」

ミーニヤ自身は揉まれても全く動じず、自分の豊満な胸を脂肪の塊にしか見てないらしい。

アルラ「ホントその胸は羨ましいわね」
ミーニヤ「…アルラもなににするニヤ」

背後から胸揉みされるミーニヤ。

銀時「お前らだけで勝手にやってる」

銀時は手を振ってこの場を立ち去ろうとした。
が、アルラが手を伸ばして、と言うよりツタを伸ばして銀時を捕まえて体に寄せる。

アルラ「そんなこと言わないでよ銀時。一緒に遊びましょう？」
ミーニヤ「何やってるニヤアルラ！そいつはあたしが使うんだニヤ！」

リリス「だ〜め。銀時は私の〜」
ネプテューヌ「ちよつと！銀さんは私のだからね！」

銀時「いつから俺はお前らの物になっただよ！」

銀時はネプテューヌ達に取り合いにされる。

しかしこれを見たフェイトは黙っているわけがない。

フェイト「銀時は私のだよ！！」

なのは「フェイトちゃん、抜け駆けはいけないなの」

シグナム「何かやってると思えば、銀時は私のだ！」

リインフォース「あなた方に銀時は渡しません！」

ティアナ「兄さんは渡さない！」

スバル「銀さんは私のだよ！」

猿飛「何かやってると思ったらあなた達何やってるのー！！！」

もはやしっちゃんかめっちゃんかである。さらにナンバーズも加わって

さらにバトルまで展開した。ちなみにネプテューヌとリリスとミーニャとアルラは参加してません。
そしてその戦いは夕方まで続いたとか。

そして夜。ミーニャとアルラが加わってさらに賑やかになった。

そして深夜、リリスは眠りに入り、夢を見る。

何も無い荒野。そこに沢山の死体があった。そしてそこに一人の女性が血まみれで立っていた。

???。「・・・またたくさん殺したのね・・・」

女性は立ったまま呆然と死体を見る。

女性はボロボロのローブを身に纏っているが、頭に角が生えていた。そして手には引き裂いたかのように血がべつとり付いている。

???。「・・・どちらにしろこの場所に用はないわ・・・」

女性・・・いや、サキュバスはこの場を去ろうとした。

サキュバス「...ところで私に何の用？」

サキュバスはふりかえらず言う。

???「フッフッフ…君をサンプルにするものだよ」

そこにいたのはシグマとイリスである。

ちなみにファルコリア達はおらず、今の時期は15年前である。

サキュバス「私を？」

シグマ「そうだ。だがもう死ぬがいい」

シグマが言うといリスがもう突進で神速の如くゼロセイバーを振る。
サキュバスは気配を感じてかわす。

サキュバス「本気のようなね。だったら遠慮なく…倒してあげるわ」
ころ

サキュバスは爪を立てて殺気を放つ。

そしてイリスにも負けない神速でイリスを切り裂こうとする。

イリスは殺気を感じてゼロセイバーで防ぐが、重い一撃を受け、交代する。

イリス「クツ、強い・・・」

シグマ「素晴らしいな。やはりサンプルにふさわしい」

その後もサキュバスとイリスは爪とゼロセイバーで攻撃しあう。

サキュバス「しつこい、これで終わりにする」

サキュバスは右手に氷の魔法、左手に炎の魔法とその間に蝙蝠を出し、合体させると白い槍みtainなものができる。

切られたサキュバスは倒れる。

シグマ「フッフ、ではサンプルを回収するか」

薄れゆく意識の中、サキュバスは思う。

サキュバス（もうこんな疲れたわ。せめて私は楽しく暮らせることをしてみたい。もし転生できるならそんな生活をしてみたい。そして・・・優しいお母さんと・・・過ごして見たい・・・）

今の人生を諦め、サキュバスは二度と目覚めない眠りについた。

リリス「!!!?!」

夢から覚めると、体から汗が出る。

リリス「・・・今のは私に記憶なんだね・・・」

リリスは思い出す。あの夢は自分の記憶なんだと。

ネプテューヌ「何か悪い夢でも見た？」

リリス「!」

寝ていたはずのネプテューヌが声をかけてきた。

リリス「…何時から」

ネプテューヌ「リリスが起き上がった時」
リリス「それ思いつきり最初じゃん」

リリスは突っ込む。

リリス「あのね、思い出したんだ。自分のこと」

ネプテューヌ「・・・」

リリス「でもね、私母さんと一緒に過ごしたいんだ。あのとき楽しかった」

リリスはネプテューヌと話し合った時のことを思い出し、涙が出る。

リリス「だからわたす「いいよ」「…え？」

ネプテューヌ「記憶がどうだが、リリスはリリスだよ。それに・・・」

ネプテューヌは言う。

ネプテューヌ「リリスっておっちょこちょいなところがあるしね」

リリス「母さん!!」

さっきのシリアス壊したことに怒るリリス。

同時に嬉しさが出る。

リリス（ありがとう）

リリスは静かにお礼を言った。

ネプテューヌ（ボソツ）どういたしまして（

ネプテューヌは聞こえない程度で返した。

翌朝

ミーニヤ「ニヤー」

新八「クオラ待てこの泥棒猫がアアアアアアアア！！！」

鈴「待てと言われて待つ馬鹿はいない！いると言えば真人位だ」

ミーニヤと鈴が新八から逃げている。

あとなぜかミーニヤと鈴は仲良くなっていた。ネコ繋がりだからだろうか。

あと逃げてる原因？ミーニヤが新八のメガネを盗んだからだ。

クド「わふゝ、アルラさんいい匂いがするですゝ」

アルラ「そうでしょ？」

ユイ「はあゝ、いやされるゝ」

クドとユイはアルラからはっする香りに癒されている。

ネプテューヌ「順応早いね」

リリス「そうだね」

ネプテューヌとリリスは眺めて笑っている。

ネプテューヌ「これからもよろしくね、リリス」

リリス「うん」

2人は顔を見合わせ、にっこり笑った。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

リリス「はい、アシストするのはリリスと、」

ミーニヤ「新しく入ったネコマタのミーニヤと」

アルラ「アルラウネのアルラがアシストするよ」

銀八「じゃあペンネーム『月光閃火』さんから行くぞ。『よお…月
光閃火だ。』

しかし…慌てて赤くなっているファルコリア、スッゲー可愛いな…

銀八「ちょっとそれ駄目だつて！『月光閃火』さん傷つくから！」

アルラの毒舌に銀八は冷や汗流して突っ込む。

イリス「今回の話で分かるように元に戻っています。そして慣れるためにリハビリをしています」

真王「『月光閃火』さんの考えたオリキャラですが、とりあえず参考にしようかと思えます。何処に出すかなんて知りませんが、そしてオリキャラのプロフィールをいただきました」

『名前：エルダー・ザイン

正式名称：対魔導戦式強化人間【アルファード】

年齢：見た目10代後半くらい（実際年齢ウン千歳（汗）

性別：

容姿：『hackシリーズ』のハセヲを大人っぽくした感じ

性格：寡黙で近寄りがたいオーラを漂わせているが、曲がった事が大嫌いで正々堂々を好む

魔力ランク：SSSS

マルチ・タスク・マジカ

希少能力：【魔導錬装】【魔装具】と呼ばれる魔力を帯びた武器や

防具を錬成し纏う能力、練り込む魔力の量によって【魔装具】のランクは上がっていく、またオリジナルの【魔装具】を作り上げる事も出来るがその際一から作り上げる為最初は少々時間が掛かる、錬成する【魔装具】には全て“非殺傷”・“殺傷”に切り替え可能

詳細：この所頻繁に起こっている【管理局員傷害事件】の元凶であり、強者を求めて流離う【魔導錬装士】の青年

その正体はかつてとある研究者によって立ち上がった【プロジェクト

マルチ・タスク・ウイザード

MTW】の唯一の成功体であり、それ以前の記憶は全く無い（元

々はごく普通の硬派な青年武闘家だった）

また、生まれ持ったの不老不死の体質持ちであり、死ぬ事も老いる事も出来ない（とは言っても普通に病気は出るし怪我もする）

好きな女性のタイプは『シヤマル』のようなおしとやかな人

余談だが、舌と内蔵がとてつもなく頑丈でどんなにトンデモ料理でも平気で平らげる（が、さすがに『シヤマル鍋』を食べたあとは数時間下痢に悩まされそうだが…（汗）

こんな感じだ。ちなみに、イメージＣＶは『櫻井 孝宏さん』で…
検討よろしく頼む。（一礼）』

ミーニヤ「それじゃあ『月光閃火』、廊下に立つニヤ。次はペンネーム『鳴神ソラ』からニヤ。『良かった…黒神さんの所の様にならなくて…』

ネス「あれは悲しかったよね…」

リュカ「うん…」

カービィ「と言うか！ダークソウルっぽいのが喰らっていた奴に！
！？」

スネーク「しかも後の2つも見覚えのある世界だな…」

マリオ「…最後の奴が最後に戦う相手かもな…」

フォックス「そんな訳で質問『イリス達は銀時やネプテュー又達以外のメンバーを始めて見た印象はどんな感じ？』」

カービィ「真王に質問だよ」『ネプネプ達以外のネプネプ達の世界

の住人が出る可能性はあるって言ったけど…どんな人が出る可能性あるの?』」

スネーク「もう一つ真王に質問『イリス達は誰かに好意を寄せる事は考えてるのか?』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます 』」

イリス達「ある意味普通の人たちかと…」

ランドル「ワシ的にはどこか潜在能力が隠れているように思えるが…」

真王「住人と言えばアイテム売りの少女とか自称正義のヒーロー（ペタンコ）がいますね」

銀八「おい今正義のヒーローと書いてペタンコって読まなかったか?」

真王「イリスたちのことなら銀時を計画しています。ランドルだけは桂です」

銀八「・・・『鳴神ソラ』！廊下に立て!」

ミーニャ「（それは只の八つ当たりニャ）…ペンネーム『黄色いのにゃ』からニャ。『新八に質問。新八は分身の術とか使わないんですか?眼鏡を大量に買って置くだけで充分ですし、案外敵も騙されると思いますよ』それ本人が聞いたらありがた迷惑ニャ」

アルラ「それどころか余計本物の存在が薄くなるわよ」

リリース「うん、それじゃあ『黄色いのか』さん、新八を応援してね」

真王「次回のアシストはサチコです。では」

第四十七訓：ああ、やっぱり家族が一番だわ（後書き）

真王「次回はペツタンコ組が卒業します!？」

ミーニヤ「次回『体と胸は比例できるものじゃない』テイクオフニヤ」

（予告）

ナレーション「リリースが何やら新しい魔法を習得したようです」

第四十八訓：体と胸は比例できるものじゃない（前書き）

真王「リリスの新魔法をお披露目です」

第四十八訓：体と胸は比例できるものじゃない

銀時「フウワツハ……」

機動六課の朝、銀時は外であくびしている。

銀時「朝日さんおはようございます……」

ちよつとおふざけを言う銀時。

とりあえずそう言つて部屋でまた寝ようと思つたら、視界に黒い長髪で赤い服の女性を見つけた。

女性は銀時に気づいて走り出した。

???「銀時……」

銀時「おわっ！」

いきなり女性が銀時に抱きついた。

???「えへへ、やっと銀時に抱きつけた」

銀時「誰だよおい！いきなり抱きつきやがって！」

銀時は女性に怒鳴る。

銀時「ん？いや待て。なんか見覚えがある様なない様な……」

銀時は女性を見て引つ掛かる。

女性をよく見ると、一ヶ所だけ特徴的な髪形、見覚えのある赤い服、そして肌が青白い気がする。

ネプテューヌは除く)

しかしなのは達はサチコだと気付いていない。銀時は訳を説明する。

銀時「待て待て待て！お前らよく見る！こいつこつ見えてサチコだから！」

銀時は説明するが、なのは他の殺気が消えるどころかグンツと上がった。

あるえー？なんで消えてないの？なんで殺気が増えてるわけー？

もはや絶体絶命かと思ったら、

リリス「サチコちゃん」

サチコ「あ、リリスちゃん」

リリスがサチコを呼んでサチコは銀時から離れて行った。

なのは「え？今のサチコちゃん？」

なのは達の殺気が消える。

サチコ「そっだよ」

リリス達と一緒に来たサチコが答える。

フェイト「え？でもなんでその姿？」

サチコ「え」と、リリスちゃん

リリス「わかった。解除」

リリスがサチコに手を向けて言うと、サチコは元の小さな小学生くらいの大きさにもどった。

なのは「ホントに大きくなった…」

なのは達が驚いていると、

大人サチコ「銀時」

銀時「ごふっ！」

大人サチコが銀時にタツクル（本人は抱きついてるつもり）してきた。
た。

銀時は倒れ込む。

大人サチコ「えへへ、銀時」

銀時「ちょ、おま、止めて。ホントこっちこないで。お願いだから、300円あげるから！」

顔をいっぱい汗かいて超真っ青にしてさっさと離れるように言う銀時。

大人サチコ「だめなの？（涙目）」

銀時「ヴっ！」

サチコの涙目を見て精神に深いダメージを負う銀時。

大人になったサチコは魅力的になり、胸も大きい。

すると誰かが銀時の手をひっぱりだした。

それは大人になったネプテューヌである。

大人ネプテューヌ「大丈夫銀さん？」

銀時「あ、ああ、まあ………って何やってんの？」

なぜかネプテューヌが銀時にくっついてる。

大人ネプテューヌ「一つ聞くけど銀さん、私って…：どうかなの？」

大人になったネプテューヌは、パープルハート並に美しく可愛くなっている。

風によつてさらさらと流れる髪はさらに美しい。

銀時「えつと、まあ…：綺麗じゃね？」

大人ネプテューヌ「／／／／／／／／」

ネプテューヌは褒められて顔を赤くする。

そしてなのは達は悪魔でも殺せる殺気を出す。

ミーニヤ「他にも誰かなるやつはいるかニヤ？」

???「ハイハイハイハイハイイイイイイイイイ！！！！」

そう大声をあげて手をあげているのはヴィータであった。

そして隣にブランがそっけなく手をあげている。

ミーニヤ「じゃあその二人ニヤ」

神楽「んだよ、私にもさせるよ」

九兵衛「そうだ！僕にも今すぐだ！」

ミーニヤ「駄目ニヤ」

神楽と九兵衛が要求するが、ミーニヤが打ち止めする。

リリス「それじゃあ、ボディアップ」

ポポーン！

ヴィータとブランの体が変化した。

2人とも体が大きくなり、出ると子は出て引っ込んでいるところは引っ込んでいる。

ヴィータ「うおー！すげー！！」

ヴィータは大きくなった体に喜ぶ。

ブランは無表情だが、少し嬉しさが見える。

モニユ

はやて「ホンマに大きくなりおつたなヴィータ」

大人ヴィータ「はやて！？」

いきなり後ろからはやてがヴィータの胸を揉み始めた。

ヴィータ「あ、ちょ、はやて！そんなに揉むな／＼／＼」

はやて「いや、こんな揉み応えのある胸は初めてや。そしてムカつくな」

大人ネプテユーン「それ嫉妬だね」

リリス「嫉妬だね」

ミーニャ「嫉妬ニャ」

はやて「そこ、黙らっしやい」

はやては突っ込みながら胸を揉む。

リリス「次はあなた達？」

神楽「そうネ！早くやるヨロシ！」

九兵衛「頼む！この僕に胸を！」

2人はしつこく要求してくる。

ミーニヤ「百聞は一見に如かず、まあクドちゃんが見本にするニヤ」
クド「わふっ！？私なのですか!？」

アルラ「そうよ。リリス、やっっちゃって」

リリス「ボディアップ」

クド「ちょ…ま…」

ポーン!

クドが止めようにも虚しく魔法がかかった。

そして煙がはれると、もうポーン！キュツ！ポーン！な体を持ったクドがいた。

大人クド「わふー！ホントに大きくなったのです」

理樹「・・・ホントに大きくなった」

葉留佳「こりやグラマーレベルだね」

椎名「あさはかなり」

ユイ「なんだろう・・・この敗北感」

周りはそれぞれ感想を漏らす。

すると小毬が来ヶ谷の様子がおかしいことに気づく。

小毬「ゆいちゃん？」

来ヶ谷「あははははは…大きくなったクドリヤフカ君はクドリヤフカ君ではない。これは夢だ、幻想なんだ。アハハハハ・・・」

小毬「ゆいちゃんんんんんんんんんんん!!!」

大人になったクドのギャップについていけず、壊れかけている来ヶ谷。

周りは苦笑いを浮かべる。

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

サチコ「は〜い、今回私がアシストしますよ〜」

銀八「もう一緒にいるから少し慣れたな…。んじゃペンネーム『月光閃火』さんから始めっぞ。『よお…月光閃火だ。』

良かった…参考にしてくれるようで。

輝刃「だな…やはりやってみなければ分からない…という事だな…。」

だな…あ、今回も質問…行きまーす！

1. 作者に質問だ。今後出てくるだろうキャラ（特に女性陣）の中で、新八に惚れる（またはそれに準ずる）キャラって…居る？

輝刃「…余程新八の扱いに危機感を感じているようだな…。次は俺からだ。」

2. リリスに質問だ。今回銀時の生気を啜った訳だが…やはり他の男性陣の生気も啜るのか？

あ〜…確かに、リリスって『サキユバス』だからな…。…俺の生気って彼女リリスにとって、どんな味なんだろう？

輝刃「…根こそぎ吸われるなよ？」「『」

真王「新八に惚れるというより気にしている人がいるならミーニャとアルラですかね。と言うかミーニャとアルラは新八を気にいつていると言えはいいでしょうか。あと言うておくがリリスは生気を吸ってません。あれは噛んだだけです」

サチコ「『月光閃火』さん。廊下に立つてなさい。ペンネーム『黒神』さんから質問だよ。『質問します。』

銀時へ

今回デバイスを手に入れ、バリアジャケットはコスプレになっちゃいましたけどどう思いますか？

奏へ

麻婆茄子の存在は認めますか？

新八以外の皆さんへ

新八が彼女出来る可能性はあると思いますか？
それぞれの予想を聞かせてください。

以上。『まず順番に答えるよ〜』

銀時「もう痛い視線を向けられるのはやだよ…」

真王「よほど嫌いなのか。2つ目」

奏「おいしいわ」

真王「麻婆なら何でもいいのか？3つ目」

新八以外全員「分かりません」

真王「ああ言っても新八に春が来る可能性もありますから。では『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「次はペンネーム『鳴神ソラ』さんからだ。『なるほど…リリスが見ていたのは前世の記憶だったか…』

マリオ「新しい家族も増えたな〜いや〜こりゃあ賑やかになるな〜」

ルイージ「…苦労しそうだな銀さん…」

フォックス「あの状態を見るからにな…」

ネス「それにしても良かったよね〜銀さんはBJが変な目で見られなくて」

リュカ「それで今回はリリスが手に入れる魔法って…」

スネーク「成長魔法か…もしくは幻惑関連の魔法か？」

マリオ「そんな訳で質問『リリスは新しく家族に加わった2人の第一印象はどんな感じだ？』」

ルイーダ「皆に質問『銀さんとネプテューヌを四字熟語で表すならどんな四字熟語?』」

ネス「イリスさん達に質問『銀さん達やなのはさん達以外で自分達と気が合いそうな人は誰?』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます

マリオ「どんな魔法か気になるな」『ズバリお答えしましょう』

リリス「ネコマタとアルラウネだけどいい人たちだったよ」

真王「銀時の場合はまだ不明ですが、ネプテューヌの場合は『鯨飲馬食』だとの事です」

イリス「私はどちらかと言うと恭介さんかゆりさんかネプテューヌさんと思います」

ランドル「ワシは来ヶ谷じやの」

ファルコリア「私はイリス様と同じだ。あ、チンクもだな」

メーティア「真人さんと謙吾さんでしょうか」

バーニン「あたしは真人とノーヴェだな」

アイシー「私はユイと理樹と小毬とクドとネプテューヌだね」

シャチール「どっちかというと大山とか遊佐とか美魚かだな」

銀八「では『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

サチコ「最後行くよ。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんだよ。『リクオ』
「亀鳥虎龍先生が新たに書く『万事屋奇譚幕』の奴良リクオです。」

はやてさんに質問です。人の上に立つ人として、どんな責任を
背負えばいいんでしょうか、教えてください！これは奴良組若
頭として、真剣に言ってるんです！！」

阿良々木

「同じく『万事屋奇譚幕』の阿良々木だ。そっちの新八に質問！
銀さんがこっちの新八より、僕のツツコミを求めるんだけど、ど
うすれば良い??」

はやて「それはな、自らがポケのトップを目指すんや」

真王「はい全然参考にならない答えです。私から答えますと、人の
上に立つための覚悟が必要だと思います」

新八「あと阿良々木さん、どうすればいいって言われても僕はどう
するつもりもありません！」

真王「では『亀鳥虎龍』さん。初めての感想をありがとう。次回は
理樹をアシストにします。それから『鳴神ソラ』さんに前回の『第
四十四訓：怒り出した人は凄い力を発揮する』の質問ですが今度は
『マリオたちならどんな能力ですか?』そしてもう一つ、『『スー
パーマリオくん』を持っていますか?持ってるならそれは好きです
か?』」

サチコ「たしか『沢田ユキオ』って作者の漫画だよな?」

真王「ええ、私あれ大好きです。ではまた会いましょう」

第四十八訓：体と胸は比例できるものじゃない（後書き）

真王「次回は何とランキングバトルを開始します。ではまた」

ランキングバトルその1 (前書き)

真王「ランキングバトルの始まりだ！」

ランキングバトルその1

ある日、恭介が、

恭介「何時もシリアスとかギャグもんとかよりももっと凄いものでもやりたい！そんなわけでいきなりにランキングバトルを始めるぞ！」

つと、いきなりな展開で始まってしまいました。

ネプテューヌ「ハイこの通りいきなりな展開が始まっています」
ユイ「誰に言ってるの？」

ネプテューヌとユイが対峙する。
ネプテューヌはハリセンを、ユイは輪ゴムガンを持っている。

ネプテューヌ「まあなにはともあれ行くよ」
ユイ「おっしや行くぞ！」
ネプテューヌ「その言葉づかいどうなの？」

スイーツ大好き小学生
ネプテューヌ

VS

荒ぶる小悪魔

ユイ

ネプテューヌ「称号変わってない……」

ユイ「クオラ！荒ぶるってどついつ意味じゃあぁ……！」

ネプテューヌ「まあいいや。行くよ……！」

ネプテューヌの攻撃。

ユイ「いて……！」

ユイに1000のダメージ！

ユイ「喰らえ……！」

ユイの攻撃。

ユイは引き金を引き、輪ゴムを放った。

ネプテューヌ「いたっ……！」

ネプテューヌに80のダメージ！

ネプテューヌ「なんの……！」

ネプテューヌの攻撃。

ユイ「ブホッ！」

ユイに200のダメージ！

ネプテューヌ「レベルアップ！」

ネプテューヌはハリセンの使い方のレベルが上がった。

ユイ「舐めんな！」

ユイの攻撃。

ユイは引き金を引いて、輪ゴムを放った。

ネプテューヌ「余裕だよ」

ミス！

ネプテューヌはハリセンで防いだ。

ネプテューヌ「これでとどめ！」

ネプテューヌの攻撃。

ユイ「いて！くはっ！」

ユイに300のダメージ！

ユイに400のダメージ！

ユイ「やられた〜…」

ユイは倒れた。

ネプテューヌ「わ〜い、勝った〜」

ネプテューヌ、WIN!!

ネプテューヌ「はい、じゃあこの称号をあげるよ」

ユイは『チビ悪魔』の称号を手に入れた。

ユイ「ちくしょー……………!!!!」

ユイはショックを受けた。

バーニン「ネプテューヌが面白い遊びがあるって聞いてきてみれば何でこうなってるんだ？」

ノーヴェ「あたしがしるか」

別の場所でバーニンとノーヴェが対峙している。

バーニンはユイと同じ輪ゴムガンを、ノーヴェは水鉄砲を持っている。

バーニン「まあなにせよ、いざ尋常に」

ノーヴェ「勝負だ!」

？

バーニン

V S

荒ツンデレ

ノーヴェエ

バーニン「？ってなんだ？」

ノーヴェエ「誰がツンデレだこら————————！！！」

バーニン「まずはあたしだ！」

バーニンの攻撃。

バーニンは引き金を引き、輪ゴムを放った。

ノーヴェエ「ちっ！」

ノーヴェエに120のダメージ！

ノーヴェエ「今度はこっちだ！」

ノーヴェエの攻撃。

ノーヴェエは引き金を引き、水鉄砲を放った。

バーニン「うわ冷めたっ！そして痛っ！」

バーニンに200のダメージ！

バーニン「お返しだ！」

バーニンの攻撃。

バーニンは引き金を引き、輪ゴムを放った。

ノーヴェ「いてっ！」

ノーヴェに160のダメージ！

バーニン「成程な」

バーニンは輪ゴムガンの使い方レベルが上がった。

ノーヴェ「これもしかして詰めなきゃ攻撃できないのか？」

ノーヴェは水鉄砲の準備をしている。

バーニン「だったらあたしは攻撃できるな」

バーニンの攻撃。

バーニンは輪ゴムガンを二回撃った！

ノーヴェ「いてっ！ちっ」

ノーヴェに180のダメージ！

ノーヴェに170のダメージ！

ノーヴェ「ならこれでどうだ！」

ノーヴェの攻撃。

ノーヴェは引き金を引き、水鉄砲を放った。

バーニン「ぐわっ！」

バーニンに300のダメージ！

バーニン「なんのっ！」

バーニンの攻撃。

バーニンは輪ゴムガンを二回撃った。

ノーヴェ「いて！グハッ！」

ノーヴェに160のダメージ！

ノーヴェに200のダメージ！

ノーヴェ「また詰めなきゃいけないのか？」

ノーヴェは水鉄砲の準備をしている。

バーニン「それがあんたの敗北だ。くたばれ！」

バーニンは輪ゴムガンを二回撃った。

ノーヴェ「イテッ！ガハッ！」

ノーヴェに200のダメージ！
ノーヴェに180のダメージ！

ノーヴェ「畜生…」

ノーヴェは倒れた。

バーニン「あたしの勝ちだな」

バーニン、WIN！！

バーニン「確か負けた奴に称号を…だったか？ならこれだな」

ノーヴェは『赤ツンデレ』の称号を手に入れた。

ノーヴェ「何か前のと変わってないような…まあいいか」

ノーヴェはとりあえず気にしないことにした。

沖田「どうもいまいち何かが欠けると思っただが、まあ気にしないことにしますか」

土方「何がだ総悟」

沖田と土方が対峙している。

ちなみにスカリエッティに誘われ、現在の状況にある。

土方には木刀を、沖田にはピコピコハンマーを持っている。

土方「ま、俺が勝手テメエに恥ずかしい称号をくれてやる」

沖田「そのセリフをそのまま返しますぜえ」

クソマヨラー

土方

V S

S

沖田

土方「クソマヨラーってどついうことだコラー……………!!!」

沖田「あれ？俺は「文字だけ？」

土方「死ね総悟……………!!!」

土方の攻撃。

沖田「甘いですぜ」

ミス！

沖田はピコピコハンマーで防いだ。

沖田「死んでくださいませ」

沖田の攻撃。

土方「オボオツ!!」

土方に700のダメージ!

土方「ちよつと待てエエエエ!!なんでそんなハンマーであのダメージなんだよ!お前何かしたのか!?!」

沖田「酷いなあ。俺はなんも知らないですぜえ?」

土方「納得できるか!死にやがれエエエエ!!」

土方の攻撃。

沖田「ちっ!!」

沖田に300のダメージ!

沖田「これで終わりですあ」

沖田の攻撃。

土方「アラバアツ!!」

土方に800のダメージ!

土方「ぐあああああああ!!!!!!!!」

土方は倒れた。

沖田「あつけないねえ」

沖田、WIN!!

沖田「じゃあ土方さんにはこれで」

土方は『ちんかす』の称号を手に入れた。

土方「ちんかすってテーマーーーーー!!!!!!」

土方は怒り出して沖田を追いかけた。

コンパ「き、緊張するです」

アイエフ「落ち着きなさい」

緊張しているコンパにアイエフが落ち着かせる。

コンパはピコピコハンマーを、アイエフはおもちゃナイフを持っている。

なお、恭介曰く、ダッグを組むのもありだとの事。

近藤「やや、コンパ殿とアイエフ殿と対戦か」

エリザベス『意外な組み合わせだね』

向こうから近藤とエリザベスのペアが現れる。

近藤には割り箸を、エリザベスにはマジックハンドを持っている。

アイエフ「そつちも意外すぎるけども…」

コンパ「が、頑張るです」

近藤「このゲームだ。女子と言えど容赦は出来ん」

エリザベス『尋常に勝負！』

ゴリラ（笑）

近藤

オバQモドキ

エリザベス

VS

ドジっ子看護師

コンパ

気高き乙女

アイエフ

近藤「なんでー！ー！！？なんでゴリラになってんのー！ー！？
して（笑）って何！？」

エリザベス『私はオバQではありません』

コンパ「私はドジっ子ですか…」

アイエフ「乙女って何！？恥ずかしいんだけど！！／／／／」

コンパ「まずは私から行くです！」

近藤「フツ悪いがお譲ちゃん、勝つのは俺達だ」

近藤は余裕そうに笑う。

コンパ「え〜い！！」

コンパの攻撃。

ズゴツツツ！！！！

近藤「ボブアツツ！！」

近藤に1億のダメージ！

近藤は倒れた。

アイエフ「いや待てエエエエエエ！！なんでコンパの攻撃が1億もいくのよ！コンパ、あんた何をしたの！？」

コンパ「わ、私に聞かれても知らないです！」

アイエフはありえないことにコンパに問い詰めるが、コンパは手を振って否定する。

近藤は完全に気絶している。

エリザベス「隙あり！」

アイエフ「え？きゃ！」

コンパ「いたっ！」

エリザベスの不意打ち。

アイエフに200のダメージ！

コンパに200のダメージ！

アイエフ「やってくれたわね！」

アイエフの攻撃。

エリザベス『見切った！』

ミス！

エリザベスはマジックハンドで防いだ。

コンパ「今度はこっちです」

コンパの攻撃。

バキヤツツ！！

エリザベス『アギヤブラアツツ！！！！』

エリザベスに10億のダメージ！

エリザベスは倒れた。

アイエフ「だから待てえエエエエエエエエエエ！！！！なんでコンパの攻撃がそんなに高いのよ！！そして1桁上がってるし！！」

なにはともあれ、コンパ、アイエフペア、WIN！！

近藤は『駄目ゴリラ』の称号を手に入れた。

エリザベスは『マスコット以下』の称号を手に入れた。
しかしなぜかコンパの称号が『破壊神』に変わった。

コンパ「なんですかこの称号は—————!!!」

コンパは怒って近くのテーブルをたたき割った。

ピコピコハンマーなのに。

アイエフは苦笑いしながらコンパの暴走を止めるのだった。

桂「何と…。エリザベスがやられてしまったと」

はやて「近藤さんとペアかいな。なにやっとなねんなあのゴリラは」

桂はエリザベスがやられたことを悔やみ、はやては近藤に文句を言う。
う。

桂にはマジックハンドを、はやてにはハリセンを持っている。

サチコ「見〜つけた〜」

リリス「あ、鬘と狸さん」

サチコとリリスのペアが現れた。

サチコには謎の本を、リリスには・・・なぜかレンゲを持っていた。
ちなみにレンゲとは、中華料理を食べる時に使われるアイテムです。

桂「字が違う、桂だ」

はやて「うちは狸ちゃうがな」

サチコ「それじゃあ行くこうかな？」

リリス「始めるよ」

狸部隊長

八神はやて

ヅラ男

桂小太郎

V S

自称ネプテューヌの僕

サチコ

目立ちやすい色女

リリス

はやて「前と変わってないがな……」

桂「ヅラじゃない桂だ！」

サチコ「リリス、準備はいい？」

リリス「OK」

はやて「あれ？自分の称号にたいして突っ込みはないんか？」

桂「まずは俺からだ」

桂の攻撃。

サチコ「おっと」

ミス！

サチコは謎の本で防いだ。

サチコ「今度はこつちだよ」

サチコの攻撃。

サチコは謎の本を読み始めた。

サチコ「そしておばあさんはお城に入って・・・以下ストップ」

はやて「なんやそれ！続き聞かせてえな！」

桂「八神殿！それは罠だ！」

ミス！

桂にダメージを与えられない。

はやてに200の精神的ダメージ！

リリス「次は私だね」

リリスの攻撃。

リリスは素早い動きで、レンゲを桂の口に突っ込んだ。

桂「ゴフオツ！」

クリティカルヒット！

桂に9999のダメージ！

桂「八神殿・・・後は任せたぞ」

桂は倒れた。

はやて「桂さああああああああああああん!!」

サチコ「やるじゃんリリース」

リリース「それほどでも」

はやては叫び、サチコとリリースはハイタッチする。

はやて「桂さんの仇や!!」

はやての攻撃。

サチコ「いたっ」

リリース「きゃっ!!」

サチコに300のダメージ!

リリースの300のダメージ!

サチコ「今度はこっちの番だよ」

サチコの攻撃。

サチコは謎の本を読み始めた。

サチコ「おばあさんは城に入って・・・後ろからゴーストがおばあさんを引き裂いた!!」

はやて「ぎゃあああああああああああああああああああああ

!!!!!!!!」

クリティカルヒット!

はやては9999の精神的ダメージ!

はやて「恐いの嫌や…!」

はやては倒れた。

リリス「イエーイ」

サチコ「勝った〜」

リリス、サチコペア、WIN!!

サチコ「えっと…これかな?」

リリス「はやてさんにはこれかな?」

桂は『まさにツラ!』の称号を手に入れた。

はやては『ちびグソ狸』の称号を手に入れた。

桂「ツラじゃない桂だ!」

はやて「嫌やあああああああああ!」

そして、その2まで続く。

全員「続くんかいイイイイイイイイイイイイ！……！！！」

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生……！」

理樹「こんにちは、リトルバスターズの直枝理樹です」

銀八「んじゃいくか。ペンネーム『鳴神ソラ』さんからの質問だ。

『う……ん……能力なら……2人代表で……』

マリオ：チートブレイカー（全てのチートやチートな能力を無効化する。また、転生者なら本人の意思次第で無効化する）

ソニック：虚無のルーン（ゼロの使い魔に出る4つの虚無のルーン
の能力が使える）

それと…スーパーマリオくんは全て持っていて大好きです！！

スネーク「成長魔法だったな…それって自分の意思で好きなスタイルに出来るのか？」

フォックス「見るからにそうじゃないか？」

ルイーダ「それで次回はランキング…」

マリオ「…何か色々とツツコミ所満載な事が起きそうだな…」

スネーク「（お前が言うな…）特に近藤とか山崎が心配だな…」

ルイーダ「大丈夫だよ…きっと…」

どうなるんだ一体；

スネーク「リリースに質問だが…『成長魔法だが体型とかは自分の意思で変えられるのか？』」

フォックス「九兵衛と神楽に質問『もし自分が成長した姿はどんな感じだと思う？』」

ルイーダ「リリースちゃんに質問『成長魔法って自分にはかけられないの？』」

次回を楽しみにしています

マリオ「…どうなるのやら…」『じゃあまず1つ目と3つ目をお答えしましょう』

リリス「2つとも出来るよ。それでみんなを脅かしたりするし」

銀八「迷惑かけんなよ？んじゃ2つ目」

神楽・九兵衛「もちろんムチムチのグラマーモデルアル（だ）！！」

理樹「よほど大きくなりたかったんだね…。それじゃあ『鳴神ソラさん。廊下に立ってください。次のペンネームは『sibugaki』さんです。』アクセル

「久々に質問・・・って、今回俺かよ！」

ランド

「まあそう言うなよ先生、今回はこのザ・ヒートも居るからよお」

アクセル

「ったく、どうせなら可愛い子ちゃんの方が良かったぜ・・・んじや質問

『今回ナンバーズで誰にも惚れてない人達（ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、ノーヴェ、オットー）達はこれから先誰かに惚れる事、又は恋する事はありますか？』」

ランド

「良いねえ、恋する乙女は綺麗だからなあ」

アクセル

「まあ確かになあ、ナンバーズの嬢ちゃん達皆可愛いもんな」

ランド

「んじゃ次俺な

『質問、クロノってこの先出ます？自分結構好きなキャラなので是非出して欲しいです』」

アクセル

「これまんまsibugakiの願望じゃねえか！」

ランド

「まあそんな時もあるさ」

アクセル

「おいおい・・・んまあそんなトコだな」

ランド

「それじゃ・・・ヒートスマイルでさよならだぜ」

アクセル

「うおっ、暑苦しっ！」・・・えつと作者さんどうですか？」

真王「ウーノは無理です。でもそれ以外なら可能性があると思います。あとクロノ？何時だすか分かりませんが、出す可能性はあると信じてください」

銀八「そうか。『sibugaki』さん。一応期待してください。んでペンネーム『月光閃火』さんからだ。『よあ』：月光閃火だ。

しかし：リリスにそんな魔法が使えたとは…。というか：ちっこい神楽と九兵衛、スッゲー面倒見たくなるのは：俺だけか？

輝刃「確かに：保護欲を駆り立てられるな…。とりあえず、質問行

くぞ？まずは俺からだ。」

1・ミーニャとアルラに質問だ。新八の事を気に入っているそうだが…どっちの部類の好意に入るんだ？

あゝ…確かに、そこは気にはなるよな…。次は俺からだ。

2・リリスの魔法で大人になった面々に質問だ。正直なった時の感想をプリーズだ。

輝刃「ふむ…確かに、一刻一刻の感想は気になる所だな…。」「」

アルラ「私の場合いじりがあるから面白くって」

ミーニャ「あいつの男儀と言うのが気になるニャ。だからあたしが鍛え直してやるニャ」

ネプテユーン・ヴィータ・ブラン・クド

「超嬉しいです(ぞ)！」

サチコ「嬉しいな。でもはやてさんなんか手をわきわきしながら見てたけど…」

真王「またかあの狸は…。では『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

ランキングバトルその1（後書き）

真王「次回はネプ銀編に突入・・・ではなく、ちょっとした裏エピソードをご覧ください」

理樹「次回『似た者同士は一緒に行きやすい』テイクオフ」

（予告）

ナレーション「あの魔道機人が誰かに拾われたようです」

裏第一訓：似た者同士は一緒に行きやすい（前書き）

真王「あの魔道機人が復活か！？そして『月光閃火』さんからオリ
キャラ登場だ！！」

裏第一訓：似た者同士は一緒に行きやすい

なにもない空間。

それどころか真っ暗だった。

????「なんだこれは・・・俺は死んだのか？」

その中で一人の男がいた。

????「俺は・・・一体何をやっていたんだ？」

男は考えると、一つの光が見えた。

????「なんだあの光は？いや、よく分からんがあれに向かえば何か分かるだろうな」

男は光に向かうと、全身につつまれた。

どこかのラボ

目が開けるとそこには緑色の明るさで映る天井、横に向けば生体ポッドらしきカプセルと何やら機械が多い。

そして腰くらいあるピンク色のアホ毛がある髪に白衣を着た女性が視界に入った。

「????」あ、気が付きましたか」

若干子供っぽいしゃべり方だが、女性は心配しているようだ。

男「・・・何処だここは？俺はあの時機能停止してたはずだが……」
「????」まあ自分の状況整理も必要ですが、その前に名前、分か
りますか？つと、ミサカはミサカはあなたに聞いてみたり」

女性は男に名前を聞いてきた。

男は答える。

男「・・・フンツいいだろう。俺はVIVVIだ」

男はVIVVIと名乗った。

そう、シグマと協力し、自ら世界を手に入れようとした魔道機人・
VIVVIなのだ。

ミサカ「VIVVIって言うんですか。私はミサカっていいです。つ
と、ミサカはミサカは挨拶してみたり」

女性はミサカと名乗る。

しかし語尾に名前を2回言うのもどうかと思うが。

VIVVI「で？そのミサカが何で俺を助けたんだ？」

ミサカ「確かにあなたなら助けたに思えますが、私的には捨ったと
言います。つと、ミサカはミサカは一応言ってみたり」

VIVVI「あんま変らんだろうが……」

VIVVIはミサカにツツコム。

ミサカ「でもあなた面白い体でしたので私がいろいろと改造しました。っと、ミサカはミサカは面白く言ってみたり」

VIVVI「改造・・・確かに動けるようになったな」

VIVVIは手足を動かしてたしかめる。

VIVVI「だがお前はただの人間ではないな？」

ミサカ「なぜそんなことが言えるのですか？っと、ミサカはミサカは尋ねてみたり」

VIVVIの一言にミサカは尋ねる。

VIVVI「俺は高度な技術で作られた魔道機人だ。並の製作者でも手を焼くほどなんだが…」

ミサカ「それはですね。私は戦闘機人だからなんです。っと、ミサカはミサカは自慢してみたり」

ミサカは自分を戦闘機人だと答えた。

VIVVIはこれに驚く。

VIVVI「戦闘機人だと！？馬鹿か！戦闘機人は常に戦うだけの存在はずだろ！」

ミサカ「ところが私の場合イレギュラーな存在になってしまったんです。っと、ミサカはミサカは語ってみたり」

VIVVI「イレギュラーだと？」

VIVVIはミサカがイレギュラーと言うことに疑問に思つと、ミサカが答えた。

ミサカ「ミサカはなぜか他の子達と違って人間らしさと天才顔負け

の頭脳を持ってしまったんです。っと、ミサカはミサカは言っていたり」

VIVI「…そのイレギュラーな物があるから仲間外れにされて追い出されたと？」

ミサカ「まあそんなところです。っと、ミサカはミサカは語ってみたい」

あとね、っとミサカは続ける。

ミサカ「一度捨てた私を拾いに来る輩もいますけど、あれは私の技術力を利用してくる奴らばかりです。っと、ミサカはミサカは怒り混ざったり」

VIVI「…確かに、俺を直したお前の技術力も納得がいくな」

VIVI「ミサカの技術力を納得した。」

ミサカ「なんですか？私にねだてもあげませんよ？っと、ミサカはミサカは否定してみたり」

VIVI「ねだる気はねえよ。奪う気はあるがな」

VIVIは笑う。

ミサカ「あなたたちよっとおかしな人です。っと、ミサカはミサカは皮肉に言ってみたり」

VIVI「おかしいのはお前も同じだろう？」

ミサカ「あちゃ〜、こりゃ一本取られた〜。っと、ミサカはミサカはシヨックを受けてみたり〜」

???「お前おふざけにはほどほどにしたらどうだ？」

扉から白髪に課のに赤い刺青のある男が現れた。

簡単にいえば『hackシリーズ』のハセヲを大人っぽくした感じだ。

VIVIE「誰だお前は？」

ミサカ「あ、彼はエルダーって言うんだよ。っと、ミサカはミサカは紹介してみたり」

エルダー「俺はエルダー・ザイン。君と同じく拾われたものだ」

VIVIE「フンッ、VIVIEだ」

エルダーとVIVIEはとりあえず握手した。

VIVIE「おいミサカ。まさかこいつもわけありものか？」

ミサカ「そうですね。っと、ミサカはミサカは答えてみたり」

ミサカはエルダーのことを説明する。

ミサカ「まず第一に、この所頻繁に起こっている『管理局員傷害事件』と言うのを知っていますか？っと、ミサカはミサカはあなたに聞いてみたり」

VIVIE「ああ、管理局の連中を大量虐殺した奴がいると来たが…まさか」

ミサカ「そ、その正体は彼、エルダーくんなんだよ。っと、ミサカはミサカはエルダーくんに指差したり」

ミサカはエルダーを指差す。

エルダー「その後は俺が話す。俺はそれが起こる前、ある研究の実験にされたんだ。それはかつてとある研究者によって立ち上がった『プロジェクトMTW』、そして俺はその唯一の成功体なんだ」

マルチ・タスク・ウィザード

真剣な顔で語るエルダー。

エルダー「そのおかげか老いることも死ぬこともできない、言わば不老不死だ。まあ病気は出来るけど」

VIVVI「で？管理局の傷害はなにを求めてたんだ？」

VIVVIが聞くとエルダーは答えた。

エルダー「決まってる。俺は強い奴と戦いたいんだ」

VIVVI「・・・戦闘狂か」

VIVVIはそう言うが、内心嬉しそうだ。

エルダー「話を戻すよ。その後彷徨ってるうちに彼女にミサカ拾われちゃつてな。今も一緒にいるだけだ」

ミサカ「いや、そんなに褒めても何も出ないですよ。っと、ミサカはミサカは照れてみたり」

エルダー「...まあこのように本当に大丈夫か？って不安になりがちだが」

VIVVI「・・・」

VIVVIは不安になった。

するとVIVVIは何かを思い出していった。

VIVVI「そうだ。お前魔道機人である俺を直しただろ？」

ミサカ「改造の要求ですか？っと、ミサカはミサカは尋ねてみたり」

VIVVI「強化の要求だ！俺も強い奴と戦う。あいつを倒すために。そして世界を手にするために」

VIVVIは拳を握る。

脳裏に浮かぶのは銀髪の男。
その男とリベンジを果たすために。

ミサカ「世界を手になんか？あなたも面白い計画があるね。っと、ミサカはミサカは面白半分と言ってみたり」

VIVI「も？誰かいるのか？」

ミサカ「もちろん私だよ？っと、ミサカはミサカは答えてみたり」

VIVIは若干疑ったが、一応聞いてみる。

VIVI「なぜ世界を手にするの？」

ミサカ「私今の世界つてのがあんまりしっくりこないの。だから私じゃなくて私達が世界を手に入れていっばいやるうと思って。っと、ミサカはミサカは宣言してみたり」

エルダー「俺はその時強い奴がいるならどっちでもいい」

ミサカとエルダーの答えにVIVIは笑う。

VIVI「ククク・・・いろいろと似た者同士だな」

ミサカ「あなたが言わないの。っと、ミサカはミサカは怒ってみたり」

エルダー「確かに似た者同士だな俺らは」

3人はお互い笑い合う。

どがーん！！

爆発音と地響きが同時に発生した。

ミサカは慌ててモニターを見ると、複数の管理局員がいた。

ミサカ「あちゃ〜、いつまでも隠し通せないと思ってましたが、早かったですねえ〜。っと、ミサカはミサカは感心したり」

VIVE「いい機会だ。邪魔された腹いせとして皆殺しにしてやる」
エルダー「俺も参加しよう」

ミサカ「私だつて戦闘機人です。戦うことは出来ますよ。っと、ミサカはミサカは自慢したり」

VIVE、エルダー、ミサカは武器を持ってその場を後にした。

局員隊長「ここで間違いないのか？」

局員「はい、ドクターミサカ氏の隠れ家と思われます」

局員たちはミサカの隠れ家の入り口前で話し合っている。

局員隊長「よし、では作戦開始だ」

隊長が命令し、部下達は中に入ろうとした。
すると、

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

局員「ぎゃあああああああああああああああああ！……！」

局員隊長「な、なんだ!？」

黄色いエネルギー弾が局員たちに襲った。

そして中から魔装具を身に纏うエルダーと、背中に沢山武器らしき

ものを持つてるミサカと、右肩にバズーカ砲を持ったVIVIができた。

IBGMオープニングステージ(VAVA編)byロックマンX
(Maverick Hunter X OST, T04: Opening Stage Vile (Central Highway))

VIVI「わざわざご苦労なこつたな。だがここがお前らの墓場だ」
エルダー「さて、強い奴はいるかな？」

局員隊長「な、何者だ貴様ら！」

隊長が叫ぶと、ミサカが答えた。

ミサカ「それは私の部下ですよ。っと、ミサカはミサカは答えたり」

VIVI・エルダー「誰がだ！」

VIVIとエルダーがタイミングよく突っ込む。

局員隊長「ドクターミサカ！やはりこの場所で隠れていたか！ここで投降しろ！」

ミサカ「悪役はそう言われて投降する人はいません。っと、ミサカはミサカは正論を言ってみたり」

VIVI「ククク・・・確かにそうだな」

VIVIは笑う。

VIVI「そう言うわけだ。さっさと消えろ」

V I V I はバズーカを局員たちに向ける。

局員隊長「投降の色なしか。ならば強行手段！全部隊！ドクターミサカ含む3人を再起不能にし、捕らえよ！」

隊長の命令に、局員たちは一斉に襲い掛かるが、V I V I とエルダーがすぐに行動を起こし、局員たちをほとんど倒す。

V I V I 「その程度か？管理局は」

エルダー「弱くて話にならない」

局員隊長「く、くそ！行け！行け〜！！」

隊長はそう言って後退する。

V I V I 「逃げる気か？」

ミサカ「あの人を追いかけると面白いイベントがあるかも。っと、

ミサカはミサカは推測してみたり」

エルダー「そっちに強い奴いるかな？」

3人は局員隊長を追いかけた。

局員隊長「ハア・・・ハア・・・ここまでくれば・・・」

V I V I 「残念だったな。もう追いつかれたぞ？」

局員隊長「なに!?!」

後ろを振り返ると、V I V I達がいた。
もはや万事休す、そう思ったら、

「???」邪魔だよお前」

「局員隊長」なにぎゃあつ！」

声が聞こえて振りかえろうとしたら切られて絶滅した。

「???」一応どんな強い奴なのか見てみたらなかなかのカモがいる
じゃないか。このオルギ様と相手しろよ」

肩ぐらいあるツンツンな黒髪にカギ爪型のデバイスと言う珍しいデ
バイスを装備している局員がいた。

V I V I「ほう？他のザコ共よりも骨がありそうだな？」

「ミサカ」オルギは管理局で珍しいカギ爪型デバイス・スケアクロウ
を持つランクSSS級の超大物でミッドでは英雄と呼ばれるそうだ
よ。つと、ミサカはミサカは説明したり」

V I V I「英雄…か…」

「ミサカ」とは言っても表向きの話。裏では犯罪者だろうが容赦なく
殺す管理局裏組織の人だよ。つと、ミサカはミサカは真実を話した
り」

「オルギ」俺を調べたのか。さすがハズレ戦闘機人だな」

「オルギはミサカを評価する。」

「ミサカ」あなた方のような私を作りだした人に褒められる筋合いは
ありません。つと、ミサカはミサカは拒絶したり」

「オルギ」フッ本当なら貴様はなにもしなければいいものを」

「ミサカ」なにもしないのは私的にあまりいい感じがないのです。だ

から私は自ら革命を起こしたいって思ったの。っと、ミサカはミサカは胸を張ってみたり」

ミサカは胸を張って答える。

オルギ「小娘が。なら死ね」

オルギはカギ爪デバイス。スケアクロウを構えてミサカに切りかかる。

が、VIVIとエルダーに止められた。

オルギ「なんだ貴様ら！放せ！」

オルギは放そうとするが、振り切れない。

VIVI「悪いがそいつを殺させは死ねえよ」

エルダー「そうだ。そいつは命の恩人。それをテメエは」

VIVI・エルダー「勝手に殺そうとすんなあ！！」

オルギ「グバツ！！」

オルギは2人にぶん殴りに上空にぶっ飛ばされる。

VIVI「こいつはお土産だ。チャージシヨット！」

エルダー「スラッシュブレイド！！」

VIVIから大きなエネルギー弾を、エルダーから黒い魔力刃を出して、オルギに命中する。

オルギ「ぎゃああああああああああああああああああああ！！」

「！！！！」

オルギは2人の攻撃にあたり、絶命した。

VIVI「ふん、英雄と言いながら聞いてあきれ」

エルダー「そりゃ俺達が強すぎたからじゃない？」

VIVI「だな」

VIVIとエルダーは意気投合する。

VIVI（それにしても管理局か。戦闘機人、人造魔道士と言う違反研究をしていたのは知っていたが、実際に受けられた奴が近くにあったのは初めてだな）

VIVIはエルダーとミサカを見て思った。

ミサカ「さあ皆さん。次はどんな場所へ行こうかな？つと、ミサカはミサカはふざけてみたり」

VIVI「子供か！！」

エルダー「そしてふざけんな！！」

VIVIとエルダーはふざけるミサカに怒鳴る。

VIVI（まあどちらにしろ、いつか必ずお前を倒して見せるぞ！
白夜叉！）

VIVIは空に向かって銀髪の男・坂田銀時にリベンジを果たすことを誓った。

そしてVIVI達はこの場を後にした。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

ミサカ「皆さんこんにちは。アシストするのはミサカと、」

VIVI「復活した魔道機人・VIVIと」

エルダー「『月光閃火』からのオリジナルキャラ・エルダー・ザインがアシストしよう」

銀八「うわく、悪役3人組だな」

エルダー「俺はいきなり悪役扱いかよ」

ミサカ「プロフィールには傷害事件の元凶って書いてあったから悪着でしょ？つと、ミサカはミサカは正論を言ってみたり」

エルダー「・・・否定しない」

銀八「と、とりあえず、話を進めるか。ペンネーム『sibugaki』さんからの質問だ。『トーマ

』はじめまして、今回は『真マジンガー 衝撃！Force編』の主人公のトーマ・アヴェニールが質問します」

質問、前回の質問でウーノは無理と言いましたが・・・もしかしてウーノはジェイル博士にゾッコラブなんですか？

以上です』ああ、ウーノはスカリエッティ一筋だということだ。んじゃ『sibugaki』さん。廊下に立ってなさい」

ミサカ「次はペンネーム『鳴神ソラ』さんからの質問だよ。つと、ミサカはミサカは質問の内容を読んだり。『マリオ』あれじゃなかつたな」

フォックス「銀魂で起きたのじゃなく前回起きたあれか…」

ルイーダ「つてか兄さんの言った通りツッコミ所満載だ；」

スネーク「と言うかその2に続くと言いながら次回は別のなんだな；」

「
マリオ「つてか近藤の奴、ゴリラじゃないだろ…そりゃあゴリラになっただけどどこがゴリラなんだよ？それは失礼だろ？」

ルイージ「そんな訳で銀さんLOVEズに質問、質問『リリースちゃんの魔法で銀さんが子供になったらどうしますか?』」

スネーク「リリースに質問『もし他人を動物にする魔法を覚えたらどうする?』」

フォックス「今回負けたメンバーに質問『もし自分が勝ったらどう言う称号を付けてた?』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます

ソニック「どうなる事やら…!」ズバリお答えします。っと、ミサカはミサカは皆さんに質問を言わせてみたり」

銀時ラバース「保護して私の息子に!!!」

真王「やっぱりか。次」

リリース「特徴に合った動物に変えるよ」

真王「次は負け組、出番だ」

ユイ「駄目なお子ちゃまですね」

ノーヴェ「ド馬鹿野郎だ。ってやっぱり変わってなくね?」

土方「ノミ以下だ(黒笑)」

近藤「俺はコンパ殿に『お妙さん2号』だ!」

エリザベス『アイエフさんに『ツッコミだけの存在』と』

桂「俺はサチコに『歩く恐怖人』をつけた」

はやて「リリスに『おっぱい揉み娘』や」

真王「正確にははやてがリリスに揉むということかよ。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってな」

エルダー「次は俺を出してくれた『月光閃火』からだ。『よお…月光閃火だ。』

ランキングバトルか…もし俺らに称号が付くなら…。

月光閃火（俺）：何でもアリのブサイケメン（え…（汗）

月臣輝刃：妹愛でな人狼闘士ワーウルフ・ファイター

って感じだろうな…。

輝刃「俺はともかく、閃火のは何故？」

だって俺の場合、それしか浮かばんし…。

輝刃「確かに…妙な所でカツコイイ所があるからな…。とりあえず…まずは俺から質問だ。」

1. 作者に質問…銀魂側で死んだキャラが、リリカルなのは側で生きている…なんて展開はあるか？

確かにねえ…特に“ミツバさん”とか“鴨太郎（漢字合ってるかな？（汗））”はそうであって欲しいかな。次は俺からだ。

2・イリス達『魔道機人ガールズ』に質問だ。自分達をアニメやゲーム等のキャラに当て嵌めると、誰になるんだ？

輝刃「なるほど…確かに面白そうな質問だな…。」『どうなんだ作者』

真王「ありません。そんな企画ありません」

イリス「わたしはFateのセイバーです」

ファルコリア「私はインフィニットストラトスのラウラと言うものだ」

ランドル「ワシは東方の勇儀じゃの」

バーニン「あたしは東方の妹紅だ」

アイシー「東方のチルノかな？」

メーティア「私はデイスガイアのサファイアと言う者です」

シャチール「私は…瀬戸の花嫁のシャーク藤代？」

エルダー「…『月光閃火』、俺を作ってくれてありがとな」

VIVI「次はペンネーム『黒神』だ。『質問します。』

ネプテューヌへ

貴女に弱点はないですか？

マヨラーへ

僕の小説で貴方はまともに出番が無いのに、近藤と山崎は出番あります。そんな2人にどう思っていますか？（黒笑）

ネプテューヌ「ないよ？私は敵なしだからね」

真王「あ、後ろにピーマンの幽霊が」

ネプテューヌ「え？何処何処！？ピーマン嫌い！」

VIVI「…弱点じゃなくて嫌いな物だろこれ」

土方「くっそ、山崎の奴俺より目立ちやがって！」

土方は怒って無敵スターとアイアンシールド（物体Xを防げる効果があるらしい）を持って『黒神』のこの山崎とついでに黒神をばこりに行った。

真王「あらら、『黒神』さん。土方に気を付けてください」

ミサカ「ラストオ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問だよ。っと、ミサカはミサカは質問の内容を読んだり。『黒龍』いや、面白いですわ」

銀時「いや、俺もマヨ方に変は称号が付いて嬉しいぜ」

ソラ「コンパ強いな」

銀時「破壊神って言うのも領けるな」

黒龍「さすがにサチコとリリスペアは最強ですね」

ソラ「質問いくか」

黒龍「チンカス（土方）に質問です。

マヨネーズとタバコを止めたらどうですか？

出番増えると思いますよ」

銀時「近藤（駄目ゴリラ）に質問。

お前はお妙諦めて新しい恋を目指したらどうだ？」

ソラ「リリスに質問だ。こっちにいる、お前と同じ名前のリリスを
どう思う？」

黒龍「じゃあこの辺で」『』

真王「土方はいないので私が代りに。多分彼に言っても無駄でしょう」

近藤「俺はゴリラじゃない！そして俺はお妙さん以外などいらん！」

真王「筋金入りだな。リリス」

リリス「わあ、ちっちゃい」

真王「本人が気にしてる事平気で言ったなこの天然。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

ミサカ「では次回のアシストはネプテューヌさんですよ。っと、ミサカはミサカはアシスタントを予告したり」

VIVI「あいつか、俺は好きになれん」

エルダー「俺的には面白い奴だな」

真王「ではまた次回で」

裏第一訓：似た者同士は一緒に行きやすい（後書き）

真王「見て分かるかと思いますがあのやり取りは」とある魔術の禁_イ
書目録ンデックスの一方通行と打ち止めな感じでしたね。さあ次回はお待ち
かねの『ネプ銀編』の突入だ！」

ネプテューヌ「次回『吸引力が変わらないどころか強すぎ』テイク
オフ！」

（予告）

ナレーション「謎の商人が何かをし始めるようです」

第四十九訓：吸引力が変わらないどころか強すぎ（前書き）

真王「ついに『ネプ銀編』の始まりだ！」

ネプテューヌ「『リリカル銀魂』始まるよ！」

第四十九訓：吸引力が変わらないどころか強すぎ

ミッドチルダの商店街。

そこからネプテューヌが買い物帰りをしていた。

ネプテューヌ「うん、いっぱい買ったかな？」

手にはたくさんのお買い物したものがたくさんある。

帰ろうかと思い、六課へ行こうとしたら、

???「おめでとございま〜す!!!」

ネプテューヌ「え？」

いきなり大きな声が聞こえた。

ネプテューヌは声のした方へ向くと、フードをかぶってて見えないが、特徴的なグルグル眼鏡が見える商人みたいな人だ。

???「大あたりでございま〜す!!!」

何か当たったという謎の商人。

しかし周りにはだれもおらず、いると言えばネプテューヌだけである。

商人? 「お客さん今日はラッキーですね!それを記念してこれを差し上げますよ!」

そう言って取り出したのは黄色く紫の斑点のあるキノコだった。

ネプテューヌ「なんで?私買ってないけど…」

機動六課

そこで銀時達はいつものようにだらけていた。
そこでコンパが来た。

コンパ「銀さん！このところ血糖値が日に日に上がってるです！」
銀時「仕方ねえだろ。甘いもんたらねえとイライラするから」

銀時はめんどくさそうにコンパの言葉をスルーする。

コンパ「駄目です！いつまでも糖分取り過ぎると体に悪いですよ！
それどころかたまり過ぎると血管が詰まって死んじゃうですよ！例
えば膀胱が破裂するとか…」
銀時「え？たまり過ぎると破裂すんの？うわ、なんかやべっ」

銀時は冷や汗を出す。

新八「そうですねコンパさん、銀さんに甘いもの摂取の制限を付け
ましょうか」

コンパ「それがいいです」
銀時「いいわけねえだろ」

コンパ「守らなかつたらリリスさん達から魔法の実験台にさせて…」
銀時「止めてくんない！？それ！」

銀時はコンパの一言に顔を青くする。

フェイト「うん、でも確かに銀時はとり過ぎはよくないよ」
なのは「そうだね、いざという時に症状が出たらもとの子もないよ
ね」

銀時「お前らまで…」

銀時は頭をかいた後言った。

銀時「あゝ分ったよ！しばらく取らない方がいいだろ！」

コンパ「それがいいです。あ、私ちよつと部屋の整理するです」

コンパはそう言って部屋へ行こうとしたら、

ヒュン！

コンパが通路に吸い込まれるように消えた。

銀時「あれ？消えた？」

銀時達はそう思っていると、ネプテューヌが現れた。

しかし何やら足取りが悪く顔が俯いている。

そしてネプテューヌが顔をあげると、

ネプテューヌ「んがあああああああああ！！！！」

某ピンクの悪魔兼ブラックホールの如く吸い込み始めた。

銀時・新八「うおおおおおおおおおおお！！！！」

なのは・フェイト「きゃあああああああああああああ
あああ！！！！」

突然の吸い込みに驚きながら身近にある物をすっかりつかまる銀時達。

なのは「にやあああああ！！！なんなのこれエエエエ！！！？」

フェイト「一体何があったのおお！？」

銀時「吸い込む量超半端ねえ！！一家に一台じゃ足りないくらいだ！！！」

必死にしがみつくと銀時達。
すると、

神楽「ぎゃあああああああああああ！！！」

桂「吸い込まれるウウウ！！！」

ブラン「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アイエフ「ななな何事オオオオオオ！！？」

スバル「銀さああああああああん！！！」

ティアナ「兄さアアアアアアん！！！」

エリザベス「何事だアアアアアア！！？」

桂達が吸い込みに巻き込まれたようだ。

そして銀時にしがみつく。

銀時「何やってんだお前ら！！何で俺に掴むんだよ！あとツラ！！

テメエは放せ！！」

桂「ツラじゃない桂だ！！！」

猿飛「銀さああああああああん！！抱きつくなら私に……」

銀時・なのは・フェイト・シグナム・リインフォース

「テメエは駄目だ！！！」

ドガアッ!!

猿飛「あ~~~~~れ~~~~~!!」

猿飛は銀時達に蹴られてネプテューヌに吸い込まれた。
そしてネプテューヌの吸い込む力が大きくなっていく。

銀時「あ〜!!、まるでブラックホールが近くにあるみたいだ!」
フェイト「こんな身近にブラックホールがあるんだね!!」
なのは「それに吸い込まれたら生きて帰れないよね!私達!」
新八「銀さん!!フェイトさん!なのはちゃん!気をしっかり持つて!!」

涙交じりに諦めかける銀時達。
しかし銀時の掴んでいる手が少しずつ離れていく。

銀時「あ~~~~!!駄目~~~~!俺もう限界だ~~~~!!」
桂「諦めるな銀時!諦めたらそこで終わりだ!」
神楽「天パ!どうせ死ぬならお前も道連れじゃあ!」
スバル「死ぬウウウウウウ!!死んじゃうウウウウウウウウウウウウウ!!」

銀時は諦めずに必死に手に力を込めるが、

ポロツ

全員「あっ」

離れた。(笑)

ああああああああ「ドゴツ!!」「ぶへっ!!」

吸い込まれた銀時はどこかへ落ちた。

銀時「あい…つつつ…ここどこだ？」

銀時は痛みながらも起き上がる。

周りを見渡すと、壁(?)も地面(?)も赤く、板やらお菓子やらテーブルやらなどいろんなものがある。それぞれ吸い込まれたものらしい。

銀時「おゝゝい!!誰かいないか!!」

銀時は大声で叫ぶ。

返事は…ない。

銀時「…探すしかねえか」

銀時は搜索を開始した。

5分くらい搜索していると、

イストワール「ちょっと放してください!!」

イストワールがスライム状の何かに捕まっていた。

銀時「イストワールか!待ってる!!」

銀時は駆け寄ってスライム見たいなのを引っぺがす。
スライム見たいなのは逃げだした。

イストワール「ありがとうございます銀さん」

銀時「ああ、無事でよかつたな」

銀時は安心する。

銀時「ところでここは何処なの？」

イストワール「ここはネプテューヌさんの体の中です」

イストワールが答える。

銀時はあまり信じられないが、ネプテューヌに吸い込まれたことを
思い出した。

銀時「あゝ、吸い込まれたらこんなとにくんわな」

イストワール「安心してはいられません。さっきの私のように襲わ
れている人がいるかもしれません」

銀時「そうだな。急ごうぜ」

銀時はイストワールと奥へ進んだ。

ネプテューヌの体内・ガラクタスペース・中層地帯

銀時とイストワールが奥へ進んでいると、神楽とさっきのスライム
みたいなのに頭から捕まっている新八を見つけた。

神楽「銀ちゃん!!」

銀時「無事だったか神楽。それと新八、なに遊んでんだ?」

神楽「そうアルよ。変な奴と遊んでんじゃないアル」

イストワール「・・・あなた達ふざけて言ってますか?」

イストワールは眉間にしわ寄せて言う。

銀時「わーったよ。よいしょ」

銀時は新八をひっぱりだす。

引っ張り出された新八は気を失っているが、すぐに目を覚ます。

新八「ぎ、銀さん!」

銀時「よう新八」

神楽「オラ駄目ガネ、さつさと立つヨロシ」

新八「助けた人に対して何その態度!! 神楽ちゃん助けてないけどね!」

新八は神楽に怒鳴る。

フェイト「銀時!」

なのは「銀さん!」

奥からフェイト、なのは、スバル、ティアナ、コンパ、アイエフ、ノワール、ブラン、ベールが現れる。

新八「なのはちゃん!」

銀時「無事かお前ら!」

フェイト「私達は無事だよ」

子(？)を付けたスラサイボー・トゲスラサイボーである。通常の
スラサイボーと違って青色をしている。

銀時「テメエ何しやがるんだこのやる！！おかけでケツ真っ二つに
割れちゃったじゃねえか！！」

新八「銀さん元から割れてます」

トゲスラサイボーに向かって怒る銀時に新八は冷静にツッコム。

ノワール「お相手さんも馬鹿じゃないみたいよ」

ノワールが言うと、あたりにスラサイボーの大群がいつぱいいた。
その数は1000体以上いる。

神楽「いつぱい気持ち悪いのがいるネ」

なのは「これは数で押す作戦みたいだね」

ブラン「面倒な…」

ティアナ「考えたねあのモンスターたちは」

銀時「んなこと言ってるねえでさっさと始めろ！」

銀時達はスラサイボー達の掃討を開始した。

そして数十分後…

そこっ、手抜きだと言わない。

銀時「よし、とつととけーるぞ」

銀時達に周りには倒されたスラサイボー達がいっぱいた。
そして銀時達はガラクタスペースから出た。

新八「やつと出られましたね」

なのは「それじゃあみんなのところに帰ろうか」

銀時「みんな？どういうこった？」

フェイト「来てればわかるよ」

ネプテューヌの対内・シヨップ広場

理樹「あ、なのはさん」

恭介「生きてたか銀時」

ゆり「神楽も新八も無事ね」

銀時達はなのは達に案内されると、リトルバスターズと戦線メンバ
ーズが出迎えた。

その他にも吸い込まれたと思われるミッドチルダの住人がいる。

銀時「お前ら何やってんだ？」

理樹「僕等はまきこまれた人たちと協力して吸い込んだアイテムを集めてるんです」

ゆり「出かけるときは腕の立つ用心棒を連れて探索するからね」

恭介「今集まったアイテムは食器、料理用具、食糧、材木、デバイス、そしていろいろある」

新八「そうですね、食料があれば何とかしのげます」

新八は安心する。

銀時「ところでツラはどうした？」

桂「ツラじゃない桂だ」

銀時「…って何だったのか」

銀時の後ろに桂、エリザベス、はやて、月詠、九兵衛、シグナム、ウィータ、リンフォース、リンがいた。

シヤマルとザフィーラとエリオとキャロはけが人の手当てをしている。

なのは「はやてちゃん、どうだった？」

はやて「いろいろと吸い込まれたもんがいっぱいあったで」

はやてはエリザベスが引いている荷馬車を指差す。

中には様々なアイテムがある。

銀時「こんなに吸い込みやがったのか？」

はやて「それにいろいろとこの肉の壁や地面に刺激を与えたんやけどびくともしなかったで」

イストワール「それは完全に気を失っているからでしょう。弱い刺激では反応がありません」

桂「ではどうするのだ？」

イストワールが考え込むと、真人とクドが走ってきた。

真人「おゝい、おもしれえもんが見つけたぞ〜」

クド「まさにあんのうんなものなのですよ〜」

銀時「面白いもの？なんだそれ」

真人「来てみれば分かるぜ」

銀時達は真人に案内された。

ネプテューヌの体内・オドロキボーン

真人とクドの案内にやってきたのは固い灰色の地面と壁がある場所だった。

なのは「ココ硬いね」

はやて「これは骨やな」

銀時「んで、面白い物ってどれなんだ？」

真人「まあ待ってっ。っと着いた、あれだ」

真人が指差した。そこにはビクビク動いている白っぽい物体が骨から突き出ていた。

銀時「うわなんだこれ気持ち悪」

真人「こいつは面白いだろ？」

なのは「それはともかくこれはネプちゃんの何処の部分のだろっ」

イストワール「ネプテューヌさん！聞こえますか！」

イストワール（ネプテューヌさん！聞こえますか！）

ネプテューヌ「え？この声イースン？なんで私のお腹に？」

イストワール（それはネプテューヌさんが私達を吸い込んだからです！）

ネプテューヌ「ええ！？吸い込んだあ！？ないないないありえないからそれ」

ネプテューヌは否定する。

イストワール（ネプテューヌさんは気絶する前何があっただんですか！）

ネプテューヌ「え？私？確か変なローブを着た商人がいきなり当たりだ！とか言ってキノコを食べさせられたけど…その先覚えてない」

ネプテューヌは今まで起こったことをいった。

イストワール「どうやらネプテューヌさんは誰かに騙されて当時の記憶がないようです」

イストワールは銀時達に教える。

イストワール（ではネプテューヌさん！今いるところは何処なのか分かりますか？）

ネプテューヌ「どこ？どこは…」

ネプテューヌはあたりを見渡す。
ごつごつした壁に地面があり、少し薄暗い場所。

ネプテューヌ「洞窟だね」

イストワール（洞窟ですか！？）

イストワールも銀時達も驚く。

銀時（おいネプテューヌ！）

ネプテューヌ「銀さん！！？なんで銀さんがお腹の中から声が聞こえるの！？」

銀時（お前に巻き込まれたんだよ！それと、さっさと洞窟から出た方がいいんじゃないか？）

ネプテューヌ「あ、それもそうだね。さて、さっさと出るかな」

ネプテューヌは銀時の命令に従い、外に出ようとする。

しかしネプテューヌはまだ分かってなかった。

ここは邪悪なるものが集まる魔の世界、魔界だと。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生ー!!」

ネプテューヌ「こんにちはわ。今回は私がアシストするよ」

銀八「いくぞ。ペンネーム『月光閃火』さんだ。『よお…月光閃火だ。』

しかし…ミサカか…。何か元ネタが想像出来るな…しかも可愛いし…。

輝刃「というか…まんまだな…。とりあえず、質問行くぞ？まずは俺からだ。」

1. バツチリ復活を遂げたV E V Iに質問だ。何か振る舞いがホントに『とあるシリーズ』の『アクセラレータ一方通行』に近づいているが…その所どう思っているんだ？

確かに…特にツツコミの所が…(汗)。次は俺からだ。

2. 作者に質問だ。ミサカ達のグループ、メンバー増員とかあったりする？

輝刃「ふむ…確かに、さすがにあの人数でそのまま…という事は無いだろうな…。」

つていうか…やり取りがますます『一方通行』と『打ち止め（ラスト・オーダー）』のやり取りに近づきそうだな…（汗）。『ズバリ彼がお答えしましょう』

モニターが現れてVIVIが映った。

VIVI「あいつと同じ奇遇になるのは気に喰わん！」

真王「ようは苦労人になるのは嫌だということだ。ミサカ達のメンバーは考えていますので。では『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

ネプテューヌ「次はペンネーム『黒龍』さんからの質問だよ。『黒龍』悪役がまた増えた」

銀時「いいんじゃないの。良い役多いんだから、悪役増やさないと他の奴に戦闘での出番こないだろ」

ソラ「それにしても、そうとう強くなってるな」

銀時「ああ、それに管理局の英雄とか言う奴が秒殺だもんな」

黒龍「高杉と手を組んだらかなり厄介ですね」

銀時「そんじゃま、質問いくか。俺から真王に質問。

真王はもう最終決戦とか最終回あたりの話は考えてるか？」

ソラ「俺から質問だ。ツラは魔導師化する予定はあるか？」

黒龍「最後に俺から質問です。人気投票はやらないんですか？」

ソラ「それと、俺からそつちの銀時達に親子丼とカツ丼贈っておくぞ。ちなみに俺が作ったやつだ」

真王「はい、最終回考えてますよ。期待してください。あと桂の魔道士化と人気投票はやりません。あしからず」

銀八「・・・『黒龍』さん。廊下に立つてなさい。次はペンネーム『鳴神ソラ』さんからだ。『マリオ』ああ・・・英雄って呼ばれた奴は当てはまるな・・・なんだってそう言う称号は一部を除けば大量殺人者に付くもんだからな・・・(苦笑)」

ルイーダ「苦笑して言う事じゃないと思うんだけど・・・」

と言うか・・・思いつきりラストオーダーだなおい；

スネーク「確かに・・・しっかし・・・ポケ1人・ツッコミ2人な悪役トリオだな・・・」

ロケット団のトリオみたいだよな

リュカ「確かに女1人で男2人だけどさ・・・」

ネス「それにしても・・・どうなるんだろうね・・・」

マリオ「さあな・・・」

ルイーダ「今回出たミサカさんに質問『2人以外に善悪関係なく気が合いそうな人は誰？複数で良いよ』」

フォックス「今回出た3人に質問『自分達的に最後の切り札は何?』」

ネス「リリスに質問『動物にする魔法で誰がどんな動物になると思う?』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます。『ズバリ、彼女らが答えましょう』

またモニターが出てミサカ達が映る。

ミサカ「私は基本的に面白そうな人とかがいいなと思います。っと、ミサカはミサカは好みを言ってみたり。例えば銀髪の男とか鬘みたいな人とか。それから最後の切り札は『ファイナルズウエポン』とって沢山の武器を乱射します。っと、ミサカはミサカは興奮してみたり!」

VIVI「こいつは…。俺ならサムスのように巨大砲を発射してやる。…だからと言って体が粉々になることはないぞ?」

エルダー「俺はそうだな。完全開放してソニックみたく無敵になることかな?」

真王「中々強そう感じたな。次リリス」

リリス「うん。銀時はよく寝てる事からナマケモノで神楽は強そうだからゴリラで新八はメガネザルで桂はカモノハシ(適当)でエリザベスはペンギンで月詠さんは蝙蝠でゴリラさんはゴリラであるマヨラーさんは目が怖いから豹で沖田さんはオオカミかな?」

真王「いろいろだな。では『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい。次のペンネームは『亀鳥虎龍』さんからです。『銀時』『万事屋奇譚幕』の坂田銀時だ！そつちのオレ聞いてくれ。こつちだとオレ主人公じゃねーんだよ！主人公は『とある魔術の禁書目録』の上条当麻で、ヒロインはインデックスで、ツツコミが阿良々木暦なんだよ！しかも、『真選組』以外に女隊士だけの『天草組』に妖怪だらけの『奴良組』まであって、その連中がメツチャ目立ってんだよ！因みに質問だが、オレと上条の主人公としての違いって何！？後『万事屋奇譚幕』読んでみる！オレの活躍がメツチャ少ねえぞ！！（泣）」「・・・削除されている作品に答えは出ません。ごめんなさい」

銀八「アレ消えたのか！？ちよつとおもしろかったのにな。と言うわけで『亀鳥虎龍』さん。申し訳ございません」

ネプテューヌ「最後はペンネーム『白騎士君』から初めての質問だよ。『作者』今日は僕からの質問。銀さん達へもしこつちに白騎士物語に出て来るギガースが現れたらどうする？質問はこれだけです」

レナード「ん？」

レナードは落ちてた紙を拾った。

P・S そつちにギガース7体送ったから頑張つてね

レナード「なにやってるんだあああああああ！！！！！！！！！！
！！あの馬鹿作者は！！！！」

レナード「俺からのアドバイスだ、ギガースは異界に棲む魔獣だ！それとやつらはそれぞれ武器を持っている後、体力や魔力を吸収す

るそれにやつらには闇の衝撃波があるそれに当たると体力が魔力が減少するそれとやつらの身長は約7メートルだ気をつけてくれ」
ギガースってあれのこと？」

ネプテューヌは後ろで丸焦げにされた7体のギガースを指差す。

真王「そういえば『黒龍』の件で怒り爆発してたな。大切な家族を傷つけた(ミーニヤの自業自得なのに)ことに、『白騎士君』さん。初めての質問ありがとう」

ネプテューヌ「次回のアシスタントは秘密だよ」

真王「ではアシスタントが誰なのかヒントをあげます。かつて暴君と呼ばれた吸血鬼です」

ネプテューヌ「答えを知りたいときはディスガ〇アを調べてね」

真王「ではまた会いましょう」

第四十九訓：吸引力が変わらないどころか強すぎ（後書き）

ネプテューヌ「突如現れた謎の商人はネプテューヌに奇妙なキノコを食わせてあるうことか銀時達を吸い込んでしまつてさあ大変！」

銀時「いきなり過ぎる展開だなおい！」

ミーニヤ「てか今回あたしら出てないニヤ」

ネプテューヌ「しかもその商人はネプテューヌの大ファンだといい、すべてはネプテューヌのためだと言つて銀時達を亡き者にしようと考えたのだ！」

ノワール「そりゃあのシグマの戦いでネプテューヌは有名になつたからね」

新八「なに冷静に解説してんの！？僕ら死人扱いされてるし！」

ネプテューヌ「そして、ネプテューヌはお腹の中の銀時達と共に世界中の食べ物を食べつくすために旅立つたのだ！」

アルラ「カービィ顔負けの喰いっぷりなのね」

ネプテューヌ「次回『暴食少女ネプテューヌ』第一話、『スイーツは別腹の元』、甘いお菓子は女の子の醍醐味だ！」

神楽「私は酢昆布で十分アル」

新八「なに張り合つてんの神楽ちゃん！！」

なのは「でも女の子には甘いものが好きだもんね」

銀八「おれも好きだ」

ミーニヤ「てかどんどんこれがレギュラーになってニヤいか？」

????「ところで俺様達の出番はまだか？」

真王「まだです」

????「そうか」

真王「本当の次回は『懐かしい奴は碌でなしが多い』です」

第五十訓：懐かしい奴は碌でなしが多い（前書き）

真王「今回で五十訓を達しました」

ネプテューヌ「長いような短いような・・・」

銀時「なんにせよこんなにも進んだからなあ」

真王「これも皆さん読者のおかげです。では『リリカル銀魂』」

ネプテューヌ・銀時「始まるよ（ぜ）」

第五十訓：懐かしい奴は碌でなしが多い

前回のあらすじ、

ネプテューヌは謎の商人にキノコを貰い、食べたら意識を失って銀時達を吸い込んでしまった。

そして現在洞窟の中で捨てられたようだ。

ネプテューヌ「全く、こんな薄気味悪いところに捨てるだなんてひどい奴だね」

エックスセイバー 酷い以前に鬼畜ですな

相棒のエックスセイバーも同意する。

ネプテューヌ「ま、それはともかく出るよ」

ネプテューヌは外へ出た。

そして周りにはごつごつした岩肌が目に見える。

ネプテューヌ「……………」

エックスセイバー マスター？どうしました？

ネプテューヌ「なんでもないよ（この場所って確か……）」

ネプテューヌは何かを思い出そうとすると、遠くに何かが飛んできた。

IBGMゲラコビッツのテーマbyマリオ&ルイージRPG3
(Mario & amp; Luigi Bowser's In

????「おやおや、もう目覚めたのか?」

ネプテューヌ「あ!貴方はさつき私にキノコをあげた奴!」

ネプテューヌはグルグル眼鏡を見てさつきの商人だと気付く。

????「フフフ、その通り。あのキノコは『バキュームキノコ』、

何でもかんでも吸い込んだじゃうキノコだよ」

ネプテューヌ「何のためにこんなことを!」

ネプテューヌは言うど男・ゲラビッツは答えた。

ゲラビッツ「私の目的は、ミッドチルダを征服すること!」

ネプテューヌ「!」

ネプテューヌは驚く。

一方中の銀時達は、

銀時「ようは世界征服か?地味だな」

神楽「ああいうやつはよくダメなやつね」

新八「ああいう人に限って最終的に落ちちやうんですね」

フェイト「そ、それっていいのかなあ?」

3人の毒舌に苦笑いするフェイト。

ネプテューヌの中なため、ゲラビッツには聞こえてません。

ネプテューヌ「ミッドを征服!?!そんなこと許されないよ!」

ゲラビッツ「なんでも言う方がいい。と言いたいところだけど起きる時間が早い。だからすぐに眠らせてやる。メタ布斯！来い！」

ゲラビッツが叫ぶと、メタボリックな体にイノシシのような生き物が立ち塞がった。

メタ布斯「フガ〜！〜！イイカ！ヨクキケ！ミッドチルダハゲラビッツサマモノ！オマエ、イラナイ！。オマエ、ココデオサレル！」

ネプテューヌ「なにがなんだかわかんないけど、邪魔するなら容赦はしない……」

ネプテューヌはふらふらと揺れる。

ゲラビッツ「お〜、効いてきた効いてきた」

ネプテューヌ「うう……気持ち悪いし頭だるいしうまく動けない……」

ゲラビッツ「実はキノコ食べる際に時間制の毒を入れ込んだのさ。毒に苦しんでメタ布斯に倒されるんだな」

どうやらネプテューヌはバキュームキノコに含まれた毒に犯されたようだ。

銀時「あの野郎！」

なのは「なんてひどいことを！」

はやて「シヤマル！」

シヤマル「無理です！小さくなった私じゃ追いつけません！」

今や豆粒以下になったシヤマルじゃ毒は消えない。

メタ布斯「オマエココデキエロ……」

ヴァルバトーゼ「愚問だな。たまたま通りかかったプリニーがお前とネプテューヌを見かけたと聞いて飛んできたからな」

ヴァルバトーゼは誇らしげに言う。

ゲラビッツ「予定が全然違うよ！メタブス！戻って作戦をたてなおすよ！」

メタブス「ワカリマシタ！」

ゲラビッツとメタブスはどこかへ去った。

ヴァルバトーゼ「…さてと、改めて久しぶりだなネプテューヌ」
ネプテューヌ「うん！何年ぶりかなヴァルっち君」

まるで友達気分話し合うネプテューヌとヴァルバトーゼ。

銀時「あいつ誰だ？」

ネプテューヌの中にいる銀時達がヴァルバトーゼを見て首をかしげる。

ノワール「あの人はヴァルバトーゼ。まあネプテューヌの友達かしら」

新八「友達ですか？」

ブラン「友達って言ってもあれ吸血鬼だけどね」

ノワール、ブラン、ベール以外全員

「きゅ、吸血鬼イイイイイイイイイイイ！?!?!?!」

3人以外の全員が驚く。

ベール「ええ、狼男に自称ラスボスの女の子に死神に天使までも友達ですよ私達」

ノワール、ブラン、ベール以外全員

「ま、マジですか!？」

またも驚く銀時達。

ネプテューヌ「ところでフェンリッチ達は元気？」

ヴァルバトーゼ「あいつらなら元気だ。挨拶しておけ」

ネプテューヌ「はい」

ネプテューヌはヴァルバトーゼについていった。

地獄

それは、罪を犯した人間達が魂となり、ペンギンのような姿をしたプリニーとなって教育させる場所。

厳しい指導を受けたプリニーは魔界、もしくは天界に出荷され、いっつもなく重労働を行うのだ。

ちなみにプリニーの労働時間は一日20時間で給料そこそこ、そし

て褒美はイワシー匹と言うらしい。
そしてその地獄を拠点として魔界中をとどろかせたある吸血鬼、それは暴君ヴァルバトーゼである。

彼は以前、魔界政腐（誤字にあらず）の墮落に怒りを感じ、政権奪取を行うのだが、その真実はある一人の男の策略だった。

断罪者ネモ

彼は生前人間界である軍人のエリートだったが、敵味方が彼を陥れられ、世界だけでなく、魔界天界を大きく揺るがした張本人である。しかし、ヴァルバトーゼ達の活躍により、その策略は崩され、ネモは罪を許され、現在どこかで罪を償い続けているだろう。

そして、地獄の主たるヴァルバトーゼと、その親友・ネプテューヌは地獄へ戻ってきた。

ネプテューヌ「なつかしく。前に来た頃が懐かしいな」
ヴァルバトーゼ「そうだろうか？そしてようこそ地獄へ」

ヴァルバトーゼが言うと、銀色の髪と尻尾の生えた青年が現れた。

ヴァルバトーゼ「フェンリツヒ」
ネプテューヌ「やつほ」。久しぶりだねフェンリツち」
フェンリツヒ「お帰りなさいませ、我が主。それとネプテューヌ、今すぐ地獄以上の苦しみを味わいたいかな？」

フェンリツヒはネプテューヌに毒な言葉で言う。

彼の名はフェンリツヒ。ヴァルバトーゼに使える人狼族の一人だ。

????「あ、ひっさしぶりじゃんネプテューヌ」

????「久しぶりデスネプテューヌさん！」

????「お？ネプテューヌ」

目のついた青い帽子をかぶった少女と背中に変な生物？がある少女と緑のフードにドクロが付いた少年がいた。

ネプテューヌ「フーカちゃん、デスコちゃん、エミちゃんも久しぶり〜」

エミーゼル「いや僕はエミーゼルだから」

少年エミーゼルは名前に突っ込む。

フーカ「それにしても何年ぶりかしら、ネプテューヌがここに訪れたの」

デスコ「え〜と、約40年だった気がするデス」

ヴァルバトーゼ「正確には43年だ」

ネプテューヌ「そうだね。この場所ホントに懐かしいよ」

ネプテューヌは周りを見て懐かしがる。

銀時「…あいつ来たことがあったのか？」

ノワール「ネプテューヌだけじゃなくて私達もよ」

神楽「マジでか！」

銀時達はネプテューヌを含めノワール達も来たことがあることに感心するが、新八は何か引つかかった。

新八「あれ？そう言えばあの人ネプテューヌちゃんと43年とか言ってますけど」

新八はヴァルバトーゼが言った43年と言つのが気になった。

ネプテューヌは明らかに子供であり、43年なら既に大人である。

ノワール「ああ、言ってなかったっけ？私達女神は年を取らないのよ」

ベール「言わば不老の存在ですわ」

ブラン「でも体は成長できないのは球に傷」

銀時「ええ！？マジかよ」

銀時達はノワール達の説明に驚いた。

フリーカ「ところでネプテューヌあなた一人？ノワール達はどうしたのよ」

いきなりフリーカがノワール達にことを聞きだした。

ネプテューヌはどうしようかと迷った後、そのことを言おうとした。

ネプテューヌ「じつは……………ゴフッ！」

ネプテューヌの口から血が出た。

ヴァルバトーゼ「！？どうした！」

ネプテューヌ「懐かしすぎて忘れてたけど私毒もらってた…」
ヴァルバトーゼ「毒だと!? フェンリツヒ! 衛生兵を呼べ!」
フェンリツヒ「ご安心を、手配済みです」

ヒーラー「応急処置ですか?」

救急箱を持った金髪ロングで僧侶のような服に両腕に手枷を付けて目は閉じているような人が来た。

ヒーラー「では、エスポワール」

ヒーラーは治癒魔法でネプテューヌの毒を直した。

ネプテューヌ「あゝ体が軽くなった。ありがとう」

ヒーラー「どういたしまして。あとお代ですが…」

ヴァルバトーゼ「それなら俺が代りに…」

ネプテューヌがお礼を言い、ヴァルバトーゼが代わりにお代を払おうとしたら、

フェンリツヒ「ヴァル様!! 私が代わりになります!!」

フェンリツヒが慌てて払った。

ヴァルバトーゼ「なんだフェンリツヒ、金なら俺が払ってもよかったのに」

フェンリツヒ「なにを言いますかヴァル様、ネプテューヌの代わりに払えばイワシが少し減りますよ?」

ヴァルバトーゼ「なにっ!? それは想像してなかった!」

ヴァルバトーゼはイワシと聞くとショックを受けた。

彼は吸血鬼なのにイワシが大好物なのである。
そして人間の血が嫌いなのだ。

???「ウフフ・・・相変わらずイワシがお好きなようですね、吸血鬼さん」

ネプテューヌ「あ、アルティナさん」

アルティナ「久しぶりですわね、ネプテューヌさん」

不思議なピンクの髪に背中に天使の羽が付いた女性・アルティナが現れた。

彼女は生前人間界の看護師をやっていたが、当時戦争が起きており、苦しい生活をしていたものの、彼女は決して屈しなかった。しかし、敵国の傭兵を助けた事にスパイ容疑をかけられ、味方であるはずの人間に殺されてしまい、天使となって蘇ったのだ。その時の傭兵は後に世界を滅ぼそうとした断罪者ネモである。

さらに追加だが、ヴァルバトーゼが人間に血を吸わないのは彼女の約束のせいでもある。

その約束は、アルティナを怖がらせればアルティナだけの血を飲むと。

しかし結果アルティナは死んでしまい、永遠に血を吸うことは出来なかった。（天使として生きているけどな）

とはいっても彼はイワシで満足しているようだが。

アルティナ「ところでネプテューヌさんはおひとりですか？」

フリーカ「そうそう！ノワール達はどうしたの？」

アルティナはノワール達のことを言い、フリーカ達は思い出したかのように言う。

ネプテューヌ「あゝ、じつ「プ」リプリプリ!」?」

どっからか笑い声が遮り、謎の集団が現れた。

緑のペンギン? 「HEY! その紫野郎!」

緑色のペンギンみたいなのがネプテューヌを名指しした。

緑のペンギン? 「我らが主のために、お前を抹殺してやるぞ!」
その仲間達「してやるぞ!!」

緑のペンギン達は復唱するように言う。

ヴァルバトーゼ達は啞然とする。

フーカ「・・・なにあれ?」

デスコ「デスコ知らないデス」

エミーゼル「頭いかれてんのかあのプリニーは...」

3人はジト眼で見るが、ヴァルバトーゼは違った。

ヴァルバトーゼ「おい貴様ら!!! 全員揃ってなんだその言動は!!!
忘れたのか規則を!」

ヴァルバトーゼが緑のペンギン...と言うよりプリニー達を指差して
怒る。

ヴァルバトーゼ「『プリニーの心得その一! 語尾に必ず『ッス』を
付けること!』お前らはそれが欠けているぞ!」

プリニーの規則が違うことに怒るヴァルバトーゼ。
だがプリニー達は反省の様子がない。

プリニー？「規則」？そんなのどうしたってんだよ！あんたらとい
るより、俺達の主・ゲラビッツ様ならそんな規則破るかもだぜ？」
ネプテューヌ「ゲラビッツ！？」

ネプテューヌがゲラビッツと言う単語に驚く。

アルティナ「しっているのですか？」

ネプテューヌ「しってるもなにも、そいつは私に毒入りの特殊なキ
ノコ食わせてノワール達を私の体の中に入れた張本人だよ！」

ヴァルバトーゼ・フーカ・フェンリツヒ・デスク・エミール・ア
ルティナ

「なんだと（って）（ですって）！！？」

ヴァルバトーゼ達は驚いた。

????「フッフッフ」そしてそいつをこの魔界に捨てたのも我な
のさ」

ネプテューヌにとって聞き覚えのある声が聞こえた。ゲラビッツで
ある。

ネプテューヌ「ゲラビッツ！！」
ゲラビッツ「覚えててくれたみたいだな。私の計画を完全にするた
めに少し戦闘員がいるんでな」

それを聞いたネプテューヌは怒る。

ネプテューヌ「そんなことのためにこのプリニー達を洗脳したの！
!?」
ヴァルバトーゼ「なに!? 洗脳だと!?」
ゲラビッツ「その通りだ。でも魔界全土は時間がかかるからな。手
っ取り早く弱いプリニー族をはじめどんどん戦闘員を集め、そして
我が計画のスピードをあげるのだ！」

ゲラビッツは笑う。

ゲラビッツ「さあ行け！我が一員ゲラビッツプリニー、略してゲラ
ニー！」
ゲラニー「おーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！」

洗脳されたプリニー・ゲラニーはナイフを構えてネプテューヌ達に
襲いかかった。

・・・が、

ネプテューヌ「死ね」

ドガーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！！

ゲラニー「ぎゃあああああああああああ！ーーーー！」

ネプテューヌが爆弾を投げてゲラニー達も爆発してしまった。
プリニーは手荒に扱うと爆発する習性があるらしいのだ。

ゲラビッツ「いきなりかよ！・・・まあいいや。プリニーだからす
ぐにやられると思ったよ」
ヴァルバトーゼ「なに？まだ隠し玉が残っているのか？」

ゲラビッツ「いや違うよ。オイメタ布斯！」

ゲラビッツがメタ布斯を呼ぶ。

そして檻を担いだメタ布斯が現れた。

そしてその中には…

ミーニヤ「狭いニヤ〜〜！」

リリス「苦しいよ〜」

アルラ「息し辛い…」

ヴィヴィオ「パパ〜！ママ〜！」

サチコ「おさないで…潰れる…」

遼「狭い…」

雪「ココドコ〜！」

時子「誰がいる〜？」

ヴィヴィオとリリス達とサチコ達だった。

ネプテューヌ「ヴィヴィオ！？リリス！？サチコちゃん！？」

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん！？」

サチコ「お姉ちゃん！ヘルプ〜！」

リリス「母さん！」

ネプテューヌが叫び、ヴィヴィオ達も叫ぶ。

が、ヴァルバトーゼ達は別のところに引つ掛かった。

ヴァルバトーゼ「お前…いつの間にか親になったのか？」

デスコ「五児の子供デスか！やるデスね〜」

フェンリツヒ「3体見覚えのあるやつらなんだが…」

フリーカ「ネプテューヌ…あんた何時の間に…」

エミーゼル「なんか凄いのがないか？」

アルティナ「ネプテューヌさん…」

ネプテューヌにそれぞれのことを言うヴァルバトーゼ達。

ネプテューヌ「いや、それほどでも」

全員「褒めてねえよっ!!」

全員が突っ込んだ。

ゲラビッツ「ふははは、私の計画のためにそいつが全員吸い込んだと思っただらしぶとく残ってたやつらがいたからそこに置いておくぞ。とは言っても私の計画は確実に進んでいる。さらばだ」

ゲラビッツとメタブスはどっかへ去った。

エミーゼル「な、なにしに来たんだあいつは…」

ネプテューヌ「それはともかく！みんな大丈夫!？」

リリス「私達は大丈夫だから」

ミーニャ「この檻壊してニャ！狭くて苦しいニャ!!!!」

ネプテューヌ「わかった」

ネプテューヌはエックスセイバーで檻を壊した。

リリス達は自由になる。

リリス「イタタタ、体中いたい」

サチコ「足痺れた」

ヴィヴィオ「ありがとうネプ姉ちゃん」

解放されたリリスとサチコ達は体中を痛めている。
ヴィヴィオはお礼を言った。

ヴァルバトーゼ「あいつ…魔界のプリニーを手始めに部下を作り出し、なにを企むつもりだ」

フェンリツヒ「目的が分からない以上、先に手を出すのは得策ではありません。情報を集める必要がありますね」

フェンリツヒはそう言って洗脳されていない青いプリニーを呼びだして何か作戦を行った後、プリニー達はどっかへ行った。

ヴァルバトーゼ「ネプテューヌ、お前は…いや、聞くまでもないか」

ネプテューヌ「当然！あのグルグル眼鏡を探してふざけた顔を殴り飛ばさないと！」

リリス「あ！ちなみに私達も！」

ネプテューヌはグラビッツを倒すことに決心したようだ。ついでにリリス達も。

ヴァルバトーゼ「そうか。なら俺達も同行しよう」
ネプテューヌ「それって何のため？」

ネプテューヌが聞くと、ヴァルバトーゼはフツ、つと笑う。

ヴァルバトーゼ「無論、プリニー教育係として、あのふざけ眼鏡の根性を一から教育するためだ！」

ネプテューヌ「ヴァルっち君…。よし！みんな行くよ」

こうして、暴君ヴァルバトーゼと、女神ネプテューヌは革命者ゲラビッツを計画を阻止すべく立ち上がった。

しかし、後に彼らに待ち受けるのは想像を絶する困難が待ち受けて

いるなど彼らはしるよしもなかった。

銀時「お〜い、俺達がいることも忘れんなよ〜」

ネプテューヌは一時的に中にいる銀時達のことを忘れてたことと言
うまでもない。

〜おまけ〜

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!!」

ヴァルバトーゼ「今回のアシスタントは暴君と呼ばれたイワシ大好き吸血鬼・ヴァルバトーゼがお答えしよう」

銀八「イワシだと?んなもんイチゴ牛乳でいいだろ?」

ヴァルバトーゼ「バカモン！！牛乳の中のカルシウムでイライラがおさまるとでも思ったか！！イワシを食べて血流を良くしてからだ！！」

銀八「喰うかあんな生臭エもん！！まあいいや。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから始めっぞ。』上条

「『万事屋奇譚幕』の上条当麻です。 作者と銀さんがご迷惑をおかけしました。」

リクオ

「改めて質問です。 1.メンバーを仮面ライダーにするなら、どれが良い？ 2.メンバーを『ロックマンシリーズ』のキャラで例えるならだれですか？ 以上です。」

エール

「これからも連載頑張って！」『んじゃ1と2を順番に答えると』

銀時、デイゲイド、思いつかない

新八、思いつかない、スラッシュユマン

神楽、電王（キンタロス）、ガッツマン

桂、ディエンド、ストーム・イーグリード

エリザベス、カブト、アイシー・ペンギーゴ

月詠、キバ、シェードマン

銀八「とりあえず銀時組までです。『亀鳥虎龍』さん、廊下に立ってなさい」

ヴァルバトーゼ「次はペンネーム『月光閃火』からの質問だ。『よお』：月光閃火だ。」

しかし「謎の商人、一体アイツは何者なんだ？」

輝刃「全くだな」というか、まさかの魔界とは「デイス イアが入ってきたか。」

あゝ「デイス イアね。そこそ好きなゲームだな。あ、質問行くぜ？」

1. 作者に質問だ。何か色んな作品が入り交じりになっているけど、展開的に今後はどういう順番で放り込んでいくんだ？特に“IS”が気になる所だ。

輝刃「だな。あそこまで入り交じりになると、纏めるのも大変そうだ。次は俺からだ。」

2. 作者に質問「この物語に交じる他作品の中に『クレヨンしんちゃん』があつたが、どうやって放り込む気なんだ？やはり“劇場版 テイスト”で放り込むのか？」

あゝ「それは確かに気になるな。もしかすると、放り込む他作品の中では一番難しそうな作品だもんな。（汗）。『』」

真王「それはネタばれなため教えません。後クレヨンしんちゃんはもう放り込んでます。ワグナリア編を見てください」

ヴァルバトーゼ「では『月光閃火』よ、廊下に立つのだ。続いてのペンネームは『鳴神ソラ』だ。『マリオ』懐かしいな…色々と苦勞したよな」

クッパ「うむ…あの時は大変だったのだ…まあ、そのお陰で色々良くなったのだ」

ルイーダ「こっちは苦勞したけどね」

クッパ「あの時はマジでめんごなのだ」

フォックス「それにしても…作者はやった事ないけどデイスガイアって言うゲームのキャラが出るんだな…」

スネーク「それで次のアシスタントはあれか？ペンギン軍団を色々弄るあの嬢ちゃんの主か？」

ネス「じゃない？分かんないけど…」

リユカ「ヒント的にそうなんじゃないかな」

マリオ「銀時達に質問『体の中を見た感想はどうだった？』」

ルイーダ「銀さん達に質問『その時のネプテューヌちゃんの吸い込みはどうだった』」

クッパ「真王に質問なのだ！『元にした我輩達のゲームの様にネプテューヌが新しい力を得るのか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしています

ネス「どうなるのやら……」では銀時達の感想をきこう

銀時「あれはホントに凄いもんだなと思ったな。そして吸い込みの方は近くにブラックホールがあつたと思つたぞ！」

真王「その通り！新たに力を手に入れますよ。『ボコスカ○○』とか」

銀八「では『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってなさい。ラストオ、ペンネーム『支配者』さん。『質問ですが、ネプテューヌの体内の中はクツパと同じなんですか？』」

真王「似ているようで少し違った構造だと思つてください。『支配者』さん。初めての感想ありがとうございます」

ヴァルバトーゼ「よし、次のアシストはフェンリツヒにやらせよう」

第五十訓：懐かしい奴は碌でなしが多い（後書き）

ヴァルバトーゼ「魔界全土を揺るがすあの男の目的は、想像を絶する事実だった！」

ネプテューヌ「ミッドチルダを手にするって言うの!？」

ヴァルバトーゼ「そう!あいつの好物と言えばマグロの刺身!イワシによりも脂分の多い大トロだ!」

エミーゼル「やっぱりここでもイワシを語るのかよ!？」

ヴァルバトーゼ「大トロの刺身は、肉の柔らかさと醤油の味付けによって定番とされているが、それは大きな間違いだ!大トロは味が薄いから醤油をかけるのだ!」

ネプテューヌ「時にはワサビをのせるけどね」

ヴァルバトーゼ「こうしちゃおられん!いち早く対抗するためにイワシの刺身を提供してやる!さあ!イワシのうまみを存分に味わえ!」

フリーカ「新しい寿司ネタが発売なの!？」

ヴァルバトーゼ「次回『エリートイワシをねらえ!』第二話、『イワシ寿司の完成』イワシの道を見極める!」

ネプテューヌ「イワシは健康魚として生活習慣病にならないですがダイエットに効果がある事は不明です」

アルティナ「短く言えば、イワシは健康の源と言つことですね」

真王「それでいいのか？次回は『議題は必ずしも通るとは限らない』
です」

第五十一訓：議題は必ずしも通るとは限らない（前書き）

真王「デイスガイア勢が大集合する？」

フリーカ「何で疑問形？『リリカル銀魂』始めるわよ」

第五十一訓：議題は必ずしも通るとは限らない

ネプテューヌとヴァルバトーゼらがゲラビッツの計画阻止を開始している頃、ネプテューヌの体の中にいる銀時達は、

銀時「お〜い、こっちにパフェをくれ」

銀時だけ実家のようにくつろいでました。

新八「オイイイイイイイイイイイイ！！あんた何こんなところでサボってんだよ！！きつちり働けよ！！」

銀時「やだ、めんどくさい」

新八は青筋立てて怒鳴るも、銀時は動く気はしなかった。

銀時「この生活は楽だよな、食べ物は何んさか出るしな」

神楽「ネプテューヌが食べたものがそのまま私達の胃袋に入るネ。私も賛成ヨ」

コンパ「そう言うわけにもいきませんですよ」

2人を否定したのはコンパだった。

コンパ「確かに食べ物は困りませんが、いつまでもこのままですと私達ねぶねぶに体の一部になっちゃいますよ」

銀時「一部に？んなわけねえだろ」

銀時は否定するが、コンパが怒る。

コンパ「あなたは人の体と言うものを全然理解してません！！いい

ですか！人間の体には白血球と言うものがあります」
銀時「あゝ、しってる。ばい菌をやっつける奴だろ」
コンパ「そうです。ですがその白血球が私達をばい菌と見なされて襲ってきたらどうするんですか!？」

医学に詳しいコンパなら知っている事、だが銀時はどうでもよさそうな顔をする。

銀時「んなわけねえだろ。どうせドラクエみたいな奴らだろうに」

と、すでに寝てしまふ銀時。
コンパは諦めてため息をついた。

別魔界・邪悪学園

血染めの禁忌^{タブー}と、底なしの出鱈目、魔立邪悪学園、言わば魔界の学校である。

ヴァルバトーゼ「まずはここからの情報収集だ」

ネプテューヌ「そうだね。ベリルちゃんいるかな？」

ネプテューヌはあたりを見回す。

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん、ベリルちゃんって？」

ネプテューヌ「それはねえ……」

ネプテューヌが説明しようとするど、

ラズベリル「ラズベリル、通称ベリル、『魔界戦記デイスガイア3』のヒロインで主人公マオのライバルであり幼馴染さ」

後ろから2本の角にドクロの首飾りとかわいらしい尻尾がある女の子の悪魔・ラズベリルが説明した。

狂子「さっすがはお姉様、読者に分かりやすいご説明をなさるだなんて」

明日香「しかもなんて説明的なんでしょう。そこに痺れますわ」

後ろのラズベリルの連れが感動している。

ネプテューヌ「あ、ベリルちゃんおっひさ〜」

ラズベリル「久しぶりだなネプテューヌ。それにヴァルバトーゼもヴァルバトーゼ」

ラズベリル「ところであんた達なにしにここへ来たんだい？」

ラズベリルが聞くと、ヴァルバトーゼが答える。

ヴァルバトーゼ「いや特におおごとではないが、ゲラビッツと言う男が内のプリニーどもに世話になったから探してたのだ」

ネプテューヌ「ゲラビッツはグルグル眼鏡の奴だけだね」

ラズベリル「何かあったのかい？」

ヴァルバトーゼ「あやつは、プリニー共を洗脳して拳句魔界全土の魔物たちを配下にしようとしているのだ」

????「なに!?それは興味深い!」

つと驚いたのはラズベリルではなく黒いシャツに赤い上着でメガネ

をかけた少年だった。

ラズベリル「…相変わらずそう言うのが好きだねマオは」
マオ「プリニーどもを洗脳とは…ハア…ハア…これが落ち付いていられるか」

興奮しているマオに顔を引き攣らせるネプテューヌ達。

マオは実験系が大好きな変態なのだ。

マオ「人を変態扱いでするな！」

???「変態ですけどね…」

マオに突っ込んだのは赤マフラーで白い服の少年、その隣に白いロングの髪にきている服はお姫様な感じの少女だった。

ネプテューヌ「あ、アル君にサファイアちゃんだ」

アルマース「いやアルマースなんですけど…」

サファイア「久しぶりじゃなネプテューヌ殿」

アルマースは苦笑いし、サファイアは元気に挨拶する。

一応先に言いますが、彼らは人間です。

ネプテューヌ「久しぶり〜。あとはラハール君達か〜」

ネプテューヌは考え込むしぐさをして、何かを思いついた。

ネプテューヌ「そうだ！暗黒議会へ行こう！」

そう言ってそそくさと暗黒議会へと向かった。

ヴァルバトーゼ達も付いていった。

銀時「暗黒議会？」

ノワール「魔界にある議会のことよ。議題を出して可決させるとその通りになるから」

暗黒議会のことを説明するノワール。

小毬「てことは、『お菓子之国を作りたい！』って議題を可決するとお菓子の国が出来るの？」

ノワール「例をあげればそうね」

小毬「そっか」

小毬はそれを聞いて喜んだが、

ノワール「でもそれを判断するのは議員のみんなだから必ずしも可決するとは限らないわ。無理にでも可決したいなら力づくでやることもあるけど」

小毬「・・・諦めます」

小毬は物騒なことに諦めた。

銀時「よし、『イチゴパフェ食べ放題が欲しい！』の議題で可決させてやるぜ！」

神楽「私は『酢昆布いっぱい食べたい！』ネ！」

桂「俺は『高級そばを出したい！』」

新八「欲望叶えようとすんなー！」

欲深い銀時達に怒鳴る新八。

それを聞いたなのは達も、

なのは「じゃあ私は『銀さんと結婚したい!』で
フェイト「ずるいよなのは!私とその議題を!」

シグナム「いやこの私が!」

リインフォース「いや私が!」

スバル「私だよ!」

ティアナ「兄さんは渡さない!」

猿飛「銀さんは私のもの!」

銀時「テメエらしい加減にしるよ!!!」

銀時が怒鳴り、桂、はやて、ベールはニヤニヤと笑う。

ちなみにはやては内心『桂さんとラブラブになりたい』という議題
を叶えたいと思ったらしい。

魔界・暗黒議会

IBGM作戦会議 by 魔界戦記デイスガイア4
(Disgaea 4 Soundtrack - Team D
4)

そこは魔界全土にあり、キャラメイクや敵レベル変換などがある施設。
キャラを作って弟子にしたり敵のレベルをあげさせるにはこの
場所であるのだ。

そこで、ネプテューヌ達は議会に着いた。

ネプテューヌ「さてと、議題はなにがあるかな？」

ネプテューヌは議題の表を見る。

| | | | | |
|---------------------|---|---|---|---|
| 『伝説のスウィーツを出したい！』 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 『チートブレイカーと戦いたい！』 | 9 | 9 | 9 | 9 |
| 『音速のハリネズミに会いたい！』 | 7 | 0 | 0 | 0 |
| 『伝説の魔王神を召喚したい！』 | 9 | 9 | 9 | 9 |
| 『黒夜叉を呼び出したい！』 | 9 | 0 | 0 | 0 |
| 『百合転生者を呼び出したい！』 | 8 | 0 | 0 | 0 |
| 『破壊神を召喚したい！』 | 9 | 9 | 9 | 9 |
| 『亜空軍レンジャーを呼び出したい！』 | 6 | 0 | 0 | 0 |
| 『フラワープリンセスを呼び出したい！』 | 6 | 0 | 0 | 0 |
| 『白い悪魔？を召喚したい！』 | 5 | 0 | 0 | 0 |

いろんな議題があった。

ちなみに右の数字はマナ使用数で、マナの数で敵の強さがあるらしい。そして可決率は極めて低い。

ネプテューヌ「仕方ない。受付さん、オリジナルをお願い」

受付「オリジナルですか？どんな議題で？」

ネプテューヌ「それは…歴代のメンバーを呼び出したい！」

受付「かしこまりました。では中へ」

ネプテューヌは受付に連れられ、中へ入っていった。

暗黒議会・会議室

I B G M希望の欠片 by 魔界戦記ディスガイア4
(Disgaea 4 Soundtrack - Fragments of Hope)

そこで、沢山の議員達が集まっていた。

ドラゴンの邪龍族議員、右手に筒状のある銃魔神族議員、骨状の龍の死龍族議員、石造のような魔獣族議員、ミーニヤそっくりの猫耳がある猫娘族議員、リリスそっくりの水着のような服の女悪魔の夜魔族議員、腐った体にゾンビに等しい屍族議員、キノコのモンスターの珍茸族議員、そして魔界の雑用なのに議員であるプリニー族議員が出席していた。
数は計30体いる。

ネプテューヌ「私の議題は『歴代のメンバーを呼び出したい!』、その議題に一票を!後お願いします」
議長「分かりました。判定は!？」

議長長が議員達に言う「と議員達は判定を始めた。

邪龍族議員×3「賛成!!反対!!賛成!!」
銃魔神族議員×3「賛成!!賛成!!反対!!」
死龍族議員×3「賛成!!反対!!反対!!」
魔獣族議員×5「賛成!賛成!賛成!反対!賛成!」

猫娘族議員×4「賛成！反対！賛成！反対！」
夜魔族議員×4「賛成！賛成！反対！賛成！」
屍族議員×3「賛成！反対！賛成！」
珍茸族議員×3「賛成！賛成！賛成！」
プリニー族議員×2「賛成ツス！反対ツス！」

全員が言い終わり、賛成は101、反対は62となり、

議長長「出ました！よって『歴代のメンバーを呼びだしたい！』が
可決されました！」

ネプテューヌはそれを聞いて安心の吐息を吐いた。

数十分後、

ネプテューヌは広い場所で待っていると、魔方陣が現れ、中から二
本の触覚(?)があるマントだけで上半身裸の少年が現れた。

ラハール「ハーツハツハツハ！、このラハール様を呼びつける
とは、一体どこのどいつなのだ？」

ネプテューヌ「久しぶりだねラハール君」

ラハール「ん？お前はネプテューヌではないか、呼んだのはお前か
？」

ネプテューヌ「そうだよ。あとエトナとフロンはまだかな？」
「????」
「あたしを呼んだ？」

魔方阵から赤い髪に小悪魔な感じの露出度の高い服に逆さまのハート型の赤い尻尾がある少女が現れた。

ネプテューヌ「あ、エトナ」

エトナ「ネプテューヌじゃん、見ない間に変わって……ないわね」

ネプテューヌ「失敬な、後は……」

????「私ですよ」

ラハールとエトナとは違う魔方阵が現れ、長い金髪に青い蝶リボンを付けた天使が現れた。

アルティナ「フロン様！」

フロン「ひっさしぶりです」ネプテューヌちゃん

ネプテューヌ「久しぶり」、後はあの二人だけ……」

そう言うと、目の前にゲートが現れ、赤髪と赤い大きなネクタイを付けた青年とリボンが多い黒いドレスを着た金髪の女性が現れた。

ネプテューヌ「やつほ」 アデルにロザリン

アデル「久しぶりだなネプテューヌ」

ロザリン「久しぶりじゃのネプテューヌ、余もうれしいぞ」

アデルとロザリンは嬉しそうに言う。

ネプテューヌ「で？お二人は夫婦としてどんな感じかな？」

アデル「どんな感じって……そりやまあいい感じの方だ」

ロザリン「余とアデルは絶対に切れぬ絆があるから大丈夫じゃ」

アデル「ロザリー……」

ロザリン「アデル……」

アデル「ロザリー」

うございます！」

アデル「オマツ、マジなのか!？」

ロザリンド「ぐツ、敗北感が…」

マオ「ほほう? お前の子供か?」

ラズベリル「なんだって!?! 羨ましいぜ畜生!!!」

ヴァルバトーゼ一行を除く全員はそれぞれいろんなリアクションをした。

ネプテューヌ「……あたし結婚してないから。それとこの子たちは養子だから」

ラハール「なんだそうなのか」

ネプテューヌは誤解を解いて、ラハール達は納得した。

アデル「ところで俺達を集めた理由はなんだ?」

ネプテューヌ「それはね…」

ネプテューヌは理由を話した。

ロザリンド「なるほどな」

エトナ「あたしのプリニーどもがなんか減ってるな」と思ったならそいつが原因なのね」

全員はゲラビッツに対して少し怒りを感じた。

フロン「でしたらやることは一つですね」

ネプテューヌ「よし、みんなあいつをぶったおしに行くよ」

ネプテューヌの掛け声に全員は答えた。

くおまけ

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！！」

プリニー「って質問コーナーが乗っ取られてるっス！」

エトナ「失礼ね、銀八は病気になって代わりにあたしが担任になったのよ」

フェンリツヒ「ホントなのか？ちなみにアシスタントは俺だ」

プリニー「俺もついとしてアシストするッス」

エトナ「それじゃペンネーム『鳴神ソラ』から始めるわよ。』マリ
オ「ああ、そっちの方が！」

クッパ「まあ、名前と姿位しか分からないのだ」

ルイーダ「しっかしゲラコビッツの奴…まさか原作でのダークスタ
ーの代わりにダークソウルでパワーアップしようとするのかな？」

ネス「けど…逆に吸われたんだよね？」

リュカ「それじゃあれでも吸われるの？」

マリオ「だろうな…」

クッパ「それにしても…我輩の技が出るのだな…あのブロック犬の
技には作者は気に入っていた物だ…真王にまた質問なのだ！『ネプ
テューヌの中の銀時達も新しいアクションを覚えるのか？』」

マリオ「俺も質問…『何でデイスガイアとクロスさせたんだ？』」

スネーク「確かに気になるな…同じく質問『大体はデイスガイアの
敵とマリオ&ルイーダRPG3の敵が出るのか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしています

ネス「どう言う奴が出るのやら…」

リュカ「…銀さん達の出番が極力少なくなるのは気のせいかな…」
『
んじゃ作者、答えなさい』」

真王「態度でか！…はい、銀時達もそうなります。2つ目ですが、
それはもちろん面白いからだ。3つ目ももちろん出しますよ」

フエンリツヒ「では『鳴神ソラ』、廊下に立て。次はペンネーム『支配者』からの質問だ。『今回もとっても面白かったです。』

質問ですが登場させるデイスガイアキャラはアレで全部ですか？』
いや、あとティンク、雪丸、チャンプルが出てないが、出す予定だ
とのことだ」

プリニー「『支配者』さん。廊下に立つてくださいッス。次はペン
ネーム『月光閃火』さんからの質問ッス。『よお…月光閃火だ。』

しかし…ドンドン登場キャラが増えていくな…（汗）。しんちゃん
の登場は正直嬉しかったが…。

輝刃「だな…。意外とまた登場するかもな…ほのぼの編で。」

だよなあ…あ、質問行くぜ？まずは俺からだ。

1. 作者に質問だ。デイス イアの方だけ…『3』以前のキャラ
は登場するのか？『4』はさすがに発売されて間もないから難いだ
ろうし…。

輝刃「うむ…それは気になるな。特に俺は『2』のアデルとロザリ
ンドが好きだな。声優ネタイケそうだし…。次は俺からだ。」

2. ヴアルバトーゼに質問…イワシ以外で食べ物好き嫌いはある
か？あと気になる異性も情報プリーズだ。

ハハハ…輝刃、話の中であつたように原作ラストから結構経つて
るんだから既に家庭あるだろ…多分。』

フエンリツヒ「馬鹿もの！！4の主人公であらせられるヴァル様が

出ているわ!!」

ヴァルバトーゼ「落ち着けフェンリツヒ。俺様に好き嫌いはない。ニンニク、ピーマン、青汁だって行けるぞ。あと気になる異性と言うのは…アルティナだな…」

若干てれるヴァルバトーゼ。

エトナ「これが恋する人つての？ムカつく、『月光閃火』、永遠に廊下に立ちなさい」

プリニー（八つ当たりツス…）

エトナ「次はペンネーム『黒龍』からよ。『黒龍』またなんか新しいキャラが出てきた！」

ソラ「そうだな」

銀時「それにしても今度敵は雑魚臭プンプンだな」

ソラ「まあ何にしてもネプテューヌなら大丈夫だろ」

銀時「そう言えば黒龍は『魔界戦記デイスガイヤ』知らないんだよな」

黒龍「名前位しか知らないですね」

ソラ「とりあえず質問にいったらどうだ？」

黒龍「それもそうですね。1・ネプテューヌ質問。もし自分の家族がグレたらどうしますか？」

- 2・全員に質問。修羅ネプテューヌとヘドロはどっちが怖いですか？
- 3・修羅ネプテューヌに勝てる人はいますか？

ソラ「最後に俺からドーナツを贈っておく」

銀時「じゃあ俺も。確かバルトーゼって奴はイワシ好きみたいだからイワシ贈っとくわ」『ネプテューヌだったらこう答えるわ」

ネプテューヌ「更正させてやるよ。物理的に：＃（若干修羅化）」

リス・ミーニャ・アルラ

「ガクガクブルブル・・・」

エトナ「うわ怖…、えっと次は…」

全員「どっちも怖えよ（いです）！！そして勝てねえよ（ません）！！」

フェンリツヒ「修羅化したネプテューヌは閣下でさえも半殺しにした存在だ。かく言う俺も二度とあんな目に会いたくないな…」

エトナ「分かるわかる、あたしも死にかけたわ」

真王「簡単にいえば『黒神』の狂王スバルよりも強いと認識してください」

エトナ「そんじゃ、『黒龍』、ネプテューヌを怒らせないように気を付けてね」

フェンリツヒ「今回のアシストはラハールとフロンと言っちゃった」

第五十一訓：議題は必ずしも通るとは限らない（後書き）

真王「今回は普通に、次回はネプテューヌに新たな技を手に入れる
!？」

ラハール「次回『助けたお礼は凄いものがある』テイクオフだ!!」

〈悩み〉

真王「他作品のキャラを出すにはその作者の許可を出す必要がある
のでしょうか。例えば黒龍のソラを出したいなら黒龍さんの許可が
必要かと思えます。登場させようと思うキャラはプリムレンジャー
とリリーとがはねです。この場合、リアルルイーダさんとmyu-
myuさんの許可が必要かと思われませんが、どう思いますでしょう
か…」

第五十二訓：助けたお礼は凄いものがある（前書き）

真王「ネプテューヌに新たな技を習得か！？」

フロン「『リリカル銀魂』始まります？」

第五十二訓：助けたお礼は凄いものがある

ネプテューヌとヴァルバトーゼ達がゲラビッツの情報を集め、森の中に人影が見えたとの情報入手し、ネプテューヌ達はその森へ入った。

エリリンフォレスト

IBGM森のきのご用心byスーパーマリオRPG
(forest maze EXTENDED super ma
rio rpg.wmv)

1467

薄暗い森の中、ネプテューヌ達は探索していた。

ネプテューヌ「この先を抜けたらゲラビッツはいるかな？」

ヴァルバトーゼ「行くしかないだろう」

エトナ「あたしこの場所キライ」

フロン「駄目ですよエトナさん、かく言う私もこの場所は好きじゃありませんが」

エトナとフロンはこの場所を嫌がっていた。

ジメジメした森なので女性はどうも好きになれない場所である。

コケやキノコが生えている場所でもある。

ネプテューヌ「ホントだね、頭が少しムズムズするんだけど」
アルマース「ってネプテューヌさんへんなキノコ生えてますから！
！」

ネプテューヌの頭に紫色のNの文字が書かれたキノコが生えてきたのでアルマースがそれを抜く。

ネプテューヌ「プリニー達何処にいるんだろうね。かんぱいだな」
ヴァルバトーゼ「ああ、ほんとにかんぱいだ」

なぜかネプテューヌとヴァルバトーゼがシルクハットと付け髭つけて手に少し入ったワイングラスを持って「ルネッサンス！わっっ
ははははははは！」と言いながら乾杯する。

エミーゼル「心配だろ！！しかもそのネタ古いし！！」
アルティナ「髭男○ですか…」

エミーゼルが突っ込みを入れ、アルティナは呆れる。

フエンリツヒ「さすが我が主、古いネタでもお構いなしにボケるそれもまさに素晴らしい能力^{チカラ}」

アルマース「褒めるとこなのそれ！？」
ネプテューヌ「おっと、遊んでる場合じゃなかった、早く行かなきゃ」

ネプテューヌは探索を再開した。
すると・・・

????「おっい！その人〜！」

ネプテューヌ「ん？」

声が聞こえたのでその場で止まるネプテューヌ。
声のした方向は大きな湖の上に浮島があり、その浮島で手を振っているキノコ？がいた

キノコ？「その人〜！ちょっと待つエリ〜！」

ネプテューヌ「大変だ！島に取り残されたキノコがいるよ！」

ラハール「何言ってるんだ、泳げばいいじゃないのか？」

ラハールは興味なさそうに言うが、

キノコ？「エリはカナヅチなんだエリ〜！」

キノコは答えた。

エトナ「あんな奴ほつといも「ちょっとまって」「グエツ！」

ネプテューヌに首を掴まれた。

ネプテューヌ「キノコさ〜ん！今助けに行くからね〜！」

ネプテューヌはそう言って飛び降りる準備をしたら、

キノコ？「駄目エリ！！その毒沼は入ったら二度と出られないエリよ〜！」

キノコが叫んで危うく入りかけたネプテューヌ。

キノコ？「でもエリを助けてくれるなら感謝するエリ！お礼にこの

キノコをあげるエリ！」

そうキノコが言って取り出したのは黄色くて紫の斑点があるキノコだった。

それはネプテューヌにとって見覚えのあるものだった。

ネプテューヌ「あ！それってバキューンキノコ！」

キノコ？「おいしい！これはバキュームキノコエリ。ありとあらゆるものを吸い込めるとっても貴重なキノコエリ」

ネプテューヌ「貴重って…私それ食べて毒もらったんだけど！」

キノコ？「失礼エリ、このキノコに毒はないエリ。ただ2つあった貴重なバキュームキノコのうち一つがいつの間になくなったエリ」

ネプテューヌや中に銀時達はそれを聞いて驚いた。

ゲラビッツはキノコのバキュームキノコを盗んで改造したんだと。

キノコ？「ともかく、これは毒もなくて安全なキノコだから大丈夫エリ」

ネプテューヌ「それは分かったけど、一体どうやって助けようかな？」

キノコ？「大丈夫エリ、この島は浮島だから動くことがあるエリ。そこにあるロープを引っ張ればいいエリ」

足元を見ると確かに浮島につながれているロープがあった。

ネプテューヌ「これを引っ張ればいいわけだね。ならいくよ」

ネプテューヌはロープを引っ張り始めた。

ちなみにヴァルバトーゼ達はピクニック気分でシートを敷いてお茶を飲んでいた。

銀時「何やってんだネプテューヌの奴」

イストワール「浮島に取り残された人を助けるのでしょね。ちょっといいです、私についてきてくれませんか？」

銀時「え？おい」

イストワールが銀時を引っ張ってある場所へ連れて行かれた。なのは達も後をついていった。

ネプテューヌの体内・パワースペース（腕）

イストワールの案内されたところは、少し膨らんだ筋が動いている場所だった。

銀時「なんだあの動いてんのは？」

イストワール「あれはネプテューヌさんの腕の筋肉です」

真人「筋肉だと!？」

筋肉を聞くや否や、真人が顔を出した。

銀時「お前何やってんだ」

真人「へっ、筋肉と聞いてやって来たぜ。それにしてもまだ足んな

「いみたいだな」

「なのは「どういうこと?」

なのは達が疑問に思うと、真人が答えた。

真人「筋肉を活性化させるアミノ酸が足りないんだ。アミノ酸をあ
の筋肉に溜めれば力が出るんだが…」

新八「アミノ酸なんてどこにもありませんよ」

新八の言う通り、アミノ酸はどこにも見当たらない。
あると言えば大砲のようなものがある物ぐらいだが。

ブラン「・・・」

ブランはとりあえず大砲みたいなものを叩いてみた。
すると大砲から何かが飛び出してきた!

IBGMミニゲームbyマリオ&ルイージRPG3
(Extended Edition: Mini game Th
eme) Mario & amp; Luigi: Bowser
's Inside Story)

「イストワール「銀時さん危ない!」

銀時「うおお!!」

何かはネプテューヌの筋肉に当たった後跳ね返って銀時に向かって
きた。

銀時は驚いて木刀ではじき返した。

イストワール「今度はブランさんです！」

なのははまたネプテューヌの筋肉に当たった後跳ね返って今度はブランに向かってきた。

ブランもハンマーでそれを弾き飛ばし、ネプテューヌの筋肉にすっぽり入るとネプテューヌの筋肉が膨らんだ。

ネプテューヌ「ん！？なんか力が出てきた気がする」

真人「さっき飛び出たあれはアミノ酸だ！どんどん筋肉にぶつけてやれ！」

ヴィータ「よし！暇つぶしにやってやる！」

ヴィータ達も参加して、アミノ酸をどんどんぶつけた。

ヴィータ「オラオラオラオラ〜！」

どんどんアミノ酸をぶつけていくと、大きなアミノ酸が出る。

ヴィータ「こいつでいけ〜！〜！」

ヴィータは大きなアミノ酸をぶつけ、筋肉が最大限にまで巨大化し

ネプテューヌ「もぐもぐもぐ・・・ん!？」
ヴァルバトーゼ「どうした!？」

ネプテューヌが口を押さえたのでヴァルバトーゼ達が異変を感じたが、

ネプテューヌ「まずい」
全員「だ~~~~~!!」

ヴァルバトーゼ達はずつこけた。
もちろん銀時達もずつこけた。

エリノコ「ま、まあそれはいいとして、キノコの効果を試してみ
るエリ」

ネプテューヌは深呼吸して、

ネプテューヌ「ふおおおおおおおおおおおおお!!
!!!」

ピンクの悪魔の如く吸い込み始めた。

ヴァルバトーゼ「うおっ!？何と言う吸い込み力だ！」

エトナ「凄いわね。城の埃が取れそうだわ」

フロン「掃除機ですか!？」

エリノコ「バキームキノコは大喰いな人によって吸い込む力が強
いエリ」

リリス「あゝ、母さんよく食べるからね」

吸い込みから避難している人たちはそれぞれ感想を言う。

ガンツ！

ネプテューヌ「イダッ！」

突然硬いものがネプテューヌの顔にあたり、吸い込みが止まる。

アルティナ「大丈夫ですかネプテューヌさん！」

ネプテューヌ「いたた、まあね」

ヴァルバトーゼ「今のはなんだ？」

????「そ、その声は閣下ツスか？」

ヴァルバトーゼは聞き覚えのある声が聞こえてそつちに振り向くと、硬い檻にギユウギユウ詰めにされたプリニー達がいた。

ヴァルバトーゼ「おまえたち！」

プリニー「やっぱり閣下ツスね！助けて欲しいツス！」

プリニー達は助けを求める。

ネプテューヌ「それにしてもどうしてあなた達が？」

プリニー「俺達は洗脳から逃れたプリニーツス。ゲラビッツは洗脳できなかつた俺達をこんな檻に閉じ込めてほつとかれたツス！」

プリニー「許せないツス！ゲラビッツは俺達を邪魔もの扱いしやがったツス！」

プリニー「でもその前に開放されたいツス」

ネプテューヌ「分かった。手荒だけど我慢してね」

ネプテューヌはプリニーの檻を壊し始め、プリニー達を開放させた。

プリニー「助かったツス！」
プリニー「ありがたいツス」
プリニー「やった〜ツス」

解放されたプリニー達は喜んでるようだ。

ヴィヴィオ「よかったね」

ヴァルバトーゼ「しかし、なぜプリニーどもが……」
「???」それは我が教えてやるよ」

突然聞き覚えのある声にあたりを見回すネプテューヌ達。

上を見上げると、ゲラビッツ………にそっくりのUFOだった。

ゲラビッツ「そのプリニーどもは私の洗脳を受けていないから閉じ込めたのさ。それと、他にも洗脳を受けてない者たちの声も聞かせてやるよ」

モニターが現れて、囚われている魔物たちが映った。

寝子猫族「にゃ〜、ここからだしてほしいにゃ〜」

猪人族「ブヒ〜、俺達プチオーク族を助けてほしいブヒ〜」

魔獣族「誰でもいい！誰か俺達を助けてくれ！」

夜魔族「誰か〜、私達を助けてください〜い」

怪鳥族「コケコケコーー！！（誰か助けて〜！！）」

死告族「こちらは死告族、敵に捕らわれてしまった」

銃魔神族「SOS！誰か俺達を開放させてくれ！！」

ネプテューヌ達はこれを見て怒りを覚える。

ゲラビッツ「どうかね？怒ってるようだけどお前たちの冒険はここ

で終わりにしてもらおうよ』

ズシューーン!!

突然上からエリノコそっくりのキノコモンスターエリンギヤーが現れる。

しかし倍くらいでかく、顔がゲラビッツのようにグルグル眼鏡のようになっている。

IBGMクツパ戦闘byマリオ&ルイージRPG3

(Mario & Luigi: Bowser's Inside Story Music Extended - Browser Battle)

ネプテューヌ「うわ!でっかいエリンギヤーで洗脳されている。ゲランギヤーって呼ぶかな?」

デカゲランギヤー「エリリ!お前達はここにくたばるがいいエリ!行け!」

ゲランギヤーx10「エリリ!!」

デカゲランギヤーの背中から10体のゲランギヤーが飛び出してきた。

ネプテューヌ「な、なに!?!」

ネプテューヌは驚いて思わず吸い込みを始める。

ゲランギヤー「ってこんな時に吸い込み始めたら…….…….中に

吸い込まれちゃうエリ〜！

銀時「な、なんだ!？」

10体のゲランギヤーは吸い込まれてネプテューヌの中に入ってしまった。

ゲランギヤー「まあいいや。こいつらから先に倒すエリ」

銀時「んだと!俺達をザコ扱いしたな!」

ザコ扱いされた銀時は怒る。

銀時「まあいいやでやられてたまるかこのやる!」

ゲランギヤー「ウギヤツ!」

桂「天誅!」

ゲランギヤー「ウギヤ!」

なのは・ティアナ「シユート!」

ゲランギヤー×3「ギヤアアアツ!」

新八「うおおおおお!」

ゲランギヤー「邪魔エリ」

新八「なんで僕だけエエ!？」

銀時達はゲランギヤーを攻撃する。

ゲランギヤー「なかなかやるエリな。けど舐めてはいかんエリ!キノコ胞子攻撃!」

ゲランギヤー達は綿のようなものを出してきた。

銀時「なんだそれは?」

しかし銀時達は平然としている。
すると、銀時の頭にキノコが生えた。

フエイト「ぎ、銀時！頭にキノコが！」

銀時「え？あ！ホントだ！てかお前らも生えてんぞ！」

なのは「え？ああ！ホントだ！」

グイータ「うわ！あたしもだ！」

ノワール「ちよっ私まで！？」

キノコが生えた事にパニックになる銀時達。

ゲランギヤー「フハハハ、俺達の胞子にふれた者は頭にキノコが生えるエリ。そしてそれだけじゃないエリ。生えてから数時間たつと体が変化して最終的に俺たちみたいになるエリ」

それはつまりキノコが生えて数時間たつと、銀時達はみんなエリンギヤーのようにキノコモンスターになるというのだ。

銀時「ちよつと待てエエエエエエエ！それって俺達はキノコになっちまうってことかああ！？」

ゲランギヤー「ま、そうエリ」

銀時「いやだよ！絶対になりたくないエリよ！……ってあれ？」

銀時は今一瞬『エリ』と言ったような気がした。

ゲランギヤー「症状の一段階エリね。『口癖がエリと着くこと』エリ」

銀時「最悪じゃアアアアアアアア！！！最悪なもんもらっちゃまったエリ！！」

フエイト「銀時！エリって言っちゃってるエリよ！って私も！？」

サチコ(なのはさんの砲撃だ)

ヴィヴィオ達はそれを見てなのはのディバインバスターだと分かった。

デカゲランギヤー「テメエ！口からビーム出すだなんて聞いてないエリー！」

デカゲランギヤーはしぶとく生きてた。
只砲撃をビームと勘違いしている。

ヴァルバトーゼ「ネプテューヌ…お前何時の間に習得したのか？」
ネプテューヌ「習得したわけじゃないよ。でもトドメと行こうかな。
プリニーさん」

ネプテューヌはプリニー達を呼ぶ。

プリニー「なんスか？」

ネプテューヌ「相手は弱ってるから最後はあなた達でお願いね」
プリニー「ヨッシャアアアア！！覚悟しろこのでかキノコツス！
！」

プリニーたとがやる気になった。

出番が欲しかったのかと一同は思った。

そしてプリニー達はいっせいにデカゲランギヤーに突撃すると、

ネプテューヌ「行くよ！プリニーさん！」

プリニー「…ってちよっと？なんで赤い火の玉を出してるんスか？」

赤い火の玉を出して構えているネプテューヌを見て嫌な予感がした

するとネプテューヌが回復役をプリニーに渡した。
それもプリニー全員分。

ネプテューヌ「頑張ってくれたお礼だよ」

プリニー「こ、これが温もりってやつッスか！こんなに感動したのは初めてッス！」

プリニー「俺達の女神様が見えるッス。あ、女神だったッス」

プリニー「ネプテューヌさま万歳ッス！」

心やさしいネプテューヌに感動するプリニー達。
が、そのせいである人の禁句を言ってしまう。

プリニー「何処そのぺちやばい魔神とは大違いッス！」

プリニー「そうッス。いつもき使ってるやつとは違うッス」

エトナ「誰と違うって？」

エトナが殺気立って笑う。

ニコニコ笑っているが、目が全然笑ってない。

プリニー「えひっ！？すいませんでした~~~~ッス!!!」

プリニー達は全力で土下座した。

エリノコ「それじゃあエリは旅をするエリ。またどこかで会うエリ
よ〜」

エリノコは荷物を持ってどこかへ行った。

ネプテューヌ「よ〜し、このまま森へ出るよ〜」

ネプテューヌ又は固有技、『吸い込み』を習得した。
ネプテューヌ又はモンスターアクション、『ボコスカプリニー』を習得した。

くおまけく

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！」

プリニー「あれ？銀八先生はどうしたんスか？」

エトナ「前回も言ったように病気よ」

ラハール「嘘つけ！出番増やすために縛ってどこかに置いただろう！」

エトナ「ちっ！さすが殿下、いち早く気づいたわね」

フロン「そんなことより、アシスタントは私天使長フロンと魔王ラハールさんがお送りします」

ラハール「うむ。ではペンネーム『鳴神ソラ』から始めるぞ。『ルイージ』思いっきり作者が読んだスマブラ小説に出る人達があったああああああ!!!」

ソニック「Hey、しかも俺のもあったし」

一応聞いた方が良いとも思いますよ〜かく言う自分も黒龍さんに許可を貰って自分の小説であちらの主人公の1人である天道ソラ氏を出しましたし…

マリオ「それにしても歴代ディスガイアのキャラが出てるな〜」

ネス「機動六課に着そうだね〜」

リュカ「確かにエトナさんの趣味に合いそうな人がいるしね〜」

マリオ「そんな訳で真王に質問『銀時達が覚えるアクションって大体は原作での俺達のアクションを元にするのか?』」

ルイージ「そう言えば…気になった事を…『イリスさん達も吸い込まれたの?』」

スネーク「ディスガイアのメンバーに質問『内のマリオはどう思う?』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます」

真王「はい、原作のとアレンジした技を繰り出します。あとイリスさん達は吸い込まれておりません」

ラハール「そしてマリオか？魔王級の実力を持っているようだな」

エトナ「ふうん、結構楽しめそうじゃない」

フロン「マリオさん、ピーチさんの愛をちゃんと受け取ってくださいね」

アデル「赤繋がりだな」

ロザリンド「アデルと戦闘スタイルが似ておる…」

マオ「あのチートブレイカーはどんな仕組みなのだ？（興奮気味）」

ラズベリル「結構強そうだね」

アルマース「なんだか苦勞が増えそうな…」

サファイア「ほほう？面白そうな奴じゃの」

ヴァルバトーゼ「チートブレイカーか…」

フェンリツヒ「……（閣下の覇道を邪魔するものであれば…やるしかあるまい）」

フーカ「只のおっさんじゃない」

デスコ「この人が真のラスボスデスか！？と言うかお姉さま恐いも

の知らずデス…」

エミーゼル「強そうだな…」

アルティナ「ある意味すごい人ですね…」

プリニー「とまあ皆さんの感想はこんな感じっス。では『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってくださいっス」

エトナ「次よ。ペンネーム『支配者』からの質問よ。『今回も面白かったです。』

ラハールに質問です。自分より強いデイスガイアキャラは何人いると思っっていますか？

エトナに質問です。アニメのとき見たいにラハールの首狙ってるんですか？

銀時に質問です。ラハールと自分どっちが強いと思っっていますか？あたしは何時か殿下を殺って魔王になるわ！」

ラハール「おいつ！！…まあいい。俺様より強いものと言えばロザリンド（覚醒時）、ヴァルバトーゼ、そしてデイスガイアではないがゼダと言う宇宙最強の魔王だな」

銀時「無理です、勝てません」

真王「白夜叉になったら勝てる確率が上がるかもよ？では『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

フロン「次は、ペンネーム『月光閃火』さんからの質問です。『よお…月光閃火だ。』

てんのに活躍してる場面がないって、ある意味辛いな」

新八「なんか、存外に扱われている気分です・・・」

神楽「まったくアル！もつと活躍させて欲しいネ！」

ソラ「まあ元気出せ」

黒龍「それにしても、どんどんどんどんディスガイアのキャラが出てきて凄いですね」

ソラ「あれだな。出てくるキャラの多さが売りになっているな」

黒龍「それはそうと、ネプテューヌの体の中に入っている銀さん達ってやっぱり白血球に襲われる可能性大ですね」

ソラ「ネプテューヌの白血球だから性質が悪そうだな」

黒龍「それじゃあそろそろ時間なので、質問いきます。

1・銀さん達、ネプテューヌの腹の中にいる人達に質問。胃液とかで溶かされたりしないんですか？

2・紅桜があまり出てきてませんが、出てくる予定はあるんですか？

3・これから出てくる銀魂メンバーはいますか？」

ソラ「じゃあ俺からネプテューヌに胃薬を贈っておく」

黒龍「それじゃあ次回も楽しみにしています」

真王「銀時達は胃袋以外の場所で暮らしていますので大丈夫だと思

います。紅桜はオイオイ出そうと思います。あと現れる銀魂メンバ―はネタばれ明かしません、ヒントをあげます。銀魂界一の怖さを持つ人です。『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」

エトナ「次はペンネーム『黒神』よ。『質問です。』

新八以外の皆さんへ

原作の最新話で、新八は完全にギャルゲーオタクに堕ちました。

そんな哀れな童貞童貞をどう思っているのか、皆さんの答えを聞かせてもらいます。』…まあぶっちゃけ言つとね」

新八以外全員「キモイ」

プリニー「……『黒神』さん、廊下に立つッス。最後にペンネーム『亀鳥虎籠』さんからの質問ッス。『迷彩』

「いやあ、面白いもんだねえ、この銀髪のボウヤは。女の子をこんなに虜にするとは、罪な男だねえ。私も恋の一つもしてみたいね。」

阿良々木&五和

「（一体……何歳なんだろう、この人……）」

リクオ

「え〜と……質問です。最近近藤さんや神裂さんから“もう少し年上に頼れ”と言われるんですけど、頼ってもいいんでしょうか？」

神裂

「だから奴良リクオ、貴方はもう少し……まあいいでしょう。」

第五十二訓：助けたお礼は凄いものがある（後書き）

真王「次回は巨大な敵が現る!？」

エトナ「次回『怪獣の戦いはやっぱり巨大ロボで』テイクオフよ」

予告

ナレーション「あの銀魂らしい兵器が出るよっだ」

第五十三訓：怪獣の戦いはやっぱ巨大ロボで（前書き）

真王「お久しぶりに更新です！」

銀時「んで？結局どうなったんだ？」

真王「アンケートを取ったところ『先へ進んでほしい』ということになりました。そしてこれだけは言わせてもらいます。リアルルイージさん、Myu-myuさん、そしてプリムレンジャーとリリーとがばねを期待しているみなさん、誠に申し訳ありませんでした！
！！（超土下座）」

ネプテューヌ「私からも申し訳ありませんでした」

真王「そして長らくこの小説を待っていたみなさん、お待たせしました。『リリカル銀魂』が始まります」

第五十三訓：怪獣の戦いはやつぱ巨大ロボで

ネプテュー又達は森を抜け、平原を進んでいる。

ネプテュー又「この先を進めばいいんだね？」

プリニー「はい、この先ツス」

前回助けたプリニー達はネプテュー又達と行動している。

すると、

プリニー「見えたツス」

一匹のプリニーがあるところを指差した。
その先にあるのは大きな砦が見えた。

ラハール「あの砦が奴の根城か」

エトナ「どうせなら行く前に一発かましますか？」

ラハール「それもいいな」

マオ「ならば我に任せろ」

マオが携帯を取り出して誰かに電話する。

すると、ネプテュー又達の近くに巨大大砲が現れた。

アルマース「そ、それであそこに？」

マオ「当然だ。我の研究で完成した『デスオメガバズーカ』、発射
—————！！」

叫ぶと同時にスイッチを押し、ド—————ン！！！！

と勢いよく大砲から弾が発射された。
そしてその弾は砦に向かって一直線に向かって・・・

ドガアアアアアアアアアアン！！！！

砦に着く前に巨大障壁によって防がれた。

そしてその障壁は見事に砕け散った。

マオ「バリアが張られていたのか・・・」

ネプテューヌ「でもまあどちらにしろバリア壊したから入れるよね？」

アデル「へっ、面白くなってきたな」

マオはバリアがあつたことに少し残念がったが、ネプテューヌがポジティブに言い、アデルは両手を合わせる。

そしてセラビッツの砦へ向かおうとすると、

セラビッツ「ちょっと待ってよ」

本人ダラビッツが登場した。

ネプテューヌ「セラビッツ！」

セラビッツ「いきなり大砲で攻撃するだなんて、おかげで障壁が二度と張れなくなっただじゃないか！」

障壁を壊されたことの怒るセラビッツ。

ネプテューヌ「フフンだ。セラビッツ、大人しくお縄に頂戴すれば許してやってもいいよ？」

セラビッツ「それはお断りだ。しかし、お前達がここまでやるとは

思いもよらなかつたな。ならばあの兵器を使う時だ」

ゲラビッツはそう言つて通信機を取り出す。

ゲラビッツ「メタブス！今すぐあの兵器の出番だよ！」

そう言つて切ると、砦から何かが飛び出た。

そして、

ズズウウウウ~~~~~ン!!!!!!

ネプテューヌ「うわわわっつと！」

地響きにぐらつくネプテューヌ達、そして見上げると、ネプテューヌ達は絶句した。

一応、人の形をしている。だが、その輪郭はカクカクしていて、あまり美しいとは言えない。丸い眼と四角い鼻のみの顔は、そこはかとなく不気味な無表情で、胴体は骨組みだけの箱の中に妙なガラクタが入っているだけだ。手は平たく、指は無い。平たく言えば、

ネプテューヌ「先行者？」

ヴァルバトーゼ「先行者だな」

ラハール「先行者だ」

エトナ「先行者ね」

プリニー「先行者ツス」

中国人形『先行者』その者なのだ。

が、ゲラビッツは笑う。

ゲラビッツ「お前ら馬鹿か？こいつは先行者に見えて先行者ではな

い！全身超合金で出来てどんな魔王でも倒せる殺戮兵器ロボット。
人呼んで『グレートセンコウシャX』だ！」

ネプテューヌ「ちょ、超合金!？」

ヴァルバトーゼ「ぐ、グレートセンコウシャXだと!？」

ヴィヴィオ「えつと…これ突っ込むべきかな？」

リリス「いや分かんない」

突っ込むべきなのかスルーするべきなのか困惑するヴィヴィオとリリス達。

ゲラビッツ「フハハハ、さあこのグレートセンコウシャXにひれ伏すがいい！」

確かにネプテューヌ達では100メートルくらいの全長のロボットにかなうことは出来ない。

もはや絶体絶命かと思った。

だがなぜかフロンが静かに笑っている。

フロン「フッフッフ…そんなロボットがあるだけでひれ伏すだなんておかしいですね」

ゲラビッツ「なに?あんたにも秘策があるっていつのか？」

笑うフロンにゲラビッツは怪しむ。

フロン「もっちゃん!巨大ロボで対抗するには巨大ロボでいいですよ！」

ゲラビッツ「な、なに!?!お前も巨大ロボを持っているのか!?!」

ゲラビッツはフロンが巨大ロボを持っている事に驚く。

しかし、ヴァルバトーゼ達は苦い顔をしているが。

「フロン」その通り！いでよ！私の右腕！『グレートフロンガーX！』
「
そう叫ぶと、空から巨大な何かが降ってきた。
それはフロンそっくりな巨大ロボットだった。

フロン「闇夜をかけ、幾多の宇宙を日々続けて現れる超合金兵器、その名も！『グレートフロンガーX』！天に変わってお仕置きです！」

背景にバーン！と爆発させてカツコよく言うフロン。
対してヴァルバトーゼ達はやっぱりか…とため息をつき、
ネプテューヌ達は苦笑いを浮かべて突っ込むべきか？スルーするべきか？と困惑する。

フロン「目には目を、歯には歯を、ロボにはロボを、さあこれで対等です！」
ゲラビッツ「ぐぬぬ、しかたない、グレートセンコウシャX！あの鉄屑をたたきのめせ！」
フロン「鉄屑じゃないです！そっちが鉄屑じゃないですか！」
全員（確かにな…）

先行者は鉄屑みたいなものだと思うらしい。

ネプテューヌ「ところでフロンさん、フロンガーXは自動で動くの？」

ネプテューヌがフロンガーXのことを聞いてみると、

フロン「ハイ、このリモコンで操作するのですよ」
全員「手動かよっ!?!?」

全員揃ってフロンがリモコン操作している事に突っ込む。

ゲラビッツ「キャッチ!」

フロン「あっ!」

が、リモコンがゲラビッツに取られた。

ゲラビッツ「潰し!」

グシャ!

フロン「あああああああああああああ!?!?!」

全員「このバカヤロオオオオオオオオオオオオオオオオオ!?!?!?!?!」

フロンがショックを受け、全員が怒鳴ってケリ飛ばす。

ゲラビッツ「ふははは!もはやこれまでですねえ」

ゲラビッツは高く笑う。

フロン「なんの!グレートフロンガーXにはまだ秘策が残ってますよ!」

リリス「戻ってくるの速いね」

フロン「何とフロンガーXにはコクピットに乗って操縦することだつて出来るんです!」

ネプテューヌ「それなら希望はある!っで入り口は何処?」

ネプテューヌが聞くと、フロンは笑顔で答えた。

フロン「あそこです」

そう言っ指差したのは、フロンガーXの後頭部だった。

全員「そこか！イイイイイイ！！！！」

全員が突っ込む。

ネプテューヌ「これを登るの？」

フロン「ですね」

ネプテューヌはため息をついた。

ネプテューヌ「それじゃあプリニーさん。私達が向かう間止めてくれない？」

プリニー「イヤッスよ！いくらなんでも勝てないッス！！」

ネプテューヌの頼みを全力で否定するプリニー達。

ネプテューヌ「イワシ100匹」

プリニー「やってやるッス！！」

イワシ100匹というときと打って変わってやる気になった。

ネプテューヌ「頑張ってね」

プリニー達「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッス！！」
エトナ「現金な奴らね・・・」

エトナはそんなことを愚痴りながらもコクピットに登っていった。

フロンガーX内部・コクピット

ヴィヴィオ「わ〜！すごい！」

サチコ「本物だ〜！」

ヴィヴィオとサチコは中を見て目を輝かせている。
中はまるで船の司令室のようだ。

アルティナ「フロン様、まさかこれも？」

フロン「もちろん！もしもの時のために設置しましたよ！」

フロンは力強く答える。

フロン「操縦するときはそのパネルの上に立つんです」

指差す先には地面が盛り上がっている部分があった。

フロン「あの上に立ってなんやかんやで装備されたら自分が動いた形と同じように動きますよ」

フーカ「なんやかんやって何？」

ラハール「つまり右手をあげればフロンガーXも右手をあげると？」

フロン「その通り！ちなみにこれは私のロボですから操縦できるのは私だけ「わあ〜、これスゴイね」って操縦できてるウウウウウー！！！」

エトナ「いい加減なロボットね」

いつの間にか操縦が出来てるネプテューヌに驚くフロン。
そこに突っ込むエトナ。

ネプテューヌ「さあ！このフロンガーXの力を見せるよ！」
フロン「それ私が操縦して言うセリフです」

そして今、巨大ロボ同士の戦いが始まった。

IBGM巨大クツパ戦byマリオ&ルイージRPG
(Mario & Luigi: Bowser's
Inside Story Music Extended -
Giant Bowser Battle)

ネプテューヌ「まずはパンチだよ！」

ネプテューヌが殴る姿勢になると、フロンガーXも殴る姿勢になる。

ネプテューヌ「くらえ！」

ドゴッ！

一撃を受けてセンコウシャXは後退した。

ゲラビッツ「なかなかのロボだね。けどセンコウシャXはこんな装
備をしているんだよ！」

センコウシヤXのあの部分から2つの球の付いた大砲が現れた。

アルマース「うわぁ！なんですかあれ！」

サファイア「なんじゃあの大砲は？」

アルマース「姫様見ちゃだめです！」

興味ありそうに見るサファイアをアルマースは顔を赤くして目を隠す。

が、ネプテューヌとヴァルバトーゼ達はあの大砲を見覚えがある様な顔になる。

ヴァルバトーゼ「むっ、もしかネオアームストロングサイクロンジエットアームストロング砲ではないか？」

ネプテューヌ「完成度高けーなオイ」

アルマース「アームストロング二回言いましたよ！こんな卑猥な大砲があるんですか！？」

アルマースが反論して問い詰める。

ネプテューヌが答えた。

ネプテューヌ「銀さん曰く、江戸城の天守閣を吹き飛ばし、江戸を開国させちまつた成威族の決戦兵器だ。だって」

アルマース「あんな大砲で銀さんの国がやられたって言うんですか！！」

いくらなんでもあり得ないような内容でアルマースは突っ込む。

なぜ銀時のこと知っているかというと、ネプテューヌから聞いたのだ。

ヴァルバトーゼ「違うぞネプテューヌ。地獄の魔王ネオサイクロン

が作られたといわれる大量殺人兵器だ」
アルマース「さっきと話が違うんですけど」

ヴァルバトーゼの内容に突っ込む。

マオ「いやいや、親父の百年殺しと互角のパワーを秘めた暗黒兵器だ」

ラハール「ちがう。古代魔道士レンゴークが開発した爆発兵器だ」
ロザリンド「確か資料では魔界の創造者アルティマが作られた最終兵器じゃったが」

アルマース「どんだけいっぱいアームストロングの案があるんですか!?!」

エトナ「全国の男共を尊重し、女共を卑猥性に陥れたという最終兵器よ」

アルマース「結局なんなんですかアームストロング砲って!?!」

アームストロング砲、本当に謎多き存在なのであった。

ゲラビッツ「ではネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲、発射!」

ゲラビッツが発射スイッチを押し、大砲から発射される。

ポスッ

・・・とおもったら出ない。

ゲラビッツ「やべっ、弾入れるの忘れた」

全員「ッオイ!?!?!#」

怒りマーク付きで突っ込む。

ネプテューヌ「なにはともあれ、とどめ！」

隙についてセンコウシャXにトドメをさす。

センコウシャXはばらばらと崩れ落ちた。

ネプテューヌ「うわあっけな」

ゲラビッツ「くっそ〜、センコウシャXがやられるなんて。けどこれで終わりだと思ったなら大間違いだよ！ 砦に来てみるんだな！」

ゲラビッツは砦へ飛んで行った。

センコウシャXの戦いが終わった後、フロンガーXは天界へ帰っていった。

フロン曰く、「役目を果たしたら帰るのが基本です！」とのこと。

ネプテューヌ「さあ、早いとこゲラビッツの砦に突入するよ！」

ネプテューヌ達はゲラビッツの砦へ進んでいった。

くおまけ

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！！」

アデル「もう突っ込む気も起きないな。アシスタントは俺と」

ロザリンド「ロザリンドがアシストしよう」

エトナ「あゝ、はいはい、いつもイチャイチャする駄目夫婦ね」

アデル・ロザリンド「誰が駄目だっ！！！」

エトナ「うわ息ピッタシ…まあいいわ。ペンネーム『鳴神ソラ』からの質問よ。『ルイージ』出るんだねあの人達」

スネーク「そして出る予定なんだな…外見のせいで怖がられてる花屋…」

フォックス「しかし…プリニーがクリボー代わりなんだな」

クツパ「あゝあゝあの時は皆良くやってくれたのだ…ちゃんとキノコも後でやったし」

ネス「…まあ、それはともかくどうなるんだろっね」

リユカ「だね」

マリオ「それじゃあ皆に質問」元になっている3以外の俺達のゲームのブラザーアクションを元にしたのも出るのか？」

ルイージ「僕も質問」3の僕達の技のスペシャルアタックを元にした技を銀さん達は覚えますか？」

クッパ「我輩も質問！」道中でネプテューヌが水を飲んだり、レントゲンを当てられる事があるのか？」

そんな訳で次回を楽しみにしています

ネス「どうなるのかな」

真王「1つ目はたぶん無理でしょう。回転すると目が回るしボールになれば腰を痛めるって言っていました。2つ目は多分そんな感じですね。3つ目は可能性があると思います」

アデル「んじや」鳴神ソラ「廊下に立ってくれ。次はペンネーム『三国同盟』からだ。『愛マニアなフロンさんに質問です。』

「この作品でたくさんの女性とフラグを作っている銀さんを、どう思いますか？」

フロン「んも〜？銀さんたら羨ましいくらい愛に満ちていますね？私応援していますよ」

アデル「いやあれ本人はスツゴイ苦労してるみたいだが…、『三国同盟』、初めての質問ありがとな」

ロザリンド「次はペンネーム『支配者』からじゃ。『今回はプリニ』達の技に笑えました。

質問です。大魔王クツパ対ラハールはどっちが強いでしょうか？実際に戦ってみてください。』」

真王「普通にラハールが勝ちます」

ロザリンド「いつも負け続けている奴とは違うの。『支配者』よ、廊下に立つのじゃ。次はペンネーム『月光閃火』からじゃ。『よお…月光閃火だ。』

しかし…新八が不憫でならないな…。とりあえず、新八宛に『アイマード・スーツ（略称：AS） ヴィクトリー』を贈るとしよう。ちなみに普段の待機形態は腕時計だ。（そういつて、新八宛に『アイマード・スーツ ヴィクトリー』を待機形態（腕時計）を転送する）

輝刃「…展開した姿は、V2ガンダムだな…。では、まずは俺から質問だ。」

1. ネプテューヌに質問…後で修羅化して閃火と一戦交えてくれんか？

ハハハ…輝刃、サンキュ 次は俺からだ。

2. アデルとロザリンドに質問…結構ラブラブなようだが、喧嘩はするのか？

輝刃「確かに…あれだけラブラブだと、喧嘩の一つや二つはしている
そうだな…。」『新八よ、お主宛に届いたぞ』

新八「ありがとうございます！『月光閃火』さん！」

ネプテューヌ「使い道わかればいいけど…あと私はああなる気はないから」

アデル「俺とロザリーの？ねえよなそれ」

ロザリンド「あると言えばアデルが力入れ過ぎて皿を割ったり時に
余が皿を落としてしまったりがあったの」

アデル「あゝ、あつたなそう言うの。『月光閃火』、廊下に立て」

真王「次はペンネーム『黒龍』さんからです。『銀時』プリニーの
奴らはなんでネプテューヌが女神に見えるんだ？」

黒龍「炎をケツに付けた本人なのにね」

ソラ「ああそうだな」

銀時「それにしてもキノコになるのは嫌だよなア」

ソラ「語尾にエリは確かに嫌だな」

黒龍「そしてネプテューヌは新しい技を手に入れた！」

銀時「もうほとんどカービイみたいな能力だけだな」

ソラ「余計に食欲増したんじゃないか？」

黒龍「うわゝそれはある意味恐ろしい」

ソラ「じゃあそろそろ質問いくぞ。銀時達に質問だ。ネプテューヌの体の中に入って何かイタズラしようとか考えたか？」

黒龍「ネプテューヌに質問。自分の体の中に人が入っていて一抹の不安がありますか？それと真王さんは最強ですけど、最終的には何を狙っているんですか？」

ソラ「最後に俺からネプテューヌに焼きそばとお好み焼きとたこ焼を贈る」

銀時「じゃあな」『普通に作者をするだけですよ私は』

銀時「そんな暇があるなら早くやりたいよ」

ネプテューヌ「やるの！？・・・2つ目の質問は不安だよ。トイレで用をたすときそこから出てこないかって」

アデル「・・・」『黒龍』廊下に立ってくれ。次はペンネーム『黒神』からだ。『質問します。』

銀時、神楽、フェイト、マヨラーへ

僕の小説で、『狂乱編』で桂とはやてが主役のように大活躍しますが、4人はどう思いますか？（黒笑）『』

銀時、神楽、フェイト、マヨラーもとい土方

「許せるか——————!!!!!!!!!!!!!!」

(怒)「

アデル「だな。『黒神』廊下に立ってくれ」

エトナ「最後にペンネーム『亀鳥虎龍』さんからの質問よ。『万
事屋奇譚幕』の感想書いて下さい。質問です。そっちの銀さんに質
問です。こっちだと、銀さんのが徐々に薄くなっております。どう
思う(黒笑)。』」

銀時「待て待て待て！銀魂がベースなのに主役がとあるの当麻だと
？普通銀さんがメインだろうが！」

真王「『亀鳥虎龍』さん。もっと銀さんの出番を出せ」

プリニー「次回のアシストはマオとラズベリルツス」

真王「それからちよっとバトンを作りました。見てください」

『拠点セリフバトン』

『デイスガイアの拠点でエディット台詞を始める。
キャラのセルフはどんなのか想像してかくべし。』

16は複数OK。

詳細は <http://alphawiki.net/disa4/index.php?%A5%BB%A5%EA%A5%D5%A4%DE%A4%C8%A4%E1#j5e85769>
今回のキャラ：ネプテューヌ（上）、銀時（中）、なのは（下）

1 〽 時空の渡し人〽

「どこかに行くの？行き先を選んで」

「出かけるのか？帰りにパフェ持ってきてくれ」

「出かけるの？行き先を選んでね」

2 〽 アイテム界屋〽

「アイテム界へようこそ。ここで武器のパワーアップをするよ」

「ここはアイテム界だ。ちなみに宇治銀時井界がいいな」

「アイテム界だよ。特訓エリアにはここがお勧めだよ」

3 〽 武器屋・防具屋・よろず屋〽

「いらっしやいませ。ローゼンクイン商会へようこそ。好きな武器やアイテムを選んでね」

「ここはローゼンクイン商会だ。… かつたるいから早く済ませちまおうぜ」

「いらっしやいませ。ローゼンクイン商会だよ。武器はちゃんと装備してね」

4 〽 地獄保嫌所〽

「地獄保嫌所へようこそ。けがの手当てなら任せて」

「ここは地獄保嫌所だ。お前らは気合で治しとけ」

「ここは地獄保嫌所だよ。怪我した人は私が面倒みるよ」

5 〽 裏時空の渡し人〽

「裏面に行くの？強敵がいっぱいあるから気を付けて」

「出かけるのか？お土産に極上パフェ持ってこい」
「裏面に出るの？難しいから気を付けてね」

6 〽技能屋〽

「技能屋へようこそ。技のパワーアップはここだよ」

「ここは技能屋だ。別に武器をきれいにするコーティング屋じゃねえぞ」

「いらっしやいませ。ここは技能屋だよ。技のレベルをあげていこうよ」

7 〽戦拳事務所管理人〽

「戦拳事務所へようこそ。入る？」

「戦拳事務所に何か用か？」

「ここは戦拳事務所だよ。どんなようかな？」

8 〽キャラ界屋〽

「いらっしやいませ。キャラ界へようこそ。自分の力をあげるにはここはお勧めだよ」

「ここはキャラ界だ。別に自分そっくりの奴はいないから安心しろ」

「ここはキャラ界だよ。訓練にぴったりの場所だよ」

9 〽界賊エディット屋〽

「いらっしやいませ。界賊エディットへようこそ。自分のオリジナルの船を造るところだよ」

「ここは界賊エディットだ。界賊名は糖分界賊団でいいだろ？」

「いらっしやいませ。ここは界賊エディットだよ。どんな船を造るのかな？」

10 〽マップエディット屋〽

「いらっしやいませ。マップエディットへようこそ。自分のオリジ

ナルのマップを作るところだよ」

「ここはマップエディットだ。ドットマリオマップだって作れるかもな」

「いらっしやいませ。ここはマップエディットだよ。訓練に最適なマップを作ろうよ」

11～記録屋～

「いらっしやいませ。記録屋へようこそ。過去の冒険の記録はここにあるよ」

「記録屋だ。っていうか恥ずかしい事まで記録にあるのか？…あ、ないわ」

「いらっしやいませ。ここは記録屋だよ。これまでの行動を振り返るならここを見てね」

12～教育的指導員～

「教育的指導へようこそ。…だからってSに目覚めないでね」

「教育的指導はここだ。言っとくが俺はそんな気はないからな。ホントだぞ！」

「ここは教育的指導をするよ。私がO H A N A S Iするから」

13～特産品屋～

「いらっしやいませ。特産品屋へようこそ。アイテムをしつかり保持してね」

「ここは特産品屋だ。悪いが宇治銀時井とパフェは売ってないわ。スマン」

「いらっしやいませ。ここは特産品屋だよ。地域でしか手に入らないアイテムを売りますよ」

14～ミュージシャン～

「いらっしやいませ。音楽屋へようこそ。自分好みの音楽を聞こう」

呼ばれていないからかな？」

な「自慢じゃないけど私胸も成長してるからね。美貌の磨きをして
おこつかな？」

18回す人へ

「黒龍さんのソラさん」

「鳴神ソラでもいいぜ」

「黒神さんの」

真王「いかがでしょうか」

プリニー「って言うか何でこんなところに書いたんスか？」

真王「活動報告見てくれる人少ないから」

プリニー「……………」

第五十三訓：怪獣の戦いはやっぱり巨大ロボで（後書き）

真王「大事なことなので言うておきますが、本当にスイマセンデシ
タ！！」

銀時「お、おいおい…そんなに謝らなくていいから」

真王「いや、言わないといけないって思って…」

銀時「…次回『たまには地味サイドも活躍したい』テイクオフ」

第五十四訓：たまには地味サイドも活躍したい（前書き）

真王「今回短めで新八が活躍します」

第五十四訓：たまには地味サイドも活躍したい

ネプテューヌ達がゲラビッツの砦へ向かう頃、ネプテューヌの体の中にいる銀時達はなにしているかというところ、もうネプテューヌの一部になって・・・

銀時「なつてねえよ！！つーか一月ぐらい放置ってどういうことだコラっ！！これ俺らがメインの作品だろうが！！」

この章はネプテューヌがメインです。

銀時「なんでだアアアアアア！！俺にも活躍させるよオオオオオオオオオオ！！」

神楽「そうだよオオオオオ！！私も活躍させるよオオオオオ！！」

銀時と神楽は出番が少ないことにご立腹のようだ。

そしてその他の人も同じである。

新八「まあまあ銀さん、せっかく出番が来たからちゃんと活躍しない」と

銀時「うるせえよ！地味のくせに！」

神楽「お前が黙れよ地味にくせに！」

新八「お前らが黙れエエエエエエエ！！つーか地味って言うなアアアアアア！！」

地味と言われたので怒鳴る新八。

ゆり「ちょっとあなたたち、そこで暇してるなら探索しなさい」

見かねたゆりが銀時達に声をかける。

銀時「メンドクセえよ。行きたかねえよ」

が、銀時のその一言で終わらせる。

ゆり「あらそう、やってくれたらバナナパフェおごるけど…」

銀時「よっしゃー！！！！行くぞオメエら！！！！」

パフェと聞くや否や、銀時はやる気になって探索の準備にかかった。

桂「全く、パフェごときで揺れるとは侍として情けない」

桂は呆れる。

ゆり「それじゃあ桂さんには極上そばを・・・」

桂「皆の者！俺達は探索に入るから安心しておれ！」

銀時に負けを取らず桂も揺れた。

ゆりは楽しそうな顔をする。

ゆり「あっけなく騙されてるわねあの2人は。クスクス・・・」

新八（え、Sだ・・・）

新八は笑うゆりを見て冷や汗を流した。

他の戦線メンバーも冷や汗を流す。（特に音無が）

ネプテューヌの体内・外れのスペース

現在の探索チームは銀時、神楽、新八、桂、エリザベスの5人…もとい、4人と1匹である。

銀時「んだここ？なんかジメジメすんぞ？」

神楽「変なおいがするアル。女の敵ネ」

ジメジメする雰囲気気持ち悪がる。

桂「なんだか頭が少しムズムズするのだが・・・」

新八「…って桂さん！変なキノコが生えてますよ！！」

銀時「ダツセエー！！お前キノコ生えるまで気付かないなんてアホの証拠だな！！」

新八「あんたもアホの仲間だよ！！！！」

桂の頭にキノコが生えた子のに突っ込みを入れ、それを笑う頭にキノコが生えた銀時に怒鳴る新八。

エリザベス『あの檻にもあるけど…』

エリザベスの指差す先には、コケやキノコがたくさん生えていた。すると、

????「あ・・・、う・・・」

コケやキノコが生えた物体が起き上がった。

銀時・新八「ぎゃあああああああああ！！！！」

銀時と新八は驚いて下がる。

「????」「よろずや・・・久...ぶり...」

そいつは銀時の名前を言った。

新八「ぎ、銀さん知り合いですか?」

銀時「んなわけねえだろ!!こんな檻にいたると言えば怪物だろ!!」

銀時は全力で否定する。

「????」「怪物じゃないぞ!俺だ!」

そいつは周りにコケやキノコを採って、姿を現した。

新八「近藤さん!?!」

銀時「なんだゴリラか」

神楽「おいゴリラ、何でここで寝てるアルか?」

近藤だったことに驚く銀時達。

近藤「いやゝ、実はいきなりネプテューヌ殿が現れては吸い込まれてしまつてこんなところで寝てしまつたわけ」

新八「どんだけ寝たらそんなにキノコが生えるんだよ!!」

ありえないことに新八は突っ込む。

近藤「それで、トシや総悟やス力殿たちはいずこへ?」

新八「土方さん達も吸い込まれたんですか!残念ながら見てません」

近藤「・・・そうか」

近藤は暗い顔になるが、気を取り直す。

近藤「ここに吸い込まれたのも何かの縁だ。俺も捜査に協力しよう」
桂「それは助かる。ではこの檻をどうするかだ」

新八「では僕がやってみます」

新八は手にハンマーを持つ。

新八「うおりゃ~~~~!!!!」

ハンマーを思いっきり振って檻に攻撃……ではなく銀時にあたった。

銀時「イデッ！」

新八「うわ！銀さんごめんなさい！」

新八は謝るが、

シュルルルルルル・・・

銀時が小さくなっちゃった（マギー風）

ミニ銀時「えーーーーー!!!!!!」

新八「銀さんが小さくなった!?!?」

エリザベス「打ちどころが悪いな……」

エリザベスはそんな感想を漏らす。

ミニ銀時「おーい！早く元に戻せ〜!」

神楽「私に任せるネ」

三二銀時「無理に伸ばすな〜！！！」

銀時は元に戻すよう頼む。

神楽が手伝っているが、体を無理やり引っ張っても元に戻れない。

桂「こんなときに敵が出てきたら元の子もないな」

新八「縁起でもないこと言うな！！！」

縁起でもない桂の一言に新八は怒鳴るが、

????「敵いたりして」

桂「何者だ！！」

とげバットを持ったシンプルな顔を持つ敵が現れた。

タンパクくん「この番人、タンパクんだ」

新八「お、お前が？女の子に声をかけて…」

タンパクくん「ナンパクくんじゃねーよ！！タンパクんだよ！！」

バッドで殴って突っ込む。

タンパクくん「そこで寝てるゴリラは俺の餌だ。勝手に手を出すな」

近藤「ゴリラって…」

ゴリラという単語に変な感じになる近藤。

タンパクくん「腐る直前が一番うまいから寝かせておいたんだ」

新八「何処がだよ！！完全に腐ってたじゃねえか！！」

近藤「俺は腐ってませ〜ん！！！！」

グルメ？なタンパクんに怒鳴る新八。近藤は自分は腐ってないとい張る。

新八「まああなたのような敵には銀さんが倒してくれませう」
タンパクん「はあ？その銀時という奴は何処にいるって？」
神楽「あれ？いないアル」

銀時がいなくなったことに何処にいるか探す。

銀時はというと、

ミニ銀時「ぐああああああああああ」

タンパクんに踏まれてました。

ミニ銀時「テメエ！良くも俺を踏みやがったな！！」

銀時はタンパクんを殴るも、あまり効果はない。
それどころか、

タンパクん「なんだ？藪蚊か？」

パシッ！

ミニ銀時「ぐわっ！」

蚊を叩くような感じに潰された。

新八「あ！銀さん！」

潰された銀時に気付く。
が、タンパクくんは気付いていない。

タンパクくん「だから何処にいるんだって!!」

バットを振り回しながら追いかける。

ミニ銀時「テメ待ちやがれこのやる!!」

銀時は飛び跳ねながら追いかけると、

タンパクくん「うるさいハエだな、邪魔すんな!」

ミニ銀時「あべしっ!」

ハエ扱いされて飛ばされた銀時。

そして銀時は膨らんだ部分に激突すると、近藤を閉じ込めた檻が消えた。

近藤「万事屋!助かったぞ!」

近藤は嬉しくそこから出るが、

タンパクくん「勝手に逃げだすなよ!!」

タンパクくんに殴られた。

タンパクくん「もう許さん!弾吐きノック!」

口から弾を吐いて桂に打つ。

近藤「侍の底力はそんなもんじゃないぞ！」

そう言つてタンパクんにくらいついた。

近藤「新八くん！俺がくらいついてる間にトドメをさしてくれ！」
タンパクん「離せこのゴリラめ！」

喰らいつかれたタンパクんは近藤を離そうとする。

ミニ銀時「俺もやるぜ！」

ミニ桂「俺もだ！」

ミニ神楽「私もやるネ！」

銀時達もくらいついた。

タンパクん「銀時…いたのか!？」

ミニ銀時「…つて今頃気づいたんかい!!！」

今頃気づいたタンパクんに突つ込む。

ミニ銀時「新八く!!コイツの動きを止めるからやれー!!！」

新八「で、でもそいつはバット持つてるし…！」

ハンマーの扱いに慣れてない新八とバットを持つタンパクんでは新八が不利である。

ミニ銀時「だつたらバットを取り上げるしかねえか」

タンパクん「バットを離すかバクカ」

バットを上にあげて絶対に離そうとしないタンパクん。

ミニ銀時「だったらこれはどうだ!」

ミニ神楽「撥り攻撃じゃ〜!」

タンパクン「うひゃひゃひゃひゃ〜!〜!〜!」

銀時達に撥られてバットを離してしまった。

ミニ銀時「新八〜!〜!行け〜!〜!」

新八「うおおおおおおおおおおお!〜!〜!〜!」

タンパクン「あ…!」

ハンマーを握りしめ、新八はタンパクんに攻撃…

新八「うおりゃあああああああ!〜!〜!」

ポコーーン

ミニ銀時・ミニ神楽「よわっ!〜!」

全然こたえない攻撃なためタンパクんにノーダメージ。

タンパクン「全然こたえねえよ。やっぱ地味な奴には無理に決まっ
て…!」

シュルルルル〜

ミニタンパクン「え〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!」

新八「え〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!」

タンパクンがちっちゃくなっちゃった

ミニ銀時「俺らといっしょじゃん…!」

エリザベス『打ちどころがいいのか悪いのか…!』

銀時達は啞然とし、エリザベスは呆れの表情になる。

新八「えい」

プチッ

ミニタンパクくん「ぎゃ〜〜〜〜〜〜!!!!!!」

最終的にタンパクくんは新八に踏まれました。

ミニ銀時「新八く、早く元に戻してくんねえかな〜」

タンパクくんを倒した後、銀時は元に戻せるよう頼む。

新八「もう一度叩いたら戻るかも…!」

新八はハンマーを構えて、

ドカッドカッドカッドカッドカッ

ミニ銀時「…って叩き過ぎだろ〜〜!!!」

新八「じゃ、じゃあこれで…!」

三二銀時「戻るかこの野郎！！！！」

今度は出来たたんこぶで大きくなったかのようにするがそれも無理。とりあえず帰ってシヤマルに直してもらおうことにした。

しかしなのは達におもちゃのように扱われてしまい、銀時は元に戻ってもやつれていた。

近藤は仲間になった。

新八は『ミニミニハンマー』を習得した。

新八「こんな技いらねえーーーー！！！！」

くおまけく

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！」

マオ「ハア〜ハツハツハ！邪悪学園理事長マオ様だ」

ラズベリル「そしてラズベリルがアシストするよ」

エトナ「それじゃあまず最初にペンネーム『鳴神 ソラ』からの質問よ。『う〜ん実に残念…』

マリオ「わずか1票の差だな」

ルイーダ「それにしても…色々ロボについてツッコミ所満載だ…」

クツパ「我輩的にネプテューヌが巨大化すると思ったぞ」

フォックス「カードを使ってたか？」

スネーク「フォックス…それはとあるサイトで真の魔法少女と言われてる少女がやった事だぞ…」

ネス「次回はどうなるんだろう？」

リユカ「うん…銀さんを除いた皆さんに質問ですけど…『もし今回の章でのネプテューヌさんが吸い込む力を手に入れましたけど、もし銀さんが吸い込む力を手に入れたらどうなると思いますか？…』」

ルイーダ「フロンちゃんに質問『あのロボどうやって作ったの？かなり費用がかかったんじゃない？』」

マリオ「ゲラコビッツに質問『ロボを作ってた様だが…何の為に作ったんだ？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます 』ズバリ答えるとね…」

銀時以外全員「多分ネプテューヌより吸い込み力が小さいかと…」

フロン「2つ目ですけどそれは企業秘密です。アルティナちゃんのおかげで完成したのですから」

アルティナ「その苦勞がそのためということなのですか…」

アルティナは暗くなった。

真王「後ゲラビッツ曰く、思いつきで、だそうだ。『鳴神 ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

マオ「次はペンネーム『支配者』からだ。『今回はネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲のネタが面白かったです。質問です。ラハールへ、エトナとフロンに忠誠の証として古代エジプトの儀式手うこをさせてはいかがですか？（黒笑）後、銀魂のキャラで手下にするとしたら誰がいいですか？』」

ラハール「おい貴様あ！俺様にウ○コとはどういうことだ！いらんわそんなもん！…つとあいつらで手下にするとえば銀時、神楽、桂、月詠という奴だ」

ラズベリル「それじゃあ『支配者』さん、廊下に立ってなさい。次のペンネームは『黒龍』からだよ。『黒龍』今回はロボが出るとは色々混ぜ込んで凄…」

銀時「もはや銀魂とリリカルなのはの枠に収まりきれてないな」

黒龍「ですね。一番目立っているのはネプテューヌだし」

銀時「それにしても、もうすぐこの長編も終わりじゃねえか？」

黒龍「ああ、確かに。ゲラビッツがボコボコにされる予感大ですな」

銀時「お前も早く真王に追いつくように頑張らないとな」

黒龍「分かってますって」

銀時「そんじゃま、今回の質問。ネプテューヌに質問だ。お前、最近一番悩んでいる事はなんだ？」

黒龍「俺から真王さんに質問です。もし真王さんの小説が削除されたどうしますか？」

そしてリリカルメンバーと女神四人に質問です。幼少期の銀時やソラや桂や高杉やアリスやアリアを見てどう思いますか？」

銀時「そんじゃな」『』

真王「小説が消されたら？もう一回書き直します」

ネプテューヌ「悩み？そうだね…もっともっと食べたかったって思うことだね」

真王「まだ食う気がよー！」

ネプテューヌ「3つ目だけどみんなかわいいね」

ノワール「た、確かにね（すごいかわいい…）」

ブラン「興味ない…」

ベール「あらあら かわいらしい子たちだこと…」

リリカルメンバー「凄く可愛いです…！！！！」

ラズベリル「子供時は人気あるね。『黒龍』さん、廊下立ってなさい」

真王「次回のアシストはリリスでやるぞ。では」

第五十四訓：たまには地味サイドも活躍したい（後書き）

真王「ゲラビッツの砦に潜入！そしてそこにエトナ達にとってムカつく敵が現れた！」

マオ「次回『胸がでかいのは生意気な証拠』テイクオフだ」

第五十五訓：胸がでかいのは生意気な証拠（前書き）

真王「特に書くことはない」

ネプテューヌ「それだけ？」

真王「ええ、これだけ。『リリカル銀魂』開始します」

第五十五訓：胸がでかいのは生意気な証拠

現在、ネプテューヌ達はゲラビッツの砦の前にいる。

ネプテューヌ「いよいよ来たね」

ヴァルバトーゼ「そうだな、プリニーどものお礼とたっぷり返さなくてはならんな」

ほとんどの人がやる気になる。

ネプテューヌ「よし、突入するよ」

ゲラビッツの砦・ロビー

IBGMクツパ城byマリオ&ルイージRPG3
(Mario & Luigi: Bowser's Inside Story - Bowser's Castle)

中に入ると、外見と違い、もりやもう豪華なロビーだった。

フロン「わ！なんですかここ！」

ラハール「ゼニスキーの成金城を思い出すな」

エトナ「あゝ、確かに」

ほとんど金ぴかで出来ている風景にラハールとエトナは懐かしむ。

ネプテューヌ「そんなことより、早くゲラビッツを探そうよ」

ネプテューヌが早く行くよう後ろを向いて言うと、

「???」その不審者！そこで止まれ！」

女性の声が聞こえた。

IBGM強敵登場？by魔界戦記ディスガイア4
(Disgaea 4 Soundtrack - Smash
Beat)

「???」怪しい侵入者め！ここから先は通さないよ！」

そう言ったのは茶髪ボブカットの女性：ならまだしも、下半身が毛が生えて鳥の足みたいなのがあり、そして腕であるm物が鳥の翼になっている。

この魔物は空からの狩りを得意とする鳥女族・ハーピイである。

ハーピイ「みんな！この侵入者どもにお仕置きしてやんよ！」

ハーピイの掛け声仲間が集まる。

現れたのは、緑髪と蛇が同化している感じに下半身が蛇みたいになっている魔蛇族・ラミア。

水色の髪に下半身が魚のような人魚族・マーメイド。

頭に触覚と背中に羽のある水着っぽい服を着ている妖精族・フェアリー。

6本の杖と黒い眼玉が浮いて、黒いドレスに青い肌の魔女族・ウィッチレディである。

ネプテューヌ「うわぁ、結構やる気だねあの人たち」
ヴァルバトーゼ「面白い、その挑戦を受けて立とう」

ネプテューヌ達は臨戦態勢に入った。
ちなみにエトナは、

エトナ「何あいつら？あたし等に喧嘩売ってる様にしか見えないんですけど？」

フロン「奇遇ですねエトナさん。私もそう思っていました」

エトナとフロンが意気投合で殺意交じりにハーピー達を睨む。

なぜかって？エトナとフロンはスルーとしたまな板でハーピー達はデデンとしたビッグメロンであるからである。

はつきり言つて草原と山の差である。

エトナ「テメエら！！あたしに差し置いてよくもそんなもんをぶら下げてやがるわね！！」

槍を構えて怒気混ざりで叫ぶエトナ。

ハーピー「は？あなたこの脂肪の塊がどうかしたの？」

ラミア「あらあら、あなた嫉妬してるのね」

ウィッチレディ「ウフフ、胸が大きいのは罪ね」

マーメイド「人魚族は好きで大きくなつたんじゃありません！」

フェアリー「大きい胸ほど最強なのよ！」

ハーピーは脂肪の塊しか見ておらず、ラミアとウィッチレディは美を感じており、マーメイドはなぜか顔を赤くして怒鳴り、フェアリーは……馬鹿である。

フェアリー「誰が馬鹿よ！」

ラミア「誰に突っ込んでんの？」

空に（天井なんだけども）向かって叫ぶフェアリーに突っ込むラミア。

ネプテューヌ「それにしても確かにみんな胸大きいね。はやてさんが見たら喜びそうだね」

サチコ・遼・雪・時子・ヴィヴィオ・リリス・ミーニャ・アルラ
「あゝ、納得……」

巨乳ソムリエ？のはやてなら喜びそうに思う一同。
ヴァルバトーゼ達は何のことか分かってないが、ロザリンド、アルティナは少し寒気を感じたとか。

ハーピー「とにかく！あんた達はここでくたばってもらおうよ……！」

ハーピーが突っ込んできた。

ハーピー「三打連空！」

ネプテューヌ「くっ！」

空中から滑りだすようにケリを出すハーピー。

ハーピー「今度はアイアンウイングよ！」

両手・・・もとい、両翼が光り出してその翼でネプテューヌに攻撃した。

ネプテューヌはとっさに防ぐ。

ネプテューヌ（ちょっと硬いな…）

ラミア「それぞれ、踊りなさい」

ウィッチレディ「燃やしてあげるわ」

ラミアとウィッチレディはファイアを連射してヴァルバトーゼ達に攻撃する。

ヴァルバトーゼ「ちっ！舐めた事をしてくれる」

フリーカ「だったら任せて！ブーメントマホーク！」

フリーカは手に持っている斧をブーメランのように投げ飛ばした。

ウィッチレディ「きゃあー！」

ウィッチレディに直撃し、倒れた。

ラミア「なっ！だったら、蛇睨み！」

フリーカ「なん・・・」

ラミアに睨まれたフーカは石になった。

デスコ「お姉さま!?!」

ラミア「無駄よ、石になった者は誰にもとけないわ」

誇らしげに言うラミア。

エトナ「じゃあ特にないわね」

いつの間にかエトナがラミアの後ろに回っていた。

ラミアは気付くもすずに遅し、後ろから蹴られて倒れてしまう。

エトナはその上に乗る。

ラミア「く・・・」

エトナ「さあて たつぷり虐めてあげるわ」

笑っているようだが、目が全然笑っていないエトナがサドな顔で言う。

そして『溜まっていた』魔力でラミアを攻撃する。

エトナ「永遠にくたばりやがれこの蛇野郎が——————」

「!!!!!!」

ラミア「きゃあああああああああああああああああ!!!!!!」

エトナのお仕置き(という名の虐殺)でラミアは悲鳴をあげる。

それを見ている者たちはガタガタ震えていた。

ちなみにフーカは元に戻った。

フェアリー「ホラホラ喰らえー!!!!!!」

フェアリーが魔法を滅茶苦茶に発射して来た。

ヴァルバトーゼ・フェンリツヒ「うお！」

フーカ・エミーゼル・アルマース・デスコ「うわああああああ
！！！！」

フェアリー「どうだ！あたしの魔法の威力は！」

どや顔で言うフェアリー。

マーメイド「フェアリー！ちゃんと周りのことも考えて攻撃しなさいよ！」

マーメイドは怒るが、フェアリーはつまらなさそうな顔をする。

フェアリー「え〜、やだ」

全員（子供かあいつは…）

全員揃ってそう思った。

ちなみにネプテューヌとハーピィは今だ格闘中。

フェアリー「あたしの魔法にかかればみんな怖いものなしだー！！」

そう言つて魔法を連射する。

マーメイド「・・・仕方ありませんね。 勇気の歌」

マーメイドが歌い始めると、フェアリーのステータスが上がった。

フェアリー「パワーアップ！」

ヴァルバトーゼ「こいつは！？」

フェンリツヒ「強化魔法か…」

ヴァルバトーゼが驚き、フェンリツヒが推測する。

フェアリー「さあ、このあたしの魔法でぶっ飛ばしてやるわ！きやはははは「させるかー！！」「うげっ！」

大きな火の玉を出して高笑いすると、フーカが後ろから蹴りを喰らわす。

フェアリー「ちょっとあんなにする・・・って」

フェアリーは冷や汗を流した。

上を見上げると、ゆっくりと降りてくる火の玉が…

ボツ！

フェアリー「あちゃあああああああああああああ！！！！」

全身に引火して暴れまわるフェアリー。

フェンリツヒ「馬鹿はやはりそんなオチで終わるだろうな」

マーメイド「妖精族は魔法は使えますけど考えるというのが苦手らしくて…」

妖精族の特徴を説明するマーメイド。

ラハール「成程、というかなぜ親しく話し合ってるのだ俺様達は？」

ラハールの一言にマーメイドはハッ！つとなる。

マーメイド「思わず話し合ってしまったが、ハウリングボイス
！」

マーメイドの口から超音波のような攻撃が来た。

エミーゼル「うわあああああ！！」

フロン「み、耳が…！」

フーカ「何これ！？超音波！？」

攻撃を受けている者たちはマーメイドのハウリングボイスで耳鳴りがなっている。

フェンリツヒ「ぐおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

ヴァルバトーゼ「どうしたフェンリツヒ！！！」

フェンリツヒはヴァルバトーゼ達よりも苦しんでいる。

フーカ「まさかフェンリツち狼だから耳がいいんじゃない…！」

デスコ「それは致命的デス！」

狼は耳が良いためダメージがでかいらしい。

エトナ「えい」

ドカツ！

マーメイド「はうわ！！！」

が、なぜかエトナが後ろからマーメイドを蹴飛ばした。

マーメイド「な、なんで？」

エトナだけ動けることに驚きを隠せないマーメイド。

エトナ「え？なんて？耳栓してるからよく聞こえないのよ」

その答えはエトナが耳栓しているからだった。

ちなみにラミアはもうボロボロ状態である。

エトナ「さうで、何処から攻めよっかな」

サディスティックな顔でマーメイドに詰め寄るエトナ。

マーメイド（ああ…私貞操失っちゃうかも…）

心から崖っぷちに追いやられたマーメイドだった。

一方ネプテューヌは、まだハーピィと格闘中。

ハーピィ「しつこいぞお前！」

ネプテューヌ「絶対離さないもんね！」

格闘中ネプテューヌがハーピィの足にしがみついていたようだ。

ネプテューヌ(このままじゃ拉致が明かない……………そうだ！)

何かを思い出して、よじ登り始め、

ネプテューヌ「それー！」

モニユ！

ハーピィ「ひゃわっ！？／＼／＼／」

ハーピィの胸を鷲掴みにした。

胸を触られたハーピィはバランスを崩して落ちた。

ネプテューヌ「ホレホレ、ココが弱いんか？それともこれかな？」

ハーピィ「あ！、そこは、あうっ！揉んじゃ、ひう！だめええく
くく！」

アルマース「って何やってるんですか！！」

ハーピィの胸を揉みまくるネプテューヌを止めるアルマース。

ハーピィは危ない道を進みかけるところだったらしい。

なおエミールゼルはアルティナによって目隠しされた。

ハーピィ「な、なかなかやるなお前達…」

ヴァルバトーゼ「…なんだか腑に落ちん勝利だがな…。だが俺達の
勝ちだ」

ネプテューヌ「ゲラビッツに言っというて、『ネプテューヌとその一
行が貴様の野望を破壊しに来た！』って」

フェンリツヒ「貴様！『ヴァルバトーゼとその一行』に変える！！」
フーカ「あたし達はその他扱いかい！！」

ネプテューヌのセリフに訂正させるフェンリツヒだが、その内容に怒鳴るフーカ。周りも同意見である。
するとハーピー達が驚きの顔になる。

ハーピー「ネプテューヌ？あんたがそうなの？」
ネプテューヌ「そうだけど？」

ハーピー達は顔を合わせ、話し合った後、ネプテューヌ達に言った。

ハーピー「さつきはスマン。ゲラビッツ様があなた達をご案内しろと命令を受けていたんだ」

ネプテューヌ「ゲラビッツが？」

ネプテューヌは片眉をあげる。

ハーピー「そうだ。今から案内するからついてこい」

ハーピーはそう言って奥へ行った。

ついでにラミア、ウィッチレディ、フェアリー、マーメイドも奥へ行った。

フーカ「本人が招待するの？意外とラッキーかも？」
デスコ「お姉さま……」

アホなフーカに呆れるデスコ。

ヴァルバトーゼ「どう思うフェンリツヒ」

フェンリツヒ「明らかに裏があります。大方ネプテューヌに罫を仕掛けようという魂胆でしょうが」

連れてこいということに明らかに罫だと推測するフェンリツヒ。

ネプテューヌ「みんな！何やってるの、早く来てよ！」

だがネプテューヌはそれを気付かずにいる。

ヴァルバトーゼ達はため息をついてついて行った。

ゲラビッツの砦・会場ドーム

ネプテューヌ「何でこうなるの？」

メタ布斯「サアカカツテコイ！」

なぜかネプテューヌをメタ布斯がデスマッチする羽目になった。

簡単にまとめると、

中に入る。

メタ布斯とエンカウント。

無理やり連れ出される。

檻に閉じ込められる。

現在

という感じである。

メタブス「コナイナラコツチカライクゾ！」

メタブスはパンチを繰り出す。が、

ドガツバキツベキツバコツベシツメキツバガツズドツ！

ネプテューヌ「ウイナー！」

ネプテューヌの敵ではなかったりする。

アルマース「イヤ早いよ…！」

アルマースが突っ込む。

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃんは強いからね」

リリス「母さんは負けないよ」

サチコ「お姉ちゃん最強！」

ロザリンド「それでよいのかお主ら…！」

ゲラビッツ「いや、ホントすごいね君は」

ゲラビッツがネプテューヌの前に拍手しながら現れる。
ネプテューヌは警戒する。

ゲラビッツ「そんなに警戒しなくていいから、勝者にはとっておきの物をあげちゃうよ」

ゲラビッツのとおきとおきというのに引つ掛かるネプテューヌ。

ネプテューヌ「とっておきってなに？言っておくけどつまらない物はいらないよ。持ってくるなら豪華な食べ物にして！」

全員「なんでだあああああああ！！！！」

ネプテューヌに突っ込むヴァルバトーゼ達と今まで見ていたヤジ馬達。

ゲラビッツ「食べ物ならご用意できるよ」

ネプテューヌ「ならいい」

全員「ツオイ！」

ビシッ！と突っ込みを入れる一同。

ゲラビッツ「おい、勝者に褒美の場所を案内してやれ！」

????「ハイハイ」

ゲラビッツの命令にメイド？の妖霊族・ゴーストがやってくる。

ゴースト「さささ、VIPルームへご案内いたしますよ」

ネプテューヌ「御馳走食べ放題」

ご機嫌なネプテューヌはついて行って、ヴァルバトーゼとヴィヴィオ達はため息を吐きながらついて行った。

ゲラビッツの砦・VIPルーム

そこでは、大量のごちそうが部屋いっぱいありました。

ネプテューヌ「うおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

ネプテューヌは興奮している。

ゲラビッツ「ささ、たっぷりお食べ（ククク、体に悪い養分がいっぱい入ってるからそこで醜くなるがいい）」

ゲラビッツは誘うが、内心悪たくみをしている。

ネプテューヌ「いただきまーす」

ギョオオ~~~~~！！

ラハール「ってこんなところで吸い込む奴があるかー！！」

いきなり吸い込み始めたのでラハールは怒鳴る。
数秒後、

ネプテューヌ「御馳走様」

全員「早っ！！」

もうすでにすべて完食してしまったネプテューヌに超驚く。

あれだけ食べた（というより吸い込んだ）のにネプテューヌの体に変化はない。

ゲラビッツ（こ、こいつの胃袋はブラックホールか！？女神ってある意味恐ろしいな…）

ちょっと違う解釈をしまっているゲラビッツ。

ゲラビッツ（…仕方ない、プランZに変更だ）

ゲラビッツはどこかへ立ち去った。

フエンリツヒ（…やはりまたおおごとを起こすつもりだな、あの男は…）

そんなゲラビッツを見て考え込むフエンリツヒ。
すると、

ネプテューヌ「ん？んん！？」

ネプテューヌが口を抑え始める。

ヴィヴィオ「ど、どうしたのネプ姉ちゃん？」

ネプテューヌの異変に気づくヴィヴィオ達。
そしてネプテューヌは口を大きく膨らませ、

ネプテューヌ「ボエッッ！！」

????「ぬおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」
ヴァルバトールゼ達「は？」

ネプテューヌの口からたくさんの人が出てきたことに啞然とするヴ
アルバトーゼ達。

そのため対応が遅れ、

ドガシャーンッ！！

全員「どわああ！！」

ぶっ倒れる。

????「アイタタタ、何処だここは？」

起き上がったのは銀髪で白い着物の男、そうネプテューヌの体の中
にいた坂田銀時である。

新八「こ、ここは外ですか？」

神楽「地面があるネ！」

フェイト「てことは私達出られたんだ！」

スバル「みんな！けがはない？」

どうやら全員ネプテューヌの中から脱出できたようだ。

ラハール「おい貴様ら、一体何者だ？」

銀時「あ？お前大人に対しての礼儀がなってないな。名前を聞くと
くは自分からって親に習わなかったか？」

ラハール「知らん」

ラハールは銀時の言葉を軽く流す。

ノワール「その俺様主義は相変わらずねラハール」

ラハール「む？誰かと思えばノワールではないか！」

ブラン「私もいる」

ベール「ついでに私もですわ」

ノワールがいた事に驚くラハール。

エトナ「って言うか、あんた達今まで何やってたの？30字以内に簡潔に説明して」

ノワール・ブラン・ベール「無理だ（よ）（）ですわ（）」

軽く流す。

ノワール「まあ自己紹介も兼ねて説明すると…」

少女詳細説明中…

ノワール「・・・というわけよ、分かった？」

ヴァルバトーゼ達「ああ、分かった（わ）」

ヴァルバトーゼ達は納得したようだ。

ネプテューヌ「よし！それじゃ銀さんは復活したことだし、探索を
続行するよ！」

銀時「なに俺を死人扱いしやがんだこの野郎！！」

ネプテューヌ「きゃー！ー！」

ネプテューヌは銀時から逃げだした。

なのは達は苦笑いを浮かべながら後をついて行った。
只ノワール達は不安そうな顔をしている。

ノワール「……………」

ベール「まだ心に残りますか？」

ノワール「……まあね」

静かに答えるノワール。

ノワール（ネプテューヌ、あなたは忘れたかどうかかわらないけど・
……あの子のことを……）

ノワールはそこで思考を止めた。

ノワール「行きましょ」

ベール「ええ、ねぶねぶにはあの子のことを覚えてるか知りません
けど……」

ブラン「どうだろうな……」

どこかの魔界

????「クシユン！」

どこかで少女がくしゃみをした。

????「今誰かが私の噂をしたような……」

少女はピンク色のロングヘアで胸はシグナム級のバストを持っていて身長はスバルくらいである。

そして背中に天使の羽がある。

????「けど、誰が何を言われようと私は止まる気はないわ。すべてを終わらせるために」

少女はポケットからロケットを出して開く。

????「そして、いつも私にやさしくしてくれたお姉ちゃんと会うために……」

ロケットの中には少女と、紫の髪の少女・ネプテューヌと仲良く映っている写真があった。

くおまけ

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！」

リリス「はい、アシスタントはリリスがやります！」

エトナ「ちょっと何？あのスツゴイ態度した娘、胸的な理由？」

殺気交じりに睨むエトナ。

エトナ「…まあいいわ。ペンネーム『黒神』から行くわよ。『黒神』
「いやあ、今回は無事に長編が終わったからベール中心の質問しま
すか？」

銀時

「ふうーん、どんな質問すんだ？」

黒神

「まあこんな質問です。」

ベールへ

その1

桂の魔剣士としての姿を見てどう思いますか？

その2

僕の小説のシリアス『狂乱編』も無事に終わりましたが、彼女から見てどこら辺が印象良かったですか？

その3

逆にメツチャ腹が立つところはどこにありました？（黒笑）

銀時

「おいしいiiiiiiii!!!!何か3つ目は明らかに喧嘩売ってるだろ
う!!!!大体なんだよ、（黒笑）って!?!前から思ってたんだけどよ
お、お前メツチャドSな質問時々するじゃねえか!?!」

黒神

「いやあ、何かこう言うのがはまりだして……っいいい（黒笑）」

銀時

（こいつ、にじファン一の最悪な読者だあ!?!?!?!）『……っつて
なにこいつ」

エトナは黒神のやり方に引く。

ベール「順番に答えれば桂さんはかつこよかったですし、印象と言えば変身シーンとい事ですね。ム力つくと言えればあの糞狸が堂々とやりやがったことですがね#（低声）」

目に見えるほど殺気を放つ。

エトナ「『黒神』あんた今日死ぬわよ？」

リリス「それ失礼だよ。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんからの質問だよ。『ルイージ』僕達のギャグ漫画のネタでたあああああああ！！！」

マリオ「俺的にブラザーアクションが出たなと思ったぞ？」

スネーク「流れもほぼ同じだな。」

ルイージ「と言うか新八君：良かったじゃない…一応活躍出来たんだし」

フォックス「しかも中心だったな」

ネス「ネプテューヌに質問『もし小さくなったら何がしたい?』」

スネーク「銀時に質問『自分がハンマー握って相手を殴ったらどんな効果が出ると思う?』」

マリオ「近藤に質問『今回出た新八の技はどう思う?』」

そんな訳で次回を楽しみにしています

マリオ「頑張れよ!」「」

ネプテューヌ「銀さんに甘える」

銀時「おいおい…、多分俺は普通だと思うぞ?」

近藤「どう表現すればいいか分からん!」

リリス「それじゃあ『鳴神 ソラ』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『月光閃火』さんだよ。『よお…月光閃火だ。』

しかし…何時になったら前にぱつつあん宛に送った『アイマード・スイツASヴィクトリー』が出るかな…主に本編で。

輝刃「…まず登場は難しいだろうな。んじゃ、質問行くぞ?まずは俺からだ。」

1. 作者に質問…ぱつつあんミニミニハンマーに技が出来たが、他にもぱつつあんに技を習得させるのか?

確かに…それは気になるな。次は俺からだ。

2. 作者に質問…原作銀魂で描かれていたぱつつあんがメインの『文通編』だが、この小説でもやったりする?

輝刃「ふむ…確かに『文通編』は俺も原作銀魂の話の中で結構好きな話の一つだからな…。」『っで、どうなの作者?』

真王「新八はあれだけで十分。『文通編』はやりません、すいませ

ん。そしてアーマースーツは出さないよ」

エトナ「んじゃ『月光閃火』、廊下に立ちなさい。次はペンネーム『三国同盟』よ。『風祭さんに質問。』

「風祭さんが元生きてた世界は銀さんやなのは達はマンガやアニメの登場人物なんですか?」『』」

フーカ「あたしはデイスガイアの住人よ」

リリス「つまりどつちでもないってことだね。『三国同盟』さん。廊下に立ってなさい」

エトナ「最後にペンネーム『黒龍』からよ。『黒龍』おお、今回は新八が地味活躍しましたな」

銀時「ちっ、ぱっつあんだだけかよ」

黒龍「今舌打ちした」

銀時「俺の扱い酷すぎるぜ」

黒龍「まあまあ、そう言わない」

銀時「ああ、なんか納得いかねえ」

黒龍「あはははは(苦笑)」

銀時「とりあえず、今回の章が終わったらあつちの俺の活躍を見た
いもんだぜ」

黒龍「まあそうですね。期待しましょう」

銀時「そんじゃま、質問するか。ぱっつあん（新八）に質問だ。お前、とりあえず眼鏡割れろ」

黒龍「いや、何その質問！？つうか質問じゃねくね！？」

銀時「だってよーダメガネのせいで俺がちっこくなっただらうが」

黒龍「うわ、すんげえ根に持っている。やられたのはあっちの銀さんなのに」

銀時「黒龍、お前も質問あるんだろ。早くしろ」

黒龍「はいはい、分かりました。ええバカ（新八）に質問です。お前『ミニミニハンマー』と言うとんでもなく凄い技を手に入れたのにいらぬとは、どんだけ贅沢なんだ？バカなのか？クズなのか？ゴミなのか？メガネザルなのか？だからお前は新一じゃなくて新『八』なんだよ。なんだよ『八』って……」

銀時「お前も変わんねえじゃねえか！！しかも俺より陰湿だし！？」

黒龍「だって原作の銀魂で新八が廃人墜ちしたからすんげえがつかりなんだもん」

銀時「ああ、アレには俺もガツカリだ」

黒龍「じゃあ最後の質問。新八、お前とりあえず一回この小説離脱して精神修行してこい。お前にはホントガツカリだから」

第五十五訓：胸がでかいのは生意気な証拠（後書き）

真王「謎の少女の正体は一体？…はどつでもいいとして」

???「良くないです!!」

真王「次回はゲラビッツがミッドチルダにやってきて、ネプテュー
又達も追いかけます！」

フリーカ「次回『パズルゲームは頭が肝心』テイクオフよ！」

第五十六訓：パズルゲームは頭が肝心（前書き）

真王「ちよつとドラクエのあのモンスターが出るかもね」

ネプテューヌ「それで作品消されたりしないの？」

真王「・・・『リリカル銀魂』始まるぞ」

ネプテューヌ「うわ、誤魔化した」

第五十六訓：パズルゲームは頭が肝心

ミッドチルダ・ロストロギア格納庫

ここはロストロギアの保管所、言わばロストロギアの格納庫だ。そこに一人に来訪客が現れる。

管理局員「貴様！なに者だ！」

管理局員が気付いてその人物に立ちふさがるが、

???「ビーーーーー！」

管理局員「ぐあーーーーー！」

機械のようなモンスターのビームによって倒された。

ゲラビッツ「ふっふっふ・・・ついに見つけたぞ！」

管理局員「なっ！それは！」

来訪客：ゲラビッツはある物を手にした。

ゲラビッツ「この管理局の上層部が手に入れた禁断のロストロギア、まだ稼働はしていないが、使い道はたくさんある」

そう言ってそれをポケットにしまう。

ゲラビッツ「さあ！私の計画が実行するとき！今すぐとは言わんが活目するがいい！」

ゲラビッツはどこかへ飛んでしまった。

管理局員「な、なんてことだ。支給本部に連絡を!!!」

魔界・地獄

現在ヴァルバトーゼ達は銀時となのは達と話し合いをしている。ちなみに出番はなかったが、今まで中にいた真選組とナンバーズは協力することになり、捕まった魔物たちは解放された。

ヴァルバトーゼ「ふむ、大体の事情は分かった」

アルティナ「ゲラビッツがネプテューヌさんにあれこれをしたことは分かりましたが、肝心のあの人に狙いが分かりませんね」

ティアナ「確かに、ゲラビッツの動機が分からないままね」

ヴァルバトーゼ「フェンリツヒ」

フェンリツヒ「御安心ください、そろそろ戻ってくるかと」

フェンリツヒがそう言うと、プリニーがやってきた。

スパイプリニー「お待たせしましたツス、フェンリツヒ様。ゲラビッツの行方が判明しましたツス」

フェンリツヒ「…ギリギリのご到着だな。プリニーの心得その6、『御主人様を待たせるべからず』ま、ギリギリだから許してやるとして、情報は？」

スパイプリニー「ハイツス、ゲラビッツは今人間界へ移動したとの

事ツス」

ラハール「人間界にだと？」

ラハールやその他に人も片眉をあげる。

スパイプリニー「ハイッス。けどその人間界はちょっと違うッス。場所はミッドなんとかって場所で…」

なのは達「ミッドチルダ！」

なのは達は驚いた顔でミッドチルダの名を出した。

スパイプリニー「ハイ、そのミッドチルダという世界にゲラビッツが行ったとの事ツス」

ヴァルバトーゼ「ミッドチルダ…聞いたことがある。世界を管理するという巨大組織がある場所ってやつか？」

六課組（そう言う認識なんだ…）

六課組は管理局をそんな認識されてる事にそう思った。

ヴァルバトーゼ「なにはともあれ、場所はわれたのだ。行くしかあるまい」

フェンリツヒ「お待ちください閣下」

フェンリツヒが止める。

フェンリツヒ「無闇にあいつのどこに行くのはあまりいい気がしません」

フリーカ「でもフェンリツヒなら何とかなるんじゃない？」

フェンリツヒ「フツ、分かっているではないか小娘」

フェンリツヒはフツ、と笑う。

ヴァルバトーゼ「フン、毘だろぅが強敵がいようが、俺達は止まる気はさらさらない。行くぞ！皆の者！」

フェンリツヒ「やれやれ、仕方ありませんね……すべては、我が主のために……」

ヴァルバトーゼの号令と共に、なのは達、銀時達、ネプテューヌ達は人間界…もとい、ミッドチルダへ行つた。

ミッドチルダ・外れの小島

ヴァルバトーゼ達はなぜかこんな辺鄙な島に着いてしまった。

ヴァルバトーゼ「ん？なんだここは？」

銀時「なんだここは？無人島じゃねえかこれ！？」

無人島に着いたことに腹を立てる銀時。

ネプテューヌ「いや、これ無人島じゃないよ。ホラあれ」

ネプテューヌがある場所を指差す。

それは何かの研究所だった。

銀時「あ、ホントだ」

ネプテューヌ「私あれをグラビッツのだと思うけどな」

あの建物をゲラビッツの研究所じゃないかと推測するネプテューヌ。

フエンリツヒ「その推測は正しいらしい。その証拠にホラ」

フエンリツヒはある物を見て言う。

それは、吸盤のような四つの足と、右腕にサーベル型の剣、左腕にボウガンを装備している機械だった。

フエンリツヒ「成程、意外な歓迎をされているようだな」

銀時「ってちょっと待てよ！なんでキラーマシン？『ドラクエ』？

あいつドラクエやってんの？」

フェイト「何言ってるの銀時？」

目の前にいる機械はどう見てもドラクエシリーズのキラーマシンそのものだった。

だがフェイトは何の事だか分からないらしい。

するとキラーマシンが戦闘態勢に入った。

ヴァルバトーゼ「おしゃべりする暇はないぞ！皆の者！戦闘配置に着け！」

号令により全員戦闘に入った。

IBGMアイテム界ボスby魔界戦記ディスクガイド4

(Disgaea 4 Soundtrack - Across
The Darkness)

ネプテューヌ「相手が仕掛ける前に倒す！」

ネプテューヌが先制してキラーマシンに切りかかると、

ヴァルバトーゼ「待てネプテューヌ！！」

ネプテューヌ「なっドガッ！」ぶへっ！」

いきなりヴァルバトーゼが叫び、ネプテューヌはふりかえると、何かにぶつかった。

否、正確には見えない何かにぶつかったのだ。

キラーマシン「ピピガ、コウゲキ」

一体のキラーマシンがネプテューヌにボウガンを構えた。

ベール「させません！」

ベールがキラーマシンに銃を撃ち、阻止した。

ネプテューヌ「イタタ、…これって」

キラーマシンから離れたネプテューヌは地面に赤いパネルがあることに気付いた。

ネプテューヌ「ということは・・・あった」

上を見上げると、赤いブロックのようなものがあった。

ノワール「ジオパネルにジオブロック…ゲラビッツもやるわね」

銀時「ジオ・・・なんだって？」

銀時達は頭を傾げる。

ベール「地面が赤く光っているのが靈素の床・ジオパネル、そしてあのブロック型は靈素の結晶体・ジオブロックですわ」

ノワール「ジオパネル自身はあまり意味はないけどジオブロックはジオパネルに乗るとジオパネルに影響が出るの」

ベールとノワールがジオパネルとジオブロックのことを説明する。

ノワール「…にしても『進入禁止』とはね…」

フェイト「え？『進入禁止』？」

ノワール「あのジオブロックの効果よ。その効果のブロックがパネルに乗ったらそのパネルの中に入れないし奥へ行くことも出来ない」

ノワールの説明に全員納得する。

ブラン「でももつと厄介なのがあるわ…」

ブランがあるとこを見て言う。

それはキラーマシンの足元にある青いジオパネルだった。そしてその効果は、『超敵強化3倍』である。

ノワール「あいつなんてもんだしやがったのかしら！」

新八「あの、一体どうしたんですか？」

怒り気味のノワールに新八が聞いてきた。

ノワール「あそこに青色のパネルがあるでしょ？その効果は『超敵強化3倍』で敵の強さが3倍になるのよ！」

銀時「ゲツ！どうすりゃいいんだよ！」

銀時達は慌てふためく。

ネプテューヌ「こっとなつたら……」

ネプテューヌは赤いジオブロックに向けて銃を撃つ。
赤ジオブロックが壊れた。

ネプテューヌ「よし！これで進める！」

キラーマシン「ピピ、ターゲットヲコウゲキ」

ジオブロックを壊されたのが、キラーマシン達が移動を開始した。
そのため『超敵強化3倍』の青パネルから離れた。

ネプテューヌ「おお！これはチャンス！デヤアッ！」

ネプテューヌはキラーマシン3体を切り捨てた。

銀時「まったく、手間かけさせんじゃねえよ！」

そう言いながらも銀時は2体のキラーマシンを切り捨てる。

新八「僕だつて、うおおおおおおお……！」

新八は負けじとキラーマシンに攻撃する。

キラーマシン「ピガ、ピガガ、ガピ……」

ダメージを受けたキラーマシンは壊れたかのように変な音を出す。

なのは「なに？」

キラーマシン「カウンターパワー・・・ハンゲキカイシ」

キラーマシンがものすごい勢いで突っ込んできた。

そして右手の剣を思いっきり振る。

銀時「うお！」

銀時はかるうじて避ける。

が、近くにあった木がスパンと切られた。

キラーマシンは体を回転させて銀時に攻撃。

銀時はそれを防ぐ。

銀時「舐めんじゃねえこのやるし！」

銀時はキラーマシンを弾き飛ばす。

銀時「うおおおおお！！！」

銀時は木刀を構えて突撃し、キラーマシンは剣を構える。

そして両者は剣を振った。

バチバチバチバチ！

キラーマシンの体に火花が飛ぶ。

そして倒れた。

銀時「まったく手間かけさせやがって」

ネプテューヌ「でもこれで先へ進めるようになったね」
ラハール「…いや、まだだ」

安心するのも束の間、ネプテューヌ達の前に新たな敵が現れる。それはキラーマシンと同種のようなのだが、色が違う。

キラーマシンの色は青色だったが、このタイプは濃い緑である。

ヴァルバトーゼ「さっきの奴らの隊長格のようだな」

ネプテューヌ「おお！これは強そう！」

ヴァルバトーゼは見定め、ネプテューヌは興奮している。

キラーマシン改「マヒャドギリ」

緑色のキラーマシン・キラーマシン改が切りかかってきた。
ネプテューヌはかわし、近くの木が切れた。
すると切れた木が凍りついてしまった。

なのは「木が凍った!?!」

銀時「ちよまで、今マヒャド切りって言ったよね？やっぱりドラクエ
じゃ「ヒュン!」「どわ!」

なのはは驚き、銀時は納得しているようだが、キラーマシン改のボ
ウガンをギリギリかわす。

キラーマシン改「ビーーーーー!!」

今度はビームで攻撃してきた。

銀時「どわあああああああ!!」

銀時はビームを必死で逃げる。

ネプテューヌ「させない！ハアアア！」

キラーマシン改「ピピ！」

ネプテューヌが攻撃してきたのでキラーマシン改は気付いて防ぐ。

ネプテューヌ「行くよ！クリティカルエッジ！」

キラーマシン改「マヒャドギリ」

ネプテューヌとキラーマシン改の技が炸裂した。

そしてしばらくすると、

ズバンツ！バチバチバチ！

キラーマシン改「ビ…ギ…」

キラーマシン改は切られて倒れた。

ネプテューヌ「よし！敵部隊の隊長討取ったり〜！」

ヴァルバトーゼ「よくやったぞ！ネプテューヌ！」

銀時「んじゃ殴りこみに行きますか」

銀時、ネプテューヌ、ヴァルバトーゼ達はゲラビッツの研究所へ足を踏み入れる。

離れたところでキラーマシン改が動く。

キラーマシン改「ギ…ガ…ホウコク…ゲラビッツ…サマニ…ホウコ

ク

そう言いながら左腕のボウガンで銀時達を狙う。

キラーマシン改「キンキュウ…ヨウセイ…シキュウ…エン」ドシユ
！「ゴオツ!？」

何処からか矢がキラーマシン改に頭にあたり、キラーマシン改は機能停止した。

???「ついに、ついに見つけたよ、お姉ちゃん」

そしてキラーマシン改にトドメをさした少女はにっこり笑って後について行った。

くおまけく

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生!!」

フーカ「今日のアシスタントは『夢見る乙女』フーカと」

デスコ「『ラスボス希望者』デスコがアシストするデス!」

エトナ「そんじゃあ始めますか。ペンネーム『鳴神 ソラ』からよ。
『マリオ』今回のメタボス戦は一言で言うなら…また俺達のギャグ
漫画の様にあっさりやられたな」

クツパ「羨ましいぞネプテューヌ…我輩なんて食べて太ったぞ…（
遠い目）」

ルイージ「あはは…それで銀さん達が出て来られたね…」

ネス「最後に出た人物って…あれだよな?」

リュカ「確かネプテューヌさん達の次のゲームでの主人公な人だよ
ね?」

マリオ「しかも忘れてる様だな…ラハール達に質問『銀時達を最初
に見た印象はどんな感じだ?』」

ルイージ「銀さん達に質問『ネプテューヌの中から出る時はどんな
感じだった?』」

スネーク「同じく質問だが…『ネプテューヌの中から出た後、はや
てはあれをやっちゃったか?』」

そんな訳で次回を楽しみにしています

マリオ「どうなるのやら…」『ズバリお答えするわ」

ヴァルバトーゼ「銀髪の男は強者とみた！」

アルマース「新八君は苦勞してるな…」

フロン「神樂ちゃんと九兵衛さんは私達と同類ですね！（胸的な意味で）」

サファイア「桂はワシと気が合うの」

プリニー「エリザベスさんってもしかして…いや、何でもないツス」

アデル「あの月詠って女はかなりの達人だな」

ロザリンド「そう言えばなのというものは余と似た声じゃったな」

ラハール「フェイト…ぐはっ！ムチムチ女か！！」

アルティナ「はやてさんはなんだかいやな予感がしますが…」

アデル「シグナムは俺にとって最高の好敵手ライバルだな」

ラハール「ヴィータは俺様と気が合いそうだ」

フロン「シャマルさんは回復士ですね。応援します」

フェンリツヒ「ザフィーラは俺と同類か…（種族的な意味で）」

フリーカ「スバルってフツの女の子よね？」

デスコ「ティアナさんはツンデレデスね！」

エトナ「エリオってなーんか似てるのよね。あ、アデルの髪が」

ラズベリル「キャラは真面目だな。あたしのも見習ってくれ」

真王「え〜と、銀時達が出た後アレのように出したと想像してアレを出しました。そしてはやてもあれを出しました」

エトナ「えげつな！…まあそんなわけで『鳴神 ソラ』廊下に立ちなさい」

フリーカ「えっと次はペンネーム『支配者』って人からの質問よ。『今回も面白かったですね。銀時に質問です。今まで出会ったこの小説の全キャラの中で一番のドSは誰だと思っっていますか？』」

銀時「いやそれを俺に聞くなよ。どっちかというとサド王子かサド魔神ぐらいだろうよ」

フリーカ「サド魔神って…ああ、エトナね。『支配者』、廊下に立て」

デスコ「お姉さまそれは命令形デス…」

エトナ「それじゃあこれで終わりだけどこんなのもあるわよ」

『ダンジョンバトン』

私のオリジナルバトン…かもしれない？

このバトンはダンジョン探索の時に言うセリフを表したものです。ダンジョンによる仕掛け、トラップ、戦闘などをイメージしてかきます。

今回のキャラ：（上から順に）ネプテューヌ・ノワール・ブラン・ベール

0・ダンジョン突入

「よし行くよ」

「さて、さつさと始めるわ」

「…しかたないな」

「さてさて、どんなダンジョンなのかしら？」

1・エンカウント・通常

「よしっ、勝負だよ！」

「さあーで、どのくらい楽しませてくれる？」

「腕慣らしには丁度いい…」

「さ、お手並み拝見ですわ」

2・エンカウント・格上

「なんか、強そうだよー…」

「こいつ…強い…！」

「ああああん？やんのかゴラァ！」

「みなさん、気を引き締めていきましょう！」

3・エンカウント・格下

「任せてー！こんな奴、私ひとりで十分！」

「なんでそんなレベルで挑んでくるの？馬鹿なの？死ぬの？」

「ザコ相手に…私が必要なの…？」
「ふふっ…余裕ですわ」

4・勝利

「まだまだ余裕だね！」
「私にかかればこんなものよ」
「勝って当たり前…」
「あら、もう終わりですか？」

5・楽勝

「ボッコボコにしてやったもんね！」
「弱すぎてお話にもならないわ」
「こんな戦力で勝てると思ってたの…？」
「うふふっ、楽勝ですわ」

6・辛勝

「ちよつと油断したかなあ…」
「まさか、ここまで追い詰められるとは…」
「侮った…？いや…違う…」
「さすがに、今の戦いは応えましたわ…」

7・戦闘不能

「やられちゃった…」
「ありえない…何であたしが…」
「負けた…」
「そんな…私が…」

8・戦闘復帰

「コンティニューだよー！」
「助かったわ！あ、ありがとう…」
「礼を言う…」

「ふふっ、ありがとうございませす」

9・エンカウント・奇襲

「正々堂々勝負しろー！」
「奇襲っ！？どこからっ！？」

「クツ！この卑怯者！正々堂々正面から勝負しやがれっ！」
「後ろを取られるなんて…不覚…！」
10・アイテム使用・自分
「アイテムアイテムっ」と
「しょうがないわね…」
「念のため…」
「これが役立つ時が来ましたわ」
11・アイテム使用・相手
「これ使って！」
「べ、別にあんたのために使うんじゃないのよ！勘違いしないでよね！」
「これ使って…」
「このアイテムで役立つてください」
12・宝箱・普通
「ラッキー」
「それなりに役には立ちそうね」
「やった…」
「いい物を見つけましたわ」
13・宝箱・レア
「これっ、珍しいものじゃない？」
「面白いものが見つかったわね」
「珍しいものね…」
「まあ！素敵なものですわ」
14・宝箱・レジェンド
「うおおおおお…！！これはっ…！！…」
「ま、まじで!?!」
「ウオツすげー…！！…おつと本心が…」
「まあ…！なんて素敵なものかしら…！」
15・仕掛け（扉）
「よいつしよつと」

「よいしょ」
「どつつせい！」
「よいしょ！」
16・仕掛け（オブジェ移動）
「よいしょ、うんしょ」
「どつついせ」
「ふん！」
「よいしょ！」
17・仕掛け（スイッチ）
「なんだろ？これ？」
「なにがおきるかしら？」
「・・・」
「なにが起こるのでしょうか？」
18・コンボリンク
「もう一回行くよーっ！」
「追い討ちよっ！」
「今のうちに削らせてもらおう・・・」
「まだまだ終わっていませんわ！」
19・バトンタッチ
「選手交代！後は任せた！」
「今はあなたに任せるわ」
「任せたわ・・・」
「後はお願いね？」
20・トラップ（トゲ）
「いたっ！」
「あいたっ！」
「いつ！？」
「きゃっ！」
21・トラップ（ヤケド）
「あちちちー！」

「ッッ！」

「てっ！」

「あっっ」

28・トラップ（虫）

「あわわわわわー！！」

「きゃあっ！なによこれー！！」

「うわっ！こっちくんな！」

「きゃっ！なんですか！？」

29・トラップ（落下）

「わあああああああああああー！！！」

「きゃあああああああああああー！！！」

「うわあああああああああー！！！」

「ひゃあああああああああー！！！」

30・トラップ（モンスター）

「うえっ！？何でッ！？」

「なっ！？これって！？」

「モンスター…」

「そんなっ！？」

31・回復

「ありがとう！助かったよ！」

「べ、別に嬉しくなんか…嬉しいです…」

「ありがとう…」

「ありがとうございますわ」

32・自己回復

「回復回復っ」と

「癒しよー！」

「自己回復…」

「バイタリテイ上昇…なんちゃって」

33・味方回復

「回復してあげるよ」

「別にあなたのために回復させるんじゃないわよ!」

「回復してあげる…」

「回復させてあげますわ」

34 . ガード

「おっと」

「なんの!」

「効かない」

「防御ですわ」

35 . ジャンプ

「えい!」

「とう!」

「は!」

「えい!」

36 . 持ち上げ

「よいしょ!」

「よっ!」

「…」

「よいしょ」

37 . 投げる

「えい!」

「それ!」

「デヤッ!」

「セイ!」

38 . コンティニュー

「え?まさか諦めるの?」

「コンティニューする?」

「終わるつもり?」

「コンティニューしますか?」

39 . 死亡、GAME OVER

「ゲームオーバーだよ…」

「もう諦めるのね……」
「フザケンナッ!!このやる!!」
「ゲームオーバーですわ……」
40・レベルアップ
「レベルアップ!」
「よし!レベルアップ!」
「レベルアップ……」
「レベルが上がりましたわ」
41・待機
「うんつと」 背伸び
「髪がほつれてるわ……」 髪をいじる
「……」 黙って読書する
「えつと、ここはこうしてアレすれば……」 ゲームを想像している
42・待機2
「結構疲れたかな」 肩を回す
「ポーズはビシッ!と決めた方がいいわね……」 考えているしぐさを
する
「ZZZ……ZZZ……ハッ!」 眠りに入る
「ちよつときつくなつた気がしますわ……」 胸を抑える
43・必殺技
「受けてみて!私の必殺技!」
「これで終わりにしてあげるわ!」
「まとめてぶつ飛ばしてやる……」
「我が戦術をお見せして差し上げますわ」
44・クエストクリア・ランクE
「うええ、最悪の結果じゃーん!」
「まるで悪夢を見てみたいだわ……」
「おい!何なんだこの結果は!舐めてんじゃねえぞ!このカス!」
「残念ですわ……」
45・クエストクリア・ランクD

「だめだめ！こんなの低すぎー！次はもつと頑張るよ！」
「ち、調子が悪かっただけよ！」
「異議あり！」
「もう一度、挑戦ですわ！」
46・クエストクリア・ランクC
「ふつーだね、ふつー。まだまだ良くなるよ！」
「悪くは無いんだけど、個人的には納得いかないわね」
「良くない…けど、悪くも無い…」
「まあ、こんなところでしょうか」
47・クエストクリア・ランクB
「おおー！これはいい感じの評価だよおー！」
「私が居たんだから、このくらい当然よ？」
「こんなものね…」
「ふふつ、意外に好成绩でしたわ！」
48・クエストクリア・ランクA
「ふつふつーん これも私の活躍あつての結果だね！きつと！」
「ハードとして、当然の結果ね！」
「やるじゃない…凄いわ…」
「素晴らしいですわ！この調子で、次も頑張らしましょう！」
49・クエストクリア・ランクS
「ねぷつ！？えっ？ま、まさかのSゲット！？す、すごいよこれえ
」！」
「し、仕方ないわねー！ほ、褒めてあげるわ！」
「ランクS…ゲットだぜ！」
「凄いですわ！この調子で次も頑張らしましょう！」
50・回す人
「鳴神ソラさん！」
「黒神さんね」
「Sibugaki…」
「黒龍さんですわ」『

エトナ「は、いい、そんなわけで次のアシストはあの幽霊のガキにやらせるわ」

サチコ「サチコだよ」

第五十六訓：パズルゲームは頭が肝心（後書き）

真王「次はネプテューヌ達のかなしいエピソードが出ます」

サチコ「次回『愛が大きければ悲しみも怒りも大きい』テイクオフだよ」

第五十七訓：愛が大きければ悲しみも怒りも大きい（前書き）

真王「今回はシリアスを作りました。ネプテューヌ達のかなしい過去に……」

ネプテューヌ「……『リリカル銀魂』始まります」

第五十七訓：愛が大きければ悲しみも怒りも大きい

ネプテューヌ達はゲラビッツの研究所に潜入し、今も現在進行形で進んでいる。

途中警備していたキラーマシン達と、蜥蜴のような顔で全身緑色で尻尾の生えた斧を持つ人型の龍族、龍人族のリザードマンとエンカウトしたが、ネプテューヌ達の脅威はすさまじく、止まることはなかった。

そんな時だった。

IBGM 悲しみの雨 by 魔界戦記 ディスガイア4

(Disgaea 4 Soundtrack - Sorrow
Rain)

ノワール「ネプテューヌ」

ネプテューヌ「何？」

ノワールがネプテューヌを引きとめる。

ノワール「言おうか言うまいか悩んでたけど、あなたh」「いいよそれ」「え？」

ネプテューヌ「その話はしなくていいんだよ。…今にもあの時の記憶が湧きあがってきちゃう…」

ネプテューヌの言葉にノワール達は驚く。

ノワール「ネプテューヌ…あなたまさか」

ネプテューヌ「覚えているよ…。あの時のことも…。あの子のことも…」

ネプテューヌの小さな背がさらに小さくなった気がする。

ネプテューヌ「今思うと胸が痛いよ…。昔の自分達が馬鹿らしく思えるのに…」

ベール「ええ…今思えばあの時の私達はどうかしてましたわ」
ブラン「…人間どもを殺したくなつた感情が…」

あの事件の彼女達は、気が動転してそんな感情を抱いてしまったよ
うだ。

ノワール「そう…違法研究の実験台にされた彼女が、ほとんど体力
を失って…駆けつけた時にはもう…」

ノワールは悲しそうな目をする。

ネプテューヌ（今思えば優しくかったな…たとえどんなことでも決し
てくじくことのないあの子と友達になれた事が…）

（回想）

それはネプテューヌ達が銀時達と会う前、5年前のことだった。

ネプテューヌ「あれ？君はどうしたの？迷子？」

当時のネプテューヌは、ベンチで座っている一人の少女を見かけた。しかし周りには誰もおらず、ただ寂しそうに座っていた。

少女「お姉ちゃん、誰？」

少女はネプテューヌを見て言った。

ネプテューヌ「私？私はネプテューヌ。見た目はこれだけど女神様なんだ」

少女「女神？女神って大陸を守護するあの？」

ネプテューヌ「そうそれ！」

ネプテューヌは嬉しそうに答える。少女はほほ笑む。

ネプテューヌ「ところで、あなたはここに住んでるの？」

ネプテューヌが聞くと、少女はフルフルと首を振る。

ネプテューヌ「じゃあ別のところ…っというよりあなたの名前は？」

少女「私？わたしは白服の大人からG - 045号と呼ばれているの」

ネプテューヌ「っ！！？」

少女の答えにネプテューヌが驚愕した。

ネプテューヌは確信する。

この子は違法研究によって生まれた人造人間なのだ。

実はネプテューヌの大陸・プラネテューヌに違法研究をしていると噂がある。

当の本人は半信半疑だったが、イストワールのクエストをやっ

たところそれが本当にあつたのだと確信した。

違法研究をやっていたものは、『人造女神計画（通称：プロジェクトM）』であつた。

その違法研究をやっていた者たちは、ネプテューヌ達の活躍によって全員逮捕された。

しかし、研究の被害にあつた子供たちは計り知れなかった。

被害にあつた子供たちは動かない肉へと変わり果ててしまったのだから。

そして、今ネプテューヌの目の前にいる少女は、あの研究の生き残りである。

だからネプテューヌは決断する。

ネプテューヌ「ねえ、私と一緒に来ない？」

少女「え？」

少女は耳を疑った。

ネプテューヌ「帰る場所がないなら私が……ううん、私達が作つてあげるよ。それにその名前はあなたにはすっごく似合わないしね」

少女「いいの？ 私なんかを匿つて迷惑じゃ……」

ネプテューヌ「迷惑とかそういう問題じゃない……」

ネプテューヌが怒り交じりに怒鳴る。

少女はビクツと驚く。

ネプテューヌ「あなたがどんな人だろうとそんなの関係ない！ どう生まれようとあなたは私達と同じ……人間なんだから！」

ネプテューヌの力強い言葉に、少女は涙を流す。

少女「うれしい、私を…そんな風に言ってくれる人がいるなんて…」
ネプテューヌ「そうだね。それに涙を流すのも、自分が人である証
でもあるんだから」

ネプテューヌは少女を抱きながら言う。

少女「ありがとうお姉ちゃん、なんだか少し元気が出たよ」

ネプテューヌ「どういたしまして」

ネプテューヌは笑う。

ネプテューヌ「あ、そうだ。どうせなら君に新しい名前があるね」

少女「名前？」

ネプテューヌは少女の名前を決める。

ネプテューヌ「そう名前、私なりに考えた名前だけど、君の名前は

「

〜回想終了〜

ネプテューヌ（本当に昔が懐かしい。そして…憎たらしい…）

あの子を殺した人間達に対して怒りを表す。

ネプテューヌ（クッ…どうしてこんなに腹の中がどす黒く渦巻いて

いるの？思い出すだけでどうしてこんなに憎悪が湧きあがるの？)

今のネプテューヌは表情と感情を隠すだけで精いっぱい。
手に力が湧きあがる。

ネプテューヌ(ねえ教えてよ。どうしたら私の中の苦しみが無くなるの？)

あの子を思うあまり俯くネプテューヌ。
それを見て心配そうに見るノワール達。

ノワール(・・・やっぱりネプテューヌはあの子から離れられないのね…)

ベール(無理ありませんわ…。あの子をよく慕っていたのはねぶねぶなのですから…)

ブラン(愛が深ければ深いほど、心の傷がそれほどひどくなる…)

そう言うノワール達も心に深い傷を負っていた。

だが、そこですごく空気の読まない奴が来た。

???「見つけたぞ!!」

全長4メートル級の赤い体にとげの棍棒と頭に角が生えている。

一目で鬼と連想するような邪鬼族・タイラント。

???「……………」

もう一方は全身レンガ状で出来た全長4メートルの石の巨人。
頭は角ばって赤いレンズがひとつ。

この者の正体は魔道巨人族のゴーレムと呼ばれるものである。

タイラント「くそ生意気なガキどもめ！今すぐその変面をつぶして
y「ドゴツ！！」ガバアツ！！」

タイラントが言い切る前にネプテューヌが殴り飛ばす。

しかもネプテューヌは苛立っているようだ。

ネプテューヌ「…人が感傷してるって時に、よくもまあ抜け抜けと
前に出てくるもんだね？」

銀時「ね、ネプテューヌ？」

銀時達は様子のおかしいネプテューヌに引く。

ネプテューヌ「人の思い出に……………邪魔をするなあ—————
—————！！！！！！」

タイラント「グアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

ネプテューヌの猛攻撃にタイラントは倒れた。

ゴーレム「……………」

ゴーレムはそんなネプテューヌに後ろから攻撃を仕掛ける。

銀時「あぶねえネプテューヌ！！」

銀時と桂とラハールとヴァルバトーゼがゴーレムの攻撃を防ぐ。
ネプテューヌはふりかえってゴーレムに飛びかかる。

ネプテューヌ「ああああああああああああああああああああ

あ！！！！！」

ネプテューヌはエックスセイバーを思いっきり振る。

ガキーン！！

が、ゴーレムが堅いためあまりダメージを与えられない。
するとゴーレムは手と手を合わせて、ハンマーのようにして地面に打ち付けた。

銀時「うおわっ！！」

なのは「きゃっ！！」

ヴァルバトーゼ「クツ、地震か？」

ゴーレム以外全員がバランスを崩した。

ゴーレムは大地震を引き起こすクエイクインパクトを放ったのだがネプテューヌはとっさに飛んだため影響は受けなかった。

ネプテューヌ「やああああ！！」

ネプテューヌはゴーレムの首筋をとらえ、突き刺した。

首筋から火花がたち、ゴーレムはネプテューヌを引きずり下ろそうとする。

ネプテューヌ「ああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

ネプテューヌはエックスセイバーを思いっきり、奥へ突き刺す。
そして徐々にゴーレムの目に光が消え、完全に沈黙した。

ネプテューヌ「ハア…ハア…ハア…」

エックスセイバーを抜き差し、息を荒くするネプテューヌ。

ネプテューヌ（…まだ残ってる…まだ頭にこびり付いてる）

ゴレムからとび降りて、頭を抱えてうつむくネプテューヌ。

銀時「おいちよっと、ネプテューヌの様子おかしくね？」

見かねた銀時がノワールにとう。

ノワール「……………」

しかしノワールは黙っている。すると、

ベール「…昔、人とは違う生まれ方をした一人の少女がいた…」

フェイト・エリオ「っ!？」

ノワール「ベール…」

ベールが語り始めると、フェイトとエリオが驚愕する。

ベール「しかしその少女は孤独であっても苦の生活であっても決して心を曲げなかった…。そんな時ねぶねぶがその少女を見つけた。少女はねぶねぶの誘いを受け入れ、まるで私達の妹の様に親しんでいた。けどある時事件は起きた…」

ベールは一息ついて言った。

ベール「あの子は、違法研究の実験台にされて殺された…」
女神組以外全員「ツツツツ！！！！！！！！！！」

そこから語られる話は衝撃が強すぎた。

ブラン「私達が駆け付けた時にはあいつはもう虫の生き状態だった。実験による疲労と出血多量で体力を徐々に奪われていった」

ノワール「そんな時、私達の中にある感情が芽生え始めたのよ。…人間に対する憎悪を…」

ノワール達は顔に怒りの感情が見える。

ブラン「私達はその感情を抱くとともにあいつらを半殺しでは済まない事をしようとした」

ベール「ですがあの子は…」

〈回想〉

ゴウゴウと燃え続ける建物の前に、4女神と、もはや虫の息状態ではほぼ血が出ている少女がいた。

その時彼女達は少女にひどいことをした奴らを半殺し以上のことをやるうとしたら、

少女「ま・・・待って…復讐をしたところで…また…悲しみが増えてしまう…」

少女はネプテューヌ達に復讐などやめるよと言っ。

パープルハート「勘違いをしないで！これは、あなたを救えなかった悲しみに対する…腹いせよ！」

ホワイトハート「あいつらを…お前をこんな目にあわした奴らを一
人残らずぶち殺すだけだ！」

怒りをあらわにするホワイトハート。

少女「駄目…女神様が人殺しをするのは…絶対に…駄目な
の…。怒りで…人を殺しては…また悲しみが…生まれるだけ…」

少女のハイライトが徐々に消え、生命がどんどん薄くなっていく。

少女「ああ…何だか…お姉ちゃん…達…が…ぼやけ…て…見え…
…る…」

ブラックハート「しゃべっちゃダメ！傷が！」

少女「ううん…私…のいのち…はもう…そんなに…長く…ない…
よ…」

力なく語る少女が、ある頼みごとをする。

少女「さい…ご…に…おねえ…ちゃん…もつと…見せて…」

ほぼ見えない少女に視界に、パープルハート達が映る。

少女「ああ…お姉ちゃん…やっぱり…私…には…お姉ちゃん…達…
に…もつと…楽しく…できな…かった…のが…心…のこり…
…」

少女は目を閉じ、握っていた手は剥がれおちた。

パープルハート「なっ！ちょっと！しっかりして！こんなところで死なないで！！」

パープルハートは叫ぶも、少女は二度と覚めることはなかった。

〈回想終了〉

ベール「あの子は最後まで、私達に人を傷つけることを止めさせましたわ」

ブラン「私達があいつを思う様に、あいつも私達にことを思っている行動かもしれない…」

ブランは少し意気が墜ちている。

話を聞いた銀時やなのはやヴァルバトーゼ達はそれぞれ反応する。

新八「そんなことが・・・」

神楽「ネプっちはそんな過去があったあるか…」

桂「何と…」

銀時「あいつもそんな過去があったのか・・・」

なのは「辛かったんだね…ネプちゃん・・・」

フェイト（なんだかプロジェクトFが可愛く見える気がする…）

エリオ「悲しすぎます…！」

スバル「うう…ネプテューヌちゃん…」

アデル「その痛み、俺にも伝わったぜ」

アルマース「ネプテューヌさん…」

フリーカ「ネプテューヌにもそんな事情があったなんて…」
デスコ「ネプテューヌさん、がなじすぎデス〜〜!」

それぞれ思う中、フロンは、

フロン（私は、これまでいろんな愛を学んできましたが、これは応えますね。愛する相手を失った悲しみ。まるで昔のラハールさんみたいですね…）

フロンとラハールが出会った頃のラハールは、母を失ったことで愛をすべて否定してきたことを思い出すフロン。

アルティナ「ネプテューヌさん…」

ヴァルバトーゼ「ネプテューヌ…」

アルティナとヴァルバトーゼは悲しみに暮れているネプテューヌを心配する。

するとヴァルバトーゼがあることを思い出してネプテューヌに言う。

ヴァルバトーゼ「ネプテューヌよ。一つ聞くがその少女の名は？」

ネプテューヌ「…ネリア」

元気がない声でその少女の名前を言う。

ヴァルバトーゼ「ではネプテューヌよ。そのネリアのために何をなすのだ？」

ネプテューヌ「ネリアのために…なすこと？」

ヴァルバトーゼ「そうだ。ネリアはお前達のことと思ってこの世を去った。なら、お前達はそいつのためにやるべきものを守る義務があ

るはずだろう？」

ネプテューヌは考え込む。

ネプテューヌ（そうかもかもしれない。ネリアは最後まで私達が人を傷つけることを避けた。もともと私達を愛していたネリアはそれをさせたくなかったのかもしれない…）

ヴァルバトーゼ「それに、ここは魔界だ。もしかしたらそいつと会えるかも知れんぞ？」

ネプテューヌ「え？」

ネプテューヌは驚いたかのような顔になる。

アルティナ「ネリアさんがどんな人かは分かりませんが、きっと心清らかな方でしょうね」

フリーカ「あ、そっか。心清らかな人の魂ってまれに天使になるってことだっけ？」

アルティナの言葉にフリーカが納得する。

ヴァルバトーゼ「その通り、そのネリアなら天使になってお前達の前に現れるやもしれぬぞ？アルティナもその一例だ」

アルティナ「吸血鬼さん…」

ネプテューヌは再び考え込む。

ネプテューヌ（ネリアが天使になって…か。確かに、それならネリアに会えることが出来るかも。そして、ネリアに謝らないといけなかな。ネリア、こんな私を、許してくれるよね…）

ネプテューヌは自然と笑みが出る。

ネプテューヌ「ありがとう、おかげで元気が出たよ」
ヴァルバトーゼ「礼には及ばん。早く行くぞ」

ヴァルバトーゼが先導してネプテューヌ達はついていった。

ネプテューヌ（ネリア・・・何時か…会えるよね…？）

ネプテューヌは仲良しのあの子を思いながらついて行った。

????「覚えててくれたんだ、お姉ちゃん」

遠くからネプテューヌ達を見ていた天使がいた。

????「今から会いに行くよ、お姉ちゃん」

その天使はネプテューヌ達の後をついて行った。

くおまけ

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！！」

サチコ「こんにちは。今日はサチコがアシストするよ」

エトナ「意外と元気ねこの子。ま、いいわ。ペンネーム『鳴神 ソラ』から行くわよ。『マリオ』一言がバトンで埋まったから此処で感想を書くぞ」

ルイージ「ゲラコビッツの奴…何かを盗ったね…」

クツパ「一体何を盗んだのだ…」

ネス「それにしても…前回と今回の最後に出たのオリキャラらしいけど…」

リュカ「どうなるんだろう…」

ソニック「Hey、質問だけ！『銀時を四文字熟語で表すならどんな感じになる？』」

ネス「真王さんに質問だけど…『ネプテューヌの妹さんは出て来るの？』」

リュカ「新八さんに質問『原作の現代の自分を見てどう思いますか

「?..」

「そんな訳で次回を楽しみにしてます」

真王「それなら銀時は馬耳東風が似合うと思いますよ。なんせ人の話聞かないことがあるし。あとネプテューヌの妹ですか？それはオイオイ出す予定ですが…妹さんのプロフィールが分かったので難しいです。さあそして新八の答えは」

新八「別にな変わっていませんね」

サチコ「それって自覚してないってこと？」「鳴神 ソラ」さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『亀鳥虎龍』さんの質問。」

上条

「いや、また凄い戦いが始まったな。」

銀時

「全くだぜ、てかあっちの新八はまだ彼女出来てねえのか？」

阿良々木

「そつみだいだな。」

上条

「そつちの新八さんに質問。俺たちのところの新八さんに彼女が出来ました。どう思う？あと万事屋トリオと六課メンバーに質問。『万時屋奇譚幕』の万事屋をどう思う？以上！」「」

新八「ちくしょー……………!!!羨まし過ぎるぞこんちくしょー……………!!!」

新八は地面に突っ伏してどんと叩く。

相当悔しがっているようだ。

真王「それから彼らの意見では『銀魂関係なのに出版すくねえじゃん!』とのことです。『亀鳥虎籠』さん。廊下に立ってなさい」

エトナ「えつと次はペンネーム『黒神』からよ。『黒神』

「いやあ、ベールもあんなにはやてに対する対抗心が見られて良かったあ」

銀時

「最悪なんですけど!?!こいつほんと最悪すぎじゃねえか!?!」

黒神の黒い表面に銀時は呆れている。

黒神

「ちなみに、はやてはベールに勝った気分で嬉しいようですよ」

銀時

「しらねえよ!?!」

黒神

「では質問します」

ベールへ

真王さんに桂と自分を中心としたシリアスを作ってもらえば？

椎名へ

僕の小説のシリアス『狂乱編』で桂は主役として活躍しましたが、同じ動物好きとして桂に対する対抗心を燃やしていますか？

ゆりとマヨラーへ

僕の小説では銀時と桂は魔剣士となって活躍しました。自分達も魔導士になって見たいですか？
特にマヨラーへ、無理してならなくて良いんじゃない？（黒笑）

銀時

「また喧嘩売るような質問かよオオオオ！！！」

黒神

「だってそうしたほうが面白いじゃん」

銀時

「面白いのはテメエだけだろうがアアアアア！！！！」「……んじやまずー！つ目から」

ベール「そうしたいのは山々ですが、やはり私はそれはない方にしようと思います」

サチコ「意外だね。遠慮するなんて。次」

椎名「・・・浅はかなり」

サチコ「・・・えっと、なんて言ってるの？」

真王「『興味はない』…だ」

エトナ「通訳ありがとう。じゃ3つ目…」

ゆり「魔剣士？そりゃやってみたいわね」

土方「俺は……………止めておくか」

エトナ「あつそう。『黒神』、廊下に立ちなさい」

サチコ「次はペンネーム『黒龍』さんだよ。『黒龍』次回はついに新キャラ登場ですね」

銀時「一体どんな奴なんだろうな」

ソラ「つつか、お前ら言う事そこだけか？」

黒龍「あ、それとパズルが凄かった」

銀時「そうだな。まあ俺はパズル全然やらないけどな」

ソラ「他には？」

黒龍「ああそれと、ゲラビッツが何か企んでいましたね」

銀時「なんか、すんげえロストロギア見つけたとか言ってたよな」

ソラ「とりあえず、もうこれ以上語る事はないな」

黒龍「そうですね」

銀時「そうだな」

ソラ「じゃあ最後に質問いくぞ。ヴァルトーゼに質問だ。お前、イワシ以外に好きな食べ物あるか？」

銀時「俺は真王に質問。あんたの一番好きなアニメとゲームはなんだ？」

黒龍「じゃあ俺は最近ネプテューヌ以外出番が減っている女神三人に質問。最近の自分達の出番のなさについてどう思いますか？」 黒笑「

ソラ・銀時

((こいつ、たまに黒くなるよな)) 「

ヴァルバトーゼ「俺の好きな物はイワシ以外など有り得んと！」

真王「アニメでは『なのは』『銀魂』『ONE PIECE』『フェアリーテイル』・・・ゲームでは『魔界戦記ディスガイア』『東方』『マリオシリーズ』『超次元ゲームネプテューヌ』・・・。ただガンドムのようなロボアニメや格闘ゲームは嫌いです。そして3つ目は」

ノワール「まあこれはネプテューヌがメインみたいなものだし」

ブラン「別に興味はない」

ベール「ねぶねぶにやらせてあげましょう」

サチコ「あれ？意外だね」

サチコは予想と違う反応したことに驚く。

エトナ「んじゃ『黒龍』、廊下に立ちなさい」

真王「そして『鳴神 ソラ』さんのバトンを公開します」

『上から順にマリオ、ルイージ、ソニック、クッパ

0・ダンジョン突入

「行こうぜ！」

「行こう！」

「レッツゴー！」

「ガハハ！行くぞ者共！」

1・エンカウント・通常

「バトル開始だな」

「バトルだね」

「速攻で行くか」

「行くのだ！」

2・エンカウント・格上

「なかなか強そうだな」

「うわぁ…強そうだな…」

「おっと、他の奴等より強そうだな」

「皆の者！引き締めるのだ！」

3・エンカウント・格下

「小さいの出たな」

「これなら簡単に行けるね」

「速めに済ませるか」

「我輩だけで十分なのだ！」

4・勝利

「次に行くか」

「やったね」

「また遊んでやるぜ」

「ガハハ、もう終わりなのか？」

5・楽勝

「簡単に終わったな」

「楽勝だね」

「楽勝だぜ」

「不甲斐無い奴等だ」

6・辛勝

「なんとか勝てたな」

「なっ、なんとか勝てた；」

「ふう〜こつ言つ時もあるや」

「ぬう…今のはやばかったのだ…」

7・戦闘不能

「マンマミィアー」

「マンマミィアー；」

「ノオ〜」

「ぐのおおお…」

8・戦闘復帰

「復活！」

「ありがとう！また頑張るよ！」

「サンキュー」

「助かったのだ」

9 . エンカウント・奇襲

「奇襲か！」

「うわぁ！どこから着たの！」

「おつといきなりだな」

「後ろから来るとは…」

10 . アイテム使用・自分

「アイテムを使うぜ！」

「使わして貰うよ」

「使用するぜ」

「使用するぞ」

11 . アイテム使用・相手

「これを使え！」

「大丈夫？」

「Hey、アイテムだぜ」

「このアイテムを使うのだ」

12 . 宝箱・普通

「おつ、アイテムだな」

「あつ、アイテムだ」

「どんなのが出て来るのやら」

「おつ、アイテムなのだな」

13 . 宝箱・レア

「レアアイテムだな」

「レアアイテムゲットだよ」

「ゲット」

「ガハハ、良い物を手に入れたのだ」

14 . 宝箱・レジエント

「これは伝説の…」

「うわぁ！凄いの手に入れちゃった！」

「ひゅ〜まさかこう言うの手に入るとはな」

「これは伝説のアイテムなのだ」

15・仕掛け（扉）

「よいつしょ！」

「うっんしょ」

「はっ！」

「どっせい！」

16・仕掛け（オブジェ移動）

「よいしょー！」

「よいしょ、よいしょー！」

「せえの！」

「こんなの楽勝なのだ」

17・仕掛け（スイッチ）

「スイッチか？」

「何が起こるんだろう」

「スイッチか：押さなきゃ進めないのか？」

「スイッチなど押して見るに限るのだ！」

18・コンボリンク

「連続で行くぞ！」

「もう1回！」

「決めてやるぜ！」

「手を緩めずにもう1回なのだ！」

19・バトンタッチ

「此処は任せるぞ」

「ごめん、任せた」

「頼んだぜ！」

「此処は頼むのだ」

20・トラップ（トゲ）

「いたっ！」

「あいた！？」

「おうち！」

「ぬおっ！？」

21・トラップ（ヤケド）
「あち！炎系か」
「あつつ！？」
「熱すぎるぜ！」
「尻尾が焼けるのだ！」
22・トラップ（毒ガス）
「毒ガスか！？」
「気分が…」
「やばいで…」
「なんと毒だと！？」
23・トラップ（グルグル）
「やべえ…目が…」
「目が回るよ」
「こんなの屁でもないぜ」
「ぬおお…複数に見えるのだ」
24・トラップ（ビリビリ）
「体が痺れる」
「あびやびやびやびや！！」
「痺れるぜ！」
「し〜び〜れ〜る〜のだ」
25・トラップ（トランポリン）
「うわあ！」
「ひゃあああ！」
「おっと！」
「のわあ！？」
26・トラップ（爆弾）
「どわあ！」
「ひええええええ！」
「うわあ！」
「ぶぼっ！」

27・トラップ(タライ)

「あいた！」

「何でタライ？」

「いて！」

「どう言う風に仕掛けられてるのだ？」

28・トラップ(虫)

「虫の大群か！？」

「虫が来たああ！」

「おっと！」

「虫に埋もれるうう！！！」

29・トラップ(落下)

「うおおおお！！！」

「うわああああ！！！」

「のお~~~~！！！」

「ぐおおおお！！！」

30・トラップ(モンスター)

「モンスターか！」

「モンスターが来た！」

「モンスターが着たな」

「なんとモンスターが降って着たのだ」

31・回復

「よし！回復したぜ、サンキュー」

「ありがとう！おかげで助かったよ」

「センキュー！」

「おかげで大暴れ出来るのだ」

32・自己回復

「回復だ」

「回復しないと」

「自分で回復するぜ」

「我輩自身出来るのだ」

33・味方回復

「大丈夫か？今回復するぞ」

「今回復するね」

「回復させるぞ」

「今回復させるのだ」

34・ガード

「ガード」

「防御しなきゃ！」

「防御するぜ」

「防御なのだ！」

35・ジャンプ

「ジャンプ！」

「やあ！」

「とう！」

「なのだ！」

36・持ち上げ

「よいしょ！」

「うんしょ！」

「よつと」

「軽いのだ」

37・投げる

「喰らえ！」

「いっけえ！」

「プレゼントだ！」

「喰らえなのだ！」

38・コンティニュー

「コンティニューか…」

「コンティニューする？」

「コンティニューだぜ」

「コンティニューするのだ！」

39・死亡、GAME OVER

「ゲームオーバーか…」

「此処までなの…」

「まだまだ行ける筈だぜ！」

「ゲームオーバーなど納得行かんぞ！」

40・レベルアップ

「レベルアップ」

「レベルアップだよ」

「レベルアップ」

「レベルが上がったのだ！」

41・待機

「一眠り、一眠り」 寝転がる

「よいしょ」 屈伸

「足を暖めないとな」 準備運動する

「暇なのだ…」 座っている

42・待機2

「zzzzzz」 寝ている

「うんしょ！」 体操している

「まだか？」 足をトントンしている

「うむ、大丈夫だな」 甲羅の汚れを確認している。

43・必殺技

「行くぜ必殺技だ！」

「これで決めるよ！」

「決めてやるぜ！！」

「我輩の力を見せてやるのだ！」

44・クエストクリア・ランクE

「うーん、もうちょい修行がいるな」

「あそこでドジを踏んだからかな？」

「ノウ…悪すぎだぜ」

「残念無念なのだ」

45・クエストクリア・ランクD
「もつと行ける筈だ」
「この次は頑張ろう！」
「行ける筈だろ？」
「これは後でまたやるのだ！」
46・クエストクリア・ランクC
「普通だな」
「これはこれでよかったかな？」
「普通だな」
「真ん中なのだ」
47・クエストクリア・ランクB
「後少しだな」
「良かった」
「もう少しで高ランクだな」
「我輩がいるからもう少しあげるのだ」
48・クエストクリア・ランクA
「よし！ランクAだな」
「やった！ランクAだよ！」
「これ位朝飯前さ」
「ランクAクリアなのだ！」
49・クエストクリア・ランクS
「よし！ランクSゲット！」
「凄いよ！ランクSだ！」
「楽勝だぜ」
「ガッハハハ！我輩がいるのだ！ランクSなど当たり前なのだ！」
50・回す人
「ハルルに回すぞ！」
「G・3Xさんに回すよ」
「月光閃火にバトンを回すぜ」
「龍牙に回すのだ！」

…バトンはこんな感じで』

真王「いかがでしょうか。それでは次回を待て」

エトナ「あ、それから次回はネプテューヌがアシストするから」

第五十七訓：愛が大きければ悲しみも怒りも大きい（後書き）

真王「今回はゲラビッツとの対決！そしてあの子も登場！」

ネプテューヌ「次回『ほったらかしにされたら誰だって怒る』テイ
クオフ」

第五十八訓：ほったらかしにされたら誰だって怒る（前書き）

真王「ゲラビッツが盗んだロストロギアの正体が！」

ネプテューヌ「『リリカル銀魂』始まるよ！」

第五十八訓：ほつたらかしにされたら誰だつて怒る

ネプテューヌ達は次々と敵を倒し、研究所の屋上へとたどり着いた。

ゲラビッツ「よく来たな！お前達！」

ゲラビッツは堂々という。

ゲラビッツ「まさか私の部下達でも止められぬとは予想外だな。だが、奥の手というものは最後に取っておくべきと思わんか？」

マオ「うむ、同意見だ」

デスコ「ラスボスの勉強になるデス」

アルマース「参考にしちゃダメです」

同意するマオとデスコにアルマースは突っ込む。

ゲラビッツ「本来ならまだ使う気はなかったんだが、いた仕方あるまい」

そう言つて取り出したのは3つの黒い宝石だった。

銀時「！？そいつは！」

全員「ダークソウル！？」

ゲラビッツ「その通り！こいつはダークソウル！闇の心を持つ者に力を与える優れモノなのさ！」

ダークソウルのことを説明するゲラビッツ。

なのは「あなた…それを何処で！」

ゲラビッツ「よくぞ聞いてくれました！何と個のダークソウルは口ストロギア保管所にあったものから盗んだのだ！」

なのはたちはそれを聞いて驚愕する。

ゲラビッツ「管理局上層部が手に入れたこのダークソウル…今こそ力を試すとき！」

フェイト「や、やめてえ！！！」

ゲラビッツ「止めない　ダークソウルよ！我に力を与えよ！！！」

ゲラビッツは狂った笑いを浮かべてダークソウルに命令する。

ダークソウル「……………」

が、なぜかダークソウルは反応しない。

ゲラビッツ「お、おいどうした？ダークソウルよ、お前は闇の大きいものにしか聞かないはず……………ん？待てよ……」

ゲラビッツは何かを思い出してなんか装置みたいなものを出す。そしていろいろといじっているとゲラビッツは驚いた顔になる。

ゲラビッツ「何つうこった…まさか我よりも大きな闇を抱える奴がいるなんて……」

なのは「えっ？」

ティアナ「ど、どういうこと？」

ゲラビッツ「分からののか？お前らの中にとびつきり強い闇を抱えている奴がいるんだよ！」

ゲラビッツの言葉に全員が驚いた。

ゲラビッツ「ダークソウルを従うことが出来るのは大きな闇を抱える者なのに、我の闇よりも大きな奴がいる」
銀時「おいおい、そりゃ誰だ？」

銀時が聞く。

ノワール、ブラン、ベールはもしかやと思い始める。

ゲラビッツ「それはな……その紫髪の子だよ！」

全員「なに!？」

ネプテューヌ「え？」

ゲラビッツの衝撃的なことに全員が驚く。
特にネプテューヌが一番驚いたようだ。

ゲラビッツ「その小娘から強力な闇を感知されているぞ。しかもその闇は“人間に対しての憎悪”と“失ったものの深い愛情”のようだ！」

衝撃的な事実には驚きを隠せない銀時達。

ノワール（クツ…、なんてこと…私達があの事を話したせいでネプテューヌにまた闇が生まれてしまった…）

ノワールもブランもベールも、あの事を話したせいでひどく後悔した。

ゲラビッツ「クツッ、我の命令も聞けないんじゃないやどつすればいいんだよ！」

ゲラビッツが悔しがっていると、ダークソウルが光る。

ダークソウル「簡単ダ、貴様が死ネバイイ」

そしてゲラビッツの真上に黒い光の球が現れる。
何やら黒い電気がバチバチと音を鳴らしている。

ゲラビッツ「うわ…死ぬ場面がやってくると思ってたけどまさかこんな形で死ぬなんて…」

ダークソウル「当たり前ダ。死ネ」

黒い光の球から、黒い稲妻がゲラビッツに向かって落ちてきた。

ドンッ！バーーッ！！

ネプテューヌ「グウウッ！！」

銀時「なっ！？」

スバル「ネプちゃん！？」

こんぱ「ねぷねぷ！？」

ヴィヴィオ「おねえちゃん！？」

何とネプテューヌがゲラビッツを突き飛ばして代わりにダークソウルの攻撃を受けたのだ。

ダークソウル「自ラ犠牲ニシテ前ヘデルカ。ダガ好都合ダ」

ダークソウルは手のような黒い何かを出し、ネプテューヌに近づく。

ダークソウル「サテ、貴様ノ闇ライタダク」

ダークソウルはネプテューヌに手をかざすと、ネプテューヌから黒い霧のようなものが手に吸い込まれていく。

ネプテューヌ「グ、ウウウ・・・」

フェイト「な、なにあれ？」

ゲラビッツ「あれは彼女の闇の元素だ！全部吸い取られたら一生あいつの下僕となっちゃうよ！」

ゲラビッツの説明に全員が驚愕する。

銀時「ちっ！待ってる！今助けな！バチイツ！！」グオツ！」

銀時がネプテューヌを助け出そうとすると、黒い障壁が銀時を拒んだ。

ダークソウル「フン、我ノ邪魔ヲスルナ。小娘ヨ、我がシモベトナレ」

????「そうはさせないわ！」

ダークソウル「ム？」

何処からか少女の叫びと共に白い閃光が飛んできた。

閃光は障壁をつらぬいたが、ダークソウルは紙一重でかわす。

ピンク色のロングヘアで胸はシグナム級のバストを持っていて身長はスバルくらい、そして極めつけは背中に天使の羽がある少女だった。

ダークソウル「キサマカ！」

????「これ以上あなたの好き勝手させるわけにはいかない！」

少女は弓を構えてダークソウルに言う。

ダークソウル「シッコイヤツメ！ソコマデシテ死ニタイヨウダナ！」
「???」なんとでも言いなさい！神兵長様に活せられた使命、ここで果たす！」

ダークソウル「ホザケ小娘！中途半端トハイエコヤツノ闇ノカヲミセテヤルカ」

ダークソウルに闇がまとわりつく。

そしてはれるとそこにはパープルハート・・・のようだが目は赤く、体も髪も黒い。

ダークソウル? 「・・・なんだこの妙な体の奴は?・・・ああ、我が」

声もほぼパープルハートそっくりである。

ダークハート「そうだな。この体の名前をとってダークハートと名乗って置くか」

「???」下種め！人に化けるなど！」

ダークハート「黙れ小娘が!...ちようど良い、この体の性能を試してみるか」

ダークハートが剣を持ち、少女に切りかかる。

少女は懐から剣を取り出してそれを防ぐ。

反撃に少女は体を回転させて薙ぎ払うが、ダークハートはそれをかわす。

次の瞬間目にも止まらぬ速さで少女がダークハートに切りかかった。ダークハートはそれに気づいて防ぐ。

銀時「なんだこいつは・・・」

桂「あの動き、あのしなやかさ…形は違えど、あの少女は我々と同じ侍の匂いがするな…」

月詠「イヤ、絶対に侍になれるもんじゃないぞ？」

銀時と桂が驚くが、月詠は桂のセリフに突っ込む。

ノワール（あの動き…あの剣さばき…あれは私の戦闘ポジションみたいだわ）

ノワールは少女の動きを見て推測する。

ノワール（私のだけじゃない。ブランの動きかたやバールの攻撃作法、そしてネプテューヌの身軽さもよく似ている。もしかしてあの子は……）

ノワールは少女の正体を予測した。

ダークハート「フンッ」

????「きゃあっ！」

だが少女はダークハートの足払いを受けて転んでしまう。

ダークハート「油断したな！死ね！」

????（しまった！やられる！）

少女は目をつぶる。

ガキインッ！！

ダークハートの剣が止められた。少女は目を開けると、ネプテュー

又が防いでいた。

銀時「ネプテューヌ!」

ネプテューヌ「ハアアアアアアアアアア!!!」

ネプテューヌはダークハートを弾き飛ばした。

ダークハート「おい貴様、なぜ赤の他人を救うのだ?」

ネプテューヌ「……この人が赤の他人だって頭で理解しているよ。だけど、このまま黙って見過ごすのはどうしても出来ないって心が叫んだんだよ!」

ネプテューヌが少女を助けた理由を言う。

ネプテューヌ「でも、なぜだか知らないけどこの人が他人って思えないんだ。なんか、とても懐かしく、そして、この人がもしかしてって思うの」

ネプテューヌが少女に向く。

ネプテューヌ「ねえ、あなたはもしかして……」

そして、少女の名を口にす。

ネプテューヌ「……ネリア、なの?」

ネリア?「……………」

ネリアと呼ばれた少女は黙っている。

なのは「ね、ネリアって……」

ティアナ「確か、ネプテューヌさん達と一緒にいたあの…」

エリオ「でも50年前の子供で…」

スバル「違法研究で生まれ…」

桂「そして死んでしまったあの少女…まさか」

なのは達はネリアという名の少女のことを思い出す。

ネリア？「私がネリアってことはどうして分かるの？」

ネプテューヌ「それはね…日本の首都は？」

ネリア？「滋賀！千葉！佐賀！」

ネプテューヌ「隣の客は？」

ネリア？「よく客食う客だ！」

ネプテューヌ「三步進んで？」

ネリア？「二歩下がる！」

ネプテューヌ「ノワールの趣味は？」

ネリア？「声優兼バンド願望者！」

ノワール「こらーーーーー！！！」

ノワールが怒る。

って言うかスツゴイノリがいいネプテューヌと少女。

ネプテューヌ「最後に、ハーケン…」

ネプテューヌ・ネリア？「ダーーーーーッ…！」

ネリア？「…ってのはっ！？」

少女は今頃乗せられたことに気づく。

ネプテューヌ「やっぱり…」人が聞いたことを素早く答える『、こ

れは私がネリアに教えた教訓だもん」

銀時「凄い教訓作法だなおい…」

銀時は呆れる。

ネプテューヌ「そつか、あなたはやっぱりネリアなんだね」
ネリア「・・・ばれたら仕方ない。そうだよ、お姉ちゃん」

少女・ネリアは本人だと認める。

ノワール「やっぱりね」

ブラン「微妙に見覚えがあった」

ベール「雰囲気が少し似ていましたしね」

ノワール達も納得したようだ。

ネプテューヌ「やっぱり…ネリアーーーーー！」

ネリア「お姉ちゃんーーーーん！」

2人はお互い駆け出し、感動の再会を果たす…

ネプテューヌ「このバカたれーーーーー！！！！」

バキッ！

ネリア「ゴハッ！！」

女神組以外全員「エエ~~~~~」
~~~~~！！！！！！！！~~~~~」

なぜかネプテューヌがネリアを殴り飛ばした。

周りは皆驚いている。

ネプテューヌは倒れたネリアに、コブラツイストで絞める。

ネプテューヌ「この馬鹿！人が悲しいほど心配させて！！」

ネリア「イダダダダダダダ！ごめんごめん！ごめんなさいですから離してお姉ちゃん！」

ネプテューヌ「ゴメンで済んだら神も仏もいらないよ！大体天使にでもなったら何か手紙でもくれたらよかったんじゃないの？」

ネリア「そうしたかったんだけど仕事が忙しくて出せずにいせなかつたの！」

ネプテューヌ「言い訳すんな〜！！！」

ネリア「グエエエエ！ギブギブギブ！」

絞める強さをあげるネプテューヌ。

ネプテューヌ「今思いだしたんだけどネリア昔トマトジュースとタバスコを間違えて私に火を吹かせたよね？」

ネリア「ゲツ！そ、そこまで覚えてたの？」

ネリアは冷や汗を流す。

ノワール「私なんかジュースこぼしてギターを台無しにされた記憶があるわ」

ブラン「私は読みたかった本を燃えるごみと一緒に捨てたことが…」  
ベール「私はお気に入りのゲーム『ドキドキメモリアル』のカセットごと踏ん付けられて壊しやがったことがありますわ」

ネリア「・・・」

ネリアは滝のように汗を流す。

ネプテューヌ達は今までネリアにしてやられたことを思い出して黒



い気を出している。

ネリア「でも「ネリア！そこに座れ！」はいっ！…！」

ネリアはビシッ！と正座する。

ネプテューヌ「あれからどんな感じに変わったかと思えばやっぱり変わっていないというか…！」

ノワール「って言うかあなたこの前のことちゃんと反省してるでしょうね？」

ブラン「テメエには後でパシリをさせてもらおう」

ベール「これから二度とあのころのようなことはしないと誓えますね？」

ネリア「は、はい…（来るんじゃないかな…）」

ネプテューヌ達の説教が始まった。

アイエフとコンパは力なく笑う。

ネリア「あの…私今任務「誰が口出ししろといった？」ゴメンナさい」

ダークソウルのことを言おうとしたら、無理であった。

数十分後…

ネプテューヌ「……っというわけで、ネリア、ちゃんと決まりは守ってね」

ネリア「は、はい…（足がしびれた…）」

やっと説教が終わった。

ネリアは立ち上がるうとするが、長く正座してたため足がぐくぐくである。

ダークハート「もう話し合いは終わりか？」

ダークソウルは仁王立ちして待っていた。

ネプテューヌ「あ、待っていてくれたんだ」

ダークハート「このまま手を出すのはあまりいい気がしないんでな。用が済んだなら始めるか」

ダークハートは剣を構える。

銀時「おい偽ネプテューヌヤロー。テメエがどうしようが俺の世界に入った奴は誰であろうと許さん」

銀時は木刀を構える。

ダークハート「貴様は……ふむ、成程な」

銀時「あん？なにがだ？」

ダークハート「白き侍よ。貴様は誰であろうと許さんと言ったが、この者は切れるのか？」

ダークハートが魔方陣を出して一人の真っ黒な人間を召喚する。  
その人物を見て、銀時と桂が驚愕した。

銀時「なっ!?!」

桂「馬鹿なっ!?!な、なぜっ!?!」

ダークハート「驚くのも無理もないな。なんせ死んだお前達の『恩師』が目の前にいるからな」

ダークソウルがあざ笑うかのように言う。

召喚されたものは、ほとんど黒いが、その姿はまぎれもなく銀時と桂、そして高杉の恩師である吉田松陽よしだしやうなのだ。

ネプテューヌ「…あの人は一体」

桂「あの方は、俺達や銀時の師匠であり、先生でもあつた吉田松陽よしだしやうというお方だ」

全員「えっ!?!」

桂の説明に驚く。

コンパ「た、確かその人は桂さん達が攘夷戦争を始める前に処刑されてて…」

アイエフ「つてことはあの人は偽物だわ!」

桂「見た目で分かるようにそくだ!銀て「バシィ!」うわあ!」

桂は見えない何かに阻まれた。

ネリア「これは結界!?!それもかなり強力だわ!」

なのは「どうしよう!壊せそうにない!」

ネプテューヌ「あれ?銀さんだけ外だ」

どうやら銀時以外は結界に閉じ込められたようだ。

銀時は偽松陽を見て固まっている。

桂「銀時！動くんだ！その先生は偽物だ！切らなければやられるぞ！」

ダークハート「こいつがその人に切る覚悟があればだけどな」

ダークハートは嘲笑う。

銀時「・・・お、おれは・・・切れねえ・・・」

新八「何言ってるんですか銀さん！！」

神楽「そうネ！銀ちゃんさっさと倒すネ！」

フェイト「銀時！先生がどんな人か知らないけどその人はダークソウルが作った幻影、偽物だよ！」

新八たちが言うが、銀時はわなわな震えていう。

銀時「俺は切れねえ！頭で分かっているも・・・偽物だとしても・・・俺はこいつを・・・先生を切れねえ！！」

つらそうな顔をして拒否する銀時。

桂「銀時・・・お前・・・（やはり銀時・・・先生のことを・・・）」

ダークハート「どうあっても切れないようだな？だったら」

偽松陽は銀時に近づく。

そして刀を振り上げる。

ダークハート「その先生に殺されてる！」

ネプテューヌ「銀さん!!」

叫び虚しく銀時の上から刀が下りてくるのだった。

くおまけく

エトナ「教えて!!」

全員「エトナ先生!!」

ネプテューヌ「こんにちは、ネプテューヌがアシストするよ」

エトナ「そんじゃ行くわよ。ペンネーム『鳴神 ソラ』から行くわよ。『マリオ』ネリアの言う通りだな…もしあのままネプテューヌ達が力を振れば自分達と同じ事を起こそうとする奴が増えるかもしれないからな…」

ルイージ「それで分かったね…」

クツパ「うむ…次回でちゃんと出そうだな…」

ネス「ゲラコビッツが盗んだのは…」

リユカ「どうなるんだろう…」

フォックス「そんな訳で質問『4人のバトンでのセリフはどうだった?』」

ネス「スバルさん達に質問『ここんとこの自分達の出番についてどう思いますか?』」

リユカ「同じく質問ですけど…』なのはさんを4文字熟語で表すならどんな感じ?』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます 『」

真王「それでは1つ目と3つ目は私が。いろいろと凝りました。なのはの四字熟語は多分、全力全壊ではないでしょうか。そしてスバルたちはというと」

スバルたち「出番がな~~~~い!!!」

真王「ハイあんな感じですよ。では『鳴神 ソラ』さん。廊下に立って下さい」

ネプテューヌ「次、ペンネーム『支配者』さんからの質問。『今回は感動的でしたね。質問です。真王さんは次は何とコラボさせるつもりなんですか?もう少し激しいバトルが多い作品とコラボさせる」と面白いともいますよ。後バールに質問。自分の事をドSだと思

ますか？』」

真王「ネタばれしちゃ面白さが減ります。少し明かすと銀河の世界ですね」

ベール「さあ？どうでしょうね？」

エトナ「・・・あれ分かってて言うてるの？まあいいわ。『支配者』、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『月光閃火』からよ。『ネプテューヌ』にも哀しい過去があったとはな・・・何か切なくなってきたぜ・・・。

輝刃「だな・・・さて、質問：行くぞ？」

1・ネプテューヌに質問：もし身体が大人になったら何がしたい？

ハハハ：よくある質問だよな・・・。次は俺からだ。

2・キャラに質問：もし身体が大人になったらとして、戦国BASARAシリーズの女性キャラの衣装が着れたら何を着たい？

輝刃「なるほど・・・なかなか面白い質問だな・・・。さて・・・バトンが来たな・・・どうする？」

やるっきゃないっしょ　ただ、ちょっとばかり端折りな所があるが・・・そこは堪忍な？』」

ネプテューヌ「私なら銀さんに告白・・・かな？」

エトナ「さり気無くムカつく。んで2つ目は」

キャラロ「どれも着ません」

エトナ「あつそ。『月光閃火』、廊下に立ちなさい」

ネプテューヌ「次だよ、ペンネーム『黒龍』さんからだよ。『黒龍』なるほど、ネプテューヌにも辛い過去があつたんですね」

ソラ「ネプテューヌもネプテューヌなりに抱えている事があるって事だな」

銀時「普段は食う事しか考えていないけどな」

高杉「くくく、それにしても、ネプテューヌの野郎も勿体ない事しやがる。自分の黒い獣の声の従って憎しみを開放すればいいのによお」

黒龍「うわっ、かなり歪んでる！」

ソラ「高杉は先生が死んでからこうなつたからな」

銀時「つつか、お前まで感想出てくんじゃねえよ」

高杉「良いじゃねえか。俺は俺のしたいようにするからな」

黒龍「相変わらず何を考えている読めない……」

ソラ「しゃあない。質問いくか？」

黒龍「そうですね。じゃありカルメンバーと女神メンバーに質問



です。今こっちの小説では攘夷戦争編が始まっていますが、攘夷戦争を見てどう思いますか？」

ソラ「俺からも質問だ。あんぱんばかり食べている山崎の事をリカルメンバーはどう思う？」

高杉「最後に俺から質問だ。くくく、ネプテユーン。無理せずに分の憎しみに従う方が良いと思うぜ。自分の黒い獣の声に従ってな」

銀時「おい、なんか最後に余計な質問が入ってきたぞ！」

黒龍「ま、まあたまにはいいんじゃないですか・・・」

ソラ「はあくまったく・・・」『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ノワール「悪いけど語れることはないわ」

ブラン「・・・ノーコメント」

ベール「しゃべる気も起きません」

どうやら4女神もリカルメンバーも攘夷戦争に対しての言葉はないらしい。

ネプテユーン「って言うか山崎さんあんぱんって・・・」

全員「そりゃないでしょ？」

デイエチ「私は山崎さんと・・・」

エトナ「あゝはいはい、あんたはほつといて、3つめ」

ネプテューヌ「・・・悪いけど私は人を殺めるのは絶対にしない主義なの！」

ダークソウル「本当ニソウカ？我が貴様ノ闇ヲミテヤロウ」

ネプテューヌ（闇の心）「許さない！ネリアを！私達の家族を奪った人間どもに！そしてなにもしなかった奴らに！すべてホロボシテヤル！」

真王「うわこりゃ危険だ！『黒龍』さん！絶対に闇に飲まれないでね！」

エトナ「んじゃ最後に『黒神』でしめるわよ。『質問します。』

スバルへ

僕の小説では貴女はメインヒロインとして活躍して、しかも貴女が主人公の外伝小説もあります。

そんな自分を見てどう思いますか？

シグナムへ

もし、レヴァンティンをパワーアップさせるのであれば、どんな感じにパワーアップして欲しいですか？

ぱっつぁんへ

僕の小説では銀時はもちろん、神楽もエリオと良い感じになっていますので、遅れをとった貴方は焦っていますか？

以上です。『順番に答えるならこうね』

スバル「うーん、嬉しいような複雑な気分です」

シグナム「出来れば火力上昇と鋭さをあげようと思う」

新八「あ、焦ってねえっしゅー!!」

真王「あ、噛んだ。『黒神』さん。廊下に立ってなさい。そして『月光閃火』さんのバトンがあります」

『バトン行くぜ』

1. ダンジョン突入

「よし！いつちよ行くとするか！」

2. エンカウト

「ハハハ：来いよ来いよ！」

「うーん…こりゃ長引きそつだな…（汗）。」

「チヨロい相手か…まあいい…行くぜ！」

3. 勝利

「よし！次行くぜ！」

「何とか勝てたか…ふい…。」

「ハハッ…楽勝〜」

4・戦闘不能

「クソッ…やられちまったぜ…。」

「俺とした事が…ドジっちまったぜ…。」

5・戦闘復帰

「よっしゃ！ふっか〜っ！」

「完全復帰！バリバリ行けるぜ！」

6・奇襲

「チイツ…！？不意を突かれたか！？」

「オイオイ…そりゃ卑怯だぜ！？」

7・アイテム使用

「アイテムを使うか…。」

「ほら…使えよ。」

8・宝箱

「何が入ってるかな〜？」

「ハハッ…こりゃ何が来てもラッキーだな」

「伝説クラスか…楽しみMAXだぜ！」

9・仕掛け

「これは…押さなきゃならんな…。」

「よっこ〜らせ…っ！」

10・コンボリンク

「もっかい…行つとくか。」

「逃しやしねえよ…もっかい行け！」

11・バトンタッチ

「わりい…後任せた！」

「こつから先は…アンタにやらせてやるぜ。」

12・トラップ

「あだっ…！」

「アチチチチ…熱い熱い！」

「クソツ…毒ガスかよ!?!」  
「はう…目え回るう…。」  
「アババババ…!!」  
「飛んでいくううううううううう…。」  
「アイタ…!」  
「何で虫イイイイイイイイイイイイイイイイイイ?!?!?!?!?!?!」  
「落ちるううううううううう…。」  
「オイオイいきなりモンスターかよ…(鬱)。」  
13・回復  
「おつ、回復したぜ…サンキュ」  
14・自己回復  
「よし!回復したな…。」  
15・味方回復  
「待つてろ…今回復させたるからな…。」  
16・ガード  
「その攻撃…防いだ!」  
17・持ち上げる/投げる  
「よいしょ…と。」  
「そおらよっ!」  
18・コンティニュー  
「ハッ…!!まだまだやれんだよ!!」  
19・死亡、GAME OVER  
「クツ…!俺は…まだまだ…!!」  
20・レベルアップ  
「よっしゃ!レベルアップだ!!」  
「これでまた一つ、強くなれたぜ。」  
21・待機  
「さあて…待ちますか。」　クールに佇む  
「んしょ…んしょ…。」　準備運動中  
22・必殺技

「見せてやるぜ！俺の超絶秘技を！！」

「森羅万象の理を以て…穿て、暗冥の悪しき闇を！！」

23・クエストクリア

「うーん…こりゃダメだな…」

「フウ…最下位よりはマシか…」

「まだまだ未熟か…」

「まあまあ…つて所かな？」

「ま…こんなもんかな」

「あと一息つて所だな…頑張らないと！」

「ここまで来れたか…フツ…（微笑）」

24・回す人

「出来ればでいいから、これを見てくれる人が回してくれたら幸いかな…へへっ…（照笑）」

真王「はいそんなわけで、次回はネリアがアシストします。では」

第五十八訓：ほったらかしにされたら誰だって怒る（後書き）

真王「銀時ピンチ！しかしそこに援軍が現れる！！」

ネリア「次回『味方は遅れた時にやってくる』テイクオフです」

第五十九訓：味方は遅れた時にやってくる（前書き）

真王「今回強い味方が登場だ」

ネリア「『リリカル銀魂』が始まります」



## 第五十九訓：味方は遅れた時にやってくる

前回のあらすじ

ダークソウルがゲラビッツを裏切って、ネプテューヌがダークソウルの攻撃を受ける。

そしてダークソウルはネプテューヌの闇を奪い、ダークハートへ変身した。

そこに現れたのはネプテューヌ達の養子で実験の生き残りだった天使、ネリアと再会する。

しかしダークハートは卑怯なことに銀時と桂の恩師、松陽の偽物を召喚させた。

銀時以外は全員ダークハートの結界に閉じ込められ、銀時は松陽の姿に動けない状況になっていた。

そして偽松陽の刀が銀時に振りかざす。

ダークハート「その先生に殺されてる！」

ネプテューヌ「銀さん!!」

叫び虚しく銀時の上から刀が下りてくる。

ガキインッ!!

突然誰かが偽松陽の刀を弾いた。

???「いや、危なかったぜよ」

その人物はボサボサした髪に洋服にサングラス、下駄を身に付けて

いる気軽そうな男であった。

銀時と桂はその人物を見て驚いた顔をする。

銀時「お・・・お前は！」

桂「辰馬！？辰馬じゃないか！」

銀時と桂は辰馬を見て驚きだす。

2人を見た辰馬は懐かしそうに銀時と桂を見る。

辰馬「おおー、金時にツラア！こんな所で会うとは思ってもよらなかつた！」

辰馬は両手を2回叩いて愉快そうに言い出す。

辰馬「酒じゃあ！酒をたつぷりと持ってこ・・・」

言いかけた途中で銀時と桂に思いつきりぶん殴られて倒れる。

銀時「だからあ、いつも言っているだろうがー！金時じゃなく銀時だ！」

桂「それにツラじゃない桂だあ！」

辰馬をボコボコにしている銀時と桂を見てフエイト達は啞然とし、神楽とエリザベスは辰馬のボケつぷりに呆れだす。

そしてスバルは恐る恐ると聞き出す。

スバル「あのう・・・銀さん、この人の知り合いですか？」

銀時「ただの腐れ縁だ！・・・この馬鹿は坂本辰馬さかもとたつま！大富豪の息子で、現在は星間貿易業『快援隊』を営みながら、気ままに大宇宙を渡り歩いている馬鹿で・・・俺達と同じ攘夷志士の1人だ」



ネリアはこいつと呼ばれてむっとなる。

辰馬「それを言うならまずはネリアの出会いからじゃ。ワシはいつも通り営業やっとならネリアの譲ちゃんが出てきてな？」世界のために戦ってくれ』って言うもんじゃ。本当ならワシは誘いを断るんじゃが譲ちゃんに瞳に絶対に譲れない信念が見えとったからのう。そんで仕方なく引き受けたってわけじゃ」

ネリア「ハイ、聞けば辰馬さんは銀さんのお友達との事とともに進むことになりました」

銀時達はそれを聞いて納得する。

ネプテューヌ「で、辰馬さんはネリア見てどう思ったの？」

突然ネプテューヌがそんなことを聞くと、

辰馬「そりゃあ綺麗な別嬪さんじゃからすぐに抱きつゴボツ！」

ネリア「それは言わないでください！！／＼／＼」

辰馬が答えようとしてネリアに殴られた。

銀時、桂、神楽、新八はやっぱりか…な顔をする。

ネリア「只でさえ恥ずかしいんですよ！見ず知らずの男にいきなり抱きつきにかかられるのはもってのほか！他の女性に対してもいきなり抱きつきにかかる人なんてあなたくらいですよ！！」

辰馬「いやいや悪いの。お詫びとしてワシg」するなー！！！！！！」

飛びかかってきそうだからネリアが辰馬にジャーマンスープレックスをかました。

ネプテューヌ「ネリアの教訓その2、『触ろうとする男は即効ぶっ飛ばせ』、役に立つよね」  
ベール「気色悪い男には格闘技で絞めろって心に叩きこませましたから」

銀時・新八「九兵衛2号!？」

とんでもないものをネリアに叩きこませたネプテューヌとベールは笑い、銀時と新八は九兵衛の様なポジションになっているネリアに驚く。

ヴアルバトーゼ「なんだ? あれは・・・」

フェンリツヒ「さあ? 私も理解しかねます」

フーカ「って言うかジャーマンスープレックスって...」

デスコ「これって...」

フーカとデスコはアルティナを見る。

アルティナ「なぜこつちを見ているのですか? 私はやりませんわよ!」

フーカ「あ、いや、ごめん」

デスコ「ごめんなさいデス、アルティナさん」

断固否定するアルティナ。

フーカとデスコは謝る。

ダークハート「...貴様らの茶番を閉じさせてやるか」

ダークハートは手に魔力を溜めて銀時達に放とうとする。

「????」「させないよ」

が、何処からか飛んできた黄色い魔力刃に相殺させられる。

ダークハート「新手か」

「????」「呼ばれて飛び出てじゃじゃ〜ん!つてね。呼ばれてないけど」

お笑い言っているようなこの女性は、長い金髪に緑色の瞳に黒い服を着ている。

そしててにはバルディッシュそっくりのデバイスが握られていた。

ダークハート「よく見れば死にぞこない共の奴ではないか」

「????」「私は死にぞこないじゃない!ちゃんとアリシアって名前があるの!」

女性・アリシアはダークハートに怒鳴る。

フェイト「ア、アリシア?」

銀時「え?嘘?アリシアって...?」

アリシア「そうだよ、久しぶりフェイト...つて言えばいいのかなあ?」

曖昧な答え方をするアリシア。

しかし銀時はありえないような顔をしている。

なんせアリシアは事故で死んだのだ。

銀時は10年前(本人の場合はごく最近)にプレシアとアルハザードへ落ちて来たのだ。

その時あるハザードはプレシアの不治の病を治したが、アリシアの蘇生は無理だったようだ。

…って言うかアリシアの体は一体何処にあったかって？…さあ？私でも分かりません。

銀時「あの、もしもし？あんた本当にアリシアなの？」

銀時は恐る恐る聞いてみる。

アリシア「もちろん、正真正銘アリシアだよ」

普通に答えるアリシア。

ヴァルバトーゼ「おい、こいつがお前の姉なのか？」

フェイト「だと思っんですけど…」

フェイトは不安になる。

ヴァルバトーゼ「ま、どうにしる味方が増えたのだ。戦力が多い方がいい」

ラハール「うむ、そう言うことだ」

ラハールはヴァルバトーゼの言い分に同意する。  
するとネプテューヌがそう言えばと思いつく。

ネプテューヌ「そう言えば銀さん、確かアリシアって事故で死んだんだっただよね？」

銀時「あ、ああ、そうだ」

ネプテューヌ「じゃあもしかしてアリシアは死んで幽霊って言うな！スタンドだ！」「…」

幽霊と言い切る前にスタンドだと言い張る銀時。

アリシア「そうだね、私は幽<sup>レ</sup>「スタンドだ!!」…スタンドにな  
ってここにいるの」

なのは「ゆ…スタンドに？」

なのは達は顔を青くしながら聞く。

なのははお化け系が苦手らしい、銀時が特に。

アリシア「そう、実は私は死んだ後いろいろと世界をさまよって  
ね、その時『亡<sup>スランドロード</sup>霊の溜まり街』って場所に着いてね、そこでなんや  
かんややって体を手に入れて強くなって現在に至るっつと」

フェイト「なんやかんやって…」

フェイトは苦笑いをする。

ネプテューヌ「えっと…てことはアリシアは魂の存在ってこと？」

アリシア「体はあるけどそんな感じだね」

ネプテューヌ「じゃあアリシアって不死身なわけ？」

アリシア「そうだね」

ネプテューヌは何か考えた後、何かピコーンと思い浮かぶ。

ネプテューヌ「それじゃあアリシア」

アリシア「なに？」

ネプテューヌ「てい」

ザクッ

アリシア「グハ」





ネプテューヌ「ああ、なんてこと…アリシアが死んでしまった」  
新八「イヤお前が殺し「静かに」ゴフツ！」

一人語るネプテューヌに突っ込もうとする新八にノワールが殴る。

ネプテューヌ「たった一人でダークハートに挑み、そして勇敢にも散ってしまった」

ヴァルバトーゼ「俺達のために、勇敢に戦ってくれたことを誇りに思う」

新八「何記憶を美化しようと「だまれ」ガフツ！」

なぜかヴァルバトーゼも参加して詩の様に語る。

今度はブランにハンマーで殴られる。

ネプテューヌ「ありがとう、アリシア」

ヴァルバトーゼ「アリシア、お前の想いは永遠に語り継がれるだろう」

ネリア「アリシアさん、今までありがとうございました」  
フェイト「姉さん…」

夜空の星（イメージです）を見上げて優しく微笑むアリシアを思う一同。

見ているなのは達は涙を流す。

ある一人のKYB（空気の読まない馬鹿）を除いては……。

新八「感動するとこ違うだろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！  
なんでだよオオ！！なんで感動場面がやってくるんだよオオ！！  
今までのボスのやり取りって一体なんだったんだよ！！っーか  
何で夜空が出てくるんだよ！！なんで感動シリウスが完成するんだ

よ!!!」

ミーニヤ「黙れこのKY!!」

額に青筋立てて怒鳴る新八にミーニヤがぶつ飛ばす。

その後新八を再起不能にさせる。

ネプテューヌ「最後に私からアリシアに贈り物をあげるよ」

そう言っ取り出したのは、・・・松明。

そしてそれをアリシアに、

IBGMチュートリアルby魔界戦記ディスクガイア4

(Disgaea 4 Soundtrack - Puppet

Smile)

ジュツ!

アリシア「あちゃああああああああああああああ!!」

アリシアが熱さで起き上がった。

フェイト「姉さん!?!」

ヴァルバトーゼ「うおっ!?!復活した!!」

ネプテューヌ「ねぶツ!?!アリシアが黄泉の国から帰ってきた!」

突然アリシアが復活したとこに驚く。

アリシア「勝手に殺さないで！って言うか私死んでるからこのセリフはないかな？」

アリシアは怒る。

IBGM飛べない翼by魔界戦記ディスガイア4  
(Disgaea 4 Soundtrack - Unflyable Wings)

ダークハート「いつまで下らない茶番をしているのだ？」

ダークハートは仁王立ちしている。

ネプテューヌ「くだらなくない！こっちは少し緊張を取っただけ！」

ネプテューヌは反抗する。

ダークハート「なんだそうか？緊張していると下から液体でも出るのか？」

銀時「コンパあたりならs」なんてこと言っんですかー！！！！」  
「ブベッ！」

コンパは顔を真っ赤にして銀時をはたく。

ダークハート「フンツずいぶんと賑やかな連中がいるもんだな」  
ネプテューヌ「当たり前だよ」

ネプテューヌは自慢する。

ダークハート「ハッ！とても人を殺めようとした奴の言うセリフではないな！サツサと闇を開放してればいいものを！」  
ネプテューヌ「私は闇に堕ちたりはしない！」

ネプテューヌは力強く答える。

ネプテューヌ「確かに私はネリアが死んだことにあなたという大きな闇を抱えてしまった！そしていつか闇自身が私を食いつぶして暴走してしまう！」

かつてネリアという家族を失ったことにネプテューヌの闇を作り出してしまった。  
ダークハート

ネプテューヌ「でもね、闇なんてのは一人で抱え込むんじゃない！みんなで背負うんだよ！私にはノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイちゃん、ネリア、なのはさん達にヴァルっち達、そして銀さんがいる！」

辰馬「あのお、ワシ等はおまけ扱いかの？」

辰馬が言っているが、そんなの無視。

ダークハートが言う。

ダークハート「フフフ、仲間だと？家族だと？…それが我をたおすものだと考えているのか？」

ネプテューヌ「そう！闇を打ち倒すのは力じゃない！みんなという絆の力なんだ！」

ダークハート「ぬかしおつたなっ！！貴様の言う絆というものがどれほどのものか見定めてくれるわ！！！」

ダークハートは懐から剣を出す。

それと同時に地面からキラーマシン10体、リザードマン6体、ゴ  
ーレム3体が現れる。

ネプテューヌ「ネリア、いけるよね？」

ネリア「うん、お姉ちゃん、私の力を見せてあげる！」

アリシア「さてさて、お姉ちゃんの活躍をこの目で見ていてフェイ  
ト」

辰馬「やれやれ、戦いはすきじゃないんじやが、やるしかないのう」

ネリア、アリシア、辰馬も戦闘態勢に入った。

ネプテューヌ「行くよ！ダークハート！！私達の絆の力を見せてあ  
げる！！」

ダークハート「ぬかせ！！貴様は闇に堕ちるのだ！！」

今ここに己の闇との戦いが始まった。  
ダークハート

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生！！！」

エトナ「今回は事情があつて休むわ。そんじゃお休み〜」

プリニー「投げやりッス！！…つとまあこの通り今回質問コーナーはお休みッス。申し訳ありませんでしたッス。あ、それからアンケートを取るッス」

『『ネプ銀編』後のストーリーはどのようにするかアンケートを募集します。』

## 1：未開惑星編

福引で宇宙旅行のチケットを貰ったネプテューヌは、銀時達と一緒に宇宙旅行へ向かう。しかしテロリストのおかげで未開惑星へ墜落してしまった。銀時達は助かったものの、惑星の原生生物に苦労する。これは未開惑星に脱出兼お宝回収冒険の物語。

(クロス元：ピクミン2)

## 2：銀河編

ミッドチルダに巨大宇宙生物が襲撃した。襲撃後、ネプテューヌ達は星の子・チコと出会う。そしてネプテューヌ達はチコとともに宇宙の平和を取り戻しに行くのだ。

(クロス元：スーパーマリオギャラクシー(2も有り))

プリニー「以上ッス。活動報告にも載せるッス。ではまた会いましょ  
うッス」



第五十九訓：味方は遅れた時にやってくる（後書き）

真王「今回は壮絶なバトルが繰り広げられるぜ！」

ネリア「次回『変身は人間に使えないのが玉にキズ』テイクオフで  
す」

第六十訓：変身は人間に使えないのが玉にキズ（前書き）

真王「今回で『ネプ銀編』は終わります。それではスタート」









ノワール「やるじゃないネリア！」

ネリア「これでも別の神界で修行して来ましたからお姉ちゃん達よりも強「チュンツッ!」…」

ネリアの顔に何かが通り過ぎた。  
後ろを振り返ると銃弾の跡が。

ノワール「誰より強いつて?」

ノワールが笑顔で銃を向けている。  
はつきり言って目が笑っていない。

ネリア「ハハハ、ナンデモナイデス（調子に乗るのは止めよう…）」

ネリアは冷や汗流して片言で答える。

ネリア「ってノワールお姉ちゃん後ろ！」

キラーマシンG「コウゲキ！」

ノワール「はっ！」

ノワールの後ろから怒ツキングしたキラーマシンGが剣を振りかぶる。  
なんで機械が大きくなるんだよ!のツッコミは無しの方向で。

アリシア「スパークスラッシュ！」

近くでアリシアが電撃刃を飛ばしてキラーマシンGの腕を切り落としました。

アリシア「まだまだ行くよ!!!ライトニングランサー！」

フェイトのプラズマランサーのような攻撃をキラーマシンGに放つ。  
キラーマシンGは爆発し、他二体のキラーマシンも爆発した。

辰馬「お譲さん等は強いので。ワシも負けてられんじゃき」

辰馬も剣でキラーマシンやリザードマンを切り捨てる。

ダークハートが出した敵はもうゴーレム三体だけとなった。

ゴーレム「……………」

二体のゴーレムがお互い近づき、怒ツキングを行った。

ゴーレムG「……………」

ゴーレムは倍にまで巨大化した。

銀時「でっかい奴がでっかくなると怪獣だなこりゃ」

桂「うむ、その説は間違いはない」

新八「呑気なこと言ってる場合ですか!!」

怪獣クラスに大きくなったゴーレムGを見て呟く銀時と桂。  
それを聞いて突っ込む新八。

ゴーレムG「……………」

ブンッ!

銀時「ウオツ!」

ゴーレムGは銀時に殴りかかる。



辰馬「でかい分たちが悪いぜよ」

ネリア「厄介な相手ですね」

なのは「でもダメージが無いはずがない！」

ノワール「荒削りつてもんだけどやるしかないわね」

ヴァルバトーゼ「ふむ、ではお手並み拝見と行こうか」

なのは、銀時、ノワール、ヴァルバトーゼ達はゴーレムGと対戦する。

パープルハート「ヴァイアブルエッチ！」

ダークハート「ならこちらもだ！」

パープルハートとダークハートはお互い剣をぶつけ合う。

隙を与えてくれない剣技はお互いさま。

乱闘中にパープルハートには右頬、左腕、右足に、ダークハートには左頬、腹部、右ももに切り傷が出来る。

ダークハート「さすがだな」

パープルハート「あなたこそね」

笑い合う二人。

ダークハート「だがそろそろケリをつけるか」

後ろに待機していたゴーレムを呼ぶ。

ダークハート「行くぞ。魔チエンジ」

ダークハートがそう言うとゴーレムが光り出した。  
ゴーレムは光の球になり、ダークハートがそれを握ると、石で出来た大きな太刀が現れた。

パープルハート「・・・これは少し骨が折れそうだな」

ダークハート「なら諦めるか？」

パープルハート「まさか！諦めたらゲームオーバーなのよ！」

パープルハートが切りかかり、ダークハートは防ぐ。

ダークハート「さて、こいつの力を試してみるか。グラントブレイク！」

ダークハートは太刀を大振りに振る。

パープルハートは防ごうとすると、吹き飛ばされた。

パープルハート「きゃああああ！！」

吹き飛ばされるも、何とか持ち直す。

が、いつの間にか刀が飛ばされていた。

パープルハート（まずいわ…このままじゃジリ貧ね。刀がさっきの  
で飛んでっちゃったし、何とかこっちも武器を持ちたいけど…）  
ダークハート「そこで止まる必要があるか？」

ダークハートが太刀を振り上げた。

「????」「亡霊の呪玉！」

人の顔をした黒い弾がダークハートに向かって飛んできた。飛んできた先は何とサチコだった。

サチコ「まだ行くよ！ソウルチョッパー！」  
ダークハート「ち！」

何も無いところから大鎌を出してダークハートを攻撃する。

サチコ「お姉ちゃんを殺させないよ〜」

地面から骸骨とゾンビを召喚するサチコ。

銀時はそれを見て顔を青くする。

するとパープルハートはサチコを見てなにかを思い出す。

パープルハート（もしかしてサチコって…）

ダークハート「こざかしい！」

サチコ「うわったあ！」

ダークハートが一振りでガイコツやゾンビをなぎ倒す。

サチコはその時その場から逃げる。

サチコ「危ない危ない、危うく死ぬところだった。・・・死んでるけど」

パープルハート「ちょうど良かったサチコ、力を貸して」  
サチコ「へ？」

サチコは素っ頓狂な顔になる。















ヴァルバトーゼが呼ぶ。

ヴァルバトーゼ「この先大変な道のりが待っていると思うので俺達も協力してやるう」

ネプテューヌ「え？いいの？ありがとう！」

ネプテューヌは嬉しそうになる。

こうしてダークハートとの一戦が終わった。

【ネプ銀編：END】

くおまけ

エトナ「教えて！」

全員「エトナ先生!!」

ネリア「皆さんこんにちは、ネリアがアシストいたします」

エトナ「うわこの子礼儀正しい、まあいいわ、ペンネーム『鳴神ソラ』からよ。『マリオ』その通り、例え偽善だろうが命を潰せば自分の何かが減って行くからな…まっ、俺はそれをしてるんだけど偽神や常識のない転生者に…そいつ等を倒したと言う罪を背負ってな…」

クツパ「しっかし…律儀だなゲラコビッツ」

ルイージ「確かに説明してるしね…」

フォックス「言うか当たってたな」

ヨッシー「言うか本格的に出てからコメディになりましたね」

ネス「ダークソウルもといダークハートも律儀に待ってくれたね」

リユカ「けれどその後銀さんがピンチ！」

マリオ「俺だったらすぐにそれを殴った後に出した野郎に何俺の仲間の幻影出し取るんじゃないじゃああ!!」って言う」

ルイージ「と言う訳でネプテューヌに質問『ネリアちゃんと再会してどうだった?』」

ネス「同じく質問『ダークハートを見てどうだった?』」

リユカ「なのはさんに質問『自分の4文字熟語で表された奴を見て  
どう思いますか?』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます 『」

ネプテューヌ「うん!ネリアにあえてとつてもうれしかった!あと  
ダークハートは私にそっくりだったね。黒いけど」

なのは「え?私この『全力全壊』はしっくりくるんだけど」

エトナ「そんなだから世間に魔王だって言われるのよ」

なのは「魔王じゃないもん!」

エトナ「あゝはいはい。『鳴神 ソラ』、もっと魔王なのはを拝みなさい」

魔王なのは「だから魔王じゃないもん!!って名前変わってるう!!?」

ネリア「エトナさん、あまり彼女をいじめないで…。次はペンネー  
ム『亀鳥虎籠』さんからです。『アンケートは2で!」

質問。

シグナムに質問。 僕の小説では、銀さんと良い関係になりかけて  
います。どう思いますか?

新八へ、僕の小説では彼女がいます。 どう思いますか?

スバルに質問。 僕の小説では、左之助の弟子になってます。 どう思いますか?』 順番に答えるならこんな感じですね」

シグナム「・・・よし!」

シグナムは勝ち誇ったかのような顔をする。

新八「羨ましいぞちくしょー——————  
!!!!!!!」

新八は悔しく泣いている。

スバル「あ、あの人の弟子って…」

スバルは顔をひきつらせた。

エトナ「んじゃ『亀鳥虎龍』、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『黒龍』からよ。『黒龍』おお、ついに辰馬さんの登場ですか」

銀時「おいおい、ついにあのバカまで登場したのかよ」

桂「しかし、今回の光景の一部にどこかデジャヴを感じるのは気のせいかな?」

ソラ「気のせいじゃないか?」

銀時「つつか、ダークハートって以外に律儀などこあるな」

黒龍「それにアリシアも登場しましたね」

ソラ「もう何でもありだな」

銀時「つつか、悪ふざけでネプテューヌに殺されてるけどな」

黒龍「なんか不憫です」

ソラ「じゃあ質問いくか」

黒龍「そうですね。質問です。真王さんは劇場版銀魂新訳紅桜編を見ましたか？それで見た感想はどうでしたか？」

銀時「じゃあ九兵衛二号コト、ネリアに質問だ。お前、とりあえずそっちの俺の事どう思った？」

黒龍「最後に俺から質問します。ネプテューヌに質問。妹であるネリアに会ってネリアにこれから話したい事とかありますか？」

銀時「そんじゃな」『』

真王「すみません。実は劇場版銀魂見てないんです。超サーセンWW。それからネリアはネプテューヌ達の義妹なんです。本当の妹は現在ゲーム業界で留守番しています」

ネリア「銀さんですか？お姉ちゃんの言うとおりキャラクターランポランでパーマで駄目なおっさんでした」

銀時「何教えてやがんだあのガキ！！」

ネプテューヌ「話したいこと？あるよ。ゲーム機壊したとかアイス落としたとか物壊したとか…」

真王「思いつきり殺意がこもってるぞ。『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」

エトナ「最後は『白騎士君』で終わるわよ。って久しぶりの感想ねこれ。『白騎士君』2番の銀河編をお願いします」

レナード「それからスバルに質問。もし使ってみたい必殺技を3つの内を選んで下さい」

1・ゴットフィンガー

2・ヘル・アンド・ヘブン

3・ギガ・ドリル・ブレイク

白騎士君「答え待っています」

スバル「え、えつとお…3番かな？」

真王「成程。『白騎士君』小説頑張って書いてくれ。そしてアンケートですがこうなりました」

未開惑星編：1

銀河編：4

真王「それでは次回は辰馬がアシストだ。アンケートはまだ続けるぜ」

真王「あ、今更ながらのキャラプロフィールです」

〈ネリア〉

髪：腰まであるピンク（アホ毛付き）

目：青

服：アルティナと同じ

3サイズ：92 / 55 / 84

体重：滅せられた。

性別：

種族：天使

魔力光：純白

好き：平和、花、ネプテューヌ達4女神

嫌い：闇、悪事を働く者、ダークソウル、卑怯な人

性格：真面目で傷ついた人は敵味方関係なく優しくする。

レベル：4000

得意武器：弓（神兵の弓）、 剣（ライトブレード）

スキル：聖女のご加護（接近キャラの状態異常を和らげる）

詳細：清らかな心を持つ天使。生前の彼女はある実験に使われた被検体だったが、ネプテューヌ達によって保護される。しかし再び実験によってさらわれ、間もなく死亡。しかし、今は天使として復活した。実は前にネプテューヌ達に迷惑なことをした恥ずかしい過去があるようだ…。

真王「それではまた次回で」



第六十訓：変身は人間に使えないのが玉にキズ（後書き）

真王「次回はネリアが語るあの過去に！」

辰馬「アハハ、次回『過去の歴史に意外な事実が隠されている』  
テイクオフじゃき」

## 第五回、モンスター解説図鑑

真王「第五回、モンスター解説図鑑！」

イエー………イ！！

ヴァルバトーゼ「ではまず最初のモンスターからだ」

「スラサイボー」

第四十九訓に登場。

ネプテューヌの体の中に生息する細胞のようなスライム。基本体当たりのみの攻撃だけで簡単に倒せるが、ネプテューヌに悪影響はない。

真王「次はこのモンスターです」

「トゲスラサイボー」

第四十九訓に登場。

頭部にとげが付いただけのスラサイボー。基本的にスラサイボーと同じ攻撃法だが、とげが付いただけあって、攻撃力が高くなった。

ヴァルバトーゼ「次はこいつらだ」

くゲラニーく

第五十訓に登場。

ゲラビッツに洗脳されたプリニー族。しかしはつきり言ってザコであるが、集団攻撃は苦戦するだろう。あとプリニーは手荒に扱ったり投げられると爆発する習性があるらしい。

真王「次も洗脳モンスターです」

くゲランギヤーく

第五十二訓に登場。

ゲラビッツに洗脳されたエリンギヤー。ジメジメしたところを好むキノコ。キノコから発するホルモンから女性のパワーを下げるらしい。

真王「次は二次作品でよく登場するあいつの登場だ」

くグレートセンコウシャく

第五十三訓に登場。

ゲラビッツが開発した巨大ロボット。姿はどっから見ても先行者そのものである。さらにネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を所持しているが、弾を入れ忘れたせいであっけなく倒された。

ネプテューヌ「なにしに出てきたんだって感じだね」

真王「だな」

〈タンパくん〉

第五十四訓に登場。

ネプテューヌの体の中に住むモンスター。ネーミングが若干たんぱく質らしい。

捕まえた近藤を餌にして腐る直前がうまいとグルメな一面があるらしい。

真王「…はい次」

〈鳥女族〉

第五十五訓に登場。

鳥が義文化したようなモンスターで空から獲物を求めるハンター。

漢字では鳥女トリメカと呼ぶ。

地上の敵に対しては絶対に逃がさない特殊能力を持っている。

主なモンスター名

ハーピィ（茶）・オキュペター（緑）・アエロー（黄）・メルキュ  
ーレ（紫）・ブラッククロウ（黒）・ハーピィクイーン（赤）

魔ビリティー

スカイハント：地上移動キャラに対して絶対に命中する。

特殊技

三打連空：空から三回ど突きだす・・・シユールだ。

アイアンウイング：漢字で読むと鋼の翼とも言つ。

マツハストライク：タクシーに使うのは良くないです。

メテオスロー：隕石の如く飛ばされたら原型が無くなります。

真王「ちよつとデイスガイア風にしました。次です」

く魔蛇族く

第五十五訓に登場。

魔性の魔物と恐れられている蛇女。下半身が蛇で、髪の毛に5つの蛇の頭がある。

異性の者の状態異常が悪くなりやすくなる香りが放っている。

主なモンスター名

ラミア（赤）・ゴルゴン（茶）・ナーガ（紅）・オロチ（白）・メ  
デューサ（紫）・ラミアクイーン（黒）

魔ビリティー

魔性の魅惑：男性キャラ接近時、状態異常がかかりやすくなる。

特殊技

毒蛇のキス：普通のキスなのに痺れるくく・・・

蛇睨み：睨まれたらカッチカチやぞ！

八又突き：髪の毛をそんな扱いしてはいけません。  
炎蛇靈動：火傷と恐怖から逃れられないかもね。

真王「まだまだ行くよ」

〈妖精族〉

第五十五訓に登場。

悪戯好きなかわいらしい女の子モンスター。魔法は得意だが、考  
えることは苦手の様である。

どんな魔法に対して中和させる力を持っている。

主なモンスター名

フェアリー（紫）・ピクシー（ピンク）・セルラ（青）・シルフ（  
緑）・フリー（赤）・ティターニア（黒）

魔ビリティー

妖精の鱗粉膜：魔法攻撃に対してダメージを半減する。

特殊技

ぶん殴り：只杖で殴るだけ。ええ、それだけ。

パーフェクトアタック：妖精らしからぬ突進攻撃。けど痛い！

ボンバードツカン：失敗すると大爆発が起こるのは当たり前です。

スターダスト：降り注ぐ星礫は危険です。

〈魔女族〉

第五十五訓に登場。

魔界に住み着いた魔女がモンスター化した姿。  
鍛錬のたわものか魔法攻撃が高い。

主なモンスター名

ウィッチレディ（青）・デビルウーマン（黒茶）・デスセイレス（黄）・デビルマジシャン（黒緑）・ヴァンパイアロード（暗紫）・ウィッチクイーン（暗赤）

魔ビリティ

魔力強化：魔法攻撃が通常の2倍になる。

特殊技

メラ：お化け屋敷にぴったりではないのが玉にきず。

パフパフ：女の武器でみんな快樂に落ちます。きもちいい。

メラゾーマ：当たったら火傷じゃ済みません。

イオナズン：爆発要注意！

人魚族

第五十五訓に登場。

海の世界に住む美しき女性モンスター。そして歌が好きらしい。  
補助魔法に関して長けている。

主なモンスター名

マーメイド（水色）・セイレーン（黄）・サーペント（緑）・ロー  
レイ（紫）・ウンディーネ（青）・リヴァイアサン（紅）

魔ビリティ

人魚の聖歌：補助魔法が通常の二倍になる。

#### 特殊技

往復ビンタ：ぷっくり晴れたら地味に痛い。

ハウリングボイス：うるさいってレベルじゃねーぞ！

サーフィンウエーブ：流されるだけでは済みません。

ハウリングリサイタル：もはや災害以上の音声です。

#### 〜殺人機族〜

第五十六訓に登場。

別世界の科学者が作り出したといわれる機械モンスター。

ダメージ量によって攻撃力が増す。

#### 主なモンスター名

キラーマシン（青）・キラーマシン改（濃い緑）・キラーマシンZ  
（紫）・キラーマシンX（黒）・キラーマシンカイザー（赤）・キ  
ラーマシン（金）

#### 魔ビリティー

カウンターパワー：体力が少なくなるにつれ、攻撃力が増す。

#### 特殊技

キラーストーム：ロボにはビームが一番！

マヒャド切り：痛いのか冷たいのかどっちかしろ！

キラースター：これを撃ったら悪魔に：なれるのか？

キラースイクロン：細かく千切りです。スツゲエあぶねえし！



〜龍人族〜

第五十七訓に登場。

人型の龍族で、戦いを好む戦闘民族。  
攻撃回数によって力をあげる。

主なモンスター名

リザードマン（緑）・サラマンダー（赤）・バジリスク（茶）・ド  
ラゴンナイト（青）・リザードロード（紫）・ドラゴンロード（黒）

魔ビリティー

龍人の闘士：攻撃した回数に応じて攻撃力が増す。

特殊技

ドラゴンナックル：竜の腕力舐めんな！

ドラゴンファイア：ドラゴンお馴染みの技：地味だけど…

ドラゴンブレイク：地面をかち割れ！…って危ないだろ！

ドラゴンバースト：龍の怒りはすぐに止まらない！

〜邪鬼族〜

第五十七訓に登場。

邪龍族と並ぶ巨人族。実は酒が大好き。  
耐え抜くときに大きな攻撃が出せる。

主なモンスター名

タイラント（赤）・トロル（茶）・オーガ（緑）・サイクロプス（  
青）・ギガース（黒）・トロルキング（紫）

魔ビリティー

鬼神の逆鱗：ダメージ回数に応じて攻撃力が増す。（一度攻撃すると元に戻る）

特殊技

鬼殴り：野球の球扱いです。

鬼殺し：この一撃は危険だ！！

鬼神破壊：魂と体が分離されてしまいます！

大鬼神撲殺：一振りで星が壊れるうう！！

〈魔道巨人族〉

第五十七訓に登場。

古代より生まれし魔道兵器。破壊を好む危険な敵。技の回数で威力が上昇する。

主なモンスター名

ゴーレム（茶）・アイアンゴーレム（濃い青）・メタルゴーレム（銀）・グラントゴーレム（紫）・マスターゴーレム（赤）・ジエノサイドゴーレム（黒）

魔ビリティー

破壊衝動：特殊技使用回数に着き、能力が上昇する。

特殊技

ゴーレムナツクル：一殴りでも十分すぎる破壊力。

クエイクインパクト：これで大地震を起こしかねない！

破壊光線：『バーストストリーム』と呼んじゃ駄目です。

絶対滅殺砲：星ごと破壊する危険あり。

真王「そして最後がラスボスだ」

〈ダークハート〉

第五十九訓と六十訓に登場。

ダークソウルがネプテューヌの闇を吸い取って変化した姿。見た目はパープルハートと同じだが、体が黒くて目が赤いことだけだった。ネプテューヌとの戦いで重傷を負い、現在治療中。

真王「では第六回まで会いましょう」

第六十一訓：過去の歴史に意外な事実が隠されている（前書き）

真王「今回はダークソウルの誕生のシーンです。その原因は一体？」

## 第六十一訓：過去の歴史に意外な事実が隠されている

ダークハートとの一戦後、ネプテューヌ達は何しているのかというと、

ネプテューヌ「ウノ！」

銀時「またかよ！また俺の負けかよ！！」

ユイ「銀さんよわいですね」

サチコ「もしかしてくじ運ないの？」

桂「日ごろのグータラ生活が天罰を下したんだろう。む、ウノだ」

銀時「ツラに負けた〜〜！！」

桂「ツラじゃない桂だ！」

ウノで遊んでいた。

ネリア「…ってみなさん何呑気にカードゲームやっているんですか  
！」

見かねたネリアがネプテューヌ達に怒る。

銀時「うつせーな。こっちは真剣なんだよ。ゲームに勝つことこそ  
人生の価値が決まるんだよ」

ネリア「遠回しに廃人になるにしか聞こえませんか」

ネリアは冷静に突っ込む。

ネリア「皆さんそんな呑気に遊んでいる場合ですか！今ダークソウルが動けない状況とは言えいつ動き出すか分からないですよ！」  
はやて「まあまあそんな仕事熱心にならんでも。麦茶とロールケーキ

キどうや？」

ネリア「あ、頂きます」

とりあえず麦茶とロールケーキを貰うネリア。

ネリア「…話を戻しますがダークソウルは危険な物だと理解出来て  
ますか？モグモグ…」

新八「食べながらしゃべるな」

繰り返のロールケーキ含みながらダークソウルのことを話すネリア。  
そのため新八から突っ込まれる。

銀時「あゝはいはい、とりあえず危険な物だろ？」

ネリア「…全然聞く耳持とうとしませんねえ…」

アルラ「それならちよつと…」

ヤル気ない銀時にジト眼で見るネリア。

するとアルラがネリアの耳元で囁いて頭にピコーンと光った。

ネリア「銀さん、話を聞いてくれたらパフェをおごってもらっても

「で、どんな危険性があるんだ？」

パフェと聞くと打って変わって真面目に聞いてきた。

ネリアは少し苦笑いを浮かべる。

ネリア「ではまずダークソウルの誕生から説明しましょうか」

ネリアはダークソウルについて話を始めた。

ネリア「私が神界にいたころある書物を見つけてまして、その資料は

「ダークソウルに関係するものでした」

ネリアはその書物を取り出し、内容を読み始める。

ネリア『今は昔、生き物は善あれば悪もあり、光あれば闇もある。

光りなる者は喜び、歡喜、楽しさという善の感情が存在する。だが逆に、憎悪、怒り、憎しみ、悲しみ、殺意、欲望という悪の感情も存在する。その中には七大罪の傲慢、プライド、暴食、グリード、色欲、ラスト、憤怒、ライス、怠惰、スロウス、嫉妬、ヴェイグリード、強欲も悪の感情に属する。個人は等しくはないものの、己の欲を満たすために奪い、殺し、挙句戦争を起こすのだ』

悪の起源を強調させるような内容だ。

ネリア『そんなある日、私は耳を疑う情報を得た。人々が作り出した闇が形を成して光りを喰らう化け物へと変貌していくことを。半信半疑だった私はそれを確かめるとその話は事実であった。闇の量も尋常ではなく、いつしか神界どころか全次元世界にまで影響を及ぼすかもしれない。しかし我々だけでは闇を消し去ることは出来ない、あまりにも多すぎるのだ』

強大すぎる闇があると主張しているようだ。

ネリア『そんな時、ある男が一つの宝石をもちだしてきた。その男の持つ宝石は白く輝いていた。男曰く、『この宝石の力で闇を全て封印させるのだ』と我々に言い聞かせた。我々はその男の案に乗り、宝石を使って闇を全て封じる計画を実行した』

宝石が黒い闇を吸い込む絵が書かれている。

ネリア『するとすごいことに闇は宝石に吸い込まれ、どんどん闇の

力が消えていった。闇にとらわれた者たちは解放され、光ある世界へと戻ってきた』

ページをめくると、黒くなった宝石と戦争をする人間が描かれていた。

ネリア『しかし、幾多の世界に戦争を起こし、また闇を作り出すきっかけが出来てしまった。宝石が闇を吸い続けていると、輝かしく美しい純白の色をしていた宝石が、見る見るうちに黒く醜い闇を象徴とする者へと変貌していった』

黒い宝石が黒い雷を出して災害を起している絵が書かれている。

『完全に黒くなったこの宝石はこれ以上闇を吸い込むことが出来なくなつた。それどころか意志を持ち始め、大災害を起したのだ。集まった闇が一つの宝石に固められ、闇という意思が生み出された。

私はこの“意思を持つ闇”もしくは“闇の魂が具現化した存在”

『ダークソウル』と名付けることにした』

全員「っ！！！??？」

全員はこれを聞いて驚愕する。

ネリア『我々はダークソウルの破壊、もしくは封印の計画を練つた。そして我々は幾多の犠牲を払い、ダークソウルを10個のパーツに分解した。その分解したパーツを別次元世界へと封印し、絶対に人も生き物も入れることのない場所へと封印することが出来た』

ダークソウルが10個の欠片に分かれた絵が描かれている。

ネリア『しかし私は不安がよぎる。誰かが封印を解くかダークソウ



ル自身が封印を壊すかが不安になる。だがもし、この世にダークソウルを止める、あるいは破壊できるものが存在するなら、私達に、すべての世界の平和を守ってくれ。…実は書くのを忘れていたが私はダークソウルの封印の参加者である。その影響で力をほとんど失った。だが私は後悔はしない。すべての力をこの書に書き記す。頼む、世界に平和を与えてくれ。それが私からの願いだ。

著者 レオ

ナルド・ヴィンチ』

そこで書物は閉じられた。

それを聞いた全員は……時が止まったかのように固まっていた。

ネリア「これが、ダークソウルの誕生記です」

イストワール「……そうですか」

イストワールは顔がすぐれない。

銀時「んで、上の神さんがダークソウル壊してバラバラにしたってか？」

ネリア「ハイ、しかし、十分の一に減っても闇は活動できます。そしてダークソウルは自らの欠片、つまり10個全ての欠片を集めて完全復活を目論んでいます。私はそれを阻止するためにここに派遣されました」

いつもとは違うネリア。

桂「よし、ならば戦力が多い方がいいだろう」

はやて「そやな、ネリアさん、うちらとともに協力してくれへんか？」

ネリア「一緒に戦ってくれるなら私は参加しましょう」

ネリアは仲間になった。

はやて「よっしゃ！こんなん言うのも久しぶりやけど、機動六課へようこそ！」

桂「うむ」

みんなネリアが仲間になったことに喜ぶ。

しかし、ネプテューヌだけはなぜかすぐれない顔になっている。

ネプテューヌ（違う…ダークソウルはそんなので出来たんじゃない。ダークソウルは…彼女は…）

???

何も無さそうな白い空間。あるのは白く眼に映らないほど高い柱。下界へ見渡せる窓。そして、白い玉座に座る男が一人いるだけだ。そんな時、一人の少女がやってきた。

水色よりの白い髪、胸はそれなりにあり、背中には天使の羽が付いている。

少女「ネオ様！ネオ様！」

少女が玉座に座る男、ネオに呼び掛ける。

ネオ「ん？おお、エルナじゃないか。どうした？」  
エルナ「大臣さまが呼びなんです。至急会議室に来なさいと」  
ネオ「・・・分かった。すぐ行く」

一瞬苦虫をかみつぶしたような顔になったがすぐ気を取り直して歩き出す。

## 会議室

そこで、幾多の次元の神々が何やら話しあっていた。

神「地上世界の人間どものせいで闇の基準値がどんどん超えていつてる！このままでは時間の問題だ！」

どうやら人間世界にある闇が増え続けているところを話し合っているようだ。

闇とは憎悪、怒り、憎しみを代表に、傲慢、悲しみ、邪心も闇の分類に入る。

ネオ（フン、こんなもの俺の知ったことじゃないが、確かに厄介だな）

ネオはこれを聞いて考え事をしていると、

ネオ（！・・・そうだ、あいつならい生贄になるだろうな？）

神とは思えない悪な顔をしていた。

エルナ「お帰りなさいませネオ様、今日はあの会議でしたか？」  
ネオ「ああ、あまり解決策が見つからんらしい」

それを聞いたエルナは少し暗くなる。  
が、ネオはエルナを見てニイツと笑みを浮かぶ。

ネオ「だが、この俺様が闇を消し去る唯一の手がかりが見つけた」  
エルナ「え？それってなんですか？」

エルナが希望が見えたかのような顔になったが、それはすぐに終わった。

ネオ「それはなあ、“お前が犠牲になれ”！」  
エルナ「え？きゃああああああああああ！！！」

エルナは白い光に包まれると、大きな白いひし形の宝石へと変わった。

ネオ（クツクツク・・・喜べ、お前は神の世界の贄となる存在だ。  
そして俺の野望の踏み台としてな…）

神「ネオとやら、その宝石で本当に闇を消せるのか？」

髭を生やした老人の神がネオに聞く。

この方は書物に書き残したレオナルドである。

ネオ「当然だ。ただし、消えるではなく吸収するんだよ」  
レオナルド「……………」

ネオは余裕な顔で言う。

だがレオナルドは怪しそうな目でネオを見る。

レオナルド（こやつ…どうも嫌な予感しかしないのう…悪いことが  
起こらなければ良いが…）

その後、レオナルドの予想は的中した。

ネオの持つ宝石が闇を吸収していった。

しかしその宝石は元はエルナだった者、故に、

エルナ『ガ・・く、苦しい…誰…か…タス、け…て…』

闇に喰われていくエルナ。

しかし誰もその声は聞こえなかった。

ネオ「見ろ！俺の考えは間違いでなかった！！これで世界は平和  
になるぞ！！」

ネオはこれを見て高笑いを出す。

レオナルド（…ネオの奴、あの笑いには少し違和感を感じる…。まさかと思うがああ宝石は…）

レオナルドは違和感を覚えた。

エルナ『酷い…どうして…』

大好きだった者に裏切られた。

エルナ『なんで私がこんなことに…？』

憧れだった人に捨てられた。

エルナ『…許せない…』

心と魂から闇を産み、

エルナ『…私を…すべてを裏切った者たちを許さない』

入ってきた闇が作用して、

エルナ『許サナイ、許サレナイ、世界ヲ、全テヲ、ミンナ、コワシテヤル！！』

白かった宝石が黒く変色していった。

レオナルド「な！？こ、これは！」

ネオ「（なんだもう飲まれたのか？情けない）ちっ！どうやら闇を吸いすぎてしまったようだ」







その後…

レオナルド（・・・やはりな）

レオナルドは“過去を読む”アイテム・ロストサーチを使ってネオとエルナのやり取りを見た。

レオナルド（あやつは昔から野心家じゃったが、ここまでする奴だとは…。じゃが、今のワシではあやつを止めるのは不可能。となる  
と・・・）

レオナルドは一つの本に手を出す。  
中身は白紙であった。

レオナルド（ワシが見てきたことを全てこの書に書き残そう。そのまま書くと怪しまれるが“魔法”で文字を変え、書き残そう）

レオナルドは本に文字を書く。

レオナルド（この際誰でもいい、あの馬鹿ものを止めてくれ。そしてあの子を、救ってくれ）

???

「ダークソウル「ユルセナイ・・・」

暗い闇ノナカデウゴキダス。

ダークソウル「ドウシテ、私ヲ・・・我ヲ捨テタンダ？」

ソノ憎シミハ呑ミコモウトスル。

ダークソウル「許セナイ！我ヲ捨テタヤツラヲ！ソシテ誰モ救ワナ  
カッタヤツラモ！ミンナミンナ壊シテヤルウウウウウウウウ  
ウ！！！！！！！！！！」

闇を膨張させて爆発を引き起こす。

ネプテューヌ「！？夢？」

汗を流して起き上がるネプテューヌ。

ネプテューヌ「今のは…間違いない、やっぱりダークソウルって」

そしてネプテューヌは確信を持つ。

ネプテューヌ「私が…なんとかしなきゃ…」

くおまけく

銀八「おしえて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「はい、あのサド悪魔もなくなったことだし、今回のアシスタントを紹介しようか」

辰馬「アハハハハハ、ワシが担当するじゃきん」

銀八「そんじゃあ行くか。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんからの質問だ。『マリオ』えっ？なのは（冥王）は魔王じゃなくて冥王だろ？」

おい！

ルイージ「無事…とは言えないけど終わったね」

フォックス「確かにそうだな…ダークソウルはまだ欠片だったのか…」

スネーク「全て集まれば完全復活か…」

マリオ「まあ、あの様子じゃあしばらくは回復に専念するだろうな」

ルイージ「ネリアちゃんに質問『内の兄さんどう思う？』」

スネーク「ネリアに質問だが…『銀時以外でツツコミ所あるなと思つた人物はいるか？』」

ネス「コンパさんとアイエフさんに質問『ネリアさんを見ての第一印象はどんな感じですか？』」

そんな訳で次回を楽しみにしています

マリオ「……皆はなぜなのは(冥王)の名を出すと離れるんだ?」  
つてマリオ「……………」  
前なんてこと言ってた……………!!」

真王「最近多いな、なのはが魔王だの悪魔だの冥王だの……」

辰馬「アハハハ、それって喧嘩売ってないんか?」

真王「全然、質問回答スタート」

ネリア「ええ、こんなに規格外な人は初めてです。銀さん以外で突っ込みどころと言えば桂さんですね」

コンパ「ネリアさんは本当に可愛い天使です!」

アイエフ「私は天使なんて初めて見たから言うけど、可愛かったわね」

ネリア「あ、ありがとうございます…」

ネリアは照れる。

辰馬「そんじゃあ『鳴神 ソラ』、廊下に立つじゃき。次はペンネーム『白騎士君』からじゃき。『白騎士君』スバルは3番を選んだか」

レナード「シモンのように口上を言うのか？スバルは」

白騎士君「どうかな？スバルがもし螺旋の戦士に覚醒して天元突破グレンラガンみたいにあなるかな？」

レナード「それは絶対に無い後、またスバルに質問。『2番目に使ってみた必殺技は？』今回は今回はこれだけ」

白騎士君「質問の答えを待っています」

スバル「これ絶対に言わなきゃいけないですか？」

真王「はよ言え」

スバル「うっ、1番です…」

銀八「はいはい、『白騎士君』廊下に立ってなさい」

辰馬「そんじゃあ次はアリシアちゃんがアシストするじゃき。そん  
じゃな」

第六十一訓：過去の歴史に意外な事実が隠されている（後書き）

ネプテューヌ「私達の前に語られし驚愕な真実、それは…」

ノワール「まさかダークソウルが作られたのは神の仕業だって言うの？」

ネプテューヌ「なんと！人類の中でカステラとチーズケーキの区別が付かないなどという人が存在するのだ！」

銀時「なんで食べ物なんだよ！ショックのあまり現実逃避してんのか？」

ネプテューヌ「この二つの区別の仕方はただ一つ！食べてふわふわしていればカステラ、もっちりな食感ならチーズケーキと認識せよ！」

ベール「チーズケーキには水分が含まれているのですわ」

ヴァルバトーゼ「それだけではない！この二つの食感に、イワシを食してさらに健康を会得するのだ！」

フェイト「味はよろしくないけど健康にはなるよね…」

ネプテューヌ「次回『グロリアスイーターネプテューヌ』最終話！  
『カステラとチーズケーキ』目指せ甘もの！」

銀時「あ、ちなみに俺チーズケーキがいいな」

真王「おれも。ちなみに『分れてたって中身は同じ』が次回です」



第六十二訓：分れてたつて中身は同じ（前書き）

真王「今回はちょっとした事件：ないイベント」

アリシア「『リリカル銀魂』始まるよ〜」



ホワイトハート」……」

ブランとホワイトハートはただ黙って小説を読み、

ベール「あらあらあら……」

グリーンハート「まあまあまあ……」

ベールとグリーンハートはただお互いそんな言葉を口にいしているだけだった。

はやて「みんな、ネプちゃんたちがこうなった原因が分かったで桂「何と、八神殿、それは一体？」

はやてが原因を突き止めたようだ。

はやて「この前なのはちゃんが回収したロストログア・ディバイダルが原因やと思うんや」

フェイト「ディバイダル…別名『分裂者』だね」

パープルハート「そのせいで“私”と“普通の私”が別れちゃったってことね」

パープルハート含め他の女神たちも納得したようだ。

ネプテューヌ「私が普通ってどういうこと!？」

ネプテューヌが突っかかるがスルー。

リン「検査の結果ですが明日になれば元に戻るそうです」

グリーンハート「そうですか、それなら安心しました」

ノワール「じゃあとりあえず自由やっても何なく元に戻るのね」

はやて「そつや」

はやては答える。

はやて「あ、どうせや」

パープルハート「？」

はやてがパープルハートに向く。

はやて「その美しい美乳をうちに揉ませ」バキッ！」「ブヘッ！」

パープルハートに殴られた。

てか自業自得だ。

パープルハート「ま、とりあえず自由やっても問題ないなら私達で好きにするわ」

フェイト「あれ？何処行くの？」

パープルハートがネプテューヌと手をつないでどこかへ行こうとしたのでフェイトが聞いてみる。

パープルハート「フツ、決まってるじゃない」

ネプテューヌ「私達が行くところはそう…」

ネプテューヌ・パープルハート「おいしい食べ物があるところだよ

(よ)」

全員(分れても中身はそつくりだな…)

笑って言うからどんななにかと思えば本人そのものな答えだった。

はやて「それはいいとしてもちゃんと服着いや。その恰好はおかしいやろ」

はやてが指摘する。

水着に近いパープルハート達の服は一般に出れないのだ。

パープルハート「大丈夫よ。これくらい」

パープルハートに光が包まれる。

そして、なぜか胸部に紫のNのトレードマーク付きの白いTシャツに青いジーン姿になった。

パープルハート「どう？似合うかしら？」

はやて「ほぅ、なかなかクールなもんやなあ」

なのは「うわ、かつこいい…」

銀時「凄い恰好だな」

桂「おお、似合うではないか」

スバル「かつこいいです」

周りはパープルハートの姿を見て高評価した。

ブラックハート「何やってるのよネプテューヌ。早く行くわよ」

つと、いつの間にか白のTシャツに黒のスカートをはいたブラックハートが出かける準備をしていた。

ちなみにホワイトハートは頭に白いリボンに白のゴスロリ。

グリーンハートは某桜の大食い幽霊の服を緑色にした感じの服を着ている。

新八「いつの間にもう着替えたんですか？」

ホワイトハート「このくらい朝飯前」

ホワイトハートは即答する。

ベール「それでは」

そう言つてネプテューヌ達はどこかへ行つた。

ミッドチルダ

ネプテューヌ「む？あのクレープ屋さん…新メニューイタリアンバジル味！？早速食べよう！」

パールハート「興味あるわね」

ネプテューヌとパールハートは早速新メニューを注文する。

ノワール「エレキギター……」

ブラックハート「デープ・ロック・ブルータイプ……」

ノワールとブラックハートは飾られているエレキギターに目を輝かせている。

ブラン「……………」

ホワイトハート「……………」

ブランとホワイトハートは本屋でただ黙って本を読んでいる。

ベール「あら？このティーカップは……」  
グリーンハート「このグラスもなかなかのものですわ」

ベールとグリーンハートは高級店でいろいろ見て回っている。  
特に何のイベントもない。

ネプテューヌ「いや、最初分れた時は焦ったよね」  
パープルハート「たしかにね」

つとファミレスで食べながら言う2人。  
ちなみにここはミッドチルダのファミレスです。

ノワール「そりゃ慣れないうちはみんな焦るものね」  
ベール「効果は一日と言っても、なんだか名残惜しいですわ」  
グリーンハート「私もそう思いますわ」

ブラン「…私は別にいい」  
ホワイトハート「…私も別にいい」  
ブラックハート「あんた達よくそんなことが言えるわね……」

意見にずれがあるが、とりあえず寂しそうだ。

ネプテューヌ「あ、ジュースなくなつた」

いつもの調子で入れに行こうと動くと、

ネプテューヌ「あれ？」

なぜか男の人に掴まれる。

そして首元にナイフを突き付けられる。

バーバーンッ!!!!

突然の銃声に客含め店員が悲鳴をあげた。

男「テメーら動くなー!!!!」

どうやら強盗団のようだ。

リーダー「良く聞け貴様ら!この俺、ジエード率いる『萌える闘魂』  
が乗っ取ったー!!!大人しくしていればよし!さもなければ死ぬこと  
を忘れるな!」

ノワール(萌える闘魂って何っ!?!もしかして変態なわけこいつら  
!?)

ノワールは心の奥底で突っ込む。

強盗団員「オラ!お前らもこい!」

何とノワール達も人質に取られる。

ジエード「さて、準備を始めるぜ」

ファミレスの外

ジエード「良く聞け貴様ら!俺は強盗団『萌える闘魂』のジエード



だ！今からこの場を占拠した！俺達を逮捕など出来んぞ！こっちは人質がいるんだ！時空管理局から100万円提供しろ！そうすれば人質は解放してやる！」

シャッターで中が見えないが、ジエードの声が聞こえる。

外には数10人の局員と、なのは達と銀時達がいる。

そして真選組とナンバーズもいる。

銀時「何で俺がこんなことしにやいけなんだ？」

桂「何を言うか。困っている人々を助けて何の損もないだろう」

近藤「平和な日常を守る！それが俺達真選組の使命なのだよ」

近くにいる近藤が断言する。

山崎「局長！」

セイン「情報集めたよ！」

山崎とセインが戻ってきた。

近藤「山崎、中の状況は？」

山崎「はい、ジエード含め強盗団が20名、中にいる人質は店員と客含め35名です」

中の状況を把握して作戦を考える真選組。

局員「臨戦態勢！」

局員たちがいきなり構えをとった。

強盗3人と人質が出てきたからだ。

銀時達はすつごく見覚えのある人質がいた。

ネプテューヌである。

銀時「ってオイイイイイイイイイイ！！！！！！なんでテメエがいるんだー！！！！！！」

ネプテューヌ「わー！助けてー！悪いおじさん達に捕まっちゃったよー！（棒読み）」

銀時「ム力つく！その棒読みがム力つく！！」

棒読みに答えるネプテューヌに怒鳴る銀時。

強盗団員「へへッ！残念だったな局員ども。すでに人質は俺達の手の中にある。大人しく諦めろ」

勝ち誇ったかのように笑う。

が、それが命取りになる。

強盗団員「グアッ！」

ネプテューヌを捕えていた男が吹き飛ばされた。

正確には、ネプテューヌが瞬時に抜け出して両肘で男を突き飛ばしたのだ。

強盗団員「てm「チエスト！」ゴホッ！」

もう一人の男が事態気付くが蹴り飛ばされる。

そしてネプテューヌは3人目の男に振り返り、頭を掴んで宙返りしてはその男を地面にたたきつけた。

ネプテューヌ「フウッ」

その口を漏らすと、周りから歓声と拍手が送られた。ネプテューヌは一時啞然とし、照れくさく頬を掻く。

ドカーーン!!

強盗団員「ドワアアアアア!!」

ファミレスに爆発が起こり、中から強盗団達が吹き飛ばされた。

パープルハート「あら？もうそつちはケリが付いたの？」

ネプテューヌ「意外と楽勝だったよ？」

中から武器をもったパープルハート達が出てきた。

どうやら彼女達は中で戦闘して強盗団を再起不能にしたらしい。

パープルハートの左手にすでに気絶したジェードが引き摺られている。

局員「確保————!!」

こうしてジェード率いる強盗団は御用となった。

## 機動六課

ネプテューヌ「いや〜、面白かったね〜」

パープルハート「楽しめただけよしとしましょう」

新八「なんでそうなるんだよ!!」





ゼロUF「自らの欲望に自分を慕っていた者をモノにし拳句の果てにああ言う風にするなんて許せん!!」

ネス「確かにそうだね…ネリアさんに質問『ネプテューヌさんの養子であるリリス達を最初に見た印象はどうでした?』」

リユカ「同じく質問『内のルイーダさんはどう思いますか?』」

スネーク「リリスに質問『ネリアに動物になる魔法をかけたら何になると思う?』」

そんな訳で次回を楽しみにしています

ゼロUF「頑張れよネプテューヌ!!」・・・マリオスッゲー怒ってる」

アリシア「確かに…。あ、ネリアさん質問ですよ?」

ネリア「え?ええ、最初見たときは目を疑いましたよ。でもお姉ちゃんから事情を聞いて仲良くしています。(本当は認めんけどな)あとルイーダさんですか?苦労なさってるんですねって思いました」

リリス「ネリアを動物に?多分リスじゃないかな?」

銀八「んじゃ『鳴神 ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

アリシア「次はペンネーム『黒神』さんからだよ。『音無へ

自分も魔法が仕えるのなら、どんな魔法が使いたいですか?」

マヨラーへ

今だ出番が無い貴方は、『狂乱編』で大活躍した桂の存在が憎いですか？（黒笑）

神楽へ

原作でギャルゲーオタクと堕ちた新人を見てどう思いますか？

以上です。『えつと順番に答えるとね』

音無「とりあえず医学系の魔法だな」

土方「切るぞ桂————!!!」

神楽「マジオタクネ。キモイアル。くたばるヨロシ」

アリシア「それじゃあ『黒神』さん、廊下に立ってね」

真王「さて、次回のアシストはまたネリアにやらせます」

第六十二訓：分れてたつて中身は同じ（後書き）

真王「今回はディスガイアでお馴染みのランダムダンジョンへ突入  
！」

ネリア「次回『ダンジョンは男のロマン』テイクオフです」



第六十三訓：ダンジョンは男のロマン（前書き）

真王「今日はディスガイアでお馴染みランダムダンジョン・アイテム界へ行くぜ」

ネリア「『リリカル銀魂』、始まります」

## 第六十三訓：ダンジョンは男のロマン

きっかけはネプテューヌの一言から始まった。

ネプテューヌ「ねえ、みんなアイテム界行こうよ」

魔界・地獄

銀時「で、何で俺達がこんな所にゃいかんのだ？」

銀時はだるそうに愚痴る。

ノワール「何言ってるの。行かなきゃあなたは『あゝだるい』もうメンドクセえよ。もう生きること面倒クセエよ」とか言っじやない」

銀時「イヤそりゃそうだけど最後のまでは言わないから俺」

さすがにそれはないだろうと突っ込みを入れる銀時。

ちなみに今いるメンバーは銀時達よろず屋組となのは達六課組、そして女神組とヴァルバトーゼ達悪魔組である。

ネプテューヌ「アイテム界屋さん、今日はこのエックスセイバーをよろしく願います」

アイテム界屋「エックスセイバー界ですね。お待ちください」

アイテム界屋の人は何やら準備をし始めた。  
すると何か引つかかった銀時が尋ねる。

銀時「なあ、アイテム界って何だ？」

それを聞いたヴァルバトーゼが説明する。

ヴァルバトーゼ「所持するアイテムのレベルをあげる世界だ。だがアイテム界には様々な種類があつてな？普通のガムならガム界、プリンならプリン界、イワシならイワシ界、カタクチイワシならカタクチイワシ界、スルメイワシならスルメイワシ「イワシはもういいの！！」・・・ま、アイテムによつて世界が違う、それがアイテム界だ」

ヴァルバトーゼの説明におおくと漏らす方々。  
ちなみにさつき突っ込んだのはエミールゼルである。

ヴァルバトーゼ「例えば…その木刀に名前はあるか？」

銀時「これは『洞爺湖』だよ」

ヴァルバトーゼ「つまりその木刀・洞爺湖の世界もあるということだ」

ほぼ全員納得したようだ。

アイテム界屋「準備が出来ました。何時でも出発できます」

ネプテューヌ「来た来た。みんな行くよ」

銀時「あゝい、分かったよ」

そしてネプテューヌ達はアイテム界…エックスセイバー界へ向かった。

エックスセイバー界・1F

IBGMアイテム界by魔界戦記ディスガイア4  
(Disgaea 4 Soundtrack - House  
of Peers)

ネプテューヌ達が降り立った世界。

周りの風景は宇宙空間のようだ。

桂「ココがアイテム界か…」

エリザベス「意外と殺風景かもしれませんね」

エリオ「そう言えばノワールさんから聞きましたけど『修行に持ってこいの相手がいる』ってどういった人たちなんでしょう?」

エリオが聞くとラハールが答える。

ラハール「それはなあ、今すぐに分かることだ」

モンスター「グルルルルウウウウウ……」

周りからモンスターのうねり声が聞こえた。

出てきた相手はいろんな種類の敵だった。

いくつもの目と触手をもつ触手魔族・モルボル。



なのは「キャ！離して！」  
フェイト「なのは！」

なのはがモルボルに捕まった。

その触手が入れてはならないところに入れてきた。

新八「フバアツ！！！！！！（超鼻血）」

直視した新八は滝のように鼻血を噴出してしまった。

ヴィヴィオ「ママ危ない！」

ヴィヴィオはモルボルをグーで殴り、モルボルを倒す。

なのは「ありがとうヴィヴィオ、今度は私の番だよ！」

ヴァルバトーゼ「よし！貴様の修行の成果俺達に見せてみる！」

ヴァルバトーゼの言葉になのはは頷き、空中に上がって修行によって進化した技を披露する。

なのは「いくよ！スターライトシューター！！！」

10個のスフェアを展開し、モンスター軍を撃破した。  
その威力はまるで得意技のデイバインバスター並である。

ヴァルバトーゼ「中々の威力だな」

なのは「ヴァルバトーゼさんのおかげです」

なのははヴァルバトーゼにお礼を言う。

銀時「え？なのは、お前何時の間に強くなったの？」

なのはの強さに尋ねる銀時。

すると銀時以外は何言ってるんだこいつ？みたいな顔で見る。

ノワール「知らなかったの銀時。なのは達はヴァルバトーゼ達に頼んで修行してたのよ」

ベール「魔界でたくさん修行で今やどんどん強くなっていったますのよ」

ブラン「…知らないのはあなただけ」

銀時「・・・マジで？」

銀時は驚きを隠せない。

桂「日ごろから人の話を聞かんからだぞ」

エリザベス「まったくです」

桂とエリザベスに呆れられる。

フーカ「ま、敵みんな倒したから次行くわよ」

エックスセイバー界・4F

銀時達がモンスターたちを倒している最中、不思議な物を見つけた。緑色で？のマークが浮かび上がっているゲートがある。

銀時「なんだこれ？」

ネプテューヌ「これは『不思議ゲート』入ってみてのお楽しみ」

そう言つてネプテューヌが入る。

ネプテューヌ達は不思議ゲートへ入った。

エックスセイバー界・4F・闇商人の間

闇商人「ヘイラッシャイ！ワイロ売りますぞ〜！」

怪鳥族・コカリトスに似た商人が酒、クロロフォルム、爆弾、金の延べ棒を販売していた。

ネプテューヌ「じゃあそのクロロフォルムと金の延べ棒買つよ」

闇商人「ヘイ！値段は10600HLいただきますぞ〜！」

ネプテューヌは金を払つて買った。

フェイト「ワイロって…何に使つつもりなの？」

正義感強いフェイトにとってワイロはいけないもの。

マオ「どうした？賄賂など魔界では日常茶飯事の領域だぞ？」

フェイト「……………」



フェイトは頭を抱えた。

なのは達人間界の常識と悪魔達魔界の常識は全然違うのだ。

ラハール「もう用はない。行くぞ」

エックスセイバー界・7F・ラーメン屋

ラーメン店長「ラララ〜ララ〜、んお？お客さんかい？」

重騎士姿のラーメン店を構えている男がいた。

ネプテユーン「おじさんラーメンっ」

銀時「お〜、ラーメン懐かしいな〜。一回食つとくか」

神楽「『3分以内に特大ラーメン完食』がなつかしいネ」

なのは「じゃあ私味噌で」

スバル「あたし醤油」

ラハール「とんこつを選ぶか」

ラーメン店長「毎度〜」

ネプテユーン達はラーメンを食した。

体力が500回復した。

エックスセイバー界・10F

アイテム將軍「ぐああああああ!!!!」

アイテム界のボス的存在・アイテム將軍を倒した銀時達。

なお、アイテム界の30F・60F・90Fにはアイテム大王というボスがいて、

100Fにはアイテム神というボスがいる。

(修羅の世界のアイテム界ではアイテム神2である。)

ネプテューヌ「次はイノセントタウンだね」

ヴィヴィオ「一時休憩だね」

銀時「イノセント?」

銀時が気になったので聞いてみる。

ネプテューヌ「アイテム界にいる住人だよ。その人たちはいい人たちだから襲ってこないよ」

銀時はそうかと返す。

そしてイノセントタウンでネプテューヌ達は一時休憩した。

エックスセイバー界・13F・ぼったくりバー

ぼったくりバーのママ（以下、ママ）「いらっしや〜い、ぼったくりバーへようこそ」

バーの構えを立てている店主の夜魔族が挨拶をした。

その他に従業員の猫娘族、妖花族、夜魔族（この人物は色違い）もいる。

銀時「え？ぼったくりバーって何？なにぼったくられるの？」

銀時は顔を青くしていく。

ママ「あら、ぼったくりって書いてあるけど別に深い意味はないわ。それはともかく今日はお金で払う？それともか・ら・だ・で払う？

？」  
銀時「なんか二択目スツゴイやばそうなんですけど！！」

銀時はさらに冷や汗を流す。

アルラウネ「さあさあそんなに硬くしないで気持ち良くなりましょ

」  
ネコマタ「そうニヤ。肩の力を抜いて気持ちよ〜くなるニヤ〜」

銀時「止めてくんない！？っか俺積極的な女嫌いなんですけど！？」

銀時は暴れ出すがネコマタの人間顔負けのパワーのせいで振りほどけない。（てか人じゃねえけど）

ネプテューヌ「銀さん、先にお金払った方がいいよ。10万HL」

銀時「高えよ！！んな金払う気はねえよ！！」

ネプテューヌ「でも払わないと男の尊重が根こそぎ取られちゃうよ

「？」

銀時「…分かった、払う」

ママ「あらあら、毎度ありがとうね」

銀時は男としての尊重を10万HLで守ったのだった。

エックスセイバー界・16F

なんとかぼったくりバーから逃れた銀時。

しかしなのは、フェイト、シグナム、リインフォース、スバル、ティアナは機嫌が悪そうな…というか銀時に殺気を向けている。  
その原因は自分で考えてください。

ビビビビ！ビビビビ！ビビビビ！

突然警報みたいな音が鳴った。

銀時「え？これ何？」

ヴァルバトーゼ「これは界賊が来る警報だ！来るぞ！」

IBGM界賊団登場 by 魔界戦記ディスガイア4  
(Disgaea 4 Soundtrack - Make  
the Hell)

ガラガラガラガラガラ！

馬車の走る音が聞こえる。

黄巾界賊団船長「武器をもって立ち上がれ！我らは天下を手にするのだ！！」

黄巾界賊団員達「オオ~~~~~！！！！」

黄巾界賊団が現れた！

ネプテューヌ「なんだ、この人たちが」

ノワール「いつにもなくうざい奴らね」

なのは「彼らを知ってるの？」

ベール「黄巾界賊団はアイテム界でよく現れる界賊ですわ」

黄巾界賊団のことを説明するベール。

ネプテューヌ「でも対して強くないから安心して」

黄巾界賊団船長「なんだと！？そのセリフは俺達の実力を見てから言いやがれ！！」

で・・・

黄巾界賊団をやっつけた。

ネプテューヌ「フツ、またつまらん物を切ってしまった」

銀時「何かツッコつけてんだコラ」

ネプテューヌ「イタツ」

カッコつけたネプテューヌにど突く銀時。

なにはともあれ、次のステージへ進んだ。

エックスセイバー界・24F

ビビビビ！ビビビビ！ビビビビ！

またしても警報が鳴る。

銀時「今度はなんだ？」

遠くから船が見えた。

胴体はガレオン船であるが、両サイドが天使の羽でトップには十字架がある。

聖女界賊団船長「全ての根源である悪を排除し、すべてを平和にせよ！」

聖女界賊団員達「おお~~~~~!!!」



スバル「だつたら私が！」

スバルがウイングロードで駆け出す。  
リボルバーナックルが回転を始める。

スバル「リボルバー……！インパクト……！」

ヘイホー界賊団「ぎゃあああああああああああああああああああ  
あ……！！！」

リボルバーナックルを地面にたたきつけた衝撃波でヘイホー界賊団  
が全滅した。

ヘイホー界賊団をやっつけた。

新八「ヨワツ！あんたらなにしに出てきたんだ……！」

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん。こっち終わったよ……」

ヴィヴィオが手を振っている。

その周りにボロ雑巾になった聖女界賊団がいた。

聖女界賊団をやっつけた。

銀時「もうそつちは終わらせたのか？」

ネプテューヌ「さあ、長居は無用だよ……」

こうして次のステージを進み、30Fのアイテム大王を倒し、エッ  
クスセイバーはレベル30へとパワーアップした。

その後逆界賊団でレベルを50へとあげた事も追加しておく。



くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ネリア「ハイ今回もやらせていただきますネリアです」

銀八「よし行くぞ。ペンネーム『支配者』さんからの質問。『はやくに質問です。どんなアニメキャラの乳をもみたいですか？』ってセクハラじゃねえかこれ！！」

はやて「うちは胸が大きくておしとやかな人がええな」

銀八「答えやがったし！！『支配者』！セクハラ発言は減点だぞ！！」

ネリア「・・・次はペンネーム『鳴神 ソラ』さんからです。『マリオ』今回はちょっとした凄い事になってるな」

ルイーダ「分裂：」

スネーク「けれど性格はあんまり変わってないな……」

フォックス「んでまあ……倒したな」

ネス「あっさりだね」

リュカ「ご愁傷様だよね」

マリオ「そうだな……銀時達に質問『自分がもしネプテューヌ達と同じ様に分裂したらもう1人の自分はどんな感じだと思っ？』」

ルイーダ「ネプテューヌ達に質問『怒った兄さんどうだった？』」

ネス「リリースに質問『普通の状態のネプテューヌさん達と女神状態のネプテューヌさん達で動物になる魔法をかけると同じ動物になる？』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます 『』

銀時達「イヤ多分同じだろ（アル）（じゃろ）」

ネプテューヌ「分かるよその気持ち、一緒に倒そう！」

ノワール「凄まじい怒りね……」

ブラン「……（ベールに隠れる）」

ベール「あらまあ……」

コンパ「恐いです…」

アイエフ「こりやかなわれないわ…」

リリス「さつき試してみたら同じ動物だったよ？」

ネリア「やったんですか!?!?!」鳴神 ソラ「さん。廊下に立  
つてなさい。次はペンネーム『黒神』さんからです。『銀時へ

ブレイブルーのキャラクターを見てどう思いますか?以下の人物か  
ら一人ずつ答えて見てください。

ラグナ・ザ・ブラッドエッジ 『ブレイブルー』版の銀時

ジン・キサラギ ヤンデレ的なブラコン。

ノエル・ヴァーミリオン 貧乳ヒロイン

レイチエル・アルカード ラグナの天敵(?)

ニユー ヤンデレ二号。

ツバキ・ヤヨイ　美女だけどブラコン好き。

マコト・ナナヤ　露出獣人。

ハザマ　（ユウキ・テルミ）　多重人格なサディスト蛇男。

以上です。『』

銀時「なんでだよ！なんでブレイブルーが出るんだよ！・・・まあ順番に言つとだな、こいつだよ、何でこいつと俺の声が似てるんだよ。マジムカつく。イヤブラコンっておい……。まあ貧乳は当たり前だな。なんだ？このロリ野郎は？ヤンデレって……。こいつもブラコンかい！ーリリースといい勝負だな！ーいやミーニヤか。サドは止めるって……」

真王「『黒神』さん。あつしはブレイブルーあんま知らないのであまりそう言う質問はしないでください。次のペンネームは『月光閃火』さんだ。『よお』：月光閃火だ。」

しかし……やっぱり分裂しても中身はそのまんまのようだな……。まあ……元々が同じだから当然か。

輝刃「ま……各々が個性的で魅力的だから別に構わんか……。」

そつだな……あ、質問……行くぞ？まずは俺からだ。

1・ネリアに質問：やっぱり、ネプテューヌ達みたいに『ハ  
ート』みたいな形態になれるのか？ になれるのだったら、どんな戦い  
方をするんだ？

輝刃「確かに、 magari なりにネプテューヌの妹分な訳だからな…。  
次は俺からだ。」

2・作者に質問：使用作品の欄に『IS-インフィニット・ストラ  
トス-』が入ってたハズだが… どうかの回の話で出てきたのか？ そ  
れとも、今後の話の中で登場するのか？

あゝ…それは確かに気になるな…。 とうか…他の作品のも、まだ  
出てきてないのがあると思うが…どうなんだろ？』・・・は？その  
作品は『第四十五訓：見た目はコスプレでもすごい力が秘められて  
いる』を見てから言え」

ネリア「作者さん！少し自重してください！ちなみに私はお姉ちゃ  
んの様に変身は出来ません。女神と天使じゃ身分が違いますし、変  
身できるのはお姉ちゃんたちだけです」

真王「へい、『月光閃火』さん。もつと小説を確認しろ」

銀八「んじゃ次、ペンネーム『白騎士君』だ。『白騎士君』分裂し  
ても中身は変わらないね。早速質問です。『僕の質問したスバルの  
必殺技は本編で使いますか？もう一つ質問スバルはグレンラガンの  
シモンの様に口上を言いますか？』今回はこれだけです答えを待っ  
ています」

レナード「俺の出番は？」「『」

真王「『白騎士君』、それは使わんしさせはしないよ？そんなわけだ！『黒龍』からの質問だ。『黒龍』テスト終わって久しぶりの感想で〜す」

銀時「これでやっと小説投稿できるな」

黒龍「いやホント、マジで大変でした」

ソラ「結果は微妙だけだな」

黒龍「そう言う事言わないで！！」

銀時「今回は分裂するかありえない事が起きたな」

黒龍「そんでもって事件をあっさり解決する所は彼女達らしいですね」

ソラ「そうだな」

黒龍「じゃあ質問いきます。

1・ネプテューヌに質問。分裂したパープルハートとなんか合体必殺技と思いつきましたか？

2・真王さんに質問。最近どこかの小説とのコラボとかを考えていますか？

3・リリカルメンバーと女神四人に質問。さっちゃんビームが出るとんでもメガネをどう思いますか？」

ソラ「じゃあ次も楽しみにしているぞ」

銀時「じゃあな」

黒龍「最後に最高級ワインを贈っておきます。アルコール濃度高いんで気をつけてくださいね」『あゝ、ネプテューヌは思いつかなかったと言っていました。あとコラボ小説のは考えてますよ？無敵の神と女になった兄と極オタクの妹のこのだがな。そして最後のだが：みんなありえないってちょっと否定的な答えを出しました。』  
黒龍『さん。廊下に立ってなさい』

銀八「そんじゃ最後だ。ペンネーム『亀鳥虎龍』』質問」

1．はやてに質問です。僕の小説では、温泉で神裂の胸を揉んでいました。自分で見てどう思いますか？

2．シグナムに質問です。僕の小説の主人公のうち、戦いたいキヤラは？

上条当麻

アクセアレータ  
一方通行

奴良リクオ

鑢七花

3．沖田に質問。土方抹殺のアイテムを使うならどれが良い？  
答えたら、そのアイテムをプレゼントします。

ロケットランチャー

追尾装置付きミサイル

毒入りマヨネーズ』碌なもんねえな…」

はやて「そっちのうち、どんな胸の揉み応えやったんや?」

真王「何つう質問してんだテメエ!」

はやて「ギャブっ!」

真王に殴られた。

シグナム「そうだな…七花が良いな」

沖田「それら全部くだせえ。それで土方さんを亡きものにしまさあ」

土方「んじゃテメエが死ぬエエエエエエエエエエ!?!?!?!」

沖田と土方は乱闘を始めた。

真王「はあ、『亀鳥虎籠』さん、とりあえず廊下に立て。あ、それからこんな企画作つたよ」

『自分の界賊団

これは自分オリジナルの界賊船とそのキャラクターを使って界賊団を作るバトンです。

界賊船のパーツと乗せるキャラはどんなんでもよい。

資料



界賊団名

界賊船ボディ

界賊船ヘッド

界賊船リア

界賊船右サイド

界賊船左サイド

界賊船トップ

界賊団員（1～10人）（船長は一人）

例

ねぶねぶ界賊団

ボディ：ガレオン船（黄色）

ヘッド：プラズマ砲台（赤）

リア：ロケットリア（黒）

右サイド：ハルバードの右翼

左サイド：ハルバードの左翼

トップ：大和の主砲

ネプテユーン（船長）

ノワール

ブラン

ベール

こんな感じですよ。私の場合、

### 真王界賊団

ボディ：ガレオン船（赤）

ヘッド：ジャイアントドリル（赤）

リア：バーストエンジン（赤）

右サイド：ハルバードの右翼

左サイド：ハルバードの左翼

トップ：大和の主砲

銀時（船長）

ネプテユーン

ノワール

ブラン

ベール

桂

神楽

なのは

フェイト

サチコ

希望相手

黒神

黒龍

鳴神ソラ  
亀鳥虎龍  
白騎士君  
月光閃火  
支配者』

真王「そんなわけで次のアシストはヴィヴィオが出ます。では」

第六十三訓：ダンジョンは男のロマン（後書き）

真王「今回は何と銀魂史上最強最悪の緑の大魔王の降臨だ！！」

ヴィヴィオ「次回『最凶恐怖キャラって偶にいたりする』ていくお  
ふだよ」



## 第六十四訓：最凶恐怖キャラって偶にいたりする

それはとある日の事。

銀時、神楽、新八、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールの7人はスカリエッツィに何か重要な事を頼まれてアジトに来た。そしてスカリエッツィの部屋で7人はスカリエッツィの以上に青ざめている表情に不思議に思っていた。

銀時「んで、どうしたんだスカリエッツィ？また厄介な事を頼み込んできたってのか？」

スカリエッツィ「……あ……ああ」

珍しくも弱気なスカリエッツィに銀時も流石に不思議がる。

一体何があったかのかと気になる。

スカリエッツィ「今日は、君達にある人物と会わせたくてね。それも銀時君と神楽君と新八君の知り合いで、会いたがっていたように」

銀時「え、マジで！？そいつって……」

神楽「姉御アルか!？」

銀時と神楽はスカリエッツィのある人物とは誰なのかを気づく。

神楽の言う姉御とは新八の姉のお妙であり、神楽は彼女のことを慕っている。

2人はそう期待込めただと思うが……

スカリエッツィ「いや、そんな名の人物ではなく……何か花屋であるように」

ネプテューヌ達「花屋？」

ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールの4人は花屋である事に意外そうな表情をする。

銀時と神楽と新八もそうであるが、花屋であり自分達の知り合いであると聞くと、急激に青ざめる。その人物は嫌と知っている。

かぶき町に住む天人であり、その中でも最凶であるあの緑の魔人が。

銀時・神楽・新八「……………」

3人は青ざめて、体をブルブルと震えている。花屋であるならあの男に違いないと嫌と思う。

ネプテューヌ「あれ？銀さんどうしたの？」

ノワール「神楽も新八もなに震え得てるの？」

ブラン「…トイレ行きたいの？」

ベール「どうしたのでしょうか？」

ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールの4人は一体3人は何に怯えているのか分かんなかった。

しかしその恐れる理由がすぐに分かる、

何故なら、その3人でさえも恐れる最凶の人物が今部屋に入ってきた。

???「おやあ、坂田さんに神楽ちゃん、そして志村君じゃないですかあー!!」

愉快そうに現れて笑いながら現れたその男は、文字通り人間ではなく天人であった。

頭に花が生えていて可愛らしいが、それを除けば他全体は鬼の様な顔つきと体制であった。

緑色の体色にとつもない威圧感を放つ魔眼とも言える瞳。

そして何でも砕きそうな歯。

それはまさしく鬼である。

その男を見たノワール、ブラン、ベールは青ざめて時が止まったかのように固まってしまった。

ネプテューヌの場合は啞然としていた。

銀時「あ……あはははは、へ…屁怒紹さん、いや屁怒紹様…まさか貴方もいらしてたなんて思いもありませんでしたア……あははは」

屁怒紹「はあい。何か志村君から事情を聞かされて、私も店を閉めて貴方達を探していたんですよ。そしたら変な光に包まれてしまい、気がついたらみっどちるだって言う異世界に飛ばされてしまったんですよ。まさかここが、以前金髪のお嬢ちゃん達が言っていた異世界ですかねえ」

銀時「そ……そうなんですよお！さすがの屁怒紹様も突如の瞬間移動に驚いたでしょ！」

神楽「いやあ……ま……まさかお前もこの世界に飛ばされたなんてなあ、私すっかり姉御だと思ったヨオ……あ……あははは！」

新八「いやあ…ホントあなたが来るなんて思いもよらなかったですよ…あ…あはははは！」

屁怒紹が銀時と神楽と新八の再会のあまりに嬉しそうに喋りだす。一方の銀時と神楽と新八は屁怒紹の圧倒的怖さに固まってしまい、とにかく怒らせないように喋っていた。

そして屁怒紹は、見慣れていないネプテューヌ達女神組の4人に気



づいて、自己紹介をする。

屁怒紹「あ、どうもすみません。挨拶を遅れました……私、坂田さんと同じ世界で花屋をやっています……屁怒紹です」

自己紹介の名を聞くと、3人は急激に汗を流す。

屁怒紹「放屁の『屁』に怒りの『怒』、紹便マスクの『紹』と書いて……屁怒紹です」

彼がそう言うと、3人は青ざめていた。

ノワールは顔中に汗を流して、苦笑しながらも恐怖を感じていた。ブランは体中が震えていて、今でも泣き出しそうな表情をしている。ベールにいたっては体中が震えて作り笑いを浮かべるも怖くてひきつらせている。

屁怒紹が相当なまでに怖いのである。

何せ、屁怒紹の姿だけじゃなくその威圧感は並大抵な者ではない。そのあまりの怖さに生命型ロストロギアしか見えず、ゾーマよりも強そうである。

屁怒紹はあの宇宙三大傭兵部族の一角、荼吉尼族である。

その戦闘力は半端じゃないほど高く、屁怒紹はその上位に入りそうな雰囲気である。

只一人を除いては……。

ネプテューヌ「へえ、屁怒紹さんって言うんだ。私ネプテューヌ、よろしく」

そう言つて手を差し出す。

銀時（オイイイイイイイイイイ！！何やってんだこの子オオオオオオオオオオ！！！！）

神楽（屁怒組に握手求めてるアルウウウウウ！！！！）

新八（つて言うかネプテューヌさん全然怖がつてねえエエエエエエエエ！！！！奇跡だよ！！スツゴイ怖いもの知らずだよ！！！！）

銀時達はネプテューヌの行動に心の中でシャウトする。

多分ノワール達も同じことを考えていただろう。

屁怒組「え？あ、はい、こちらこそ」

屁怒組は少しあっけにとられたがとりあえず握手した。

屁怒組「あ、そうだ、是非ともお礼がしたいのもし良かったらこの当たりで僕が立てた家をご招待したいので…是非皆さんも遊びに来てください」

何か無駄に威圧感を放っているのか、ノワール達は青ざめて汗だらけである。

屁怒組「では、お待ちしております」

屁怒組は丁寧に挨拶してこの場を去る。

屁怒組が去ってから数分後、彼女達の止まっていた時がようやく動き出す。



ネプテューヌ「そんなに恐がらなくていいよ。ホラ、屁怒組さんの頭にある花を見続けていればきつと怖くなくなるから……」

ネプテューヌはそう言うが、よく見ると目のハイライトが消えている。

ノワール（もしかして恐怖通りこしてしまったわけ？）

恐怖通りこして逆にやさしく接するようになったようだ。

ネプテューヌ「さあみんな、早く屁怒組さんのところにいこ？」

銀時「それはいや……じゃなくてそれはいいけど引きずらないでくれる！？嫌な予感しかないんですけど!？」

ノワール「ああ、ネプテューヌ！お願いだから離して!!」

ずるずると銀時達を引きずるネプテューヌ。

スカリエッティがハンカチをもって振った光景が見えた。

### ミッドチルダ・屁怒組の森

ここは、屁怒組が立てた樹で作られた花屋『ヘドロの森』である。場所はほぼスカリエッティのアジトの隣で、屁怒組がここで店を経営する許可をスカリエッティにお願いした。

スカリエッティは断れば何されるか知らない為、一発で許可した。ナンバーズ達もスカリエッティの判断に賛成する。

何せ屁怒紹の怖さは最凶とも言つべき存在であり、間違いなく自分達より強い。

逆らえば殺されるからだ。

屁怒紹から放たれる威圧感には、間違いなくSSSランクは達成する。下手すれば生命型ロストロギアをも瞬殺出来そうなほどの強さを秘めている。

そんな屁怒紹の店の中に、銀時、神楽、新八、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールの7人はいた。

6人は今だに、屁怒紹の圧倒的な恐怖に怯えて震えていた。ネプテューヌ又はニコニコ笑っている。

屁怒紹「それにしても不思議ですね。あの金髪のお嬢ちゃん、フェイトちゃんでしたっけ。まさか私も、坂田さん達と同じくあの子の世界に飛ばされるなんて思いもありませんでした」

銀時「そ……そうですねえ、フェイトが屁怒紹様が来たって知りや驚きますよ」

屁怒紹の存在に今だ慣れていない銀時はビビりまくっている。

何せ屁怒紹はゾーマをも倒せそうな強さを持っていそうであり、如何に英雄である銀時でも屁怒紹だけには敵に回したくない。

ノワール達も同じである。

SSSランクの戦闘力がありそうな屁怒紹に敵に回したただけでも恐怖しだす。

屁怒紹「それに、ネプテューヌちゃん、ノワールちゃん、ブランちゃん、ベールさんだっただけ？」

ノワール・ブラン・ベール「はい!!!」

ネプテューヌ「なに？」

思わずビクツとして返事するノワール達。

屁怒紹は頭を下げてお礼を言い出す。

屁怒紹「坂田さん達が色々世話になって、ご近所としてお礼を言います。本当にありがとうございます」

ノワール・ブラン・ベール「いえいえ、とんでもございません!!」  
ネプテューヌ「別にお礼言うことじゃないよ」

礼儀正しい屁怒紹の礼儀正しい返事に、ノワール達は苦笑しながらも言い出す。

屁怒紹「そう言えば皆さんは、僕が花屋やっている事が変だと思っ  
ていますか？」

ノワール「いえいえ、そんな事は!!」

屁怒紹「ははは、良いんですよ。こんな見てくれじゃねえ」

屁怒紹の質問にノワールが汗だらけに答える。  
しかし、屁怒紹は愉快に笑い出す。

屁怒紹「僕はねえ、花になりたいんです」

ノワール・ブラン・ベール「？」

屁怒紹「昔からこんな外見の為に他人に怖がられた者でね、せめて心だけでも花のように綺麗になりたいと…だから少しでも花と一緒にいられる仕事がしたくて…最初はやっぱり向いていないみたいだ  
っと思いましたよ。お客様も1人も来なかつたから」

前の屁怒紹は孤独であつた。

孤独のあまりに悲しい思いもたくさんした。

しかし銀時と出会ってからは少し心が晴れた感じている。

屁怒紹「でも坂田さん達は違いますよ。私を怖がらずに接してくれ  
たのは坂田さん達が初めてですから」

銀時・神楽・新八（すみません、あの時もメツチャ怖がっていました  
けど！！）

屁怒紹にとってはそう思うが、銀時と神楽と新八は単に勢い任せに  
なって接触してしまっただけである。

そして今だに屁怒紹の事を怖がっている。

ベール「あのう、銀時さん…屁怒紹さんって外見よりも内心は良い  
人ですね」

銀時「ああ、屁怒紹様は心が綺麗だけど単に外見が怖いだけの人な  
らなげえ…あははははは」

彼女達は屁怒紹の本心を理解できた。

屁怒紹「あ…そう言えば坂田さん達は今、機動六課と言う場所でお  
世話になっているんですね。でしたら、後で私が渾身込めて育て上  
げた花を機動六課の皆さんに渡してください」

銀時達「は…はい、喜んでえ！！」

屁怒紹からの差し入れを、青ざめながらも受け取るうとする銀時達。

ネプテューヌ「あ、そうだ。屁怒紹さん、偶には機動六課こくちに来ない  
？」

全員（何言っただあアアアアアアアアアアアアアア！！！！）

ネプテューヌの突然過ぎる発言に全員心の中でシャウトする。





「パア」

銀時「あ…ああ、そうだね」

と屁怒紹に全然恐怖しないヴィヴィオは、屁怒紹の頭に咲いてある花にウキウキと笑っていた。

どうして屁怒紹が怖くないかは、あえて聞かないでおく。

屁怒紹「あのう、お近付きにとこれどうぞ。僕が渾身込めて育てた花ですので」

はやて「ありがたく受け取りましたアアアアアア！！！！！！」

と頭を下げながら受け取るはやて。

もしちゃんとしなければ殺されるからっと思った。

こうしてかぶき町からまた1人、原因不明の現象によってミッドチルダに舞い降りた。

世界最凶の花屋、屁怒紹。

外見が恐怖の存在でも花のように優しき純粋な心を持つ天人は、ミッドチルダでも敵に回してはいけない人物と認定されるであろう。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ヴィヴィオ「こんにちは。ヴィヴィオだよ」

銀八「んじゃ始めますか。ペンネーム『月光閃火』さんからだ。『よお…月光閃火だ。』

しかし…界賊団の面々は、これからもぶっ飛んだ感じの奴らがボンボンと出てきそうだな…(汗)。

輝刃「…反論出来んな…(汗)。とりあえず、質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・銀時達に質問…屁怒組の仲間でこんなキャラが居たらどうする？

仲間その1…『テイルズオブデスティニーシリーズ』の『バルバトス』ゲートイア』

仲間その2…『第3次スーパーロボット大戦』の『ケイサル』エフェス』

仲間その3…『ブレイブルーシリーズ』の『黒き獣』

うっ…そのパーティーは怖エな…(汗)。次は俺からだ。

2・高杉に質問…ぶっちゃけ自分と同じ声の『SOUL EATER R』の『エクスカリバー』をどう思う？

輝刃「中の人ネタを引つ張り出すか…(汗)。」

全員「い、いやだっ!!」

真王「だろうな。あと高杉、応えてくれ」

モニタが出て高杉が映る。

高杉「こんな奴が俺かと思うと吐き気がするな」

真王「だな。『月光閃火』さん、廊下に立ってくれ」

ヴィヴィオ「えつと次はペンネーム『鳴神 ソラ』さんだよ。『マ

リオ』今回は良い点での感想」

ルイーダ「銀さんは魔界は無理だよね」

スネーク「だな…」

フォックス「しかしアイテムの強さを上げるダンジョンか…」

ネス「凄いね」

リュカ「次回は何が来るんだろう?」

マリオ「質問、『銀時達も何か武器をパワーアップさせたか?』」

ルイーダ「ネプテューヌ達に質問『ネリアちゃんと再会出来た時どうだった?』」

スネーク「なのは達に質問だが…『何時の間に修行してたんだ？』」  
次回を楽しみにしてます

マリオ「どうなるのやら…」

真王「ああ、今回パワーアップさせたのはネプテューヌのエックスセイバーだけなんです。残念ながら銀時達のはないです。でも後にパワーアップするかも？それとネプテューヌ達はネリアにあってとっても嬉しそうにしていましたよ。それからなのは達ですがゲラビッツとの対戦後ヴァルバトーゼ達に頼んで修行してもらったとです」  
ヴィヴィオ「それじゃあ『鳴神 ソラ』さん。廊下に立ってなさい？」

真王「何で疑問形？まいつか。次は『支配者』からだ。『支配者』いや〜今回も笑えましたね」

銀時「そうだな」

支配者「では質問です。1銀時に質問、女神メンバーの中でSMPプレイをするなら誰がいいですか？（黒笑）2、シグナムに質問私の小説の登場人物の中で戦うなら誰がいいですか？

1、ブレイド

2、剣心

3、セト

4、シヤナ

5、綾子

6、イヴ

7、ヤミ

8、セイバー

この中から選んでください。3、マヨラーに質問、最近全く出番がありませんがそんな自分をどう思いますか？」

支配者「これで終わります」『で、どうなんだ銀時」

銀時「しねえよ！！何つつ質問だよこれ！！」

真王「確かに。次シグナム」

シグナム「どちらかというとセイバーだな」

真王「最後にマヨ方」

マヨ方「おい誰がマヨ方だ・・・って名前変わってるじゃねえかー  
ー！！！！」

真王「良いから答える土方」

土方「うっせえよ！！って元に戻ってる（ホッ）。そんなもん悔し



ソラ「それは仕方ないな」

銀時「そんじゃ最後に質問だ。ネプテューヌに質問だ。お前は人生を掛けて食いたい料理とかあるか？」

ソラ「俺からネプテューヌに質問だ。お前に食えない物とかあるか？」

黒龍「最後に俺からネプテューヌに質問です。東大級の問題がでたらできますか？」

銀時「そんじゃな」

ソラ「じゃあな」

黒龍「次回も楽しみにしています」『ぜんぶネプ姉ちゃんあての質問だね』

ネプテューヌ「うん、全部！」

真王「ツオイ！」

銀八「薄っすら予想してたけどそれかよ！」

ネプテューヌ「それに私がたべられないものなんてないよ！（ピーマン以外は）」

真王「（絶対ピーマン残してる奴がそれを言うか？）んで最後」

ネプテューヌ「東大？どんな？」

真王「これだ」

東大の本を見せる。

ネプテューヌ「……………ブシュッ!」

頭から煙が出た。

真王「あらら、無理か。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい。そして小説頑張ってください。最後に『月光閃火』さん。『鳴神 ソラ』さんの界賊団を公開します」

『月光閃火』

『名前：万達界賊団』

ボディ：キャラヴェル船（白）

ヘッド：超電磁荷粒子砲（レールブラスター／黒鉄）

リア：ブリストラスター（金色）

右サイド：グラップル右アーム（朱）

左サイド：グラップル左アーム（朱）

トップ：ジャミングミスト発生装置（白銀）

月光閃火（船長）

希望相手

伽藍

鋼 知恭

ring

龍の骨』



『鳴神 ソラ』

『界賊団名：スマツシュパイレーツ

界賊船ボディ：ガレオン船（虹色）

界賊船ヘッド：ハルバードの砲台

界賊船リア：バーストエンジン（白）

界賊船右サイド：ハルバードの右翼（虹色）

界賊船左サイド：ハルバードの左翼（虹色）

界賊船トップ：グレートフォックスの主砲

界賊団員

マリオ（船長）

ルイージ

ソニック

スネーク

フォックス

ファルコ

ピット

リンク

ヨッシー

クッパ』

真王「んじゃ次回のアシストは屁怒組にやらせようか」

銀八「え？・・・・・・・・・・・・・・・・んじゃ俺旅に出るわ」

真王「二度と帰ってくんない」

第六十四訓：最凶恐怖キャラって偶にいたりする（後書き）

真王「今回は何とコラボ作品！女の子大好きなあのかキャラが登場だ  
！！」

屁怒組「えっと、次回『百合っこ娘に気をつける』テイクオフ」

（予告）

ナレーション「白百合の少女が六課に流れ着くようです」

第六十五訓：百合っこ娘に気をつける（前書き）

真王「『リイン』さんから許可をいただき、あのゲストキャラが出演します！」

銀時「あゝ、あの百合ゆりづるさん……」

真王「ストップ、それではスタートだ！」

銀時「どっちだよ……！」

## 第六十五訓：百合っこ娘に気をつける

とある次元世界のとある妹が、女神たちや銀色の魂を持つ侍と出会うおはなし。

ミッドチルダのはずれのはずれ、そこに一人の少女が倒れていた。

見た目は、太股位まで伸びた銀髪をストレートにし、金色と蒼色の虹彩異色の瞳をし、顔立ちは美しく整っていた。身長は変わらないが、痩せすぎでは無く、逆に無駄な部分も無く、スタイル抜群と言ってもいい。言うなら、美少女と呼ばれるだろう。簡単どころ“Angel Beats!”の“ユイ”を長髪ストレートに変え、右目が蒼、左目が銀色のオッドアイにした感じの少女だ。

???「あれ？ここはどこだろう。(。|。)?」

少女は目を覚ましてあたりをうかがう。

ボロ着いた建物。青い空。そして遠くに見える近未来都市の様な街。

???「こ、ここって…ミッドチルダ!?うわやばっ!二八二八が止まらない( ^ ^ )!」

ミッドチルダと知ると嬉しそうな顔をする少女。

??? (時期からするとここってStrikersぐらいかしら? つてことは大人になったのはちゃん、そしてツンデレティアナちゃんやんとスバルちゃんとキャロちゃんに会える!!! あ、確かエリオもいるんだっけ。そこはほっこり)

なんか百合っこいことを考える少女。(エリオは除外されている)  
少女の名はビビ・ステイン、なのは達の百合ハーレムを築くオタク  
馬鹿である。

しかし元いた世界ではすでに(別世界の)なのは達を百合ハーレム  
に取り入れた・・・否、洗脳したと言えば正しいか。

彼女にはある潜在能力・禁忌をもっている。  
バイオ・ラブハーツ

その禁忌はビビに好意を抱かせ絶対服従させる力。

そしてその行為を抱いた者にてを出す物には死を与える。

それが彼女を力であり、禁忌でもある。

その一つが『魅了の笑み』という。

すると、少女・ビビを狙う輩が現れる。

それはカプセル型ガジェット・ガジェットアタッカーである。

ビビ「ガジェット！やっぱStrikersに入ったんだね私は  
！(\*><\*)。ってそれはともかく、ベアト、ワルギリア、か  
たずけるわよ」

ベアト・ワルギリア 承知した

ビビは嬉しそうな顔をして武器を構える。

だが彼女は知らない。

このガジェットが高杉ら『鬼兵隊』が作ったものであると知らずに。

まずガジェット達が攻撃を仕掛けた。

ビビはなんなく避ける。

ビビ「何処狙ってるの？そんな君達にこれをあげるよ」

ビビの手から黒っぱいスフェアが出された。

ビビ「てい」

放たれたスフェアはガジェットすべてを破壊した。

ビビ「ハッハッハ、やっぱりこの強い私がガジェットなんてザコ当然よね」

完全に余裕で愉快そうに笑うビビ。  
だがそれがすぐに終わる。

ズズズズズン！！

ビビ「わわっ！！」

突然の地震にバランスを崩されそうになるも何とか耐える。  
そして顔をあげると、巨大な金属で出来たゴリラがいました。

ビビ（え？何このゴリラ？こんな奴いたっけ？って言うかどっかで見たような…）

ベアト ビビ！考えている暇はないぞ！

ビビ「へ？キヤアツ！！」

ベアトから叫びが聞こえたがゴリラガジェット（ビビの仮命名）が殴りかかって来たのでギリギリかわす。

ビビ「っ！あんたあ！良くもやってくれたわね！お返しよ！！」

いきなり殴りかかってきたから起こって大量の魔力弾を展開してゴリラガジェットに放つ。

ゴリラガジェット「マジックプロテクト」

ゴリラガジェットがそう言ったあとビビの魔力弾がすべて直撃した。煙がはれると少しボロ着いているが頭在している。

ビビ「へ？うそ！手加減レベルにしてあると言え、なんで立っていられるの！？」

ビビはわけが分からないような表情をする。  
そこにワルギリアが答える。

ワルギリア 今一瞬“マジックプロテクト”という言葉が聞こえた。多分そのせいだろう

ビビ（マジで！？だから耐えられたのね〜（。〇。））

納得するビビ。

ゴリラガジェット「ゲガアアアアア！」

ビビ「！」

納得する束の間、ゴリラガジェットがビビを踏みつぶそうとしている。

ビビ（仕方ない、まだわけわからないのに死んでたまるか！く、W  
、>（

ワルギリアを構えてゴリラガジェットを粉さ…

????「スターダストストーム！！」





なのは「こんなところにまでガジェットが来るなんて、しかもガレオムまで…。ところであなた大丈夫だった？」

ビビ「はい！いやほんとありがとうございます！」

元気よく答えるビビ。

が、一瞬なにか引っ掛かった。

ビビ（あれ？今確かガジェットと…あとなんて言ったんだっけ？…

・まあいいや）

すぐに諦めた。

彼女にとって恋の相手が目の前にいるのだから。

ビビ「…ところで、ここってどこですか？」

なのは「ここはミッドチルダです」

ビビ「ミッドチルダ？（知ってるけどね）」

知っていながらも分からないかのように質問する。

なのは「あの、あなたは何処から来たんですか？」

ビビ「え？ああ、私地球から」

なのは「え！？地球から！？」

ビビの地球から来たと言う一言に驚くのは。

なのは「…驚きました。でもどうやってここに？」

ビビ「いや、私でも何が何だか分かんなくてさ、ただ覚えてる事と言えば穴みたいなのに入っちゃって気が付いたらここに、見たいな？」

若干嘘交じりな答え方だが、地球に住んでいることは確かである。

なのは「えっと、とりあえず事情聴取のため、これから私と同行を  
願えますか？」

ビビ「分かりました」

なのは「それと気になっていただけですけどそれってデバイス？」

なのははベアトとワルギリアを見る。

ビビ「うん、この宝石みたいなのをベアト、そしてこっちはワルギ  
リアって言うんだ」

ベアト ベアトだ

ワルギリア ワルギリアと言います

なのは「やっぱり、それじゃあ機動六課へご案内します」

ビビ「はい（やったぜい！これでスバルちゃん達に会えるう！）

> <\*（）」

ビビは内心嬉しそうな感じになってなのはのあとをついて行った。

## 機動六課

ビビはなのはに案内され、現在六課の食堂にいる。

周りにはなのはを初め、はやて、フェイト、シグナム達ヴォルケン  
リッターとスバルたちフォワードがいる。

ビビ（やっぱっ！！すっげ興奮する！！別世界とは言え私のハーレムが完成するには凄いことだよ！！）

自分の嫁（勝手ながらの予定）が囲まれていることに興奮するほど。

はやて「えつと、まずお名前は？」

ビビ「私？私はビビ・ステインだよ。よろしくね（ニコッ）」

六課組（エリオ以外）「っ！？／／／／／（か、可愛い…）」

同性を虜にする魅了の笑みを発動する。

エリオ以外の六課組は顔を赤くした。

ビビ（いえ〜い！これで六課組をコンプリートしたぜ！！あとは数の子組をこの手に…グツツツツフ…）

心の中でゆがんだ思念を抱いていると、

ガシャーーーーーン！！！！

ビビ「（ビクッ！）ふえっ！？」

何かが割れる音が聞こえた。

はやては頭を抱えるしぐさをする。

はやて「…まゝた“あいつら”かいな」

スバル「じゃあ私達が止めに行きます」

スバルたちフォワードは音が鳴ったところへ向かった。

はやて「ごめんな〜、あいつらがここよく暴れとるから驚いてしま



体がハリケーンのように回転して障害物を飛ばして奏に抱きつこうとする。

ティプルとイス

ゴスッ！

ビビ「オブワッ！ドゥッ！ブヘッ！」

虫唾が走ったのか奏がビビをぶん殴った。殴られたビビはバウンドして壁に激突した。

なのは「ビビちゃん！？大丈夫！？」

なのはとフェイトが駆け寄る。

ビビ「……………」

……返事がない。ただの屍のようd「勝手に殺すな！！」…チツ。

ビビ「だ、大丈夫大丈夫。これくらい平気…」

ビビは起き上がってなのはとフェイトを安心させる。

ビビ（ななな、なのはちゃんたちだけじゃなくAngel beats！の奏ちゃんも私の百合ハーレムの一員になる時が来たああアアアアアアアアア！！！！）（#、 #）（

しかし心の中では次なる願望が出来ることに喜びを感じていた。が、同時に違和感を覚えた。

ビビ（ってあれ？確か奏ちゃんってangel beats！のキャ

ラのはず…。なんでリリなのの世界にいるの!?)

奏がなのは達の世界にいることに疑問を抱くビビ。  
しかしさらに疑問をうかばせてしまう。

小毬「誰か迷子の人がいるの?」  
クド「わふう? 誰なのですか?」

(ビビにとって)可愛い子ボイスの声にキュピーンと電波を感じ取ったビビ。

後ろに振り替えると小毬とクドがいた。

ビビ(うつそ〜)(。;〜!!!?あの二人は恋愛ゲームでお馴染み“リトルバスターズ!”の神北小毬と能美クドリヤフカ! やっぱっ! マジ可愛い!!)

天然さわやか系キャラが出た事に興奮するビビ。  
更にこれだけでは終わらない。

プリニー「トイレの掃除終わったッス〜」

レミリア「そう、なら今度は廊下の掃除を…」

咲夜「お譲さま、それは私が済ませました」

フロン「ラハールさん、もうちょっと愛を自覚しなくては」

ラハール「いい加減しつこいぞ貴様! って俺様に近寄るなどといったらうムチムチ!」

リリス「酷いよ〜」

ビビ(あ、あの二本触覚はデイスガイアのラハール! あのペンギンはプリニー! そしてちよつと雰囲気が違うけどフロンちゃんだ! つて奥にいるあの二人って東方のレミリア・スカーレットと十六夜咲夜! キヤ〜本物だ〜!!!)

自分の好きなキャラ？がいて大興奮しているビビ。  
すると銀時と桂とネプテューヌがやってきた。

銀時「何騒ぎたててんだこのヤロー。中学生の修学旅行か？」

ネプテューヌ「銀さん例え的におかしい」

桂「何、だったらラップをおどってみよう。やるなら今しかねーZURA やるなら今しかねーZURA 攘夷がJOY JOYが攘夷 ふざけた国に俺が天誅 やるなら今しかねーZURA やるなら今しかねーZURA 攘夷がJOY JOYが」

銀時・ネプテューヌ「ジョオオオオオオオオオオオオオオオオオイ  
！」

銀時とネプテューヌはとび蹴りをぶちかました。

桂「ぐはっ！何をやる銀時！」

銀時「うるせーよ！！テメエの下らんラップに付き合う気はねえよ  
！！」

ネプテューヌ「私はノリで」

桂のラップに怒りを出す銀時とただノリでケリをかましたネプテューヌ。  
ーヌ。

ビビはそんな3人の銀時を見て驚いた顔をする。

ビビ「（あれは・・・普段はグータラでただのバカをやっているけどかつて攘夷戦争に参加し、白夜叉と恐れられし銀色の魂を持つ白い侍・・・坂田…銀時…」

銀魂の主人公で白夜叉と恐れられし侍・坂田銀時を見てそう呟いた。

???

ここは何もない荒野。

そこで一人の男が世界を見ていた。

???「・・・こいつは参ったな...、あの兄妹の妹が別次元の世界へ飛んで行っちゃまった」

男は別世界にいる六課にいるビビを見て呟いた。

???「しかし、あの世界どうも変だな。普通はいないはずの奴らに移住してやがるし...」

六課にいるリトルバスターズ、Angelbeats、デイスガイア、東方、ネプテューヌ達に銀時達のメンバー達を見て愚痴こぼす。

???「・・・しかたない。あいつを呼ぶか」

男はパチンつと指を鳴らすと魔方陣が展開される。

そして中から見た目が“天元突破グレンラガン”の“ヨコ・リットナー”を黒髪ストレートにし、右目が赤、左目が金色のオッドアイになっている感じの女性だった。

その女性は男を見て不機嫌なオーラを発する。

???「・・・なんだクソ神、俺を呼び出すなんてどうい風吹きまわしだ？」



女性は男口調でウザそうに男に言う。

「???」いや何、お前の妹さんがどっか飛んで行っちゃってさ」「???」あいつが?どうもあの糞妹の気配が消えたと思ったらすう言うことか…」

自分の妹が消えた事に多少の心配はしているようだ。

「???」うん、美しき兄妹愛。・・・いや、姉妹がいいか?」「???」いっぺん死ぬかテメエ…」

殺気全開で男を睨む。

「???」そう切れなさんなって。さて、一応迎えに行くぞ」「???」・・・ったく世話のかかる奴だ」

男と女性はビビのいる六課へ向かった。

「???」「…………カミ…………ダークソウルサマノテキ」

陰に黒い何かか2人のいたところを見ていた。

「???」(あれは…早く報告をしなくちゃ!)

その影を見た女神が仲間を呼びに行った。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

屁怒紹「どうもはじめまして、今回アシストすることになりました  
…屁怒紹です」

真王「ハイそんじゃあ銀八先生…って逃げやがったし…」

銀八先生がいつの間にかいなくなった。

真王「まあいいや。んじゃペンネーム『鳴神 ソラ』さんからいくぞ『ルイージ』こちらでも屁怒紹さんが出た！」

マリオ「おおく賑やかになりそうだな」

スネーク「お前はホント…」

マリオ「ってか何で皆怖がるんだ？こつ言つのは外見だけで判断するのは失礼だぞ」



これで終わります』」

真王「んじゃ沖田」

沖田「俺はあらゆる手段でくそ方を殺りませよ」

屁怒紹「殺生はいけませんよオオ!!」

沖田「アオグバアツ!!」

沖田は屁怒紹に殴られた。

銀時「ゾーマ10体」

銀時は即答。

屁怒紹がやっぱり苦手らしい。

屁怒紹「それでは『支配者』さん…廊下に立ってください」

真王「いい加減そのオーラを止める。次、ペンネーム『黒神』さんからだ。』質問します。

ノワールへ

ネプテューヌ以外で貴方が今最も注目している人は誰ですか？



真王「勝手に出てくるな!!」

ビビ「グハッ!」

屁怒組「えっと…みなさんまた会いましょう」

第六十五訓：百合っこ娘に気をつける（後書き）

真王「今回は銀時とのバトル。そして勝負の行方は…？」

ビビ「次回『百合の花ことばって純粹って言っより変態じゃね？』  
テイクアウト」

第六十六訓・白百合の花ことばって純粹って言うより変態じゃね？(前書き)

真王「今回はビビと銀時のバトルシーンがあります。では始め!」



第六十六訓：白百合の花ことばって純粹って言うより変態じゃね？

前回のあらすじ

別世界から謎の少女・ビビ・ステインを保護したなのは。

ビビはそこで原作にはいないキャラ達がいて大混乱。

そして伝説の白夜叉・坂田銀時と出会った。

ビビ「坂田…銀時…」

ビビは銀時を見て思わずつぶやいた。

銀時「あん？なんでオメエが俺の名前知ってんだ？」

ビビ「え？あ、いやその…」

銀時が聞こえたのでビビは慌てる。

ビビ（）しまった~~~~！思わず声に出ちゃったよ~~~~）T T（

~~~~！..!どうしようどうしよう！..!どうやって誤魔化そう！..!？（

銀時「あ、そう言うことか」

ビビはビクッとなる。

もはやこれまでかと悟っていると、

銀時「もしかして俺のファンなのか？ヤベッちよつと緊張するな〜。

サインペン持ってねえし」

ビビ（あ、やっぱり馬鹿でよかった）

普段どおりな銀時を見て安心の息を吐くビビ。

ネプテューヌ「銀さん有名人だからサインペンぐらい持っててよ」
銀時「んな余裕ねえよ。こっちらシグマのこととかゲラビッツの
こととかで疲れてるんだから」

ネプテューヌ「でもそれを一緒に解決してこそだもんね」

嬉しそうに笑うネプテューヌと、やれやれな表情をする銀時。

ビビは2人の話の中に“シグマ”とか“ゲラビッツ”とかで気にな
り始める。

ビビ「あの…よく話が聞こえづらかったんですけどなんて？」

ネプテューヌ「ああ、それはね、」

ネプテューヌは話す。

六課のこと、銀時達とネプテューヌ達が転送装置を使ってここに来
たこと、リインフォースのこと、モンスターのこと、リトルバスタ
ーズ達次元漂流者のこと、シグマのこと、『R・S事件』のこと、
スカリエッティとナンバーズのこと、魔界のこと、ゲラビッツのこ
と、アリシアのこと、そして最悪な存在・ダークソウルのことを話
した。

ネプテューヌ「…というわけなんだよ」

ネプテューヌは話すが、ビビはとてついでにいけそうにない内容だ
った。

ビビ（これ…スツゴイ混沌^{カオス}すぎる出来事なんですけどオオオオオオ
オオオオオオ！！転送装置で来たって有り得んし！スカリエッティ
と数の子姉妹が仲間になってる事も魔界もなのはちゃん達のこと
もスツゴイことになってるしいいいいいい！！！！しかもリイン

フォーアとアリシアちゃんの復活ってありイイイイイイイイイ！
！？)

ネプテューヌ「まあそれじゃあ……………えっと名前なんて言うんだっけ？」

ビビ「あ、私ビビって言うんだよ。よろしくね(ニコッ)(」

ビビはネプテューヌにっこりとはほほ笑む。

無論魅惑の笑み発動して。

ネプテューヌ「へへ、私ネプテューヌだよ。よろしくねビビちゃん」

銀時「俺は万事屋の銀時だ。銀ちゃんって呼んでもいいぜ」

ネプテューヌと銀時は“普通”に挨拶する。

このことにビビはおどろいた表情をする。

ビビ(あれ？どうして？その男はともかく、なんで私の魅惑の笑みが効かないの?)

ネプテューヌに魅惑の笑みが聞かないことに戸惑うビビ。

魅惑の笑みとはビビと同性の相手に惚れさせるビビの能力。

どんな女性でも惚れるという概念をもたせる力。

だがネプテューヌにはこれが効かなかった。

ネプテューヌ「銀さん、暇があったらどっか食べにいかない？例えば甘飯洋食店とか」

銀時「お？それ俺行ったことあるんだよ。そこのパフェおいしかったな」

ネプテューヌ「ほんと？じゃあそこにいっつか」

ビビはネプテューヌと銀時のやり取りを見ていると、意外なことが

分かった。

ネプテューヌは銀時に惚れているのだと。

誰かに好意を抱いている女性に魅惑の笑みを出しても効果がないのだ。

故にネプテューヌにきかなかつたのはこれのせいである。

ビビ「あ、あ、あの…」

ネプテューヌ「ん？」

ビビ「銀時さんは一体誰と一緒に？」

ビビは外れて欲しいと願う。

が、それは叶うことなかつた。

ネプテューヌ「銀さんはね、私含めてなのはさん、フェイトさん、スバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リインフォース、猿飛さん、セイン、セツテ、ウインディ、デイド、チンクちゃんにも惚れられてるんだよ。モテモテだねこの色男ロメオが。あ、はやてさんは桂さんね」

銀時「言っつんじゃねえよ。俺はどれだけ出苦労してんだと思っただよ」

ブラン「それがモテ男の運命」

銀時はOTLな状態になる。

そしてそれを聞いたビビは、銀時に対する嫉妬、そして殺意を抱く。

ビビ（こんな男が…こんなダメ男がなのはちゃん達を…だと？許せない。ならば早くシマツシテオカナキヤ）

目のハイライトをなくし、ビビは殺気を出して銀時に言う。

ビビ「坂田銀時」

銀時「ん？」

ビビ「貴方には…キエテモラウ」

ビビはベアトリーチェとワルギリアを展開した。

銀時「え？ちよ、おいおいおい！何殺気立ってんの？銀さんなんか悪いことした？」

ビビ「うるさい！黙って死ね！」

黄金の鞭の様な武器・ベアトリーチェのベルレフォーンを銀時に向かって放つ。

スパパパパパパパパパパパパパパパ！

ビビ「なっ！」

ベルレフォーンがスライスされた。
切ったのはネプテューヌであった。

ネプテューヌ「あのさ、何に対して銀さんを襲うか知らないけど、
銀さんを殺させはしないよ？」

鋭い眼光がビビを見つめる。

ビビは殺意を引っ込ませ、謝罪する。

ビビ「ごめんなさい。ちよっと気が動転しちゃったみたい」

ネプテューヌ「分かればいいんだよ。それに銀さん女運悪いの日
常茶飯事みたいだし」

銀時「俺は不幸少年か！！」

銀時が怒鳴るがスルー。

ビビ（今よく見えなかったけどベルレフォンがスライスされた。一体どんなチート使ったのこの子？）

ビビはネプテューヌの力に心底驚かされた。

はやて「なんか騒がしかったけど何かあったん？」

騒ぎを聞きつけたはやて達がやってきた。

ネプテューヌ「それはね、ビビちゃん銀さんに嫉妬してガゼルパンチを入れかけてたんだよ」

ビビ「嫌ガゼル入れてないから」

訳を説明するネプテューヌに突っ込むビビ。

ビビ「でもこのダメオに嫉妬してる事はホントよ。こんな天然な奴に“愛しの”なのはちゃん達を渡してたまるもんですか！！」

ありったけ銀時に対する怒りをぶつける。

ネプテューヌ「・・・今愛しのって言った？」

ビビ「そうよ！私は将来なのはちゃんあっちとあ〜んなことや〜んなことまでしたいの！（てか元の場所でもうしちゃったけどね）」

もといいた世界で愛を築いた彼女に取ってなのは達は天使らしい。なのは達はそれを聞いた顔を真っ赤に染めた。

ネプテューヌ「ビビちゃん…それって…これなの？」

右手で左頬を当てるしぐさをする。
これは同性愛の意味がある。

リリス「でえきいとえるう〜？」

リリスが巻き舌風に言う。

ビビ「まあね」

銀時「言っちゃったよ！自分が百合っ子だって認めちゃったよこの子！…！」

銀時が大声で叫ぶ。

ビビは元から百合な子です。

ビビ「そんなわけだから、なのはちゃん達をかけて、あんたを倒ころす
！」

銀時「あれ〜？いま倒すと書いて殺すって聞こえたんですけど!？」

堂々と銀時に指差すビビ。

銀時は冷や汗を流す。

するとはやてが思いついたかのような顔をする。

はやて「そや、訓練所があるさかい、そこで銀ちゃんとやってもええよ」

銀時「何考えてんだ〜〜〜!!!!」

ビビ「ありがとつはやてちゃん！これで心おきなくこの人をやれるよ」

銀時はシャウトし、ビビはお礼を言う。
その他の人たちは苦笑いを浮かべた。

機動六課・訓練場

ビビと銀時は配置にしている。

そこ以外のところでは達は観客のように見ている。

コンパ「銀さん大丈夫でしょうか…」

アイエフ「あの子は結構戦闘に慣れてるわね」

ノワール「それに凄い力を隠し持っているみたいね」

なのは「まあ見てればわかるかな」

紫「確かに実力は見てから分かるものよ」

ヴァルバトーゼ「俺達も興味あるな」

ネプテューヌ「そろそろ始まるかな？つていつけない。これ渡すの忘れてた」

それぞれ見守る中、ネプテューヌはある物を取り出して銀時とビビのところへ向かった。

銀時「な〜んでこんなことになっちゃったんだ？」

銀時は頭を掻きながら愚痴る。

お姉さまとか、後特に妹とか!!!」

末期症状でも犯かされた感じである。

周りのほとんどは「コイツ病気だ」などと言っている。

ベアトリーチェ それはともかく、服は着ないのか？

ビビ「え？つていや〜ん!(*><*)」

ベアトリーチェの指摘で自分がどうなっているか把握する。

マッチング みたいなポーズで。

銀時「腹立つ!こいつメツチャ腹立つ!」

ビビのポーズを見てイラツと来た銀時。

ビビ「つてそれはともかくとして、覚悟しなさいよ坂田銀時!」

ワルギリア それ以前に服きろ

なんやかんやあつたが、百合転生者・ビビと白夜叉・銀時の戦いが始まった。

IBGM華麗なる閻族by魔界戦記デイスガイア2

(Disgaea 2 - Magnificent Dark

Family - 05)

ビビ「(こんな男からなのはちゃん達を引きはがしてやる!)喰らいなさい!デビルズシューター!」

バハムート「グオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!!!!!!!!!」

魔方阵からバハムート（FF4タイプ）が現れた。

銀時「オイイイイイイイイイイイ！！ドラゴン召喚なんて聞いて
ねえぞ！！」

ビビ「言っていないもん。ってか召喚なしなんて言われてないし」

いきなりバハムートが召喚して来たもんだから銀時が怒鳴る。
それを当たり前のようにビビが言う。

ビビ「坂田銀時！貴方を倒してあげるわ！」

銀時「だから倒すと書いてなんて呼んだんだ！！」

ヴィヴィオ「パパ、頑張って」

ヴィヴィオが無邪気に応援。

ビビは魂に怒りの火が付いた。

ビビ「キサマヲヌツコロス！！（#、、）」

銀時「なんでそうなるんだよっ！！」

銀時は突っ込む。

ビビ「喰らいなさい！！メガフレア！！」

バハムート「グガアアアアアアアアアア！！！！」

バハムートの口からエネルギーがたまり、銀時に向かって発射され
た。

銀時（・・・あ、これ死んだわ…）

銀時は簡単に諦めかけたその時、

??? 何ここで諦めてんだ？

銀時「っ！！？」

ズバーーンッ！！！！

何と銀時はバムートのメガフレアを一刀両断した。

ビビ「ニヤ、ニヤニイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イ！！！！?? (@ @:;)」

あまりにもありえなさすぎる出来事にビビは目を丸くした。
無論観客達も目を丸くした。

銀時も例外じゃない。

??? 間一髪みたいだな

何処からか銀時そっくりな声が聞こえる。

銀時「まさかオメエが？」

??? そうだ、俺はおいぼれじーさんと馬鹿科学者とイスンの
よって生まれたんだぜ

発している声は銀時の持つ木刀だった。

??? さきにいつておくが、俺にはまだ名前がない。だが今思い
ついた。オメエのような輝き続ける銀色の魂、『シルバーソウル』

と名乗って置くぜ

銀時「『シルバーソウル』…ねえ。分かったぜ」

銀時の新たな相棒、シルバーソウルを手に笑った。

銀時「んじゃ反撃と行きますか」

銀時はシルバーソウルを構え、

シュン！ズバンツ！！

一撃でバハムートの首を切り落とした。

ビビはバハムートが切られたことと、銀時の強さに驚く。

ビビ（…アニメ見てたから思ってたけど…これが、白夜叉の力…）

首を切られて動かなくなったバハムートと、白夜叉銀時の光景を見る。

が、ビビは己に喝を入れる。

ビビ（何考えてるの私！なのはちゃんたちはこの男に毒されているのよ！！だから、私が、コノオトコヲコロシテアゲルワ）

ビビの魔力が上昇した。

ビビ「ベアトリーチェ、モード02、アバター・オブ・リンク“神魔憑依”“アルトリア・

ペンドラゴン”！！」

ビビはベアトリーチェをモード02に変え、あるキャラの力を持つアバター・オブ・リンク神魔憑依を発動する。

そしてビビの姿は銀髪のところは変わらないが、ある騎士王の衣装と髪型をしていた。

そして手には目に見えない不可視の剣をもって。

ビビ「本当にあなたを舐めすぎたみたいだけど、なのはちゃん達を手に入れるまであなたを倒す!!」

ビビは銀時に向かって瞬間移動の如く駆け出す。

ビビ「喰らいなさい!はああああああああ!!」

たとえ白夜叉でも絶対に見抜かれないほどのスピードで銀時に切りかかる。

ガギインッ!!

ビビ「キャッ!」

何と銀時はたった一振りですべてを後退させた。
その一撃は凄く重かった。

ビビ「くっ!だったら...」

ビビは騎士王の力、その真名を開放する。

ビビ「エクスカリバー約束された勝利の剣ッ!!」

その輝かしい閃光はすべてを飲み込みかねないほどの攻撃を放った。

…で、観客サイド。

音無「おいおいおい、なんかやばいぞ？」

ゆり「あの子凄い力ね、今度SSS団に勧誘しようかしら」

日向「イヤ冷静に見てる場合か！」

デスコ「そうデス！あんな攻撃はラスボスが使うものデス！」

フーカ「いやちよつと違う」

ヴァルバトーゼ「あの攻撃は銀時でも…いやまだ早いかな」

なのは「何言ってるの？アレ銀さんでもひとたまりもないよー！」

フェイト「急いで止めないと」

なのはとフェイトは駆け出そうとしたら、ヴァルバトーゼ達に止められた。

ヴァルバトーゼ「勝負はまだ終わっていないぞ。最後まで見届けろ」

フェイト「だけど…」

ネプテューヌ「大丈夫。銀さんなら負けないよ。決して曲がることのない不屈の魂を持つ銀さんなら」

ネプテューヌは銀時を信じて見守っていた。

変わって銀時サイド。

銀時（凄い攻撃だな…）

銀時は目の前に迫る約束された勝利の剣を見て思う。
エクスカリバー

銀時（確かにこいつは魔王でもどんな奴でもひとたまりなさそうだが、けどな…）

銀時はシルバーソウルを握りしめ、構える。

銀時「こんなもん、お前よりネプテューヌのエックスカリバーの方が熱かったぜ」

ビビ「なに？」

シグマの要塞をぶった切ったあの技を思い出す。

銀時「あいつの熱い攻撃と比べたらこんなもん……へなちよこもんだああああ！！！！」

銀時はビビのエクスカリバーを、銀色の魔力刃でぶった切った。このことにビビはありえないほど驚いた。

ビビ「うそっ！？私の約束された勝利の剣がつー！！」
エクスカリバー

銀時「ウオリヤアアアアアア！！」

ビビ「ッ！？ワルギリア！」

二辺が長い六角形の形状のプレートが七枚展開され、銀時の持つシルバーソウルを防ぐ。

銀時「ウオオオオオオオオオオ！！！！」

が、銀時の猛攻はここで止まるわけがない。嵐のような攻撃にビビは焦る。

ビビ「何よこの攻撃…！！」

ワルギリア　グう…！
ビビ「ワルギリアッ！？」

ワルギリアが苦しむ声をあげた。

ワルギリア　奴の攻撃に特殊な魔力が纏っている…
ビビ「え？銀時に魔力が？」

普通銀時は木刀を持つ侍で会って魔力など一切皆無だと想像するが、

銀時「実は俺にもあつたんだよね〜！！」
ビビ「くっ！！」

銀時は肯定しながらラッシュを放つ。
すると銀時はこんな言葉を口にした。

銀時「…ところで何でお前はなのはとかに固執すんだ？」

ドクンッ！！

ズガッ！！

銀時「オボッ！」

銀時が殴り飛ばされた。

ビビ「固執違うわ。私はなのはちゃん達を愛したいだけよ」

ビビの目から怒り、そして銀時に向けて殺気をはなっている。

ビビ「なのはちゃんたちは私の物、私のすべてはなのはちゃんたちだけ、だからあなたはすぐに消えてもらおう（ソシテメザワリナアナタノソソンザイヨケシテアゲルヨ）」

花にまとわりつく、虫のように………せっかく花開いた白百合に付く、一点の濁りのように……。

ビビ（ヤッパリ、コノバダイカシテオクワケニハ、イカナイワヨネ………）

ビビの心が、真っ白になるほどの純粋な殺意に、完全に染められたが、

ズドガッ！！

ビビ「ギャアッ！！？？」

ヘアトリーチエ・ワルギリア ビビ！？

突然ビビがぶっ飛ばされた。

言わずもがな、銀時の攻撃にやられたのである。

ガッ！バギッ！ドガッ！！

ビビ「ガッ！？ゴッ！？ギャアッ！！？？」

銀時から受ける一撃はまるでゴーレムのパンチを直撃したかのようだ。

ワルギリア させんっ！！

ワルギリアがプレートを動かして次の攻撃を防ごうとするが、もはや切れた銀時に、

バギヤアツ！！！！

ワルギリア　グアアツ！！！！

ビビュギヤアアアア！！！！！！

防御など皆無に等しい。

吹き飛ばされたビビは痛みをこらえながら起き上がると、目に映ったのはとてつもない殺気を放つ銀時と、無残な姿になったワルギリアのプレートの破片だった。

今ワルギリアのあるプレートは2枚である。

ビビュワ、ワルギリア！！

ワルギリア　ガ…もうしわわけ…ありませんで…した…ビビ

プレートが破壊されたせいかダメージを受けてるワルギリア。

銀時「おい」

銀時が声をかけたのでビビは体勢を立て直して銀時を見ると、いつも死んだ魚の目ではなく、敵を狙う夜叉の目になった。

銀時「テメエはあいつらを…なのは達をもの扱いしやがったな」

銀時の発する声はなのは達を己の欲のためにある買っビビに対しての怒りの声だった。

銀時「人の意思を踏みにじって、自分の欲のためにものにしゃがったのか？」

ビビ「・・・フツッ、フツフツフツ・・・」

怒る銀時に笑いだすビビ。

ビビ「ええ、その通りよ。私の夢の実現のためになのはちゃんたちは私の色に染め上げるの。私の本能がそう教えてくれる」

銀時「本能だと？」

ビビの本能というものがどんなものなのか少し気になる銀時。

ビビ「私の本能は禁忌、愛があればすべてが私の物。私に愛する人はみんな私と愛し合う。それもみんな私の物に・・・」

ビビの甘く狂った言葉に、銀時はさらに怒りを覚えた。

銀時「テメエの本能とか禁忌とかしらねえが、そんなもん愛し合うとかそんなもんじゃねえ、ただの洗脳だ」

ビビ「結構。あなたに何言われようと私の夢を実現するために・・・消えてもらっわ！！」

ビビは銀時に向かって駆け出した。

そして両者は剣を交差させようとした。

ガキインツ！！x2

????「ハイハイハイ、バトル中に横槍入れちゃったけどストツプね」

「クソ神、そのいい加減なしゃべり方やめろ。気味悪い」
「痛い言い方だなもう」

銀時のビビの間から「魔法先生ネギま！」の“ナギ・スプリングフィールド”に、“キングダムハーツ2”のラスボス、“ゼムナス”の白と黒のコートを着せた感じ。そして、瞳が七色に光るオーロラのような不思議な眼をしている男と、クソ妹と口走った女性が2人の攻撃を防いでいた。

男の方は銀時の、女性の方はビビの攻撃を防いでいた。

ビビは目の前にいる女性に驚いた顔をして言う。

ビビ「え？…嘘…お姉さま？」

銀時「え？お姉さん？」

「感動の再会って言うだろ、グレイ・ステインくん？」

グレイ「…余計なことは言わないでくれます？クソ神」

ビビは元男であり唯一の家族、グレイ・ステインと再会した。

ビビ「あと…誰だっけ？」

「おい！！俺を忘れたのかよっ！！」

もう一方は思い出せなかったみたいだが…。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

ビビ「ラッホ〜〜イ！！今日のアシストはビビ・ステインだよ〜〜」

銀八「ああ、いつもなのは達を弄んでいるドS変態百合ストーリー
」

ビビ「違う！！私のことは女の子好きの白百合娘と呼んで！！！」

銀八「百合の部分は否定しないのかよ！！！」

ビビ「しないよ？」

真王「諦めろ、これが彼女の成分だ」

銀八「・・・しゃあねえ。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから質問
行くぞ。『ルイーザ・リーン』さんの所のビビちゃんが着たあああ
ああ！！！」

スネーク「まあ、前回の感想返信でもう分かってたけどな・・・」

マリオ「ビビの奴が銀時の力をマンガと同じと考えてたら駄目だろ

う…後、なのは（冥王）は魔王じゃなくて冥王だ」

ネス「久々に言ったね…」

リユカ「どうなるんだろっ…」

ルイーダ「皆に質問『ビビちゃんを見た感想は？』」

スネーク「同じく質問『ビビの能力はどう思う？』」

フォックス「真王に質問なんだが…『ビビをリイン氏の所と同じ様に色々させるのか？』」

次回を楽しみにしてます 『』

なのは「そうだね。とってもかわいい子だったよ」

フェイト「うん、私も」

はやて「ちっちゃい癖して胸でかいな。今度揉んでみよか（オイッ！）」

シグナム「ビビか…（今度私と勝負しようではないか）」

ヴィータ「何かこっちは敗北感があるんだが…」

シャマル「あらあらかわいい子ですね」

スバル「ビビって可愛いね！」

ティアナ「私は普通に…（でもやっぱり可愛い…ボソッ）」

キャラ「凄く…かわいいです」

ネプテューヌ「可愛くて強そうだね」

ノワール「まあ…強そうね」

ブラン「…（殺気が漏れている）」

ベール「あらあら、可愛い子なこと…」

ビビ「イヤ〜ン 私なのはちゃん達から褒められてる〜（*^

^*）」

真王「一部嫉妬してるようだがまあいいか。銀魂組の場合は…」

銀魂組「死ねよこの変態野郎」

ビビ「何だこの野郎っ！！（、皿、#）」

真王「落ち着け。能力の方はみんなありえないとの事。そして畑氏はリーインさんの様なダークー直線なことはしないのです。そんなわけで『鳴神 ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ビビ「えっと、次はペンネーム『月光閃火』だよ。『よお…月光閃火だ。』

しかし…やれやれ…（呆）。（そう言いながら、ビビに対して呆れポーズを取る）

輝刃「…性根を叩き直し甲斐があるな…。」（そう言いながら、不敵な笑みを浮かべる）

…とりあえず、質問：行くか。まずは俺からだ。

1. ビビに質問…ってか一つ言っておく。君…お仕置き確定。You See?（そう言いながら、スタンバイオツケーとばかりに『地獄の鋼鉄掴掌』の発動体勢に入った（汗）

輝刃「…少しは手加減しろよ？次は俺からだ。」

2. 作者に質問：使用作品の一覧の中にある『IS-インフィニット・ストラトス-』で、どうせなら一夏達を出してはみてもどうだろうか？んでもって銀時のIS姿を見て啞然となる…みたいなハリアジャケットみたいなシーンもあつたりして…。

確かに、引用だけじゃなくてそのキャラ達が銀時達と絡むつてのも…何かドタバタの予感がして面白そう『ハン！かかってこいよ！返り討ちにしてあげるわああああ！！！！』

ビビは月光閃火に喧嘩売った。

そしてバトルが始まった。

真王「何やってんだあいつは。一夏達の登場は考えておきます。』
月光閃火『さん。廊下に立ってなさい』

月光閃火「オラアアアアアア！！！！」

ビビ「シネエエエエエエエエ!!!」

まだ乱闘している。

真王「止めんか!」

真王はスターライトブレイカー改を放った。

で…

真王「全く。ちゃんとやれよ」

ビビ「ハイ…」

銀八「・・・さて次は、ペンネーム『黒龍』さんから。『黒龍』何あのビビツて娘？百合な上にかなりウザいんですけど?」

ソラ「お前百合あんまり好きじゃないからな」

黒龍「まあね」

銀時「いや、俺もあいつの頭の中の声聞こえたらかなりウザいと思っぜ」

ソラ「それは俺も同感だな」

黒龍「とは言え、初めての他作品とのコラボですね」

銀時「ああ、お前も削除される前は何度かやってからな」

黒龍「ついに真王さんもコラボに手を出したと言う事ですね」

銀時「つつか、元からアニメとかマンガの二次創作描いている時点でコラボも何もないけどな」

黒龍「それ言っちゃダメでしょ!!」

ソラ「じゃあそろそろ質問したらどうだ？」

黒龍「そうですね。じゃあ質問します。

1・新八に質問。こっちの小説は無印編に入りましたけど、なのはに恋路を抱いて粉碎する未来があると言う事についてどう思いますか（黒笑）

2・ネプテューヌに質問。黒神さんの所で今コラボで出演していますけど、今のご感想は？

3・銀さんに質問。百合のビビに攻撃にさらないために、シルバーハートになって逆にビビを落とすと言うはどうですか？もし落とせなくても攻撃はされないと思いますよ？

銀時「いや、ちよっ！何だよ三番の質問！」

黒龍「いや、百合っ子対策にはこれがいい案だと思ったんですけど」

真王「んじゃ『黒龍』さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『亀鳥虎龍』さんだ。『質問。』

真王さん質問というより、願望です。僕の小説『万事屋奇譚幕』のキャラとコラボして欲しいんですけど、よろしいでしょうか？もし良かったら、下記のメンバーを出して欲しいです。

上条当麻

アクセアレータ
一方通行

奴良リクオ

鑢七花

とがめ

神裂火織

打ち止め（ラストオーダー）
以上です。

銀さんに質問。僕の小説で、シグナムと恋人同士になった自分をどう思いますか？

ヅラに質問。

七花の『虚刀流』をどう思います。『ああ、そのコラボの方は考えておきます。んで銀さんとヅラ』

銀時「……………」

銀時は青ざめて汗を流している。

理由は簡単。シグナム以外の銀時ラバーズは殺気を向けているからだ。

ビビも血涙流して銀時を睨んでいる。

桂「ツラじゃない桂だ。まあ素晴らしい我流だと俺は思う」

真王「んじゃ『亀鳥虎龍』さん。廊下に立ってなさい」

ビビ「・・・それじゃあ次のアシストは何とグレイお姉さまがアシストしちゃいます！」

真王「次回で短編終わらせようかな・・・」

第六十六訓：白百合の花ことばって純粹って言うより変態じゃね？（後書き）

真王「現れたのはビビの姉…というより兄のグレイと、2人をチートにした神が現れた！そして銀時達の前にさらなる敵が襲いかかる！」

グレイ「…次回『神様は偉そうなくせして我儘』テイクオフだ…帰らせる」

真王「駄目」

第六十七訓：神様は偉そうなくせして我儘（前書き）

真王「今回はあの2人とオリキャラが助っ人に登場！」

ネプテューヌ「個性的だからちょっと癖があるけどね」

真王「それではスタート」

第六十七訓：神様は偉そうなくせして我儘

一応やります。前回のあらすじ。

銀時とビビの対戦をおっはじめ、そろそろクライマックスに差し掛かったところ、乱入者が現れた。

ビビ「お姉さま！？それと…えっと…？」

神「おい忘れたのかよ！！俺からチートもらったの忘れたのか？」

ビビ「チー…まさか神様！？」

神「その通り！！やっと思いついてくれたのか…」

グレイ「お前の場合はクソ神で充分だろ？」

神「いやん、酷い、グレイ君」

グレイ「シヌカコラ…」

ビビは実の姉…もとい、実の兄と、もう一人の名前を忘れてしまったが、何とか思い出す。

グレイの毒舌に神様ふざけの言葉を出すとグレイがキレ声で詰め寄る。

ビビ「って言うか、何でおにい…お姉さま達がここに？」

グレイ「…俺は大事な妹をほって置くつもりはないからな」

グレイはそう言うのとビビは感動して抱きつく。

神「いや、感動の再か「クオアラ〜！！」「オブツ！！」

神様がにやけた目で見てみると、誰かに蹴られた。

ネプテューヌ「ちょっとあんた！人のバトルを見てるところで何やってるの！！いいところで勝負が付くと思ってみてたのに…も、連行する！」

神「そりゃそうだけどなんで俺が引きずられるの？」

神様はネプテューヌに引きずられていく。

グレイは只いい気味だと思いながら、ビビは苦笑いを浮かべながら後について行った。

銀時「あれ？俺は！？って置いてくなく！！！」

銀時は4人を追いかけた。

で…

グレイ「はじめまして、姉のグレイ・スティンです。妹がお世話になったみたいですね」

神「そして俺様はなく子も黙る「自称」神様である…って誰だ自称言つた奴は？」

グレイが礼儀正しく女口調で挨拶し、神様も自己紹介するが、グレイの途中の言葉でジト眼で見る。

なのは「あ、どうも、私達は…」

少女達自己紹介中…

ビビ「え？東方風？」

グレイ「（そこは気にするとこじゃない）」

ビビは何か引つかかったらしいが、グレイが念話でストップさせる。

フェイト「えっとつまりあなた方はビビを迎えに来たということですね？」

神「そんなとこだ。いやビビが無事で何より」

ビビ「あはは、心配かけたみたいだね…」

ビビは頭を書いてバツが悪そうな顔になる。

ヴィヴィオ「ビビお姉ちゃん帰っちゃうの？」

ヴィヴィオが上目遣い＋涙目でビビを見る。

ビビ「ぐっ！！」（止めて！！そんな目で見ないで！！何か重くい罪悪感が！！私の体力がもうゼロなのよ！！）
神様「・・・（何か・・・重い罪悪感が俺を押し掛かってくんですけど…もしかして俺のせい？）」

2人は罪悪感でいっぱいになる。

ビビ「だ、大丈夫だよヴィヴィオちゃん、たとえ離れてたとしても私はあなたのこと忘れないから」

神「そのセリフ死亡フラグwwww」

神様が必死にヴィヴィオを説得するセリフに笑い、ビビは殺意を抱く。

ヴィヴィオ「そっか、ありがとうお姉ちゃん」

ヴィヴィオはにっこりとビビに笑う。

ブツッ

ビビ「やっぱかわい〜〜!! (# ^ ^ #)」

ビビはあまりの可愛さにヴィヴィオに抱きついた。

ネプテューヌ「うちの娘はやらないぞ!! (棒読み)」

ビビ「お母様! ヴィヴィオを私の娘にさせてください!! (棒読み)」

ネプテューヌ「甘い! 我が娘を貴様なぞに渡す気はない!! (棒読み)」

新八「ってあんたら何漫才してんだよッ!!!」

どこかの恋のドラマの様な漫才をしているネプテューヌとビビに新八が怒鳴る。

神「娘が結婚だと? 父さんは認めんぞ!! (超棒読み)」

新八「お前もするなっ!!」

なぜか神様まで乗ってきたので怒鳴る。

グレイ「ハア…妹、遊んでないでもう帰るわよ」

神「…本当のところもう少し遊びたかったんだがな…」

いきなり変える宣言をしまして、神様は少し名残惜しそうな感じになる。

ネプテューヌ「そんなに謙虚にならなくていいよグレイ“ちゃん”」

グレイ「私は謙虚じゃ……………って、ちょっと待て！！今なんて言ったっ！！」

グレイはネプテューヌの言葉の中で凄く引つ掛かるセリフを聞いた。

ネプテューヌ「ああ、この人がグレイに女の子みたいな呼び方をしてみろって言うてたし…」

グレイ「テメエカコノクソガミアアアアアアアアアアアアア！！！！」

！（激怒）

ビビ「お、お、お、落ち着いてエエエエエエエ！！！！（*□*
\\:~）」

銀時「落ち着けエエエエエエ！！この人は頭が少しあれな奴だと思
うからあああ！！」

神「頭があれって失敬だなおいつ！！」

ネプテューヌが答えるとグレイが切れて、ビビと銀時が押さえるも、
銀時の一言が癪に障ったのか神様も切れる。

神「…ま、そんな俺達に迎えが来たみたいだぜ？」

ビビ「へ？何が？」

神「地獄行きの迎えだよ！」

神が何か察したのかある場所を見る。

するとその場所に真つ黒な魔方陣が展開された。

なのは「！臨戦態勢！」

なのはの号令に六課組は臨戦態勢に入った。

そして魔方陣から何かが飛び出た。

???「グウウウウ・・・」

それは真つ黒で四足歩行の顔が両手両足同じの生物・・・といったより、簡単に言うと真つ黒な大きな“手”だった。

親指と小指は足、人差し指と薬指は手、そして中指は顔という位置らしい。

手？「オオオオオオ・・・」

その手は両手をあげて何か言い出すと、複数の魔方陣が展開される。

そして中から死骨族、死龍族、妖霊族、屍族が現れる。

無論銀時が苦手な奴らなため、銀時は顔を真つ青に染める。

ネプテューヌ「わゝ、アンデット系勢揃いだよゝ」

神「アンデットはあんまいい気はしないんだが…乗りかかった船だ、かたずけるか」

グレイ「ハア…やれやれだな」

ビビ「ゾンビだろうがゴーストだろうがかかってきなさい！！」

神とグレイとビビは戦闘態勢に入る。

だが、魔方阵はあと一つ残っていた。
そこから巨大な大きな影が現れた。
黒い皮膚に紫の血肉と全長10メートルの巨大な虫…ぶっちゃけ巨
大な芋虫ゾンビである。

全員（ゾンビと虫がチークダンス踊ってるうウウウウウウウ
！！！！！？）

さすがに目の前のモンスターを見てありえなさそうなことに驚く。
さらに女性陣は虫とアンデットのダブルパンチで凄く青ざめている。
特にビビは虫が大の苦手でガタガタ震えているのだ。

ゾンビワーム「ウボワアアアア…！！」

巨大ゾンビ虫・ゾンビワームは口から猛毒の息を吐いた。

ネプテューヌ「うわ、浴びたら無事じゃすまなさそう…」
アバター・オブ・リンク
ビビ「なら私の出番ね！ベアトリーチェ、「神魔憑依」！「アルト
リア」！」

ビビが騎士王モードに変身し、

ビビ「^{アヴァロン}“全ては遠き理想郷”！！」

その人の宝具技を使って毒息を防いだ。

ネプテューヌ「うわスツゴイじゃん！」

ビビ「当然よ。エッヘン！」

グレイ「威張るなクソ妹…」

アンデット「オ~~~~~!!!!!!」

1秒にも満たない砲撃がアンデット軍を全て巻き込んだ。
クロイテ（仮名）は危険を察したのか離れた。

神「いや、相変わらず性が出る技だね」

神は嬉しそうに言うが、それ以外はみんな啞然としている。

ネプテューヌ「いやでもこれでアンデット軍は全滅………してない
みたいだね」

ネプテューヌは煙がはれているところを見ると、皮膚がところどころ
焼けただれたゾンビワームがいた。

ビビ「うわ……ゾンビなもんだから余計気持ち悪さが上がってるよ
……」

ビビは冷や汗流して後ずさる。

ヤミノテ「……………」

するとヤミノテがゾンビワームの上に立つ。

ヤミノテ「ソノチカラガアルカライツテワレワレヤダークソウル
サマニカテルトオモウナヨ。コノワタシガミズカラコイツヲユウゴ
ウシテキサマヲホオムツテクレルワ」

ヤミノテは魔法を唱えると、渦の様なものが現れ、ヤミノテとゾン
ビワームを吸い込む。

???「アラタメテシレ！コレガ“ヤミニヨリノロワレシオニ”ヲ
！！」

そして空間から大きな人型の影が飛び出してきた。

4つの大きな腕に裂けた大きな口、赤い鋭い目と悪魔の象徴たる黒い角。

そして体にはたくさんの鎖が巻かれている。

ネリア「何という禍々しき存在・・・人の負の感情で作られた鬼のようですね」

グレイ「鬼・・・」

人の負の感情に生まれしおに、呪いの鬼・呪鬼。
すると呪鬼は右手を振り上げて地面にたたきつけると衝撃波が発生した。

ネプテューヌ「ジャ〜〜ンブ！！」

全員ジャンプして避ける。

呪鬼はそれを逃さず、グレイに殴りかかるうとする。

グレイ「こんなもんツツ！！」

グレイは鎖付きの双剣・“ブレイズ・オブ・エグザイル”で呪鬼の腕を捕えた。

呪鬼は痛がるような動きをしたが、グレイは止まるつもりはなく、呪鬼の懐に近づいて、腕を一本切り落とした。

呪鬼は負けじと上の腕で黒い魔力光を出し、そこから出てきた黒いスフェアが出て銀時達に高速で向かってきた。

ネプテューヌ「銀さん！」

銀時「まったくしゃーねえな！」

ネプテューヌと銀時が前へ出て、黒いスフェアを全て叩き落とした。

グレイ（あの女も強いが、アレが白夜叉か…）

グレイは銀時の強さを見て思う。

生前ある本屋で銀時が乗っている漫画があつて、銀時の強さを把握したようである。

ネプテューヌ「次は、レミイちゃん！」

レミリア「レミイちゃんいうなって言わなかった!？」

ネプテューヌがレミリアを呼ぶ。

レミイちゃんと呼ばれたことに怒鳴ったが。

ネプテューヌ「早速あれをやるよ！」

レミリア「全く、しょうがないわね」

ネプテューヌ・レミリア「魔チエンジン!!」

叫ぶと同時にレミリアが武器へと変化した。

刀身は赤い血の様な色をして、ガードの部分に吸血鬼の目、そして蝙蝠の羽が付いた剣である。

銀時「おいこらテメエ！！俺達まで巻き込ませるなよ！！」

レミリア「あんた達がちゃんと逃げないからよ」

銀時「んだと！」

ネプテューヌ「ぎ、銀さん落ち着いて…」

銀時が怒り、レミリアは毒舌を吐き、ネプテューヌが落ち着かせる。

バキバキバキバキバキバキツ

不気味な音が聞こえる。

前を見ると赤い球を中心にいると生えているのがあった。

新八「あ、あれは…」

グレイ「どうやらあの赤いのはあいつの核の様だな…」

グレイは冷静な判断で赤い球を見る。

そして体が完全に形成された姿は、全身金属の拘束具に覆われていて、蛙のように出ている目（てか頭）と、両手には腕と同じくらいの大きさの鉄球があった。

ブウウンツ！！

銀時「ウオツ！！」

ネプテューヌ「うわ！」

ビビ「きゃっ！」

拘束具の敵・タルタルシアンが腕の鉄球で攻撃を仕掛けた。

グレイ「こいつ…！！」

グレイが身構えると、魔方陣の中から人型の檻の中に骸骨、ミイラなどの死体が入った敵が出てきた。それぞれ両手に手斧、剣、丸のこぎりをもっている。

銀時「あれ〜？なんでだろ〜？変な骸骨がたってるよ〜？・・」

銀時はあるく骨を見て顔を青くする。

骸骨達は隔離の悪魔・フィニスという存在である。

フィニスたちは大ぜいと銀時達に向かっ…

???「くらいな!!」

…って行くことしたらビームが発射されて三体のフィニスが撃ち倒された。

???「お前達！援護に来た!!」

六課の屋根からプリニーとほぼ同じだが、緑の色と鋭い眼光だけが違っていた。

IBGM戦友よby魔界戦記デイスガイア
(Disgaea - Battle Comrade) (Hyper Extended)

ネプテューヌ「あ、カーチスさん！」

コンパ「わ〜、カーチスさん助かったです〜！」

ノワール「久しぶりじゃないカーチス！」

ネプテューヌ達は緑色のプリニー…カーチスと呼ばれるプリニーを見て嬉しそうに言う。

カーチスは飛び降りてネプテューヌ達に言う。

カーチス「久しぶりだなお前達！だが感動の再会よりもやるべきことがあるだろ？」

カーチスはそう言ってフィニスとタルタルシアンを見る。
つとグレイ、ビビ、そして神と眼が合う。

カーチス「ん？見慣れない奴がいるが・・・」

ネプテューヌ「大丈夫！この人たちは味方だよ！」

ネプテューヌが力強く言う。

カーチスはそうかという。

フロン「それより！カーチスさんが援軍に来ましたのでこっちは大助かりです！」

フロンは嬉しそうに飛び跳ねる。

カーチスはふつと笑う。

カーチス「実は…援軍は俺だけではない」

カーチスはそう言うと、遠くから車の音が聞こえる。

そして黒い車がこちらに近づいてきた。

そして何と車が走ってる途中何か分解して変形して人型へと変形した。

そしてそれは完全に変形し終わった後タルタルシアンに回し蹴りを

喰らわせた。

タルタルシアンは蹴り飛ばされて気絶する。

銀時「オイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！！何これ！！？
車がロボットに変形したんですけどオオオオオオオオオオ！！！！！！
？」

銀時はありえないかのようなリアクションをする。

カーチス以外は銀時と同じことを思ったか、啞然としている者もいる。

カーチス「紹介しよう。こいつはブラックサンダーって言う金属生命体だ」

ベール「金属……」

ブラン「生命体……？」

リリス「って言うか宇宙人なの？」

ベールとブランは首を傾げるが、リリスは目を輝かせている。
ヴィヴィオも目を輝いている。
ブラックサンダーは手を振る。

カーチス「あともう4人追加だぜ？」

????「ボルケーノフレア！！」

????「ストームブリザード！！」

遠くから女性の声が、火山の様な火の玉と吹雪の竜巻がフィニスの軍団に直撃した。

桂「なんと！これほど強力な力！これはさぞ強い魔道士と言えようか！」

桂はこの威力を見てなのは達くらいの実力を持っていると推測する。
なのは達とビビは聞き覚えのある声に疑問を抱く。

なのは・フェイト・はやて・ビビ（今の声…まさか…）

なのは達は上を見上げると、無二の親友（ビビの場合は恋人）がいた。

アリサ「久しぶりねなのは。あのファミレスで会って以来かしら
すずか「みんな！助けに来たよ！」

なのは「アリサちゃん！、すずかちゃん！」
フェイト「な、何で2人がここに？」

なのは達はアリサとすずかがいることに驚いている。

アリサ達は訳を言えば実家に帰ってすずかと話し合ってたところ、影の様な敵が現れたが、たまたまカーチスが通りかかっていたので2人を連れ出した。その後カーチスは敵を全滅させてこの場を去ろうとしたら2人がカーチスにお願い（半ば強制的に）を شدした。カーチスは魔界へ連れて行き、2人を修行させたらしい。

アリサ「今まで私達は見てただけだけど、今度は私達が戦う番よ！」
すずか「私達だって頑張れるよ！なのはちゃん！」

なのは「アリサちゃん、すずかちゃん」

なのは達は嬉しそうな顔をする。

ネプテューヌ「あれ？そう言えばあともう2人…「バガシャアアン
！！」「！？」

「????」全く、何で私がこんなことしなきゃいけないんだろうね?」
「????」知らないよ、お姉ちゃん」

大きな音がしたところから、膝までのピンクのロングにシグナムよりもでかいバストをもつダイナマイトスタイルの女性と、銀髪でビビと同じくらいの身長で胸もそれなりにあり、なんだか金属の拘束具を身につけている少女がいた。

銀時「あの…どちらさん?」

「????」あ、私はレーティア・デビリアス、あなた達の味方よ」

「????」私は妹のジャンヌ・デビリアスだよ。よろしくね」

女性と少女は挨拶した。

銀時「あ、はい、こちらこそ…って今は戦闘中だろうがああ!!」
「!」

銀時はつられて挨拶しようとして突っ込んだ。

レーティア「あっそう、じゃあジャンヌ、片っ端からかたづけなさい!」

ジャンヌ「はい。シャマツシュ、フォームチェンジ」

ジャンヌは銀色の首飾りの様なデバイス、シャマツシュに声をかける。

シャマツシュ オーライマスター、合言葉は?

ジャンヌ「金色の暗殺者」

シャマツシュ OK、フォームチェンジ!

シヤマツシユが言つとジャンヌの体が光る。
治まると黒いドレス（ToIoveのヤミちゃんのドレス）のジ
ヤンヌがいた。

全員「んなつ!?!」

全員服が変わつたことに驚いた。

ジャンヌ「^{トランス}変身、茨の大波!!」

ジャンヌの髪の毛が茨の様な感じになり、フィニスの軍団を全て蹴
散らす。

銀時「ちよつとちよつとあの子髪の毛で戦つてるよ?」

レーティア「あの子のデバイスでバリアジャケットを変えると能力
も変えるの」

レーティアが説明する。

ジャンヌ「うん、これが私の能力^{チカラ}、そして何より…」

ジャンヌは一息ついたあと言い放つ。

ジャンヌ「コスプレはおしゃれだ!!」

全員「違うわっ!!」

全員全力で否定した。

ジャンヌ「何言ってるの!? コスプレは立派なおしゃれなんだよ!
ほら、ここにショートパ」人前で見せないくていいから!!」

ジャンヌがスカートをめくり上げようとして、新八が全力で止める。
レーティアは呆れたように顔を支える。

なんやかんやあったが戦闘は終了した。

ネプテューヌ「で、帰っちゃうの?」

ネプテューヌ達はさびしそうな目でビビ達を見る。

ビビ「うん、私にも帰る場所があるし、本当はもうちょっと居かっ
ただけだな」

グレイ「行ってないでさっさと帰るわよ」

ビビ自身も名残惜しく言うが、グレイはそれをバツサリ切る。
奥でレーティアがヴィヴィオに耳打ちしているように見えるが。

ビビ「えっと、皆さんさようなら...」

ビビは別れの挨拶を言って去ろうとすると、

ヴィヴィオ「お姉ちゃん...」

ヴィヴィオが涙目でこちらを見ている。

ヴィヴィオ「お姉ちゃん...私と一緒にいて...?」

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

グレイ「・・・グレイだ」

銀八「テンション低！！もうちょっと元気にやれよ」

グレイ「めんどい、さっさと始める」

銀八「・・・しゃあねえな。んじゃコラボの元であるペンネーム『リイン』さんからだ。』どうも！！ 執筆、お疲れ様です！！！」

旅人「とうとう、あいつが来たか……………」

レヴェツカ「あん人、大丈夫やるか？」

（え？ 何、この妙な組み合わせ……………グレイとビビと、神様があつちに居るので、仕方なくこの方々を呼んだのですが……………）

レヴェツカ「ま、大丈夫やるな。あん人は、イレギュラー大好きやし。おもしろい事があると、すぐに首突っ込みたがるんやから」

旅人「歯止めがきかんのも、考えものだがな」

ですよねえ〜……………

作者&旅人&レヴェツカ「はあ〜……………」

さてと、では、ここでちょっと質問を一つ

・もしかしてですが……………グレイ、ビビ、神様は、今後永続的に使用していくのですか？

レヴェツカ「？ どういう事なん？」

旅人「今後、この物語が終結するまで、使い続けるのか？ という事だろう」

はい。そこが少し気に成りまして……………ずっと使っていくとしても、私は全然構いません。って言いますが、ジャンジャン使っちゃって下さいm(――)m

旅人「……………まあ、お前の頭の中では、あの兄妹の物語は、そろそろ佳境に入る。のだったな」

ええ。あの二人に関しては、現段階でもう成長させる事はないですからね……………ラスボスまでは

旅人「その間は、あいつらの物語、という訳か」

はい

レヴェツカ「何気にあんさん、ネタバレしとるで」

あ(@ @:;)……………い、いいんですよ!! 根幹さえ、ばらさなければツ!!!!

旅人「はあ(大丈夫か? この作者は……………)」

で、では!! 次回も楽しみにしておりますので、執筆、頑張ってください!! 失礼します!!!

レヴェツカ「ほなな」

旅人「また会おう」

真王「無論です。3人はこのまま使っていきます。リインさんがシリアス行きならこっちはギャグ行きで」

銀八「……ま、とりあえず『リイン』さん。コラボありがとう
ございました」

真王「んじゃ次はペンネーム『鳴神 ソラ』さんから。『ゼロUF
「俺のこの手が真っ赤に燃える!物扱いする馬鹿者に鉄拳入れると
轟き叫ぶ!!ばあくねつ!バーニング!フィンガアアア!!」

いきなり出しよった!!

ルイーダ「そりゃありーんさんの所じゃあしちやっただ後だったから黙ってたけど…ビビちゃんも兄さんの常識の無い転生者の認識に入るからね…」

スネーク「リーンの所ならともかく、他の所じゃな…」

フォックス「防ぐより避けた方が良いぞ。マリオはチートとかバグとか後、神の能力を無効化するから貰った能力だと無効化するから」

ネス「いや〜どうなるのやら〜」

リユカ「銀魂メンバーとリリなのメンバーにネプテューヌさんを除いたメンバーに質問です『ビビさんを見た感想は?』」

スネーク「真王に質問『ビビやグレイをどう言う感じに扱うんだ?』」

ボケヤツツ「コミか?」

フォックス「ビビに質問『もし女神になったらどんな感じだと思っ?』」

そんな訳で次回を楽しみにしています

ゼロUF「ウルティメイトスラッシュー!!」

ルイーダ「何時まで撃つの!?!」マリオさん、怒り御尤もですが抑えてくださいよ。そりゃ彼らは可愛いかすごい子だか思ってるでしょうね。ビビはボケ、グレイはツツコミという役位置になります。グレイにボケはありえないし」

グレイ「・・・苦勞がふえそうだ...」

ビビ「私が女神になったら？そりゃセクシー&ダイナマイツなボディとかでなのはちゃんたちと.....キャツ？」

銀八「何この子？気持ち悪っ」

ビビ「何か言った？」

銀八「い、いや別に...」鳴神 ソラ『さん、廊下に立ってなさい」

グレイ「ハア・・・仕方ない。ペンネーム『黒神』だ。『質問。』

神楽へ

もし、魔導士になれるのならどんな魔導士になりたいですか？

桂へ

僕の小説で魔剣士となった自分自身の姿を見てどう思いますか？

アイエフ・コンパ・ノワール・ブラン・ベールへ

僕の小説でゲストとして呼ばれたネプティーンですが、どんな活躍をするかを期待していますか？『んじゃ中華野郎、さっさと答えろ』

神楽「コルア、何だその言い方は、私はこのままがいいから魔道士はいらないネ」

桂「魔剣士の俺の姿…」

桂は少々酔い痴れているように見える。

アイエフ「あたしは別に」

コンパ「頑張るですねぶねぶ」

ノワール「とりあえず守護女神でね」

ブラン「…がんばれ」

ベール「ファイトですわ」

銀八「応援かよ。『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

真王「次はペンネーム『ああ』さんから。『皆に質問。』

もし、白夜叉+シルバ+ブレイド+リインフォースユニゾン+今回出てきたシルバ+ソウルの銀さんと戦ったら勝つ自身はありますか？『もう一つ『ビビへ』

とりあえず一週間、屁怒紹と同じ部屋でダークマター食いながら、過ごしてください。『ぜんぶ合わせたら銀さんは史上最強の存在になりますね。でも体はついていけません。あしからず』

ビビ「屁怒紹ってたしかあの鬼の人で、あのダークマターを………すっごくいやっ……」

黒龍「でも何であなた登場してんですか？」

セフィロス「いや、何。あの勘違い娘を見たらつい、絶望を与えてたくなってしまうてな」

黒龍「めちゃくちや危ない理由だった!!」

セフィロス「フツ、しかし、ここまで滑稽な者を見るのは久しぶりだ。いや、あまりにも愚かな愚者というべきか・・・」

黒龍「うわゝめちゃくちや罵倒していらっしやる」

セフィロス「まあ愚者とは言え、それなりにできるようだな」

黒龍「いや、そりゃあ転生者ですし・・・」

セフィロス「ああ、クラウドよりも遥かに・・・」

黒龍「えっ!?!クラウドよりも強いんですか!?!」

セフィロス「愚かだな」

黒龍「やっぱりそうですよね!?!」

セフィロス「フっ、私はこれで失礼させてもらおう」

セフィロスは黒い羽でできた肩翼を出して空に飛んでかえる。

黒龍「言いたい事だけ言って帰っちゃった……仕方ない。最後に質問です。」

1・ビビに質問。とりあえず、その腐った思考は捨てる。

2・ビビに質問。銀時の強さをみどうだった？

3、ビビ（くそ）に質問。正直のそのウザイ考え方どうにかしないと、読者から批判バンバン来ますよ？（黒笑）

1番と3番はかなりドSな質問だった。

黒龍「じゃあ次回も楽しみにしています」『ビビ、お前宛だ」

ビビ「なによ！私の頭は新鮮そのものよ！銀時の強さはまあ認めるけど、って私にくそッて言うならあッ！！私のファンの皆様が反乱をおこすわよ！！」

真王「いそうだな……。んじゃ『黒龍』さん。ビビファンの皆様に殺されないようにしてください」

銀八「次はペンネーム『月光閃火』さんからだ。『よお……月光閃火だ。」

しかし……銀時の強さは筋金入りだな……。信念の籠った攻撃ほど、強いモノは無いな……。

輝刃「全くだ……。んで、質問……行くぞ？まずは俺からだ。」

1・作者に質問：新八の出番はもう少し先になるか？

あゝ…確かに、そろそろ出てもいいんじゃないかな？次は俺からだ。

2・ビビに質問：つつーか、“あの”続きだ。真王のスターライト・ブレイカーは効いたな…。身体中煤だらけだぜ…。んでもって、とりあえず…ナデナデ…。(そういつて、ビビの頭を優しく撫でる)

輝刃「フツ…何だかんだ言つて、案外気に入っているようだな…(微笑)。「『」

ビビ「…男に触られるの虫唾が走る！」

真王「どんだけ男が嫌いなんだあんたはっ!!」

ビビ「うるさい!!私が撫でられるのを許すのはなのはちゃんたちだけだよ!!」

真王「お前は…ヴィヴィオ達のナデナデは禁止するからな」

ビビ「そ、それだけのご勘弁を〜!!(、・:;)」

真王「全く…つて新八はまだ存在するよ。『月光閃火』さん、新八を見てませんね？」

銀八「んじゃ次回はあのへらへら笑っている神さんだな」

真王「またな〜」

第六十七訓：神様は偉そうなくせして我儘（後書き）

ビビ「六課の仲間になった私達にまち構えられたのは信じがたい事
実、それは…」

グレイ「おい、お前半ばあのガキの涙目で折れたんじゃないのか？」

神「そこは気にするなよ」

ビビ「なんと！男でありながら女の子の心をもつ男！つまりオカマ
！その物たちの存在が世間に知らしめられてしまつとは！！」

グレイ「おい、こいつ壊れたか？」

レーティア「いやこの子正常よ」

ビビ「こうなつたら、オカマ撲滅のためにある者たちの派遣をする
しかない！いでよ！プリティ美少女部隊、キラールズ！！」

ジャンヌ「んいつ！みんなを骨抜きにしちゃうぞ！！」

グレイ「勝手にやってる…」

ビビ「次回！『ビビの百合大作戦』最終話！『決戦！オカマ大王
の死闘！』最後に笑うのは美女たちさ！」

神「さすがにオカマは嫌だな」

グレイ「おれもだ」

真王「今回はネプテューヌでお馴染みあのコーナーでも開くかな…」

途中紹介（前書き）

第六十五訓から六十七訓まで現れたキャラクターを紹介します。

途中紹介

くビビ・ステインく

髪：白っぽい銀色の長髪のセミロング

目：右目が蒼、左目が銀色のオッドアイ

服：リイーンさんの絵で見てください。

年齢：12歳あたり

3サイズ：ヒ・ミ・ツ？

体重：これもヒ・ミ・ツ？

性別：

種族：禁忌女

魔力光：明るい虹色

好き：なのはちゃん達（特にヴィヴィオ）、アニメ、ゲーム、マンガ、可愛い者、ムフフイベント

嫌い：男全般（実の兄は除く）、虫、気持ち悪い者、なのはちゃん達を汚すもの

性格：百合好きの変態、キレると悪魔も泣かす冷酷な感じになるとか
レベル：6500

得意武器：ベアトリーチエ、ワルギリア

スキル：禁忌の魅惑（ビビと同性のキャラ接近時、能力が上昇する）

詳細：別次元の世界に転生した少女。極が付くほど百合好きでアニメゲーオタクである。神から能力もらって我が物顔で（別次元の）なのは達を虜（という名の洗脳）にしてきた。ムフフなことを好み、何時かなのはちゃん達を手に入れようと考えている。余談ではあるが、ある配工管の男にぼこぼこにされたというが、また別の話。

くガレオムマーク2く

髪：ない

目：赤

服：全身金属

年齢：不明

3サイズ：なし

体重：1000キロ以上かと…

性別：

種族：ガレオム量産類

魔力光：なし

好き：????

嫌い：????

性格：機械なので不明

レベル：800

得意武器：なし

スキル：なし

詳細：鬼兵隊が作り出したガレオム。前回『第四十二訓：戦いにはBGMが一番』から倒されたガレオムがパワーアップした姿、にもかかわらず、なのはのスターダストストームですぐに倒された

くグレイ・ステインく

髪：黒い長髪

目：紅と金色のオッドアイ

服：ビビ同様。

年齢：21

3サイズ：88 / 56 / 87

体重：70？

性別：（生前）

種族：幻想鬼神

魔力光：暗い虹色

好き：静かな時間、散歩

嫌い：クソ神、邪魔もの、女であること、非現実なこと

性格：人前では女として行動、普段は口悪く言う

レベル：7000

得意武器：龍刀【斬鬼】、ブレイズ・オブ・エグザイル、神機、刺
し穿つ破滅の三ツ薔薇、ブレイズ・オブ・リグドゥオーグ、ダイバ
イダー・Type-B、タマモノマエ、シュテンドウジ、スウトク
テンノウ

スキル：幻想のオーラ（敵魔物キャラのステータスを減少させる）
詳細：ビビと同じく別次元の世界に転生された人物。常識なことは全く信じず、自分が女になったことに嫌みを感じている。現在己の起源に悩まされており、今でも己の起源を否定している。

（名前不明（神様））

髪：赤いぼつさりヘッド

目：七色

服：キングダムハーツ2”のラスボス、“ゼムナス”の白と黒の
コートを着せた感じ

年齢：見た目26歳、実年齢不明

3サイズ：ない

体重：デIFOルト70キロ

性別：

種族：破壊神

魔力光：不明

好き：グレイいじめ？、たこ焼き、妻たち

嫌い：邪魔する奴、修正力の存在

性格：ちよつと頭のねじが飛んでいる？

レベル：?????

得意武器：全部

スキル：神の威厳（神系のキャラのステータスが上昇する）

詳細：グレイとビビを転生させた張本人。実は神になる前までは普通の人間だったと言うが、今は破壊神とまで言ってしまった。元々モテル感じだったため9人の個性的（？）な妻がいる。たこ焼きが大好きらしく、究極のたこ焼きを食べたいと願っている。

くヤミノテく

髪：なし

目：なし

服：なし

年齢：不明

3サイズ：なし

体重：150キロ

性別：不明

種族：闇の手

魔力光：闇色

好き：????

嫌い：????

性格：機械的

レベル：3000

得意武器：なし

スキル：闇の指令力（闇系モンスターの能力が上昇する）
詳細：真つ黒な手の形をしたモンスターでダークソウルの部下。司令塔ポジションらしい。司

くゾンビワームく

髪：なし

目：10個の赤い目（16個あったのだが、6つは潰れている）

服：なし

年齢：死んでから3000年だろう

3サイズ：なし

体重：10t

性別：不明

種族：魔虫族（ゾンビ化）

魔力光：なし

好き：???

嫌い：???

性格：ただ敵を食べようとするらしい

レベル：4000

得意武器：なし

スキル：なし

詳細：魔虫族の一匹がゾンビと化してしまった存在。耐久値が凄く高いため苦戦を持ちいられがち。

く呪鬼く

髪：なし（三本の角がある）

目：不気味な赤い目

服：なし

年齢：不明

3サイズ：なし

体重：100トン

性別：不明

種族：????

魔力光：不明

好き：????

嫌い：????

性格：????

レベル：5000

得意武器：なし

スキル：なし

詳細：ゾンビフォームとヤミノテが融合した姿。ひとときわ凶暴なため迂闊に攻撃は出来ない

タルタルシアン

髪：なし

目：しる

服：金属の拘束具

年齢：????

3サイズ：なし

体重：20t

性別：？

種族：別次元の悪魔

魔力光：なし
好き：????
嫌い：????
性格：ただ敵を狙う、それだけ
レベル：4000
得意武器：鉄球
スキル：死者の鉄骨（フィニスの数で防御力上昇）
詳細：全身鉄で出来た拘束具を身に纏う別次元の悪魔。両手の鉄球で力任せに振り回す。

（フィニス）

髪：なし
目：しろ
服：人型の檻
年齢：????
3サイズ：なし
体重：3000キロ
性別：????
種族：別次元の悪魔
魔力光：なし
好き：????
嫌い：????
性格：????
レベル：1000
得意武器：手斧、剣、のこぎり
スキル：なし
詳細：人一人分はいる檻の中に骨や死体が、怨霊に取りついて悪魔

と化したもの。なお、アゴノフィニス、テレオフィニス、モルトフ
イニスの三種おり、それぞれ武器も違うが、それぞれ苦痛、恐怖、
死で動いている。フィニスはラテン語で隔離と呼ぶ。

〈ブラックサンダー〉

髪：なし

目：蒼

服：つとというかボディは黒い車

年齢：????

3サイズ：なし

体重：2トン

性別：

種族：オートボット

魔力光：なし

好き：????

嫌い：????

性格：基本無口

レベル：6000

得意武器：なし

スキル：トランスフォーム（機械から人型へと変形）

詳細：宇宙のどこかにある惑星から来た金属生命体。ミッドチルダ
に不時着し、迷っていたところをカーチス達に助けられ、以後六課
の一員となる。イメージはトランスフォーマー（映画版）のバンブ
ルビーを黒くした感じ。

くアリサ・バンニグス

髪：赤みがかった金髪（シャマル並みの長さが腰までのロングへと変わった）

目：緑

服：二次作であるバーニングアリサ

年齢：19歳

3サイズ：燃やされた…

体重：燃やされた…

性別：

種族：炎帝姫

魔力光：赤とオレンジの間

好き：なのは達、紅茶、子犬

嫌い：気持ち悪い物、むさい男、ヤル気のない男

性格：素直になれないツンデレ

レベル：7000

得意武器：レーヴァティン（剣）

スキル：バーニングハート（倒した敵の数によって攻撃力上昇）

詳細：なのは達の親友でバンニグス財閥のお嬢さま。成績優秀で頭の回転が良い方である。ただツンデレなどがあるため素直になれないのが玉にキズ。

く月村すずか

髪：腰までの紫

目：青色

服：上部になのはのエクシード、下部にヴィヴィオのバリアジャケットを青紫色にした感じ

年齢：19歳

3サイズ：破かれている（でもアリサより上は確か）

体重：氷の欠片が墜ちてる

性別：

種族：夜の一族（吸血鬼）

魔力光：蒼紫

好き：なのは達、猫全般、優しい人

嫌い：悪い権力者、気持ち悪い者、吸血衝動

性格：普段はおしとやかな性格

レベル：7000

得意武器：ブリュヌ（剣）

スキル：ヴァンパイアハート（通常攻撃でとどめを刺した後、完全回復する）

詳細：なのは達の親友の一人。普段はおしとやかな少女だが、『夜の一族』という吸血鬼族の末裔なのだ。今でも己の血のことを悩んでいる。

途中紹介（後書き）

これは質問の領域に入りません。あしからず。

5pbのふぁいらじっ その1(前書き)

真王「超次元ゲームネプテューヌに登場するコーナー。その名も『5pbのふぁいらじっ』見ててくたせえ。チエケラッ！」

5pbのふぁいらじっ その1

5pb.の「ふぁいらじ」
久しぶり！5pb.だよ！みんな今日もよろしくね。

この番組は、リスナーから電波を通して誰かに伝えたいことを募集し、ボクが代わりに読んで伝える番組だよ。

伝える内容は、日常報告でも大切な人へのありがとや告白でも何でもOK。伝えたい相手はラジオを聞いているリスナーでもいいし、パーソナリティーのボクでもOKだよ。

じゃあ、さっそく番組に送られてきたハガキを読んでいくね。

まずは、『好奇心な探検家』さんからのハガキです。

『よう！5pb.ちゃん！実は君に凄いことを教えるぜ！って言うかありのままのことを話すぜ！実はゲーム業界の女神たちが行方不明だっというんだ。俺も最初耳を疑ったよ！せっかく女神様の抱き枕カバー買おうと思ったのに…おっと余計なこと書いてしまった（だが後悔しない！）。それとプラネテューヌのある場所で私は何か装置みたいなものを見つけたんだ。しかしどれもこれも暴走したのか煙がもくもく立っててね。そこで私は思いついたんだ、女神達はこの機械を使って行ったんだ！って。けど誰もしんじてくれなかった…。けど私の考えは正しいんだ！5pb.ちゃんも何か言ってくれ！』

ってええ！？女神たちは行方不明なんですか！？でも君の必死さは伝わったよ。だいじょうぶ、君のこと信じるよ。

さて次は、『エースのファン』さんからのハガキです。

『5pb・ちゃんこんばんは…でいいのかなあ？俺初めてなんだよ。でもまあいいか。いや〜ホントなのはさん達はかっこいいな〜。』
・あ、5pb・ちゃんに教えるけど俺はあのエース3人のファンなんだ！まず八神はやてさんはレアスキル持ちのエース、次にフェイト・T・ハラオウンはスピード界では負けない素早さをもつ電撃使いのエース、そして極めつけは管理局では誰もが知ってるエースオブエース・高町なのはさん！俺は特になのはさんのファンなんだ！影ながら彼女を応援しているんだぜ！…そう言えばなのはさんが恋をしている奴がいるって噂なんだが絶対嘘だよな？嘘だと言ってほしいよオオオオオオオオ！！！！』

…えっと、とりあえずそのなのはさんに支援している事は分かったよ。それにしてもエースって凄い人たちだね。でもエースと言ってもこいの一つくらいするよね。『エースのファン』さん、これからがんばってね。

さてさて、次は、『悩める恋の旅人』さんからのハガキだよ。

『ホテル・アグスタのことなんだが、俺はある金髪で緑のドレスを着た女性を見てしまった。俺はまた恋をしてしまった』

恋の進展だね。『悩める恋の旅人』さん。しつかり頑張つて。

まだ行くよ。『可愛いもの大好き女子局員』さんからのハガキです。

『5pb・ちゃんこんちゃ〜ッス』

あっ、こんにちは〜。

『聞いて聞いてよ！機動六課に次元漂流者が来たってことだけど実

はすんごくかわいい子たちだったのよ！特に白っぽい髪に蝙蝠の髪飾りをつけたかわいいわんこみたいなのがいたのよ〜、メツチャかわい〜〜（* > < *）〜〜〜！！あの子をナデナデしたいわ〜〜〜！！」

へえ〜、子犬みたいな女の子か〜、きつと可愛いんだろうね。『可愛いもの大好き女子局員』さん、ありがとうね。

次は、本名OK『リック』さんからのハガキだよ。

『これを見るかどうかわからんが、お礼を言いたい。あのあと私達はとつても元気に暮らしている。これも君達のおかげだ。哲志達も私達のためにバイトをしてくれている。最初は大丈夫かと不安だったがな。ところでサチコ達は元気にしてるか？あとでジエニフアの料理を送るから元気にしてくれよ』

素晴らしい家族愛だね。

次も本名OK『勝男』さんからのハガキだよ。

『覚えてるか？寿司屋の関口勝男だ。あんたらのおかげでこの寿司屋は人気を取り戻したぜ！今度来るときは俺特製の神めえニユーを作つてやるよ。その名も『ビッグカツパー』（見た目は河童巻きをでかくした感じ）』だ！絶対に人気は間違いなしだ！そんじゃあな』

・・・いや、その新メニューはどうかと…、まあいいや。

さてさて、次は、『世界征服をたくらむ男』さんからのハガキ…、つてなにこれ？まあいいや。

『フハハハハハ！このはがきを見ている者の中で紫髪の少女と銀髪の侍よ！我を覚えているだろうか？この文章とハンドルネームを見てピンと来ても我は何処にいるか分からんぞ。貴様らのせいで我の計画はついても絶対に諦められん。なので今は魔界のどこかでこつこつとお金を溜めている。次に現れるのなら貴様らの敗北となるだろう！・・・さて、もうひと稼ぎするか…』

・・・これ突つ込むべき？・・・止めとこう…。

えっと、次は、『機動四課の隊長』さんからのハガキだよ。

『ある森の中に大きすぎる大木があったんだ。私はそこへ行ってみたら何と花屋だったようだ。どれも見た事ない花がいっぱいではばらく見とれていたらその花屋の店主…言葉に表されないほど恐怖を感じた。絶対世界征服しに来たやつに違いないが、言い出したら確実に殺される！！これだけは言うて置く！』屁怒組の森』から逃げてえエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！』

つて『機動四課の隊長』さあああああん！！何があつたのオオオオオオオオオオオオ！！！！？つて言うか屁怒組の森って何！！？何かすつごく怖いんだけど！！？・・・いかんいかん、少し落ち着こう。

気を取り直して、『ロリコン好き局員』さんからのハガキです。

『俺すつごくかわいい子を見つけたぜ 顔立ちがあのがルデモの悪魔っ子にそっくりな顔立ちの女子なんだ。その子に告白しようとしたら「あんたキモイから近寄んな」っていわれた。・・・俺泣いていいか？』

は、ははは…人の好みはそれぞれだから気にしないでね。

えっと次は、『元聖祥大付属小学生徒』さんからのハガキです。

『なんてこった。俺達のアイドルのアリサ・バンニグスと月村すずかさんが突然いなくなってしまった！一体何処に言ったんだ！？教えてくれ！マイハー………ツ………!!』

……突っ込む気も起きない。

ちようどここで時間みたい。それじゃあみんな、また今度！バイバイ！

この番組は、時空管理局の提供でお送りしました。

それじゃあ、銀八先生の質問コーナーをお送りします。

銀八「教えて！」

全員「銀八先生……！」

神「いよう）。）。ノ『リイン』とこの神様だぜ？」

銀八「お前何さまだ？」

神「神様だ」

銀八「・・・じゃあさっそく行くか」

神「スルーかよ」

銀八「ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから始めっぞ。『ルイージ』あれ・・・兄さんは？」

スネーク「これ・・・」

『ちよつとした修行に出ます・・・決してポケな女の子を張り倒しに行くのではないのでb yマリオ』

ルイージ「・・・勘違いされない為かね・・・今、コラボを書いていますので！後、ちよつとキングベヒモスを倒すのをF A Rしたゼロ（兄さん）でビビちゃんが倒す感じにしよう！と作者は考えてます」

スネーク「それで加わったな・・・」

フォックス「だな・・・」

ネス「皆に質問『仮面ライダーネオスと仮面ライダーネクサスについてどう思いますか？』」

フォックス「ビビに質問『コラボでのマリオのはどうだった？』」

ネス「真王さんに質問」もし運動会するならそちらはどう言うメン
バーで行きますか？」

次回を楽しみにしています」

真王「これだけはぶっちゃけ言いますが私仮面ライダーなんて興味
ないんです。質問してくれてもごめんなさい（土下座）。あと運動
会が出るならネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールといったと
ころですね」

ビビ「えっと次は私の…もうぼこぼこにされてめっちゃ悔しいよ！」

銀八「まだ根に持ってるのか…」

神「…『鳴神 ソラ』さん、廊下に立ってな？次の質問はペン
ネーム『黒神』さんだぜ？」質問します。

黒神

「いやあ、完全に凄い展開になりましたね。じゃあ…月詠へ、ジ
エイソンと化したキャラ口を見てどう思いますか？」

銀時

「何おつかねえ質問してんだお前は!？」

銀時がさっそくありえない質問に青ざめて叫びだす。

黒神

「まあいいじゃないっすかコレぐらい…後ベールへ、もしゲスト
として呼ばれたら、桂と共存活躍でもしてみたいっすか？」

銀八「って言うか自分が変態だって認めてるんですけどオオオオオオオオオオ！！！！」

神「いやあここまでいくとは……『黒神』、変態に気をつけな。次は俺がお世話になってる『リイン』だぜ。『どうも！！ 更新、お疲れ様です！！！！』

レヴェツカ「どうも。あん男の第一夫人、レヴェツカいますう。つてか、あん人何気に、高みの見物しとるし」

そうですね……何もしてませんし……

レヴェツカ「自分の力で一掃できるモンを、あえて……よほど余裕がましとるなあ」

で、ですね……さすが、神様

レヴェツカ「ほんで、ウチの愛する男や」

は、ははは……

さて、今回も質問を少し、させていただきます

・前回、感想でほかのウチの五人の転生者（バカヤに竜虎、ハジメに天音、夢乃）は使いたいとおっしゃられていましたが……使うのですか？

・他の感想を見て思ったのですが、まさかビビの性格を丸くするおつもりですか……？（ハイライトが消えた瞳で、若干ドスの効い

た声で)

レヴェツカ「アンタにとって、ビビはヤンデレで確定なんかいな！
！」

もうそういう認識じゃないですか、読者からは………ですから、こ
こでもその片鱗が垣間見える事を、楽シミニシテオリマス

レヴェツカ「あんさん、目がイツとるで」

では……！ 次回も楽しみにしておりますので、執筆、頑張ってください
……！ 失礼します……！

レヴェツカ「ほなな」『……俺の居ぬ間に何があった？』

真王「だな。あの五人は出す予定だ。なんせ面白そうだし」

銀八「それだけかよ……！」

真王「リイーンさんのはヤンデレに入るならこっちにはエロかわでい
きますよ？」

銀八「エロかわって何！？エロっぽくて可愛い子の略か……？」

真王「では『リイーン』さん、廊下に立ってなさい」

銀八「聞けよ……！」

真王「最後にペンネーム『あああ』さんから。『最近、銀さん、フ

ラグメイクしてないですけど大丈夫なんですか？』銀さんのフラグは作者の都合です。『あああ』さん、ちよびつと期待してもいいが」

神「今回はレーティアって言うやつだぜ。ばいばい！」

5pbのふぁいらじっ その1 (後書き)

真王「今回は何と宇宙の世界に突入！宇宙生物の襲撃に巻き込まれ宇宙へ飛ばされた銀時達はミッドへ帰る冒険（そしてお宝探し）が始まる！」

レーティア「次回『宇宙は広いよねっと思っただ時期もある』テイクオフよ」

（報告）

真王「なんか予告と違ってしまいました、別に気にしないでください。面白ければよいと思っので」

第六十八訓：宇宙は広いよなっと思つた時期もある（前書き）

真王「ついに始まつた銀河編！銀さん達はどんな冒険を繰り広げられるか！」

レーティア「『リリカル銀魂』銀河編、始まります」

真王「あ、マリギヤラみたくタイトル考えてみました。どうぞ」

（サバンナランドギャラクシー）

『小さな星のあばねんぼっ』

第六十八訓：宇宙は広いよねっと思つた時期もある

ミッドチルダのある日から2週間開催されたあの祭り。

『星屑祭り』が今日も夜空へ飛んでいく。

そして始まりは一つの手紙。

『ネプテューヌお姉ちゃんへ

今日も星屑祭りが始まっているよ。

みんなで一緒に楽しもうよ。

『ヴィヴィオより』

ネプテューヌ「ハイそんなわけで来ました。第36回、チキチキ、星屑祭り大会いいいい!!」

ビビ、なのは、はやて、レーティア、ジャンヌ、神楽、スバル

「いえ~~~~~いい!!」

新八「ちよつと待てエエエエエエエエ!!!!!!いつの間にそんな企画作つたんだよ!!」

ネプテューヌがマイク持つて実況して、みんなノリノリに言うところを新八は突っ込む。

ちなみにアリサとすずかは自宅に戻つたそうだ。

銀時「決まってるだろ?祭りと言えば騒ぐんだよ」

新八「祭りは楽しみだけのもので会って騒ぐものではありませんよ

新八「こ、これは一体!?!」
レーティア「あの怪物の仕業よ!」

レーティアが指差す方向を見ると、巨大な怪獣がミッドチルダを襲っている。

ジャンヌ「えつと・・・あれってガメラ?」
レーティア「違うと思うけど...」

姿が微妙にガメラに似ていて思わずつぶやくが、レーティアがやりわり否定する。

ガメラ? 「ウグオアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?!?!」

ガメラにの怪物は暴れた後空高く飛んでいった。

銀時「ホントに飛んでいったよ!!マジでガメラでいいんだな!?!」
ネプテューヌ「言ってる場合!?!早くしないと!」

ネプテューヌは町の方へ行こうとした。

するとなぜかタイミング良く星屑が来る。

ネプテューヌの足が星屑にあたり、偶々通りかかったロストロギアにヒット。

全員「あつ」

拳銃ロストロギアが暴走し、銀時達を吸い込み始める。

そしてやっぱりこう言う役割なのか、新八がいの一番に光の球体に吸い込まれ始めた。

新八「うわあああああ！！！！」

新八は慌てて銀時の手を掴み、銀時はネプテューヌ、ネプテューヌはノワール、ノワールはベール、ベールはブラン、ブランはレーティア、レーティアはジャンヌ、ジャンヌはビビ、ビビはグレイ、グレイはコンパ、コンパはアイエフ、アイエフは神楽の手を掴むと言う、繋ぎっこ状態になった。

銀時「し、新八！！テツメ、どう言っつもりだ！」

銀時は踏ん張りながら新八に文句を言う。

新八「嫌だー！！一人で吸い込まれるのは嫌だー！！」

グレイ「そこは普通“僕に構わず行ってください”くらいの事は言う場面だろ」

ビビ「だから逝って」

新八「逝けるかアアアアアア！！！」

神楽「全員私に構わず逝ってー……！！」

銀時「いや、お前も道連れだ！！」

先頭の神楽を始めとしてなんとか吸い込まれないように踏ん張っているが、いつまで持つか分からない。

心なしか、吸引力が強くなっているようにも感じられた。

桂「ふははははははははは！銀時！急に風が強くなったと思ったら一体何やっているのだアアアアアアアアアアアア！！！！！！？？」
ヴィヴィオ「きゃああああああああああ！！！！！」

巻き込まれたのか桂、ヴィヴィオが吸い込まれていく。

ジャンヌ「いけない！トランス！」

髪の毛を触手のように2人を捕まえた。

桂「かたじけぬううジャンヌ殿！！」

桂はお礼を言った。

神楽「も、もうダメアル！」

どンドン強くなる吸引力に対して踏ん張りが効かなくなった神楽は
少しづつ後ろに後退してしまう。

神楽の手を掴んでいたネプテューヌ達も後ろに後退してしまつ。

銀時「か、神楽！根性見せろ！！」

神楽「ご、ゴメン銀ちゃん！さすがに、もうダメネ……」

そして神楽の体を宙を浮き、後ろにいたネプテューヌ達も宙に浮い
てしまう。

もうダメだ……そう思った時、奇跡が起きた。

ガシ！

神楽の手を誰かが掴んだ。

神楽「エリー！」

IBGM星船byスーパーマリオギャラクシー2
(Super Mario Galaxy 2 Music Extended - Starship Mario C)

ネプテューヌ「う…うん…?」

???「おや、気が付いたかい?」

ネプテューヌが目を覚ますと・・・緑の風船がしゃべっていました。

ネプテューヌ「貴方は…?」

イーバ「あたしはイーバ、宇宙の旅人さね」

ネプテューヌ「宇宙の…宇宙…宇宙…!!!??」

ネプテューヌははっとなって見渡すと見渡す限りの星星…完全に宇宙だった。

ネプテューヌ「マジで宇宙…」

ネプテューヌはorzな状態になる。

イーバ「ははは、最初のリアクションはそれかね。そらあんた達、さっさと起きな!」

イーバがネプテューヌのそばにいる男をばしばし叩く。その男は何と銀時である。

他にも新八、銀時、ノワール、ベール、ブラン、レーティア、ジャンヌ、ビビ、グレイ、コンパ、アイエフ、神楽、桂、ヴィヴィオ、エリザベス、プリニー、そして神がいた。

銀時「いつつ、なんだよ一体……」

イーバ「おや、目覚めたかい？」

銀時「うお！風船がしゃべった！」

イーバ「誰が風船だつて？」

銀時「ブフオツ……！」

銀時が目を覚まし、イーバが声をかけると銀時が余計なことといって
押し掛かりでぶっ飛ばされた。

その後全員目を覚まして、最初は驚きの連発だが何とか落ち着いた。

桂「何と！ならば俺達は天竺へ旅立ったと言うのか！」

ネプテューヌ「んなわけないでしょ……！」

神「ここは孫悟空の世界じゃないぞ」

相変わらずの桂のボケにネプテューヌとビビとジャンヌは殴る。

イーバ「で、あんな達のミッドチルダって場所なんだけどこっから
じゃ遠いね。でもあたしが送り届けてやるよ」

イーバの言葉にみんな嬉しそうにする。

イーバ「でもタダで返すのはこっちとしてあまりいいことじゃない
んだがね」

ジャンヌ「えっと、何か手伝えってこと？」

ゲームでよくある『何かしてほしいなら何かしてこい』な感じのイ
ベントが。

イーバ「そうさね、あたし達は宇宙のトレジャーハンターをやつて

るんでね。でもあたしや足腰悪いし子供達にやらせるのは良くない
って思ったね」

アイエフ「つまりお宝探しのために手伝ってくれと？」

イーバは「そうさね」と答える。

イーバ「お宝と言ってもいろいろあるから『お宝みたいなものでも
いい』から見つけておくれ」

みんなはは〜いと答えた。

イーバ「それじゃあさっそくあの星をしらべてくれないかい？」

イーバが指差す先には白いでっぱりがある茶色い星だった。

銀時「あの星か」

新八「って言うか、何であの星に近づかないんですか？」

イーバ「バカ言ってるんじゃないよ、あそこは危険な予感がするんだ
よ。あたしは非戦闘員なんだ」

新八は疑問を投げるが、イーバが説明する。

イーバ「それにあそこにはお宝があるってこいつが教えてくれるの
さ」

そう言って取り出したのは何かを探知するレーダーみたいなものだ
った。

さっきからあの星をさして右に振っている。

新八「それは分かりましたが、一体どうやってあそこまでいくんで

全員「ぶへっ!!」

白いものに直撃した。

銀時「あいててて…ん?なんかいやな予感が…」

銀時は冷や汗流して白い物体を見る。

白い物体からどンドン亀裂が走り、そして、

バリーーーーン!!

???「ンギヤアアアアアアアア!!!!」

植物と恐竜が合わさったようなモンスターが生まれました。

IBGMデノパツクンbyスーパーマリオギヤラクシー
(Super Mario Galaxy Music Extended Boss Theme 1)

???「ウガアアアアアア!!!!」

銀時「ぎゃアアアアアアア!!!!」

モンスターが銀時を追いかけ始める。

口に涎垂らして。

銀時「ちよつとおお!!!俺食おうとしてんの!?絶対食うなよ!
!絶対不味いぞ!!!食ったら糖尿病になんぞこのやろっ!!!」

逃げながらモンスターに言うが、お構いなしのようだ。

ネプテューヌ「銀さん必死だね」

神「いやいや、こりや見ものだな」

ジャンヌ「銀さん頑張ってる」

神楽「銀ちゃん、男は度胸アル！」

銀時「なんでお前らはそんなところでエスケープしてんだああああああああああ！！！！」

いつの間にか観客席（つーかどこから！？）ですわって観望しているネプテューヌ達。

銀時はそんなネプテューヌ達に額に青筋立てて怒鳴る。

ネプテューヌ「…仕方ない、銀さん、今助けるよ！」

ジャンヌ「面白そうだから私も！ちなみにあんたも」

プリニー「ええええええええ！！？何で俺ツスカ！？」

ネプテューヌとジャンヌと（強制的に）プリニーが参戦した。

銀時「元はと言えばテメエが飛んできたからじゃねえかああああああああ！！！！！！」

プリニー「ギヤああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

ドガーーーーンッ！！！！

????「ウギヤああああ！！！！」

銀時は力任せにプリニーをぶん投げ、モンスター・ティラノパック

ネプテューヌが玉をさして聞くとジャンヌが答え、シャマツシユに声をかける

シャマツシユ オーライマスター、合言葉は？

ジャンヌ「華人小娘」

シャマツシユ OK、フォームチェンジ！

シャマツシユが言うとジャンヌの体が光る。

治まるとそこには緑色の中華服（東方の紅 美鈴の服）を着たジャンヌがいた。

ジャンヌ「いつくよオオオオオオオオ！！！！」

ジャンヌは球に向けて正拳付きの構えをとる。

ジャンヌ「セイヤツ！！」

ドガツ！！！！！！

思いつきり殴った。

ビヨオオオオオ~~~~~ン！！

全員「へ？」

球付き尻尾がゴムのように伸びて、

ドゴ~~~~ン！！！！

ティラノパクション「ンギヤアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

ティラノパツクンの頭に直撃した。

銀時「どんな弱点持ってたんだよこいつ!!」

ネプテューヌ「宇宙で広いね〜」

変わった弱点を持つティラノパツクンに突っ込む銀時。
ネプテューヌは改めて宇宙の神秘を感じたらしい。

するとティラノパツクンの口から何かが出た。

銀時「んだこれ？」

ネプテューヌ「これ…電池？」

出てきたのは何と赤い単三電池だ。

しかしなぜか銀時達と同じサイズである。

ジャンヌ「これがイーバさんの言ってたお宝かな？」

レーティア「ともかく目標は達成したし、戻るわよ」

銀時達はお宝（電池）を持ってイーバ達の星船に戻った。

どうやって戻ったかは黙秘する。

イーバの星船

イーバ「良くやったねあんた達。あたしの目に偽りはなかったよ」

お宝を眺めながら言うイーバ。

ネプテューヌ「…ところでこのラツパの機械は何？」

ドルフィン「こんにちは、私お宝鑑定士のドルフィンと申します！
以後よろしく」

銀時「あ、こちらこそ…」

ネプテューヌがボロつちい機械を指差してイーバに聞くと、その機械・ドルフィンが挨拶して銀時は驚きながらも返す。

イーバ「疲れたろ？あそこの土管の中で休めばいいさ。なに、見た目と違って結構広いよ」

ネプテューヌ「ありがとうございます」

ネプテューヌ達は言われたとおり土管に入るとまるでホテルのような場所に着いた。

新八「結構広いつつーかホテルまっしぐらなんですけど…」

神楽「おお！ここに浴場とかゲームセンターとかがあるネ！」

銀時「完全にホテルだな…」

新八は驚きながらそんな感想を漏らし、神楽が案内板を見て興奮し、銀時がこつ漏らす。

レーティア「このシャワーはどんな感じかしら？」

アイエフ「ちよつとゲーセンチャレンジしてみようかしら」

ベール「私も…」

神「俺もゲーセン負けないぜ？」

ジャンヌ「一緒に体洗おうかビビちゃん」

ビビ「うん」

ヴィヴィオ「私もいく」

プリニー「ちよつと待つツス！」

ノワール「私はさきに寝とくわ」

ブラン「私も」

銀時「こつちは疲れたから寝るわ」

ネプテューヌ「じゃあお休み」

こうしてそれぞれいるなどこ行って一日が過ぎた。

『永久燃料ダイナモJr』を手に入れた。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

レーティア「ハイ、恋を求める乙女レーティアがアシストしちゃい

まゝす？」

銀八「？つげんな、普通にやれよ。・・・んじゃペンネーム『鳴神ソラ』から始めるぞ『ルイージ』色々とツツコミ所満載なメッセーじだったね」

フォックス「そうだな…思いっきり1つはゲラコピッツだろうな…」

スネーク「次回は宇宙か…」

ネス「んで質問じゃないけど疑問…ほとんどキングダムハーツは書かれてるけど…デイズニーのキャラが1人（KHでのソラ達やXII E I 機関を除く）でも出たら駄目なのかな？コラボを頼まれた側として気になるし」

リュカ「そこらへんはどうなんだろうね？」

マリオ「改めて質問『宇宙に行った時、最初に何する？』」

フォックス「こちらのコラボ3でいなかったメンバーに質問『マリオのトレーニングについて？どう思う？』」

スネーク「 그레이に質問『起動六課来て苦労する事はあるか？ビビ以外で』」

そんな訳で次回を楽しみにしています 『今出たのがそうだ。んで次』

全員「それトレーニングじゃなくて拷問だよねっ！！！！？」

그레이「苦労か？・・・ガキの子守とかだな」

真王「ヴィヴィオ達か。んじゃ『鳴神 ソラ』さん。忠告ありがとうございます」

銀八「次はペンネーム『黒龍』さんからの質問だ。『黒龍』久しぶりの感想です！」

銀時「お前、最近友達から借りたとある魔術の禁書目録インデックス見てたもんな」

黒龍「六巻での一方通行がマジ最高でした!!!」

ソラ「あいつの生き方は共感できるからな」

銀時「小説とアニメには全然手を付けてないけどな」

黒龍「アニメはまだいけますけど、小説は長いですから・・・」

銀時「ジャンプマンガ並の連載だよな」

黒龍「とにかく面白かった!!!」

銀時「一つ聞くけどよ、まさかとある魔術の禁書目録インデックス加えようとか思っ
てないよな？」

黒龍「……………」 あからさまに目を逸らす

ソラ「マンガだけしか読んだ事ない分際で良く思いつくな」

黒龍「だって、すんげー一方通行に共感できるんだもん!!!」

銀時「もんって気色悪いんだよ」

黒龍「酷い!?!」

ソラ「そう言えば、打ち止めは良いキャラしてたな」

黒龍「当麻はアレですね、ちょっと無謀な所が良くないですね」

銀時「まあ、アイツは守りたいもん守っただけだもんな」

黒龍「彼は彼でいい所があると言っんですが、俺は一方通行と打ち止めに共感してしまいました」

銀時「今気づいたけどよ、何かとある魔術の禁書目録インデックス談義になってるよな」

ソラ「別にこの作品にないのにな」

黒龍「あれ?なんでこうなったんだろ?」

銀時「お前がインデックスに嵌ったからだろ」

黒龍「面目ありません・・・」

ソラ「じゃあ質問いくか。ビビに質問だ。お前はとりあえず、百合が法律上認められなかったらどうする?」

銀時「じゃあ俺はグレイに質問。お前さア、神に男に戻してもらおうように頼んだらどうだ?」

黒龍「最後にネプテューヌに質問。銀さんに対して何かアプローチしてますか？」

銀時「じゃあな〜」

ソラ「じゃ」

黒龍「次回も楽しみにしています」『ズバリ順番にお答えしましょう』

ビビ「だったら認めるように改変させてやるウウウウウウ！！！！」

グレイ「そうしたいがもう諦めた…ハア…」

ネプテューヌ「アプローチ？……………考えてるよもちろん！」

真王「考えてねえな。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『HARU』さんからの質問。『アホの婦女子ヒメに質問です。体験してコレだけイヤだ〜と思うの選んでください。』

1 ボーボボが自分のコスプレをしている。

2 サービスマンが自分の誕生日に祝いに来る。

3 魚雷ガールにおフザケしている自分にタツプリ扱かれる。

P.S. 女性である私から一言…。

ハッキリ言えばマジで気持ち悪いです。

後、見た目よりも内面を磨かないとボーボ達と魚雷ガールに心身共に精魂叩き込まれますのでご注意よ…。

ヴィヴィオへ

アホの腐女子くちに何される解らないからあんまり近づいちゃダメだよ。
『…ビビ』

ビビ「なによこれ！？全部イヤに決まってるでしょ！？」

真王「ならば全部破棄だ。次ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「なんで？お姉ちゃんは優しいからそんなことないよ？」

ビビ「ありがとうヴィヴィオちゃん〜ん！！(TOT)」

レーティア「あらあら、それじゃあ『HARU』さん？廊下に立ってね」

真王「次はジャンヌをアシストにつけよう。では」

〈今日のお宝鑑定〉

〈永久燃料ダイナモJr〉

価値：5000円

見た目：単三電池（赤）

イーバメモ：最初に見つけたお宝さ。見た目は頼りなさそうな奴らだったけど実際は結構強い相手だったね。その調子で頑張ってほしいね。

ドルフィンメモ：永遠に動き続ける永久燃料ダイナモの子孫！まだまだ未熟なところもあるが電力が尽きないこと間違いナシ！私に埋め込めないのが悲しいです。

第六十八訓：宇宙は広いよなっと思った時期もある（後書き）

真王「なんだかピクミン要素がありますが気にせず。次回はハチの国に行きます」

ジャンヌ「次回『ミツバチの蜜は甘い』テイクオフ」

（予告）

ナレーション「あの変身アイテムが出てきそうです」

第六十九訓：ミツバチの蜜は甘い（前書き）

真王「今回はハチの国。一体どんなものが待ち構えているか？」

ジャンヌ「『リリカル銀魂』始まるよ」

「ハニーロップギャラクシー」

『飛べ！ハチネプテューヌ！』

第六十九訓：ミツバチの蜜は甘い

ミッドチルダの帰還兼イーバのお宝探しを行って翌朝になった。

ネプテューヌ「ん〜、ハア〜、気持ちいい朝だな〜、って宇宙だからいつ朝なのか分かんないや」

背伸びして一人漫才するネプテューヌ。

銀時「フワツハア〜・・・あ〜、なんかねみい〜…」

ネプテューヌ「あ、おはよう銀さん」

新八「おはようございます」

アイエフ「おはよう」

コンパ「おはようですなぶねぶ」

ヴィヴィオ「おはよう〜」

プリニー「おはようございますッス」

ほとんど全員起き上がったようだ。

ビビ「う〜ん…みんなおはよ〜…」

ジャンヌ「でも眠い〜…」

ビビとジャンヌは眠たそうな顔で起きてきたが、銀時達は固まった。なぜかって？それは彼女達の着ているパジャマが原因である。

何と2人とも肌が透けて見えるパジャマを着ているのだ。

2人のボディラインが良く見える。

新八「ブハアッ!!!（鼻血）」

新八は当然にも鼻血を出す。

周りのほとんどは赤くなり、グレイとレーティアは呆れた顔になる。

銀時「ちょ！お前ら何つつもん着てんの！？なに成人エリアの着てんだよ！！」

ビビ「ふえ？………ああ、この服？」

ジャンヌ「ちよつと2人で遊んでたから」

なにがだよ！つと言いたかったが深く追求しないようにした銀時であつた。

レーティア「ほら、早く着替えなさい」

ジャンヌ・ビビ「はい」

ネプテューヌ「じゃあ私達はさきに……」

イーバの星船

とりあえず外に出た銀時達。

ビビとジャンヌはすでに着替えた。

イーバ「おや起きたかい。ちょうどいい星に着いたよ」

イーバが指差す先には花が多い星だった。

ネプテューヌ「おお、この星は平和そうだね」

銀時「んじゃおりますか」

ハニーロップギャラクシー

IBGMハニービーキングダムギャラクシーbyスーパーマリオギ
ャラクシー

(Super Mario Galaxy Music Extended -
Honeyhive Galaxy)

きれいな花がいっぱいある星に着いた銀時達。

ベール「…ここはなんて素敵なところなのでしょうか」

レーティア「確かにいい香りがするわね」

ジャンヌ「ここでひと眠りできそうだね」

ベール、レーティア、ジャンヌは環境の良い場所にいい気分になる。

銀時「でもそう言うことに限ってへんなことが起こった」「その人、ちょっといいですか?」「…ほらな」

銀時が言いかけた時に銀時達より小さめのハチが声をかけてきた。

ハチ「見かけない人であるますがこの際仕方ないであります。ちょっとお願いしてもよろしいでありますか?」

ネプテューヌ「お願いってどんな?」

銀時「止めとけネプテューヌ。そいつに関わったところでいいもんなんてないっての」

ネプテューヌ達は八チの話の話を聞くが、銀時がその場を去ろうとすると、

八チ「聞いてくれたら“凄いお宝”をあげるであります」

銀時「よしネプテューヌ、とりあえず話を聞こうじゃないか」

新八「変わり身早いな」

凄い宝と聞いて銀時は心変わりし、新八が突っ込む。

八チ「それでは早速ある場所へ案内しますが…そのままは飛べそうにありませんね」

八チの言う通り、飛べない人がいるためどうするべきか悩む。

ネプテューヌ「じゃあ飛べる人が担いで…」

八チ「いやそつちじゃないであります。どうせだからこれをあげるであります」

そう言つて八チが取り出したのは黄色と黒の縞模様があるキノコだった。

八チ「食べてみるであります」

ネプテューヌ「う、うん」

ネプテューヌは一口食う。

すると彼女の体に変化が出た。

ネプテューヌは何と八チになった。

・・・ブラックホールに。

新八「か、桂さああああああああああん!!!!!!」
神楽「おいヅラあ!!生きてるあるか?」

新八「んなわけあるかああ!!桂さんブラックホールに吸い込まれたんですよオオオオオオ!!!!」

ブラックホールに吸い込まれた桂に叫ぶ新八。
すると別の場所で白い穴が出てきた。

ペッ!

そこからはきだすように気絶している桂が出てきた。
バツタからノーマルに戻っている。

ハチ「あちゃ〜、一機分失っちゃったみたいでありますね。今度からちゃんとするであります」

全員承諾するも、新八は複雑な気分になった。

で...

ネプテューヌ達は八千化して八千たちの女王へ向かった。
ちなみに銀時達は来ていない。なぜかと言うと、

銀時：コスプレを嫌がる

新八：恥ずかしいから無理

桂：気絶中

神：興味なし

グレイ：完全拒否

という感じである。

ベール「男の子はやはり恥ずかしかったのでしょうか…」

ノワール「それを言うなら私だって恥ずかしいわよ…」

八千姿のベールは銀時達を心配し、ノワールは八千姿に恥ずかしむ。

八千「次はここを登っていくであります」

そう言って指差したのは断崖絶壁。何やら黄色い壁があるようだが…。

ノワール「こんな崖飛んでいけつての？」

頂上まで飛ぶのかと思うノワール。

しかし八千化したとしても飛び続けは疲れてくる。

八千「イヤ飛び続けなんて疲れるでありますからあの壁を使つてあります。こうやって」

八千は黄色い壁にくっついた。

壁を伝ってよじよじ登っていく。

ネプテューヌ「成程、それなら羽使わずに登れるね」

ネプテューヌはそう言って壁に飛び付く。

ビビ「止めときなさいって。べったりつきそうだし」

ネプテューヌ「つかないよ？ホラ」

黄色い壁にくっつくとなればねばしたものが付くと思っていやがるビビだがネプテューヌが手を見せて証明する。

レーティア「まあ粘つかないにしろ登れることは確かね」

アイエフ「あんたはなんでその登り方!？」

鞭のファスシニムを引っ掛け代わりに上るレーティアにアイエフが突っ込む。

なんだかんだでみんな登っていくと、

ネプテューヌ「うわぁ・・・」

ビビ・ジャンヌ「でっか!」

女王「あら新人さん達かしら?」

目の前にいる大きな女王蜂に驚くネプテューヌ達。

はっきり言って女王から見ればネプテューヌ達は豆くらいである。

女王「うう…なんだかまだムズムズするわ」

何やら女王の体に何かが疼いているようだ。

ネプテューヌ「つてもしかして頼みたいことってあれ？」
ハチ「あれとは失礼であります。頼みたいこととは女王様のムズムズを治すのであります」

ネプテューヌはため息吐いてやれやれになる。

ネプテューヌ「女王様の頼みだもんね。私がやるよ」

そう言つて女王の体のムズムズの原因を探り出した。

ネプテューヌ「まるで茂みみたいな体…ってなんでこんなにものが詰まってるの？」

女王の体からどうでもいいものがいっぱいあった。

沢山あつてイラついて行くと、光る物が見えた。

ネプテューヌ「ん？どっこいしょ！！！」

女王から抜き取つてみるとそれはオレンジ色の結晶だった。

女王「あ、なんかすつきりした」

ネプテューヌ「じゃあこれが原因だね？」

ネプテューヌがオレンジの結晶を持って女王に聞く。

女王「あゝ、それ『蜂蜜結晶』。昔私の中に入れてたの忘れてたわ」
全員「忘れとつたんかい！！！」

全員思わず突っ込む。

女王「ずいぶん昔のだけど中の甘さはしっかりキープしてるから大丈夫よ」

ヴィヴィオ「・・・あ、ホントだ甘い」

ヴィヴィオは舐めてみて甘いと感想を漏らす。

女王「ムズムズを治したお礼としてそれ持っていつでもいいわ
アイエフ「え？マジでくれるの？」

女王「いいのよ」

アイエフは半ばいいのかと思ったが女王は言う。

ネプテューヌ「それじゃあさっそく運びだそ」頂き「ってえ？」

運び出そうとしたら TENTOU 虫とクワガタの口が合わさったような紫の虫が蜂蜜結晶を盗んだ。

クワカブト「フハハハ、このクワカブト様がたか」返せこの虫やるうー！」「うぎゃあああああー！！！」

喜んでるところネプテューヌに踏みつぶされた。

蜂蜜結晶はその時のはずみで飛んでいき別のクワカブトがキャッチ。

クワカブト「受け取ったぞきょうだ」お宝返しなさい！」「ぎゃあああああああー！！！」

今度はビビがドロップ。

別のところでクワカブトがキャッチ。

クワカブト「きょうだ「死ねコラアアアアアアアア!!!」最後まで
言わせてエエエエエエエエ!!!」

レーティアとジャンヌにドロップされた。

クワカブト「撤収」

クワカブトの一匹が蜂蜜結晶を持ってどっかへ行った。

全員「待てエエエエエエ!!!」

全員そのクワカブトを追いかけた。

ハニーロップギャラクシー・クワカブトの住処

クワカブト「グフウ・・・」

持ち去ったクワカブトはネプテューヌ達によって倒された。

ネプテューヌ「さて、早く銀さん達のところに「行かせると思っ
てるのか!?!?!?!」

木の上から緑色の巨大な虫が降ってきた。

IBGMオタキングブイスーパーマリオギャラクシー

(Super Mario Galaxy Music Extended - Boss Theme 2)

クワカブトキング「貴様ら！！俺の可愛い子供達にイタぶったお礼を受け取りな！！」

クワカブトキングが牙を出してこっちに向かってきた。

ネプテューヌ「そう言う中二臭いセリフは…」

ネプテューヌ、ビビ、ジャンヌ、レーティア、ヴィヴィオが飛びあがって、

ネプテューヌ「お断りなんだよ！！」

クワカブトキングに向かってドロップを与える。が、

ドゴッ！

ジャンヌ「あ、いない」

クワカブトキングがいなくなった。

クワカブトキング「何処狙ってんだよバカ」

何とクワカブトキングが飛んでいるのだ。

ビビ「バカはあなたよ！！」

ニヤリと笑ったビビはクワカブトキングに向かって魔力弾を放つ。

クワカブトキング「仰向け飛行！」

クワカブトキングが仰向けのまま飛行した。

その時魔力弾が背中に当たるも弾かれてしまう。

アイエフ「てか仰向けで飛ぶなんて聞いてないわよ!!」

アイエフが突っ込む。

ジャンヌ「・・・あれ？」

するとジャンヌは木の傍で不思議なボールを見つけた。

ジャンヌ「（これを使えば…）みんな！ちょっとどいて！」

ジャンヌはネプテューヌ達を離れさせ、美鈴の姿になって構えをとる。

クワカブトキング「なにするか知らんが死ねやアアアアアアアアア

！！！！！」

さっきまで飛んでいたクワカブトキングが牙を出してジャンヌに襲いかかる。

ジャンヌ「・・・破っ！！」

正拳付きでボールを勢いよくクワカブトキングへ飛ばした。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

ジャンヌ「はい、コスプレを愛する女の子、ジャンヌ・デビリアスだよ。みんなよろしくね」

銀八「よし行くぞ。ペンネーム『黒神』さんからだ。『質問します。』」

ノワールへ

『リリカル銀魂ゲスト杯』に参加したネプテューヌは優勝できると
思いますか？

土方へ

最近こつちでも出番少ないですけど大丈夫ですか?」

ノワール「そうね。出来れば優勝させてほしいって思っわ」

土方「大丈夫なわけねえだろオオオオオオオ!!!!おい作者!!
俺の出番はいつになるんだ!!」

真王「人前でネタばらしする気はないですよ。あえて言うなら、ボソボソ・・・」

土方「本当か? だったらまあいいが・・・」

真王「ハイそんなわけで『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

ジャンヌ「さして次はペンネーム『鳴神 ソラ』さんからだよ。』
マリオ「……拷問に見えるのか?」

ルイージ「(駄目だ、兄さんは長年やってたから普通に思っている;)」

マリオ「しかし、ピクミン要素の入ったギャラクシー編だな」

フォックス「けれど…ミッドチルダを襲った奴は一体…」

スネーク「だな」

マリオ「質問『お宝を見つけた時、どう思った?』」

ルイーダ「真王さんに質問『出て来るお宝はピクミン2で出たお宝を少しアレンジしたのが多いんですか？』」

オリマー「私からも質問『主にマリオの所とピクミンので出た原生生物が出て来るのかね？』」

次回を楽しみにしてます』ネプテューヌちゃんたちの感想では「この電池がお宝か？」だって。かく言う私もそうだけど」

真王「ハイその通り。ちよつとばかりピクミン2のお宝を少々アレンジしました。そして今回クワカブトが出たのでそれが証拠です」

ジャンヌ「それじゃあ『鳴神 ソラ』さん。廊下に立つてください。次はペンネーム『月光閃火』さんの質問だよ。『よお…月光閃火だ。』」

しかし…まだ居たんだなビビ達…。元の世界に帰ったとばかり思ってたぜ…。ま…俺ア気に入ってつからいんだけど

輝刃「…本音を言ったな…。閃火…またビビが行きすぎた行動を起こしたら、あの『地獄の鋼鉄掴掌』をかますのか？」

まあな…ビビはどうかやら痛い目に遭わないとその場は解ってもらえなさそうだしな…。あ…質問…行くぜ？まずは俺からだ。

1. ビビに質問…『閉塞空間で筋肉モリモリの漢達によるおしくらまんじゅう』『一年間地獄の鋼鉄掴掌を喰らう』『地獄で若本V O I C E の鬼から発せられる』ぶるうあああああああああ！！
！！』の叫びを一生聴かされる』この中で受けたくない罰はどれだ？

ますか？後、スバルにこれを」

スバルにコアドリルをあげた。

白騎士君「実は銀河編にラガン、グレン、アークグレン、超銀河ダイグレンが何処かの星にあります」

レナード「なお超銀河ダイグレンは星に擬態しているのでかさは星並みだ」

白騎士君「今回はこれにて」『…おいスバル、何かお前宛だぞ」

スバル「うえええ…そんな急に渡されても…」

真王「バイオキャラは出ません。あしからず。『白騎士君』ごめんなさいね。それからバトン公開だ」

『また出すよ。私のオリジナルバトン。』

このバトンはダンジョン探索の時に言うセリフを表したものです。ダンジョンによる仕掛け、トラップ、戦闘などをイメージしてかきます。

今回のキャラ：（上から順に）レーティア・ジャンヌ

0．ダンジョン突入

「行きますわよ」

「出発しんこ〜」

1．エンカウント・通常

「相手してあげるわ」

「いいね君、相手になるよ」

- 2・エンカウント・格上
「これは強敵ね」
「う〜ん、頑張る！」
- 3・エンカウント・格下
「私に勝てると思ってるの？」
「私一人で十分だよ」
- 4・勝利
「この程度で負けるわけがないわ」
「結構肩慣らしに放ったかな？」
- 5・楽勝
「楽過ぎてつまらないわ」
「このジャンヌ様に負けはなし！」
- 6・辛勝
「こいつはちよつとてこずったわね…」
「ぎり勝利だった〜」
- 7・戦闘不能
「が…馬鹿な…」
「バツタンキユ〜…」
- 8・戦闘復帰
「フツツありがと」
「ふっか〜っ！」
- 9・エンカウント・奇襲
「油断した…！」
「な！？いきなり!?!」
- 10・アイテム使用・自分
「これの出番ね」
「アイテムつと」
- 11・アイテム使用・相手
「これを使いなさい」
「これあげるよ」

22・トラップ(毒ガス)
「くっ!毒ガス!」
「ケホケホ・・・」
23・トラップ(グルグル)
「目が回る」
「ほにゃ」
24・トラップ(ビリビリ)
「痺れる!」
「きゃあ~~~~!!」
25・トラップ(トランポリン)
「うわっ!」
「ふあっ!」
26・トラップ(爆弾)
「がああ!!」
「ぬあっ!!」
27・トラップ(タライ)
「いたっ」
「あいたっ」
28・トラップ(虫)
「キャアッ!虫が!!」
「虫が体の中にイイイイ!!」
29・トラップ(落下)
「きゃあああああ!!」
「落ちるウウウウウ!!」
30・トラップ(モンスター)
「モンスター!」
「出たわね!」
31・回復
「ありがとう」
「

32・自己回復

「癒しよ」

「回復！」

33・味方回復

「回復させるわ」

「みんな元気になって！」

34・ガード

「はっ！」

「ガード！」

35・ジャンプ

「はっ！」

「やっ！」

36・持ち上げ

「行くわよ」

「よいしょ！」

37・投げる

「喰らいなさい！」

「それ！」

38・コンティニュー

「ここで終わる気？」

「コンティニュー？諦める？」

39・死亡、GAME OVER

「残念ね」

「オウマイゴット……」

40・レベルアップ

「強くなったわね」

「レベルアップ」

41・待機

「・・・フウ」腕組をする（胸が強調される）

「・・・」頭に腕を組んで鼻歌歌う

42・待機2

「やだ、こぼれちゃいそう…」 服を直す

「次はどんなコスプレしようかな…」 衣装を取り出して眺める

43・必殺技

「私の力、思い知れ！」

「これが私の本気だよ！」

44・クエストクリア・ランクE

「最悪な結果ね…」

「うええ〜最悪じゃ〜ん」

45・クエストクリア・ランクD

「腑に落ちないわ…」

「この評価に一言申す！」

46・クエストクリア・ランクC

「普通ね。でもまだ上へ行くわよ」

「個人的にはもつとだよね…」

47・クエストクリア・ランクB

「いい評価ね。偉いわ」

「ランクBゲットだよ！」

48・クエストクリア・ランクA

「なかなかの評価ね。凄いわ」

「おお！ランクAゲットだよ！！！」

49・クエストクリア・ランクS

「凄いわね！お礼に私が褒めてあげるわ？」

「究極のランクSゲット〜〜〜！！！」

50・回す人

「リインさん、黒龍さん、白騎士君で」

「あとは真王にお気に入りしているみなさんで」 『

真王「次回はアリサをアシストにする。では」

〈今日のお宝鑑定〉

〈蜂蜜結晶〉

価値：4000円

見た目：蜂蜜味の飴玉

イーバメモ：豊かなハチの国で手に入れたしろものさね。蜂蜜を凝縮させて結晶として保存しているこの結晶は何年たっても中身はまだまだ味が残りそうだね。

ドルフィンメモ：蜂蜜がたまったものが結晶化したおいしいもの！蜂蜜を味わいたい子供達にお勧め！ただし虫歯になっても責任は取れません。あしからず。

〈バンディングボール〉

価値：1000円

見た目：スーパーボール（大）

イーバメモ：飛び跳ねるもんはいっぱいあるけどこいつの場合はちよっとばかり危険だね。あたしとしては軽く弾む程度の方がいいん

だがね。

ドルフィンメモ：地面でも壁にあたっても跳ねる跳ねる！過激サーカスに持って来いと思うならこれを持っていけ！しかし高く投げると反動がでかいため約10メートルでお願いします。

第六十九訓：ミツバチの蜜は甘い（後書き）

真王「次回はおかしなお菓子の世界」

アリサ「次回『お菓子を食べ過ぎると虫歯になる』 テイクオフよ」

第七十訓：お菓子を食べ過ぎると虫歯になる（前書き）

真王「今度のステージはお菓子の世界！果たして銀時はどうする？」

アリサ「リリカル銀魂を始めるわよ」

「スイートスイーツギャラクシー」

『甘いお菓子の家宝探し』

第七十訓：お菓子を食べ過ぎると虫歯になる

星船移動中、ヴィヴィオがなにか反応する。

ヴィヴィオ「なんだかいにおいがする」

銀時「ん？…言われてみれば確かに甘いにおいがするな」

ネプテューヌ「スイーツの匂いがするよ」

何処からか甘い香りがする。

イーバ「それはあの惑星群ギャラクシーに着いたからだよ」

イーバある場所を指差す。

そこにあるのはケーキやらビスケットやらアイスやらクッキーなど
甘いお菓子がいっぱいあった。

新八「エッ！？あのお菓子って本物ですか？」

宇宙にお菓子が浮いている事に驚きを隠せない新八。

他の人たちも同じである。

イーバは黙ってうなずく。

イーバ「さああなたたち、お宝探してきな！」

銀時達はとりあえずこのギャラクシーに降りた。

スイートスイーツギャラクシー

IBGMスイーツファクトリーギャラクシー by スーパーマリオ
ギャラクシー

(Super Mario Galaxy Music Extended
- Super Mario Bros. 3 -
O verworld 2)

ネプテューヌ「いいい~~~~~やつほおおおおおお
う~~~~~!」

ヴィヴィオ・ビビ・ジャンヌ

「いえ~~~~い!」

ネプテューヌ・ヴィヴィオ・ビビ・ジャンヌは勢いよくヨーグルト
のプールに飛び込んだ。

銀時「おいこら何やってんだ!この場所は俺の特等場だぞ」

浮き輪で浮きながらメガホンでネプテューヌ達に言う銀時。

神楽「ぬおおおおお!!!ゼリーのトランポリンあるうう
!~~~~~」

レーティア「弾力いいとしても埋まらないようにねー!」

神楽「大丈夫あブリュッ!」

レーティア「言ったそばから……」

神楽がゼリーの上で跳ね続けレフィアが注意するが、ズボツと埋まってしまう。

桂「ふははははははははははは！エリザベスよ！俺の豪快な滑りを見るがいい！」

アイスバーの上でスケートのように滑る桂とスキーで滑っているエリザベス。

神「…でかいなこのイチゴ」

グレイ「ああ、見事にでかいな」

プリニー（エトナ様をここに連れてきたら喜びそうツスね〜）

神様とグレイは自分の数倍はあるイチゴを眺め、プリニーはスイーツ好きのエトナの性格を思い起こしている。

新八「って待てコラアアアアアアアあ！！！！なにあなたたちこんなところで遊んでんだああ！！！！」

新八は遊んでいる銀時達にシャウトする。

銀時「何言ってるんだ新八、こんな贅沢三昧ギャラクシーの星着ギャラクシーたらもちろん遊ぶに決まってるよな？」

銀時の言い分のほとんどが同意する。

新八「だからってのんびりし過ぎだろ！！アイエフさん銀さん達にビシッと言ってあげてくださいよ」

新八はアイエフの向くが、

アイエフ「うん、不味くもない、これは天然のケーキかしら？」
ベール「ここで紅茶は良いですわね」

アイエフ、コンパ、ノワール、ベールはケーキを食べていました。
ちなみにブランはイチゴの上で本を読んでいる。

新八「何！？僕が間違ってるの！？僕の16年の人生が間違ってたか！？」

孤立してショックを受けた。

銀時「大体こんなところで危険なものなんてあるm「ザバー……ン……」……え？」

ヨーグルトプールから真っ白なクラゲモンスターが現れた。

ヨーグルゼリー「俺の縄張りで何やってんだコラ」

バリバリバリバリバリバリバリ！

銀時「アビヤア………！！！！」

ヨーグルゼリーの電撃で銀時は感電しました。
ちなみにネプテューヌ達はすでに脱出していた。
そして陸にほっぴり出された銀時。

ネプテューヌ「大丈夫？銀さん」

銀時「…俺…死んだ？」

アフロヘアーになった銀時は意識もろろうとしている。

コンパ「た、大変ですう!!!人工呼吸!」

レーティア「なら私が!・・・チューー!」

銀時「ん~~~~~!!!??」

コンパが人工呼吸の指示をするとレーティアが深く人工呼吸させる。傍から見ればレーティアが銀時にディープキスしているしか見えな
い。

新八は「羨ましくなんかない。羨ましくなんかないぞ...」と血の
涙を流していた。

銀時「分かった分かったからもういいっての!!」

銀時は起き上がる。

銀時「あゝ、全く、酷い目に会った」

ネプテューヌ「良かったね銀さん?」

ネプテューヌの声にビクツとなる銀時、振り返ると魔王が見えるよ
うなオーラを出しているネプテューヌがみていた。

銀時「いやいやいや、違うよ違う、これあれだよ、人為的な事故「
死ねやボケエエエエエエエエエ!!!」ぎゃああああああ
あああああああ!!!」

哀れ銀時、乙女を怒らせた罪は重い。

ちなみにレーティアとグレイと神以外の人たちはみんなガタガタ震
えていた。

銀時「まったく、何で俺がこんな目に、俺が何かしたか？」

アフロ黒焦げな銀時が言うが、ネプテューヌはっぴんとしている。周りに至っては、「自分の胸できけ」と言われるしまつ。

レーティア「ごめんなさいね。もしかしてあなたもしたかった？」
ネプテューヌ「へ？・・・い、いや別に私もしたかったわけじゃない
くて！／＼／＼／＼」

レーティアの冗談交じりな言葉にネプテューヌは一瞬啞然とし、顔を赤くして否定する。

アイエフは「やっぱこの子出来てるわね…」とネプテューヌを見てそう思った。

レーティア「ふふ、女は行動力なのよ。恋の発展頑張ってるね」
ネプテューヌ「は…ハア…」

とりあえずレーティアからアドバイスを貰ったネプテューヌ。

ビビ（女は行動力…なら私はなのはちゃんたちとイチャイチャ…グ
へへ…）

ビビは内心欲望なことを考えている。

しかしそれではただの変態おやじである。

ジャンヌ（なら私は全国にコスプレを…）

ジャンヌは相変わらずだった。

ちなみに途中で『**尊王**』を手に入れた。

チヨコレート溪谷

下がよく見えない溪谷チヨコケキに一本の橋（板チヨコ）がある場所で、

コンパ「高いですウウウウウウウウウウウウ！！！」

コンパが取り残されていました。

ネプテューヌ「コンパ！早くこっちに来て！」

コンパ「無理ですウウウ！私こう言つの苦手なんですよオオ！！！」

へたり込んで根をあげるコンパ。

銀時「大丈夫だ。お前が墜ちてもこっちは何の支障もないから」

コンパ「他人事みたいに言うなですうう！！！」

銀時「うぎゃあああああああ！！！！！」

銀時の他愛もない一言にコンパが注射器を投げて銀時の頭に命中。

コンパ「し、しし、仕方ないです…行くしかないです！」

コンパは勇気を振り絞って立ち上がり、橋を渡る。が、

コンパ「やっぱ怖いですウウウウ！！！！！」

ジャンヌが何かを見つけた。

ジャンヌ「シャマツシユ、フォームチェンジ、合言葉は深き潜水者」
シャマツシユ オーライマスター

ジャンヌがフォームチェンジすると、蒼いぴちぴちのボディスーツを身につけたジャンヌがいた。首の部分に？の数字がほられている。

ビビ（ちょ！それセインの戦闘服じゃん！！）
ジャンヌ「能力発動、ディープダイバー」

セインの使う能力で潜水するジャンヌ。
って言うかゼリーって無機物だったっけ？

ジャンヌ「取ったど〜！！」

ジャンヌは2つ実が付いた食べ物を持って出てきた。
後に『アイノミ』と呼ばれるお宝を。

ケーキキングタワー

最後にケーキのタワーの場所に着いた銀時達。

ネプテューヌ「いかにもダンジョンがありそうな雰囲気だね」
銀時「んなこと言っていないで入るぞ」

銀時達はとりあえず入った。

ケーキングタワー・ダンジョン

ダンジョンの中に入った銀時達ですが、そこでトラップがいっぱい襲いかかってきました。

バムケーン円盤岩の襲撃、フルーチェの水攻め、飴玉の岩なだれ、コーラの滝つぼなどおいしい罠が襲いかかりましたが、何とか切り抜け、頂上までたどり着いた。

銀時「あゝ、ひでえ目に会った…と」

ネプテューヌ「もう体中ボロボロだよ」

罠に苦戦したせいで体力がボロボロになっている銀時達。

ヴィヴィオ「わあゝ、見てみて！いい景色だよ」

プリニー「遠くでゼリーマウンテンが見えるッス」

タワーの頂上で景色を眺めるヴィヴィオとプリニー。

するとアイエフは真ん中にある一本の白い棒を見つけた。

アイエフ「何かしらこれ…お宝のようだけど…」

アイエフが眺めていると、

銀時「こいつもお宝でいいんだろ？だったら持って帰ろっぜ」

銀時がそれを持って後を去る。
アイエフは息をこぼして後を追いかけた。

『生命の炎』を手に入れた。

グミグミ平原

ここでは地面も植物もみんなグミ。
そこでレーティアとジャンヌがいる。
銀時達に先に戻つといでと言ってここにいるようだ。

レーティア「…こんなに楽しいのは初めてかしら」
ジャンヌ「うん、彼らと一緒にいるだけで楽しく思うな」
レーティア「転生前はなかったわねこーいうの…」
ジャンヌ「うん…」

思い起こすのは自分達が転生前までのこと。
つまらない学校生活。孤独なる日常。そして少女時に起きたあの出来事。

レーティア「っ…!」

ドムッ!

苛立ちを覚えてレーティアは隣にあるグミの木を殴った。

グミの木は殴られて反った後元に戻って木の実が墜ちた。

レーティア「…今でも虫唾が走る思い出ね…」

怒りの感情を表すレーティア。

脳裏にある記憶には、虐待する父親、必死で虐待を止めようとする母親、泣き続ける妹、そして血だらけで虐待を受ける姉。

バチバチバチバチ！

レーティア「…アアアアアアアア！！！」

怒り爆発して大きな魔力玉を作り出して怒り任せで投げ飛ばす。遠くで爆発した。

レーティア「ハア…ハア…」

息を荒くするレーティア。

今にもまた放つ雰囲気を出していると、ジャンヌが抱きついてきた。

レーティア「!?!?!?…水華？」

ジャンヌ「大丈夫だよ。お姉ちゃんには私がいるもん、だから、一人で抱え込むより私といてもいいんだよ？照奈お姉ちゃん」

2人は前世の名前を呼び合い、抱き合った。

レーティア「ごめんね、水華」

ジャンヌ「うん…」

星船

ネプテューヌ「ねえ！さっき爆発が聞こえたけどなんなの？」

帰ってきてネプテューヌが一言聞いてきた。

おそらくレーティアのアレだろう。

レーティア「ゴメン、ちょっと魔法の訓練してたから」

ジャンヌ「私は付き添い」

ネプテューヌ「そうなんだ。次出発するらしいから行こうよ」

レーティア「分かったわ」

訳を言ったあと、ネプテューヌは今後のことを言い、レーティアは承諾する。

レーティア「行きましょ」

ジャンヌ「うん」

レーティアとジャンヌは手をつないで星船へ乗り込んだ。

余談ではあるが2人を待っていた頃銀時達は甘いもの食べすぎたせいで虫歯に悩まされたことは言うまでもない。

『莓王』を手に入れた。

『甘玉』を手に入れた。

『アイノミ』を手に入れた。

『生命の炎』を手に入れた。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

アリサ「今日のアシストはこの私アリサ・バンニクスよ、感謝しなさい」

銀八「態度でか！何この生意気な子！」

真王「それがアリサだからだ」

アリサ「誤解を招く発言は止めてくれる！？」

真王「この際無視しろ」

銀八「だな。んじゃペンネーム『黒神』さんから行くぜ。『質問し

ティアナのお仕置きの『スターライト・ブレイカー』を受けた黒神は黒こげとなった。

ちなみに真王さんからもらった『レインボー・スター』はフェイトに『リリカル銀魂ゲスト杯』で壊されたので、今は修正中。『相変わらず腹黒い作者だな』

はやて「だ、大ピンチや！このままじゃ本当に出番が盗られてしまうわ！あ、でも狂乱編はかつこええからいいとして？」

アリス「・・・『黒神』あんた永久に廊下に立ってなさい！」

真王「八つ当たりだな。自分恋が実ってないから。次はペンネーム『鳴神 ソラ』さんだ。『マリオ』と言う訳で良い点でやるけど…流石に溶岩は無理だな…毒沼を100メートル泳げなら今なら簡単に出来るが…」

ルイージ「何で!？」

マリオ「幼き頃にヘキサさんにやって見ろと言われて実際にやった。その後に毒状態になって師匠によって回復、今では並大抵の毒も平気だ」

フォックス「それにしても出たな八チキノコ」

マリオ「他にも出るかね〜色んなアイテム」

オリマー「もしくは私の方の強化アイテムだね」

ルイージ「それにしても桂さん」

ネス「何でバツタ；」

マリオ「質問『マリオギャラクシーに出たアイテムは全て出るのか？』」

オリマー「私も質問『ピクミン2で出た強化アイテムは出るのかな？』」

フォックス「俺も『ギャラクシー編で他にもイーバとドルフィン号以外に新しいキャラを出す予定はあるのか？』」

次回を楽しみにしてます 『1つ目と2つ目はすべてとは限りませんが、出ることは期待してください。そして3つ目ですが、次回で新キャラの登場予定』

銀八「んじゃ『鳴神 ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

アリス「えつと次はペンネーム『リイン』さんからね。『どうも！！ 更新、お疲れさまです！！』」

リュマ「初めまして。この駄作者、リインの書く作品に登場します、理のマトリアル、星光の殲滅者、“リュマ・シユテイル”と申します」

お、おい……………お前がなんでここに？

リュマ「レヴェッカという方から、代役を任されまして……………不肖このリュマ、はせ参じた次第です」

さ、さいですか……………

リュマ「さて……………ご主人様（グレイの事）、ご無事のように
よりです。無事、こちらに帰還してくる日を、心からお待ちして
おります」

さて……………他に何か言う事はありますか？

リュマ「そう、ですね……………では、こんな質問を」

・ご主人様グレイのご活躍が少ない気がいたしますが、気のせいでしょう
か？

・ご主人様があの変態（ビビの事）の事をあれだけ気にしているの
かが不可解で仕方ありません

リュマ「これは要望ですが、ご主人様の活躍の増やして下さい」

こらこらこらこらアアアアアアアアツ！！！！！！ 出させて
いただいているのだから、そういった要望とか言うなッ！！！！！！
っていうか、グレイの事ばかりかよ！！！！！！

リュマ「当然です。ご主人様以外の事などどうでもいいです。まあ、
ご主人様が命じるのであれば、気にしますが」

ウチにはまともな精神をした奴がないのか？

リュマ「いないのでは？ 他のマテリアル達も、ご主人様一筋でありますから」

……………もう、いいや

では！！ 次回も楽しみにしていますので、執筆、がんばって下さい！！！！ 失礼します！！！！

リュマ「失礼いたします」『…：どんだけあの人に忠実なのよ…』

真王「彼の出番が少ないって？それは気のせいだ！！（心からの叫び）あとビビを気にするのは肉親の一人だからだ。心配してこそ兄なんだ」

グレイ「止める、少し変な気分になるだろ」

アリス「（ツンデレ？って私じゃないわよ！！）とりあえず『リイン』さん。廊下に立ってなさい」

真王「そして『鳴神ソラ』さんからバトンだ！」

『バトンの上から順にサトシとオリマー』

0・ダンジョン突入

「行くぜ」

「慎重に行こう」

1・エンカウント・通常

「来たぞ！」

「相手になるよ」

- 2 . エンカウント・格上
「強敵だなこいつ」
「強敵か、だが弱点を突けば」
- 3 . エンカウント・格下
「普通のより下だな」
「早めに済ませよう」
- 4 . 勝利
「よっしゃあ！」
「倒せたな」
- 5 . 楽勝
「楽勝だぜ！」
「今回は素早く終えたな」
- 6 . 辛勝
「なんとか勝てたな…」
「ふう」
- 7 . 戦闘不能
「ごめん…」
「すまない私の体力が…」
- 8 . 戦闘復帰
「サンキュー！」
「ありがとう、これで頑張れるよ」
- 9 . エンカウント・奇襲
「うわあ！いきなりか!？」
「奇襲か！気を付けるんだ」
- 10 . アイテム使用・自分
「これだな」
「使用させて貰うよ」
- 11 . アイテム使用・相手
「これを！」
「これを使うんだ」

12・宝箱・普通

「アイテムだ」

「アイテムをゲットだ」

13・宝箱・レア

「珍しいのゲット」

「これは…珍しいのだ」

14・宝箱・レジェンド

「伝説のアイテムゲットだぜ！」

「まさか伝説級のが手に入るとは」

15・仕掛け（扉）

「おわっ！」

「よいつしょ」

16・仕掛け（オブジェ移動）

「よいつしょ！」

「よっほ！」

17・仕掛け（スイッチ）

「何かのスイッチか？」

「押さないと進めなさそうだな」

18・コンボリンク

「連続で行くぜ！」

「攻撃を続けさせて貰うよ」

19・バトンタッチ

「任せたぜ！」

「頼んだ」

20・トラップ（トゲ）

「いてっ！」

「！！」 足を押さえてる

21・トラップ（ヤケド）

「あっちゃああ！！！」

「これは火傷のか？」

22・トラップ(毒ガス)
「うつ、気分が…」
「毒ガスか…」
23・トラップ(グルグル)
「目が回る」
「おお、どつちに進めば良いのだろうか？」
24・トラップ(ビリビリ)
「どわわわわ!？」
「ビリビリのか…」
25・トラップ(トランポリン)
「どわっ!？」
「わたたたたた!？」
26・トラップ(爆弾)
「うわあああ!！」
「爆弾!？」
27・トラップ(タライ)
「いてっ」
「何でタライが？」
28・トラップ(虫)
「虫か？」
「虫が出て来たね」
29・トラップ(落下)
「うわあああああ」
「どこに行くんだ!？」
30・トラップ(モンスター)
「モンスターか!？」
「モンスターがいきなり出て来た!」
31・回復
「はあ、スッキリするぜ」
「体力回復だな」

32・自己回復
「回復しないと」
「やばいやばい」
33・味方回復
「大丈夫か？」
「今回復してあげるよ」
34・ガード
「防御だ！」
「ガードするよ！」
35・ジャンプ
「とう！」
「たっ！」
36・持ち上げ
「よいしょ！」
「持ち上げるよ！」
37・投げる
「いっけえ！」
「それ！」
38・コンティニュー
「此処で諦めるのか！？」
「どうするんだい？」
39・死亡、GAME OVER
「くそ」
「むう」
40・レベルアップ
「よっしゃ！レベルアップだ！」
「レベルアップしたよ」
41・待機
「運動しないとな」 準備体操している
「ふう」 寝転がっている

42・待機2

「ふわぁ…」あくびしている

「させ、どうしようかな…」腕を組んでいる

43・必殺技

「一気に決めるぜ！」

「行かせて貰うよ！」

44・クエストクリア・ランクE

「最低ランクかよ…」

「うゝむ」

45・クエストクリア・ランクD

「Dランクだな」

「まだまだだな」

46・クエストクリア・ランクC

「普通だな、まだまだ行こうぜ！」

「上を目指したいね」

47・クエストクリア・ランクB

「よっし！Bランクだ」

「Bに来たか」

48・クエストクリア・ランクA

「Aランクだ！」

「Aか…」

49・クエストクリア・ランクS

「よっしや！！Sゲットだぜ！」

「よし！この調子で行こう」

50・回す人

「ボッスンさんや葉月さんに回すぜ！」

「飯面3とハルルさんにバトンを回すよ」

『こんな感じで』

真王「次回はずかになります」

〈今日のお宝鑑定〉

〈莓王〉

価値：1200円

見た目：大きなイチゴ

イーバメモ：ケーキの飾り付けにはイチゴがいつでももんだろ？しかもこのイチゴはイチゴ界の王様に値するからこの名前が付いたんさ。味も保証できそうだがね。

ドルフィンメモ：イチゴ界の王様！総じて莓王！これだけ大きければ巨大ケーキ作りは間違いなし！そのケーキを作ればの話ですが…。

〈甘玉〉

価値：500円

見た目：ドロップ飴

イーバメモ：最近の若者は飴が大好きだったね。私としてはこんなもんより酸っぱい飴がいいんだがね。

ドルフィンメモ：舐めて嬉しい素敵な飴玉。舐めて舐めて幸せゲット。虫歯になったら逆戻りですが。

くアイノミく

価値：800円

見た目：チエリー

イーバメモ：一つの枝に二つの木の実、まるで何か繋がりとあると言う意味がこもっていると私は思うね。若い子にはこれがあれば恋でも実るかね。

ドルフィンメモ：恋愛を語るにはこれが一番！好みで愛の力を試すとき！って言うか機械である私が恋なんて実らないけどね。

く生命の炎く

価値：600円

見た目：ろうそく

イーバメモ：ケーキタワーの頂上で発見されたお宝さね。こいつに

炎をともしたらなんだか生命のありがたみを感じたね。私の様な老体にはもってこいじゃないかい？

ドルフィンメモ：生命のありがたみを教える幻の一本！ご老人の方々に長生きさせるにはもってこいの代物！災害時に明かり代わりにしてもオーケーです。

第七十訓：お菓子を食べ過ぎると虫歯になる（後書き）

真王「次回は廃墟の宇宙ステーションである女性と出会うお話」

すずか「次回『改造されても人は化け物じゃない』テイクオフ！」

く予告

ナレーション「あるゲームの生き残りがいるようだが……」

第七十一訓：改造されても人は化け物じゃない（前書き）

真王「ここで新キャラ登場。そしてネプテューヌが切れる!？」

すずか「リリカル銀魂スタートです」

「破壊された宇宙ステーション」

『暗闇の奥の化け物』

第七十一訓：改造されても人は化け物じゃない

銀時達が星船で移動中、コンパが奇妙な物を見つけた。

コンパ「み、みなさん！あれを見るですー！！」

銀時「あ？いつたいなにがイデッ！？」

寝ていた銀時が起き上がると硬い金属が額にあたった。

新八「な、なんですかあれ！？」

ヴィヴィオ「パパ、大きな独楽が浮いてるよ」

アイエフ「ヴィヴィオ、あれは宇宙ステーションって名前よ」

巨大な宇宙ステーションに新八たちは驚き、ヴィヴィオは大きな独楽と勘違いしているが、アイエフが訂正させる。

神「しかし…なんか変じゃね？」

ノワール「確かに変だわ」

グレイ「ああ、なんだか“襲撃を受けた”みたいだな…」

しかしとところどころボロボロになっている宇宙ステーションを見て怪しむ神とノワールとグレイ。

イーバ「…いやな雰囲気しかないねえ」

イーバはそう言いながらも接近した。

廃墟された宇宙ステーション

イーバ「気をつけていくんだよ、なにがあるか分からないからね」
ネプテューヌ「行ってきま〜す」

ネプテューヌ達は中へ潜入した。

中は少し不気味で、しかも、

アイエフ「なんだか血の匂いがするわ。それに変なもの…」

血と変なにおいが漂っていた。宇宙なのに。
すると目の前に瓦礫の山が道をふさいでいた。

ネプテューヌ「これちょっとやさっとじゃ無理そうだね」

銀時「それに吹き飛ばしたらなんかこう、大爆発的な展開が待っている気がする…」

レーティア「だったら私の出番ね」

目の前の瓦礫に悩んでいると、レーティアが一つのカギを持って前へ出る。

ビビ「…カギ？」

ジャンヌ「ってお姉ちゃん出すの？」

レーティア「仕方ないわよ。この子しか力持ちいないし」

ビビは啞然とし、ジャンヌは心配そうな顔して聞くが、レーティアが困った顔して答える。

レーティア「まあそれはいいとして、開け！金牛宮の扉！タウロス！」
タウロス「ンモオオ~~~~！！！」

レーティアがカギを小さな魔方陣に刺すと大きな魔方陣から二本脚に海ばん履いて大きな斧を装備している牛・タウロスが現れた。

全員「牛が出たああ~~~~！！？」

グレイ「なんだあの牛は？」

ビビ（フェアリーテイルのタウロスう~~~~！？って待てよ？この後のパターンって）

全員タウロスが出てきたことに驚き、グレイは不思議そうに見て、ビビはフェアリーテイルの登場するタウロスだと判明。

タウロス「ンモウ！レーティアさん今日も立派なナイスバディですなあ」

全員「セクハラ発言っ！！！？」

ビビ・ジャンヌ「やっぱし……」

出てきていきなりレーティアにセクハラ発言するタウロスに驚く全員。

ビビとジャンヌに至ってはやっぱりかため息を吐く。

レーティア「はいはいそんなことはいいからあの瓦礫吹っ飛ばしてくれない？」

タウロス「あれですか？いいでしょう！レーティアさんのナイスバディのために一肌脱ぎますよオオ~~~~！！！」

レーティア「ナイスバディはいいわよ……」

タウロスが興奮気味で瓦礫を撤去するがナイスバディの一言でレーティアは突っ込む。

その後瓦礫は撤去されネプテューヌ達は進んでいく。

しかしタウロスはなぜか残っている。

理由は簡単、ベールとグレイにくぎ付けになっているからだ。

レーティアは強制閉門させようかしらと思ったがこの先役に立つかなと思ったので止めた。

するとビビが近寄ってきた。

ビビ「あの…タウロスがいるってことは他のも…」

レーティア「ええ、星霊系ほとんど持つてるわ」

ビビはなるほどと納得する。

???「シギヤアアアアアア!!!」

すると緑色の触手モンスターが現れた。

そしてすぐにレーティアに襲いかかるうとしていた。

タウロス「レーティアさん危ない！」

タウロスが事態に気付いて触手モンスターの口を止めた。

レーティア「ありがとうタウロス！後でたっぷり私の体使ってもいいわよ」

タウロス「ハイお任せください!!!ンモオオオオオオ~~~~~」
~~~~~!!!」



そんなことよりもお前の足元になんか落ちてるぞ。

銀時「え？あ、ホントだ」

銀時は足元にあるレポート番みたいなものを拾う。

『今日の報告書 × 月 日（現在の6か月前のようだ）

ついに我々の研究が成功した。これで新たな時代に第一歩を踏み出せる。早速被検体S・Nに新しい薬物を……………」

その先は血で汚れて読めなくなっている。

ネプテューヌ（被検体…）

内容を見てある実験の被検体として生まれたネリアのことを思い出すネプテューヌ。

気を取り直して触手モンスターが逃げたところを追った。

サイエンスドーム

大きなドーム状の部屋に着いたら、中央に触手モンスターの核的なのがいました。

銀時「こいつか…」



「????」「何の用?」

頭に響くような女性の声が聞こえた。

グレイ「!?こいつは!」

ビビ「声だけでこんな威圧感!」

レーティア「これがここにいた人たちが作り出した」

ジャンヌ「被検体S・Nと呼ばれた存在…」

声による威圧で身構える転生者組。銀時達も同じだ。

「????」「あんた達はここにいる奴らじゃないみたいだけど。しかしなんでここに来たの?」

銀時「あゝあれだ。一応気になってここに来ましたゝなんて?????」「……………」

奴の質問に銀時が適当に答えると、モンスターの体が徐々に変化していき、人の形になった。

踵あたりまでいきそうな紅色のロングヘア、言うなればアルカナハートのシャルラツハロートそっくりの人物だった。

ビビ（あれってアルカナハートのシャルラツハロート!?…………いや、原作のじゃないね）

ビビは目の前にいるシャルラツハロートそっくりの人物を見て本人じゃないと推測する。

「????」「…そんなにチャランポランな大人は初めて見たけど。あなたの名は?」

銀時「人に聞くときは自分からって親から言われなかったか?」

「????」全く教わってない。∴まあ教えるけど」

銀時の言い分に女性は普通に答える。

シャル「あえて言うなら私はシャル・ノイシユバンシユタイン。長  
いからシャル・ノイシユバンシユタイン様でいい」

新八「一文字増えてんじゃねえかッ!!!」

とりあえず女性・あるかが自己紹介するが一文字分増えてるので新  
八が突っ込む。

シャル「ところであなたたち私の手を引き裂いたでしょ?」

シャルの言葉にみんな首を傾げた。

シャル「ほら、大きな触手が牛に引き裂かれるシーン」

全員がああ、と思いつく。

シャル「・・・そんなわけであなた達の強さ見せてくれない!?!」

あるかが右腕を槍状の触手に変化させて銀時に襲いかかる。

銀時は驚いて叩きつけようとしたら、

ブウンッ!!スカッ!

銀時「あれ?」

当たる寸前に触手が銀時の木刀の軌道から避けたのだ。  
もう一度来ると思ったらシャルは元の手に戻した。



ネプテューヌ「人間を…同じ人間でありながら殺し合わし、拳句その人物を実験して道具のように扱うなど、言語道断だ!!!。なぜ人間は過ちを繰り返す!!!?なぜ人間は命を大切にしない!!!?世界も世界だ!!!なぜそんな人間達をそんなにほうっておけるんだ!!!」

世界に対しての憎しみの声が全部に響かせた。

神(あいつ昔何かあったか?…いや違うな。あいつの中にある何か が作用しているかもしれんな)

神はネプテューヌを見て怪しく思っている。

ノワール「ネプテューヌ!!!」

ネプテューヌ「っ!?!…私一体?」

ノワールが叫ぶとネプテューヌはなにが起こったか理解できない顔 をしている。

ネプテューヌ(今のつて…もしかしてあの時の!?)

ネプテューヌが思い起こすのは『第五十八訓：ほつたらかしにされ たら誰だつて怒る』でダークソウルに闇を吸い取られる部分からじ やないかと推測する。

シャル「…今のはなんだかしらないけど、私の怒りを分かってくれ たみたいでよかった」

ネプテューヌが怒りを理解してくれたことに安心するシャル。

シャル「…ところでなにをここにへ来たの？」  
新八「えつと実は…」

少年説明中…

シャル「成程、宝探しねえ。…なら私も参加していい？」

シャルが納得した後いきなりこんなこという。

ネプテューヌ「なんで？」

シャル「私はこうなる前は結構強いからね。って言うか戦いがある  
と思うとワクワクするんだ。いいよね？」

ネプテューヌ「へえ、私はいいけどみんなは？」

銀時「まあいいんじゃない？」

レーティア「異論はないわ」

タウロス「ナイスバディのあなたのためならば！」

ジャンヌ「私もオツケイ」

グレイ「なんでもいい」

ビビ「私もいいよ」

神「面白そうだから採用」

ほとんどが賛成した。

シャル「そうか、嬉しい。あ、出来ればもう一人入るよ」  
「????それは俺のことかシャル」

シャルが言うと、男の声が聞こえた。

そしてニードレスのアダム・ブレイドそっくりの人物が現れた。

ギルシア「俺はギルシア・アダマイド、ただのしがない神父だ」

新八「いやいや、普通神父はこんな宇宙にいませんよ……」

ギルシアは自己紹介すると新八が彼が宇宙にいることに突っ込む。

ギルシア「うっせえな、気付いたらこんなところに落とされたんだよ」

新八の言い方に癪に障ったのかギルシアが文句を返す。

ジャンヌ「落とされたって……」

ビビ「あなたまさか……」

ジャンヌとビビはギルシアの正体を推測する。  
するとギルシアが2人を見た途端、

カラカラカラカラチャリーン！  
カラカラカラカラチャリーン！  
ババーーーーー！

ギルシアの両目がスロットの様に回転し、両目にハートが出ては口から大量のコインが滝のように流れた。







銀時達は星船へ帰った。  
途中変な物を拾って。

そしてドームにはグレイ、ビビ、レーティア、ジャンヌ、シャル、  
ギルシア、そして神が残っている。

グレイ「で、単刀直入に言うがお前らは…」

ギルシア「転生者ってんだろ？」

グレイがギルシアに聞くとギルシアは自白する。

グレイ「…俺らが転生者だと気付いたのか」

ギルシア「俺は獣ってわけじゃないが一応転生者の匂いが分かるぜ」

鼻をトントンと指差すギルシア。

シャル「ついでに言うとも私も転生者なの」

ジャンヌ「え？じゃあの話…」

シャル「イヤあの話は本当よ。転生して1カ月たった時白衣の奴ら  
が見てたのか私をさらってここにいてるってわけ」

シャル自ら転生者と答え、ジャンヌが疑問を口にするるとシャルが真  
実を言う。

シャル「そのおかげで死ねないし自殺も出来ない。寿命で死ぬるけ  
どね」

レーティア「…ところであなた達に能力とかあるの？」

レーティアが聞く。

シャル「変身以外だとニードレス能力オールスターだね」

ギルシア「俺は他人の力を覚えることだ」

神「ギルシアはまんまだな」

ギルシア「うるせえ、そんなことよりビビたん！ジャン又たん！俺がこれでもかというくらい抱きしめて…」

グレイ・レーティア・シャル・神

「断固阻止」

ギルシア「チッ」

ギルシアが手をわきわきさせてビビとジャン又の抱きしめようとしたら、背後に黒い気を放つグレイとレーティアとシャルと神がいてギルシアが舌打ちする。

…まあそんなこんなで『シャル・ノイシュバンシュタイン』『ギルシア・アダマント』が仲間になった。

ちなみに『人面機』と『レッドマン』を手に入れた。

が、なぜかこの2つはお宝判定に入らなかった。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

すずか「はじめまして、今回アシスタントをする月村すずかです」

銀八「礼儀正しい！そんなじゃ行くぞ。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんからだ。『マリオ』レーティアとジャンヌにそんな過去が…」

ルイージ「それにしてもおかしのギャラクシーだったね」

スネーク「そうだな…それで虫歯になってるな…」

ピット「転生者の皆さんに質問『銀さんのバリアジャケットはどうでしたか？』」

スネーク「シルバーブレイドの製作者三人に質問『自分達の作ったシルバーブレイドがこちらのコラボでdバージョンアップしたがその感想は？』」

ネス「レーティアさんに質問『好きなタイプは？』」

リュカ「何でそれ？」

次回を楽しみにしています 『んじゃお答えしましょう』





銀時「主役交代だ！？銀魂の主人公は俺で十分だアアアアアアアアア！！！」

新八「オiiiiiiiiiiii！！なんだよこの僕に対する嫌がらせ！！」

真王「『亀鳥虎龍』さん、廊下に立て。次はペンネーム『ボツスン』さんから。『質問です。他にも他作品は出ますか？』一応どんどん出すつもり。『ボツスン』さん、初めての質問ありがとうございませす」

銀八「次はペンネーム『月光閃火』さんからだ。『ども…月光閃火だ。』」

輝刃「しかし…ビビ達にずいぶんな言われ様をされたな…。」

ああ…ま、その所は心配ご無用 どの罰も、やり終えたら俺謹製のスイーツ盛り合わせをご馳走するからな…。

輝刃「…お前の神経は相当凶太いな…（汗）。とりあえず、質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1. グレイに質問…元・オトコであるグレイだが、正直言って…女性の容姿になって大変な事はあるか？

あゝ…確かに、性別によって得手不得手がはっきり違うからな…。俺がもし女性の容姿になってしまったら…多分、下のスーソー感が少々気になるかもな…（汗）。次は俺からだ。

2. ジャンヌに質問…コスプレ好きだと聞いたけど、もしかして男

装とかもした事あったりする？もしそうだとしたら、そんな中でもっともしつくりきたモノをベスト3形式で教えてくれ。

輝刃「ふむ…なるほど…。というか…閃火も一時的コスプレをしたいなあ…って時期があったが、今はどうなんだ？」

あゝ…今は昔ほど熱は入ってねえが、『機会があったら一度はやってみたいな…。』ってぐらいは思ってるぜ…。っつーか、サイズ合わねえのが大半だろうなあ…（汗）。『ズバリお答えしよう』

グレイ「やたらとキモイ奴らがナンパしてきたり着替えの時だな…」

ジャンヌ「男装もOKだよ。特に気に入ったのは1位から順にアーチャー（FATE）、ギルガメッシュ（FATE）、クラウド（FF）かな」

すずか「そんなに…。『月光閃火』さん廊下に立つてください」

銀八「ラストお、ペンネーム『支配者』さんからの質問だ。『支配者』ピクミンみたいにお宝集めですか…いいですね」

銀時「なんか任天堂のゲームネタが多いよな」

支配者「そうですね。では質問です。

1つ目の質問

よく考えたら、アイエフの声とはやての声って一緒ですよ。声優ネタやらないんですか？

2つ目の質問

アイエフの声ははやてと一緒にですけど桂の事が気になったりしないですか？

3つ目の質問

アイエフはSかMどちらが好きですか？必ずどちらか答えてください（黒笑）

ではこの辺で「『」

真王「私は今感想を見てそうだったと思いました。一応そのネタは考えておきます。アイエフは桂の事を気にしません。しかし3つ目はどっちでもありません。てか失礼。『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「ハイんじゃ次はシャルにでもアシストするか」



第七十一訓：改造されても人は化け物じゃない（後書き）

真王「シャルとギルシアを仲間に入れたネプテューヌ達。そして次回はミッドチルダを襲ったあの怪獣が現れる！」

シャル「次回『いきなりデカイボスはちょっと危険』テイクオフよ」

## 第七十二訓：いきなりデカイボスはちょっと危険（前書き）

真王「銀河編の始めから私のオープニングを作りました。ディスガイア曲『ラストエンゲージ』をイメージしてください。ではスター  
トだ！」

（ゲームバの溶岩帝国）

『対決！宇宙魔王ゲームバ』

## 第七十二訓：いきなりデカイボスはちょっと危険

シャルとギルシアを仲間に入れて星船で移動中、

ジャンヌ「でさ、その男がしつこいもんだから思いっきり足で大事なアレを潰してやったのよ」

ビビ「うわえげつないわね…。で、その男どうなったの？死んだの？」

ジャンヌ「一日中悶絶してたって」

ビビ「うわ〜、痛いはずだよね〜」

ジャンヌ「ね〜」

ビビとジャンヌが楽しい話し合いをしている。

ギルシア「ハアハア、いい絵が出来てるぜ…」

レーティア「それはいいけど鼻血しまいなさい」

シャル「てか何処からカメラ持つてるの？」

鼻血出してカメラで2人を撮ってるギルシアにレーティアが注意しシャルが突っ込む。

ガクンッ

すると突然星船が止まった。

ネプテューヌ「ど、どうしたのイーバさん？」

イーバ「…ここから先にとつもない雰囲気を感じるね」

表情が強張っているイーバ。



ネプテューヌ「このパネル動くよ！」

ビビ「お、落ちる〜！！」

レーティア「これって進まないといけないのかしら？」

シャル「スネークブロックはついて行かないと落ちちゃうよ」

こうして進むうちに終盤あたりまで来た。

ネプテューヌ「そろそろ着いたかな？」

新八「早く進んだ方がいいですね」

???「そう言うわけにもいかないな」

銀時達が進む先に長方形で不気味な顔をした石の怪物が現れた。

ドッサン「貴様らはこのドッサン様が潰してくれる！オリヤっ！！」

ドッサンがうつぶせに倒れてきた。

銀時達は慌ててかわす。

それを見たシャルが駆け出した。

銀時「おいどうするんだ？」

シャル「私この手の敵のパターンが読めるからね。こう言う倒れた敵には、こうするのよ！！」

高く飛び上がってドッサンの背中にあるしるしに向かってドロップを繰り出した。

それを受けたドッサンはばらばらに砕けた。

全員揃ってあっけな、と思った。

シャル「さてと、次はアレね」

そう言つてシャルが見たのは大きな扉と宙に浮く金色の隕石。  
扉には鎖が巻かれている。

シャル「あの隕石を使つて鎖を壊せば・・・」

ギルシア「なら俺の出番だな。フラグメント！パワー！」

隕石を指差して鎖を壊すよう指示するシャルにギルシアが能力を使つて鎖をぶち壊した。  
そして扉が開かれる。

銀時「ここの大將とのご対面だな」  
ネプテューヌ「気を引き締めてね」

巨大玉座の間

銀時達とはある場所に着いた。

全員「なっ！！？」

そしてある存在を見て驚愕した。  
それはミッドチルダを襲つたあのカメラそっくりの怪獣だった。

IBGMクツパの対面byスーパーマリオギャラクシー  
(Super Mario Galaxy Music Extended - Confronting Bowser)



に浮き上がる。  
そして上にある星に着地する。

IBGM強大なるクツパ大王byスーパーマリオギャラクシー2  
(Super Mario Galaxy 2 Music Extended - Bowser)

ガメーバ「喰らうがいい！」

右手に不気味なオーラを纏ったガメーバがパンチを繰り返した。  
パンチが当たったと同時に衝撃波が来たがジャンプでかわした。

ギルシア「今度はこっちから行くぜ！パワーのフラグメント！オリヤアア！！」

ギルシアは反撃に能力を使ってガメーバに攻撃した。

ガメーバ「ぬうう・・・何か頭に衝撃が走ったぞ？」

頭をポリポリ掻くガメーバ。

新八「効いてない!?!」

シャル「あいつの皮膚硬すぎよ。もっとこつこつ何かぶつけるものでもあればいいけど...」

新八が驚き、シャルが分析している。

ガメーバ「ハアアアアア!!」





銀髪などころは変わらないが、なぜかショートで黄色いリボンにどこかの学生の服と思わせる服装だ。

ジャンヌ「あ！その手があった！シャマツシユ！フォームチェンジ！合言葉は力の不要者」

ジャンヌはビビの姿に自分も同じ格好になる。

ビビ「行くわよ！ビビちゃ~~~~ん・・・」

ジャンヌ「こつちも！ジャンヌちゃ~~~~ん・・・」

ビビ・ジャンヌ「パ~~~~ンチ！」

ビビとジャンヌはただ殴っただけで隕石を飛ばした。

レーティア「しょうがないわね。バトンモード！」

ファスシニム オーケイ

レーティア「いくわよ！ハアッ！！」

レーティアがファスシニムをバトン型に変えて人間とは思えない脚力で隕石を蹴り飛ばした。

ガメーバ「ウグボワアアアアアアア！！！」

隕石をぶつけられて悲鳴をあげるガメーバ。すると口から何かキノコが出た。

ガメーバ「なっ！？まずい！」

ガメーバは取りに行こうとしたら、途中で縮んでしまった（それで

も銀時達より大きい)。

ガメーバ「又オアアアアア!!ガッ!グオツ!」

そしてそのまま落下して地面に落ちた。

ガメーバ「ぬうう…しくじったか。さすがは勇者、侮れん奴らだ」

ガメーバは起き上がってそう言うが、まだ銀時達を勇者だと思い込んでいる。

ネプテューヌ「先に言うておくけど、私達は勇者じゃないよ」

ネプテューヌが代表に行った。

ガメーバ「……………はあ?」

ガメーバはあつけにとられたかのような顔をする。

ガメーバ「…………勇者じゃなかったらあんたらはなんだってんだ?」

銀時「ただのしがない万事屋とその一行です」  
ギルシア「おい、今俺達を入れただろ」

ガメーバが聞くと銀時が答えるが、一部余計な物にギルシアがジト眼で見る。無論神と転生者組でもある。

ネプテューヌ「そんなんことよりも、よくもミッドチルダを滅茶苦茶にしてくれたね!このつけを倍返しにしてやる!」

ネプテューヌがエックスセイバーを突き付けて言う。



「！」

ネプテューヌがエックスセイバーを握りしめて言う。

グレイ「フン、そんな気合があるなら十分にやっていけそうだな」

グレイは他愛なく言葉を出す。

ネプテューヌ「・・・へえ」

するとネプテューヌがグレイに関心を漏らす。

グレイ「？なんだ？」

ネプテューヌ「いや、ただグレイさんにはそんな一面があったんだなって」

グレイ「んなつ！？」

ネプテューヌに一言にグレイが驚く。

ネプテューヌ「確かなんて言うのかな？・・・ツン・・・ツン・・・ツンデレ？」

ビビ「お兄ちゃんがツンデレ・・・」

ジャンヌ「へえ、男にもツンデレ属性ってあるのね」

ネプテューヌ、ビビ、ジャンヌはグレイがツンデレになったと驚いている。

グレイ「な、なにいつてんだお前ら！！俺がツンデレであるもんか！！！」

神「ま、まさか毒を吐く人物にツンデレ属性がみられるとは・・・」

グレイ「テメエは黙れクソ神!!」

グレイは全力で否定するが神まで便乗して切れる。

グレイ「いいか！俺は決してツンデレなどではないからな!!」

釘を打つようにグレイは言う。

しかしなぜか顔が赤く見える。

ネプテューヌ「顔が赤いよ？ツンデレじゃないと言っても説得力無いし」

グレイ「だ、だ、だ、だまれええええええええええ!!!!」

全員「うぎゃああああああああ!!!!」

銀時「何で俺達までエエエエエえ!!!!??」

ネプテューヌが最後のとどめを刺したのでグレイが暴走した。

全員揃ってボロボロになったがイーバだけ無事だった（逃げたから）。

そしてグレイのツンデレ伝説はここから始まったかもしれない。

グレイ「始まるかアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!

!!!!!! (怒)」

『デカデカノコ』を手に入れた。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!!」

シャル「冒険と食を求めるシャル様がアシストするよ」

銀八「なんか突っ込みどころ満載だがまあいいか。んじゃペンネーム『月光閃火』さんからだ。』ども…月光閃火だ。

しかし…NEEDLES系の新キャラにFAIRY TAILの星座宮キャラ登場…更なるカオスの予感が…(汗)。

輝刃「というか…レーティアとギルシアのやり取りが何とも…(汗)。  
あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1.ギルシアに質問…レーティアとのやり取りで何かピンクい絆を得たみたいだが、実際の所…その後のやり取りが気になるのだが…  
どうなのだ？

あ…確かに、本編で何かそれらしい雰囲気だったからな…。その後が気になる所だぜ…。次は俺からだ。

2・作者に質問：何かこの小説を読んでものすごくオリキャラの設定案が湧き上がるんだが：投稿オツケー？

輝刃「：そう都合よくはいかないだろう…。」

ハハハ…ですよね〜（汗）。『』

レーティア「もちろん夫婦の絆を高めようとして…。」

真王「いやまだ結婚してないだろ…！」

レーティア「そうね、とりあえず抱き合ったくらいね」

真王「ホントか？まあいいが、2つ目はその投稿承りました。『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

シャル「次はペンネーム『鳴神 ソラ』さんからだよ。『マリオ』新しいキャラが出たな…。」

ルイージ「男の人はビビちゃんとは行動が似てる気がする…。」

スネーク「確かにそうだな…。」

冥王「次がボス戦みたいなの」

フォックス「どうなるんだろうな…転生者組に質問『内のマリオはどう思う？』』」

ピット「ギルシアさんに質問『どうやって宇宙に来たの？』』」



フォックス「真王に質問『今更な感じだけど星船って普通に丸い形か?』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます 『』

グレイ「うちの妹が世話になったな」

ビビ「まだ怖さが残るなあ…」

レーティア「相手にしたら勝ち目がなさそうね」

ジャンヌ「コスプレさせようかな?」

シャル「ねえねえ!一緒にゴーストの佃煮食べようよ!」

ギルシア「仲間のためなら神でも喧嘩売ると思うぜこいつ。後俺が宇宙に来た理由は俺を落とした神の奴に聞けよ」

真王「星船の形はイーバと似てる様です。『鳴神 ソラ』さん。廊下に立ってなさい。それからバトン公開だ」

『デイスガイアの拠点でエディット台詞を始める。キャラのセルフはどんなのか想像してかくべし。』

16は複数OK。

詳細は <http://alpha.wiki.net/dissgaea4/index.php?FrontPage> のセリフまとめ  
今回のキャラ：上から順に、レーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア

1 〱 時空の渡し人〱

「あら？何処行くの？行き先を選んで」

「どこか行きたいの？案内してあげるよ」

「修行でもいくの？だったら私も連れて行ってよ」

「どっか行くのか？なら強そうなところでいいぜ？」

2 〱 アイテム界屋〱

「アイテム界屋へようこそ。どんな世界へ行きたい？」

「スリルと興奮を求めるアイテム界へようこそ！え？コスプレはいらない？」

「ここはアイテム界だよ。ねえ私と狩り合いしようよ」

「ここはアイテム界だ。さてどいつからやるんだ？」

3 〱 武器屋・防具屋・よろず屋〱

「いらつしゃい。ローゼンクイーン商会へようこそ。なにをお買いになりますか？」

「いらつしゃいませ〜！可愛い看板娘のローゼンクイーン商会へようこそ〜！」

「アイテム売るよ。なに買ってくる？」

「おう、アイテム売ってるぜ。何買うんだ？」

4 〱 地獄保じごくほけんじょ嫌所〱

「あら？怪我でもしたの？私が癒してあげる」

「怪我したの？だったら治療するよ」

「医療なら任せて。痛くしないように麻酔なしでやるから」

「ああ？何で俺様が直さないといけないんだ？女の子は全力で治します  
！！」

5 〱 裏時空の渡し人〱

「裏面へ行くの？気をつけてね」

「ここからさきはむずかしいよ？それでもいくなら止めないけど」  
「ここから先は強いのがいっぱいいるよ。途中で投げ出したくなっても責任取らないから」

「裏面か？ならもつと準備して出直してくるんだな」

#### 6 技能屋ぎいのみや

「技能屋へようこそ。どの技を磨きたいの？」

「ここは技能屋だよ。どんな技が欲しいの？」

「この技能屋で一体どんな力が欲しいの？」

「ここは技能屋だ。技欲しかったらマナをよこしな」

#### 7 戦拳事務所せんきよじむしょ管理入かんにりにん

「戦拳事務所だけど入る？」

「ここは戦拳事務所だよ。何か用かな？」

「何か用かな？」

「作戦でも立ててるのか？」

#### 8 キャラ界屋

「キャラ界屋へようこそ。どんな場所を歩きたい？」

「スリルと感覚を求めるキャラ界へようこそ！え？コスプレダメ？」

「ここはキャラ界だよ。私といけないことしない？」

「ここはキャラ界だ。潜在能力ならここでいいんじゃないのか？」

#### 9 界賊エディット屋

「界賊エディットへようこそ。あなたはどんな船を造るの？」

「界賊エディットへようこそ。みんなで海賊団つくろ」

「界賊名乗りたいならこの界賊エディットの私に頼んでね」

「ここは界賊エディットだ。一緒に可愛い子を探そうぜ！」

#### 10 マップエディット屋

「マップエディットへようこそ。あなたはどんなマップを作るの？」  
「マップエディットへようこそ。みんなでオリマップ作ろう！」  
「自分のマップ作りたならこのマップエディットの私を呼んでね」  
「ここはマップエディットだ。一緒にかわい子ちゃんをマップに誘  
おうぜ！」

11～記録屋～

「記録屋よ。今日の成績はどうかしら？」  
「ここは記録屋だよ。今日の記録はどんなかな？」  
「今までの冒険や食べ物記録する記録屋だよ」  
「俺は可愛い女の子しか記録せん！！まじめにやれ？チツ、分かつ  
たよ」

12～教育的指導員～

「あら？教育的指導に何か用かしら？」  
「あれ？どんな子たちを調教するの？」  
「教育指導するの？どんな奴にするか選んで」  
「俺の教育は全裸にしてケツを舐めまわさせるんだ。いいだろ？」

13～特産品屋～

「いらっしやい。特産品屋へようこそ。なにをお買いになりますか  
？」  
「いらっしやいませ！可愛い看板娘の特産品屋へようこそ！」  
「アイテム売るよ。どれ買ってく？」  
「おう、アイテム売ってるぜ。どんな特産品買った？」

14～ミュージシャン～

「ここは音楽屋よ。好きな音色を聞いてみてね」  
「音楽屋へようこそ。クラシックもあるよ？」  
「音楽でどれを聞きたいの？」

「ここは音楽屋だ。俺はメタル系が好きだがな」

15) キャラ塗師)

「ここは色替え屋よ。どんな色塗りしたい？」

「色替え屋へようこそ。なに色になりたいか言ってみて？」

「色替え屋だけど何になりたいの？」

「ここは色替え屋だ。全国の女の子達！全て俺様色に染まれエエエ  
エエエ！！！！」

16) 戦拳事務所)

レ「なんだか肩がこったわ。少し揉んでくれないかしら？」

レ「私とギルシアは愛し合う運命になる予定よ。ウフフ」

レ「なんだか溜まってくるわ。…性欲が」

レ「こう見えて昔はバトン部のトップエースだったのよ」

ジャ「私以外にコスプレしない人はいない！…そう信じてる！」

ジャ「毎日服変えて飽きないかって？全然」

ジャ「ハア…誰か私を縛り上げてくれな…ん？何か用？」

ジャ「コスプレでも男装も出来るよ。だってコスプレはおしゃれだ  
もん」

シャ「お腹空いた。ねえ君食べていい？」

シャ「道端で拾ったゴキブリ食べる？いらない？あつそう・・・」

シャ「こんな恰好して寒くないかって？うんあんまり」

シャ「どこかで神の力を消す奴がいるってことだけどいつか挑戦し  
てみたいな」

ギ「いいか！世の中はすべて女の子が一番だ！そう思うたる！」

ギ「俺に覚えられない力はないぜ？それが俺様だからだ！」

ギ「頭のは飾りだつて？これは体の一部だ」

ギ「俺は女の子が好きだが、レーティアの様なお姉さまでもいいぜ  
？」

17〜回す人

「鳴神ソラさんね」

「私リイン」

「じゃあ黒神で」

「俺は誰でもいいぞ。月光閃火でもいいが」

真王「それから『月光閃火』さんからキャラ投稿です」

『名前：レジイ・アルクタート

年齢：18

性別：

容姿：朱髪のショートシャギーに金色のクールな瞳、175cmのほどよく引き締まった体格で顔立ちはややクール系、ラフな服装が主で首には六芒星のネックレスを着けている

性格：寡黙でちよつと近寄り難い雰囲気を持つが、根っこは優しくて義に篤い

意外とポケ体質で主にアニメやゲーム等の名ゼリフ系のポケが多い

魔力ランク：EX

魔導士ランク：SS+（推定）

能力：鍛えれば鍛える程無限に上がる身体能力、テイルズシリーズの術技・召喚晶霊全て

詳細：転生前の名は『赤城<sup>あかぎ</sup> 月華<sup>げっか</sup>』

元々はサブカル大好きなごく普通のフリーターだったが、建設工事のアルバイトの際に落ちてきた鉄骨から仕事仲間を助けてそのまま鉄骨の下敷きになって死亡。そのまま神様（見た目『銀魂』の『洞爺湖の精霊のオッサン』（汗）から転生ボーナスを貰い転生し、ミッドチルダのスラム街を拠点に何でも屋をやっている

時空管理局からの依頼も度々受けている為かほとんどの局員とは面識がある（とは言いつつ、上層部や最高評議会からの依頼はちよろまかしの達成報告が多い（汗）

一人暮らしが長い為、一通りの家事は出来：特に料理の腕前は最近シヤマルから料理の手ほどきの依頼を受けている程上手い

デバイス名：ネステイルティア（愛称・ルティア）

種類：インテリジェントデバイス

思考性別：

待機時：六芒星のネックレス

セットアップ時：『テイルズシリーズ』の『エターナルソード』

バリアジャケット：『テイルズオブファンタジア』の『クレスIIア

ルベイン』のコスチューム

詳細：転生の際に神様から転生ボーナスの一つとして貰ったデバイス性格的に『お姉さん＋オタク＋乙女』といった感じで、レジイに対してパートナー以上の想いを寄せている

オタクな為か、度々データの中にアニメやゲーム等の画像や動画データが入っていてレジイにとって少々悩みの種だったりする（苦笑）

↳

シャル「次はギルシアがアシストするよ。それじゃあ待ったね〜」

第七十二訓：いきなりデカイボスはちょっと危険（後書き）

真王「今回は銀時が最も恐れるあの場所です」

ギルシア「次回『幽霊が脅かすのは寂しがり屋だから』テイクオフだ」



第七十三訓：幽霊が脅かすのは寂しがり屋だから（前書き）

真王「銀さんにとって最も嫌なステージだ」

ギルシア「そんじゃあ始めるぜ」

（ホラホラマンシヨンギヤラクシー）

『石の怪物と神秘の木』

## 第七十三訓：幽霊が脅かすのは寂しがり屋だから

イーバ「にぎやかにやってるかい？」

イーバが星船の中でくつろいでいる銀時達に言う。

銀時「ああ、暇すぎて体が鈍っちまうくらい」

銀時はジャンプ読みながら言う。

それが銀時にとって最悪な道になった。

イーバ「そうかい、なら次のギャラクシー・ホラホラマンションギヤラクシーでもいけるね」

銀時「・・・うぐっ！いかん！腹痛が…調子悪くなってきた！」

次のギャラクシーを聞くや否や銀時が調子悪そうなしぐさをする。真実を言えば銀時は物騒なギャラクシーの名前が出て絶対に行きたくないと思いが告げてあえて嘘の苦痛を出したのだ。

ネプテューヌ「ホラ銀さん、そんなところで突っ立ってないで早く逝こ」

銀時「物凄くシャレになんないんですけどオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

銀時の叫び虚しく引きずり込まれました。イーバはハンカチ持って振っていました。



レーティアが怖がっている（ふりをしている）ためギルシアが彼女を支える。

ギルシア「安心しろ、俺様が守ってやるからな」

レーティア「ギルシア／＼／＼」

ギルシアが行った後レーティアが顔を赤くする。

その時二人の空間にスツゴイピンクのオーラが纏われる。

銀時「うごごご！！！！？なんだこれは！！」

シャル「あれは『ラブハーツ空間』と言って邪悪なる者を寄せ付けない愛の結界なんだよ。私も始めていた」

ビビ「なんですって！？私もなのはちゃん達とごごご！！」

ジャンヌ「落ち着いて…」

オーラに押された銀時が言うと、シャルがそのオーラの正体を暴き、ビビが魂の叫びを出すもジャンヌが落ち着かせる。

が、向こう以外でもネプテューヌ達はその逆のオーラを纏っているが。

ネプテューヌ「うらやましいうらやましいうらやましいうらやまし  
いうらやましいうらやましいうらやましいうらやましいうらやまし  
いうらやましいうらやましいうらやましいうらやまし  
……（ブツブツ）」

ノワール「ムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくム  
カつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつくムカつ  
くムカつくムカつく……（ブツブツ）」

ブラン「私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だ  
って私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だ  
私だって私だ……（ブツブツ）」



ネプテューヌ「え？ちよつと待ってよ」

何事もなかったかのようにシャルが先導し、ネプテューヌ達はあっけにとられるもすぐに移動した。

レーティア「ふさがっているわね」

進む先に鉄格子が行く手を阻んでいる。

ギルシア「仕方ねえな。俺様がぶつ壊「ちよつと待って」「ウゴツ！」

ギルシアが前へ出るとネプテューヌに裾を掴まれて倒れる。

ネプテューヌ「このキノコを使えばいけると思っけど…」

そう言っ取り出したのは白いキノコだった。

そのキノコを食べるネプテューヌ。

そして何とネプテューヌはお化けへと変身した（下半身がお化けになっっているだけ）。

コンパ「ああ〜！！ねぶねぶがしん「死んでないからね！！これは変身してるだけだからね！！」「そ、そうですか」

コンパが死んだと思い込んでしまったのでネプテューヌが補足して安心したようだ。



腹を抱えて笑うネプテューヌ。  
その後鉄格子を見ながら言う。  
お化け化しているネプテューヌなら通れるがそれ以外は出来そうにない。

ギルシア「チツ、だったら力づくでいくか？」

レーティア「待って、こんな時こそ彼女の定番よ」

ギルシアが腕をまわして殴り壊そうとするとレーティアが止めて一ツのカギを出す。

レーティア「開け！処女宮の扉！バルゴ！」

レーティアが政令を召喚すると、ピンクのショートに手枷をつけたメイドが現れた。

バルゴ「およびでしょうか？ご主人様」

バルゴはレーティアの前で跪く。

レーティア「早速あなたにやってもらいたいことがあるんだけど…」

バルゴ「お仕置きですか？」

バルゴが真顔でボケる。

レーティア「違うわよ。ここから鉄格子先まで掘ってくれる？」

バルゴ「承知しました」

バルゴが承諾した後地面を掘って鉄格子先まで道を作った。



レーティア「それじゃあ行きましようか」  
ギルシア「やるじゃねえかレーティア」  
レーティア「ウッフ、ありがと？」

レーティアはギルシアに抱きついてピンクオーラを出す。

バルゴ「紙吹雪はいりますか？」  
レーティア「結構よ」

マンションの外

外へ出た銀時達は宙に浮く瓦礫を渡っている。

銀時「お宝はこっちにあるのか？」  
ネプテューヌ「そうだよ。っとあった」

ネプテューヌはお宝がある場所に指差す。

銀時「おし！こいつをとってとつととこんなとこオサラバ……」  
????「なに僕のお宝横取りしようとしてんのオオオオオオオ！！  
？」

銀時が取ろうとすると地面から石の怪物が現れた。

IBGMポルタ&キングボーネブスーパーマリオギャラクシー  
(Super Mario Galaxy Music Extended - Boss - Kingfin, Boulder  
geist)

銀時「誰だオメエは？」

ポルタ「僕はポルタ、僕の宝物に手を出すな！」

石の怪物、ポルタが石をうかばせて銀時に向かって放つ。

銀時「うおおおおおおおおおお！！！！！」

銀時は猛ダツシユで飛んでくる石をかわす。

銀時「くそ！ネプテューヌ！手伝ってくれ！」

銀時はネプテューヌ達に助けを求めるが、

ネプテューヌ「銀さん頑張つて〜！！！」

ヴィヴィオ「パパ頑張れ〜！」

シャル「見ものだね」

ギルシア「だな」

銀時「またお前らは観客かああああああああ！！！！！！！！！！  
！（激怒）」

銀時は奥で観客みたいに見ている奴らに青筋立てて怒鳴る。

ポルタ「あ、いたんだ」

ボルタは今気付いたかのような顔をする。

その時黒い石の流れ弾がネプテューヌ達に向かってくる。

ネプテューヌ「白刃取り！…ふっふんまだまだ甘いね」

黒い石はネプテューヌがキャッチ。

不敵に鼻で笑う。

ジャンヌ「いや、その、その石もったら…」

ジャンヌが冷や汗流している。

するとその石が砕けて真っ黒な何かになる。

ネプテューヌ「…何これ？」

???「ケケケケケケケ」

ピピピピピピ！ドガー…ン！！！！

ネプテューヌ「ウギヤアアアアアアアア！！！！」

ネプテューヌは爆発に巻き込まれた。

周りは避難していた。

ボルタ「ああ、いい忘れてたけど黒い石は爆発するから気をつけてね」

銀時「先に教えるよバツキヤロオオオオオオオ！！！！」

ボルタ「普通敵が教えるか？」

銀時「あ、そうか」

ボルタの一言に銀時は怒鳴るが、突っ込みを入れられて納得する。



ガタガタと土下座して謝るボルタ。

余ほど怖いのが目で分かる。

とりあえず『フューチャースフェア』を手に入れた。

ネプテューヌ「最初っからそうすればいいのに・・・ねえ？」

にっこりと笑うネプテューヌ、だが目が笑ってない。だが目が笑っていない。

∴ 大切なことなので2回言ったツス。

ボルタ「エヒイイイイイ!!! ホントマジでごめんなさいイイイ!!! 僕本音言うとタダ友達いなくて調子に乗ってしまったただけなんですウウウウウウ!!!」

ネプテューヌ「∴ そのために私はとばかり受けたわけ？」

黒オーラは治まるどころかどんどん濃くなっていく。

ボルタ「ギャアアアアア!!! 落ち着いて!!! お詫びと言っちゃなんだけどいいところ連れて行くから!!!」

ネプテューヌ「何? ゴミダメ？」

ジト目でボルタを睨むネプテューヌ。

ボルタ「いや話は最後まで聞いてって! ほらこっちですよ!」

ボルタは怖がりながらもネプテューヌを連れ出す。

銀時達も後をついて行く。

外れ小島

ボルタ「着いたよ」

ネプテューヌ「……………（啞然）」

銀時「こいつぁ……………」

レーティア「きれい……………」

ある小島に着いたネプテューヌ達はあるものに目を奪われた。  
それは、神々しいほど青く輝いている大きな木だった。

ボルタ「彷徨う神の木、その名の通りただ宇宙空間を彷徨う島でい  
つどこに現れるか分からないとされているんだ。けど僕がそれを見  
つけてロープで縛って固定させたんだ」

銀時「おいおい、こんな神秘っぽい木を捕まえてたら罰あたんねえ  
か？」

ボルタが自慢げに神の木を説明して、銀時が冷や汗流して言う。

ボルタ「いや、僕はよくわかんないんだけどこの木は神と神との  
通信とされているとかって言われてるんだ」

ボルタは曖昧気味に答える。

ネプテューヌ「…神の木…」

ネプテューヌがふいに近づく。

そして神の木に触れる。

???

ネプテューヌ「!?!?ここは?」

突然世界が白と黒の世界へと変わった。

しかも周りに白い魂みたいなのがいっぱい浮いている。

???'ここは魂の世界だよ」

ネプテューヌ「!?!?誰!?!」

ついに何処からか声が聞こえてネプテューヌは見渡す。

???'あたしはここだよ」

ネプテューヌ「何処?!?!?!」

ネプテューヌの体の中から黒い魂が出てきた。

そして全身黒くて目が赤く、赤い刺青みたいなのがあるネプテューヌそっくりの存在がいた。

ネプテューヌ?「よう、表の私」

ネプテューヌ「:もしかしてあなたなんだね。あの時からの」

ネプテューヌ?「そうさ。あたしはあいつから闇を吸われる際に誕生したのさ。そうだな、ダークネプテューヌとでも名乗って置くか」

黒いネプテューヌ、ダークネプテューヌは自己紹介する。

ダークネプテューヌ「なに、少なくともあたしはお前を殺す気はないからな。半身を殺したところで表の世界にまで影響しちまうわ。だからあたしは助言ぐらいはする」

ネプテューヌ「助言？」

ダークネプテューヌ「ああ、ダークソウルとあのタカスギが同盟結んだらしいぜ」

ネプテューヌはそれを聞いて驚愕した。

ダークネプテューヌ「世界を壊すという理由で協力し合ってるみたいだな」

ネプテューヌ「そんな・・・」

ダークネプテューヌ「いきなり話しても整理が付かんなら時間はやるよ。そんじゃあな」

そして世界が光りに満ちた。

彷徨う神の木の付近

ネプテューヌ「・・・ダーク・・・ソ・・・ウル・・・」

元の世界へ戻ったネプテューヌ、だが眩いたあと倒れてしまう。

銀時「！おいどうした！」

ネプテューヌ「・・・あ、ぎゅ...ん...」



気付いた銀時が駆け寄ってくるが、ネプテューヌの状態は顔が赤くて汗を流して息が荒い。

新八「大変だ！ひどい熱です！」

神楽「星船まで運ぶネ！」

ノワール「ネプテューヌ！しっかりしなさい！」

ヴィヴィオ「お姉ちゃん！」

プリニー「応急処置ッス！」

ネプテューヌは星船まで連れて行かれた。

ボルタ「……僕はどうすれば……」

一人ポツンと残されたボルタであった。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!」

ギルシア「よう、ギルシアだ。しっかりアシストしてやるからな」

銀八「頼むからちゃんとやってくれよ?んじゃペンネーム『鳴神ソラ』さんから始めるぞ。『マリオ』現れたな…」

ルイージ「ホントだね」

スネーク「しかもキノコで大きくなってたな…」

フォックス「それで早速ギルシアとシャルが大活躍だな」

冥王「ボスは撃破したけど…また別のキノコか何かで巨大化して出て着そうかも…」

マリオ「質問『俺の弟子の明久を見てどう思う?』」

ルイージ「同じく『冥王のもう1つのバリアジャケットについてどう思う?』…」

ネス「なのはさんに質問『冥王の技はどう思う?』」

それでは次回を楽しみにしてます『』

真王「そうですね。仮面ライダーでも馬鹿ですよな?もう一つ冥王のバリアジャケットって黒神のスバルと同等だな」

なのは「凄いですけどあのコスプレはないよ…」

ジャンヌ「安心してなのはちゃん。私が綺麗なコスプレを」

なのは「しなくていいよ!?!」

真王「は〜い」鳴神 ソラ『さん、廊下に立ってなさい」

銀八「次はネプテューヌだ。じゃあな」

〜今日のお宝鑑定〜

〜フーチヤースフェア〜

価値：2300円

見た目：水晶玉

イーバメモ：不思議な球だけどなんだか私の未来が見れそうな気がするね。

ドルフィンメモ：不思議な球からあなたの未来が見れる！人生を占いたい人にオススメ！なにが出るかは知りませんが。

第七十三訓：幽霊が脅かすのは寂しがり屋だから（後書き）

真王「今回は転生者メンバーが大活躍します！」

ネプテューヌ「次回『転生者は隠し技を持っている』テイクオフ！」

く予告く

ジャンヌ「私達の本気が見れるかも？」

第七十四訓：転生者は隠し技を持っている（前書き）

真王「今回は転生者組が大活躍！別にグレイやビビや神は出ませんが」

神「俺の活躍はいつになるんだよ。早くあつちにださせろよ」

真王「あんた出したら一瞬で終わるだろ？」

神「あ、それもそうか」

真王「それではスタート」

（彷徨う神の木）

『狙われた神の木を救い出せ！』

## 第七十四訓：転生者は隠し技を持っている

星船

イーバ「容体はもう安定したよ」

コンパ「ねぶねぶ元気になりました。今安静して寝ていますです」

風邪で倒れたネプテューヌを看病していたイーバとコンパ。

新八「良かった」

神楽「当たり前ネ。ネプっちが簡単にくたばらんアル」

新八は安心し、神楽は当たり前なことを言う。

銀時「しっかし、なんでいきなり？」

イーバ「そりゃこっちが聞きたいよ」

銀時は疑問を投げるがイーバはそう言う。

銀時「あれ？そう言えばレーティア達は何処行った？」

グレイ「神の木をもっと見てみたいだよ」

銀時は周りを見渡しながらそう言って、グレイが答えた。

彷徨う神の木の付近

ジャンヌ「昨日から見てたけどやっぱり不思議だね」

レーティア達は神の木の付近で眺めていた。  
ジャンヌは座って眺めて呟く。

レーティア「ほんとね」

ギルシア「これが神の神秘ね」

レーティアは賛同するが、ギルシアは興味なさそうな感じである。  
するとレーティアがギルシアによってだきつく。

レーティア「…こうしていると夫婦に見えるかしら？」

ギルシア「ドキドキ緊張する彼女の間違いだろ？」

レーティア「やだひどい！」

レーティアの冗談にギルシアはそう返してレーティアは元気な少女  
のように言ひ。

ギルシア（…あいつの予想はあってんのか？）

（回想）

レーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシアは夢を見ていた。

レーティア「ここは何処なのかしら？」

ギルシア「少なくとも誰かさんの仕業っぽいな」  
「???」鋭いな、さすが転生者というわけか?」

レーティアが不思議そうに周りを見渡して言い、ギルシアが仮説立てると誰かが肯定の声を出す。

声のした方へ向くと、ネプテューヌそっくりの黒い奴、ダークネプテューヌが岩の上で座っている。

ジャンヌ「うわっ！ネプテューヌちゃんそっくりだ！！」

ダークネプテューヌ「お前らに聞きたいんだが表の私はどうしてるんだ?」

驚いているジャンヌをスルーしてダークネプテューヌが聞いてくる。とりあえず話すと、

ダークネプテューヌ「ふん、干渉した反動かね」

ジャンヌ「偉く軽ツ!!!?」

別に驚きもせず普通の返事なためジャンヌが驚く。

ダークネプテューヌ「でもまあ大丈夫そうだな。それからお前達に言うておくことがある。神の木で待っている。そうすれば何かイベントが起こるぜ?じゃあな」

ダークネプテューヌはそう言い残して消えた。

〜回想終了〜



ギルシア（あいつはああ言ってたが、一体どんなイベントなんだろっな？）

ギルシアが想像すると、

シャル「・・・見慣れない奴らがいるよ」

シャルが木の近くにいる謎の集団に指をさす。

しかもそいつ等は何やら危なっかしいものを持っている。

ギルシア「成程な。この木に罰当たりなことする奴らをぼこってこいってことだな？」

レーティア「若干解釈が違ってる様な気がするんだけどまあそうね」

ギルシアが言った後レーティアが言う。

レーティア達は集団に近づくと、そいつ等は人型の4つの赤い目のような顔に身体中おおわれた黒いアーマーがある。  
が、なぜかこの者たちに“人間の気配がない”。

シャル「人の姿をした死人兵士・イヴィルソルジャーってとこかな？」

ギルシア「もう一方はなんか見覚えねえか？」

????「ガア」・・・」

もう一方は同じく人型で裂けた口と鋭い牙、長し舌を出している人外生物だった。

レーティア「あゝ、バイオの長舌やろうね。私あれちょっと苦手よ」  
ギルシア「んじゃさつさと片付けるか？」  
シャル「賛成、あいつらいると居心地悪そうだ」  
ジャンヌ「久しぶりに本気が出せそうかしら！」

レーティア達はイビルソルジャーの部隊に突撃した。

IBGMファタライズbyソウルキャリバーレジエンス  
( Mega Extended Edition : Lloyd  
Irving 「Fatalize」 ( Soul Calibur  
Legends ) )

レーティア「私の動きが捕えられるかしら!？」

レーティアはファスシニムを取り出して鞭でイビルソルジャーを  
なぎ倒す。

イビルソルジャー「オオオオオオオ!!!」

イビルソルジャー達も武器で応戦する。

レーティアは難なくかわす。

レーティア「喰らいなさい! 死の舞い踊り!!」

イビルソルジャー「グアアアアアアア!!!」

暴れまわる大蛇の様に鞭の攻撃が襲いかかり、イビルソルジャー  
達は1割倒された。

????「シヤアア!!」  
レーティア「!?!」

先ほどの長い舌の人外生物・リッカーがレーティアのファスシニムを舌で捕えた。

後ろのイヴィルソルジャーが剣を振り上げてレーティアを切り捨てようとした時、

レーティア「ハアッ!!」

イヴィルソルジャー「グオッ!?!」

レーティアの後ろ蹴りに蹴られた。

レーティア「舐めないでよね!どこかの中国妖怪みたいに体術を有しているからね!」

リッカー「アアアアアア!?!?!」

レーティアがファスシニムを思いっきり引張ってリッカーを投げ飛ばす。

レーティア「ファスシニム!バトンモード!」

ファスシニム オーライマイマスター

レーティアの指示にファスシニムは鞭からバトン(ラ・ピュセルのプリエ愛用バトン)へと変わった。

イヴィルソルジャー「ウオオオオオオオオオオ!!!!」

レーティア「かかってきなさい!!やあッ!!」

レーティアは無双の如く襲いかかってくるイヴィルソルジャー達を

体術や足技やバトンで次々と倒していく。  
とても普通の人間とは思えないスピードで次々と倒していく。

レーティア「フンッ！」  
リッカー「ゲエッ!？」

するとレーティアが瞬時に近くのリッカーに飛びかかって馬乗り状態になった。

他にイヴィルソルジャー5体とリッカー3体がレーティア（と乗せられているリッカー）を囲む。

レーティア「…ちょっとばかり張り切り過ぎちゃったみたいだからもうこんなに減ったわね…」

レーティアは周りの敵達を見る。

周りにはイヴィルソルジャーとリッカーと彼女を合わせて10人しかない。

すると乗せられているリッカーの舌がレーティアの体にまきつく。  
絞めつけられて胸が強調されている。

レーティア「フフッ、たっぷり遊んであげるわよ　・・・リス・フォーム 夢魔変化」

レーティアは悪魔のような魔性の笑みを浮かべ、背中から悪魔の羽が出現した。

ギルシア「オラかかってこいザコ共オオ!!!」

レーティアとは別のところではギルシアが手に炎を纏って敵を殴りまくっている。

ギルシア「リトルボーイ!!」

炎の打撃パンチ・リトルボーイを放つギルシア。

ギルシア「まだ行くぜ!カンダタストリング!!」

紫に光る糸を出してイヴィルソルジャー達を切り刻んだ。  
イヴィルソルジャーは糸を切るうとするが一向に切れない。

ギルシア「その糸を切れるものは、神だけだ。そしてとどめだ!テンペストスレッド!!」

カンダタストリングよりも糸の束が濃い攻撃がイヴィルソルジャー達を襲った。

ギルシア「判決!!死刑!!!!」

ギルシアは十字に切ると背後でイヴィルソルジャー達が落下した。

ギルシア「ん?うわっと!」

ギルシアが後ろに振り向くと矢が襲って来たのでかわす。  
弓を構えたイヴィルソルジャーだった。

ギルシア「・・・ヘッ!!」

ギルシアは鼻で笑うと瞬時にイビルソルジャーに目の前に立った。

ギルシア「デーン・ドライブ・フォックスハンド！」

音速の如くの攻撃でイビルソルジャーが袋叩きにされ、吹き飛ばされた。

ギルシア「オラどんどんかかってこいやザコ共っ！！！」

悪魔のような顔でイビルソルジャー達を挑発した。

ジャンヌ「セイヤアアアッ！！！」

レーティアとギルシアとは別のところでジャンヌがFateのライダーの恰好してリッカーを投げ飛ばす。

リッカー「シャアア！！！」

ジャンヌ「チッ！」

もう一匹のリッカーが舌でジャンヌの服を掠らせる。

ジャンヌ「ッ！！！！！」

ジャンヌの体にリッカーの舌が巻きつかれた。

他二体のリッカーも舌で巻きつく。

ギリギリと締め付けられているため痛みながら表情を赤くしてい

る。

ジャンヌ「う…く…っ！」

体のあちこちがくいこまれていくジャンヌ。

リッカー「…ゲエア！」

バリツ！！

ジャンヌ「ツア！／／／／」

服を引き裂かれた。

ジャンヌは飛び上がって木の根の上に立つ。

7割ほど露出するあわれもない姿がよく見える。

ジャンヌ「ちょっと調子に乗り過ぎたかな、せつかくのコスプレ衣装がもうボロボロ。仕方ないわね」

自分の衣装を見てはやくジャンヌ。

すると彼女は自分の服をビリビリに破き捨てたのだ。

無防備な全裸になったジャンヌ（だがパンツはある）。

ジャンヌ「こつからは本気でいくよ！シャマツシュ！ウォーロードフォーム！」

シャマツシュ All right！！

手に持つデバイス・シャマツシュで光を放ってバリアジャケットを展開する。

上半身なのはエクシード（ジャケットはない）、下半身に黒いブーツとの黒のストッキングとガーターベルトと前が開いたロング

スカートだ。

そして手には銀色の双剣を握っている。

ジャンヌ「さあ！遊んであげるわよ！」

双剣を振り回してリックカー達を挑発する。

リックカー達はそれに反応して舌で攻撃する。

スパンツ！

リックカー「ギャアアアアアア！！？」

ジャンヌにあたる直前舌が切れた。

理由は簡単、目には見えないほどのジャンヌの攻撃で切れたのだ。

ジャンヌ「虎刃斬！！」

虎の牙のように斬撃技を繰り出してリックカーを一体倒す。

ジャンヌ「剣から拳に変えて、魔拳ビッグバン！！」

ジャンヌは双剣から銀のナックルグローブに変え、超強力な魔力でビッグバンの如くの爆発を引き起こし、リックカー達はほぼ全滅した。  
… 一体だけは生き残っていた。

リックカー「シャアアアアア！！！！」

仲間がやられたことに怒り出したリックカーが長い舌でジャンヌを捕えた。



ジャンヌ「んっ／＼／＼／」

リツカーの舌がジャンヌのアレな部分と胸にあたっている事に気持ちよさげな顔をしているが、

ジャンヌ「ダメ、これじゃ足りない。これじゃ私の<sup>サキユバスハート</sup>夢魔の性欲が満たされない」

リツカーの舌に捕まっ たまま近寄る。

ジャンヌ「ねえ、私とイイコトシマシヨ?」

シャル「……………ちょっと数多くない?」

レーティア、ギルシア、ジャンヌとはまた別のところではシャルがいて、周りにはイヴィルソルジャーとリツカーがたくさんいる。

シャル「まあいいや、まとめて燃やしてあげる。ドッペルゲンガー！バハムート！」

シャルの体がバハムート（LOV仕様）へと変身した。

バハムート（シャル）「カオスフレア!!!!」

口から炎が凝縮された塊を発射させてイヴィルソルジャーとリツカー達をほぼ全滅させた。

そしてシャルは元に戻って、

リツカー「シャアア!!」

ドスツ!

シャル「アッ!」

背後にいたリツカーに心臓を貫かれた。

シャル「……………びつくりしたね」

だがシャルは平然としていた。

ある研究の実験台にされて死ぬことのできない体になっているのだから。

左腕を刃に変えてリツカーの首を切り落とす。

イヴィルソルジャー「ウオオオオオ!!」

生き残っていたイヴィルソルジャーがシャルの前で心臓を突き刺した。

また遠くで弓のイヴィルソルジャーが矢を放って頭をつく。しかし、

シャル「ごめ〜ん、私簡単に死ねないんだ」

心臓刺されようが頭を撃たれようが死なないシャル。

シャル「だから、くたばりな」

両腕をしなる蛇のように攻撃するシャル。

ある時は鎌状にして敵を切り、ある時はオリハルコンの腕でぶっ飛ばしたり、またあるときは体中からとげ（と血）を出して一掃したりしていた。

シャル「見てなさい！ディーンドライブフォックスハンド×リトルボーイのコンビネーション技！その名も…」

シャル「ディーンドライブリトルボーイ！！」

炎の拳の高速攻撃がイヴィルソルジャー達を襲った。  
そしてイヴィルソルジャー達は全滅した。

ギルシア「ハンツ！準備運動しただけですか」

シャル「結構楽しかったね」

ギルシアは肩を回し、シャルは木の根の上で座って足を振っている。

レーティア「あらギルシア」

ジャンヌ「そつちも終わったんだね」

後から遅れてレーティアとジャンヌがやってきた。  
心なしか少し艶めいているように見えるが…。

ギルシア「…何か前よりきれいになってねえか？」

シャル「なんか能力使った？」

レーティア「ええ、妹と同じ相手の力を奪う<sup>リス・アブソバー</sup>夢魔吸引のおかげでね」

艶めいた理由は彼女達の能力のせいなのだ。

それにやられたイヴィルソルジャーとリックカー達は干からびたミイラの様になっていた。

シャル「でも、こいつら普通じゃないね」

そう言つて一体のイヴィルソルジャーの顔の仮面を取る。  
人ならざる死人の顔だ。

シャル「人間の死体を媒介に化け物にしてる」

ギルシア「誰だかねえ、こんな技術を作つた奴は」

シャルが分析し、ギルシアが言う。

レーティア「さ、もうここにようはないから行きましょ」

レーティア達は星船へ戻つた。

???

イヴィルソルジャー「ご報告します。神の木へ向かつた部隊が何者かに全滅されたとの事です」

神殿のような空間でイヴィルソルジャーがある男に言う。

「???」部隊が全滅だと?どんな奴だ?」

イヴィルソルジャー「女が3人と男が一人、いずれも異世界の能力を所持しているようです。そしてあの場にいないでしょうが複数の仲間がいらつしやるようです」

「???」異世界の能力……なるほど、転生者ということか」

男はその人物達（レーティア達のことを言っている）を転生者と見破る。

「???」神の木のことは諦めるとして、次の作業にかかれ。場所はそうだな、……でどうだ?」

イヴィルソルジャー「了解しました、森羅神ネオ様」

男・ネオはある場所を言い、イヴィルソルジャーは消えた。

「???」……クッククック……すでに世界のほとんどは我がものに堕ちた。あそこはあいつがやってくれるだろう。精々壊れるところを見ていくんだな。この俺、森羅万象の神・ネオ様がな! ファ〜ッハッハッハッハッハ!!!」

その男は部下だった少女をダークソウルに変えた張本人・ネオが狂気の高笑いをあげていた。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ネプテューヌ「こんにちわ〜！また私だよ〜」

銀八「ハイそんじゃあペンネーム『鳴神 ソラ』さんから行くぞ。

『マリオ』おお〜早速スピンを使ったな」

ルイージ「ホントだね…と言うか銀さん…」

明久「と言うかちよつと失礼じゃない；」

康太「少し事実だから仕方ない」

スネーク「それにしても高杉と組んだか…」

フォックス「厄介な同盟だな…」

マリオ「質問『俺の弟子の康太はどう思っつ？』」

ルイージ「リリなのメンバーに質問『冥王はどう思っつ？』」

フォックス「スバルに質問『最近、自分の出番がない事どう思う?』」

真王「…変態に仮面ライダー…いやなんでもない」

フェイト「本当になのはそっくりだったね」

はやて「唯一違うのはアレやね…(一部分を見ながら手をわきわきしている)」

シグナム「冥王か・・・フフッ」

ヴィータ「これはあたしへの当てつけか!？」

シャマル「ほ、ほんとになのはちゃんそっくりよ」

ザフィーラ「世界は広いな…」

スバル「写真見ましたけど凄い人だったんですね。黒神のあたしはメインになってましたけど気にしてないです」

ティアナ「冥王…ちょっと怖いわね」

エリオ「コスプレって…」

キャロ「う、羨ましい…」

銀八「それから鳴神 ソラさんのばとんがあるぜ」

『と言う訳で前回の話にあったバトンを…上から明久、ハツリーニ康太、フォ

ツクス、スネーク

1 〽 時空の渡し人〽

「あつ、どこかに行くんだね？」

「……どこに行く？」

「行き先はどこだ？」

「目的はどこだ？」

2 〽 アイテム界屋〽

「アイテム界へ行く店だよ、どこに行く？」

「……どのアイテムを強化する？」

「アイテム界屋だ、鍛えたいアイテムはあるか？」

「アイテム界屋だ。どうする？」

3 〽 武器屋・防具屋・よろず屋〽

「此処で武器やアイテムを揃えよう！」

「……準備を怠るな」

「冒険行く前に揃えるんだな」

「何を買うんだ？」

4 〽 地獄保嫌所<sup>じごくほけんじょ</sup>〽

「地獄保嫌所だつて……名前が凄いいよね。」

「……体力を回復するか？」

「体力は回復した方が良いぞ」

「体調管理はちゃんとするんだぞ」

5 〽 裏時空の渡し人〽

「此処さつきより強いから気を付けて！」

「……油断するな」



「気を付ける、この先は表より強敵がいる」  
「此処を通るなら注意しろよ」

6 技能屋スキムラ

「どの技を鍛える？」  
「……技能屋で何を鍛えるんだ？」  
「技を強化するのか？」  
「技能屋だな。どんな技を鍛えるんだ？」

7 戦拳事務所管理人せんきよじむしょかんりにん

「戦拳事務所管理人だね……入る？」  
「……入るのか？」  
「作戦は立てといた方が有利だな」  
「何事も作戦は大事だからな」

8 キャラ界屋

「キャラ界屋だつて、どこへ行く？」  
「……キャラ界のどこへ行く」  
「キャラ界屋か……此処と思つた場所を選んでくれ」  
「どんなキャラの潜在能力を鍛える？」

9 界賊エディット屋

「界賊エディット屋でどんな海賊団を作る？」  
「……どんな船を作るんだ？」  
「どう言う船や海賊団を作るんだ？」  
「界賊エディット屋か……どんな海賊を作るんだ？」

10 マップエディット屋

「マップエディットだよ！自分の好きなマップを作成しよう！」  
「……どんなマップを作る？」

「マップエディット屋か…あんまり複雑なのを作るなよ」

「マップエディット屋か…自分で思ったマップを作って見るんだ」

11) 記録屋)

「記録屋だね。今までのを記録する?」

「……記録するか?」

「記録はちゃんと取るんだよ」

「記録を取っておかないと後で泣くぞ」

12) 教育的指導員きょういくていきじょういん)

「教育的指導員か…行く?」

「……どう言う教育をする?」

「教育的指導員だ。好きな様に教育しような」

「此処はバランス良く育てるのもよし、低いのを鍛えるのもありだ」

13) 特産品屋)

「いらっしやい、特産品屋だよ。珍しいのがあるよ」

「……どんな特産品を買う」

「特産品屋だ、何を買って行くんだ?」

「特産品屋へようこそ。気に入る物はあるか?」

14) ミュージシャン)

「音楽は何を聴く?」

「……音楽で疲れた心を癒すか?」

「音楽屋だ。好きな音楽を聴いてくれ」

「どう言う音楽を聴くんだ?」

15) キャラ塗師)

「キャラの色を変えるよ!好きな色に出来るよ」

「……どんな色にする?」

「キャラ塗師だな。どんな色にする？」

「キャラの色を変える所だな。目立たない色が狙われ難いと思うぞ」

16 戦拳事務所せんきよじむしょ

明「よお〜し何をしようかな〜」

明「あつ、一緒にゲームする？」

康「……今写真を整理している」

康「……お前も取って欲しいのか？」

フォ「武器は整備しとかないとな」

フォ「のんびりしてくれ」

ス「やれやれ、一息付けるな」

ス「気を付けてくれ、そこにダンボールを置いてあるからな」

17 回す人

「んじゃあ黒龍さんに」

「……ボツスンへ」

「俺は龍の骨だな」

「フロストへ回してくれ」

…こんな感じですよ」

真王「そして、『あああ』さんからの質問。『質問です

ビビも転生者でチートキャラなんですよね？そのビビに勝って、シルバールブレイドやユニゾンという奥の手を残している銀さんはどれだけ強いんですか？

シルバールブレイドがあるのにユニゾンは必要なんですか？ぶつちやけ、出した意味無い気がするんですけど』銀さんの強さは夜王でも勝てるくらいと思えばいいです。あとユニゾンはサポートだ。『あああ』さん、廊下に立ってなさい」

ネプテューヌ「次は私の闇が相手になるよ。じゃあね」

第七十四訓：転生者は隠し技を持っている（後書き）

真王「次のステージへ進んだ銀時達は怪しさ満点の奴らが現れた！」

ダークネプテューヌ「次回『ハジケ過ぎると身が持たない』テイク  
オフだぜ？」

第七十五訓：ハジケ過ぎると身が持たない（前書き）

真王「今回は伝説のハジケリストが登場する様だ」

銀時「様だっておい…」

（フラワーガーデンギャラクシー）

『お花の世界のハジケリスト』

## 第七十五訓：ハジケ過ぎると身が持たない

神の木から別れた銀時達は次なるギャラクシーへと向かった。

フラワーガーデンギャラクシー

IBGMウインドガーデンギャラクシー  
スーパーマリオギャラクシー

(Super Mario Galaxy Music Extended - Gusty Garden Galaxy)

ヴィヴィオ「わあ、前のと違ってここは花がいっぱいだよ」  
レーティア「おまけに風がきもちいいわね」

ヴィヴィオがたくさんの花を見てはしゃぎ、レーティアは髪をなぞって風を感じ取る。

シャル「それにいろんな植物があるよ、ホラ」

シャルが指差す先になんだがとげとげした草がある。

新八「なんですかそれ？」

シャル「トゲトゲ草、触ると痛いけど食べれるよ？」

新八「食べねえだろ!!」

新八が訪ねてシャルが答えると新八は突っ込む。

シャル「そこにあるのはノビノビ草」

ジャンヌ「ちよっ、絡まった!」

ノビノビ草から生える蔦にジャンヌは困惑する。

シャル「そしてこれがフワフワ草」

今度はピンク色の植物、特に害はなさそうだ。

するとシャルが一本取り出して、風に乗って飛んでいった。

プリニー「飛んだツス!？」

シャル「そのフワフワ草持って飛んでみなよ。風に乗って気持ちいいよ」

銀時達はとりあえずフワフワ草に捕まる。

銀時「うおおおおお!!」

ネプテューヌ「凄いとんでる」

プリニー「お、落ちるツス…」

みんな風に乗って気持ち良く進んでいる。

桂「のんびりする必要はないぞ。もっと風に乗っていけば早く行く」

ビュオオオオオオ~~~~~!!!!



桂「うおおおおお~~~~~!!!!!!」

ビビ「風に乗り過ぎイイイイイイ!!!!!!」

ジャンヌ「って言うか何処まで行くのおおお!!!!!!」

突風が吹いて桂は風に連れ去られて、ビビとジャンヌが突っ込む。

まあなんやかんやで次の場所に着いた。

そこは巨大なリンゴが浮いていた。

ネプテューヌ「私達リンゴの上にいるよ……」

神楽「キャツホオオウウ~~~~!!!!!!リンゴが食べられるね!!!!!!」

神楽は興奮している。

神「オイオイ一人でこれ食う気か?」

グレイ「また虫歯になんぞ」

神楽「リンゴ食いじゃああああ!!!!!!」

神「聞けよつ!!!!!!」

呆れる神とグレイをしり目に神楽はリンゴの中にもぐりこんだため神が突っ込む。

銀時「これ完全にジャイアントピーチならぬジャイアントアップルだな」

ネプテューヌ「銀さんそれ明らかに昔すぎ」

メタ発言なので突っ込むネプテューヌ。

メキメキメキ、ドバーン!!!!!!

神楽「ぎいやああああああああああああ！！！！」  
芋虫「うがアアアアアアアアアア！！！！」

地面リムの中から神楽がお宝を抱えて巨大な芋虫から逃げている。

ジャンヌ「ホワタア！！」

芋虫「ゴブエツ！！」

ジャンヌがとび蹴りで芋虫を蹴飛ばす。

ジャンヌ「大丈夫？神楽ちゃん」

神楽「助かったネ。おまけにお宝見つけたヨ」

銀時「お宝って…虫食いつてんじゃねえか」

神楽が『オールドバグズキングダム』をドーンと立てて言い、  
銀時はそれを見て突っ込む。

オボオツ

すると芋虫の口から何か出た。

オレンジ色のとげとげした奴と青いプルプルした奴だった。

すると青のプルプルした奴がこっち向いて、

???「見せもんじゃねえぞコルアあ！！」

と叫んだ。

ネプテューヌ達はとりあえずそいつをストンピングした。

???「待てやアアアアアア！！いつまで踏み続けるんじゃボケえ

！！」



「!!!??」

着地と同時にドンパッチをスノボの様に滑り込んだ。  
全員は思わず驚く。

ネプテューヌ「・・・今のって」

ベール「もしかして…」

???「今日も大量だったぜ」

金色アフロのグラサン男がきもち悪いアンコウを持ってやってきた。

全員「アンコウデケエエエエエ!!!!!!!!!」

全員は思わずシャウトする。

???「よし運じゃあ次の…ん？」

男がどこか行こうとすると、ネプテューヌとベールの目が合う。

???「お、お前らは…」

ネプテューヌ「やっぱりだ!お〜い!」

ベール「ポーボボさん!」

ポーボボ「紫花〜!、緑子〜!」

全員「いや誰だよ!!!」

ネプテューヌとベールがその男の名を言って走ってきて、ポーボボも(完全に間違っている)名前を呼んで向かってくる。

そして3人は感動の再会…

ネプテューヌ・ベール・ポーボボ「このド腐れ野郎があッ!!!!!!」







ブラン「見たら疲れる…」

ノワールとブランは疲れた目をしている。

ヴィヴィオ「ねえ、ハジケって何？」

ノワール「用は頭がぶっ飛んでるってことよ。ヴィヴィオは将来あんな男と結婚しちゃだめよ」

銀時「ホントだな（てか声が高杉に似てやがるな…）」

ヴィヴィオがハジケについて聞くとノワールが説明と忠告し、銀時はそう思った。

ポーボボ「そうだ、お土産にこれやろう、その場に落ちてたやつだけだな」

ポーボボは懐から『祭灯』と『宴旗』を出した。

あえてどうやって出したから黙秘する。

ネプテューヌ「ありがとう！、でどっか行くの？」

ポーボボ「そろそろあいつらも心配するだろうし、一応帰るつもりだ」

屋台ののれんが「へいてん」と書かれている方へ向けた。

ポーボボ「んじゃなあ、元気でやれよ」

ネプテューヌ「じゃあね」

サントスーツを着てポーボボがそり（屋台）に乗って鹿（ドンパッチと天の助）を操ってどこかへ飛んでいく。





銀八「そうだな。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問だ。『よお…月光閃火だ。』

しかし…何かボスクラスなキャラが最後辺りに出たな…。つつつても、多分『デイスガイア』の『バイアス』みたく『中ボス』扱いされそうだな…(汗)。

輝刃「だな…。話の全体的な長さを考えると、そうなるかもしれんな…(汗)。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1. 闇ネプ(何となく略称命名)に質問…やはりネプテューヌの闇な訳だから、ネプテューヌと同じく大食漢なのか？

あ…確かに、ネプテューヌって話の中でかなり食べるシーンが何回あったからな…。次は俺からだ。

2. ジャンヌに質問…今回の話で死人達に服を破かれて色っぽいシーンになった訳だが…替えの服作っておいてやるうか？

輝刃「そういえば…お前は这个世界(小説になろう)では『オイル・マスター万達者』って設定だったな…。」

…設定つて…(汗)。そんな真つ直線に言わなくても…(汗)。  
ズバリお答えしましょう」

ダークネプテューヌ「まあな。軽くラーメン10人前はいけるぞ」

ジャンヌ「大丈夫。スペアがいくらでもあるから」

真王「現在2万の服が出来ているようだ」

銀八「多過ぎ!! どんだけ作ってたんだよ!!」『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい!」

ダークネプテューヌ「次はペンネーム『鳴神 ソラ』だぜ?」『ゼロ U F』「出やがったな偽神!」

ルイージ「イタイイタイ! 衝撃で飛んで来る石が痛い!」

スネーク「ホントこの時のマリオの周りは危険だな!」

ぶほっ! (大きな石に当たる)

フォックス「作者あああああああ!」

ネス「いや〜ホント凄いな〜レーティアさん達」

リュカ「あのメンバーには効かないと思うけど…」

クッパ「まったくなのだ…ああ言われてもあ奴らは攻撃するだろうな…」

ルイージ「まあ転生者の皆に質問『兄さんの偽神嫌いはどう思う?』」

スネーク「ヴィヴィオに質問『最近こっちの冥王に鍛えられてるけど…冥王についてどう思う?』」

フォックス「銀魂メンバーに質問『冥王についてどう思う?』」

じっ、次回を待ってます…（ガクッ）

スネーク「作者！すっかりしろ作者、作者ああああああああ  
！！」

ゼロUF「銀時にネプテューヌ！頑張れよ！！」『あっちの作者と  
ばっちりじゃねえか。クツクツクツ…』

銀八「えっと、まあ順番に答えましょうか」

レーティア「私達はどんな人物が見た事ないけどきつと許せない行  
為をした人だろうね」

ジャンヌ「そんな人神の風上にも置けないって言うしね」

シャル「でもどっちかっていうとマリオは怒り沈めて」

ギルシア「女の子に手え出したらぶったおす！！」

ヴィヴィオ「修業させてくれる優しいおねえちゃんだよ？」

銀魂組「怖いと思う」

ダークネプテューヌ「人それぞれだな。『鳴神 ソラ』マリオを抑  
えとけ。次はペンネーム『黒神』からだぜ？『質問します。』

ノワール・プラン・ベール・アイエフ・コンパへ

ネプテューヌ率いる『チーム・マイティアテム』がトップから一気

に最下位に転落しました。  
それを見て、不味いと思いますか？

では。』あいつらはまずいと思ってたぜ？『黒神』廊下に立ってな  
？」

真王「さて、またまたバトンを開始しよう」

『またまたオリジナルバトン公開します！

このバトンはトラップと遭遇したときにどんなセリフを出すかとい  
うバトンです。

キャラは上から順にレーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア

1：トゲ

「いたっ」

「きゃっ！」

「痛ッ、刺さった」

「イツテエ！」

2：毒ガス

「クッ、毒ガス！」

「ケホケホ・・・」

「視界が緑色になってる」

「チッ！舐めた真似を！」

3：火炎放射

「あっつ！」

「キヤアッ！熱い！」

「皮膚がやけちゃっうよ」

「これくらいで！」

4：グルグル

「目が回る」  
「ほにゃ〜」  
「グルグル〜・・・」  
「チツ！小癩な！」  
5：トラバサミ  
「ツア！足が！」  
「イッタアツ！」  
「足引っ掛かった」  
「うっぜえ！壊れる！」  
6：落石  
「ツ！！避けて！」  
「うわあっ！！」  
「じゃま！」壊した  
「オラアツ！！」壊した  
7：矢  
「クツ」  
「うっ！」  
「ん？刺さった？」  
「チツ」  
8：ハンマー  
「ブフォオツ！！」  
「ガアツ！！」  
「ブオツ！」  
「グオオツ！！」  
9：プレス  
「きゃ」  
「ニヤ」  
「」  
「グオ！」  
10：間欠泉

「うわああを！」

「うわああ！」

「温泉かな？」

「おおと！」

11：間欠炎

「あつつつ！」

「ギャアチアチアチィィ！！！」

「あつつ・・・」

「チツ！」

12：電撃

「うわつ！？」

「ふあつ！？」

「しびれる〜！」

「チツ！」

13：バンパー

「ひゃあつ！」

「うわあつ！」

「わあつ！」

「うをつ！」

14：バナナの皮

「ひゃわつ！！！」

「わわわ、いたっ！」

「うわをっ」

「うをっ！ごはっ！」

15：爆弾

「がああつ！！！」

「ぬあつ！！！」

「がっ！」

「ぬああつ！！！」

16：トランポリン

「うわっ!?!」

「ふあっ!?!」

「わあ」

「無視だ無視」

17:パンチマシーン(ストレート)

「ぐうっ!」

「ひでぶっ!」

「ぶっ!」

「ぐあっ!」

18:パンチマシーン(アッパー)

「うごっ!」

「がほうっ!」

「あぐっ!」

「ごはっ!」

19:パンチマシーン(げんこつ)

「にゃっ!」

「あうっ!」

「いたっ」

「ぐおっ!」

20:沼

「う、く、この!」

「うまく進めない」

「足がつかえた」

「メンドクせえ!」

21:雷

「うわっと!」

「ひゃあっ!」

「おっとうと!」

「うおっ!」

22:まきびし



「あいたたつ！」

「いたたたたた！」

「ん？足になんか刺さった」

「ちっ！」

23：ゴロゴロ岩

「くっ！この！」

「くうっ！」

「こわす！」

「おらあっ！」

24：火の玉

「あっつ！！」

「お尻に火が付いたああああ！！！！！」

「なんか熱い……」

「ちっ！」

25：間欠冷氣

「うっ！さむい」

「……」凍った

「か、体が寒くなってきた」

「さ、さみいいい！！！」

26：蜘蛛の巣

「しっこいなあ〜」

「体いっぱいついた……」

「……」気にせず進む

「うっとおしいな……」

27：ネバネバ

「やだ〜、気持ち悪〜い」

「うわ〜、ネバネバ〜」

「粘ってる……」

「あ〜、もうウゼエ！」

28：毒液

「ツ！！！！服が！！！！」

「いやぁぁん！！！！」

「ペッペ！口に入った！」

「ブツ！」 鼻血

29：突風

「うっ！風？」

「いやぁん！」 スカートを抑える

「風気持ちいい」

「ありがとうございました！」 ジャンヌのスカートの中を見た

30：竜巻

「うわぁぁ！」

「ほわぁぁ！」

「お」

「なんだこれは？」

31：砂なだれ

「クウツ」

「な～が～さ～れ～る～！！」

「あ～れ～！」

「がっ！ペッペ！口に入った！！」

32：虫

「キヤアツ！虫が！！」

「虫が体の中にイイイイ！！」

「…食べよ」「食つな！」

「ウツゼエー！！」

33：大虫

「んんん～！！！！」 頭から食われた

「いやぁぁ！！」

「・・・ジュルリ」 まで！

「ウツゼエー！」

34：触手

「やあ：／／／／／そこに入れちゃ、だめえ！／／／／」  
「ああん／／／／、縛り気持ちいい／／／／」  
「あ〜う〜／／／／」  
「ハアハアハア・・・」 遠くでカメラを回している  
35：イカスミ  
「ま、前が…」  
「見えないよ〜」  
「う〜ん、どっちだっけ？」  
「うおおおお！！世界が真っ暗だああ！！」  
36：水攻め  
「やだ濡れちゃったわ」 透けている  
「びしょびしょだよ〜」 こちらも  
「え？なに？」  
「いい絵だぜ…」 鼻血を出している  
37：マグマ  
「ギヤアツチャアアアアアアアア！！！！！！」  
「ウワツチャアアアアアアアア！！！！！！」  
「アチャチャチャチャ！！」  
「あちイイイイイイ！！！！」  
38：隕石  
「っ！よけて！」  
「うひゃあ！！」  
「撃ちおとそうかな？」  
「うおおおおおお！！！！」 逃げている  
39：タライ  
「いたっ」  
「あいたっ」  
「ん？」  
「ぐおっ！！」  
40：バケツ

「つて！」  
「あうっ！」  
「いたっ」  
「いっ」  
41：ナベ  
「うごっ！」  
「いだあっ！」  
「く、首が……」  
「ぐろう……」  
42：フオーク（人間サイズ）  
「うっ！」  
「油断した……」  
「傷が出来た」  
「ちっ！」  
43：ギロチン  
「危ない危ない……」  
「／／／／／／／／／／」 服が破かれた  
「あ、手が墜ちた」  
「ダッシュで進め！」  
44：レーザー  
「し、慎重に……」  
「そっつと……」  
「めんどくさいなも〜」  
「全く、一張羅がボロボロだぜ」  
45：落とし穴  
「きゃあああああああ！……！」  
「落ちるウウウウウウウウ！……！」  
「お〜〜〜？？」  
「うおつと……！」 端に捕まる  
46：スタート連れ戻し

「え？入口？」

「あ〜ん！まだ通ってない所があるのに〜」

「あれ？入口？」

「外か？」

47：レベルダウン

「な、何か力が抜ける…」

「うええ！？レベルが下がってる…！」

「あれ？なんか変わってる？」

「ん？力が衰えてきているような…」

48：アイテム損失

「あ、アイテムが無い！」

「あ〜〜！！！」

「あれ？無くなってる」

「俺の美少女コミックスが〜！！」

49：隠れモンスター

「なんなのよこいつ！？」

「いきなり強敵出現？」

「食つか食われるか…」

「チツ！厄介な奴だぜ」

50：回す人

「鳴神ソラと黒神と黒龍ね」

「私リイーンさん」

「ケンとヒヨウガだね」

「俺は月光閃火と天城と風花だな」

真王「それでは次はイーバがアシストさせます。では」

く今日のお宝鑑定く

くオールドバグズキングダムく

価値：50円

見た目：虫食いのリンゴ

イーバメモ：これはどうやら虫達の住処みたいだけどすでに使い古された後だね。価値は低いにしてもお宝として持って行ってもらうよ。

ドルフィンメモ：ムシタチノクニガモウハイキヨニナツタモノ！ワタクシナンテイナクナツテセイセイシマスガネ！トットトコンナモンステテコイ！

く祭灯く

価値：600円

見た目：提灯ちよんちん

イーバメモ：お祭りの際によく見かける奴だね。なんでも昔は明かり代わりに使ってたってことだけだ。

ドルフィンメモ：お祭り騒ぎにこれが一番！みんなで踊ればおどりゃんせ！あ、どっこいしょく、どっこいしょく！

（宴旗）

価値：600円

見た目：祭の旗（宴と書かれている）

イーバメモ：この旗はみんなで宴を開いているときにいるものだね。だからって調子に乗って人に当てないようにしてほしいもんだね。

ドルフィンメモ：旗にはいろんな意味があるその一品！騒げば騒ぐほど振り回したくなる！（人にあたっても責任は取りません）

第七十五訓：ハジケ過ぎると身が持たない（後書き）

真王「なぜハジケリストがここにいるかはあえて聞かないでほしい。  
んで次回はみんな楽しい遊園地の世界！しかしそこである依頼主が  
銀時達と何かしようとしているが…」

ポーボボ「次回『人の恋路を邪魔する奴は銃に撃たれて死んじまえ』  
テイクオフだ」



第七十六訓：人の恋路を邪魔する奴は銃に撃たれて死んじまえ（前書き）

真王「今回は遊園地のステージ。そこである男が依頼を…」

銀時「ある男って誰だ？」

真王「見てればわかる」

（アミューズメントギャラクシー）

『娘と男を追いかけて』

第七十六訓：人の恋路を邪魔する奴は銃に撃たれて死んじまえ

星船のある部屋で男達が話し合いをしていた。

「……偶然とはいえ、俺の話を聞いてくれるか？奴が動き出した」

その中の一人である白髪に若本ボイスのグラサンのおじさん・勝平である。

銀時「……おい、それって本当か？」

勝平「本当だとも、俺も目を疑ったが確かだ。だから手段をとわねえ、奴も奴の企みも全て……潰す」

いつにもなく真剣な2人。

銀時「……そうか……お前がそう言うならば……俺のこの命をお前に預けよう」

勝平「……けつ、せいぜい頼りにしてるぞ」

勝平は立ち上がってその場を去った。

銀時「……なあ新八」

新八「なんですか？」

銀時「……奴って誰だ？」

新八「知らんのかいい！！！」

ただ頷いただけかよ……。



「!!」

ライフル構えながら言う勝平に新八とアイエフが突っ込む。

アイエフ「奴って何かと思ったら娘さんの彼氏じゃない!!」

勝平「うるせえよ!あんな奴彼氏だなんて認めねえよ!!っていうかデートなど認めません!おじさんは認めませえん!!!!」

アイエフの言い分に勝平は頑固否定する。

アイエフ「あたし的にあんたが世界の責任者なのが認めないわよ!

」

ギルシア「テメエがあんなかわいい子のお父さんだなんて認めねえよ!!」

レーティア「貴様のようなブ男がお父さんだなんて認めないわよ!

」

ネプテューヌ「このポップコーンが500円だなんて認めないよ!!」

新八「オメエらは黙ってる!!」

アイエフが言うと便乗してギルシア、レーティア、ネプテューヌが  
いって新八が怒鳴る。

銀時「ってどんな依頼かと思えば娘のデートを邪魔するだあ?」

グレイ「付き合ってるれん」

銀時は呆れた感じでいい、グレイも呆れて帰ろうとする。

勝平「おい待てえ、俺がいつそんなこと頼んだあ?」

勝平が引き留める。

松平「俺はただ、あのチャラ男を抹殺したいだけだよ」

銀時・新八・アイエフ「もっと出来るか！」

更に物騒なので突っ込む3人。

勝平「娘が好きになった奴は幸せにしたいが、悩んで悩んで、そして抹殺と導きだしたんだあ」

アイエフ「いろいろ考えすぎよ!!」

アイエフは怒鳴る。

新八「ビビさん、こう言う親ばかりの人に何か言ってあげてください」

新八は隣でござござしているビビに言う。

ビビ「誰がビビって？あたしは殺し屋リリー13（サーティーン）と呼びなさい」

なぜかグラスンかけてライフルを構えるビビ。

アイエフ「ちよつと、殺し屋って何？13って何？」

ビビ「不吉の象徴、あんなチャラ男野郎に女の子が好きにさせてたまるかアアアアアアアアア!!!!!!」

アイエフが聞くとビビは答えて直行した。

勝平「ちよつとお！俺を置いてかないでくれませんかあ!？」

勝平も追いかけた。

銀時「やべえな、ありや絶対に殺りかねないぞ」

新八「ネプテューヌさん、あの人たちを止めなきゃ…」

銀時が呟いて、新八が止めるようネプテューヌ達に言つと、

ネプテューヌ「誰がネプテューヌ？私は殺し屋パープル13だよ？」

ノワール「そして私はブラック13」

ブラン「・・・ホワイト13」

ベール「そして私はグリーン13ですわ」

なぜかグラスンとライフルを装備した4女神。

そして入口へ走っていった。

ネプテューヌ「面白そうだから行ってくる」

銀時「お〜い！！ってだめだ。もう行つちまいやがった」

神「面白そうだな。なら俺は殺し屋ゴッド13いくぜ！」

新八「お前もかイイイイイイイ！！！！」

神まで向かって行って新八が突っ込む。

レーティア「まああなた達は彼女達を追って、私達はここで満喫するから」

新八「あ、はい」

とりあえずレーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア、ヴィヴィオ、プリニー、コンパ、アイエフ、桂、エリザベスは遊園地を満喫し、それ以外は勝平達を追いかけた。

メリーゴーランド開演中、栗子と男が楽しそうにしている。  
その後ろでライフルを構える13ズ。

勝平「野郎やりやがるな、まさかこれを選ぶとはな…」

ベール「狙いが定まりませんわ…」

神「それよりいつになったら縮まるわけなんだ？」

グレイ「縮まるか、これメリーゴーランドだぞ？永遠に回り続ける」

グレイはジト目でそう言う。

神楽「メリーとバント？何アルかソレ？遊園地行った事ないからわかんないアル」

新八「やっぱ殺人沙汰は行き過ぎにも限度がありますよ！あの二人の仲引き裂くにしても他に方法があるでしょう」

神楽はいいとして、新八は助言をすると、

勝平「イヤ、あの男が娘といるだけで抹殺予定なんだよ」

新八「きつぱり言いやがったよこの人お！！」

勝平の親ばかり行為は限度を超えていた。

レーティアサイド

レーティア「うくん、このカルボナーラおいしいわ」

ギルシア「だるうな。ってかあいつ凄い量を食べてんな」

カルボナーラを食べて感想を言うレーティア。

ギルシアが隣の席でドドンと立っている巨大ケーキをバクバク食っているシャルを見て言う。

看板には『巨大ケーキ、5分以内に食べ切れたら無料!』と書かれている。

レーティア「底なしの胃袋ね。改造されたときにかしら? はい、あくん」

ギルシア「イヤ多分元からだと思うぜ。あくん」

レーティアがカルボナーラをさし出してギルシアが食べる。

レーティア「おいしい?」

ギルシア「ああ、うめえぜ。まあレーティアが作った方がおいしいと思うがな」

レーティア「ウフフ、ありがとノノノノ」

レーティアは顔を赤くしてお礼を言う。

2人に周りに桃色空間が出来て、その周りにカップル達の嫉妬と殺意の膜が出来ている。

アイエフ・コンパ・プリニー・桂・エリザベス

(端っこでよかった(です)∴(ツス))

端っこのテーブルで座っている5人(っていうか3人と2匹)は冷



や汗を流し、ヴィヴィオに至っては震えており、シャルは殺意の中にいるが平然とケーキを完食した。

変わって銀時サイド

栗子と男はジェットコースターを見ている。

栗子「私あれに乗りたいでございます」

男「オイオイマジかよ。俺ああいつの苦手なんだよなあ」

頭を掻く男。

男「ワリい、ちょっと一人で乗っててくれねえか？」

栗子「イヤでございまするよ。一緒に乗るでございまする」

するとジェットコースターが通り過ぎて栗子が眺める。

すると男の後ろに、

ビビ「ガタガタうるさいわよクソ野郎」

ナイフを突き付けるビビがいた。

ビビ「騒いだら穴がもう一つ増えるわよ？」

男「ヒイツ！」

男は脅迫されて固まる。

栗子「?どつしましたでございますか?」  
男「あ、いや、その、やっぱ一緒に乗るか」

栗子が振り返って聞くと男は汗を流しながら言い、栗子は嬉しそうな顔をする。

そしてジェットコースターにて、

男と栗子は前から二番目の席、ビビはその後ろの席、銀時達が一番後ろの席だ。

ビビ「……………せ」

男「え?」

ビビ「ジェットコースターが戻る前にクソでも汚い液体でもいいからだしなさい。さもないと地獄よりひどいことが起きるから」

ナイフを首筋に突き付けて脅すビビ。

栗子「?あの、怖いのなら降りるでございますか?」

栗子がおかしいと感じた栗子は男に聞く。

ちなみに「降りたら殺す」とビビに釘打たれている。

男「いやいやいや、大丈夫だって!どんどこいじゃ!」

栗子「…………あの(ガクンッ!)」

何か言おうとしたら突然ジェットコースターが動き出した。

ネプテューヌ「わぁ~~~~~!!!」

ノワール「ちょ、これきついわね!!」

銀時「うおおおおおおお!!」

高速で動くジェットコースターに騒ぐ銀時達。

神「どうだ様子…」ああああああ!!「ウゴオツ!!」

前から何かにぶつかった。

グレイ「…何してんだお前…」

ビビ「ベルト閉めるの忘れてた!!ベルト閉めるの忘れてたああ!!」

何とベルトを締め忘れたビビが飛んで着て神にぶつかって今は銀時と新八の席を掴んでいる。

そして急降下や回転がでる。

ビビ「あわわわわ!!!!こんな状態でジェットコースター乗るなんて初めてだよオオオオ!!!!」( ; ) / 「

銀時「だからって俺の髪を掴…ギヤアああああああああああああああ!!!!」

もはや暴走状態のビビは苦し紛れに銀時の頭を掴む。

そしてジェットコースターは終わった。

栗子「は、怖かったでございます」

そう言っている栗子だがたのしそうだ。

男「……………」





あれみて」

ベンチで座っている勝平がうなだれていて、ビビはある方向をさす。そこには着替えた男となぜかそのままの栗子だった。

ビビ「あのクソ男は着替えたのに栗子ちゃんはそのままよ」

神楽「決にくそ挟めたアルか？」

ビビ「んなわけないでしょ、そしてイメージをぶち壊すな」

神楽が下品なこと言ってビビが突っ込む。

ビビ「きつとあの子はあのクソ男を傷つけないために嘘ついたのよ」

勝平「ナニイ・・・」

ブラン「それでどうするの？むこう言ってるけど・・・」

説明するビビに着替えたブランがある物を見て言う。

それは栗子と男が観覧車へ向かうところだ。

ベール「！？まずいですわ！この先のパターンはいろいろ口説いたあとキスする気ですわ！！」

ビビ「なんだと！？だった強制中止じゃアアアアアアアアア！！！！」

ビビがダツシユで向かい、勝平、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、神も追いかける。

新八「ああ、どうするんですかこの後」

銀時「知るかよ」

グレイ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

新八が聞くと銀時はそう返す。

グレイ「・・・まったく仕方ないな・・・」

とグレイはどこかへ行った。

新八「あれ？グレイさん何処に？」

新八と銀時と神楽が周りを見る。  
するとジャンヌ達が現れる。

ジャンヌ「ねえ、お姉ちゃん見なかった？」

銀時「見てねえよ。こっちはグレイがどっか行っちゃまった」

ジャンヌ達はレーティアを探しているようだ。  
2人は何処へ？

### 観覧車・ゴンドラ内

栗子と男が見つめ合って話している。

男「しかし、凄いな。普通引くぞ？一緒に遊んでる相手が脱糞した  
ら」

栗子「ふふふ、私はそれぐらいでは引きませんでございませう」

男「く、栗子・・・」

栗子「それに・・・私はあなたのことが・・・」





巻き込まれた13ズはへりごと落ちて墜落した。

男「な、なんなんだあの女は……」

栗子「……………(ぼ〜)」

啞然と見る男と顔を赤くして見る栗子。

グレイ「…もうここにはようはないわ。幸せにきなさい」

グレイはそう言って立ち去ろうとすると、

栗子「あの！こんな脱糞野郎と別れるでございませうから付き合ってくださいでございませうかあ！！？」

グレイ「……………はあ？あつ」

いきなり栗子が告白する。

それにグレイはあつけをとられて足を滑らせた。

が、途中でレーティアが飛んできた。

レーティア「あとをついてきてみれば、何やってるのかしら？」

グレイ「…気に入らん奴を排除しただけだ。しかしその羽は……」

レーティア「まだ話さないわ」

一人覆えるような大きな羽で飛んでいるのでグレイが聞くが、レーティアの言葉にそうかと返す。

レーティア「それにしてもあのカップル助けるなんてどうい吹き回し？」

グレイ「さっきも言った様に邪魔もの排除だ」

レーティアが聞くとグレイはそう返す。

レーティア「素直じゃないわね。ツンデ「言わせないぞ?」はいはい」

そんなこんなで銀時達はアミューズメントギャラクシーを後にした。

くおまけく

銀八「教えて!」

全員「銀八先生!」

イーバ「宇宙の旅人、イーバだよ」

銀八「はい、んじゃ始めるぞ。ペンネーム『月光閃火』さんからだ。『ども』月光閃火だ。

しかし…まさかのボーボ勢の一部がゴロツと登場か…。あしらう

のも一苦労だな…（汗）。

輝刃「ああ…さすがの俺も、彼らをあしらうのは至難の所業だぜ…。  
あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・イーバに質問…銀時達と初めて会った時の感想を頼む。

ハハハ…シンプルにいったね…。次は俺からだ。

2・高杉に質問…正直言って、ポーボボの事どう思う？あとまた子ちゃんにも質問…高杉とおなじ声の持ち主であるポーボボをどう思う？

輝刃「…また子“ちゃん”って…。そんな『少女』な歳ではないだろう…。ところで、またバトンが来たぞ？」

ああ…またやるぜ。もちろん、載せはオツケーの運びでな。『』

イーバ「天然で馬鹿だね」

銀八「おゝい、それって天然パーマで頭馬鹿って言うてんのか？ま  
いつか、次」

高杉「こいつが俺と同じ声だと…？」

また子「ちょおお！！晋介様と同じ声は許せないッスー！！つーかち  
やんづけ止めて！恥ずかしいから！」

銀八「ハイこんな反応でした。『月光閃火』さん、廊下に立ってな  
さい」

イーバ「次はペンネーム『鳴神 ソラ』からだね。『マリオ』『ボ  
ボ』と天の助、首領パッチが出たな……」

ルイージ「ホント凄いな……」

スネーク「次はどんなギャラクシーなのやら……」

フォックス「桂の奴、ボケキャラだなホント……」

明久「質問『先生の殺気はどうでした？』」

ネス「ネプテューヌさん達に質問『冥王についてどう思う？』」

ルイージ「同じく質問『どうやってボロボロ達と知り合ったの？具  
体的に教えてね。』」

そんな訳で次回を楽しみにしています 『』

真王「皆さんたじろいでしたよ。マリオは敵に回したくないの  
意味で」

ネプテューヌ「なのはさんそっくりでも強いね」

ノワール「アレが違うけどね」

ブラン「……………」(一部分を見て殺気を放っている)

ベール「ほぼ私と同じくらいでしょうか？」(一部分を見て)」

真王「ボーボボと出会った理由ですか？なんでも季節外れにサンタクローズ（ボーボボ）がやってきて彼女達みんな驚いてボーボボ達がハジケまくってネプテューヌ達がストンピングしてその後なんかんやでボーボボとネプテューヌとベールが仲良くなった敵な感じですよ」

イーバ「それ適当に答えた気がするよ…。『鳴神 ソラ』廊下に立つてなさいよ」

真王「それじゃあ『月光閃火』さんのバトンを公開しよう」

『1・トゲ

「あ…チクツときた…！」

2・毒ガス

「うっ…これはちとキツいな…（汗）。」

3・火炎放射

「アツツツツ…！！」

4・ゲルゲル

「はう…目が回るう…。」

5・トラバサミ

「イテツ…咬みやがったよ…。」

6・落石

「へぶっ…！？」 頭に落石が当たった

7・矢

「うおっ…危ねえなあ…。」

8・ハンマー

「うへえ…。」 何とか振り下ろしの際を突いて回避

9・プレス

「又グググ…！！」 ペチャンコになりたくない一心で何とか持ち上げて擦り移動（汗）

- 10・間欠泉  
「おお…!？」 間欠泉に乗ってちよつと驚き
- 11・間欠炎  
「……………(汗)。」 服黒焦げの身体煤まみれ
- 12・電撃  
「アババババ…!？」 あまりの刺激に髪型スー | サ ヤ人化  
(汗)
- 13・バンパー  
「のわっ…!」
- 14・バナナの皮  
「あゝらよつと」 バナナの皮に乗って軽快に滑っている(汗)
- 15・爆弾  
「グフツ…!」
- 16・トランポリン  
「あぼ〜ん…。」 跳ねに身を任せ飛んでいく(汗)
- 17・パンチマシーン  
「ブフツ…!」 ストレート  
「ガフツ…!」 アツパー  
「グベツ…!」 げんこつ
- 18・沼  
「チツ…上手く進めないな…。」
- 19・雷  
「あつぶねえ…(汗)。」
- 20・まきびし  
「アタタタ…痛えな…。」
- 21・ゴロゴロ岩  
「何か気分はイン イージ ーンズ〜!？」
- 22・火の玉  
「とりあえず打つ!」 何処からともなくバットを出して火の玉ノ  
ツク(汗)



隕石を全力の飛び蹴りで壊す(汗)

37・タライ

「アタツ…。」

38・バケツ

「ぬおっ…前が見えんツ!？」 上手い具合に被ってしまう(汗)

39・ナベ

「ゲフツ…!」

40・フォーク(人間サイズ)

「あつぶなあ…(汗)。」

41・ギロチン

「ヒェ…あと一歩でお陀仏だったぜ…(汗)。」

42・レーザー

「ほっ…!」 レーザーの当たる所に肉を当てて焼く(汗)

43・落とし穴

「落ちるウウウウ…!」

44・スタート連れ戻し

「あれ?入口に戻った?」

45・レベルダウン

「オイオイ…レベルが落ちるってアリかよ…(汗)。」

46・アイテム損失

「あ…せつかくのレアアイテムが…(汗)。」

47・隠れモンスター

「ええ…(汗)。何でよりによって…(汗)。」

48・回す人

「このバトンを見てくれてる人全員…じゃダメかな?」

真王「それから『鳴神 ソラ』さんのバトンもだ」

『今回長いな…マリオとルイージで…』



1：トゲ  
「あいた！」  
「あいたたた！」

2：毒ガス  
「うお！？」  
「毒ガスだ……」

3：火炎放射  
「あつつ！」  
「うわあ！」

4：グルグル  
「目が回る！」  
「うひゃあ〜」

5：トラバサミ  
「ばりいた！？」  
「おおう！？」

6：落石  
「ふん！」 壊した  
「ルイージロケット！」 同じく

7：矢  
「スーパーマント！」  
「シールド」 防いだ

8：ハンマー  
「ハンマー返し！」 自分のハンマーで殴り飛ばす。  
「おっと！」

9：プレス  
「ふんりやあああ！！」 押し返した  
「ひいいい！！」

10：間欠泉  
「こりゃあ良い湯だ」

「兄さん！」  
11：間欠炎  
「あっちゃあ！」  
「やっぱり……」  
12：電撃  
「びびびびびび！」  
「防ぐよ！」  
13：バンパー  
「バンパー！」  
「うわあ！」  
14：バナナの皮  
「あうち！」  
「こけた……」  
15：爆弾  
「どわっ！」  
「こつち投げないで！」  
16：トランポリン  
「ぴよんぴよん」  
「凄いね」  
17：パンチマシン（ストレート）  
「良いパンチだ」  
「何ボクシングのトレーニングの様にしてるの！？」  
18：パンチマシン（アッパー）  
「おっと！」  
「まだやるんだ……」  
19：パンチマシン（げんこつ）  
「おっと！」  
「げんこつも放つの！？」  
20：沼  
「沈まない様に注意しないとな」

「慎重に…」  
21：雷  
「うおっ！」  
「あぶなっ!?!」  
22：まきびし  
「地味に痛いな」  
「確かに」  
23：ゴロゴロ岩  
「走れ！」  
「走るよ！」  
24：火の玉  
「スーパーマント！」  
「うひゃあ!?!」  
25：間欠冷氣  
「冷たいな…」  
「そつだね…」  
26：蜘蛛の巣  
「燃やせば良いか？」  
「やばいから！」  
27：ネバネバ  
「粘々するな…」  
「進み難しいね」  
28：毒液  
「スーパーマント！」  
「あつぶな…」  
29：突風  
「踏ん張らないと吹き飛ばされそつだな」  
「ひいひい！」  
30：竜巻  
「回る回る」

「慣れてるからね」

31：砂なだれ

「逃げるおおお！」

「同感！」

32：虫

「よつと！」

「うわぁ！」

33：大虫

「てい！」

「やあ！」 ルイージロケットで吹っ飛ばす。

34：触手

「切り刻む！」

「殴ります！」

35：イカスミ

「カートであつたな」

「そうだね……」

36：水攻め

「丁度良いな」

「顔洗うのにね」

37：マグマ

「マメマリオでダッシュ！」

「うひひひ！」

38：隕石

「走れ走れ！」

「多い多い！」

39：タライ

「あいた！」

「痛い！」

40：バケツ

「前が……」

「あつたね……」  
41：ナベ  
「今度はナベが……」  
「まただね」  
42：フォーク（人間サイズ）  
「真剣白刃取り……！」  
「よお〜やるよ」  
43：ギロチン  
「うおつと……！」  
「流石にね……」  
44：レーザー  
「スーパーマント……！」  
「危ないな」  
45：落とし穴  
「落ちるか」  
「どこに行くの……！」  
46：スタート連れ戻し  
「スタートに戻ったか……」  
「そうらしいね」  
47：レベルダウン  
「いかん！早く修行して取り戻さない……！」  
「早いな兄さん」  
48：アイテム損失  
「ああ！？キノコが……！」  
「こつちもキノコが……！」  
49：隠れモンスター  
「隠れモンスターか」  
「どんなアイテムを持ってるんだろ……！」  
50：回す人  
「柵に回すぞ」

「黒一文字さんに回します」

『…こんな感じで』

真王「次回はレーティアがやるよ？ではまた」

第七十六訓：人の恋路を邪魔する奴は銃に撃たれて死んじまえ（後書き）

真王「今回は暑い夏にふさわしい海のステージだ！」

レーティア「次回『夏と言えば海が一番』テイクオフよ？」

第七十七訓・夏と言えば海が一番（前書き）

真王「今回は海のステージ！みんなで泳ぎましょう！」

（アトランティスオーシャンギャラクシー）

『海の世界で大満喫』



## 第七十七訓：夏と言えば海が一番

銀時達が星船で移動中、なのは達機動六課にて、

はやて「ホンマ何処におるんが銀ちゃんたちは…」

はやては部隊長室で頭を抱えている。

なんせ銀時達はあの怪獣騒動のあと行方が分からなくなっているのだ。

なのは「いろいろ探したけど何処にも見当たらない」

フェイト「こつちも検討が付かないよ」

はやて「どうしたもんかなあ…」

3人は悩んでいると、

イストワール「私でしたら探せますよ？」

イストワールが出てきて言って、3人は喰いかかる。

はやて「ホンマか!!」

イストワール「はい、ですが見つけ出すのに3日かかってしまいましたが…」

はやて「なんや3日か。そんな時間…待てるかアアアアアアアアアアア!!!」

はやては思いっきり頭を抱えて叫んだ。

はやて「3日立って待つより自分で探した方が早いやないかい」

なのは「そ、そうだね…」

はやて「・・・まあこれはどうでもいい」とやけど、熱いわ…」  
フェイト「そりゃ私達も熱いよ…」

はやてとなのはとフェイトは汗を長いて言っつ。

ミッドチルダは今夏真っ盛り。

はやて「あゝ、いつか桂さん達と海でパシャパシャしたいゝ」

はやてはむなしく突っ伏した。

で、今銀時達は何処でなにしてるかというつと、海の星にいます。

アトランティスオーシャンギャラクシー

IBGMスカイビーチギャラクシー  
byスーパーマリオギャラクシー  
12

(Super Mario Galaxy 2 Music Extended - Starshine Beach Galaxy)  
y

神楽「ううううみいいいじゃアアアアアアアアアアアアあああああ  
あ！……！……」

傘をさして海に向かって叫ぶ神楽。

ネプテューヌ「海じゃアアアアアア!!!」

同じく海に向かって叫ぶネプテューヌ。

ちなみに今着ている水着は黄色とオレンジのフリル付き水着（頭のアクセサリーに赤い花）。

ヴィヴィオ「海だあああ!!!」

更に同じく叫ぶヴィヴィオ。

水着は黒だ。

アイエフ「元気ね」

コンパ「ねぶねぶ、先に準備体操するですよ?」

そんな二人を見るアイエフと呼ぶコンパ。

アイエフは黒と青の混ざったビギニ。

コンパは白に茶色の斑点とリボンの付いたビギニだ。

銀時「しっかし宇宙にも海がいっぱいのもあるんだな」

新八「たしかに・・・」

桂「良い風景ではないか」

エリザベス「ですね」

銀時と新八と桂はシートの上で眺めて言う。

ちなみに3人は水色のトランクス水着だ。

あとエリザベスはそのまま。

ノワール「まさかここで貸し切りみたいに出来るのって憧れるわ」

ブラン「……………」  
ベール「フフ、久々にひと泳ぎですわ」

ピンクに白斑点のビギニのノワール、白と水色の網状の水着のブラン、白と紫のビギニ（スカート付き）のベールが現れる。

ギルシア「おい見るよ、素晴らしい物が拝められるぜ？」

桂「うむ、確かに」

銀時「俺もだ」

新八「神秘の光景ですね」

ギルシアの筆頭に男達は鼻血を出して見る。

プリニー「カメラスタンバイオツケイツス」

何処から取り出したのかビデオカメラを担ぐプリニー。

銀時「よしプリニー、早速あいつとかの「なにをやるう」としてるのかな？」イテッ！」

銀時はスイカ型のビーチボールをぶつけられた。

レーティア「思春期ねあなた達」

ジャンヌ「それが男だもんね」

シャル「海じゃああ！」

ビビ「ヴィヴィオたん水着萌〜…」

レーティアが呆れ、ジャンヌはそう言って、シャルは叫んで、ビビはオヤジっぽい言動をしている。

ちなみにレーティアは黒で紫の斑点のビギニ、ジャンヌとビビは両





げ飛ばした。

レーティア「何やるうとしてんのよ」

銀時「お前からこそ何やるうとしてんだよ!!この小説を18禁にさせるきかよ!!!!」

邪魔されたことに睨むレーティアに銀時は怒鳴り返す。

レーティア「15禁ギリギリならOKでしょ?」

銀時「いやそついう問題じゃねえよ!!!!」

ジャンヌ「はいはい貴方はさっさとあつちを觀望しましょうね」

ジャンヌは銀時の耳を引っ張って連れて行く。

レーティア「・・・さて、続きをして?」

ギルシア「おう!!」

レーティアの体がギルシアのよってきれいに塗られたり揉まれていく。

本人は満更ではないらしいが。

で...

ネプテューヌ「いやっほおおおおおおう!!!!!!!!!!」

ドボーーーーーン!!!!

崖の上からネプテューヌがとびこみ、水しぶきが上がる。

ネプテューヌ「ぶはっ！・・・おゝい！こっちだよ」

ネプテューヌは海から顔を出して崖の上にいるヴィヴィオ達に手を振る。

ヴィヴィオ「いくよ！それ〜！」

プリニー「俺を下にしないでくれッス〜！！！！」

ヴィヴィオもプリニーと一緒に飛び込む。

シャル「よ〜〜」

ジャンヌ「キャ〜〜落ちそう〜！！」

ビビ「キャああ気持ちい！！」

シャルは飛行しながらジャンヌとビビの乗っているバナナボートにロープで引っ張っている。

コンパ「ここをこうし…ってああ！また壊れたです！！」

コンパが砂の城作ろうとして壊れた。

アイエフ「幼稚ね」

コンパ「ほっとくです！成功してこそ嬉しさがあるんです！！」



アイエフは冷めた目で見てコンパは反論する。  
ちなみにノワールとベールは2人して椅子の上でパラソルの下で寝ている。

そしてブランは、

ブラン「……………できた」

立派なお城が出来ました。

大きさはブランの身長の二倍。

コンパとアイエフは啞然とするのだった。

で…

ネプテューヌ「それ！」

ジャンヌ「ぽん！」

ヴィヴィオ「それ〜！」

レーティア「やるじゃない」

今ネプテューヌ達はビーチバレーをやっていた。

レーティア「シューートツ〜！」

レーティアがスマッシュ放つ。

枠の中なため勝ち。

得点は15 - 13。レーティアチームがリード。

銀時「まったくみんな海となると元気になるんだな〜」

新八「当たり前です。みんな人間海から生まれたって言うじゃないですか」

銀時と新八は双眼鏡を持ってレーティア達（の一部）を見ている。2人とも鼻血を出して。

銀時「そうかもしれないな。まああいつらの発情はみんな一部に集まるもんな」

桂「なにを言う美しき女子は美のために一部に塊が出来たんだ」

銀時「じゃあお前の場合は脳細胞に血管でも詰まったのか？」

動くにつれて揺れる胸とかプリッ とするお尻を見ながらこんな会話をしている。

銀時「ん？そういやあいつは何処行っただ？」

新八「え？見てませんけど…」

銀時が周りを見ながらそう言う。

あいつとは神様のことだ。

今度はスイカ割りしようとしている。

割るのはベールで目隠ししてスイカの方へ行こうとしている。

ネプテューヌ「ベールウ、もうちょい右だよ！」

プリニー「次は真っ直ぐッス！」

レーティア「もう少し…っとそこよ！」

周りの指示でスイカの前まで来たベール。

ベール「ええい!!」

棒を思いつきり振ってスイカを割った。  
そしてみんなでおいしく頂きました。

神「大量に取ったどー！！！！！！！！！！」

すると海からすごい大物を持って飛び上がった神が出てきた。  
そして着地と同時に何種もの魚やお宝の様な『貝獣マイマイ』、  
トゲガイ』も持ってきた。  
ちなみに神は虹色のトランクスだ。

ネプテューヌ「今まで海の中で取ってきたの？」

神「おう、取れたて新鮮だぞ？」

神は自慢げに言う。

レーティア「その中にでかすぎるタコがいるんだけど…」

レーティアが言うのと、『海の壺』中から大きなたこがはい出てくる。

シュルルル!

ネプテューヌ「えちよ、きゃあああああ!!!!」

ネプテューヌ含む女性人達がタコの足に捕まった。

レーティア「クッ、こんな…/ / /」

ビビ「イヤ~~~~!!!!気持ち悪い~~~~!!!!」

ノワール「こらッ！パンツだけは止める~~~~!!!!」  
ベール「ちょ！そこを握つては、ああっ!!!!」

タコ足で女性達があわれもなくなっていく。

銀時「・・・いい景色だ」

新八「...はい」

桂「...うむ」

ギルシア「入るのか？、まさか入るのか？」

エリザベス『宝庫ですね』

プリニー「シャッターチャンスッス」

女性陣「なにやっとなんじゃ男共オオオオオオオオオオ!!!!」

鼻血流して眺める男達に怒鳴る女性陣。

ちなみに神は「またとってくる」と言つて海へ飛び込んでいった。

レーティア「みんな落ち着きなさいよ。この子はただ遊びたいみたいよ?・・・あ、もう少し奥へ入れて？」

ジャンヌ「あう／＼／＼／＼この感覚、癖になりそう／＼／＼」  
全員「何やってんだこの変態姉妹ども~~~~!!!!」

縛られていることに快感を求めているデビリアス姉妹に全員怒鳴る。

銀時「まってる！うおおおおお!!!!」

銀時は木刀を持って巨大なこの足を切り落とす。

ネプテューヌ達は助かったが、レーティアだけが捕まっていた。

ギルシア「レーティア！今助けるぞ！ディーン・ドライブ・ブラッ  
クバード！」







くおまけ

銀八「おしえて！」

全員「銀八先生！！」

レーティア「は？い？みんなのアイドルレーティアです？」

銀八「みんなのアイドルって…自分で言ってる恥ずかしくな「先生、少し黙っててください」ウゴオツ！！」

レーティアは銀八の首を絞めて気絶させた。

レーティア「さて、ペンネーム『鳴神 ソラ』さんから行くわよ。

『マリオ「銀魂のあのネタだな」

ルイージ「あははは…」

フォックス「ある意味ご愁傷様…」

スネーク「そうだな…と言うか何時の間にか来てたんだな…」

クッパ「メンバーに質問なのだ『マリオの殺気を向けられたら耐えられるか？』」

マリオ「おいおい、無差別に放つみたいでやめてくれないか？グレイに質問『今の世界に来て居心地はどうだ？』」



ルイージ「神様に質問『兄さんはどう思いますか？』」

次回を楽しみにしてます 『普通の人ならまず気絶するわね。次はグレイと神様よ』

グレイ「前の方がましだと思っな…（遠い目）」

レーティア「沢山のポケどもに苦労してるってことね…」

神「あいつか？俺様的には物語の邪魔になるなら容赦はしないぜ？」

レーティア「それじゃあ『鳴神 ソラ』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『リイン』さんよ。』どうも、お久しぶりです。最近、テストやらレポート提出やらで暇がなかったリインです

神「 オイ、コイツハドウイウコトダ？」

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッッ……………！！！！」

か……………かみ、さま……………？

神「ナンダカヨオ、俺ノ偽物ガイルミタインナンダヨナア、オイ……………」

え？ 神様の、偽物？

神「アア……………ゴツド13？ あんな、人の恋路を邪魔するな  
ど……………俺ジャネエ、俺であつてはならない……………」

ツ……………た、確かに、貴方の真名は、“契りの仲立ち人”、で



……」

(か、かかかか、神様、マジギレだああああッ!!!!!!)

神「Je veux le sang, sang, sang,  
et sang. Donnons le sang de gu  
illotine. Pour guérir la seche  
resse de la guillotine. Ja veu  
x le sang, sang, sang, et sang  
!!!!!!」

「ダッシュッ!!!!!!!!」

ああ……………行っちゃった……………こりゃあ、もう全員断頭ですな、う  
ん……………

あ、そうだ。あのバトンですが、多分、明日ぐらいに掲載すると思  
いますので。なごらく放置していて、大変申し訳ありませんでした

m (——) m

あと、一つ私から質問を

・この作品の中に、重度の中二病の方って、何人くらいいますか？

では!!! 次回も楽しみにしておりますので、執筆、がんばって下  
さい!!!!!! 失礼します!!!!!!



め。次はペンネーム『黒神』さんからよ。『黒神

「いやあ、あのロリ鬼の漏らしが主に受けましたなあ」(黒笑)

銀時

「さっそくかよおい!!後でブランに殺されても知らねえからな!  
!」

黒神

「そんな感じで質問(黒笑)」

銀時

「聞けやあ!!」

近藤へ

僕の小説では、マヨラーとドSを差し置いて本編に出ている貴方ですが、2人に申し訳ない気分ですか?

ゆりと音無へ

ゲストとして呼ばれた事をどう思いますか?

ブランへ

漏らしネタはそう続かないかも知れないのでご安心を(黒笑い)

銀時

「こいつ、ほんと最低のドS読者だなおい!!」『…あなたいじめ  
て楽しいの? まあいいけど」

近藤「うむ・・・トシ、総悟、すまない」

ゆり「私の扱ってあれなの!？」

音無「お、落ち着けゆり!」

レーティア「ブランなら赤コウラ100個とスター持ってあなたの  
ところへ行つたわ。『黒神』さん、いい加減に虐めるのやめなさい。  
最後にペンネーム『月光閃火』さんからよ。『ども』: 月光閃火だ。

しかし: 13 (サーティーン) 系の話か…。グレイ: 制裁ご苦労さ  
ん。(合掌)

輝刃「しかし: 間のレーティアとギルシアの甘々シーンは砂糖大フ  
イーバーだな...(汗)。」

うん: あの桃色空間はさすがにツライ...(汗)。あ: 質問: 行くぞ  
? まずは俺からだ。

1. また子ちゃんに質問: つつーか、感想だ。前の質問の時の恥ず  
かしがつてるまた子ちゃん、結構可愛いぜ

輝刃「: 最後の所でキメるなキメるな...(汗)。次は俺からだ。」

2・真王に質問：新八に何らかの恋愛フラグは建つのか？このまま何の实りも無しは、あまりにも可哀想な気が…。

確かに、新八って他の二次創作では大概フラグとか無縁だったりしてるし…何かもつたない気がするな…。

輝刃「ああ…新八はオタクである事を除けば、結構純粹で優しい青年だからな…。」

また子「かわいいと言うなアアアアアアアアアアアアツス！！！」

真王「銀河編終わったら新八の恋の物語を作る予定。『月光閃火』さん、期待してもいいです」

レーティア「次は私の妹がやるわ。またね？」

〜今日のお宝鑑定〜

〜貝獣マイマイ〜

価値：1200円

見た目：サザエ

イーバメモ：貝類族の暴れ者の殻みただけどこれって家の様に出るのかねえ？

ドルフィンメモ：貝類の怪獣が遺したと言われるこの一品！こいつ

の防御力は抜群です！

トゲガイ

価値：500円

見た目：ホネガイ

イーバメモ：この界はなんだかトゲトゲしているね。それ以外は特  
にないね。

ドルフィンメモ：とげとげした大きな貝！それ以外は特にないのが  
玉にきずですが。

海の壺

価値：2000円

見た目：タコつぼ

イーバメモ：あの巨大たこが出てきた壺だね。きっとあのタコにと  
つていい場所なんだろうねこれ。

ドルフィンメモ：海の世界にはこんな壺という神秘がある！そうは  
思いませんか！？



第七十七訓：夏と言えば海が一番（後書き）

真王「今回は何と寒い世界です」

ジャンヌ「次回『普段怒らない奴が怒るとめっちゃ怖い』テイクオ  
フ」

第七十八訓：普段怒らない奴が怒るとめっちゃ怖い（前書き）

真王「今回は寒い世界であの人が切れる!？」

銀時「あの人って何？なんかスツゲエ気になるんだけど!？」

真王「見てれば分かる」

銀時「イヤ教えてくれよオオオオオオオオオオ!?!?!?!?!」

（ブリザードマウンテンギヤラクシー）

『吹雪の世界のカチコチコング』

第七十八訓：普段怒らない奴が怒るとめっちゃ怖い

銀時達は星船で次の星へ到着した。

イーバ「さあみんな！暑い日にぴったりの銀河群ギャラクシーに着いたよ。頑張  
つていきな」

そして銀時達はギャラクシーへ降りた。

ブリザードマウンテンギャラクシー

IBGMアイスポルケーノギャラクシーbyスーパーマリオギャラ  
クシー

( Super Mario Galaxy Music Extended - Ice  
Frozen Flame Galaxy - Ice

銀時「ここに降りたのはいいけどや…」

銀時は深呼吸して大声で叫んだ。

銀時「ここ寒過ぎるじゃねえかあああ~~~~~!!!!!!」

超極寒のギャラクシーの世界ではほぼ真っ白に近いブリザードマウンテンギャラクシー。

そして何と言っても気温は5 程度だ。

ネプテューヌ「ブルル・・・さ、寒いぃ、ルウィーよりも寒いぃ」

ノワール「こここんなに寒いだなんて聞いてないわよオオ」  
神楽「さささ寒過ぎてみみ身が凍えるねえ」

上記3人は体をぶるぶる震わせている。

アイエフ「いいい一体こんなに寒いのはどういことなのよオオ」  
ビビ「さささ寒さに身がこたたたえるるうう」

ジャンヌ「う・・・何か眠くなってきたような・・・」

アイエフとビビも寒がっていると、ジャンヌが目をとととさせている。

レーティア「はっ!? ジャンヌ駄目よ! こんなところで寝たら死んでしまうわ!!」

スパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパ!

新八「レーティアさんスト~~~~プ!! それ以上やったらジャンヌちゃんが死んでしまいます!!」

レーティアがジャンヌは往復ビンタで眠気を飛ばそうとしているが、さすがにやり過ぎなので新八が止める。  
ジャンヌの顔はトマト級に膨れた。

ジャンヌ「お姉ちゃん、ここまですることないでしょう！  
レーティア「ご、ごめんね」

膨れて怒るジャンヌにレーティアは申し訳ない様に謝る。

新八「それにしてもこの以上の寒さは一体……」  
???「サイが誤ってごめんな“さい”！」

新八が原因がなんなのか考えていると何処からか声が聞こえた。  
すると一段と寒くなった気がする。

ネプテューヌ「あれ？なんか寒くなってない？」  
???「イクラのお値段さあ“いくら”？」

またもや声が聞こえる。  
そしてさらに寒くなった気がする。

???「鬚が“まげ”げられた！夜食が消えてい“やーショック”  
！縁側の“カレー”！」  
銀時「さ、さびいいいいいいいいいい！！！！！」

銀時達はギャグまがいな言葉を聞いて通常よりもすごい寒さを感じた。

そして現れたのは氷の塊のモンスターだった。

カチコチキング「フハハハハ！みんな寒いのが好きさ！だから  
みんな寒くなれ。とどの“とど”つまり！」  
全員「エヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！！！！！」













コンパ「…なんだか将来私不吉なあだ名で呼ばれそうです…」  
実際そうだったりするんだよ…。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

ジャンヌ「はい！今日は私がするよ」

銀八「おし、んじゃペンネーム『支配者』から始めるぞ。『海の話』とサキユバス…ですか…」

質問行きます。

マヨ方へ

刀に刺されて死ぬならどの部分がいいですか？（黒笑）

1、腹

2、胸

3、腹の下の急所

沖田に質問

どうやってマヨ方を殺すのが一番の理想ですか？  
詳しく教えてください

ブランに質問

お漏らしキャラになってしまいましたかそんな自分を如何思いますか？

自殺しますか？それとも漏らしっ子女神としてゲーム業界に名を残したいですか？（黒笑）「ではこの辺で最後にマヨ方とブランに一言…怒っちゃや〜よ……………ククククッ」『……………』

土方・ブラン「ぶち殺すぞこのやるオオオオオオオオオオオオ！！！！」

沖田「俺はじわじわと追い詰めてやる方がいいんでさあ」

真王「…そんじゃあ『支配者』さん、とっとと他人を怒らすようなことやめろ」

ジャンヌ「同意。次はペンネーム『鳴神 ソラ』さんからだよ。『マリオ』良かったな作者、こっちのコラボでのタイトル名を考える











鼻で笑っているつもりらしい。

ジャンヌ「…じゃあ『黒神』さんは廊下で立ってもらうとして、ペンネーム『月光閃火』からよ。』ども…月光閃火だ。

しかし…真王の所に居る神様、南無三だな…(汗)。とりあえず…繋げますか。(そういつて、遠隔技法+結合術式で真王の所に居る神様の頭と身体を繋げて命を繋ぐ)フウ…術式完了 次はあまりハメを外し過ぎない事だな…。

輝刃「…何と言うか…閃火凄すぎだな…(汗)。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1.レーティアとジャンヌに質問…サキュバスみたいな姿になれると話の中であつたが、正直言つて吸つてみたい男性キャラの生気はあるか？ただし、死なない程度に頼むぞ？

ハハハ…何も言えないや…(汗)。次は俺からだ。

2.また子ちゃんに質問…つつーか、また感想だ。そう怒鳴つても顔を赤くしてりやあまり説得力無いぞ？まあ…可愛いからいいが…。(そう言いつつ、また子の頭を遠隔技法で優しく撫でる)

輝刃「…ぶっ飛ばされんなよ…(汗)。「吸つてみたい男？シヨタ系と美男子系かな？お姉ちゃんもそうだし」

銀八「おいおい…。」

また子「うがああああああ！！！！触るなちくしょオオオオオ！！！！」

真王「暴走したぞあの女…まあいいか。『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

ジャンヌ「最後にペンネーム『黒龍』さんだよ。『黒龍』期末テストが終わったの久方ぶりの感想です」

銀時「久しぶりだな」

ソラ「テスト忙しかったからな」

黒龍「俺も無事にテストが終わって嬉しいです」

ソラ「推薦取れたからな」

黒龍「ホント一時はどうなるかと思いました」

銀時「まあ、話は変わるけどよ、良いもんだな」

黒龍「銀魂は純粋な下ネタで、真王さんはエロい下ネタですね」

銀時「ああ、トラブルみたいな感じだな」

ソラ「そうだな」

黒龍「じゃあ質問しますか」

1. 前の回でプランは小便漏らしましたが、やっぱりあなた見た目通り子供ですね（黒笑）



第七十八訓：普段怒らない奴が怒るとめっちゃ怖い（後書き）

真王「邪心コンパ怖え……。さて、次回は悪の船団に殴りこみ！そこでレーティアとジャンヌの仲間らしき人たちがいる！？」

コンパ「次回『戦友と書いてともと呼ぶ』テイクオフです」

（予告）

ナレーション「新たな転生者が加わりそうです」

第七十九訓：戦友と書いてともと呼ぶ（前書き）

真王「今回は何と銀時達に新たな転生者が仲間になります！」

銀時「つておい、一体いくらキャラ作る気なんだよ」

真王「良いじゃん、好きだから」

銀時「よくねえよ！俺達の出番が無くなっちゃうよ！！」

真王「大丈夫。ラスボス対戦では主人公出番があるから」

銀時「そうなのか？それならいいが……」

真王「ハイそれではスタート」

（イヴィル大船団）

『大突破！イヴィル大船団！』

## 第七十九訓：戦友と書いてともと呼ぶ

星船

ジャンヌ「・・・銀さんよく飽きずに作れるね・・・」

銀時「だって糖分とらねえとイライラするんだもん。そう言っお前はそれやって飽きねえのか？」

ジャンヌ「イヤだって毎回着替えないとイライラするし・・・」

ジャンヌの目の前にはケーキを作る銀時がいて、その銀時の前にはコスプレ衣装を作っているジャンヌが話し合っている。

この光景を見ているネプテューヌ達は「似てるなあ」と思っている。

ドーン！

どこかで大砲が発射される音が聞こえた。

ジャンヌ「な、何？」

ヴィヴィオ「あ、あそこ！」

ジャンヌが突然のことに慌てていると、ヴィヴィオがある場所を指さす。

それは、沢山の宇宙船がある船団だった。

しかもところどころに争っているような煙が上がっている。

ネプテューヌ「あの船団・・・もしかして・・・」

ネプテューヌは見覚えのある船団を見て思う。

レーティア達が話したあの異形集団の…。

イーバ「行くつもりかい？別に止めはしないが、無茶はするんじゃないよ」

レーティア「大丈夫、任せて」

イーバが忠告してレーティアが言う。

そして銀時達は船団へ突入した。

イヴィル大船団

IBGMクツパJrの大船団byスーパーマリオギャラクシー  
(Super Mario Galaxy Music Extended - Browser Jr's Airship Armada)

船団に到着したネプテューヌ達、だが直後にイヴィルソルジャー達に囲まれている。

銀時「いきなりこれはねえだろ…」

ネプテューヌ「うん、私もそう思う」

銀時は苦虫をかみつぶした顔をしていい、ネプテューヌは同意する。





ビビが東方の魔理沙の恰好をして本人の得意技であるマスタースパークをぶつ放す。

捕まっていたイヴィル達はあとかたもなく消滅した。

レーティア「さて次は…あなたよ！」

マドロイド「ウバアアア！！」

レーティアはバトンで後ろにいた全身緑色でたくさんの触手が映えた人型のマドロイドをぶつ飛ばす。

ギルシア「めんどくせえ！一気につぶしてやる！パワーのフラグメント！」

ギルシアは右腕を振り上げる。

ギルシア「惑星砕き！！」

そして船にたたきつけ、船が大爆発した。

で・・・

銀時「お前俺たちまで巻き込ますきか！！」

ギルシア「うるせえよ！文句言うならあいつらに言え！！」

レーティア「はいはい、2人とも落ち着きなさい」

すばやく別の船に移りこんだ銀時たち。

その後銀時とギルシアが口げんかし始めてレーティアが抑える。

すると、



レーティア「まあそれは置いてくとして、あの人の指令？」

銀時達の聞こえない声で真剣な顔をして聞くレーティア。

カイクム「ああ、俺のほかにもイツセー、レオン、ユウカ、ナリア、そして親友であるリアスもいるぞ」

レーティア「彼女も・・・わかった。私たちも援護するわ」  
カイクム「助かる」

レーティアは振りかえって言う。

レーティア「みんな、この船団を破壊するわよ」

ネプテューヌ「うん、理由がわかんないんだけど確かにこのままにするのはよくないって思うね！」

銀時「おれめんどくさ」銀さんも来る！」っておいイデデデデ引っ張るな！」

ネプテューヌも含めほとんどの人も賛成するが、銀時は否定しようとしてネプテューヌに耳を引っ張られる。

レーティア「で、リアスはどこに？」

カイクム「あそこだ」

カイクムは船団の中で大きい船を指差す。

プリニー「あれ、なんだかボスがイそうツスね〜」

カイクム「あそこの親玉・リュウゲイと戦闘に入っていると思う」

レーティア「ならいくしかないわけね」

カイクム「ああ、アンヘル！」



勢いよく船が引つ張られていく。  
そして、

銀時「つてちよつと待て！ぶつかるぶつかるぶつか・・・ギイヤア  
アアアアアアアア！！！」

どんと大船に接近して激突した。  
アンヘルはぶつかる寸前で離れた。

銀時「いたた、お前こついうことがあるなら先に言えよ！！ちよつ  
ぴり涙目になつちまつたじゃねえか！！」  
カイル「すまん、いつものことだから」  
新八「いつもやられてるんですか！？」

銀時がカイルに訴え、カイルは謝るが新八は驚愕する。

アンヘル「おしゃべりする暇はないぞ。やつらが強敵と接触した」  
カイル「そうか、なら早く行くほうがいいな」

隙間からアンヘルが言ってカイルは立ち上がる。

銀時「おいこの野郎！人を船ごと投げ飛ばしやがつて！！焼きトカ  
ゲにすんぞこの野郎！！」

銀時は青筋立ててアンヘルにシルバーブレイドを向けて言うが、

アンヘル「ほう？ならおぬしをブラックホールまで飛ばしてもかま  
わんな？」

銀時「ごめんなさい、そういうのは勘弁して・・・」

新八「屈するのはやつー!!」

アンヘルのマジに近い言葉を聞いて銀時は速攻屈した。  
新八はそんな銀時に突っ込みを入れた。

そんなことでも甲板へついた銀時たち。

????「グルアアアアアアアアアア!!」  
????「クソツッ!」

見た目が四神の一体・青龍とよく似た生物・リュウゲイが、一人の青年と一人の女性と戦っている。

カイク「イツセー!レオン!」

イツセー「カイクか!」

レオン「遅いぞカイク!それと久しぶりだなレーティアとジャンヌ  
レーティア「ええ、久しぶりね」

カイクは二人を呼び、イツセーとレオンが気づき、レーティアが言う。

銀時「え?何?あいつら知り合いなわけ?」

銀時はジャンヌに聞く。

ジャンヌ「うん、知り合いというより、ギルド仲間かな?ちなみに後3人いるよ?」

ギルシア「おい・・・それってあれか?」

シャル「転生者たちが集うギルド・・・」







「????」「フウ、結構張り切り過ぎたかしら?」  
「????」「私としてはまだまだ物足りない気がするけど...」  
「????」「なんで私がこんなこと...」

腰までのアホ毛が付いた真紅の髪の女性と腰までの黒ポニーテールの女性がもの足りないと言つ顔をし、銀髪のロングの少女がいよいよそつに言う。

「イッセー」「リアスお姉ちゃん!」

「レオン」「もう方が付いたのか?ユウカ、ナリア」

「リアス」「まあね」

「イッセー」が呼び、レオンが言い、リアスが応える。

「ユウカ」「フフ、あれは私がやってもよろしいかしら?」

「リアス」「いいけどやり過ぎないようにね」

「ニコニコ」笑うユウカにリアスが許可を出す。

「イッセー」とカイムは苦笑いを浮かべる。

「リュウゲイ」「ウガアアアアア!?!?!」

痺れを切らしたリュウゲイがユウカに襲い掛かる。

「ユウカ」「...ライトニングボルト・獄」

「ドバ~~~~~ン!?!?!」

「リュウゲイ」「ツツツツ!!!!!!?????!?!?」



リュウゲイ「ゴオオ！！！！？？？？」

最強技の同時出しでリュウゲイを撃破かつ消滅した。

銀時たちはこれを見て啞然とした。

銀時「なあ？俺達いらないんじゃない？」

ネプテューヌ「いやそうだったら私たちが出てる意味なくなるじゃん」

2人ともメタ発言はダメツスよ。

リアス「ふう、ミッションコンプリートってね」

リアスはそういつて銀時たちのほうに向く。

リアス「自己紹介するわ。私はリアス・グリオン、よろしく」

イツセー「俺は弟のイツセー・グリオンだ」

銀時「あ、どうも、俺はキャプテン銀時です」

ネプテューヌ「本当は坂田銀時だよ。私はネプテューヌだよ」

グリオン姉弟と銀時たちが挨拶する。

レオン「私はレオン・バステットだ。誰でもいいから私と戦わせろ」

新八「いきなり何ナノこの人！？」

レオン「すまん、こいつは戦闘狂なんだ。おれはカイクム・ドラグニ

ールだ。そしてこいつは相棒のアンヘル」

アンヘル「うむ」

ギルシア「なるほどな。ギルシア・アダマントだ」

シャル「私シャル・ノイシュバンシュタイン」

レオンも挨拶するがいきなり宣戦布告な事言つたので新八が突っ込む。

レオンも謝って挨拶する。

ユウカ「私はユウカ・カザキリですわ。よろしくお願ひしますわ・・・（ボソツ）ブタドモ」

新八「あれ？気のせいでしょうか？一瞬豚って言われたような・・・

」

桂「始めまして桂小太郎です。好物はそばだ」

ユウカ「あら？ならタバスコそばでも食いなさい」

アイエフ「いや何言ってるの!？」

ユウカも挨拶すると新八は何か引つかかったが何も出なかった。

桂も挨拶。しかもここでクールボケ。だがユウカが危ないことを言つたのでアイエフが突っ込む。

ユウカはDSだと認識した。

ナリア「私はナリア・レイドだよ。よろしくね」

ビビ「私ビビ・ステインよろしくねナリアちゃん」

ナリアとビビは握手した。

が、

ナリア（見た目でわかる・・・この子絶対に犯ル気ね！）

ビビ（本能でわかる・・・この小娘は危険だ!）

ナリア・ビビ（私と同じ百合の道を進む存在を!）

内心では半分友達半分ライバルな気持ちとなった。

リアス「レーティアから話をきいてると思うけど私たちはメテンスギルドの一員よ」

銀時「で？そのメッテルビートのお前らは何のためにあるんだ？」  
ネプテューヌ「それを言うならメテンスギルド」

銀時がぼけてネプテューヌが修正する。

リアスは咳払いして言う。

リアス「私たちメテンスギルドは、『反イヴィル勢力』として成り立ってるの」

桂「イヴィル？あの人型と龍のことか？」

桂がイヴィルソルジャーのことを思い出して言うと、リアスはうなずく。

リアス「そ、私たちを転生させてくれたアテナスの使命でイヴィル軍首相の阻止をしているの」

ノワール「首相？誰だかわかる？」

カイク「いや、残念だが・・・」

ノワールが疑問を投げるとカイクが言う。つまり知らない。

リアス「ま、ここであつたのも縁だけど、私たちそろそろ戻るからナリア「あゝ、コホン、言い出しづらいんですけどその・・・」

リアスはレーティアたちに別れの挨拶をした後ナリアが口ごもって言った。

ナリア「帰るための『デール』忘れてきちゃったみたい・・・」  
全員「・・・・・・・・・・・・・・・・」



『リアス・グリオン』 『イツセー・グリオン』 『レオン・バステッ  
ト』 『カイクム・ドラグニール』 『アンヘル』 『ユウカ・カザキリ』  
『ナリア・レイド』が銀時たちとともに行動するようになった。

銀時「・・・頼むから俺がひどい目にあわないことになってくれよ」

銀時はそれだけをつぶやいた。

『青龍の奉玉』を手に入れた。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

コンパ「今日は私が担当するです」

銀八「うし、んじゃペンネーム『鳴神 ソラ』から始めるぞ』マリオ「凄いなコンパの奴」

ツッコミトリオ「こわっ!!」

ネス「ある意味カチコチキングが被害者だと思いました」

リュカ「だよ〜と言うかスーパーマリオくん」

クッパ「転生者ズに質問なのだ』コラボで出たキングスカッシャーを見てどう思う?』」

ネス「ヴィヴィオに質問』冥王さんに技を教えられたけど、なのはさんの技と教えられた技で比べてどっちが凄いと思う?』」

フォックス「真王に質問』もしVividまで進んだらどうなると思う?』」

次回を楽しみにしてます

マリオ「また新しい転生者が出るか…』」んじゃ答えようか」

レティア「ネズミね」

ジャンヌ「カモ君…って」

ギルシア「たしかネギまのネズミじゃなかったか?」

シャル「たいそうな名前だね」





「どうも、今回同じサブタイトルが被ったので嬉しい気分な作者です。それじゃ早速質問します」

新八に質問

「こちらの新八はノーヴェのファーストキスを奪いました。それを見てどう思いますか？」

ユーノに質問

「こちらのユーノは命掛けでなのはを守った代償で魔法が使えませんが変わりになのはにベタ惚れされています。どう思いますか？」

最後に質問

「ギンガとフォルカの仲をどう思いますか？」

以上です

ではでは』では順番に答えよう」

新八「ノノノ、ノーヴェさんとおお!!?ノノノノノ」

ユーノ「なんだろう、凄く羨ましい…」

全員「いや分からん」

真王「んじゃ『sibugaki』さん、廊下に立ってなさい。つぎ、ペンネーム『支配者』さん。『コンパがあんなふうにはブチキレルとは…キャラ崩壊ですね…」

ネプテューヌに質問

貴方もブラン同様子供ですよ？貴方もお漏らしして、漏らしっ子女神になっちゃうんじゃないですか？そしたら二人でコンビ組んだ

らしいのに子供過ぎる女神として（黒笑）

銀八先生に質問

銀時と違つてまるででもない男略してマダオな貴方ですがそんな自分をどう思いますか？（黒笑）

沖田に質問

お星様が落ちてきて土方がつぶれて死んだらどれくらい嬉しいですか？』ハイ、一つ目は没」

銀八「つてオオオオオオオオオオいい！！なに考えてんだよ！！ちゃんと答えようよ！！」

真王「後ろ見てそれが言えるか？」

銀八は後ろをみると、魔王でも殺せるような黒いオーラを纏うネプテューヌがいた。

銀八「あ、ああ、なるほどな、うん・・・そして2つ目はうるせえよこんちくしょオオオオオオオ！！」

真王「おいおい・・・ん？良く見るとまるででもない男、略してマモオだな。最後沖田さん」

沖田「そりゃあ土方のアンチキシヨウが消えて清々しまさあ」

土方「じゃあテメエがつぶれるオオオオオオオオオオオ！！！！！！（怒）」

沖田と土方が喧嘩した。

真王「ハア…『支配者』さん、？と廊下に立ってなさい」

コンパ「誰ですかそれ？ペンネーム『ケン』さんです。『統夜』あれはカチコチキングの自業自得だ。コンパは悪くない」

遊輔「炎を持つ人がいれば何とかなつたのにね」

統夜「質問しようかな。『レーティア達はスーパーストリートファイター？AEに出てくる狂オシキ鬼と殺意の波動に目覚めたリュウに余裕で勝てますか？』」

遊輔「真王さんが知っていればいいけどね」

統夜「新たな転生者か…・どんなのが来るのか楽しみだ」

自分の作品にシャルを参加させてああいう戦い方になりましたが…  
・どうでしたか？『』」

レーティア「オシキ鬼ってのは知らないけどリュウなら勝てるって言えるわ」

ジャンヌ・ギルシア・シャル「同じく」

シャル「あ、あっちの私頑張ってるね」







はやて「サツサとしてくれるかな作者（殺気）」

真王「・・・さて、なのは達の称号を町人Aに・・・」

3人娘「ゴメンナサイ、ソウイウノハカンベンシテ・・・」

真王「分かればいい、んで次」

ネプテユーン・銀時「逃げる！」

真王「他力本願かい…。『黒龍』さん、廊下に立ってる」

コンパ「・・・えつと次は確か・・・」

リアス「そう、この私、リアス・グリオンがアシストするわ」

真王「それじゃあまた次回で」

く今日のお宝鑑定く

く青龍の奉玉く

価値：6000円

見た目：青い勾玉



イーバメモ：青龍のような勾玉だね。もしかしたら他にあるのかもね。

ドルフィンメモ：四神の1体、青龍の奉玉ですね。アクセサリにするのはもったいない気がします…。

第七十九訓：戦友と書いてともと呼ぶ（後書き）

真王「キャラが増えてきたな…。次回は銀河編のラスボスとの戦い（？）が始まります」

銀時「おい、あの“？”はなんだ？」

真王「教えないよ」

リアス「次回『ラスボスの対戦は準備すべし』テイクオフよ。ちなみにバトルはないわ」

真王「お〜い・・・」

## オリジナルキャラ設定（前書き）

真王「ここは『リリカル銀魂 銀の侍と4人の女神』に登場するオリキャラ」というよりメテンスギルド員の方々の紹介をいたします。なお物語が進むにつれて少し設定を変更します。それでは「

## オリジナルキャラ設定

↳レーティア・デビリアス↳

髪：膝までのピンクのロング

目：藍色

服：t o l o v e r のララの服を黒くした感じ、グレネーダーの天道琉朱菜の赤い部分を黒くしたイメージ（帽子はない）（ハートローズセットアップ時）

年齢：21歳

3サイズ：105 / 55 / 83

体重：血に塗り潰された

性別：

種族：夢魔姫（転生者）

魔力光：淡いピンク

好き：素敵な男、甘い物、静かな時間、ムフフなこと

嫌い：面倒なこと、気持ち悪い奴、悪い権力者

性格：普段はのんびりな感じ。いざというときはやる気になる

レベル：8000

得意武器：ファスシニム（鞭orバトン）、ハートローズ（銃）

スキル：魅了のオーラ（男女問わず惚れこむオーラ。そのおかげで変態から襲われるのはしばしば）

リス・フォーム  
夢魔変化（背中から羽を生やしてサキュバスとなる。その時能力が通常よりも上になる。飛行も可能）

サキュバスハート  
夢魔の性欲（快感を求めようとする欲。その気にならなければ相手を襲わない）

リス・アップソーパー  
夢魔吸引（相手の力を奪い取る。自分の意志によって吸収する物を変える）

詳細：この世界に転生した女性。生前は大人気アイドルのようにみ

んなから親しまれていたが、妹と交通事故にあい死亡。その後神（リインさんのとこじゃない）と対面して「俺のせいでミスって殺しちまった、ごめんね」などと腹立つ顔で言ったので逆上して半殺しにした。その後チート能力を貰い、世間の男達を手に入れようとしている。・・・ちなみに彼女曰く「能力使うなど外道がする事」らしい。生前の名前は『魔星照奈』らしい。

#### 所持能力

魔導の心得（ランクE×クラス）

アンリミテッドエネルギー

武術の心得

#### 特殊技

死の舞い踊り：舞い踊る鞭が敵をも踊らされます。

咲き散る花びら：一輪の花（花の種類によって効果が違うらしい）が鞭となって相手を倒しまくる。

乱刃連装舞：台風の如く襲われる鞭は相手を逃さない。

魔砲突き：一突きでは嘔吐では済まないようです。

刃屯大旋風：いくつもあるバトン（魔法で作られたもの）が敵に向かって飛んでいく。

妖魔粉碎・竜王撃：竜王を一撃で沈めたと言われる技。

薔薇の玉砕弾：撃たれたらバラが咲き散るように…

愛の薔薇咲き：薔薇の種が力を吸い上げて咲き乱れる

相愛の十字砲：着弾地点から愛の十字架を拝められるでしょう

（ジャンヌ・デビリアス）

髪：長い銀髪

目：赤

服：初登場ではシャーマンキングのジャンヌの鎧。時折いろんなコスプレをするらしい

年齢：15歳

3サイズ：87/51/80

体重：血で濡れている

性別：

種族：コスプレマスター（転生者）

魔力光：白金

好き：コスプレ、レーティアお姉ちゃん、可愛い子

嫌い：????

性格：コスプレ大好き、甘えん坊な感じ

レベル：7000

得意武器：シャマツシュ（形状は決まっていなくても来ているコスプレで違うらしい）

スキル：コスプレイヤー（来ている服によって能力を変える）

夢魔変化（背中から羽を生やしてサキュバスとなる。その時能力が通常よりも上になる。飛行も可能）

夢魔の性欲（快感を求めようとする欲。その気にならなければ相手を襲わない）

夢魔吸引（相手の力を奪い取る。自分の意志によって吸収する物を

変える)

詳細：姉のレーティアと同じく転生した一人。生前は姉と同じく人気者だったが、神のミスによって死んでしまった。だが彼女はコスプレが大好きだとの事。彼女は生前母親と姉から着せ替え人形のようにされていたが、そのせいか自分から着せ替えにはまり、更にはアニメや漫画のコスプレを楽しむ始末という末期な感じになっている(その時姉のレーティアは後悔したらしい)。転生後なのは達とラブラランデブーな生活(というよりコスプレさせようと思っっている)をしようと考えている。ビビと手を組んでもに愛の架け橋ラブラブ・ロードを立てようとしているらしい。余談ではあるがドMな性格をしているとかさそうでないのか。生前の名前は『魔星水華ませいすいか』らしい。

所持能力

魔導の心得(ランクEXクラス)

アンリミテッドエネルギー

武術の心得

ジャンヌのオリジナル  
特殊技

魔獣召喚まじゅうしょうかん：ジャンヌの脳裏にある魔物を召喚できる。

マスターアルテマブレイカー：幻想のマスタースパークをアレンジした技。

フォーサイドイリュージョン：フランの使う四人分裂と同じ。

デイベインカリバー：星光の剣を放つ魔法。エクスカリバーと威力が同じ。

固有結界・聖女の夢の世界ジャンヌスドリーム：ジャンヌが作り出した固有結界。ここ

ではジャンヌの思考通りにさせる世界。相手にコスプレさせたいと願ってこの技を覚えた。余談だがこれで彼女自身が 絶対自重 されるために作ったとさせるがまた別の話。

くシャル・ノイシュバンシュタインく

髪：紅色のロング。踵まで届きそう。

目：赤

服：アルカナハートのシャルラツハロートの服

年齢：22歳

3サイズ：92 / 54 / 83

体重：かじりとられた。

性別：

種族：改造生命体（転生者）

魔力光：赤黒

好き：戦い、じゃれあい、花、強い奴、面白いこと、食べ物（特に肉）

嫌い：つまらないこと、卑怯者

性格：若干戦闘狂な感じ。

レベル：9999

得意武器：なし

スキル：ドツペルゲンガー（体を何でも変化できる）

詳細：前世では退屈過ぎて身勝手に転生した女性。しかしある研究者に捕まり研究の実験隊となって不死身の体を手に入れてしまった（本人いわく、痛かったとのこと）。体を変形させたりそれで攻撃したりも出来るようになった。元から得た能力はニードレスのフラグメント、ワンピースの悪魔の実、とあるの超能力全部だけである。なお彼女は食に関して通であるらしい（トリコ的に）（更にシャマ



パイを平気で食べれると言う胃袋を所持)。容体はアルカナハートの髪をおろしたシャルラツハロートをイメージ。

所持能力

魔導の心得(ランクEXクラス)

アンリミテッドエネルギー

武術の心得

モンスターソウル(フェアリーテイルにいるサタンソウルみたいなもの)

↓ギルシア・アダマント↓

髪：蒼よりの銀髪

目：赤

服：ニードレスのアダム・ブレイドの服

年齢：25歳

体重：70キロ

性別：

種族：最強神父(転生者)

魔力光：銀

好き：女の子(特に妹系)、戦い、金

嫌い：おせっかいな女、面倒事

性格：ロリコンな性格(本人は否定)、そしてバトルマニアック

レベル：9000

得意武器：なし

スキル：ゼロ(相手の能力を覚える。フラグメントだけでなく魔法

も可能)

詳細：神様のミスで死んでしまった転生者。転生前から小さな女の子を愛でる癖があるため周囲からロリコンと呼ばれている。容体はニードレスのアダム・ブレイドそのもの。

↳リアス・グリオン↳

髪：腰までの真紅（アホ毛付き）

目：青

服：ハイスクールD×Dの女子制服

年齢：23歳

3サイズ：93 / 54 / 82

体重：引き裂かれています

性別：

種族：魔族譲（転生者）

魔力光：紅

好き：一緒に抱いてくれる人形（男）、甘いもの（けど辛いのもいける）、イツセー

嫌い：下僕（特にイツセー）を傷つけるもの、権力者

性格：リーダーシップ的な性格。楽しみを求めようとずる？

レベル：9000

得意武器：なし

スキル：魔族姫の威厳（隣接する男性キャラのステータスが上昇する）

夢魔変化リリース・フォーム（背中から羽を生やしてサキュバスとなる。その時能力が通常よりも上になる。飛行も可能）

サキユバースハート  
夢魔の性欲（快感を求めようとする欲。その気にならなければ相手を襲わない）

リス・アブナーバー  
夢魔吸引（相手の力を奪い取る。自分の意志によって吸収する物を変える）

詳細：現世で楽しみを見いだせないことから自殺した転生者。転生後、メテنزギルドに勧誘され、イヴィル軍を戦う指揮官兼戦闘員となった。さまざま魔法を繰り出すことが出来る。寝るときはいつも全裸になるのが玉にキズ。弟であるイツセーが大好き（おっぱいハーレムを目指すイツセーを影ながら応援しているらしい）。容体はハイスクールD×Dのリアス・グレモリーである。

イツセー・グリオン

髪：ハイスクールD×Dの一誠の髪

目：蒼

服：ハイスクールD×Dの男性制服

年齢：21歳

体重：57キロ

性別：

種族：魔族騎士（転生者）

魔力光：ブラッドカラー

好き：リアスお姉ちゃん、おっぱいハーレム

嫌い：リアスお姉ちゃんを傷つける奴、権力者、女の子を傷つける奴

性格：正義感の強い男の子

レベル：8600

得意武器：神器（拳かつ鎧）

スキル：デビルズハート（敵を倒すとステータスが上昇する）

ブースデッド・ギア（ステータスや物理物などを倍加させる（10の攻撃力を100にあげる・リングを1つから2つにする等））  
詳細：姉と同じく夢が実現できないことに自殺した転生者。その後能力を手に入れてイヴィル軍を撃退する戦闘員となる。姉をはじめとしておっぱいハーレムを実現させようと燃えている（ただし、女性が好きんでいる人がいるなら手を出す気はない）。良く姉のリアスの絡まれることが多いが、本人は満更ではない様子。容体はハイスクールD×Dの主人公ー誠である。

レオン・バステット

髪：腰までの銀髪

目：金色

服：DOG DAYSのレオンの戦闘服

年齢：21歳

3サイズ：91/53/83

体重：切られた跡がある

性別：

種族：闘士姫（転生者）

魔力光：銀

好き：戦い、武器の手入れ、好敵手ライバルシグナム

嫌い：つまらないこと、卑怯者、デスワーク

性格：シグナムほどの戦闘狂

レベル：7900

得意武器：いろいろ

スキル：戦闘魂（攻撃回数によって攻撃力が上昇）

武器形成（さまざまな武器を作ることが出来る）

詳細：幼き頃過激な武闘派に育てられた転生者。そのせいか男勝りなしゃべり方が多く、強そうな奴を見かけたら構わず戦いを挑んで来ようとする（一応自重はしている様だ）。転生後は10tの重りを持ちあげるパワーと武器を形成する力を手にした。なお死んだ原因は山道で足を滑らせたらしい

カイクム・ドラグニール

髪：茶髪

目：赤

服：DODのカイクムの服

年齢：27歳

体重：70キロ

性別：

種族：狂戦士

魔力光：茶

好き：平穩、空、アンヘル

嫌い：イヴィル軍、卑怯者、命を簡単に奪うもの

性格：普段は温厚的だがいざというときはやる

レベル：9000

得意武器：剣（バスタードソード、鉄塊）

スキル：ドラゴンズハート（ダメージを受けることによって攻撃力が増す）

詳細：幼き頃ある国の王子だったが、イヴィル軍のよって国が壊れ、両親を殺されたかなしい過去を持つ青年。イヴィル軍に対しての憎悪を抱いている。そして彷徨っているところをドラゴン・アンヘルと出会い、ともに戦うことを決意し、契約した。そのご、アテナス

率いるメテンスギルドに出会ってイヴィル軍を滅させることを誓う。  
容体はDODのカイムそのもの。

くアンヘルく

髪：人間時では血よりも太陽よりも赤いロング

目：赤

服：人間時では赤いワンピース

年齢：10000歳以上（人型では見た目20歳）

3サイズ：1000/55/84

体重：約2000キロ（人型では60キロ）

性別：

種族：ドラゴン

魔力光：真紅

好き：カイム、戦い、相手をいじること

嫌い：うつとおしいこと、うるさい奴

性格：カイムに対しては普通だが、それ以外では見下した言い方を  
する

レベル：9999

得意武器：なし

スキル：ドラゴンズハート（ダメージを受けることによって攻撃力  
が増す）

詳細：カイムの相棒であるドラゴン。当てもなく飛び回っていると  
ころをカイムと出会い、契約した。契約主であるカイムとは普通に  
接するが、それ以外では毒の混ざった言い方をするらしい。なお人  
型へと変身も出来、レーティア達よりもスタイル抜群である。容体  
はDODのアンヘルそのもの（3段階バージョン。カオスではなく）

ユウカ・カザキリ

髪：腰までの黒ポニーテール

目：赤

服：ハイスクールD×Dの女子制服

年齢：21歳

3サイズ：91 / 54 / 83

体重：潰れた…

性別：

種族：魔族女王（転生者）

魔力光：黒

好き：紅茶、相手をいじること、攻め

嫌い：不細工な男（オタク的な）、料理が下手な人

性格：優しい人の様に見えるが、極が付くほどのサディスト。

レベル：9999

得意武器：鞭、剣

スキル：女王様（隣接する敵男性キャラのステータスが下がる）

リリス・フォーム  
妖魔変化（背中から羽を生やしてサキュバスとなる。その時能力が

通常よりも上になる。飛行も可能）

サキュバスハート  
妖魔の性欲（快感を求めようとする欲。その気にならなければ相手

を襲わない）

リリス・アップソーパー  
妖魔吸引（相手の力を奪い取る。自分の意志によって吸収する物を

変える）

詳細：生前男達によって犯されて殺された転生者。手加減というも

のを知らず、問答無用でたたきのめすと言つ道具っぷりがある（生前でやられたせいかもしれないが…）。情報性が強いのか持ち前のノート（彼女曰くデスノート）で秘密をしゃべって屈辱を陥れようとすることも。メンバーの中では最も危険な奴である。

（ナリア・レイド）

髪：髪をおろした銀髪のなのはをイメージ

目：青と緑のオッドアイ

服：なのはのエクシード（上半身）とアグレッツサ（下半身）

年齢：15歳

3サイズ：88 / 50 / 80

体重：焦げ跡が…

性別：

種族：百合っ子娘（転生者）

魔力光：白

好き：百合、女の子、可愛い物、ビビ？

嫌い：男全般（心に決めた人では別らしい）、ビビ？、権力者

性格：百合っ小娘。ビビとはライバル（？）関係らしい

レベル：8000

得意武器：フランダース双剣、ムチ

スキル：百合百合パワー（女性キャラ接近時、能力上昇）

詳細：アニメ、ゲーム、マンガをこよなく愛するオタク。「転生して百合世界を築きたい！」と心の中で望んでいるとなぜか家の上空に隕石落下（そして死亡）。そして転生できると知って百合ハーレムを築こうと燃えている。だが同じ百合好きのビビと出会って、お



互いライバル(?) 兼百合友達として行動する。容体は髪をおろした銀髪のなのはをイメージ。

オリジナルキャラ設定（後書き）

真王「個性の多いキャラ達である」

銀時「多過ぎだろー!!」

予告

ナレーション「世界の危機が迫る様だが……」

第八十訓：ラスボスの対戦は準備すべし（前書き）

真王「今回はガメーバとの接触。そしてすべての原因であるあの男が現る！」

リアス「『リリカル銀魂』始めるわ」

（ガメーバの新銀河帝国）  
『宇宙と女神と人間と』



新八は驚き、ネプテューヌは見覚えのある顔の星を見て言う。

イーバ「こいつは参ったね…」

イーバはネプテューヌ達言う。

イーバ「この宇宙はあんたらの命運にかかってんだ。生きて帰ってくれよ」

銀時「ああ」

ネプテューヌ「わかったよ！」

ヴィヴィオ「いつてきま〜す！」

プリニー「ヴィヴィオ待つツス！」

イーバが言った後、ネプテューヌ達は飛んでいった。

イーバ（・・・気のせいかもしれないが宇宙だけじゃすまない気がするね… だけど頼んだよ）

イーバは不安を持ちながら祈る。

彼らが帰ってくるのを信じて。

## ガメーバの新銀河帝国

IBGMクツパの新銀河帝国byスーパーマリオギャラクシー2  
(Super Mario Galaxy 2 Music EX

ガメーバの本拠地である帝国に足を踏み入れた銀時達。

銀時「オラアアアアアアア!!!」

ギルシア「どきやがれええええええええ!!!」

ネプテューヌ「邪魔だよ!」

エリザベス「ナメンナゴルアアアアアアア!!!」

神楽「ホタアアアアア!!!」

ユウカ「ア、ハハハハハハハハハハ!!!」

神「はっはっは、俺様達を止められるかな」

上記の人たちは出てくる敵達をゴミまたはボロ雑巾のように蹴散らす。

一応他にもいるが。

新八「やる気いっぱいですね」

リアス「あたしとしては楽でいいけど」

カイル「おいおい・・・」

ヴィヴィオ「お姉ちゃんたちもパパもすごい」

プリニー「規格外が多いツス」

その後ろで新八たちがこんな会話をする。

そして敵を倒して数分後、ついに最後の門まで来た。

(決して手抜きではない!)

銀時「今地の文に余計なひと言があった様な...で、やっときたわ

けだな？」

リアス「ええ、親玉がね」

銀時達は大きな扉を見る。

リアス「さて、みんな準備はいい？」

全員「おう（ああ）（はい！）（やるッス！）」

神楽「ウツス！準備は出来ましたぜ！」

リアスの言葉に全員が答える。

神楽はなぜか大きなリュックを持っている。

銀時「っておいなんだよそのリュックは」

神楽「準備アルよ。ホラ」

神楽がそう言つてリュックを開ける。

中はお菓子ばっか。

新八「なんでだアアアアアア！！！何処の世界にラスボス前にお菓子持って行く奴がいるんだよ！！！」

新八はありえないことに突っ込む。

グレイはこれを見て呆れ果てた。

銀時「おい神楽、お菓子は300円までって言っただろ」

新八「銀さん注意するところ違ってます！」

今度は銀時に突っ込む新八。

ギルシア「ま、」

リアス「とりあえず」

レーティア「ラスボスの」

ビビ「とこまで」

転生者組「1、2、3、4……遠足ダア！」

新八「遠足う！？」

ギルシア、リアス、レーティア、ビビの順番に言って、それぞれ準備体操をした後いろいろ装備して遠足といった。

新八は思わずシャウトした。

グレイはあきれてため息を吐いた。

……まあとりあえず進もう。

王座の間

ガメーバ「ついに来たか」

王座の間でガメーバが座っていた。

ちなみに巨大化してない。

ガメーバ「なんだか見慣れん奴らもいるがいいだろう。さあ勇者よ

！お前達の力を見せるのだ！」

まだガメーバは銀時達を勇者と勘違いしている。

銀時「だくから俺達は勇者じゃねえって言ってるだろ」

ネプテューヌ「何言ってるの銀さん、この奉玉を持ったあいつを倒



したんだから勇者じゃん」

銀時「イヤそりゃあいつらがやったんだよ」

銀時は否定するが、ネプテューヌが懐から『青龍の奉玉』をだして  
いうが、銀時はレーティア達をさして言う。

ガメーバ「ん？・・・おい、その勾玉は一体？」

銀時「あ？こいつはイヴイルってやつらが持ってたやつだよ」

ガメーバ「イヴイル…だと？」

ガメーバが奉玉を見てなぜか表情を険しくした。

銀時が説明するとさらに険しくする。

そして、ガメーバは納得した表情になる。

ガメーバ「そうか・・・ついに時が来てしまったということか…」

銀時「？どういうことだ？」

銀時達はガメーバの言ってる事が分からなかった。

ガメーバ「我が輩は探していたのだ。世界を救う勇者をな」

銀時「あゝはいそうで「銀さん話は最後まで聞く」「いでででで引  
っ張るなつての！！」

ガメーバが語り始めると銀時がめんどくさそうに立ち去ろうとして  
ネプテューヌに耳を掴まれる。

ガメーバ「時にお主ら、イヴイルのついては聞いているのか？」

ガメーバが聞くとリアス達以外は首を振った。

ガメーバ「イヴィル、『悪魔』と名があるが、奴にとっては破壊者と呼んでいるらしい」

リアス「破壊者…？」

銀時「っーか奴って誰だ？」

リアスは考えるしぐさをし、銀時が尋ねる。

ガメーバ「奴は、イヴィルを従い、幾多の世界を破壊して行っている。今覚えている世界ではもう20以上も消えてしまったのだ」

リアス「世界が…消えた!？」

カイム「……………ッ!!」

銀時「え?何の話?全く付いていけないんですけど…」

リアスは驚き、カイムは険しい表情をしている。

しかし銀時達はちんぷんかんぷんな顔をしている。

ガメーバ「魔法の世界、科学の世界、魔物の世界、時代劇の世界、侍の世界、幾多なる世界がやつら、そしてあの男によって消滅させられているのだ」

長く語るガメーバの表情が少し切なさを感じる。

ガメーバ「時にその小娘、お主はなにが好きだ？」

ナリア「え!?!あ、私はアニメ、ゲーム、マンガが大好きなの!特に『戦国乙女』とか!」

銀時「だから何の話してんだっつーの!!」

ガメーバがナリアに質問し、ナリアは応える。

銀時は分からない故に怒鳴る。

ゲームバ「世界にはもしものが存在することがある。たとえば言うならその『戦国乙女』という世界。それは時代劇の登場人物が女性になっただけの世界だ。その他に『科学と魔法が合わさった世界』『電子世界と融合した世界』『未来の違う世界』などIFの世界が数多く存在する。侍の世界に宇宙人がやってきた世界もそうだ」

銀時、神楽、新八「あっ！！」

銀時達よろず屋組は納得した顔になる。

ゲームバ「そしてこの世界もしか、本来合わさることのない幾多の世界の住人が出会う世界もある」

ビビ（・・・もしかしてリリなのの世界にリトルバスターズとかデイスガイアとかのキャラが出てるってことかな？）

ビビはゲームバの言葉に推測する。

ゲームバ「だが、奴は別次元世界を破壊し、何もかもを無にするつもりようだ。そして奴はこの世界を標的にした。そう、奴は世界すべてを己の手一つで手に入れようとするのだ」

桂「自らの手で世界すべてをだど！？バカな！？そんなことが……」

ゲームバ「出来るはずがないと？だが、奴はそれをしようとしているのだ」

驚く桂をしり目にゲームバは続ける。

ゲームバ「そう、奴はもう、すべての世界そのものを支配しているということなのだ」

ゲームバの衝撃的事実にほとんど驚愕した。

銀時「つまりあれか？世界の危機だから勇者を探して、結局見つからないから自分から悪役になって探してたつてののか？」

銀時がジト目でガメーバを見る。

何やら怒り出しそうな雰囲気だ。

ガメーバ「情けないが、そういうことなのだ」

ガメーバは申し訳なさそうに言う。

「???」本当に情けないデカブツだな。衝撃的告白して自ら負けにするなんてそれはいただけないな〜？」

ネプテューヌ「な、何！？頭に声が！？」

銀時達の頭に男の声が聞こえた。

「???」暇つぶしで色々回って見ていればどれもこつれも屑ばつかな匂いがするな。あゝ、臭くて臭くて俺早くぶっ壊したいな〜」

新八「な、なんですかこの重々しい声は？」

ノワール「…なんだか大きな憎しみごもった声を感じるわ…」

神楽「何言ってるアルか？私にはケダモノの声にしか聞こえないネ」

新八は汗を流し、ノワールも流すが、神楽は毒な事いう。

「???」ハハハハハ！ケダモノっていうか！俺ちょっと悲しいかな〜」

銀時「のぞき見る奴はケダモノで十分だ。とつとつ姿を出したらどうだ？」

明らかに馬鹿にした言い方。

銀時は正体不明の男に向かって言う。  
すると、黒い髪にキングダムハーツのアンセムのコートを着た男が現れる。

???「失礼なやつだな。ゴミくずの人間にどうこう言われる筋合いはないんだよ」

男はそういうながらも少しケラケラしている。

銀時「おめえ、誰だ？」

???「こういうときは自分から名乗るもんだろ？坂田銀時」

銀時（……………こいつ、何で俺の名前を……？）

銀時が聞くと男はそう返す。

だが男は銀時の名前を知っていることに銀時は疑問を抱く。

???「まああえて答えようか。俺のことはこう呼んでくれ、『森

羅万象の神』ネオってね」

レーティア「森羅万象の神？」

ベール「ネオ……？」

カイル「……………」

男・ネオは自己紹介をして、カイルはなんだか殺意を放っている。

ガメーバ「この者こそが世界を破壊し、イヴィルを従え、すべての世界の支配者なのだ」

ガメーバがネオを見て言う。

カイル（こいつが、こいつこそが俺の、俺の家族や故郷の敵！）  
かたき

カイムはネオに剣を向けた。

ネオ「？何だお前は？」

カイム「俺はカイム、俺のことを知らないだろうが、貴様のイヴイ  
ル達によつて俺の家族や故郷を壊されたんだ！」

ネオが会務を見て聞き、カイムは怒りの混ざつたことを言う。  
上記二人とリアスたち以外は驚いている。

ネオ「・・・あゝ、そうかそうか、お前あの世界の住人だったのか  
」

ネオは思い出したかのように言う。

ネオ「ご苦労なこつたなゝ、わざわざ俺のために自分から殺されに  
来るなんてな」

カイム「！！！！キサマアツ！！！！」

ネオのチャラけた言動にカイムは怒りだして切り捨てようとするど、

リアス「待ちなさい！」

リアスがカイムの襟をつかんで止めた。

カイム「離せ！俺はこいつを！」

リアス「待ちなさいって言ってるでしょう！不意打ちを出したとこ  
ろで勝てると思ってるの！？」

カイム「何！??？」

カイクはジタバタと暴れていくが、リアスのお言葉に驚く。

ネオ「ほう？そちらのお嬢さんは状況判断がいいねえ？俺の実力が見抜いたのかい？」

リアス「見抜けるにしろ見抜けないにしろ、私達が束でかつた所で勝ち目が薄いと感じたからね」

ネオは感心したかのように聞く。

リアスの一言に全員が驚愕している。

チート能力もつてしても勝てないということに。

ネオ「はい大正解！そうとも！俺の能力『ポジティブ・フィードバック』なら貴様らの能力なぞ意味を成さないんだからな！」

自慢げに語るネオ。

銀時「ポジ・・・なんだって？」

リアス「ポジティブ・フィードバック、一度受けた技を倍にして返す能力。簡単などころ口で争っていると大喧嘩、拳句殺し合いをしてしまうという感じね」

銀時が『ポジティブ・フィードバック』のことを聞くと、リアスの説明に納得する。

ネオ「そのとおりだ。最終的にビッグバンへと向かう力。この力があるからこそ世界を壊せるんだよ」

ネプテューヌ「そんなことのために・・・どれだけの犠牲を出せば気が済むの!？」

ネプテューヌ又は悲痛な言葉を出す。

ネオ「さあ？何せゴミくずの人間に犠牲なんて軽いもんだろ？」

だがネオは興味ない感じで返された。

ネオ「それにな、悪魔も天使も魔物も、人間と同じゴミくずなんだよ。存在するものこそ罪なんだよ」

神「ほう？その意見に大賛成だが、お前もゴミくずの一員に入っていないか？」

ネオの言葉に神が指摘する。

ネオ「言ったはずだ。俺は森羅万象の神、つまりあんな2流の神共よりも最上級の存在なんだよ」

ネオは神の言葉にばつさりと切り捨てる。

ネオ「さて坂田銀時、お前確か自分の<sup>ル</sup>武士道を貫くって言ってなかったか？」

銀時「あたりめえだろ。自分の守るものは自分で守る。それが自分<sup>デメエ</sup>の<sup>ル</sup>武士道だ」

ネオの問いに銀時は答えた。

ネオ「ブラボー！お前“らしくもない”事言ってくれるじゃないの！」

ネオは笑いながらしゃべる。

だが“らしくもない”という言葉に引っかかった。



ネオ「こんなチャラけた男が“仲間を守れず救えなかった可哀想な侍”だとはね」

銀時「ツ!!!!!!??? テメエ!なんでそれを!!!!??」

銀時は驚愕してネオに問い詰める。

ネオ「守るものは守るといいながら戦争のおかげで守るものを失っているのにかかわらず、おまえ自身はのうのうと生きている。何が武士道だ。何がルールだ。何が侍だ。結局貴様はただ口だけの臆病者ではないか。それだからお前達の師匠である吉田松陽よしだしりょうようもころさ・・」

ガキインツ!!!

皮肉に語るネオに銀時が切りかかったが、ネオが見えない何かでとめた。

しかもいつもの銀時とは違い、いつも表情に出さない“怒り”が現れていた。

銀時「……………せねえ」

ネオ「?」

銀時の言葉にネオは耳を傾ける。

銀時「テメエに、せんせい師匠の名を言わせねえ!!!!!!」

怒り状態の銀時。

ネプテューヌ（怒ってる……銀さん怒ってる!）  
ヴィヴィオ（いつものパパじゃない……）

グレイ（なんだあいつ？妹が戦ったときよりも違う気を感じる・・・）  
リアス（あれが白夜叉・・・）  
神（ほう？こいつは面白そうだな？）

その銀時に上記の人たちは驚いているらしい。

ネオ「名を言わせねえっていつてもお前はそういう資格はないだろう？」

ネオは鼻で笑う。

銀時「・・・確かに俺は、かけがえのない仲間を守る事ができなかつた」

思い起こすはかつて攘夷戦争で戦った仲間達。

そして仲間達はすでに屍になってしまった事も。

銀時「けどな、今も俺の大切なものを失わせるわけにはいかねえ！」

そして思い出すは万事屋、真選組、たくさんのかぶき町の住人、ネプテューヌ又たち、なのは達機動六課、そしてフェイト。

銀時「だからテメエのような外道に、俺の、俺達の大切なものを奪わせねえ！！」

桂「同感だあああああああ！！！！」

銀時が宣言すると同時に桂が爆弾を投げて爆発させた。

桂「人は皆大切なものを守るために生きてきている。それを無駄に

破壊し、奪わせる外道はこの桂小太郎が天誅を下す！！」

桂は爆煙の中にいるネオに向かって刀を向けて言う。  
桂も相当お怒りのようだ。

リアス「あの馬鹿！考えのなしに！」

リアスはこの光景を見て頭を抱えた。

レーティア「それが白夜叉というものよ」

リアス「わかつてはいるけど・・・」

レーティアが言うが、まだ納得しかねるようだ。

リアス「・・・あゝもう！何だっていいけどあの馬鹿二人を援護しなさい！」

ジャンヌ・イツセイ・レオン・カイル・ユウカ・ナリア

「おう（了解）！」

レーティア「フフツ、わかったわ」

リアスは半場やけになって指令を出した。

レーティアは笑って命令を聞いた。

ネオ「まったく、貴様らに大切なものなどあるのか？」

煙が晴れると、無傷のネオが宙に浮いていた。

銀時「あるさ、俺達の仲間と、自分の魂だ」  
テメエ

シルバーソウルを構える銀時。  
ネプテューヌたちも臨戦態勢に入る。

ネオ「おろかなゴミくずめ、絶望に染まるがいい!!」

ネオは高々と言い放ち、銀時たちは戦いを始めた。

くおまけく

銀八「教えて!!」

全員「銀八先生!!」

リアス「今日のアシストはこの私、リアス・グリオンよ」

銀八「何で上から目線なんだよ・・・まいつか。ペンネーム『支配者』さんからの質問行くぞ。』質問です  
ブランに質問

ゲーム業界で一番の偉そうな意見を言う事しかないお漏らしはする文字通り“ガキ”であるそんな自分を如何思いますか？（黒笑）  
つてさつきからブランに対するいじめが多いなおい！！」

リアス「それじゃあこの質問は没ね。彼女そろそろ精神的にもあれだし。さて次はペンネーム『鳴神 ソラ』からよ。『マリオ』またな…」

ルイージ「沢山出たね；」

スネーク「今度は青龍か…朱雀はこっちで出たが…」

フォックス「あっさり倒したよな、マリオと神が；」

ネス「次回はどうなるのやら…新たに出た人達に質問『冥王についてどう思う？』」

クッパ「同じく質問なのだ『マリオに勝負を挑む勇氣はあるか？』」

マリオ「おいおい、何だその挑発的な質問は…ビビ達転生者組みに聞くが…『冥王に称号を付けるならどんな感じだ？』」

次回を待ってます！』1と2を答えるならそうね。マリオとほぼ互角の力を持つてるわね。だからといってマリオに無闇に手を出すほど私はおるかじゃないわ」

イツセー「とつてもきれいな人ですね。2つ目は僕もおねえちゃんと同じで」

レオン「ほう？面白い！勝負しろ！（何の戸惑いもなく）」

カイク「冥王が本名なのか？後めんどくさい」

アンヘル「カイクと同じだな」

ユウカ「へえ、面白そうな方々ですわね」（黒い笑みが見える）

「

ナリア「この人も百合の仲間に…….しよつとしたらなんか赤い人に殺されそうなのでやめます」

銀八「んで、あいつの称号はこうなった」

紙に、「なのはモドキ？」「なのなのちゃん」「チートブレイカー2号」「ヴィヴィオの師匠？」と書かれている。

リアス「それじゃあ『鳴神 ソラ』廊下にたつてなさい。次はペンネーム『亀鳥虎籠』さんよ。『上条

』何か、凄い新キャラ多いな…….」

一方通行

「それは俺等も言えねエだろ？」

沖田に質問。

僕の小説『万時屋奇譚幕』第八十七話の土方さんを見てヤッパリ内心嬉しいですか？

真王さんに質問。

ネプテューヌの詳細が出来ればメールで送ってくれませんか？少しでも彼女の出番を増やしたいので。

土方に質問。

こちらの自分に何か言いたい事はありますか？』」

真王「ネプテューヌのことはメールで出しましたよ。そしてしっかり活躍させてください」

沖田「これは面白そうですねえ〜エロ方さん」

土方「テメエ切るぞ総吾オオオオ！！」

沖田と土方はけんかした。

リアス「私も見たけど一体どうやって破けるのよあの服？まあいいわ。『亀鳥虎龍』廊下に立って服を破きなさい」

真王「おいまで、まあいいか。ペンネーム『黒龍』さんいくぞ『銀時』なんかどんどんどんどん新キャラ登場してんじゃねえか」

ソラ「真王も裁くの大変だな」

黒龍「転生者要素を俺も加える事決めましたけど、ここまで个性的なキャラを考えられる真王さんも凄いですね」

銀時「つつか、性格に難がありすぎてマトモな奴がほとんどいなければどな」

黒龍「ああ、戦闘狂だったり、巨乳ハーレムだったり、百合だったり、ドSだったり……」

ソラ「普通の奴が思いつかないな」

銀時「めちゃくちゃだな」

黒龍「そこが、ギャクって所ですね」

銀時「いや、そう言う解釈でいいのかよ？」

黒龍「じゃあ質問しますか」

1・ビビに質問。あなたと完全にキャラ被りした転生者が出た事についてどう思いますか？

2・真王さんに質問。キャラが多すぎて、居る事を忘れてしまったキャラはいますか？

3・最近リリカルキャラがかなり存外になっているのは気のせいですか？特にナンバーズあたりとか

黒龍「今回はここまでです」

銀時「じゃあな」

ソラ「またな」『いやそんな事ないです………っつて言ったら嘘になりますね。定春忘れてました」

銀八「うおい！！」

真王「後リリカルキャラは存外じゃないツス！」



リアス「まあその変はいつでも言いとして、ビビ？」

ビビ「ナリアの事？あの子は私に百合友達よ！（もちろんライバルだけどね）」

真王「はいでは『黒龍』さん、廊下になつてなさい」

リアス「次回は私の弟、イツセーがやるわ。じゃあね」

第八十訓：ラスボスの対戦は準備すべし（後書き）

真王「次回はネオとの対決が始まる！そして銀時達は苦戦を持ちいられる！」

イツセー「次回『神様に喧嘩売ると罰当たりになる』テイクオフだ」

第八十一訓：神様に喧嘩売ると罰当たりになる（前書き）

真王「銀河編最終回！果たして銀時達はネオに勝てるか！」

ネプテューヌ「そしてあの二人が帯入り参加するよ」

イツセイ「よし！タイトル変わったが、『リリカル銀魂 Story  
k e r S 』銀女神鎮魂歌』始まるぞ」



ネオ「今度は俺の番だ」

とネオがなにもないところで裏拳を出す。

銀時「ブファツ!!!」

すると何も無いのに銀時が殴り飛ばされた。

ネプテューヌ「!!!銀さん!!!」

ネオ「潰れる!」

ネプテューヌが悲痛の声を出す、ネオがトドメと言わんばかりに拳を撃つ姿勢で、放った。

ガガガッ!!!

が、ギルシア、カイク、レオンが見えない何かを止めた。

ギルシア「おい神さんよお。なんも見えないもんで攻撃なんてするくねえか?」

ネオ「知らん。俺がそんなことを答える義理はない」

ギルシアが言うと、興味なさそうな感じで返すネオ。

レオン「イヤ、私には分かる。インヒシブル・ガーディアン“目に見えぬ守護霊”といったところか?」

ネオ「ククク、さすが戦闘経験の豊富な奴には気付くか」

レオンが見抜いたかのように言い、ネオが笑って指を鳴らすと、ギルシアが止めた何かの姿を現した。

それはキングダムハーツのアンセムを守っている守護霊みたいな黒い奴だった。

その黒い奴は言ったんギルシア達から離れてネオの近くに戻る。

ネオ「フッフ、どうかね俺の最高傑作たる『ジェノサイダー』は」  
カイク「最高傑作だと？」

レオン「大方死体を改造して兵器にしたんだろう」

笑って語るネオにカイクは眉を潜め、レオンが黒い奴の正体を暴く。

銀時「テメエ… どんだけ人の命を奪えば気が済むんだよ!!!」

銀時はこれでもかというほどネオに怒りをぶつける。

ネオ「知らんな。人間はどうしようもないゴミクスだからそんなもの考えた事もないな」

だがネオは軽く流した。

ネプテューヌ「人はゴミなんかじゃないよ！信じあい、助け合い、ともに笑顔で笑うこともあるんだよ！」

そんなネオ言葉にネプテューヌが否定を出す。

ネオ「信じあう？助けあう？ともに笑う？………よくもそんなことが抜け抜けと言えるなあああ!!!??」

ネオがネプテューヌの言った言葉を復唱した後、ネオが珍しく怒りの顔になった。

ネオ「ならお前達人間は“あの時”なにをしていたああ！！救うべきものを、殺すべき物を、信じるべきものに何かしたのか！？イヤ何もしていない！！人間はただ欲望を満たすだけで人を無視し、人間を道具の様にして捨ててきた奴らを信じろと言うのか！！？」

銀時「???何言ってるんだデメエ？」

ネオの言ってる事に何の事だかさっぱり分からない銀時達。

ネオ「・・・人間はただ欲を満たすために疑い合い、殺し合い、ねたみ、見捨てていく存在だ。そんな奴らまで信じるだなんてお前達人間の頭も屑以下、イヤ人間ですらないな。やはり人間というものは存在するに値しないな！！」

ネプテューヌ「ガアツ！！？」

ネオがよく分からないことをかかっていると黒い奴がネプテューヌの首を掴んだ。

銀時「ネプテューヌ！？...放しやがれこの...」

ネオ「吹きとべ！！カオスストーム！」

ポオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

銀時「グオオオオ！！」

新八「うわあああああ！！！！」

ジャンヌ・ビビ・ナリア「きゃあああああ！！！！」

ギルシア「く、こいつは...!!?」

リアス「なんて強力な...!!」

銀時がネオに近づこうとして、ネオが右手から禍々しい魔力弾を放って銀時達を襲った。





銀時「うおっ!? 何だこいつ!? 黒いネプテューヌ!? 黒いネプテューヌだ!」

桂「なんと!?!」

神楽「ネプっちそっくりネ。刺青以外は」

エリザベス「たしかに」

新八、銀時、桂はダークネプテューヌに驚き、神楽とエリザベスは見ている。

対面済みのレーティア、ジャンヌ、ギルシア、シャル以外は驚いた表情をしていた。

ネオ「きさま・・・俺を邪魔するとはな」

ダークネプテューヌ「アホめ、あたしの半身を殺されてはよくないからな」

そういつてエックスセイバーそっくりの黒い剣、ダークセイバーを出してネオに向ける。

ダークネプテューヌ「だからオメエというイレギュラーは消えてもらわなきゃな」

ネオ「フン、貴様ごとき力で俺にかなうと?」

ダークネプテューヌ「思っっちゃいねえよ。けど代わりにお前に凄い奴が来るぞ?」

???「カメンライド!! ゼ・ゼ・ゼ・ゼ・ゼ・ゼ・ゼロ!!」

???「ウオリヤアアアアアアア!!!!」

ネオは鼻で笑い、ダークネプテューヌはにやりと笑うと、何処からか機械音と男の声が聞こえた。

ネオはとっさにその場を離れ、回避した。

ネオ「これはこれは、『赤き異常殺し』と『破壊神』が私に御用があるとは」

ゼロUF「当たり前だ！俺はテムエの様な偽神をこの場で存在させる気はねえ！！」

冥王「っていつか私は破壊神じゃなくて冥王なの〜」

ネオが珍しそうにいい、ウルトラフォームの仮面ライダーゼロ（正体はマリオ）が今までよりもすごい殺気を放って言う。

あと冥王は修正を行った。

リアス「チートブレイカー異常殺し！？自分勝手な転生者を容赦なく地獄送りにさせたあの！？」

レオン「ほう？」

ナリア「更にはその転生者を問答無用で拷問ともいえる地獄の修行をさせて再起不能にするまで永久に地獄を味あわせるあの伝説の転生者ハンター！？」

ゼロUF「おい、それそこまでやらないからな！」

リアス、レオン、ナリアはゼロの存在に驚いたがナリアの言ったことにゼロは否定する。

ネオ「やれやれ、俺も随分と歓迎されているな」

銀時「だったらここで諦めるか？」

ネオはやれやれなしくさをして銀時が言う。

ネオ「それは断る。だが俺はここで計画を途絶える気はない。悪いがお前達はこの場で消えてもらう」

ネオはそう言って黒い空間から何かを出した。

そるは丸い球体の機械だった。

カイクム（ツ！！？あ、あれは…！！）

カイクムはそれを見て目を見開いた。

銀時「んだその丸いのは？」

銀時達はその丸いのを見て首をかしげる。

カイクム「気をつける！！そいつは・・・俺の故郷の世界を破壊した奴だ！！」

全員「え！？／何！？／嘘！？／マジかよ！？／なんだって！？」

カイクムが叫んで全員が驚愕した。

ネオ「そうだ！！これこそ世界を破壊するための兵器『亜次元爆弾』だ！！そして貴様らはこの爆弾の前で消えてなくなるがいい！！」

ネオが行ったあと亜次元爆弾が作動した。

制限時間は何と10秒！

それと同時にネオはどこかへ消えていった。

銀時「オイオイオイオイマジかよ！！何とかしろよ！！」

- 9 -

神楽「終わりネ！もうこの世の終わりネ！！」

- 8 -





マリオ「おう」

冥王「また会うの〜」

マリオと冥王と別れた。

そして銀時はその場に座り込んで考えた。

銀時（・・・“あの時”って、一体なんだろうな…）

ネオが言ったあの言葉を思い出す。

ダークネプテューヌ「人は大切な物を失われた時、奪われた人物は復讐鬼と化す。人間達の中でよくあるケースだ」

すると隣にダークネプテューヌがこんなことを言い出した。

銀時は首を向かず、ある仲間だったあの男を思い出す。

ダークネプテューヌ「ホラ、早く立てよ。あんたの恋人達が待つ居場所が見えたぞ」

ダークネプテューヌが銀時の肩を叩く。

目の前には大きな青いきれいな星が見えた。

プリニー「ミッドチルダツス」

ヴィヴィオ「帰って来たんだ！」

リアス「あれが・・・」

プリニーとヴィヴィオがはしゃぎ、リアス達は感心している。

桂「別に口を出す気はないが、銀時、たとえ過去の仲間を救えなかったとしても、今生きている仲間達を守らなければならぬ。そう







コンパ「びしょ濡れです…」

ノワール「ケホ、海の上みたいね…」

プリニー「…」

ヴィヴィオ「ああ！プリニーさんの口から出してはいけないものが！」

リアス「…ここまでむちゃくちゃな人は初めてだわ！」

レーティア「人のこと言えるかしら？」

ナリア「あう…」

落ちてきた隕石…いや、星船から銀時達が出てきた。

なのは「え？銀さん？」

フェイト・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リインフォース・

チンク・セイン・セツテ・ウィンディ・デード・猿飛「銀さん」

銀時「（兄さん）！？」

イストワール「帰ってきましたか」

なのは達銀時ラバーズは驚き、イストワールは安心したかのように  
呟く。

銀時「あ、お、おまえら「銀さん（銀時）（兄さん）———！！」  
つてやつぱりかいいい！！」

ラバーズは銀時を見るや否やいきなり抱きついてきた。

猿飛は投げ飛ばされたが。

ダークネプテューヌく感動の再会ってやつだな>

ネプテューヌ「もう一人の私？」

ダークネプテューヌくあたしはいつでもお前の中にいる。今寝とくからな>

いつの間にかネプテューヌの体の中にいるダークネプテューヌは眠りに入った。

ネプテューヌ「・・・なんだかんだいって、私、これが一番好きなんだ」

ネプテューヌはそう言って騒がしく楽しい空間へ走っていく。

余談だが新しく来たリアス達を見てラバーズがヤンデレ化したり物凄い勢いでファンクラブが出来たりと凄いことになるのはまた別の話。

【銀河編・END】

???

???'「また一つ世界が消えてしまいましたか…」

一人の女性が悲しくつらそうな目をしていた。

???'「このままでは、あの人の身が危ない。どうか彼を、光ある  
想いに届いて…!」

女性はある人物を思い、祈っていた。

だが復讐神と化したあの人物には届くことはなかった。

くおまけく

銀八「教えて!」

全員「銀八先生!!」

イツセー「よう、リアスお姉ちゃんの弟・イツセー・グリオンだ」



ゼロUF「皆！頑張れよ！」

フォックス「転生者組みに質問」マリオの殺気を受け続けられるか？  
「」

ルイージ「同じく質問」兄さんのトレーニングと言つ名の拷問はどう思いますか？  
「」

ネス「真王さんに質問」ギャラクシー編が終わったら何編にするの？  
「」

次回を待っています！

ゼロUF「偽神ぶちのめせよ！」  
『』1と2を順番に答えるならおれはわからない。そしてあれはちょっと勘弁してくれ…」

リアス「うーん、まあ耐えられそうね。後それ参考にしようかしら？  
「」

レオン「私は断然耐えられる。そしてそんな感じのトレーニングは時々やってるぞ」

カイル「やってるのか！？俺は転生者じゃないから答えないぞ」

アンヘル「われもだ」

ユウカ「私は平気よ。それにしてもそのトレーニングって・・・ウフフ」

ナリア「さりげなく不安なんですけども！？私はぎりぎりぐらいで

あれはいやだよ!」

レーティア「私は耐えられるけどあれはやらないわ」

ジャンヌ「お姉ちゃんと同じく」

ギルシア「俺は大丈夫だが、あのトレーニングは能力だめか？」

シャル「私もだけどあれやりたくない」

グレイ「どうでもいいしめんどくさい……」

ビビ「……（嫌がっている）」

真王「そうですね。短編の後『ゲーム祭編』を予定しています。その後『かぶき町異変編』、『リリ銀パーティー編』、『戦艦脱出編』のどれかを予定しています」

イツセー「つておい!ネタ晴らししてるじゃん!」

真王「いいんだよ。面白くなるなら。『鳴神 ソラ』さん。次を期待してください」

銀八「次はペンネーム『ケン』さんからの質問だ。『統夜』神が出て来たな……」

そうだなあ……お前と遊輔、はやてはレーティア達並にチートへ成長する……

統夜「えっ……マジかよ……」

遊輔「だが精進あるのみ・・・」

はやて「せやな・・・転生者達に質問や『マーブルVSカプコン3  
に出てくるギャラクタスと戦い勝てる自信ある?』」

統夜「て事は・・・俺や遊輔、はやてはとあるの聖人やDMCのデ  
ビルトリガーのようなものに匹敵する強さになるの!?!」

そうなる・・・成長してのチートは悪くない・・・先輩であるシャ  
ルが最強だけどな・・・『あ、すまん。作者はそのゲームもってな  
いし知らないんだよ。だから『ケン』さん、申し訳ございません」

イツセー「えつと次はペンネーム『黒龍』さんから。『銀時』つい  
に出たな、嫌な感じの神・・・」

黒龍「あんな神様は便所紙様で十分でしょ」

銀時「上手いwwwwww!」

ソラ「まアなんとかなるだろ」

黒龍「しかし、あんな凄い能力の敵が出てきてもまだ採集決戦じゃ  
ないから驚きです」

銀時「最後は一体どうなんだろうな?」

ソラ「俺が知るか」

黒龍「まアトークはこのくらいにして質問いきますか」

1・ネプテューヌに質問。あなたが一番嫌いなモノはなんですか？

2・ブランに質問。黒神さんの所でもこっちもで極悪料理を味わった事について一言お願いします（黒笑）

黒龍「今回はここまでです」

銀時「二番目はめっちゃSだなおい」

ネプテューヌ「食べ物ならピーマンだけど、仲間が傷つく事だよ！」

ブラン「テム「シット！」ウツ！……（気絶）」

ユウカ「暴走したら手がつけられないと思ったので黙らせました」

真王「……何も語るまい。『黒龍』さん、廊下に座ってなさい。

最後だ。ペンネーム『リイーン』さんだ。『どうも、お久しぶりで  
す、リイーンです

神「いよう）。。（ノ） 前回は取り乱しちまったぜ」

取り乱し過ぎです

神「フヒヒWWWサーセンWWW」

（反省の色なしですか、そうですねか……ハア）

神「さて……俺と同じ神様が登場だが……まさか、俺様大活躍の予感？」



無いかと……メタな発言をすると、大抵の作者の場合、自分のキヤラを可愛いがるので、おそらく、あのネオというキャラは、真王様にとつて、最強を誇るモノ……貴方、もしかしたらやられるかも、ですよ？

神「メタな事なら、仕方ねえじゃん。それに、俺がガチになるのは、俺が認めた奴だけだ」

あの旅人と、蒼き青年、の二人ですよ

神「ああ。あいつら相手だったら、俺は超本気になる。ってか、そいつら以外に本気なんて出したら、あいつに失礼だ」

旅人、ですか

神「ああ。アイツ以外とは、真剣に戦いたくねえ。それが、ライブルってもんだろ？」

……貴方にそういった相手を作った甲斐、在りましたね

神「ああ……でだ。まあ、そうだな。ところで、ネオって奴の恰好、俺のパクリか？」

ああ、そうですね。確か、貴方の服装って……

神「ゼムナスのコート。あれ、俺もそうじゃねえ？」

ですねー。神様イコール、あのコート。という認識でも出たのではありませんか？

神「なあにを言うか。俺が神々のファッションセンスの最先端を行っただけだ。時代がようやく、俺に追いついたってことだ!!!」

はいはい、自慢乙

神「オイテメエ、なんか今日は豪気だなあ、ええ？」

さ、さあ、なんの事でしょうか？ あ、あははは……………

神「ムウ……………つと、まあそんなことよりも、ちょっとネオに質問」

？

神「お前にとって、神とは種だと思つか？ それとも、類だと思つか？」

……………なるほど、そう言う事ですか

神「作者なら、分かるな。その意味」

ええ、まあ……………つまり、神というのは、人類や鳥類、魚類と同じ扱いだと思つか、という事ですね。さっきのと合わせて言うと、“神類”というべきだろうか、という事ですね

神「そう。ただ人類と同じ姿、まあ中には竜や獣類みたいな姿の奴もいるが……………ただちょっと変な力が使える種類と考えるかどうか。という質問だ。ちなみに、俺はそれも考えるがな……………ああ、それともう一つ」

まだあるのですか？

神「お前、求道者のままでいいのか？」

……はい??

神「うん、分からんか?……ネオ。お前は世界を支配し、壊してきたといったな。そして、お前は全てを屑と言った。それは即ち、自身しか愛していない、自身が全てという事。それはつまり、独りよがりと同意だ」

それが、求道者でいいのかとどういう関係が？

神「つまり、世界を支配した“だけでいいのか”？ せっかく支配した世界を壊して、何になる？ 屑の排除？ それもいいが、せっかく支配したなら、世界中の美人美女美少女、そんで美幼女に囲まれてウハウハ位してからやれよ。つまり、そう言う事だ」

訳わかんねえよ!!! 全く意味不明ですよ神様!!!!

神「おいおい、今のでわかんねえの？ ようは、“世界を支配しただけで満足するな”ってことだ」

……な、なるほど

神「さて……ネオ。違うのならば、お前は何者だ？ 森羅万象の神ならば、これぐらいは答えられるはずだろう?」

チョー上から目線ですね、神様

神「実際そうだろうか？ お前が設定だと、俺って神よりも上位の存在なんだろう？」

まあ、ある意味……………

神「だろ？ だから上から目線なのよ」

は、はははは……………こんな人でごめんなさい

m ( ) ( ) m

神「崇めろ」

やかましいです！！！！ では！！ 次回も楽しみにしておりますので、執筆、がんばって下さい！！ 失礼します！！！！

神「ばいばい！！！！」

神「さてさてえ、次回予告を見る限り、俺様大活躍を期待してもいいよねえ？」

あるいは、ネオの方もですよ。もしかから、貴方とネオがぶつかって世界がヤヴァイ、ってな事になるかも……………

神「かもな」 『それじゃあネオさんに聞いてみようか』

モニターにネオが移る。

ネオ『そんなもの興味はない。俺は世界の何もかもを破壊するのだ』  
『!』

真王「要約すればネオはただ壊すだけである。それにウハウハなんて一ミリもない様で。それに世界をすべて破壊するのは人間共がネオの…」

???「これ以上は語ってはいけません!!」

真王「おつといかん。『リイーン』さん、更新がんばってくれ」

銀八「って言うか今の声は誰だ？」

真王「空耳だ。忘れる。次回はレオンがアシストするぞ」

第八十一訓：神様に喧嘩売ると罰当たりになる（後書き）

ナリア「ついに現れた真の黒幕！しかし驚くべき真実があった！」

カイル「こいつが俺の故郷を！」

ナリア「おどろくべき物、それは完全なるキャラかぶりだった！」

レオン「そこは驚くところなのか？」

ナリア「アホウ！彼の容体をよく見てみなさいよ！！あれはどう見てもキングダムハーツのアンセムその者よ！！髪の色以外は」

リアス「何でそこを気にするわけ？」

ナリア「あのアンセムは二次元キャラの存在。つまり！きっとあのネオってやつは二次キャラ大好きキャラなのよ！！」

ユウカ「本編とは何の関係もないので信じないでくださいね」

ナリア「次回！『転生女王ナリア』最終話！『咲き散る花のために』  
今こそ私が主人公に！！」

ビビ「抜け駆けは許さないわよ！！」

イツセー「っていうか狙ってたのか？」

ナリア「イヤ気分で叫んだの」

ユウカ「でしたら、私が主人公になっても」

転生者組「それだけはやめろ」

真王「はあ『見た目は違っても中身は似ている奴が多い』 テイクオ  
フだ」

く予告

ナレーション「別次元の剣聖たちが現る？」

## 第六回、モンスター解説図鑑

真王「第五回、モンスター解説図鑑！」

イエー………イー!!

真王「では始めにこのモンスターからだ」

くティラノパツクンく

第六十八訓に登場。

サバンナランドギヤラクシーに住むモンスター。普段は卵の中で寝ているが、起きれば獲物を求める。見た目はマリギャラのディのパツクンと同じ。

シャルメモ：球と花卉は食えないから取り除いて焼く。植物成分が入った肉だから生活習慣病は防げる。

真王「次はこのモンスターです」

くクワカプトく

第六十九訓に登場。

クワガタの口を持つ虫。体は固いため魔法攻撃は効かないが、ドロップ攻撃は潰されるので倒せる。



シャルメモ：殻はむしり取って中は焼きを入れればおいしい。

レーティア「次は奴らの王様よ」

くワカブトキングく

第六十九訓に登場。

クワカブトのボス。グルグルの目をしているが決して目を回しているわけではない。飛行能力ももっており、苦戦を強いられることもある。

シャルメモ：クワカブトと同じ調理法。中身は大きい分味もしつかりだ。

真王「さて次はこいつだ」

くヨーグルゼリーく

第七十訓に登場。

スイートスイーツギヤラクシーのヨーグル湖に住むクラゲモンスター。縄張りに入ってきた奴は容赦なく電撃を喰らわせて追い払う。余談だが女の子が好きという噂も。

シャルメモ：引き上げたら焼くより刺身がおいしい

真王「まだ行くぜ」

くドッサンく

第七十二訓に登場。

板型の石の怪物。倒れるときにドサンとなることからこの名が付いたとの事。もしくはボタンと言う敵の亜種という説がある。

シャルメモ：石を食う馬鹿はいねえよ

シャル「次はボスな奴だよ」

くガメーバく

第七十二訓に登場。

ミッドチルダを襲撃した犯人。見た目はクツパっぽいガメラ。巨大化した姿は20メートルを超えていたがデカデカノコを吐きだした後2、3メートルまで縮んだ。銀時達を勇者と思い込んでいる。

シャルメモ：調理したことはないがきつと絶品だと思う。

真王「次は普通の奴：なのか？」

くボルタく

第七十三訓に登場。

霊体が岩を覆って怪物となった姿。実際は友達がいなくてさびしがりな性格の男の子。見た目はマリオのポルタそのもの。

シャルメモ：岩なんですけど・・・

真王「次はちよつと厄介な奴だ」

〈イビルソルジャー〉

第七十四訓に登場。

全身黒いアーマーに赤い四つの目を持つ人型の敵。さまざまな武器を使いこなしている。正体は人間の死体から作られているが、詳細は判明されていない。

シャルメモ：食う気にはなれない・・・

レーティア「次のはちよつとあれな奴よ」

〈リツカー〉

第七十四訓に登場。

赤っぽい肌色に裂けた口と長い舌を持つ怪物。イビルソルジャー同様人間の死体から作られたようだ。見た目は肌色っぽいナムカプのベノムに舌が長いイメージ。

シャルメモ：食べる気になれない

真王「まだまだ行くぜ」

〈カチコチキング〉

第七十八訓に登場。

カチコチと呼ばれる氷モンスターの王さま。寒いギャグが大好き。だが邪心コンパの怒りを買ってしまったためぶち砕かれました。

シャルメモ：カキ氷でイチゴシロップでもかけようかな？

真王「触らぬ神にたたりなし。つぎだ」

〈マドロイド〉

第七十九訓に登場。

全身緑色で触手を持つ人型モンスター。人間の死体を改造している。特に女性をよく襲うことに奴らは女性が好きではないかと思われるが今は不明。

シャルメモ：触手はすべて切り落としてグツグツ煮込んで食べる

リアス「次は奴らのボスね」

くリュウゲイく

第七十九訓に登場。

長い胴体で蒼い鱗を持つ竜型モンスター。実はある存在が作り出されたと言われる改造モンスターらしい。なお同種にスザーグ、ゲンブード、ビヤツコルという四神をモチーフにしてる同種がいる。ちなみにリュウゲイは青龍をモチーフにしている。

シャルメモ：揚げフライにして食べたかった・・・

真王「さいごだ」

くネオく

第八十訓に登場。

髪：無印キンハのアンセムの髪を黒くしたイメージ

目：赤

服：無印キンハのアンセムの服をイメージ

年齢：1億歳以上（見た目25歳）

体重：????キロ

性別：

種族：森羅万象の神

魔力光：????

好き：????

嫌い：世界、人間、生物

性格：世界そのものに対して憎しみを抱いているようだ。

レベル：??????

得意武器：なし

スキル：ポジティブ・フィードバック（相手の技を倍返して返す）

詳細：森羅万象を名乗る神。人間達をゴミくずといい、世界をすべて破壊しようとしている。そんな彼に人間達を憎む秘密があるようだが……。

真王「現時点でネオの秘密は暴けません！それではまた」

第八十二訓・見た目は違っても中身は似ている奴が多い（前書き）

真王「今回は風花さんの許可の元あのキャラ達がやってきます！」

神「オイオイまだ増えるのか？」

真王「はい、ではスタートです！」





## 機動六課

銀時「で、新八はこのちっこい奴らを拾ってきたのか？」  
「???」「誰がちっこいだこらあ!!」

銀時は6人を見て言うと、6人の一人のピンクのリボンをつけた栗色の髪に背が小さい少女がとび蹴りをかました。

「???」「しっかし、妙な光に連れ去られたと思ったら景色もものは達も変わってないな」

「???」「でも見慣れない人たちがいるじゃないの」

茶髪でめがねをかけた青年が周りを見ながらいい、その少年とそっくりな顔立ちの女性がのんびりした口調で言う。いうなれば2人は双子のようだ。

イストワール「それはですね。あなた方が知る世界とは別の世界。  
いわば平行世界です」

「???」「マジで!?!」

「???」「あら」

イストワールが説明すると双子は驚いた表情をする。

ネプテューヌ「えっと・・・とりあえず自己紹介しようかな?」

ネプテューヌが言うと、代表に黒目黒髪の青年が言う。

レイン「そうだな。レイン・アスハだ。一応普通の人だ」

続いて双子のめがねの青年。

森羅「俺は久遠寺 森羅だ。よろしくな」

次は双子ののんびりした女性。

咲夜「久遠寺咲夜、だよ。森羅とは、双子なんだ。よろしくね」

次は何だが辰馬のような雰囲気青年。

蒼馬「僕は不出世の天才演奏家、遠野宮蒼馬さ。これからよろしく頼むよ。特に女の」「お前はこいつらに半径2万km以内に近づくな」「地球外退去を命じられた!？」

レインと森羅の変な進言に突っ込む蒼馬と苦笑いする人々。

次は6人の中でまじめそうな青年。

紅也「二宮紅也だ。よろしく」

最後に銀時を蹴飛ばしたピンクの髪の少女。

さくら「私は、東條さくら。好きな人はレン君。私以外レン君に近づくな!」

いきなり自分の彼氏宣言するさくら。



森羅「出たよレインの癖といつかなんといつか…」

咲夜「でもそこがレン君だもんね」

蒼馬「そうだね」

紅也「はあ……」

さくら「む……」

神らは頭を抱え、咲夜は普段通りそう言って、蒼馬は同意し、紅也はため息を吐き、桜はレインと銀時の行ったところを見て頬を膨らませている。

すると、

定春「ワン」

ガブツ！

蒼馬「フゴオオオオオオオオオ！！！！？？」

後ろから定春が蒼馬の頭からがっぽり入ってかみついた。

森羅「うおっ！？なんだこのでつかい犬！？」

咲夜「あら、大きなワンちゃんね」

紅也「こ、これが犬なのか？」

さくら「でか……」

初めて見た見た森羅たちは驚いていた。



銀時「バカヤロウ、真のパフェは見た目・おいしさ・輝かさで決まるんだよ」

レイン「そうだ。それが分からん奴は子供ということだ」

新八「あんたらの頭こそが子供だよ！！しかもその3元素まる崩しじゃねえか！！」

真顔かつ真剣に言う銀時とレイン。

だが新八に怒鳴られる。

銀時「何言つてんだ新八」

レイン「向こうを見てみる。愛用者がいるぞ」

銀時とレインの視線の先には、『宇治銀時パフェ』と『ドックパフェ』を食べるなのは、フェイト、スバル、アルフ、ネプテューヌがいた。

新八「うそおお！！！！？」

新八はこればかりは驚いた。

無論食べているなのは達以外もこればかりは驚いた。

銀時「いや待てよ？俺の小豆とオメエのを合わせて作ったらもつと旨いんじゃない？」

レイン「おお！そうか！そんな発想もあつたか！これを名付けて『宇治銀時ドッグパフェ』としよう！」

新八「またパフェ伝説が一つ増えちゃったよ！！」

銀時とレインがまた新たなメニューを導き出して、新八は突っ込まざるをえなかった。

ミッドチルダ・商店街

銀時「何で俺がこんなことしなきゃいけないんだよ…」

レイン「それはこっちのセリフだ…」

銀時とレインはだるそうに買い物袋を持ってつぶやく。

二人以外に森羅、咲夜、紅也、神楽、新八、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、レーティア、ジャンヌ、ギルシア、シャル、リアス、イツセー、レオン、カイク、ユウカ、ナリアもいる。

なぜ彼らがここにいいのかというと、はやくからのパシリである。

蒼馬とさくらは留守にすることになった。

まあ買い物する前はさくらがギルシアに追いかけられたり、レインがジャンヌに目をつけられたり、はやくが咲夜の胸をもんだり（このときはやくは「んなっ!? 何やこの隠れおっぱいは!?!」とリアクションをした。咲夜は着やせするタイプらしい）、蒼馬は相変わらず女性にナンパしようとしたり、森羅が蒼馬に踵落とししたり、紅也はため息吐いたりとしていたとか。

ノワール「ところでその大量の胃薬は何なの?」

ノワールは紅也と森羅が持っている胃薬を指差して聞くと、

紅也「今後の腹痛対策のためだ」

ノワール「ああ、なるほど…」

紅也が説明してノワールは納得した。

グニユツ！

咲夜「ひゃんっ!?!」

神楽「テム、普通そうに見えて実際でっかい乳持ちちゃがって、こっちによこせよ」

すると神楽が咲夜の胸を鷲掴みにして羨ましそうに言う。

咲夜「それはだめよ、それに、神楽ちゃんは、将来私ほどじゃないけど大きくなるわよ」

神楽「マジでか!?!」

咲夜「そうよ」

咲夜がのんびり口調で神楽に言うと神楽は驚いて咲夜はうなずく。

紅也「それ以前に胸をもみながら歩くな」

ネプテューヌ「いいじゃん、あれもスキンシップのひとつなんだよ  
こうやっち」

こうやっち「俺はこうやっちじゃない!...って名前変わってる  
う!?!」

神楽と咲夜を見てため息を吐き、ネプテューヌに突っ込むこうやっち  
ち...もとい、紅也。

銀時「なあレイン、ブルーベリーとパフェをあわせてもうまいか?」

レイン「試した事はないが、旨くなる事は言えるだろう」

レーティア「また始まったわ...」

ジャンヌ「甘党コンビだね」





銀時「いや、俺とあいつらだけで十分だ」

若干笑っているリアスが銀時に聞くと銀時は笑って返す。

銀時「おいレイン、俺がこいつを倒したらパフェおごってもらおうか？」

レイン「いいだろう、だが俺が倒したらあんたがおごれよ」

銀時「乗ったぜ。いくぞ！」

銀時とレインがなぜか賭け勝負をして、イビルドラゴンへ突撃した。

IBGMファタライズbyソウルキャリバーレジエンス  
( Mega Extended Edition : Lloyd  
Irving 「Fatalize」 Soul Calibur  
Legends )

イビルドラゴン「ガアアウー!!」

向かってくる銀時とレインに爪で攻撃しようとする。  
だが銀時とレインは攻撃をかわした。

レイン「最初はこれをくれてやる」

トレインはイビルドラゴンに近づく。

レイン「見様見真似、虎刃斬！」

まるで虎の爪で引っかくような攻撃を放つ。  
イヴィルドドラゴンにダメージを与えた。

イヴィルドドラゴン「グオオオオオ!!!」  
レイン「うわっ!」

銀時「ちっ!」

イヴィルドドラゴンは反撃にドラゴンオーラでレインと銀時を吹き飛ばした。

イヴィルドドラゴン「グアアアア!!!」

そしてイヴィルドドラゴンは2人に向けてファイアーブレスを放つ。

ギルシア「熱エネルギー吸収!!!」

するとギルシアが前に立ってイヴィルドドラゴンの炎を吸収した。

銀時「おいなにすんだよ!別に手を出さなくてもかてたぞ!」

ギルシア「あ?そうなのか?」

銀時が文句を言っているとところイヴィルドドラゴンがまた炎で攻撃しようとする。

ガシッ!!

イヴィルドドラゴン「グ・・・!?!」

咲夜「手は出させないわよ」

だが咲夜の鞭がイヴィルドドラゴンの口を強制的に閉ざした。

イビルドラゴン「グググ・・・」

イビルドラゴンはうっとおしそうにして爪で鞭を切るうとする。

レーティア「させると思ったの？」

だがレーティアがその爪を鞭で捕らえた。

咲夜「あら、あなたも鞭使いなのね」

レーティア「まあね。レオン」

レオン「疾風雷打脚！！」

咲夜が感心し、レーティアがレオンに言って、レオンが仮面ライダーみたく必殺キックをかました。

森羅「紅也！あの羽をたたっ切るうぜ！」

紅也「ああ、いくぞ！」

森羅と紅也はデバイスを起動させた。

森羅の姿は右手には長物の大太が握られ、柄と鍔は中国風だが刀身は日本刀その物の異国風の刀を持っている。

唾には宝玉が埋め尽くされていて、刀身には虎の姿が真紅に彫り描かれている。

バリアジャケットは上半身は筋肉が判るほどピッタリのタンクトップ、下半身は中国風の着物を穿いている。

そして顔には普通の眼鏡の代わりに黒眼鏡をつけていた。

つまる所、これはどう見ても『るろくに剣心』に出てくる『えにし雪代縁』の姿、倭刀と言う事だ。

紅也の姿は某炎髪灼眼の討ち手よろしく髪と瞳が真っ赤になっていた。

ジャンヌ「るる剣とシヤナじゃん！けどそれがいい！！」

森羅「・・・後ろで何か聞こえたがスルーしろ」

紅也「ああ、」

ジャンヌの驚きをスルーして森羅と紅也は駆け出す。

森羅「さて、見様見真似、ソニックレイヴ！」

紅也「一閃！」

ズバン！！

イヴィルドラゴン「ゴオオオ！！！？」

森羅と紅也の一閃攻撃でイヴィルドラゴンの羽が落とされた。  
これで飛ぶことも出来ない。

銀時「だ〜か〜ら〜！」

レイン「そいつの獲物は」

銀時・レイン「俺だっって言ってるだろ！！」

しびれを切らした銀時とレインがイヴィルドラゴンに向かっていく。

イヴィルドラゴン「グオオオオオ！！！！」

だがイヴィルドラゴンは負けじとドラゴンオーラで吹き飛ばした。

銀時「遊びは終わりだこの蜥蜴野郎」

レイン「テメエに教えてやるよ」

銀時とレインが二人同時に、

銀時・レイン「俺は人生を生きる侍（人間）だああ！！！！」

そう叫んでイビルドラゴンと叩き伏せた。

かくして『銀の魂を持つ侍』と『黒き剣聖』が共に戦った瞬間だった。

で…

ネプテューヌ「銀さんとレインさん、飽きないね〜」

銀時「イヤだって糖分取らねえとイライラするんだもん……」

レイン「別に糖分関係ないが俺は好きで食ってるだけだ」

六課に戻ったネプテューヌ達は食事を始め、銀時とレインは相変わらずパフェを食べている。

銀時「つていうかもつとイライラするもんがあるんだけどな」

銀時がある場所をジト眼で見てレインはため息吐いてネプテューヌは苦笑いする。

その視線の先には咲夜とユーノだ。

咲夜「やっぱり、世界が違ってても、ユー君だね」

ユーノ「え、えっと……（まずい！僕すっごくドキドキしてる！？）」

必要以上にラブる咲夜と戸惑うユーノ。

レイン達とこのユーノは咲夜といい関係になっているらしい。

こちらのユーノは咲夜と目があって心の奥底から開かれた。

簡単なところ一目ぼれである。

森羅「はあ……兄としてどうかと思うぞ咲夜」

咲夜「私が姉よ」

新八「どつちだよ！！」

なのは「森羅君と咲夜ちゃんは双子だからね」

ため息吐く森羅が言うと咲夜が姉と主張し、新八が突っ込んでなのはが言う。

蒼馬「フツ、どうだい子猫ちゃん、僕といいことでも」

ザクツ

ネプテューヌ「ゴメン、私銀さん以外と付き合う気はないんだ」

蒼馬「それが……返事……ガクツ」

ナンパしてきた蒼馬にネプテューヌがエックスセイバーで蒼馬の頭をザツクリと行った。

レイン「ネプテューヌ、確かに蒼馬は復活しやすい奴だけどそれはやり過ぎじゃないのか？（汗）」

ネプテューヌ「え？じゃあギガスラッシュ放てばよかった？」

レイン「なお悪い!？」

レインは冷や汗流して突っ込むと、更に物騒なことに突っ込む。

『レイン』『森羅』『咲夜』『蒼馬』『紅也』『さくら』が六課に居候することになった。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!!」



レオン「レオン・バステットだ。私がアシストする」

銀八「んじゃペンネーム『支配者』さんからいくぞ。『支配者』真の黒幕登場ですか……」

銀時「おい…なんかおかしくねえか？」

支配者「何が？」

銀時「前の番外編の話し見た限りじゃ、あいつがダークソウルの誕生の原因を作った奴だろ？ だったら恨まれる原因はあいつであってアイツが人間を恨むなんて間違ってるじゃないか？」

支配者「ですよ…それに黒幕は”ダークソウル”のはずですし、自分をあんな目に合わせた張本人であるネオが人間に対して復讐してるなんて知ったら『ワタシヲウラギツタチヨウホンニンハオマエナノニジブンガフクシユウキニナルナンテユルセナイ!!』とか言ってるブチキレてすぐにでも襲い掛かりに行くと思うんですけど」

銀時「そう思うよなあ……」

支配者「それにネオが高杉と組むとも思えませんし……」

銀時「だよなあ…あんな事言ってるんだしな……人間は最低だって…最低は如何考えてもあいつだと思っただけだな」

支配者「まあ、別にいいですけど…では質問です。ネプテューヌに質問、貴方は多くの人にマヌケと罵られていますますがそんな自分を如何思いますか？（黒笑）」

土方に質問

多くの小説でマヨ方やエロ方と罵られていますますがそんな自分を如何  
思いますか？（黒笑）

機動六課に質問

まるでと言って良いほど出番がなくなっていますがそんな自分達を  
如何思いますか？（黒笑）

では今回はこの辺で「『」

ネプテューヌ「私はまぬけじゃない!!」

土方「エロ方じゃネエエエエエ!!マヨ方は許す!」

銀八「許すんかいイイイイイイ!!!!!!」

はやて「こちら『黒神』のこの『狂乱編』みたいに扱われてへん  
か?」

真王「気のせいだ」

レオン「では『支配者』はバケツを持って立たせるとして、ペンネ  
ーム『鳴神 ソラ』の質問は『マリオ』亜次元爆弾…ちっ!むなく  
そ悪いぜ!」

ルイージ「それで特訓中?」

マリオ「そつだよ!」

冥王「ホント嫌な奴なの」

ルイージ「それにしても…ネプテューヌ」

フォックス「おいおい」

マリオ「ちなみに俺の師匠のトレーニングでは能力を使わないで自力でやるの、ってかやったら身に付かんが師匠の教えだ」

フォックス「転生者組みに質問『行きたい世界はあるか?』」

スネーク「転生者組みに質問『嫌いなモンスターはいるか? 具体的に頼む』」

クッパ「質問なのだ『マリオってどれ位有名なのだ?』」

次回を待ってます!』マリオはメテンスギルドや神界のほとんどで有名だぞ。そして私は魔物ばかりの世界だな。苦手な奴は亜臭を放つ奴、言わばゾンビだ」

リアス「私は綺麗な男だらけの世界ね。モルボル種がいやよ」

イッセー「おっぱいのでかい女性達の世界!ゾンビ系は好きになれないけど…」

ユウカ「全ての人間どもを私の配下にする世界ですわ。苦手と言えば特になんですけど」

ナリア「女の子と百合りんの世界!虫とかゾンビとか幽霊とかは勘弁して…」

レーティア「なんでもいいわ。虫とかはちょっと無理ね。あと不細工なオタクとか」

ジャンヌ「何処でもいいよ。けど虫は駄目」

ギルシア「ブラックスポットってどこだ。俺に苦手な物などない！」

シャル「トリコの世界。気持ち悪い変態はお断り」

レオン「では『鳴神 ソラ』は鉄アレイ持って廊下に立って、ペンネーム『月光閃火』だ。『ども』月光閃火だ。

しかし…ネオの容姿はホントにネタっぽい感じだな…。というか…あれでキャラ崩壊したら、一体どうなるんだろ？

輝刃「さあな…皆目検討が着かんよ…。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1. ネプテューヌ達女神陣に質問…もし他のアニメやゲームのキャラになれるとしたら、誰になりたい？ただし、質問の通り自分が出ている作品内で…というのは無しだぞ？

あはは…それは楽しみな所だな…。次は俺からだ。

2. ネオに質問…実は此処に、『シャマル』っつー料理がちよつと（破壊神的に（汗））苦手な女の娘が作った料理があるんだが…食べてみる？

輝刃「…さっそくキャラ崩壊させる気か…（汗）。さすがのネオも、

本能でその料理が『危険だ』と判ると思うぞ…（汗）。」「『それじゃあ答えてみる』」

ネプテューヌ「シヤナちゃんかな？だつてかつこいいし」

ノワール「アイドルマスターか・・・初音ミクか…」

ブラン「興味ない」

ベール「ロザリンドさんですわね」

真王「では悪役であるネオさんの答え」

モニターにネオが映る。

その手にはシヤマルの料理が。

ネオ『……………』

グシャ！

シヤマル料理が潰されました。

銀八「やっぱりシヤマルのは駄目か？」

真王「ちげーよ。あれは『人間のゴミを食べない』んだよ」

銀八「作った料理さえもゴミ扱い!？」

真王「はいはい無視だ無視。『月光閃火』さん。廊下に立ってなさ

い  
」

レオン「次だ。ペンネーム『黒龍』からの質問。『黒龍』ネオは何  
かありそうですね」

銀時「でもよ、確かあいつがダークソウルの原因だった奴だろ？」

ソラ「ダークソウルが出来た後かその前に何かあったって事だろ」

銀時「なるほどな」

黒龍「これから色々と秘密が明らかになっていくって事でしょう」

銀時「まあ色々ネタバレ感ある気がするけどな」

ソラ「そうか？」

黒龍「じゃあ質問しますか」

- 1 .ネオに質問。あなたにとって、転生者とは何ですか？
- 2 .ネプテューヌに質問。ネオとネプテューヌにはかなりの力の差  
があると見ますが、これからどうしますか？
- 3 .ネプテューヌ以外の女神に質問。何か最近活躍シーンがあまり  
見られませんが、大丈夫ですか？

黒龍「今回はこれで終わりです」『』

モニターが出てきてネオが映る。

ネオ『そ奴らも人間と同じゴミクズだ』

そう言っつて消えた。

レオン「・・・つぎだ」

真王「彼女にはパワーアップさせようと思いますね。あとネプテユ  
ー又以外は大きく譲ってます。『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」

レオン「よし、次のアシストはカイクとアンヘルだ。じゃあな」

第八十二訓：見た目は違っても中身は似ている奴が多い（後書き）

レイン「パラレルワールド平行世界へやってきた俺達に待っていたのは衝撃の出来ごと、それは……」

森羅「なんだかいろいろありそうな世界だな……」

レイン「そう！この世にパフェの神秘であるトッピングの種類が豊富であることだ……」

森羅「衝撃の出来ごとってそれかい……」

レイン「パフェには冷たいアイスから始まって沢山のクリームと味付けや見た目のためのトッピング。そのトッピングに新たな境地が誕生した。そう！栄養満点のドッグパフェだ……」

森羅「そりやお前の好物じゃねえか……」

咲夜「世の中はひろいわね」

レイン「だが！ドッグパフェの同等にならぶ宇治銀時パフェと合体することによって新たな極地、『宇治銀時ドッグパフェ』が頂点に達するのだ……」

蒼馬「甘いものになると積極的だね。レン君は」

さくら「私普通のパフェがいい」

レイン「次回『甘党冒険記』最終話！『パフェの神秘を求めて』パ



フェエこそが最強の極致なり！」

フリーダム「あれ？僕の扱ってどうなるの？」

森羅「俺突っ込むの疲れるわ」

真王「そんなんじゃ『ツツコミマスターの継承者』になれんぞ」

森羅「いらねえよそんな称号！！」

真王「次回『恋はいつでもハリケーン』テイクオフだ」

さくら「え？誰かが恋の発展でもするの？」

咲夜「私とユー君じゃない？」

真王「違うよ。あの童貞が卒業するんだよ。じゃあな」

森羅「童貞って誰だよ！教えてくれよ！！」

第八十三訓：恋はいつでもハリケーン（前書き）

真王「ついにあの童貞が卒業を果たすときが来ました！」

新八「な、なんだって！？い、一体だれが？」

真王「それは呼んだら分かる。スタート！」





神楽は毒を吐き、なのはは困惑し、エリザベスはこう言つて、ギルシアは怒つて、レーティアは面白そうに笑う。  
新八は照れ臭そうにする。

銀時「新八テメー、よくも俺の前で彼女作りやがったな？（やるじやねえか新八）」

レーティア「思考と口が逆よ」

銀時の言つてる事と想像が逆なのでレーティアが突っ込む。

新八「ま、まずい！本気のデートなんて…くっ、心臓の鼓動が止まらない！」

神楽「あれ？新八一度やつたんじゃねえのか？」

銀時「イヤ、この前のアレは金泥棒だからノーカウントだ」  
なのは「え？何の話？」

まだ興奮が抑えられない新八をよそに銀時たなのは達に以前新八がデートしたことあること、エロメスのこと、そして嘘デートであったことを話した。  
なのは達は少し納得した。

咲夜「新しくん？男は度胸よく、頑張つてね」

ユーノとイチヤイチャしながら新八を応援する咲夜。

銀時「なに人前でいちやついてんだテメエらああ！！！！」

ユーノ「ウボオ！！」

咲夜「ユーくウウん！！」

銀時が青筋立ててユーノを蹴飛ばした。

咲夜はユートノを追いかけた。  
なのは達は羨ましいな〜と指をくわえていた。  
全員がそうこうしている。

ジャンヌ「お待たせ〜」

フリルスカート、ピンクTシャツ、黒ブーツ、白リボンでポニーテールにドレスアップしたジャンヌが来た。

ジャンヌ「新八君、似合うかな？」

ルンルンとおどったり一回転したりして可愛さをアピールしながら新八に聞く。

新八はジャンヌの可愛さにほけてしまう。

ジャンヌ「？新八君？」

新八「はっ！？に、似合います似合います！とってもかわいいくらいに！／／／／／」

ジャンヌ「えへへ／／／／／」

惚けた新八に声をかけると新八は我に返ってジャンヌにいい、ジャンヌは顔を赤くしててれる。

ジャンヌ「あ、そうだ。新八君もデートしやすい服があるよ。それ！」

新八「うわー！」

ジャンヌがゴソゴソと何か取りだした瞬間新八に着せる。  
そして新八の姿はグレーパーカーに青ズボンという服だ。

ジャンヌ「うんサイズピツタシ！似合ってるよ新八君」  
新八「え？あ、はい、あ、あ、あ、ありがとうございます！／＼／  
／／」

まさか女の子に着せられることの動揺を隠せない新八。

ジャンヌ「それじゃあ新八君、レッツゴ」

新八「え？ちよ、ちよっとお！！？」

ジャンヌが新八に腕に抱きついて2人は六課を出て行った。

銀時「・・・おい」  
全員「？」

銀時がこの場にいる全員に声をかける。

銀時「・・・あいつらを追いかけるぞ」

ミッドチルダ

そこで若いカップルが歩いている。  
いわずもがな、新八とジャンヌだ。

ジャンヌ「~~~~~」

ジャンヌは鼻歌を歌いながら新八の腕に抱きついている。

新八「……………／／／／」

逆に新八は心と精神が興奮状態だ。

新八（まさか2度もデートすることになるとは…あ、あれノーカウ  
ントにしよう。そ、それにしてもまさかジャンヌちゃんが自分か  
らデートを誘うだなんて！ついに僕は『リリカル銀魂シリーズ』で  
一番の幸せ者になるかもしれない！）

デートをすることがとてもうれしい新八。

新八（……………つかそれ以前にジャンヌちゃん心なしか必要以上に  
引っ付いてきてない？というか僕の手がジャンヌちゃんの胸に…／  
／／／）

確かにジャンヌの胸が新八の手にあたっている。

15歳でありながらかなりのプロポーションを持っているので美少  
女行っても過言ではない。

新八は顔を赤くし、同時に青くなる。

新八（な、なんだか周りの視線がひしひしと感じるんですけど…  
……………もしかして銀さんもこんな環境を？……………少しだけ同  
情します）

周りから嫉妬と殺意の視線（特に男子から）を感じて青くなる一方、  
恋心を持たれている銀時に納得して同情する。

そんな二人を追う輩が数名、銀時を代表に神楽、桂、エリザベス、  
なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフ



イーラ、スバル、ティアナ、ユーノ、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、レーティア、シャル、ギルシア、リアス、イツセー、レオン、ユウカ、ナリア、レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくらである。  
ちなみに全員グラサンつけて。

なのは「で、追いかけてみたけど結局どうなっちゃうのかな？」

銀時「ばっかなのは声がデケえよ！」

フェイト「イヤ銀時がうるさいよ！」

シグナム「テストロッサがうるさいぞー！」

ヴィータ「シグナムが一番うるせえよー！」

スバル「ヴィータ副隊長が一番うるさいですー！」

ネプテューヌ「そう言うスバルもうるさいよー！ー！」

ギルシア「ネプテューヌたんが一番うるさいですー！ー！」

森羅「オメーが一番だよー！ー！」

さくら「あんただよー！ー！」

リアス「あんたたち全員がうるさいのよー！ー！かく言う私もただかねー！ー！」

なんか漫才をやってる様だがそこは無視だ。

レイン「で、何で俺達まで追わなきゃならいんだ？」

森羅「俺の場合は新八が羨ましいんだちくせう！」

蒼馬「フフフ、そして二人は永年の愛をきこ、テメエは地面ときずいてる！」  
「ブフェツ！ー！」

レインがため息を吐き、森羅が苦やしそうにいい、蒼馬が語りかけようとしてレインと森羅に踵落として地面にキスした。

咲夜「ユー君も、一緒にあんな感じになりましたよーね」

ユーノ「は、はい… / / / / /」

ニコニコしながらさりげなくユーノに抱きつく咲夜と顔を赤くするユーノ。

銀時「なに人前でいちゃついてんだ眼鏡こらあん？」

ドガドガドガドガドガドガドガドガ!

ユーノ「イタタタタタタタタタ！」

ラブラブ状態の二人に嫉妬して銀時はユーノにストンピングをかます。

咲夜「ユー君になにしてるの!」

バシイ!!

銀時「おふう!!」

見かねた咲夜が銀時に鞭でひっぱたく。  
そしてユーノに駆け寄る。

咲夜「大丈夫ユー君…?」

ユーノ「ハイ、ありがとうございます。咲夜さん」

咲夜「ユー君…」

ユーノ「咲夜さん…」

森羅「はいはいはい、桃色はここまでにしとけ」

咲夜「チツ…」

森羅「今舌打ちしなかったか？」

ユーノと咲夜の桃色空間が出来上がるところで森羅に邪魔されて舌打ちする咲夜。

ネプテユーン「銀さん、次レストランへ行つたよ！」

銀時「おし！」

銀時達は後を追った。

ファミレス・アーチャン

ジャンヌ「あ〜ん！ハムハム おいし〜？」

ファミレスでおいしそうなイチゴケーキを頬張るジャンヌ。  
対して新八はまだまだがちがち状態だ。

新八（ケーキを食べるジャンヌちゃんが可愛い…、ってイカンイカン！僕はなに欲深いことを考えているんだ！紅茶を飲んで落ち着こう）

新八は心の中でこう思ったあと紅茶を飲もうとする。

ジャンヌ「・・・新八君、なに目に紅茶を当ててるの？」

新八「ん？アチャパアア！！！」

新八の右目に紅茶が当たっているのでジャンヌが指摘すると、気付

いた新八はやけどした。

ジャンヌ「もくになってるの新八君。初めてのデートだからって固まり過ぎだよ」

新八「は、はあ・・・」

手にハンカチを持って目とか服を拭くジャンヌに謝る新八。

ジャンヌ「ところで新八君」

ジャンヌが突然こんなことを言い出す。

ジャンヌ「正直言って…私のことどう思ってる？」

新八「え？」

新八は困惑する。

いきなりどう思うと言われても今の新八には対応できない。故にどこかたえるのか迷うのだ。

新八（ジャンヌちゃんは僕のためにあえてそうさせてくれているのか？でも僕は…どうすれば…）

迷っていると、ガラの悪い男達が現れる。

男「よお、姉ちゃん。俺たちに付き合えよ。そんな眼鏡より楽しいぜ？」

げらげらと下品な笑みを浮かべる男二人。

ジャンヌ（うわ、どうも嫌々な奴らね）





ジャンヌ（新八君、もしかして私のために…？）

ジャンヌは男達を倒した新八を見てこう思った。  
「かつこいいいな新八君」と。

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおお！！！！

と、突然湧き上がるギャラリからの咆哮。

とりあえず、みな一様に「感動した！！」だの、「アイツらには俺たちも手を焼いていたんだよ」だの、「スゲエ、君は超人か！！？」なんて新八に言いよつているのが眼に映った。  
新八は元に戻つてあたふたしている。

ジャンヌ「（仕方ないな…）新八君！こっちだよ！」

ジャンヌは新八を捕まえてどこかへ走つた。

銀時「何処行く気だあいつら？」

ネプテューヌ「ともかく追いかけるよ！」

ジャンヌ「驚いたよ。新八君つていざという時にあんな芸当な技を出せるなんて」

新八「あ、い、いえ、あれは半ばヤケクソみたいなもんです…」

群衆から逃れたジャンヌと新八は人気のない公園にいた。

銀時達は入口の陰で見ている。

ジャンヌ「で、さっきの続きだけど…」

新八「あ、もう答えは見つけました」

ジャンヌが言おうとしたら新八が答える。

新八「ジャンヌちゃんは可愛いですしきれいです。そしてコスプレが好きという難点がありますがちゃんと他人を思いやる気持ちがありますから」

ジャンヌ「新八君／＼／＼／」

ジャンヌは新八に嬉しいことを言われて顔を赤くする。

ネプテューヌ「へへ、いい雰囲気になってんじゃん。そう思うよね銀さん？」

銀時「ああ、ぶっ壊してやりたいぐらいにな」

ノワール「ってちょっと？何でライフル構えてるの？」

なぜか新八に向けてライフルを構える銀時に突っ込むノワール。

銀時「んなもん簡単だ。新八をぶっ殺すんだよ」

ナリア「直球！？止めなさいよそんなこと！」

あまりにも物騒なので銀時を抑える。

銀時「はなせ〜！！俺はあの眼鏡をぶっ殺すんだ〜！！！！」

じたばた暴れる銀時。

幸い新八とジャンヌに気付かれてない。





新八「・・・ファ・・・ファ・・・」

全員（ファーストキスだとオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！？）

新八は心の・・・いや、魂の奥までシャウトした。  
見ていた銀時達も同じくシャウトした。

レーティア「あの子ったら大胆ね？」

ギルシア「チツ、まあ百歩大目に見てやるぜ」

シャル「これか恋愛か？」

イツセー「くく、羨ましいぞ新八！」

ナリア「ついに恋を渡ってしまっただか・・・」

転生者組はこんなリアクションをした。

咲夜「あら、でも私とユ一君も負けていられないわ」

ユ一「いい！？咲夜さん！？」

咲夜がユ一ノに抱きつく。

咲夜「ユ一君も頑張りましょ、出ないとあの子に先を越されちゃ  
うわ」

ユ一「・・・はい（ごめんなさい新八さん。でも僕は負けません）  
」

新八とユ一ノは恋のライバル関係になるのであった。

まあ森羅が止めて咲夜に鞭で叩かれるのは別の話。

この後なのは達が積極的に銀時に詰め込むことも別の話。

そして新八とジャンヌ、咲夜とユーノが大人の階段を上る関係まで  
行っちゃうのもまた別の話なのだ。

そんなときレオンが一言。

レオン「恋はいつでもハリケーン』とは正にこのことだな」

某グル眉毛料理人の名台詞(?)を呟いたのだった。

新八は『ツツコミマスター』から『恋するツツコミ使い』へと変わ  
った。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!!」

カイル「今回のアシストは俺、カイル・ドラグニール」

アンヘル「アンヘルだ」

銀八「凄い二人だな…まあいいや、ペンネーム『鳴神 ソラ』から行くぜ？『マリオ』ううむ…」

タレ銀「何唸ってんのマー君？」

マリオ「銀次先輩、俺、行った方が良いですかね？」

タレ銀「ううん、許可貰わないと」

マリオ「ですよね」

ルイージ「そんなに有名だったんだね兄さん」

フォックス「だな」

スネーク「別の小説のキャラが加わったな」

ネス「どう言う風になるのやら…」

クッパ「質問なのだ『マリオの大先輩である銀次についてどう思う？』」

スネーク「リリナの組みに質問『成長したヴィヴィオと模擬戦をした事あるか？』」

フォックス「はやてに質問『ツツコミ所あるなと思う人を自分風にベスト10を作るならどう言う風になる？理由も付けて答えてくれ』」

「次回を楽しみにしてます」

真王「みんなはマリオ以上の規格外だと思ってますよ。ちなみにヴィヴィオは誰とも模擬戦はしてません。そしてはやてが考えたベスト10を発表しよう」

『一位：ユウカ（真選組のあの人より黒いんやけど!?!）

二位：ナリア（なんやビビちゃんと同じ匂いがすんな）

三位：レオン（シグナムと同じやな）

四位：レイン（銀ちゃんに負けずを取らない甘党や）

五位：咲夜（シグナムよりおっきいやと!?!）

六位：アンヘル（めっさでつかいんやけど…）

七位：ギルシア（ようヴィータ達が狙われてたわ）

八位：ヴィヴィオ（ヴィヴィオ、いつの間にかこんな…）

九位：レーティア（う、羨ましい…）

十位：ジャンヌ（うちもコスプレ着せるけどあれは病気やな）

真王「ハイでは『鳴神 ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

カイク「次はペンネーム『月光閃火』だ。『ども…月光閃火だ。』

しかし…次回はとうとう“あの人”に春が来るか…。頑張れよ

輝刃「とうか…誰なのかは敢えて言わないでおこう。あ…それと質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・ネオに質問…人間に絶望する前のお前って、何で癒されてたんだ？

そういえば…確かに、誰だって何か『癒されるモノ』の一つや二つは持っているもんな…。ネオだって何か一つは持っていてもおかしくはないよ…。次は俺からだ。

2・シャマルに質問…前の質問の時にネオに自分の料理を『クズ』と思って握り潰されたけど、正直言っへこんだ？

輝刃「確かに…ボスキャラにさえも自分の料理を否定された訳だから…。俺達なら全然平気だが…（苦笑）。」

輝刃…俺達の舌と内臓が神憑りの強靱だって事、忘れない方がいいよ…（汗）。『』

真王「ネオはなにをしても癒されるものではありません。唯一ある物だけが癒しになるのです。でもそれはネタばらしなので教えません。次シャマル」

シャマル「……………（周りにキノコが生えている）」

カイク「（見なかったことにした）…………『月光閃火』、廊下に立

て」

アンヘル「次のペンネームは『なめ猫』というものだ。『はじめまして、なめ猫』といいます。

フォレストページで小説（またはリレー小説など）を書いていて、最近このサイトで久しぶりに別の小説を書き始めました。漫画やアニメの守備範囲は一応広い方です。

早速に入りますが、まずキャラの人数がとてつもないですねw自分も多く出す方ですが、流石に真王さんのようにうまくできませぬ；よほど愛情を込めてるんですね。

ストーリーもギャグがとにかく面白くて、今じゃ大好きになったばかりのネプテューヌの活躍に夢中です。

今後の活躍も期待してます。

あと、質問も受けつけているみたいなので1つ。

ネプテューヌへ質問

「もはや雑魚1000体相手でも無双できるんじゃないかね？」

以上。

もしうちの小説はじめてはを見てくださったら幸いです。

ではまた！』ふむ、あの紫なら無双も可能だろう。『なめ猫』よ、廊下に立つがいい」

真王「次はペンネーム『黒龍』さんからだ。『黒龍』おお、また新しいキャラが出てきた！」

ソラ「つまり、これで二作品とコラボしてるって事だな」

銀時「だよな。つつか、多すぎて俺誰が誰が分かんなくなってきたんだけど……」

黒龍「いや、さすがにそれはマズイでしょ」

ソラ「お前はどつなんだ？」

黒龍「……………(汗)」 あからさまに目を逸らす

銀時「オメーも分かってねえじゃねえか!！」

黒龍「そ、そう言うソラはどつなんですか!？」

ソラ「まあそつだな。何となく覚えてる感じだな」

銀時「お前は正直だな」

黒龍「とにかく、この作品の良さの一つはキャラの多さと言う事ですね」

銀時「けどよ、あっちの俺の出番が減るのはおまり良い気分しねえけどな」

黒龍「そう言う事言わないでください!！」

ソラ「質問行くか？」

黒龍「そうですね。じゃあ質問します」

1・レイン達風花さんのキャラ達に質問。あなた達の元の世界にも



確かりリカルなのはキャラ達がいきましたよね？つで、そっちなのは勢のなのは、フェイト、スバル、ティアナ、リインフォース、チンク、セツテ、ティード、セイン、ウエンディ、が銀さんLOVEな事についてどう思いますか？

2・レインに質問。うちのソラと気が合うと思いますか？

3・森羅に質問。あなたと新八は同じ穴のムジナだと思いますか？  
(黒笑)

黒龍「今回はここまでです。次回を楽しみにしています」『それじゃあ答えましょうか』

レイン「あれは凄いな。あと気が合うと思っな」

森羅「なんだか複雑な気分だぜ。って一緒にするな!!」

咲夜「私は、どっちでもいいわ」

蒼馬「フツ、それがもてる男か…」

紅也「近寄るとロクな事がない…」

さくら「む、なら私もレン君と同じように!」

カイル「なにする気だ6番目。』黒龍』廊下に立て」

アンヘル「こやつで最後じゃ。』黒神』がな。』質問します。

新八へ

何か最近原作で酷い扱いされてると思いますか？  
ゲームオタクク堕ちや、中途半端なツツコミサボリ、そして連邦編で  
のブリーフ姿。

不安があつたら怒りのコメントを言ってみてください。

音無へ

僕の小説で、地獄の罰ゲーム付きの大会に呼ばれた事を強く後悔し  
ていますか？

以上です。』ではメガネと音無」

新八「クツ！これが僕なのか！？」

音無「ああ、もうそれしかないと思う」

真王「絶望に染まるな！『黒神』さん廊下に立ってなさい！」

アンヘル「次のアシストはユウカになる。ではの」

真王「あ、それからストーリーアンケートを募集します。詳細は活  
動報告より。では」

第八十三訓：恋はいつでもハリケーン（後書き）

新八「うわああ！！僕ファーストキスもらっちゃったよオオおお！！！」

ジャンヌ「新八君、これからもよろしくね？」

新八「はい！」

山崎「ついに新八君も彼女が出来たんだね……」

デイエチ「私達もだけどね……」

咲夜「ユー君？」

ユーノ「さ、咲夜さん……」

銀時「腹立つつ！！こいつ等腹立つつ！！！」

ユウカ「あら？もてないからって八つ当たりは駄目よ？」

銀時「へブ！」

ユウカ「次回『癖者揃いは個性的』テイクオフよ」

第八十四訓：癖者揃いは個性的（前書き）

真王「今回長いしキャラが増えます」

銀時「お前どんだけ作ってただよオリキャラを！！」

真王「とっさに思いついたんだよ。それでは始まります！」

## 第八十四訓：癡者揃いは個性的

機動六課の訓練場でフォワードは何時も通りに訓練中。

スバル「デイベインブレイカー！」

ティアナ「クロスバーニングシュート！」

エリオ「雷王一閃！！！」

キャロ「ドラグニールチェーン！！！」

ただ原作物よりも技が増えてパワーが付いてなお且つランクがA A級まで行っているくらい強くなっている。

銀時「性が出るね」

レオン「うむ、奴らもいい腕を持つてるな」

銀時とレオンがフォワード達を眺めている。

ネプテューヌ（・・・なんだろうこれ？）

銀時達とは別のところでネプテューヌは奇怪な物を見る目で見ている物がある。

それは『抜いてね？』と書かれた看板と、その下にメカっぽいうさ耳があった。

リアス「あら？ネプテューヌ、何やってるの？」

見ているとリアスが声をかけてきた。

ネプテューヌ「あ、リアスさん。これ」

ネプテューヌはリアスにうさ耳を指差す。

それを見たリアスはいやいやそんな奇怪な目でうさ耳を見ている。

リアス「：ハア、ネプテューヌ、それは引っこ抜かない方が「おゝ  
い何やってんだ？」」

ため息を吐いてネプテューヌに言おうとしたら銀時とレオンがやってきた。

銀時「ん？つてなんじゃこりゃ？」

銀時は奇怪な目でうさ耳を見た。

レオン「おお、タバネか」

銀時「え？これを知ってるの？」

レオン「うむ、しかしそれは飾りだ」

レオンがうさ耳を見ていい、銀時が指差して言つとレオンが答える。

レオン「私達の居場所を突き止めるとは、凄いと言つべきかなあの  
マッドサイエンティストは！！」

ズボッ！！

レオンがうさ耳を持って引っこ抜いた。

うさ耳だけが取れた。

ネプテューヌ「耳だけとれちゃってるうウウウウウ！！！！？銀さ  
んどうしよう！？」

銀時「ば、馬鹿野郎落ち着け!!とととにかくタイムマシンを探すんだ!!」

ネプテューヌ「イヤ銀さんが落ち着いてよ!!!」

耳だけとれたことにネプテューヌはパニックだったが、銀時がゴミ箱に顔を突っ込んでパニックになっていたので思わず突っ込む。

???「やつほ~~~~~!!!!!!」

すると上空から女性の声が聞こえて上を見上げると大きなニンジン（少々メカっぽい）が落ちてきた。

銀時「なんじゃこりゃあ!!??」

ネプテューヌ「で、でかいニンジン…」

レオン「ずいぶんと派手な登場の仕方してるな、タバネ」

銀時とネプテューヌは驚き、レオンが愉快そうにニンジン(?)に言うところニンジンが開いて機械っぽいうさ耳をつけたピンクっぽい口ングの女性が出てきた。

タバネ「ひっさしぶりだねレオちゃん!リアちゃん」

レオン「だからレオちゃんではないと言ってるだろ」

リアス「私はリアス!それで呼ばないでっかっていてるでしょ!」

なんだか彼女の愛称で呼ばれるのが嫌なレオンとリアス。

ネプテューヌ「あゝ、えつと、知り合い?」

レオン「イヤ、ギルド仲間だ」

銀時「ギルド?メテنزギルドのか?」

タバネ「ど〜うも!メテنزギルドS級転生者・タバネ・シノンだ

よ〜」

自己紹介をするタバネ。

銀時「あ、どうも、ご丁寧に。俺は」

タバネ「あ、言わなくても分かるよ。白夜叉・坂田銀時でしょ？」

銀時は驚いた。

特に本名より二つ名の部分に。

タバネ「んで、そっちは銀時の嫁候補のネプテューヌちゃんだね？」  
ネプテューヌ「候補じゃない！今でもばりばり嫁だよ！」

銀時「それは大人になってから言え」

タバネはネプテューヌを見て言うとなぷテューヌが嫁宣言する。

銀時は突っ込むが返事はネプテューヌのグーパンチだった。

レオン「ところで、一体なにようでこっちに来たんだ？」

タバネ「おつと忘れるところだった〜。あのお方が、銀ちゃん達に  
会いたいわって」

リアス「アテナスが？・・・分かったわ」

レオンがタバネが来た理由を聞くとタバネは応えてリアスが承諾する。

リアス「レオン、イツセー達を呼んで。あ、それからちょっと新人  
がいるから入隊できるかしら？」

タバネ「新人君ですか〜？アテナっちなら多分受け入れると思いま  
すよ〜」

リアス「頼むから誰彼構わず愛称チックな呼び方は止めてってば。」



特にアテナスには」

リアスは頭を抱えるはめになった。

レオン（あいつはタバネのネジずれな頭が苦手らしいからな…）

レオンはリアスを見ながらそう思った。

で、

タバネ「さ〜て 皆さん準備はいいですか〜？」

タバネがちっちゃなドアっぽいアイテム・デールを持って銀時達に聞く。

今レーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア、リアス、イツセイ、カイク、アンヘル、レオン、ユウカ、ナリアだけならず、銀時、新八、神楽、定春、桂、エリザベス、月詠、九兵衛、辰馬、源外、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリード、ユーノ、スリエツティ、グレイ、ビビ、神、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフ、イストワール、ネリア、レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくらまでいる。

銀時以外は興味本位で付いてくるようだ。

レーティア「久しぶりにギルド帰りね」

ギルシア「さて、どんなところやら」



全員「どわあああああああああ！！！！」  
タバネ「はいとうちや〜く〜！！！」

するとゲートから滝のように銀時達がなだれ込んできた。  
タバネは奇麗に着地。

女性は雪崩の中に入らなかったため無事である。

タバネ「みんな〜？そんなところで寝ちやだめです」

ドガ！バキ！ベキ！バキ！

リアス「誰のせいになつたと思ってるのよ！このすつと〜どつこいが！！！！」

タバネ「いつた〜〜〜い！！！」

タバネは相変わらずポケた言い方をして切れたリアスが鉄拳を与え、  
タバネは涙目で頭を押さえる。

レイン「っていつか」

森羅「ココがそうなのか？」

タバネ「そうだよ。そしてようこそ！アルティエラロード転生者たちの集い場・メテンズギルドへ！！」

アルティエラロード転生者たちの集い場・メテンズギルド・ひろば

銀時達は皆ギルドの中を探索している。

ほとんど漫画やゲームやアニメなどのキャラそっくりな奴らが多い。

銀時「ホントにほとんど見覚えのある奴らばっかなんですけど」

銀時は周りを見ながら言う。

ネプテューヌ「ホントだね。あ、長い舌の恐竜がいる!」

コンパ「こつちにはピンク色の丸いのがいるです!」

レーティア「でも一番はこの子なのよ」

黄色いネズミ「ピカチュ」

女性陣「かわいく?」

ネプテューヌはヨツ、コンパはカーイーを指差して言い、レーティアがピユウを持って女性陣は見惚れる。

ナリア「おじさん!あのフィギュアは出ましたか!」

店主(アイアンナイト)「おうナリアちゃんかい?悪いが売りきれちまった」

ナリア「なん…だと…?」

店主「うそだ。こいつだろ?」

ナリアがデイスガイアのアイアンナイト似の店主に声をかける。

店主はないと答えてショックを受ける。

だが店主の冗談のようで一つのフィギュアを出した。

それはSTRIKERSなのはメイド服姿のフィギュアだった。

ナリア「ついにきたあああああああ!!!!!!!」

ナリアはもらえて大はしゃぎする。



ビビ(っっていうかあのフィギュアほしい…)

それぞれこんな事を考えていると、

ウォーリアー「みんな〜!!! 『戦鬼姫』が帰ってきたぞ〜!!!」

なのは「な、なに?」

レオン「帰ってきたか・・・」

デイスガイアのウォーリアーそっくりの転生者がギルド内を叫んでいる。

聞いたほかの転生者達は驚いた顔をしていた。

そして奥から漆黒のポニーテールで水着のような鎧を身につけ顔に赤い刺青をつけた女性がやってきた。

手にはひもがあつてその後ろに真っ黒焦げなドラゴンがある。

???「今日は大量に取ってきたの」

上機嫌な女性。

しかし銀時達は戦慄している。

女性から漂う強者のオーラが分かるのだ。

すると女性は銀時達を見た。

???「見慣れん奴らじゃの。それとレオンではないか!」

レオン「久しぶりだな? ガレーナ・ギラス。会いたかったぞ」

ガレーナ「そうかそうか。余も会いたかったぞ!!!」

レオン「!!!」

女性・ガレーナはレオンを見て懐かしそうに言い、レオンも懐かしそうに言う。



！」

モブ（月の姫）「くたばれ~~~~~!!!!!!」

モブ（もこたん？）「死ねやアアアアアアアア!!!!!!」

モブ（？）「私つてば最強ね!!」

モブ（若本（ry））「ベリイイイイイイムエエエ口オオオンン  
!!!!!!」

モブ（爆発キャラ）「ぬわああアアアアア!!!!!!」

モブ（ハゲ）「な、ナムチャアアアアアアア!!!!!!」

モブ（スナイパー）「俺の後ろに立つな……」

モブ（ドジ軍師）「ハワ~~~~!!」

・・・行く途中いろんな住人がいたがそこは無視することにした。

アルティエラロード

転生者たちの集い場・神々の宮殿

ここは先ほどよりも神秘的な宮殿。

銀時達は目を奪われる。

リアス「ほら、そんなところで惚けつてないで早く入りなさい」

とリアスが観賞を邪魔されたがとりあえず中に入る。

中に入った銀時達は大きなドーム状の部屋に入る。

その中心に一人の女性がいた。

????「きましたか」





銀時「ゆ、揺らすんじゃないか…ふ、二日酔いが…」  
ネプテューヌ「わわわ！このままじゃ銀さんの口から異物がUター  
ンしちゃうよ！！」

アテナス「レシア、そろそろお放しになって」  
レシア「む…分かりました」

ネプテューヌが慌てて止めようとして、アテナスが言うとレシアは  
動きを止めて下す。

銀時「あ、やべ…俺そろそろはきs「フンツ！」ガボオ！」

揺らされたせいで限界に来たところでレシアがボディブローをかま  
して銀時を吐き出させる。

その瞬間メイド服を着た人が現れて異物を袋の中へジャストインし  
た。

袋に入ったあとメイドの人はどこかへ消えた。

レシア「どうだすつきりしたか？」

銀時「スツキリするどころか腹痛が出たんですけど！！」

真顔で言うレシアに青筋立てて言う銀時。

新八「そりゃ銀さんの自業自得ですよ」

ネプテューヌ「あはは、私ネプテューヌっていいいます。貴方のお名  
前は？」

新八は冷ややかな目で見て、ネプテューヌは苦笑いをしながらレシ  
アに聞く。

レシア「私はアテナス親衛隊総隊長・レシア・エルダー。嫌いな物は身分と状況をわきまえない輩です。特にあなたとかあなたとかあなたなら尚更ですが」

蒼馬「フツ、僕がご指名されるとはね」

辰馬「アハハハハハ、ワシも仲間入りか」

神「俺様が同類にみなされてるな」

レシアの冷たいセリフに蒼馬、辰馬、神は一本とられた感じになる。

レシア「それよりも得に許しがたきことはその犬です!!」

定春「ワフ?」

神楽「定春がどうしたネ?」

レシアがイラついた感じで定春に指差す。

定春と神楽は分からない顔をする。

レシア「とぼけないでください!さっきから体中泥くさいにおいがその犬から充満してるじゃないですか!っていうかあなた方はその犬に洗ったことがあるんですか!?」

銀時・神楽・新八「イヤ全然」

レシアの言い分によろず屋は真顔で返した。

レシア「ヌグググググ・・・この際仕方ないです、アテナス様!この犬を清潔にさせてあげます!~~~~~!!!!!!」

!!」

神楽「ア、テメエ!定春を返すネエエエエエえ!!!!」

痺れを切らしたレシアが定春を担いで扉から出て行った。

神楽は追いかけていった。

アテナス「あの子つたら相変わらず汚いものには厳しいわね…」

アテナスは苦笑いを浮かべる。

数秒後…

レシア「御清潔をさせてあげました」

新八「イヤ早っ!？」

定春「ワン」

神楽「ホワ〜、定春かいいい香りがするね〜」

身体中ピッカピカにいい香りを漂わせる定春が戻ってきました。  
神楽は定春の上でぽけ〜っとしている。

なのは「ほんとだ、いい香りがする」

咲夜「いいにおいの枕みたい〜」

ビビ「和む〜」

ほとんどの女性陣は定春にモフモフしている。

アテナス「さて、余談はここまでにして本題に戻りましょう」

アテナスは真剣な顔になる。

アテナス「この最近、世界規模でイヴィルの活動が活発になっています。理由はお分かりかと思いますが、ある男の仕業なのです」  
ネプテューヌ「ネオだね」

ネプテューヌの言葉にアテナスはうなずく。

アテナス「ネオは危険な存在ですが、もうひとつ危険なものがひとつあります」

桂「む？・・・まさかダークソウルか!？」

桂が思い出して聞くとアテナスはさらに驚愕する事を言った。

アテナス「そうです。ダークソウルは彼が作り出したもの・・・  
・・・いえ、改造されてしまったものなんです」

レイン「改造・・・だと？」

レインが頭を傾げて聞く。

アテナス「ダークソウルは人々の負の感情が集まった集合体。そのためには贄物を持って出さなければなりません」

ネリア「ま、まさかあのダークソウルは・・・!？」

ネリアが驚愕した表情と出す。

アテナス「そうです。あのダークソウルにはネオが森羅万象の神と名乗る前に慕っていた使いの少女・エルナなんです」

全員「なツツツ!!!!!!??」

全員が驚愕する。

ネオは酷い奴だと思っていたがそれ以上だった。

アテナス「あの子は彼を憧れていました。世界や全てのためにしていく彼を尽くすために彼女は彼の傍に着きました。ですがネオはそんな彼女を道具としか見ていなかった。裏切られ、心を闇に染めた彼女はダークソウルの奥深くに閉じ込められました」

衝撃の言葉に全員言葉を失った。  
いや、そうじゃないのがいた。

レイン「ッざけるなあっつ！！！！！」

レインだった。

レイン「奴に憧れを抱いていたそいつを、ただの使い捨てにする奴が、存在してたまるか！！」

森羅「俺もレインに賛成だ。捨て駒にする奴は許せネえ！」

咲夜「私も怒っちゃうわよ」

ナリア（そうは見えないわよ…）

ビビ「女の子を捨てるだど！？許せん！！（#、・、）」

ティアナ「ふざけてるわ！！そんなこと、神でも許されると思ってるの！？」

なのは「…ここまで怒りを感じたのは初めてだよ」

その他もネオに対して怒りをあらわにしている。

アテナス「……………」

アテナスは少しつらそうな顔をしている。

神「で、様はそのダークソウルの中にするそいつの救出とネオの計画の阻止を依頼したいのか？」

アテナス「…はい」

神の言葉にアテナスは肯く。

銀時「・・・しゃーねえな」

銀時はポリポリと頭を掻いて言う。

銀時「要は手伝ってくれてんだろ。この『万事屋銀ちゃん』の坂田銀時がその依頼を受けてやるぜ。ただし、報酬はがっぽりもらうがな」

レシア「貴様：！」

アテナス「およしなさい！」

レシア「はい」

銀時の欲っばい物を見たレシアが突っかかるうとしてアテナスに止められる。

アテナス「私の願いを聞きつけてくれるのでしたら、それなりのお礼をさせてあげます」

銀時「そう来なくっちゃな」

ネプテューヌ「大丈夫！私達がその願いを叶えてあげるよ！」

みんなの決意が固い。

アテナス「ありがとうございます」

アテナスはお礼を言った。

神「ところでだ、仮に神と名乗ってるんだ。何か能力はあるかい？」

レシア「貴様その態度：！」

アテナス「私の能力と言えば『異能の力に干渉されない程度の能力』ってところですな」

レシア「アテナス様!？」

いきなり神が言いだしたことにレシアは顔を強張らせるがアテナスがそれを話して驚いた。

神楽「なんねそれ？」

神「まあこう言うことだ」

分かってない神楽が首をかしげると神がバインドを投げる。

スッ

するとバインドがアテナスに捕まる前に消えてしまった。

アテナス「と、この様に異能の能力を消せます。それから、このリングを潰して見てください」

アテナスが神楽にリングをさし出す。

神楽「リング潰す？舐めてるアルか？こんなもん楽に……」

神楽はリングを一気につぶ……事が出来ない。

汁が少しずつ出ているだけだ。

神楽「あれ？おかしいアル！！いつものパワーが出ないネ！！」

アテナス「このように能力持ちでも私が触ればただの人の様になります」

いつもと違うことに戸惑う神楽。

アテナスがその原因を言う。



銀時「マジか!？」  
レオン「マジだ。どんなものでもアテナスには効かん。・・・物理攻撃は除くが」

銀時達はおどろいて、レオンが肯定する。

アテナス「では、我々メテンスギルド協力の元、あなた方の協力者を紹介します」

アテナスが言うと複数の人物が現れる。

その二人は面識あり。

タバネ「最初に会ったけどタバネ・シノンだよ、バイバイ!」

両手にVサインするタバネ。

ガレーナ「ガレーナ・ギラス、レオンこれから一緒になれるぞ」

腕を組んで言うガレーナ。

ヤルオ「僕は恵紹ヤルオだおwww。よろしく」

全員（なんだ今の口癖は...?）

ビビ「.....」

黒髪の少年の口癖に戸惑う銀時達。

ビビは少年を見て嫌な顔をしている。

ルシアス「私はルシアス・ルーセン。あまり私に話しかけなして」

赤い目にツインテールの少女がそっぽ向いて言う。

周りは苦笑いかため息をした。

ルーシア「私はルーシアだよ。好きなことはおねえちゃんをぶつ殺すこと」

ルシアス「よし、言いたいことがあるならこの際はつきり言いなさい」

ルーシア「キャハハハ！良いよ！殺ってあげる！」

ルシアスの双子と思われる少女が碌でもないことをいった後ルシアスとルーシアが武器展開…

???「止めんか！」

ルシアス「いたっ!？」

ルーシア「にやあっ!？」

…したら黒い髪の女性が本(?!?)で二人の頭をはたいた(というか殴ったと言っべきか?)。

???「小娘どもは、また喧嘩しているのか？」

ルシアス「イヤ〜、ワタシタチナカヨクヤツテマス〜(ひきつった笑顔と汗)」

ルーシア「ホラコノトオリ〜(こちらも)」

ビビ・ナリア(フェアリーテイルのハッピーみたいになってる!?)

女性から威圧のオーラが見えてルシアスとルーシアが不自然に笑って肩を組んでいる。

ビビとナリアはこれを見て驚いた。

チフユ「フン、チフユ・オオムラだ。教導は厳しくしておくから覚

悟しておけ」

女性は銀時達にそう言った。

神はチフコを見て若干ながら冷や汗をながしている。

アルテス「私はアルテス・ラーエムです！好きな人はユウカ様とかユウカ様とかユウカさま」

ユウカ「あらそんなに罵られたいわけ？」

アルテス「ああ？ユウカ様！！もつとあそこを蹴って！！？」

白よりの紫の髪の女性がユウカにどかどか踏まれて喜んでいる。ほとんどの人はドン引きした。

アテナス「そして最後に、レシア、貴方もお行きなさい」

レシア「な！？アテナス様！私はあんな馬鹿共といるのはごめんです！」

アテナスの言葉にレシアが驚いて反論する。

レシア「特に乱れた頭と腐った目に下品な言葉を使っついても女性に振り回される男がいるなら尚更です！」

銀時「おい！それ俺のこと言っつてんのか！？」

ナリア「特定の人を言っつてるみたい……」

レシアの言い分に銀時が突っ込み、ナリアが呟く。

アテナス「私からのお願いと思っつてください」

レシア「むう………分かりました」

レシアはしぶしぶ従った。

アテナス「それでは、現時点を持って我々メテンスギルドはあなた方に協力いたします」

「タバネ・シノン」 「ガレーナ・ギラス」 「レシア・エルダー」 「恵紹ヤルオ」 「ルシアス・ルーセン」 「ルーシア・ルーセン」 「アルテス・ラーエム」 「チフユ・オオムラ」 が仲間になった。

銀時「…どんどんオリキャラが集まってるんですけど…、つーか俺どんどん影薄になつてねえ!？」  
ネプテューヌ「銀さん落ち着いて」

頭を抱える銀時になだめるネプテューヌ。

レオン「そう言えば銀時、ランクのこと気にしてたな？」

レオンが思い出したかのように言う。

レオン「いい機会だから教えてやってもいいだろう。タバネ」  
タバネ「オ〜ケイ〜！天才タバネちゃんがランクについて教えちゃうよ!」

レオン「自分で天才っていつてるぞ」

レインのツツコミを無視してタバネはモニターを出す。

タバネ「タバネちゃんの〜、ランク解説コーナー〜」  
新八「なんか新展開始まつたんですけど!？」

新八は思わず突っ込み、周りは啞然とするか頭を抱えるか苦笑いを浮かべるかである。

タバネ「まず、転生者にはそれぞれ強さのランクがあるの。C、B、A、S、EXの5種類あるんだよ。ちなみに詳細はこっち」

タバネはランクの詳細を出す。

『C級転生者：普通の人と変わらないあまり能力を持たない者に着くランク。だが頑張り次第によってB級にランクアップする』

『B級転生者：常人からは達人というレベルのランク。能力は一つだけ。C級と同じく頑張り次第によってAかSに行く可能性がある』

『A級転生者：悪魔の中で魔神ランクの強さを持つランク。能力は一つから複数ある』

『S級転生者：魔王や神とほぼ同じ実力を持つと言われるランク。転生者の中では覇道を極めし者という意味になる』

『EX級転生者：その実力は全知全能、全宇宙の力を持つと言われるランク。詳細は不明だがこのランクを持つ者は一人だけのようなが…』

ネプテューヌ「うわ、スツゴイレベルの違い…」

なのは「それじゃあタバネさん達はS級ランクということなんですか？」

ネプテューヌはランクの違いに呆然とし、なのはが疑問を言う。

タバネ「そうだよ」でもルルツちとルツちゃんとヤルオ君はAランクなんだ」



タバネ「ま、それはともかく、超スゴい人だつてことだよ」

ノワール「そ、そうですね…」

アテナス「……話はまとまったかと思いますが、よろしくお願ひします」

タバネの言い分にノワール達は苦笑いを浮かべる。

アテナスが言った後なのは達やレシア達は宮殿から出て行った。

そしてアテナスが「いや、なぜかネプテューヌだけがここにいる。

アテナス「？あなたは行かなくてよろしいのですか？」

ネプテューヌ「アテナスさんに聞きたい人がいるの」

ダークネプテューヌ「そう言うこつた」

ここにいるネプテューヌに疑問を持ったアテナスが聞くと、ネプテューヌの体からダークネプテューヌが出てきた。

アテナスはダークネプテューヌを見て驚いた。

ダークネプテューヌ「単刀直入に言う。『なぜあの神のことになるとつらそうな顔をするんだ？』」

ネプテューヌ「そうだね。同じ神様でも『知ってる程度であんな悲しそうな顔はしない』よね？」

2人の言葉にアテナスは言葉を詰まらせる。

ネプテューヌ「……何かわけありみたいだけど聞かないでおくよ  
アテナス「……そうしてくれますと助かります」

ネプテューヌはしぶしぶと諦める感じになって、アテナスは少し安心を浮かべる。

アテナス「そんなあなたに特別に名前を教えます」

ダークネプテューヌ「アテナスは偽名ってか？」

アテナス「それは神としての名前です。私の本当の名前は、リアー  
又と申します」

アテナスは…いや、リアー又はネプテューヌに真実の名を言った。

リアー又「気をつけてください。あなた方に平和のご加護があらん  
ことを…」

リアー又はそう言って祈る。

ネプテューヌもとりあえず祈る。

???「……………」

???「邪魔しなくていいの？」

遠くで祈っている二人を見ている奴らがいる。

リアスとレシアだ。

レシア「私はアテナス様にちかづく汚らわしいものを嫌いますが、  
アテナス様のお心を理解してくれる方なら話は別です」

リアス「あの子は仮にも女神の類だからね」

2人は祈る2人を見ながらその場を去った。

余談ではあるが、帰る途中モブどもに絡まれたりお土産大量に持っ  
て帰ったりしたことは別の話。

帰って早々銀時はまた男局員（なのは達のファン）たちに追われる  
のも別の話。



そして、

オカマ転生者「あ〜らやだ？あたしの好みのタイプじゃない！結婚して〜？」

雷帝の男「いやあああああああああ！……！」

たまたま遊び半分で行ってきた転生者殺しがオカマに追われる羽目になるのもまた別の話なのだ。

〜おまけ〜

銀八「教えて！」

全員「銀八先生……！」

ユウカ「うふふ、ユウカ・カザキリよ？」

銀八「俺こつ言つドS女は苦手だ……」

ユウカ「あら？ひどいこと言うわね」

銀八「・・・ではペンネーム『白騎士君』から行くぞ」

ユウカ「無視したわね」

銀八「いや・・・なんでもねえ。んじゃ、『白騎士君』新八君について彼女が！」

レナード「おめでとう！新八君」

銀八「カーツペツ！」

作者は新八に恋が芽生えた事に驚き、レナードは新八に祝福した、銀八は不満そうに床に唾を吐いた。

白騎士君「では質問します。』

1 スバルとネプテューヌに質問。気合でギガ・ドリル・ブレイク  
出来ますか？

2 みんなに質問。僕の小説のレナードの味覚をどう思いますか？

『 以上です』

レナード「シャルさん。スペースゴキブリは生と焼くはどっちが美味いんだ？」

銀八「レナード！そんな質問すんな！」『ズバリ答えていきます』

スバル「無理です」

ネプテューヌ「そもそもドリルないよ？」

真王「当たり前だ。皆さんはマリオ（鳴神ソラ）と同じXX料理食者だと思ってるんじゃないか？」

シャル「私は焼きを入れる方が…」

銀八「はい『白騎士君』廊下に立ってなさい」

ユウカ「・・・次はペンネーム『鳴神 ソラ』さんからね。『ルイージ』……………（ダバアアアアアアアアアア）」

マリオ「ルイージいいいいいい！！！！どうしたいいきなり！？涙を滝の様に流して!?!」

ルイージ「良かった！新八君が幸せを掴んで！（ - - ）」

フォックス「ルイージはな…」

スネーク「扱い悪い人の味方だからな…」

ネス&リュカ「うんうん」

タレ銀「なのはちゃん達に質問『成長したヴィヴィオちゃんと1対1戦って勝てる?』」

冥王「皆に質問なの『ヴィヴィオちゃんに称号を付けるならどう言う感じにするの?』」

フォックス「ユーノに質問『恋のライバルって言うけどどこら辺でライバルなんだ？』」

次回を楽しみにしてます 『そうね、今のとこなのはとほぼ互角だろうけどシグナムとはまだまだって感じね。あと称号はこんなとこよ』

紙に、『魔王の娘？』『聖王のクローン』『将来の主人公』『なのはの娘』と書かれている。

ユーノ「最後は僕ですね。そりゃ僕は咲夜さんと、新八君はジャン又さんというから（咲夜さんが半ば）ライバルということになりました」

ユウカ「それじゃあ『鳴神 ソラ』、そのダメ鈍感に恋でも教えなさい。次はペンネーム『月光閃火』からの質問よ。』ども…月光閃火だ。

しかし…銀さん、アンタはリリなののお大半の女性陣に愛されてるんだからそんな僻まない僻まない

輝刃「…何も言えんな…。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1. 新八に質問…ジャン又からファーストキスを貰った訳だが、正直言っってどんな味だった？

確かに、『ファーストキスはレモン味』なんてフレーズが昔からあったからな…何か気になる…。次は俺からだ。

2・マジエコンヌに質問：そういえば、この所出番がサツパリ無いけど…正直言ってヒマ？つつーか、あまりスポットが当たらなくて寂しい？

輝刃「そういえば、序盤はそこそが出番はあったが…最近はめつきり出番が無いよな？正直言って、ヒマを持って余していただろうな…

(汗)。「『』」

新八「えつと…ほんのり柔らかくないチゴの味がしました／＼／＼／

ジャンヌ「新八君：／＼／＼／」

銀八「カーツペツ！！」

2人の桃色空間に銀八は不機嫌に唾を吐く。

ユウカ「あら？レディの前でなに唾を吐いてるのか・し・ら！！？」

銀八「ギアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

唾を吐いた銀八を気にいらぬユウカは電撃で銀八を黒焦げで気絶させる。

マジエコンヌ「別にそんなもの気にせんが？」

真王「ハイじゃあ『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『ボツスン』さんだ。『新八君。おめでとつ。』

バナージ「よかったな。新八さん。恋人が出来て。」



ユウカ「理由になつてないわ。『ボツスン』廊下に立つてなさい。次はペンネーム『黒龍』ね。『新八』先越されたアアアアアアアアアアアア!!!」

新八はまだこつちの自分は彼女が出来なくて、あつちの自分は彼女が出来た事に涙を流して頭を抱える。

銀時「おいおい、マジかよ……」

黒龍「真王さんも気を利かせたって事ですかね？」

神楽「あつちのぱつつあんは幸せになったアルか……メガネのくせに生意気ネ」

黒龍「まあ今は純粹に祝つてあげましょう。オタクである彼に彼女が出来た事に……」

ソラ「オタクって言ったな……」

黒龍「じゃあ質問いきましよう」

1. 銀さんに質問。なんで新八が彼女出来た事について舌打ちしたんですか？あなたもハーレム作ってますよね？

2. ジャン又質問。新八のどこに惚れましたか？

黒龍「今回はここまでです。では『』で？どうなのかしら？」

銀時「そりゃハーレムっぽいのは出来てるがこつちの身がもたねえ

よ。あと地味しほぢに彼女が出切るのは許せんからだ」

ユウカ「サラッと彼を地味しほぢって言ったわね。次よ」

ジャンヌ「エへへ〜 どうだろうね〜」

ユウカ「というわけで秘密だそうよ。『黒龍』貴方もその新八に恋でも作りなさい。なのは以外に」

真王「これがラストだ。ペンネーム『支配者』さんからの質問。『質問です。』

真王さんに質問

タイトルを鎮魂歌系に変えられましたけど、理由は他のリリカル銀魂の最終章が鎮魂歌だからですか？

土方に質問

1、沖田ではなく近藤に刺し殺されるなら殺されても本望ですか？  
(黒笑)

2、マヨネーズの海に溺れて死ぬのとロリ少女の波に飲まれて死ぬのとどっちが良いですか？因みにロリ少女の件は貴方がトッシーだから(黒笑)『そっちでもありカツコ良さで行きました』

土方「どっちもさせるか!!!そしてマヨネーズのためならば!!!」

トッシー変化。



トツシー「拙者はロリ少女達の波に飲み込まれたいでござる!！」

ユウカ「油断した際に憑依されちゃったみたいね」

真王「それがトツシーの頑固さだ。『支配者』さん、貴方もトツシーになれ」

ユウカ「サラツと言うわね。それからアンケートなんだけど『ロリ銀パーティー編』が決まったわ。みんなは楽しみに待ってなさい。あ、アシストはナリアにさせるわ。じゃあね」

真王「参加したいと言う方は是非名乗りあげてください! 私から出向いて行くことがありますけども」

第八十四訓：癖者揃いは個性的（後書き）

真王「今回は何と私が出てきます。その理由は銀時達の学力調べ」

ナリア「次回『学力なんて人それぞれ』 テイクオフだよ」

## メテンスギルド設定（前書き）

メテンスギルドの方達のプロフィールをまとめました。

レテティア達はオリキャラ設定で見てください。

## メテンスギルド設定

くタバネ・シノンく

髪：ピンクっぽい紫

目：茶色

服：原作ISの篠之乃束の服

年齢：23歳

3サイズ：98/52/82

体重：タバネ「教えてあげないよ」

性別：

種族：狂研究者（転生者）

魔力光：なし

好き：チーちゃん、アテナっち、ギルドのみんな、機械いじり

嫌い：悪い奴

性格：本人（篠之乃束）顔負けの緩さと天才能力

レベル：8200

得意武器：銃

メカニック・クリエイト

スキル：機械形成（幻想世界風に言うなら『ありとあらゆる機械兵器を作れる程度の能力』）

詳細：天然ユルルな性格を持つウサギ女。生前は機械系に強かったらしい。だが緩い性格をしているがやることが危なっかしい一面も。容態はISの篠之乃束そのもの。

くガレーナ・ギラスく

髪：真紅のポニーテール

目：金色

服：戦国乙女の織田信長の服

年齢：26歳

3サイズ：100 / 55 / 84

体重：72キロ

性別：

種族：戦鬼姫（転生者）

魔力光：なし

好き：戦い、狩、レオン

嫌い：つまらぬ事

性格：レオンと並ぶ戦闘凶

レベル：9200

得意武器：剣、槍、斧

スキル：戦火の魂（攻撃回数で破壊力を増す）

詳細：レオンの親友で強度の戦闘狂。実力はレオンとほぼ並ぶ程度だが互角に渡り合う実力。容体は戦国乙女の織田信長そのもの。

レシア・エルダー

髪：オレンジシヨート

目：青色

服：デイスガイアの魔法剣士（2Ver）

年齢：22歳

3サイズ：95 / 53 / 82

体重：破れています

性別：

種族：魔法騎士

魔力光：虹

好き：アテナス様、綺麗なこと、料理

嫌い：汚い輩、無礼者

性格：規則や礼儀にうるさい。

レベル：9999

得意武器：剣、杖、槍

スキル：魔道術（通常攻撃に属性が付く）

詳細：幼きころ両親が殺され独りぼっちになった少女。アテナスが保護して世話をされ、彼女はアテナスに恩返しのために親衛隊隊長として頑張っている。今ではアテナスが母でレシアが娘の様な関係。ベタ惚れなためかアテナスに手を出す輩は問答無用で魔法を浴びさせるようだ。

～恵紹ヤルオ～

髪：黒

目：黒

服：白Tシャツとズボン

年齢：17歳

3サイズ：なし

体重：57キロ

性別：

種族：自称普通の人間？（転生者）

魔力光：なし

好き：エッチなこと、女性全域

嫌い：男共、ビビ？

性格：エロ思考なことを考えている

レベル：5000

得意武器：なし

スキル：エロスパワー（エロメーター（ヤルオ命名）が上がればパワーも上がる）

詳細：何の理由で転生したか分からない謎の転生者。常にいやらしい思考を持つ。ナイフに頭が刺されようがハンマーで潰れようがマグマに落ちようが岩に潰れてようがすぐに復活できる（ホントに人間かと疑われるほど）。なお口癖に「だおwwwwww」る語尾に「wwwwww」をつけるという。

ルシナス・ルーセント

髪：青よりの銀にツインテール

目：真紅

服：インフィニティ・ブレードのルシナス・ルーセント

年齢：20歳

3サイズ：88/52/82

体重：ルル「ぶっ殺すわよ？」

性別：

種族：魔道生命体

魔力光：なし

好き：アテナス、一人の時間

嫌い：ルーシア、騒がしいこと

性格：あまり人によらない質

レベル：7000

得意武器：剣

スキル：無限の剣（一つに武器に様々な技が使える）

詳細：ある研究所から作られた人工生命体。妹のルーシアと仲が悪い（様に見える）。不老不死なため老いることも死ぬこともできない（だが痛みはある）。アテナスに救助されて彼女にだけ心を開いている。チフユには頭が上がらない。

（ルーシア・ルーセン）

髪：ルシアスよりちょっと明るめ

目：赤

服：インフィニティ・ブレードのルーシア・ルーセント（エイリアス）

年齢：19歳

3サイズ：90 / 53 / 83

体重：ルーシア「教えないよ」

性別：

種族：魔道生命体

魔力光：なし

好き：いじり、女の悲鳴

嫌い：ルシアス

性格：姉のルシアスと対称に明るい。けどDSである。

レベル：7000



得意武器：拳

スキル：無限の剣（一つに武器に様々な技が使える）

詳細：ルシアスと同じく研究所からの人工生命体。あねのルシアスと仲が悪い（様に見える）。不老不死なため老いることも死ぬこともできない（だが痛みはある）。実験を受けたせいなのか元からなのか危ないやり方をすることが多い。こちらも同じくチフユに頭が上がない。

（アルテス・ラーエム）

髪：白っぽい紫

目：紫

服：魔王プリエの服

年齢：23歳

3サイズ：94 / 54 / 85

体重：アルテス「教えるのはユウカ様だけだよ！」

性別：

種族：自称雌女（転生者）

魔力光：なし

好き：ユウカ様

嫌い：ユウカ様の霸道を邪魔する者

性格：ユウカと対称的にDM。本人がいなければS化する

レベル：9999

得意武器：鞭

スキル：ドエム（ダメージを受けると能力が上昇）

詳細：生前男達に犯され続け死んでしまった転生者。転生後男に対

して容赦などない。ユウカと出会った時自分の中の何か（後にDM本能）が刺激された。ユウカに虐げられることで快感を覚えるらしい。

〈チフユ・オオムラ〉

髪：黒

目：黒

服：黒スーツ

年齢：チフユ「誰が明かすかバカモン」

3サイズ：チフユ「死にたいのか？」

体重：チフユ「覚える必要はない」

性別：

種族：鬼教官（転生者？）

魔力光：なし

好き：特になし

嫌い：やる気なしな奴

性格：織斑千冬とエルザ・スカーレットをそれぞれ5割にした感じ

レベル：9000

得意武器：剣

スキル：特になし

詳細：生前180万の兵士を教導させた女軍教官。剣などを使った戦術で相手軍を撃沈させたことから『黒き死神』と呼ばれている。

転生後はその教官時代を生かして餓鬼ども（他の転生者）を教育中。本を持って殴ったり目で脅すところが周りから見た怖い一面だそう  
だ。

くアテナス（リアーナ）く

髪：デイスガイア4の人間アルティナの髪を青色にした感じ

目：茶色

服：白いローブ

年齢：1万歳以上（見た目20歳）

3サイズ：84 / 56 / 83

体重：消えてます

性別：

種族：転生神（元人間）

魔力光：なし

好き：平和、花、心やさしき人

嫌い：権力者、イヴイル、心の腐った人間

性格：いたって温厚

レベル：?????

得意武器：?????

スキル：能力無干渉（物理攻撃を除くすべての能力を無効化する。

相手の元からの能力でさえも無力化。ただの人間になる）

詳細：死んだ人間を転生させるか輪廻の話に返す転生の女神。メテ

ンズギルドの首相で住人（転生者）達の面倒を見ている。神になる

前の彼女はもともと普通の人間だったらしい。ネオのことになると

悲しくなる顔に何か秘密があるようだが…。

番外訓：学力なんて人それぞれ（前書き）

真王「今回私が出てきます。ではスタート！」

## 番外訓：学力なんて人それぞれ

機動六課はよい天気、というかミッドチルダはよい天気。

そんな時銀時達のはんびりくつろいでいると、

????「ジャンプooooooooooooング!!!!!!」

外の上空から声と共に何か落ちてきた。

銀時「な、なんだ一体!?!」

銀時達は外へ出て土煙を見た。

その中から少年の様な顔立ちでニードレスのアークライトの服を青くしたイメージの人物がいた。

????「ふう、やっと着いた」

なのは「あ、あなたは何者ですか?」

なのはが恐る恐る聞くと、男は応えた。

真王「おれか?」リリカル銀魂 Strikers 銀女神鎮魂

歌の作者の真王と言ったらわかるか?」

新八「いいいい!?!?作者あ!?!」

新八はこれを聞いて驚いた。

真王「おいおい心外だぞそんな驚きかたは」

ネプテューヌ「そりゃ普通いるはずのない作者がいるから驚くよ」

心外そうに言う真王にネプテューヌは呆れて言う。

レオン「で、なにしに来たんだ？」

真王「いやなに、ちよつとバカテスみたく学力検査をしに来た」  
全員「学力検査？」

レオンが理由を聞くと真王が応えて全員首をかしげる。

真王「その通り。全員参加だから遅れるなよ？ではスタート！」

理樹「何処に向かって言ってるの？」

真王「仕様だ。気にするな」

真王がカメラ目線でビシツと指差して言い、理樹が突っ込むが仕様だと返す。

かくして真王による学力検査が始まった。

#### 問題1

『林檎という漢字は何と読む？』

ほとんどの答え

『リンゴ』

真王のコメント

正解だ。

真人・ガレーナ・ヴィヴィオの答え

『リン何とか』

真王のコメント

檣という漢字は難しいよね

神楽・シャルの答え

『食いもん（なんか液体が付いてる）』

真王のコメント

食うなよ？そして涎垂らすな

問題2

『 $(x - 3)^2$ を展開して答えよ』

ほとんどの答え

『 $x^2 - 6x + 9$ 』

真王のコメント

正解だ。  $x^2$  は「 $x$ の二乗」と読むんだ

銀時、神楽、ネプテューヌの答え

『  $2x - 6$  』

真王のコメント

残念。これは  $x$  ではなく二乗です。  $(x - 3) \times (x - 3)$  と考えればいいかと

近藤の答え

『  $3x$  です 』

真王のコメント

こっちに座れ、その頭をかち割ってやる

問題3

『 普通の葉っぱは広葉樹、ではどがった葉っぱは何と読む? 』

ほとんどの答え

『 針葉樹 』



真王のコメント

正解だ。モミの木もそのひとつなのだ

桂・はやて・蒼馬の答え

『トゲトゲ草』

真王のコメント

マリオゲームのやり過ぎだ

シャル・ヴィヴィオの答え

『クリスマスツリー』

真王のコメント

・・・出来れば何葉樹か答えて欲しい

神楽・真人の答え

『サボテン』

真王のコメント

誰も砂漠の植物なんて言ってるねえよ

問題4

『傘を英語でカタカナ式で答えよ』

ほとんどの答え

『アンブレラ』

真王のコメント

正解だ。

銀時・新八・レオン・ネプテューヌ・フェイトの答え

『アンブリラ』

真王のコメント

残念。たまくに間違えるケースだね

はやて・桂の答え

『アンブレラ社』

真王のコメント

バイオかよ…

沖田の答え

『なんか砲撃をぶっ放す奴』

真王のコメント

マスタースパークをお見舞いしようか？

問題5

『galaxyを日本語に直せ』

ほとんどの答え

『銀河』

真王のコメント

正解だ。

銀時の答え

『ギャラクシー』

真王のコメント

出来れば漢字にしてくれ

神楽の答え

『全宇宙の星の集合体』

真王のコメント

中二臭い答えだな…

問題6

『得意な奴が失敗すると言つ意味のことわざを出せ』

ほとんどの答え

『猿も木から落ちる』 『カッパの川流れ』

真王のコメント

正解だ。もう一つあったような気もするが、コメント忘れた

近藤の答え

『お妙さんとの愛』

真王のコメント

しつこ過ぎたら失敗しますよ

沖田の答え

『土方の抹殺計画』

真王のコメント

…お前が死ね

問題7

『クナイが相手の影に刺さったら動かなくなる技を何と言っ?』

月詠・猿飛の答え

『影払い』

真王のコメント

正解だ。さすが元お庭番州や忍者術を学んでいるひとは凄いな

銀時・神楽・ネプテユーン・ビビ・ナリアの答え

『ザ・ワールドー!』

真王のコメント

ジヨジヨネタは忍術に入りません

問題 8

『海の中で最大級の魚類はなんでしょう?』

ほとんどの答え

『ジンベイザメ』

真王のコメント

正解だ。そう言えば海遊館でその子供がいたよつな……

神楽・ネプテューヌ・フェイト・なのは・ブランの答え

『ザトウクジラ』

真王のコメント

残念。鯨系は哺乳類だ。

ヤルオの答え

『海龍』

真王のコメント

魔物の話をしてるんじゃないありません

レオン・ガレーナの答え

『リヴァイアサン』

真王のコメント

空想生物だ

神の答え

『ラオシャンロン』

真王のコメント

もはや海の生物ですらない。つーかわざとやってるな？

問題9

『炎の対となる属性を答えよ』

ほとんどの答え

『氷』

真王のコメント

正解だ。熱い物には冷たい物をだ

ネプテューヌ、ヴィヴィオの答え

『水』

真王のコメント

これはよくある間違いだ。水は電撃系の対となる属性なんだ

近藤の答え

『鬼火』

真王のコメント

色ですか？

問題10

『勝って（）』

勝利しても油断するなという意味のことわざを完成させよ』

ほとんどの答え

『勝って兜の緒を締めよ』

真王のコメント

正解だ。

銀時、レイン、ネプテューヌの答え



『勝ってパフェを手に入れる』

真王のコメント

パフェ争奪戦じゃねえよ

神楽、シャルの答え

『勝って食いもんを奪い取れ』

真王のコメント

弱肉強食と言いたいらしいな…

ギルシアの答え

『勝って幼女を愛でよ』

ビビ、ナリア、ヤルオの答え

『勝って女の子達を愛でよ』

真王のコメント

帰れよ

近藤の答え

『勝ってお妙さんを告白せよ』

真王のコメント

永久に無理だと思っな

問題 1 1

『マリオシリーズで体が大きくなるアイテムを答えろ』  
ほとんどの答え

『スーパーキノコ』

真王のコメント

正解だ。

ネプテューヌ、ヴィヴィオの答え

『パワーアップキノコ』

真王のコメント

それはパワー回復のアイテムです。残念でした

シャルの答え

『ニンニクだったっけ?』

真王のコメント

それはワリオです

はやて、桂の答え

『巨大キノコ』

真王のコメント

それも大きくなりますが巨大化なので

問題 1 2

『吾輩は（ ）である。（ ）の中の言葉を入れよ』

ほとんどの答え

『吾輩は猫である』

真王のコメント

正解だ。夏目漱石の作品だ

桂、はやての答え

『我が輩はクツパ大魔王である』

真王のコメント

マリオさん、こいつ等を溶岩へ捨てていいですか？

神楽の答え

『我が輩は女王様である』

真王のコメント

女王の欠片一つのないがな（笑）

銀時の答え

『我が輩は糖分王である』

真王のコメント

要するにアホの中の糖尿病だな？

フェイトの答え

『我が輩はライオンである』

真王のコメント

猫類でも違つわボケ

問題 13

『任天堂で大人気のスターは？』

ほとんどの答え

『マリオ』

真王のコメント

正解だ。ちなみに俺も好きだ

桂の答え

『カツオ』

真王のコメント

死ね

問題 14

『緑の配工管の名前を答えよ』

ほとんどの答え

『ルイージ』

真王のコメント

正解。マリオの弟だ。身長は彼より上ですが…

神楽の答え

『地味』

真王のコメント

彼に謝れ

沖田の答え

『永遠の二番手』

真王のコメント

お前も謝れ

問題 15

『スマブラでマリオの最後の切り札を答えよ』

ほとんどの答え

『マリオファイナル』

真王のコメント

正解だ。

桂、はやての答え

『カツオフアィナル』

真王のコメント

いつまで引きずってんだ？

神楽の答え

『ギガデストロイアルティメットスペシャルブレイカー』

真王のコメント

ねえよ！！そんな必殺技！！

ナリアの答え

『双炎龍業火拳』

真王のコメント

カツコよくするな

真王「ハイ試験しゅーりょう」

真王が手をパンッと鳴らす。

真王「どうだ？勉強になったか？」

新八「何処らへんがだよ！！ほとんどゲームの問題があるじゃねえか！！」

ニコニコ笑う真王に青筋立てて怒鳴る新八。

ま、実際マリオとか出てました。

真王「まあまあそう怒るな。とりあえず俺はここに出てこれて満足したことだし、もう帰るわ。じゃあな」

真王はそう言ったあと嵐のように去っていった。

銀時「・・・ハタ迷惑っぽい奴だな...？」

ネプテューヌ「・・・また現れそうかもね」



くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

ナリア「はい！今回のアシスタントはナリアです」

銀八「出たか変態百合女」

ナリア「誰が変態どころあ！！」

銀八「ゴハツ！？」

銀八はナリアに殴られて気絶させられた。

真王「おいおい・・・まいつか。ペンネーム『鳴神 ソラ』からスタートだ。『常識のあるメンバー』『無理、教えたら好意寄せてる人に殺される。』」

タレ銀「マー君！怖かったよおおおお！！」

マリオ「あんな・・・しっかし銀次先輩と同じ能力持ちがいるとはな・・・」

ルイージ「ホントだね」

フォックス「ってか多過ぎだろ・・・」

ヨッシー「と言うか私と同じ人いたよね」

ファルコ「後、カービィとかピカチュウもな」

マリオ「…（何かアテナスはその偽神：ネオについて知ってるな…）」

フォックス「新たに出て来た転生者メンバーとアテナスに質問『マリオについてどう思う？』」

スネーク「同じく似た質問『銀次についてどう思う？』」

クッパ「メテنزギルドのメンバーに質問なのだ『こちらのリュウケンドーに変身してるソラについてどう思う？』」

次回を楽しみにしてます 『それじゃあ一人ずつ全部答えようか』

タバネ「スッゴイ能力持ちだね。この人が先輩か。そのリュウケンドー貸してくれない？（実験する気だ）」

ガレーナ「ほう？両者とも強いな…。勝負しろ！」

真王「躊躇いなく言いやがったな？まあ能力消えたって俺が元に戻してやる」

レシア「転生者殺したちですか。ですがアテナス様を邪魔をするならば……切る！」

ヤルオ「3人とも興味ないおWWWWWWWW」

ルシアス「興味ないわ」

ルーシア「面白そう!!」

アルテス「私はユウカ様以外興味ないありませんわ」

チフユ「ふむ・・・あの銀次という奴にはあの言葉づかいをどうにかしなければならんな...」

真王「おいおい・・・『鳴神 ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

ナリア「次はペンネーム『ケン』さんだよ。『統夜』新たな仲間が増えたな」

遊輔「しかも個性的な人達ばかり」

統夜「タバネとチフユって・・・あの・・・言わないでおくのが吉かね」

遊輔「ネオの事・・・何か知っているようだね」

統夜「銀さんに質問だ。『本妻にしたいのは誰ですか?』」

俺からはジャンヌに質問だ。『新八にお通ファンを絶対に止めさせますか?』

次回も楽しみにしています。『』

銀時「・・・・・・・・」

銀時は冷や汗を流している。

原因は後ろにいる黒い気を放っているラバーズ達だ。

ナリア「どっち選んでも殺されるね。次の質問」

ジャンヌ「お通ちゃんって誰？」

真王「これだ」

新八「ちよっ!!!？」

真王は新八を無視してお通ちゃんの写真をわたした。

ジャンヌ「……………新八君」

新八「はい……………(びくびく)」

ジャンヌ「……………私を親衛隊入団させなさい!!」

と寺門通親衛隊服(女の子なのでさらしを巻いている)を着たジャンヌだった。

全員「えゝえゝえゝえゝえええええ!!!!??」

全員は予想外の答えに驚くしかなかった。

真王「心広いな。『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

ナリア「えつと次、ペンネーム『黒龍』さんからです。『銀時』ま

た新しい神の登場だな」

黒龍「それにしても転生者の数が多いですね」

銀時「つうか、大抵の奴が他の漫画やアニメのキャラと同じ姿って  
どうなんだよ…」

黒龍「やっぱアニメのキャラになってみたいって思う人は結構いま  
すからね」

ソラ「なら、男が女になってる奴もいんじゃないか？」

銀時「ああ、いそうだな」

黒龍「まアそれよりも、何か一人問題起こしそうな奴がいますね」

銀時「恵紹ヤルオって奴か？」

黒龍「なんかかなりしそうな事ができるキャラですよね」

銀時「まあそういう奴は大抵酷い目に遭うのが定番だけだな」

黒龍「そうですね。じゃあ質問しますか」

1・ビビに質問。女の子が好きならいつその事男になったらどうで  
すか？そうすれば何の問題もありませんよ（黒笑）

2・真王さんに質問。次にやる長編は、黒神さん今やっている長編  
みたく、たくさんの小説のキャラを呼んでする物なんですか？

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『ってビビは男が嫌いなよ！！分かる！？』

真王「だな。それとその通りです。ゲストたくさん呼びます。『ゲイム祭編』の後でね。『黒龍』さん。参加したいなら名乗り出してもいいですよ？」

ナリア「次はペンネーム『リーン』さんだよ。『どうも！！』リーンです

神「いよう）。。ノ お久だなあ　こっちでは、ほのぼのやってるなあ」

こちらは今頂上決戦やってますからねえ……………

しかし、転生者達が一気に増えましたね

神「しかも、転生神とは……………これまた、神様らしい神様が表れたなあ」

神様らしい？

神「ああ……………さて、アテナスさんよお。ちよいと質問がいくつかにある」

・なぜ、メテنزギルドなんてモノを作ったのか

・転生者を増やし、その軍勢を作って、お前は何をするのが目的なのか

神「かな」

な、なんとも、猜疑心満々ですね……………

神「ああ。なにせ、何かをしているという事は、つまりそれは何か目的があるという事。娯楽にしても、使命しても、任務にしても…

……………」

つまり、この女神さまは、何か企んでいる？

神「もしかしたら、このカオスな物語のラスボスだったりして」

そんな馬鹿な……………いや、でも、そうとも取れそう。なんだから、胡散臭いですし

神「そう感じるお前は、おそらく何かに毒されてるな」

……………最近、どんな作品見ても、鬱展開しか連想できなくなってますからね。アレ見てから

神「終わってるな」

重症ですかねえ……………

では！！次回も楽しみにしておりますので、執筆、がんばって下さい！！失礼します！！！！

神様「ばいばい！！！！」『…………アテナス様」

アテナス「私は、“彼”を止めるためにメテンスギルドを作りました。世界すべてを壊そうとする彼を…」

真王「はいでは『リイン』さん、二度と彼女を悪役にすんなよ？  
(ドスの聞いた怒りの声で言う)」「

ナリア「最後だよ。ペンネーム『支配者』さん。『支配者』転生者ギルドとは…思い切った事をしましたな……。ひよっとしてあのキヤラが出てくるんでしょうか？」

銀時「さあな」

支配者「まあ、いいや。質問です

土方に質問

1、マヨネーズの他に好きな食べ物はないんですか？  
犬の餌ばかり食っていると死にますよ(黒笑)

2、銀時がモテてますけどそんな銀時を見て如何思いますか？(黒笑)

沖田に質問

土方暗殺計画は365日毎日考えてるんですか？「『」

土方「あるぞ。土方スペシャル焼きそば(もちろんマヨたっぷり)とか土方スペシャルお好み焼き(こちらも)とか…。あの万事屋がもてるのは以外だな」



沖田「ええ、俺は土方さんを何時でも殺せるようスタンバイしてま  
さあ」

土方「上等だ総悟オオオオオオ!!!」

また喧嘩をおっぱじめた。

真王「はぁ・・・」支配者』さん。廊下に立ってなさい」

ナリア「次は、何とタバネさんがアシストだよ。じゃあね」

**番外訓：学力なんて人それぞれ（後書き）**

真王「今回は何と次元世界最強の魔王が現る？」

タバネ「次回『規格外の上は規格外』 テイクオフ」

第八十五訓：規格外の上は規格外（前書き）

真王「今回は規格外中の超規格外なキャラが登場だ！！」

ネプテューヌ「とはいっても作者がもう一つ作った作品のキャラじゃないの？」

真王「クオラあ！！」

????「フフツ、『リリカル銀魂』始めるわ」

## 第八十五訓：規格外の上は規格外

????「グ…ハア…！」

暗闇の世界で男が倒れた。

その男の他にもたくさんの人が倒れていた。

その死屍累々の中心に一人の人物がいる。

????「…これでほとんどの悪転生者は地獄行きで決定ね」

声からして女性のようだ。

????「さて、他にお尋ね者は………厄介なところへ逃げるものね」

女性は呆れ半分の顔でため息をつく。

手に持つ通信機には『ミッドチルダ』と書かれていた。

ミッドチルダ・機動六課

ナリア「だから違っつてば…！いい？かめはめ波の動きはここから  
こうやって！」

銀時「ばっかオメエ、そりゃ波動拳を作ってたんだよ！」

なんか銀時とナリアがいろいろポーズを作っていた。



レーティア「ギルシア？」  
ギルシア「……」

レーティアは必要以上に引っ付いている。  
ギルシアは満更じゃない様な感じである。

なのは「ゴメン新八君、無理」

なのはは両手を合わせて謝った。

ジャンヌ「要は諦めた方がいいよ新八君」

新八「ええ、僕もそう思いました」

ジャンヌの言葉に新八は諦めの顔になった。

ビビビビ！ビビビビ！ビビビビ！

するとメテンスギルドメンバー達の端末が鳴り始めた。

リアス「この反応は……」

ユウカ「はぐれ者がいらっしやいます……」

メテンスギルドメンバーは険しい顔になる。

すると訓練場に魔方陣が現れて、10人の人物が現れた。

銀時「あいつらは？」

リアス「はぐれ転生者、輪廻の輪に戻らずに現代をこびり続ける哀れな奴らよ」

リアスはそう教えて前へ出る。

はぐれ転生者「なんだお前らは！？さてはギルドの奴らか！？」

はぐれ者の男が代表に言ってきた。

リアス「その通り。私はリアス・グリオン、メテンスギルドの一員よ」

誇らしげに言うリアス。

リアス「大人しく輪廻の輪に帰るのもよし、さもないと痛い目にあうわよ？」

すでに戦闘態勢のリアス。

はぐれ転生者「フン！誰があんなとこに戻るか！！俺達は、今いるこの世界が好きなんだ！だから、あんなとこに戻ってまた別の場所で転生なんてまっぴら御免だ！！」

どうやらはぐれたちは聞く耳を持たないらしい。

リアス「どうあっても動く気はないみたいね」

リアスはやれやれなしぐさをする。

リアス「だったら、私達に出会ったことを、後悔することね！！」

リアス達ははぐれ転生者達と戦闘に入った。

IBGM中立者by魔界戦記デイスガイア4  
(Disgaea 4 Soundtrack - Noble  
Marble)

レオン「リアス、ここは私とガレーナがやってもいいか？」  
リアス「十分よ」  
ガレーナ「さて、余を満足させてくれるか？」

レオンとガレーナは手をポキポキ鳴らす。

はぐれ転生者「ちっ！舐めるなああ！！」

一人のはぐれが大きな斧を持って駆け出す。

レオン「舐めているのは貴様だ。獅子王拳！！」

レオンが拳に魔力を溜めて獅子の顔をした閃光がはぐれたちを襲った。

ガレーナ「ヌウン！！」

ガレーナが大振りの剣ではぐれたちをのけぞらせる。

はぐれ転生者「おのれ！！」  
ケルベロス「ゲオオオオン！！」

一人のはぐれが三つ首の犬モンスター・ケルベロスを召喚した。





ついでにケルベロスも。

レオン「まだやる気か？」

余裕そうに鼻を鳴らすレオン。

はぐれ転生者「まだよ！メテオストーム！」

はぐれの一人が降り注ぐ岩をレオン達に向ける。

ガレーナ「翼竜斬！」

だがガレーナが飛ぶ斬撃ですべて撃ち落とした。  
これにはぐれたたちも驚く。

ガレーナ「こいつはおまけに見せてやろう。真紅龍・ドラギラード  
！」

ガレーナに赤いオーラが纏い、そして彼女の奥義の一つ、真紅の体  
の龍・ドラギラードへと半獣化した。

ガレーナ「紅蓮炎龍爪！」

そして紅蓮の如く、爪に纏いし炎ではぐれ3体を撃破した。

はぐれ転生者「うう・・・このままじゃ・・・」

はぐれの1人の女がじりじりと後ずさりして・・・

トン

はぐれ転生者「え？」

後ろに何か当たった。

いや、ユウカにあたった。

ユウカ「あら？何処へ行くこうとしてるのかな？」

はぐれ転生者「ヒイ！」

ユウカの笑みに女性は恐れる。

ユウカ「！ああ、ダメ！そんな涙目になったら…苛めたくなくなっちゃうじゃない?!?!」

サンダーインパクト

ダアア~~~~ン!!!!

はぐれ転生者「ギヤアアアアアア!!!??」

涙目になったはぐれの女性を見てユウカはドSスイッチが入ってしまい、雷の魔法で相手をいじめた。

はぐれ転生者「アアアア!!ヤメテエエエ!!」

ユウカ「止めない?アハハハハハハハハハハハハ!!!!!!」

女性が止めると言うも聞く耳持たない。

ユウカ以外はため息を吐くかほとんどもドン引きするか苦笑いを浮かべるか顔を真っ青にするかである。

ネプテューヌ「……怒らせたら命がいくつあっても足りないね……」  
銀時「おれもだ」

ネプテューヌ達は心の中でユウカを怒らせないことを決意した。

アルテス「放して！私はユウカ様のところにイイイイイイ！！！」  
カイクム「お前の場合は全部あの技を受けに行く気だろうか！！」  
ギルシア「大人しくしてろDMが！！！」

なんだか遠くでじたばたと暴れているアルテスと抑えるカイクムとギルシア。

そしてはぐれ転生者達は捕まっていた（一人は黒焦げだが……）。

銀時「にしても変身とかありなのか？」

銀時がレオンとガレーナに聞く。

理由はレオンが変身したヴァルガードのこと。

レオン「アテナスが与えてくれた能力だ。ちゃんと制御しなければ意味がない。今なら完全に獣化出来るぞ？」

笑いながら言うレオン。

ガレーナ「話してるとこ悪いが、別の奴が来るぞ。敵意はないがな」

ガレーナがある場所を見て言った。

その視線の先には一人の女性がいた。

腰まであるさらさらした黒髪に金色の瞳、黒いスカートとストッキングとガーターベルトにファントムキングダム製の服（胸のと

こは黒いシャツで（を身につけて、ボロ着いているマントを羽織っている。  
そして極めつけはこれでもかと思うくらい超ダイナマイトボディを持っている。

出るとこはドーン！と出ているくらい巨大バスの持ち主だ。

「？？」。「奴らを追ってきてみれば、もうすでに終わってたみたいね」  
女性は捕まっているはぐれたちを見てそう言う。

銀時「こいつらいつてんのか？ツーか誰？」

「？？」。「普通こう言うときは自分から名乗るもんだけどまあいいわ。  
私は神道勇華よ、以後お見知りおきを」  
なのは「あ、どうも・・・」

銀時が聞くと女性・勇華が自己紹介したのはがつられて言う。

ユウカ「あら？貴方もゆうかですか？」

勇華「も？成程、あなたもゆうかなんですね」

ユウカの言葉に勇華は首をかしげたが、すぐに理解した。

勇華「それから、さつきから覗き見するのは紳士的によくないわよ」  
神「そうかい？そりゃ悪かったな」

勇華が後ろから出てきた神に対して言う。

神「いよう、あいつは元気か？」

勇華「それはとっても元気よ。今来るけども」

神と勇華が仲良く(?)話し合っていると、漆黒の魔法陣が現れる。その中から一人の青年が現れた。

勇華とほぼそっくりで、髪はぼっそりした黒、上半身はいい筋肉質で服は同じだが、茶色いズボンを身に着けている。

???「ずいぶん懐かしい奴に会えたな？」

神「俺様もそうおもうぜ? 神道勇斗」

勇斗と神はにやりと笑う。

グレイ「こいつを知ってるのか？」

神「まあな。一度一戦交えた事がある」

グレイが聞くと神は答える。

神「あの戦いは、今思い出しても血沸き肉踊る・・・幾度も互いの暴をぶつけ明かした・・・とうとう決着つかずに終わってしまったがな」

勇斗「クッククク・・・まったく本気を出さないお前が言うか？」

神「そりやお前も同じだろ?・・・クッククク・・・」

神と勇斗が笑いあう。

しかし不気味なのでみんな少し引いている。

神「にしてもお前の挑戦者も無謀だな？」

勇斗「無茶無謀などどうでもいいが、あいつらは自分が強いと思っ込んでいるからな。だが、あの男は違ったがな」

神「あいつ？」

勇斗や神の言う挑戦者というのははぐれ転生者や勇者や魔王などの

事。

勇斗はある人物のことを思い出している。

勇斗「ジルバ・フォード、あいつの能力で俺が本気の50%を出さねばならぬ相手という事にすごく面白かったがな。まさか弟子のために他界するとは……」

今思えばよきライバルであった事を思う勇斗。

神「そいつの弟子さんはがんばってるようだが？」

勇斗「フツ、気が向いたら会ってみるか……」

勇斗は笑いながら言う。

すると、

はぐれ転生者「ついに見つけたぞ！！魔王神！！」

はぐれ転生者の男が現れた。

はぐれ転生者「お前を倒せば、俺たちは世界をこびり続けられる！！行くぞみんな！！！！」

そしてたくさんのはぐれ達が現れた。

その数なんと1000以上。

新八「多すぎなんですけどおおおおオオオオオ！！！！！！！！！！」

新八は思わず転生者達の数にシャウトする。







へ戻された。

そして勇斗は死屍累々の転生者達に近づいて呪文を唱える。

勇斗「われは願う。救われなく哀れの子羊たちを輪廻の輪に戻らせよ……」

呪文を唱えるとはぐれ達は光に包まれて消えた。

銀時「……いまのは何だ？」

勇斗「グラヴァルドボールは俺が契約した魔帝龍だ。そして今やったのは輪廻の輪に戻す呪文だ。だが罪が深いやつはプリニーになるがな」

ネプテューヌ「プリニーに？」

銀時が聞くと勇斗が答え、ネプテューヌは首をかしげる。

勇斗「ああ、深い罪を持つやつはペンギンのようなプリニーになる。普通のとは違って一日20時間超重労働で褒美は鰯一匹だからな」

勇斗が言うと、レインは死にたくない理由がまたひとつ増えたなとつぶやいたとか。

神「てめ勇斗！あんなもん出すなら何で出さない！！」

勇斗「グラヴァルドボールのゼロオブザビッグバンは森羅万象を無に返す力があるんだ。受けたら能力もパワーもすべてねこそぎ無くなるからな」

神「そ、そうか……（俺様のあれみたいな感じだな……）」

神は少しそう思った。

勇斗「さてと、俺はもう戻る。はぐれ達を一掃できたらな」

勇斗は振り返って立ち去ろうとする。

ネプテューヌ「え〜？どうせだからもつとここにいない？」

勇斗「お誘い御尤もだが、俺はこう見えて忙しいんでな」

ネプテューヌが子供のように言うが、勇斗は動じることなく返した。

勇斗「おっとそつだ。その銀髪の男。名前は？」

銀時「坂田銀時だ。何なら銀ちゃんって呼んでも・・・」

勇斗「銀時、そのペンダントと剣をこっちに貸してくれ」

勇斗が足を止めて銀時を呼ぶ。

銀時は少しふざけて言うが、軽くスルーして勇斗は銀時の持つシルバースレイドとシルバースウルを指差して言う。

銀時「・・・なんに使うんだ？」

銀時は怪しみながらそれらを渡す。

勇斗「・・・デバイス完全融合！」

受け取った勇斗はなんと2つを融合させた。

そして白銀に輝く刀が現れた。

勇斗「これがお前の新たなる力だ。名前はそつだな、『銀狼夜叉』  
でどつだ？」

銀時「銀狼夜叉・・・」



なのは「ホントにきつた!」  
シグナム「ああ、だが切ったところがよく見えなかったぞ!」  
ネプテューヌ「早い・・・!」

見ていたなのはたちは驚いていた。  
もちろん本人も。

銀時（何だ今のは？投げてきた石が遅く見えたぞ？それに切ったあの感覚・・・すげえぜこりゃ・・・!!）

銀時は驚きながらうれしそうになる。

勇斗「その銀狼夜又は銀時の相棒となった。大事に使えよ」

銀時「ああ」

勇斗はそういつて時空ゲートを開く。

勇斗「じゃあな、そしてまた会おう」

勇斗はそういつて時空ゲートを通ってどこかへ消えた。

銀時「・・・よくわからんが、ありがとよ、勇斗」

銀時は今はいない勇斗にお礼を言った。

グレイ「でだクソ神、あいつはいつたいなんなんだ？」

神「神道勇斗、あいつは確か別次元の魔界の魔王神だどよ」

ビビ「魔王神!?!つまり魔王の中の神様!?!」

神「・・・まあそんな解釈でもいいが・・・」

グレイが聞くと神が説明し、ビビは驚いた。

リアス「何はともあれ、一難は去ったわ」

レシア「そうですね。どうせですから私の料理でも食べますか？」

シャル「おお、レシアの料理は天下一品だからね」

勇華「あら？それはご馳走になりますね」

リアスは安心して、レシアが言つとシャルと勇華がうれしそうにする。  
そのほかも同意権だ。

グレイ「っておい、ちょっと待て。何でお前まで参加してんだ？」

そういえば『神道勇華』が六課に住み着くようになっていた。

勇華「私ははぐれ達を輪廻の輪に戻す目的があったけどもう終わっ  
たからね」

グレイ「それとこれとは話が違つぞ」

勇華「ま、簡単に言つたら私ここに住んじゃおつかな・・・ってね」  
にっこり笑つ勇華にあきれるグレイ。

勇華「ちなみに私は勇斗と同じ能力持つてるからね」

釘をさすように言つ勇華。

はやて「そうかそうか、ってそれがどうしたー！ー！ー！」

勇華「きゃっ！？」

疾風は頭を上下にした後いきなり勇華の胸をわしづかみにした。

はやて「んなあぁっ！！！！？？なんやこのでかすぎるキングパイは！！？そしてなんとという張りのある柔らかさや！！あ、あかん、これは癖になる・・・」

必死な顔で勇華の胸をもみ続けるはやて。

銀時と桂は目潰しを食らってのた打ち回り、新八は鼻血を出して気絶し、神楽、ブラン、さくらはすごい嫉妬のオーラをまとい、六課組みは顔を赤くし、ほとんども顔を赤くしている。

勇華「もう、そんなに私の胸がいいならこうしちゃうわよ」  
はやて「え？」

すると勇華が自分の胸ではやての顔に挟んだ。

勇華「そ〜れ パパパパパパ」

プニユ フニユ プニユ フニユ

はやて「むー！むー！（柔らかいものがうちの顔に…！！とても気持ちええわぁ・・・）」

マシユマロの柔らかさを持つ勇華の胸に気持ちよくなるはやて。

新八「ストオオオオオオオオッ！！！！これ以上やったらはやてさんが危ない道をたどりますよ！！！！」

新八がとめた。

勇華「そうね。ごめんなさいね」

勇華も反省したようだ。

勇華「ま、それはそれとして、よろしくね」

『神道勇華』が勝手に仲間になってしまった。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生ー！」

タバネ「はーい！みんなのアイドルタバネちゃんだよー」

銀八「いつからアイドルなんだよー！」

タバネ「ついさっき」



銀八「・・・無視しよ。ペンネーム『鳴神 ソラ』さんからいくぞ。  
『マリオ』さすがに溶岩は駄目だからピーチ姫の料理を食べさせて  
やってくれ、美味いから」

ツッコミトリオ&クツパ「(溶岩より残酷だ;)」

マリオ「それにしても双炎龍業火拳：ゼロの状態でこう言う技を考  
えてみるか」

ルイージ「と言うか：1個で回答2つがひどっ！」

マリオ「弟は地味じゃねえよ！後、永遠の二番手とかも！」

クツパ「マリオ関連の問題が多いのだ後半；」

銀次「何か凄い人に付けられた気がする：質問『アテナスさんの能  
力って放せばその人の能力は戻るの?』ちなみに俺のは触れた後は  
そのまんま」

マリオ「メンバーに質問『作者が最近書いた龍騎の小説はどう思う  
?』」

ルイージ「(それ感想じゃない;)真王さんに質問『僕達の世界の  
アイテムで好きなアイテムは何?』」

そんな訳で次回を楽しみにしてます 『』

アテナス「私の意思でその人の能力に鍵をかける(制限をつける)  
事ができます」

真王「特にスターが好きですね。2つ目はみんな面白いじゃない？  
だと」

タバネ「それじゃあ『鳴神 ソラ』さん？廊下に立ってなさ〜い。  
次はペンネーム『ケン』さんだよ。『統夜』個性的な答えばっかだ  
な・・・」

まあな・・・

統夜「銀さん・・・答えられないのは恥ではない・・・」

レオンに質問だ。現在種族が吸血鬼と墮天使の混血しか判明されて  
いなく潜在能力の塊である統夜をビシバシ鍛えたいと思いますか？

統夜「何か・・・イグニスやデュークを軽々と倒せそうだ・・・」

俺はイメージOP3にシャルとレオン、ユウカを入れようと画策し  
ている・・・

統夜「セントクルセイダース崩壊後から厳しくなりそうだからな。  
・・・曲は？」

そこら辺は考え中だ・・・レオン先生とユウカが正式参加するのを  
楽しみにしていなさい。

統夜「は〜い」『それじゃあレオっち、答えようね』

レオン「だからレオッチではないと何度言ったら・・・無  
論あいつを鍛えるつもりだ」

真王「それじゃあ『ケン』さん、統夜が強くなるのを楽しみにしています」

タバネ「次々、ペンネーム『なめ猫』さんからだよ。『どうも、なめ猫です。』

今も小説を楽しませてもらっています。

短編やコープス編、銀河編とかをよく見てるんですが、あのあたりからがきっかけになったのか銀魂にはまってしまいました。

で、将軍様とねぶねぶ達の絡みはまだでしたっけ？夏ですし、プール騎馬戦の話も読んでみたいですw

では質問残して撤退いたす！さらば！

ラムザ「…今から僕達を呼ぶようにするとは…：…：はい、えーと

…銀さんに質問、桂さんに作者からのメッセージです」

銀さんへ

『仲間がとてつもなく多くなっていますが、全員の名前はしっかり覚えていきますか？』

桂さんへ

『お前は魔王か？』

ラムザ「以上。あと、まだわかりませんが、もしかしたらアイドルマスターの二人とかと一緒にそちらへ乱入するかもしれません。そうになったらよろしく頼みます。ではまた」

銀時「確かにあんなに多くちゃ覚えづらいな…、ならあだ名で覚えやすくしよう」

桂「魔王じゃない桂だ」

真王「はい、『なめ猫』さん、廊下にたつてなさい。次だ、ペンネーム『黒龍』さんから。『黒龍』なんかバカテスって感じの話でしたね今回は……」

銀時「まあ大体バカな発言する奴は予想できたけどな」

ソラ「マリオが半分を締めていたけどな」

黒龍「にしても、こうやって色々な文面を書ける真王さんは凄いですね」

銀時「やっぱそりやお前の能力が低いだけじゃね？」

黒龍「その言い方酷くないですか!？」

ソラ「まあそんなことより質問にしたらどうだ？」

黒龍「……そうですね。じゃあ質問します」

1・真王さんに質問。次の『リリ銀パーティー編』ではどれくらいの作品のキャラが出演するんですか？

2・ネプテューヌに質問。とりあえず、一般的な高校生レベルの問題を贈ってみますので、解いてみてください。

黒龍「今回はここまでです。また次回も楽しみにしています」『まず黒龍さんの『リリカル仮面ライダー』が入って烈火龍の『DRAW GON NAIL』、天城の『無限学園』、ケンの『ヒーローズエピソード』、鳴神ソラの『スマッシュハーツブラザーズ』、風花の

『The last of crime』、リインの『とある兄妹の転生物語』のキャラ達がゲスト参戦します」

ネプテューヌ「……………プシュー……………（解けず知恵熱発生）」

真王「ダメだこりゃ、『黒龍』さん、廊下に立って楽しみにしてください」

タバネ「それじゃあ次回のアシストはなんと勇華さんだよ。じゃあね」

第八十五訓：規格外の上は規格外（後書き）

真王「今回は………なんだかムフフエツちなイベントの予感が……」

勇華「フフ、次回『R - 15』ってエロゲロ用語が無ければいい』テイクオフよ」

**裏第二訓：R・15ってエロゲロ用語が無ければいい(前書き)**

真王「ムフフエツチなイベントが起こります。それでも見るなら見てもいいです」

裏第二訓：R - 15 ってエロゲロ用語が無ければいい

機動六課の真夜中。

そこでこそそこそとごめく人物が一人。

その人物は、ヤルオである。

ヤルオ「グッフッフ・・・ついに僕のターンが来たおwwwwww」

中二臭い笑い方をしながらある部屋へ向かうヤルオ。

そしてその部屋・なのはの部屋に着いた。

ヤルオ（いつもあの女が僕の邪魔をしていたが、今度こそずっと僕のターンだおwwwwww）

ヤルオの言うあの女とはビビのことを言っている。

ヤルオ（なのたんこうりゃくだおwwwwww）

ヤルオは扉に手をかけ「ちょっと待ちなさい！」「・・・よつとして聞き覚えのある声に止められた。

ビビ「私の目が黒いうちはあなたの行動が読めるわよ」

ヤルオ「チツ、またしても邪魔をするかwwwwww」

目の前の天敵てんていに舌打ちするヤルオ。

ヤルオ「だが、僕にはやらねばならぬことがあるおwwwwww」  
ビビ「奇遇ね。私もやることが一っ」



ヤルオ・ビビ「コイツが先に手を出す前に女の子を手に入れる！」

・・・変態面では意気投合している2人。

そして扉に手をかけたその後、2人は信じられないものを見た。

勇華「あら？なにしに来たの？」

なぜかなのはの部屋に勇華がいた。

ビビ「え？え？何でなのはちゃんに部屋に？ってかなのはちゃん何処？（ ）？」

勇華「それってこれのこと？」

ビビがきよろきよろしていると、勇華がペラツと毛布をめくる。

全裸で顔を赤くしてびくびく痙攣しているのはがいた。

ビビ「!?!なにこれ・・・」

勇華「ちよつと遊んでみたらこうなっちゃって」

バツが悪そうに言う勇華。

「うーん、銀さんもつとして〜」となのはが寝言を言っているが。

ヤルオ「orz・・・なんてこつたい、まさか先にやられてしまうとは・・・」

ヤルオは別のところでショックを受けているが…。

勇華「だったらどうするの？私を犯すの？」

勇華がニコニコ笑って2人を挑発する。

ヤルオ「犯すだと?・・・グッフッフッフ・・・」

ヤルオが笑い始める。

ヤルオ「ハーレム目指していく度も女を手に入れた僕に不可能はない!」

ビビ「ってどんだけ犯ってきたのよあんだ!」

自信満々のヤルオに突っ込みを入れるビビ。

ちなみに本人いわく今のところ8人程度。

勇華「あらあら　ここじゃあれだから別の部屋で犯しましょ?貴方もね」

ビビ「え?私まで!」

ヤルオ「ビビ、なのたんの仇を取るまで一時休戦だおwwwwww」

ビビ「・・・そうね」

巻き添え食らったビビだが、ヤルオと共になのはの仇を取ることを誓う。

つーか死んでませんよ。

## 勇華の部屋

六課ってどんだけ部屋があるんだのツッコミはなしの方向で。

勇華「ウフフ、それじゃあ」

ベッドで仰向けで倒れ、左手で胸を触り、右手でスカートの中をのぞかせる。

思いつきり誘っているようだ。

ヤルオ・ビビ「……………（ゴクッ）」

見た上記の2人は色欲が疼いた。

勇華のプロポーションは出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいる。

そして相手を誘惑させるような姿勢。

まるで男の生気を食べに求める夢魔サキユバスの様な感じだ。

ビビは思わず近づいて勇華の胸を触ってみる。

ムニユッ

ビビ（あ、柔らかい…）

勇華の柔らかなマシユマロに思わず揉み続けるビビ。

ビビ「（すごい…思わずくせになる…）……………ん」

勇華「……………」

ビビは勇華とキスした。

ヤルオはというと、「目が見えないおゝwwwwww！そして動けないおwwwwww」と目隠しとバインドをされていた。

目隠しはビビで、バインドは勇華がやったのだ。

ビビ「クチュ…れる…」

勇華「レロ・・・ふむ・・・」

今度はディープで攻め、舌同士がからめ合っている。

勇華「ぷは・・・これじゃあ足りないわ・・・」

長い、深いキスを交わし合った二人の唇からは、夜の光に照らされ、輝く糸を引いていた

勇華「それに、あなたはある物を持つてるみたいだし」

勇華はいいおもちゃを見つけたかのように笑う。

ビビはよく分かってないみたいだが。

勇華「あなたには、おまじないの合言葉があるわね」

ビビ「おまじない？」

勇華はビビの耳元で言った。

勇華「合言葉は...『タブー・ザ・リリー白百合の禁忌』」

ビビ「!?!?!?!」

合言葉を言った瞬間ビビの中にある何かが弾け飛んだ。

それはここに流れ着く前に自分で体験した潜在能力・禁忌を。

ビビ「・・・・・・・・ウフフフフフ・・・・・・・・」

ビビは魔女のような笑みを浮かべる。

ビビ「ハムウ・・・・・・・・」

勇華「ん…レロ…チュブ…ペロ…」

そして勇華に口付けして舌と舌をからめ合わせる。

ビリッ

勇華の黒シャツがビビによって破かれる。

そして豊満な胸がバインと露出し揺れた。

ビビ（…やっぱでかいなあ…こっちも大きくなってるとけど敗北感あるな…）

勇華の胸を揉みながら少々敗北感を感じるビビ。だが柔らかい感触がくせになる。

勇華「……………（ニィ）」

ビビ「!?!」

勇華の口が弓を引いた。

その瞬間瞬間移動でもしたのかビビを背後から抱き締める形になった。

勇華「私を弄ぶのもかまわないけど、責められる気分はどうかしら？」

ビリッ

ビビ「っ!?!?／／／／」

上半身が露出してあわれもない姿になるビビ。

ビビはこう見えてプロポーションは高い方だ。

勇華「あらあら、かわいらしいからだね」

ビビ「ひぁっ!?!」

右手でビビの胸を、左手でビビの秘部を弄ぶ勇華。

ビビ（ああ…私弄ばれてる…でも気持ちい…もっとシテエ?）

表情はまるで快感を求めて甘える少女である。

勇華（可愛らしい声を出しちゃって?）

クチュツ、又チュ、又チャ

勇華（でも、それも悪くないかな?）

ビビ「アアツ、ハアア…?」

嬌声をあげるビビに笑う勇華。

ビビ「キモチイイヨ?…モットホシイヨ?」

子供のようになだるビビ。

ビビ「くれなかったら…コウシチャウゾ?」

ペロツ、又チャ、ペチャ

勇華「ハツ…ウン!」

振り返ってしゃがんで勇華の秘部を舐めてくる。

勇華「ハア、ハウツ！・・・気持ちいい・・・」

勇華は反撃にビビの首筋を舐める。

ビビはゾクツと体を震わせた。

勇華「もっと激しくやってみましょう？」

ビビ「ム、アム、アム、ヂュウウ！」

勇華「ハア、ハア、赤ちゃんみたいにすっっちゃって？」

秘部同士をあわせながらビビがまるで赤ちゃんのように勇華の胸を吸っている。

しかも動く度につれて秘部からの刺激がくる。

ビビ「アム、ン、ン、プハ、ハフウ？ノノノノノ」

勇華「あ、アン？フフフ？」

この後もビビが勇華の胸を吸ったり、勇華がビビの胸を揉み解したり、ビビが勇華の体を嘗め回したり、勇華がビビの秘部をもてあそんだり、そして、

ビビ「ハア、ハア、アハ、アハハハハ？？」

勇華「ハアア、エヘヘ？アアア？ハウ？？？」

勇華がビビにピストンされている。

一応言えば勇華が受けてビビが攻めの状態だ。

ビビ（キモチイイ・・・コマデキモイイノハジメテ???・・・  
モット・・・モットホシイ・・・モットワタシニ・・・）

狂った獣のように勇華をもてあそぶビビ。

勇華「フフツ、今度は私よ?」

体勢が逆になった。

勇華が攻めでビビが受けの形に。

勇華「それに、あなたにはこれがはじめて?」

勇華は自分の秘部をいじった後、そこからアレが生えてきた。

（言っておくがこれは魔法で作られています）

ビビ「・・・すごく・・・おつきいですノノノノ」

アレを見た瞬間心の…魂の奥からドクンツ!と跳ね上がった。

勇華「いくわ、よ!」

ブチブチブチ!

ビビ「イ、アツ!」

勇華のアレがビビの秘部には言った瞬間何かが破れる音が聞こえた。



勇華「あら？初めてなの？」

ビビ「ここに来る前に…ハアハア…なのはちゃんと…犯ってたから」

勇華「そう、なら問題ないわね」

ビビ「ッ！！ハアアアアア！！！！！！！！」

勇華が動けばビビがびくりと反応する。

勇華「フフ、フツ！ハッ！フツ！」

ビビ「ああ？！アアアン！！ヒギイ！ラメエエ！！」

受けられながらも足で巻きつくビビ。

…つーか大丈夫だよな？ぎりぎりセーフな気がすると思うが…。

勇華「どうする？このまま出す？」

ビビ「出して、一思いに出して！！！！」

ズンズンと腰を動かす勇華が問い、ビビが言った。

勇華「フフツ、喰らいなさい！」

ビビ「ッア！？アアアアアアアア！！！！」

勇華が中に出して、ビビの体がびくりと跳ね上がる。

ビビの意識が朦朧としている。

勇華「ウフフ、このまま終わりだとは思わない事ね」

ビビ「エ？？？？」

にっこり笑う勇華を見てビビはまたするのかと驚き半分うれしさ半

分の顔になる。

勇華「まだいくわよ？フツ、フツ！」

ビビ「ハイ・・・ウンツ！ハウツ！ハムウツ！！??」

勇華は腰を動かしながら、ビビは勇華の胸を吸いながら続いていた。

しかし縛られていたはずのヤルオはそこにいなかった。

ヤルオ（今回はかりは多めに見てやるおwwwwww。けど女の子を征服するのはこのヤルオだおwwwwww）

バインドから逃れたヤルオは自室に戻ってこんな事を思っている。

ヤルオ（けど今発情しようとした僕のジョイスティックがすでにびんびん状態だおwwwwww。自分でもびっくりするほどびんびんだおwwwwww。このびんびんを誰か受け止めるやつは・・・）

???「お呼びですかヤルオ様？」

???「ヤルオちゃん??」

ヤルオ「・・・計ったかのようなタイミングで登場だおwwwwww」

考え込んでいると、赤と緑と青の少女達と、ピンク色の髪のナイスバディな女性が現れた。

ヤルオ「親衛隊は分かるけどママンまでくるなんて予想外だおwww

www」

ママン？「だつて、ヤルオちゃんそれ系のことで困ったらママが処理するんだもん」

赤い親衛隊「ヤルオ様、このヤルオ様親衛隊一番・タマネがやりますから」

緑の親衛隊「いやいや、リリンが一番ですよね？」

青の親衛隊「レムナが一番だよ」

ママン？「3人ともだめよ、マナちゃんがヤルオちゃんの相手するから」

ヤルオの母兼ママンこと恵紹マナと、赤い髪の少女タマネ、緑の髪の少女リリン、青い髪の少女レムナがヤルオに対して口げんかした。

ヤルオ「・・・しかたないおwww。分身の術！」

ぼーん！

ヤルオはため息をついて分身の術で4人になった。

ヤルオ×4「これで文句ないおwww？」

親衛隊+マナ「あ、できてたんだっ・・・」

いまさら思い出したかのように言う4人。

泣いていいかwww？

ヤルオ「ま、それはともかく、はじめるおwww。・・・ジユル」

親衛隊+マナ「・・・(ドキドキ)」

獣の目で見るヤルオと、それをスタンバイオーケイでいる変態共。

ヤルオ「とお~~~~!!」

変態共「キヤアア~~~~!!」

ルパンダイブで襲われる変態共。

タマネは胸を、リリンは秘部を、レムラはキスを、マナはピストンでヤルオからの快感を覚える。

・・・ここから先は省かさせていただきます。

変態共「オイイイイ!! ## #」

別のところでは、

レーティア「ハアハアハア??ギルシア、もっと突いてええ!??」

レーティアとギルシアが甘〜い夜をすごしていた。

リアスとイツセーサイド

(自主規制) (ま、レーティアたちと同じと思えばいい)

ジャンヌ、ナリア、タバネサイド

ジャンヌ、ナリア、タバネ「ハア・・・ハア・・・今度の新作が楽しみだ・・・」

とジャンヌはコスプレの裁縫を、ナリアはエロ本を、タバネは新兵器を作っていた（読んでいた）。

翌日

いつも通りの朝を迎えた起動六課。  
・・・なんだが、

グレイ「おい・・・何がどうなったらそんな姿になるんだ？」

グレイが呆れた顔でビビを見た。

なんとビビの姿がなのは達とほぼ同じ位に成長していたのだ。

出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいるまさに美女と呼ぶに相応しい。

見た目の年齢は20歳程度あたりだろう。

ビビ「いや、実は勇華さんとやり合ってたからだがどんどん成長しちゃってさ」 ^ ^ ^ ^ 「」

銀時「つかゲストキャラ変わっちゃっていいのか！？リインと読者から苦情が来てこの小説消されるぞ！？」

頭をかくビビと頭を抱える銀時。

そこはリイーンさんに聞いてみるしかないな……。でも大丈夫だと思う、ケンさんとここにマイティ真拳使いがいるし……。あそこにシャルもいるし……。

まあだめならだめで編集するけども……。

ビビ「そんなわけで、グレートビビちゃんさんじょじょう！」（ハ

ハ）「

グレイ「調子に乗るな」

ゴツンッ！

ビビ「イッタ~~~~イ!!」（>「<）「

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!」

勇華「は〜い、今日のアシスタントは神道勇華です」

銀八「うし、んじゃペンネーム『鳴神 ソラ』さんから始めるぞ。  
『ルイージ』新しい人が出たね」

マリオ「ってか師匠の知り合い出た!？」

フォックス「驚いたな」

スネーク「と言っかはぐれな…」

銀次「凄いね能力も」

冥王「なの」

マリオ「メインメンバーと転生者達に質問『俺の師匠であるジルバについてどう思う?』」

ソロ「俺から真王に質問『転生者の名前は自力で考えたり、漫画の参考にしてるのか?』」

ネス「百合な人達に質問『作者の書いてる龍騎の小説に出る女の子達についてどう思う?』」

次回を楽しみにしてます 『最初のはみんなチートすぎるとか規格外だな・・・とか言ってたぞ』

真王「2つ目ですが、そのとおりです。漫画と自分の想像力で作ってます」

ビビ「ほほう？かわいい子達だね」

ナリア「ハアハア・・・」

ジャンヌ「どんな服なら似合うかな」

真王「一人危ない事言ってる気がしますが無視しろ。『鳴神 ソラ』さん、廊下にたつてなさい」

勇華「えっと、次はペンネーム『月光閃火』さんからの質問よ。『ども…月光閃火だ。（鼻血未だに噴き出し中）』

輝刃「とりあえず…鼻血を止めておけ閃火…（汗）。」

そうしたいけど…止まんないんだよね…（汗）。（鼻血未だに噴き出し中）あ…質問…いいかな？まずは俺から…。

1・勇華に質問…正直言つて、そのグラマラスボディで困った事はあるんか？（鼻血未だに噴き出し中）

輝刃「直球ストレートでそれを言うか…（汗）。というか…閃火が前にメッセージで投稿したオリキャラは、勇華のあのグラマラスボディに耐えられるのか？」

ハハハ…多分、ギリギリで耐えきるんじゃないかな？…あ、鼻血噴射が止まった…。（そういつて、顔面蒼白で鼻に付いた血をティッシュで拭く）

輝刃「……………（汗）。次は俺からだ。」



2・銀時に質問…というかアドバイスだ。自分のバリアジャケットに不満を持っているようだが、そういうならお前は『これはゾンビですか?』の主人公の変身した姿を見てもそう思えるか?

八八八…確かに、その作品の主人公ってヒロインの女の娘から素質を丸々吸収しちゃったから変身せざるを得なくなって、その変身した姿が…完全に女物の服装だったもんな…(汗)。(顔面蒼白でフラフラになりつつも、そう解説する(汗))

輝刃「…大丈夫なのか閃火(汗)?」

アハハ…大丈夫大丈夫…夫…。(そういつて、そのまま仰向けでぶっ倒れる)

輝刃「オイオイ…無理しやがって…」。(そう言いながら、閃火を介抱し始める(汗))『うんそうね』、しいて言えば目を血走った人間達が襲いにくる事かしらね」

銀八「やっぱ狙われるんかい!!って人間達って!?!」

真王「男女問わずの事だ」

銀八「マジかよ!!…と次!」

銀時「ブハハハハハ!!オメエのほうがすっげえ恥ずかしいコスプレだなブハハハハハ!!」

真王「では『月光閃火』さん、病院行ってください。次はペンネーム『リイーン』さんだ。『どうも!!!更新、お疲れ様です!!!」

神「……………なあ、なんで俺様、動いてないわけ？」

そつえば、一度も攻撃という行動をしてませんよね

神「なんか、悲しいかな……………」

つていうか、動いたら次元震が発生しかねないかと

神「それくらいに加減はするさ。ただ……………未だに活躍という活躍が……………」

きつと来ますよ……………多分

神「多分かよ……………」

では！！次回も楽しみにしておりますので、執筆、がんばってください！！失礼します！！！！

神「はぐらかすな……………」

つといますか、質問は無いんですか？

神「いや、特にない。お前は？」

そうですね……………なら、一つ

・真王様に質問。もし、神以上の存在がいるとしたら、それはなんだと思いますか？ そんなモノは無い。という答えは無しでお願いします

神「……………つまり、神を超越した存在。ってことか」

私は、○○か××だと思いますね。因みに、どちらも漢字二文字です

神「さて、なんて答えがくるんだろな？」  
神以上の存在ですか？  
・超魔王神ですかね」

銀八「何だよ超魔王神って!？」

勇華「超魔王の神様の事よ。『リイーン』さん、廊下にたつてなさい。次はペンネーム『黒龍』さんよ。『銀時』なんだありや!？完全無欠のチートじゃねえか!！」

黒龍「相変わらず新キャラ引つ切り無しに登場しますね」

ソラ「良く捌けるな」

銀時「つつか、あつちの俺のデバイスがパワーアップしたのは良いんだけどよ、結局コスプレなんだな……………」

黒龍「それがデュフォでしょ」

銀時「納得いかねえ……………」

ソラ「それで、今回の質問は？」

黒龍「今回はこれです」

1・勇斗に質問。あなたは負けた事がありますか？とりあえずジャンルは問いません。

2・勇斗に質問。あなたは何のために戦いますか？

3・勇斗に質問。戦ってみたい奴とかいますか？

黒龍「今回はここまでです」

銀時「なんでもよ。最近黒龍の奴、質問するネタがなくなってきているらしいぜ」

ソラ「随分したからな……」『勇斗の質問ね』

勇斗「そうだな。まず俺に敗北というものはなかったな。戦う理由は真の幸せのために。相手なら何でもいいが」

勇華「だそうよ。『黒龍』さん、更新がんばってね」

真王「最後だ。ペンネーム『ウィンド』さん。『真王さんに質問とお願い。』

私もフォレストページと言うサイトでなのは小説を書いています。嫌でなければコラボを考えてくれませんか？

質問は私のかいている小説の主人公達と銀さん達を戦わせたなら勝てると思いますか？主人公の中で強い方を選びました。

リリス・ハートネット（オリヴィエの恋人でクラウドの親友。ベルカ時代最強の剣士）

メア（ファントムブレイカーと呼ばれる集団中最強。次元世界を消滅させる程の力をもつ。主人公中最強？）

エール、コヨリ（ヒロイン）（転生者。しかし実態はエールは最高神と悪魔の間に生まれた半神半魔でコヨリは冥王から生まれた。主人公中ずば抜けて強い）

セリス（デビルメイクライとのクロス。ダンテの相棒でダンテと同等、それ以上の剣技と銃技をもつ）

こんな感じですよ。ちなみにデビルメイクライの方はまだかいておらず予定です。返答お願いいたします。『メアは難しいですがそれ以外は勝てると思いますよ？あ、エールとコヨリはどうか・・・？』  
『ウインド』さん、なのは更新ガンバです」

勇華「えっと、次回はガレーナがアシストよ。じゃあね」

裏第二訓：R - 15 ってエロゲロ用語が無ければいい（後書き）

真王「今回は次章『ゲーム祭編』のスタートです！」

ガレーナ「次回『祭りの準備は初めにやっとけ』テイクオフだ」

第八十六訓：祭りの準備は初めにやっつけ（前書き）

真王「やってきました！『ゲーム祭編』！銀時達がゲーム業界へ観  
光します！」

ガレーナ「『銀女神鎮魂歌』始めるぞ」

## 第八十六訓：祭りの準備は初めにやっとけ

### 機動六課

今日も平和な一日。

そこに、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベールが何やらそわそわしている。

ネプテューヌ「イースンまだ？」

イストワール「もうちょっと待っててください」――」

イストワールがトンテンカンと何やら装置を作っている。

ネプテューヌはその装置が完成するのを待っているようだ。  
そして、

イストワール「ふう、やっとできました」――」

装置が完成した。

ネプテューヌ「ホント！？これなら間に合うね！」

ノワール「ホントね。出来なかったらどうなるかと冷や冷やしたわ」

ブラン「帰ったら準備……」

ベール「帰ったら忙しくなりそうですわ……」

ネプテューヌ達も出来た事に安心したようだ。

コンパ「良かったです」

アイエフ「そうね」





イストワールのイラついたことでほとんどがああ、そうかと呟いた。なのは「で、ネプちゃんたちはその転送装置で何処行こうとしたの？」

ネプテューヌ「さっき言ったようにゲーム業界だよ。そして開催されるゲーム祭の代表として出席するんだよ」

全員「ゲーム祭？」

なのはが聞くとネプテューヌが言う。  
そしてこの場にいる全員が首をかしげる。

ノワール「数年に一度行われるお祭りよ」

ベール「さまざまな大陸の人たちが集まってワイワイですわ」

ブラン「イベントたくさんあるわ」

ネプテューヌ「あ、銀さん達も参加する？楽しいよ？」

銀時達はしばらく考え、そして行くことに決めた。

行くメンバーは銀時、新八、神楽、桂、エリザベス、月詠、九兵衛、辰馬、源外、猿飛、なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリード、ヴィヴィオ、プリニー（ヴィヴィオ護衛のため）、ユーノ、スカリエッティ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン、セツテ、デイエチ、ノーヴェ、ウエンディ、オットー、デイド、ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、コンパ、アイエフ、イストワール、リリス、ミーニャ、アルラ、グレイ、ピ

ビ、神、レーティア、ジャンヌ、シャル、ギルシア、リアス、イツー、カイク、アンヘル、レオン、ユウカ、ナリア、レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくら、タバネ、ガレーナ、レシア、ヤルオ、ルシアス、ルーシア、アルテス、チフユ、勇華である。

イストワール「それではみなさん、行きますよ？」

ほとんど「お〜〜!!！」

レオン「いつでもいいぞ」

チフユ「監視しておくか…」

ユウカ「ウフフフ…」

ガレーナ「早くしろ」

イストワールが聞くと全員が答える。

そして装置が正常に作動し、ネプテューヌ達は転移した。

ゲーム業界・プラネテューヌ

IBGMプラネテューヌby超次元ゲームネプテューヌ  
(Hyperdimension Neptunia - Plan  
eptune's Theme)

シュンツ!!

イストワール「着きました。ゲーム業界です」

誰もいない広場でイストワールドが言った。

銀時「ココが…」

神楽「うお~~~~!! 凄いアル!!」

桂「なんと…」

なのは「すごい…」

スバル「ミッドチルダと負けてないね…」

エリオ「た、たしかに…」

スカリエツティ「これはたまげたよ」

リリス「ココが母さん達の？」

ビビ「な、なんて未来都市!？」

神「眩しいな…」

ジャンヌ「凄いとこだね…」

レオン「ほう?」

レイン「ミッドよりも進んでねえか？」

咲夜「わあ~~~~」

さくら「ミッドよりすごいかも？」

タバネ「こ、ここの科学力は一体？」

勇華「へえ〜?」

元々ゲーム業界出身であるネプテューヌ達以外は驚きの声をあげていた。

特にミッドチルダよりも未来が進んだみたいな未来世界の都市・プラネテューヌを見て。

ネプテューヌ「こここそが、私の管轄であるプラネテューヌだよ!」

自慢げに鼻を伸ばすネプテューヌ。

銀時「え?」

スバル「ネプちゃんがここを？」

神楽「ムリムリネ、こんなガキンチョが出来るわけねーだろ」

銀時とスバルとほとんどの人は疑問に思い、神楽はありえないと言  
い張る。

（転生者のほとんどは知っています）

ネプテューヌ「ガキンチョって、人のこと言えないでしょ！・・・  
ところで銀さん、私達がどんな人だったか分かる？」

ネプテューヌは神楽に突っ込んだ後、銀時に問う。

銀時「え？そりゃ年増を超えたババ……」

しばらく待て。

ネプテューヌ「で、私達がどんなのだったか覚えてる？（血が付い  
てる）」

銀時（だった物）をしり目にネプテューヌ達は血だらけなまま黒い  
笑顔で問う。

なのは達は今見た出来事に青ざめる。

唯一平気なのはレオン、ガレーナ、勇華だけ。

レオン「確か守護女神だったか？」

ネプテューヌ「そ！その代表として出席するんだよ」

レオンが言うとネプテューヌが答える。

「???」「譲ちゃん譲ちゃん、俺達と一緒に遊ぼうよ」

「???」「イヤ、離してください！」

すると何処からか声が聞こえる。

聞こえた方へ向くと、数人の男達と一人の少女がいた。

ネプテューヌを少し成長させてロングな髪の少女がナンパされていた。

それを見たネプテューヌはダッシュで駆け出して、

ネプテューヌ「うちの妹になんしてくれとんじゃああああああ  
アアアア！！！！！！」

と男達にライダーキックを浴びせて気絶させた。

ナリア「ラ、ライダーキック！」

ジャンヌ「斬新だ…」

新八「何の!？」

ナリアとジャンヌは驚き、新八は突っ込んだ。

フェイト「っていうか、今妹って？」

ネプテューヌ「ネプギア、大丈夫？」

ネプギア「うん、もう大丈夫だよお姉ちゃん」

フェイトが今ネプテューヌが言ったことに疑問に思うと、ネプテューヌが少女・ネプギアに聞くとネプギアは大丈夫と答えた。

銀時「え？なにそれ？妹さん？」

といつの間にか復活した銀時が尋ねた。

ネプテューヌ「うんそうだよ。私の妹の…」

ネプギア「ネプギアって言います。初めまして」

ネプギアが礼儀正しくお辞儀をした。

スバル「あ、ど、どうもこちらこそ…」

スバルは釣られてお辞儀をする。

桂「はじめまして、桂です。好物はそばだ」

神楽、ヴィータ「だからいちいち好物を言うんじゃない（アル）！  
！！」

桂も挨拶する際好物も言ったので神楽とヴィータがど突きです。

ネプギア「だ、大丈夫ですか！？」

銀時「ツラはこんなじゃくたばらねえよ」

ネプギア「ツ、ツラ？」

桂「ツラじゃない桂だ！」

蹴り飛ばされた桂に心配するネプギア。

そして銀時がツラと言ったことに思わず復唱するが桂が訂正させる。

なのは「それにしても健気な性格しているね」

ネプギア「そうでしょうか？」

はやて「そやで。何処ぞのちっちゃくて食欲旺盛なのは大違いや」

ネプギア「…あの、そう言うのはお姉ちゃんの前では言わない方が…」

なのはがネプギアの性格に感心し、はやてが言っではならないことを口走った。

ポンポン

後ろから叩かれたはやては振り返ると、「ちよつと面貸せや」という感じに親指を後ろに向けて肩を持つネプテューヌが笑いながらはやてを見ていた。

はやては見た瞬間「あ、これうち死んだわ」という感じになった。

その後首根っこ捕まれてどこかへ連れて行かれました（ドナドナが空耳に聞こえる）。

ネプギア「アハハ…あ、ところでこのゲーム業界は初めてですよね？観光を兼ねて案内しましょうか？」

ノワール「そうね。銀時達にはもっとゲーム業界を知る必要があるかも」

ネプテューヌ「それじゃあさっそく行ってみようか」

新八「戻るの早!？」

イストワール「でしたらこれの出番ですね」

ネプギアは苦笑いをした後案内のことを聞くとノワール達は賛成する。

いつの間にか戻ってきたネプテューヌに新八が思わず突っ込んだ。



はやては半殺しな目にあつて戻ってきた。  
イストワールがなにかアイテムを出してきた。

イストワール「女神専用の『移動ワープ装置』です。それではラストーションへ」

イストワールがスイッチを押し、ネプギアを含めて銀時達はワープした。

ゲーム業界・ラストーション

IBGMラストーションby超次元ゲームネプテューヌ  
(Hyperdimension Neptunia - Last  
actions Theme)

銀時達は、機械や工場が多いところへワープした。

ノワール「ココが私の管轄・ラストーションよ」  
源外「こう言うオイルの匂いや機械の音が好きだな俺は」  
プリニー「ザ・メタリックって感じっスからね」

源外は光景を見て髭を触り、プリニーが同意する。  
すると、ノワールそっくりの少女がやってきた。

「????」お姉ちゃん帰ってくるなら連絡くらいくれればいいんじゃないの?」

ノワール「あゝ、ごめんユニ、ゲーム祭のことでそこに頭回ってなかったわ…」

少女はユニというノワールの妹らしい。

ユニ「…まあ確かに一週間後にゲーム祭が始まるからね」

ノワール「…ところでユニは挨拶しなくていいの?」

ユニ「え?ああ、この人たち?あたしはユニよ。とりあえずよろしくね」

ユニはしぶしぶ納得したあと、髪を翻してあいさつした。

ただその態度がネプギアと対称的にどうも強気気味のようだ。

「????」挨拶はいいですけどちゃんと仕事ぐらいは出来ればいいですね」

後ろから少年の声が聞こえた。

ユニはそれを聞いた時嫌そうな顔をした。

ユニ「…相変わらずビジネス系には厳しいわねケイ」

ケイ「情報収集はビジネスの基本です。僕は神宮寺ケイ、この教祖です」

呆れ半分に嫌み半分に言うユニに、ケイは軽く返す。

ティアナ「頭のお固いサポーターさんがいた者ね…」

スバル「アハハ、もし私の上司がこんな性格の人だったらまずあたしダウンするよ…」

ノーヴェ「右に同じくだ…」

ティアナは呆れた顔をして、スバルとノーヴェは冷や汗を流す。

ケイ「硬くて結構、それに頭の悪い人はビジネスに適しいですか  
らね。特にその白い男は尚更ですが…」

聞こえてたらしく、人に対しても厳しいケイ。  
ちなみに彼の言った白い男と言えば…。

銀時「おい、白いって俺のことか？」

ケイ「あなた以外おりません。それとも白い崩れパーマと呼ばばい  
いですか？」

銀時「おい崩れってなんだこの野郎。俺の頭がむしゃくしゃしてる  
からか？」

表情を変えずしれっとした態度で銀時は頭に青筋を立てる。

ユニ「いや、逆に白く濁ったもじゃヘッドの方が面白くない？」

ケイ「それもそうですね」

銀時「腹立つんだけどこいつら殴っていい!!?」

フェイト「ぎ、銀時押さえて…」

ユニが思いついたことを言うとケイが同意、銀時は完全に切れてフ  
ェイト達が抑え込む。

ユニ「まっそれはともかく、なにしに来たの？」

ノワール「ええ、グータラ天パに案内してるの」

銀時「オメーも何言ってるんだよ!!」

ノワールの言い分に銀時が突っ込む。

ケイ「確かにゲーム業界では見かけない人たちですね。・・・特にこの後の予定はありませんので行ってもいいですよ」

ユニ「そうなの？それならよかったわ。次に行く所は・・・」  
ネプギア「ルウィーにいこうと・・・」

ユニ「よし、ならば行きましょ」

ユニが強制的にどうこうすることになってルウィーへワープした。

ゲーム業界・ルウィー

2491

IBGMルウィーby超次元ゲームネプテューヌ  
(Hyperdimension Neptunia・Low  
e's Theme)

銀時達は、ファンタジックな雰囲気のある雪景色のところへワープした。

ブラン「ココがルウィー、私の場所・・・」

レーティア「へへ、っていうかさむっ!？」

ギルシア「いきいきし!..!」

レオン「む?ここは他のと違って寒いな・・・」

着いた瞬間身を凍えさせる気候に答える一同。

ブラン「このルウィーでは寒いのが普通…」

ヤルオ「そりゃ一面雪ばっかだおwww」

ヤルオが突っ込む。

???「あ！ホワイトハート様〜!!」

するとメガネをかけて赤い教師っぽい服を着た水色の髪の女性がやってきた。

ドテツ！

???「きゃっ!?!」

あ、こけた。

ブラン「・・・相変わらずドジね、ミナ」

ミナ「うう・・・すみません。・・・あ、私はここの教祖をやっております西沢ミナです！」

ブランは呆れた顔をしていい、ミナは謝ったあと挨拶した。

ブラン「ところでミナ、あの子たちは？」

ミナ「あ、それならあ〜〜!!やっぱりお姉ちゃんだ〜!!」  
「つてえ？」

遠くから少女の声が聞こえた。

ピンクの服に青いリボンをつけた少女がやってきて、その後ろを追

いかける青い服にピンクのリボンでピンクの少女より髪が短めの少女がやってきた。

???「帰ってくるんじゃないかと思ってたよ」

???「・・・おかえり」

ブラン「ただいま、ロム、ラム」

少女達とブランは言葉を交わした。

青い少女はロムでピンクの少女はラムである。

銀時「今度は双子かよ」

なのは「でもどっちも可愛いね」

ネプギア「あ、なのはさんもそう思いますか?」

ロムとラムを見ているなのはにネプギアが同意する。

ロム「・・・」

銀時「?何見てんだ?」

さつきからロムが銀時をじーとみている。

ロム「・・・幼女絡みになると不運な人?」

ラム「あゝ、それロリコン疑惑?オジサンそんな年してもう...」

銀時「ちっげえよ!!!俺はロリコンでもねえしおじさんでもねえ!!!せめてお兄さんって言えよ!!!もう一度言うが俺はロリコンじゃねえ!!!」

ロムの不名誉な言葉にラムがニヤニヤ笑いながら言うと、銀時は全力で否定する。

後ろをちらつと見ると・・・黒い殺意を抱くラバーズたちが。

ラム「お兄さんって、白髪みたいな頭してたら説得力無いよ？」  
ロム「というより最近閃光に飲まれるか鎌で切られるかの件でそう  
なってるの？」

ニヤニヤ笑うラムに同情の目で見るロム。

銀時はラムに対して怒りをあらわにする。

皆は銀時にごめんなさいと頭を下げた連呼する。  
なのはとフェイトは少し複雑な顔になる。

ベール「え〜と、最後が私の管轄であるリーンボックスですね」

ベールが言う。

心なしか少し困ったかのような顔をしている。

それに気付かず、リーンボックスへワープした。

ロムとラムも一緒に着いてきた。

ゲーム業界・リーンボックス

IBGMリーンボックスby超次元ゲームネプテューヌ  
(Hyperdimension Neptunia - Lean  
boxes Theme)

緑いっぱい洋風的な町並みを持つリーンボックスへ着いた一同。

ヴィヴィオ「わあ、緑がいつぱい！」

プリニー「ホントツス。ここは豊かさが伊達じゃないかんじッス」

ヴィヴィオはリーンボックスの風景に感動し、プリニーは比較していた。

銀時達も自然豊かな場所に感動をしている。

ベール「これが、リーンボックスたる象徴の一つですわ」

???「そしてそのリーンボックスを納めるのはベールお姉様だけですの！」

ベールの後に誰かが言ってきた。

ベール「・・・チカは相変わらずですわね」

チカ「当たり前です。全てにおいて素晴らしいのはお姉様！それだけですよ！」

ベールは苦笑いを浮かべてリーンボックス教祖・箱崎チカは胸を張る。

チカ「ところで、見かけない人たちですけど祭りに参加するのはの？」

銀時「まあな」

なのは「私達ねぶちゃんに誘われたの」

ちらつと銀時達を見たチカが聞くと銀時達は応える。

チカ「そうですか。ゲーム祭はこのリーンボックスで一週間後に行われますの。その間は観光でもしないさいな」



銀時「そうするぜ」

銀時達はその間ゲーム業界を観光していった。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

ガレーナ「あしすとは余がやることになった。全力で相手になろう」

銀八「いいけどやり過ぎるなよな？んじゃペンネーム『鳴神 ソラ』  
さんからだ。『ルイージ』ちよおおおおおっお！？」

スネーク「ある意味…凄いです…」

フォックス「よくやるよだな…」

ネス「マリオに見せられないね。」 アイマスク付けてます。

リュカ「／／／」 同じく。

冥王「ヤルオにディバインバズーカをしなくなって来たの」

クツパ「落ち着くのだ。」

ルイージ「此処にいないけど兄さんから転生者組みに質問『普段は何してるんだ?』…だって」

スネーク「百合組に質問『女の子同士で赤ちゃんが出来ると言う薬を内のドクターが内の所の百合達におど…お願いされて作ってあるんだが…欲しいか?』」

クツパ「(それやばくないか?) 我輩は真王に質問『何でヤルオを作ったのだ?』」

次回を楽しみにしてます 『最初は長いから2つ目と3つ目を言うか』

百合組「全力でほしい!!」

真王「それでちゃっかりもらっちゃってるな…。ヤルオの作った理由はキーワードで『エロ主』と検索したらわかると思いますよ」

グレイ「一人で本を読んだぞ?」

ビビ「ナリアちゃんとジャンヌちゃんと遊んでた」

レーティア「ギルシアといちゃついていたわ？」

ジャンヌ「3人でカードゲームだよ」

シャル「お腹空いてたから食べまくってたわ」

ギルシア「俺は分かるだろ？」

リアス「ミッドでうろつろしてたわね」

イツセー「俺は姉さんと一緒に」

レオン「私はガレーナと対決をしていたな」

ユウカ「人を屈服させる案を考えてたわ」

ナリア「私もジャンヌちゃんと同じ」

タバネ「新作づくりだよ」

ガレーナ「レオンとの戦いだ」

レシア「暇なので六課を掃除していました。隅々まで」

ヤルオ「女の子とのランデブーな案を・・・」

アルテス「ユウカ様にどう攻められるかシミュレーションしてましわ／／／／／」

チフユルシアスとルーシア「馬鹿共の指導だ」

真王「では『鳴神 ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

ガレーナ「次は確かレオンがお世話になる『ケン』だな？『統夜』  
凄いな……」

マイティ真拳の使い手の零斗は龍の骨さんから許可を貰っています  
から……大丈夫ですよ。

統夜「ヤルオって完全なる変態だよ……」

アドヴァンスフォンでインターネットを始めた。

自分的に大丈夫ですよ。

遊輔「後ろからシャルさんが抱きついたら面白そうだな。どんなり  
アクションを見せてくれるか……」

達哉「同感だ……タバネさんに質問です。『俺達のデバイスの中  
で興味のあるデバイスはありますか？』」だそうだ」

タバネ「それはもちろん、トウちゃんの新たに持つてるデバイスだ  
よ」

真王「相変わらず愛称で呼ぶな。それに統夜でトウちゃんか？」

ガレーナ「では『ケン』よ。廊下に立て。次はペンネーム『月光閃  
火』だ。『ども』：月光閃火だ。（そう言いながら、血色の良すぎる  
顔でカラカラと笑う）

輝刃「…もう大丈夫なのか？」

ああ…もうすっかり回復したよ。ついでに耐性も付いたから、ユウカのグラマラスボディにもカラカラと対応出来るぜ…。

輝刃「そ…そうか…（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・ユウカ殿に質問：前の感想書きでの出来事からすっかり貴公に對して耐性が付いたのだが、それでも骨抜きにする自信はあるのか？

ハハハ…もうガッツリ来い！って感じかな。次は俺からだ。

2・転生者メンバーに質問：リリナの勢・銀魂勢・ネプテュー又達それぞれのキャラの中で『この人とは戦いたくない』って思えるのは誰だ？リリナの勢・銀魂勢・ネプテュー又達それぞれのくくりの中で一人ずつ選んでね？あ…それと、『愛しているから』とかの理由で選ぶのは無しだよ？

輝刃「なるほど…確かに、そういうのを理由にして逃げるかもしれないからな…。」『だそうだが』

勇華「あら？だったらあなたに胸挟みでもする？」

真王「そこまですると死ぬよ？次だ」

グレイ「シグナムだ。めんどくさい」

ビビ「出来ればなのはちゃん達とか傷つけないけど…」

レーティア「私は特に？」

ジャンヌ「ないな」

シャル「いないよ？」

ギルシア「ヴィヴィオちゃんだな」

リアス「ネプテューヌかしら？」

イツセイ「俺は…ないな」

レオン「私はいない」

ユウカ「どんな奴でも相手になりますわ」

ナリア「なのはちゃんかな？だって魔王だし」

タバネ「沖田つて人かな？」

ガレーナ「なぜ怖がることがある？」

レシア「銀時とは戦う気はありません」

ヤルオ「ヴィヴィオちゃんだなWWW」

アルテス「男共全般ですわ」

チフユ「いないが？」

ガレーナ「では『月光閃火』よ。廊下に立て」

真王「続いて、ペンネーム『支配者』さんから。『勇華とビビのヒロシーンがなんか……』って思っちゃいましたね。

質問です。

皆さんに質問です。

お漏らし女神ブランとエロオタク副長土方を如何思いますか？（黒笑）

沖田に質問

自分と気の合いそうな転生者は誰だと思ってますか？

転生者達に質問

自分達の中で一番変態な転生者は誰のつもりですか？（黒笑）『では』

全員「だからそれ喧嘩売るようなことは止める！」

沖田「ユウカでサア、一緒に土方さんをぶっ殺しましょうぜ？」

ユウカ「殺すよりも絞めあげた方が効果的ですけど？」

真王「何の話だ？つぎ」

転生者組「ヤルオ」





銀時「それで、今回は質問のネタとかあるのか？」

黒龍「ありますよ。今回の話で思いついたホットな質問です」

1・真王さんに質問です。今度は銀さんと銀さんラバーズのエロシーンを書いたらどうですか？読者受けが良いと思いますよ？

2・それでもし書くのなら、銀さんが襲われる形になると俺的には面白いです（笑）

3・ヤルオに惚れている人たちに聞きます。なんでヤルオが好きなんですか？

銀時「おいおいいいいいいい！！！何とんでもねえ質問してんだよ！！」

黒龍「いや、主人公とヒロイン達のエロシーンは定番でしょ」

銀時「いや、それ違くない？」『気が向いたらやります。そしてヤルオラバーズ、答えなさい』

タマネ「私は昔変態に絡まれたところを助けられて惚れました」

リリン「一緒にクエストやった時からよ」

レムナ「一目ぼれかな」

マナ「まだ幼かったヤルオちゃんがよく私のミルクを吸ってたから私くせになっちゃったの？」

真王「だそうです。『黒龍』さん、そつちでソラとラバーズの微工ロシーンでも作ったら？」

ガレーナ「最後はペンネーム『きつと木の精だ』。『木の精だ』き……………き……………き（鼻を押さえて顔真っ赤）」

恭平「通訳すると”きつと木の精だです、ご無沙汰してます”といつてるぞ（素面）」

木の精だ「ゆ……………ゆ……………ユ（鼻を押さえて）ry」

こなた「通訳すると”勇華お姉さん工口過ぎます”だってさ（素面）」

木の精だ「……………あ……………あ……………（鼻を）ry

恭平「”後質問があります、忘れそうになりましたが最初のほうでなのはちゃんか、お姉さんに頂かれた様に見えるんですが実際どこまで行ったんですか？」

銀さんはそれについてどう思いますか？”と言っているな、うちの大将（素面）」

こなた「ンじゃ今回はこれぐらいで、ついでに私達が素面だったのは単なる慣れだよ！じゃね！」

恭平「俺達のオタク暦の長さを侮るなよ先生、これからも頑張ってくれ！（鼻を押さえてぐつたりしているきつと木の精だを抱えて退出）」

勇華「ちよつとやった程度だけど？」

真王「ちよつとでか？銀時はそんなこと知りません。『きつと木の精だ』さん、廊下に立ってティッシュ詰めて」

ガレーナ「ではここまでだ。次はレシアがやるらしい。またの」

真王「よし、バトン公開でもするか」

『部位破壊バトン』

銀凧さんから頂きました。クイーンズゲイトのネタのようです。まあ見て行ってください！！

1：キャラは何でもいい（特に女性が一番ありがたいことが…）

2：破壊キャラを考えて…

破壊者：罪男族（白いふんどしと罪と書かれた布のかぶり物（見るための穴がある）しか身につけていない怪人の一種。持つ武器は斧でレベルはMAX）

セリフ：壊れたとこ

パープルハート（ネプテューヌ）

頭：っあー！（プロセスサユニットヘッドが壊れる）

腕：イタッ！やったわね！（両手が破れて睨む）

胸：キヤアアアアア！！！！！！！（胸が露出して思わず隠す）

腰：くっ！この…！！（腰あたりの布が破れる。見えそうで見えないように…）

脚：うっ！（プロセスユニットフットが壊れる。足部の布が破れる）

全破壊：………覚えてなさいよ…！（衣装がほぼ破れてへたり込んで涙目で睨む。あの部分が見えそうで見えないように…）

レーティア

頭：きゃっ！！（頭がかすれた）

腕：うっ！（手にキズを追う）

胸：キヤア！！！！／／／／（胸が露出して思わず隠す）

腰：はわっ！？見ないでえ…！！（腰あたりの布が破れる。見えそうで見えないように…）

脚：いったあ…（足が破れて転げる）

全破壊：うう…みつともなくなっちゃった…（衣装がほぼ破れてへたり込んで涙目。あの部分が見えそうで見えないように…）

神道勇華

頭：いつ！（頭がかすれる）

腕：痛いわね…（両手の布が破れる。ついでにけが）

胸：きゃふん！（胸が露出して胸がバルンと揺れる）

腰：ああん！（腰あたりの布が破れる。パンツが見えそうで見えないように…）

脚：いった〜い！（足が破れてすっ転ぶ）

全破壊：あ〜ん、やられちゃった〜・・・（衣装がほぼ破れてへたり込む。あの部分が見えそうで見えないように…）

ケン 銀凧 エターナル 風花 天城 鳴神 ソラ 白騎士君 支配者 烈火竜 リーン あんぎゃーす 黒龍 黒神 さんでいいです。

あとはフリー。』

真王「それではまた」

第八十六訓：祭りの準備は初めにやっつけ（後書き）

真王「先に言っておきますがMK2出てないです。なので私が脳内で想像して出しました。でも発売してプレイ後に編集しようと思いません」

レシア「次回『人間とアンドロイドは似てて違う』テイクオフです」

第八十七訓：人間とアンドロイドは似てて違う（前書き）

真王「祭りの準備だ」

## 第八十七訓：人間とアンドロイドは似てて違う

プラネテューヌのとある工場。

そこは『アンドロイド』と呼ばれる人型の機械からくり、が山の用に多い。しかも完全な人間と思えるほどの人間その者の外見であった。

そんな場所に銀時、新八、神楽、なのは、フェイト、スバル、ティアナ、ネプギア、ユニ、ロム、ラム、月詠、源外、スカリエツティはある依頼人のお手伝いをしている。

??? 「銀さん、そこはあの机に追いついてください」

銀時 「ん? …… ああ、ここか? 」

と銀時は人間の腕らしきアンドロイドの機械腕を机に置く。

そして銀時は、アンドロイドを調整しているボサボサの黒髪でゴールがついててタオルを巻いている発明家である若き青年に近づく。実はこの青年こそが今回の依頼人である、キリア・ファンテである。

キリア 「皆さん、今日は依頼とは言えこうも多くの手が借りられて助かりました」

源外 「なあに！ お前さんのアンドロイドと言う人型機械技術からくりに興味をもってなあ。せっかくだから手伝っている訳よ」

源外は若き発明家作り上げたとは思えない完成度の高い機械技術からくりを持つキリアに強い興味を持っていた。江戸一番の発明家としての意地があっても、優秀な若き発明家がいる事は嬉しくてたまらないようである。



スカリエツテイ「ここまで完成度の高いアンドロイドを作れるとは……君はただの発明家ではなさそうだね」

スカリエツテイも源外と同じく『プロジェクトF』と『タイプSK』とは違うが人間と思わせるほどのキリアのアンドロイド技術は啞然としていた。

それも戦闘機人の様な戦闘用ではなく、明日の祭り用の為に作り出している。

神楽「うほほーい！本物の人間ぽいヨ！」

ネプギア「私もこれまで性能なアンドロイドは初めてですよ。って神楽さん手伝ってください」

ラム「私達はここで見てるからいゝの。でもホント本物そっくりだ  
」  
ロム「（こくこく）」

銀時達がキリアの手伝いしているのに対して神楽とロムとラムは、手伝うと言うよりも見学して遊んでいるだけであった。

まだ小さな子供であるのか少年と少女のわくわく感を出しまくりであつた。

銀時「たくう……あいつ等は気楽で良いなあ、おい」

月詠「別に良からう、コレほどまでの機械技術で作られた機械、わ  
ちち等の世界でも滅多に見られぬ」

呆れる銀時に3人の無邪気さに微笑む月詠。

全く手伝わない3人の代わりに謝りだすフェイト。

フェイト「すみません、3人が全く……」

キリア「別に良いですし……いくらあの女神候補の人とは言えまだ

幼き子ですから、たまに無邪気に心が晴れさせた方があの3人のためですし」

迷惑がつていない所が、3人の喜ぶ姿を見て嬉しそうに笑うキリア。そこまで自分が作ったアンドロイドを気につてくれた事が凄く嬉しいようである。

スバル「でも神楽さんとエリオがはしゃぐのも分かるよ……だって機械技術だけでこんなにも完成度高く作れるなんて」

ティアナ「確かに……もう中には人間のように動いたり喋ったりする事ができるのがあると聞いてたけど……このアンドロイドを見てたらあり得るわ」

なのは「魔界にもアンドロイドがいたけどこっちも凄いね」

キリアの機械技術からくりの高さを、ここにあるアンドロイドを見て感心するスバルとティアナなのは。

源外やスカリエッティに認められるなら尚更である。

銀時「にしてもよお……こんなにも人間その者を機械技術からくりで作れるとは……どっかのポンコツとはおおち……」

ドカア！

銀時「が痛あ！」

新八、なのは、フェイト、スバル、ティアナ、ネプギア、月詠

『『（銀時）（銀さん）（兄さん）！？』』

突如、背後から源外作の三郎が銀時の後頭部を殴る。

源外と同様に、キリアの手伝いをしている様であったが……銀時の

暴言にムカついた様であった。

源外「馬鹿野朗め、確かにこの小僧の機械技術は評価できるが、わしの三郎だつてこの人造機械には負けておらぬわい。なあポンコツ」

ゴ！

源外「ぶはあ！」

三郎に殴られて倒れる源外。

スカリエツティ「てか君も言っているから源外君。いくらポンコツとは言え自分の作品にそれは」

ゴキーン！

スカリエツティ「なぶらあ！」

スカリエツティも三郎に殴られて吹飛ばされる。

ティアナ「アンタも言っているじゃないの！」

呆れてスカリエツティにツッコむティアナ。

フェイトはスカリエツティを見て……プロジェクトFのベースとなる基礎論理を構築し、自分を生み出した人物とは思えないと、苦笑して疑いだす。

ネプギア「そうですね。その子にポンコツなんて……あ」  
ラム「言っちゃってるし」

ネプギアは思わず口に出してしまつ。  
殴られると思いきや、

ペシッ

ネプギア「あいたつ！」

叩いただけだつた。

銀時「何この差!?!」

銀時は突っ込むがスルーである。

キリア「あははははは！本当に愉快な人達ですね」

月詠「いや……唯の馬鹿な連中なだけじゃ……」

楽しそうにと見えて笑うキリアに呆れだす月詠。

スバル「所でキリアさん、このアンドロイドってひょっとして武器の扱い方も出来るんですか？」

スバルの質問にキリアは、わずかだが少し真剣な表情になる。

しかしすぐに笑顔に切り替えて質問に答える。

キリア「勿論です！内部には『電杯<sup>でんはい</sup>』と呼ばれる特殊な機械技術で作られた超高速データ回収装置が付けられています……それを眼と脳の部分につけさせて瞬間的にデータを図って登録し、人間並に扱えられます」

スバル「凄いですね！」

そんな凄い技術で作られた事に、感動して喜ぶスバル。

フエイト「ですが……このアンドロイドには武器を扱っようには設定されていません」

キリア「そりゃそうですね」

ティアナ「このアンドロイドは戦う為じゃなく明日の祭りイベント用に作られたなら尚更よね」

明日始まる祭り。

それはゲーム業界で数年一回は行われる『ゲーム祭』。

女神たちに祝福を祝う祭りなので、プラネテューヌ、ラストイション、ルウィーの住人達（偶に異世界の住人）がやってくるのだ。

銀時「とりあえず、後は大丈夫か？」

キリア「はい、皆さんのお陰でほとんど完成しました……後は1人で最終メンテナンスをするだけです」

どうやら余裕で間に合ったようである。

神楽とロムとラムははしゃいでわくわくと明日の祭りを楽しみになってきた。

スバル「頑張ってください、キリアさん」

月詠「もし上手く行けば、主がミッドチルダの発明家と呼ばれる日も遠くなくなる」

応援するスバルと、キリアがプラネテューヌ一の発明家と呼ばれるのも遠くはないと確信する月詠。

2人に褒められて照れるキリア。

銀時「じゃあまたな」

フェイト「お祭り頑張ってください」

銀時とフェイトはそう言い、銀時達は全員この場を去る。

そしてそれぞれ別々の宿に向かって別れると、スカリエツティが源外に話し出す。

スカリエツティ「源外君、彼は大丈夫だろうか？」

源外「なあに、確かにまだ若者じゃが腕は確かな物じゃろ」

スカリエツティ「いやそうじゃない……確か彼はプラネテューヌ随一の天才発明家であるオルテラ・ファンテの一人息子で……オルテラは管理局に……」

スカリエツティがキリアの父の名を言い出すと、源外が深刻な表情を表す。

源外「スカリエツティよ……若者を成長させるコツはあ、嫌な事に縛られずに前に進ませるだけよ」

かつて、復讐心に取り付かれた自分を思い出して言い出す源外。

それを聞いたスカリエツティが「違うない」とフツと笑って同感する。

ネプギア「いやなことに縛られず……ですか」

建物の陰できいたネプギア。

ネプギア「ですが、あの人はまだ捕らわれているままですよ？」

キリアを思い出して顔を俯かせた。

次の日

ついに迎えたゲーム祭の日。

夜の賑やかな風景に誰もが満足そうに楽しんでいる。

その中には守護女神たるネプテューヌ達が出席していた。

中でもメインは天才発明家のキリアのアンドロイドによるカーニバルであった。

そんな中でリーンボックスの治安維持組織『リーンボックス特命課』と、機動六課がゲーム祭で事件を起こさないように要注意に警備しなければならぬ。

そんな中、フェイトとなのはは……

銀時「……で、2人だけなんで着物？」

と銀時は2人に対して言い出すが、同時に少し見惚れていた。

フェイトのは紫色の無数の金色の蝶が描かれている着物で、なのははピンク色で少し紅めの桜の花びらが書かれている着物である。

フェイト「だって……こうしたほうが警備しやすいし…… / / /」  
なのは「それに、銀さんと一緒にいたほうがやりやすいから…… / / /」

新八「完全にそっちが本命ですね……」





だが、機動六課は管理局の仕事が入って警備しなければならない。それは機動六課の同盟を結んだナンバーズも例外ではなかった。そこで2人だけが銀時と一緒に行動する権利を持ち、クジで決める事にした。

見事当たりを選んだのがフェイトとなのはであった。選ばれなかった者は歯を食いしばって悔やむだけであり、特に猿飛にいたっては血の涙を流している。

ギルシア「あんな奴にもてられる女っていつもあなののか？」  
レーティア「さあね、そんなことよりあそこ行きましょ」

たばこを吸いながら銀時達を見ているギルシア。  
そんな時レーティアがギルシアにくっついてどこかへ行く。  
ちなみにレーティアの姿は紫に桜の絵が描かれている浴衣だ。

そんな中新八とジャンヌ、咲夜とユーノ、リアスとイツセイが警備（という名のデート）をしていたとか。

それ以外は普通に祭りの中をうろついている。

桂「ふ、相変わらず銀時の罪深さが見えてくるな」  
はやて「そうやな、コレで更に増えたら面白いと言うのに」  
リン「そう言う問題ですか？」

桂とはやてはその様子を面白そうに言い出し、リンは不自然そうに苦笑する。

ちなみにはやての姿も、水色で緑色の燕の絵文字が書かれている着物を着ている。

フェイトとなのはと並べられる程の和風美女となっていた。

桂「では、我々も行く」

はやて「了解や さつき見つけた美味しいそば屋を見つけたから」

はやては桂の腕を抱いて、共に祭りを楽し…………… じゃなく周りの警備を開始する。

リン「行つてらっしやい」

エリザベス「2人とも楽しんでね」

リンとエリザベスは2人の背中を見守って手を振るう。

一方のヴィータはそんな2人を複雑そうに見る。

ヴィータ「たく、あいつ等機動六課の仕事を忘れてるんじゃないかねえか？」

と怠けている2人に呆れている。

しかし本音はどうして桂とはやてがあんなに仲が良いのか納得できなかった。

はやては家族の様な関係の為、大切な仲間。

桂は共に戦った仲間の1人であり、同時に好意を抱いている。

そんな2人の仲が最近徐々に良くなっていくのに、胸がもやもやしそうである。

タツマ「…………… ヴィータ、おんしはヅラと一緒に行かんで良えんか？」

そんなヴィータに辰馬が話します。

実は以外にも、ヴィータが桂に好意を抱いている事を一番最初に知ったのも辰馬であった。

ヴィータ「な…………… なななな何言っていやがる！？／＼／べっ別に私が……………」

辰馬「今日は祭りじゃき。楽しまな損ぜよ」

ヴィータ「いや、私達は警備の！」

辰馬「ほうか。じゃが、そんな為におまんは自分の想い伝えずにそのまま燻らし続けるんかの？それは辛いだけじゃぞ？」

辰馬の一言でヴィータはだんまりになる。

いくら2人の関係を知っても何もしないで終わるのは嫌である。しかし一体どうすれば良いのかヴィータには分からなかった。

辰馬「……とりあえず、もう少し積極的に行動してみるだけでもやってみたらどうじゃ」

ヴィータ「え？」

辰馬「恋を成就させるには少しでも好きな人の側におった方が良さじゃ。その方が効率上がるからの。じゃから……ヴィータ、おまんも少しでも良えからヅラの側におれ。おまん自身の為にもものう」

辰馬が笑いながらヴィータにそう言つと、ヴィータも辰馬の言う通りに桂となるべく一緒にいる事を決意する。

辰馬「言いたい事も言つたし……そこの綺麗なお姉さあ……ん！わしと一緒にこの祭りを楽しもうぜよ」

と辰馬が目の前に通ってきた美人な女性に飛びつこうとすると……

ドカァ！

ヴィータ「つーか、てめえの場合ただ女を見境なくナンパしてるだけじゃねえかアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

辰馬「あららあ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!」

額に青筋を浮かべて『グラーフアイゼン』で辰馬の頭を叩くヴィータ。

せつかくの彼の良い事言った雰囲気が台無しになってしまった。

シャマル「ちょ！……やりすぎだよヴィータちゃん！」

ザフィーラ「ヴィータ……気持ちは分かるが落ち着け……」

シャマルとザフィーラも、暴れだすヴィータを止める。

なんやかんやで機動六課の警備は全然薄かった。

しかし彼等はまだ気づいていなかった。

このゲーム祭でとんでもない事件が起こる事を。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!」

レシア「今回のアシスタントはレシア・エルダーがやります。正直この天パみたいな人と組むのは嫌ですが…」

銀八「殴るぞ!・・・ペンネーム『鳴神 ソラ』からだ。『バトン無理です!!m(´|`|)m』

マリオ「そりゃあ流石に女性のはな…」

ルイージ「(違うよ兄さん;)」

スネーク「(作者は血の雨を降るのを恐れて無理なんだ)」

フォックス「ネプギア出たな」

クッパ「他のメンバーもなのだ」

明久「祭りつてどんなのだろうね!」

ムツツリーニ「……………あっちの料理も興味深いから行きたい料理が趣味なので」

ギル「ぷっ!」

ソロ「面白そうだな!なあ!パーティに俺を追加させてくれないか?」

マリオ「後から参加は出来るのか?…転生者組みに質問『ギルについてどう思う?』」

フォックス「ネプギア達妹組みに質問『マリオについてどう思う?』」

ルイージ「銀さん達に質問『ソロについてどう思う?』」

次回を楽しみにしてます 『』

レシア「ギル?あのあの尖り鼻の雪だるまモドキのしゃべり方をする奴ですか?」

銀八「言い方ひどい!?次!」

ネプギア「お姉ちゃんが言った赤い配工管の人ってこの人なんだ...」

ユニ「あれで1キロメートル先に崖を渡れるって噂だけどホントなの?」

ラム「キノコが大好きなおじさんかな?」

ロム「...オオボケのおじさん?」 ラムからスーパーマリオくんを見て

銀時「あいつか?ソラの双子的な奴かと思ったな?」

銀八「そんなわけで『鳴神 ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

真王「それから参加は6人までなので参加できません。観客か応援としてなら出演できるかも?」

レシア「次だ。ペンネーム『ウインド』さんからの質問です。『ウインド』まさかネプギア達が出てくるとは……」

セレス「ネプギアってネプテューヌの妹だよな」

ウインド「ああ。ゲームはまだ出てないけどかうつもりだ」

セレス「ふん」

ウインド「さて、勇華に質問うちの小説の男の娘であるセレスをどう思う？」

セレス「俺からも。銀さんに質問。もし高杉がデバイスをてにいれて魔導師になつたらどう思う？」

勇華「そっちの私がやってるなら私もやっちゃうわ？」

銀時「高杉が魔道士にだと？ いやいやいや、ありえないって絶対……」

真王「可能性もあるんだぞ？ 『ウインド』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『月光閃火』さんからの質問だ。『ども…月光閃火だ。』

しかし…いやあ、食らった食らった…。(そういつて、ちよっぴり苦笑いをする)

輝刃「…どうやら、裏で食らったようだな…ユウカの『胸挟み』を…(汗)。大丈夫だったのか？」

ああ…結構ユウカちゃんの胸の感触は上々だったけど、後はのほほんと堪能させてもらいました (合掌)

輝刃「そ…そうか…(汗)。あ…質問…行くぞ？ まずは俺からだ。」

1・ネプテュー又達女神陣を除く銀さん達に質問：ネプテュー又達の世界に来た感想を言ってくれ。出来れば、何か裏話があると尚嬉しい…。

確かに、ネプテュー又達の世界って結構近未来的な感じだもんな…。次は俺からだ。

2・新八に質問：ネプテュー又達の世界の住人の中で『この人はついついつツコミを入れたくなってしまっうな…』なんて人、居る？

輝刃「確かに、ネプテュー又達の世界の住人ってネプテュー又達を含めて個性的なキャラがいっぱい居るからな…。これは新八もツツコミの連続で疲れそうだな…（汗）。」「『な、長い…、とりあえず答えようか』」

全員「なんでもありだなと思った」

新八「突っ込みどころが多いと言う人と言えばラムちゃんぐらいです」

ロム「ラムが大好きなの？」

新八「いやいやいやそんなんじゃないですって!!」

真王「またロリ疑惑フラグが…、『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

レシア「次はペンネーム『黒龍』だ。『黒龍』ついにネプテュー又達の故郷、ゲーム業界が登場ですね」



銀時「元々この小説はネプテューヌと銀魂とリリカルなのが基礎だからな。出てもおかしくないだろ」

ソラ「近未来か…」

黒龍「ブランの場所以外は住みやすそうですね」

銀時「ベールの所も住みにくそうだろ。頭固いクソガキいるし」

黒龍「あっちの銀さんかなりけなされてましたもんね」

銀時「たく、胸糞悪イ」

黒龍「ハハハ…じゃあ質問しますか」

1・マヨ方達を最近まったく見てないですけど、蒸発しましたか（黒笑）

2・女神四人に質問。あなた達の故郷ゲーム業界で最強の人は誰ですか？

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『あの黒集団は消えていないぞ？』

真王「彼女達の中で今のところ強いのはネプテューヌです。『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」

レシア「次だな。ペンネーム『亀鳥虎龍』だ。『銀さん、神楽、そして駄眼鏡に質問。』

僕の小説『銀魂ライダーデイケイド』では、仮面ライダーに変身できます。

嬉しいですか？

沖田に質問。

土方抹殺計画を建てたいなら、良い企画書があるんですが、見てください。

1・土方の食事だけこつそり毒を盛る。

2・土方に言われもない無実の罪を着せて、死刑にする。

3・土方の恥ずかしい写真をバラまく

ユウカと一緒に実行してみてください。『駄眼鏡とはなんだ？・・・  
ああ、あの新八という男か』

銀時「何がだよ！！何でコスプレなんだよ！！！」

神楽「お〜！かっこいいアルな！！！」

新八「駄目ガネ言っなこらああああああああ！！！！！」

真王「次だ」

ユウカ「3番ね。羞恥心を噴出させる方が苦しみがいがあるわ」

沖田「そりゃ盲点でしたあ」

土方「させるかこのやるオオオオオオオオ！！！！！」

真王「あゝあ、『亀鳥虎籠』さん、廊下に立ってなさい。最後、ペンネーム『黒神』さん。『質問します。』

ネプテューヌへ

リリカル銀魂ゲスト杯に参加して、他のリリカル銀魂メンバーとゲスト達の力量を見てどう思いましたか？  
その感想をお願いします。』」

ネプテューヌ「イヤホント個人的だけどみんな強いね。私も負けてられないよ」

真王「では『黒神』さん。廊下に立ってなさい。そしてネプテューヌを優勝させなさい」

レシア「次はあの変態馬鹿がやるな……」

ヤルオ「ヤルオっていつてほしいおwww」

真王「あとバトンです」

『ボッスンさんから貰いました夏・シチュエーションバトンです。』

このバトンのルールは

- 1、必ず二人でやること
- 2、夏に関係のあるもの（例、プール、海、夏祭りなど）
- 3、二つ以上すること
- 4、必ず一人にまわす（送り返し可）

こんな感じですよ。では始めます。

ジャンヌ×新八（肝試し）

ジャンヌ「なんだか怖いね新八君…（と言いながら密着している）」  
新八「そ、そうですね…（メツチャくつついてるんですけど!?？ア  
レが当たってるんですけど!??!）」

ガサガサ

銀時「悪い子はいねーかあああ!!!」 落ち武者スーツ

新八「って違うだろオオオオオオ!!!そのセリフナマハゲじゃね  
えか!!!怖さが吹っ飛んだわ!!!」

銀時「うるせえ!!!メガネのくせしていい彼女作りやがって!!!」  
ジャンヌ「銀さんだっていい彼女達が出来てるじゃん。ハーレムだ  
よ」

銀時「そんなことよりお前が地味のままできて欲しいんだよ!!!」  
新八「完全に悪意があるじゃないですか!!!」

銀時「うつせええええ!!!地味地味らしき」銀時〃〃「来るなあ  
アアアアアアアアア!!!」

銀時はサチコから逃げだした。

新八「と、とりあえず行こうか」  
ジャンヌ「うん？」

ギルシア×レーティア（同じく）

ギルシア「これで肝試しか？」  
レーティア「こんな感じだから肝試しなのよ」

移動中、全裸でトゲつき鞭で逆さに縛られているアルテスがいた。

ギルシア「・・・なにやってんだ？」

アルテス「ユウカ様が考え出した脅かし法です？」

レーティア「ブラッディ100%じゃあ誰か逃げちゃっわよ・・・」

ギルシア「それに男共が写真撮ることもあるぞ」

アルテス「ハッ！？盲点だった！！」

ギルシア「んじゃ勝手にやってろ」

このバトンは鳴神ソラさん、ケンさん、風花さん、支配者さん、天城さん、黒神さん、黒龍さんで。』

真王「では」

第八十七訓：人間とアンドロイドは似てて違う（後書き）

真王「次回はお祭り騒ぎ！でも事件発生！」

ヤルオ「次回『仇をとるなぞ復讐者がやること』テイクオフだお  
W W W W  
」

第八十八訓：仇を取るなぞ復讐者がやること（前書き）

真王「今回またゲストキャラが出る」

銀時「どんだけでるんだよー!」

## 第八十八訓：仇を取るなぞ復讐者がやること

ゲーム祭のとある屋台

ネプテューヌ「あのバカ女め、いつかぶったおす！」

ネプギア「そ、それは駄目だよ……」

フェイトとなのはの警備命令の利用による銀さんダブルデート行動に、2人を羨ましがると嫉妬するネプテューヌと制するネプギア。なぜネプテューヌがここにいるかというところは実はこっそり抜け出して少し祭り気分を味わっているのだ。

ちなみにノワールとブランとベールは分つてながら見逃している。そこにキリアが苦笑して話しかける。

キリア「あはは……随分と好きなんですね。銀時さんの事」

ネプテューヌ「!? / / /」

ネプギア「？」

突然、銀時に好意を持っていることを言われてキユンと驚くネプテューヌと首をかしげるネプギア。

実際ネプテューヌはすでに銀時と接吻キスしている。

しかしそれは銀時との2人だけの秘密。憧れから愛する人へと変わっていったのだ。

ネプテューヌ「い、いや……そ、そんなつもりじゃあ…… / /」

キリア「あははは、顔を真っ赤にしてまで必死で隠そうとするその動揺がその証さ」

ネプテューヌ「うう / / /」



更に顔を真っ赤になるネプテューヌ。

キリアはネプテューヌの隣に座って酒を飲み始める。

キリア「それにしても、まさかネプテューヌさんがあのプラネテューヌの女神様だったなんて……」

ネプギア「お姉ちゃんの事知っているの？」

キリア「はい……僕のアンドロイド技術を最も感動してくれた人で、あの人のお陰で今の僕がいるんです」

ネプテューヌを知っている事に驚くネプギア。

ネプテューヌは少し照れている。

そこに店の店員らしき人物があるものをスバルに差し出す。

店員「へいお待ち！」

それが出た時、ネプテューヌは凄く喜び出す。

ネプテューヌ「きたー」

メツチャ喜んでいる彼女に、キリアはできる限り顔に出さないようにしていたがそれでも嫌悪感が出てしまう。

何故ならその物体は……井に入っているご飯の上に、カラフルに大量のなんかトッピングが山盛りに乗っている。

恐る恐るにキリアはネプテューヌに訊く。

キリア「……………ネプテューヌさん、何ですかコレ？」

ネプテューヌ「ご飯にトッピングタップリ乗った特別メニュー、『スーパードネプ丼』だよ……食べてみる？」

キリア「い……………良いです……………」

苦笑しながら断るキクナエ。

それをお構いなしにネプテューヌは『スーパーネプ井』を美味しく頂く。

キリアはネプテューヌの味覚がどうなっているかを疑いだす。

ちなみにネプギアもネプテューヌと同じものを食べていたの更に驚くのも別の話。

そしてノワール達女神組（教祖組は除く）もスーパーネプ井を食べた経験があつたのもまた別の話。

そしてネプテューヌが『スーパーネプ井』を完食した後、ネプテューヌはキリアと話しをする。

ネプテューヌ「そう言えば、ファンテで思い出したんだけどオルテラって知ってる？」

ネプギア「オルテラ・ファンテ？確かプラネテューヌの天才発明家でクソマシンオブサイヤーを3回優勝したあの人？」

キリア「親父は……僕が尊敬するほど優秀な発明家でした……しかし親父も15年前に事故死で……」

キリアの父親も事故によって亡くなっている。

ネプギアは思い出させてはいけないのを思い出させたことに慌てだす。

だがキリアは暗い雰囲気打ち消すかのようにネプテューヌにある事を訊く。

キリア「そう言えば、僕昔親父から貴女の事を聞かされました……何でも違法なる研究をしていた『P・H事件』プロジェクトを解決なさったんで

すよね。貴方のサーラ・ゲイス率いる『プラネテューヌ特化部隊・ネプテューナーズ』と共に……」

ネプテューヌ「……………」

P・H事件とサーラの名を聞いて表情を曇らせるネプテューヌ。  
ネプテューヌが以前（ネプ銀編の『第五七訓：愛が大きければ悲しみも怒りも大きい』より）銀時達に話したあの事件を思い出しているのだ。

そして、かつてあそこでたくさんの方が来て、そして失ったあの事件。

ネプギア（お姉ちゃん……………」

ネプギアは聞かされたため悲しそうな表情をする。

ネプテューヌ「解決したとしても、結局犠牲になった人たちは戻ってはこない。世界ってのはそう言うもんだよ……」

握る手がギリギリと音がする。

ネプギア「お姉ちゃんはある以来部屋にふさぎこんでいました。救えなかった人がいたことで、凄く泣いていました。……………」でも気付いたんです。どれだけ後悔しても誰一人護れやしない。どれだけ無力さを噛みしめても誰一人救えやしないんだって。だから……お姉ちゃんは死んだ人たちの分まで生きて多くの命を護ろうって誓ってるんです。それが死んだ人たちに対して出来る事だからだって」

ネプテューヌ「ネプギア、ちょっとくすぐりたいよ……」

ネプギアに嬉しそうな顔で突っ込むネプテューヌ。

キリア「仇をとろうとは思いませんか？」  
ネプギア「!？」

突如、仇を討つ事を進めるキリアに驚くネプギア。

キリア「死んでいった中にもかけがえのない者もいたはずでしょ…  
…その人達の為にも敵を討とうと思った事はありますか？」

ネプテューヌ「キリアさん」

ネプテューヌがキリアを睨む。

ネプテューヌ「たとえ大切な人がいたとしても、『ただの復讐鬼になって人の被害を考えない人』になるつもりはないよ」

その瞳と言葉はどういう意味なのかキリアはしることはなかった。

キリア「あ、申し訳ございませんが最後の調整があるので……僕はコレで……」

キリアはお金を置いて急いでこの店を出る。

しばらくしてネプテューヌもお勘定して店を出てノワール達のところへ戻るようにする。

だがネプテューヌは彼女を見ていた人物に気付くことはなかった。

赤みがかった黒色で左右にツインヘアーしていて背後にロングヘアーのような背中に届くぐらいのサラサラとしたロングヘアー並みの長さをした紅色の如くの瞳。

漆黒ともいえるミニスカートで細長い足を太ももの部分まで隠せるほどの黒くて長い靴下。

そしてスバルとティアナ並の豊満な胸の大きさ。

彼女はネプテューヌを見てこの場を去ろうとすると、ネプギアは気になって彼女を追いかける。

???「やっと見つけたよ…ネプテューヌさん…」

その少女はこうつぶやいて人ごみの中へ消えた。

ネプギア「今の人・・・もしかして…?」

ネプギアは思い起こした。

かつて『P・H事件』フロンティア事件のネプテューナーズの生き残りを…。

射的屋台

レオン「んお?射的か…」

レオンが言って同行していたガレーナ、タバネ、イッセー、リアス、ナリアも見る。  
だがよく見ると、

九兵衛「おや、こんなところで奇遇だなあチ」

ピク!

チンク「チン……おやあ?そう言う貴様こそ人の名前を間違えるほ

ど頭が老けてきたのか貧兵衛？」

ピク！

九兵衛「ひん……き……貴様の間違いはわざとらしく感じるが？」

チンク「間違えてやっているのさ貧乳眼帯」

九兵衛「まだそう言うか？……ロリ眼帯」

互いに鋭い睨め合いをして火花を散らす九兵衛とチンク。

チンクと同行していたセイン、セツテ、ウエンディ、デイドはチンクの対抗心には怯えていた。

ここまで相手を睨むチンクの姿が見た事がないからである。

九兵衛もチンクに対する対抗意識が異常なまでに怖かった。

まあここであるの左目眼帯のIS使いでも出たらさらに混沌になるけども。

ガレーナ「何をやっておるのじゃ？」

ガレーナはそんな二人の負のオーラにまったく臆せず近寄る。

ウエンディ「あ、ガレーナの姉貴、じつはかくかくしかじか……」

ガレーナ「チンクが射的やってたところを九兵衛が対抗してきたと？」

ウエンディの説明に納得するガレーナ。

つーかアレで分かったのは凄いものだな。

ガレーナ「まあいい。で、結局二人はなにが取りたかったのじゃ？」

チンク・九兵衛「おじさんの身ぐるみ」

店主「ちよつとオオオオオ！！！」

チンクと九兵衛が物騒なことだったので店主が突っ込む。  
しかもこの店主やられた後なのかボロ着いている。

チフユ「バカ者！」

ベシッ！！

たまたま通りかかったチフユが2人に教簿板で叩いた。

チフユ「射的の球を人に向けて撃つな！失明でもしたらどうするつもりだ？」

チンク「その時は貧兵衛が責任を持つ」

九兵衛「いやチ コが・・・」

チフユ「仲良くやれ…（鬼の殺意）」

チンク・九兵衛「アイサアア！！」

チンクと九兵衛が喧嘩しかけたところ、チフユのにらみと殺意によって2人は肩を組んで楽しく（している感じにして）走っていった。

イツセー「あ、相変わらずだね。チフユさんの鬼魂…」

リアス「特にチフユバスターは受けたら昇天される代物だからね」

セイン、セツテ、ウエンディ、デイド

（一体どんな技なのオオオオオオオオ！！！！！？？）

イツセーとリアスは冷や汗を流し、セイン、セツテ、ウエンディ、デイドはなのはのデイベインバスターみたいな砲撃を放つと想像して顔を青くする。

実際のチフユバスターは分厚い辞書を片手で頭に一撃を与える技で

ある。

これがとても痛い攻撃だ。

ガレーナ「店主よ。余も射的を頼みたい」

店主「おう、やってみな」

ガレーナはクレジット（ゲーム業界のお金らしい）を払って射的に挑戦する。

リアス「ガレーナはどんなのを選ぶのかしら？」

イツセー「面倒なことにならなければいいが……」

チフユ「まああの戦闘馬鹿には（チラツ）何を言っても無駄みたいだからな（チラツ）」

リアスは興味を示し、イツセーは不安になる。

チフユはさつきから後ろをちらちら見ている。

視線の先には仲良く肩を組んでいるチンクと九兵衛。

視線を外せばにらみ合うが、チフユが見ればワイワイと仲良く肩を組む。

ナリア（まるでフェアリーテイルのグレイとナツとエルザの関係だね……）

ナリアはこの光景を見てそう思った。

そしてガレーナが銃を構えて、

ドンッ！！バーン！！

大きなくま人形を破裂させた。



この場にいた全員「……………は？」

もちろんこの場にいた全員が啞然とする（レオンは除く）。

レオン「おいガレーナ、狙って撃ち落とすものだが破壊しろという意味じゃないんだぞ？」

ガレーナ「そうなのか？余はてつきり…おもわず覇気を使ってしまったぞ？」

ガレーナは射的を知らなかったらしい（銃撃戦の知識ぐらいはある）。  
メテنزギルド組はやっぱりかど頭を抱えることになった。  
ちなみに店主は気絶した。

一方、

ヴィヴィオ「ねえねえ！これ似合うかな〜！」

プリニー「…不気味感があるッス」

ヴィヴィオがお面をかぶってプリニーがコメントを漏らす。

勇華「お面なんてほとんどそういうものよ」

グレイ「俺はこんなところは好きじゃない」

ビビ「まあまあ……………」

一緒についてきた勇華はそういい、グレイは帰りたがり、ビビ（ち

なみにスリムボディのまま）が押さえる。

ヴィヴィオ「あ、金魚すくいがあるよ」

ヴィヴィオが金魚すくいの屋台を指差す。

プリニー「挑戦するッスか？」

ヴィヴィオ「うん!!」

ヴィヴィオは金魚すくいに挑戦した。

で・・・

ヴィヴィオ「・・・（´・`・`）」

プリニー「つ、次こそは頑張るッス・・・」

ビビ「そ、そうよ、そんなにしよげないでヴィヴィオちゃん・・・」

結局取れずにもものほしそうな顔をするヴィヴィオにプリニーとビビが励ます。

????「はい」

すると目の前に5匹の金魚が入った水袋が、持ってきた人はまるでおとボクの瑞穂をライトブルーの髪に碧目にした感じの人物だ。

ビビ（何だかおとボクの人物に似ている奴がいるんですけどオオオ

オオオ！！？)

ビビはその人物を見て内心驚いていた。

ヴィヴィオ「あ、ありがとうお姉ちゃん」

????「お、お姉ちゃんって…俺男なのに…」

????「綺麗だからね、エールは…」

ヴィヴィオがお礼を言うが、お姉ちゃんと呼ばれて若干ショックを受ける少年。

それを補足するように言う髪型は黒髪の超ロングにハイライトがない青い瞳の少女。

グレイ「それで?“ そんななりして祭に参加している” お前らは何だ？」

グレイは“ お前らの正体を知っている” 様な目で2人を見る。  
2人はやれやれなしくさをしていった。

エール「そうだね。僕はエール」

コヨリ「私コヨリ」

ヴィヴィオ「エールおね…お兄ちゃんとコヨリお姉ちゃんだね？」

ヴィヴィオが一瞬エールをお姉ちゃんと言いかけたが訂正した。

エール「ここに来たのは単なる面白そうだからかな？」

勇華「ふくん、じゃああの二人は…」

勇華が別の方へ向く。

ヴィヴィオ達もそっちへ向くと、

「????」んだよ、たったの456ポイント?ならもつと力入れて…」  
「????」って待ってよ、そんなことしたらマシンが壊れるからメ  
ア:」

メア「目指せMaxポイントだ!!!みとけよセレス」  
セレス「聞いてねえし!!!」

膝まであるピンク寄りの髪に赤目。異常なまでに美少女でどこから  
みても男に見えない少年・メアがグローブをつけてパンチマシーン  
に挑戦している。

それを膝まである灰色にサファイア色の瞳、服の上は青と黒を混ぜ  
た色で肩は露出し、下は黒い長ズボンをはいている青年・セレナが  
制するも聞いてないようだ。

グレイ「…何だあいつらは…? (あの灰色の奴…ただものじゃねえ  
な…)」

勇華「へえ〜 (あの人、わりと好みのタイプね…)」

ビビ「なぜパンチングマシンが!?!?!あ、プラネテューヌが  
あるから?」

上記三人はそんなことを思いながら見ていた。

一方、スカリエツティ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、  
オットー、ノーヴェ、土方、近藤、沖田、山崎はイストワールの頼  
みでネプテューヌ達の護衛を任された。  
ちなみに近藤たちは祭りがあるとウェンディから誘われた。

しかしクアットロと山崎はネプテューヌがお好み焼きが食べたいと言う理由でお好み焼きを買いに行った。

ノーヴェ「たくう……なんでアタシ等ナンバーズが護衛をしなきゃ行けねんだよ？」

ドゥーエ「しょうがないでしょ、私達は機動六課と同盟を結んだ関係だから機動六課の仕事を一緒にやらなきゃいけないから」

ノーヴェの納得のいかなさにドゥーエが落ち着かせる。

ドゥーエ「それにねえ、ここはあのメインイベントのキリア作アンデロイドの美しき舞『百花』が良く見られる特上席みたいな場所だし」

トーレ「怠けないくださいドゥーエ姉様！」

ウーノ「そうよ……こんな時に鬼兵隊が攻めて来たらとんでもない事が起こるわよ？」

ドゥーエの気楽さに呆れるトーレとウーノ。

土方「しかし、あの馬鹿が有名人つてのもどうかと思うな」

近藤「そういうなトシ。万事屋は有名に成りたい訳じゃなくともなつてしまったんだよ」

土方がタバコを吸いながらそっくり、近藤が補足する。

確かに彼によって数多くの事件は解決されたから、彼ならやりかねないだろう。

土方「……にしても山崎遅えな。たこ焼き買つのに何時間掛かってんだ？」

土方が時計を見ながら山崎を待っている。  
そこに……

クアットロ「お待たせ」

山崎「副長、お待たせしました！」

急いでこっちに走ってくるクアットロと山崎。

両手にはお好み焼きとたこ焼きが入っている箱を持っていた。

トーレ「遅いぞクアットロ！ちゃんと買ってきたのか！？」

土方「オメーもだ山崎！何やってたんだ？」

トーレがクアットロの持っているお好み焼き、土方が山崎の持っているたこ焼きが入った箱を取り上げ、その箱の蓋を開けると……やく半分食べられた状況のお好み焼きとたこ焼きがあった。

クアットロ「御免ねえ、何かその野良犬が飛び込んできてお好み焼きを食い込んだのよ……この？4のクアットロ、一生の不覚ね」

山崎「すみません、僕も同じく野良犬にやられまして、この山崎退、一生の不覚です」

とクアットロは笑って、山崎も謝罪するが……二人の口元には大量の青のりが付いている。

トーレ「そうか……私はその口元についている青のりの方がが一生の不覚だと思うが？」

クアットロ・山崎「（ギク！？）」

トーレの鋭い眼線で見られ、凶星を突かれるクアットロと山崎。

ウーノ「クアットロオオオオオオオオ！」

トーレ「この馬鹿者オオオオオオオ！」

土方「山崎イイイイイイイ！」

ノーヴェ「何頼まれている物を勝手に食ってんだアアア!?」

ウーノ、トーレ、土方、ノーヴェの4人は激怒してクアットロと山崎を容赦なく蹴りだす。

クアットロ「痛たたた！これは違っつて！途中で食べた、たこ焼きの青のりよー！」

ウーノ、トーレ、土方、ノーヴェ『どっちでもいいわぁ！（怒）』

ドカア！

クアットロ・山崎「へブウ！」

クアットロの言い訳でウーノ、トーレ、土方、ノーヴェの4人は怒り出して渾身の蹴りを炸裂させ、クアットロと山崎を気絶させる。ダイエチが「山崎さ〜ん!〜」と涙を流す。

トーレ「どうするドクタ……てか食っているし！」

土方「近藤さんも!?ってかなんでオメエらもいるんだよ！」

ウーノ、トーレ、土方、ノーヴェの4人がクアットロにお仕置きしている中で、近藤、スカリエッティ、ドゥーエ、いつのまにかいた神の4人は残りのお好み焼きとたこ焼きを食べている。

スカリエッティ「別にいいではないか、今日は祭りだから無礼講で

行く」

神「そうそう……にしてもこのたこ焼きもいいなあ」

スカリエツティと神は気楽そうに言い出す。

神「それに今日はキリアって奴の機械技術が披露されるイベントもあるそうだな？黙ってみとけばいいかもな？（・・・レヴェツカもつれ行ったほうがよかったか？）」  
トーレ「だからって、我々は」

ワアアアアアアアアアアア！

観客達が突如、歓喜に叫び出す。

何故なら部隊には数多くの着物を来た女性型アンドロイドが現れて、その中心部にはキリアが着物姿で立っている。

神「おお、ついに始まるか！」

近藤「あれが天才発明家、キリア作のアンドロイド……なんとも美しい、まるで人間そのものだ！」

観客達もかなりの高い評価でキリアのアンドロイドを褒めまくる。

そしてアンドロイドの踊りが始まる。

人間そのものの動きに連係しあうその華麗な動きは誰もが見惚れてしまう程であった。

そこには、フェイトとなのはも見惚れている。

しかし彼女等は先ほどまで銀時と一緒にいたはずだが、銀時がフェイトとなのはの分を含め、綿菓子を買ったのであった。

なのは「うああああ、綺麗な舞だね、フェイトちゃん！」



フェイト「うん！アンドロイド技術をここまで上昇させたキクナエさんって凄いよ」

キリアの予想以上の技術の高さは2人も認めるほどである。誰もがアンドロイドの舞を見惚れる中、この時まだ知らなかった。この『ゲーム祭』が地獄の祭りに変わる事を。

一方の銀時は、綿菓子を買って急いでフェイトとなのはの所に向かう。

銀時「やっと見つけたよ綿菓子売ってるところ……そろそろキリアの機械からくりショーが始まる頃だなあ」

今通っている所は人気のない場所である。

誰もがキリアのアンドロイドの踊りを注目して向かっているため、1人もいないといっても良い。

あと少しでフェイトとなのはの所に到着する中……

????「おいおい、せつかくの祭りだつてのに随分と寂しい所にいるじゃねえか？」

銀時「!?!」

突如の背後からの一声に銀時は驚きながら後ろを振り向く。その瞬間に、黒い獣の刃が銀時を襲うが銀時はその斬撃を交わす。しかしせつかくの綿菓子3つがまっ二つに切れた。

高杉「くくく……良くかわしたなア？やっぱ『白夜叉』となると反応が違う訳かア？」

男は不気味な笑いをして銀時を見る。

黒い獣のような鋭い眼線に右手に持っている鐔無き刀。

そして派手な着物に左目の部分に包帯を巻いている。

その男、『鬼兵隊』のリーダーである高杉晋介が銀時の前に再び姿を現した。

銀時「なんでてめエがここにいやがる？」

怒りに籠った眼で高杉を見る銀時。

その覇気は『白夜叉』としての存在に近いほどである。

高杉「せっかくの祭りだから、どんな面白い祭りをしてんのか見に来たら……まさかここでてめえと再会するとはな」

祭り好きな高杉は、『ゲーム祭』に強く興味を持っている。

そこでどんな祭りをするのか見に来たら、まさか銀時がいるとは高杉も驚いていた。

だとすれば、桂もいるのではないかと確信する。

高杉「実はな、先日今回の祭りの目玉の機械からくりショーをやるキリアツて奴に会ってよオ……コレがまた粹の良い獣を飼っててな。【牙】を突き立て様と今か今かとのたうち廻ってるじゃねえか……」

銀時「高杉……まさかテメエ」

高杉「まあ……黙って観とけ。コレからすごぶる楽しいショーが始まるぜ。父親を奪われた息子の派手な血の祭りがな」

アンドロイドのカーニバルが終わると、観客から盛大な拍手が送られる。

キリアはアンドロイドと一緒に頭を下げる。

そして大きな特上席で拍手を送っているノワールたち。

ネプテューヌ「……………」

ただネプテューヌは怪しそうな目で拍手している。

ノワールたちも同じだ。

そしてキリアが特上席に団扇を向けると……

キリア「紅桜……機動！」

キリアの命令にアンドロイドは突如、右腕から巨大な紅色に輝く巨大な刀が現れる。

それを見たフェイト、なのは、源外、スカリエツィ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、オットー、ノーヴェ、土方、近藤、沖田、山崎が驚きの表情を表す。

キリア「狙うは守護女神の首なり！」

そして紅桜振られ、ネプテューヌたちのいる特上席へ魔力刃が放たれた。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

ヤルオ「今回はヤルオがアシストするおwwwwww」

銀八「こんな変態と組むのはどうかと思うが・・・まあいいか。ペンネーム『フリーダム』さんからの質問だ。『初めましてです。』

Sフリーダム「しかし、銀時ってモテてるな」

ジャステイス「13人にフラグたてたんだからな」

デステイニー「でも、ネプティーヌも確か、銀時に好意を寄せたよな？」

レジェンド「そうだったはずだが…」

デュエル「しかし、ヴィータも素直じゃないな」





神「ここは結構平凡だぜ。まあ、お前にとつちやあ、暇な場所かと思っけどな……………つか来るなよ。お前が来たら、こここの六課隊舎、つかミッドチルダ自体が壊滅の危機に陥るからな。戦闘の余波で」

旅人「安心しろ。星すらも消し飛ばせば、証拠隠滅になつてちやうどいいだろう」

神「良くねえよッ！！！！」

ま、まあ……………本当に、色々と申し訳ございませんでした

では、次回も楽しみにしておりますので、執筆、頑張つて下さい！  
！ 失礼します！！！！

神「ばいばい！！！！」

旅人「またな」

で、あの〜、一つ質問を

神「あるのかよ」

ええ。ちよつと気になる事が

・今回のゲーム祭編、具体的に何をする予定なのですか？ ネタバ

レに繋がるのならば、答えなくても構いません

神「ああ。あんまり先が見えないもんな」

ええ。なので……………」黒神の銀園祭をアレンジしたものだよ  
WWW」

真王「『リイン』私は別にきにしてないツス。次はペンネーム  
鳴神ソラ』だ。『マリオ』ううゝむ…」

ルイージ「どうなるんだろっね…

ギル「ぶっ？」

フォックス「どうなるんだ祭り!!」

スネーク「新たなライバル登場か！」

ネス「転生者組みに質問『ソロが怪獣を出した時はどつだつた?』」

リユカ「同じく質問です『マリオさん、冥王さん、銀次さんの3人  
で戦いたくない人は誰ですか?』」

ソロ「応援で行くぜ!それで銀時に質問『リアス達の中でツッコミ  
所満載と思う奴はいるか?』」

リュウケンドー「俺も応援で」

フォックス「応援と言つ名のツッコミで行こう」



スネーク「俺も」

ギル「ぷっ」

リュウケンドー「ギルも応援だつて」

次回を待ってます！』転生者組みは驚いたけどそんな能力を持つ転生者もいるようだ。そして銀次です。なんせ能力が無になっちゃうからな」

銀時「どれも突っ込み所満載だよ！とくにヤルオがな！」

ヤルオ「ほめ言葉として受け取るおwww。『鳴神ソラ』さん、廊下に立つおwww。次はペンネーム『月光閃火』だおwww。ww』ども…月光閃火だ。

しかし…バトンのヤツのでのアルテスの姿…とりあえず眼福モノでした。（合掌）

輝刃「…男の群れに揉みくちやにされるな…きつと（汗）。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1.ネプテューヌ達の世界の住人に質問…銀時の『宇治銀時井（ご飯の上に小豆がこんもり）』と土方の旦那の『土方スペシャル（ご飯の上にマヨネーズどっちやり）』…正直言って、「どちらか一つは必ず食べなきゃダメ」と言われたらどちらを選ぶ？

ハハハ…どっちもさすがに胃が本能でキツイと感じるからな…（汗）  
。次は俺からだ。







転生者達に質問です。屁怒紹様に勝てる自信はありますか？

統夜「随分とチャレンジャーな質問だな・・・」

シャルに質問です。自分の作品では統夜とフラグを立ててしまいましたがどう思いますか？』では答えようか」

女神組「怖い攻撃だね・・・」

転生者組「それ以前にこえーよ！！」

グレイ「何をだ？」

レオン「さあな」

ガレーナ「何処に恐れるものがある？」

真王「ああいうリアクションでした。『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

ヤルオ「次はペンネーム『黒龍』だおwww。『黒龍』キリアが何か起こしそうですね」

銀時「それにしてもよ、ヴィータの奴がヅラを好きとはね〜（ニヤニヤ）」

ソラ「ヅラも罪深いと言えば、罪深いな」

黒龍「まあこれからどうなるのか楽しみではありませんね」



ヤルオ「次のアシストはルーセン姉妹だおwwww。そして『鳴神ソラ』バトンだおwwww」

『んじゃあバトンを…』

空&ソロ（夏祭り）

空「しゃあ！色々回るぞ！」

ソロ「どつちが多くての屋台回れるか勝負するか？」

空「おっ！良いな！」

その後、彼等は10店舗以上も回ったのであった。

明久×明久LOVEズ（海）

明久「はあゝのんびり出来るな」

玲「アキ君、私の背中に塗ってくれませんか」

エリア「私も頼むよ」

赤セイバー「奏者、頼めるか？」

姫路「明久君！遊びませんか！」

美波「そうそう！一緒に遊びましょう！」

玉野「楽しいよ」

キヤス狐「ご主人様と一緒にカキ氷食べませんか」

優子「どうかしら？」

葉月「バカなお兄ちゃん行こう」

明久「皆！一斉に言われても困るんだけど！！」

その後、ジャンケンで決まった順番を明久はやったのであった。

そんな訳でこのバトンをハルルさんに送ります。』

真王「では次回へ」



**第八十八訓：仇を取るなぞ復讐者がやること（後書き）**

真王「復讐のために憎悪を抱くキリア。そしてネプテューヌに憎し  
みを抱く者も…」

ルシアス「次回『憎しみは所詮己を見失う』テイクオフよ」

第八十九訓：憎しみは所詮己を見失う（前書き）

真王「シリアスです。それではスタート」

## 第八十九訓：憎しみは所詮己を見失う

突如、アンドロイドの手から現れた紅色の大刀。

観客達はコレで剣舞をするのかと思った。

リリカル組はあんな物をアンドロイドに装着させてた事に驚くが、

源外、スカリエツティ、そして真選組だけは違った。

アンドロイドについている刀、紅桜を。

源外「紅桜！？なぜあれが!?!」

スカリエツティ「まさか!」

どうして紅桜がここにあるのか理解できない源外に、まさか鬼兵隊と手を組んだのではないかと思ひ浮かべるスカリエツティ。

キリア「殺れ」

キリアの一言でアンドロイドが大きく飛び込み、それが一気にネプテューヌのところまで一気に飛び込んできて、紅桜を振る…

スパーーーーーン!!!!

…おうとしてアンドロイドが紅桜ごと真つ二つに切られた。切ったのは紛れもなく、ネプテューヌ本人だ。

ネプテューヌ「…どうせ、こんな事だろうと思ったよ」

ネプテューヌはパールハートへ変身し、特上席から落ちた。

ノワール「ネプテューヌ!!!」

ノワールが呼ぶも、ネプテューヌは激突直前で着地し、そして瞬間移動の如く人ごみの中を駆け抜け、

チャキン！

キリア「！！？」

キリアに首を突き付けた。

パープルハート「…何のつもりで私達を狙ったかは知らないけど…、言っただけだよ。『ただの復讐鬼になって人の被害を考えない人』になる気はないって」

パープルハートはキリアに対して怒りを、そして悲しみの目で見る。

キリア「結構です。私には成さねばならぬことがあるのですから」

キリアがそう言つとぞろぞろとアンドロイドの軍団が現れる。

パープルハート「…教会の粛正に巻き込まれたあなたのお父さんの仇を？」

キリア「…イストワールさんから聞きましたか。そうです。親父はリンボックスで教会の粛正という戦争に巻き込まれたのです」

キリアの言葉に驚く面々。

グリーンハート「でしたら私によつがあるのでしょうか？」

とグリーンハートが前へ出る。

キリア「ええ、あなたの元教院長・イヴォワールのせいで親父が不名誉な死を遂げてしまったんです」

グリーンハート「・・・彼のしてきたことは許されざる行為、そしてその責任を負うのが守護女神<sup>ハート</sup>・・・」

グリーンハートは右手に槍を装着した。

グリーンハート「全力でお相手いたします。皆さんは手を出さないでください」

キリア「いいです。彼の変わりにおあなたが、私の無念を受けるお！！！」

キリアの号令にアンドロイド達が一斉に突撃した。

グリーンハートは槍を構えると、

「???」  
「アンドロイド・・・」

後ろから聞き覚えのある声が2つ。

ブラックハート・ホワイトハート「狩りじゃアアアアアアアアアア！！！」

グリーンハートは頭を下げるとブラックハートとホワイトハートがアンドロイド軍を吹き飛ばした。

グリーンハート「あなた達、なぜ？」

ブラックハート「ネプテューヌだったら迷わずに助けに来るかと思っただからよ」

ホワイトハート「私はたんにあいつがムカつくだけ・・・」

若干適当な答え方だがグリーンハートの笑みがこぼれる。

ブラックハート「というわけでネプテューヌ、こいつ等は…」  
パープルハート「分かったわ。私はこつちを優先するから…」

パープルハートが別の方に顔を向けて言う。

その視線の先には6人のフードの人物がいた。

事件が発生した直後、銀時と高杉は刀を持って睨みあっている。

銀時の眼からは怒りが、そして高杉の眼からは狂気が満ちている。  
思えば銀時が歌舞伎町で高杉と再会したのもこの様な感じであった。

高杉「知ってるか銀時？キリアの父親、オルテラ・ファンテの事を  
よオ」

高杉がキリアの父親『オルテラ』の名を出すのが、銀時はその名を知らない為今一ピンとこない。

高杉「そいつは全然戦いの力はないが、奴の機械からくりの扱いと技術は一級品だった。なんせあの紫の譲ちゃんのとこで機械大会からくりで3度も優勝したほどにな。けどな、昔この地である戦争に巻き込まれたってな。全く酷い話だぜ。自分達の都合で事故に見せかけて始末した上に、そいつに全ての罪を擦り付ける最悪なデマを流したんだからな？」

銀時「最悪なデマ？」

高杉はオルテラの死に対する真実を言い出した後、更に深刻な情報を銀時に言い出す。

高杉「オルテラ・ファンテを調べたら、『教院組織を暗殺する計画を立て強力な機械からくりを造っていた』ってな。……死んだ奴を犯罪者みたいにして死後も奴の名が犯罪者として残るように汚名を着せ全て罪を奴に擦り付けた。……それを知った息子がどう思ったか想像にかたくなえよ」

今でも思い出すキリアのあの時の憎しみの憎悪。

高杉は愉快そうに不気味に笑い出す。

獣の牙が生えてきた事が、何よりも面白くてたまらない。

ガキーン！

高杉の言葉の途中で銀時が凄まじい速さで木刀を振るうが、それを脅威の反応で刀で防ぐ高杉。

銀時の眼はいつもの眼ではなく、白夜叉としての眼線であった。

銀時「どけ、高杉……てめえと話し合ってる暇ねえんだよ……」

凄まじい殺意と威圧感を放っている。

通常なら誰もがそれに答えて気絶するが、高杉は愉快そうに笑う。

高杉「そう慌てんなよ銀時イ！奴を止めようとしても無駄だぜ。キリアはすでに手遅れだ。なんせ憎悪と憎しみに取り付かれてた復讐者だからな……今の奴を動かしてるのはその2つ。牙を折らなきゃ止まらねえよ……そう言やあてめえに一つ訊きたい事があつたなア」

ある事を思い出した高杉は、銀時にある事を訊き出す。

高杉「あの紫の譲ちゃん…ネプテューヌだったか？あんななりして女神さまってのはすげえもんだなあ？」

銀時「ネプテューヌの事はてめエには関係ねえだろ」

高杉「クク…確かに…だが似蔵と万斉もネプテューヌって嬢ちゃんを高く買って認めてたぜ。一流の剣各顔負けの神速抜刀術だったな」

2人の部下から聞かされたネプテューヌの強さ。

確かに魔法に頼る魔導士にしては身体能力が他の戦士どころが、ここいらの侍より高い事は確かである。

高杉「俺ア、その嬢ちゃんがどうやってその強さを手に入れたか興味を持った。だから色々調べさせてみた…したら面白い事が解つてな。あのガキとんでもねえ過去を隠してやがったのさ」

銀時「てめえネプテューヌの過去を調べたのか!!」

高杉「譲ちゃんが『プロジェクトP・H事件』関わった事は知ってるかあ？」  
銀時「何!？」

『プロジェクトP・H事件』

それはネプテューヌ達のような守護女神たちを作る計画の事を思う。  
高杉は銀時の様子を見てニヤリと笑う。

高杉「そう、今てめえが考えてる通りだ。プラネテューヌで悪質な研究をやってるやつらがいてな？それは守護ハード女神っていう存在を作り出そうってんだ。無論譲ちゃんやその教会の面々どもは無視できるわけもなく止めに行った。だが全然なくなる気配はなかった。その後サーラ・ゲイスと言う男が現れて『プラネテューヌ特化部隊』と言う義勇軍に入った。そしてある特殊部隊が結成されたのさ」



銀時「ある特殊部隊？」

このプラネテューヌには、その様な部隊はノワール達から聞かされてはいない。

その特殊部隊の名を高杉は言い出す。

高杉「特殊魔導士部隊『ネプテユナース』。魔法だけじゃねえ、純粹な武術にも優れた6人の戦士達がオーバーSランクを遂行する為に作られた特殊部隊。歴代最強部隊として恐れられた……だがそれが仇になった。それが気に入らない連中はSSランクの任務を遂行していた『ネプテユナース』にミサイルを仕掛けたんだ。……ネプテューヌはその『ネプテユナース』の生き残りとなつたんだよ」

銀時「なあ!？」

機動六課に入る前のネプテューヌが、その様な部隊に入ってた事には予想もしなかった。

だとすれば、その様な強力な部隊に所属してたんならネプテューヌのあの急激なる速い成長とフェイト達をも凌駕する実力に納得はいく。

そんな銀時に、更なる衝撃的な事を言い出す高杉。

高杉「ククク…驚いたろ?しかも俺達『鬼兵隊』にも『ネプテユナース』の生き残りが江戸に流れ着いて、俺達がこの世界の存在を知る前に潰す為に入ったのさ。しかも譲ちゃんに強い憎しみを抱いてやがった…ククク…面白いだろ」

銀時「ネプテューヌと同じ……『ネプテユナース』の生き残り?」

高杉「今頃、かつての旧友同士が再会を果たしているだろうよオ……ククク……」

高杉はおかしそうに笑っていた。

パープルハート「・・・まさか再会できるとは思わなかったけど……」  
???「けど会えたのよ。ネプテユーン」  
パープルハート「……アリエス・ヴァーミリオン……」

フードを取り、その顔を見たパープルハートはかつて、自分と同じ部隊に入って共に戦った盟友の1人、「ネプテユーン」の生き残りで、パープルハートにとってもかけがえのない仲間である。剣の腕も魔法も優れた一流の魔剣士で、さらには仲間思いの心優しい人物。

アリエス「お久しぶりです。守護女神<sup>ハート</sup>パープルハート様」

黒い髪の少女・アリエスは固く敬礼する。  
だが何処となく雰囲気は違っている。

パープルハート「・・・それで、ただ再会を喜ぶ状況じゃなさそうね」  
アリエス「その通りです」

すると、左手の掌から翡翠の光が現れて、その光の中から真紅に輝くサーベル型の長剣が現れる。  
その長剣の先の刃を、パープルハートに向ける。

アリエス「この場で……貴女を殺す為にここに来たの!!!私達……  
ネプテユーンを……私達の思いを裏切った貴女を!!!!!!」

アリエスの憎しみの声がこだまする。  
パープルハートは顔を俯かせる。

パープルハート「裏切った…そうね。あの時が起こったから……」

〈回想〉

プラネテューヌ・違反研究施設

パープルハート「次よ、もうここにようはないわ」  
アリエス「そうね。跡形片付いたし」

どこかの研究所で、『プロジェクト P・H事件』が起こる前の当時のパープルハートとアリア。

足元には研究員と思われる死体が3つ。

「???」「こつちも終わったぞ」

「???」……………同じく「」

別の扉から茶色い短髪にFFのクラウドのようなマントを着た男、天井から忍者みたいな恰好をした男が逆さででてきた。

パープルハート「ザック、ムツリ……」  
アリエス「そつちも片付けたのね」

パープルハートが二人の名前を呼び、アリエスが言う。

ザック「ああ、そろそろヒメラとレグナ、ラートも来るころだが……」  
「????」みなさ〜ん!!」

別のところから声が聞こえた。

コンパより長めのピンクの髪に黒いブレザーと赤いスカートをはい  
ている少女。

灰色の髪に赤い目の少年。

青い髪のおしとやかそつに見えるの少女。

パープルハート「ヒメラ、レグナ、ラートも」

ヒメラ「ハイです」

レグナ「きたぜ」

ラート「こつちもです」

ピンクの髪の少女・ヒメラは返事し、灰色髪の少年・レグナと、青  
髪の少女・ラートもいう。

ザック「この階の部屋は全部調べたな」

ムツリ「…あとは地下の道が一つ」

アリエス「地下ね。そこに犯人の首謀者が……」

アリアがまじめな顔で言う。

そして地下へと続く道の扉。

パープルハート「こつね」

パープルハートが扉を開く。



ザックが聞くとムツリは静かにアリエスのパンツのことを言った。そのせいでアリエスは顔を真っ赤にして二人を殴り飛ばす。パープルハート達は呆れ、ヒメラはどうするべきか戸惑う。

違反研究施設・地下・最終プラント

????「フッフッフ・・・もう少しで完成する…」

一人の偉そうな研究員がプラントにはいつているパープルハートそっくりの女性を見て言うと、

ドガーーーン！！

????「なんだ？」

男は何事かと思い、振り返ると数人の倒れた兵士と、パープルハート達『ネプテユナーズ』だった。

アリエス「貴方が『プロジェクト・ハード』の責任者ね？殺人、違反研究、違反人工生命製造、その他の罪で逮捕する！」

アリエスが刀を男に向けて言う。

男「『ネプテユナーズ』！まさか君達の様な英雄気取りの奴らが現れるとはな」

ザック「俺らは英雄とかじゃないぜ？ただの特殊部隊の一員さ」

パープルハート「貴方はここで野望を破壊する！ザイド・ゲーズ！」

パープルハートは男・ザイドに刀を向ける。

ザイド「俺の野望がついえた？確かにこのままでは俺の夢が終わる。だが、俺は俺なりの最後のあがきを出してやる！完成とはいささか程遠いが、私の研究の成果を見せてやる！」

ザイドが言っているとプラントから光が出てガラスが割れる。

パープルハート達は眩しくて目をつむる。

そして目を開けるとパープルハートそっくりの人物・クローンパールが。

ザック「へッ、悪あがきつてやつか」

レグナ「だが俺達も、負けるわけにはいかんのでな」

ヒメラ「たとえそっくりでも、手加減はしないです！」

ライト「い、行くよ！」

ザックは剣を、レグナはブローを、ヒメラは杖を、ライトはバットを構える。

ザイド「よかろう、ここが貴様らの墓場に」ビビビビ！ビビビビ！  
ビビビビ！」なんだ？」

突然の警報にザイドとパープルハート達は驚く。

ナレーション「警告、入り口に爆撃を確認。プラネテューヌ教会と確認」

レグナ「おいおい！教会ってお前のところじゃねえのか？」

パープルハート「知らないわよ！教会がそんなこと…」

ドガンー！！ドガンー！！ドガンー！！

何とミサイルが地下を貫通してネプテュー又達のいるところまで襲って来たのだ。

無論ネプテュー又達は巻き込まれて炎の壁で阻まれる。

パープルハートとザイドがいて、アリエス達は別のところだ。

ザイド「まさか教会に命令でもしたのか？」

パープルハート「違う！これは私達が処理すること！教会のみんなも承知して…」

ザイド「協会が犯人じゃないとすればおそらく第三者じゃないのか？」

ザイドの問いにパープルハートは強く否定する。

ザイドは第三者の仕業じゃないかと聞くとパープルハートは顔をしかめる。

パープルハート「どういうこと？」

ザイド「簡単なことだ。教会が動かないならば『教会を偽造したものがお前達を排除しようとしている』だろう。つまりお前とあやつらを絶縁させるために…」

パープルハート「ツツツ！！！！！！！！？？？みんなアア！！」

ザイドが敵の狙いを推測して言うとパープルハートは血相を変えて叫ぶ。

だが虚しくもミサイルが…



パールハート達を巻き込ませた。

プラネテューヌ・違反研究施設跡地

ネプテューヌは燃え盛る研究施設の前で倒れていた。

ネプテューヌ「ここは…!? みんな!? アリエス!!!」

ネプテューヌは仲間達を呼ぶ。

だが返事はない。

つまりは…

ネプテューヌ「…しん…だ…? そんな…:…あ、あ、ウアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!」

ネプテューヌの心の悲鳴が響き渡った。

〜回想終了〜

思い出す己の無力さ。

あの時自分にもっと早く気づいていれば、もっと力があればみんなを救いさせたかもしれない。

パープルハート「……フ……フ……フッフッフ……」

パープルハートは不意に笑いだす。

パープルハート「無様ね……、守ると言っておきながら、こんな結果になるなんてね……」

アリエス「そうね。だからこそあなたに私達の仲間である資格がない」

頭を支えて悲しみの表情をするパープルハートにどうでも好きそうな顔で一蹴りするアリエス。

アリエス「……出来れば刃を向けたくなかったけど……裏切り者である貴様だけは、絶対に許さない！」

かつての仲間とは言え、仲間だったパープルハートに剣を向けるアリエス。

パープルハートも出来ればアリエスには敵に回したくなかったが、かつての仲間という理由な訳ではない。

アリア「剣を抜いて、ネプテューヌ！」

裏切られた憎しみで憎悪を込めて叫ぶアリエス。

パープルハートはエックスセイバーを構える。

パープルハート「…みんなは私を許せないの？」

パープルハートは不意に残り六人のフードの人物達、つまりネプテユイナーズメンバー・ザック、ムツリ、ヒメラ、レグナ、ラート、に話しかける。

だが返事はない。

アリエス「余所見する暇があるかあ！！」

パープルハート「ッ！！」

ガキーン！！

アリアの剣とパープルハートのエックスセイバーが交差する。

パープルハートはアリエスの憎しみを断ち切れるか！？

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

ルシアス「・・・ルシアスよ」

ルーシア「私ルーシアだよ。今回は私たちが姉妹がアシスタントだよ」

ルシアス「貴方と姉妹になった覚えはないわ（武器を構える）」

ルーシア「姉妹だよね？（ヤンデレ化）」

真王「あ、チフユさん」

ルシアス・ルーシア「さあ！仲良くやっていこー」

銀八「すげえなおい…。んじゃペンネーム『ウィンド』さんからだ。『ウィンド』遂に出た！ありがとう真王さん！今回も殺られるんじゃないかと思っただ！」

リリス「まったく…しかし祭りか。おっと自己紹介か。リリス・ハートネットだ」

ウィンド「一応真王さんに注意。エールは一応一人称は俺ですから。メアは丁寧語に近いです。セレスもおなじだと思います。後お願いします。彼らをこのままそちらの方へ出演させてくれませんか？」

リリス「わがままだな」  
ウィンド「分かっているさ。だが俺は見たいんだ！銀さん達の力になるあいつらの姿を！！！」

リリス「真王。わがまままで申し訳ないがあいつらをこのまま銀時ら

の仲間に入れられてやってくれ。頼む。後エールとコヨリには気を付ける。キレたら怖い。メアは……ウインドの小説を見たから分かるな？」

ウインド「しかし高杉だ遂に出たな……」

リリス「ああ。果たしてどうなるか……」

ウインド「さて、質問と参りますか。銀魂メンバーに質問。家のリスにかてますか？」

リリス「とうとつだな……リリカルメンバーに質問だ。こいつらにかてるか？「ダンテ、バージル、ネロ」返答頼む」ズバリお答え「ちよい待ち」なんだ？」

真王「実はまだあったよ。『リリス』……」

ウインド「ど、どしたのリリス？」

リリス「ごめんなさい」

ウインド「へ？」

リリス「誰だつて最初は間違いはある。真王の言う通りだ。なのに……」

ウインド「い……いやいや！お前らをさんざん放っておいた俺も悪かったよ。だから気にするな」

リリス「うん……ありがとう（ニコッ）」

ウインド「ぐはー！！（しまった……リリスは俺の小説で男の娘中トップクラスの容姿とスタイルの持ち主……そんな奴から上目遣いで見られたら……グフッ）」

リリス「え……ええ？」

数分後……

ウインド「OK大丈夫だ（鼻血垂らしてる）」

リリス「大丈夫なのか……」

ウインド「い、一応質問だ。銀さん、リリカルメンバー、転生者メンバーへ。俺の主人公達を見た時のそれぞれの感想を。そしてヴィオに質問俺の主人公達で家族になってほしいのは？」

リリス「こちらからも。真王に質問。真王にとってリリカル銀魂とは何だ？」

ウインド「おお！真面目な質問！」

リリス「たまにはいいだろ？返答頼む」

『ウインド「真王さんに質問。家の主人公らをどう思いますか？」』  
です。では質問の答えだ」

銀時「いや聖王に喧嘩売ったら罰当たりな気がするんですけど…」

新八「はつきり言っつて勝てません！！」

神楽「いつでも来るネゴルウラアア！！」

リリカルメンバー「無理です！」

真王「次、メアは優しそうな奴で実はそんな裏があつたとの事。そしてあの吸血鬼に惚れられてとの事。エールとコヨリは将来ラブ夫婦になれるんじゃないかとの事。そしてセレスは規格外すぎるだろとの事」

ヴィヴィオ「エールお兄ちゃんとおコヨリお姉ちゃんだよ」

真王「私にとってリリカル銀魂は面白・ギャグ・笑い・遊び・そしてアドベンチックであること！最後ですが私に負けないレベルキアラですね。では『ウインド』さん。今度は質問三つまででお願いします」

ルーシア「次！ペンネーム『鳴神 ソラ』さん！この人よく来るよ。』。『マリオ「復讐なんて…それぞれ違うが死んだ者が望むのは何時もの姿でいて欲しい…ただそれだけだ」

ルイージ「やばいね…」

フォックス「マジでどうなるネプテューヌ！」

スネーク「だな」

ネス「質問『リュカについてどう思う？』」

リュカ「僕も…『ネスについてどう思いますか？』」

銀次「質問！『最初俺を見た時どう思った？』」

次回を待っています！』」

真王「ツツコミ使い（リュカ）とハーレム視望者ネスな感じ。能力以外（電撃のことじゃない）はまんま銀次ですね」

ルーシア「では『鳴神 ソラ』さ〜ん 廊下に立ってなさい」

ルシアス「次、ペンネーム『フリーダム』よ。『Sフリーダム「復讐をしても何も残らないに失った物も戻ってこない」

ジャステイス「ネプテューヌもそれは、わかっているはずだ」

デステイニー「そうであってほしいな…」

レジェンド「そうだな…」

Xアストレイ「それでは、質問です」

銀時とリリカルメンバーに

青眼の究極竜と真つ向勝負で勝てますか？

沖田に

次の内使いたい武器は？《アトミックバズーカ、ツインバスター  
イフル、ローエングリンランチャー》

ハイペリオン「一つ、かなり危ない気がするぞ…」

更新頑張ってください」

銀時・リリカルメンバー「イヤ無理！！」

ルシアス「賢明な判断ね」

沖田「この中で一つならそのローエングを試しまさあ」

ルシアス「相変わらずだね。『フリーダム』狙われないでね」

真王「次はペンネーム『ケン』さん。『統夜』復讐は何も生まない・  
・・・分かってるつもりだが・・・」

カナと咲夜と戦った事を思い出していた。





はレオンミシエリの声優さんの声、そしてユウカは…モリガンボイスの人ですね」

銀八「次だ。ペンネーム『月光閃火』さんだ。『ども…月光閃火だ。

しかし…やはり裏で糸を引いていたか…『煎餅隊』。

輝刃「いや…『煎餅隊』ではなく『鬼兵隊』だぞ（汗）？あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・高杉に質問…もし自分が女体化したら、どういう反応をするんだ？

ハハハ…確かに、それはちよつと気になるな…。というか…高杉の場合、女体化したら何か属性が『ボーイッシュな風貌のヤンデレっ娘』になりそう…（汗）。次は俺からだ。

2・キリアに質問…作ったアンドロイドの中に、もしかして好きなヤツの姿をしたのもあったりする？

輝刃「…あり得ない話ではないな…。何はともあれ、キリアだって好きなヤツの1人や2人は居るだろうな…。」…高杉かよ」

高杉「…どうでもいいが？」

真王「へい次キリア」

キリア「私にそんなことはありませんよ。ただなぜか姿がリーンボックスの女神様に近づいてきた気がするんですが…」

銀八「なら『月光閃火』、廊下に立ってなさい」

真王「次だ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問。『黒龍』ついにキリアが復讐に動き出したましたね」

銀時「ネプテューヌの昔の知り合いの出てきたしな」

ソラ「高杉、アイツも相変わらずだな」

黒龍「それとチフユ強し！」

銀時「まあエルザと千冬が合体したみたな奴だしな」

黒龍「それとソラ、『スーパーネプ井』をどう思いますか？」

ソラ「まあ美味しいなら良いんだが、色んな物をトッピングして味をごちゃ混ぜにするのはあまり良くないな。不味くなる可能性があるからな」

銀時「さすがに料理上手いだけはあるな」

ソラ「とは言え、美味しいなら特に文句はない」

黒龍「そこはただ見た目に拘る様な口だけ料理人とは違いますね」

銀時「美味しいなら特に問題視しないのもコイツの良い所だしな」

黒龍「じゃあ質問しますか」

1・ネプテューヌに質問。スーパーネプ井って具体的にどんな味が

しますか？

2・ネプテューヌに質問。おしっこ漏らしたブランをどう思いますか（黒笑）

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」

銀時「つつか嫌味な質問だなおい！」『ではネプテューヌ』

ネプテューヌ「トッピングによって味が違うんだよ。ちなみに前回食べたのはバジル味。…ブランはいないけど、それは駄目だよ…（死にたくないし…）」

真王「では『黒龍』さん、死ぬな」

ルシアス「縁起でもないわね。ペンネーム『ああ』さんよ。『銀時』ラバーズに質問です。

1・銀さんをどうやって誘惑するとか考えてますか？  
2・仮に誘惑が成功した場合銀さんにいじめられますか？それともいじめたいですか？（まあ、さっちゃんは誰だつて分かるから別に良いや）『』

真王「皆さんは様々な案を考えています。そして受け派ですね彼女等は」

ルーシア「『ああ』さん、廊下に立ってなさい」

ルシアス「ムカつくからそれやめなさい。最後よ。ペンネーム『なめ猫』よ。『俺』どうも、なめ猫です」

ラムザ「こんにちは、FFTのラムザです」

カイト「ごきげんよう、オリキャラのカイトです」

ラムザ「ていうか、しょっぱなから何だいこの形式は…」

俺「すまん、もう我慢できなくなっただんでつい」

カイト「おい…」

ラムザ「…まあいいや、前回から僕も出されたし。さて…まずは感想を」

カイト「ネプテューヌ達の世界で祭をする話に入ったみたいだが、  
またもやネプテューヌの重い話が出そうだな…どうなるやら」

ラムザ「あと、ネプギア達にも注目したい所だね。新作としていよいよ出るみたいだし、僕としても気になってるよ」

俺「今後もしつかり見なければ。あと銀さん争奪戦も…」

ラムザ・カイト「こら」

俺「そろそろいっぺん全員ぶつかるんじゃないかのうw」

カイト「何を期待してんだ…」

ラムザ「あ、そういえばコラボ申し込むつもりらしいけど、今はどうなってるんだい？」

俺「んー…ラムザ達か、春香達か、それとも破壊者…」

カイト「破壊者やめとけ、こっちのなのはさんに迷惑かけちゃだめだろ…」

俺「うむ、そうか…」

ラムザ「本気でやるつもりだったのか…?」

俺「さて、今回も質問やメッセージをしますか」

1・銀さんへ

いつか一夫多婦でやったりしないんかい？w覗きとかもやってるんでしょ？w

2・ビビへ

銀さんとの決着はまだだけど、いつつけるの？

3・新八へメツセージ

カニはサラダで食ってもうまいよ

俺「以上」

カイト「おい1つ目何のつもりだこら」

俺「ではまた！（逃）」

ラムザ「…後でフレアぶっぱなすか…」『……………」

ジト眼で銀時を見る。

銀時「やるかアアアアアア！！！俺は変態じゃネエエエエエ！！！」

ビビ「変態だよ。めんどくさいからやらないよ」

新八「イヤ意味が分かんないんですけど…」

真王「へい、『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい。次回はアルテスガアシスト。では」

第八十九訓：憎しみは所詮己を見失う（後書き）

真王「次回は何とあの男が現る!？」

アルテス「次回『事件には第三者が絡む場合がある』 テイクオフよ。  
ユウカ様くく?」

**第九十訓：事件には第三者が絡む場合がある（前書き）**

真王「ネプテューヌとアリエスの対決。そして真犯人が現れる!？」

アルテス「リリカル銀魂、始まります。ユウカ様〜〜!！」





パープルハート「クウ！」

アリエスは大きく地面を踏んで、突進するサイの如くパープルハートをそのまま襲い掛かる。

アリエス「鷹爪！！」

今度は瞬時にタカが獲物を捕らえるような斬撃が襲い掛かり、パープルハートはそれをギリギリでかわす。

パープルハート「さつきから動きが瞬時的だけど、その剣のせい？」  
アリエス「そう！このエックスブレイドは閃光の如くの瞬間移動でレポートが可能になり、さらには光の輝きが大きければ大きいほど切れ味と威力は倍増、さらにはそれで幻影を見せる事が可能な剣。それだけではない！貴様に復讐するために異世界での力を手にしたのだ！」

パープルハート（…やっぱりみんな異世界で生きていたのね）

パープルハートは心から安心する。

もし異世界でモンスターがいたとしても簡単にはやられないと確信しての安心だ。

逆にアリアはパープルハートの強さに感心していた。

自分の『エックスブレイド』に引けをとらないパープルハートの刹那の瞬間移動術は、『エックスセイバー』の能力でもなく魔力による強化でもない。

純粋なスバル自身の移動速度の速さであった。

アリエスの知っている限りでは、パープルハートの速さ以前より大幅アップしている

アリエス「（相変わらず速い……それに以前より動きのキレが増し

ている！……なら！」『エックスブレイド』、カートリッジロード  
！」  
エックスブレイド Special attack and mo  
bility

ガジャン

『エックスブレイド』がカートリッジをすると、アリエスの足場か  
ら黒紫色の魔法陣があふれ出る。  
パープルハートはどんな攻撃が来るか警戒する。

アリエス「鷹波一閃！！」

パープルハート「（早い！？間に合わな…）きゃああ！！」

飛んできた斬撃が音速を超える速さで来たのでパープルハートは反  
応できずに切られ飛ばされる。

アリエス「これでとどめだ！ネプテューヌ！！」

アリエスが飛びあがってパープルハートにトドメをさすようにエッ  
クスブレイドを地面に挿す体制になる。

このままではやられるところなのに、パープルハートは一つの賭け  
を思い出して、笑う。

パープルハート「あゝ、ここから見るとアリエスのアレが見えそう  
…」

ズザアアアアアアアアアア！！！！！！

パープルハートが言うフードの一人がアリエスの真下にスライデ

イングしてカメラを構える。

アリエス「って何やってじゃアアアアアア!!!!!! / / / / /」

ドゴッ! !

???「グフッ!」

アリエスはスライディングしたフードの人物に態勢を変えて蹴り潰す。

パープルハートは「相変わらずね」な顔をする。

アリエス「このムツリ! どうしてあんたというやつはいつもいつもこんな大事な時に邪魔するわけ!? 狙ってるの! ?」

ムツリ「.....!!!! (ブンブンブン!!!!)」

アリエスがスライディングした人物・ムツリの胸倉を掴んで詰め寄り、本人は否定の首を振る。

アリエス「いゝや! 絶対狙ってたわよ! 思いっきりカメラを構えているのが証拠よ! !」

ムツリ「.....見てない見てない」

ムツリは頑固なに否定する。

するとザックがフードを取ってムツリに聞く。

ザック「.....ちなみにどんなのだった?」

ムツリ「水色のしましま、くまさんイラスト付き」

アリエス「フンッ!!!! / / / / /」

ドガッ！！ズドッ！！

聞いたアリエスが真っ赤になってムツリとザックを蹴り潰した。  
て言うか2人が悪い。

ヒメラ「アワワ、大丈夫でしょうか…」

レグナ「気にするな」

ラート「それないよ…」

ヒメラは戸惑い、レグナは特に興味なく、ラートは突っ込みを入れてる。

レオン「さすがネプテューヌの仲間だな」

ガレーナ「うむ、個性溢れる者たちだ」

チフユ「あり過ぎるのもどうかと思うがな」

グレイ「あいつの周りってこんなんバツカか？」

ビビ「どっちにしろアリエスちゃんって可愛いね」

ザック「そうツスね……。……。……。ん？」

なぜか隣にレオン、ガレーナ、チフユ、グレイ、ビビがいてびっく  
りするネプテユナーズ。

ザック「うおお！！？いつのまに！？っ！か誰！？」

レオン「なに、騒がしいもんだから来て見ただけだ」

とレオンがギリッと拳を握る。

そして強者のオーラが出る。

ネプテユナーズ「っ！？」

ネプテユナーズ一同はレオンの覇気に警戒する。  
イヤ、レオンだけでなく、グレイ達にも警戒する。  
この人らは強いと。

パープルハート「・・・みんなは？」  
ガレーナ「あれじゃ」

パープルハートが他のみんなのことをきくと、ガレーナがある場所に指をさす。

一方その頃、銀時と高杉の戦いも始まっていた。  
木刀と刀のぶつかり合いは激しく、超一流の剣士同士の戦いの領域をはるかに超えていた。

銀時は睨み、高杉は笑い出しながら剣を振るう。  
そして2人の剣がぶつかり合っただけで終わる。

銀時「要するにアレか…テメエはそのアリエスって女の憎しみを利用する為に『鬼兵隊』の一員に入れたって事だったろ？」  
高杉「ククク…利用ねえ…確かに俺ア、アリエスに会った時に誘うつもりだったんだがなア…意外な事にアイツは『鬼兵隊』の噂を聞きつけ自ら入ってきたのさ…おかげで『鬼兵隊』の戦力は増える一方さ…このまま行きゃあ、『春雨』相手に戦争ぶっかける事も出来る戦力になるだろうぜ」

不気味に愉快そうに笑い出す高杉。  
確かに強力な武装集団の『鬼兵隊』にアリエスのような強力な魔導

師が加われれば、『鬼兵隊』はあの『春雨』と双璧になりかもしれない。

高杉「アリエスの中にいる獣はネプテューヌや教会に対する憎しみによつて成長してる……俺はアイツの中の牙を研ぎ澄まし暴れたがつている獣に惚れちまつてね…いつそ俺達と一緒に世界相手に暴れてみねえかと誘つちまつた」

初めて会つた時から溢れていたアリエスの世界に対する強い憎しみ。高杉は彼女の中の憎しみに共感し、鬼兵隊に勧誘したのである。その彼女も高杉の世界に対する憎しみに強く共感し、鬼兵隊の一員となった。

高杉「なア銀時……お前もネプテューヌを見て薄々と気付いてたんじゃねえのか？」

銀時「……」

高杉「甘つたれた空間にいる時は隠れているが…アイツの中にもアリエスの様に強い憎しみや憎悪を持った獣が住みついてやがる事によオ？」

高杉の意見も一理ある。

いかに憎しみを捨てようと決意しても、多少思い出せば一気に増幅されて不の感情が湧き上がる。

ネプテューヌとは言え、それは例外ではない。

彼女の中にも闇は眠っている。

大切な仲間を奪われ、護れなかった悔やみ。

それが全て解放されればアリエスのように復讐鬼となる。

高杉「あのガキもよオ、俺やアリエスの様に全てを捨て、感情のま

まに生きてみたら立派な牙が生えてくると俺ア思うがな」

銀時「……確かにてめえの言う通りだ。どんな奴でも自分の中<sup>テメエ</sup>に闇位え持つてる」

高杉の言葉を黙って聞いていた銀時が喋りだす。

銀時「けどよオ……憎しみを持たずに生きてく事を選んだのはネプテューヌ自身だ……なら例えてめえやアリエスが復讐の道に引きずり込もうとしても……アイツは自分の<sup>テメエ</sup>武士道<sup>ブル</sup>を貫くハズだぜ？」

いくらスバルを復讐の道に走らせようとしても無駄だと銀時は忠告する。

銀時「仮にネプテューヌ自身が復讐に選んだとしても無駄になる……そんな時は、俺達がアイツを必ず止めてやつからなア」

仲間として、そして同じ侍魂を持つ者として銀時はその時のネプテューヌを止めようと決意する。

そんな銀時を見て、高杉は剣を鞘に納めて銀時からゆっくりと離れる。

そして懐から煙管を出して口にくわえる。

高杉「ククク…止めてやるねエ……このまま殺り合うのも良いんだが、あいにく俺の役目はここまででね……てめえとの会話は単なる暇潰しだ……今頃『機動六課』の連中はキリアのアンドロイドとかいう<sup>からくり</sup>人造機械に苦戦中だろうしな？」

高杉の言う通り、フェイト達は今頃苦戦しているかもしれない。速いところ助太刀しなければならぬようだ。

そして高杉は口から煙管を外して煙を吐く。



高杉「俺アここいらで失礼するぜ……生き残れたらまた殺ろうや……」

そう言つて高杉は振り向いてこの場をゆっくりと立ち去ろうとする。

????「スベテ八森羅神様ノタメニ……」

高杉・銀時「っ!!!??」

何処からか声が聞こえ、それと同時に殺気を感じた二人はそこから避ける。

銀時達のいた地点に誰かが剣をふるつた。

そこにいたのは、銀河の世界で戦つたイヴィルソルジャーだった。

銀時（あいつはイヴィル!?何でこんなところにいやがるんだ!?それに森羅神つて……まさかあいつが!?)

イヴィルソルジャーがいることにもしかしてあの男もいるんじゃないかと驚く銀時。

更に屋台の裏から次々とイヴィル軍が現れる。

ちらつと隣にいる高杉は笑っているように見えるが驚いてもいた。

するとイヴィルソルジャーのリーダーらしき雰囲気を持つイヴィルストライカーが命令する。

イヴィルストライカー「敵確認。排除せよ」

そしてイヴィル軍は銀時達に襲いかかった。

時は遡ってアンドロイドとフェイトサイド。

バキィ！

突如、刀が折れた鈍い音が聞こえた。

それは近藤の持っている刀がアンドロイドの紅桜に折られたからだ。

近藤「ウソオオオオ！！？名刀虎徹ちゃんがああああ！」

信じられないほどに絶叫する近藤。

実はコレが虎鉄の模造品である事を本人はまだ知らない。

近藤「ウソオオオオオオ！ルー殿、アギト殿、トシ、これ虎鉄ちゃんか！ウソオオオオオ！」

アギト「うるせーな！言っている場合かぁ！（怒）」

ルーテシア「近藤、落ち着いて！」

近藤「だってコレまだローンが！ウソオオオオ！」

愛刀が折られて叫ぶ近藤に対して怒鳴ってツッコむアギトと、近藤を落ちつかせようと抑えるルーテシア。

アギト「チィ、何でこんなにも多くアンドロイドが来るんだよ……アタシ等ナンバーズや機動六課の連中も大苦戦じゃねえか！」  
土方「全くだ。しかもキリがねえ」

そう、『紅桜』の脅威は闘えば戦うほど強くなれる生きた刀。しかも数がやたらと多い。

しかし一方的に減らないアンドロイドに苦戦しているのも確かであ



近藤「あつあれは妖怪『祭り囃子』！！祭りを妨害する暴走族をこらしめる古の妖怪だ！！！！！！」

ルーテシア「おおー！！」

アギト・土方「……いや、違つと思つ」

近藤の『祭り囃子』の説明に感心するルーテシアに、何か違つと思つアギトと土方。

女性陣「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

男性陣「ラアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

神「死ねやあアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！屑どもオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

それぞれの楽しみを邪魔された事で、怒り満点で潜在能力は最大限。未完成版の紅桜では話にならないほどの強さが発揮される。

大活躍によってアンドロイドは一気に減少されてしまう。

ちなみに普段は怒らない神だが、せっかくのたこ焼き屋をぶつ壊されて怒らない訳がない。

大好物のたこ焼きを黙って見逃す性格なわけではない。

近藤「祭りの神が降臨なされたぞオオオオオオ！勝利は我等の手にありイイイイイイイツ！！」

近藤は彼らの大活躍を気に、一気に勝利宣言をした。

戻ってネプテューヌサイド

パープルハート「・・・凄い光景ね・・・」

レオン「そう思うだろ？」

パープルハートは啞然とし、レオンが同意する。

ネプテューヌズ一同は、「化け物揃いか？」などと思っただらしい。  
「つかあんたらも化け物の領域だ。」

一方のキリアは、8体のアンドロイドと共に戦いの状況を眺めている。

いかにキリアでも状況の悪さは理解していた。

だが彼はそれでも抗うかの様に奇襲の開始しようとする。

そんなとき、源外、スカリエッティ、新八の3人がキリアの前に立ちはだかる。

キリア「……………源外さんにスカリエッティさん……………来てたんですね」

源外「小僧……………自分が今してる事を分かっているのか？」

ゴーグルに隠された悲しめな眼で源外はキクナ工を見る。

かつて自分と同じ道を進もうとしているからだ。

源外「この勝負は小僧の負けだ……………以下に最新型機械技術に『紅桜』

を加えても、野朗共の強さはそれを上回っている」

スカリエッティ「それに、ほとんどはもう逃げたしね」

源外とスカリエッティはキリアの敗北宣言をする。

これ以上やっても、罪が重くなるだけである事を知らせるために。

キリア「そうですか……でしたら今度は機動六課とナンバーズを壊滅させる為に……」

新八「キリアさん!!」

キクナエは更に奇襲を開始しようとする中、新八が必死に叫び止めようとする。

???「アラアラ、随分と面白い見せもんじゃない?」

聞き覚えのある声に7人は振り向く。

そこには、余裕の笑顔を浮かべているパープルハートがいた。

アリエス「あ!?!いつの間に!?!」

アリエス達も今気付いた。

パープルハート「ヒーローショーか何か?私にヒロイン役がいいわね……」

キリア「貴方じゃ役不足です。どいてください」

パープルハートを睨みつけて言い出すキリア。

復讐心に取り付かれた暴走はそう簡単には終わらない。

パープルハート「…言う義理はないけど、復讐したところで虚しさしか残らないわ」

それでも彼に取り付いた復讐心は取り除かなきゃいけない。

パープルハートはそのつもりでこの場にやってきた。

パープルハート「お父さんが泣くわ……こんなことは誰も望んじやない。アナタが一番分かっているはず」

その言葉にキリアはだんまりとなる。

それと同時に、脳内で父親と過ごした楽しい思いでが浮かび上がる。

キリア「……分かっています……だけど苦しくて仕方ないんですよ……都合で罪を擦り付けられ事故に見せかけ殺された父の屈辱感や絶望。それを許せない自分……そんなものばかり背負って生きていたとは思いません……それに戻らないものばかり眺めて生きていくのは、もう疲れました」

分かっているにも認められない結果に悔やみ、もがき、悲しむキリア。勝手に父親を罪人扱いされた屈辱にもう耐えられなくなったのだ。

キリア「もうどうでも良い。そして今まで犠牲となつて死んでいった者達にしてやれる事はない事も百の承知……最後は自分の道を進んで死にたいんです……だから、どかないなら貴方とは言え容赦はしません」

死を覚悟したキリアはもう誰も止められない。

そう思わせるほどにキリアの覚悟は大きかった。

しかし、それでもパープルハートは動かない。

パープルハート「どかない……私にも通さなきゃならない筋つてモノがあるの」

パープルハートはエックスセイバーを抜く構えをして、キリアを睨みつける。

そしてアンドロイドは紅桜を構えてパープルハートに対抗しようと





パープルハートは皮肉な言い方をする。  
そして現れたのは銀河で出会ったネオだった。

ネオ「久しぶりだな？宇宙の世界で出会って以来か？身の程知らずさん？」

パープルハート「身の程知らずなのは、私達を舐めているあなたでしように」

ネオ「まさか、」

ネオはおかしそうに頭を抱えて笑う。

ブラックハート「あなた…ネオ!!」

ホワイトハート「テンメエ…よくも性懲りもなく現れやがったな!？」

グリーンハート「しかも、私のリーンボックスに足をふみいるなど…」

他の女神たちは殺意を放ち、ネオを警戒する。

ネオ「クククク、そう警戒しないでくれ。特別に面白いものを見せてやろう」

そう言っ指を鳴らすと、黒い魔方陣の中から人型のイビルが現れる。

パープルハート「そいつは…?」

ネオ「こいつは変身能力を得意とする奴だね。例えばこんな感じだ」

ネオが説明した後、人型イビル・イビルゲンガーは形を変えて、パープルハートとなった。





銀八「教えて!!」

全員「銀八先生!!」

アルテス「ユウカ様の信者、アルテスでございますわ」

銀八「まゝた変態か。しゃあねえペンネーム『リイーン』からだ。

『どうも!! 更新、お疲れ様です!!』

神「いよう）。）。ノ ってか!! また俺様活躍していないし  
!!!!?」

いやいや、どこに活躍の場が在ります?

神「いいじゃねえかよ!!! あの人形共をぶっ壊すとかそれぐら  
いはしてもサアツ!!!!!」

貴方の場合、今頃多分、あそこ上空で、浮かびながら盃片手にこんな事を言ってるかもしれませんよ?

神「クツクツクツ……………面白し、あな愉快なり。復讐に取りつかれた愚かな暴徒の声、まこと心地よい。やはり祭りには、このような騒動が付き物と言える。クツクツク、せいぜい俺を楽しませる神樂を舞うがいい、人間共……………クツクツクツクツク、クハハハハハツ、アツハツハツハツハツハツハツハツ!!!!」

っという感じに

神「あゝ、ありえそう　めっちゃ傍観してると思っわ」

ってか、今までの戦闘も、全部こんな感じで傍観してますね、きっと

神「だろうなあ　空に浮かんで、攻撃の余波が来たら八工を払うようにはじいたり　まじで俺そう言う事してるわ、うん」

で、仲間がピンチになった時だけ、ほんの気まぐれ感覚で助力すると思っんですよね

神「うわあなにその上から目線w　俺じゃんwww」

ですから、貴方が活躍するのは、そう言った時だけですよ……………多分

神「まあ好待遇を期待しようw」

そうして下さい(これではらくは、駄々こねる事はないかな)

神「なんか言った?」

イエナニモ。では!!　次回も楽しみにしておりますので、執筆、頑張ってください!!!　失礼します!!!

神「ばいばい!!」

あ、質問があるんですけど

神「あるのかよ」

・新八君に質問。もし、銀さんを超えられる力を上げるよ。それも対価無しで。と、この神様が言ってきましたら、どうします？ もらいますか？

神「おお、俺太っ腹だなあ……………って俺がやるのかよ!!!??」

貴方以外に誰がいます?」

新八「めちゃくちやほしいぞオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

真王「だそうです。『リイン』さん、廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『フリーダム』さんだ。『Sフリーダム』復讐の連鎖は、簡単に止める事は、出来ない」

ジャステイス「だが、決して諦めない事だ」

デステイニー「頑張れネプテューヌ!!」

レジェンド「応援しているぞ」

アカツキ「では、質問の方に行こうか」

銀時に

デステイニーと1対1で、勝てるか

ネプテューヌに  
銀時と二人つきりに、さあどうする？

デステイニー「おいしいいい！！勝手に俺を出すな！！そして二つ目は、お前が聞きたいだけだろ！！」

Sフリーダム「やれやれ……」

更新楽しみにしてます』銀時ならたぶん銀狼夜叉持ってるから勝てると思うよ？」

ネプテューヌ「銀さんと二人つきり！？えへへ、どうしよう」

真王「恋だな。『フリーダム』さん、廊下に立ってなさい」

アルテス「続いてはペンネーム『鳴神 ソラ』ですね。『マリオ』バカだろ」

ルイーダ「（あっさり言った！）」

マリオ「何でネプテューヌを裏切り者とするのかわかんねえ……そう言うのはもうちょい調べろ」

明久「ってか……名前が……」

ムッツリーニ「……俺じゃない」

スネーク「言っていないからな……」

リュカ「ツツコミ使い！」

ネス「ハーレムは暖かく楽しく見守るだよ　ただし強制的なのはダメだー！」

フォックス「叫ぶなよ…ネプテューヌ達に質問『ソロについてどう思う？』」

スネーク「一同に質問『ソロに称号を付けるならどう言つのを付ける？』」

ネス「質問『内のチルノについてどう思う？』」

ルイージ「それにしても…あの男…」

(一同の目がマリオに…)

マリオ「何で俺？」

次回を待ってます！『…まず最初の質問』

ネプテューヌ「ソラとゼロの融合名だね」

ノワール「普通ゼロって名乗りなさいよ。…あ、マリオの仮面ライダーゼロとばくるわね…」

ブラン「…ソラもどき」

ベール「ウルトラマンゼロですか…」



アルテス「続いてはソロの称号よ」

紙に、『独奏』、『ウルトラマンゼロ』、『ソラもどき』、『獣使い』と書かれている。

アルテス「最後にチルノだけど…」

全員「やっぱ馬鹿だな」

真王「だな。『鳴神 ソラ』さん、廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『ウインド』さんからの質問だ。『ウインド』遂に始まったか……」

リリス「果たしてどうなるか……見ものだな」

ウインド「実は家の小説から1人来てるんだよね」

リリス「誰？『やほ』シエル？」

ウインド「そう。家のかいてるネプテューヌとなのはのコラボの主人公でネプテューヌ達の恋人のシエルだ」

シエル「暇だから遊びに来た」

リリス「そうか」

シエル「にしてもネプテューヌ達…大丈夫かな？」

ウインド「やっぱり気になるか？」

シエル「まあね」

ウインド「ところでさ。二人がそろつと絵になるな」

シエル「そう？」

リリス「そりゃ全員男の娘だからな」

ウインド「そう言えば二人は誰かと戦ったことはあるか？主人公の中で？」

シエル、リリス「セレス」

ウインド「マジか!？」

シエル「ふふふ……あの時はぼこぼこにされたよ……」

リリス「改めて思い知らされた……上には上がいると言つことを……」

ウインド「……聞くけどどうなったの？」

シエル「こっちは最初から変身までしてやりあったのに……セレスは3、4割程度の力でしかやりあわなかった……」

ウインド「リリスは？」

リリス「ダークトリガーを使ってやっと4割……」

ウインド「……俺はとんでもない主人公を作っちゃった（しかもやりあったセレスの状態は普段の4割程度。つまりリミッターを体と魔力にかけてる状態で二人にかつた。本気で殺れば間違いない瞬殺だな）しかたないだろ。相手がセレスだったんだから」

シエル、リリス「うっ……」

ウインド「さて、質問にはいるか？真王さんに頼みだ。次回、セレス達を出してくれませんか？お願いします！」

リリス「転生者メンバーに質問。セレス達とやりあって勝てるか？シエル「じゃあ俺も。なのはメンバーに質問。狂気に吞まれたメアとやりあって何分、いや何秒生き残れる？（黒笑）」

リリス「黒いな……」

ウインド「と、とりあえず返答お願いします！」

リリス「ところで今回の話明らかに黒神さんの（ウインド）「それ言っちゃだめ！」「」リリスとシエル以外は出てますよ？」

転生者組「難しいかな……」

レオン「いつでもいいぞ」

ガレーナ「フフ、余も楽しみじゃ」

真王「それからなのはさん達は『無理、勝てない』と言ってました。『ウィンド』さん、廊下に立ってなさい」

銀八「次はペンネーム『黒龍』さんからだ。『黒龍』ネプテューヌとかつての仲間のアリエス達の対決が始まりましたね」

銀時「まああいつらの勘違いだけだな」

ソラ「ネプテューヌなら分かり合えるだろ」

黒龍「でも、昔はネプテューヌと共に戦った人たちですから強いでしょうね」

銀時「取り戻すのは容易じゃねえな」

黒龍「なににせよ、ネプテューヌがまた一つ成長しそうですね」

銀時「まあ取り戻したら取り戻したでキャラが増えてどんどんカオスになりそうだけだな」

黒龍「とくにあのムツリなんかバカテスのあの人そのものですよね」

銀時「まあ分かりやすいしな」

黒龍「じゃあ質問します。ネプテューヌに質問。『ネプテユナース』のメンバーの中で一番仲の良い人は誰ですか？」



ケン「熱中症対策として水分補給！！シャマルドリンク！！」

ブランの全身にシャマルドリンクを浴びせた。

ブラン「うげぎべうげあああああ！！！！！！」

口に含んでしまいこの世のものとは思えない悲鳴を上げて気絶した。

ケン「ブランをあつちに帰します。質問です」

ブランを真王さんの所へ帰り、質問をする。

ジャンヌと新八へ

貴方達は新八の姉であるお妙にご報告へ行きますか？あの人は未来の義姉になる人ですから・・・

リリカルメンバーへ

自分の作品でははやては天使の力に覚醒しました。貴方達は勝てる自信はありますか？

銀さんへ

もし自分のラバーズが重度のヤンデレになったらどんな対応をしますか？

ケン「以上ですね。イメージ声優の件ありがとうございます。モリ

ガンボイスって田中理恵さんですか？マーブルVSカプコン3で変わっていましたし……』では順番に応えますと……」

ジャンヌ「未来のお義姉様にー!!」

新八「僕なんだかいやな予感しかしないんですけどー!!」

リリカルメンバー「何…だと…?」

はやて「うちが天使か」

銀時「Nice boatイヤアアアアアアアア!!!」

アルテス「……ケン」人様のキャラを殺さないように。次はペンネーム『なめ猫』よ。俺「どうも、なめ猫です」

ラムザ「こんにちは、ラムザです」

カイト「ごきげんよう、カイトです」

俺「さて、次の話も読ませてもらいましたが、シリアスはまだ続きますな」

ラムザ「ネプテューヌが友と戦うことになったのか……だが……」

カイト「ああ…俺達から見ても、いろいろ言う言葉はあるが…控えめにしないと。んじや感想から言おうか」

俺「ねぶねぶの重たい過去が、もし原作本編にもあったらどんなストーリーになるか…そんな好奇心をくすぐるほど、いい話を書いてるなあというのがまず1つ」

カイト「次に、アリアだったか？あいつとは友達であるらしいが、ちよつと薄く感じてしまったのは俺だけか…?」

ラムザ「いや、わからなくもないよ？あれは、まだ本当の絆っていうのができてない状態にあるだけだと、僕は思ったよ」

カイト「なるほど、『友』の何たるかをどっちもまだ知らない様子

って考えてもおかしくはないか。けど、憎しみによる狂いつぶりが強いんだよなあ……」

ラムザ「この手の話は、僕達の方では1、2つぐらいしかしない予定だから言ってもいいかもね。前に他の読者達が憎しみについて意見をしている所も見させてもらったけど、これについても正解はないんだよね……」

俺「復讐を賛美する人もいましたからねえ……何とも言えないっちゃ言えないんですが……それもだけど、どちらかというところ『その先』のことが心配かなと」

ラムザ「そう……復讐にもいろんな形があるが、時として復讐がただの八つ当たりになる時、またはやりすぎになる時、そして……実はただの逆恨みになったりする時など、復讐心に捕らわれたままやる行動によって、その先が惨劇続きになるようじゃ……あまりにも悲しいものだよ……」

カイト「そうだな……賛否両方を考えて答えると、復讐の先にあるものを見据え覚悟できないのなら、復讐はするべきじゃない。そして、復讐は時として惨劇を呼びやすい……ま、俺達は復讐には否定的な方だけだな」

ラムザ「願わくば、アリアもそれに気付くといいのだが……よく見ておこう」

俺「さて、今回はまじめに質問ですが……」

1・ビビへ

百合ハーレムの先に何を見る？

2・ネプギアへ

今のネプテューヌの話を見ていて、どう思う？

俺「以上。ではまた」

ビビ「その先？分かってないなめ猫。その先は永遠の愛を完成させるのよー！」

ネプギア「復讐はいけないことです！！復讐をしたって得られるのは虚しさしか残りません！！」

真王「その通りだ。故に『なめ猫』よ。廊下に立つのだ」

銀八「（何雰囲気変えてんだ？）次はペンネーム『月光閃火』さんだ。『ども』月光閃火だ。

しかし「アリア以外の『ネプテユナース』の面々が、何だかバテスの主要キャラっぽい気が「とくにムッツは（汗）。

輝刃「そこはそつとしておいてやれ…。と「質問「行くぞ？まずは俺からだ。」

1・真王に質問「前に閃火がメッセージか感想書きで投稿したオリキャラの事なんだが「現在の状況を教えてくれないか？

あ「そういえば、書いたね俺…。確かにあれから約1ヶ月って所だけど「ちよつと気になるかな。次は俺からだ。

2・アリエスに質問「正直言って、好きな男性のタイプって「何？

輝刃「完全に中学生並の質問だな「（汗）。」

うう「だって気になるじゃんかよ「撫で撫で（そう言いながら、遠隔技法でアリアの頭を優しく撫でる）『スマン、作者は最初諦めようと思っただけだ』」



ネプテューヌ「酷くない!？」

アルテス「ストーリーがあわないだけよ。まあこの祭編が終わったやるつもりよ。次はアリエスね」

アリエス「うん、かつこよくて私に着いてくれる人ですね。それから撫でないでください」

そう言うがいつは満更じゃなかったり…。

真王「では『月光閃火』さん、何か待つちゃってスイマセン。次はペンネーム『HARU』さんだ。『ポカブ』何か、ヤバい展開になってるブーツ」

ミジュマル「アリエスの気持ちも解らない…でも!！」

ツタージャ「やっぱり、どんな理由が有ろうとも復讐は間違っている!！」

エムリット「キリアもアリエスも勝手過ぎだよ!！」

ポカブ「そうだブーツそれではただの自己満足だブーツ!！」

ツタージャ「二人に質問するけど、守護女神達の妹達はどう思っているの?立場じゃなくて、個人としての思いで答えて!！」(グラスミキサーでアンドロイド達を一掃する。)

ミジュマル「でなきや『シエルブレード』で駒切りにするよ!！」  
(そう言うとはタチでアリエスの剣とアンドロイド達のに付いてい

る紅桜を使い物に成らない位に切り刻んだ。(

ポカブ「オイラも！『ニトロチャージ！』」(ニトロチャージでアンドロイド達を火だるまにする。)

エムリット「私だつて！！『サイコシヨック！！』」(サイコシヨックで『電杯』に誤差道を起こさせ、同士討ちにさせている。)

HARU「言っている事は間違つてないけど、暴れ過ぎ！」「『」

キリア「私としてはかわいらしい人だと思います」

アリエス「ネプテューヌよりもしつかりしてそう……あ！失言でした！」

アルテス「もう遅いわよ。『HARU』もう廊下に立ちなさい。ペンネーム『きつと木の精だ』からの質問。『木の精だ』ご無沙汰しております、きつと木の精です！」

恭平「復讐ねえ……俺はやろうと思った事ないから気持ち全然わかんねーわ」

こなた「ん……でも、否定は出来ない、かな？あんな事やられたら例え八つ当たりとか自己満足とか言われてもやりたくなると思うよ」

木の精だ「でも何もわざわざ祭りの日にやらんでもいいんじゃないかとお思いながら質問一つ行きます！」

真王先生に質問



ジャンヌ「新八く~~~~ん!!!」

真王「は、い、では『黒神』さん、久しぶりに感想をありがとう」

アルテス「次のアシストはチフユさんよ…じゃあね」

**第九十訓：事件には第三者が絡む場合がある（後書き）**

真王「真実を知ったネプテューヌは暴走知る修羅と化した。果たして銀時達は間に合うか？そしてゲーム業界を救えるか？」

チフユ「次回『戦友は絆が深い』 テイクオフだ」

第九十一訓：戦友は絆が深い（前書き）

真王「『ゲーム祭編』の最後です。それでは」







ガレーナ「軽く一体目か、まだ余裕じゃな」

3体のイヴィルナイトに囲まれながらもガレーナはレオンを見ている。

ガレーナ「さて…」

懐から薙刀を取り出し、囲んでいた3体のイヴィルナイトを切り捨てた。

ガレーナ「余も負けていられんわ！」

グレイとビビは5体のイヴィルナイトに囲まれている。

ビビ「スツゴイ気迫してるね〜」

グレイ「騎士<sup>ナイト</sup>ねえ、俺にはどうでもいいことだがな」

イヴィルナイトから発する威圧に感心するビビにどうしても好きさそうにするグレイ。

ザック「どうでもよくねええ!!!」

グレイ「？」

ビビ「え？」

イヴィルナイトx5「？」

ところがザックが否定を出す。

ザック「わかってないないおい！騎士<sup>ナイト</sup>、それすなわち主君を守ると

「いう重要な役割を持つ兵士さ！」

「つかつかと歩いて語るザック。」

ザック「騎士という気品を分らん奴はそれを語る資格はな……」

ガツンッ！

ザック「イデエ……！」

「ビシッ！とカッコよくグレイ達を指差して言うザックだが、後ろから剣で叩かれる。」

「ビビ「何がしたいのあの男……」」

「ビビは呆れるしかなかった。」

ザック「イツテエなこのやる！そっちがその気ならこっちもやっつてやるぜ……！」

ザックは起き上がってバスターソードを取り出した。

それに反応したイビルナイトの一体が剣を振り上げる。

ザック「ウオオオオオオオ……！」

ガギイン……！！

ザックとイビルナイトがぶつかり合った。

ザック「見せてやるよ！ブラックウイング……！」

とザックのマントの上から黒い片翼が現れる。

ザック「喰らえエエえ！！！」

水平に飛行してイヴィルナイトを切り捨て、イヴィルナイトを一体撃破した。

ザック「どうよ俺の実力は！」

ビビ達に無かってサムズアップするザック。

そんなザックの後ろにイヴィルナイトが剣を振りかぶって……………動いていない。

いや、正確には動けない。

ムツリ「ニン…影払い…」

イヴィルナイトの影に出来ないが刺さっており、影払いを出したのはムツリだった。

そして一瞬消えたと思ったらイヴィルナイトの目の前に現れる。ムツリが刀をチャキンと納めると、

イヴィルナイトは倒れた。

グレイ（アレがネプテユナーズか…、特殊部隊は伊達じゃないと言うことか…）

グレイは少し評価する。

そして残り三体を試してみる。

ヒメラ「レイジングボルト!!」

ヒメラがマジッククロッドで魔法を発動させ、落ちてきた雷でイヴィルナイトの一体を撃破する。

レグナ「ウオラアアアアアア!!」

レグナは右手に黒い炎を纏い、イヴィルナイトを殴り倒す。

ラート「行きます」

ラートはんなんだが真っ黒でとげとげが多いバットを構える。  
すると目が黄色から真っ赤の染まって…

ラート「とつとと潰れやがれこの木偶の坊どもがああああ!!!!」

まるで人が変わったかのようにボコスカとイヴィルナイトを潰しまくる。

ビビ「ちよつとオオオオオオオ!!!!??あの子メツチャ人が変わってるんですけどオオオオオオオ!!!!」

ラートの豹変にビビは驚かすにはいられない。

ブラックハート「ああ、ラートは二重人格なのよ」

ホワイトハート「戦闘欲が出ると人格が変わるの」

グリーンハート「そして容赦ないのが玉にきずですが…」

ビビ「ああ、そう…」

女神たちの説明にビビは顔を引き攣るしかなかった。

グレイ「それはどうでもいいが、後ろも気を配っとけよ」  
ビビ「へ？・・・うきやあ！！」

グレイが今にも振り下ろそうとするイヴィルナイトを見ていい、ビビはギリギリ避けた。

ビビ「ツ~~~~！！やってくれたわね！！あんた達に苦しい物をくれてやるー！！」

ビビはイヴィルナイトにそう言つと、

ビビ「謳よ、世界に響け……………」  
全員「？」

突如、鉄琴を奏でるような音が、聞こえた……………

ビビ「詩」ヒュムノス rejected the darkness (拒絶される闇) 『』

それは、悪意なる物を追い払う詩。うた

ビビ「真紅の闇よ、うち払え 混沌の闇を消滅せよ 星の光よ、混沌をうち払え」

グレイ「…………妹…………」  
神「詩か、…………」

アリエス「これは…………？」  
なのは「なに？この歌？」



とパープルハートがエックスセイバーを向けて言う。  
先ほど体の中に渦巻いていた殺意と怒りがきれいさっぱり洗い流された気分だ。

ネオ「フフフフ、この手の場合は奥の手を隠すもんだろ?」

ネオがパチンと指を鳴らす。

すると新たなイヴィル・イヴィルキマイラが現れた。  
牛、鷹、虎の頭と蛇の頭の尻尾を持つモンスターだ。

イヴィルキマイラ「グモオオオオ!!」

パープルハート「クッ!」

いきなりイヴィルキマイラが突進してきたが、パープルハートが素早くかわす。

だが急カーブUターンでもう一度接近してきた。

パープルハートは接近するイヴィルキマイラを見て、にやりと笑った。

パープルハート「アリエス!!」

アリエス「ここに!」

パープルハートがアリエスを呼ぶとアリエスが隣に現れる。  
そしてお互い剣を構えて、

パープルハート・アリエス「ソクソクリュウガ歌歌竜牙!!!」

居合切りの如く、イヴィルキマイラを倒した。





ネオ「これまたずいぶんと準備の早い…」

ネオはそれを聞いてあきれる。

アリエス「真実を知った以上、私はお前を許さない。私は、ネプテユーンさんを守る騎士となる!!」

高々と思いを言うアリエス。

だがネプテユーンズの男性陣はあくあという感じになり、ネプテユーンズ含む女性陣のほとんどは少し顔を赤らめる。ついでに隣にいるパープルハートも顔を赤くする。

パープルハート「アリエス、それ遠回しに告白を言ってるわよ…」  
アリエス「え? …… ああああああつ!!」

パープルハートに突っ込みにアリエスは惚けるが思い出してシャウトした。

アリエス「うう… 勢いはずみでいってしまった…。しかし悔いなどいりません!! 今ここに正式な告白をします!!」

アリエスはパープルハートの手を取ってこう言った。  
周りのほとんどは彼女達を応援する声が。  
パープルハートはにっこり笑って、



いきなり刀を振り回してきたので驚く銀時。

アリエス「うるさい！私のネプテューヌさんを誑かし、あまつさえ獣のように襲おうと考えているだろ！？」

銀時「んなわけあるかアアアアアア！！！大体あんなちっこい体に何の興味もねえよ！！！」

パープルハート「なら今の私ならいいわけ？」

銀時「そう言う問題でもねえよ！！！」

アリエスと銀時の言い合いは少し醜い。

アリエス「こうなればあなたの首を切り落と」「止めなさい！」「あいた！」

剣を構えて殺す気しているとパープルハートに叩かれた。

パープルハート「かつてに人を殺そうとしないの！」

と言ってアリエスを抱き寄せる。

アリエスはパープルハートの温かさに頬を赤らめる。

アリエス（温かい…このままでいいかも…）

アリエスは安心そうな顔をする。

パープルハート「言っておくけど私は銀さん一筋だしファーストいただいちやってるから？」

ギョオツ！！

だがパープルハートの一言にアリエスは銀時を睨む。  
それを見た銀時は怖気づいた。

ネプギアはひきつった笑いを浮かべ、ユニは軽蔑する目で見て、  
ムとラムは顔を赤らめる。

ネオ「貴様ら！ふざけるのも大概にしろ！！なんなんだこの茶番は  
！！」

レオン「悪党を前にして茶番は駄目だったか？下種の本性が漏れて  
るぞ？」

ネオがこの光景に切れて、レオンがそう言う。

パープルハート「あなたの目的は今ついえた。覚悟しなさい！」

ネオ「潰えたって？ところが私の計画はまだ終わってないんだよ」

パープルハートの言葉をしり目にネオは余裕でいう。

ネオ「残念だったな！私は世界を滅ぼすまで終わる気はないからな  
！」

????「んじゃここで死ぬか？」

ふと後ろから声が聞こえ、その者の攻撃を止めるネオ。

ネオ「別次元の神か」

神「俺様は滅ぼす方は止めねえが、俺様の物を壊すのはいただけね  
えな！！」

と虹色に輝く大鎌を振る。

ガシイッ！

ネオ「!?!」

ネオがなにかに捕まった。  
バインドだ。

神「くらいな、デストロイフォー……ルール（劣化1/1  
000）!!!!!!」

と黒い光がネオに向かって降り注がれる。  
煙がはれるとイヴィルガードマンを盾にするネオがいた。  
イヴィルガードマンの体中がひびが入っている。

神「ちよびつと本気を入れてみたんだが、なかなかの硬さだなおい」  
神はイヴィルガードマンの硬さを評価する。

ネオ「（いかな、まともな相手をすれば勝ち目はない。世界を地  
獄に落とすにもやられるわけには……）今日は部が悪いな。引くとし  
よう」

パールハート「待て！」

ネオはどこかへ転移してしまった。  
変身を解いてネプテューヌになる。

ネプテューヌ「逃げられたね……」

ネプテューヌは拳を握る。

アリエス「ネプテューヌさん……」

アリエスはそんなネプテューヌを見る。

ネプテューヌ「でも……」

ネプテューヌはアリエスに向き直る。

ネプテューヌ「また会えてうれしかったよ、アリエス」

それを聞いたアリアは驚き、目に涙を浮かべる。

アリエス「う、うええええ……ん！！私も会いたかったです……！！！」

拳を泣いてはネプテューヌに抱きつく。

ネプテューヌはそんな彼女をよしよしと慰める。

ザック「ころころとキャラ変わりやすいな」

アリエス「なんか言った？」

ザック「言ってますん」

ザックの呟きにアリエスが睨む。

アリエス「……ん……ごほん、我ら『ネプテユナーズ』ただいま戦線に復帰いたしました」

ネプテューヌ「ん、それじゃあ、また私達と一緒に戦ってくれる？」

アリエス「喜んで！」

こうして、アリア達『ネプテユナーズ』は仲間に加わった。

グレイ「ついでにしておくが、もう少し味方が出来るぞ?」

とグレイが後ろを指差す先には、エール、コヨリ、メア、セレスだった。

ヴィヴィオ「あ、さっきの」

エール「また会ったね」

グレイ「さっきの戦いを見て、一緒に戦いたってさ」

はやて「それは願ってもないことや。協力するで」

『エール』『コヨリ』『メア』『セレス』が協力することになった。

勇華「それにしてもセレスねえ、初めて会った感じがしないわね」

セレス「奇遇ですね。私もあなたみたいない人とは初対面とは思えないんです」

勇華「なんて言うか、私達いつか恋人になれるかしら?」

セレス「…あなたが積極的にかと思うけど…」

くねらせる勇華に冷や汗を流すセレス。

こうしてゲーム祭は無残な姿になったが、ベールによるなんやかんやで復活し、みんな祭を楽しんで行きました。

そしてキリアは自分の罪を償うためにプラネテューヌでひっそりとくらしているのは余談である。

【ゲーム祭編…END】

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!！」

チフユ「今回の質問のコーナーのアシスタントは私がやるっ」

銀八「おう、じゃあ行くぜ？ペンネーム『鳴神 ソラ』さんからの質問だ。『ソロ』おい、最初の称号は関係ないか…」

チルノ「と言うかバカの一言で終わった!？」

ゼロ「行くぞ!あいつを止めに!」

リュウケンドー「良し!」

ソロ「パーティの前の出会って事で行くか…」



ネオス「はい！」

ネクサス「……………了承」

クツパ「行くのだ！」

冥王「なの！」

銀次「うん！」

ルイージ「僕も！」

フォックス「今度はヴィヴィオとプリニーに質問」ソロについてどう思う？」

スネーク「質問」内のピットについてどう思う？」

ワリオ「同じく」内のピットに称号を付けるならどんな感じだ？」

次回を待ってます！」ズバリお答えしよう」

ヴィヴィオ「空お兄ちゃんとそっくりだね」

プリニー「ウルトラマンッス！」

真王「彼は天使、それなのに破壊者はちょっと違和感がある。ちなみに称号は……」

紙に、「飛べない天使」『天使なのに破壊者』『シヨタ』『ヤラレ

チャッタ』と書かれている。

チフユ「では『鳴神 ソラ』よ。背筋を伸ばして廊下に立て！次はペンネーム『ケン』だ。『統夜』皆……祭りを邪魔されたら怒るのは無理も無い」

はやて「そっちの私とリリカルメンバー達……驚いてるな」

統夜「まあな……身体能力も規格外になる可能性もあるからな」

はやて「ネオつちゅう奴は酷いな……ああいうやり方は許せへんな……」

統夜「いくら神でもいつか報復がやって来るぞ……ギルシアへ質問……アンタはレーティアと可愛い幼女……一つの選択肢しか無い場合はどちらを助ける？」

はやて「あつちのりりカルメンバーに質問や……私が天使と聞いて似合わないと思った？」

最後は近藤へ

新八やジャンヌに対し義兄さんと呼べと言いましたか？

止めた方がいいですよ。お妙と結ばれる可能性は0に近いのに……  
以上です。

はやて「天使になった私って統夜の剣術とか扱えるんか？」

統夜「そうだな……瞬歩は勿論刹那と月牙天衝のような技が扱え

る・・・レオン教官から基礎的な事を学んでからだな・・・瞬歩と刹那は俺しか出来んし・・・教えるぞ」

はやて「ありがとう・・・統夜・・・」

統夜「雪蓮やシャルさん、メアリも一緒だが・・・」

はやて「そ、そうやな・・・私だけやと・・・不公平やしな・・・あははは・・・」

統夜「人族の場合・・・魔法で補うしか出来ないかな・・・ソニックームーブとかあるんだし・・・人間にも可能性があるよ」『一つ目ならあいつは絶対両方取る気だぞ・・・』

真王「それとリリカルメンバーははやてが天使なんて似合わん。どちらかというと墮天使たぬきだな」

はやて「ちょいまちい。今墮天使と書いて何と呼んだんや？」

真王「木の精だ！」

チフユ「字が違うぞ。最後は近藤、答えろ」

近藤「いやまだ呼んでない。だがお妙さんと結婚するのは確実だ」

真王「諦めの悪い・・・。『ケン』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「続いて、ペンネーム『フリーダム』さんからの質問。『Sフ  
リーダム』黒幕登場!!」

ジャステイス「ネプテュー又達の絆を砕いた張本人!!」

デステイニー「許せねえ!!」

レジェンド「ネプテュー又落ち着け!!やみくもに攻撃しても通用しないぞ!!」

アカツキ「どうなっちまうんだろうな…」

ノワール「とりあえず、質問に移る…」

銀時に

この世から、パフェというものがなくなったら、どうする？

銀魂組・リリカル組に

カービィ100人から、吸い込まれず（食われず）に生き残れるか？

スターゲイザー「何か、吸い込むの裏に別の意味の言葉があるような…」

更新楽しみにしてます』っておいイイイイイ!!パフェが無い世界なんていらねえよ!!」

銀時「そうだ!!パフェが無いなら作ればいいんだ!!」

チフユ「作るのか？次の質問だが、ほぼ全滅が目に見えるな」



アリエス「私はネプテューヌさん一筋ですので（キツパリ）」

真王「うわ言い切った。では『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

チフユ「次はペンネーム『亀鳥虎籠』だな。『上条

「汚ねえことしやがる、あのネオって野郎」

剣心

「他者の信頼をあのような形で砕くとは、許せん！」

一方通行

「どの世界でも、汚ねエ考えの野郎がいるみてエだな！」

沖田に2つ質問です。

1. 僕の小説『万事屋奇譚幕』では、土方の影が薄くなっています。嬉しいですか？

2. 『銀魂ライダーディケイド』では、一番活躍しています。嬉しいですか？』では沖田、答える」

沖田「どっちかって言うと土方さんがくたばる方が嬉しいんですけどさあ」

チフユ「人を殺すな！」

バコツ！

沖田「オゴオツ！」

沖田はチフユのチフユバスターを受けた。

真王「本の角っ子は痛いぞ〜。『亀鳥虎龍』さん、廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『黒龍』さん。『黒龍』おお、ここで黒幕登場ですね」

銀時「アリエス達もこれでネプテューヌと和解するだろうな」

ソラ「ま、真実知ったしな」

黒龍「このままあつちのアリエスがネプテューヌのライバルになると思っただんですけど」

銀時「やっぱアレじゃねえか？新キャラなんだから敵キャラよりも味方キャラにしたいって奴じゃねえか？」

黒龍「まあ気に入ったキャラはだいたい主人公の味方にしたいって思うのは当たり前ですからね」

ソラ「それにしてもだ、キリアもアリエスも利用されたってところだな」

銀時「まあネオならやりかねないだろ」

黒龍「まあそろそろお開きにして質問いきます。今回は新八と神楽と土方から質問があるそうです」

新八「神さん、真王さん、女神四人に質問です。なんか知らないんだけど最近読者から何故か罵詈雑言が耐えません！なんでいつも僕だけこんな目に遭わなきゃいけないでしょう！？なにか良い対処法があったら教えてください！！ホントマジで！！」

神楽「私はそっちの女性陣に質問アル。あ、答えられる人数だけで良いネ。最近ぱっつあんがロリコンオタクに堕ち気味と言うかもう堕ちてしまったアル。さすがにキモいからなんとかして欲しいネ」

土方「そっちのメガネに質問だ。お前、彼女が出来たらしいけどよ、こっちのお前は読者から罵倒の嵐、そしてロリコン疑惑のある可哀想な奴になっちまった。それで、そんなお前を見てどう思う？」

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『順番に答えるなら、新八がカツコよくパワーアップする方がいいかと」

神「俺様なら神の力を授けようか？」

女神組「うーん、まあ頑張つて？」

真王「なぜ疑問形？次」

女性陣「・・・・・・・・・・・・・・・・」

新八を軽蔑する目で見ている

ジャンヌ「新八君が……？でも許す！なぜなら、私もオタクだから！」

真王「だろっつな。次」

新八「そっちの僕ですか？……………フツ（勝ち誇った笑み）」

真王「おい、『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」



チフユ「次の質問はペンネーム『カーバンクル』からだ。『カーバンクル』どーもー。カーバンクルでございます。質問は3つです。」

1・銀さんへ

もしも一ヶ月間のご飯が土方スペシャルになったらどうしますか？  
ちなみに逃げ出そうとすると屁怒紹さんが捕獲しに来ます。

2・ネプテューヌへ

もしも銀さんが二度と戻れないほどの憎悪に染まり、全てを破壊する存在になってしまった時、あなたはどうしますか？（真面目に質問しています。）

3・新八へ

ブロリー「お前だけは簡単には死なさんぞ・・・」  
に勝てますか？（大爆笑）」

銀時「マヨラーのなんて食いたくねえが屁怒紹がくんのはもつといやじゃあアアアアアア！！！」

ネプテューヌ「その時は全力で銀さんを止める！！！」

新八「勝てるかアアアアアア！！！！（激汗）」

チフユ「ふむ、では『カーバンクル』よ。バケツを持って廊下に立  
て」

真王「最後だな。ペンネーム『ウィンド』さん。『バキバキドカガ  
シャーン！！！！！！』

ウインド「はあはあ……シエルとリリスの奴……いくらネオが許さないからって真王さんの所に行こうとするなよ。あっちにはセレス達がいるから大丈夫だろ（特にセレスが）」「作者ああああああああああああああ！！！！」「何だ！？」

レイド「作者！大変だ！」ウインド「誰かと思えばメアの仲間のレイドじゃん」

レイド「あ、どうも。って違うわ！ヤバいんだよ！」

ウインド「落ち着け。質問するから落ち着け。真王さん。そろそろセレス達の正体を明かしてください。お願いします」

レイド「一応俺もだ。ネオ。セレスとメアを舐めるなよ。奴らとやりあうなら覚悟するんだな」

ウインド「で、何があった？」

レイド「そうだ！吸血鬼姉妹が真王さんに向かってる！」

ウインド「何い！？マジか！」

レイド「ああ。美琴を含めたメンバーは任務でいないからむりだ」  
ウインド「……逝くか」

レイド「……ああ」

ウインド、レイド「こいやああああ！！！！」

ドカバキグシャドゴガシャーンバキバキドォーン！！！！

レイド「と、止めた……ぜ（ガクッ）」

ウインド「真王さん……吸血鬼姉妹には注意して……くだ……さ……

……い……（ガクッ）」

チーン

作者、レイド終了のお知らせ。『この話が終わったらもう知りまじたみたいになりますよ。それにネオは神様とほぼ同じ実力かちよつと下程度なので知りませんね。』ウインド『さん、これからは生きる』

チフユ「他人事みたいに言うな。次のアシストはあいつの妹、ネプギアだ、ではな」

真王「おっと、バトンを公開するか」

『このバトンは敵の攻撃で状態異常を起したときにどんなセリフを出すかというバトンです。』

キャラは上から順にアリエス、ザック、ムツリ、ヒメラ、レグナ、ラート

1：毒

「く！毒攻撃ですか…」

「やつべ、気分が悪いぜ…」

「……（ふらふらしている）」

「か、回復させます！」

「こんなもん浄化してやるぜ！」

「気持ち悪い…」

2：猛毒

「グう…これは…」

「コツはヤベエぜ…」

「……（頭を押さえている）」

「ゴフツ！（吐血）」

「浄化してやる！」

「ヴ〜…」

3：マヒ

「痺れますね…」

「体がマヒしてやがる！」

「…動けん」

「体がピリピリします…」

「マヒか…」

「ピリピリ」

4：ヤケド

「アチチチチチ！」

「俺のケツがあー!!」

「……………!!」 (のた打ち回っている)

「あ、熱いですー!!」

「うわっちち！」

「あ、熱い……!!」

5：氷結

「くっ！体が！」

「さっびい!!」

「……寒い」

「か、体が……」

「クソ！動けねえ！」

「さ、寒いです……」

6：石化

「……………」 固まっています

「……………」 固まっています

「……………」 固まっています

「……………」 固まっています

「……………」 固まっています

「……………」 固まっています

7：眠り

「スウゥ、スウゥZZZZ」

「ZZZZ…ZZZZ…ZZZZ…」

「……………」 立っただまま寝ている

「スヤスヤ、スヤスヤ……」

「グカ〜〜!!」

「……………」 本格的に寝ている

8：沈黙

「……………!」 「くそっ!私があんなことに!」と言いたらしい。

「……………?」 「ジャスチャーすれば分かるか?」と言いたらしい。

「……………」 「しゃべってない

……………!?……………!?!?」 「ふえ〜!?!どっなってるんですか?!?!?」と言いたらしい。

「……………」 「これじゃあ声出すこともできねえ……」と言いたらしい。

「……………」 「しゃべれませんか」と言いたらしい。

9:ド忘れ

「へ?ここは何処?私は誰?」

「えと?何やってたんだっけ?」

「?????????????」

「確かバトルをやってたような……?」

「何だっけ?」

「忘れました」

10:混乱

「え?え?え?え?」

「うおおおおおおお!!!」

「……………!」 自身を抑え込んでる

「ホッヘラポッポッポ〜!」 混乱中

「あれ?どつちだ?」

「わたし?おれさま?うち?オレッチ?」

11:墮落

「あゝ、面倒癖……」

「ヤル気でねえな〜」

「……………」 カメラの興味も失せた

「……………」 机に突っ伏している

「ヤル気が出ねえ……」



「うっ〜っ〜き〜っ〜ら〜っ〜い〜」

16：ミニマム

「ネプテューヌさんの胸の中に入れる…／／／／／」

「ちっちゃくなっちゃった!」

「……!ブハア!」 女性のスカートを直視

「私達人形サイズになったみたいですよ」

「でかい…!」

「ちっちゃくなくてもそれがどうした〜!?!?」

17：トード

「ゲロ〜!?!?」 「蛙〜!?!?」 と言いたいらしい。

「ゲロロ!」 「なんじゃこりゃ!?!?」 と言いたいらしい。

「……ゲロ」

「ケロケロケロ」 「蛙は嫌です!」 と言いたいらしい。

「ゲロロ〜!?!?」 「何でカエル!?!?」 と言いたいらしい。

「ゲロ〜……」 「カエルですか……」 と言いたいらしい。

18：魅了

「……／／／／(ポ〜)」

「俺はあなたに心を奪われた」

「……」 黙って見る

「わあ〜／／／／／」

「こいつは…」

「……」

19：恐怖

「いやあああああああああ!?!?!?!」

「うぎゃアアアアアアアアア!?!?!?!」

「……!?!?!?!」 (ガタガタガタ)

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ

ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ

ゴメンナサイゴメンナサイ(以下繰り返し)」

「止めるお!?!?やめてくれえ!?!?!」

「止めてえ!!こないでえ!!」

20:目回し

「目、目があ…」

「やべ、くらくらするぜ…」

「………」 我慢している

「ほにゃ〜…」

「くそう………」

「………」 目を回している

21:陽気

「ルルルルンタッタ」

「お?なんだか楽しいな」

「………」 「なんやかんやで楽しく思う

「フンフンフ〜ン」 料理作り中

「お?なんだか気が楽しいな」

「〜〜〜」

22:激怒

「ンダトゴルアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

「んだとコラアアアアアアアあ!!!!!!」

「………」 静かなる怒り

「ふざけとんのかこらアアアアアアアアア!!!!!!」

「死ねやコラアアアアアアあ!!!!!!」

「くたばりやがれザコがアアアアアアア!!!!!!」

23:哀愁

「う……う………」

「なんだ?なんかスツゲエ泣きたい……」

「………」 (ダバアアアアアアアアアアアアア!!!!)

「な、涙が止まりません……」

「止まんねえよお……」

「………」 (泣)

24:出血



「くそっ!!」  
「やつべ血が足りねえ……」  
「……」 顔が蒼い  
「ひ、貧血になっちゃうです……」  
「クソ、血が足りねえ……」  
「血がダクダクです……」  
25：ネガティブ  
「私貝になりたい……」  
「俺に騎士なんて向かねえよ……」  
「……orz」  
「落ち込みます……」  
「俺なんて……」  
「死にたい……」  
26：大笑い  
「アハハハハハハハハ！」  
「ハハハハハハハハハハ!!」  
「……!!!!」 失笑  
「アハ、アハハハハハハハハハハハハハ！」  
「フハハハハハハハハハハハハハハハ!!」  
「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!」  
27：ピヨリ  
「ポエ……」  
「ウエエ……」  
「……」  
「ホニヤ……」  
「ウア……」  
「ブエ……」  
28：うなだれ  
「ヴウ……」  
「ア……」

「……………」

「ア……………」

「……………」

「グ……………」

29：死の警告

「し、死ぬの？私…？」

「せめて、騎士になりたかった…」

「…無念」

「そんなイヤあ…！」

「こんなところで…終われるか！」

「私の冒険はここで終わってしまった？」

30：不幸

「ひ、酷い目にあつた…」

「不幸だああアアアアアア…！」

「ギャアアアアアアアアアアアア…！」

「キアアアアアアアアアアアア…！」

毛に引火

「うぎゃあああああ…！」

「あひゃあああああ…！」

31：暗黒

「くっ！目が…！」

「前が見えねえぜ！」

「視界が暗い…」

「前が見えません！」

「チツ！」

「見えなくてもどうしたあああ…！」

32：シヨツク、驚き

「ええっ…！」

「なにっ…！」

「……………！」

「えええええつつっ!!!!??」

「まじかつ!!!??」

「うえっ!?!」

33: 衰退

「いつもより力が出ません」

「パワーダウンしてるな」

「.....」

「(パワーアップしないと)」

「体が衰弱してやがる」

「パワー不足ですね」

34: 怠惰

「なんだかめんどくさい」

「なぐんかヤル気でねえ」

「.....」

「暇ですね」

「メンドクセ」

「.....」

35: ストップ

「.....」 止まっています

「.....」 止まっています

「.....」 止まっています

「.....」 止まっています

「.....」 止まっています

「.....」 止まっています

36: 洗脳

「テキ、ハイジヨスル」

「クロス」

「.....」

「シンジャエ」

「ハカイスル」

「シネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネシネ……」

37：捕縛

「う、動けない……」

「捕まった!」

「…不覚!」

「きゃあっ!」

「くっそ!」

「油断しました……」

38：よろめき

「うぁ……」

「くっ……」

「……」

「あう……」

「ぐ……」

「ッ……」

39：アンデッド

「ア……」 「まさかゾンビ化なんて……」と言いたらしい。

「グアア……」 「これって死ねないのか?」と言いたらしい。

「グルル……」 特にしゃべらない

「アア……」 「気持ち悪いですよみなさん……」と言いたらしい。つーかお前もだ。

「グ……」 「これじゃあ回復アイテムも取れねえな」と言いたいらしい。

「オ……」 「ゾンビ……」と言いたいらしい。

40：ベイビー

「バプ〜」 「これでネプテューヌさんの……」と言いたいらしい。

「バプブ〜」 「情けねえ姿になっちまった」と言いたいらしい。

「……」 「しゃべる気なし

「パプ〜」 「赤ちゃんになったです〜」と言いたいらしい。

「バプウウウウウウ!!!」 「なんじゃこりゃあああああ!

「!?!?」と言いたいらしい。

「バブウ」「これはこれでいいですね」と言いたいらしい。

41:アニマル

「動物になってしまったニヤン」ネコ

「それわざとらしいな」狼

「.....」蝙蝠

「私も可愛いですよ?」ウサギ

「俺は爬虫類かよ」ワニ

「不愉快です...」ネズミ

42:気絶

「ほえ...」

「うぐう...」

「.....」

「アウ...」

「グ...」

「あ...」

43:発情

「か、体が疼く...」

「なんだこれは...?」

「.....」 無料にカメラを構えなくなった

「熱いです...」

「なんだ?」

「.....」

44:羞恥

「は、恥ずかしい...」

「うわ!それは止めてくれて!!」

「.....」 恥ずかしがってる

「アウ...」

「え?ちよ、それは...」

「.....」



「うわわわわわわ!!」

「.....!!!!!!」

「きゃああああああああ!!!!!!」

「うおおおおおおお!!!!!!」

「いやあああああああ!!!!!!」

49:上の子

「ボ.....」

「ボ.....」

「ボ.....」

「ボ.....」

「ボ.....」

「ボ.....」

50:酔っ払い

「ネプテューヌさん...ういゝ／／／／／」

「もっともってこい...／／／／」

「.....」あまり酔わない

「もっと酒もつとこいや!!」酒癖がめっちゃ悪い

「ヒック!よっちゃまった...」

「酒はうまいぜ!!」まだ飲む

真王「このバトンを きつと木の精だ 桜 宇宙ひらめ シーザス  
理想を追い求めし者 Minosawa ケン 銀凧 風花 ポ  
ツスン ヒョウガ 亀鳥虎龍 シャドー・ナイトメア 天城 リイ  
ーン s i b u g a k i 鳴神 ソラ 白騎士君 黒龍 黒神 に  
渡します」

真王「では次回を」

## 第九十一訓：戦友は絆が深い（後書き）

アリエス「ネプテューヌさんの仲間になった我々ネプテューナーズは  
まず最初に坂田銀時の抹殺を会議する」

ザック「え！？いきなり何言ってるの！？」

アリエス「そのち彼女をミッドチルダの王へと君臨させ、世界の  
統一を発展させる！」

ヒメラ「それ遠回しに世界征服になってます！」

ムツリ「…忠実になってる」

アリエス「真の女神はここで終わらない！！立ち上がれ！そしてわ  
れらネプテューナーズがお守りするのだ！ネプテューヌさんを！！」

レグナ「キャラ崩壊してねえか？」

ライト「元から彼女はネプテューヌさんが好きだったから…」

アリエス「次回！『女神少女ネプテューヌ』最終話！『<sup>ハート</sup>守護女神ネ  
プテューヌ！』真の輝きはネプテューヌさんにあり！！……………  
……………一度やってみましたこれ」

ネプテューヌ「アリエスちゃん？何やってるのかな？」

アリア「あ！ネプテューヌさ…」



ドガ！バキ！ベキ！バキ！

ネプギア「・・・次回『インタビューするなら気をしっかり持って』  
テイクオフです」

## ネプテユナーズ設定

（アリエス・ヴァーミリオン）

髪：赤みがかった黒色で左右にツインヘアーしていて背後にロングヘアーのような背中に届くぐらいのサラサラとしたロングヘアー

目：紅

服：黒い服に漆黒ともいえるミニスカートで細長い足を太ももの部分まで隠せるほどの黒くて長い靴下

年齢：20歳

3サイズ：89 / 55 / 83

体重：切れてる…

性別：

種族：ネプテユナーズ指導隊長

魔力光：黒紫いろ

好き：ネプテユーナ、女神様、仲間達、辛い物

嫌い：変態（ムツリも含まれる）、ニンジン

性格：まじめで正義感の強い。可愛いものには目が無いと言う噂も…？

レベル：7800

得意武器：エックスブレイド

スキル：瞬刀術（素早さに特化した剣術で先制攻撃が可能）

詳細：ネプテユナーズの一員でその中のリーダー格。リーダーシップを持って仲間との信頼を持っている。数年前にネプテユーナと共にクローン技術の責任者・ザイドを対峙中にプラネテユーナ教会の者たちからの攻撃で異世界（銀時の世界）へ飛ばされてしまう。その時ネプテユーナは私達を見殺しにしたと思ひ込み、激しい憎しみを抱いた。だがネオによる卑怯な手口で会ったことを知り、彼女と和解し、ともに進むことを再び誓う。余談であるが、影で隠れて女

の子100%なことをやっているとか（ネプテューヌとムツリは知っているが言わないことにしている）。

（ザック・ストライク）

髪：茶色い短髪

目：緑

服：某1STソルジャーのマント付き服

年齢：21歳

3サイズ：なし

体重：67キロ

性別：

種族：ネプテユナーズ斬り込み隊長

魔力光：蒼

好き：正義の味方、ネプテューヌ、仲間

嫌い：悪人、卑怯者

性格：正義感溢れる熱血漢

レベル：7600

得意武器：バスターソード

スキル：正義の心（屈しない心が精神系状態異常を受けにくくなる）

詳細：ネプテユナーズの一人で特攻隊みたいなやつ。騎士に憧れ、騎士のようになかったこいい存在になりたいと言う理由でネプテユナーズに志願した。人一倍正義感があるため悪な奴には成敗を下す。事件後にネプテューヌを疑いを持ったが嘘をつかない彼女を信じていたらしい。

くムツリ・カゲスケく

髪：青

目：蒼

服：青色忍者服

年齢：19歳

3サイズ：なし

体重：47キロ

性別：

種族：ネプテユナーズ隠密員、ムツツリーニ

魔力光：漆黑

好き：カメラ、ネプテユーナ、仲間、女の子

嫌い：卑怯者

性格：口数は少なく、ムツツリな心がある

レベル：7000

得意武器：手刀、村正

スキル：忍道（正面からの攻撃をかわしやすくなる）

詳細：ネプテユナーズの一人で隠密員。口数が少なく、あまり人ごみの中にいるのが好きではないが、その実力は確かなもの。唯一の欠点は変態な心があつてシャッターチャンス逃さない。そのせいで毎度アリエスにどやされたり刺激が強ければ鼻血を噴出する。容体はムツツリーニに忍者服を着せたイメージ。

くヒメラ・レーシーく

髪：コンパより長めのピンク

目：紫

服：バカテスの女子制服



種族：ネプテユナーズ戦闘員

魔力光：灰色

好き：ネプテユナーズ、ネプテユナーズのみんな、日常

嫌い：正義、仲間を傷つける奴

性格：諦めない心強さがある

レベル：7200

得意武器：ブレイヴブロウ

スキル：ブレイヴバインソウル（邪悪なるものを滅させる能力）

詳細：ネプテユナーズの一人でザックと仲がいい戦闘員。いつもネプテユナーズを信頼している。事件後、あのあとこっさりアリエス達に内緒でネプテユナーズのところへ訪問し、絶望で泣いていたところを目撃した。容体はまんまいつ天の大兔そのもの。

（ライト・ドライ）

髪：青のショート

目：黄色（裏人格では赤）

服：青い学生制服

年齢：19歳

3サイズ：83 / 55 / 83

体重：潰れてます（物理的に）

性別：

種族：ネプテユナーズ戦闘員

魔力光：明るい青

好き：ネプテユナーズさん、メンバーのみんな、甘い物

嫌い：残虐者、正義

性格：若干謙虚気味（活発でベクトル使いな感じ）

レベル：7100

得意武器：撲殺バット

スキル：二重人格（人格を変えることで能力が変化）

詳細：ネプテユナーズの一人でヒメラと続く危険な奴。普段は温厚でオドオドしい雰囲気だが、二重人格のようだ。もう一つの人格は某ベクトル使いよろしくあららしい口調と斬新な（暴力的な）攻撃法を繰り出す。リトルバスターズの西園美魚と似ているが、唯一違うのはヘアバンドが無いことだろう。

第九十二訓：インタビューするなら気をしっかり持て（前書き）

真王「こんかいは『月光閃火』さんが考え出したキャラが出ます。  
ではチエケラ！」



## 第九十二訓：インタビューするなら気をしっかり持て

ここはミッドチルダ…のはずれにあるスラム街。

そこには不良者含めはずれ者とかいろいろいるエリア。  
そのエリアにある店があった。

???。「また来いよ」

と店の前でいう青年は、朱髪のショートシャギーに金色のクールな瞳、175cmのほどよく引き締まった体格で顔立ちはややクール系、ラフな服装が主で首には六芒星のネックレスを着けている。

客「おう、また頼むぜ？レジィ」

と中年の親父がそう返す。

青年の名は『レジィ・アルクタート』このスラム街でなんでも屋を営む男だ。

レジィ「さて、次はなにしようか」

???。「何が暇なのかね？」

レジィ「普通終わったら暇だろ？ルティア」

と、六芒星のネックレスから女の子の声を聞き、レジィが突っ込む。  
これはデバイスで、名前はレジィの相棒『ネステイルティア（愛称・ルティア）』である。

レジィ「ん？」

すると、テーブルの上にある端末機がなる。  
そして電話に出る。

「????」ようレジイ、早速だが……ってなんだその嫌そうな顔は？」  
レジイ「いや誰だつて嫌がりますよ。毎度同じ仕事してたら」

端末から映った中年ぐらいの男が睨み、レジイは言う。

その男は普通の局員たちの服ではない。はっきり言って管理局上層部らしい制服だ。

上層部員「まあいい、レジイよ。機動六課は知っているか？」

レジイ「六課？あのエース達のか？」

上層部員の男が六課の名を言うと、レジイが思い出したかのように言う。

なぜレジイが六課を知っているからというところ、よく管理局から依頼が来ているからだ。

ただ大半は上層部や最高評議会が多かったりする。

レジイ「あそこの抹殺なら俺はお断りするぞ？」

真剣な顔でいうレジイ。

上層部などのことはレジイにとってあまり許されない存在であるからだ。

理由はもちろんレジイが転生者であるからだ。

彼は生前サブカル大好きなごく普通のフリーターだったが、建設工事のアルバイトの際に落ちてきた鉄骨から仕事仲間を助けてそのまま鉄骨の下敷きになって死亡……そのまま神様（見た目『銀魂』の『洞爺湖の精霊のオッサン』（汗）から転生ボーナスを貰い転生し、今現在ミッドチルダのスラム街を拠点に何でも屋をやっているのだ。

当時の名前は『赤城<sup>あかぎ</sup> 月華』である。

上層部員「イヤ、今回の依頼はその六課の調査だ」  
レジィ「調査？」

上層部員の言葉に眉を顰めるレジィ。

上層部員「そうだ。なんでも六課にいる“坂田銀時”という男も事を調査するんだ」

レジィ「・・・はい？」

レジィは耳を疑った。今言った言葉に坂田銀時という男の名を。

レジィ「（あいつって確か銀魂の主人公だよな？）その坂田銀時のことを知りたいと言うことだな？」

上層部員「そうだ。調査と言ってもマスコミでいうインタビューみたいにすればいい。それで坂田銀時の情報を手に入れるのだ。なお六課に次元漂流者らしい人物が多数いるらしいからそいつ等も頼む」

と言って通信を切る上層部員。

レジィ「・・・坂田銀時ねえ・・・」

ルティア「坂田銀時ってこの人でしょ？」

ルティアが銀時の写真を出す。

レジィ「おお、そいつだ。しかし何で彼がこんなところにいるんだか・・・」

彼は銀魂を見ているからそのセリフを言う。

レジィ「まいつか 行くぞジェットロン！」  
ルティア「ガッテンダーボス！」

なぜかいきよくボケる二人。

そんなわけでレジィは六課の調査へ向かった。

ルティア「ねえねえねえ！次のなのはの写真だけど…」  
レジィ「だからそれはいいって…」

途中でこんな会話があったがそこは別の話。

時はたつて機動六課。

レジィ「そんなわけで、レジィ・アルクタート、上の方々からの依頼で調査することになりました」  
はやて「さよか」

と部隊長室で敬礼するレジィと返事するはやて。  
同室のなのはとフェイトもいる。

レジィ「まず最初にですが、坂田銀時について教えてくれませんか？」

とレジィがメモ帳を持って聞く。

はやて「うちか？そやな、銀ちゃんは今から十年前から活躍して英雄になったつちゆうことやな」

レジィ「十年前…闇の書事件ですね」

なのは「うん、それからして銀さんはこのミッドで英雄的存在になったんだよ」

レジィはふむふむと言ってメモを取る。  
そしてフェイトがこんな発言を出した。

フェイト「ちなみに私は銀時の嫁だよ」

レジィ「え」？

フェイトの発言にかたまるレジィ。

言った本人は顔を赤らめる。

なのは「ちよつとフェイトちゃん！？銀さんのお嫁さんは私だよ！」

フェイト「違うよ！！私だもん！！」

なのはとフェイトは口げんかし始めた。

レジィ「・・・あれは？」

はやて「二人とも銀ちゃんに惚れててな、銀ちゃん絡みになるとあなるんや。ちなみに他にも銀ちゃんが好きな奴がおるで？」

レジィは呆れながらもメモを取る。

はやて「それからこの六課に居候している奴らがいるんやけどちよつと癖が強いからな」



レジイは二人の行動をメモに書き留める。

ネプギア「あの、何やってるんですか？」

と後ろからネプギアがレジイに声をかける。

レジイ「ああ、ごめん、俺はレジイ、ここの上の依頼で坂田銀時について調査しているんだ」

ネプギア「銀さんですか？私はあまり親しくありませんが、お姉ちゃんは『銀さんは私にとってすごい人だよ』って言ってたくらいです」

レジイはメモを取る。

レジイ自身は銀時は白夜叉と呼ばれるくらい強いことは知っている。

ネプギア「あと調査するって言ってましたけど………頑張ってください」

なぜかネプギアはレジイを応援するようなこという。

レジイは「もしかして癖があるって……」と、六課にいる人たちを不安に思った。

それが的中するのだった。

猿飛「銀さん？さてはあなた銀さんを奪いに来たのね！？だけど私は銀さんを永遠に私の嫁だから……」

レジイ「納豆捏ねてる時点で嫁じゃなくなる気がします」

猿飛「それだけじゃないのよ！銀さんは私に気が合うほどいじめてくれるのー！！」

レジィ「要はあなたドMですね。分かります」

スバル「銀さん？・・・優しい人…かな？」

ティアナ「私は兄さんって呼んでるの。義理だけど…」

レジィ「いつか本妻ならぬ本妹に？」

ティアナ「べ！別にそんなつもりじゃないのよ！！勘違いしないで！！」

ブラン「あいつはうるさい男…」

ラム「それにロリコンな性格してんだよ？」

ロム「それに不幸体質の持ち主」

レジィ「ああ…そう…」

理樹「銀さんですか？僕的には基本いい人だと思いますけど」

鈴「違うぞ理樹、あの天パは暴力的なんだぞ」

理樹「違うからね！！」



サチコ「銀時？エへへ、銀時は将来私がお嫁さんになるんだ」  
レジィ「その体じゃ無理じゃね？」  
サチコ「むぐ、ノリ悪いよおじさん」  
レジィ「俺は18歳だ！おじさんじゃねえ！」

ヴィヴィオ「パパのこと？パパはヴィヴィオのパパだよ」  
プリニー「答えになってないッス。ちなみに俺は銀さんのことをグ  
ータラさんというッスね」

リリス「宇治銀時井っていう小豆をご飯に載せた食べ物を出すよあ  
れ。食べてみて吐き気したよ……」  
ミーニャ「私もあれは駄目ニャ」  
アルラ「あの味覚はねえ……」  
レジィ「はは…そうですか……」

グレイ「銀時？興味ないな」

ビビ「私のなのはちゃんを誑かした許すまじき存在だ！！ギントキ・イズ・ゴートウヘルウウウウウウ！！！」

レジィ「この人大丈夫ですか？」

神「ほつとけばいいぞ」

レーティア「そうね、強いて言えばフラグメーカーかしら？」

レジィ「分かります。嫁宣言する人と巡り合いましたから」

ギルシア「なんだそうか」

ジャンヌ「私今から新八君とデートするから他を当たってくれない？あ、質問の答えはあれはグータラさんよ。そして糖尿病」

リアス「めちゃくちやの塊よあの男は！」

イツセー「そんでもって実は何考えてるか分かんない人だな」

レオン「白夜叉か？あいつは強いのは分かるが、いつまでもサボってはいかないな」

ガレーナ「ああ、余もそう思う」

レジィ「あの…それ持ってたて腕痛くないんですか？」

レオン「鍛え方が違う。こんな岩など軽く持てるわ」

レジィ（明らかに1トン分あつたよな…？）

レイン「あいつとはお互いパフエで語り合った仲だ」

レジィ「つまりあなたも糖尿病予備軍の仲間入りですね」

レイン「失敬な！！」

咲夜「レン君見たいに〜、甘いものが大好きみたいだよ。でもユ  
ー君の仲を裂くのはいただけないな〜」

ユー「さ、咲夜さん／＼／＼／」

タバネ「私なりに結構面白い人だね」  
チフユ「私だったら只の大バカ者だな…」

ヤルオ「いろんな意味でフラグメーカーだおwww」  
マナ「おまけに昔隠し子騒動にあったって」

エール「彼には腐った目をしてるけどいざって時にきらめくってさ」  
コヨリ「私はそうは見えないけどね…」

アリエス「あの天パ？ネプテューヌさんに近づく不届き者です！いざって時には私が奴の首を…」  
ザック「止めろって！」  
ヒメラ「すみません！すみません！」

そんなわけでいろいろ聞きだしたレジィ。

レジィ「ホントに癖が多過ぎな奴らだったな…」

ただ少々やつれ気味な感じになっている。

ネプテューヌ「あれ？きみだれ？」

とネプテューヌがレジィに声をかけてきた。

レジィ「あ、ぼくは…」

ネプテューヌ「あ！確か調査の人だね。それならちょうど良かった」

その少女は純粹なのかもしれない。

ネプテューヌ「銀さんああ見えてぶっきらぼうなところがあるけど、私にとっての銀さんは誰かを守りたい、誰かを幸せにしたいって思いを秘めているって思うんだ」

だから憧れを抱くと言うものなのかもしれない。

ネプテューヌ「だから私は、銀さんが好きなのかもしれないしね」

僕自身にはよく分からないけど、銀時という男は普段はグータラしているというイメージが濃いみたいですが、いざというときは白夜叉の如く活躍を広めると言うことになるでしょう。まあ俺自身の場合は銀時の強さなんて目に見えてますし、彼に愛されている人たち

もそんな彼に惹かれていたら俺は思っんです。…最後の締めですが、  
彼はいい人だと思うよ。

BYレジイ・アルクタート』

上層局員「作文んん!!??」

上層局員はレジイが提出した紙を叩きつけた。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!」

ネプギア「こんにちは、アシスタントのネプギアです」

銀八「礼儀正しいな。んじゃペンネーム『なめ猫』さんからの質問。  
『俺』どうも、なめ猫な俺達です」

カイト「おい何だその省略は」

俺「何となく」

ラムザ「……」

カイト「…まあいいや、いつも通り感想といくか」

ラムザ「次はネプテューヌが暴走したようだが…大丈夫だろうか？」

カイト「わからないな…少なくとも、今回は『憎しみ』がテーマみたいに見えるからじっくり見とこうや」

俺「ですね」

ラムザ「ところで、ふと思ったんだけど…」

俺・カイト「？」

ラムザ「なのはさん達がメインの戦いつて、ここではまだあってないよね？ネプ祭の後にやるんだらうか？」

カイト「そういえばそうだな…小説の題名にリリカルがあるくらいだし、なのはさん達もメインになるはず」

俺「ふむ…なのは達が深く関わる設定もまだっぽいですが、そろそろメインになる話を書くというようなこと言ってた気がします」

ラムザ「あのままプライベートにおけるいじられキャラのまま、終わるはずもないからね。ここのなのはさんは、オリジナルの性格で変わった魅力があつていいと思ってるけど」

俺「ですね…まあ期待していきましょう。ヒロインですし」

カイト「で、どうすんだ？ここのなのはさんを目立たせようと、コラボとして乱入すんのか？」

俺「うーん…話は妄想してるんですが、なのはさんを覚醒させる話だけですね…許可もらえたらの話だけ…」

ラムザ「僕達については？」

俺「一応、破壊者とカイトとミアリアだけ対象にしています。ですが、出してもらうにしても仲間にはならないつもりです」

カイト「おいおい…破壊者まで呼んで大丈夫なのか？絶対にありえないと思うが…仲間の大半、ただでは済まないぞ…？」

俺「もちろん、何とかするつもりです。とにかく、まずはOKをも

らえるかどうかです」

ラムザ「わかった…任せるよ」

俺「えー…突然ですみせんが、もしよろしければうちの設定やキャラを少しコラボしてもらっていいでしょうか？返事をお待ちします」  
カイト「もう少し丁寧をお願いしなよ…まあコラボしてくれるなら幸いだよ」

ラムザ「ではまた！」

質問

ビビへ

「冥土へいざなう者、好きかい？」

ネプテューヌ

「エックスセイバーとか見ると、空でドクターバイルと戦いそうな気がする（ロックマンゼロ4）。戦ってみたい？」『んじゃ答えよう』

ビビ「冥土へいざなうもの……もしかしクイーンズブレイドのアイリちゃん！？メツチャ大好きです！！」

ネプテューヌ「いや別に。っていつかそれだけで戦う意味って得る？」

ネプギア「私もそれはどうかと…」

銀八「んだよ。『なめ猫』さん、廊下に立ってなさい」



ネプギア「えつと…次はペンネーム『月光閃火』さんです。『ども…月光閃火だ。』

輝刃「…という事だそうだが？」

ハハハ「それでも、俺はアリエスを愛でるもんね〜 ハア〜…撫で撫で（そういつて、遠隔技法でアリエスの頭を優しく撫でる）」

輝刃「よくもまあめげないな…。とりあえず、質問：行くぞ？まずは俺からだ。」

1・キリアに質問…話の余談で『プラネテューヌでひっそり暮らしている』とあったが、やはりアンドロイド作りは続けていくのか？それとも、自らの機巧技術を活かして新たな機械作りに励むのか？

確かに、元になった話でも源外の爺さんは機巧技師からくりの仕事は続けたもんな…。次は俺からだ。

2・真王さんに質問…もう近藤さん意地が強いから、いつそオリキヤラで近藤さんに一途な想いを寄せる女性作ってみたらどうか？

輝刃「何か一層妙の嬢ちゃんへの想いが強くなりそうな気が…（汗）」  
「『えつとキリアさんは…』」

キリア「どちらともです。それで私は人々の役に立てようと思うんです」

ネプギア「では作者さん」

真王「近藤に彼女ね〜、機会があったら」

ネプギア「投げやり!? 『月光閃火』さん、ごめんなさい!」

真王「なぜ謝る!?!?ペンネーム『ウインド』さんだ。『ウインド』はいい。今回は私ウインドと」

美琴「メアとレイドのリーダー、美琴が話を進めるわ」

ウインド「……………あいつらは?」

美琴「回復中」

ウインド「さいですか……………しかしアリエスが百合とは……………」

美琴「人の好みなんて人それぞれよ」

ウインド「そうだよな。お前シヨタコンだもんな。メア限定で」

美琴「悪い?」

ウインド「イイベツニ」

美琴「さて質問に行きましょう。セレス達に持たせたい武器がある  
とすればなにがいい?」

ウインド「真王さんに質問。セレスと勇華はカップル確定ですか?

もう一つ。勇華。君には媚薬を与えよう(黒笑)」

美琴「なにさせるつもりよ……………」

ウインド「孫の顔が楽しみだ」

美琴「私もちょうだい」

ウインド「目的は?」

美琴「もちろんメアの初めてを「言わせねえよ!?!」ちっ」

ウインド「舌打ちすんな!?!たくつ……………後真王さん。セレスの本気

モードとネオが闘えばどちらが勝つと思えますか?」

美琴「返答よろしく。さあ早く媚薬を「やるか!」ちっ……………(絶

対手に入れる)」

ウインド「聞こえてんぞこらシヨタコン娘」『では……………ん?同じ

のがある』ウインド「美琴は帰らせました。後々厄介ですんで……………」

「だからといって俺を呼ぶんですか……………」

ウインド「そうだよ。メア達の仲間のクリア君」

クリア「とりあえず早く終わらせますか。真王さんに質問。メア達にテーマソングをつけるならどんな曲？直ぐに出さなくていいんでじっくりかんがえてください」

ウィンド「真王さんに注意。セレスのしゃべり方は基本一人称は俺です。まあしゃべり方は私とセレスがいた感想を見ればわかります」クリア「んじゃよろしく」『では順番にお答えしよう。まず武器ですが、エール、コヨリ、セレスには剣ですね。メアはどんな得意武器なのか分らないですが。次の質問ですがもう確定です」

ネプギア「ええっ！！？？」

真王「次にネオはそんなセレスでも瀕死程度で済むくらいですね」

ネプギア「いやいやいや、ある意味すごいことなんですけど！？」

真王「最後ですが、思いつきません、ごめんなさい」

ネプギア「『ウィンド』さん、ごめんなさい。あとそれから質問は三つまででお願いします」

銀八「つぎだ。ペンネーム『ケン』さんからの質問。『統夜』あいつら速くも鬼兵隊止めちゃったね・・・真実知って直ぐに・・・凄いな」

はやて「私って墮天使なんか・・・」

統夜「あはは・・・天使は戦闘特化種族じゃないが墮天使に匹敵する強さは持つてる・・・人外には変わり無いけどね」

メアリ「凄いわね・・・ふと思ったけど私達・・・人族から見れば

チートね」

統夜「まあな・・・ギルシアさんは男の中の男だ・・・新八に質問だ。ジャンヌとの結婚式は和風か洋風のどっちで挙げる？何故か気になっちゃうてさ・・・」

メアリ「気になるわね・・・レーティアさんとギルシアさんの事を義姉さんと義兄さんって呼ばなきゃいけないわね」

余計な事ですが・・・メアリのバストのサイズはレーティアのバストサイズに1cmプラスした感じです。

統夜「アリアに質問。銀さんとネプテューヌの仲をどうしたら認めるか？」

新八「えっと・・・僕は江戸出身なんで和服ですね・・・」

ジャンヌ「私はそれでもおっけー」

ネプギア「けけけ、結婚！！？／／／／」

真王「ネプギアには精神的に早いのか？」

ネプギア「そ、そんなことないもん！」

真王「ハイ次」

アリア「認めません、ネプテューヌさんは私の物です！」

ネプギア「あ、相変わらずですね・・・」

真王「それが彼女だ。『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

ネプギア「ではペンネーム『フリーダム』さんです。『Sフリーダム』和解出来て良かったな」

ジャステイス「全くだ」

デステイニー「キリアは、隠居生活？」

レジェンド「仕方がないだろうな……」

アカツキ「さて、質問に行くぜ」

銀時に

手元に遊園地のペアチケットが！！誰と行く？

沖田に

足下にアーマーシュナイダー、そして目の前に近藤が、この後どうする？

インパルス「明らかに二つ目は、近藤っていう人に死亡フラグが……」

更新楽しみにしています『』

銀時「イヤ選べネえよ……」

後ろに絶対銀時と生きたいと言うオーラが見えるほどにラバーズがいる。

沖田「俺は土方さんにやるぜえ」

ネプギア「駄目ですよ！『フリーダム』さん！廊下に立ってくださいー！」

銀八「少しは仕切るようになったな。ペンネーム『鳴神 ソラ』さ  
んだ。『デイケイド<sup>トリート</sup>激情態』おいこら、後者2つの称号書いたの誰  
？」

リユカ「どつどつ」

マリオ「させさせ…アリエス達はネプテューヌの元へ戻ったか」

ルイーダ「と言うか辞表って何時の間に出したの…」

フォックス「転移魔法じゃねえ？」

スネーク「だよな…ネプテューヌに質問『内のマリオについてどう  
思う？』」

ソロ「メテンスギルドの長に質問『マリオとの特訓は見ていてどう  
だった？』」

デイケイド激情態「質問『後者2つの称号作ったの誰なのか教えて  
くれない？デイメンションキックか豪腕で殴るから#』」

次回を待っています！『ズバリお答えしよう』

アリエス「強敵ですね（ネプテューヌさんに手を出す気なら…）」

ザック「あいつ人間か？」

ムツリ「……………」

ヒメラ「料理を食べるのが大好きでしたね」

レグナ「あいつ凄すぎねえか？」

ラート「最強ですね」

アテナス「そうですね。彼の特訓法で活用する人やトラウマ持った人や新たな道を進む人と買いましたね」

真王「ふむ、ちなみにピットに行ったあの二つの称号は…」

邪王「俺だよ！邪王だよ！」

バキッ！

デイケイド激情態「ヤラレチャッタ……」

ネプギア「えええ！？やっちゃっていいんですか!?!」

真王「暴走止めだ。『鳴神 ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ネプギア「……次はペンネーム『黒龍』さんです。『黒龍』いや  
くついにゲーム祭編も終わりましたね」

ソラ「次はコラボのアレだったな」

銀時「まあ頑張ってたこい」

リリス「とりあえず酷い目には遭いたくないですね」

ヤミ「そうですね」

アリス「私は面白ければ良いがな」

アリア「にゃ〜」

セイバー「アリアのはどう言う意味ですか？」

黒龍「さあ？」

ソラ「ま、コイツコレはあまり気にするな」

黒龍「それじゃあそろそろ質問しましょうか。今回はこの人達が質問するそうです」

沖田「そっちのアリエスに質問でさア。なんでも土方この野郎もネプテューヌを狙っているみたいなんで、殺したどうですかイ？（黒笑）」

リリス「質問ですけど、そちらでの苦勞人ベスト3を上げるなら誰ですか？」

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『』





この中で何が欲しい？

- 1・お通ちゃんの等身大口ボット
- 2・ラブチョコリスのお通ちゃん追加Ver
- 3・お通ちゃんの脳

『コアラマン「質問します」

作者へ

自分の書いている小説のキャラで結婚するとしたら誰ですか？

コアラマン「リリ銀パーティ編楽しみにしてます。頑張ってくださいね。」

『黄竜「質問します」

銀魂・リリカル勢へ

もしも一週間のご飯がすべてあんパンとお炒の卵焼きになったらどうしますか？』では順番に答えましょう

ジャンヌ「何ですって！？そんなゲームがあるとは予想外だわ！私にもやらせて！！」

ナリア・ビビ「わたしも！！」

新八「3番を除いて全部です！つかお通ちゃんを殺してんどうすんだああああ！！！」

真王「勇華ですね」

銀魂・リリカル組「食べられるかアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「!!」

真王「ハイ四人とも、廊下に立ってなさい。次回はユニで、では」

銀八「なんか珍しく鳴神ソラさんと月光さんの状態異常バトンが来てねえなあ」

真王「うん」

第九十二訓：インタビューするなら気をしっかり持て（後書き）

真王「次回はなんと動物園の動物が変身する!？」

ユニ「次回『動物が変身するのは奇想天外』 テイクオフよ」

く予告

ネプギア「バイトを始めます」

第九十三訓：動物が変身するのは奇想天外（前書き）

真王「ハイ今回はネプギアがアルバイトします！だけどそのアルバイト先は…」

ユニ「・・・『リリカル銀魂』始めなさい」

真王「おいこら何その命令形。そんな口を出す子に育てた覚えはありませんよ？」

ユニ「親かあんたは！！」

## 第九十三訓：動物が変身するのは奇想天外

皆さんこんにちは、ネプテューヌお姉ちゃんの妹のネプギアと言います。

時たま周りからどつちが姉？って言われる始末ですが、私が妹です。さて、今の私の現状ですが…

???「お前面白いから、ワシの…いや、ワシ等の飼育委員になれ」

ウサギの顔をした人から行きなり飼育委員になれって言われています。

ことの発端はまず遡ってみてから。

ネプギア「暇です」

まず私は何かをやることはありません。

女神候補生として何もできないのは良くないのです。だから私は決断しました。

ネプギア「バイトを探しましょう」

ネプギア「とは言つものの」

色々回つたがあまり自分に合う仕事は見つけられなかった。いろいろ彷徨っていると、あるポスターを見つけた。

ネプギア「王魔時動物園？」

動物園飼育委員募集ポスターだった。特に制限はなく、ここから遠くない。

ネプギア「・・・いってみよう」

ネプギアは決心してそこへ向かった。

ミッドチルダの森の奥・王魔時動物園園内

ネプギアは電車に乗って地図にあった動物園を探し、そして見つけて中に入ったはいいが、

ネプギア（寂れてるな）

そう、他の客があまりいないどころかところどころがさびれている。なんだかほつとかれた感じがした。

ネプギア「人材不足以前に職務怠慢はいけないことですな。園長に





ネプギア「イタッ！」

なぜか蹴られた。

シナ「ワシは面白いことしかやらん主義、だからすべての飼育はお前に任せる。ワシのために働け」

ネプギア（メツチャ自己中なんですけどっ！！！？）

シナの自己中にネプギアは思わず突っ込まずにはいられない。

ネプギア「それにしても、あなたの職務怠慢なせいで客ごとく人すら着てませんね!？」

ネプギアはこればかりは怒る。

ネプギア「こんな動物園見そこないました。帰らせていただきます」

とすでに準備万端でかえろうとする。

シナ「帰る？それは手遅れじゃ」

ネプギアが外へ出ると、檻の中にいたはずの動物達がいる。

扉は閉まり、檻はバツクリと開き、シナが加えてるニンジンから煙が出ていく。

シナ「閉園は4：44。ここはワシによるワシのための動物園。全てがワシの思うがまま」

煙を浴びた動物が姿を変え、看板の文字の間の部分が変化する。



ネプギアが変身した動物達を見てそんな感想を漏らすと、シナが否定、説明する。

ネプギアは若干信じられない顔をする。

シナ「ちよつとワシの武勇伝を聞け。あれは15…13…そんならい前のこと」

ネプギア（うる覚えっ！？）

それはその当時のシナは普通の子供。野兎を追いかけまわしているシーン。

シナ「その日ワシは野兎を追いかけまわしてたんじゃ」

ネプギア（子供のころからろくでなし！？）

シナ「その時、化け物ウサギが現れて、それに呪いを受けてこんな姿になった…」

化け物ウサギ『その呪いは報い、解きたくば動物…生命への愛を示せ。示したくば、数多の動物を集め、そしてその力を以て、物言わぬ生命の声を聞き、世界に轟く園を造れ。その名を知らぬ者がいなくなる程に』

シナ「ワシは世界中を回り、こいつらを集めた。分かるか？わしが人間に戻るためには、この王魔時動物編を天下一にせねばいかんんじゃない」

シナの滅茶苦茶なことに言葉が出ないネプギア。

シナ「じゃがワシは面白いことしなやらん主義、だから…」

ネプギア（落ち着きないなあ…）

シナ「自分のことは自分でさせて、動きしゃべれるようにしてやっ

た獣共（こいつ等）と飼育員おまえで動物園ウチを天下おまえ一にするんじゃ」

ごろごろ転がっていくシナにネプギアはそう思い、寝転がった状態でそう言うシナ。

ネプギア（めっちゃくちゃだよこの人・・・）

ネプギアはシナに対して変な目で見る。

ネプギア（けど、逆にさびしそうな目をしている…）

それと同時に同情する。

ネプギア「何処までやれるか分かりませんが、やります！飼育員」  
シナ「よっしゃ！」

そしてネプギアは王魔時動物園飼育員になった。

????「おお、何だここの動物どもは？しゃべってやがる。これは売ったらいい金だ。数日後に決行だ」

遠くから犯罪者のな男の集団が王魔時動物園を見ていた。

数日後、機動六課

ネプテューヌ「ネプギア、バイトを始めたんだって？」  
ネプギア「うん、飼育員をやってるんだ」

ネプテューヌとネプギアが会話している。

ネプテューヌ「いいな、私の場合まず見た目から判断されていくし……」

ネプテューヌが墜ち込んだ雰囲気になる。

ネプギアはどう声をかけていいか分からなくなる。

ネプギア「あ、こんな時間。行つてきまーす！」

ネプテューヌ「あ、行つてらしゃい」

ネプギアが時計を見てバイト先である王魔時動物園へ出かけていった。

銀時「おいネプテューヌ、ネプギアがどっか行つたみたいだが？」  
ネプテューヌ「動物園の飼育員だって」

出かけるところを目撃した銀時が聞くと、ネプテューヌは応えた。

## 王魔時動物園

カバ？「オ、ウ腹減った！早く飯食われる！」

シマウマ？「食わせるだ。ちゃんと言葉づかい気をつける」  
ネプギア「これはセルフサービスじゃないんですよポポさん」

擬人カバのポポは待ち遠しくえさを要求。だが作業服のネプギアが注意する。

ネプギア「それとシナさんはなにしようとしてるんですか？」

シナ「ニンジン食いにだ」

ネプギア「よこどりはなしですよ」

横から横取りしようとしているシナにネプギアは片手で止める。

ネプギア「はいゴリコン君バナナ」

ゴリコン「あ、そこにおいてください。自分これ不器用ですから」

ネプギア「思いつきり器用だけど…」

擬人ゴリラのゴリコンは石を使ってなんか立派な像を作っていた。

スライム？「ギアちゃん働き者だねえ。あ、そこのお肉いただき」

ネプギア「スララさん？盗っちゃだめですって」

骨の頭を緑色のゼリーのような体の擬人スライム・スララが肉を食べる。

ネプギア「バイトに入って数日…結構楽しいかも…」

そんなネプギアが呟いた時だった…。

シナ「面白い遊びをするぞお前ら〜！〜！」

一番の不安要素のシナが現れてネプギアは呆れの息を漏らす。

ネプギア「毎度ああいうことしますね園長は…」

「???」「それが園長でしょ?」

ネプギア「それはそうですけど、人前で食事のどこを見せつけない  
でくださいウワバミさん」

ウワバミ「あら失礼しちゃう」

頭の三匹の蛇の女性・ウワバミが食事（上の蛇が）ネズミを丸呑  
みしながら言う。

ウワバミ「それにしても、ギアちゃんあまり怖がってないわね」

ネプギア「慣れてますから」

ウワバミはネプギアに聞くとネプギアはにっこりと答える。

2726

ネプギア「園長さんは本当に戻る気あるのでしょうか?」

ウワバミ「そうね。園長はああ見えて、ガキ大将のままだからね」

ネプギア「精神的に子供のまま…ですか（お姉ちゃんには言わない  
でおこうかな?）」

ウワバミ「ええ、でもそんな園長だからこそ私達は付いて行ってる  
の」

ウワバミとネプギアの会話である。

ネプギア「あ、餌のストックを増やしに行きます」

ウワバミは『頑張つてね』と手を振った。

ネプギア（呪いか、この動物園を大きく、そして天下一へ成長さ

せておけば園長さんの呪いが解ける。けど、それで良いんだろうか（

こんなことを思いながらえさ場へ向かうと、

ネプギア「ん？」

男「げ!？」

アザラシ? 「んー!!! (レディ!!!)」

男達の集団がアザラシを誘拐未遂を目撃した。

ネプギア「イガラシさん!？」

リーダー「騒がれると面倒だ。殺せ!」

男共「チヨリス!」

リーダーの命令に男達は武器を取り出してネプギアを襲う。

ネプギア「っ!？」

ネプギアはとつさに所持していたソードで襲ってきた男達をなぎ倒した。

その動きはまるでネプテューヌとほぼ同じ。

ネプギア「イガラシさんを放しなさい!！」

ネプギアは剣を構えてリーダーに言う。

リーダー「放すんだったらお前から放せよ!こいつが目に見えねえか?」

とリーダーは開いている手でナイフを持ってイガラシに着きつける。



ネプギアは苦笑の表情で武器を放す。

リーダー「よし、いい子だ。お前のような奴は売ったら結構高いお金になりそうだ。こいつも連れてけ！」

ネプギア「ああっ!？」

ネプギアは捕まってしまった。

人質をもたれては手が出せない。

ネプギア（このままじゃイガラシさんが…、お姉ちゃん、園長…）

ついにネプギアが泣き出すところあった。

シナ「脱兎のごとく、蹴り倒す！」

ネプギアを使っていた男達がシナに蹴り飛ばされた。

ネプギア「園長さん!？」

シナ「ネプギアよう、どうも遅いと思ったなら何を道草食ってやがる」

園長が現れた事に驚くネプギア。

だがシナは少し苛立ち気味だ。

ネプギア「あの園長、これは…」

シナ「だが、お前が叫ばなければ、仲間が連れ去られるところだった」

シナはマントを脱ぎ棄てて言う。

シナ「ワシは面白いことしかやらん主義、仲間がいなけりゃ面白く

ない！」

ネプギア「園長さん……」

ネプギアは品を仲間思いな人と認識した。

リーダー「何言っただ？やっちまえ！！」

シナ「脱兎のごとく、蹴り潰す！！」

リーダーが命令するが、シナが早く男共を全滅させた。

リーダー「くっ！テメエ！こいつがどうなってもいいのか!?!」

とリーダーがイガラシにナイフを突き付けるが、

ネプギア「アザラシの体毛は体の流線型にそって生えています。なので女の子にもこんな簡単に取れます」

後ろからネプギアが楽にイガラシを取り返した。

リーダー「なっ!?!」

シナ「うちに手を出したこと、後悔せい！」

ラビットピースー！！

シナがピースマークでリーダーの顔をへこませた。

シナ「満月に映る兎クレーターの如く凹め」

ピースマークのクレーターを作られたリーダーはそのまま落ちてシナに踏まれました。

シナ「うむ、凹みが足りんね」  
ネプギア「イヤもう十分かと…」

いつまでもけり続けるシナを止めようとするネプギア。

シナ「まあいい、仲間を取り戻したんだ。ありがとな」  
ネプギア「え？」

お礼を言ったシナの顔が、銀時の様な天然パーマの男性に見えた。  
目をこすってもう一度確認すると、いつものウサギ顔だ。

ネプギア（シナ園長・・・あなたは本当に…）

シナ「おつとそうだ！ネプギア！餌よこせ！特にニンジンがな！」

ネプギア「独り占めは駄目です。あと其処も！」

スララ「あうちっ！」

シナ「ジエツトニンジン！」

こうして王魔時動物編は平和である。

更に数日後、

ネプテューヌ「こんなところに動物園があるんだ」

何とネプギアがネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベール、ユニ、  
ロム、ラムを連れて来たのだ。

ネプギア「うん、ここが私のバイト先」  
ユニ「こんなさびった所が？」

ユニはジト眼で見る。

シナ「ようこそ、王魔時動物園へ」

すると園長のシナが接客してくれた。  
だがなぜか顔を帽子で埋めている。

ネプギア「園長さん」

ネプテューヌ「えっ！？この人園長！？」

ネプテューヌ又含めありえなさそうな目で見る女神たち。  
すると風が吹いて園長の帽子が飛んだ。  
そして顔が出た。

シナ「おっと帽子が…」

素早くキャッチするが当然ばれた。

女神たち「ウサギイイイイイイイイイ！！！！！！？」

驚くネプテューヌ又達にネプギアはため息を吐いた。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!!」

ユニ「私がやるわ」

銀八「態度でか!!! まあいい、ペンネーム『一酸化窒素』から始めるぞ。『一酸化窒素』どうも、一酸化炭素だ。リリ銀パーティー編楽しみにしているけれどちょっと質問。」

みんなに質問

カーバンクルEXさんのリクエストに書いてあった対戦相手の中で戦ってみたいのは誰ですか？

一酸化窒素「ちなみに僕はオニワールド以上鬼巫女零ぐらい大会の人とは違うので。」『対戦者ってこれか？』

『世果埜 春祈代（ムシウタ）

リーゼロツテ・ヴェルクマイスター』（11eyes）

ブロリー（ドラゴンボール）

ワルプルギスの夜（まどかマギカ）

アレクサンドル・アンデルセン（ヘルシング）

バルバトス・ゲーディア（ティルズオブデスティニー）

赤屍蔵人（ゲットバツカーズ）

球磨川楔（めだかボツクス）

都城王土（めだかボツクス）

銀八「あゝ、みんなはこんな感じかな」

ネプテューヌ「私はワルギリスの方かな？」

ネプギア「それを言うならワリユプルギスだよ」

ビビ「あのリーゼちゃんを私の物に…グッフッフ…」

神「全員でかかってこいや…。俺様が全て相手になってやるぜ？ま、ワルプルギスは俺の配下だしな（本編にて）」

ギルシア「ムシウタの奴だ」

レオン「バルバトスだな」

ガレーナ「同じくだ」

セレス「アレクサンドルだね」

それ以外「どちらとも戦いたくない」

銀八「んじゃ『一酸化窒素』さん、廊下に立ってなさい」

ユニ「次ね。ペンネーム『ケン』よ。『統夜』チンクって中の人ネ

タを使ったな・・・面白いからいいけど・・・」

ISね・・・ISはデバイスネタになるから好きですね。

統夜「白式や紅椿、ブルー・ティアーズ、甲龍、ラファール・リヴ  
アイヴ・カスタムIEI、シユヴァルツエア・レーゲンか・・・これ  
らの武装はいいよな。これらを元に強化改造とか出来るし・・・」

優子「恐ろしいものを作りそうね・・・私からは・・・レーティア  
さんに質問です。ギルシアさんのここだけは直してほしい所はあり  
ますか？」

統夜「俺からは銀さんに質問だ。貴方は巨乳大好き派？それとも貧  
乳大好き派？どっちだ？これぐらいかな」

優子「ムツリって土屋君の親戚か何かなのかしら？」

統夜「さあ？ブランってひだまりスケッチのゆのと同じ声だよな」  
『ゆのって誰よ？』

真王「それはいいとして、質問の答え」

レーティア「特にないわ。まあ強いて言えば他人の幼女に見境なく  
襲わないでほしいかな？」

銀時「おれか？・・・どっちかっていうとボインの方が・・・」

真王「成程。『ケン』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム  
『支配者』さんだ。『キャラ的に山崎っぽかったですね（笑）』

土方と神楽と新八と沖田の意見も聞きたかったです。

質問です。

神楽に質問

一番好きな食べ物はなんですか？酢昆布とご飯以外で

転生者チームに質問

自分達の中で一番強いのは誰だと思ってますか？

トツシーと新八の事を如何思いますか？』」

神楽「卵かけご飯アル！」

ユニ「それご飯の領域でしょ！！」

真王「抑えて。彼らの中ではチフユさんですね（なんせ鬼教師だからね）。トツシーはみんなあまりよく思っていないでしょうが、新八の場合ジャンヌだけメロってます」

ユニ「メロってるって何！？」

真王「では『支配者』さん、廊下に立ってなさい」

ユニ「聞きなさいよ！！」

ユニはライフル銃で撃つ。

真王「危ない当てんな！！」

銀八「えと、つ、次はペンネーム『鳴神 ソラ』さんだ。『スネー



ク「いや、ほとんど変身するのはピットだけでマリオのは常識のない転生者とか偽神とかにだけだ」

デイケイド「色んな意味で痛い……」

ルイージ「けど良く書けたなだよね」

フォックス「と言うか…何したんだお前？」

マリオ「模擬戦しただけだぞ？後聞かれたからトレーニング方法を言ったら『拷問じゃん』って言われた」

フォックス「そりゃあな……」

ネス「転生者組みに質問『内のファルコについてどう思う？』」

フォックス「後俺も質問『ファルコン・ハートについてどう思う？』」

ルイージ「メテングギルドの団員さん達に質問『兄さんの修行はどうだった？』」

次回を待ってます！』では最初と次の質問を同時に言つと、」

転生者組「哀れだな（だね）（じゃな）」

真王「慰めるよ。次」

勇気ある転生者「ああ！あの人の修行のおかげで俺は強く慣れた気がするんだ！よし！もつと活躍するぜ！……」

気弱な転生者「わ、私ああいうのは苦手なんです!! 私達のような女の子が出来るものじゃありません!!」

末期症状の転生者「コワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ」

道を極めし転生者「あんな修行法もあるのか。少し試してみるか」

真王「ハイでは『鳴神 ソラ』さん、ちょっとありがとございませす?」

ユニ「何で疑問形?・・・ペンネーム『王天仁』からよ。『今回の話完全に紅桜編の後日談のパロディですね。わかります。』

HIGE「それいつたらダメだろ。」  
そんなことより質問です。

リリカル組へ

この中で機動六課に入れるとしたら?

Drウエスト&エルザ

クルル曹長

翡翠&琥珀『・・・そう言えばあいつ(はやて)はメイド二人ほし  
いとかがいつてたけど...』

真王「あ、もう決定だ。『王天仁』さん、廊下に立ってなさい。次  
はペンネーム『フリーダム』さんからの質問だ。『デステイニー』  
何か、チンクがISのラウ...」

Sフリーダム「それ以上言うな!!」

ジャステイス「確かに、見た目も似てるけど」

レジェンド「眼帯もな…」

Xアストレイ「まあ…質問に移りましょう」

リリカル組に

プリンのおたうを24時間眠らずに聞いてられるか？

銀時に

チヨコ、イチゴ、バナナ、どのパフェが一番好き？

アカツキ「今回は、いたって普通だな」

ハイペリオン「二つ目は、いいとして一つ目は、普通なのか？」

更新楽しみにしてます』まず一つ目は無理です。みんな寝ます」

銀時「俺は全部頼むぜ」

ユニ「黙りなさい糖尿病。『フリーダム』あなたも糖尿病にならないでね」

銀八「なんかさり気にムカつく…。次はペンネーム『フォースアカインド』さんから。『フォースアカインド』リリ銀パーティ編、楽しみにしています。」

ハスター「よっしゃー！楽しみにしてるぜ。」

U蚊「でも新八はバトル始まってすぐにヤムチャ状態になりそうな

気が……。相手も相手だし。」  
ハスター「誰か新八にISくれてやれてくれないか……。」  
と言う訳で質問します。

新八へ

この中でどの力が欲しい？

魔力

超能力

妖力

オタク力』んじゃ新八」

真王「僕は超能力を手に入れる!!!」

真王「確かに超能力は凄いものだね。『フォーサアカインド』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『月光閃火』さんだ。『ども』：月光閃火だ。」

しかし：アリアはホント可愛いよなあ……。 (そう言いながら、遠隔技法でアリアの頭を優しく撫でつつ一緒に色んな所が活発になるツボを遠隔技法で押す)

輝刃「色んな所が活発って： (汗)。あ：質問：行くぞ？まずは俺からだ。」

1. ビビに質問：今まで登場した男性キャラの中で『この人になら』：抱かれてもいいかな』って思う人：居るか？ただし、『該当者無し』はダメだぞ？

アハハ： (汗) 百合者であるビビにその質問はどうだろうか… (汗)  
。次は俺からだ。

2・レジイに質問：今回出会ったキャラ達（特に女性陣）の中で、  
『この人となら、仲良くなりたいな…』って思う人って誰かな？  
輝刃「ふむ…なるほど…それはストーリー展開でレジイが絡む時の  
参考になるかもしれんな…。」ア・ホ・カ！ビビは大の男嫌いな  
んだよ！つーかそんなことしたら『リイーン』さんに怒られるわ！  
！」

レジイ「だな。俺に一番いいと思う人は…おしとやかに思うべ  
ールさんかな？」

真王「では『月光閃火』さん、アリアと戯れていいです」

銀八「押し付けちゃったよ！！…まあいい、ペンネーム『改竄  
者』さんから。『質問します。』

銀時へ

銀さんって他の刀とか欲しくないの？

なのはとフェイトへ

この中の一つをすると銀さんと結婚出来ます。やりますか？

- 1・お妙の卵焼きを3？食べる。
- 2・一ヶ月間の食事が全てアンパンだけで済みます。
- 3・屁怒紹さんと一ヶ月過ごす。『』

銀時「俺は木刀で十分だ」

真王「そして次」



いるようだね」

カイト「やつぱ銀さんは器がでかいんだろうな。これなら次のチート軍団も楽勝…か？」

ラムザ「すでに対策も考えてるかもね。それらに比べて、僕達じゃ全キヤラ中最弱扱いかなあ」

カイト「さあな…俺らが判断する所じゃねえよ。ただ、破壊者はともかく俺達がどの位置にあるのかは知りたい気持ちはある」

俺「そうですねえ。まあとにかく、じっくり傍観していきましょう。破壊者もどっかて傍観してそうですし」

カイト「んじゃまた」

質問

アリア・ビビ・勇華へ

毎晩何やってんの？』では彼女等の答え」

アリア「いつネプテューヌさんを抱けれるか案を考えてました」

ビビ「あの天パに釘打ち…」（呪いの藁人形で）」

勇華「セ・レ・スと…ウフフ…」

真王「…『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「次、ペンネーム『亀鳥虎龍』だ。』上条

「情報収集って、結構大変なんだよな」

神裂







「！」

真王「想像通りのリアクションをありがとう。最後に新八」

新八「僕はジャンヌちゃんと彼女出来てうれしいんですよ。でも実はこの前風花さんのゲスト出演で咲夜さんにぼこぼこにされてもう足洗ってます……（ガクガク）」

ジャンヌ「もう二度とあんなことしちゃダメだよ新八君」

新八「ジャンヌちゃん……」

ジャンヌ「新八君……」

新八「ジャンヌちゃん……」

ジャンヌ「新八君……」

新八「ジャンヌちゃん……」

ジャンヌ「新八君……」

新八「ジャンヌちゃん……」

ジャンヌ「新八君……」

銀八「カーッペ……！」

いつのまにか復活した銀八がいやそうに唾を吐く。

ジャンヌ「汚いわよあんた!!」

ユニ「死にさらせえ!!」

銀八「ギャアアアアアアア!!」

銀八はユニのショットガンで撃たれた。

ちなみに死んでません。

真王「では『黒龍』さん、新八以外廊下に立つてください。ラスト、ペンネーム『ウインド』さんからだ。『ウインド』これって明らかにあの話だ」

クリア「けど面白いじゃないですか」

ウインド「確かにな……」

クリア「じゃ質問行きますか」

ウインド「だな。ネプテューヌに質問。白夜又モードの銀さんと戦って勝てる見込みはあるか？」

クリア「女神四人に質問。乗りたいガンダムは？」『ネプテューヌなら女神化して五分五分ぐらいかと……。そして彼女等の中でガンダムに乗る人はベールですね。しかも全ガンダムフィギュア持つてると……」

ユニ「駄目ねあの婦女子……。『ウインド』廊下に立ちなさい。さて、次はあの双子よ。あとよろしく」

シナ（本名：兔佐木 志奈）

髪：白（クリーム色の天然パーマ）

目：赤（茶色）

服：逢魔ヶ刻動物園の椎名の服

年齢：30代あたり

3サイズ：無し

体重：40キロ

性別：

種族：王魔時動物園園長

魔力光：なし

好き：楽しみ、面白いこと

嫌い：楽しくないこと、つまらないこと

性格：常に面白い子としかしない主義らしい

レベル：6000

得意武器：素手

スキル：アニマルの呪い（動物の魔力を手ぬすることで力を得る。

戻すこともできる）

詳細：幼き頃化け物ウサギによって呪いを受けた男。天下一の動物園を作ることで元に戻るうとしていた。だが面白いことしかやらん主義なのでほったらかし。その反面孤独を嫌うらしい。ネプギアや他の仲間たちと主に天下一にしようと考えている。

### 第九十三訓：動物が変身するのは奇想天外（後書き）

シナ「ワシは王魔時動物園園長シナじゃ。早速じゃが機動六課をワシの天下に収める！」

ネプギア「って何やろうとしてるんですか園長!!」

シナ「だってワシ面白いことしかやらん主義！ほれあるじゃろ？近頃魔王なんて呼ばれとる奴」

ネプギア「それは本人の前で入っちゃだめですよ!!ただでさえをれを言った被害者は後を絶たないんですから!!」

シナ「そうか、なら金の死神は露出狂だと…」

ネプギア「もつとだめに決まってるでしょ!!」

シナ「次回！『王魔時動物園戦記』最終話！『シナの野望』ワシの活躍は天下を治めるのじゃ！」

ネプギア「ですからそう言った迷惑行為は止めてくださいー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ネプテューヌ「・・・ネプギア…一体何が？」

真王「次回『別れとなると悲しいことになりやすい』テイクオフ」

「予告」

プリニー「ついに転生のお金がたまったッス……」

第九十四訓：別れとなると悲しいことになりやすい（前書き）

真王「今日はプリニーが転生します！」

プリニー「かなしき別れッスー!!」

第九十四訓：別れとなると悲しいことになりやすい

キピーーーン！

プリニー「！」

部屋の掃除をしていたプリニーがなにかを察知した。

プリニー「とうとう来たんスね、この時が…」

彼自身も気付いているようで、報告のためにイストワールに言う。

プリニー「話があるツス」

イストワール「・・・その様子だともう時期が来たということですね」

イストワールも彼の事を悟ったらしい。

イストワール「皆さん、話したいことがあります」

イストワールとプリニーが一同に向き直り言う。

ネプテューヌ達女神組は悟ったらしい。

ネプテューヌ「プリニーさんが転生するの？」

全員『え！？』

驚愕する一同（女神組除く）。

ネプテューヌ「プリニーがどういいう存在か覚えてる？」



なのは「確か、生前罪を犯した人間が、償いのために生まれ変わった姿だって……」

なのはの言葉にが頷き、プリニーが説明を引き継いだ。

プリニー「プリニーの本能で分かったんすよ、今日が転生の日だって。だから、皆さんとは今日でお別れッスね。短い間だったッスけど、お世話になりましたッス」

ペこりと頭を下げるプリニー。

だが陰で聞いてしまったヴィヴィオがいた事は誰も知らない。

その日は、ささやかながら宴会が開かれた。

そして夜。

あちこちで雑務を手伝っていたこともあって、プリニーと親しい局員は多く、皆別れを惜しんでいた。

とは言え全員が出向くわけにもいかないのです、見送りのメンバーは三隊長にヴォルケンリッター、FW陣、協力者組、ラインの合計97人に絞られた。

## 魔界・月渡しの雪原

見渡す限りの銀世界を、赤い満月が照らしている。

はやて「魔界の月は赤色なんやね」

桂「俺もあれは初めて見たな」

ネプテューヌ「違うよ。普段は金色なんだけど、不定期で赤く変わる日があるんだよ」

ネプギア「赤い月の光が、償いを終えたブリニーの魂を浄化して、新しく生まれ変わるようにしてくれるんです」

はやてと桂の言葉にネプテューヌが答え、ネプギアが補足を入れた。

ビビ「……何か聞こえない？」

ティアナ「これって、歌……？」

ティアナが気付いた通り、どこからか歌が聞こえてくる。

IBGM赤い月by魔界戦記ディスガイア

(Disgaea: HOD Soundtrack - Red Moon)

2753

『赤い月 赤い月

罪を犯した者共の

穢れを清める 赤い月

今宵は誰が生まれ変わる？

今宵は誰が生まれ変わる？』

高く、神秘的な歌声だ。

シグナム「一体誰が……、あれは……！？」

歌声の主を探して辺りを見渡していたシグナムが驚きの声を上げる。

銀時「んだこりゃあ？」

スカリエツテイ「これは…」

チンク「歌は彼らからか？」

グレイ「……………」

ギルシア「あの赤い月へ向かってるのか？」

レイン「というか数が半端ねえな」

彼らの視線の先には無数のプリニー。数え切れないほどのプリニーが  
一列に並び、歌いながら遠くに見える祭壇を目指して歩いている。

プリニー「オレ達も行きましょうッス」

プリニーが言って、一同は祭壇に向けて歩き出した。

月渡しの雪原・祭壇。

通称『月下の雪鏡』。

赤い月の光が柱となって立っている。

ユーノ「この柱は？」

プリニー「転生するための柱ッス」

見ていたユーノが呟くとプリニーが説明する。

キャラ「誰かいるみたいですよ？」

キヤロが言つたとおり、三人の黒い人影が光の柱の側にいる。大きな鎌を持った黒い手袋とマントが宙に浮いており、空っぽのフードの中に目と思しき赤い光が二つ灯っている。

ネプギア「あれは『死神』です」

ビビ「え！？あれがっ！？」

ネプギアが言つてビビがありえなさそうなことを言った。

多分銀時や土方も同じ意見だろう。

死神 償いを終えたプリニーの魂を赤い月に送り届ける使者。外見は邪霊族という悪魔に似ているが、その詳細は謎に包まれている。プリニーが光の柱に触れると、その体から光る球体 魂が抜け出て赤い月へと昇つていき、残された皮を死神が回収していく。

グレイ「プリニーの特性は分かった。ところで、プリニーが罪を償い終えるには、どれほどの時間がかかるんだ？」

ネプギア「罪の内容によってそれぞれです。百年もかからないプリニーもいれば、千年以上かかるプリニーもいます」

罪を犯した瞬間、死後のプリニー化が決まるわけではない。

善行をプラス、悪行をマイナスとして、死んだ時に総和がマイナスになっていった者がプリニーとなるのだ。

また、法で裁けない罪（自殺など）はかなり大きなマイナスとなる。

森羅「じゃあおまえはどのくらいかかったんだ？」

プリニー「大体三百年くらいツスね。まだ早い方ツスよ」

森羅の問いに答えるプリニー。

彼の場合、六課に雇われて人間基準で給料がもらえるようになったのが大きい。

ちなみに、魔界でのプリニーの平均時給は約15ヘル（アイスキャンディが一本60ヘル）である。

プリニー「そろそろみたいッスね……」

見れば、あれだけいたプリニーがもう一桁にまで減っている。プリニーは光の柱の前に立った。

ヴィヴィオ「プリニーさん!!」

ヴィヴィオがプリニーを呼びとめる。

ヴィヴィオ「やだあ!!行っちゃだあ!!」

涙をためて訴えるヴィヴィオ。

じたばた暴れるヴィヴィオを右にネプテューヌ、左にビビ、後に後ろから銀時が持ち上げる。

長い時間ではないものの、ヴィヴィオはプリニーを大切にしていたようだ。

プリニー「ごめんッス」

プリニーは謝る。

プリニー「皮肉ッスね……。プリニーになって間もない頃は、さつさと転生したくてたまらなかったのに、今は名残惜しくて仕方ないッスよ……!」

肩を震わせ、プリニーは一同の方へ向き直る。

プリニー「皆さん……！ お元気で……！ それにヴィヴィオ……」

プリニーはヴィヴィオの方へ向く。

プリニー「いつになるか分からないんですけど……何時か俺はヴィヴィオのそこへ行くツス！ 何年かかるか分からないんですけど迎えに行くツス！」

ヴィヴィオ「プリニーさん……うん！ 約束だよ！」

光の柱に触れ、プリニーの魂は赤い月へ昇っていった。

銀時、桂、月詠、源外、スカリエツティ、グレイ、神、チフユは登っていくプリニーの魂を見つめ、新八、神楽、ジャンヌ、ビビ、ナリア、さくら、ヒメラは涙を流しながら見て、それ以外は反応それぞれである。

特にヴィヴィオはすわりこんで泣き崩れていた。

ヴィヴィオ「う、う、……」

リン「グス……、あれ？ まだプリニーさんが残ってますよ？」

リンが気付いた。一同の後ろに数体のプリニーがいることに。

だが他のプリニーとは体色が違った。片方は若肌の色、もう片方は黒く眼鏡をかけている。

沖田・土方「あ？」

近藤「どうしたトシ、総吾」

若肌のプリニーと黒く眼鏡をかけたプリニーを見た土方と沖田が声を出し、近藤が聞く。

土方「イヤ、よく分からねえが……」

沖田「俺達は、あのプリニーを懐かしく思えるんでさあ……」

マジマジと若肌色のプリニーを見る二人。

そのプリニーは一同を、沖田を見た。

沖田「！ま、まさか……………姉上!？」  
全員「え!？」

沖田が驚いた形相でそのプリニーに聞く。

土方「ならお前は……………伊東なのか？」

土方は眼鏡をかけた黒いプリニーに聞く。

そしてそれぞれのプリニーの背後にホログラムのように半透明で少し明るめの人影が出る。

沖田の姉「こんな形で会ってごめんなさい、総ちゃん」

伊東「久しぶりだな土方」

沖田「あ、姉上!」

土方「…やっぱりお前だったんだな」

死んだはずの二人が目の前に現れて驚く2人。

土方「……………確かお前は攘夷で罪を犯したんだったな」

伊東「その通りだ。だから僕はその罪を償うためにこの姿になったんだ」

土方と伊藤は死闘を思い出して言い合う。

沖田「けど姉上は！罪なんて犯してなんか……」  
ミツバ「ごめんなさい。私はあの人に惹かれてるせいで大切な弟を構うことが少なかったから……。こんな不出来な姉でごめんね」  
沖田「そ、そんなことねえ……！」

沖田は姉と再会できたのか会話がぎくしゃくしている。

銀時「懐かしい奴にあつたな……」

新八「伊藤さんにミツバさんまで……」

ネプテューヌ「銀さん、あの二人誰？」

銀時と新八が2人に驚いていると、ネプテューヌが聞く。

銀時「女の方はあのドSの姉であつちの眼鏡は攘夷の奴さ」  
ネプテューヌ「……？また遅れたプリニーがいる」

ネプテューヌが後ろを見ると今度は茶色いプリニーだった。

茶色プリニー「そろそろ罪を償うって時に懐かしい奴に会えてうれ  
しいぜ！」

そのプリニーは銀時と桂を見ながら言う。

対して二人はチンプンカンプンだ。

桂「？何のことを言っているんだ？」

銀時「俺はオメエの様な奴と知り合いはいねえぞ？」

茶色プリニー「んだよ忘れたのか？いつも言ってたろ？」

茶色プリニーの背後に茶色い短髪に右目に眼帯、いかにも侍と雰囲気



気のある男が出る。

武蔵「仲間というのは家族なんだ！つてな！」

銀時「なっ！？オメエは…！！」

桂「か・・・風上武蔵かざのうえむさし！！」

銀時と桂は驚愕する。

かつて仲間と呼び合い、攘夷戦争ではかなく散ってしまった男・風上武蔵の存在に。

武蔵「久しぶりだな銀時、桂。あれから戦争は…、イヤ、いわんでも分かる」

武蔵は懐かしそうな顔をした後、同時に悲しそうな顔をする。

無理もない、攘夷戦争から月日が流れたんだから。

武蔵「もう何年たったかな？あの攘夷戦争・・・。結局、あの時は守る物を失っちまったな」

銀時と桂は沈黙する。

武蔵「だが、今お前達に守る物が出来たじゃねえか！」

武蔵が愉快そうに言う。

銀時は意味分かんない顔をしたが、桂は理解して笑う。

桂「ふっ、いつの間にか我等も背負うものが出来たしな。銀時は荷が重すぎるほど来たがな」  
銀時「・・・そうだな」

ようやく理解した銀時。

武蔵「過去を悔やんでもしょうがねえ。失った物は取り返すこともできねえが、今守る物を守るべきだ！銀時！桂！今の侍に出来ることは………正面から堂々とぶつかっていけ！」

銀時「……あんたは死んでも変わらねえな」

桂「同感だ」

武蔵「そっちな！」

武蔵のアドバイスに銀時と桂は吹っ切れた感じになる。  
そしてミツバ、伊東、武蔵は光の柱に立つ。

武蔵「んじゃお前ら。負けんなよ！」

銀時「お前もな」

武蔵と銀時は背を向けて、

武蔵、銀時「あばよ。ダチ公！」

銀時は去り、武蔵達は転生した。

女神やなのは達は祈りをささげた。

## 機動六課

戻ったなのはたちは少々元気がない。

無理もない。いつもいる相手がいなくなったからだ。  
特にヴィヴィオが一番痛手だ。

フェイト「どうしよう…」

なのは「ヴィヴィオ、あのプリニーちゃんをよく懐いてたからね…」  
ジャンヌ「転生は不定期だから…いつ来るかもわからないし、どんな世界に転生するか…いつの時代か平行世界か…」

全員「ハア…」

全員揃ってため息を吐いた。

???「そんなにさびしかったんですか…」

すると男のこの声が聞こえたのでそっちに向く。

青い髪に背中には茶色のバック、身長はヴィヴィオよりちょっと上くらいだ。

銀時「誰だおい？ここはテメエのようなガキンチョが来るところじやねえよ」

???「エリオさんとキャラロさんもいるのにですか？」

銀時「まあ確かにガキンチョだけだな…って何で知ってたんだ？」

シッシツと手でジャスチャーする銀時に少年が突っ込む。

その少年の一言に銀時が疑問を持つ。

だがヴィヴィオは少年からの雰囲気をつかっていたのだ。

ヴィヴィオ「もしかして…プリニー…さん？」

全員「え？」

プリア「うん、昨日ぶりだねヴィヴィオ。今の僕はプリアだよ」

ヴィヴィオ「プリア・・・プリアお兄ちゃん...」  
プリア「はい」

プリアが言うとヴィヴィオは泣いて抱きついた。  
かくしてヴィヴィオが懐いたプリニーは、プリアとして転生しまし  
た。

ただ余談としてプリアは強く男の娘ですので女性局員（+フェイト）  
に追いかけてまわされることになるのは言うまでもない。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!!」

.....シーン

銀八「・・・あれ？確かあの双子がアシスタントす」「代わりにワ  
シがやるんじゃ」「ってだれ!？」



アカツキ「そうだ気にするな。そんじゃ質問に行きましょつか!」

ネプテューヌに

一番の恋のライバルは?

眼鏡(新八)に

眼鏡じゃなくて、コンタクトにしないのか?

バスター「それじゃあ、此れから彼奴を眼鏡以外に何て読めばいいんだ?」

更新楽しみにしてます』では回答を」

ネプテューヌ「銀さんを狙うケダモノどもだよ!」

シナ「言ってる本人もケダモノの仲間入りじゃないのか?」

ネプテューヌ「!」

真王「それは言うな。次」

新八に眼鏡外してコンタクトをつけてみた。

銀時「あれ?新八がいね」な」

神楽「何処道草食ってるアルか?」

なのは「新八君が突然いなくなつたよ」

ギルシア「みえねえな」

近くに新八がいるのに見えてないだとぬかす一同。

真王「やっぱり馬鹿は頭駄目のようだ」

ネプギア「お姉ちゃん……」

ジャンヌ「落ち込まないで新八君……」

ちなみに上記三人は認識している。

真王「では『フリーダム』さん、あなたも地味になってみてください  
い」

シナ「では次のペンネームは『鳴神 ソラ』じゃ。『マリオ』お  
ゝ凄いな」

ルイージ「言うかネプギアちゃん、ガンバ！」

スネーク「解けたら銀時似なのかね？」

フォックス「さあ？」

ネス「質問『ファルコに懐いてるこっちのフランとお空についてど  
う思う?』」

タレ銀「質問!『俺が蛮ちゃんの能力使つと違和感ある?』」

ソニック「Hey、質問だぜ!」ビビはFFR（ファイナルフォー  
ムライドの略）を見た時どう思った?」

次回を待ってます!」蝙蝠とカラスか!天下ーのために飾るか!

真王「飾るな!ちなみにフランは変異蝙蝠だ」

シナ「そうか。次の質問じゃが、似合わない」

真王「そう思う。最後にビビ」

ビビ「これなんてチート!?!」

真王「ハイそれでは『鳴神 ソラ』さん、廊下に立ってなさい。次  
はペンネーム『ウインド』さんだ。『ウインド』wwwwwwww  
w」

クリア「え〜只今作者が爆笑中なので俺が質問します。勇華に質問。  
今出ている男性陣で結婚したい相手はいますか?あとなのはとフェ  
イトにも。銀さんと結婚するために試練を乗り越えなければならな  
い。試練は以下の通り」

「メアと戦って数分間生き残る」、「セレスと戦って数秒間生き残  
る」この二つだ。よろしく」では回答…」

勇華「もちろんセレス。ウフフ?」

セレス「はは……」

なのは「フェイト」どっち選んでも死ぬウウウウウウ!!!」



シナ「リアクション面白！」「ウインド」よ。廊下に立つのじゃ。  
ではペンネーム『なめ猫』も始めよう。『俺「ネプギア頑張れネプギア。なめ猫な俺らです」

カイト「やはり来たな、ネプギア主役」

ラムザ「ネプギアもヒロインだからね」

俺「さて、原作でもまじめな頑張りっ娘キャラのように見えるけど、  
ここでも違和感ないくらい頑張ってますねー」

ラムザ「またネプギア主役の話があるといいね。もちろん楽しませてもらおうよ」

カイト「しっかし、ぶったまげた動物園長だな……うさぎか何から  
しかったが；」

ラムザ「次は何するんだらうね；」

カイト「さあな……」

俺「そっいえばカイト達のキャラ紹介も書いてなかったですね……そ  
ろそろ書いとかなば」

カイト「おう、頼んだぜ」

ラムザ「ではまた！」

いつもの質問？

ビビへ

「やっぱり銀さんと決着つけたら？あ、うちでアイリちゃんが出る  
んだけど、いつか会わせられたらいいな。大地ふつとばして岩山ぶ  
った斬りまくる強さだけど」

質問なのかこれは、な質問

『時空管理局や機動六課のメンバーいちおフルパワーをたった1人で撃破、すな

わち無双できる者よ来たれ！ BGMはヤンマーニ（nowhere）  
『e』

（なお、そちらの時空管理局や機動六課でもおk）

ラムザ「何がしたいんだよ……」

カイト「……いつか、俺にも突撃しろと？」  
『最初の奴は作者に聞け』

真王「もうやらねえよ。あと無双出来る人は……」

グレイ、ビビ、神、レーティア、ギルシア、レオン、ユウカ、ガレ  
ーナ、チフユ、メア、セレス

真王「……ぐらいだろう」

シナ「出す前提じゃな。『なめ猫』よ。一緒に天下を取ろうぞ」

真王「勧誘するな。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問だ。  
『ども……月光閃火だ。』

しかし……アリアを宥めるのに、結構時間が掛かったぜ……（汗）。今  
後は気をつけよう……（汗）。

輝刃「そう言いつつも、閃火の肌はずいぶんツルツルになってるな  
……（汗）。あ……質問……行くぞ？まずは俺からだ。」

1・真王に質問……ずいぶんと登場作品が増えていつてるが……まだ増  
え続けるのか？

確かに、結構な数の作品が入り乱れてるよな……（汗）。次は俺から

だ。

2・レジイに質問…この中で『これならギリギリ大丈夫だな…』  
と思えるモノはどれかな？

1…宇治銀時井

2…土方スペシャル

3…スーパーネブ井（名称合ってるかな…（汗）

輝刃「ううむ…どれも完全に胃に本能的な苦手意識を生みそうなモノばかりだな…（汗）」

うん…あ、ところでレジイってアリアの事どう思ってる？っていうか、ぶっちゃけ異性としてどう思ってる？

輝刃「閃火…いくら何でも自分の気に入ってるキャラであるアリアをレジイとくつつかせようとしているのは…案外お似合いになるかもしれないな…。」  
「さあまだ分かりません。増えるか増えないかは」

レジイ「3番…だな」

真王「では『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『一酸化窒素』さん。『対戦相手の皆さんに誰と戦いたいか聞いてみたら…。』

バルバトス「あの銀髪の侍だ。あいつ確かゾーマとか言うやつ倒して英雄扱いされているんだろ。」

ブロリー「カカロットオオオオオオオオオオ！」

アンデルセン「異教徒は全員皆殺しだ。」

球磨川楔「まあ…誰でも良いか…。」

赤屍蔵人「楽しめれば誰でも構いませんよ…フフフ…。」

「

まあこんな感じだ……。

そしてみんなに質問

カーバンクルEXさんのリクのお助けキャラの中でタッグを組みたいのは誰？

そして銀さん……まあ頑張れ……。『数が多いな…、今は女神と銀魂組で』

ネプテューヌ「うん、霊夢さんかな？」

ノワール「魔理沙ね」

ブラン「夢食い…」

ベール「めだかという方ですわ」

ネプギア「私もお姉ちゃんと同じ人」

ユニ「同じ銃使い（違います）の御坂ってやつよ」

ラム「狼牙さんかな？」

ロム「（こくこく）」

銀時「おれはいらね」

新八「悟空さんで！」

神楽「私が悟空ネ！」

桂「馭どのだな」

月詠「両儀式、わっちはそれがいいの」

真王「ハイでは『一酸化窒素』さん、廊下に立ってなさい」

シナ「うむ、次はペンネーム『リイーン』じゃ。『どうも！！更  
新、お疲れ様です！！！！』

神「あり？ 前回の感想、消えてね？ 俺様が活躍した回の」

上手く送信されなかったのでしょうか……………？ まあ、その分の感  
想を書けばいいだけの話ですし

神「まあ、そうだな」

さて……………ようやく活躍しましたね、神様

神「おうよ！！ ラスポスらしき奴を一撃で追い払う！！ さす  
が俺様！！！！ 色々狂ってルウ！！！！」

あと……………何気にビビも活躍してましたね

神「ああ。あれには俺もびっくりだわ……………まさか、あいつが活躍  
するとは。しかも、ヒュムノスをチヨイスするとは」

しかし……………はじめ見たとき、アレには、え？ って思いましたけ

どね……………

神「あの、“拒絶される闇”って奴か？ よく見ると、オリジナルだし、あれ英語だしな」

ヒュムコンやヒュムミュにも無いタイトルで、んん？ と思つたら……………いや、自分の把握していないヒュムノスがまだ在ったのかと勘違いしましたよ……………それに

神「ああ？」

ヒュムノスで二人称視点、又は三人称視点というのはあまり無いんですよねえ。ヒュムノスというのは、自分の想いを謳うモノです。なので、普段は一人称視点の歌詞が多いのです

神「（ああ、スイッチ入ったか）」

ですから、“される”という文法は、ヒュムノスではあまり使用されません。あの場合、“拒絶される闇”ではなく、“闇を拒絶する”という意味合いの方がヒュムノスとして合っています……………あと、ヒュムノスのすべてには、必ず頭に“EXEC”という単語が入ります。これは全てのヒュムノスに必要なモノで、“実行する”という意味を持っており、その詩の想いを具現化させるキーに成ります。それが無ければ、ヒュムノス語で謳っていたとしても、効果が表れず、ただ想いを独白しているようなものです。つまり、在れをヒュムノスとして成り立たせるには、“EXEC|REJECT||DARKノ・（エクゼク・リジエクトダーク）”。または、“EXEC|HYMME|REJECT||DARKノ・（エクゼク・ヒュム・リジエクトダーク）”となります。或いは、これが“インフェル・ピラ”をサーバーとした“新約パスタリエ”のヒュムノスの場合、

“EXEC”ではなく“METHOD”という単語に成り、“METHOD|HYMMERECT|DARKノ。(メソッド・ヒュム・リジエクトダーク)”のような形に成ります

神「おいおい……………よくまあ知ってるなあ、おい」

使っているネタのことぐらいは、熟知しておかないといけないと思  
いまして……………それに、ヒュムノス語はかなり奥が深いので…  
……………面白いんですよえ。ネタとして、かなり使えそうですねですよ

神「まあ、まだ勉強中なんだろう？」

はい……………“新約パスタリエ”に至っては難しすぎますし、“アル・  
シエラ(星語)”なんて無理です。理解が追いつ来ません

神「ま、まあ……………気長にやれ」

目指せリアルレーヴァテイルです!!!! いづれは、自作ヒュムノ  
スとか作りたいですし

神「……………もうシラネ(；ーー)」

あとは……………なんか、降魔ヶ刻動物園のが出てきてますし……………

… ホント、カオスが増していつてますね

神「ただだけキャラ増えるんだがWWW 忘れられているキャラい  
るんじゃないの？」

間違いないますね、これは……………

神「良い例がここに居るし………な」

うっうっ………で、では!! 次回も楽しみにしておりますので、執筆、頑張ってください!! 失礼します!!

神「ばいばい!!」

では、いくつか質問を

神「おお、あるのか」

・真王様へ。ハッキリ言って、この銀女神鎮魂歌の全キャラを把握していますか？

・再び真王様へ。“METHOD REPLEKIAノ.”という曲を知っていますか？ ヒュムノスの一つですが………もし知らなければ、よかつたら聞いてみて下さい。Youtubeとニコ動に歌詞付きの動画が在りますので。お勧めです

神「おい!! 最後のは質問じゃねえだろ!! しかも、処刑用BGMタグが必ず付いているッ!!」

いやあ、ヒュムノスの話してたら、無性に聞きたくなくなってきました………ほんと、いいですよ、レプレキア。最高の“通常戦闘曲”です

神「あんなもの、通常のバトルで流れるとかなあ………贅沢だろ、



オイ」

いつ聴いても、ラスボスの曲としか思えない感じが、また堪らないんですよ」

神「やっぱさ、ヒュムノスは神曲ぞろいだよな」

ですね」・・・なんだかワシと似た性格しとるな」

真王「無視だ無視。忘れないように登場したキャラ達をメモってますよ。後その曲は知りませんですしアルトネリコ持ってません」

シナ「ふうん」リイン」よ。とりあえず廊下に立て」

真王「次です。ペンネーム『黒龍』さんからだ。『黒龍』まさかあの唯我独尊ウサギのあの人が登場するとは……」

銀時「なんつつか、真王もジャンプ買ってんだな」

ソラ「単行本買った可能性もあるだろ」

黒龍「なににせよ、ネプギアの大変なバイトが始まりましたね」

ソラ「そうだな」

黒龍「なんて言うか、神とシナって似ていますよね」

銀時「あゝ、なんか雰囲気似てるもんな」

ソラ「気が合いそうだな」

黒龍「じゃあ質問しますか」

1・これからもシナ達、王魔時動物園の人たちは出るんですか？

2・ジャンヌに質問。新八が屁怒紹様に襲われたらどうしますか？

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『へい、もちろん再登場の予定はしています」

ジャンヌ「そそそそそのときはわたわた私がままままももってあげあげあげ・・・（ガクガクガクガク）」

真王「愛と恐怖がまじりあっている……。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい。つぎだ。ペンネーム『支配者』さんだ。『ジャンヌに質問  
新八がなのはに未だに好意を持っていますかいかがいたしますか？

銀八と銀時に質問

リア充を如何思いますか？

皆さんに質問

屁怒紹に勝てるのは誰ですか？』」

ジャンヌ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

真王「答える気なし……。次、銀八は気絶してるから銀時」

銀時「爆発しろ!!!」

真王「・・・最後」

レオン・ガレーナ「私だ（余じゃ）」

神「俺様だ」

セレス「少なくとも俺は魔神だ」

真王「では『支配者』さん、廊下に立ってなさい。最後だ。ペンネーム『改竄者』さんからです。『質問です』  
ギルシア・アダマントさんへ

ザ・チルドレンのなかで好きな子は?『』

ギルシア「全国の少女すべて!!!強いて言うならヴィヴィオたんだけ!!!」

真王「『改竄者』さん、少女と廊下に立ってなさい」

シナ「もう終わりが、ワシはもう帰る、じゃあな」

くプリアく

髪：青

目：黒

服：プリニーの皮のような服に黒短パン。背中にいつもリュック型のプリニーバックを背負っている。

年齢：8歳

3サイズ：なし

体重：35キロ

性別：

種族：プリニーボーイ

魔力光：???

好き：ヴィヴィオ、お金、働きごと

嫌い：面倒事、押し付けられること、襲われること

性格：少し適当気味。

レベル：5000

得意武器：プリニーナイフ

スキル：プリニー指令（隣接するプリニーの数で能力が大幅に上昇する）

詳細：罪を償い終えたプリニーが転生した姿。女の子と間違えるくらい超可愛い顔立ちで、よく女性からいちゃつかれたり、童貞を取られかけたりしている。現在はヴィヴィオの世話係である。

第九十四訓：別れとなると悲しいことになりやすい（後書き）

真王「さて、次回はまたキャラが増えます。しかも意外すぎる登場の仕方で！！」

ラム「なんなのか気になるけど！次回！」人は知らない間にお母さんになっている『「

ロム「テイクオフ・・・」

予告

レーティア「私、一児のママになっちゃう？」

第九十五訓：人は知らない間にお母さんになっている（前書き）

レーティア「今回の私、赤ちゃんが出来ちゃう？」

真王「マジツスカ!？」

第九十五訓：人は知らない間にお母さんになっている

ズキンッ

痛イ

ズキンッズキンッ

私ノ中デ暴レテイルヨウダ

ズキンッ！ズキンッ！

イタイ

ズキンッズキンッズキンッ

マルデセマイクウカンカラデテガッテイルヨウダ

ズキンッ、ズキンッ

アア、ワタシニ

ズキンッ

ワタシノナカニ

ズキンッ！

アラタナイノチガヤドッテイルンダ！

ズキンツズキンツズキンツズキンツズキンツ

## 六課の食堂

銀時「クソガキ！俺のパフェ横取りしたばかりか何に悪びもなしってどういうことだ！！」

ラム「何言ってるの、あそこにポツンと置いてあって『どうぞ食べてください』って言ってるもんじゃないの？」

ロム「（こくこく）」

銀時とラムが言い争っている。

実はラムが銀時のパフェを食べてしまい、結果として銀時は怒っている。

銀時「もうゆるさねえ！お尻ペンペンじゃゆるさねえからな！！」

ロム「ヒ……」

怒る銀時に思わず涙が出るロム。

ラム「ああ！！ロムちゃんを泣かすなんてあんたサイテーだよ！！」

銀時「んだよそりゃ！！それ俺が泣かしたみたいじゃねえか！！」

ネプテューヌ「またいじゃなくて、本当に泣かしてんじゃん」

ブラン「……何処からどう見てもあんたのせいには見えぬ」

ネプテューヌ「又達や六課や新八たちは銀時を冷ややかな目で見る。」



銀時「止めてくんない！？その目止めてくんない！？俺なんか悪いことした！？」

なのは「自覚ないんだね…」

フェイト「銀時…」

なのはもフェイトもこればかりは銀時の味方しない。

ギルシア「だったら簡単だ。俺がこれでもかというくらい守って…」

ブラン「手を出すな！！」

ギルシア「ごほっ！」

ギルシアが手を出しかけた瞬間ブランに殴られた。

ジャンヌ「あいかわらずギルシアは幼女に弱いわね…」

レーティア「そうね…」

ジャンヌは呆れた顔をして、レーティアは下腹をさすりながら言う。

コンパ「…？…？」

コンパはレーティアのしぐさを気にした。

ネプテューヌ「そうだネプギア、アレ持ってきた？」

ネプギア「これだよね」

ネプテューヌがネプギアにあれと言うとネプギアは理解してある物を取り出した。

それはケチャップやらマヨネーズやら納豆やら小豆やら鮭やらとなんかトッピングするものが多い。

そしてドンブリが2つ。

はやて「まちいや。なんやそれは」

ネプギア「見てれば分かります」

そう言うネプギアの目は諦めてくださいと言う感じだった。

するとネプテューヌはトツピングをドボスカと入れまくった。

そして完成したのが、

ネプテューヌ「お披露目、スーパーネプ丼！」

とどんぶりを持ってどや顔で言う。

銀時「つてなんだよそれ！！いろいろ混ざり過ぎだろ！！」

沖田「いや、旦那の嫁さんも土方さんと同じ犬の餌にしちまうた  
あ」

土方「総悟テメエ何時かぶつ殺す」

銀時が怒鳴り、沖田は皮肉なことを土方に言う。

ネプテューヌ「……こんなおいしいのに何で理解できてないん  
だろっ……」

ネプギア「見た目から駄目だと思っけど……アム」

全員「そう言うお前は何で平気!?!」

ネプテューヌさがっかりした表情で食べ、ネプギアは突っ込みなが  
らそれを食べる。

ただその光景に全員ネプギアに突っ込んだ。

レーティア「……………」

レーティアはなぜか離れた場所で下腹をさすっている。

コンパ「レーティアさん……」

レーティア「！！……ってコンパ？」

不意にコンパが声をかけてきたのでレーティアは驚く。

コンパ「ちよつと失礼です」

レーティア「！！だめ！」

レーティアは言うがもう遅し、コンパはレーティアのお腹に耳を傾けた。

やがれコンパは驚いた表情をした後レーティアに向く。

コンパ「レーティアさん……」

レーティア「……」

コンパ「あなたは……」

アイエフ「どうしたのコンパ？」

アイエフが二人に聞いてきた。

レーティアは逃げだそうとするが、コンパにがちり掴まれて逃げられない。

コンパ「皆さん、レーティアさんが……」

アイエフ「……どうかしたの？」

アイエフが目を細め、六課や一同がレーティアに向く。  
ギルシアはまさかという顔をしているが。



・・・微かに心臓の音が聞こえる。

アイエフ「マ、マジ・・・？」

ネプテューヌ「こ、この中に・・・／／／／／」

ネプギア「赤ちゃんが・・・／／／／／」

アイエフは唖然とし、ネプテューヌとネプギア、他の女神達も顔を赤くする。

もちろんレーティアは恥ずかしさで顔を赤らめてうつむく。

レーティア「内緒にしたかったのに・・・、いつか驚かそうと思ったのに・・・」

コンパ「ダメです！もしもの時に対応できなかったら元の子もありません！」

レーティアの呟きにコンパが否定する。

普段よりも少しすごみが増しているのは気のせいだろうか・・・。

なのは「妊娠・・・」

フェイト「先を越された・・・」

はやて「なんか負けた・・・」

妊娠している＝母親になることに3人娘はショックを受けていた。

アリエス「つか・・・なんでそんなことに？」

ユニ「っていつか何時からよ」

レーティア「ちよつと宇宙の世界でね・・・」

銀時「・・・あれか」

レーティアの言う宇宙に銀時は思い出す。

銀時「てことはオメエ…まさか…」

レーティア「・・・ギルシアと肌を重ねちゃいました?・・・きゃ  
!いつちやった???」

女性陣(レーティア、子ども組除く)「ウガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

レーティアの腹立つ言動(今だ結婚できない女性にとって)に頭を抱える一同。

レーティア「あの日付き合って間もないころ、私は大きく彼に惚れちゃったの!こっさり抜け出して彼の部屋に来ちゃったらもう積極的にしてきちゃってさあ」

ギルシア「・・・その時の記憶は全くないんだが?」

レーティアの言葉にギルシアは曖昧に言う。

レーティア「ごめんごめん、ちよいと魔法をかけてみたら彼積極的になって・・・そして彼からの愛の…キヤー!キヤー!キヤー  
!!!!!!!/!/!/!/」

レーティアは訂正した後なぜか頬を赤くして体をくねくねと動かし  
ている。

女性陣の怒りボルテージが上昇していく。

ベール「う、羨ましいですわ!大好きな彼氏と中d「止めんかああ  
あ!」むぐ!」

ベールが言うてはいけない言葉を言いかけた瞬間ノワールが止める。

レーティア「とはいえ、私の中にあるこの新たな命、この子の未来も作らなきゃいけないわね」

お腹をさすっというレーティア。

自分が母親になるという自覚もあるようだ。

レーティア「で、私はこれからどうするの？」

コンパ「もちろん、医務室で休むです」

シャマル「安静にするのが一番です（やっと私の出番）」

レーティア「・・・わかったわ」

レーティアはちょっと不安になったが、返事した。

アイエフ「ところでコンパ、妊娠の時の対策って習ってる？」

コンパ「ぜんっぜんないです！」

ネプテューヌ「サラッと凄いこと言っちゃってるんですけど・・・」

アイエフは不安ながら聞くと、コンパは真顔でないと答え、ネプテューヌ達は苦笑いを浮かべるしかなかった。

とりあえずレーティアは医務室で安静することにした。

数日後・・・

レーティア「うう……うう~~~~ん……」

つらそうな表情をするレーティア。

すでに出産の兆しがやってきたのだ。

コンパ「どどどどどどうしようです〜!!」

シヤマル「落ち着いてコンパちゃん！水と洗面器とタオル的な物を持ってきて！」

経験のないコンパは慌てるが、シヤマルが落ち着かせる。

ネプテューヌ「つ、ついに出産の瞬間が……」

ネプギア「だ、大丈夫でしょうか？」

みている人たちも固唾をのむ。

そして……

レーティア「あ、ああ……うあああああああああああ  
！」

オギヤアアアア！！

新たな命がここに生まれた。

ネプテューヌ「おお！！でたああ！！」

桂「なんとお！」

銀時「まじか!?!」





リアス（か、可愛いじゃない…）

ユウカ（あらあら・・・）

咲夜（いつかユウ君と…）

さくら（いつかレン君と…）

タバネ（かわいい女の子だ〜）

アリエス（かわいい・・・はっ！いかんいかん！私はネプテューヌさん一筋…）

ほとんどの女性陣はこう心の中でいう。

赤ちゃん「う〜」

数日後・・・

ネプテューヌ「ほらほら〜、ばあ〜」

赤ちゃん「きゃっ！きゃっ！きゃっ！（^ ^）」

ネプテューヌや他の女神達が赤ちゃんを喜ばしている。  
ちなみに赤ちゃんの名前はリルとレーティアが名付けた。

レーティア「ほら〜、リルちゃんも元気ですね〜」

リル「だあ、だあ、あう〜」

銀時「けっ！何が可愛いんだか…」

あやして喜ぶレーティアとリルに銀時が毒を吐く。

ネプテューヌ「なにそれ？新八君から聞いたけど気にしてるの？」

銀時「あいつのせいで俺がどれだけ苦労していると思ってるんだ？  
ヴィヴィオの事も含めてな」

銀時の言うあれとは銀時とクリソツの赤ちゃん・勘七郎のこと。  
アレのおかげで隠し子騒動にあわれた。

リル「あううあう！」

レーティア「？銀時、リルが呼んでるわよ」

銀時「イヤ、て言うか何で分かるの？」

レーティア「女の感よ」

なぜ赤ちゃんであるリルの言葉が分かるのか疑問に思ったが、銀時はとりあえずリルに近寄ると、

ギギギギギギ！

銀時「いでででで！ちぎれるちぎれるちぎれるって！…！」

レーティア「ちよつとリル！？」

リル「キャッ！キャッ！キャッ！キャッ！」

いきなりリルが銀時の髪の毛を引っ張っている。

当の本人にとっては銀時の天然パーマが珍しいらしい。

銀時「なにしゃがんだこのクソガキ…！」

リル「（ビクッ！）ふえ…。」







銀時「何見てんだよ。怒りてえのはこっち…ん？」

銀時が言うとき気配を感じたので振り向くと、

ガスッ！！

後ろから殴られた。

銀時「いつて！なにしやが…」

銀時は頭を押さえて振りあえって…絶句した。

なんせ目の前にいるのは一つ目の布だけの存在がいるのだ。

銀時「えゝえゝえゝえゝえゝ！！なんでスタンドがここに…っつてこっちもかああ！！？」

銀時は後ずさって言うが、後ろにもう一体いた事の驚く。

レーティア「あれ？いつの間？」

レーティアはいつの間にかかぶっていた布が無くなったことに疑問を抱くが、

レーティア（！？まさか…）

すぐに答えが出た。

それはいとしい我が娘の能力…

リル「う~~~~~！！！」





ギルシア「物を浮かすわ攻撃するは生き物のように動くわだな」  
レシア「ふむ、『サイコキネシス』と『物質生物化』ですか」  
ジャンヌ「イヤあの『ハウリングボイス』も入れてよ」

リルはとんでも能力を持つてると思い知らされた。

それと同時にリルを怒らせないようにしようと思った一同であった。

夜中

ギルシア「生まれたてのリルがいきなり能力しようとは驚いたな」  
レーティア「ええ、将来いい大物になれるわこの子」  
ギルシア「・・・いろんな意味が入るがな」

生みの親たる彼等は（リルの）将来のことを考えている。

リル「あうう」

レーティア「?どうしたの?」

リルが呼んでるみたいなので耳を傾けると、

リル「ただ、アううい」

ママ、大好きと言っている気がした。

レーティア「ウッフ、お休み」

レーティアは笑ってリルのおでこにキスをした。

この後レーティアが「大家族とまではいかなくてももつと子供を増やしたいわぁ？」と喋って2人はいい感じに甘々い夜で肌を重ね合いました。

何やってるかって？それはイメージしてください、ピストン運動だと。

くおまけく

銀八「教えて!!！」

全員「銀八先生!!！」

ラム「今日のアシスタントは！ルウィーの女神候補生ラムちゃん」と

ロム「ロムちゃんがやるよ...」

銀八「前はあの志村動物園園長が占拠しやがったからな」

ラム「先生、志村関係ありません」

ロム「関係ない…」

銀八「わーってるよ。んじゃペンネーム『月光閃火』から始めるぜ  
『ども』月光閃火だ。

しかし…プリニーの感触って、やっぱりプニプニしてるのかな？

輝刃「…見た目がペンギンみたいだからな…。感触もプニツとして  
いるのだろう…。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1 . プリニー改め、転生し終えたプリアに質問…というか助言だ。  
今は『男の娘』って触れ込みで女性陣に追っかけられてるだろうが  
…年頃になれば『凛々しめ美男子』という触れ込みで多少は追っか  
けも控え目になるだろうから気長に待っておけ。

確かに、『男の娘』と『凛々しめ美男子』とではイメージが多少ガ  
ラリと変わるからな…。次は俺からだ。

2 . レジイに質問…この中で使ってみたいのはどれ？

- 1 … 『スクライド』の『シエルブリット』
- 2 … 『テイルズシリーズ』の『エターナル・ソード』
- 3 … 『デビルメイクライシリーズ』の『エボニー& amp; アイヴ  
オリー』と『リベリオン』

輝刃「…どれも下手したら、建物をぶっ壊しかねないモノばかりだ  
な…(汗)。特に『スクライド』の『シエルブリット』辺りが…(

汗)。「『」

プリア「アドバイスありがとう…。でも作者が言うには将来の僕はいつも男の娘のままだって」

ラム「可愛いからね」

ロム「(こくこく)」

レジィ「うゝむ、3番目の銃かな？」

真王「では『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい。次はペンネーム『鳴神 ソラ』さんだ。『マリオ』転生したな」

ルイージ「それで追いかけるのね」

フォックス「銀時達は懐かしい人達に会えたな」

ネス「それで最後は…」

ピット「あ〜…」

クウガゴウラム(エルディ)「と云うか何で…」

アギトトルネイダー(マルス)「FFRをされてるのかな…」

リュウキドラグレッダー(ヨッシー)「いや〜」

ファイズブラスター(詩久利)「初登場が…」

ブレイドブレード(リンク)「(owo)」

マリオ「質問『FFRってチートって思える部分は?』」

スネーク「質問だ『プリアは暇な時は何をしてるんだ?』」

ルイージ「質問です!『シナさんを見た時どう思った?』」

次回を待ってます!『相手に一撃死を与えることかな?』

ラム「私もそう思う!」

ロム「(kokokok)」

プリア「暇な時はお手伝いをしています。時折女性の人から視線を感じるんですが…」

ロム「ウサギ人間…」

ラム「ウサギのお化けだよ!」

真王「まあ人それぞれ、『鳴神 ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ラム「よし、ペンネーム『フリーダム』だよ!『Sフリーダム』新しく転生したか…」

ジャステイス「だけど、女性局員に追われるとか…」

デステイニー「しかも、その中にフェイトがいるんだもん…」

レジェンド「母性本能か…？」

アカツキ「まあそんな事は、置いて質問に移りましょうか」

全員に

この中で、戦いたくないのは？

1. オベリスクの巨神兵
2. グレートモス×10000
3. ホワイト×100000000

銀時に

ジェットコースターとお化け屋敷どっちを選ぶ？

Sフリーダム「銀時が絶対嫌うものが入ってるな…」

更新楽しみにしてます』……ってゾンビ種は多過ぎだしさすがに無理でしょ！！」

ロム「ゾンビ、怖い…（ふるふる）」

真王「だろうな。では次」

銀時「ジェットコースター」

迷いなく答えた。

ラム「（やっぱ怖いんだ。かく言う私も一人じゃ怖いけど…）それじゃあ『フリーダム』さん、廊下に立ってなさい」

ロム「つぎは、ペンネーム『ケン』さん。『いや』・・・いいものだな。プリニーの話は

統夜「ああ。銀さん達は友達や同僚、家族と出会えたんだから・・・」

この手の話って別れた後数日後に舞い戻るってケースがあるしね。

統夜「プリア・・・災難だな。男の娘で女性局員に追いかけられるとは・・・しかもフェイトも一緒に追いかけてるとは・・・男の娘・・・恐るべし」

それじゃ・・・質問しますか。

真王さんへ

ここ最近ですが・・・マトモなキャラを作った事ありますか？お恥ずかしい限りですが・・・俺自身・・・マトモというのはどこまでなのか分からなくて・・・

統夜「アテナスさんへ質問。俺の蒼炎をどう思いますか？」

さて・・・転生者達へ差し入れをして終わるか

統夜「何だろう？」

とある次元世界でとれたとても甘くおいしいスイートスイカをお一人ずつ差し上げます。次回も楽しみにしています。『ケンさん、ありがとう...』

真王「まともキャラと言えばプリアぐらいですね」

ラム「イヤあの荒れよう見てまとも!？」

アテナス「全てを絶望へいざなう炎…。その炎が悪用に使われないことを祈ります」

真王「この後差し入れはみんなでおいしく頂きました。『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

ロム「次は…、ペンネーム『なめ猫』さん。『俺』どうも、なめ猫な俺らです」

ミリア「初めまして、FFT外伝のオリキャラとして出演してます、ミリア・レミユリスです。今度、ボクとカイト君がそっちで世話になるってことだから、挨拶として書きこみさせてもらいました」

俺「なお、ラムザはお休みです。あしからず」

カイト「さて、そっちはいよいよパーティーが始まりそんな中、オリキャラやコラボキャラの目立ちが多くなりつつあるようだな…」

俺「前回答えてくれた無双についても、銀さん達はいなかったですね…ネプテューヌも…」

カイト「どうなるんだ…？まさか、このまま神やレオン達よりも影が薄いまま終わるとは思えないが…」

ミリア「んー…今はまだ目立たないだけじゃないかな？ほら、物語のクライマックスあたりに覚醒したりとか」

俺「そうですねえ。ただ…ブローリーやワルプルギスの夜といった、スケールぶつとびキャラが次で一気に来るから、どうなるのか…」

カイト「さあな。こればかりは俺も予想しきれねえよ。ここじゃ、作者も神レベルみたいだし」

俺「うちもチートスケールであるとはいえ、真王さん達やキャラ達には全然かなわないですよ。俺だって神じゃなくて、ただのしが



ない男だし」

カイト「そもそも、ジャンルというか属性が違うからな。だが、銀さんやなのはさん達はどうするんだらうな……」

ミリア「そうだね……とりあえず、まずは傍観をしつかりしてからだよ。ボク達には、まだまだ知るべきことがたくさんあるから」

カイト「まあな。考え抜く間、目立つようなことはせずによろしく俺、いつも同じことを言っただけですが、これに尽きますね」

カイト「んじゃ、質問といくか」

質問1

「この二人の『モノマネ』できる人いるかな？もちろん姿もそっくりに」

・「バカなああああああ！！？（銀魂に出た杉山さんのキャラ」

・「将軍かよおおおおお！！！」（みんな大好きなあの人）

このメッセージにリアクションを

銀さんと桂とドSへ

「俺が…ガンダムだ！！！」

「あんたは一体何なんだあああ！！！」

圭「それでも！！守りたい世界があるんだあああ！！！」

ミリア「あ、あの…なんかだんだんカオスになってきてるよ……？」

カイト「暴走してきてんじやないのか……？」

俺「大丈夫だ、問題ない」

カイト・ミリア「……」

俺「ではまた」『……』「これ何のこと？」





猿飛「銀さんと結婚するのよ!!」

近藤「お妙さんと結婚するんだ!!」

土方「マヨネーズ王国」

沖田「全国の女共を調教でさア。あと土方を亡き者に…」

山崎「出来れば目立っていいかな？」

ネプテユーン「食べ放題」

ノワール「いつか声優に…（あとコスプレも…）」

ブラン「全国小説大賞を取るわ…」

ベール「世界一のゲーマーになりますわ!」

コンパ「立派な看護婦さんです」

アイエフ「トレジャーハンターね」

ネプギア「お姉ちゃんと世界の平和です」

ユニ「お姉ちゃんを超える!」

ロム「ラムちゃんと一緒…」

ラム「ロムちゃんと一緒がいいな」

真王「3つ目はまだ出番がないので言えません。『斬真 豪』さん。廊下に立ってなさい。次だ。ペンネーム『ミストファイナー』さん。』質問で御座んす。

真王さんへ

やっぱり新八はリリ銀パーティ編の開幕セレモニー公開処刑になるのかな?』…かってに殺すな。『ミストファイナー』さん、廊下に立って」

新八「(ホツ)」

ラム「えっと、次はペンネーム』どうしてこうなった』さん…  
ってこれ名前?まいつか。』質問です

銀さんへ

この中で思いつきりぶん殴りたい奴は誰?

1・QB

2・ムラタ(大番長の方)

3・木原数多』で、どうなのよおじさん」

銀時「おじさんじゃねえ!!お兄さんと呼べ!!とりあえず1番でラム「私もそう思う。』どうしてこうなった』さん、廊下に立ってなさい」

真王「んじゃ最後だ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問。『黒龍  
「今回は確かに良い話ではあるんですが…」

銀時「なんだ?なんか納得できない事でもあんのか?」

黒龍「いや、罪を犯した者をプリニーして労働基準法を違反したような重労働をさせて罰を償わしているのはデイスガイアの人達なんですよね？」

ソラ「確かそうだったろ？まあ自給もかなり低いみたいだしな」

銀時「つまり何が言いてんだよ？」

黒龍「いや、プリニー達をこき使っているデイスガイアの人達が何て言うかウザイみたいだな」

銀時「いや、なんでウザいんだ!？」

黒龍「なんて言うか、“なんであんたらに罪を犯した人間をこき使う権利なんかあんだ？そんな権利ねえだろ。させるなら社会貢献や人々の役に立つもつと意義のある事させる！この屑共!”…みたいだな」

銀時「おiiiiiiii!!!何気に喧嘩売ってんじゃねえよ!!!」

黒龍「いや、これは俺のつい思っちゃった事を言葉にしてこうなっただけで、他意はありません」

銀時「めちゃくちや他意あるだろ!!!しかもかなり命知らずな!!!」

黒龍「いや〜なんかミツバや伊東がプリニーになったらそんな黒い感情が芽生えてしまっって」

銀時「なんつうか悪役みたいな奴だなお前は!!!」

ソラ「ま、人間その一瞬でつい思ってしまう事ってあるからな」

黒龍「まあ今回俺が言いたい事はこれだけなんで質問いけます。今回はこの人たちです」

ソラ「真王に質問だ。なんで俺まで新八虐めたと思っっているんだ？俺は何もしていないんだがな」

黒龍「真王さんに質問です。真王さんも最初の頃は新八の扱いが悪かったと思うんですが、なんで最近は新八を気遣うようになったんですか？」

銀時「今回はここまでだ。またな」『それはもちろんあなたは“新八に対して接し方がつめたそうだから”。次ですが、ほとんどの二次銀魂小説で新八が酷い目にあったり新八に怒りを買う内容だったりと多くあったので私は新八に対して優しいことやろうとしました。その一つがこの小説にあった新八がジャンヌという彼女が出来た事。なので新八を不幸にしているところを見るとなぜだか知らないけど新八に虐める奴らに成敗を下したくなるんですよ」

新八「真王さん！そこまで僕に気を使ってくれるなんて！！」

ラム「でも結局眼鏡だけの存在よね」

真王「今すぐ雪山の中で遭難させようか？」

ラム「スイマセンデシタア！！」

ロム「デシタア！！」(ビシッ！)「」

真王「というわけで『黒龍』さん、新八をいたわりなさい」

銀時「つーか作者。コープススプラッター編で新八のメガネネタや  
つたろ？」

真王「あれはあれ、これはこれ。多少新八にそんなことやっても周  
りの作者のように新八をどうしようもない屑のような扱いする気は  
ないです。ロリコンだろうが変態だろうが私はそんな新八が面白い  
からなんですよ」

新八「えっと・・・ここは喜ぶべきなんでしょうか？突っ込むべき  
でしょうか？」

真王「どっちでもいいぞ。では次、ペンネーム『大佐』さん。『新  
八くん』に某大佐からありがたいお言葉が・・・」

シュバルリッツ・ロンゲーナ「死ぬがよい。そして質問だ。」（そ  
う言いながら真緋蜂改を連れてくる大佐）

リリカル勢へ

この中で勝てると思うのは？

ガラ婦人

真緋蜂 - 改

光翼型近接支援残酷戦闘機 エヴァツカニア・ドゥーム

アキ & アツカ

憎悪に満ちたセセリ

スピリチュア・ラーサ

おまけ



サタンクロウズ「プリアたん。結婚してー。」・・・無理なのが目に見える」

プリア「えええええ！？むりですよお！！」

ラム「真に受けるなあ！！『大佐』さん！廊下に立ってなさい！」

ロム「次は・・・ペンネーム『カーバンクル・ロード』さん。『なぜだか知らないが僕のせいで新八に死亡フラグが立ちまくってますね。』

まあ実際そうなるかもしれないレベルまで行ってしまつかも知れないですけどね。

オーガニクス「それよりストロベリーサンデーまだか？」

質問

ジャンヌさんへ

新八のこと守るって言ってますけど、だったらこいつ等から新八をまもれるのか？

こいつ等

ヨグIIソトース（ランドルフ・カーターシリーズ）

アルファ・ケンタウリ星人（Self-Reference ENGINE）

ラIIゲース（虚無戦記）

エル・シャダイ（異界戦記カオスフレア）」

ジャンヌ「・・・死んでも守る！」

新八「ジャンヌちゃん…！」

真王「甘いねえ…」

ラム「（ムカつくわね…）」

ロム「は、恥ずかしいよ…」

真王「『カーバンクル・ロード』さん。廊下に立ってなさい」

ラム「これで最後ね。ペンネーム『菓子折マスター』からよ。『ちなみにお土産はすべて赤屍さんにみんなに届けるように依頼します。』」

ちなみに新八にもお土産が…

世界樹の葉（死んじやった時に使ってたね。）

質問

神へ

「どうやってワルブルギスの夜を配下にしたんですか？」

神「ああん？そんなもの『魔法少女リリカルなのは』とある兄妹の転生物語』の『65話目』を見るや」

真王「『菓子折マスター』さん。神に逆らうな」

ラム「今日はここまで」

ロム「次回は…プリアが担当…」

〜リル〜

髪：紫（癖つ毛がある）

目：赤

服：赤ちゃんの服（B）／紫のワンピース（G）／若かりし頃の二ド레스の璃瑠の服（W）

年齢：いまだ0歳

3サイズ：19 / 20 / 23（B）— 80 / 51 / 72（G）— 12 / 58 / 84（W）

体重：7キロ（B） / 37キロ（G） / 42キロ（W）

性別：

種族：念力娘

好き：レーティアママ、ギルシアパパ

嫌い：銀時

性格：無邪気な子供のような振る舞い

レベル：????

得意武器：剣、杖、扇子

スキル：サイコキネシス（念動力でものを動かす。無論璃瑠なみ）  
物質生物化（無機物を生き物のようにする。実際はサイコキネシスで動かしているだけ）

生体変化（ドッペルゲンガーよろしく体を変化させる。赤ちゃんから子供、グラマーと変えられる。ちなみに赤ちゃんではB、子供ではG、大人姿ではWとなる）

第九十五訓：人は知らない間にお母さんになっている（後書き）

真王「さて、次回はパーティーではなく鬼道丸的なものです」

プリア「次回『魂は心の輝き』テイクオフ」

第九十六訓：魂は心の輝き（前書き）

真王「銀魂の『刀じゃ斬れないものがある』を模した物語だ」

リル「あうう（リリカル銀魂はじまります）」

## 第九十六訓：魂は心の輝き

どこかの大会

そのリング上でネコマタの恰好をしたぴちぴちの女性とサキュバスのようなぴちぴちの女性が向き合っている。

司会者「赤コーナー！！猫大好き故に戯れたい！キヤットちゃん〜ん！！」

観客共「ワアアア〜〜〜〜！！！！」

司会者「青コーナー！！悪魔になって魔に落ちよ！！サツキくんちゃ〜〜ん！！！！」

観客共「うおおおお〜〜〜〜！！！！」

司会者の紹介に観客（というかヤジ馬）たちが興奮する。

ナリア「キヤットちゃんファイト〜〜！！」

ジャンヌ「サツキくん負けるな〜〜！！」

そんな彼らの中に別々に応援する変態がいた。

ビビ「つてあほかあああ！！！！」

ジャンヌ・ナリア「ひでぶっ！！」

そんな彼女らにビビがとび蹴りをかます。

ちなみに上記3人以外に銀時、新八、神楽、ネプテューヌ、ネプギア、ノワール、ユニ、ブラン、ロム、ラム、ベール、アイエフ、コンパ、ヴィヴィオ、プリア、エール、コヨリ、メア、セレス、勇華もいる。

ビビ「面白いものががるからってついてきてみればキャットファイ  
ト!?!」

ジャンヌ「でもビビちゃん百合が好きだったよね?」

ビビ「そりゃそうだけど!?!こういう乱暴なやり方じゃなくてもっ  
と優しいやり方で攻めるのがいいの!?!それからなのはちゃんは永  
遠の19歳よ!?!ここ重要!」

もはや根本的にずれているビビ。

ユウカ「あらあなた達」

そんな時ユウカが現れた。

ジャンヌ「ユウカさん、あなたもこれに?」

ユウカ「ええ、女どうしがゆがんだ顔でゆがんだ形で倒れ伏す。こ  
れって爆笑もんじゃない?」

新八「何つうサイディスティックな楽しみ方してんの!」

ユウカのサディスティックな答えに新八は突っ込む。

ユウカ「あ、それはそうとみんな、ちょっとおもしろい物を見つけ  
たわ」

ユウカはそう言ってどこかへ行こうとする。

銀時達はとりあえずついてきた。

ミッドチルダ・地下道

銀時「おいおい、何処だよここ？」

ユウカ「裏世界、悪人達の社交場よ。ここは表の連中とは縁のないものがあるわ」

やさぐれ者みたいな者たちが集まる場所で銀時達が移動中。

神楽は商人の商品に興味を持っているが新八とジャンヌが止める。

そして人の大声が聞こえるところへ行くと、沢山の観客とその中央で闘技場のような場所がある。

銀時「こいつぁ、地下闘技場？」

ユウカ「煉獄闘技場、ここで行われているのは…」

戦場で一人は2メートルでムッキリした体格でいかにも強そうな男。もう一人は鬼の仮面をかぶり、黒いロングな髪 of 巫女服を着た女性が向き合っている。

????「死ねエエエエエえ!!!!」

男は斧を振り、女はその一瞬に腰にある刀を振る。

ユウカ「正真正銘の、殺し合いよ」

男は地面に倒れ伏せた。

詰まり女に切られて死んだ。

同時に観客達が歓喜の声を出す。

司会者「勝者！鬼姫！」



ネプギア「こんなことが…」

ユウカ「殺し合いなんて日常じゃ拜められないわ。だから誰にも見られない場所で賭けを取ってるの」

銀時「趣味のいい見せもんだな、おい」

神楽「テメエ嫌なもん見せやがって！寝れなくなっちまったらどうするつもりだこのやるし！」

ノワール「あんたは落ち着きなさい！」

ユウカに掴みかかる神楽にノワールがはたき落とす。

ネプギア「これは明らかに違法行為です！止めましょう！」

ユウカ「それはよろしくないわ」

ネプギアが止めるよう言うとユウカが止めた。

ユウカ「手を出したところで、ここを見ている権力者が見え隠れするものよ」

アイエフ「変な趣味を持つ奴もいるのね」

ユウカ「下手に動けば追われの身になりかねないわ。でも思わない？こういうものには虫唾が走るでしょう？」

ベール「・・・否定はしませんわ」

ユウカ「それからあれを見て」

ユウカは中央にいる鬼の仮面をつけた巫女・鬼姫を指差す。

ユウカ「煉獄闘技場最強闘士・鬼姫。やつを探ればいいことが起るんじゃないかしら？」

他人事のように頼むユウカ。

銀時「おい」

ユウカ「大丈夫よ。六課が聞いたら迷うことなく突っ込んでいくわよ。だからこのことは内緒よ。六課ともリアス達も」

人差し指を口に当てて言うユウカだった。

とある道場の前

銀時「つーか、本当にここに奴がいるのかよ……」

新八「ええ、ここに入っていくところを……」

銀時がこうぼやく。

銀時達は鬼姫を追いかけてここにいるのだ。

ジャンヌ「ユウカは情報系に関しては強い方よ。いざというときには役に立つから」

銀時「いざというときって……ほとんどは弱みを握ることじゃねえか」  
ジャンヌ「……まあそこもそうだけど……」

????「ぎゃあああ……」

全員「!?!」

銀時が突っ込みを入れてジャンヌがひきつらせると道場から子供の声が聞こえた。

ビビ「あれ？何か悲鳴が……」

銀時「お前らはここで待ってる!」



銀時「ば、バカやろう…人間にある穴はすべて急所…、ヤベ！ケツ真つ二つに割れてんじゃん！」

新八「銀さん落ち着いてください。元からです」

お尻をさする銀時と突っ込む新八。

部屋の奥ではネプテューヌ達は子供たちと遊んでいる。

巫女「ですけどそちらにも落ち度があるでしょう？あんなところで人の家を覗き込むなんて…」

新八「あの、すみません、ちょっと人探しをしてて」

巫女「？」

新八は訳を言う。

新八「巫女さん、このあたりで、恐ろしい鬼の仮面をかぶった女性を見ませんでしたか？」

巫女「鬼？これはまた、ではあなた達は鬼退治の桃太郎か何かですか？」

巫女は不思議そうな顔でいう。

銀時「三下の鬼なんざ興味ねえよ。狙いは大将首。立派な宝を持ってるなら別だがな」

アイエフ「とつちや駄目よ」

ある意味盗人の様な答えだ。

鬼姫「宝ですか、強いて言うならばあなた達はあの子供達を捕まえて売るつもりですか？」

するといつの間にか巫女さんから鬼姫に変わり現れた。

銀時「どわアアアアアアアア！！！てててて、テメエどういうつもりだ！！」

突然の登場に銀時と新八は驚く。

もちろんネプギア達も驚く。

鬼姫「あなた方もどういうつもりですか？あの闘技場から私を追いかけてきたのでしょうか？」

新八「あ、じゃあ本当に巫女さんが？」

鬼姫は仮面を取り、銀時と話していた巫女さんとして言う。

カナ「いかにも、私が煉獄闘技場の鬼姫こと、カナと申します」

道場の外、神楽はお手玉でジャグリング、ジャンヌ、ネプテューヌ、ビビ、エール、コヨリとかはケンケンパで子供たちと遊んでいた。

銀時「オイオイいいのか？茶なんか出して、鬼退治に来た桃太郎かもしれねえぜ」

カナ「あなた方もいいのですか？品物みたいにお茶を飲んで」

遊んでいる子供達を見て言う銀時とカナ。

ネプギア「沢山の子供たちと一緒にいる巫女さんは鬼だなんて思え

ません」

ノワール「でもこの子たち、もしかして孤児？」

ネプギアは力強い、ノワールが子供達を見て言う。

カナ「みんな、私の子供たちです。それも捨て子たち」

ベール「まさか、その子たちのためにあんな闘技場で？」

ベールが問うと、カナが答える。

カナ「私がそんな立派な人間に見えますか？こんな罪という血に濡れた私が……」

銀時「あんた一体……」

カナ「今も昔も変わらず、私は人切りです。剣の腕が取り柄で私はいつの間にか人切りなんて呼ばれることになったのよ」

数年前のカナが人を殺めると言う罪を犯している。

カナ「刑務所に入れられ、首が飛ぶのを待っていたんですが、私の剣に魅入られた方々が私を牢屋から出してくれました。それが彼らです。あなた方は煉獄闘技場を潰すつもりですか？関わらない方が身のためです」

ノワール「鬼の餌食になるつもり？」

カナ「宝に触らなければ鬼は出ませんよ？私はあの子たちのためなら何でもするつもりです」

カナの決意は本物だ。

そんな彼女にネプテューヌが赤ちゃんを抱いて笑う。

ネプテューヌ「クスクス、鬼がそんなこと言わないよ。どうにしろ立派な親じゃん」

カナ「汚いことをやった人を親と呼びますか？」

ネプテューヌが変顔になって赤ちゃんを喜ばせる。

カナはあまり表情は変わらない。

ネプギア「でも、今は悔しいはずです」

カナ「最初に子供を拾って、少しでも罪悪感をぬぐいたかった」

ネプギア「そんなものでやっていけるほど子供達の教育は厳しいと思います」

ネプギアはネプテューヌが抱いていた赤ちゃんを高い高いする。

カナは聞いて固まる。

子供「先生先生！これ似合いますか？」

新八「あ、こら返せ！」

新八のメガネを奪った子供がカナに近づく。

カナ「……………」

子供「あれ？先生？おいこら！先生になにをした！苛めたら許さないぞ！」

ネプギア「苛めてませんよ……」

銀時「そいつは悪かったな。こいつはお詫びだ。一応持つとけ。神楽、行くぞ」

黙ってうつむくカナに不審を持った子供は銀時達を睨む。

ネプギアは弁解し、銀時はあやしていた赤ちゃんを返す。

そして子供の頭に名称と六課の住所をわたし、神楽達と共に帰る。

子供「変な奴だったね。ここにお客さんが来るなんて初めてだね」  
カナ「ええ、最初で最後の客人です」

裏人「ゴホオツ！」

ユウカ「参ったわね。敵さんもなかなか尻尾がつかめないわね」

裏世界で人の山の上にユウカが座っている。

ユウカ「ザコ相手では情報が少ないわ…。でもちょっと暴れすぎたかしら？」

周りは五体満足の裏人たち。

そんなユウカの後ろに聞き覚えのある人が…。

???「あんなそんな仕事熱心なことしてるなんて珍しいわね…そんな働き者だとは知らなかったわ」  
ユウカ「・・・リアス」

リアスに見つかってしまったユウカである。

とあるファミレス



リアス「ま、遠慮せずに食べなさいよ」

ネプテューヌ「え？これ何？」

ユウカ「ごめんなさいね。リアスに見つかったの」

どうやらユウカの隠密行動をリアスにみつかってしまったらしい。

彼女等の目の前に料理がたくさん。

ちなみにリアス、ユウカ、ネプテューヌ、ネプギアがいるだけ。

ネプギア「伊達にリーダーやってませんね……」

リアス「面倒をみるのもリーダーの務めってもんよ」

苦笑いするネプギアにリアスは応える。

ちなみにネプテューヌはバクバク食っている。

リアス「ユウカにいろいろ吹きこまれた気がするけど、あれは関わらない方がいいわ」

リアスが警告する。

ネプテューヌ「その感じ何か知ってるみたいだね」

リアス「ええ、下手をすれば潰しかねない連中がいるからね」

ユウカ「ねえ、それって……」

ユウカが聞くとリアスは応えた。

リアス「……時空管理局最高評議会。ミッドチルダ愚か管理世界を我が物顔で作る。ミッドの人権を握っている連中よ。あの趣味の悪い闘技場は、あいつらにとっての遊び場に過ぎない」

## 闘技場の展望

そこにローブを着た男と支配人の男が見ている。

最高評議会「花型はどうした？鬼姫がいないぞ？」

支配人「それが、何か理由つけて顔を出さなくなっています」

最高評議会「そろそろ奴も潮時か、なに、新しい趣向も用意してある」

## 夜の道場

草むらで新八、神楽、ネプギア、ユニ、ロム、ラム、ジャンヌ、ビビ、ナリアが立てこもっている。

そんな時ジャンヌがあんパンを持ってきた。

ジャンヌ「はいあんパン、これで体力つけて…」

みんなあんパンを食べる。

神楽「それよりやつこさんはどうだパスタネプ」  
ネプギア「（パスタ？）全く動きはありません」

神樂が立て込み刑事の様なことを言うのでネプギアは思わず乗る。

ユニ「ねえ、あなたのお姉さん確か2、3日で動くとかいってたけど今どうしてるの？」

ネプギア「お姉ちゃんは今リアスさん達と一緒になんです。取り調べと言えはかつ井。どっちかって言うとパスタが食べたくなりました。あ、パスタになってる」

ユニ「あんたねえ…」

もさもさとあんパンを食べるユニがネプテューヌのことを聞くと、ネプギアはちよっとボケてユニが呆れる。

神樂「成長したなパスタ。俺の背中には任せませ」

ネプギア「ハイ、山さん」

ジャンヌ「誰よ山さんって…」

ナリア「っていうか乗りいいわね…」

そんなコントをしながら見ていると、後ろからカナが。

カナ「すいません、背中ががらあきですけど…」

全員「ワアアアアアアア！！！！」

神樂「落ち着けパスタあ！！確保かく・・・あ、あんパンがのどに…」

思わずびっくりする一同。

神樂はあんパンがのどに詰まる。

ロム「あ、お馬さん…」

ラム「え？あ、ホントだ」

新八「カナさん、あなた…」

ロムが二頭の馬と馬車に乗る子供達を見つけた。

カナ「このまま、管理外世界へ出るつもりです。どういつつもりで見張ってたか知りませんが、この場は見逃してもらいたいです」

どうやらかなは管理局の目の届かない世界で子供たちと平和に暮らそうと考えているようだ。

神楽はもだえ苦しんで、ネプギア達は彼女を助ける。

カナ「勝手なことですが、これ以上殺しはしないのです。何年のなるか分かりませんが、あの子たちに胸を張って親と呼べるようになりたいんです」

新八「カナさん…」

新八は感心した。

ネプギア「新八さん」

ジャンヌ「お尋ね者よ…」

ネプギアとジャンヌが声をかけた。

その視線の先には闘技場の支配人とその部下達だった。

これが意味するのはカナを始末しに来たと。

神楽「早く行くヨロシ」

新八「うちのボスさんはただあなたを見張っとけて、目的も言わずに。全く何考えてんだか」

新八は呆れ半分だがカナにいった。

ジャンヌ「だから好きにやらしてもらいます。何が正しいか違うか分からないけど、あいつとネプテューヌちゃんなら、きっとこっちは思うわ」

カナ「……ありがとう」

カナはそう言っただけで馬車に乗った。

支配人「あ！鬼姫！」

支配人がカナが馬車を走らせているのが見えた。

裏人「おえー！逃がすな！」

裏人「始末するんだ！！」

裏人たちもカナを始末しに追いかける。

ドゴツ！

裏人「ウゴワツ！」

すると殴り飛ばされた。

殴った犯人は神楽達だ。

神楽「行くぞパスタ！」

ネプギア「ハイ山さん！」

ジャンヌ「そのネタはもういいっての！！！」

神楽達は裏人たちと戦闘に入った。

戻ってカナと子供達。

いつもより馬車のスピードが速い。

子供「先生！なんか早んですけど！」

子供の一人が言う。

だがカナの返事がない。

子供「？どうしたんですか先生？もしかして泣いているの？」

様子のおかしいかなの子供たちは不思議がる。

実際カナは涙を流していた。

カナ（もつと早く、あの人たちと出会いたかったな…）

????「甘いな」

ネプテューヌ達のような優しい笑顔のある人たちのことを思い出して涙を流すカナに絶望がやってきた。

ドスッ！

カナ「!?!」

????「ワシから逃げられると思うたか？」

まるでぬら孫の鬼妖怪の様な男（確か鶴だったっけ？）がカナを後ろから串刺しにして抜いたあと馬車から離れた。  
その後支配人がやってくる。

支配人「終わったか。さすがの鬼姫も本物の鬼には敵わないか。今からお前が煉獄闘技場の帝王だ。鬼竜<sup>おにたつ</sup>」

戻ってカナのところ。

子供「先生、これから何処行くの？」

子供「僕達先生と一緒になら何処へでもいくよ」

カナが刺されたことを知らない子供たちが言った。

カナ「そうね。私はあなた達と一緒になら何処でもいくわ。けど、そんなに遠くにはいけないみたい…」

刺された胸を抑えるカナ。

子供「あれ？先生どうしたの？」

子供「ひよつとしてまた泣いているの？」

子供「なんかまた嬉しいことでもあったの？」

子供「先生つてば泣き虫なんだから」

カナ「そうね。本当にそうね。幸せ者よね。私って」

月に照らす夜に、鬼姫はその命を散らす。

翌日

今日はなぜか湿った天気。

銀時「あゝ、いやな雨だ。なにもこんな日にそんな湿っぽい話し、持ってこなくていいだろう?」

ユウカ「それはごめんね。でもはなさなきやって…」

窓を覗く銀時はいい、ユウカが謝る。

新八、神楽、ネプギア、ユニ、ロム、ラム、ジャンヌ、ビビ、ナリアは体育座りでしょげている。

神楽「ごめん、銀ちゃん…」

ネプギア「カナさん…」

新八「僕らが最後まで見届けていれば…」

ロム「う…グす…」

ノワール「あなた達のせいじゃないわ」

ベール「あの人は人切り、自分でも碌な死に方はしませんわ」

ノワールが慰め、ベールが言う。

ユウカ「妙なことに巻き込ませてごめんね。これ以上かかかわると口くなことが無いわ。この話はこれっきり…ん?」

ドアが開いたので見ると、カナと一緒にいた子供たちだ。

ユウカ「あなた達、ここへ来るなど言ったでしょう?」

子供「に、兄ちゃん…兄ちゃんに頼めば何でもしてくれるんだよね?ここは万事屋だよね?」

ユウカの注意もスルーして子供達は銀時に頼んでいる。

そして同時に泣き出す。

子供「お願い!先生の仇を取ってよ!!」



一人の男の子が一つのシールを出す。

子供「これ、僕の宝物だけどあげるよ」

子供「お金はないけど、みんなの宝物あげるから、だからお願い！  
兄ちゃん！」

どさつと子供達のおもちゃが出てくる。

そんなお共達にユウカは呆れて言う。

ユウカ「いい加減にきなさい、もう帰りなさい」

子供「・・・僕、知ってるよ」

子供達の中で年長らしき子供が言う。

子供「先生、僕達の知らないところで悪いことをしてきたんでしょ？だから死んじゃったんだよね？でもね、僕達にとっては大事な母ちゃん、立派な母ちゃんだったんだよ！」

涙交じりに言う子供。

するとネプテューヌが、

ネプテューヌ「あれ？このシールびっくりマンじゃん」

子供「そうだよ。よく知ってるね」

ネプテューヌ「お菓子買ってたらちよつとね。それとね・・・」

と一言止めたあと、

ネプテューヌ「その願いを叶えてあげるよ」

それを聞いた子供達は喜んだ。

ネプテューヌ「さてと準備準備」

ネプギア「お姉ちゃん！」

そそくさとどこかへ出て行こうとするネプテューヌ。

リアス「バカだとは思ってたけど、ここまで馬鹿とはね」

入口にもたれているリアスが言う。

リアス「何先考えずに突っ込んで楽に住む連中じゃないわ。死ぬわよ」

ネプテューヌ「いくにしる動かないにしる、私は死ぬよ。どつちに転ぶとどんな運命になるかなんて分かんないし、鬼が出るか蛇が出るかなんてのも分かんない。でもね、今行動しないと私じゃないって気がするんだよ」

歩きだして、通り過ぎ様に言う。

ネプテューヌ「私という魂が、おれちゃうんだよ……」

そう言っただけでしまった。

リアス「己の美学のために死ぬ、ネえ。ロマンチストね」

アイエフ「そこがネプ子ってことよ」

ノワール「なんだかんだいってあの子なりの正義もあるもんよ」

ネプギア「どつちにしろ、動かなければ意味がないんです」

なんかおもちゃを装備したアイエフ達まで出ていった。

リアス「なんなのよ一体…」

ユウカ「全く、馬鹿な連中ですね…」

ジャンヌ「バカだから彼らだけだね」

ビビ「それもそうね」

リアス「で、あんた達はなにをしようとしているの？」

ユウカはインテリ眼鏡、ジャンヌは鼻眼鏡、ビビは音吹きを装備して、リアスが止める。

ユウカ「ごめんなさいね。あいつらが馬鹿な連中なら、私達もバカの一員ってことでしょ？」

振りあえつていうユウカにリアスは肩をすくめるのだった。

### 煉獄闘技場

???「ぐわああああ!!!!」

男が鬼竜の怪力に潰された。

支配人「恐るべき力ですなあ。邪鬼族の鬼竜は。あの鬼姫も簡単に始末できるわけだ」

最高評議会「ククク、あれにかかれば一流魔道士なぞ赤子も同然だ」

もうすでに鬼竜は周りの敵どもを粉碎したようだ。

支配人「しかし鬼姫もバカな奴だ。大人しく買われていればよかったもn「ワアアアアアアアアア！！！」ん？」

支配人の会話を覆いかぶさるように観客達の声が上がる。

そして入場口を見ると鬼姫の仮面をつけた紫髪の女性………否、パールハートだ。

支配人「お、鬼姫！？バカな！奴は確かに！」

最高評議会『ククク、面白いではないか。鬼姫よ、我らに恨みを晴らすべく、現世に蘇ったか』

パールハート  
鬼竜と鬼姫が対峙する。

鬼竜「貴様、なぜここにいる？わしが殺したはずだ」

パールハート「あなたなの？私を殺したのは。いろいろ恨み事があつて眠れやしないわ」

若干驚いているように見える鬼竜はいい、パールハートは腕を組んで言う。

鬼竜「ここはもう貴様の居場所じゃない。ワシの舞台じゃ、消え去れ」

パールハート「消えないわ。まっすぐな心の魂は、たとえ体が滅んでも消えはしない！」

鬼竜「ほう？ならばその魂、今ここでかき消してくれるわあ！！」

鬼竜の棍棒とパールハートの剣が同時に振られた。

鬼姫の角が折れ、鬼竜の額に血が出る。

鬼竜「うおおおおおお！！！！」

すると鬼竜は懐から担当を出してパープルハートの顔に突き刺そうとする。

が、あたったのは仮面だけで、パープルハートはかわしてニヤリと笑ったあと峰打ちで鬼竜の左腕を折る。

支配人「あ！！」

最高評議会『終わったな』

鬼竜「でやあああ！！！！」

ドゴッ！

パープルハート「ぎ！？がああ・・・！！」

鬼竜の棍棒が直撃し、口から少量の血が出る。

最高評議会『人間にしては良くやった』

あざ笑う最高評議会。

だが予期せぬことが起こった。

何とパープルハートは刀を間に入れて止めていた。

パープルハート「クスクス、デカブツさん？こんなもんじゃ、私の魂はおれないわ」

最高評議会『ん！？あの目は！本物の、本物の修羅の目だ！！』

パープルハートの敵を狙う目を見た最高評議会は驚くと同時にパープルハートは鬼竜を切り飛ばした。

倒れた鬼竜に観客達は熱狂。



女神組（パープルハートとネプギア除く）「よーっ！」

パープルハート「よ…よ…良い子のみんなは…」

パープルシスター「違います！よからぬ者どもには！」

女神達はパープルハートに指差して、パープルハートはうる覚えで答えようとすると、ネプギアの変身姿・パープルシスターが修正する。

女神組「退治してくれよう！」

支配人「ふざけおつて、やっちまえ！」

支配人の指示に用心棒共は動き出す。

パープルハート「全く、死んでも知らないわよ」

ブラックハート「あんにだけカツコつけるのはよろしくないわよ」

パープルシスター「まだ今月の仕事が出来てないのに死ねません！」

ホワイトシスターR「今どこるか先月ももらってないんじゃないの？」

ホワイトシスターL「全然ない…」

グリーンハート「先月はアレ仕事がなかったんじゃありませんの？」

ブラックシスター「じゃあ今回はがっぽりよ！」

ホワイトハート「まとめて吹っ飛べエエえ！！」

だが彼女達にとってはザコも同然。バツタバツタと倒していきます。

支配人「こ、これはア…」

ジャンヌ「理解できない？」

後ろにジャンヌ、ビビ、ナリア、ユウカが武器を突きつける。

ユウカ「いまどき早い合戦。しかも人切りのために動いているの  
ビビ」得られるもんなんてない。それぐらい分かる」

ジャンヌ「だけど動かなかつたら、自分が自分じゃなくなるのよ」

突きつけながら言う。

支配人「テ、テメエら、こんな真似してタダですむと思っているの  
か？俺達のバツクに誰がいると思ってやがる」

ナリア「あいにく見当が付かないや。でもバツクにいるのってもし  
かして…」

ナリアが言うのと何と周りに桂、エリザベス、月詠、九兵衛、辰馬、  
猿飛、近藤、土方、沖田、山崎、なのは、フェイト、はやて、シグ  
ナム、ヴィータ、シャマル、ザファイラ、スバル、ティアナ、エリ  
オ、キャロ、フリード、ヴィヴィオ、プリア、ユーノ、ウーノ、ド  
ウーエ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン、セツテ、ディエチ、  
ノーヴェ、ウエンデイ、オットー、デイド、グレイ、レーティア、  
シャル、ギルシア、リアス、イツセー、カイク、アンヘル、レオン、  
レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくら、タバネ、ガレーナ、レ  
シア、ヤルオ、ルシアス、ルーシア、アルテス、チフユ、エール、  
コヨリ、メア、セレス、アリア、ザック、ムツリ、ヒメラ、レグナ、  
ラートが囲んでいた。

支配人「な！？」

アイエフ「バツクに誰がいるって？」

なのは「私達機動六課だよ」

勇華「あら、おつかない人たちがいたもんね」

ヤジ馬ども「か、管理局だ！！逃げるお！！」



機動六課が現れた事にヤジ馬達は逃げだす。

そして、最高評議会も出ていく。

最高評議会『フン、調子づき追って。まあいい、いいものを見せてもらったしな。フハハハハハ・・・』

で・・・

ユウカ「結局、大物は取り逃がしちゃったわね。悪い奴ほど眠りやすいつていうよね」

パープルハート「つていうか人を散々利用してあんたが眠ってほしいわ」

リアス「ま、どう転んでも次にするべきことを探すことね（奴らが動く前にね…）」

リアスとユウカが離れていった。

ブラックハート「さ、私達も戻りましょ」

パープルシスター「お姉ちゃんそれぞれどうするの？」

パープルハート「そうね」

さっさと帰ろうとするブラックハートにパープルシスターが鬼姫の

仮面を眺めているパープルハートに言うと、パープルハートは放り投げた後刀で粉碎した。

パープルハート「もう鬼の仮面なんて似合わないわ。転生して新たな人生を歩みなさい」

夕暮の空を見上げて言うパープルハートだった。

くオマケく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

プリア「こんにちはは、アシスタントは僕がやります」

銀八「へい、んじゃペンネーム『鳴神 ソラ』から行くぞ。』マリオ「新しい子が出たな」

ルイージ「銀さん悲惨だ！」

フォックス「不憫過ぎる……」

スネーク「ホントにな……」

ヒビキアカネダカ（クレス）「あれ？」

電王モモタロス「俺、普通だよな？」

キバアロー（魔青）「あらー？」

ソロ「質問『FFRで自分的に使いやすいと思うのはどれだ？』」

ピット「質問『リルちゃん的能力を見た時はどう思った？』」

ネス「質問『アイドルになれるなら誰がなる？』」

次回を待っています！

ティルス「後、リリカル銀魂ライダー〜異世界鎮魂歌〜外伝 第3  
訓：転生者の集まりで質問でリリ銀パーティに参加したいって人を  
出してるので見といてください！」『ズバリお答えしよう』

真王「まあほとんどは剣か銃か体術だしね。それにみんなリルの能  
力は言わゆるチートベイビーです。アイドル？歌力のありそうなフ  
ェイトで」

銀八「『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

プリア「次はペンネーム『フリーダム』さんだよ。『Sフリーダム』レーティアが新しい命を産んだか…」

ジャステイス「銀時ラバーズが何か、やらかさなければいいが…」  
レジェンド「どうせなら、襲ってしまえばいいと思っぞ…」

デステイニー「ちょっ！！何いってんだよ！！」

アカツキ「そうそうあるいは、レーティアから魔法教えてもらって、それを銀時に使って逆に襲ってもらえばいいと思っぞ」

デステイニー「ラバーズに変なアドバイスすなー！！」

Sフリーダム「ああ彼奴等は、置いといて質問に行きます」

全員（ネプテューヌ、ネプギア以外）に  
初めてネプ井みた時の感想

ネプテューヌ、ネプギアに  
ネプ井は、どういう味がする？

ジャステイス「見た目からコツテリのレベルは、越えるな…」

更新楽しみにしてます』えっと・・・あれには少し吐き気を覚えたよ。でも他の女神達は平気そうだったけど」

ネプテューヌ「いろんな味が楽しめるよ」

ネプギア「辛い味とか甘い味とかいろいろ混じってるんです」

真王「よく平気で食べるな？『フリーダム』さん、廊下に立ってなさい。次、ペンネーム『なめ猫』さんだよ。『俺』眠たげながらのなめ猫な俺らです」

カイト・ラムザ「なら寝なよ」

俺「うむ…」

ミリア「あ、あはは…」

カイト「えーと、レーティアに子供ができて、まだまだ産もうとしてるっばいな」

ラムザ「まだできるだろうね…ここ、1000人越えようがお構いなしだし」

ミリア「インフレしてるからね。…それにしても、すごい能力持ちが生まれたね」

カイト「サイコキネシスか…M2（ミュウツー）とかを思い出すなあ」

俺「そうですねえ」

カイト「んじゃ、今回の質問もろもろを」

1・アリア・ビビ・ネプギアへ

「ネプテューヌのためならば、公の場で全裸になっても行動する覚悟」はおありかね？w」

2・作者さんへ

「ここには、ヤンデレってどれくらいいるんですか？あと、まどかマギカを出しても面白そうな気がしますが予定はないですか？……ほむらかわいいよほむら」

3・アリサとすずかへ

「カムバアー………ック!!!（出番）」

4・誰でも

この物語では、一夫多婦ありでしたっけ？ならば現在そのトップにあるのは誰？『ただしヤルフ、テメーはだめだ』

ラムザ「また卑猥な質問を……」

俺「ではまた」『では順番に……』

アリア「ネプテューヌさんのためならば……」

ビビ「するかそんなこと……」

ネプギア「は、裸なんて駄目です……」

真王「ヤンデレ？ユウカとコヨリあたりだろう？あと出番はまたの機会に……。そして最後のはミッドは一夫多妻OKなんだよ。『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい。っていうか質問は3つまでだ」

プリア「次です。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんです。『神裂

「坂田銀時………赤ん坊相手にムキになるとは」

インデックス

「人として最低なんだよ！」

上条

「今回は銀さんに幻滅した」

土方に質問。

僕の新連載小説『スマツシユディケイド奇譚幕』では、マリオからサインを貰ってます。  
羨ましいですか？」

土方「イヤ俺に言われてもな…」

真王「『亀鳥虎籠』さん。廊下に立ってなさい。つぎ、ペンネーム『ケン』さんツス。『統夜』あゝあ・・・銀さんに幻滅しちゃった俺・・・そんな事よりギルシアとレーティア夫妻の子供であるリルへのプレゼントをあげなくては・・・キックボードならぬエナジーボードをプレゼントだ」

エナジーボードとはIESを動力源としたキックボードで自動で動き運転できる代物で燃料は無し。時速100キロまで出せる。

統夜「さて・・・届けに行くか・・・ギルシアに質問だ。リルという子供を授かったんだからロリコンを卒業した方がいいんじゃないか？何か気配が・・・」

統夜は直ぐに刹那を使って逃げた後顔を赤らめたはやてが通り過ぎたのは言うまでも無かった。

遊輔「おいおい・・・俺としてはリルが熱血で逞しい女の子になってほしいかな。皆の笑顔を守るような・・・レーティアさんに質問だ。どんな風にリルを育てますか？」

零斗「ひゅっ・・・おめでたいね。口・・・ギルシアとレーティア・・・おめでとぅー!」

マイティ真拳使いがやって来た。

遊輔「今・・・ギルシアにロリコンって言わなかった？」

零斗「気のせいだ。新八とジャンヌ夫妻へ質問だ。統夜や遊輔にとつての故郷である冥界に行ってみたいか？侍を指している新八にとってはプラスになるかもだ・・・色んな事を知る事によって・・・真の侍が生まれる・・・世界は広いんだ・・・頑張れよ」

遊輔「零斗・・・俺からは紅蓮の焰を纏った虎を模したヌイグルミ」

零斗「俺からは・・・俺のサインが書かれているマイティサイン色紙をプレゼントだ」

統夜からはエナジーボード、遊輔から蓮の焰を纏った虎を模したヌイグルミ、零斗から零斗のサインが書かれているマイティサイン色紙をギルシアとレーティア夫妻、リルに差し上げます。『おう、プレゼントは受け取ったぜ』

ギルシア「俺は幼女が好きだ!!」

レーティア「つまりする気なしよ。私としては心やさしい女の子にしたいわ」

新八「いやいやいや！僕らまだ結婚してませんよ!!」

ジャンヌ「そ、そっだよ！っていつかドンとこゝっていつか...ノノノノ」



真王「青春だね〜。『ケン』さん。プレゼントありがと〜ござい  
ます」

銀八「次イ、ペンネーム『月光閃火』さんだ。『ども』：月光閃火だ。

しかし…新八も本編・後書き関係無しに大変だな…。とりあえず、  
これでも飲んでのほ〜んと言いきましょ（そういつて、何処からと  
もなく緑茶の入った湯呑みを新八の下へ転送する<sup>テレボス</sup>）

輝刃「ちよつと待て…閃火、さっきの緑茶に何を混ぜた？」

ああ…ちよいと『イケメンになる薬』をね…。

輝刃「やれやれ…あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・プリアに質問…好きなモノはプリニーの時から変わらずか？

確かに、プリニーの時と転生して人間になった時とで好みが変わる  
かもしれないから…。次は俺からだ。

2・真王に質問…転生者組のイメージC.Vって、真王の脳内では誰  
になっているんだ？

輝刃「確かに、そういう感覚は人それぞれだから…。気になると  
言えば気になるか…。」

プリア「ごく稀にプリニーのころの性格が移っちゃうこともあるん  
です。そのおかげなのです」

真王「え〜っと、あいつらのイメージボイスは…」

☞レーティア：To loveのララ  
ジャンヌ：シャーマンキングのメイデンジャンヌ  
シャル：アルカナハートのシャルラッハロート  
ギルシア：ニードレスのアダムブレイド  
リアス：エンジェルビーツの中村ゆり  
イツセー：禁書目録の当麻  
カイム：ドラッグオンドラグーンのカイム  
アンヘル：ドラッグオンドラグーンのドラゴン（アンヘル）  
レオン：Dogdaysのレオンミシエリ  
ユウカ：ニードレスの楼閣寺璃瑠  
ナリア：リリなのなのは  
タバネ：ISの篠之乃束  
ガレーナ：戦国乙女の信長  
レシア：デイスガイア4の魔法剣士  
ヤルオ：ニードレスのクルス  
ルシアス：インフィニティブレードのルシアス（植田佳奈）  
ルーシア：インフィニティブレードのルーシア（川澄綾子）  
アルテス：銀魂のあやめ  
チフユ：ISの千冬  
マナ：ゆるるゝとしたお母さんボイス（どんな人だったか分からない）  
タマネ：to heartのタマ姉（と呼ばれている人）  
リリン：グギユ  
レムナ：カービイボイス  
アリア：ニードレスのアルカ  
ザック：FFのザックス  
ムツリ：ムツツリーニ  
ヒメラ：バカテスの姫路  
レグナ：いつ天の大兔

ライト：リトバスの美魚（裏モードではニードレスのディスク）

真王「こんな感じだろう。『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

プリア「次です。ペンネーム『黒龍』さんです。『銀時』あっちの俺エエエエエ！！？？」

黒龍「なんか銀さんが不憫ですね…」

ソラ「さすがに同情したな」

黒龍「まあ赤ちゃんは大切にしなければいけないと言うのも分かりますけどね」

銀時「だからってアレはないんじゃない！？」

黒龍「まあこっちの新八も今回の銀さん並に不憫な目に遭うんですから怒らない怒らない」

銀時「いや、あっちの俺が不憫だからって新八不憫にする理由にはならないと思うけどな…」

黒龍「なんて言うか、銀さんを軽蔑の目で見ている新八がちょっとウザかった」

銀時「いや、元からお前は新八の事ウザイとか思ってるだろ…！」

黒龍「ナンノコトヤラ？」

銀時「なんでカタコト！？」

黒龍「まあとりあえず質問しましょう」

1・銀さんラバーズに質問。今回の事で銀さんの事軽蔑したみたいですけど、銀さんの事が嫌いになって別の誰かにくら替えするような尻軽女になりましたか（黒笑）

2・ネプテューヌに質問。もし赤ちゃんが出来たらどんな名前付けますか？

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」

ラバーズ「んなわけあるかあ！！私はいつでも（銀時／銀さん）一筋だ！！」

ネプテューヌ「む、あ、ネプラス！これがいい！」

真王「うむ、いい名前だね。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「つぎだ。ペンネーム『白騎士君』だ。『白騎士君』とりあえず……」

と、作者が指鳴らしをすると突如、真王の所の銀時が現れた。

銀時「えっ！？どこどこ！？」

白騎士君「この、クソ天パが……！！！！」

ドゴッ……

銀時「ぎゃああああああああああ！！！！」

と、作者は今回の銀時がリルを泣かせた事に怒り任せに銀時に、跳び蹴りを喰らわせた。銀時は壁の所まで吹っ飛んで床に倒れた。

白騎士君「銀さん．．．．．貴方はリルちゃんを泣かした。これより貴方に罰を与える！」

銀時が突如、起き上がり作者に文句を言おうとするが、作者が右手を上げた瞬間、ドアから『天元突破グレンラガン』に出て来るグレンラガンの量産型ガンメン『グラパール』（人間サイズ）が四機出て来た。四機が銀時の手足を押さえ付け、ケツを差し出すような体制になった。

銀時「お、おい！てめらぁ！何する気だ！」

白騎士君「グレンラガンに変身！！」

作者が叫んだ瞬間。作者がグレンラガンになった（人間サイズ）。

銀時「えっ！？変わった！？」

白騎士君「いくぞ！必殺！！ギガア．．．ドリルウ．．．」

と、体中からドリルが出て来てドリルは右手に集まり巨大なドリルになった。

銀時「え？．．．．．ちよ、ちよつとまて．．．」

白騎士君「ブレイクウウウウウウウウ！！」





ん…見損なつたよ…」

ニンフ「私も…」

アラド「俺も…」

質問です。

銀さん。リルちゃんを泣かせましたが赤ちゃんの気持ちが解らないあなたは赤ちゃんになつたらどうですか？

もし銀さんがリルちゃんを泣かせた事を真撰組と桂さんに知られたらどうしますか？

カップルの皆さん。レーティアさんとギルシアさんにリルちゃんが産まれて羨ましいですか？

バナージ「それにしてもリルちゃんにあんな能力があつたとはな…」

ニンフ「凄いな。リルちゃん」

次回も楽しみにします。『…ククク』

銀八は笑いをこらえている。

銀時「なるかアアアアア！！」

真王「桂も真撰組も知ってるよ。沖田は…もう分かってるかもしれませんがね」





「がやるまゝす」

真王「じゃあ俺こいつを病院へ行ってくる」

第九十六訓：魂は心の輝き（後書き）

真王「お待ちかね、『リリ銀パーティ編』の幕が開かれます！」

リル「あううう（次回『パーティはみんなでやるのが楽しい』パーティオフ）」

第九十七訓：パーティはみんなでやるのが楽しい（前書き）

真王「お待ちかね！『リリ銀パーティ』の始まりだぜ！！」

全員「リリカル銀魂！始まります！」



真王のパーティー会場

銀時達がいるこの場所は人が3人通れるぐらいの幅がある抜き穴がある。

そして真王は、源外、スカリエツティ、アリシア、初めての登場のプレシア、イストワール達教祖組の8人と一緒に特別席で座っていた。

真王「……と言う訳で、第一回『リリ銀パーティー』を開始します！」

銀時達『ちよつと待ってエエエエ！！！！！』

突然、大会を強制参加させられた銀時達は大いに叫びだす。

銀時「つつか何だよ一体！！小説の面白さ上げの会議の後にすぐ大会なんて聞いてねエぞ！！」

フェイト「作者、コレは一体どう言うことなの！？」

コレには銀時はもちろん、フェイトも納得できない様子でいる。

真王はまだ状況が分かっていない銀時達に呆れて言い出す。

真王「あれ？いつてなかった？『リリ銀パーティー』だよ？」

ティアナ「何よ、リリ銀パーティーって！？てかアンタまさか、ゲストの皆さんと大会で競えって言うわけエ！？」

真王「そうだよ。今回の長編はゲストを主役としたシリアス！！銀

時、新八、神楽、なのは、フェイト、スバル、ティアナの四人……いや、チーム『リリカル銀魂』にはそのゲスト達と一緒に大会に参加してもらおう!!」

新八「はあ!?!いきなり何ですかそれ!!」

ティアナ「しかも勝手にチームが決められているし!!」

新八とティアナは、真王の勝手な行動に怒りを込めて怒鳴りツッコム。

さすが突っ込みチーム、どんどん磨きが出来ている。

プレシア「……真王、もう貴方がどうして本編に出てきているのか……そして何でまた私が大会の実況をしなきゃいけないかはツッコまないからフェイト達に納得いくように説明してあげて」

プレシアは、今更ギャーギャー騒いだってキリがないから早めに進める様にと真王に要求する。

真王「そうですね。まあはっきりと言うとですね……今まで『銀魂』って何かの存在をネタとして長編を作っているじゃん。だから僕もそれを参考にして自分のオリジナル長編シリアスを考えてみたくなっただけですよ」

真王は銀時達に、どうしてこんな事をさせるのかを説明する。

今回のシリアスは『銀魂風』でも『リリカル風』でもなく、『真王風』の爆笑長編である事ははっきりと分かった。

真王「作者が他の小説の作者と話し合っただけで協力し合うような短編小説や特別話として自分の小説のキャラクターを相手に登場させる、またはゲストとして他の小説のキャラクターを自分の小説に登場させる事が多い……そこで僕は眼を付けた!!」

真王は決意したような表情で叫びだし、右手を強く握りだす。

真王「もし、『銀魂風』にとゲストを呼ぶ事自体を長編ネタにすれば、立派な長編シリラスが出来ると!!」

銀時達「ゲストを長編ネタあ!?!」

ゲストの存在をネタとして考える真王に、フェイトは驚愕の表情をする。

真王「まあこのやりとりは黒神のリリカル銀魂ゲスト杯と酷似していますけども。ゲストと盛り上げる方がいいんですけどね」

ティアナ「げ……ゲストと一緒に長編シリラスを盛り上げるウウ!」

まさか今回の長編がそう言う内容である事に驚くティアナ。

だとすれば、今回現れるゲストの数は黒神のときよりも『リリカル銀魂シリーズ』でも最多である事は間違いないであろう。

真王「その為、今回の舞台として我が作り出した『パーティマップ』を皆さんで楽しく盛り上げようじゃないか!!」

完全にノリノリな真王。

真王「はい、と言う訳で銀さん、フェイト、スバル、なのは、神楽、新八……あとついでにティアナ」

ティアナ「ついでって何だゴルア!!」

ティアナは怒り出して『クロスミラージュ』を取り出し真王に向ける。



それをスバルが「ティア」、落ち着いてえ!!」と苦笑で止める。

真王「ゲストの皆さんと楽しんじゃってください!!」

もう後戻りは出来ないと、銀時達は諦めだす。

そして溜息を吐きながらも、真王の提案に乗る。

銀時「……しゃあねえ、まあせつかくゲストの皆さんも来ているからよお」

新八「もう後戻りはできませんよ……」

神楽「いくあるネ!」

なのは「にやはは、頑張るよ」

フェイト「このままほつとらかしにする訳には行かないしね」

スバル「私はむしろ楽しみかなあ」

ティアナ「はあ……もうやるしかないわね」

7人はこの大会に参加する事に決定した。

この瞬間、チーム『リリカル銀魂』は結成した。

真王「あ、ごほん、それではお待たせしました!!ただいまより

『リリ銀パーティ』を始めたいと思います!!」

すると、巨大な大砲が天井に向けられて弾丸を撃ち、天井にぶつからずに大爆発して周りを轟音がこの地下室全体に響き渡る。

そして観客席にはいつの間にか数多くのミッドチルダの一般人達が数多く現れ、大会開始に歓喜の叫びを上げる。

ヴィヴィオ「パーパー、フェイトさあん、スバルお姉ちゃん、ティア

さあん、がんばってエ」

リル「う」

ヴィヴィオとリルは、プレシアの隣で銀時達を応援する。  
ちなみにリルはヴィヴィオが抱いている。

真王「それでは、ただいまより参加チームを発表いたします！！まずはこのチーム、数多の事件を剣1本で解決した伝説の武人を中心とした機動六課代表、『リリカル銀魂チーム』！！」

観客達はワーワーと騒ぎ出して銀時達を見て興奮する。

銀時の存在はミッドチルダでも大有名である。

過去の事件を含め、ミッドチルダにやってきてからの事件解決での活躍はミッドチルダでも耳に広まっている。

銀時「ほおー、何かすんげえ大会になりそうで……すんげえ嫌な予感しかしねえけど？」

スバル「き……気のせいですよ銀さん！！」

銀時の嫌な予感は気のせいだとスバルは言い出す。

真王「では続いて、ゲーム業界の守護女神達！その可愛さで相手をメロメロ？『女神チーム』」

ノワール「何つつ恥ずかしい紹介の仕方してんの！！」  
真王「おっと」

ノワールは恥ずかしさで真王を蹴り飛ばそうとしたが、真王は軽くかわす。

伊達に作者をやっていないのだ（本当かどうかなんて知りませんが）

白い煙が噴射するかのように現れ白い煙が現れた場所から扉が開き、その中からエレベーターが動くかのようにノワールを取って7人の姿

が現れる。

その7人こそがネプテューヌ、ブラン、ベール、ネプギア、ユニ、ロム、ラムであった。

ネプテューヌ「悪いけど銀さん、優勝は私達の物だよ」

銀時「お前と対戦かよ……」

銀時は頭を抱えることになる。

なのは「あれ？確かルールブックに参加は6人までって書いてあった様な……」

真王「いい質問だ」

首を傾げるのが呟いた後真王が答えた。

真王「本当なら6人にしたんだけどガキンチヨ2人がしつこく参加したいって言うから仕方なく入れてやっただけのこと。なので特別にということですよ。あなた方も含めて」

スバル「あ、確かに私達で7人ですね」

スバルが納得する。

ガキンチヨ2人とはルウィーの女神候補ですが。

真王「でもまあ参加した以上“しつこく怖いことが起こっても”責任はとりませんがね」

ロム「え……？」

ラム「え？なにそれ？しつこく気になるんだけどお！？」

真王「ハイ次ですがあ」

ラム「無視すんなあ……！」

ラムの言いつけを無視するとして、

真王「狂乱の貴公子の剣が宙を舞う！『狂乱チーム』！！」

白い煙が噴射するかのようには現れ白い煙が現れた場所から扉が開き、  
その中からエレベーターが動くかのようには6人の姿が現れる。

桂、エリザベス、はやて、ヴィータ、リンフォース、リンの6  
人だ。

桂「フハハハハハハハハハ！銀時！やるからには全力で行くぞ！」

銀時「へ！お前が墜ちるよツラ」

桂「ツラじゃない！桂だ！」

いつも通りのやり取りをする2人。

真王「続いて、江戸や世界（とお妙さん）の平和は俺達が守る！」

真選組チーム！！」

白い煙が噴射するかのようには現れ白い煙が現れた場所から扉が開き、  
その中からエレベーターが動くかのようには6人の姿が現れる。

近藤、土方、沖田、山崎、ディエチ、ルーテシアだ。

土方「おい作者、あのかっこはなんだ？いらねえだろこれ」

真王「ならそれをつけた本人に言えばよ」

土方はカッコに突っ込むが、呆れるしかなかった。

沖田「っていうか何でバズーカ女とこいつがいるんでい？」

真王「ディエチは山崎の未来のお嫁さん。ルーテシアはツイでだ」

土方「おおい！！そんな設定でいいのかあ！？」

デイエチと山崎は顔を赤くし、ルーテシアはショックを受け、土方は突っ込む。

真王「では次、男の子はみんな骨抜きにしてやるぞ？」プリティレ  
デイズチーム！」

白い煙が噴射するかのように現れ白い煙が現れた場所から扉が開き、  
その中からエレベータが動くかのように6人の姿が現れる。  
タバネ、レーティア、ジャンヌ、リアス、ユウカ、ナリアだ。

全員（プリティレデイズチーム除く）（絶対に相手したくない奴が  
混ざってるううウウウウうう！！！！）

銀時達はチームの中にいるユウカに心の中で絶叫する。

ユウカ「あら？何か失礼なことを言われた気がしますわ」

ジャンヌ「新八君、情けはいらないよ」

レーティア「見ててね、リル。ママ頑張っちゃうわよ」

ユウカはジト目で銀時達を見て、ジャンヌは真剣に、レーティアは  
リルに手を振る。

真王「ヘイヘイ、その武道と力は神の如く、メテンスナイトチー  
ム！」

白い煙が噴射するかのように現れ白い煙が現れた場所から扉が開き、  
その中からエレベータが動くかのように6人の姿が現れる。  
レオン、ガレーナ、ギルシア、レシア、カイル、チフユだ。

レオン「おい作者、本当に強い奴と戦えるのか？」

真王「そうだよ。もしかしたら戦いたかった相手と戦えるかもね」  
ガレーナ「それは願ってもないことじゃの」

レオンとガレーナは殺る気満々だ。

レシア「人前で変な行為は止めなさいよね」

ギルシア「変などはなんだ。俺は女の子が大好きなだけだ」  
カイク「それがそうだったの」

カムはギルシアの根本ずれに突っ込む。

チフユ「おい、こんなたいそうな舞台を用意してもかまわんが、あまりやり過ぎないようにしておいた方がいいぞ。私的に」

真王「そんなことないですよ（さすがだね。伊達に軍人指令はしていないか…）」

真王はチフユが見抜いているように思えた。

真王「さて、次はゲストサイドの登場だ！！伝説の黒き聖剣と呼ばれし甘党とその仲間達！『剣聖チーム』！」

白い煙が噴射するかのように現れ白い煙が現れた場所から扉が開き、その中からエレベーターが動くかのように6人の姿が現れる。

風花さんの作品の『リリカルなのはStrikerS』のThe  
e last of crime』からのゲストとして登場した  
レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくらが現れた。

レイン「パーティがあるって来てみれば何だこれは？」

森羅「なんか何処となく楽しそうに思えるな」

咲夜「ウフフ〜 みんな楽しそ〜」

蒼馬「フフフツ、プリティレディズチーム、ぜ「勝手に動くな」ぐえっ!?!」

紅也「いやな予感しかしないな…」

さくら「結構広いねここ…」

5人はそれぞれコメントを言う。

蒼馬に至ってはナンパしようとしてレインと森羅に襟を引っ張られた。

レイン「よう銀時、お互い戦い合う仲だ。俺が勝ったらパフェをおごらせろ」

銀時「上等だ。俺が勝ったらお前がおごれよな」

レイン「こつちもな」

銀時とレインは腕を合わせる。

真王「『剣聖チーム』は風花さんの小説『リリカルなのはStrikerS』、The last of crime』からのゲスト、レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくらが組んだスペシャルチーム!!」

ケイ「あの白夜又と似た感覚を持つドッグパフェが好きというレイン・アスハとその親友森羅、その双子の咲夜は母から習った一流以上の鞭使いと言われていますね。蒼馬とさくらという人は一般人のように見えますが彼は銃を、彼女は手榴弾を使いこなせるように、紅也に至ってはセレスフィア・フルーレというデバイスを使い、その実態はある魔道士の子孫であると」

レイン「・・・まるで見てきたかのような説明だな?」

ケイ「情報収集はビジネスの基本だからね」





魔炎竜「いつもの病気が…」

氷刃竜「まあそれが光翔竜だからね…」

魔炎竜と氷刃竜は呆れる。

真王「『ドラゴンネイルチーム』は烈火龍さんからの小説『DRAGON NAIL』竜の爪』から真王竜、黒鎌竜、白天竜、光翔竜、魔炎竜、氷刃竜の面白部隊ズチームです」

真王竜「おい面白はつけるな」

真王の解説に真王竜は突っ込む。

ネプテューヌ「又「っていうか真王竜さんと作者って名前そっくりだね」  
ネプギア「竜があるないですね」

ネプテューヌとネプギアは名前がそっくりであることを知る。

真王「あ、時に真王竜さん」

真王竜「ん？」

真王「シグナムのことはどう思いますか？」

真王竜「素晴らしいおっぱい………じゃなくて見事な騎士だ」

全員（観客含め）（今素晴らしいおっぱいっていいそうになっただろ！）

真王竜はすけべな性格があるらしい。

シグナムは胸を手で隠して顔を赤くする。

真王「さておき、つづいては異界の英雄ヒーローが世界を救う！『スマブラ  
ハーツチーム』！」



ツッコミメンバーはシャウトした。

真王竜含むドラゴンネイルチームは『やるなあいつ』と心の中で思った。

真王「まったく、ゴホン、『スマブラハーツチーム』は『鳴神ソラ』さんの小説『大乱闘スマッシュブラザーズ出張版』のマリオ、ソニック、明久、ルイージ、クッパ、冥王の超最強？と言われるチームです！」

ルイージ「なぜ疑問形？」

ルイージが何か言うが真王はスルー。

真王竜「おい、マリオとかいったか？」

マリオ「？だれだ？」

真王竜がマリオを呼んだ。

真王竜「真王竜だ。竜の爪のリーダーをしている」

マリオ「竜の爪…成程な」

マリオは真王竜含め竜の爪のことを知っているようだ。

伊達に世界を旅しているわけではないようだ。

真王「へい次行くぞ。黒き夜叉が空の月を輝かせる『リリカルライダーチーム』！」

更に白い煙が噴き出し、人影が現れて煙がはれると、黒龍さんの小説『リリカル銀魂ライダー』異世界鎮魂歌』のゲスト、ソラ、リス、アリス、アリア、セイバー、ライホースが現れた。

ソラ「はあ、何で俺がこんなところに…」

リリス「いいじゃないですか」

アリス「フツ、パーティならば楽しむ方がいいだろう?」

アリア「にゃ」

セイバー「みつともないのでマスターから離れなさい」

ため息吐くソラにリリス、アリス、アリアが寄り添うが、セイバーに止められた。

銀時「よう、あつちの新八はどうしてるんだ?」

ソラ「今は入院中だと」

それを聞いたこつちの新八少し同情した。

真王「『リリカルライダーチーム』は黒龍さんの小説『リリカル銀魂ライダー』異世界鎮魂歌』のゲスト、空、リリス、アリス、アリア、セイバーとついでのライホースの完璧なかつ腹立つチームです!」

ライホース「ちょっと待て!!なぜ私がついでなのだ!?!」

新八「っていうか!今一瞬空耳かと思えますけど腹立つとかいいませんでした!?!」

納得いかないライホースと新八が突っ込む。

だがスルー。

真王「つぎ!うちの学園は天下一品!?!だけどもちやくちや『学園チーム』!」

更に更に白い煙が出る。そして中には天城さんの小説『学園戦記 無限学園!』からのゲスト、恭介、由美、愛淫と、ヤルオ、ルシ

アス、ルーシアのチームが現れた。

恭介「つ、ついに来てしまった…」

主人公の恭介は緊張しているようだ。

由美「恭介、リラックスするんだよ」

愛淫「そうですね。永遠に…」

恭介「できねえよ！！その懐にある武器の気配があるんだけどな！！」

恭介の言う通り、以上ヒロインの由美と愛淫の懐に隠している武器がある。

ちなみに2つとも鞭。

ヤルオ「フッフ、こんな頼りない男と組むのかよｗｗｗｗｗｗ」

ルシアス「私はこんな奴と組むのが嫌なのよ」

ルーシア「へエ…」

ルシアスとルーシアは一触即発の予感だ。

チフユ「何をやっている？」

ルシアス「なんでもないよ〜！」

ルーシア「なかよくやってるから〜！」

全員（やっぱ弱いんだな…）

いまだにチフユに逆らえない姉妹なのであった。

真王「『学園チーム』は、天城さんの小説『学園戦記 無限学園！』のゲスト恭介、由美、愛飲とヤルオ、ルシアス、ルーシアの不

幸な主人公を主体のチームです！」

恭介「不幸止めてくんない？敏感なんだよそれ」

恭介のツツコミもスルー。

チカ「っていうか、なぜあの3人を入れたのかしら？」

真王「数が足らんから。そして変態とヤンデレだから」

チカ「思いつきりな発言をしましたわね!？」

真王の思いつきり発言にチカは思わず突っ込む。

真王「さて次、世界の闇は蒼炎の炎ですべてを焦がす!」「ヒーローズチーム!」

更に白い煙が立ち込め、なかからケンさんの「HERO'S EPISODE」のゲスト、統夜、達哉、遊輔、咲夜、メアリ、そしてこっちのシャルが現れた。

なお風花のところに咲夜がいるので、こっちの咲夜は相川と記していただく。

統夜「面白そうなところじゃねえか」

達哉「ああ、ワクワクするぜ」

2人はやる気満々だ。

真王「『ヒーローズチーム』はケンさんの小説『HERO'S EPISODE』のゲスト、統夜、達哉、遊輔、咲夜、メアリ、そして我が作品のゲストとして登場しているシャルのちょっと変わったチームだ!」

遊輔「なんだその投げやりな紹介!？」

遊輔は突っ込む。

ネプギア「シャルさんは最初のゲストさんでしたもんね」  
シャル「ええ、口調はこつち側でいくわ」

ケンさんサイドの口調でいくシャル。

真王「そつちも頑張れよ閣下モドキ」

メアリ「誰が閣下じゃあアアアアアア！！！しかもモドキって言う  
なやアアアアアア！！！」

統夜「落ち着けエエエエエえ！！！！」

相川「だめだよ！挑発にのつちや！」

青筋立てて切れたメアリに統夜と相川が押さえる。

真王「まだ行くよ。転生した兄妹と神様が共同戦線！？」とある転  
生チーム』！」

またまた白い煙が出て、そこからリインさんの小説『魔法少女リ  
リカルなのは』とある兄妹の転生物語』からのゲストとして登  
場したグレイ、ビビ、神、レヴェツカが現れた。

グレイ「・・・目立つのは嫌いだ」

ビビ「まあまあ」

嫌がるグレイにビビが押さえる。

ネプテューヌ「あれ？見慣れない人がいるね」

レヴェツカ「あんたらとはお初やな。うちはレヴェツカ。この夫のバカ

第一夫人や」

神「おい、今馬鹿って言わなかったか？」

神は睨むが睨み返す。

レヴェツカ「うちらほっぴり出して遊んでた人がそれを言うか？」

神「グ…」

神は言葉を詰まらせた。

そりゃそうだ。

ネプギア「あの、第一ってどういうことですか？」

レヴェツカ「そんなまのいみや。なんせ9人も妻もつとるんやからな」

全員「9人の妻あ!？」

参加者は全員驚いた。

神（レヴェツカ…帰ったら一発ぶちこんでやるつか？あん？）

レヴェツカ（そんな時はこっちも搾り取ってやるかな）

神（へ、やってみるよ）

神とレヴェツカは念話で危ない会話をしていた。

ネプギア「あれ？4人だけですか？」

真王「んにゃ、後二人はあいつと一緒に来るから」

????「もう付いたぜ」

ネプテューヌ「ウヒヤア!!」

数が足りないことに気付いたネプギアだが真王が言う。



そのあとネプテューヌの後ろに真王とそっくりだが髪の毛とコートが赤い色をしていた。

真王「きたね。紹介するよ。私の義兄弟の…」

邪王「邪王様だ。よろしくな」

全員（作者に兄弟だとっ!?!）

真王の義兄弟と聞いた全員は驚愕した。

真王「で、あの二人は？」

邪王「上からだ」

邪王が上を指差すと、何かが降ってきた。

シュタツ！

そしてみごとに着地。

???「シ、シャ口様、僕ちよつと怖かったですよ…」

???「あら？そうだったの？ごめんなさいね」

全員「なんか来たんですけどオオオオオオオオオオオオオオオオ!!?!」

ベール「なんだかチカにそっくりですわ…」

銀髪の少年が少し涙目で訴え、エメラルドグリーンの長い髪に真紅の瞳を持つ女性が悪びもなく謝る。

見てた全員が驚き、ベールに至っては自分の教祖であるチカと似ている感じがしたらしい。

邪王「シャリアローゼ、リオンお前らはとある転生チームと協力するんだな」

シャリアローゼ「へえ、神クラス二人と・・・ねえ」  
神「俺様はいつでも大歓迎だ、ぜ！！！」

ガギイインツ！！

全員「うわあああああ（どわあああああ）（きゃあああああ）  
！！！！」

神の持つ虹色に輝く鎌とシャリアローゼの持つ血の色の剣がぶつかり合った直後部屋全体に衝撃波が襲った。

真王「おいおい、双方武器をしまえ。パーティが台無しだ」

邪王「チーム同士のけんかはよそでやりな」

真王と邪王が臨戦態勢に入る。

二人の殺気が尋常じゃないくらい、観客が震えている。

神「チツ、分かったよ（あぶねえな...どうもあいつの目は本気で殺る目だったぜ）」

シャリアローゼ「分かったわ（虹色の鎌なんて珍しいわね。しかも武器同士が当たった直後に感じたこの感覚...）」

神・シャリアローゼ（結構楽しませてくれそうじゃねえか（ないの））

神とシャリアローゼはお互いライバル魂を燃やしていく。

恭介「待て待て待てー！！なんだよあれ！！あんな規格外の奴も参加してんのか！？」

真王「規格外であろうが無かろうが参加は決定だ。それとも何か？

あの事に恐れたのか？」

恭介がとある転生チームに指摘する。

真王はいいっぱり、恭介は俯く。

真王「・・・一つ教えてやろう」

真王は恭介の耳元でいった。

真王「ヒソヒソ・・・（元の世界に帰ったら向こうのフェイトとデートする券をプレゼントしよう）」

恭介「ヒソヒソ・・・（フェイトさんとデートする券！？）」

真王「ヒソヒソ・・・（そうだ。あっちのフェイトと立派なラブを築いとけ）」

恭介「ありがとうございました！！」

恭介はお礼を言った。

ちなみにその券は本当にあるので恭介のポケットに入れた。

光翔竜「はっ！？私と同じフェイト様大好きの同類がっ！？」

魔炎竜「お前は黙ってる」

光翔竜は何かを逃したかのような顔をし、魔炎竜は突っ込む。

真王「アゝ、アゝ、ゴホン、それでは最後のチームを紹介します」  
プリア「やっどですか」

真王「最後のチーム。異界より現れし最強チーム！『異界戦士チーム』！」

白い煙が立ち込める。そして現れたのは『フォレストページ』の『



ジャンヌ「早く始めようよ」

参加者は今すぐやりたいかめんどくさいというしぐさをしている。

真王「まあ慌てるなって。今からリリ銀パーティーの醍醐味を見せてやるぜ」

そう言っただけで指を鳴らす。  
すると会場がある島へと変わった。

ネプギア「うわあ!!」

新八「えええ!!? 僕らいつの間になんか?」

レイン「これが真王が言っただけの醍醐味か?」

参加者のほとんどは突然の変わりように驚いている。

真王「イエス! この島はすべて私の作りだしたバーチャルリアリティ! マリオパーティーを模したもんだから双六で活かしてもらいます!」

フェイト「す………双六う!?!」

銀時「ってちよつと待てエエエエエえ!!! まるっきり黒神のとパクってるじゃねえかアアアアアア!!!」

フェイトは双六であることに驚くが、銀時は黒神のと似ているため突っ込む。

真王「失敬な。確かに似ているかもしれませんがあんな地獄ばかりのと一緒にはしないでください。まあこの醍醐味の解説をいたしますよ」

真王はリリ銀パーティの解説を始めた。

真王「ルールは分かると思いますが、普通の双六のように10001マス先にあるゴールマスに止まった人が優勝します」

恭介「1000マス長え!!!?」

さすがに長いマスに恭介は驚くが真王はスルー。

真王「なお双六というからにはマスの方も注意してください。それぞれ色鮮やかなマスは、青のノーマルマス、赤のペナルティマス、プレイヤーマークのミニゲームマス、色違いのパーティマス、シルクハットと?マークのクイズマス、!マークのイベントマス、?マークのハプニングマス、黄色のボーナスマス、クッパの顔をした邪王マス、黒とドクロのデンジャーマス、キノコマークのアイテムマス、交差する剣のテュエルマス、VSマークのバトルマスと言うさまざまなマスが存在する!!止まる事で、何が起こるかわからないぞ!!!」

普通に双六をするようだが、仕掛けはマスにあるようだ。

その止まったマスの色によって、何かが起こる事は間違いない

アリス「成程な」

ラム「双六経験あるんだよ」

土方「いやな予感の塊だな...」

コヨリ「面白そう...」

上記4人はそれぞれのリアクションを取る。

中には4人のように勝つ気でいたり、臆したり、敗北するのを恐れている者もいる。

特に勝利を確信したような笑いをする人も。

真王「進む時はこのサイコロブロックでたたき、1〜10までの数字の中で出た目だけ進んでもらいます」

ブラン「それは分かったけど…なんだかますが色々通ってるように見えるわ」

真王「いいところに気が付いたね」

ブランがマス目の先を見ながらこんなことを言う。

確かに今いるスタート地点の草原から荒地やら森やら火山やら拳句空の上までマス目がある。

真王「醍醐味その2！それはこの双六に20のエリアがあること！草原を初めとして森、町、荒地、屋敷、浜辺、海、沈没船、砂漠、山道、洞窟、火山、雪、冰山、空、城、銀河、天、闇、全の合計20のエリア！そしてエリアごとに何かあるかはやって見てのお楽しみ！」

はやて「中々癖のある双六やな…」

はやては呆れ半分驚き半分だ。

真王「そんなわけでチームリーダーさんは邪王の持っているくじを持って順番を決めます。話はそれからだ」

で、順番を決めたところ、

ヒーローズチーム

剣聖チーム

スマブラハーツチーム

学園チーム

プリティレディズチーム





くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

レーティア「みなさん、今回のアシスタントは私レーティアと、私の娘・リルちゃんがアシストしちやいます？」

リル「うゝ」

真王「でも赤ちゃん語じゃ分らんよ。これを喰え、『翻訳こんにゃく』」

パクッ

リル「あゝ、あゝ、・・・ママ、早くハガキを読もうよ」

レーティア「え！？ええ、分かったわ」

レーティアがリルがしゃべったことに驚きながらも読もうとする。

レーティア「え、ペンネーム『鳴神 ソラ』からの質問ですね。

『マリオ』（一人）」

ルイーダ「銀魂にもあった奴のネプテューヌバージョンだね」

フォックス「しっかしこつちだと最高評議会か…」

明久「それで次はいよいよパーティーですね！」

マリオ「ああ！思いつきり楽しもうぜ！」

ムツツリーニ「……………××料理が出なければ良いんだが…」

ソロ「応援してるから頑張れよ！」

リュウケンドー「質問『ゼロイドを見た時どう思った？』」

アंक「リアスに質問だ『一番苦労してる事は何だ？』」

スネーク「転生者メンバーに質問だ『チートを無効化出来るメンバーを除いて興味あるのはいるか？』」

次回を楽しみにしています 『私は見た事ないけどジャンヌはアレあれもチート装備と一緒にとか言ってたわ』

リアス「苦労してること？…強いてあげるならバカ達が問題起こすことかしらね」

レーティア「フーン、私はあのムツツリーニがいつカメラ撮りに来るのか気になるわ」

真王「取られたらいつて言ってる様にしか聞こえんぞ？」鳴神 ソラさん。廊下に立ってなさい」

銀八「次だ。ペンネーム『フリーダム』さんからだ。『Sフリーダム』最高評議会は、あんな事までしてたのか」

ジャステイス「殺し合いをさせる何て外道だな…」

デステイニー「あんな奴等がいるから、世界は…！！」

レジェンド「終わらせる…」

アカツキ「ああ、あの二人が若干ネタを言っているが、置いて質問に行きますか」

ネプテューヌ

今一番欲しい物(者)は？

リリカル組

激流下りとカースタントやるとしたらどっち？

Xアストレイ「ネプテューヌさんへの質問の物の裏に違う意味があるような…」

更新楽しみにしてます』ズバリお答えしましょう」

ネプテューヌ「エへへ、銀さんだよ」

リリカル組「川下りの方で」

銀八「ムカつくなあ。『フリーダム』さん。廊下に立ってなさい」

リル「次、ペンネーム『武田軍兵士 清坂 剣麻』。『政宗』  
t's Party!! YaHa!!!」

幸村「うぬオオオオオオツ!!! みいなあぎいるウウウウウウ  
ウウウツツ!!!!」

二人の若き武将が雄叫びを上げながら激突していた。

美己「さすが超合金ニューZ つとミサカは光子力の力に驚愕しま  
す」

美琴「まあ、あの二人はほつといて……次回はコラボ長編に  
なるのね」

美己「ミサカ達は出ませんがつとミサカは語ります」

美琴「? とところで作者は?」

佐助「あく作者なら……あそこ」

佐助がそう言っ指差した方向では、

剣麻「オーロラ発・動!!!」

作者が銀色のオーロラを発生させ、

銀時「あれ? ここどk」

剣麻「不意打ち御免! バサラ技、烈火乱れ斬りイツ!!!」 (

一応木刀で)

ズバババババンツ!!!!!!

銀時「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!!!!  
!???」

最後まで言わせる事なく銀時をメッタ打ちにしていた。

美琴「……………」

美己「……………」

美琴「つと、とりあえず質問をするわ。信じられないけど、お館様は溶岩の中に平気で、江田島さんは宇宙空間にいても生きてたけど……………あなた達も平気ですか」

佐助「いや、流石に無理じゃね?」『』

全員「無理だ(ツス)(です)(だよ)(じゃ)」

レオン「私なら溶岩の上で走る程度だ」

ガレーナ「同じくな」

リル「超人だね。『武田軍兵士 清坂 剣麻』。廊下に立ってなさい」

レーティア「(リルがあんなのになりませんように)次はペンネーム『ケン』からです。『統夜』今回は地下で殺し合いの賭け事……………虫唾が走るな……………見世物じゃねえつつの……………最高評議会……………二年後……………あいつらが出てくるんだっただな……………」

華琳「全くね……………下衆は所詮下衆なのよ……………あいつらは……………話変わるけど……………貴方……………その後どうしたの?」

統夜「逃げ切れなかった……………」

華琳「ご愁傷さま……………私からは……………銀時へ質問よ。貴方……………あの時リルを泣かしたそうじゃない?反省しているの?」

統夜「リルを泣かした銀さんに怒ってるな……………」

華琳「当たり前じゃ無い・・・私の鎌でアナログスティックを根っこから切断していたわ」

統夜「わぁ・・・新八とジャンヌ夫婦へ質問だ。結婚したら一軒家を建てて二人で住む予定はありますか？新婚生活って一番重要だし・・・」

華琳「彼らの幸せを統夜は願っているわ。新八に質問よ。貴方はどんな武器を使いたいのかしら？」

- 1・閻魔刀（DMC3に出てくるバールが使っている刀）
- 2・バスターソード（FF?に出てくるクラウドが使う大剣）
- 3・リベリオン（DMCにてダンテが使う大剣）
- 4・レッドクイーン（DMC4に出てくるネロが使う推進剤噴射機構のある大剣）

統夜「新八がデビルハンターになりそうだな・・・侍から離れてるよね!？」

今回の贈り物は統夜（ヴァンパイアルシフアー状態）がメサイアを纏い、六刀を六爪流に構え、遊輔（死神化状態）が二槍を手にし、レオンとユウカの二人と全力全開の模擬戦という訓練をしているイメージイラスト（余談だが結果は統夜と遊輔の負けだけど・・・）、はやてと文乃、優子、秀吉、メアリの五人が頬を赤らめて下着姿でベッドに円になるように横になっているイメージイラストの計二枚です。

華琳「戦いが好きな人達と百合の人達にはいいイメージイラストね」

次回も楽しみにしています。』じゃあ答えなさい」

銀時「何で俺のせいじゃ何のにこんなひどい目ばっか…ブツブツ」

ジャンヌ「その辺は計画中だよ」

新八「うゝん、使いやすさでレッドクイーンですかね」

レーティア「それじゃ『ケン』さん。廊下に立ってなさい」

リル「次だよ。ペンネーム『なめ猫』さん。『俺』少し考えすぎて  
る、なめ猫な俺らです。質問についてはすみませんでした。以後気  
をつけます」

カイト「魂…か……」

ミリア「だ、大丈夫…？深く考えこんじゃってるけど…」

カイト「いやな、管理局のトップがあんなゲスばかりなのに、大き  
な反乱をすぐにしないカナや銀さん達は強い…そう思ってたさ」

ラムザ「そっか…」

ミリア「そうだね…」

カイト「俺だったら、安全確保したらすぐに国や管理局をつぶしに  
暴れるけど、銀さん達はひたすら耐えてじわじわ進んでる…俺らと  
は逆みたいだ。特に、オリキャラ達の実力やキャラ性を比較しても、  
本当に俺はガキだなあ…」

ラムザ「僕達は単独で無謀な反乱をずっとしてきたけど……たま  
に考えたくなるよね」

カイト「ああ……こついうのも、生きていくためにもしっかり考え  
なきゃだめだっけと思うからな…」

俺「考えるのはすばらしいことなんです。では質問を」

この場で軽い質問・作者へ

うちのカイトとミリアについてどう思いますか？

1・オリキャラ達へ

力と正義について考えて何を思う？

2・アリアへ

ネプテューヌの盗んでかいだりしてない？

俺「ではまた」『なにそれ？』

レーティア「正義は力にものを言わせるものじゃないわ。人を救うことが正義だと私は思うわ」

リル「さすがママだね」

アリア「フフツ、ネプテューヌさんに脱ぎたてパンツを…」

パープルハート「なんか足りないと思ったらあんたが盗んだのかあ  
ああ!!!」

アリア「キャアアアアアアアア!!!」

アリアは逃げだした。パープルハートは後を追った。







僕のオリキャラで好きな人、嫌いな人はだれ？』まだ出てないのに  
応えられません。

『僕の作ったオリキャラ達にイメージＣＶをつけるとしたら誰になる？』それはあなたがつけてください。『ヴァーラガルザ』さん。  
廊下にたつてなさい」

銀八「次だ。ペンネーム『黒龍』さん。『黒龍』おお、今回は銀魂  
のあの名シーンですね」

銀時「確か今回の話の元になった原作の話の中に出て来るセリフが  
人気のセリフベスト10に入っていたからな」

黒龍「でも、ここはやっぱり銀さんのセリフとして聞きたかったで  
すね」

銀時「良いんじゃないの？真王なりのアレンジの仕方なんだからよ」

黒龍「それもそうですな」

ソラ「それにしても、最高評議会は原作よりも腐ってないか？」

銀時「だよな。原作に輪を掛けて腐り度が増してるよな」

黒龍「ですよね。原作だと、正義のためだとかふざけた言い訳で違  
法研究とかして自ら使った法律を破っていましたけど、さすがに人  
が死ぬのを娯楽にはするような連中ではなかったですもんね」

銀時「まあ、腐れ脳みそだって事には変わりないけどな」

黒龍「まああつちのネプテューヌや銀さん達にはそんな連中に振り

回されないで自分の道を進んで行って欲しいですね」

銀時「言わなくてそうするだろ」

黒龍「それもそうですね。じゃあ質問します」

1・ネプテューヌに質問。もし、最高評議会の連中が目の前に居たらどうしますか？

2・ネプテューヌや他の女神と銀さんに質問。うちの小説で一番の苦勞人は誰だと思いますか？

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」『ズバリお答えしましょう』

ネプテューヌ「そいつも悪い奴だからぶっ飛ばすよ！！それからライホースさんかな？」

銀八「そうか。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

真王「次、ペンネーム『ウィンド』さんからの質問。『ウィンド』久しぶり。ウィンドです」

リア「新たな主人公にして転生者で一応神のリア・オルフェウスだ。ところでリリース達は？」

ウィンド「修行中。さて質問にはいるか。ネプギア達妹陣に質問。俺の出してる男の娘主人公達で気になる相手はいるか？また付き合いたいなんて奴はいるか？」

リア「こちらも。銀時にだ。家の奴らで勝てそうな奴はいるか？」  
ウィンド「返答よろしく」『彼女達はセレスですかね。銀時は多分エールあたりかと。』ウィンド『さん。廊下に立ってなさい。最後



## 『リリ銀パーティールール説明』

### ～マス説明～

ノーマルマス：青（特になにもないマス）

ペナルティマス：赤（チームにペナルティが下される）

ミニゲームマス：プレイヤー（チームかその一人が挑戦し、クリアすればマス移動）

パーティマス：色違いの4人（チーム対戦して勝ったチームがマス移動。4人対戦もあれば、2対2、1対3の対戦もある）

クイズマス：シルクハットと？（クイズに正解すれば5マス移動。外れると5マス下がる）

イベントマス：！マス（エリアに何かが起きそう？）

ハプニングマス：？マス（相手のチームに何か起きそう？）

ボーナスマス：黄色（自分のチームにいい事が起こりそう）  
邪王マス：クツパマス（邪王が現れて最悪なルーレットをされます。  
一つだけいいものを選ぶと邪王は逃げだします）  
デンジャーマス：黒でドクロ（チーム全員に悲劇が！！）  
アイテムマス：キノコ（ミニゲーム、クイズなどをクリアするとア  
イテムを一つ貰えます）  
デュエルマス：交差する剣（自分のチームのプレイヤーと相手のチ  
ームのプレイヤーとの対戦が始まります）  
バトルマス：VSマス（真王が考え出した対戦相手と戦います。中  
には助っ人が現れます）

（エリア情報）

草原：初めにスタートするエリア。特にこれといった者はない一般  
的なエリア

森：木々が生い茂るエリア。この森でしかないハプニングが潜んで  
いる。

町：住人が多いエリア。平和的だが実は裏で何かが起きている？

荒地：草原とは大差ないが、ちよっぴり危険性が隠れているエリア。

屋敷：何かが出そうなエリア。ここでのハプニングは何かが起きる  
！？

浜辺：海の接するエリア。津波に飲まれると浜辺エリアの最初に戻  
される。

海：魚達が泳ぐエリア。ここではさまざま海の生物たちが多い。

沈没船：いかにも怪しい雰囲気エリア。屋敷エリアと似た雰囲気  
を放っている。

砂漠：ジリジリと猛射が襲うエリア。時たまに蜃気楼で迷うことも  
…。

山道：火山へと登るエリア。荒地と比べて危険度が高い。  
洞窟：薄暗い火山の洞窟。ここではハプニングマスが多くみられる。  
火山：灼熱の火山エリア。デンジャーマスを踏むと大変なことが…！  
雪：雪の降り積もるエリア。氷の湖が割れたら…。  
冰山：綺麗な氷の世界。滑りやすいので注意が必要。  
空：雲の上のエリア。ゴールに近づくにつれて難易度が高くなっている。  
城：誰かのお城らしきところ。トラップが数多くあるので要注意。  
銀河：宇宙の世界。宇宙でも危険がいっぱい！  
天：不思議な空間のエリア。だが危険度が高いので気をつけるべし。  
闇：危険な闇の世界。危険度が最高に高いので要注意。  
全：最後のエリア。真王が最後のマスで優勝者を待っている。  
の20のエリアに分かれていて、全部で1000+1マスある。  
一つのエリアに50マス（全は1マス分ある）。

### 〈アイテム一覧〉

ダブルダイズ：サイコロブロックが二つ現れ、さいだ20マス進める。ゾロ目になると嬉しいことが…  
トリプルダイズ：サイコロブロックが三つ現れ、最大30マス進める。ゾロ目になると嬉しいことが…  
ピットリストップ：数字の変わるスピードが遅くなり、だいたい数字が出しやすくなります。  
ノロノロイ：数字が1～3までしか出せなくなります。  
ダッシュラン：数字が8～10までしか出せなくなります。  
アオナレー：1ターンだけ全てのマスを青マスにします。  
デュエルベル：ベルを鳴らして指定相手と戦います。  
クイズベル：ベルを鳴らしてクイズに挑戦します。



バトルベル：ベルを鳴らしてバトルを開始します。

無敵の星：一度だけ無敵になって3つのサイコロブロックで前にいるチームをぶつとばします。ぶつ飛ばされたチームはダメージと共に5マス戻されます。

運だめしカード：使用するまで何が起こるか分からない不思議なカード。

第九十七訓：パーティはみんなでやるのが楽しい（後書き）

真王「マスの内容のリクエストがあるなら感想に書いてみてください。ただし本当に載るとは限りませんが…」

邪王「ケケ、『双六でも一筋縄ではないか』 テイクオフだぜ？」

（予告）

邪王「別次元世界からやってくる奴らがいるらしいぜ。『ヴァーラガルザ』のキャラ共が現れるこった」

第九十八訓：双六でも一筋縄ではいかない（前書き）

真王「パーティの始まりです！でもちよつと乱入者が出ようが私達が軽く対処しますがね」

邪王「『ヴァーラガルザ』の投稿キャラが出るんだぜ？」



頭上にサイコロブロックが出現。

真王「サイコロブロックを叩いて進んでください」  
統夜「こうか？」

真王のアドバイスに統夜は叩いてみると、ブロックが割れて7が出る。

達哉「7か」

相川「まずまずだけど行こうかしら？」

ヒーローズチームは7マス進んだ。

だがどんな危険があるかなぞ統夜たちは考えていなかった。

7マス進んで赤のマスに止まると……空に浮いてあるモニターが現れて何か内容が映し出された。

『フアは嫌い』

メアリ「……はい？」

統夜「なんだこりゃ？」

ヒーローズチームは意味が分からず首をかしげる。

真王「赤のマスはペナルティマス。止まったらチームにひどい罰が受けられます」

相川「だから何のよ。っていうかアレは何？」

真王「謎解きしてみる」

ヒーローズチームは謎解きして見た。

統夜「（ファは嫌い？ファ嫌い…ファは嫌…ファ、イヤ・・・って）まさか！！！」

真王「気付いてももう遅い。ファイヤー」

ボウツ！

ヒーローズチーム「あぢゃああああああ！！！！！」

ヒーローズチームがファイヤーで丸やけにされた。

銀時「おいしいい！！！！これ思いつきり黒神のことパクってるじやねえかああああ！！！！！」

真王「確かにペナルティを出しましたがこっちの方がまだましの方だと私は思います」

丸焼けにされたヒーローズチームを指差して怒鳴る銀時だが真王は軽く返す。

恭介「こ、こんな危険なパーティだったか！？は、早く逃げて…」

と恭介が逃げだす準備をすると目の前にモニターが現れる。

『途中でやめたら首切るぞ』

恭介「やりやいいんだろオオオオオ！！！」

首元にナイフを突きつけられたら誰だって言う。

ルイーダ「思いつきり見覚えがある様な…」

マリオ「言うな、ルイーダ」

クツパ「我が輩も何かトラウマがよみがえるのだ…」

似たような経験をしていた人たちが言う。

森羅「次は俺らの番だが…、赤マスは4、7、10の3つだな」  
レイン「ならそれら以外を狙えばいいだけだ」

次は剣聖チームでレインが叩く。  
出た数字は8だ。  
進んだ先には人一人のマスだ。

真王「おう、ミニゲームマスか。私が出題するミニゲームにクリアしたら数マス進むことが出来ますよ」  
森羅「ミニゲームねえ。どんなだ？」  
真王「これだ」

『杭打ちヒップドロップ』

咲夜「何これ〜？」

咲夜含め内容が分かってないらしい。  
いや、経験のある物が語る。

マリオ「名前からして推測だがヒップドロップで食いをぜんぶうち込むんだろ？」

真王「その通り。12個ある杭のうち5つの杭を全て打ち込んでください」  
さくら「なら楽勝じゃん。私がやるよ」

簡単だとみたさくらが名乗り出た。

真王「特に限定はないからな。それではミニゲームを始めようか」

真王はパチンと鳴らして12個の杭を出現させた。  
なぜか杭の上に蝶がいる。

さくら「なんで蝶がいるの?」

真王「そうでもしないと杭を打つのとそうでないとの区別というもんがあるだろ」

さくらが言い、真王が答えるとマリオ達はうんうんと首を動かす。

真王「さて、準備はいいか?スタート!」

IBGM杭打ちヒップドロップbyマリオパーティ  
(in the mushroom forest EXTEND  
ED Mario party.wmv)

さくら「さて行くわよ〜」

さくらはまず一つ目に杭、手前一番左にヒップドロップする。

ベコンッ!

杭が地面に埋まった。

蝶はすでに逃げだしていた。

さくら「よし次!」



さくらは調子づいて次の杭を打ち込もうとする。  
中側左から2番目だ。

グサツ！

さくら「ぎゃああああああああああああああああ！！！！お尻刺さったアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

打ちこもつとした杭が何ととがっていた。

思いつきりいつたため悶絶するさくら。

恭介「待て待て待てー！！なんであんな尖ったもんまであるんだよ！！」

真王「いつてなかったっけ？12個ある杭のうち5つがうちこむ杭、残りの7つはとがったものだ」

ありえないといったばかりに恭介は突っ込むが、真王は軽く流す。

ルイージ「制限時間内にその5つの杭を打ち込めばいいんだよ」

ネプギア「それってルイージさん経験あるんですか？」

ルイージ「兄さんも経験してるよ」

マリオ「初めての時はケツがやばい感じになりかけたよ……」

経験のあるルイージとマリオが語る。

森羅「えつと……さくら！あと25秒以内に頑張れるか！？」

さくら「とっ……ぜん……よ」

お尻を押さえながら立ち上がるさくら。

さくら「ここで頑張らなくなったら、何がレン君のお嫁さんかアアアアアアアアアア!!!」

レイン「何時から俺はお前の嫁になった？」

そして長き？激闘の末…

真王「タイムアップ、残念だったね」

後一個の杭が残ってたところで終わってしまった。

撃ち込んだ杭は4つ、尖った杭は最初のと合わせて5つだ

さくら「おしりがぁ…」

すでにさくらのお尻は五体満足だ。

紅也「ぶ、無事ではなさそうだ…」

咲夜「あら、痛そうね」

森羅「他人事だなおい…」

紅也は冷や汗を流し、他人事のように言う咲夜に森羅が突っ込む。

蒼馬「まさかミニゲームでもこんな危険があるとは…、リトルハニーよ！今から僕が「退場だ」ゴホウツ！」

蒼馬が言いかけたところで咲夜と森羅がリアットをかます。

レイン「お前の頑張りは伝わったぜ。あとは任せろ」

さくら「レン君…」

真王「ミニゲームは失敗しましたのでここにどまります。では次のかた」

レインの励ましにさくらはその心を受け取った。  
次はスマブラハーツチームの番だ。

マリオ「よし、これだ！」

マリオがブロックを叩くと6が出た。

・・・ただのノーマルマス。

真王「・・・ただのマスですね。期待してたんですが…」

クッパ「我が輩らの苦しみ姿と言いたいのか!？」

明久「ひどいよ真王さん!！」

真王「失敬な…」

理不尽な指摘に眉をひそめる真王。

マリオ「まあ進めただけでも良しとしようぜ」

冥王「そうなの」

マリオと冥王が制止をかける。

真王「まあいいです。次は学園チーム」

由美「私の出番ね。とう!」

由美がブロックを叩く。

出た目は10。つまりは、

恭介「ペナルティだアアアアア!!!」

恭介は絶叫した。  
そしてモニターが登場。

『ナメクジキッス』

全員「ナメクジイイイイイイ！？」

全員が絶叫。

そしてドラクエに登場するナメクジモンスターが現れた。  
でかい唇がプルプル揺れている。

恭介「気持ち悪いことこの上ないな…」

由美「そうだね…」

愛淫「そうですね」

恭介「ってちよっと？何で俺の後ろにいるわけ？」

気持ち悪がっている恭介の後ろに由美の愛淫が避難していた。

由美「恭介！男ならしゃきっとしなさい！」

愛淫「私達に勇気を見せてください」

恭介「遠回しに俺に死ねって言ってるだろオオオオオオ！！！！」  
「！！」

恭介3度目の絶叫。

すでにナメクジが迫ってきた。

ヤルオ「あいつが担うなら何でもいいおwww  
ルシアス「見学しときましようかしら？」



ジャンヌ「む、覚悟決めた！えい！」

レーティアとジャンヌは不安気味だったがブロックを叩く。  
出た目は？。

ジャンヌ「しまったアアアアアア！！」

リアス「なんてことしてくれたのよあんたアアアアアア！！」

ジャンヌは叫んでリアスは怒鳴る。

そしてモニターにこんな内容が：

『タコと遊んで』

プリティレディズチーム「は？」

プリティレディズチームは意味が分からない顔をしたが、目の前に  
巨大たこが現れる。

プリティレディズチーム「キャアアアアアア！！」

当然ながら捕まるチーム。

レーティア「そんな！まきつかないで！」

ジャンヌ「や、ん縛られてるよ」

リアス「ちよつと！パンツだけは止める！」

タバネ「ぬめぬめしちゃう！」

ユウカ「く、屈辱な…！」

ナリア「ちよつ！？これじゃ見えちゃう！」

巨大たこによってあわれもない姿になるチーム。

銀時、新八、統夜、達哉、遊輔、蒼馬、真王竜「ぶっ!?!」

直視した上記の人は吹いた。

恭介「ギャアアアアア、目がアアアアアああああ!?!」

恭介は由美と愛淫に眼つぶしを喰らった。

プレシア「ちょっと!?!?なんてものを用意したのよ!?!」

真王「イヤあつい…」

全員「ついですむ問題かあ!?!」

真王「なら男性陣に聞いてみるよ。なあ?」

男性陣(変態心ある方に限る)「最高にありがとうございました!?!」

男性陣はお礼を言った。

後で絞めると思った女性陣であった。

まあとりあえずたこを放しました。

ネプテューヌ「次は私達の番だね。とう!」

次は女神チームの番。

ブロックを叩くと9と出た。

その先のマスはVSマークがある。

真王「ほう?バトルマスを踏んだね?私の考え出した相手と戦って  
もらいますよ」

ネプテューヌ「余裕だよ。どんとこい!」

真王「いい返事だ。では対戦相手はこれだ!」

真王が言うとモニターが出た。

『インベーターズ

イカベーター×10

カニベーター×10

クラベーター×10

ユフォベーター』

そしてイカ、カニ、クラゲ、UFOの様なインベーターが現れた。

銀時「思いつきりインベーターじゃん!!」

真王「黙らっしゃい。では試合開始!」

真王の合図に戦いが始まった。

ネプテューヌ「速攻で終わらせるよ」

ネプギア「いきます!」

まず最初にネプテューヌ姉妹が駆け出す。

ネプテューヌ「デュエルエッジ!」

ネプギア「ファンタジックスター!」

ネプテューヌは一振り、ネプギアは連続剣でイカベーター5体とカニベーター3体を倒す。

ノワール「あんただたちだけカッコつけようたってそうわいかないわよ!」



ユニ「こつちだつて！」

ノワールのショートソードとユニのショットガンがイカベーター5体とカニベーター3体倒す。

ブラン「まとめてたたきつぶす……」

ラム「小さいからって負けないもん！」

ロム「頑張る……」

ブランがハンマーでクラベーター5体、ロムとラムがカニベーターをそれぞれ2体ずつ倒す。

ベール「攻めますわ。よろしくて？」

そしてベールが槍でクラベーター5体倒す。  
残るはユフォベーター1体。

ネプテューヌ「さあ残るはあんだだよ」  
ユフォベーター「……………」

残り1体となったユフォベーターの戦術は、

ピュンツ！

逃げだした。

女神チーム「あ！逃げた！」

真王「ホントだ。これだとインベーターズは全滅と見なし、女神チームは10マス進めます。ちなみに行っても何も発動はないよ」





邪王「そいつは邪王マス。俺様が直々にいいもんをプレゼントしようと思つてな」

そう言つてルーレット盤を取り出す。  
そのルーレットはずっと回っている。

邪王「このストップボタンを押しな。何が出るかな？」  
はやて「そうか。んゝ……………これや!」

はやてはボタンを押す。  
ルーレットはゆっくりになり、あるところに止まった。

『屁怒紹シンドローム』

狂乱チーム「いゝやゝ ああああああああああああああ  
!?!?!?!」

狂乱チームはこの世とは思えない絶叫をした。

邪王「屁怒紹シンドローム、沢山の屁怒紹ファミリーと鬼ごっこですよ」

ヴィータ「まじで最悪だアアアアアアアアア!?!?!」  
はやて「よりによつてあの屁怒紹さんかアアアアアアア!?!?!」  
シグナム「しかもファミリーって、あいつの家族もかあああああ!?!?!」

狂乱チームは絶望の色に染まっている。

邪王「んじゃ頑張つて……………ん?」

真王「…誰だ?」





邪王「んじゃそつちは？」

ローグ「俺はローグ・ヴァンズ」

レルシア「レルシア・ヴァルキュリアと言います」

真王「それはともかく、邪魔だ。大人しくしろ」

真王は速攻で三人と一個を縛った。

ユリナ「何でこんなことに…」

アーク「こりゃああああ！！ワシは割れ物かああああ！！！！」

ローグ「何でこんなことに？」

レルシア「私が聞きたいです」

真王は一切スルーだ。

邪王「ちっ！変な邪魔もののおかげでいいお仕置きが出来なくなっちゃまった」

チームのみんなは心の奥で狂乱チームを合掌した。

真王「全く、邪王、『外にいるうるさい奴ら』も捕まえてこい」

真王が言つと邪王はいよいよと応えて転移する。

ほとんどは首をかしげる。

真王「次、メテンスナイトチーム」

レオン「やれやれ、つぎか」

レオンは出番が来た後すかさずブロックを叩く。  
出た目は6。





真王竜含めドラゴンネイルチームが構える。

真王竜「俺達の恐ろしさというものを教えてやる……」

真王竜が駆け出して瞬間移動の如くメタルカイザーに切りかかる。

ネプテューヌ「うわ早い！」

レイン・ソラ「……………」

統夜「強そうだ……」

見ている人たちは驚く。

だが、

パシッ！

真王竜「なに!?!」

メタルカイザーが真王竜の攻撃を機械化されている右手で止めた。そしてチームのいる方へ投げ飛ばした後右手のアームがのびた。チームはとっさに躲す。

真王竜「どうやら一筋縄ではいかんらしいな……」

メタルカイザー「グルルルルルウウウウ……」

魔炎竜「で?どうするんだ?」

真王竜「決まってる。討伐だ!」

IBGMドラゴンbyケロRPG

(KeroroRPG - Boss Battle Theme

真王竜「少々甘く見ていたらしい。少し本気を出すか」

真王竜は手をかざすと、地面に魔方陣が現れる。

魔方陣から出てきたのは、黒き剣型のデバイス『ダークレヴァンティン』だった。

真王竜「さあ、覚悟しろ！」

真王竜がダークレヴァンティンを構えて言う。

メタルカイザー「グラア！！」

真王竜「どわああ！！」

いきなりメタルカイザーが不意打ちを出す。

真王竜はギリギリでかわす。

黒鎌龍「今度はこつちだ」

黒鎌龍は大蒲を出してメタルカイザーに切りかかる。

ガッ！

メタルカイザー「グウ」

黒鎌龍「歯あ！？」

口で止められて驚く黒鎌龍。

白天竜「こちらも」

魔炎竜「忘れてもらっちゃ」

氷刃竜「困るよ！」

3方向から白天竜、黒炎竜、氷刃竜が同時に攻撃。

特に白天竜の持つフリーズレヴァンティンがメタルカイザーの左腕を切り落とした。

メタルカイザー「！？ガルアツ！！」

切り落とされたことに気付いたメタルカイザーは右腕を振り回して追い払う。

切られた左腕には傷口に氷が張って機械らしきものをのぞかせる。

光翔竜「完全にサイボーグですね…」

真王竜「こんな技術を作った人間は計り知れないな…」

真王「誰も作ってないよ。こいつは自然体だ」

真王が割って入って説明した。

真王「魔物は進化しているんだ。人間と同じく。遺伝子の違いで何かが克服し、ある時は自ら機械化する魔物だっている。例をあげるならこのダメグモキヤノンあたりだろう」

ダメグモキヤノンをモニターに出しながら言う真王。

真王竜「・・・進化ねえ。世界はやっぱ広いって思い知らされる。・・・だが」

魔方陣が足元に展開され、ダークレヴァンティンを構える。

真王竜「そんなことで強くなれると思うなよ！！闇龍一閃！！」

真王竜は一閃を繰り返した。

メタルカイザーは悲鳴をあげることなく倒された。

真王「おめでとう、これで10マス進んだね」

敵を退治したドラゴンネイルチームはネプテューヌ達と同じ位置に着いた。

ネプテューヌ「強いんだね」

真王竜「伊達に悪の組織は名乗ってない」

ネプギア「自分で悪って言ってますけど…」

仲良く話すネプテューヌと真王竜に2チームは呆れてネプギアは突っ込む。

真王「ほれ、同じチームの方が応援してらっしゃるぞ」

観客席の方を見ると、同胞の呪血竜・聖唱竜・夜帝竜・水蓮竜がいた。

呪血竜「とりあえず観客としてきました」

聖唱竜「応援に来ました」

夜帝竜「クッソー！楽しそうに暴れやがって〜！」

水蓮竜「みんな頑張ってる〜」

反応はそれぞれだ。



リリカルライダーチームがブロックを叩く。  
出た目は8。

アリス「ミニゲームマスのようだな」  
アリア「どんなんだろ……」

モニターが現れた。

『わたって進め！ぐらぐらタワー！（一人限定）』

そしてソラ達の目の前にいくつかのバランス悪そうな足場がある。

アリス「面白そうだ。ここは私が行こうか」

ソラ「ああ、頼むぞ」

真王「んじゃ始め！」

IBGMてらせテレサの館byマリオパーティ  
(full of danger EXTENDED mario  
party.wmv)

まずアリスが足場に載ってみる。

グラグラグラグラ！

乗った瞬間ぐらぐらと揺れ始めた。

真王「向こう岸の浮島まで渡ったらクリアだぞ」

アリス「ふむ、では」

アリスはトントンと常人ではありえないジャンプで足場を渡る。  
アリスが乗った足場はぐらついたあとすぐに崩れる。

アリス「意外と楽勝だな」

そしてもう着いた。

全員「早っ!？」

ソラ「こうなると思った…」

全員は驚き、ソラはやっぱりかと思いを抱える。

真王「クリアだね。では10マス進みますよ」

リリカルライダーチームは10マス先へ進んだ。  
現在彼らがトップ。

近藤「よし!次は我々の番だ!」

次は近藤達真選組チームの番。

近藤はブロックを叩いて5を出した。

土方「ハブニングマスか…、一体何が起こるんだ?」

沖田「きつと土方さんを暗殺することですア」

真王「アホ沖田、それはペナルティだ」

真王は沖田に突っ込む。

モニターが現れた。

『最後尾の奴がずるして10マス進んだ』

土方「はああっ!?!」

異世界戦士チーム・リリカル銀魂チーム「いよっしゃアアアアア  
!?!」

土方は有り得んばかりに大声を出し、最後尾にいる異世界戦士チ  
ームとリリカル銀魂チームは喜ぶ。

近藤「なんてこったアアアアアアアア!?!!相手チームにいいも  
んを出してしまったああアアアア!?!」

近藤は頭を抱えてシャウトする。

エール「すまんね」

エールはそっぴいながらブロックを叩く。  
出た目は7だ。

エール「ノーマルか・・・」

ココリ「でもペナルティよりまし」

次はリリカル銀魂のチーム。

銀時「よし、おれのターンだ」

銀時は拳を握ってブロックを叩く。  
出た目は2。しかもペナルティ。





Drドーン「なんでこんな目にあつのであるか？」

ディケイト「俺店番やってんのに何で？」

フィリア「私が聞きたいです」

邪王「そりゃ怪しいからだ」

一同「直球っ!？」

全員揃ってびつくりする。

邪王「にしてもひどいけがをしているな。・・・テラエクスヒール」

邪王が魔法をかけると、永遠のアセリアそっくりの女性・セリアの傷がすべて消えた。

セリア「・・・ウ・・・マスター？」

カイン「セリア!良かった!」

意識を取り戻したセリアにカインは喜ぶ。

邪王「えつと…俺様が前に捕まえたのが2名、会場に入ってきたのが3名と一つ、観客にいるのが3人、今いるお前らで5、まだどこかにいるのが数名、そして目の前にいるあんたらで2だ」

邪王が別の方へ向く。

そこには2人の男女がいた。

金色の鎧を身につけた赤目赤髪の女性とBASARAの信長の鎧を黒くしたものを着て緑の髪の赤い目の青年がいた。

???「よく私達がいることが分かったな？」

邪王「『極神10傑集』の気配なんていやでも分かる」

???「・・・私達の事も知っているのか？」

『極神10傑集』という単語に眉をひそめる女性。  
隣にいる青年もそうだ。  
捕まっているカイン達はさっぱりとした顔だ。

イシュタル「まあいい、私の名はイシュタル・ヴァジスゲイド。今日限りでお前は死んでもらう」

イシュタルは地面に手を当てると魔方阵が現れて、その後ろに巨大な悪魔が現れる。

それを見たカイン達は戦慄するか興味を持つ。

邪王「デーモン種、しかも魔王級だな」

イシュタル「フッフ、我が悪魔によって消滅し

ビュッ！ズバツ！！ドグシャツ！

イシュタルが言いかけた時、邪王が右腕を音速で降ると悪魔の頭と胴体が離れた。

そして地面に落ちた頭と胴体はそのまま紫の血だまりになってしまった。

見ていたカイン達やイシュタルや青年も啞然としていた。

イシュタル「・・・ハッ！今のは一体？」

邪王「ソニックカッターで首を切り落とした」

イシュタル「ば、ばかな！？あの悪魔は強力な再生能力を有してるんだぞ！切られたところですぐに再生

邪王「出来なくしてやったんだよ。なぜかって？俺様がいるところは俺様のフィールドだからだ！！」

全然根本的ではない。

邪王「で？そこのお前は？」

隆次「・・・混獄こんごく 隆次りゅうじ」

イシユタル「しゃべるな隆次！」

邪王「黙らつしやい」

青年・隆次を止めるイシユタルだが邪王に一蹴された。

邪王「まあこつちにも極神10傑集の一人いるしな。今パーティで観客としているがな」

イシユタル「あいつは・・・」

イシユタルは頭を抱えた。

どうやら知り合いがいることに頭を抱えているらしい。

邪王「ところで『極神10傑集』、テメエらは何のためにここに来たんだ？3秒以内に答える。はい1」

ゴスツ！

隆次「2と3は！？」

隆次は邪王に殴られた。

邪王「いや、やってみただけ」

隆次「何気にひどくないか？」

邪王「うるせえよシスコン」

隆次「誰がシスコンだ！！？」

邪王・イシュタル「おまえ」

隆次「ハモった!?!」

シスコンと言われて言い返すがイシュタルにまで言われる隆次。

邪王「まあいずれにしろ何でもいいが…」

邪王から膨大な禍々しい魔力が放出。

その時大地震が発生。

邪王「俺様とあいつの物語を汚す奴は誰であろうと許さんぞ?」

邪王の発する殺気にイシュタル達は戦慄した。

邪王「ま、それはいいとして、早く戻らないとあいつ心配してるだろうな」

殺気を消して戻る準備をする邪王。  
その手には7本の紐がある。

イシュタル「おい、なぜ我々まで?」

邪王「ついでだ。レッツラゴー」

イシュタル「おい!ふざけるな外道が!!私はいかないと…話を聞け馬鹿ものがああああ!!!」

隆次「(俺…ちょっと情けないです…:)(」

ミッドチルダ・???

ジーク「紙一重だった…、運良く捕まらずに済んだな」

レギス「ああ、束でかかろうが俺達が負けていた」

カオストール「フフフツ、ますます興味深いね、この世界は…」

別の場所で邪王から逃げだした3人が感想を漏らす。  
そしてさらに別の場所で…。

レーヴェ「久しぶりに会おうかな…過去の俺…」

とかなしそうな雰囲気という男がいた。

更に別の場所では。

エルシャダイ「何者だあの男…、イシュタルの悪魔を一瞬で無に帰すとは…だが同時に邪魔な存在だ」

マスターテリオンみたいな黒髪金色の男が遠くから邪王たちを見て言う。

エルシャダイ「…っ!？」

しばらく覗いていると邪王がこちらを向いた気がした。

エルシャダイ(あの男…気付いている!? 我ら『極神10傑集』に匹敵するやもしれぬ…)

そう解釈していると後ろにいる複数の気配に気づく。  
人型の黒い体で赤い目が特徴の邪王兵である。

邪王兵「神殺シ」  
カミコロ

ズドガッ！！

エルシャダイ「な…あ…」

3方向の同時攻撃にエルシャダイは避けられず直撃を受けたためそのまま意識を失った。  
そしてそのまま消えた。

邪王兵「ニセモノダ。ホンモノスデニニゲタ」

邪王兵は他の搜索にあたった。

エルシャダイ（危なかった…。何だあの我々に匹敵する力を持つ輩は！？このままでは我が計画に支障をきたす。ならば先手を打って奴らを始末…）

邪王兵「シネ」

ガッ！！

エルシャダイ「な…に…？」

邪王兵を始末しようと考えた矢先に後ろから邪王兵が来た事に気配を感じられないまま気絶させられた。

更に更に別の場所。

ユリス「この世界にも強い人が…。早くあの男を止めないと…。兄

さん」

一人の少女がある計画を阻止するために行動を開始した。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

銀八「よし！リリ銀パーティだからゲストがアシストするぞ！まずはいっからだ！」

マリオ「よう！『スマッシュハーツブラザーズ』からのマリオだけ！」

ルイーダ「同じくルイーダです」

銀八「よし、んじゃいくぜ。ペンネーム『フリーダム』さんからだ。



『Sフリーダム「パーティ面白そうだな」

ジャスティス「けどマリオパーティがベースだから」

レジェンド「踏んだマスによっては、大変な事に…」

カオス・アビス・ガイア

「『『（ゴソゴソ）』』」

デステイニー「お前等、何やってんだって…アアアアアア！！」

ガイア「あ…」

カオス「やべっ！！」

アビス「バレた！！」

アカツキ「どうした？」

デステイニー「ガイア達がゲルスゲー、ザムザザーを10機ずつと  
デストロイを5機をあっちに送っちゃった…」

一同『……』

アカツキ「まっまあしょうがねえな（苦笑）あっとりあえず、質問  
だ」

全員に

今回のパーティに裏があるとしたら何？

デステイニー「おいーーーーー!!あっちに送った奴等どつすんの!  
!」

Sフリーダム「え」と…とりあえず、そちらでどうにかしてください  
い…」

デストロイ(オリジナル)「私の子供達(量産型)は、どこに…」  
泣」

更新楽しみにしてます」

マリオ「いいことだったらいいが、悪い事ならば壊す!」

真王「誰が悪いことなんてするか」

マリオ「あ、そうなの?」

真王「『フリーダム』変な誤解を招くなよ」

ルイージ「続いては僕達のとこの『鳴神 ソラ』さんだよ。『マリ  
オ』色々強い人もいるから楽しくなって来たぜ!」

ソニック「YES!ますます楽しみがあるな!」

クッパ「(変な事が起こりません様に…)」

冥王「頑張るの!」

明久「どう思いますルイージさん」

ルイージ「うん、僕達、ツッコミしまくりそうだよ。」

フォックス「頑張れよ！」

スネーク「応援してるぞ」

ムッツリーニ「……………許可を貰えばグラビア並みに撮る。無断で撮らない」

ネス「質問『マスについてはこんなのがあったら良いと言つのを含めて考えましたか?』」

リユカ「なのはさん達に質問です『集まった人達を見てどう思いました?』」

ソロ「メテنزギルドの長に質問だ『クローンなのは達は どうしてる?』」

次回を楽しみにしてます 『2つは作者さんが答えるよ』

真王「そりやもう考えましたよ。そしてなのはさん達はみんな強者揃いだと驚いてました。次」

アテナス「彼女達は施設で不自由なく暮らしています。しかも本物そっくりですから興奮している転生者もいますが…」

真王「では『鳴神 ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

マリオ「次はペンネーム『ケン』だけ。『統夜』始まったぜ……」

遊輔「そうだな」

零斗「羨ましいぜ！！チキショウ！！」

統夜「や・・・零斗・・・お前は黒神さんとこのパーティーに出てるだろうが・・・お前とダイチ、たけしは龍の骨さんのところのキャラなんだから・・・」

零斗「そ、それもそうだな・・・」

統夜「そうだぞ・・・」

零斗「新八がレッドクイーンを選ぶとは・・・右腕を悪魔の右腕にした方が・・・」

統夜「んなもん・・・ジャンヌに聞こえたら怒るよ？早速質問だ・・・ヤルオに質問だ。スクデイに出てくる伊藤誠についてどう思うか？」

零斗「ヤルオは変態だがああはならんだろ・・・沖田に質問だ。もし統夜の蒼炎が使えたら誰を燃やすか？」

ダイチ「お・・・盛り上がってるね」

気力使いのダイチがやって来た。

統夜「まあな・・・そういうお前は？」

ダイチ「俺も参加したいと思って・・・真王さんに質問だ。女性陣

の中で一番エロい人って誰ですか？」

統夜「ダイチ・・・スケベな事するんじゃないぞ」

ダイチ「分かってるよ・・・」

今回の贈り物は犯罪組織を蒼炎で燃やし周りに精神崩壊した魂をいくつか浮遊させ右手に大剣を手にしている統夜のイメージイラスト（テーマは悪への絶望）、統夜（ヴァンパイアルシファー形態）と遊輔（死神形態）、はやて（天使化）、雪蓮（白虎化）、メアリ（白獅子化）の五人が草原で立っているイメージイラストの計二枚を差し上げます。』んじゃ順番に応えようぜ」

ヤルオ「ああいう奴に限って死亡フラグwwwwww」

沖田「そりゃ土方さんでさア」

真王「アルテス。なんせマゾだから」

ルイージ「直球！？『ケン』さん！廊下に立ってなさい！」

真王「つぎだ。ペンネーム『ヴァーラガルザ』さん。『ついに始まったか・・・』」

エルシャダイ・ワイズデント「くだらん世界だ。今にでも潰してやりたいわい。だがまだ我らが動くまでではない。」

でもあのバカはどうするんですか？

エルシャダイ・ワイズデント「イシユタルに搜索させている。もし

も我らの存在がばれそうだったときにはその事を知った者達を始末するように言っている。あのバカは我々の中でも問題児だからな・・・。」

苦労してるんですね・・・。。あ、それと質問

みんなへ（作者も含む）

もしもみんなが屁怒紹さん（しかも家族そろって）一ヶ月間暮らすことになったらどうしますか？（逃げ出そうとするとプロリーとバラガスにシヤマルパイを無理矢理食わされます。）『』

全員（一部除く）「逃げる!!」

真王「覚悟の上らしい。『ヴァーラガルザ』さん。廊下に立ってなさい。次だ。ペンネーム『黒龍』さんからの質問だ。『黒龍』ソラ、リリス、アリス、アリア、セイバー、後ライホース、これから頑張ってください!!」

ソラ「とりあえず、黒神のゲスト達みたいな展開にならない事を期待したいな」

アリス「フツ…まかせろ」

リリス「優勝してみせます!」

アリア「にゃ〜…」

ライホース「なんで私はついで扱いなのだ!？」

銀時「まあ、頑張れや」

神楽「ん？ヤミだけ出れない事に怒ってないアルか？」

ヤミ「今回は、私は呼ばれてませんし仕方ありません」

ソラ「まあ、元気出せ」

ヤミ「ありがとうございます」

黒龍「とりあえず、今回はここまでにして質問します」

1・真王さんに質問。なんでソラ達のチームを腹立つとか言ったんですか？

2・ネプテューヌに質問。今回のゲスト長編で一番の強敵はどのチームだと思いますか？

3・銀さんに質問。回ってくる番が最後尾になった事に焦ってましたけど、なんか罰ゲームとかあるんですか？

黒龍「それじゃあ次回も楽しみにしています」『・・・ノーマル版でアリスがことごとく超えた事を思い出して・・・』

ネプテューヌ「ハイ作者ストップ！私は多分とある転生チームかな？」

銀時「なんで焦ってるって？そりゃ黒神みたいな目にあうんじゃないかと不安になるんだよ！」

真王「だそうです。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

ルイージ「えつと次はペンネーム『なめ猫』さんからです。『俺』引き続き考えまくる、なめ猫な俺らです」

ラムザ「もはやデフォだね…」

ミリア「リリ銀パーティーが始まり、たくさんのコラボ…そして銀さん達が楽しい長時間のゲームで競争する……明るい時間だね」

ラムザ「予想すると、勝つのは…やはり銀さん達かな？作者さんもヴァーラガルザさんのオリキャラ達に自信ありげな発言をしてるし俺「つまり？」

ラムザ「今のところ、真王さんはうちのキャラが勝つという自信をいろんな人達に見せている。真王さんは、そのはつきりとした理由を持っている…だとすれば、今回も勝つかもしいないな…」

ミリア「んー…まだわからないと言っておくけど、どうして誰も彼もが神レベルなんだろうね？」

俺「何があれほどの神や超人を生み出しているのか……知りたくてたまりませんね」

ラムザ「とにかく、またすごいものを見せてくれるだろうから、楽しみにしよう」

質問

レーティアへ

「続き。正義の『暴走』について何か」

勇華へ

「最強とは？」

俺「ではまた」

レーティア「…そんな物、正義ではない…！」



マリオ「ある意味同感だな…」

勇華「さあ？」

真王「とぼけた感じにするな」

ルイージ「…『なめ猫』さん、廊下に立ってなさい」

マリオ「次はペンネーム『月光閃火』だぞ。『ども』：月光閃火だ。

しかし…レジィ、もっと活躍して欲しいな…」。

輝刃「…アイツの場合、シリアスで良いとこ見せないと難しそうだな…(汗)。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・ジャンヌに質問…もし新八にコスプレをさせるなら、どんな格好にさせる？ちなみに、男性モノ限定でな。

うん…やっぱり、中の人繋がりでVガ ダムの『ウ ソ・エイ  
ン』の格好が良いんじゃないかね？次は俺からだ。

2・山崎に質問…今後やってみたいコスプレってある？出来ればテ  
プリ系以外で…。

輝刃「確かに、山崎のコスプレって大概テ プリ系が主だっている  
からな…。」

うん、たまには別のも良いんじゃないかと思ってね。あ…ちなみに、  
レジィのイメージC/Vについての余談だけど…俺的には『谷山紀章』

さんか『小野坂昌也』さんかな。どっちもシリアス・ギャグ両方イけるし…。』じゃあ順番に答えるぞ」

ジャンヌ「ソウルキャリバーの侍の人のコスプレだよ」

山崎「あれ以外いらないます」

マリオ「即答だな…；『月光閃火』。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『マインドスイーパー』さんだ。『ヴァーラガルザさんのキャラ普通のキャラから全能クラスのキャラまでそろい踏みですね。

質問

銀さんへ

この中で万事屋に来て欲しくない人は？

- ・阿部高和
- ・カービィ
- ・最強さん』」

銀時「カービィ以外で！！」

真王「だな。『マインドスイーパー』さん。廊下に立ってなさい」

マリオ「最後だな。ペンネーム『ウインド』さんだ。『ウインド』ふっやつと熱から解放された」

リア「熱にやられるとはな」

ウインド「久々だったから油断してた。しかし遂に始まったなパーティーが」

リア「セレス達の活躍を期待するか」

ウインド「質問いくか。銀時に。今の実力で高杉に勝てるか？」

リア「真王さんに。エール、コヨリの力とメアの狂気が出る場面は

考えてるのか？後リアの能力のリクエストをお願いします」

リア「リクエストする必要あるのか？」

ウインド「考えてるが思い付かない」

リア「そう」

ウインド「質問は終わりだが管理局の上層部は屑の中の屑だな」

リア「正義など所詮は人間が作り出した幻だ。それもわからない奴らが正義を語るな」

ウインド「まあセレス達を怒らせたらあいつらの運命は決まってる。気にするな」

リア「だな」

ウインド「さて。そろそろ更新してくれ」

リア「そうしてくれ……………ん？」

ウインド「どした？」

リア「……………吸血鬼姉妹がこつち来てる」

ウインド「やべ。最近更新してなかったからばこされる」

リア「……………ちょっと待って」

スタスタ

ウインド「え？」

ドゴオオオオオン！！バゴオオオオオオン！！バキバキ！ザ  
シュ！ベキツ！ドオオオオオオン！！

リア「終わった（返り血がついてる。しかも無傷）」

ウインド「ああありががととうございませす！！！（怯）『』」

銀時「もし高杉が俺と同じことをしようとしてたら使つかもしれねえな」

真王「その辺は考え中。『ウインド』さん。廊下に立ってなさい」

マリオ「んじゃ次回もまた会おうぜ。ってかアシスタントは別になるがな」

第九十八訓：双六でも一筋縄ではいかない（後書き）

真王「パーティはまだまだ続け！」

マリオ「次回！『エリアには危険なイベントもある』テイクオフだ！」

くつぶやき

真王「ヴァーラガルザさん、投稿キャラを悪く使ってすみません」

第九十九訓：エリアには危険なイベントもある（前書き）

真王「リリ銀パーティー二回目！」

邪王「まだ初番だぞ？」

## 第九十九訓：エリアには危険なイベントもある

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム27

剣聖チーム27

スマブラハーツチーム30

学園チーム44

プリティレディーズチーム39

女神チーム48

とある転生チーム38

狂乱チーム29

メテンスナイトチーム36

ドラゴンネイルチーム42

リリカル仮面ライダーチーム47

真選組チーム35

異界戦士チーム45

リリカル銀魂チーム36

女神チームトップ。

現在3ターン目

次のターン・ヒーローズチーム

シュンツ！

邪王が7人の人、前回捕まえたカインやイシユタル達だ。

真王「遅いぞ、時間かかったんじゃないか？」

邪王「やっぱそうか？他にもやってきた馬鹿共もいたが、俺様の部下が任せている。まあ悪党3人は危険を察知してすでに逃げたがな。お、来たか」

邪王兵「ツレテキタ」

レーヴェ「何で俺だけ現行犯逮捕みたいなのわけ？」

邪王兵はレーヴェを連行される様な感じで手錠をかけられている。

ローグ（討伐対象のレーヴェ！こんなところに会えるなんて…。っ  
ていうか俺動けねえ…）

連れてきたレーヴェを見てローグは驚く。

邪王「それで、勝負はどうなってるんだ？」

真王「まだ始まったばかりだ。観とけよ」

ヒーローズターン

相川「私の番よ」

相川がブロックを叩き、3をだす。

その先はボーナスマス。

統夜「よっし！ボーナスゲットだぜ！」

シャル「ポケモン持ってんの？」

達哉「いや違うから……」

シャルのポケに達哉が突っ込む。

そしてモニターが現れた。

『近道土管を見つけたので25マス進む』

相川「やったー!!!」

統夜「リード取ったぜ!!!」

喜ぶヒーローズチーム。

25マス進むと周りが森の中になった。

真王「まずはヒーローズチームが森エリアに突入だね」

達哉「エリアには何かあるのか？」

真王「エリアによってここではないイベント、ハプニング、ペナルティがあります。エリアを進めば進むほど難易度が上がりますよ」

統夜「へへッ、ますます面白くなって来たぜ」

統夜は手を合わせて握る。

剣聖ターン

森羅「ならこっちもボーナス狙いだ!」









学園ターン

愛淫「フフ、わたくしこそが恭介さんにふさわし許嫁と確信させますわ！」

そついいながら愛淫はブロックを叩いて5を出す。  
その先はハプニングマス。

恭介「確か相手チームにいいことか悪いことかになるんだつたよな……」

恭介が確認する。  
そしてモニターが現れた。

『先走つた奴にロケットパンチ！』

モニターが出た瞬間ロケットパンチが飛んでいった。  
狙われた先は剣聖チーム。

森羅「げっ！」

さくら「当たつたら戻されちゃつよー！」  
レイン「くっ！仕方ねえな」

剣聖チームのレイン、咲夜、森羅が前へ出て、ロケットパンチを壊そうとするが、

真王「おい、手え出したら失格決定だからな」

ドガーーン!!!

剣聖チーム「ぎゃああああああああああ!!!」

真王の一言にピタリと動きを止めてしまい、直撃を受けてしまった。そして今いたマスから5マス後ろに下がった。

マリオ「まあ壊そうとすれば酷い目に会うのは目に見えるからな…」  
「  
クツパ「我が輩はもう懲りたぞ…」

遠い目をするクツパ。

実は壊そうとして酷い目にあつた経験があるらしい(漫画談)。

プリティレディズターン

タバネ「よし、私の番だよ〜!」

タバネはブロックを叩き、8を出す。

進んだマスにはシルクハットと?マークのマスだ。

真王「それはクイズマス。私の出題する問題に答えられたら進める  
ぜ」

タバネ「よし、タバネちゃん頑張っちゃうぞ〜!」

ヤル気あるのか緩いのかどっちか分からないテンションだ。  
そしてモニターが現れた。

『妖魔夜行』

この名前にイメージできる東方キャラは？」

タバネ「ルーミアちゃん！」

真王「正解だ」

タバネは即答して正解した。  
そして5マス先へ進んだ。

女神ターン

ノワール「さて、次は私達ね」

ブロックを叩き、5を出す。

キノコマークのマスだ。

真王「アイテムマスだね？私の考えた物をクリアしたら3つのうち好きなアイテムを差し上げますよ」

真王が説明したあとモニターが現れた。

『ダブルダイズ：バトル』

ダッシュラン：クイズ

アオナレー：バトル』

ノワール「うん、じゃあダブルダイズの方ね」

真王「なら、バトルの準備を、対戦相手はこれだ！」

『氷の精霊』

チルノ（参加3人限定）『

チルノ「あたいうってば最強ね！」

水色の服と髪に氷の羽を持つ少女・チルノが現れた。

ノワール「どうする？」

ブラン「私が出る……」

ラム「ルウィーメンバーが出ちゃうよ！」

ロム「（こくこく）」

対戦するのはブラン、ラム、ロムのルウィーメンバーだった。

真王「では…試合開始!!」

ブラン「叩き潰す」

ブンッ!

先手にブランがハンマーを振るが、チルノは簡単にかわす。

チルノ「今度はこっちだ!アイシクルフォール!(EASY)」

チルノは氷のつぶてをブラン達に発射する。

ロム「ロムちゃんバリアー」





神はブロックを叩き7を出した。  
ポーナスマスである。

神「どんなポーナスが貰えるのかな？」

ワクワクしているとモニターが現れた。

『道の途中でアイテム2つ手に入れた』

目の前に虹色の？ブロックと3個のサイコロブロックがあった。

真王「お、イレカエールとトリプルダイズの2つか」

グレイ「ダイズの方は分かるがこいつはなんだ？」

グレイはイレカエールを指差す。

真王「イレカエール、マリパでいうワープブロックだ。相手チームと入れ替わることが出来るぞ。ただし、どのチームになるかなんてわからないがな」  
レヴェツカ「おもしろいところやな」

狂乱ターン

はやて「うちらも負けんぞ！」

はやてはブロックを叩いて9を出す。

・・・また邪王マス。

はやて「なんでやアアアアアアアアあああああ……！」

はやては絶叫した。

邪王「そんなことしても始まったぜ？ホレ」

邪王の言う通り、すでにルーレットは回っている。

はやて「ああもうどうにでもなれー！！」

やけくそで押した。

そしてモニターが現れた。

『邪王から100万円ゲット』

邪王「……………」

狂乱チーム「よっしゃアアアアアアアアアア！！！！！！」

まさかのお題に邪王は黙りこみ狂乱チームは大喜び。  
他のチームは羨ましそうだ。

ヴィータ「さあ出してもらっぞ」

シグナム「欲深くはないが、出した方がいい」

邪王「……………」

邪王はまだ黙りこくっている。  
そして、

邪王「……………じゃあな」

ピュンッ！

邪王は逃げだした。

狂乱チーム「あー！！逃げたあー！！！」

いいものを選ぶと邪王はそれを渡さず逃げるらしい。(クッパマス  
同様)

メテンズナイトターン

ガレーナ「さて、どんなものが出るのやら」

ガレーナはブロックを叩いて3を出す。  
バトルマスだ。

ガレーナ「これはちょうどいい！」

ガレーナは嬉しそうだ。

そしてモニターが現れる。

『史上最悪のサイヤ人

ブロリー(スーパーサイヤ人化)』

そしてすでにサイヤ人化したブロリーが現れた。

ブロリー「カカロットオ……」

何やらガレーナをカカロットと勘違いしているらしい。

ガレーナ「余はガレーナじゃ。しかしこれだけの気を放てるとは、とても戦いがいがある」

ガレーナはニイイとわらって覇気を放つ。

ブロリー「!?……貴様、これだけの気を放つとは……」

ガレーナ「戦記姫、ガレーナ、参るぞ!!」

ガレーナが一瞬消えた後ブロリーに一撃を与える。

ブロリー「ゴアハア!!」

たった一撃で大きく吹っ飛んだブロリー。

ガレーナ「……なんだ?この程度か?……はあ、いい相手だと思っただが、飛んだ見込み違いだったとはなあ!」

ガレーナから超膨大な魔力が放出させている。

参加メンバーや観客達は後退りする。

レイン「な、なんだ!?!」

統夜「おいおい何つつう魔力だ……。いや魔力だけじゃねえ。もっとこ  
う何かを威圧する力が働いている様な……」

真王「覇気の一つ。『武装色の覇気』、身に纏う覇気のが武器となつてはじいたり破壊したりできる」



ただそれ以外は驚かすにはいられない。

銀時「待て待て待て待てー！！！！なんだよ！闇炎纏ヤミホムラマトインシガレーナいし竜リウって！めちゃくちゃかつこいいけどめっちゃチートなんですけどお！！？」

レオン「私もガレーナも他の奴らとは違っていろいろ訓練してきたからな。マグマの上を走るとかトラップだらけの城を一人で攻略とか猛獣の島で一人修行をしたな」

新八「それ修行という名の拷問じゃん！！」

ジャンヌ「イヤイヤ、新八君、普通の修行じゃ納得いかないのよあいつら」

新八が突っ込むがジャンヌが補足を入れる。

真王「（将来大物になれそうだな……。それに極神10傑集驚いてらあ）勝利したみたいなので10マス進みますね」

真王はにやにや笑いながら不法侵入した奴らを見るのであった。

ドラゴンネイルターン

真王竜「竜か……。もしあいつが仲間になるなら闇帝竜としようか？」

光翔竜「あゝ、確かにそんな雰囲気がありますね……」

黒鎌竜「我々の5本指に入りそうだしな」

白天竜「でも彼女がすんなり入ってくれると思う？」

氷刃竜「まず無理だろうね」

魔炎竜「いっそのことロストロギアでも使っちゃったらどうだ？」

ガレーナ「余はそっちに入る気なんてないぞ？」  
ドラゴンネイルチーム「オオウ！！」

陰でひそひそ話をしているとガレーナがわってきてびっくりする。

夜帝竜「テメエが強いのは良く分かったぜ。あたしと一戦交えねえか？」

ガレーナ「余に挑戦するか？面白い」

一足触発の雰囲気になる。

真王「おいこら、その時はデュエルマスでやっつけ」

だが真王によって止められた。

2人は名残惜しそうな顔をした。

光翔竜「暴れられたらかないませんよねっ」と

光翔竜はそう思いながらブロックを叩く。

出た目は7でハプニングマス。

そしてモニターが現れた。

『真選組に木の実が降ってきた』

ゴンッ！

近藤「イテッ！」

近藤は何か頭にあたって押さえる。

拾うと何かの木の实だった。

なぜか導火線が付いて…。

ドガーーーーン!!!!

真選組チーム「ああああああああああああああああああ!!!」

爆発した。

銀時「ちよつと待てエエエエエエエえ!!!!」

フェイト「木の実が爆発したよ!!!」

真王「爆弾の実、木の実そっくりだが爆弾である。それを受けた真選組チームは一回休み」

ティアナ「説明口調で最低だこの作者!」

真王「なんか言ったか?」

ティアナ「イッテマセン」

銀時達は爆発したことに驚き、真王が説明して、ティアナがツッコミ入れるが真王に睨まれた。

リリカルライダーターン

リリス「次は私達の番です!」

リリスはブロックを叩いて10を出す。  
ノーマルマスだ。

ソラ「ま、そうだろうな」



異界戦士ターン

コヨリ「出番が来たよ」

コヨリはブロックを叩いて10を出す。  
何とペナルティマス。

コヨリ「あゝ！」

『ダークマター』

ペチヤ

コヨリ「ギャあああああああああああ！！！！」

ダークマターを顔にぶつけられたコヨリはもたえ苦しんでいる。

エール「コヨリイイイイ！！！！しっかりしろオオオオオオオ！！！！」

メア（あれを食べたらいけない予感がする…）

勇華（まずそうねあれ…）

エールは必死で看護し、メアや勇華たちは少し汗を流す。

リリカル銀魂ターン

銀時「よし、今度は俺達の番だ」  
なのは「じゃあ私が叩くよ」

なのははブロックを叩いて5を出す。  
それは！マークのマスだ。

真王「ん？イベントマスだね。エリア特有のイベントが発生していいことになるか悪いことになるか…」

新八「不吉なこと言うのやめてくれませんか!?!」

新八が冷や汗流して突っ込む。  
そしてモニターが出る。

『頭上注意』

ドガッ！ゴンッ！ドガッ！ペタッ！ガンッ！ドガッ！ドガッ！

銀時「イデッ！」

新八「いて！」

神楽「ウゴッ！」

なのは「にゃ!?!」

フェイト「きゃ！」

スバル「あいた！」

ティアナ「きゃあ！」

頭上からアイテムと木の実が降ってきた。  
アイテムは新八となのはとフェイトだが、木の実は銀時、神楽、スバル、ティアナだ。

なのは「イベントってこんなのがあるの？」  
フェイト「まあとりあえずこれらはもらっとこうよ」

リリカル銀魂チームは『ダブルダイズ』『ピッタリストップ』『バトルベル』をてにいれた。

銀時「まあパーティーは始まったばかりだ。逆転狙ってやるぜ！」

銀時達は気合を入れた。

真王「気合十分だね」

邪王「そうだな。で？中にいる奴らは？」

真王「探索中か戦闘始まつちやつてるよ」

邪王「あいつらと勝てると思うか？」

真王「さあな。・・・外のもまだ奴らがいるが……」

邪王「まいいさ。『夢の創造者』ドリームクリエイターのお前と『混沌の破壊者』カオスブレイカーの俺なら  
良きシナリオが完成するだろ？」

真王「その通り。極神だか何だか知らん奴に三流のシナリオは向か  
ん」

邪王「ストーリーは…もう後半へ向かっていくかもな…」

真王「さて、私が描いたシナリオ通りに進めばいいのだが…」

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

統夜「よう！ヒーローズチームの統夜だ！」

達哉「その親友達だぜ！」

相川「相川咲夜です」

銀八「へい、んじゃ行くぜ。ペンネーム『烈火竜』さんからの質問だ。『質問

真王さんの好きなアニメまたはゲームは何ですか？』」

真王「アニメでは銀魂となのはと他多数：ゲームではネプテューヌ、デイスガイア、マリオ、カービィ、その他いろいろだな。『烈火竜』さん。廊下に立ってなさい」

統夜「んじゃ次はペンネーム『フリーダム』さんだ。『Sフリーダム』初代マリオパーティのミニゲームが二つ出てきたな」

ジャスティス「基本あの二つは、クリア出来るよな」

Sフリーダム「マリオパーティ全種類持つてるから、大体どういうミニゲームかわかる」

デスティニー「ってか最初の「ファは嫌い」と「途中でやめたら首を切る」って、漫画のマリオにあったネタだった気がする…」

レジェンド「正式には、『スーパーマリオくん22』の特別編のネタだな…」

アカツキ「他にも結構エグイ物や危ない物もあったが、質問に行くぜ」

リリ魂チームに

追いかけられた後どうなった？（精神的な事もあるので、無理に答えなくてもいいですよ）

全員に

ペナルティでキツイのは、どっち？

A・肉体的

B・精神的

デスティニー「全員無事にパーティを終わらせる事出来るのかな…」

更新楽しみにしてます』で？作者どうなんだ？」

真王「彼らは死ぬかと思ったと言いましたよ。違う意味で…」

統夜、達哉、相川「……………」

真王「特にきついのは精神です。くさは臭いですし…」

統夜「関係なくね!? 『フリーダム』、廊下に立ってくれ」

相川「えっと、次はペンネーム『ケン』さんよ。『樹』ギヤアー  
ーハツハツハツハッ! 統夜に遊輔、達哉……ざまあみる!」

妬みからかペナルティマスに止まり丸焼けになった統夜達を見て大笑いしていた。

零斗「テメエは退場してろ!」

零斗の蹴りで樹をお星様にしていた。

零斗「全く……」

その後統夜とダイチもやって来た。

統夜「あれは痛かった……」

零斗「ご愁傷さま……もし俺がネプテューヌ達と組んだらチーム・  
マイティアテムが出来たかもな」

統夜「タコに襲われた女性陣……ご愁傷様です」

ダイチ「あられもない姿を見せてありがとうございましたあー  
ー! ! ! ! !」

ダイチの言葉を聞いた統夜と零斗は青ざめた。

統夜「お前・・・あの中にユウカさんがいるという事は・・・どんな災いがやってくるか知らない訳じゃないよね？」

零斗「哀れなり・・・」

ダイチ「あっ・・・」

統夜「といえずご愁傷さま。ユウカさんへ質問。とあるスケベ馬鹿がタコにあられもない姿をされて喜んでいました。どうしますか？」

ダイチ「お前・・・何とんでもない質問送ってるんだよ！！そこは助けるよ！」

統夜「や・・・どの道さ・・・制裁されるのが目に見えてるんだ・・・どう逃げる気だ？」

ちよつとしたお願いですが・・・僕の作品で出てくるキャラをバトルマスに入りたいのですがよろしいでしょうか？もし許可が取ればメッセージで送ります。

統夜「何か送るの？」

まあね。まだ先になると思うけど・・・ちよつとね・・・

銀さんラバースに右手に木刀を持ち微笑んでいるポーズをした銀時人形をあげます。頭にあるボタンを押せばそれぞれの名前を呼びこ

う言います。

銀時人形『

・・・お前を愛している』

と言います。次回も楽しみにしています。』・・・えっとユウカさん…?」

ユウカ「まずはマグマに放りこむわ」

統夜「マグマは駄目だろオオおお!!?!?いや分かるけども!」

達哉「そうだぜ!分かるけども!」

相川「私もです!確かに分かりますけど。『ケン』さん、廊下に立つてなさい」

達哉「よし次はペンネーム『鳴神 ソラ』だ。『マリオ』いや、まさかな…」

クツパ「うむ…」

ルイージ「だね…」

ヨッシー「大変ですね…」

ムッツリーニ「……………」

アंक「俺たちの時はどうなるのやら…」

カザリ「そうだね…」



ウヴァ「まあ、思いつきりやるだけだ」

ガメル「質問『ミニゲームは主にマリオパーティのを出すの?』」

ネス「ミニゲームをやった人達に質問『ミニゲームをした感想は』」

「

フォックス「質問『罰ゲームはマリオくんのとかのをメインとしたのやちよつと変えたのにしてるのか?』」

次回を楽しみにしてます 『真王は主にそれを出すらしいぞ』

さくら「お尻が割れそうだった」

アリス「意外と楽勝だったな...」

真王「最後のは教えません。『鳴神 ソラ』さん。ろつかにたつてなさい」

銀八「次だ。ペンネーム『月光閃火』さんだ。『ども...月光閃火だ。』

しかし...襲撃してきた奴らも災難だよな...。だって相手がああ『邪王』だもん。

輝刃「だな...。元が真王だから、ギャグ物の『お約束』が混じる事が目に見える...。(汗)。あ...質問...行くぞ?まずは俺からだ。」

1. 山崎に質問...原作銀魂で張り込みの話があった時にずいぶんと“あんばん”で病んだ思いしたが、他の食べ物でもあのホラーな呻



ラムザ「……………すまない、はっきり言えば、ここに出た10の神何とかのほとんどは、中身が薄い強さだったか……」

俺「言いすぎですよラムザ。あれは肝心ものが抜けてたんです。ラムザが思っただけのもの……ね」

ラルム「ネプちゃんいわく、フラグの理由……だね?」

俺「はい、多分ヴァーラガルザさんや真王さんもわかってるはず……そう信じてますが……」

ラムザ「では質問」

アイエフへ

銀さん達のメアド登録とかってしてるの?

アリアへ

ねぶねぶの部屋へスネーキングしてるね?その様子だとW

ドクターバイルから一言

「正義だと?戯れ言だ!」

ラムザ「バイルさんは帰ってくれ……」

俺「ではまた」

以下おまけ

カイト「なあミリア……俺、向こうでまたあの時と同じこととしてしま  
う気がする……今のままじゃ……」

ミリア「……大丈夫だよ。そうなりそうになったら、今度は……ボクが  
止めてあげるから……」

カイト「……ありがとな、ミリア」『では彼女等の答え』

アイエフ「銀時ケータイ持ってないでしょ？」

アリア「いつでもオーケイです！」

邪王「いや何がだよ？『なめ猫』廊下に立て」

統夜「次だ。ペンネーム『武田軍兵士 清坂 剣麻』だぜ。『美己』  
「ミサカから皆さんに質問があります。美堂蛮の邪眼による一分  
間の幻覚を喰らった場合、次の内どのの幻覚がイヤですか」とミサ  
カは問います」

- 1・腐留苦去主を無限ループで食わされる。
- 2・大量の害虫が群がってくる。
- 3・自分の体がだんだん崩れ落ちていく。
- 4・大量の悪霊や亡霊、死霊に襲われる（倒しても倒しても這い上  
がってくる）

美己「では実際どうなるかやってもらいましょう」とミサカは合図  
を送ります」

美堂蛮「おうよ！ギャラは貰ってるからとびっきりの見してや  
るぜ！」（邪眼発動）

一分後、

蛮「ジャスト一分だ！悪夢ゆめは見れたかよ？」『か、体が崩れるう  
ウウウウウ！！！』（悪夢中）」

達哉「ギヤアアアアアアアアアア！！フルコースを俺の中に入れる  
なああああ！！！！」（悪夢中）」

相川「む、ムカデが体に中に！！？た、助けて！！」（悪夢中）」

真王「かかっているな…（余所見したためかかかってない）。『武田軍  
兵士 清坂 剣麻』、変な悪夢見せるな」

真王はとりあえず3人を元に戻した。

相川「ゼエゼエ、ゴホン、次はペンネーム『黒龍』さんよ。『黒龍  
「アリス中々やりますね」

アリス「フツ…」

リリス「出番は少ないですけど、他のチームみたく酷い目に遭って  
いないのが、何よりですね…（苦笑）」

ソラ「これからどうなるか分からないけどな」

銀時「ま順調に進んでるから良いじゃねえか」

黒龍「それにしても、誰が罰ゲームを受けるんでしょうね？」

銀時「黒神の所みたいに負けた奴は全員受けるのよりはマシだ」

ソラ「同感だ」

黒龍「ははは……じゃあ質問します」

1・フェイトに質問。今回の長編で出番があり、しかも銀時と一緒に  
なれた言について一言。

2・真王さんはマリオパーティシリーズは全部持っているんですか？



白騎士君「今回はこれにて」

ラバース「ギンサーーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！」

真王「次」

統夜「それだけ!？」

フェイト「えつと…凄いなのかな?」

統夜（別世界なのに自覚してねえ!）

銀時「シラネえのか?かめはめ波はここからこうやって…」

真王「カット、『白騎士君』廊下に立ってなさい」

達哉「…次だ。ペンネーム『ウインド』さんだぞ。『ウインド

「ふふふ……」

リア「何してる?」

ウインド「いやな。パーティーにある仕掛けを送ってるのさ」

リア「?何の?」

ウインド「ハプニングマスに男の娘限定コスプレを「明らかにあい  
つらにだな」H A H A H A!バレたか」

リア「阻止する」

ウインド「無駄だ。もう送った。それにな………いつも負けるわけ  
にはいかないんだよオオオオオオオオ!!!(スサノオ)」

リア「ほう?いいだろう(ダブルオーライザー)」

ウインド「スサノオ!いざ尋常に」

リア「ダブルオーライザー。目標を」

ウインド「勝負!」





第九十九訓：エリアには危険なイベントもある（後書き）

真王「まだ始まったばかりだぞ」

統夜「次回『町はいつも安全とは限らない』テイクオフだ」

第百訓：町はいつも安全とは限らない（前書き）

真王「パーティ3回目」

邪王「行くぜ！」

## 第百訓：町はいつも安全とは限らない

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム 125

剣聖チーム 111

スマブラハーツチーム 104

学園チーム 119

プリティレディズチーム 93

女神チーム 90

とある転生チーム 89

狂乱チーム 85

メテンスナイトチーム 93

ドラゴンネイルチーム 92

リリカル仮面ライダーチーム 96

真選組チーム 83

異界戦士チーム 98

リリカル銀魂チーム 94

ヒーローズチーム トップ。

現在7ターン目

次のターン・プリティレディズチーム

シュン！

邪王「ついたぞ」

邪王はユリス、レイヴィス、ベアトリス、ラギーシス（縛られている）、スネーカー、イヴ、レイシア、リルシオンを案内した。

ただ彼らはいつまでもにらみ合っている。

そりゃ敵同士だから。

真王「これで侵入者どもは集まったか？」

邪王「いや、レイヴィス曰くあの変態鬼畜の神がまだだと」

真王「ふ〜ん、（試合に出るんじゃないか？）」

プリティレディズターン

リアス「さて、私の番ね」

リアスはブロックを叩いて9を出す。

ペナルティマスだ。

リアス「ガツデムシット！」

リアスはショックを受けた。

そしてモニターが現れる。

『おっぱい揉み魔登場』

その後ストパンの芳佳そっくりの少女が現れた。

リアス「げっ!? ヨシカ!」

銀時「え? 知り合い?」

タバネ「ギルド仲間だよ。自分の胸が小さいことにコンプレックスでいつも他人のおっぱいを揉んでくるの」

リアスが少女を見て後ずさり、タバネが少女のことを説明。

確かに原作と同じくらいペツタンコだ。

ヨシカ「作者さんから許可をもらってリアスさんのを一日中揉み放題出来るんですよ? っていうかやらせてください」

リアス「誰がそんな… ていきなりやるんじゃない! ちよ… ダメ! そこは駄目だつてば…!!」

ヨシカ「リアスさん! リアスさ…ん!!」

芳香はリアスの胸を揉む揉む揉む、リアスは顔を赤くさせて悶える。

銀時「また変態が現れたよ! しかも揉み魔かよ!」

タバネ「芳香ちゃんは誰かれ構わず揉む癖があるからね。ついた二つ名が『おっぱいマツサージャー』だよ」

???「これはまた面白い者がいっぱいだね」

タバネ「ふえ?」

突然説明するタバネの背後から誰かがタバネの胸を鷲掴みにする。

その人物は真紅のロングで右目が赤、左目が蒼のオッドアイ、そして黒のドレスを着た女性・マダム・アンバリーだ。

タバネ「わあ、アンバリー久しぶり。あのとき以来かな？」  
アンバリー「久しぶりだよ。うんタバネちゃん分補給」

タバネは慌てるそぶりを見せず懐かしそうに会話する。

ちなみのあの時とは『大乱闘スマッシュハーツブラザーズ出張版』  
の『リリカル銀魂 Strikers』銀女神鎮魂歌 - 第  
別訓パート43：悪の科学者つて以外と生き延びやすい』からのこ  
と。

タバネ「それにしてもくすぐったいよ」

アンバリー「フフフ、今度は絶対に負けないロボを連れてきたから  
ね」

タバネ「む？私だつて隠れて凄いロボット作つたんだもん！」

Drドーン「なにお！俺のロボの方が一番である」

レーティア「そこ、何の話し合いをしてんの！」

タバネとアンバリーと便乗してきたドーンが争い合う。

そこにレーティアが突っ込む。

真王「はいはい、次行くよ」

女神ターン

ロム「私が。叩く…」

ロムはブロックを叩く……こうとして何か思いついた。

ロム「…これ使おう」

ロムは前回手に入れたダブルダイズを使った。  
するとサイコロブロックが赤色になった。

真王「ダブルダイズを使ったね？サイコロブロックを2回叩いてください」

ロムはいわれたとおりに叩く。  
出た目は7と10、つまり17マス移動できる。  
その先はアイテムマス。

真王「アイテムマスだね。好きなアイテムを選んでください」

「トリプルダイズ、ピッタリスイッチ、お助けベル：ミニゲーム  
ピッタリスイッチ：バトル  
デュエルベル：デュエル」

ロム「：ミニゲーム」

ロムが簡単そうに見えた方を選んだ。

「射ぬけ！アイテム風船割り！」

モニターがあらわれたあとタワーと雲の上のステージになった。  
そして空中にアイテムの入った風船がふわふわと浮いている。

真王「では誰が風船に捕まっていくなか決めてください」

と真王は一つの風船と弓矢を渡す。  
女神チームは相談する。

そして決まったのは、

ユニ「あたしが行くわ」

ユニだ。

真王はユニの体に風船をくくり、弓矢を持たせて空中に浮かせる。

真王「さて、どの風船を割る？失敗したら手に入りませんがね」  
ユニ「分かってるわよ……………そこ！」

ユニは構えて弓を発射した。

パンッ！

トリプルダイズの入った風船が割れた。

真王「おめでとう、トリプルダイズのゲットです」  
ノワール「ナイスよユニ！」

ノワールに褒められて少し嬉しそうなユニであった。

とある転生ターン

リオン「僕らの番だね」  
シヤリアローゼ「アイテムは使わないの？」  
リオン「取っておいた方が役立つかと思って」

リオンはそっぴいながらブロックを叩いて10を出す。





フェイトはボロ着いた状態で勝ち取った。

真王「フェイトは『銀時ラブ変態』の称号を手に入れた」

ズデッ！

真王が不名誉な称号を言われてずっとこけるフェイト。

銀時「フェイト…そしてお前ら…そんな趣味が…」

フェイト「ち、違うよ銀時！」

なのは「銀さん信じちゃだめだよ…！」

シグナム「我々は一切そんな趣味はない！」

アルフ「ただその場のノリというか…」

リインフォース「決して下心などは…」

猿飛「じゃあ銀さんのトランクスは私が…」

ラバーズ「テメエは持つて行くんじゃない…！」

ジト眼でにらむ銀時にラバーズは否定するが、猿飛だけは真症の変態だった。

狂乱ターン

ヴィータ「よし、あたしの番だぜ！」

ヴィータはブロックを叩いて5を出す。

ポーナスマスだ。

ヴィータ「よっしやああ!!」  
はやて「よっしやっただヴィータ!」

ヴィータとはやてと狂乱チームは喜んだ。  
モニターが現れる。

『鳥さんからのプレゼント』

するとコウノトリが袋を持ってやってきた。  
中身はトリプルダイズだった。

はやて「なんやこれ?これだけかいな…」  
桂「何を言う。このアイテムがあれば逆転のチャンスなのだぞ八神殿」

はやてはぬか喜びするが桂が押さえる。

メテンスナイトターン

レオン「さて、どんなものを出してくれるのか?」

レオンはブロックを叩いて9を出す。  
それはイベントマスだ。

レオン「どんなイベントだ?」

モニターが現れた。

『アイテム錬金術師・がすと』

「????」その方々々、ちょっと寄ってみるですの〜」

と声が聞こえた方へ向くとウサギ?の着ぐるミ?に分厚い手袋の少女がいた。

チフユ「お前は?」

がすと「がすとですの」

ネプギア「がすとさん!お久しぶりです!」

がすと「ん?わく、皆さんお久しぶりですの〜!」

どうやらネプテューヌ達は彼女と知り合いらしい。

なのは「誰なの?」

ネプテューヌ「がすとちゃん、ああい見えて錬金術師だって」

ジャンヌ「え?魔方阵出して何か生やす奴?」

真王「そつちじゃねえよ。アイテムを合成して作る方だよ」

ネプテューヌががすととの紹介をし、ジャンヌが錬金術について何か勘違いをして真王が訂正させる。

がすと「え〜と、ダブルタイス調合Aとトリプルタイス調合Bを組み合わせせて…」

するとがすとは2つのアイテムをつぼに入れて調合を始めた。

ボンッ!

がすと「完成ですの〜」

と5つの白銀色のサイコロブロックになった。

ギルシア「おお、スツゲエアイテムじゃねえか」

ギルシアはそういいながら取るうとするとがすとはサッとしまつ。

がすと「先に料金支払うですの。はいこれ」

がすとは値段の書かれた電卓をわたす。

カイム「高エエエエエエエエエエ!!!」

ギルシア「んあだこりゃ!?!?0いくつあるんだよ!」

それはあまりにも高額だった。

がすと「これだけ凄いものですから当然ですの」

女神組とメーカー組「そこだけは相変わらずだね(ですね)(ね)

…」

がすとの金がめつい性格を知っている彼女たちなのであった。

チフユ「これで足りるか?」

とチフユがトランクケースを一つ出した。

なかは1万の札束いっぱい。

がすと「え?」

がすと含め他の人(メテンスギルドは除く)も驚く。

銀時「ちよつと待て待て待て。その大金なに？」

チフユ「ちよつと社員<sup>バカ</sup>どもに頼んどいたらな」

銀時「イヤイヤイヤそうじゃなくて、お前一体どうしたの？」

大金を用意できたチフユに銀時が問うと答えた。

チフユ「じつは、社員勧誘という広告を見てな。暇つぶしで入ってみてなんやかんややっていたらいつの間にかその会社の社長になっていた」

なのは「なんやかんやって何！？しかも立った1日で社長ってすごいくない！？」

チフユ「いや、正確には食品、企業等の会社の総社長になっていたということだな」

全員「尚更凄すぎるだろ！！？」

チフユはある意味超人であった。

まあ取り合えず『スペシャルサイズ』を手に入れた。

がすとは「どうせならがすとサイズにするのですの」と言ってきたが真王が否定した。

ドラゴンネイルターン

夜帝竜「さあ、そろそろ出番だな」

真王竜「もう出番だよ」

夜帝竜はブロックを叩いて10を出す。

夜帝竜「さつきと同じか」

イベントマスを見て言う夜帝竜。  
そしてモニターが現れた。

『車に轢かれた』

キキキーーーーー!!!ドガッ!

夜帝竜「オゴアッ!!!」

夜帝竜が車にひかれた。

ドラゴンネイルチーム「夜帝竜ウウウウウウウウウウウウウ  
!!!」

ドラゴンネイルチームはまるでドラマのようにな(ぶぞけて)演じる。

銀時「作者、早く進めろ」

・・・しかたない。分かったよ

リリカルライダーターン

アリア「わたしのターン」

アリアはブロックを叩いて9を出す。  
何とそれは4人のプレイヤーが書かれたマスだ。

真王「それはパーティマス。チーム同士の戦いが始まりますぜ？」  
邪王「まずはこいつな」

邪王はモニターを出した。

『4人対戦：生き残れ！ぷかぷかアイランド』

ネプテューヌVSジャンヌVS咲夜VSアリア』

ネプテューヌ「ご指名付きだね」

ジャンヌ「へへ、負けてられないね」

咲夜「ユークくん、私頑張るよ」

アリア「にやへ、頑張る…」

4人はやる気満々だ。

真王「そんじゃ頑張ってください」

真王はパチンと指を鳴らすとステージが変わった。

ぐらぐらと揺れる浮島がポツンとあり、4人はそこにいる。

ネプテューヌ「おつとつと…」

ジャンヌ「揺れるね」…」

咲夜「落ちたらアウトね」

アリア「…」

ぐらつく浮島にバランスを取る4人。

ドーン！



4人「わっ!？」

突然大砲の音と同時に水しぶきが上がり、浮島が傾く。遠くで船が大砲を撃ったからだ。

真王「落ちないように気をつけるよ」

真王から助言をもらう。

船から発射される大砲からどんどん撃ってきて水しぶきが上がり、その水しぶきから出来る波で浮島が傾いてバランスが崩れやすくなる。

すっ転んだり落ちそうになったり浮島に大砲があたったり衝撃で体がすくんだり……。

やっとのことで時間内に全員耐えた。

真王「おめでとう。4チーム10マス進めるよ」

剣聖チーム、女神チーム、プリティレディズチーム、リリカルライダーチームは10マス進みました。

真選組ターン

土方「山崎、行ってこい」

山崎「ハイ」

山崎はブロックを叩いて4を出す。

ペナルティマスだ。



セレスと女性・イシュタルは離れる。

セレスの近くに体中ボロボロの少女がいた。  
しかも右腕がもげて機械が露出している。

セレス「君は？」

レルシア「わ、私はレルシアです…」

エール「これはひどい…」

勇華「こう言う機械に詳しい人がいれば話は早いけど…」

少女レルシアの状態は深刻だ。

イシュタル「ふん、そんな人物なぞいるわけがあるものか」  
真王「こっちにいるぞ」

イシュタルは否定するが真王がそれを否定。  
その人物とは…

タバネ「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃ〜ん」  
アンバリー「さて、改造されたい子は何処かな？」  
drドーン「君がなのであるか…」

何とマッドトリオだった（笑）。

タバネ「さてさて準備準備」  
アンバリー「ドリルでしょ？ハサミでしょ？メス、クリップ、トン  
カチ、チェーンソー、のこぎり…」  
Drドーン「確か機械用はこちらに…」  
レルシア・イシュタル・エール、コヨリ、メア、セレス、奏（あれ  
？地の文のツツコミは？）



レルシア「いらんわこんなおまけ!!」

???「そうだよ!誰も欲しがらないよ!こんな!」

レルシア「ん?」

レルシアは隣を見た。

外見は男の子に近いがれつきとした少女でレルシアと似た雰囲気がある。

そしてレルシアはこの少女を見て信じられない顔をしていた。

レルシア「・・・エル?」

エル「あ・・・えっと」

イシュタル「む?貴様は妾が破壊したはずの小娘!」

エル「お久しぶりですね。しかし、ドーンさんのおかげで私は生きながらえたのです」

強い目でイシュタルを睨む。

イシュタルは腕を組む。

真王「さて、イシュタルとの対決になったな」

セレス「彼女と戦うのか?」

イシュタル「む?」

セレスが聞くとイシュタルが耳を傾ける。

真王「対決するのはセレス、レルシアとエル。そして助っ人として

彼も連れてきた」

???「うむ、よろしく頼む」

真王の後ろにヴァルバトーゼがいた。

セレス「?・・・間違つてたらごめんだけどもしかしてヴァルバトーゼかい?」

ヴァルバトーゼ「そうだ」

イシュタル「なんと!? 『鮮血の絶対悪』『血染めの恐怖王』あの暴君ヴァルバトーゼか!」

どうやらイシュタルはセレスはヴァルバトーゼを知っているらしい。

ヴァルバトーゼ「貴様はなに者だ?」

イシュタル「妾はイシュタル・ヴァジスゲイド。暴君ヴァルバトーゼ!まさか貴殿のような大物とあいまみえるとは思わなかったが!」

イシュタルは少々興奮状態だ。

ヴァルバトーゼ「イシュタル?さて、聞き覚えがある様な...」

フェンリツヒ「別魔界で魔族の大将をやっていた奴です。その実力は一流魔王5人が出ようが返り討ちにされると言われています」

いつの間にか後ろから現れたフェンリツヒが説明する。

イシュタル「フッフ、まさか魔界の英雄たる存在と対峙することになるとは...」

セレス「いやいや、暴君と共闘とは世の中は広いな...」

セレスはやれやれな感じになる。

イシュタル「暴君ヴァルバトーゼ!貴様を倒せば妾は貴様を超える存在となる!」

ヴァルバトーゼ「いいだろう!俺達の絆と、イワシの力を見せてく

れるわ！」

フェンリツヒ「閣下、イワシは力に入れないでください」

やっぱり根本的にずれているヴァルバトーゼに突っ込むフェンリツヒであった。

・・・次回にバトルシーンを回すのでリリ銀チームのターン。

銀時「そうだよ。出番ないまま終わっちゃ意味ねーだろ」  
なのは「メタはいいとして、いこうか」

銀時はブロックを叩いて8を出す。  
イベントマスだ。

新八「どんなイベントが起こるんでしょうか…」

新八が不安がっているとモニターが現れた。

『バスに轢かれた』

キキーーーーーー!!!ドゴシヤ!

リリカル銀魂チーム「タラバツ！」

リリカル銀魂チームはバスに轢かれた。

ネプテューヌ「銀さ~~~~~ん!!!!!!」

ネプテューヌは叫んだ。

見ている人たちは大丈夫かと不安になった。

真王「さて、他の奴ら出してやるか」

パチン

????「どわああ!!」

真王が指を鳴らすと沢山の人が出てきた。  
ほとんどが邪王が捕まえて得来た人たち。

真王「お初にお目にかかります。私は真王、『ドリームクリエイター夢の創造者』でござ  
います」

ラクージス「へえ」

アギス「クリエイター創造者？何か作れんのか？」

真王「もちろん、たとえばこのドラゴン」

真王はドラゴンを創造した。

真王「さらにホーリーナイトを出し、そしてこのオリハルコンを融  
合させると……」

白い騎士のホーリーナイトを出し、さらに超堅い鉱物のオリハルコ  
ンで融合させる。

そして完成したのは騎士の雰囲気を出すマスタードラゴンナイトに





何と邪王は素手でカインを殴った。

邪王「テメエのふざけた幻想をぶち殺す！無チート・ザ・ゼロに帰る異常」

ジユツ！

カイン「……………ハッ！おれは一体？」

セリア「マスター！」

邪王がいった瞬間カインがドラゴンから（強制的に）人間に戻した。

真王「これが彼有能力、森羅万象を破壊する『混沌カオスプレイヤーの破壊者』」

邪王「表の存在のこいつ（真王）は創造し、裏の俺が破壊する」

真王と邪王を見ている彼らは思った。

勝てる気がしないと…。

真王「ふ、物語は後半に入ったばかり…我が手に書くシナリオは我が創造力によつて動く。テメエらのような三流が勝手なシナリオを変えてもらっちゃ困るな…。チート・ザ・ハード」

チート・ザ・ハード「ハイ、我が主」

真王は真紅のロングのネプテューヌ達の様な守護女神ハートのような雰囲気を出させる女性を呼ぶ。

女性が現れた瞬間カイン達や極神たちの力が大幅に下がった。

真王「暴れ出さないように見張っとけ。さて、みんなのうち誰が優勝するのかな？」

真王はパーティするチーム達を見て言うのだった。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

リオン「はじめまして、リオンです」

シャリアローゼ「シャリアローゼよ」

邪王「俺のお気に入りに奴らだ」

銀八「あっそ。ペンネーム『月光閃火』から行くぞ。『ども…月光閃火だ。』

ふむ…俺はどちらかと言えば『ボーイッシュな娘』とか『ツンデレっ娘』が好みのタイプかな。

輝刃「…しつかり律儀に答えたな…（汗）。あ…質問…行くぞ？ま  
ずは俺からだ。」

1・銀時ラバーズに質問：もし自分の中の人と同じ声の女性キャラ  
が銀時の事を好きになったら、どうする？

うわぁ…何ともハプニングマスに組み込まれそうな質問だなあ…（  
汗）。次は俺からだ。

2・フェイトに質問：ボーカーロイドのコスプレに興味あったりする？

輝刃「…何となくだが、初音ミクとか廻音ルカのコスチュームが合  
いそうだな…（汗）。」

だな…。んでもって、ヴァイスとかグリフィス辺りがKAITOの  
コスチュームとか合いそうだよ…。『えっと…』

銀時ラバーズ「全力で殺す！！」

リオン「物騒なこと言っちゃったよ！！」

フェイト「言えないです（純粹にきつぱり）」

邪王「おいおい…『月光閃火』廊下に立て」

リオン「えっと、次はペンネーム『鳴神 ソラ』さんです。『マリ  
オ』いや〜色々と思ひ出すな」

タレ銀「何で…赤屍さんかな…（涙）」

明久「ドンマイです…」

カザリ「それにしてもチルノ、小さくなってたね」

リュウケンドー「というか元に戻ってたな」

チルノ「くやしいな…」

レヴィ「次はどうなるかな」

ルイージ「質問『エリアのハプニングの元ネタはマリパですか？』」

銀次「なのはちゃん達に質問『赤屍さんを見た感想はどうだった…』」

クツパ「質問なのだ『スバル達は集まった人たちについてどう思うのだ？』」

次回を待っています！『順番に答えるよ。作者はマリパを模しているって』

なのは達「なんか寒気がした…」

邪王「なんせドクタージャツカルだな。次」

スバル「凄い人たちだなあ…」

ティアナ「少し見た目で判断してたみたい…」

エリオ「凄い人たちですね…」

キャラ「わ、私も…」

シヤリアローゼ「ハイじゃあ『鳴神 ソラ』は廊下に立ってなさい。次はペンネーム『なめ猫』よ。『俺』ねぶねぶ達のいないゲームネプテューヌなど…！そんななめ猫な俺らです」

ラムザ「早く余波から抜けなよ…」

俺「勝負はまだまだこれからといった所ですが、同時に真王さんと邪王さんの話も進んでますねえ」

ラルム「今回の結末は…というか、MVPは誰になるんだろうね？」  
ラムザ「銀さん達かなと予想するが…またオリキャラになるんだろうか？」

俺「んー…まだまだわかりません」

質問（運動会ネタ）

ネプテューヌとネプギアへ

「二人一緒でどんな種目に出たい？」

アリアへ

「ネプテューヌに送る応援歌またはエールはどんなのにしたい？」

真邪王（真王さんと邪王さん）へ

「やらせてみたいプログラムってありますか？」

俺「以上」

ラムザ「運動会かあ…運動会といえば、やっぱりあのプログラムかな」

俺「うむ。ブルマはあはあブルマはあはあ……………」

ラムザ「いや違うだろ…」

ラルム「…あきれられても知らないよ?…」

ネプテューヌ「パン喰い競争!」

ネプギア「二人三脚ですね」

アリア「ネプテューヌさんにエールを送るため…チアガールになって全力で応援します!」

真王「こう見えて彼女踊れる経験あるんだもんな。ちなみに私は球入れ」

邪王「障害物競走だぜ?」

シャリアローゼ「そんなわけで『なめ猫』廊下に立ってなさい」

真王「次、ペンネーム『フリーダム』さんの質問だ。『Sフリーダム』アイテムとかもちゃんとあるんだな」

ジャスティス「クツパが逃げる所まで、再現してるしな」

デステイニー「しかし、近藤達もついてねえな…」

レジェンド「確かにな…とりあえず、質問といこう…」

全員に

直接戦いたくないチーム又は人物は?

真王様・邪王様に

今回の参加チームの中で一番弄りがいがありそうなチームは？

アカツキ「何だか色々大変だな」

更新楽しみにしてます」

全員（一部除く）「ユウカノ勇華さん」

真王「超人無敵とドSだからな。後特に」

真王・邪王「真選組がいいな…」

リオン（この人たち実はサド属性！？）

真王「なんか失礼なこと言われたが『フリーダム』さん、廊下に立ってなさい」

銀八「次はペンネーム『支配者』さんだ。『ガレーナ強過ぎ…』  
ブロリーに圧勝なんて本来ならありえませんか？

まあ…質問です

ゲストの皆さんに質問

自分達の中で一番強いのは誰だと思ってますか？

沖田に質問

誰と組んで土方の命を狙いたいですか？（黒笑）



ではこの辺で。』多分みんなはあの神が勇華だと思っな」

沖田「ユウカと土方さんを亡きものにしまさあ」

真王「毎度のパターンだ。『支配者』さん。廊下に立ってなさい」

シャリアローゼ「次、ペンネーム『ウインド』よ。『リア』『ヨリ大丈夫かな……………?」

ウインド「大丈夫じゃね? エールに看病されるなら本望だろ」

リア「そして俺はネロ・アンジエロを倒しました( )」b」

ウインド「書いてて思ったけどチートにも程があるだろ……………」

リア「次はダンテと会っぞ」

ウインド「ネタバレやめれ」

リア「ネタバレ? なにそれおいしいの?」

ウインド(駄目だこの神。なんとかしないと)

リア「質問いくか。勇華に。セレスとの子供は何人ほしい?」

ウインド「真王さんにリクエスト。バトルマスでフランとレミリアって出せますか?」

リア「返答よろしく」

ウインド「もしかしたらリアのプロフィール出すかもしれません」  
」

勇華「何人でも?」

銀八「うわなんかむかつく…。『ウインド』さん。廊下に立ってなさい」

リオン「えつと次はペンネーム『ケン』さんです。『先程バトルマスに入れるキャラをメッセージで送りました。僕の作品で出てくるのはまだ先ですが…」

ダイチ「……………」

ガクガクブルブルと震えている。ユウカの制裁が恐ろしいからだ。

タイガ「見つけたぞお！！リュウ！！」

ダイチ「げっ！！タイガ！！」

タイガ「そして裁きを受けろお！！！！」

突然現れたタイガがダイチの襟を掴みユウカの方へ投げ飛ばした後消えた。

統夜「ダイチ……死んだな……」

遊輔「自業自得だ……」

統夜「そうだな……さて……」

質問するかね。参加している貧乳党へ……貴方達はネプ銀パーティに参加している巨乳人を見てどんな感じですか？嬉しいですか？それとも嫉妬で一杯ですか？（黒笑）

統夜「おいおい……銀魂メンバーとリリカルメンバーへ質問だ。

俺の蒼炎をどう思う？」

龍華「楽しそうなパーティですね。妹達も誘いたかったです……お父様とメアリお母様、シャルお母様、咲夜お母様……検討を祈

ります」

腰まである金髪に蒼い瞳をしはやてに似た顔立ちをした女性がぺこりと頭を下げた。

今回は実戦訓練にて大の字に倒れている遊輔とはやての二人、真祖形態の統夜がレオンとユウカに挑んでいるイラストをプレゼントです。」

ペタンコ組「ムカつくんだよこんちくしょオオオオオオオオオオオ  
！！！！！」

真王「チートものだと言ってたね。『ケン』さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『黒龍』さんだ。『黒龍』ソラ達は何事もなく、順調に進んでますね」

リリス「まあ、酷い目には遭っていませんし、文句はないですね」

ソラ「そうだな」

アリス「他のチームは波乱だがな（黒笑）」

アリア「にや〜…」

銀時「でもよ、あの真王の事だ。なにかやる可能性は否定できないよな」

リリス「ふ、不吉な言い方しないでください…」

黒龍「これからどうなるか見物ですね。じゃあ質問します」

1・なのはに質問。銀さんと一緒のチームになれた言について一言お願いします。

2・邪王に質問。少しはその歪んだ性格治したらどうですか？

黒龍「今回はここまでです。次回を楽しみにしています」「」

なのは「とっても嬉しいよ！」

邪王「悪いがこれが俺の性格だ」

真王「そう言うことだ。『黒龍』さん。廊下に立ってなさい」

第百訓：町はいつも安全とは限らない（後書き）

真王「今回は決闘にふさわしいエリアでスタート」

邪王「次回『荒地では決闘が定番』テイクオフだ」

舞台裏の滅茶苦茶話（前書き）

真王「100話突破記念として投稿だぜ！」

## 舞台裏の滅茶苦茶話

神「神様の舞台裏”。略して“カミウラ”ッ!! はっじめるよ  
おお「待て違うわボケッ!!」・・・ってなんだよ?」

真王「なんだよじゃないよ。最近出番がないからと言って勝手にし  
やしやり出るのは駄目だぞ」

神「黙らっしやい!俺様はリインからのゲストなんだぞ!」

真王「はあ・・・まあいいや。そんなわけでこのコーナー100話  
突破記念(おまけ物を入れて123はある)として『リリカル銀魂  
Strikers』銀女神鎮魂歌』の舞台裏話などやってい  
ただくコーナーである。そんで本日のメイン達の登場!」

シューウウウウウウ!!!!

銀時「どうも、主人公の坂田銀時です」

ネプテューヌ「ヒロインのネプテューヌです」

真王「そして自己紹介が遅れたが私は『リリカル銀魂 Strik  
ers』銀女神鎮魂歌』の作者である真王です。そして後ろに  
いる方々はその他」

全員「おいつ!!」

真王「うそうそ、『リリカル銀魂 Strikers』銀女神鎮  
魂歌』に登場した方々です。けど数が多すぎるので省かせていた

できます」

なのは「それもどうかと思うけど…」

真王「でもまあここまで登場したキャラクター達を出しましょうか」

銀魂：銀時、新八、神楽、桂、エリザベス、月詠、九兵衛、辰馬、  
源外、猿飛、近藤、土方、沖田、山崎、屁怒紹、高杉、仁蔵

リリカルなのは：なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、  
シヤマル、ザフィーラ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリ  
ード、アリシア、ヴィヴィオ、クロノ、ユーノ、スカリエツティ、  
ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク、セイン、セツテ、  
デイエチ、ノーヴェ、ウエンデイ、オットー、デイド、アリサ、  
すずか

超次元ゲームネプテューヌ：ネプテューヌ、ノワール、ブラン、ベ  
ール、コンパ、アイエフ、イストワール、マジエコンヌ、ネプギア、  
ユニ、ロム、ラム、ケイ、ミナ、チカ

リトルバスターズ：理樹、恭介、鈴、真人、謙吾、小穂、来ヶ谷、  
クド、葉留佳、美魚

Angelbeats!：ゆり、音無、奏、日向、直井、ユイ、松  
下、高松、野田、藤巻、大山、TK、椎名、岩沢

スプラッターハウス：リック、ジェニファー、デイビット

コープスパーティー：哲志、直美、世以子、良樹、あゆみ、繭、サチ  
コ、遼、雪、時子



WORKING!：宗太、ぽぷら、まひる、八千代、相馬、相馬、杏子、葵

魔界戦記デイスガイア：ラハール、エトナ、フロン、プリニー、カ  
ーチス、アデル、ロザリンド、マオ、ラズベリル、アルマース、サ  
ファイア、ヴァルバトーゼ、フェンリツヒ、フーカ、デスコ、エミ  
ーゼル、アルティナ

東方：レミリア、咲夜、紫、勇儀、萃香

オリキヤラーズ：リリス、ミーニヤ、アルラ、アイシー、ファルコ  
リア、ランドル、シャチール、メーティア、バーニン、VIEVE、  
イリス、シグマ、ミサカ、エルダー、ネリア、レーティア、ジャン  
ヌ、シャル、ギルシア、リアス、イツセー、カイク、アンヘル、レ  
オン、ユウカ、ナリア、タバネ、ガレーナ、レシア、ヤルオ、ルシ  
アス、ルーシア、アルテス、チフユ、マナ、タマネ、リリン、レム  
ナ、アリエス、ザック、ムツリ、ヒメラ、レグナ、ラート、シナ、  
リル、プリア

ゲストキャラズ：グレイ、ビビ、神、レヴェツカ、リオン、シャリ  
アローゼ、レイン、森羅、咲夜、蒼馬、紅也、さくら、エール、コ  
ヨリ、メア、セレス、真竜、黒鎌竜、白天竜、光翔竜、魔炎竜、  
氷刃竜、ソラ、リリス、アリス、アリア、セイバー、ライホース、  
統夜、達哉、遊輔、相川（咲夜）メアリ、勇華、奏、マリオ、ソ  
ニツク、明久、ルイーダ、クツパ、ムツツリーニ、銀次、アーカ  
ド、チルノ、ソロ、冥王、ソラ、リリス、アリス、アリア、セイバ  
ー、ライホース、統夜、達哉、遊輔、咲夜、メアリ

真王「以上が本編に出た方々です」

ビビ「こゝ、こんなに出てたんだ…」

真王「ハイ頭が混乱しそうなほど出てました」

ジャンヌ「それオーバーよ」

真王「あっそう、それじゃあまずこれから行ってみようか」

（真王の姿）  
プロフィール

真王「ハイ作者である私のイメージ姿、というのがプロフィールですね」

ネプテューヌ「とりあえず早く見せてよ」

真王「待ってって、それじゃあこいつだ！」

（真王）

髪：蒼のシヨート

目：黄色

服：ニードレスのアークライトの服を青くしたイメージ

年齢：????

体重：????

性別：

種族：作者、夢の創造者<sup>ドリームクリエイター</sup>

魔力光：????

好き：漫画、アニメ、ゲーム

嫌い：面倒事、非常識、不幸な主人公

性格：基本優しいが怒ると怖い

レベル：不明

得意武器：全部

スキル：作者の威厳（味方キャラの数によって能力上昇）

<sup>ドリームクリエイター</sup>  
夢の創造者（森羅万象を創造する）

詳細：『リリカル銀魂 Strikers』（銀女神鎮魂歌）の作者。容体は少年の様な顔立ちでニードレスのアークライトの服を青くしたイメージ。作品の中では最強と言われている。

真王「いかがかな？」

ジャンヌ「いかがかな？つてなんかこったプロフィールね…」

真王「キャラ作りに凝って何が悪い？」

レーティア「そ、それもそうね」

真王「あ、それからもう一つプロフィール」

↳邪王

髪：真紅のシヨート

目：紅色

服：ニードレスのアークライトの服を赤くしたイメージ

年齢：????

体重：????

性別：

種族：裏作者、混沌カオスブレイカーの破壊者

魔力光：????

好き：漫画、アニメ、ゲーム

嫌い：面倒事、非常識、不幸な主人公

性格：ちよつと頭のネジが外れている？

レベル：不明

得意武器：全部

スキル：作者の力（倒した数によって能力上昇）

混沌カオスブレイカーの破壊者（森羅万象を破壊する）

詳細：『リリカル銀魂 Strikers ↳銀女神鎮魂歌』の作者の裏の存在。容体は少年の様な顔立ちでニードレスのアークライトの服を赤くしたイメージ。ノクターンの存在だと思うが…。

真王「はいこんな感じ」

ネプテューヌ「って邪王って誰!？」

邪王「呼んだか？」

ネプテューヌ「ってうわああ!!作者そっくりの奴が出た!!」

真王「こいつがノクターンノベルズの…」

邪王「邪王様だ!!良く覚えとけ!」

真王「まあいろいろあるが、裏話というわけでアンケートを…というか案を取りたい」

全員「案?」

真王「そう、いわばテコ入れのようなやつだ」

神楽「なら簡単アル!私に任せるヨロシ」

真王「期待できんがな」

神楽「聞けよ!これが私のストーリーね!」

寒い寒い冬の果て、一人の少女は孤独に生きてきた。

男（銀時）「何やってんだお前、風邪ひくぞ」

少女は男の誘いに乗り、少女は周りにいる人たちとともに少し優雅

に生きてきた。

ガシャン！

大臣（近藤）「烏丸王国から宣戦布告だと！？」

女騎士（レオン）「総動員態勢だ」

だが現実是非道だ。

激しい戦いの中で何もかもが失ったのだ。

???（パープルハート）「失ったなら見つけるしかない。自分が生きるための道を」

私は旅立つ！そして自分に自由をつかむため！

『カグランジャステイス』今ここに幕を開ける！

真王「没だバカ野郎」

神楽「なんでネ！いい話だったろ！」

邪王「自分が主人公になりたいの願望が駄々漏れなんだよ。次」

桂「よし、俺が一肌脱いで案を…」

真王「『カツラップ』最後の晩餐」だろ？」

桂「ぬ！言われた！」

真王「行動がよく読めるわ。次」

レーティア、ギルシア「はい！」

真王「夫婦か。R18はあまりよろしくないぞ」

レーティア「失礼ですね。私たちだって考えてきたんですよ。こんな感じに」

深夜の家の部屋

男と女が全裸で

邪王「そのネタはノクターンでやるがな…」

レーティア「…いい案だと思ったんだけどな」

ビビ「ハイハイハイ！次私！」

真王「さて、どんななのはネタを使うんだ？」

なのは「私のネタは決定なの！？」

ビビ「聞いて驚きなさい！これが私の案よ！」

ある一軒家、そこに一人の女性が100分の食事を出していた。

女性（ビビ）「みんな、御飯だよ」

子供たち（なのは）「なの〜！」

トトトトトと100人なのはちゃんがぞろぞろと





邪王「ユーノラブ咲夜ちゃん、どんな案だ？」

咲夜「それはね〜」

父（ユーノ）「ただいまー」

母（咲夜）「御帰りなさいあなた」

男が会社から帰ってきた。

母（咲夜）「あなた？今日もやらせて？」

父（ユーノ）「はは、またかい？飽きないね咲夜って」

そして真夜中2人の肌が重なり合って

邪王「おっとすまんがカットだ。18禁報告されたくないからな」

咲夜は少し名残惜しそうだ。

チカ「なっていないですわ皆様、ここはわたくしが一枚肌を脱がねばなりませんわね」

真王「さりげなく名乗り出たがどんなだ？」

チカ「こちらですわ」

井懸面学園

イケメン男「お嬢様、マッサージいたします」





全員を回復した。

真王「それじゃあ裏話はここまで」

全員「またね」(な)(じゃあな)(バイバイ)(さらばだ)  
さよならです」

舞台裏の滅茶苦茶話（後書き）

次は紹介をやるう。

## 投稿キャラクターズ（前書き）

真王「『カーバンクルEX』さん、『ヴァーラガルザ』さん、『ケ  
ン』さん、が投稿してくださいましたキャラクターです」

## 投稿キャラズ

レギス・アスタロス・トバルカイン

髪：黒

目：紫

服：黒い学生服（元居た世界の学校の物）

年齢：16歳

性別：

種族：魔を統べし王

魔力光：黒

好き：ユリナ（自分の居た世界に居た彼女。）

嫌い：????

性格：ルルーシユっぽい？

レベル：869000

得意武器：魔剣『レーヴェ』

スキル：邪神の門（自分の命を削って自分の体に邪神を宿らせて力を得る。ただし使いすぎると自分の体が邪神に取り込まれてしまう。）

詳細：異世界を渡り歩く存在。かつて住んでいた元の世界にユリナと言う恋人がいたが、ある日宇宙人から地球を守るために米軍に生け贄として彼女は殺されてしまう。（彼女の能力の危険性を知った政府の上層部のせい）彼はそれに絶望し、自分が住んでいた世界を自分の手で破壊した。その後彼はどこかへ消息を絶つたはずだったが……。

ユリナ・ゼルニース

髪：蒼の短髪

目：蒼

服：『ブレイブルー』のノエル

年齢：16歳

スリーサイズ：何故か蜂の巣に・・・

体重：なぜか蜂の巣に・・・

性別：

種族：能力者

魔力光：蒼

好き：レギス、詩を書くこと（人には絶対に見せない。）

嫌い：虫（特に足が多いもの）

性格：事を冷静に把握する知性も持ち合わせている。が、端的に言  
つてしまえば天然ボケ。

冷静さを装っているが、実は人見知りで寂しがり屋な一面を持つ。  
レベル：69300

得意武器：双銃『レピウス』、銀槍『フレイズ』

詳細：元政府の直属の能力者。レギスとは潜入任務の時に知り合っ  
て恋人関係になった。ある日地球に宇宙人が襲来、ユリナはレギス  
やみんなを守るために日本軍の命で宇宙人を迎え撃つことに。しか  
し休憩中にある男を見つけ捕まえようとするが、逆にやられてしま  
い、その男のせいで別世界へ飛ばされてしまう。別世界に飛ばされ  
瀕死状態の彼女は、意志が有り言葉も喋る石『アーク』に助けられ  
る。その後彼女はその石と一緒に暮らすことにした。戦闘以外の才  
能は壊滅状態で、こと料理に関しては殺人的な腕前。

くアークく





好き：????

嫌い：自分の計画を邪魔する奴ら

性格：陽気でおちゃらけている

得意武器：????

レベル：????

スキル：アルシエル・ハーズ（相手の憎悪を増幅させる。）

詳細：レギスたちの住んでいた世界の政府の高官。政府を裏で操っていた存在。真の目的は絶対を超える存在を作り出すこと。手始めにレギスに嘘情報を流し彼を覚醒させ「実験した」目的のためならどんな手も惜しまない冷酷な性格もある。

補足：ここでの『実験』とは実験体に破壊活動をさせ強さを確認することである。

（カイン・アーベルジュ）

髪：銀

目：緑

服：『mugen』のゲイルの服を蒼くしたもの

年齢：二十三歳

体重：七十？

性別：

種族：人間（剣士としても一流）

好き：動物

嫌い：見下してるヤツ

性格：基本的には無口で冷静。合理的な判断を心がけているクールな性格。ただ女にめっぽう弱い。暑くなると松岡修造みたいになる。  
レベル：78000

得意武器：神剣「レーヴァテイン」

スキル：デイサグリー（不明。本人もよくわからないらしい。でも本人曰くこれを使った後に目の前が焼け野原になったという。その正体は龍化と呼ばれる代物。代々アーベルジュ家は龍の力を封印するためにある存在で、自身の体に龍の力を封印している。でも暴走してしまうと自身が龍化してしまう。（その力のパワーは封印した龍の力の限度によって変わる）今まで龍の力を完全に制御出来る者はいなかったがカインの代になって完全に封印することが出来た。ちなみに今まで龍化して生き残っていた者は……、誰一人としていない。）

詳細：別世界のとあるギルドに属する青年。しかしある日、遊びのつもりで召喚術を友人に勧められてやってみたところ何かの間違いで謎の少女『セリア・エメラルド』を召喚してしまう。その後から彼は彼女と一緒にギルド稼業をすることになった。

補足：ここでのギルドは別次元の人間の依頼を請け負う所。凄いギルドだ……。

（セリア・エメラルド）

髪：紫色のロングヘア

目：蒼

服：『永遠のアセリア』のアセリア・ブルースピリット

年齢：23歳

スリーサイズ：切り刻まれた後が……

体重：切り刻まれた後が……

性別：

種族：能力者

魔力光：紫、蒼、白

好き：本を読むこと

嫌い：マスターを馬鹿にするもの

性格：物覚えはあまり良くないが、素直で出来るまで何度でも頑張る性格。

レベル：84700

得意武器：霊剣『レイギエグスト』

スキル：ライフポゼッション（自分の能力を一時的にアップする。

しかし代償として自分の命を削るので使いすぎると体が崩壊する）

詳細：カインに召喚された少女。正体は力が強すぎたため聖杯戦争からはぶられたとある世界の王女。カインの事を自分を拾ってくれた恩義から『マスター』と呼んでいる。クールなように見えるのだが、実は直感で動くタイプで物事をあまり深く考えていない。ただ料理の腕前は壊滅的で、一度キツチンに立った時は家事の達人の助けを持ってしても大惨事が巻き起こった。

（ジーク・ドラゲリオン）

髪：黒

目：黒

服：『月華の剣士』の刹那の服を黒くしたもの

年齢：二十歳前後

体重：75？

性別：

種族：元勇者

好き：なし

嫌い：現世、常世を問わず全ての存在

性格：根暗な性格だが、戦闘時のテンションはやけに高い。

レベル：9000000

得意武器：神刀「罪王」

スキル：ヘルズ・ドライブ（人の負の感情を自分の身に宿し、自分の力にする。）

詳細：別世界の勇者。だが魔王を倒した後、魔王が最後に残した呪いによって彼は、全ての人間の負を取り込んでしまい、その後魔王に変わり世界を支配した。人間の負の部分を自分の力として取り込んだ存在であるが故に、その性質は純然たる「悪」である。ある日、カオストールに実力を買われ、彼の部下になった。

（Drドーン）

髪：金

目：赤

服：白衣（なんか色々と武装している）

年齢：32歳

体重：78？

性別：

種族：科学者

（ビッチカゴロウマシキサイエンティスト）

好き：実験、わらび餅、人体改造、薬品製造、ライダーキック

嫌い：まずい食べ物

性格：Drウエスト+クルル曹長

レベル：20000（だが強いのはこいつの作ったロボ）

得意武器：自分の服につけた防衛システム

スキル：なし

詳細：別世界を渡り歩き、さまざまな奇天烈な発明品で騒ぎを起こすマッドサイエンティスト。「」なのである」という口調で話す。お供にオックス・ゴアとエル・ディアンを連れている。また、場

の空気を読まないことがほとんどであり、時にはそれにより御都合主義（デウス・マキナならぬデウス・エクス・マキナ）や色々なフラグをブッチ切るトンデモっぷりを巻き起こす。

（シュワルツ・エンツ）

髪：銀

目：蒼

服：場所によつて変えるらしい

年齢：二十七歳

体重：七十四？

性別：

種族：噺の語り手

好き：お話を人に話すこと、物語の作成

嫌い：なし

性格：優しそうに見えて実は残虐

レベル：98700000000000

得意武器：なし

スキル：噺の現実化（彼の話した物語は現実となる）

詳細：世界を渡り歩き物語を人々に話す魔道士。その正体は自分の話した物語を現実化させ、世界を支配しようとする次元犯罪者。彼には自分の話した物語から生まれた部下がいる。最近ミッドチルダに目をつけたようだが……。

（デイケイト・ヴァルスデント）

髪：茶

目：黒

服：普通の板前の服

年齢：24歳

種族：板前（と言う名の次元旅行者）

好き：ステーキ、女

嫌い：面倒事、ナマコ

性格：自信家で誰に対しても尊大な態度で接するが、いざという時は世界や他者のために身を挺する。

レベル：48000000000

得意武器：魚切るときに使う包丁（だが例え相手が魔族だろうが能力者だろうが神だろうがなんでもぶった切る）

スキル：ストロイドフォーム（訪れた世界の人達の力を覚えて自分を使うことが出来る）

詳細：寿司屋『銀河』の店長。（て言うか一人で営業している）実は気が向いたら別の世界へ行ってしまう次元旅行者である。素性を問われた際の「通りすがりの板前だ。覚えておけ！」が決め台詞。難しい話は「大体分かった」という口癖で済ませ、あらゆる物事をそつなくこなす。ちなみに彼が訪れた世界は歴史が変わっていることから彼は、『歴史の変更者』と呼ばれている。（ちなみに本人曰く、「適当にやったらああなった。」と言っている）

（ファイリア・プリズム）

髪：虹

目：虹

服：『フェイトステイナイト』のセイバーの鎧を虹色にしたもの

年齢：21歳

スリーサイズ：焼却されました

体重：塵になりました

性別：

種族：全属性使い

魔力光：虹

好き：兄、寿司（本人曰く日本に行ったとき食べておいしかったらしい）

嫌い：バカ

性格：穏やかで寡黙（だが一度話し出すと止まらない）

レベル：8526000

得意武器：虹の剣『レイゼース』、虹の槍「スヴァルド」

スキル：虹翼（発動時は背中に六枚の羽が生える。発動中は攻撃力、防御力、スピードが上昇する。封印技の使用が可能に）

詳細：この世で絶滅したと言われている「全属性使い」であるプリズム一族の生き残りで、行方不明の兄を捜しており、別次元を移動している。ある日雪の世界で兄を探している最中、謎の男、カリオストロ・ディアボロスに襲われて瀕死の重傷を負ってしまう。しかしとどめを刺されそうになった時、「外が騒がしい」と言う客のクレームを聞いて解決しにやってきたディケイト・ヴァルスデントに助けられる。それから彼女はディケイトに「兄捜ししてんのか？ だったら手伝ってやるから俺の店の手伝いしてくれるか？」と言われ、一緒について行くことに。いつも勝手な行動するディケイトには世話を焼いている。

（コープス・デッドアンサー）

髪：黒

目：骸骨だからなし

服：なし

年齢：45000歳



性別：

種族：骸骨

魔力光：黒

好き：子どもの肉、人の心をもてあそぶこと

嫌い：邪魔者

性格：陽気で残虐

レベル：33333330

得意武器：魔杖『コープス』

スキル：骸骨化蘇生（死んだ人を骸骨にして復活する。復活した者はコープスのしもべになる）

詳細：エンツの作った物語『骸骨シヨ』から生まれた存在。子ども  
の肉を喰らう骸骨。エンツとは気が合うらしい。それでも生前は  
大魔道士として有名だった。

↳レ・ヴェ・ネオセフィロス・シルバータイム↳

髪：銀

目：黒

服：セフィロスの服を白くしたもの

年齢：銀さんと同い年

体重：銀さんと同じぐらい

性別：

種族：墮天使（元人間）

魔力光：黒

好き：イチゴ牛乳

嫌い：信念、不屈

性格：無口

レベル：5555000000

得意武器：木刀？

スキル：????

詳細：別の歴史からやってきた銀さん。守るべき者が全てミッドチルダの最高評議会の手によって殺され、憎悪により世界を破壊した。（ここまで憎悪が暴走したのもカオストルのせい）でも一部銀さんとしての意識がある。

（ローグ・ヴァンス）

髪：濃い青

目：黄

服：青いコート、黒のジーンズ

年齢：19歳

体重：63？

性別：

魔力光：青

好き：弁当作り（て言うか趣味の一つ）

嫌い：お化け

性格：基本的には事なかれ主義、大切な者は命をかけても守る主義  
レベル：650000

得意武器：レジェンドセイバー

スキル：不明

詳細：5年前に姉が自殺してから怠惰な生活を送っている。趣味が学校の屋上での読書であるなど、基本的に人と付き合うことが少ない。したがって自分から人を誘うと言う事が無い為、それをする周囲に驚かれる。だがある日、未来からやって来たという謎の少女、レルシア・ヴァルキュリアと出会ってから彼の運命は大きく変わっていく。

レルシア・ヴァルキュリア

髪：赤

目：青

服：『トリガーハート エグゼリカ』のクルエルティアの服を赤くしたもの

年齢：見かけ16歳

スリーサイズ：蜂の巣になりました

体重：蜂の巣になりました

性別：

魔力光：水色

好き：ローグ（最近恋心を抱きました）

嫌い：変態

性格：気性はやや熱血

レベル：200000

得意武器：機神霊剣ヴァルドネシアカリバー

スキル：機神化（能力を一定時間強化するが体の負担が大きい。他に隠された能力があるようだ・・・）

詳細：別世界からやって来た少女型兵器。『自由』を得るために未来から逃げてきた。ローグと出会ってから一緒にギルド業をしている。過去に仲間が自分のために犠牲になったことがあるためローグだけは絶対に失いたくないと思っている。

ちなみにレルシアの妹について簡単な説明

名はエル・リアミール、簡単に言えば僕っ子（外見も男らしい）。イシュタルにやられ別世界に転送されたとき（て言うかユリスがイシュタルに秘密で命だけ助けてあげた）、死にかけているところをDrドーンに助けられる。さらにDrドーンに男と勘違いされ『エル・ディアン』と言う名前をつけられた。（今では誤解が解けた。しかもロボットだつて事もわかつてくれている）彼女は今、Drドーンの助手をしているが色々と問題を起こしているDrドーンには手を焼いている。（ちなみにこのことはユリス以外誰も知りません）

くレイヴィス・グランスファイアく

髪：薄紫の腰までのロングヘア（赤く長いリボンも結んでいる）

目：黒

服：黒いゴスロリドレス

年齢：見た目16歳（実年齢500歳）

スリーサイズ：串刺しになった

体重：串刺しになった

性別：

種族：魔族の姫

魔力光：赤、黒、紫

好き：他者との交流（相手を一方的に振り回す事を彼女の中ではことう定義する）

嫌い：触手、ダヌ・カースター

性格：勝ち気で執念深く、尊大でワガママ。そのうえ、自己中心的。さらに受けた恨みはきっちり百倍にして返す主義。

レベル：900000000

得意武器：三叉の魔鞭『ネオジドル』（槍とか大剣とかにもなりません）

スキル：ダークネス・ドライブ（闇の力を纏い、一定時間パワーアップする）

詳細：とある世界の魔王ウイズガンドラの一人娘で三叉の魔鞭と猛々しい闇を自在に操る、高飛車なお嬢様。しかしある日、天上界からダヌ・カースターが襲来、父親や臣下もろとも魔界を滅ぼされてしまう。臣下の仇を取るためにダヌ・カースターを追って人間界へと赴くものの女性とムフフ中のダヌ・カースターにとっつかまって完膚無きまでにやられてしまう（身体的、精神的、性的な意味で。しかも9割性的な意味でグチャグチャのベトベトにされました）そんな（性的な意味で）地獄のような日々を過ごしていた彼女はダヌ・カースターを所行を止めるためにやって来たユリスの手によって助けられる。彼女は「ダヌ・カースターをこの手で倒す。」と言う条件付きでユリスの頼みを受ける。マゾツ氣を突かれるとかなり弱いのが悩みの種。

（ベアトリス・アーミティッジ）

髪：金（暴走時は赤）

目：青（覚醒時は金、暴走時は赤）

服：『聖天使ユミエル』の光翼天使ユミエルの服（黒い部分は銀色になっている）

年齢：17歳

スリーサイズ：キングクリムゾン！

体重：キングクリムゾン！

性別：

種族：天使と人間のハーフ

魔力光：黄（覚醒時は金と銀、暴走時は赤と黒）

好き：平和、正義（暴走時は血、人殺し）

嫌い：悪（暴走時はこの世全ての存在と世界）

性格：内向的かつ純粹で、無垢な人柄。しかし、その純粹さゆえに悪を憎む気持ちは人一倍強い。それに寂しがりや（覚醒時は陽気で飾り気のない気さくな性格に、さらに銀さんの要素もある。暴走時はただ相手を殺すことだけしか考えなくなる）

レベル：850000000（覚醒時、暴走時は測定不能）

得意武器：迅雷聖剣『エターナル・ワルキューレ』

スキル：雷神化（要するに覚醒、色々とパワーアップする）

詳細：とある世界で宇宙の平和を守り続けている少女。その正体はかつて運命に抗った男の末裔。彼女は自分の祖先に誇りを持っている。ユリスからアザトース復活の報を聞き、全ての世界を救うためにユリスと一緒にアザトースを倒すことにした。

暴走に関して：彼女にはかつて家族がいたが魔族に襲われたときに殺されてしまった。（さすがに彼女もその時重傷だったわけで）しかもその魔族は彼女と彼女の祖先を鼻で笑って馬鹿にしたため・・・その時に彼女の何かが吹っ切れた。そして気付いたときには彼女の目の前には、守ろうとしたものも魔族も何もかも消滅していた。（ちなみに彼女は自分の暴走には気付いていなかったがこの事象が自分の手で起こしたものだたと知り、そのことに関して今でも相当後悔している）

暴走時の能力：全てを否定する能力（彼女が否定したものはその存在が未来永劫存在しなかったことになる）

（レイシア・アルカナ・リディシア）

髪：エメラルドグリーンロングヘア

目：銀

服：『魔術師とアルカナの化身』の犀宮楓の服（黒い部分は銀色に）

年齢：15歳

スリーサイズ：ピチューン！

体重：ピチューン！

性別：

種族：魔法剣士

魔力光：ピンク、白

好き：銀さん、ネプティーン、なのは（彼女にとって全員あこがれの存在）、ピーチタルト

嫌い：近藤勲（理由・変態だしストーカーだから）

性格：純真で優しい女の子。恥ずかしがりで若干弱気だが、ここぞというところでは引かない強さがある。責任感は強い。博愛主義者で、誰にでも優しく接する。争い事が嫌い、人間誰とでも理解しあつて仲良くなれると信じている。自分よりも誰かのために頑張るお節介な善人だが、調和を尊ぶため自分を殺している傾向にあり色々と背負い込んでしまう性分でもある。

得意武器：聖剣『ライトニングノヴァカリバー』

スキル：レウトゼクシオン（一定時間、移動速度増加）

詳細：別世界に住む悪魔狩りの魔法剣士。だがある日次元のゆらぎに飲み込まれミットチルダに飛ばされてしまう。その時に銀時、ネプティーン、なのはの三人の噂を聞き、弟子入りさせて貰うために機動六課に行つたが……。

くりルシオン・ブラド・ヴァルジウスく

髪：青

目：金

服：フェイトのデバイススーツの青版

年齢：15歳

スリーサイズ：ピチユーン！

体重：ピチユーン！

性別・

種族：魔道士、吸血鬼と人間のハーフ

魔力光：青、黒

好き：妹

嫌い：偽善者

性格：クールで人を寄せ付けない雰囲気。不器用で感情を表に出すのが苦手な女の子。

得意武器：魔杖『ガルヴァジス』

スキル：吸血鬼化（一定時間吸血鬼になる。能力値が上昇するが日の光には弱くなる）

詳細：異世界に住む吸血鬼、かつて妹が吸血鬼だという理由で政府に捕らわれてしまう。そのため自分の大切な妹を奪った世界を憎んでいる。彼女は世界に喧嘩を売ろうしている高杉がミッドチルダに居ると聞き、世界を復讐するために彼の元に行く。ちなみに元の世界では同級生であるレイシアとは意見や考え方で対立している。

（リルマ・ロギストル）

髪：ピンク（ライトニングクリスタルゼロモードになると白色になる）

目：金

服：聖王ヴィヴィオのスーツの白版（ライトニングクリスタルゼロモードになると金色になる）

年齢：22歳

スリーサイズ：貫通！

体重：貫通！



性別：

種族：聖剣士

魔力光：白、金

好き：子ども達、花

嫌い：魔物

性格：朗らかで優しい性格だが、芯が強く、怒ると怖い。

得意武器：聖剣『レイヴシエルバー』

スキル：ライトニングクリスタルゼロモード（この状態になると背中に六枚の水晶の翼が生える。全能力が超強化される。光速以上の移動が可能に。）

詳細：とある世界の街の孤児院を経営する女の子。ある日子ども達が魔物に襲われたときに力が覚醒、それから彼女は子ども達を守るため、孤児院の子ども達の世話をしながらそのかたわら魔物を倒す聖剣士としても働くようになった。孤児院の子ども達のためにギルドで仕事を受けることもある。ギルドで知り合ったカインとは仲がよい。

（ネクロギアス・バルクギドシス）

髪：黒

目：赤

服：普通にジーパン

年齢：15歳

体重：61？

性別：

種族：人智を超えた何か。

魔力光：全色

好き：馬刺し

嫌い：自分が気に入らないと思った奴

性格：超陽気

スキル：数え切れない（かつてやってしたことおよびその他を見れば何となくわかる）

詳細：かつてミルガと呼ばれる生命体とかつて平行世界を飛び回って追いかけてこをした自由人、リリ銀パーティーを見に来た。ものすごい方向音痴（昔はそうではなかったが）

かつてやってしたことおよびその他：巨大化して町を押し潰す。彗星や銀河や惑星をつかんでそれで相手を殴ったり、相手に投げつけたりする。及びその余波としての宇宙（単一次元）破壊。念力による破壊。人やものや惑星の破壊。次元破壊。第五次元を破壊したのち、分数次元を含む序数次元を全てを消し去り、その住人も消し去った。ミルガとの追いかけてこに飽き、多元宇宙を破壊し、「改変宇宙群や分岐未来群や平行次元群の屑宇宙を移動してまわるのに飽きた。一つの現実で十分だ」という趣旨の独り言を言った。その一つも破壊して「もはや無限の地球群も：もはや改変宇宙群も過去も諸未来もSUPERDOPESも存在しない。もはや俺とお前（もう一人のミルガ）を除いて何者も存在しない」とし、ミルガの移動できる次元が存在しないようにした。物質操作もやっている（だがその後何も無い世界に飽きたから別存在軸の改変宇宙群にやって来た）。

ついで：突如襲ってきた邪王兵を全員消去した（本人曰く、「襲ってきた奴が悪い」だという。その後何故か迷子になった。）

（アギス・トルディース）

髪：銀

目：銀

服：『Devil May Cry』のネロの服を青くしたもの

年齢：28歳

体重：81？

性別：

種族：デビルハンター（でも他の依頼を受けることも）

好き：オリーブ抜きピザ、ストロベリーサンデー

嫌い：面倒事、自分よりおしゃべりなタイプの人間

性格：詳細参考

得意武器：魔剣『デイスガイア』、二丁拳銃『ヴェイザー&サウザ

ンド』

スキル：心臓や脳を破壊されたり全身を貫かれる程度では死ぬことのない肉体

詳細：表向きは便利屋だが、本業はこの世にはびこる悪魔を狩るデビルハンター。普段はやる気のない男で、気の向かない依頼は引き受けず、事務所も散らかりっぱなし。食事はオリーブ抜きピザにストロベリーサンデーのみという偏りで、借金まみれでありながら週休六日主義を公言して憚らないずばらな性格。アルコールについてはビールやワインを飲んでいる。一応車は持っているらしい。多額の借金をしており、仕事を終える度に取り立てられている。本人曰く、女・子供には優しいという。一見欠点だらけの男に見えるが、ひとたび悪魔を前にすれば愛用の魔剣デイスガイアと二丁拳銃ヴェイザー&サウザンドで敵を圧倒する。いかなる時でも相手を挑発するほどの余裕を持ち、高速のオートバイも軽々と乗りこなす。人間の可能性を信じており、己の正義を貫き悪を挫くタフな男。

名前：蒼咲あおさい龍華りゅうか

性別：女

種族：混血クローン

容姿：腰まである金髪に蒼い瞳をしはやてに似た顔立ち

身長：168cm

スリーサイズ：B91/W56/H89

年齢：17歳（外見年齢）

魔力光：蒼

魔力：測定不能

気力：測定不能

霊力：測定不能

妖力：測定不能

覇気：測定不能

魔術式：古代ベルカ式とレイヴ式、ヴァンパイア式、ルシファー式  
性格：普段は優しく大人しい性格をしているがそれは表面だけで、  
本来は強気で戦闘好きな性格をしているが統夜達の言う事だけは素  
直に受け入れる

趣味：お父様とお母様達を調べること、料理、スポーツ、読書など  
多数持っている

好きなもの（事）：お父様とお母様、戦い

嫌いなもの（事）：お父様とお母様に嫌われる事

詳細：C計画と呼ばれる計画で造られた人造魔導師の第一号体。その  
正体は統夜とはやて達の遺伝子から造られたクローン。理由として  
は統夜の持つ異常な戦闘能力を自在にしたかったからである。  
統夜の真祖と煌天使と魔人、雪蓮の白虎解放、はやての天使化、メ  
アリの死神化と白獅子化、優子と秀吉の試験召喚獣の操作能力、は  
やてやカナ、咲夜の持つ魔法技術、シャルの持つトランス能力が備  
わっており強さはC計画で造られたクローンの中で最強の部類に当  
たる。

妹達の面倒をよく見ており、実の妹の様に可愛がっている。

戦闘好きであるのと統夜達の遺伝子で造られたのと調整されたことにより、姉妹の中でも一番強い存在であり、統夜と本気で勝負すれば相打ちになる可能性もある程。

魔力変換資質『炎』、特異魔力変換資質『蒼炎』と『斬撃』、『轟焰』、『轟雷』を所有する。

（ウイエナ・ノブリスオブリージユ）

髪：水色

目：蒼

服：『精霊騎士アクエアル』の水の精霊騎士アクエアルの装備を全部水色にしたもの

年齢：21歳

スリーサイズ：記録消滅

体重：記録消滅

性別：

種族：氷の精霊騎士

好き：カイン

嫌い：セリア（恋のライバル、セリア本人は何が何だか分からないが）

性格：ツンデレ

得意武器：氷剣『エスペイム・ブリザード』

スキル：凍結（とりあえず何でも凍結できる）

詳細：精霊の泉から召喚された精霊騎士。カインとはギルドの仕事で知り合っって一目惚れした。何故かセリアをライバル視している。

投稿キャラズ（後書き）

真王「まだ本編に出ていない人もいますがそこはまだ待ってください」

極神10傑集設定(前書き)

真王「ヴァーラガルザさんのキャラ達です。10人の神気取り野郎  
ですがね」

## 極神10傑集設定

（イシユタル・ヴァジスゲイド）

髪：赤

目：赤

服：金の鎧

年齢：見た目30歳（実年齢1兆歳）

スリーサイズ：アレ？俺何をしてたんだ？

体重：アレ？俺何をしてたんだ？

性別：

魔力光：金、青、黒、紺

好き：美容

嫌い：自分たちのシナリオに抗おうとするもの、古い

性格：普段は傲慢かつ優雅……かと思えば突然駄駄っ子のような我が儘な言動を取ることがある。

また、自身を敬わない者に対しては残虐な面を露わにする。口調

もまた普段は気品を感じさせるが、激情に駆られて品に欠ける発言を垂れ流すときもある。

レベル：測定不能

得意武器：斧（全然使っていない）

スキル：時間移動、次元を超えて魔力の干渉、瀕死の人間を完全に回復、記憶操作、多次元も認知可能。次元を繋ぐ穴を作って悪魔を送り込むことができる。この悪魔はバラバラになっても無限に復活する。神を欺くほどの分身を作成可能。分身はやられても復活し、本体へのダメージフィードバックは無い。完全に消滅されない限り腕が切り落ちても再生可能。

詳細：無数の宇宙を作りだし、その世界の生命を思うがままに操ってそのシナリオを楽しみ、気付かれそうになったらその存在を宇宙



ごと消去することを繰り返す者達『極神10傑集』の一人。数々の悪魔を従えており、身の回りの世話や自分の部屋の構築のために限らない魔力を使用している。て言うかこの集団に入る前は別の世界で魔族の大將をやっていたから魔族や悪魔の扱いには慣れている。

混獄こんごく 隆次りゅうじ

髪：緑

目：赤

服：BASARAの信長の鎧を黒くしたもの

年齢：26歳

体重：72?

性別：

種族：神になった人間 あらゆる全ての並行宇宙に同時に在り君臨する存在

魔力光：金

好き：ユリス（隆次の妹）

嫌い：自分たちのシナリオに抗おうとするもの

性格：基本は冷静沈着なやつだが妹のことは大切に思っている  
レベル：測定不能

得意武器：黒の魔道書『ジグドラシル』

スキル：奇跡（隆次が存在する全ての宇宙の波動を同期させ未来時間を束ねて使用し、いかなる並行宇宙にも絶対にはありえない、あらゆる可能性を超えた「奇跡」を起こし新たな宇宙を創生する。この「奇跡」を起こすために未来時間を使われた宇宙（隆次が存在する宇宙で、「奇跡」がもたらされるひとつ以外全ては）消滅する。）  
詳細：極神10傑集の一人。かつて人間だったとき、妹を死の運命から救うため、宇宙を滅ぼした存在。その時に10傑集のリーダー

にスカウトされる。(妹も実力があつたので同じく10傑集入りに)

黒の魔道書『ジグドラシル』に関する説明

因果を遮断して攻撃や行動を封じたりする事も可能な魔道書

〈ホラーロード・ドロツセルマイヤー〉

髪：青

目：黄

服：ギャグマンガ日和の聖徳太子の服の黒色

年齢：見た目28歳(実年齢415億歳)

体重：亡霊なので無し

性別：

種族：転生者(もう誰が転生したかわかりますよね?)

魔力光：赤、黒

好き：ツナ、下界に旅行、犬、カレー

嫌い：ピーマン

性格：精神年齢は幼児並だが、やるときにはやるたされておろ、ごく稀に、至極まともなことを話す。

レベル：測定不能

得意武器：なし(基本肉弾戦、なぜか虚刀流を覚えている)

スキル：物語を作つてそれを現実にする。力の及ぶ範囲は最低でも町以上。一切見えなく出来る、またあらゆるリーダーに反応しない。ホラーロードを認識したあらゆる知的生命は狂うか消える。

詳細：極神10傑集の一人で一言で言つてしまつとバカ。(転生前がギャグマンガ日和の聖徳太子だから仕方がない)頭の冠は側面に付いているひもを引っ張ると伸ばす事ができる。一度、髪の毛が伸

びすぎて冠のようになっていたことがあったが、その髪はイシユタルによつて千切られた。また、下着を穿かない主義でもある。カレーが好物で、カレーで頭を洗った経験もあり、体からはカレーなどいろいろと妙なおいがする。犬好きだが、ソロモンなどろくな名前を付けていない。口癖は おアまア、もうイヤだ 等。耳で息ができたり、黒目だけで笑った目を作れるといった特技がある。全身から変なおいがするというので、10傑集内では毛嫌いされている。イシユタル曰く、「全身がまんべんなくさい。」。下手にかぐと、バイタリテイをかき消され最悪死に至るほどだという。得意技は空中で前転しながら暴れる「飛鳥文化アタック」や、ボートから勢いよく岸へ飛ぶ「フライング摂政ポセイドン」（失敗）、奇妙なポーズで相手に体当たりする「聖徳全体アタック」「ジャンピングゴリラステーション」「シャイニング横綱バケーション」「ライジング犬好きイリュージョン」などの48あるボディアタック。ほかには普通のチョップ「摂政チョップ」などがある。最近新しい技「聖徳太子有情破顔拳」を覚えた。

くエルシャダイ・ワイズデントく

髪：黒

目：金

服：マスターテリオンの服の黒色

年齢：見た目31歳（実年齢35京42兆歳）

体重：74？

性別：

種族：この世全ての造物主

魔力光：黒、白、赤、青、黄

好き：世界を弄ぶこと、バッドエンドを作り出すこと

嫌い：自分たちのシナリオに抗おうとするもの

性格：冷酷無比で残虐、たとえ自分を信頼していた奴でさえゴミのように使い捨てる。その容赦の無い外道な性格から他の10傑集からも相当恐れられている。

レベル：測定不能

得意武器：虚無の剣『ノア・イプクリス』

スキル：防御無効。三千世界において全能。無時間行動にも対応可能。時間を止められても動ける。因果を超越した存在であり、未来に行われる攻撃に対して反応して防御できる。移動は無限速。宇宙活動可能。

詳細：極神10傑集の一人。ちなみにリーダーであるアザトースは10兆年前に運命に抗おうとした男によって封じられたため実質彼がリーダーを勤めている。彼はアザトースを復活させるための計画『プロジェクト・ノヴァ』を企む。

## 特殊技

《立体魔方陣『超獣神』》：攻撃力を大幅に底上げできる。

《黒き業火よ》《白き絶望よ》：それぞれ火炎・冷気による攻撃呪文。射程無限大。

《ダークマター》：対象の攻撃の属性を変更する。

《対消滅力場》：あらゆる攻撃のエネルギーと対消滅する力場。常時。白兵戦の類による攻撃を十分の一に軽減する。

《虚空の霧》：肉体を霧へと変貌させることにより回避することが出来る。霧となっているがあらゆる攻撃をすり抜けさせられる。任意発動。

《過ぎ去りし未来》：時のループから対象を放逐し、その存在自体を抹消する。

《流星召喚》：多元宇宙全体を効果範囲と出来る攻撃。無数の流星を落とす。

（アザトース・ヨグソードス）

髪：なし

目：赤

服：なし

年齢：不明

体重：不明

性別：なし

種族：万物の王、盲目にして零知の神、造物主、一にして全、全にして一、彼方なるもの、全ての物の原型

好き：なし

嫌い：なし

性格：理性というものがない

レベル：測定不明

ちよつとした説明：宇宙の外に宇宙が広がりその宇宙の外にも宇宙が広がりその宇宙の外にも…と宇宙が無限に連なり、また可能性の分岐が無限の平行宇宙を生み出すという世界観の全てはアザトースが見ている夢であり、覚醒すれば全て消滅する（というか最初から存在しなかったも同じらしい）。世界を思うがままの容にできる。アザトースの存在を認識した物は魂を砕かれる。さらに全ての宇宙はアザトースにとって幻であって夢であり、またあっても存在しな

いのと全く同じであるらしいので、通常的手段での干渉は不可能と思われる。アザトースは、人間であり非人間であり、脊椎動物であり無脊椎動物であり、植物であり動物でありこの宇宙にもいるし、別の宇宙にもいる。宇宙から宇宙へ漂う存在でもある。また意識を持つとも持たないと言える。まさしく 一にして全、全にして一である。四角が立方体の断面であるように、あらゆる形態は四次元の類似する形態の断面である。また、四次元の形態も、五次元の類似する形態の断面であり、また五次元の形態も、これを無限回繰り返して到達不可能な高みの次元、存在の全的な無限の領域、数学も空想も凌駕する最果ての絶対領域それそのものが、あらゆる世界と宇宙と物質を超越した至高存在たるアザトースの本質である。人間の世界（最初の世界）は四次元世界の無数の局面の一つに過ぎず、四次元も五次元世界の無数の…を繰り返す。アザトースからみて、時間を含め全てのものに変化などなく、全てが同一のものであり、外宇宙的な見方の角度が違うだけである。よってアザトースが見方の角度を変えただけで低次元の存在が変化と呼ぶ現象が起きる。ようするに物をまったく別の物にする。当然だがアザトースは無数の宇宙の角度を同時に見ている。

詳細：極神10傑集のリーダーであり、存在の全的な無限の領域、数学も空想も凌駕する最果ての絶対領域それそのもの。だが今は封印されている。

#### 簡易説明

アザトースにとって「現実」や「変化」という事は夢にすぎない。過去・現在・未来ということも同様に夢、時間という概念の外にいる存在である。それに過去、現在、未来ということも同様に幻であり時間の概念が存在しないので時間無視。アザトースは全能であり低次元の存在達が変化と呼ぶのは、アザトースの意識の働きにすぎない。（ぶつちやけ言えば神も宇宙も何もかも彼の夢に過ぎない。）

〈混獄ユリス〉

髪：黄

目：青

服：黄色いヒラヒラした服にミニスカート

年齢：16歳

スリーサイズ：燃やされた・・・

体重：燃やされた・・・

性別：

種族：吸血鬼と人間のハーフ

魔力光：黄、赤、紫

好き：兄さん、世界

嫌い：このよ全てが無に還ること

性格：優しくて元気

レベル：測定不能

得意武器：冥剣「エンアジス」

スキル：自分を宇宙レベルに拡大することによって時間停止、他人の時間停止の解除が出来る、溜め無し錬金術原子の組み換えによる物質の形成を行う、何も無い荒野に一瞬で大都会を作り出す。相手の足元からマグマを噴出させる。射程数m、高さは天空まで、幅は数m。周囲数千kmをマイナス272.8度に下げる。原子核の電子の動きまで止める氷の檻に相手を閉じ込める。相手（人間大）を指差し、軽く指を振るだけで銀河と銀河の間に転移させることが可能。すべてを腐らせる風（金属でできた壁やドアを腐らせた）を発生させる。

詳細：10傑集の一人で唯一『プロジェクト・ノヴァ』に反対する少女。アザトースの復活を阻止するため異世界の強者を集めている。吸血鬼だが別に日の光の当たっても消えることはなく、血を吸うこ

ともない。

（ダヌ・カースター）

髪：黒

目：黒

服：黒のロングコート

年齢：32歳

体重：78？

性別：

種族：神（だが鬼畜変態）

魔力光：黄、水色、オレンジ

好き：女性を調教すること、束縛

嫌い：ゲイ

性格：鬼畜変態

レベル：測定不能

得意武器：召喚の書『アギスタルデルツ』（何でも召喚できる万能魔道書。本人はあまり戦闘はしないのでほとんど性的な意味で自分の娯楽のために使うことが多い）

スキル：汎世界全てに対して全能。ダヌの流れに身を浸せば全知の存在ともなる。時間を渡り死者を生き返らせることも、くがなかった世界に変えることも可能。ダヌと読心能力などで同調した場合、圧倒的な情報に個は拡散して消えてしまう。

詳細：10傑集に一人でホラーロードと同じぐらいの問題児。能力の強さもさることながら、相当の鬼畜変態なので10傑集の女性達には（性的な意味で）恐れられている。しかも相当な天才（IQ50000）。



〈ラグーシス・マルドゥーク〉

髪：白

目：赤

服：白い学生服

年齢：不明

体重：亡霊みたいなものだからなし

性別：

種族：意思を持った空間そのもの

魔力光：全色

好き：???

嫌い：運命に抗うもの

性格：とにかくミステリアスなやつ

レベル：測定不能

得意武器：なし

スキル：空間の振動で物体を崩壊消滅させる。（近ければ近いほど威力は上がる）、ラグーシスの細胞一つでも支配した空間内では、時間も物理法則も物質も何でも自由に出来る。またその支配した空間の範囲に踏み込んだ人間は戦闘意欲を完全に無くす。幼児退行する者や必死に許しを請うものもでる。更に体には龍が纏わり付いており、これによって人の意識や体を飲み込む事も可。

詳細：10傑集の一人、だがその正体はエルシャダイでもわからない。とある目的のために動いているようだが……？

〈ベルフェクティオス・スネーカー〉

髪：オレンジ

目：青黒

服：青いズボンだけ

年齢：37歳

体重：84？

性別：

種族：妖の王、半機人

魔力光：黒、緑、赤

好き：世界を壊すこと

嫌い：我々のシナリオに抗うもの

性格：基本無口で戦闘狂だが頭が回りが良い

レベル：測定不能

得意武器：妖刀『神牙・絶』

スキル：ペルフェクティオスが宇宙に存在すると同時にその宇宙とそこに存在するものは例外なく死に至る既にくつもの宇宙に破滅を与えている負の怨念がペルフェクティオを形づくる為、その供給が起こる限り、無限に再生する。彼曰く、「無駄だ、我は死と滅びを糧として存在するがゆえに、我を滅ぼす事はできぬ」とのこと。さらにペルフェクティオス曰く全ての宇宙と共に存在するものであるらしいその一部がいるだけで絶大なプレッシャーを与え、歴戦の戦士達に恐怖を植え付け、戦意を喪失させた。死を覚悟しているものでも関係無く戦意を喪失させた（機械には効かない）。  
詳細：10傑集の一人。暇つぶしで破壊した世界は数知れず。あまり目立たないのが本人の悩み。

くロソノアレ・イヴく

髪：ピンク

目：赤

服：『フェイトステイナイト』の黒桜の服（あれは服といえるのか？）

年齢：16歳

スリーサイズ：B85/W56/H87

体重：46kg

性別：

種族：物理的・概念的な闇そのもの、億千万の闇、アンリ・マンユ

魔力光：黒、ピンク

好き：殺し

嫌い：光

性格：穏やかな性格

レベル：測定不明

得意武器：なし（でもアンリ・マンユの力で武器を作って使ってるらしい）

スキル：人間や動物や吸血鬼や宇宙人や精神体の憑いた武器や鬼などの怪物を呑み込み同化できる。憎しみや恨みや後悔を持たない明るい心を持ったものはアンリ・マンユの力を使い絶望に染めてから取り込む。闇であるため実体が無く、攻撃をすり抜ける。周囲の人間や動物や吸血鬼や宇宙人や精神体の憑いた武器や鬼などの怪物の持つ魔力を奪い吸収する。魔力を持つものも持たないものも疲労し動けなくなる。射程は400m超以上。力の強いもの（魔力を持たないもの含む）ほど影響されやすく、数分で強いものも弱いものも疲労で立っていられなくなり、倒れるものも出始める。核爆弾などの現代兵器全て、火・水・土・風・雷・光・闇などの魔法、

原子分解、空間破壊、エネルギー吸収、吸収同化、異空間送り、発狂、発狂の効かない相手に効く精神攻撃と精神操作、空間ごと圧縮して時空の彼方へ放逐する攻撃は無効。さらに周囲の人間の心の力タチをカタチにする（そのシステムは要するにワラキアと同じ仕組み）

詳細：十傑集の一人でかつては暗い雰囲気だったが、ラゲーシスと知り合ってから明るくなっている。さらに能力も優秀で他のメンバーとも仲良くなっている。

（ヴァーグスナイト（これ兵士））

髪：なし

目：なし

服：黒い鎧

年齢：なし

体重：250？

性別：不明

種族：死霊騎士

魔力光：黒

性格：機械的

レベル：45000

得意武器：なし

スキル：幻想殺し（本家より精度が上）

詳細：極神十傑集配下の兵士の一つ、倒しても何度でも復活する

極神10傑集設定(後書き)

真王「まだまだ。ちなみにユリスは追われの身になってレイヴィスとベアトリスと一緒に行動しています。現在エンツが仮のメンバー」

## ハードチーム（前書き）

真王「私が作った最強の守護女神たちだ」

## ハードチーム

〈チート・ザ・ハード〉

髪：真紅のロング

目：真紅

服：チートプロセッサ（レインボーカラー）（マジック・ザ・ハードのようなプロセッサユニット）

年齢：1億歳？

3サイズ：102 / 56 / 83

体重：40キロ

性別：

種族：異常の守護女神

好き：真王様

嫌い：命令に背く愚か者

性格：極めて冷静沈着。真王に忠義を持っている

レベル：超絶レベル

得意武器：全種類

スキル：アンチ・チート（チート、バグ、神、チート殺しの能力を持つ者に大幅にステータスを下げる）

詳細：真王が作り出した女性を主に守護女神の様な20人の最強集団『<sup>ザ・ハード</sup>守護女神』のリーダー格。常に冷静沈着で真王のためならば何でもする完璧な存在。

〈ゴッド・ザ・ハード〉

髪：金色

目：水色

服：ゴッドプロセツサ（ゴールドカラー）（キングギドラのようなプロセツサユニット）

年齢：一億歳？（でもチートより下）

3サイズ：105/56/84

体重：ゴッド「我が教えるかバカ者」

性別：

種族：神の守護女神

好き：我をあがめる者

嫌い：我をあがめない者

性格：我儘、よく手を焼かされる

レベル：超人無敵

得意武器：ゴッド「いらぬわ」

スキル：神の力（ゴッド「我が神の力があれば貴様の技を倍にして返してやるわ！」）

詳細：『<sup>ザ・ハード</sup>守護女神』の一人。ドが付くほど傲慢な態度で我儘で偉そうにしている。その我至上主義な性格なため周りから手を焼かされる。そんな傍若無人にもかかわらずその実力は本物である。

（サタン・ザ・ハード）

髪：栗色

目：赤

服：サタンプロセツサ（ダークカラー）（魔王を思わせるプロセツサユニット）

年齢：サタン「ねえ？お話ししようか？」

3サイズ：サタン「なのはちゃんよりスタイルは上だよ」



体重：サタン「頭ひやそうか？」

性別：

種族：魔王の守護女神

好き：銀時、なのはちゃん、ヴィヴィオ、ビビちゃん

嫌い：みんなを傷つける人、

性格：なのはとほぼ同じ

レベル：本気出すと星が壊れるかも…？

得意武器：槍、杖

スキル：魔王の畏れ（威圧する声を聞いた瞬間どんな奴でも恐れてしまう）

詳細：『ザ・ハード守護女神』の一人。例えて『みんなの保護者さん』みたいな感じ。しかし怒らせると魔王でも神でも震え上がらせる殺気を放てる。周りから魔王なんて呼ばれるが彼女からすればほめ言葉らしい。容体はなのはが髪をおろして胸がポインとでかい感じ。

（バーサーク・ザ・ハード）

髪：逆立った赤

目：金色（ほぼ白目）

服：バーサークプロセッサ（レッドカラー）

年齢：バーサーク「オボエテネエヨ」

3サイズ：102 / 55 / 84

体重：45キロ

性別：

種族：狂気の守護女神

好き：たたかい、殺し、破壊、強い奴

嫌い：暇、だれもない、ガキンチヨ、弱い奴

性格：狂戦士。

レベル：サタンとほぼ同じくらい

得意武器：斧

スキル：狂気の心（たたかう回数が多いほど力が上がる）

詳細：『守護女神』の一人。たたかうことしか頭にない狂戦士。女性でありながらムツキリした筋肉と体中に傷だらけが目立つ。強者にしか興味がなく、弱者には切り捨てる振る舞いをする。好きな言葉は『弱肉強食』。

（ジャイアント・ザ・ハード）

髪：太ももまでの金髪

目：水色

服：ジャイアントプロセス（オレンジカラー）

年齢：本人曰く年長者らしい

3サイズ：157/98/147（通常時）

体重：つぶれてます

性別：

種族：巨大の守護女神

好き：自分、みんな、生き物鑑賞

嫌い：お調子者

性格：戦いが好きな感じ

レベル：845387000

得意武器：斧、ハンマー、モーニングスター

スキル：巨大化（体が大きくなる。最大は地球がバランスボールぐらい）

詳細：『守護女神』の一人。メンバーの中で最高の身長を持つ。通常時は3メートル以上あり、よく目立つ。それゆえか大喰な一面も。

くエレメント・ザ・ハードく

髪：肩までが緑、腰までが水色

目：赤と青のオッドアイ

服：エレメントプロセツサ（6色カラー）（8つのエレメントマターが宙に浮いている）

年齢：1億年ある？

3サイズ：91/52/82

体重：焼き焦げている

性別：

種族：属性の守護女神

好き：読書、実験、サイエンス

嫌い：めんどくさいこと

性格：普段は軽い性格だが、サイエンス系に関わると本気の感じになる

レベル：宇宙レベル

得意武器：エレメントマター

スキル：エレメントマスター（すべての属性の攻撃力が数倍、耐性が数倍になる）

詳細：『ザ・ハード守護女神』の一人。炎、水、氷、風、雷、土、光、闇の8色のエレメントマターを持つ。サイエンス系が大好きで、本気になればアインシュタインよりもすぐれているとされる（かもしれない）。

くドラゴン・ザ・ハードく

髪：水色

目：金色

服：ドラゴンプロセッサ（パープルカラー）（竜のようなプロセッサユニット）

年齢：ドラゴン「しらん」

3サイズ：111 / 56 / 86

体重：67キロ

性別：

種族：竜の守護女神

好き：たたかい、竜の誇り

嫌い：礼儀を知らないもの、相手を見下す存在

性格：多少王格をもっている

レベル：無敵レベル

得意武器：大型剣

スキル：ドラゴンブレイブ（ダメージ量が多いほど攻撃力が増す）

詳細：『<sup>ザ・ハード</sup>守護女神』の一人。竜を守護女神化した感じで竜としての品格があるらしい。それでメンバーの中でまとめ役としている。

くマツハ・ザ・ハードく

髪：オレンジ色

目：サファイアカラー

服：マツハプロセッサ（ブルーカラー）

年齢：打ち抜かれたあとが：

3サイズ：103 / 56 / 85

体重：撃ち抜かれた跡が：

性別：

種族：音速の守護女神

好き：速く進むこと、風を感じることに、のんびりしたいこと  
嫌い：面倒なこと  
性格：ストパンのシャーリー的な。  
レベル：マツハ「1秒で地球を余裕で一周出来るぜ！」  
得意武器：銃（スナイパー、ショット、ガトリング含む）  
スキル：マツハダツシュ（音速を超えるスピードを出す。最大で1秒で地球を5周できるほど）（ただし服は破けてしまうが）  
詳細：『<sup>ザ・ハード</sup>守護女神』の一人。素早さに特化した守護女神。常に速さには自信があり、メンバーの中では彼女が一番早い。容体はストパンのシャーリー。

（ファントム・ザ・ハード）

髪：白髪

目：黒

服：ファントムプロセスサ（グレーカラー）（死神を思わせるプロセスサユニット）

年齢：ファントム「忘れちゃった」

3サイズ：96 / 54 / 82

体重：幽霊なのでない

性別：

種族：亡霊の守護女神

好き：脅かすこと、いじめること、サチコちゃん

嫌い：ノーリアクションな人、つまらないこと

性格：当方の幽々子のようなゆるゆるな性格

レベル：ファントム「さあ〜？わかんないや〜」

得意武器：霊の魂

スキル：インビシブル（霊体なので誰も触れない。幽霊同士なら触

れる)

詳細：『<sup>ザ・ハード</sup>守護女神』の一人。下半身が幽霊のようにない。それ故霊体の体なので触ることが出来ない。(あることをすれば触れると思うが…)いつも消えては現れると言う相手を驚かせる困ったさん。口癖に『ホロロ』という。容体はファントムブレイカーの心愛。

〈クイーン・ザ・ハード〉

髪：黒

目：金色

服：クイーンプロセスサ(ブラックカラー)(女王様なプロセスサユニット)

年齢：クイーン「女性に年齢を聞くのは失礼じゃありませんか？」

3サイズ：103 / 56 / 85

体重：クイーン「殺しますわよ？」

性別：

種族：女王の守護女神

好き：女の子、貧弱な男をいじめること、悲鳴、ホラー映画鑑賞、自分に忠実な存在

嫌い：ブ男、自分の意に反するもの(仲間には反論しない)

性格：偉そうな女王様<sup>トミス</sup>

レベル：サタンとほぼ同じ

得意武器：鞭、拷問用具

スキル：サディスティック(レベルの低い者どもにダメージ量が10倍)

詳細：『<sup>ザ・ハード</sup>守護女神』の一人。雰囲気そのものが女王様で一目置かれる存在(ほとんどの男性陣談)。同僚であるマゾチック・ザ・ハードとエッチ・ザ・ハードとは仲良しで、3人そろって『変態3人組』

と呼ばれている（本人は『クイーンと手下』と改名しろと言ってきたこと）。

くバグ・ザ・ハードく

髪：紫のツインテール（蜘蛛のような6本脚見たい）

目：紫

服：バグプロセッサ（タランチュラカラー）（蜘蛛のようなプロセツサユニット）

年齢：バグ「数えてない」

3サイズ：98 / 53 / 82

体重：バグ「測ってない」

性別：

種族：虫の守護女神

好き：虫、ポーっとすること

嫌い：小さな生き物（とくに虫）を傷つける

性格：なんだか機械っぽい…

レベル：サタンよりは下くらい

得意武器：鎌、槍

スキル：大量地獄（大量に全種の虫を召喚する。虫ですらないものも出るが）

詳細：『<sup>ザ・ハード</sup>守護女神』の一人。虫をこよなく愛する昆虫主義（虫全般でも愛する）。ただしゃべり方が一言一言なため多少理解しづらい。

くナース・ザ・ハードく

髪：ピンクのロング

目：ピンク

服：ナースプロセスサ（ホワイトカラー）（ナースさんのようなプロセスサユニット）

年齢：ナース「教えません!!」

3サイズ：98 / 55 / 86

体重：ナース「絶対だめです!!」

性別：

種族：看護師の守護女神

好き：笑顔を見ること

嫌い：笑顔が消えること

性格：やさしい天然ボケ

レベル：メンバーの中で最弱の存在…とされている

得意武器：注射器

スキル：ラブヒールパワー（本人いわく、愛の力で回復するというらしい）

詳細：『ザ・ハード守護女神』の一人。メンバーの中で回復士的なポジション。極度の天然ボケで尚且つ躓くと注射器を飛ばしてきたりひっくり返る際に靴が人の顔にあたりたりなどちょっと危険なところもある。容体はコンパを守護女神化させたイメージ。

くシャドウ・ザ・ハードく

髪：ホニテ青紫

目：赤

服：シャドウプロセスサ（ブラックブルーカラー）（忍者のようなプロセスサユニット）

年齢：シャドウ「・・・」 数千万年も生きてと言いたいようだ。



3サイズ：104 / 55 / 83

体重：38キロ

性別：

種族：忍者の守護女神

好き：静か、クナイでジャグリング、甘いもの

嫌い：うるさい

性格：ほぼ無口

レベル：サタンとほぼ同じ

得意武器：クナイ、手刀、刀

スキル：影道（影の中に入り込んで移動する。さらに影を操れる）

詳細：『サ・ハード守護女神』の一人。シヤドウメンバーの隠密者のなポジションで無口な女忍者な感じである。忍者というからには忍者らしい素早さと俊敏さを兼ね備えており、更には影を操れるから影とシヤドウいうこともある。

〈サムライ・ザ・ハード〉

髪：白銀ポニテ

目：黄緑

服：サムライプロセツサ（シルバーカラー）（侍の雰囲気を持つプロセツサユニット）

年齢：サムライ「サタンよりかは長いな…」

3サイズ：104 / 58 / 83

体重：46キロ

性別：

種族：侍の守護女神

好き：パフェ、甘いもの、ジャンプ

嫌い：仲間が傷つくこと

性格：めんどくさい、甘党、ジャンプ愛読者

レベル：サタンより上

得意武器：刀（木刀が好き）

スキル：銀夜叉（リミッターを外すとチートでさえも凌駕する能力を出せる）

詳細：『ザ・ハード守護女神』の一人。基本は何もしないグータラな奴。更にはパフェが好きで甘党でジャンプ愛読者。性格上銀時とよく似ているので『銀時の女番的な奴』とされている。いざというときは白夜叉銀時でも引けを取らない実力を持っている。

（ロリータ・ザ・ハード）

髪：ピンクのショート

目：緑

服：ロリータプロセツサ（ピンクカラー）

年齢：ロリータ「みんなより若いよ」

3サイズ：ペツタンコスレンダー

体重：29キロ

性別：

種族：幼女の守護女神

好き：強いお兄ちゃん、おいしい物、おもちゃ

嫌い：弱いお兄ちゃん

性格：無邪気な子供

レベル：ロリータ「ナスお姉ちゃんより上かな？」

得意武器：杖

スキル：ちやいるどぱわー（よく分からないがとにかく凄い能力だ、と彼女の見解らしい）

詳細：『ザ・ハード守護女神』の一人。メンバーの中で最年少。子供らしくて

子供らしいしぐさなど本当に子供らしい。だがそれ故に迷惑なことがしばしば。

くソニック・ザ・ハードく

髪：水色

目：蒼

服：ソニックプロセツサ（ウォーターカラー）

年齢：ソニック「教えません」

3サイズ：105 / 56 / 85

体重：ソニック「死になさい」

性別：

種族：音波の守護女神

好き：歌うこと、マツハ

嫌い：特にない

性格：物静かっぽいが歌のことになると熱が入る

レベル：ロリータよりも上と思われる

得意武器：マイク

スキル：ソニックソング（歌と音波の波長で敵味方のステータスを変化）

詳細：『ザ・ハード守護女神』の一人。歌を愛する演奏者。歌の中ではトップクラス（と彼女が自画自賛。だが実力はプロ顔負けの本物）。たとえるなら魔神探偵のときの心を揺さぶる歌姫的な人。

くマゾチック・ザ・ハードく

髪：金髪

目：紫

服：マゾチックプロセスサ（イエローカラー）

年齢：汚れていて見えない

3サイズ：108 / 55 / 83

体重：汚れていて見えない

性別：

種族：ドエムの守護女神

好き：いじめられること、クイーン様、性関係

嫌い：いじめない愚か者

性格：極度のマゾヒスト。クエイサーのド 姉妹

レベル：クイーン以下らしい

得意武器：拷問道具

スキル：ド パワー（ダメージが多いほど能力が上昇）

詳細：『ザ・ハード守護女神』の一人。超極度のマゾヒストでいつも誰かにいじめられるようにねだる。いじめてくれないとわかると残虐になつて躊躇なく殺す。クイーンとは仲がいい（というかクイーンがSでマゾチックがMの関係であるが）。

（プラント・ザ・ハード）

髪：緑（なんか触覚が多い）

目：緑

服：プラントプロセスサ（グリーンカラー）（葉っぱやツタや花などがあるプロセスサユニット）

年齢：プラント「???」（覚えてないらしい）

3サイズ：99 / 56 / 82

体重：44キロ

性別：

種族：植物の守護女神

好き：植物、なりきり、小さな子ども

嫌い：汚い水、環境破壊

性格：いつもぽけくっとしているが、植物を傷つけると怒るらしい

レベル：メンバーの中で中間あたり

得意武器：槍

スキル：光合成（植物特有の能力。光を浴びると体力が急上昇する  
（傷ついてもすぐ直る））

詳細：『ザ・ハード守護女神』の一人。植物主義者で植物をこよなく愛する、  
バグとは仲がいいし、害虫が植物を食べてもとりあえず許すそうだ。

くエッチ・ザ・ハードく

髪：腰までのピーチ色

目：水色

服：エッチプロセッサ（ピーチカラー）（露出度の高いプロセッサ  
ユニット）

年齢：クイーンと同じくらいらしい

3サイズ：105/57/85

体重：エッチ「教える気はないわ」

性別：

種族：色欲の守護女神

好き：エッチなこと、性行為、クイーンとマゾチック

嫌い：とくにない

性格：とにかくエロい事が好き

レベル：クイーンと同じくらいかも

得意武器：いろいろ

スキル：色欲の護衛者（クイーン、もしくはマゾチックの近くにいるとパワーが上がる）  
色欲のオーラ（エッチのオーラを受けた人物が発情する。その時笑みやキスを受けると発情率が上昇そして暴走する）  
詳細：『<sup>ザ・ハード</sup>守護女神』の一人。四六時中エロい思考を持つ変人。同士であるクイーンとマゾチックとは肌を重ねあつた仲。ときどき危ない行動がするのもある。

〈ビースト・ザ・ハード〉

髪：茶色の太ももあたり

目：金

服：ビーストプロセスサ（ブラウンカラー）（猛獣のプロセスサユニット）

年齢：ビースト「興味無いな」

3サイズ：102/55/82

体重：46キロ

性別：

種族：猛獣の守護女神

好き：肉、動物、自然、生物界の王になること

嫌い：人間、機械

性格：血の気の多い

レベル：サタンあたり

得意武器：爪

スキル：ビーストブレイヴ（戦えば戦うほど戦術力があがる）

詳細：『<sup>ザ・ハード</sup>守護女神』の一人。猛獣：いや、生物界の王に君臨することをたくらんでいる。そのためによくサタンに挑み、勝ち負けの差が平均的の位置まで来ている。猛獣ゆえか頭の回転はあまり良くない

いが戦術に関してはぴか一強いらしい。

## ハードチーム(後書き)

真王「結構多かった……。後質問は今受け付けません」

チート・ザ・ハード「次回へ御待ちを」

ゴッド・ザ・ハード「次からは我に宝具を授ける」

サタン・ザ・ハード「待つてるよ」

バーサーク・ザ・ハード「ヒヤッハ〜!!ハヤクシロヨ〜!!」

ジヤイアント・ザ・ハード「じゃあな」

エレメント・ザ・ハード「僕も待つてるよ」

ドラゴン・ザ・ハード「……フン」

マツハ・ザ・ハード「勝負しようぜ。スピードでな!」

ファントム・ザ・ハード「ホロロ、おどかしちゃうぞ〜、ホロロロ」

クイーン・ザ・ハード「跪きなさい?」

バグ・ザ・ハード「私、みんな、待つてる」

ナース・ザ・ハード「怪我をしたらみてあげますよ」

シャドウ・ザ・ハード「……(よろしく)」





第一百一訓：荒地で決闘は定番（前書き）

真王「バトルものが多いですね」

## 第一百一訓：荒れ地で決闘は定番

前回のお話

セレスがハプニングマスでイシュタルからレルシアをかばい、完全に治療してエルと再会した。

そしてセレスは暴君ヴァルバトーゼと共闘でイシュタルと対峙する。

イシュタル「ふふ、まずは小手調べだ。ハッ！」

イシュタルは両手に黒い魔力弾を形成しそれを飛ばす。

セレスはヒラリと、ヴァルバトーゼは蝙蝠に変わってかわした。

イシュタル「まだ終わっていないぞ！」

今度は紺色の魔力刃を作り出し、クロスカッターの如く繰り出した。

セレス・ヴァルバトーゼ「デヤッ！」

セレスとヴァルバトーゼは2人同時に剣でぶつけカッターを消した。

イシュタル「やるな！その小僧と言い暴君の噂は本当だったんだな！」

ヴァルバトーゼ「その通り！俺達はイワシの力で強くなったのだ！」  
セレス「おい、一員に入れるな。っていうかイワシで強くなってるわけないから」

イシュタルは楽しそうに、セレスはヴァルバトーゼに突っ込む。

イシュタル「だがじかんをくらうのもめんどうだ。まとめて吹き飛ばしてくれる!!」

ヴァルバトーゼ「良いだろう。受けてたつぞ! 別魔界のの大将よ!」  
セレス「やれやれ、本気を出すか…」

と上記3人の魔力が上昇した。

そして詠唱を始める(セレス除く)。

普通魔界にファイアなどの魔法は詠唱はないんだが、召喚の類なら話は別。

そして2人の魔方阵から巨大な二体が出現した。

一体は巨大な黒い体にデーモンと思わせる雰囲気存在。

もう一体は巨大な体をすっぽり覆えるほどの巨大な翼、長い楔型の尻尾と凶悪な顔を持った悪魔。かつては吸血鬼の王として君臨していた者。その名も

ヴァルバトーゼ「暴帝・フルークフリーデ!!!」

フルークフリーデ「ルオオオオオオオオオ!!!」

ヴァルバトーゼに答えるように暴帝が降臨した。

イシュタル「滅びよ! シュワードブレイガ!」

ヴァルバトーゼ「やれ!」

セレス「こっちも忘れてもらっちゃ困る。魔神大次元斬!!!」

デーモンは巨大な魔力玉を形成し、口で咆哮の如く発射する。

フルークフリーデは両翼から黒いエネルギー波を放出した。

そしてセレスは黒い魔力刃を出した後剣に魔力を溜めて巨大な閃光を発射した。



やがてどんどん亀裂が大きくなり、

ガシャーン！

壊れた。

イシュタルの服は某妖精の尻尾の女鎧騎士の私服姿を黒くした感じである。

イシュタル「ムウ、我が鎧を砕けるとは…、その小僧、名を何と  
言う」

セレス「セレス、セレスティア・スパードだ」

イシュタルがセレスを見て言い、セレスは応える。

鎧が砕けたのはセレスのせいだとにらんだからだ（当たっているがな）。

イシュタル「覚えておこう、この私が自ら」

真王「はいはい、もう終わったのでさっさとこっちこい」

イシュタル「グアツ！首を引っ張るな！っていつか放せー！  
！！」

言いかけたところで真王に捕まれた。

イシュタルはじたばたと駄々っ子のように暴れている。

ちなみに相手選手がリタイアということで異界戦士チームは10マス進むことになった。

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム 155

剣聖チーム 151

スマブラハーツチーム 154

学園チーム 149

プリティレディズチーム 159

女神チーム 152

とある転生チーム 154

狂乱チーム 149

メテンスナイトチーム 148

ドラゴンネイルチーム 147

リリカル仮面ライダーチーム 152

真選組チーム 147

異界戦士チーム 156

リリカル銀魂チーム 148

プリティレディズチーム トップ。

現在 12 ターン目

次のターン・リリカル銀魂チーム

現在銀時達が進むエリアは荒れ地エリア。

ごっこつした岩がいつぱいあって平原と比べると危険度が少しある。  
ちなみにこのエリアにはバトルやデュエルマスが多くみられる。

銀時「よし、神楽」

神楽「よし来たある！」

神楽はブロックを叩き8を出す。  
剣が交差したデュエルマスだ。

真王「デュエルマス。参加しているチームのうち誰かと対戦します」  
神楽「徐々に暴れられるね！」

神楽がワクワクしているとモニターが現れた。

『夜兎の因縁（神楽VS夜帝竜）』

夜帝竜「!？」

これを見た夜帝竜は驚いたあと、にやりと弓を引いた。

夜帝竜「クククク、しばらく暴れてなかったからな。それにまたお前と対戦することになるとはな」

神楽「それは向こうの私の話ある。初対面にそういうことはないよ」

詳しくは烈火竜さんの『DRAGON NAIL』竜の爪』の『姉って、兄貴より頼れる存在になっている。』より。

真王「では神楽対夜帝竜の対決。始め！」

コングがなった。

神楽「ホワタア!!」

夜帝竜「オリヤア!!」



開始と同時に神楽と夜帝竜の足同士がぶつかり合った。

神楽「歌舞伎町の女王の座は渡さないネ!!」

夜帝竜「興味ねえよ! かつ井食って喧嘩、あたしはそれが好きでね」

拳と拳、足と足、傘と傘のラッシュ。

神楽・夜帝竜「ウオオオオオオオ!!!!」

そしてお互いの拳がぶつかり合う…

ズドオツ!

ことなくクロスカウンターで両者は顔面にクリティカルヒットして倒れ伏せた。

そして上を見ながら言う。

神楽「おいデカ傘」

夜帝竜「夜帝竜だ。イヤあえてお前だけ本名を言おう。鳳華だ」

神楽「じゃあ鳳華。今度会ったらかつ井大食い勝負ね」

夜帝竜「乗ったぜ。その言葉」

神楽と夜帝竜は倒れながら笑った。

邪王「言っておくが引き分けになったので両チーム何も進まんぞ」

神楽・夜帝竜「・・・あ」

リリカル銀魂チーム・ドラゴンネイルチーム「あ、じゃねえよ!!」

両チームは神楽と夜帝竜をストンピングする。

ヒーローズターン

メアリ「私ね、それ！」

メアリはブロックを叩いて5を出す。  
ペナルティだ。

メアリ「何いいい!!！」

そう言う間にもモニター登場。

『なめなめしちやうぞ!』

????「ベロ〜ン」

するとピンクの体に長い舌のベロリンガが現れた。

メアリ「ま、まさか…!」

真王「そのまさかだ、舐める」

ベロリンガ「ベロベロ〜ン」

ベロリンガの舐める攻撃。

ベロリンガの舌がメアリの体を舐めまわす。

メアリ「あううう…!」

効果は（精神的に）抜群だ!

メアリは痺れて倒れた。

統夜「うわゝ、女性陣にはきついな…」

統夜は引き、相川は私じゃなくて良かったと安心していた。

剣聖ターン

咲夜「私の番よ」

咲夜はブロックを叩いて9を出す。

森羅「ってペナルティじゃん!!」

森羅の言うとおりペナルティマスに止まっていた。  
モニターが現れる。

『淫獣ターン』

全員「……………は？」

全員揃って意味が分からないといった顔をしている。  
いや淫獣の意味を知っている人は理解していた。  
なんせこの中で淫獣になった男と言えば…、

ユーノ「え？ぼく？」

真王によって転移されたユーノだ。

ジャンヌ「やっぱりユーノくんってそういうイメージあるよね」

新八「僕ら知ってますけどあれはねえ……」

ユーノ「な!？」

真王「元はと言えばなのはがユーノが変身できることを知らなかったこと。それ故に女子風呂に連れて行き、ユーノは恥ずかしい目にあうも、周りから淫獣として一生を過ごされる羽目に……」

ユーノ「それは違うってば!……」

やはりユーノは淫獣とされているらしい。

周りは少し引いている。

咲夜「あら、私ユーノ君にやられちゃうの?それでもいつか」  
全員（受け入れるの!?!?・・・お、大物だ……）

だが咲夜だけはユーノが淫獣なんてことはどうでもいいらしい。

真王「まあそれはともかく、ナース・ザ・ハード」

ナース「はいです」

するとまるで天使と思わせるピンクの髪的女性が現れた。

手には医療道具と注射器一本。

しかしネプテューヌ達女神組は彼女の姿、彼女のプロセスサユニットが守護女神と似ていたのだ。

ナース「それじゃあ注入!」

ブスッ!

ユーノ「グハッ!」

ノワール「注入じゃなくてそのままブツ刺してるだけじゃないの！  
！」

真王「そこが彼女の悪い部分である」

ナースはコンパ並みの注射器をユーノにザツクリいった。  
言わば彼女は天然ドジっこらしい。

すると薬が効いたのかユーノの様子がおかしい。

ユーノ「ガルアアアア！！」

銀時「ユーノが暴走しやがったああああ！！！！」

咲夜「ユー君！？」

もはや獣状態になったユーノ。

対する咲夜も火が付いた。

咲夜「ユー君本気になってくれたんだあゝ」

犯る気満々の彼女。

するとワイプホールが現れる。

真王「ほら、さっさと行ってこい」

咲夜「ありがとう」

ユーノ「ぐがう」

咲夜とユーノはワイプホールの中に入った。

邪王「そんなわけで剣聖チームはパートナーを待つので一回休みだ  
ぜ」

剣聖チーム「んなあほなあ！？」

スマブラハーツチーム

冥王「私の番なの〜」

冥王はブロックを叩いて8を出す。  
バトルマスだ。

冥王「頑張るの！」

モニターが現れた。

『魔王の守護女神

サタン・ザ・ハード』

モニターが現れた後ある女性が現れた。  
栗色の髪にダークカラーのプロセッサ、赤い目をしているがその顔  
は誰がどう見ても、

なのは「わたし？」

高町なのはそっくりであるからだ。

サタン「違うよ。私はサタン、サタン・ザ・ハードだよ。確かに姿  
形あなたに似ているけどね」

銀時「いやいや、一部分だけ違うじゃねえか」

ネプテューヌ「そうだよ。一部分だけ羨ましいぐらいに違うよ」

銀時とネプテューヌ、そして胸の小さい人たちがサタンのある部分を凝視する。

それはサタンのふくよかなバスト。なのは本人よりもむっちりとした大きさを冥王と同じかそれ以上ある。

サタン「ひとまずおいといて、さあ、始めようか」

サタンは赤く神々しい槍を構える。

冥王「それは？」

サタン「私の愛槍ロンギヌス、さあ行くよ!!」

冥王「面白くなってきたなの！レイジングシャベリン！」

冥王も構えて対峙する。

真王「試合開始！」

そしてコングがなった。

サタン「乱れ突き!!」

サタンはロンギヌスで乱れ突きを放つ。

普通の目では追いつけない。

冥王「（早いので、これは楽しめるの!!）ディバインバズーカ！」

冥王はすべてかわしたあとディバインバズーカを放つ。

サタン「・・・ひれ伏せ」







ビビ「うおおおおおおお！！！サタンちゃん〜ん〜ん！！！！」  
「」

するとビビがなぜかサタンに走ってきた。

サタン「わつと、ビビちゃんだっけ？」

ビビ「はい！ビビです！よろしくね」

ビビはサタンにほほ笑みをかけ、

ピタッ

サタン「魅惑の笑みはを使うのはいいけど、どうせだから私を愛してもいいよ」

口止めを受けたビビだったがばああと明るくなる。

神「あいつの百合ハーレムがだんだん近づいてきてないか？」

レヴェツカ「ビビちゃんちよっとうらやましいわ」

グレイ「……………」

神とレヴェツカは興味深そうに言い、グレイはどうでも好きそうだった。

学園ターン

ヤルオ「僕の番だおWWW」



で・・・

ネプギア「きもちいねお姉ちゃん」

ネプテューヌ「温泉サイコー！」

マリオ「今までの疲れをリフレッシュできるなこりゃ」

クッパ「吾輩もだ」

光翔竜「フェイトしゃまの、太ももとたわわな胸が…（ちょっと鼻血）」

真王竜「パラダイス理想郷だ」

ギルシア「ホレホレ！お兄さんが洗ってあげるよ」

ラム「うっさい近寄るな変態！」

ビビ「もふもふ」（〃〃）

サタン「やん、くすぐりたいよ」

神「ガツハツハツハ！愉快だね」

レオン「これもよしか…」

ガレーナ「サウナはあるか？」

真王「あるぞ？我慢大会はご勝手に」

神楽「てめ、むかつく胸しやがって、こっちによこせよ」

アリス「ふふ、将来お前にも吉が来るぞ」

咲夜「ユーくん、私の体洗って」

ユーノ「はい咲夜さん」

森羅「お前らいつの間にならぬ？」

統夜「思うんだが胸でかの女多いな……」

達也「ああ、プルンプルン揺れてるな……」

相川「2人ともどこ見てるの!？」

メアリ「好きで大きくなっただんじやないよ……」

エール「コヨリ……」

コヨリ「エール……」

セレス「おい、そこでいちゃつくなよ」

勇華「なら私達もやりましょ？」

カイン「何で俺らも？」

イシユタル「なぜ妾まで？」

ディケイト「ついでだと」

レイシア「……」

リルシオン「……」

ユリス「疲労が取れるわね」とあるごたごただけがをしていたが

真王たちによつて癒された。

隆次「だな」

レイヴィス「あいつは現れねえな」

茨木童子、トミローツド、沙夜、毒牛頭、毒馬頭「……」

・（真王やチート・ザ・ハードらによつてばこられた拳句捕まっている。そして気絶している）

そんなわけで次回へ続く。

リル「ばぶ!（じゃあね〜）」

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

真王竜「ドラゴンネイルの真王竜だ。よろしく頼む」

光翔竜「光翔竜です」

白天竜「白天竜よ」

銀八「おし、ペンネーム『なめ猫』さんからだ。俺……え？襲撃くらった？……はい、とりあえずやばくなったらラムザ達をそつちに……うん、それじゃ気をつけて……（ケータイ）……はい失礼しました、なめ猫です」

ラムザ「どうしたんだい？」

俺「後ですぐに話します。ひとまず感想を」

ラルム「ええと…まず、がすとちゃんが出て来てくれたことだね」  
ラムザ「うん、あれは嬉しいことだよ。仲間にしてもいいんじゃないかな？」

俺「で、あとは…フェイトさん…例え貴方がよくありがちな変態だったとしても、1つのフェイトさんですよ…」

ラムザ「それ、フォローしてるつもりか…？」

俺「では、質問です」

がすとへ

銀さんを値段で表すと、いくらぐらい？

ビビへ

最近すっかり顔文字をやらなくなったが、大丈夫か？

ネプ姉妹へ

mk2原作でPV作ったけど、次に作るならどんな姿とBGMで作りたい？

俺「以上、ではまた」『ズバリ答えましょう』

がすと「非売品ですの」

ビビ「え？そうかな？（。ー。？）」

ネプテューヌ「演歌デビューしちゃうぞー！」

ネプギア「は、恥ずかしいよ…！」

真王竜「PVか」

光翔竜「よし！フェイト様の素晴らしいPVを作らなければ！」

白天竜「やめなさい。『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい」

真王竜「うむ、次はペンネーム『鳴神 ソラ』だ。『マリオ』なかなか良い展開だな」

ルイージ「山崎君；」

明久「次は荒地エリアですかね？」

クッパ「ふむ…どうなるのやら…」

冥王「なの」

ムッツリーニ「……………質問『ウチのチルノについてどう思う？』ちなみに馬鹿とか？以外ので頼む』」

ネス「銀さんに質問『自分のトランクスを取り合う人たち見てどうでした？』」

チルノ「アンバリーに質問！『ロボット以外に武器も作れるの？』」

次回を待ってます！『ふむ、わが竜の爪の人材にしようか』

銀時「俺のトランクスで何やってんだよ…」

アンバリー「もっとちろんできるよ！」



光翔竜「発明が出きるんですか！いいですねえ、『鳴神 ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

白天竜「次はペンネーム『黒神』さんよ。『質問します。』

真王へ

何か『マリオパーティ』シリーズで新作が発売される予定があるようですので、僕はその時に買いますが真王さんも買いますか？』」

真王「面白ければ買いますぜ！『黒神』さん、どうも！」

銀八「次い、ペンネーム『月光閃火』さんからの質問だ。『ども…月光閃火だ。』

フウ…。(そう言いながら、一息つく)

輝刃「お帰り閃火…結構お疲れのようだな？」

まあな…【アカシック・レコード】への【アクセス・ライド】は、少々精神を使うからな…。

輝刃「ハハハ…(苦笑)それで発狂しないのだから凄いや…(汗)。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1. アリアに質問…正直言って、閃火に頭を優しく撫でられるの…満更でもないか？

ハハハ：直球行くね…（汗）。次は俺からだ。

2・真王と邪王に質問…というかアドバイスだ。今さっき究極憎悪テイアナの【余分憎悪】が浄化しているみたいだから、軽いチョップ一発で全ての憎悪がガシャポンみたいにスッコンと塊で抜けてくぜ？一回試してみるといいよ…もちろん、ちゃんと『軽く』だからな？

輝刃「確かに：真王と邪王の場合、『面白そうだから』って理由でおもいつきりチョップしそうだからな…（汗）。」「ズバリ本人が答えよう」

アリア「確かにそうですが、ネプテューヌ様のやさしい柔らかかな手の温かさのほうが一番ですね」

真王「そんなわけで『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『フリーダム』さんだ。『Sフリーダム』また色々…」

ジャスティス「バスに轆かれるって、イベントじゃなくてハプニングだと思っただが…」

デステイニー「ラバーズもヤバイ方向にいつてるしな…」

レジェンド「こっそりローエングリンやジェネシスを仕込むか…」

アカツキ「お前：たまに黒くなるよな…」

バスター「とりあえず、質問に行くぜ」

全員に

次の四つのミニゲームの内やりたくないのは？

- 1・ジユラシックパッくん
- 2・クツパの気持ち
- 3・ポム兵わたし
- 4・オットット！ つなわたり

デュエル「今回は、一つだけか…仕方がないか」

更新楽しみにしてます』まあ皆さんは3番が一番嫌という意見が多かったですね。『フリーダム』さん。廊下に立ってなさい。次はペンネーム『ケン』さんだ。『統夜』あゝあゝ…可哀想な人達が続出…。」

龍華「そうですね…誰が優勝するのか気になってしまいました」

統夜「そうだな…。」

銀時ラバースへ質問

貴方達は銀さんのトランクスを巡って争ってましたが…脱ぎたてのトランクスも狙っている変態に進化するのですか？（黒笑）

ビビへ

もしなのはがしましまパンツ収集という趣味に走ったらドン引きしますか？

リリ銀メンバーへ

もし龍華と戦う事になったらどうしますか？

統夜「一番目は腹黒いな!!」

龍華「黒神さんや黒龍さんみたいな腹黒さの素質があるのでしょうか?」『では・・・』

ラバーズ「銀さんのトラ……………ゲフンゲフン!ならないよ!」

真王「どうだか。次」

ビビ「なのはちゃんは純粹のままなのよオオオオオオオオオオオオオオオオ!……!」

真王「現実逃避か。次ですが、誰なのか知りません。『ケン』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「つぎだ。ペンネーム『支配者』さんからのしつもんだ。『100話達成おめでとつございます。』

真王さんに質問です

犯罪組織マジエコノムは敵キャラと出てきたりしますか?『でるんじゃないかねか?ロリコンデブと正義馬鹿とバーサク野郎とか。『支配者』さん。ありがとつございます』

真王竜「つぎは『鉄』からのだ。『山崎に質問します。土方の暴行はどんな感じでしたか?』それは本人から聞こう」

山崎「いつにもましてひどいです・・・」

白天竜「……『鉄』さん、廊下に立ってなさい」

光翔竜「続いてペンネーム『ウインド』さんからの質問だ。『ウインド』遂に対決か……」

リア「どんな戦いになるか楽しみだ」

ウインド「質問いくZ E！皆さんに質問。こいつらに勝てる？」

（バルバトス、ダンテ、ネロ、バージル、ムンドウス、アーカード）  
リア「俺からも真王にだ。ネプテューヌ達を強さをレベルで表すなら？」

ウインド「新しい主人公考え中」

リア「そんなにだして大丈夫か？」

ウインド「……………」

真王「普通の人なら無理だろうね。レベルで言うなら例えるとサイヤ人よりも上と思え。『ウインド』さん。廊下に立ってなさい」

第一百一訓：荒れ地で決闘は定番（後書き）

真王「温泉羨ましいぞおい！まいつか」

真王竜「いいのか；次回『怖いものは実は身近にある』テイクオフだ」

**第三訓：怖いものは実は身近にある（前書き）**

真王「屋敷エリアへようこそってか？」

## 第二二訓：怖いものは実は身近にある

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム 214

剣聖チーム 215

スマブラハーツチーム 209

学園チーム 213

プリティレディーズチーム 221

女神チーム 220

とある転生チーム 219

狂乱チーム 210

メテنزナイトチーム 217

ドラゴンネイルチーム 223

リリカルライダーチーム 221

真選組チーム 205

異界戦士チーム 213

リリカル銀魂チーム 216

ドラゴンネイルチーム トップ。

現在18ターン目

次のターン・ヒーローズチーム

チームのほとんどは屋敷エリアについている。

ここ屋敷エリアはその名の通りぼろぼろとした屋敷でいかにも何か



が出そうな雰囲気を見せている。  
俗に言えばお化け屋敷だ。

ヒーローズターン

相川「こういう類は苦手なのよ…」

と怖がりながらブロックをたたいて3を出す。  
ノーマルマスだ。

相川はほっと安心した。

剣聖ターン

さくら「よ、よし！いくよ！」

さくらはブロックをたたいて6を出す。  
ミニゲームマスだ。

森羅「さくらは一度やったからな。俺が出るよ」  
レイン「まかせる」

モニターが現れた。

『5秒ミニゲーム・よける！』

森羅「あ？」

森羅は意味が分からず首をかしげていると、

ブーーーーーン!!!!!!

森羅「おわあ!!!」

車輪のついたジャガイモが森羅を轢こうとしていた。

森羅はギリギリ避けた。

森羅「おいなんだ今のは!?!」

真王「メイドインワリオの一つ、『暴走自動車』だ。クリアしたの  
で10マス進むよ」

森羅「…ま、何でもいいか」

スマブラハーツターン

マリオ「俺らの番だ」

マリオはブロックをたたいて4を出す。

ペナルティマスだ。

マリオ「ヤベッ」

モニターが現れる。

『絵にされた』

ボンッ

マリオ『あれ~~~~!!??』

スマブラハーツチーム「ええ~~~~!!??」

また絵にされたマリオと驚くチーム。

真王「3ターンの間はそのまんまですね」

マリオ『ある意味ちよつとそれはないだろ……』

マリオはあきれ果てるのであつた。

## 学園ターン

由美「どうやら私の出番のようだね?」

恭介「なんでもいいけどはやくしようよ…」

ヤルオ「僕の後ろに隠れないでよwwww」

恭介はヤルオの後ろでガタガタ震えている。

ヤルオはやれやれとした。

由美はブロックをたたいて5を出す。

ペナルティマスだ。

恭介「オiiiiiiiiiiiiiiii!!!何やっちゃってん  
のおおおお!!??」

由美「……テヘツ」

ルシアス「殴つていいかしらあいつ」

ルーシア「いやむしろぶつ殺したい気分」

そう言ってる間にもモニターが荒れあわれる。

『キットクル、キットクル、キセツハヒトツ』

全員「????????????」

全員どういう意味かわかってない。

真王「これ『リング』である曲だぞ」

恭介「え？それって井戸の中から出てくる幽霊のことか？」

真王「もちろん」

恭介「絶望したあああ!!!!!!」

恭介は絶叫した。

そう言ってるうちに近くの扉が開く。

その先に井戸が一つ。

恭介（ま、まさか・・・）

恭介含めほとんどの人が汗を流す。

井戸から手がかけられた。

這い上がってきたのは髪の毛が顔にかかって見えないう女子。  
いよいよ魂が盗られると覚悟していたら、

貞子？「ばあ〜!!」

ほとんどの人たち「・・・はい？」

怖さどころか可愛さ100%の貞子だった。

由美「・・・なにこれ？これが貞子？」



プリティレディズターン

タバネ「さて、私の番だね」

タバネはブロックを叩いて5を出す。

何とボーナスマスだ！

タバネ「やった〜！！」

レーティア「いいわよタバネ！」

ユウカ「チャンスを掴むわ」

喜んでいるところにモニターが現れた。

『扉を開いて』

タバネ「扉だね」

タバネは近くにあった扉に手をかけようとした。

ガチャバンツ！！

タバネ「ブギヤアア！！」

扉が勝手にひらいてタバネは潰れてしまった。

モニターが現れる。

『嘘だよ馬鹿め！ケケケケケ！BY幽霊』

モニターが消えると同時に足元のボーナスマスがペナルティマスに変わった。

タバネ「騙されたアアアアア!!!」  
リアス「どうも怪しいと思ってたのよね…」

女神ターン

ユニ「いくしかないわね」

ユニはブロックを叩いて5を出す。  
クイズマスだ。

『百足』

この漢字の名前の虫は?』

ユニ「え?...とこれってたしか...(落ち着け私!前に一度こんな感じの問題が...!)ム、ムカデ!」  
真王「正解だ」

ユニは正解を引き当ててほっとした。  
メンバーは喜び、5マス進んだ。

とある転生ターン

神「俺様らの番だな」

神はブロックをたたいて5を出す。  
バトルマスだ。

神「ほう？ いったいどんな奴なのやら？」

モニターが表れた。

『魔神王

魔神王』

するとランプの魔神的なやつが姿を現した。

魔神王「我が名は魔神王なり。主が我との戦いを欲するか？」

神「この状況ぐらい察しろよ」

魔神王「うむ、ならば貴様の力、お手並み拝見としよう」

IBGM神々の歌 by 魔界戦記デイスガイア2  
(Disgaea 2 - Song Of The Gods)

神「オラああああああああ！！！！！！」

魔神王「ぬああああああああああああああ！！！！！！」

ズドドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

神と魔神王がぶつかり合った時大きな衝撃が襲いかかった。  
だが2人はお構いなしにぶつかり合う。



神「は！さすがに魔神王と呼ばれてないか！」

魔神王「我は魔神界の王、伊達にそう呼ばれてはいない！」

神「嬉しいねえ！！あんま強い奴がいなくて運動不足になりそうだったがお前ならたしになるな！」

魔神王「甘く見ておると油断するぞ。残像拳」

神「グヘッ！（なんだ？避けたはずなのに…）」

神は避けたはずなのに殴られた。

そして理解した。

神「（成程。一瞬に残像を作らせて油断させてぶん殴る技ね）」

魔神王「我が技を見切ったか。ならば魔神拳」

魔神王はガノンドロフの技を使って攻撃する。

神はヒラリと避ける。

神「何度も喰らうかよ！」

そう言う神の周りに無数のスフェアが出現、それを放つ。  
だが魔神王は転移してかわす。

魔神王「よい機会だ。我が奥義を主に見せてやるっ」

魔神王は両腕を何か突き出すようなポーズをする（ワンピースの六王ガンをイメージ）。

魔神王「魔神奥義・魔神六王？！」

ズガギッ！！



神の広範囲爆發魔法で魔神王は吹き飛ばされた。  
そしてはれると立ってるのがやつとの魔神王。

魔神王「又ハハハハ・・・、我をここまで退けさせるとはあっぱれ。  
我は満足した。何時か主を超えようぞ」  
神「はん！やれるもんならな」

魔神王は負けを認めた。

よつてとある転生チームは10マス進む。

狂乱ターン

リイン「リインの番ですう！」

リインはブロックを叩いて9を出す。  
ハプニングマスだ。

『入口に戻された！』

桂「ば、ばかなああああ！！！！」  
はやて「なんやてええええええ！！！！？？」

狂乱チームが叫んでいると大きな手が狂乱チームを捕まえ、  
屋敷工  
リア入口まで戻された。

メテنزナイトターン

チフユ「私の番だな」

チフユはブロックを叩いて5を出す。  
バトルマスだ。

ギルシア「あいつはバトル向くのか？」

レシア「彼女なら考えられますが…」

チフユ「聞こえているぞ！」

ひそひそ話する2人に怒鳴るチフユ。  
モニターが現れた。

『デメマダラキング

ダイオウデメマダラx5』

緑色の分厚い背中とただれた顔にカタツムリのように出ている目が  
特徴のダイオウデメマダラ5体出現した。

チフユ「やれやれ、私の相手がこんな奴らか」

チフユは頭をかく。

真王「おい、武器は？」

チフユ「私はこれでいい」

そう言って取り出したのは日本刀だった。

真王「ならいいが、では試合開始！」

と真王が言い切った瞬間チフユが速攻で2体のダイオウデメマダラを切り捨てた。

銀時「なっ!?!」

ネプテューヌ「あの人早っ!?!」

銀時達は初めて見て驚いた。

ギルドチームは目にはしているためあまり驚かないが。

仲間がやられたのを見て怒ったダイオウデメマダラは突進してきたが、あっさりとかわされる。

チフユ「話にならん、下等生物」

そして突進してきた奴を一閃で切り倒す。

ダイオウデメマダラ「オオオオオ!!」

後ろからダイオウデメマダラが舌で攻撃しようとしたら、

シュツ!ズバン!

チフユが刀で舌を切り刻んだ。

当然ダイオウデメマダラはもがき苦しむ。

チフユ「一刀流、灯籠返し!!」

まるでカービィでいるファイナルカッターのような動きでダイオウデメマダラを倒す。



ミニゲームマスだ。

白天竜「ミニゲームですか。どんなのでしょうか？」

モニターが現れる。

『暗闇迷宮を照らせ！（参加4人）』

真王「このミニゲームのルールを説明いたします。まず電球を持ってゴール先にあるソケットに差し込めば10マス進めますが、ジャンボテレサに電球持った人が捕まると失敗となります」

夜帝竜「これか」

夜帝竜は電球を担ぐ。

真王「夜帝竜は参加する気？」

夜帝竜「ああ」

白天竜「私も参加するわ」

魔炎竜「俺らにも活躍を出すかな」

氷刃竜「メタ発言よ」

真王「4人参加決定、ではミニゲーム始め！！」

白天竜「まずは、このデカブツを……」

真王「おい、攻撃でもしたらその場で失格にするからな。ミニゲームを台無しにすんじゃないねえ」

白天竜達がジャンボテレサに攻撃しようとしてその場でぴたっと止まる。

夜帝竜「じゃあどうするんだよ！」

真王「逃げとけ」

ルイージ「そういうルールだし……」

結局そんなことに、とりあえず白天竜達は襲ってくるテレサを追い払いながらソケットまでついた。

夜帝竜「ここか。つたくてこずらせやがって」

夜帝竜はソケットに電球を差し込む。

ピカーーーーーー！！！！！！

白天竜「きゃあああああああああああ」

魔炎竜「うおっ！？まぶしっ！？」

夜帝竜「目があああ！！目がアアアアアアアアアアアア！！！！」

氷刃竜「まぶしいいイイイイ！！！！」

突然の光にもだえる4人。

もちろんテレサたちも。

真王「うむ。どうやらクリアしたようだね」

ドラゴンネイルチームクリア。

ちなみに目を直した。

リリカルライダーターン

セイバー「では我々のターンです」





真王「ハイヴィータ失格」  
ネプテューヌ「ごめんね」

なのはともあれ試合続行。

そして長い激闘の末、コヨリは飛ばされる際にバランスを崩して落ちた。よって失格。

ネプテューヌ「これで勝つる！」

アリア「いやあ、私が勝つ」

ネプテューヌとアリアの一騎打ち。  
だが、

『タイムアップ、ドロー』

真王「残念、誰も進めなかった」

まさかのタイムアップで2人は落ち込んだ。  
落ちた2人は少しやばかった顔をした。

真選組ターン

近藤「俺達の出番だ」

近藤はブロックを叩いて2を出す。  
それは黒くて骸骨マークのマスだった。







殺神貴まどか、ホロフゼロ虚無」……………（真青で寝込んでいる）」

監視していた彼らまで被害が出たらしい。

さらに別の場所

レギス「ゴフツ！！（吐血）」

ジーク「グハアツ！（吐血）」

エンツ「時報はもういやだあああああああ！！！！！！」

エルシャダイ「……………（石になっている）」

ダヌ「俺の乙女グブラバハあああ！！！！（大吐血）」

ラグーシス・スネーカー・イヴ「オボロロロロロロロロロロ！」

カオストール「私が死んでも第二第三の私が……グハツ！（吐血）」

こっちも被害が出た。

リリカルお登勢、恐るべし。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

ソニック「HEY！アシストはおれがやるぜ！」

冥王「私の出番なの〜」

銀八「じゃあ行くぞ。ペンネーム『ウィンド』さんからだ。『銀』  
かっこいいなセレス。惚れちまうぜ」

リリス「伊達に魔神はやってないってことか。質問いにく。ハード  
の皆さんに。只今そちらで修行しているリアとシエルはどのくらい  
強くなりましたか？」

銀「こちらも。銀時にだ。以前ラバーズがトランクス取り合ってた  
よな？そんな変態やめてネプテューヌと付き合え。俺はネプテュー  
ヌを応援する。何気にお前とお似合いだぜ？」

リリス「んじゃ。リアたちによるしく」

銀「兄貴がそろそろ更新始めるらしいぜ」『ズバリお答えしましよ  
う』

サタン・ザ・ハード「今のところサイヤ人と互角レベルだね。でも  
まだまだ行くよ」

銀時「いや、そんなことしたら俺しにそうなんですけど…」

真王「サタンはスパルタだな。『ウィンド』さん、廊下に立ってな

さい。次はペンネーム『支配者』さんだ。『今回は百合物とバトル  
でしたね。

質問です。

1、チートキャラが多すぎて銀時達の強さが目立たなくなってきた  
んですがレベルでいえば銀時達はどれくらいの位置なんですか？

2、チートキャラの仲間が多すぎて鬼兵隊じゃもう全く相手にもな  
らないような状況になってきたような気がするんですけど…大丈夫  
ですか？

3、マジエコンヌ又四天王は鬼兵隊の所にいるマジエコンヌの手下で  
すか？

現実的な質問ですいません。今回はこれで」『銀さんらはランクで  
いるとAあたり。そして安心してください。』ヴァーラガルザ』さ  
んが悪役作ってみたいで。そして最後にその四天王は部下と認識  
してください。』支配者』さん、廊下に立ってなさい」

ソニック「次だぜ。ペンネーム『なめ猫』だ。『質問

チートすぎるハード達全員へ

「もうあんただけでネオ達を楽につぶせる…そんな気がするが？」

ノワールへ

「決めゼリフや登場セリフ考えまくってるけど、最近どう？」

ヤルオへ

「いつか前に、全ての女を支配するといったね？それはつまり…改



心前の誠かその父親同様、女独占することに変わらないってことだな？そう受けとるよ、OK?」

俺「ではまた」『作者どうなんだ?」

真王「確かにそうです。けど干渉は少しだけです」

ノワール「それを私に聞くな!!」

ヤルオ「失敬な。僕はそこまで非道じゃないおwww」

真王「『なめ猫』さん、廊下に立ってなさい」

冥王「次はペンネーム『鳴神ソラ』なの、『マリオ』温泉良かったな」頭にタオルを乗せている。

クツパ「うむ」 銭湯の定番牛乳を飲んでいる。

フォックス「ある意味羨ましいな」

スネーク「それにしても冥王は?」

マリオ「修行中」

明久「いや〜堪能出来た〜」

ネス「質問『冥王とサタンの砲撃を受け止める勇気がある人いますか?ちなみに真王さんと邪王さん以外で』」

リュカ「アンバリーさんに質問『武器で作るなら何にしますか?』」

フォックス「質問『使いたいポケモンは何だ?』」

次回を楽しみにしてます 『ズバリ答えるの』

真王「ギルシア、レオン、ガレーナ、チフユあたりかと思っています。  
ちなみにポケモンではゼクロムですかね」

アンバリー「サイコガンだよ」

真王「おい!・・・『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってなさい。次、  
ペンネーム『月光閃火』さんだ。』ども:『月光閃火だ。』

しかし:『サタン・ザ・ハードの強さは半端ネエな...:(汗)。まあ:  
冥獄凶砲魔王とは違って理不尽な事をしない分、純粋に可愛いと思  
える訳だけ...。』

輝刃「:『後で彼女に<sup>なのは</sup>ブツ飛ばさねければいいのだがな...:(汗)。  
あ:『質問:『行くぞ?まずは俺からだ。』」

1・転生者組(レジイも含む)に質問:『トリコ』に出てくる『ゲ  
ルメモンスター』の中で食べてみたいのは何なんだ?

あ:『確かに、結構魅力的に美味しそうなのばかりだもんな...。次  
は俺からだ。』

2・守護女神達に質問:『もし自分達の通り名が戦国BASARA風  
だったら、どんなのになりそうだと思う?』

輝刃「確かに…あの作品における武将キャラの通り名って、結構理  
にならっているからな…。まあ…守護女神達の場合だと、一部とん  
でもないので来そうだが…（汗）。」

ハハハ「確かに（汗）。特にドエムのとか色欲のとか…（滝汗）。  
トリコ見てませんがワンピースコラボで見ましたので、」

男性陣転生者組「マルヤキブタで」

真王「それからBASARA見てないのでわかりません。が、『黒  
神』さんのところに同じ質問が見えたので参考にしてみると、」

『チート・ザ・ハード：絶対異常

ゴッド・ザ・ハード：超神王者

サタン・ザ・ハード：冥獄魔王

バーサーク・ザ・ハード：狂気猛者

ジャイアント・ザ・ハード：巨人戦女

エレメント・ザ・ハード：魔道属性

ドラゴン・ザ・ハード：魔竜豪神

マッハ・ザ・ハード：音速閃光

ファントム・ザ・ハード：呪怨幻霊

クイーン・ザ・ハード：暗黒女王

バグ・ザ・ハード：超虫大神

ナース・ザ・ハード：医療天使（殺墮天使）

シャドウ・ザ・ハード：漆黒月光

サムライ・ザ・ハード：白銀女神

ロリータ・ザ・ハード：小体猛者

ソニック・ザ・ハード：音波歌士

マゾチック・ザ・ハード：努恵無王

プラント・ザ・ハード：幻想乱華

エッチ・ザ・ハード：色欲女王

ビースト・ザ・ハード：幻獣王者

真王「『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

冥王「次なの、ペンネーム『ケン』さんなの。『統夜』いや〜気持ち良かったな」

達哉「ああ。それにしても・・・大きかったな」

後ろに黒いオーラを纏った達哉ラバースがあり、統夜は顔を青ざめ

た。

統夜「あ、あの〜・・・達哉・・・胸の話はいいけど・・・後ろを」

統夜に言われるがまま後ろを振り向いた瞬間、顔をサーッと顔を青ざめた。

フィーナ「達哉・・・ちよっとO H A N A S H I I ましょう」

麻衣「統夜さん。お兄ちゃんを借りますね」

統夜「あ、ああ・・・」

菜月「行きましょう」

朝霧ラバーズの皆さんは達哉を何処かへ連れて行った。

統夜「さ、気を取り直して・・・凄まじい戦いだっとな。メアリ・・・ご愁傷さまだっとな」

メアリ「うう・・・あれはきつかったわ・・・」

ご愁傷さまとしか言えない・・・魔神や竜とか・・・規格外同士の戦いだからね。いずれお前もああいう戦いが待っているさね。質問に入りますしょうか。

真王さんへ

新しく出るPSSVitaについてどう思いますか？



統夜「おいしいいいいい！！！」

はやて「ほな・・・頭を冷やしてな」

黒い笑みを浮かべながらラグナロクを二人に放った。

統夜、メアリ「どわああああああ！！！！塵と化すウウウウウ！！！！」

黒焦げになり気絶した二人をはやては連れて帰ったそうな。

最後に銀時ラバーズとアリアに銀さんとネプテューヌ（ハープルハート）の絡みのあるエロ同人誌を差し上げます。

遊輔「なに、とんでもないものを贈ってるんだよ！！！！」

次回も楽しみにしています『作者さん？』

真王「買える金ねえよ・・・、すごい機械だけど・・・ん？（ユニの妹的な奴でも？）」

冥王「作者はほつといて次いくの」

貧乳組「すっげえうらやましいぞこんちくしょおおおおおおおおおおお！！！！！！」

真王「パターンだけだな。『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

ソニック「俺が行くぜ。ペンネーム『黒龍』さんだ。『リリース』今

回はバトルが多かったですね」

黒龍「まあ最後は皆で温泉って展開になりましたね」

アリス「中々気持ち良かったぞ」

アリア「にゃ〜…良かった」

ソラ「そうだな」

リリス「それにしても、神楽ちゃんがアリスさんの胸に嫉妬してたのが見えたんですけど…（汗）」

黒龍「二年後の神楽も結構胸が大きいですけどね」

アリス「確かそうだったな」

黒龍「それで新八がかなり神楽の事意識していました」

銀時「そう言えばアイツまったく変わってなかったよな」

黒龍「寄生型エイリアンでも新八を成長させられなかったって事でしょうか？」

銀時「それある意味悲惨だな」

神楽「そつアルな」

黒龍「じゃあ質問します」



1・ネプテューヌに質問。今の所戦ったら絶対勝てないと思う相手はいますか？

2・ネプテューヌに質問。デスノートのLと頭脳勝負して勝てますか？

3・真王さんに質問。アニメやゲームやマンガで真王さんが一番嫌いだと思ったキャラとかいますか？

黒龍「今回はこれで終わりです。次回も楽しみにしています」「」

ネプテューヌ「うん、レオンさんあたりかな。あと無理です」

真王「ネプテューヌは頭脳戦は苦手なんだよ。特に思いつかないです。『黒龍』さん、廊下に立ってなさい」

第三訓：怖いものは実は身近にある（後書き）

真王「次は浜辺のエリアだぜ！」

冥王「次回「海に来たらみんな遊びたい」テイクオフなの」

第三訓：海に来たらみんな遊びたい（前書き）

真王「今度は海エリアだぜ！あ、違った。浜辺エリアだ」

### 第百三訓：海に来たらみんな遊びたい

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム 250

剣聖チーム 250

スマブラハーツチーム 250

学園チーム 250

プリティレディーズチーム 250

女神チーム 250

とある転生チーム 261

狂乱チーム 254

メテンスナイトチーム 256

ドラゴンネイルチーム 257

リリカルライダーチーム 253

真選組チーム 256

異界戦士チーム 254

リリカル銀魂チーム 262

リリカル銀魂チーム トップ。

現在 24 ターン目

次のターン・異界戦士チーム

次のエリアは浜辺エリア。

白い砂浜と綺麗な青い海のステージだ。

・・・え？ほとんどのチームが250になってるって？  
簡単だ。みんなハプニングマスを踏んで、

『津波注意』

メア「またかよ!!! ってうわあああああああああ!!!」

ザバーーーーーーン!!!!

津波に飲まれて250マスに戻されていつているからだ。

銀時「テメー! ハプニングなんて踏みやがって!! 俺らがトップだ  
つたのに!!!」

勇華「やだ、体びしょびしょよ」

銀時はメアに怒鳴り、勇華は濡れた体を見て言う。

セレス「さすが浜辺エリア。津波で戻すだなんてな」

ジャンヌ「チームのほとんどびしょ濡れだよ」

ビビ「うう、しよっぱい(\* \*)」

マリオ「本物の海その物だな」

チーム全員みんな被害にあっているようだ。

銀時「あ、クソ。もう一回だ」

銀時はブロックを叩いて3を出す。

またハプニングマス。

銀時「ゲッ!？」

新八「お前もかイイイイイ!!!」

新八のツッコミが炸裂。

モニターが現れる。

『水着装備』

シュン

モニターが現れると同時に全員の姿が水着姿になった。

男性陣はトランクス。

女性陣はビギニかスク水あたり。

なのは「にゃ!？」

ジャンヌ「おお!?!いつの間にな!？」

ギルシア「海だからか?」

海と言えば水着だろ? BY 真王

全員「そう言う問題か!？」

全員揃って地の文に突っ込んだ。

レーティア「まあ服のまま濡れるのはいやね」

ジャンヌ「じゃあこう言うステージではこのままなの?」

シャル「そんなとこじゃない?」

ベール「海といえばこういうものですよ」

タバネ「おお、それもいいね」

ユウカ「フフツ、負けるのはあなた方ですよ」

レオン「聞き捨てならんな」

ガレーナ「うむ」

咲夜「私だつて」

白天竜「氷刃竜、ともに優勝しましょう」

氷刃竜「ええ」

冥王「負けないの！」

アリス「ふ、優勝は私だ」

アリア「じゃあ、私」

相川「みんなしていいわね」

メアリ「まったく」

シャリアローゼ・勇華「ウフフフ」

とやる気満々の女性陣。

動く度につれて彼女らの素晴らしいメロンがプルプルユサユサポヨポヨ揺れ動く。

男の子の生理現象が動かないわけがない。

なんかムラムムする...  
男性陣

そこはほつといてヒーローズターン

相川「行くわよ！」

相川はブロックをたたいて9を出す。  
デュエルマスだ。

相川「さて、だれと対決かしら？」

モニターが現れた。

「ビーチバレー対決（相川VSアリス）」

相川「ビーチバレー…か…」

アリス「よくわからんが面白そうだな」

2人はビーチバレーのステージに立つ。

そして試合開始。

アリス「フツ」

相川「ええええいい！！」

相川とアリスはボールを打つ打たれる打ち返すの繰り返し。  
しかも動く度にメロンが揺れる。

神「イヤあ絶景だね」

銀時「メロンが動いている…」

新八「駄目な大人が何見てるの！！」

神は興味本位で、銀時は下心で見ているだけだ。

そして試合終了。

結果はアリスの勝ち。

相川は少し悔しそうで、アリスは少し満足げだ。

剣聖ターン

ブロックで5を叩き、ミニゲームマスを踏む。



『ぐらぐら綱渡り』

咲夜が挑戦し、バランス保ってなんとかゴール。

スマブラハーツターン

明久「よし、僕の番だ！」

明久はブロックを叩いて4を出す。  
ペナルティマスだ。

明久「ゲッ!？」

と言ってる間にモニターが。

『タコ殴り』

ベシッ!

明久「へブッ!」

大きさ10メートルのタコが明久を殴った。

ルイージ「明久くウウウウウうん!!!」  
クツパ「地味な…」

銀時「そっちのタコ殴りかよ!!!」

タコが殴る方だった。

学園ターン

ルシアス「さて、私の番ね」

ルシアスはブロックを叩いて5を出す。

ルシアス「どんなミニゲームかしら？」

『くぐりぬけ！リンボードダンス！』

モニターが現れると人間の腰あたりの高さには棒がある。

ルシアス「クリアすればいいのね、任せなさい」

ルシアスは倒れないくらいにバランスをとって棒の下をくぐりぬける。

ただなれないことなのか足はプルプル震えている。そしてくぐりぬけた。

ルシアス「こんなもんね（あゝしんどい）」

女神ターン

ベール「次は私の番ですわ」

ベールはブロックをたたいて4を出す。  
ペナルティマスだ。

ベール「・・・いったいなんなのかしら？」

不安になっているベールにモニターが現れた。

『奪われた趣味』

ベール「はああ!!!？」

ベールは意味が分かんないというつつ込み。

するとモニターに商人（邪王兵）と客（美魚）がいて、

美魚『それら全部ください』

邪王兵『アイヨ』

袋から美男子写真とBLEゲームが見えた。

ブツンッ

ベール「いゝやゝ ああああああああああああああ!!!!」

ベールはショックを受けて気絶した。

ネプギア「ベールさんの宝物が持ち出されましたね・・・」

ユニ「いつもああいうもの大量に持つてるしかも末期症状レベルまでやるぐらいよ。いい薬じゃない？」

ネプギアは汗を流し、ユニはやれやれと首を振る。

とある転生ターン

シャリアローゼ「私の番ね」

シャリアローゼはブロックをたたいて10を出す。  
ノーマルマスだ。

シャリアローゼ「チッ」

グレイ「なぜ舌打ちする」

グレイは突っ込みを入れた。

狂乱ターン

桂「よし！この俺の運を見せてくれよう！」

桂はブロックをたたいて4を出してしまった。

『落とし穴』

ポコッ！

狂乱チーム「ああああああああああああああああああああ  
！！！！！！」

狂乱チームは落ちてしまった。

全員「あほだ……」

そう思わずにはいられない一同であった。

メテنزナイトターン

ギルシア「へ、今度は俺様たちだな」

ギルシアはブロックをたたいて10を出す。  
バトルマスだ。

ギルシア「さて、どんな奴が相手だ？」

ギルシアがわくわくしているとモニターが現れた。

『絶望なる闇の化身・ロソノアレ・イヴ』

すると髪はピンク、目は赤色、服は『フェイトステイナイト』の黒桜の服（あれは服といえるのか？）で年齢は16歳ぐらいの少女が現れた。

イヴ「は〜い？私の対戦相手は誰かな？」

ギルシア「……おい真王！俺様の対戦相手がこの激萌美少女か！？」

イヴ「／／／／／」

真王「んあ、そうだ」

ギルシアの美少女という単語に反応して少しほほを赤く染めるイヴ。  
真王はそっけなく答える。

ギルシア「・・・タバネ！アンバリー！敵のスリーサイズを調べろ！」

タバネ、アンバリー「ラジャー！」

新八、ティアナ、ルイージ、ノワール、ユニ、山崎、レイン、森羅、  
恭介

「ラジャーっておい!!!？」

ギルシアが予測を超えた命令に2人はスタンバイ済みでこたえ、突っ込み組は突っ込む。

タバネ「ロソノアレ・イヴ、B85/W56/H87、体重は46  
キロの16歳！そして下着は上下ともにシルクの白！」

ギルシア「何だとおおお!!!??？」

ティアナ「どうでもいい情報を入れるなあ!!!」

ティアナが驚くギルシアに怒鳴る。

アンバリー「ちなみに彼氏なし16年、あだ名は『イヴちゃん』」

新八「なおさらどうでもいいわああああ!!!」

新八もあきれすぎて怒鳴る。

ギルシア「それだけわかれば十分だああ!!!」

新八、ティアナ「何がどこにわかったんだあああああああ！」



スカッ

だがイヴの体がすりぬけた。

ギルシア「ぬ！？」

スカスカスカスカ！

ギルシアは拳を振るも全然聞かない。

イヴ「あははは！それが攻撃？こつやるのよ！」  
ギルシア「グア！」

イヴは手に黒い炎を纏って攻撃した。

ギルシア「攻撃が当たらねえ……」

イヴ「あなたと私じゃポテンシャルが違うのよ」

あざ笑うかのようにイヴ。

ギルシア「それになんだ？力が思うように出ねえ」

イヴ「エネルギーを吸収してるもん」

ギルシアが手をグッパしているとイヴがいう。

イヴ「そんなわけだから、くたばりなさい？」

イヴはギルシアに容赦なく攻撃を開始する。

まずは黒い魔力弾を売ったり武器を作って攻撃したり力を吸い取っ



たり核兵器や属性魔法で攻撃したりさまざまな攻撃でギルシアを苦しめる。

その上攻撃が効かないので一網打尽だ。

ギルシア「ぐああああああ！！！」

イヴ「よわいよ。全然張り合いがないよ」

イヴはつまんなさそうにい五体満足のギルシアに言う。

イヴ「ま、私達極神十傑集に手を出した時点であんたの死は確実だけれどね」

イヴは手に闇のオーラを纏う。

ギルシア「……………ク、ククク、いいたいことはそれだけか？」

イヴ「!?!」

するとギルシアが血だらけにもかかわらず起き上がった。

ギルシア「一つ予告を言ってやる。お前はその後俺に跪くんだよ」

イヴ「……………頭いかれた？」

イヴはギルシアの言葉をそんな解釈した。

ギルシア「デーンドライブ、フォックスバウンド！」

ドガッ!

イヴ「!?!?!」

ギルシアの高速攻撃がイヴの顔を殴った。

ギルシア「にがさねえよ。リトルボーイ!!」  
イヴ「くあつ!!」

今度は炎を纏って攻撃。

イヴ「な、なんで!? どうして!? 私の体は」

ギルシア「誰も触れない? ところが俺は殴ることが出来る。それは」

ギルシアがいうとおでこに目が出た。

銀時、新八、恭介「ぎゃあああああああああ!!」

当然怖がる人もいるが。

ギルシア「俺の『セカンドサイト第二の目』に不可能はねえ!!」

レーティア「この世に見えざる存在を支配する能力よ」

イヴ「でもあなたは私の力によって吸収される」

ギルシア「確かにそれは厄介だ」

だがな、とギルシアは付け加えて、

ギルシア「ちからテメエの能力を奪えばいいだけだ!!」

とギルシアはイヴを捕まえて頭突き。

ギルシア「テメエの力、覚えた!」

イヴ「そんな…!!」



十字切って戦闘終了の合図となった。

真王「ギルシア勝利。おめでとう」

ギルシア「へ！当然だ」

レーティア「かつこいいいわギルシア?!」

ギルシアとレーティアはくつつきあつ。

やっぱ夫婦馬鹿だ。

イヴ「うう・・・」

イヴは目を覚ます。

レーティア「あら？目が覚めたのね。ちょうどいいわ。ギルシアが宣言したようにあなたは忠誠を誓うことになるのよ」

イヴ「何言ってるの！誰がそんなこと!!」

レーティア「ふくん、そう?」

レーティアはニイイと小悪魔のように笑った。

レーティア「だったら…教育しつけが必要ね」

レーティアの顔が超DSになっている。

真王「他チームがちょっかい出すなよ。と言っても戦闘終了何で何でもいいがな」

全員「いいんかい!!」

レーティア「そう、だったらしつけにちょうどいいプロとかいるかしら?」

真王「いるぞ。名前からして女王にふさわしい…」

真王がいうとカツカツと足音を立ててある女性が現れる。

黒のロングヘアに金色の瞳でレオタードのプロセツサユニットを身につけて女王にふさわしい。

真王「クイーン・ザ・ハードだ」

クイーン・ザ・ハード「あなたかしら？教育されたいと言っつのは」

クイーンの笑みを見て真つ青に染めるイヴの顔。

そしてそのままずると引きずられていった。

ほとんどはイヴに合掌するのだった。

ドラゴンネイルターン

光翔竜「フェイト様ああああ！！！！僕に力をオオオオオオオ！！！！」

といいながらブロックを叩く。

出た目は3マス。ハプニング。

『津波発生』

全員「またかああアアアアアアアア！！！！！！」

ドバーバーン！！！！

またもや津波で戻される。

結局抜け出すのに長く時間がかかったそうだ。

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

森羅「アシストは俺、森羅だ」

咲夜「その姉の咲夜よ」

銀八「逆だろ。ペンネーム『なめ猫』さんからだ。『ラムザ』はい  
どうも、どんどん進んで行ってるね。半分は…行ったか？」

ラルム「んー…今250前後あたりだから…まだ続くね」

ラムザ「あと15エリアといった所か…にしても、いまだ形勢が見  
えないね。誰が勝つかまだわからないよ」

ラルム「一気に差をつけるのは、いつになるんだろうね？これ、1  
1月か12月まで続くかもしれないし、まだまだ時間あるよ」

ラムザ「そうだね。案外、この物語の峠なんだろうし」  
ラルム「ネプちゃん達、頑張ってる」

## 質問

パープルハート様とネプギアへ

「二人の剣技をアピールするしたら、自分にどんな別称をつける？（例 紫の剣聖とか、ブレイブスレイヤーとか）」

ベールへ

「最近、やりたい・またはやってるエロゲーとかある？」

銀さんへ

「次回、將軍様が来るかもね？ブリーフで」

ラムザ「もうつつこまないよ…」、『順番にお答えしよう』

パープルハート「パープルスレイヤー、そんなところね」

ネプギア「私もそれで」

ベール「『男の娘大全』というゲームを（ry」

真王「出す予定はないです。『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい」

森羅「つぎ、ペンネーム『鳴神 ソラ』さんだ。『フォックス』う  
ぶ」

明久「；」

リユカ&ネス&クツパ「orz」

マリオ（絵の状態）「何があつた？」

ルイージ「見てないの兄さん？」

マリオ「倒された…それで？」

リリカルお登勢を見せた。

マリオ「強者と見た」

ソニック「YES」

スネーク「よう言えるな」

冥王「質問なの『何でリリカルお登勢を作つたなの？』」

ムッツリーニ「……………転生者側に質問『オーケストラをやるなら楽器は何を使う？』」

リンク「質問です『屋敷エリアはテレサのお屋敷をモチーフにしたんですか？』」

次回を待ってます！『なんでもプリキュアお登勢をネタにしてみたって言つてたぞ？……う！想像したら吐き気が…』



真王「しっかりしろ。3つめはマリパ&の迷宮をモチーフにしたんです、そして2つ目」

レーティア「チェロよ」

ジャンヌ「私も」

シャル「でっかいラッパだよ」

ギルシア「俺は打楽器だな。太鼓の」

リアス「フルートよ」

イツセー「木琴で」

レオン「私はどうも無理だ」

ユウカ「バイオリンね」

ナリア「チェロで」

タバネ「ピアノでOK」

ガレーナ「余は壊してしまつから無理だ」

レシア「糸で音を弾くあの楽器です」

ヤルオ「笛でOK」

ルシアス「そう言うのは苦手よ」

ルーシア「私も」

アルテス「バイオリンで」

チフユ「指揮者だな」

森羅「成程な。『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

咲夜「次は、ペンネーム『月光閃火』さんよ。』ども…月光閃火だ。」

しかし…幻想とは言え、あのお登勢の婆さんのコスプレは無理があるよ…(汗)。回想辺りの若いお登勢ならまだマシだが…。

輝刃「だな…。他の敵キャラまでもがお登勢婆さんの年甲斐の無すぎるコスプレで阿鼻叫喚の地獄絵図と化していたからな…(汗)。

あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・真王に質問…もし鬼兵隊の面々がお登勢婆さんの年甲斐の無すぎるコスプレを見たら、どういった反応を見せると思うんだ？

あ…(汗)そりゃそっちも阿鼻叫喚は起こりそうだな…(汗)。特に変平太辺りが重症になりそうだ…(滝汗)。次は俺からだ。

2・クイーン・ザ・ハードに質問…もしかして、意外と寂しがり屋？

輝刃「…なかなかストリートな所を行くな…(汗)。けど、確かに普段から高圧的な人は…意外と心が純粹だったりするからな…。」

だろ？だからとりあえず、ナデナデ（そういつて、遠隔技法でク  
イーン・ザ・ハードの頭を優しく撫でる）『』」

真王「まず高杉以外は悶絶します。これは確か」

クイーン・ザ・ハード「そんなことはないわよ。暇だと感じたら遊  
びに行くだけだし」

真王「というわけで『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

銀八「次、ペンネーム『ケン』さんだ。『統夜』あれは何処かの漢  
女と同等の破壊力を誇るな・・・」

あれは恐ろしいからね・・・いいハプニングマスを思いついた。

はやて「何や？」

真恋姫無双に出てくるチョウ蝉と卑魅呼の二人のセクシーポーズを  
見なくてはいけないという内容を・・・

統夜「おいしいiiii!!?それは恐ろしいものを考えたな!!!」

はやて「それはあかんで!!!」

閃いた事だからしょうがない・・・質問するか・・・

転生者達へ

リリカルお登勢を見てどれぐらい気持ち悪かったですか？

真王さんへ

恋姫無双は知っていますか？

タバネさんと源外さんへ

一番興味のあるIESはどれですか？

現在出ているのはIES、BIES、TIES、OIES、MIES、DIESの六つです。尚出力が高いのはMIESです。

以上です。

統夜「次回はどうなるか分からないな・・・」

はやて「次回も楽しみにしています」・・・ああ、あいつらはこの世が終わりそうだったってな

真王「知ってるよ。動画で見てる」

タバネ・源外「MIESだな（だね）」

銀八「んじゃ『ケン』さん、廊下に立って若本さんと立ってなさい」

森羅「うおい！！・・・まいつか。ペンネーム『烈火竜』さんからだ。『質問

たくさん』のキャラクターを登場させていますけど、ややこしくなつて大変ではありませんか？」・・・どうなんだ作者？」

真王「・・・確かにややこしさが残ります」

咲夜「確かに大変ね」。『烈火竜』？廊下に立つのよ」

真王「へい次、ペンネーム『白い奇術師』さんだ。『質問』

シロ「どうもシロです。こっちの銀ちゃんに質問、甘い物を食べてる場面がありますが、糖尿のほうは大丈夫なの？あとこれあげる」

『シロ特性の酔い止め薬（丸薬タイプ）』

飲めばすぐに酔いが消えますが一定時間不幸体質になる副作用があるのでよく考えて使ってください。』

銀時「心配すんな。大丈夫だから（嘘です）」

真王「というわけだ。『白い奇術師』さん。廊下に立ってなさい。おっとバトン作るか」

『まだまだオリジナルバトン公開します！

このバトンは敵の攻撃で状態異常を起したときにどんなセリフを出すかというバトンです。

キャラは上から順にハードメンバーでサタン、ジャアント、マッハ、フアントム、サムライ、エッチ

1：毒

「やるね」

「何のこれしき！」

「これじゃ最高のスピードが出ねえよ」

「効かないよ？」

「う、気持ち悪いな…」

「侵される！？それもいいかも？」

2：猛毒

「これしき！」

「やっつけてくれるな！」

「頭がいてえ……」

「だからきかないって」

「あゝ、だるい」

「死の恐怖が……」

3：マヒ

「体が、しびれる……」

「ピリピリするな……」

「うごけねえ……」

「幽霊だからきかないホロロ」

「ピリピリするな……」

「あん！しびれる〜」

4：ヤケド

「あっつ！」

「熱いな……」

「あつちいな！」

「何かむわつとしたよ？」 無傷

「耐熱モードがいるな」

「蠟燭で攻めて！」

5：氷結

「寒いね……」

「しぬか」

「ここでスピードだしたら凍っちまう……」

「寒くていたずらできそうにないホロロ……」

「あゝさみさみ、しもやけになる〜」

「ひんやりするわ〜」

6：石化

「くっ！しまった！」

「舐めやがって！」

「しまった！」

「……………」 既に固まった

「かつこよくポーズキメときゃよかった」

「……………」 魅了のポーズとなつて固まっている

7：眠り

「スヤスヤ、スヤスヤ」

「ぐが〜」

「カー、カー」

「幽霊は寝ないよホロロ」

「ガ〜、ガ〜」

「ムニユムニユ……………」

8：沈黙

「……………」 「これはやられたね」と言いたいらしい

「……………」 「声が出ねえな……………」と言いたいらしい

「……………」 「声が出なくてもいけるぜ！」と言いたいらしい

「……………」 「声が出ないと脅かすことができないよホロロ

……………」と言いたいらしい

「……………」 「あーあー、本当に出ねえな……………」と言いたいら

しい

「……………」 「無言プレイ？緩すぎるわ！」と言いたいらしい

9：ド忘れ

「えつと？なんだっけ？」

「あ？何だお前ら？ちっせえな」 自分がでかいことを忘れている

「何キ口まで言っただっけ？」

「ホロ〜？」

「ここはどこだ？私は誰だ？」

「もつとこつ…すごいプレイをやってたよつな……………」

10：混乱





「認め…ない…ぞ…」

「スロウリイ…だと…?」

「死ねないよ」

「くっ!私か…」

「もつと楽しみたかった…」

15:スロウ

「の…ろ…い…」

「な…ん…だ…こ…れ…」

「ス…ロ…ウ…リイ…」

「ホ…ロ…ロ…」

「の…ろ…く…な…つ…て…ん…ぞ…」

「な…に…こ…れ…」

16:ミニマム

「わあ!ちっちゃくなっちゃった!」

「意味ねえよ、あたし大きくなるから」

「急所狙ってみるか」

「手乗り幽霊になるホロロ」

「うお!?ちっちゃくなっちゃった!」

「何よこれえ!」

17:トード

「ゲロゲーロ」 「フェェン!カエルになっちゃったよ」  
「と言いたいらしい  
たいらしい」

「ゲロロ!」 「あたしはウシガエルか!」  
「と言いたいらしい」

「ゲロゲロ!」 「なんでカエルだよ!」  
「と言いたいらしい」

「ケロロ」 「カエル幽霊だよホロロ」  
「と言いたいらしい」

「げろ!」 「なんでカエルなんだよオオ!」  
「と言いたいらしい」

「ケロ」 「カエル放置プレイはないわよ」  
「と言いたいらしい」

18:魅了

「わああ////」

「べ、別に惚れたわけじゃないからな////」

「いいな／＼／＼／」

「ホロ／＼／＼／」

「綺麗だな／＼／＼／」

「あ、すごい／＼／＼／」

19：恐怖

「いやなのオオオオオオオオオオ！！！！」

「勘弁してくれえエエエエエエ！！！！」

「来るな来るなくなるなくなるなくなるなアアアアアア！！！！」

「ホロロ、怖くないよ」

「イヤああアアアアアアアア！！！！」

「イヤア！！ダメエ！」

20：目回し

「フエエエ・・・」

「頭ワリい・・・」

「目が回った・・・」

「酔わないホロロ」

「あゝふらふらする」

「よいではないか」 結構楽しいらしい

21：陽気

「ルンルンルン」

「再興にいい気分だ」

「今なら何億光年でもいけるぜ！」

「楽しいホロロ」

「なんか気分がいいぜ」

「私機嫌がいいからやりましょ？」

22：激怒

「少し頭ひやそつか？」

「ぶち殺す！！」

「後悔させてやるよ！！」

「ノロワレテシネ」

「テメエは私が殺す！」

「覚悟なさい？」

23：哀愁

「うとう．．．」

「なんか泣きたい．．．」

「．．．．．」 声を殺して泣いている

「．．．．．」 沈んでいる

「なんか、泣きたくなってきた」

「あれ？涙が．．．」

24：出血

「くっ！」

「やりやがったな？」

「やばいな．．．」

「出ないよそんなん」

「血が足りねえ」

「血が失っていく．．．」

25：ネガティブ

「魔王つて言われてごめんなさい．．．」

「でかすぎてごめんなさい．．．」

「亀でいいよ私は．．．」

「幽霊でごめんなさい．．．」

「ウジ虫になりたい．．．」

「藻屑になりたい．．．」

26：大笑い

「アハハハハハハ！」

「アッハッハッハッハ！」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

「ホロロロロロロロロ！」

「ハハハハハハハ！」

「アハハハハハハハハ！」

27：ピヨリ

「フエエエ」

「ホレ」

「ウツ、頭ぶつかった…」

「ホロ」

「ウヲア……」

「アウ……」

28：うなだれ

「ニヤ」

「あ」

「ヴ」

「……」

「あ」

「ヴェ」

29：死の警告

「そ、そんな……」

「まだ死ねるか！」

「出来れば地球を50周したかったな」

「死ねないって。え？魂が地獄に？それは勘弁！」

「信じないからな！私信じないから！」

「死ぬ前に男とあれしたいよもつと！」

30：不幸

「にやああああ！！！」 火事にあつた

「いで！」 柱が頭に当たつた

「ウゴバツ！！」 勢いあり過ぎて全身打撲

「ないよ」

「私のジャンプがああああ！！！」 ジャンプが燃えた

「いやああああああ！！！」

31：暗黒

「目が見えなくとも！」

「何処だ？」

「前が見えねえぜ！」

「ホロく？みんなどこ？」

「何処行つたあいつら！？」

「見えない、目隠しされた！」

32：シヨツク、驚き

「にやあつ！？」

「なんだとつ！？」

「まじでつ！？」

「ホロツ！？」

「まじでかつ！？」

「うええ！？」

33：衰退

「力が…」

「テメエ…」

「スピードは負けねえよ……」

「ホロ？何か力が抜けるきがする……」

「力が入らねえ……」

「な、なんか力が……」

34：怠惰

「めんどくさいの……」

「動きねえな」

「一休み一休み」

「ほろ」

「メンドクセ」

「なんかやだわ」

35：ストップ

「……………」 止まっています

「……………」 止まっています

「……………」 止まっています



しい

「ウウウ……」 「なんでゾンビ!？」と聞いたらしい

「オオオ……」 「いやですわこれ!！」と聞いたらしい

40:ベイベー

「あう」 「赤ちゃんになっちゃった」と聞いたらしい

「バブ……」 「何だこれ……」と聞いたらしい

「あうあう」 「懐かしいな」と聞いたらしい

「プ」 「幽霊でも赤ちゃんになれるホロ」 「と聞いたらしい  
しい

「バブ!？」 「何で0歳児!？」と聞いたらしい

「バブ」 「いい肉つきね」と言いたいらしい

41:アニマル

「ごろにゃん」 ネコ

「肉くれ」 ライオン

「かぶってね？」 ラビッツ

「???」 変わってない

「ニ、ニヤ……ノノノノ」 ネコ。しかも恥ずかしい。

「ブヒッ (私は豚という名の雌豚よ!)」 豚

42:気絶

「フエエ……」

「頭いてえ……」

「ホラ」

「ホロロ……」

「ウウウ……」

「ホニヤ……」

43:発情

「う……ん」

「体が疼くな……」

「惚れちまったかあたし……?」

「?」





「アン、アン、ダメエ！」

48：パニツク

「うきやあああああ！！」

「なんだなんだ？」

「どわあああああああああ！！」

「ほろ~~~~！!?」

「うわあああああああ！！」

「いやあああああ！！」

49：上の空

「ボ~~~~」

「ボ~~~~」

「ボ~~~~」

「ボ~~~~」

「ボ~~~~」

「ボ~~~~」

50：酔っ払い

「ヒツク……」

「酔わないね」

「早いぞ畜生！」

「飲めない……」

「ふざけんじゃねえぞこんにゃろ……」

「犯してよおお……」

51：激辛

「フゴオオオオオ！！」

「か、辛えええ！！」

「口が焼けるうう！！」

「ボオオオオオ！！」

「ウンゴアアアアア！！」

「ヒイイイイイ！！」

52：病気、ウイルス

「ゲホゲホ！」

「頭いてえ…！」

「ベクシヨン！」

「幽霊は病氣しないよ」

「何でこんなことに？」

「うづうづ…！」

53：嘔吐

「ボ□□□□□□□□□□！」

「ドボボボボボボボ！」

「デ□□□□□□□□□□！」

「ホ□□□□□□□□□□！」

「ド□□□□□□□□□□！」

「ボ□□□□□□□□□□！」

はいてない。真似てるだけ

54：風邪

「ツクシユ！」

「ブアクシヨン！」

「バツクシ！」

「…！」

「フイークシヨン！」

「…ツクシ！」

55：幼児退行

「なの〜」

「おにいちゃん〜ん」

「お兄ちゃん！」

「ほろ〜」

「あの…えつと…：ノノノノノ」

「あなたなんて全然好きじゃないんだからね」

真王「このバトンをけびんさん、郡司侑輝さん、十六夜アミナさん、シユバルツ・フロツケンさん、烈火竜さん、風音 椿さん、龍の骨

さん、武田軍兵士 清坂 剣麻さん、白い奇術師さん、白黒さん、  
十刃さん、風花さん、ボツスンさん、天城さん、リイーンさん、鳴  
神 ソラさん、白騎士君さん、黒龍さん、ヴァーラガルザさん、パ  
ワード・マウンテンさんに渡します」  
『

真王」では「

第百三訓：海に来たらみんな遊びたい（後書き）

真王「津波が多くて困る」

咲夜「次回『海は遊ぶところじゃなく泳ぐところだ』テイクオフ」

第四百訓：海は遊ぶことじゃなく泳ぐことだ（前書き）

真王「海エリアです。なんかギルシアとレーティアがメインになっ  
た。」

## 第四百訓：海は遊ぶことじゃなく泳ぐことだ

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム 324

剣聖チーム 323

スマブラハーツチーム 319

学園チーム 310

プリティレディーズチーム 332

女神チーム 317

とある転生チーム 331

狂乱チーム 321

メテンスナイトチーム 326

ドラゴンネイルチーム 331

リリカルライダーチーム 330

真選組チーム 324

異界戦士チーム 332

リリカル銀魂チーム 329

プリティレディーズチーム トップ。

現在34ターン目

次のターン・異界戦士チーム

ここは海エリア。海の中で魚が泳ぎ、海藻が揺れている。  
前回の浜辺で何とか抜け出したようだ。

海の中なのになんで息してるかって？わが力に不可能はない！BY

真王

・・・とまあ冗談はこれくらいにして異界戦士ターン。

奏「いつくよ」

奏はブロックをたたいて5を出す。  
バトルマスだ。

『海の荒くれ者

ダゴン

サハギンギヤング×10

セイレーン×5』

奏「お姉さま、行きましようか」

勇華「フッフ、まいりましよう」

そうして戦闘を開始し、物の数分でかたずけた。

銀時「早いなおい！」

真王「それが彼女ですもん」

銀時の突っ込みに真王がしれっと答える。

リリカル銀魂ターン

新八「よし、僕の番だ！」

新八はブロックをたたいて3を出す。  
ノーマルマスだ。

神楽「ケツ、やっぱり新八には地味しか残らないネ」  
新八「あんだとおおおお!!!」

神楽は毒舌を言い、新八が切れる。  
ま、結果は見えてますがね。

ヒーローズターン

シャル「さて、何が出るかしら？」

シャルはブロックをたたいて6を出す。  
ハプニングマスだ。

『真選組が食べられた』

真選組チーム「はあああ!!!?」

あり得ないと言わんばかりに怒鳴る真選組。  
だが後ろに巨大クジラが。

バクツ!

真選組チーム「ぎゃあああああああああああああああ  
!!!!!!!」

真王「はい真選組チーム脱出するまで2回休みだ」





モニターが現れた。

『プレイヤー追加』

真王「これはあなた方と縁のある方が助っ人として登場しますよ」

明久「僕らと？」

ルイージ「誰だろう？」

明久とルイージはだれだかと思っていると、袖なしの胸元と背中が開いた黒いドレスを着て、地面へ引きずる程の黒く輝く髪を持った長身な女性が来る。

大型の銃を片手で持って。

マリオ「なるほど。彼女がか」

真王「そうだ」

アーカード「銀次がここにいるというからやってきたのだが…」

自称銀次の妻・アーカードはキョロキョロとあたりを見回す。

真王「なら勝ったら銀次と結婚してもOKで」

アーカード「よし引き受けよう」

ルイージ「やっぱし…」

銀次のことになると乗せられるアーカードであった。

学園ターン



プリティレディズターン

ナリア「じゃあ私達の出番ね！」

ナリアはブロックを叩いて6を出す。  
パーティマスだ。

ナリア「なにが出るかな？」

モニターが現れた。

『潜って探してお宝探し（レーティアVSシャルVSレオンVS咲夜）』

真王「これは海底にあるお宝を素潜りで探して拾うルールです」  
レーティア「つまり海底のどこかにある宝箱を拾ってこと？」

真王はもちろんだと答えた。

真王「準備は出来たか？」

レーティア「やるわ」

シャル「任せなさい」

レオン「ヤレヤレ・・・」

咲夜「いくわよ」

真王「では、スタート！」

真王が試合開始のコングを鳴らす。  
それと同時に4人が素潜りを始める。

真王「まずは同時にスタート。だが」

真王が実況していると4人もすごい速さで潜っていく。中にシャルは人魚姿になって泳いでいた。

銀時「あいつ等早え！」

フェイト「泳ぐの得意なんだ…」

新八「つか真王さん！シャルさんが変身使ってるんですけど！！」  
真王「能力使うなというルールはないからな」

感心している時新八は指摘するが真王が説明する。

潜っている四人は手探り目探りで宝箱を探している。  
すると、

4人（見つけた！）

4人は宝箱に目をつけて一気に近づく。  
その後取り合いに。

レーティア（私が先よ！）

シャル（私よ）

レオン（私だ）

咲夜（私よ）

水中ではしゃべれないため思考でいつて取り合う4人。  
そうこうしているうちに宝箱が開いた。

金ぴかの宝石がいっぱいある。

レーティア（これは私が盗るの！）

シャル（違うよ。私が勝つの）

レオン（わたしだ）

咲夜（だから私だってば）

更に取り合いを始める4人。

そうしていると宝石がポロポロと海底に落ちていく…。

で…

真王「すっからかな宝箱持ってきたところで意味はないよ。全員  
ドローだ」

宝箱の中はもはや空っぽ同然となった。

4人はショックを受ける。

女神ターン

ネプギア「私の番ですね」

ネプギアはブロックを叩いて9を出す。

イベントマスだ。

『巨大人魚出現！』

ネプギア「へ？」

モニターに素っ頓狂な顔をするネプギア。  
すると受けから巨大な影が落ちてきた。

グシヤ！

ネプテューヌ「ぎゃあああああああああああ！！！」

ネプテューヌの真上から。

ネプギア「お姉ちゃん！？」

????「だ、大丈夫ですか！？」

ネプギアと潰した本人である人魚は驚く。

その人魚は桃色のポニーテールに黄色い胸宛にピンクの尾びれを持つ人魚。

それだけならいいが体が異様にでかい。

人間の身長が彼女に指の長さぐらいの差だ。

ネプギア「って、しらほしさんじゃないですか！」

しらほし「その声、ネプギアさん！」

どうやら彼女・しらほしとネプギアは知り合いらしい。

ユニ「・・・ネプギア、あんた彼女と知り合いなの？」

ネプギア「え、えつと…（園長が無理やり連れてきた人だなんて言えない…）」

ネプギアは反応に困った。

ラム「で？この後なにがあるの？もしかしてユニット加入とか？」  
真王「ただネプテューヌの上に落ちただけ」  
ネプテューヌ「酷くない!？」

ラムが気になったことを言うと真王は即答しネプテューヌは言う。

とある転生チーム

ビビ「いくわよ!」

ビビはブロックを叩いて4を出す。  
こっちはペナルティ。

『なのなの部屋』

全員「？」

意味が分からないモニターに首をかしげる。  
すると扉が現れた。

中にはたっくさんのなののが埋め尽くすほどいた。

なのは「私がいっぱいイイイイイイイイイイ!!??」  
ビビ「この子たちあの時の…」

なのはは驚きビビは懐かしそうに言う。

詳しくは『鳴神ソラ』さんの『リリカル銀魂』 S t r i k e r s



（銀女神鎮魂歌） - 第別訓パート40：クローンを作ったなら最後まで面倒を見るべし！』をみればいい。

真王「あの扉にはいつてやってこい」

ビビ「（キュピーン！）そういうこと…なら直球じゃアアアアアアアアア！！」

ビビはさっさと扉に入った。

真王「とある転生チーム2回休みですね」

神「あいつにとってペナルティなのか？ちがうよな」

ビビの性格を知っている神であった。

ここから先はビビのハネムーン＋ノクターンなので想像をお願いします。

（みたいならリクしてもいいですが。無論ノクターンに載せて）

全員「宣伝かよ！！」

狂乱ターン

シグナム「私の番だな」

シグナムはブロックを叩いて2を出す。

ノーマルマスだ。

シグナム「これはこれで寂しいな…」

メテنزナイトターン

ギルシア「よし、俺様の出番のようだな」

ギルシアはブロックを叩いて7を出す。

デュエルマスだ。

ギルシア「デュエルか。だがどんな相手だろうと…!?!」

ギルシアが気合を入れているとモニターに驚愕する内容が書かれてあった。

『夫婦の戦い（ギルシアVSレーティア）』

ふとレーティアを見ると彼女も同じらしい。

ギルシア「まさかお前との戦いなんて予想外だぜ」

レーティア「そうね。でもこれが運命なのよ。そう、“愛”の試練の」

銀時「なにさり気無く愛を強調してんだよ」

銀時は突っ込むが2人はスルー。

ギルシア「だが勝負の事なら話は別だ。勝ち俺様が貰う」

レーティア「いくらギルシアでも優勝は譲るつもりないもの」

ギルシア「というより父親の威厳的な物つてあるがな」

レーティア「私母としてのもあるんだけどね…」

ギルシアはグローブをきつちりとはめ、レーティアはファスシニムと銃を出す。

ギルシア「？その銃は確か…」

レーティア「そ、タバネさんが作った私専用デバイス『ハートローズ』よ」

銃型デバイス『ハートローズ』をくるくる回す。

真王「じゅんびはいいか？では始め！」

真王が開始のコングを鳴らすと同時にレーティアが駆け出す。

レーティア「さて、私とファスシニムとハートローズの舞に耐えられるかしら？」

ギルシア「へ！下の穴に手え突っ込んでガタガタ言わずぞこら！！」

レーティア「いやん、射入れるだなんて／＼／＼」

全員（なにこの会話？気持ち悪！）

レーティアは何か想像して顔を赤らめてくねくねします。

見ている人らは少し引く。

ギルシア「テンペストスレッド！」

いきなりギルシアの不意打ち。

だがレーティアは分かっていたといわんばかりにその攻撃の間を避けていた。

ギルシア「まだ行くぜ！ディードライブ+ガンダタストリング！」

今度はディーンドライブ並みのスピードで糸を出す。  
レーティアはかわしきれずに服の一部一部に切れ目が出る。

レーティア「さすがギルシア。でもすきアリ！」  
ギルシア「ガッ！」

レーティアは感心した後ファスシニムでギルシアをはたき落とす。

ギルシア「やったなこのやる！俺が勝ったら全裸（靴下は着用義務）  
で俺の全身をなめまわしてもらおうか〜！！」

レーティア「ぜひお願いします！」

全員「お願いしますのかいイイイイイイイ！！！！！！！！！！」

レーティア「あと私が勝ったら毎日抱擁でお願い！」

ギルシア「それ毎日やってることだろ！」

全員「毎日かよ！！！」

もうこいつらの愛の基準がわからん…

レーティア「踊りなさい！死の舞い踊り！」

ギルシア「ハン！ヴァルカンシヨックリトルボーイ！！」

レーティア「まだまだ！茨鞭！」

ギルシア「ディーンドライブブラックバード！！」

レーティア「食らいなさい！大旋風！」

ギルシア「くたばれ！ヒートエクスプロージョン！」

炸裂する技の数々。

土煙がはれるとギルシアはところどころに焼け跡と傷が見える。

レーティアもけがをして、ほぼあわれもない姿になっている。

レーティア「さすが私の未来の夫ね けどまだ終わりじゃないよ」

ギルシア「確かにその銃使ってないな」

レーティア「そうだよ。さあハートローズ、出番よ」  
ハートローズ 了解！

元気いっぱいな女の声がハートローズから聞こえた。

レーティア「ハートローズ、セットアップ！」

レーティアはハートローズをセットアップする。

バリアジャケットは某ほほえみのおっぱいガンナーのふくを黒くした感じだ。

レーティア「いくわよ」

ギルシア「！ディードライブ！」

銃を構えたレーティアを見てギルシアは音速で逃げる。

逃さないと言わんばかりにレーティアは銃を乱射が、すぐに弾切れ。

ギルシア「今度はこつちだ！リトルボーイ！」

ギルシアの反撃。

レーティアは紙一重でかわす。

その時大きな胸をぶるると揺らし、谷間から六発の銃弾が飛び出してきた。そしてリボルバーの弾奏にリボルバーを振り払ってリロードした。

ナリア「おお！あれはグレネーダーでやるおっぱいリロードー！」

ヤルオ「ぬ！？生でみたのははじめてだ！」

光翔竜、恭介（フェイトさん（様）がおっぱいリロー・・・）（鼻

血)

なのは「な、なんか恥ずかしい…」

この光景を見た人はいろいろリアクションをする。

レーティア「そらそらそら！」

ギルシア「効くか！」

レーティアが銃で乱射。

だがギルシアが素早くつかむ。

レーティア「ならこれでどうよ！」

ポンつと胸から6発分を弾奏し、

レーティア「ローズ・ブレイカー薔薇の玉砕弾！！」

ギルシア「ウオツ！」

レーティアの弾丸をギルシアはそってかわす。

壁に着弾した弾はバラの花が咲き散った気がした。

レーティア「最後のこれでとどめといくよ…！」

そう言って胸の布切れを取った。

ほとんどの男性陣「ブツ!？」

一部の男性陣「？」

ほとんどの男達は盛大に嘔き出した。

一部は何やってんだな顔をしている。

だが中から何発もある弾丸が宙を舞っていた。

銀時「どんだけ中に入れてんだよ!!」

鼻血吹きながら銀時が突っ込む。

するとレーティアは弾を弾奏してギルシアに撃つ。

それもマシンガンの如く。

ギルシア「うおおおおおおおおお!!!!!!」

ギルシアは全力で逃げる。

撃てば弾奏撃って弾奏の繰り返し。

すると一つだけ他のと違う弾がある。

レーティア「ギルシアに悪いけど、勝たせてもらおうよ」

レーティアはその弾を弾奏し、

レーティア「相愛そあいの十字砲じゅうじゅうほう」

ダンッ!!

ギルシア「イツ!?!」

ズドガー——————ン!!!!

発射されたピンク色の閃光がギルシアに命中。

そしてピンク色の十字架（型の爆発）が出る。

レーティア「ちょっとやり過ぎちゃったかな?」

ガシッ

ギルシア「普通の奴からすればな」

着弾地点を見ていうレーティアの方にギルシアが掴む。

ギルシアはボロ着いているが笑っている。

レーティアもつられて笑う。

ギルシア「さして、判決の時間だあ」

ギルシアの吐く息が白い。

ギルシア「デーノンドライブ＋アグニツシュワツタス＋テンペスト  
スレッド！」

ギルシアは高速で超高熱と神の糸のコンボ攻撃を繰り返した。

レーティア「きゃあああああああああああああああああ……！」

レーティアは巻き込まれ服がほとんど焼かれるか裂かれた。

レーティア（ギルシア、やっぱりあなたは……）

ギルシア「ガンダタストリング！」

ギルシアは糸でレーティアを傷つけずにしぼりつけると、

ギルシア「判決！お仕置き！」

十字を切って終了の形となった。



レーティアは落ちた聖女の様に縛られている。

真王「決着がついたみたいだな」

リアス「・・・そのようね」

真王がいい、リアスは肩を竦む。

ギルシアは糸を切ってレーティアをおろす。

レーティア「ん・・・」

ギルシア「よう、起きたか？」

レーティア「ギルシア？わたし、」

レーティアが目を開くと、ギルシアがレーティアにジャケットをかぶらせる。

ギルシア「裸じゃ風邪ひくぞ」

レーティア「う、うん・・・／＼／＼／＼」

レーティアは赤くなってジャケットをしっかりと握る。

レーティア「ギルシア・・・」

ギルシア「？」

レーティア「ちよつと惚れ直したかも、カッコよかったよ」

ギルシア「・・・こっちのセリフだ」

レーティア「ギルシア・・・」

ギルシア「レーティア・・・」

(無限ループ)

超愛フィールド発動。



リル「バブツ（チャンチャン）」

〜おまけ〜

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！！」

魔炎竜「ドラゴンネイルの魔炎竜だ」

氷刃竜「同じく氷刃竜よ」

銀八「ハイこのできちゃった夫婦がアシスタントです」

魔炎竜・氷刃竜「誰ができちゃっただ！！！」

銀八「わりいわりい、んじゃペンネーム『鳴神 ソラ』からのスタ  
ートだ。『マリオ』いや〜何回も津波に飲まれたな」

ルイーダ「ホントだね」

ソニック「YES」

明久「タコに殴られるからタコ殴り」

ムツツリーニ「……………また転生者側に質問『オーケストラでどんな曲を演奏する?』」

ネス「真王さんに質問『オリジナルの女神さん達の作った理由を教えてください』」

リュウケンドー「サタン・ザ・ハード達に質問『ソロについてどう思う?』」

次回を待っています!『ズバリ答えよう』

真王「とりあえずベートーベン・ピアノソナタ『月光』で。作った理由はただ成り行きで」

銀八「んだそりゃ!?!」

サタン・ザ・ハード「最後にソロについて?キンハのソラとウルトラマンゼロを合わせた人だね。それにいい人かな」

銀八「そんなわけで、『鳴神 ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

魔炎竜「ではペンネーム『なめ猫』からの質問だ。『ラムザ』はい、みんな楽しそうにやってるね」

こなた「こっちは初めて顔出すけど…なるほど、こりゃ峠だね」

俺「あわれ、ベール……」  
かがみ「カイト達……あんなチートだらけの物語に行くのよね？」  
ラルム「うん、大変かもしれないね」  
ラムザ「ハードのクイーン、自称神……よく見れば、支配系や取りこみの能力が目立つね。ギルシアにしる、クイーンにしる……」  
俺「力の秩序……ですか」  
ラムザ「……カイト達みたいなの、いないかな？」

質問

ノワールへ  
見てるかわからんけど、ゲームネプテューヌ人気投票で1位になれ  
そうな感じだけど、すごいね？発表が楽しみつす。（ネプ姉妹は2、  
3位気味）

ネプ姉妹へ（多いな）  
上関連だけど、ほぼ絶対上位にいけそうだね。流石ヒロイン。

レーティアへ  
やっぱサキュバスっているやばいな……；

俺「ちなみに真王さんは誰かに投票しましたか？では！」  
『あ、作者は投票できてないらしい』

真王「スマン・次」

レーティア「失礼ね。私をやばい女だなんて……」

真王「……『なめ猫』さん。投票すんません」

氷刃竜「……次はペンネーム『ウインド』さんからよ。『リア』  
ただいま」

ウインド「なんだ？嫌になって帰ってきたか？」

リア「んなわけないでしょ。休憩もらったから戻ってきたんだよ」  
ウインド「なるほど。では成果を聞こうか」

リア「結構順調だよ？クイーン・ザ・ハード師匠とサタン・ザ・ハ  
ード師匠のはきついけど面白いし優しいし。サムライ・ザ・ハード  
師匠の剣技はかなり参考になったよ」

ウインド「ほう」

リア「ただエッチ・ザ・ハード師匠とかマゾチック・ザ・ハード師  
匠は寝込み襲われるわコスプレされるわお風呂入ってくるわで面白  
い」

ウインド「何いつてんのお前！？初めては大事にしるよ！」

リア「大丈夫。人間のとき誘拐されたとき（バキューン！）された  
から」

ウインド「はあ！？」

リア「それにしてもイブ、ドンマイ……（イブの頭を撫でながら慰  
める）」

ウインド（そんなんだからフラグ建つんだよ……）

リア「質問いこっか」

ウインド「おう。リリカルメンバーに。リアについてどう思います  
か？」

リア「エッチ・ザ・ハード師匠とマゾチック・ザ・ハード師匠に。  
そんなにしたいなら今晚やります？きがすむまで相手しますよ？」

ウインド「アホか！」

リア「日頃のお礼で。さて戻りますか」

ウインド「あ、おい！行っちまった……」『え〜っと……』

リリカルメンバー「ある意味すごくない!？」

エッチ、マゾチック「モチで!」

この後リアはミイラ化寸前だったとか。

氷刃竜「・・・」ウインド『よ。廊下に立ってなさい・・・』

真王「次、ペンネーム『月光閃火』さんからの質問だ。『ども…月光閃火だ。』

しかし…イヴ嬢も災難だよな…。とりあえず…慰めになるかは解らんが、俺の特製料理をご馳走してやるよ…クイーンの嬢ちゃんも一緒にどうだい? (そう言いながら、料理人の格好になる)

輝刃「そういえば、閃火はこっちじゃ俺と同じく料理の腕が良かったな…。あ…質問…行くぞ? まずは俺からだ。」

1・極神十傑衆の面々に質問…正直言つて、妙嬢の『卵焼き(ダイクマター)』+シヤマル嬢の『シヤマパイ』を組み合わせた混合料理…<sup>キメラ</sup>食えるか?

ハハハ…いくら十傑衆でも、それは皆無必至じゃね(汗)? 次は俺からだ。

2・クイーンの嬢ちゃんに質問…ぶつちゃけ、好きな料理は何なんだ? 俺がそれ作ってご馳走してやつからよ…。

輝刃「フフツ…閃火は、妙な所で律義だな…(微笑)。」

極神十傑衆「無理だ(じゃ)(よ)！」

真王「だろうな。次」

クイーン「高級料理。とくにシチューですわ」

真王「というわけで『月光閃火』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「次、ペンネーム『ケン』さんだ。『統夜「いや」・・・見事なものだったな」

咲夜「そうね」

統夜「アリスとのバレエ・・・心を読むスキルで何とかなったんじゃないのか？」

咲夜「あ・・・」

統夜「いいけどさ・・・メアリと咲夜、シャルさんの水着姿が見れて良かった」

咲夜「嬉しいわね。早速質問するわ。ジャンヌに質問よ。もし新八が他の娘の谷間や水着に見とれていても嫉妬とかしない？」

統夜「心広いからしないっしょ。ギルシアへ質問だ。やっぱり幼女はスク水と一回ぐらいは思った事ある？」

咲夜「凄まじかったわね。ギルシア・・・流石レーティアさんの夫ね」



統夜「だな」

タバネさんと源外さんへ贈り物です。

MIESを宝石にしたマキシマムクリスタルを一つずつ差し上げます。

次回も楽しみにしています。』ズバリお答えしよう」

ジャンヌ「新八君こっち見てよ！」

と言って水着姿のジャンヌが新八を抱き寄せせる。

新八「胸が当たってぐはぁッ！」

新八は気絶した。

銀八「テメ新八。何つうラッキースケベやってんだよ」

ジャンヌ「なに？」

銀八「いや、何でもない…。(睨まれて縮こまる)」

真王「では『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

第四百四訓：海は遊ぶことじゃなく泳ぐことだ（後書き）

真王「さて、次は沈没船エリアに突入だ！」

魔炎竜「次回『沈没船と言えばお宝が眠っている』テイクオフだ」

第百五訓：沈没船と言えはお宝が眠っている（前書き）

真王「今回私ちちょっと説教をします」

銀時「なにをだよ」

真王「見てれば分かる」

## 第五訓：沈没船と言えはお宝が眠っている

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム 378

剣聖チーム 359

スマブラハーツチーム 385

学園チーム 359

プリティレディーズチーム 386

女神チーム 365

とある転生チーム 377

狂乱チーム 368

メテンスナイトチーム 375

ドラゴンネイルチーム 382

リリカルライダーチーム 380

真選組チーム 375

異界戦士チーム 384

リリカル銀魂チーム 373

プリティレディーズチーム トップ。

現在 40 ターン目

次のターン：ヒーローズチーム

次なるエリアは海底に沈んだガレオン船。  
通称沈没船エリア。

統夜「おりゃあああああ!!!」

統夜が合体剣で死神型モンスター・スペクターを倒した。

統夜「まずまずといったとこだな」

メアリ「死神には死神を、ってやつ？」

統夜「違うぞ」

メアリの一言に統夜がつっこむ。

剣聖ターン

紅也「俺の番だな」

紅也はブロックを叩いて7を出す。

ペナルティマスだ。

紅也「ゲッ!？」

『蓮コラ』

モニターに出た後一人の人物が現れた。

というより、身体中虫食ったあとと中にぎよろりと目がいっぱい。

森羅、紅也「なんじゃこりゃあああああ!!!?」

咲夜・さくら「いやあああああああ!!!」

員らと紅也は驚愕しさくらとあまり驚かない咲夜が恐怖する。  
さすがに気持ち悪いからだ。

銀時「スツゲエ気持ち悪いんですけど!!何あれ!?!」

真王「蓮コラっていつて生物に体に寄生する虫だよ」

新八「寄生っつーかメツチャ見てるんですけど!うわこっち見た!」

真王「まあ私も嫌なやつなので消しとこう」

真王自身もいやらしいので消した。

スマブラハーツターン

明久「さて、僕の出番だね」

明久はブロックを叩いて6を出す。  
これもペナルティ。

『スリラーダンス』

ゾンビ「ゾンビ」ナイ ゾンビ「ナイ ゾンビ」ナイ ゾンビ「ナイ ゾンビ」ナ  
イ「

目の前にはおどるゾンビ軍。  
つられて踊られる明久。

明久「誰か助けて〜!」  
マリオ「スマン明久!」

マリオ達は申し訳なく謝った。

アーカード「何時か銀次と愛の踊りをしたいものだ」  
ルイーダ「それはやらないでね……」

学園ターン

ヤルオ「僕の出番だおwww」

ヤルオはブロックを叩いて9を出す。  
ノーマルマスだ。

恭介「セーフ」

恭介は安心したようだ。

プリティレディズターン

リアス「私の番ね」

リアスはブロックを叩いて6を出す。  
クイズマスだ。

「数十人の声を聞けるとされている歴史人物は？」

「聖徳太子？徳川太子」

リアス「なにニ番目のミックス大名!？」

リアスは2番目の名前に突っ込みを入れた。

無論正解は1なので5マス進んだ。

女神ターン

ネプギア「いきます!」

ネプギアはブロックを叩いて5を出す。  
バトルマスだ。

ネプギア「どんな相手なんでしょう…!」

ネプギアが緊張する中、モニターが現れた。

『因縁の敵

リンダ

ワレチュー』

ネプギア「・・・誰ですか?」

ユニ「さあ?聞いたことない相手ね」

ネプギアは心当たり全然ない。



「???「おい！あたしを忘れんなこのやる！！」

と大声を出したのはネズミの耳をつけたフードをかぶった少女。  
手には鉄パイプが一つ。

ネプギア「あ、あなたは!？」

「???「へへ、やっと思い出して…」

ネプギア「下っ端さん!」

「???「誰が下っ端だ!!!いい加減その名前止める!!!」

少女は下っ端と呼ばれて怒鳴る。

リンダ「いいか！あたしの名前はリンダだ！覚えとけ!」

ネプギア「まさか下っ端さんと戦うことになるなんて…」

ユニ「ま、所詮下っ端だしね」

ラム「下っ端なら片付きやすいよ」

ロム「・・・」

リンダは名前を言うが、ネプギア達は訂正する気なし。

リンダ「ガーツ!!!まだそれを言うか!!!」

「???「実際下っ端に定着してるっチユ。もう諦めるっチユよ」

リンダ「オメーは黙ってるワレチュー!!!」

ネズミのワレチューにまで呼ばれる始末。

見かねた真王があることを言った。

真王「お前ら。いい加減人の機嫌を損ねるいい方やめろ。ちゃんと名前で呼べ」

ラム「なんで?あいつ悪い奴じゃん。頭おかしいの?」

ロム「敵に情けなし…」  
ユニ「そうよ」

だが彼女等はその気なし。

真王「あっそ、クリエイト創造・ワイルドオーク」  
ワイルドオーク「ブモオオオオ!!!」

ドガアッ！

ラム「きゃあ！」

すると真王が猪モンスター・ワイルドオークを作り出してラムに体当たりした。

真王「クリエイト創造・エンジェルナース」

ポフッ

ラムの飛ばされた先にエンジェルナースが現れて受け止める。

エンジェルナース「癒しの光・セイントヒール」

エンジェルナースの聖なる光でラムの受けた傷が無くなった。

ネプギア「この子たち…」

真王「私が創造した生き物たちだ」

真王にところにワイルドオークとエンジェルナースが近付く。

フェイト「ふざけるな・・・生き物の命を弄んで」  
ワイルドオーク「ブモオオオオオオ!!!」

フェイトが怒り混じっていつてるところでワイルドオークがフェイトに突っ込んできた。

真王「よせ」

真王が命令するとワイルドオークがフェイトにぶつかるギリギリで止まった。

真王「すまん。この子たちは私を卑下しようとする人を許さないらしい」

ネプギア「どういことですか?」

真王「言いたいことはこうだ。『真王様は俺達のために命をくれたんだ!』てない」

真王の言葉に全員は驚く。

真王「命を作ることとは簡単ではない。だが私はそれを簡単にできるでもそれだけじゃだめだ。作った命は大切に見守らなければいけない」

ワイルドオークを撫でる真王。

真王「作った命は責任持って見守ることが必要だ。そして愛で接さなければならぬ」

ネプテューヌ「愛?」

真王「世間を知らない子供には親の愛によってそれを知る。どうずれた思考にしる親が子を思うのに理由があるか?」

ネプテューヌ「ない！」

ネプテューヌははっきりと即答した。

真王「私という作者が、生きる者たちに命を与えることに悪いと  
はあるか!？」

ネプギア「ありません!！」

ネプギアもはっきりと。

真王「それを聞いて安心したよ。話を戻すがちゃんとした名前で呼  
べよ?ある兄弟の弟が永遠の2番手なんて呼ばれるのはいやがるん  
だし」

ルイージ「言ってるし;」

真王「クツパが噛ませ魔王なんても」

クツパ「噛ませとはなんだ!」

リンダ「ちよつと?あたしを無視しないでくれませんか?」

リンダは待ち遠しそうだ。

真王「スマン。もう準備OKだよ」

リンダ「へへッ、ついに出番だ」

ワレチュー「ウウツ、なんか涙が出てきたっチュ……」

リンダ「なに感動してんだよ!！」

話を聞いて泣くワレチューに怒鳴るリンダ。

真王「……準備はいいか?」

ネプギア「はい!」

真王「宜しい。ではネプギアチームとリンダとワレチューの対決。

始め!」

リンダ「おらよ!」

ネプギア「くっ!」

開始早々リンダの先制攻撃。

ネプギア「すごいですね。以前よりも強くなってませんか?」

リンダ「そりゃ影ながら鍛えてるからな。来る日も来る日も一人と一匹で過ごし、時にはネズミを食べようと思っっていたり…」

ワレチュー「それ遠回しにこっち言っただけじゃないっチューか!?!」

ワレチューが突っ込む。

ネプギア「そうですか。でも、こっちも負けるわけにはいきませエエエエエ〜〜〜〜ン!!!!!!」

リンダ「ぎゃああああああああああ!」

ワレチュー「つてもうやられたっチューか!?! チツ、使えない奴っチユ」

もうやられたリンダに舌打ちするワレチュー。

ユニ「ならあなたも」

ラム「ぶっ飛び」

ロム「…なさい」

ワレチュー「チュウウウウウウウウ!?!」

ワレチュー同様彼女らに飛ばされました。

真王「勝者女神チーム!」

女神チームの勝ちと決まった。  
すると真王が彼女らに近づく。

真王「ほれ」

そう言っただけ渡したのは運試しカードだった。

真王「ワイルドオークのお詫びだ」

ラム「あ、どうも」

ラムは受け取った。

リンダ「これで勝ったと思うなよー!!」

ワレチュー「それ下っ端のセリフっチユ。やっぱり下っ端で十分っチユ」

リンダ「ネズミの丸焼きにしてやる」

ワレチュー「それだけは勘弁っチユー!!」

リンダとワレチューはどっか去った。

結局彼女等はなんなのかと思う一同だった。

とある転生ターン

リオン「僕の番ですね」

リオンはブロックを叩いて9を出す。  
ハプニングumasだ。

『最終番目チームに出番が回った』

リオン「うわしまった!」

ビビ「何やってるのよこのクソガキ!」

リオンは頭を抱え、ビビは怒鳴る。

最終番目とはリリカル銀魂チームのことだ。

銀時「よし、俺の出番だな」

銀時はブロックを叩いて8を出す。

イベントマスだ。

『救え!機神少女と魔王大将!』

モニターが現れると3人の倒れている女性少女と3人の男が現れる。

カオストール「なんだ?」

レギス「転移されたか?」

????「……………」

あまり驚かないカオストールとレギスと黒短髪の男。

その男から感じる殺気がすさまじい。

銀時「なんだおめえら」

カオストール「人にものを聞くときは自分から名乗るのが礼儀じゃないかね?」

神楽「オイコラ、それはこっちサイドのセリフある。悪役がいうんじゃないね」

銀時「メタは止める」

銀時は神楽をはたく。

銀時「けどな、ちつと用事もんがあるらしいな」

銀時は倒れているイシュタルとエル、そして様子がおかしいレルシアを見て言う。

銀時「おい真王、バトルには勝利条件とかあるか？」

真王「その悪党2人、別世界の大江戸市で真選組隊士6000名、幕府高官45名、天人125000人斬り殺した人斬り侍・冥賀拷訊と・・・」

真王はある人物を見て言う。

銀髪でセフィロスの服を白くした人物だ。

真王「レ・ヴェ・ネオセフィロス・シルバータイムだ  
全員「え？」

レ・ヴェを見た一同は驚きの声をあげる。

彼を見て、その姿が銀時に似ているからだ。

フェイト「銀…時…？」

ネプテユヌ「うわそっくりだ・・・」

真王「そりゃ別次元の世界の銀時だ。曰くつきだがな…」

真王が暗い表情でいう。

真王「彼はとある組織に自分の仲間達や守るべきものが失われ、今



や高杉と同じ破壊者になったのさ」

なのは「え？」

新八「僕達が死んで…」

ティアナ「兄さんがあの高杉みたいに？」

銀時以外は驚きを隠せない。

その組織は管理局最高評議会なのだがあえて言わなかった。

レーヴェ「そうだ。おれは大切なもん失っちゃってこんな醜いことになっちゃったんだ。あいつらが消えると同時に俺の中の奴も砕けちゃった。今は高杉と同じ黒い獣だ。だからもう一人の俺。こんな醜いことになった俺を止められるか？」

銀時「止めるしかネえだろ？」

銀時は銀狼夜叉をかまえた。

銀時「いく先を間違えた奴だな、叩いて直させるしかネえだろ？」

ネプギア「テレビじゃないんですから…」

ネプギアが突っ込むがスルー。

真王「銀時とレーヴェは決定として…拷訊の相手は誰に？」

イシュタル「妾だ…」

イシュタルがボロボロの体を鞭打って起き上がる。

レルシア「イシュタルさん！無茶です！」

イシュタル「フン、無茶であろうが…」

真王「ヤレヤレ、そんな満身創痍じゃ戦えんだろ？ホラ」

ポロポロ状態で拷問を睨むイシュタル。真王は首を振って魔法を投げる。

するとイシュタルの体の傷と疲労が消え去った。

イシュタル「これは・・・」

真王「戦うには完全態勢でいかなきゃ意味が無い。そして面白くない（観客側が）。で、君ら2人でこの人を相手にしますか？」

???「んにゃ、3人だぜ」

そう言つて現れたのはレイヴィスだ。

イシュタル「む？主は魔王ヴィスガンドラの・・・」

レイヴィス「レイヴィス・グランスフィアだ。覚えとけ」

機が合う魔族同士。

イシュタル「ふ、足を引つ張るなよ」

レイヴィス「こっちのセリフだ」

拷問「・・・フン、一人増えようが体が回復してようが同じことだ」  
イシュタル「さっきは不覚だったが、女子と甘く見ると痛い目に会うぞ」

両者にらみ合つ。

真王「なんでもいいが、スタートだ」

銀時  
白夜叉と闇夜叉の戦いが始まった。

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

リリース「こんにちわ、リリースです。黒龍さんのリリースですよ」

銀八「よし、ペンネーム『月光閃火』から行くぞ。『ども…月光閃火だ。(そう言いながら、口の中に残っている砂糖粒を唾液で取っていく)』

輝刃「…おもいつきり器用な取り方をするな、閃火は…(汗)。あ…質問…行くぞ？まずは俺からだ。」

1・守護女神達に質問…正直言って、料理の腕前はどのくらいなのだ？

あ…確かに、それは少し気になるな…。いくら女神様でも、やれる事はきちんとやれるはずだもんな…。次は俺からだ。

2・ネプテューヌ達女神陣に質問…ぶつちやけ、甘党と辛党…どっち派なんだ？ちなみに、俺はちょい甘党かな。

輝刃「なるほど…味覚の質問か…。ちなみに、俺はどちらかと言えばやや辛党だ。甘つたるいのは、どうにも胃がもたれやすくてな…  
(汗)。「『ズバリお答えしよう』」

チート・ザ・ハード「普通にこなせます」

ゴッド・ザ・ハード「自慢ではないが生れて一回もない！(ドヤッ  
!)」

サタン・ザ・ハード「ケーキが一番得意だよ」

バーサーク・ザ・ハード「コノマエダイドコロブツコワシタコトガアルゾ？」

ジャイアント・ザ・ハード「まあぼちぼちな？」

エレメント・ザ・ハード「簡単な料理しか…」

ドラゴン・ザ・ハード「作らん」

マツハ・ザ・ハード「無理だ」

ファントム・ザ・ハード「ごめん無理」

クイーン・ザ・ハード「女王足るものできなくては意味がありませんわ」

バグ・ザ・ハード「虫、料理、なら」

ナース・ザ・ハード「医学だけでなく料理もできちゃいますです」

シャドウ・ザ・ハード「……………（忍者会の料理しかない）」

サムライ・ザ・ハード「私は鉄人級だ」

ロリータ・ザ・ハード「えへへ、この前失敗しちゃって…」

ソニック・ザ・ハード「ごめん不味いんだ私の料理」

マゾチック・ザ・ハード「クイン様の料理を見ているだけですけど」

プラント・ザ・ハード「炎嫌い」

エッチ・ザ・ハード「作れなくはないけど」

ビースト・ザ・ハード「生肉がいいな」

銀八「次はネプテューヌ達だ」

ネプテューヌ「私甘党」

ネプギア「甘いものが好きですね」

ノワール「私は甘いものかな？」

ユニ「辛い物もいけるけど」

ブラン「甘い…」

ラム「私甘口！」

ロム「甘い…」

ベール「女性はみんな甘いものが好きですわ」

銀八「というわけで『月光閃火』さん。甘いものをよこさない」

リリス「何ですか！つぎです。ペンネーム『烈火竜』さんです。

『質問

登場人物の制限はしないんですか？

『ライトノベルズ教室』には、長編でも、8人以上にはしない方が無難です』と書かれています。『作者さんいわく必要ないらしいです。『烈火竜』さん。廊下に立ってなさい』

真王「つぎ、ペンネーム『鳴神ソラ』さんだ。『明久「ムツツリーニ」しっかりして！』」

ムツツリーニ「……………服を…脱ぎ…捨てる…な（ガクツ）」 血の池の中心で気絶

明久「ムツツリーニイイイイ！！！」

ドクター「速く輸血しなければ！！」

タレ銀「真王さああああああああん！！！！」

アーカード「うふふふ」

マリオ「ってか…なんだあの戦い方？」

ルイーダ「…ほっ、ホントにいきなりだったからビックリしたよ…」

マリオ「まあ、真王に質問『今回のレティアの戦い方はどう言う作品のを元にしたんだ？』」

クッパ「質問なのだ『レティアのあのカートリッジロードの方法はどの作品のなのだ？』」

ネス「質問『今回のステージはマリパ5のアクア・ドリームを元にしたんですか？』」

次回を待ってます！』1つ目と2つ目はグレネーダーという女性ガンマンの主人公のアニメです。3つ目はマリパ3の海ステージをイメージしてください。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

銀八「まだ行くぞ。ペンネーム『フリーダム』さんからの質問だ。

『Sフリーダム』何だ…最後のは…」

ジャスティス「あの二人の出す特殊なフィールドか…」

レジェンド「周りが色々とおかしくなっていたが」

デステイニー「周りの事考えないからな…あの二人」

アカツキ「まあ、気にしたらいけないから質問に行くぜ」

今回出てきたお魚さんとは、プクプク？ それとも全く別のもの？

バスター「魚に飲み込まれるとかごめんだぜ」

更新楽しみにしてます』文字通りあの魚だ。『フリーダム』さん、廊下に立ってなさい」

リリス「次はペンネーム『なめ猫』さんです。『俺』はいどうも、ネタごちそうさまー」

ラムザ「学園でもやらせる気か？」

俺「まあギルシアやレーティアは比較的目立ちますからね。あとは変態のアリア、ビビとか」

ラムザ「全員出しきれないからね…しょうがないよ」

俺「…さて、カイトとミリアの『先輩』にしてみようかw」

質問（意味不明で）

なのはさんへ

のら猫「心が痛えんだよおおおおおおおお…！…！どつすりゃええんじゃああああ…！！（何故かはお任せ）」

銀時ラバーズへ

夜ばいするために準備することは？

ギルシアとレーティアへ

この淫乱カップルが！



俺「はいさいなら」『って何ですかこの質問!?!』

真王「気にしたらアウトだ。では」

なのは「知らないよ（キツパリ）」

真王「はい次」

ラバーズ「これから考える」

銀八「考えてねえのかよ。次」

レーティア「褒め言葉よそれは」

リリス「あれですか!?!?!?』なめ猫』さん!廊下に立ってなさい!?!』

真王「あらら、つぎ、ペンネーム『ケン』さんです。『零斗』うお  
おおおおお!?!?!?!』

ギルシアとレーティアの愛を見て、手足がついているキャベツに変  
わってしまった。

たけし「ええええええ!?!?!?あの二人の超愛フィールドでキャベ  
ツになったよ!?!零斗さん!?!?」

文乃「凄いわね・・・」

千世「頑張つてほしいわね・・・統夜達」

希「にゃあ・・・こればかりは祈るのみ」

ダイチ「ギルシアさあ〜ん!!!レーティアさんの裸体を見せてくれてありがとございましたぁー!!!」

鼻血を出してギルシアに感謝していた。

文乃「あんた・・・エリーに殺されるわね・・・」

千世「私から新八に質問よ。ギルシアとレーティアみたいな超愛フェイールドをジャンヌと一緒にになって出せる自信ある？」

希「お開き・・・次回も楽しみにしている・・・」で、2人は

新八「いやいやいや、無理ですよ!あんなオーラ出せませんよ!」

ジャンヌ「あれは2人にしかできないよ...」

真王「だそうだ。『ケン』さん。廊下に立ってなさい。最後にしよう。ペンネーム『支配者』さん。『結構力オスですね。』

質問です。

はやてに質問。はやてって何座でしたっけ?腹黒狸座?(黒笑)

転生者達に質問

自分達の中で一番エロイのは誰ですか?

なのはに質問

なのはのテーマソングを作って見ました。

『豚豚なのは。魔王が来たぞ、ブー！』

感想をお聞かせください（黒笑）『・・・』

はやて「そりゃどついう意味やゴルアあああああ！……！#」

転生者組「アルテスカレーティアあたり」

なのは「カオス・スターライト・ブレイカー！……！！！！（激怒）」

ドガ————————ン……！！！！

支配者「塵とかすウウウウウ！！！！！！」

真王「あーあ、『支配者』さん。喧嘩売ることとは止めましょう」

第五訓：沈没船と言えはお宝が眠っている（後書き）

真王「銀時白夜叉とレーヴェ闇夜叉、どちらが勝つのかな？」

リリス「次回『絶対不屈の魂であれ』 テイクオフです」

第百六訓：絶対不屈の魂であれ（前書き）

真王「ついに銀時とレーヴェの対決は意外な形で決着！？」

銀時「ってどんな決着だよ！！」

真王「本編を見れば分かるぞ」



まだ両者は倒れない。

銀時「未来の俺！そっちの世界で何がっただんだ？」

レーヴェ「……いままでは今のお前ぐらい平和にやってきたぞ。けどな、それがすぐ地獄に変わっちまった」

レーヴェは悲しい顔で言った。

レーヴェ「一瞬だった。どっかの馬鹿な奴らが俺達ごとぶっ壊しやがった。それも俺を除いて全員死にしまった」

銀時「なっ！！？」

銀時は驚愕する。

死んだ。

その言葉に深いものが心を刺した。

レーヴェ「どでっかいもんぶっ放してきやがった。それも俺達の真上でな。俺はかろうじて助かったものの俺以外は全滅だ。地獄絵図だった。そしてそのとき俺の中の何かが壊れた。魂が、大切なもんごと壊れちまいやがった」

これがレーヴェの心境。

一瞬にして奪われた彼の気持ちはどれくらい暗いどん底の闇へ落ちたか。

それは銀時でさえもわからない。

レーヴェ「もう俺は黒い獣だ。だから何もかもを壊すだけだ」

銀時「させねえよ」

銀時がいう。

銀時「未来がどうにしろこうにしろ。一つだけ分かったことがある。テメエをぶっ飛ばすことだ」

レーヴェ「俺をぶっ飛ばすだと？」

銀時「確かに目の前で大切なもん失っちゃったらさすがのおれでもお前の様になっちゃまうかもしれないねえ。ふっかい悲しみが俺の中をぐるぐるとわきだしちまう。けどな、ここでおまえを止めなきゃ、高杉と同じになっちゃまったお前を止めなければいけない気がするんだ。だから、全力で手加減なしで活かせてもらう」

銀時は本気になりだした。

目が鋭くなり、白夜叉となる。

拷訊「ほう？白夜叉か・・・」

イシュタル、レイヴィス、レルシアと対峙している拷訊が興味深そうに見る。

そして銀時に向かって駆け出した。

レイヴィス「あ！こら！」

拷訊「貴様らとやり合っても面白くない！まずは貴様から血祭りに・・・」

ズダダダダダダダダダダダダ！ズドガアッ！！

拷訊「バ・・・バカ・・・ナ・・・」

銀時「人の喧嘩に水差すんじゃねえよ・・・」





銀時が叫ぶ。

銀時「力を手に入れてもあいつらはよろこばねえよ!!」

レーヴェ「貴様は黙ってる!」

切って受け止めきって受け止めの繰り返し。

銀時「俺達が侍なら…もつべきものは力なんかじゃない!」

二人の手に力がこもる、

銀時「もっと大切な、誇り高き魂だ!!」

銀時がそう叫ぶのと同時に二人は距離を取り睨みあう

銀時「その魂が叫んでる。オメーを止めろってな!!」

それを受けたレーヴェの笑い声が木霊する。

レーヴェ「悪いが俺の魂はこう言ってる。もっと力を!」

銀時「同じ奴だつてのにな…」

レーヴェ「ああ、そうだな」

銀時は魂を、レーヴェは破壊を。

同じ侍で夜叉でありながら違う考え。

時の違いで人は変わるものである。

そして長い激闘の末、2人の体に限界が来た。

どちらも血だらけで普通の人ならすぐにダウンする傷でもまだ立つ



取らないバスト、頭のアクセサリーに十字コントローラーの様なのがあり、首には白いリング、パーカーワンプ、しましまのストッキングといった美女だ。

銀時はその女性を見て違和感を覚える。

銀時（あれ？あいつ・・・似てやがるな…）

銀時は彼女の容体を見て、ネプテューヌの面影を見た。

????「探したよ銀さん」

銀時「え？俺？」

????「違うよ。こっちの銀さん」

女性の言う銀時はレーヴェらしい。

銀時はあっそうという。

レーヴェ「誰だお前？いやなんか誰かにてる気がするが…」

????「ひどいなあ。いつも一緒にいたのに。思い出せないの？無邪気で純粋なある子供と一緒にいる」

レーヴェ「・・・まさかとは思いが…」

レーヴェは聞いてみた。

レーヴェ「おまえ、ネプテューヌか？」

プラネ「そう、プラネット・ゲーム・ネプテューン。あなたの大好きなネプテューヌだよ」

女性・プラネはレーヴェと同じ世界のネプテューヌだった。

レーヴェ「ネプテューヌ、お前生きていたのか!?!」

プラネ「うん、えへへ、2人つきりになっちゃったね」

レーヴェとプラネは抱き合う。

プラネ「それにしても良かった。銀さん正気に戻って…」

レーヴェ「ああ、お前を思い出した瞬間心が軽くなったよ」

彼女の出現により、レーヴェの心に変化が訪れたようだ。

プラネ「みんな死んじゃって、銀さんがあいつらを殺していなくなつたあと私は探し続けたの」

レーヴェ「・・・そうか」

銀時はプラネの頭を撫でる。

プラネ「／／／／／」

プラネは特に嫌がる様子もなく顔を赤くする。

銀時「あゝ、ん”ん”！！」

銀時がわざとらしく咳払い。

とりあえずレーヴェとプラネは離れる。

真王「ま、とりあえずゲームは終了。リリカル銀魂チームは10マス進むぞ」

プラネ「（ピクツ）ゲーム？」

プラネは眉をひそめる。

そしてレーヴェに向き直る。

プラネ「銀さ〜ん？私というものがありませんから仲良く遊んでたな〜！！？？」

レーヴェ「グエエ！〜く、首を絞めるなぐるじ〜」

プラネは怒った顔でレーヴェの首を握りしめる。

プラネ「酷いよ〜！私だって楽しく遊びたかったのにいい！！」  
レーヴェ「だから首しま〜く〜くるじ〜」

首を揺らすわ握りしめるのでレーヴェは意識朦朧とする。

銀時「（ヒソヒソ）姿変わってもネプテューヌだなあれ〜」

なのは「（ヒソヒソ）確かにネプちゃんだけどね〜」

アイエフ「（ヒソヒソ）やっぱネプ子ね〜」

ネプギア「（ヒソヒソ）お姉ちゃんですね〜」

ネプテューヌ「誰が誰と似てるって？」

ネプテューヌはひそひそ話している奴らを睨む。

真王「感動の再会をしているところ悪いが…迎えが来たよ」

真王がいうと、騎士姿の兵士と某ちっちゃな閻魔様が時空ゲートから現れる。

レーヴェ「来たのか」

プラネ「え？銀さん、一体何をしたの？」

レーヴェ「おれな。一度神に喧嘩売ったんだ」

レーヴェは神に喧嘩売ったと言う。

レーヴェ「なんであいつらが死ななきゃいけないんだと言って怒り任せでやったからな。けど虚しさしか残らねえ。自分で分かってても止められねえ」

プラネ「銀さん……」

プラネはレーヴェに近づいて、

プラネ「バカアー!!」

レーヴェ「へブツ!」

レーヴェをはたき倒した。

プラネ「バカバカバカバカ!」

レーヴェ「ぶべ!ブツ!おま!なにす!?!」

馬乗りになって往復ビンタをかますプラネ。

プラネ「銀さんのバカ!やみくもに復讐したって誰も喜ぶことなんてない!!失ったら元に戻れない!」

プラネは大粒の涙を流す。

プラネ「これ以上、かなしいことは止めようよ……」

レーヴェ「ネプテューヌ……」

レーヴェはプラネを抱きしめた。

レーヴェ「そうだったな。俺はお前らを悲しませないために戦ってきたのんだったな」

プラネ「今更遅いよ銀さん」

レーヴェとプラネはお互いの口を重ね…

ネプテューヌ「ダメダメダメダメストーーーーーッブ!!」

かけたところで止められた。

プラネは舌打ちして銀時ラバースは「ナイスフォロー!!」と親指を立てた。

閻魔様「レ・ヴェ・ネオセフィロス・シルバータイム、あなたを拘束します」

待ってたのか兵士たちが動き出す。

カオストール「まで!これ以上の勝手は許さ!あなた方はおとなしくしてください!?!?ちからが…」

カオストールとレギスが動こうとすると真紅の守護女神チート・ザ・ハードが能力で止めた。

彼女の能力はアンチ・チート。チート、バグ、神、チート殺しの能力を持つ者に大幅にステータスを下げる能力だ。

レーヴェ「じゃあなネプテューヌ、そしてありがとう」

プラネ「さようなら、銀さん」

レーヴェは連行されました。

プラネはぐしつと涙をとると、

プラネ「はじめまして、別世界のネプテューヌのプラネット・ゲイ



ム・ネプテューン。プラネって読んでください」  
ネプテューヌ「あ、どうもこちらこそ」

礼儀正しい挨拶に思わず挨拶して返す一同。

プラネ「あ、その前に……」

と、プラネは白い太刀型デバイスを持ってカオストールに近づき、

プラネ「セ〜〜〜〜ツノ……」

カキーーーーー！！！！

2人を野球のようにぶっ飛ばしました。

プラネ「はいこれでよし」

全員「なんでだよ……」

訂正、やっぱり中身はネプテューヌのままのようだ。

真王「さて、続いてはヒーローズチームのターンだよ」

統夜「おう、いくぜ！」

統夜はブロックをたたいて7を出す。

これはイベントマスだ。

統夜「何が出るんだ？」

モニターが現れた。



たということになる」「  
全員「マジでかつ!?!」

全員が驚く。  
もうすでにゴールが近くになったことに。

真王「覚悟はいいかお前たち。優勝は目の前、悔いのないように存分に腕を振るうがいい!」

これが本当の最後の決戦だ!

くおまけく

銀八「教えて!」

全員「銀八先生!!!」

銀次「こんにちわ。僕は天野銀次だよ」

アーカード「そして私は銀次の妻アーカードだ」

銀次「だから夫婦じゃないってば!!」

銀八「面倒な奴らだな。んじゃペンネーム『支配者』から始めるぜ。『質問です。』

はやてに質問。で？はやてって結局何座でしたっけ？

新八に質問

他の『リリカル銀魂』の自分を如何思いますか？

なのはに質問

質問内容に対して怒るなんて自分で魔王や豚って言うのを認めているのと同じ事なんですけど良いんですか？

後、魔力による暴力はいい加減にするべきです。そんなんだから魔王って呼ばれるんですよ？自分で魔王って呼ばれる原因を作ってるくせに唯暴力を振るうのは止めるんですね。非殺傷設定があるからってね。力なき者への攻撃は思い上がり以外の何物でもないんですよ。いい加減に大人になってください。

この辺でさようなら』では順番にお答えしよう」

はやて「原作じゃ書いとらんがな。まあ8月8日やな、生まれは(適当)」

新八「何で周りの僕があんなひどい目に!!?」

なのは「テメエが言ってるからだろうがアアアアアアア!!」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

支配者「屑とかすウウウウウウ！！！！！！」

真王「・・・『支配者』さん、限度をわきまえる」

銀次「（ちよつと怖かったかな？）次はペンネーム『なめ猫』さんからだよ。『俺』そういえば下つ端達の人気、どうなんだろうか…」

ラムザ「さあ？待つしかないんじゃないか？」

ラルム「海の宝つていえば、どんなのがいいかな？私は、パールとかがいいなあ」

ラムザ「なるほど。僕もそういったレアアイテムがいいね」

俺「人魚のウロコ……」

ラムザ「はい自重」

質問

レーティアへ

ハートローズのリロードについてだが、何で胸？

ネズミ野郎

またコンパに出会えた感想は？

アリアへ

ネプテューヌにチカンとかしてるよね？『」

レーティア「ちよつとグレネーダー見ててね、その中の方が隠しや

すいの」

ワレチュー「嬉しいっチュー！コンパちゃんに会えるのも何かの縁っチュー！」

アリア「モチロン！やったら殴られました」

銀次「やったの!？」

真王「駄目だこりゃ。『なめ猫』さん。廊下に立ってなさい」

アーカード「ではペンネーム『ケン』の質問を答えるのでしょうか。

『統夜「凄い事になってるな」

達哉「ああ。並行世界の銀さんか・・・」

統夜「管理局の最高評議会のカス共はやっちゃいけない事をやって・・・自業自得だな」

はやて達や仲間達を殺されたら・・・君・・・世界を絶望へ満たす魔王になってたかもね。

並行世界の人物・・・ネタが浮かびました。

達哉「その前に本編を更新しろよ？」

分かってますよ。質問をしますか。

真王さんへ

貴方は管理局をどう思っていますか？上層部も含めてですが・・・



驚き過ぎた。

アーカード「面白いなこのコーナーは。では『ケン』よ。廊下に立つのだ」

銀八「へい次、ペンネーム『鳴神 ソラ』さんだ。『ルイーダ』真王さん凄いな」

マリオ「うむ…けどなフェイトもフェイトですぐに突っかかるのあな…あいつが命を弄ぶなんて事する訳ないだろ…」

クッパ「と言うか我輩、真王からはかませ大王と言う称号を付けられてるのか…」

明久「はあはあはあ…」 開放された。

ムッツリーニ「……………頑張った」

ネス「オリジナル女神さん達に質問！『自分達をボケとツッコミで分けるならどうなる？』」

フォックス「銀時達に質問『ソロが見せた仮面ライダータロウ・スパーフォームの技を見てどうだった？』」

ヨッシー「オリジナル女神さん達に質問です！『××料理を普通に食べれる人いますか？』」

次回を待ってます！『まず2つ目の答えですがマジパネエが言いたいです。で、ハード達に答えだが』



チート・ザ・ハード「私はどちらもです。あんなゲテモノには興味  
ありません（でも食べれる）」

ゴッド・ザ・ハード「ツツコミは私の趣味ではない。それと二度と  
そんなものだしたら地獄を喰らわすぞ！」

サタン・ザ・ハード「ん？ポケる方かな？それとそれだけは止め  
て…」

バーサーク・ザ・ハード「ナニツテルカワカンネエヨ？ツーカーソ  
レクツタラシヌダロ!？」

ジャイアント・ザ・ハード「ツツコミが少々。そしてあれはマジ死  
にかけた…」

エレメント・ザ・ハード「どっちでもないかな？それと無理です」

ドラゴン・ザ・ハード「興味ないな」

マツハ・ザ・ハード「さあな？（食べないけどな…）」

フロントム・ザ・ハード「ポケるホロ。それに幽霊だから食べれな  
いホロロ」

クイーン・ザ・ハード「さあ？どちらでしょうね？それからこれは  
あなたが食いなさい？」

バグ・ザ・ハード「ツツコミ、向かない。ゲテモノ、あれ、とても、  
うまい」

ナース・ザ・ハード「何のことかよく分かんないです（天然）。それからそれは人が食べてはいけない化学物質です！！」

シャドウ・ザ・ハード「……（フルフル）」

サムライ・ザ・ハード「知るかよ。つーかダークマター食わせるな！！」

ロリータ・ザ・ハード「ん？よく分かんないや」

ソニック・ザ・ハード「僕突っ込み担当。そして食べられません」

マゾチック・ザ・ハード「ポケ側ですね。それからこれは私にとって美味な……（食ったあと失神）」

プラント・ザ・ハード「どっちでもない。何か苦かった」

エッチ・ザ・ハード「両方よ。それから食べれるかあ！！」

ビースト・ザ・ハード「ツッコミかな？それと食えるかあ！！」

真王「ありがとう。『鳴神 ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

アーカード「うむ、次はペンネーム『武田軍兵士 清坂 剣麻』だ。『久々に質問いたします。』

質問は皆様方に聞くことになります。まず一つめは次の内、真の漢だと思っるのはどれですか。

1. グレンラガンのカミナ
2. ケンイチの長老（風林寺隼人）
3. Gガンダムドモン・カッシュ

4・魁！！男塾の剣桃太郎

5・戦国BASARAの真田幸村

二つめは、次の内最も厄介な集団はどれですか。

1・インベーダー軍団、ゴール&ブライ（真ゲ）、メタルビースト軍団、ゲッターG軍団+真ドラゴン

2・次元獣軍団+ガイオウ、螺旋王、皇帝ズール

3・赤屍さん10000人

4・ゼオライマー、織田信長（BASARA）、デビルガンダム、ケイサル・エフェス、グランゾン、高町なのは

5・全スパロボ参戦作品+バンプレストオリジナルロボット軍団」

真王「うーん、これは2番のケンイチの方と5番のロボットかな？  
というわけで『武田軍兵士 清坂 剣麻』さん。廊下に立ってなさい。つぎ。ペンネーム『NWI』さんだ。『銀時達とリリなのメンバー』に質問

扱ってみたいペルソナは何ですか？

もし銀時が「なのはは俺の嫁だ」と言ったらほかに銀時に惚れたりりなのメンバーはどうなりますか？

最後になのはさん…暴力を控えめにすればみんなから魔王と呼ばれなくなりですよ『私ペルソナ知らないんで却下。2つ目は怒り狂いますね。絶対。最後だが、それは質問ではなく忠告だ。』NWI』さん。廊下に立ってなさい」

（プラネット・ゲーム・ネプテューン（愛称プラネ））

髪：ピンクよりの紫髪で太ももあたりまで

目：紫

服：本人よりも大きめのパーカーワンピース

年齢：見た目20ぐらい

3サイズ：100/52/82

体重：潰れている

性別：

種族：元プラネテューヌの女神

魔力光：紫

好き：銀さん、みんな、楽しいこと、食べること

嫌い：傷つくこと、他人の苦しむ姿

性格：本人よりも大人びているが抜けたところは一緒だ。

レベル：??????

得意武器：ツアラトウストラセイバー：白い太刀型デバイス。エックスセイバーより色々強化している（ネプギアの意味が入っている）

ゼロクリスタルウィンド：背中につけるタイプのデバイス。光速移動が可能となる水晶の羽が出現する

スキル：真・女神化（女神・プラネットハートへと変身する）

詳細：レーヴェ（別世界の銀時）とおなじ時期から着たネプテューヌ。かつての仲間を失った彼を探してきた。ネプテューヌを大人見たいにしたイメージ。武器のツアラトウストラセイバーはある男から貰った者らしい。

第百六訓：絶対不屈の魂であれ（後書き）

真王「さて、次回はリリ銀パーティー最後にするぜ」

アーカード「次回『結局運が強い奴が勝つ』テイクオフだ」

**第一百七訓：結局運が強い奴が勝つ（前書き）**

真王「今回でリリ銀パーティーは最後だぜ？」

ネプテューヌ「皆さん、今までありがとうございました」

（注）こっちのエリアと黒龍さんのエリアが被るのでアリエスと改名いたしました。

## 第七七訓：結局運が強い奴が勝つ

現在の成果

チーム名：スタートから進んだマス

ヒーローズチーム 978

剣聖チーム 976

スマブラハーツチーム 983

学園チーム 969

プリティレディーズチーム 986

女神チーム 965

とある転生チーム 977

狂乱チーム 968

メテンスナイトチーム 975

ドラゴンネイルチーム 982

リリカルライダーチーム 980

真選組チーム 975

異界戦士チーム 984

リリカル銀魂チーム 973

プリティレディーズチーム トップ。

現在 56 ターン目

次のターン・とある転生チーム

ついに迎えた最後のエリア。

ここをクリアすると優勝することが出来るのだ！

IBGM永遠のスターbyマリオパーティ  
(Mario Party Music - Eternal  
star EXTENDED)

とある転生ターン

グレイ「ずいぶん長かつ戦いだが、終わらせるとしよう」

グレイはブロックを叩いて5を出す。

何とペナルティマス。

ビビ「あ」

『変態ストーリーカー』

モニターが現れた後に誰かが召喚された。

見た目は、“新世紀エヴァンゲリオン”の“惣流・アスカ・ラングレー”の髪色が紫色にしたような感じの少女が。

????「みっつけまっしゅたっよ……お姉様！」

全員「お姉様!?!」

グレイ「知らん」

グレイにお姉様ということに驚くが本人は否定。

ビビ(あれ?なんだか初めて会った気がしないのは気のせいだろうか……?)



ビビは少女を見て疑問に思う。  
グレイ自身はこの少女に寒気を覚える。

天音「グレイお姉様！この出雲天音！お姉様の体の隅々にじっくりと」

グレイ「かえる」

ピュン！（逃げ出した）

天音「ああん、まってえ」

ピュン！（追いかけた）

神「おい、あいつがいるってことは確か…」

真王「ええ、作者リインさんの許可の元あの4人も着ます」

その後グレイは死体袋を持って来たらしい。

（中身は天音ですが）

狂乱ターン

桂「うむ、では俺が運命を決めよう！」

桂はブロックを叩いて9を出す。  
ミニゲームマスだ。

『5秒ミニゲーム・にげろ！』

桂「む？一体何から逃げ…」

ブチャ！

桂が巨大なおばちゃんの足に踏まれた。

はやて「桂さああアアアアアアアん！！！！」  
ヴィータ「んなあほな…」

言葉が映ったぞヴィータ。

メテンスナイトターン

ガレーナ「ふむ、余の出番だな」

ガレーナはブロックを叩いて8を出す。  
ノーマルマスだ。

ガレーナ「チッ、面白くない」

ドラゴンネイルターン

真王竜「よし、これだ」

真王竜はブロックを叩いて8を出す。



リリカルライダーチーム：避難した（成功）

真選組チーム：逃げられなくて巻き込まれた（失敗）

異界戦士チーム：瞬時に避難した（成功）

リリカル銀魂チーム：近くの陰に避難した（成功）

真選組チーム以外は全員逃れたようだ。

真選組チームは100マス後ろに移動させられた。

真王「真選組チーム復活に2回休みです」

真王竜はこれを聞いて少し憐れんだ。

リリカルライダーターン

ソラ「・・・決めるか」

ソラはブロックを叩いて3を出す。

ノーマルマスだ。

ソラ「嬉しいのやらなんやら・・・」

真選組ターン

火山に巻き込まれたため動けません

異界戦士ターン

勇華「次は私達ね」

勇華はブロックを叩いて5を出す。  
イベントマスだ。

『運試しルーレット』

モニターが現れるとルーレット盤が現れる。

真王「色違いのルーレットにはイベントがあります。もちろん青ならノーマル、赤ならペナルティといったことだからな」

勇華「そう、ならば・・・」

勇華はダーツを構える。

ルーレットが回る。

勇華「・・・そこ！」

勇華はダーツを投げ当てた。  
青色のエリアに。

勇華「ノーマルかあ・・・」

少し残念そうな勇華であった。

リリカル銀魂ターン

銀時「よし、ここからはやっぱ主人公が一発決めなきゃな」

銀時は気合を入れてブロックを叩いて7を出す。

ノーマルだった。

銀時「攻めてボーナスが良かったな……」

新八「そう簡単にゴールは出来ませんよ」

新八の言うことも最もだった。

ヒーローズターン

統夜「さて、俺らの番だな」

統夜はブロックを叩いて10を出す。  
バトルマスだ。

統夜「どんな相手なんだろうな……」

そう思っているとモニターが「ry

『バイオクローン・蒼咲あおたけ 龍華りゅうか』

モニターが出た後腰まである金髪に蒼い瞳をしばやてに似た顔立ちのある少女が現れる。



龍華「はい、それではお父様。いきますよ！」  
統夜「!!！」

ガギツ!

龍華の剣が統夜の剣と交差する。

その時不思議なオーラが2人から放たれている。

統夜「真・ルシファー、俺の遺伝子があるから使えて当然か」

龍華「うん、だから本気で行くよ」

ドガバガギドガボギヤバガドガギゴデダバガ!

滅茶苦茶な擬音だが激しい戦闘だと物語らせる。

統夜「やるじゃねえか!」

龍華「お父様こそすごいけんですね!」

2人は戦いを楽しんでいる。

そして迎えるラストパート。

統夜「行くぜ!」

龍華「行きます!」

統夜、龍華「おおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおお!!!!!!」

2人同時に大技をぶつk…

グジャツ!!!



統夜、龍華「ブゲラアッ!!?」

…ようとして見えない何かにつぶされた。  
地面に手形のへこみがある。

銀時「オイイイイイイイイイイ!!!!何これえええ!!おい真王!お前何かやったか!!?」

真王「向こうならしってるぞ」

銀時が真王をにらむが真王はある場所を指差している。

その先は手を振りおろしたかのような感じのリルだ。

結論から言うに戦闘音がうるさくて2人をつぶしたからだ。

銀時「待てえええええええ!!!!外野から攻撃はないだろ普通!!」  
真王「うむ、このまま引き分けにするのはかわいそうなので勝ちという判定に…」

というわけでヒーローズチームは勝ち判定となって10マス進んだ。

統夜、龍華「俺(私)を置いてくなあああああ!!!!」

剣聖ターン

レイン「いくか」

レインはブロックをたたいて7を出す。  
ノーマルマスだ。

スマブラハーツターン

マリオ「いくぜ！」

マリオはブロックをたたいて9を出す。  
ペナルティマスだ。

『お妙の卵焼き100個』

バリバリバリバリ

マリオ「あんまおいしくないな」

だが超合金でできたマリオの胃袋の前では無に等しい。  
全員唾然とするのだった。

学園ターン

由美「れっつご〜！」

由美はブロックをたたいて5を出す。  
ボーナスマスだ。

『運だめしルーレット』

これは異界戦士チームにやった奴だ。



モニターが現れた。

『スカ』

プリティレディズチーム「なんじゃそりゃあ！！！！」

チームはそろってシャウトする。

他のチームもそれはないだろうと思った。

女神ターン

ネプテューヌ「私達の番だね！」

ネプテューヌはブロックをタタ……く前にカードを取り出した。

ネプテューヌ（運試しカード……試してみよう！）

ネプテューヌは運試しカードを使用した。

『二回発生』

真王「これはマスに止まった時二回のイベントが発生するんだよ。  
ペナルティふんだらペナルティ二回な」

ネプテューヌは少し戦慄した。

ネプテューヌ「な、なら、こうだ！」

ネプテューヌはうねった後ブロックを叩いた。  
出た目は7だ。

そしてその先はボーナスマス。

ネプテューヌ「うっし！」

女神チームにボーナスが二回。

またとないチャンス。

そしてモニターが現れる。

『ダッシュブーツを手に入れて15マス進めた』

ネプテューヌ「えっと・・・真王さん。ボーナス二回って？」

真王「この場合は“同じ内容を二回行う”だ」

真王の言葉にネプテューヌ達は考える。

15マスを二回で30マス。

更に自分体があるマスは974マス。

これを足せば…。

真王「そう、女神チーム、ついにゴールへたどり着いた」

ネプテューヌ「……………いい……………いい……………」

女神チーム「いやったあああ……………！！！」

何と女神チームが優勝を果たした。

統夜「オイオイマジか!？」

咲夜「あゝん負けちゃった」

アーカード「私は銀次がいれば十分だ」

恭介「フェイトさんが…」

レーティア「あ〜ん優勝狙ってたのに〜」

ビビ「うがー！ー！負けたー！ー！」

はやて「いやー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

レオン「フン、勝ちを譲つてやる」

光翔竜「いやアアアアアアアア！ー！ー！フェイトしゃまアアアアアア！

！ー！

セイバー「そ、そんな…」

セレス「まさか負けるとはな…」

新八「ええ！？かつちやったの！？」

他のチームは驚くか納得するか反発するものもいる。

真王「では結果表を出そうか」

『ヒーローズチーム998：二位

剣聖チーム983：七位

スマブラハーツチーム992：四位

学園チーム974：十三位

プリティレディズチーム993：三位

女神チーム1001：一位

とある転生チーム982：九位

狂乱チーム977：十二位

メテنزナイトチーム983：七位

ドラゴンネイルチーム990：五位

リリカルライダーチーム980：十位

真選組チーム875：ビリケツ

異界戦士チーム989：六位

リリカル銀魂チーム980：十位』

真王「ではビリである真選組チームに罰ゲームを出します」

モニターが現れてガラガラガラとルーレットの様に回る。  
どんなのが出る止まっているとそれが出た。

『オカママッチョハッスル』

オカマ「あゝらやだわあなたたちあたしの好みのタイプじゃない  
？」

三つ編みお下げで水着姿の大男（恋姫無双の若本声の人）がぺろり  
とおいしそうに見つめている。

真選組チームは顔を超真つ青をにしている。

近藤「え、えつと、ば、罰ゲームってこれ？」

真王「はい」

近藤は真つ青な顔で真王に言う。

真王は普通に答える。

沖田「土方さん、大人しく逝ってくださいええええ！！」

土方「てめ総悟オオオオオオオ！！！」

沖田が土方を投げた。

だがオカマが土方を軽く捕まえて言う。

オカマ「大丈夫よ。あたしまとめ食いが好きだから。仲良く頂  
けるわ」

もはや絶望しかない。

オカマ「それじゃあ…….…….やらないか」

真選組チーム「くそみそおおおおおー」

文字でもかけない恐ろしさですのじばらくお待ちください。

真選組チームは真っ白に染まった。

もう生気が無いほどに。

見ていたチームは「ビリにならなくて良かった…」と安心と恐怖感が出る。

真王「さて、優勝した女神チームに商品を与えよう」

真王はパチンと指を鳴らす。

出てきたのは星の形を模した優勝カップだ。

受け取ったネプテューヌ達は大喜び。

観客からも盛大な拍手をもらう。

真王「それからこれはおまけとしてあげよう」



と言って渡したのは青いボール型の宝石だった。

ネプテューヌ「これは？」

真王「ソウルストーン、お守りとして持っていていけ」

ネプテューヌはソウルストーンを手に入れた。

真王「そして、入ってこい」

真王が言うと数人くらいの人が入ってきた。  
その中にグレイに捕まっていた天音もいる。

仁哉「あんたらとはお初だな？上谷仁哉だぜ？」

竜虎「僕は竜ヶ崎虎太郎だよ」

ハジメ「ハジメ・クレバヤシだ」

天音「出雲天音よ。よろしくね」

夢乃「寿夢乃です。よろしくお願いします」

ユリナ「ユリナといいます」

カイン「俺はカイン、一緒に熱くなれよおお！！」

セリア「セリアと申します」

ホラーロード「ホラーロードだよ」

エル「エルです。はじめまして」

コープス「俺コープス、よろしくな」

ローグ「ローグだ」

レルシア「レルシアといいます。アンドロイドですがよろしくお願  
いします」

アギス「俺はアギス。仲良くやろうぜ？」

レイヴィス「あたしはレイヴィス。よろしく」

ベアトリス「私はベアトリスといいます」

レイシア「レイシアです」

リルマ「リルマ・ロギストルといます」

龍華「さつきも言ったけど龍華だよ」

ウイエナ「ウイエナです。よろしく」

アーク「わしはアークじゃ」

デイケイト「俺はデイケイトだ」

フィリア「フィリアです」

イシュタル「イシュタルだ」

隆次「混獄隆次だ…」

ユリス「その妹ユリスです」

ダヌ「何処の誰かによってわけが分からなく捕まったダヌです」

イヴ「レーティアお姉様によって下僕となったイヴだよ」

ドーン「我が輩はドーンである」

リア「どうも、リア・オルフェウスだ」

セレナ「私はセレナだよ」

真王「彼らはここで仲間になることになった」

全員「いろいろちよつと待てエエエエエエえ！！！！！！」

見ていた全員が突っ込みを入れる。

銀時「どんだけキャラが増えれば気が済むんだよ！！さばき切れるのかおい！」

真王「否定はしないが、多い方が楽しいと思っただけ」

真王はそっけなく言う。

レイン「つーか敵だったような奴らも仲間ってどづいうことだ？」

真王「そりゃあっちにもごたごたがあっているいるとなんやかんややってこつち側に着いたと思え」

全員「メツチャ適当だなおい！」

全員はあきれ果てる。

真王「ではこれにて、リリ銀パーティ、終了!!」

こうして長い？パーティは幕を閉じた。

余談だが、ヒーローズチーム、スマブラハーツチーム、リリカルライダーチームの面々がこの世界の興味を持ったらしいので仲間になった。

だがこれで終わりではない。

敵側の面々も激しい戦いののろしを準備しているのだから…

くおまけく

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!」

イシュタル「今回のアシストは妾じゃ」

銀八「ああ、いきおく」「何か申したか？」イエ、ナンデモアリマセン」

イシュタルから殺意を感じたので片言でしゃべる銀八。

イシュタル「では参ろう。ペンネーム『なめ猫』じゃ。『俺「レーヴェとの話は終わりましたか…そして」

ラムザ「…真王さん、業を煮やしたか？まあ好きにするといいいけどさ」

ラルム「いよいよ決着…だね」

質問（2つだけ）

ネプ姉妹へ

公式サイトで君達のPVがアップされたけど、感想を。

他の女神へ

そのPVを見て思ったことは？

ラムザ「……ん？そういえばカイトとミリアは？」

俺・ラルム「あっ！？忘れてた！！」「『」

ネプテューヌ「いや、なかなかの出来栄えだと思っよこれ」

ネプギア「は、恥ずかしいです…」

それ以外の女神「羨ましいぞこんちくしょオオオオオオオ!!!」

イシユタル「・・・『なめ猫』よ。廊下に立つのじゃ」

銀八「えつと次、ペンネーム『ケン』さんからの質問だ。『アンチ管理局の作品を書いてて良かった・・・俺自身の努力と苦勞が報われた・・・」

統夜「普通なら叩かれるもんな・・・」

そうだね。真王さんには感謝です。  
質問しますか。

真王さんへ

最高評議会の脳髓達を滅ぼす予定はありますか？

銀さんラバーズへ

銀さんとレーヴェの戦いをみてどう感じましたか？

以上です。

統夜「今回は二つだな」

そつだよ。銀さんマジ強いね。侍魂がある故に強い・・・  
次回も楽しみにしています。『ズバリお答えしよう』

真王「管理局のボスは死ぬ運命なのさ・・・」

ラバーズ「絶対に銀さん（時）が勝つって信じてた！」

銀八「つーか途中でプラネに邪魔されたけどな…。『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

真王「えい次、ペンネーム」『さんからだ。』マリオ「やれやれ」

ルイーダ「だね」

ソロ「例え少し変わっても仲良いな」

リュウケンドー「だな」

ヨッシー「すいませんね〜マリオさんみたいな人いるかな…?」  
「と思っ  
て…」

マリオ「銀時たちに質問『パーティで出たエリアで好きなエリアは何だ?』」

ネス「なのはさん達銀時LOVEズに質問『レーヴェを見てどう思った?』」

フォックス「オリジナル女神達に質問『それぞれ暇な時は誰かと一緒にいるか?それとも1人か?』」

次回を待ってます!』銀時らは空ですかね。天国っぽくて。レーヴェのことは彼女等は本当に銀さんそっくりだったと。んであいつ等の答えは」

チート・ザ・ハード「一人で待機です」

ゴッド・ザ・ハード「武器を眺めておつた」

サタン・ザ・ハード「自主練だよ」

バーサーク・ザ・ハード「テキトウナヤツヲアタツテタタカウ」

ジャイアント・ザ・ハード「暇な時は日向ぼっこしてたな」

エレメント・ザ・ハード「自室で実験してたよ」

ドラゴン・ザ・ハード「なにもしてないな」

マツハ・ザ・ハード「暇なときはファントムゲームしてたぜ」

ファントム・ザ・ハード「ホロロ、マツハと同じだよ」

クイーン・ザ・ハード「エッチとマゾをどう調教させるか実験をしてましたわ」

バグ・ザ・ハード「虫、と、おはなし」

ナース・ザ・ハード「寝てました」

シャドウ・ザ・ハード「……………（黙祷）」

サムライ・ザ・ハード「私はジャンプ読んでた」

ロリータ・ザ・ハード「適当な人と遊んでた」

ソニック・ザ・ハード「自室で歌を披露してたよ」

マゾチック・ザ・ハード「クイーン様に尻を敷かれてましたわ」

プラント・ザ・ハード「お花に水やり」

エッチ・ザ・ハード「いつもクイーンに実験台にされてます」

ビースト・ザ・ハード「昼寝だ」

真王「というわけで『鳴神ソラ』さん、廊下に立ってなさい」

イシユタル「次はペンネーム『黒龍』からじゃ。『黒龍』今回は別世界の銀さんとの戦いになるとは……」

銀時「全てを失って魂が折れちまった俺か……」

黒龍「どうしました？ そんな感慨深そうな顔をして」

ソラ「シヨックだったか？」

銀時「いや、なんつうか、ああ言う俺もいるんだと思ってな」

黒龍「確かに、高杉と同じ道を歩んだ銀さんですからね」

銀時「それでも、あいつにはまだ背負うもんが残っていたけどな」

黒龍「まあ、捕まってしまいましたけどね」

ソラ「別世界のネプテューヌならいつまでも待っているだろうな」



黒龍「ええ。じゃあ最後に質問します」

1・ネプテューヌに質問。別世界のあなたはかなりのスタイルでしたね。それで未来に希望とか実えつつやりしていますか？

2・新八に質問。アイチヨリスに精神の奥深くまで侵食されて廃人になってしまった原作の自分をどう思いますか？（黒笑）

黒龍「今回はここまでです。次回も楽しみにしています」

ネプテューヌ「何時か大きくなると夢見ています!」

新八「これ僕ウウウウウウ!!!??」

新八はありえないと言うような顔をした。

イシユタル「妾はあんな輩とはついていけん。『黒龍』よ。廊下に立つのじゃ」

真王「次、ペンネーム『ウィンド』さん。『土曜日は新居浜でアカガネマリンミュージックフェスティバルがあり、そこで水樹奈々さんのライブを聞きました!」

リア「最高だったね」

ああ、しかもかなり席が近かったから良かった。もはやテンションMAX連続だったぜ

リア「話を戻して銀さんとレーヴェの戦いはダンテとバージルに似てるね」

まんまだろ。俺もあのシーンは好きだ

リア「質問いくかな。プラネに。そっちの自分を見てどう思う?」

「こちらもハード達に。自分が戦いたくない！なんて人はいますか？」

「プラネ「昔が懐かしーな」って思ったよ。・・・あれ？ちょっとおじさん臭い？」

「ハード達「我が主です（ご主人様）（真王様です）（真王だ）」

真王「だそうです。『ウィンド』さん。廊下に立ってなさい。これでラストだ。ペンネーム『黒神』さん。『久しぶりに感想をしましたので、質問させてもらいます。』

フェイトへ

エリオは神楽と月詠に一目ぼれしており、キャラはそんな2人に対してとてつもないジェイソンの嫉妬を抱いています。

貴女から見て詳しいご感想を（黒笑）

シグナムへ

『リリカル銀魂ゲスト杯編』で登場したゲストメンバーの中で是非とも手合わせしてみたい人物はいますか？

以上です。



**第一百七訓：結局運が強い奴が勝つ（後書き）**

真王「というわけで優勝は女神チームでした。次回は、管理局に恨みを抱くとある女性が…」

イシュタル「次回『恨みを持つものはたいてい何か関わっている』  
テイクオフじゃ」

第百八訓：恨みを持つものはたいてい何か関わっている（前書き）

真王「ちつと管理局に恨みを持つ人間をだしました」

ユリス「そこで戦闘をします。と言っても私じゃないですが」



プラネ「普段から何もしてないから酷い目に会っんじゃないの?」

プラネが呆れるように溜息を吐く。

そしてプラネは台の上に乗る。

プラネ「いいですよお」

チフユはスイッチを押すと動き出す。

もちろん銀時がさつきやつたレベルと同じで。

だが彼女はそれをすいすいと避け、敵の攻撃を受け止め、反撃している。

銀時「ス、すげえ…」

ネプテューヌ「さすが未来の私。スイスイだね」

銀時とネプテューヌは感心している。

チフユ「感心する暇があったら続きだバカ者」

また地獄を味わう銀時であった。

ちなみにネプテューヌはプラネほどではないが一応いけた。

グラナガンのとある店

銀時「あいててて……しみるなもう……」

少し痛々しく言う銀時。

何とか解放されて今はコンビニでうろつろしている。  
するとある物を見つけた。

銀時（お？あったジャンプ！）

愛本であるジャンプを手に取るうとして…誰かの手と当たった。

銀時、????「ん？」

銀時はふと相手を見ると白銀のポニーテールで美しい顔立ちの女性だ。

銀時「え？ジャンプ合併号？」

女性「そう言うあんたもジャンプ合併号？」

2人はジャンプがほしらしい。

銀時「参ったな、俺かれこれ5件ぐらい回ったからな（嘘）」  
女性「私はい今ここに来たばっかだけど……………あ、よく見ると2冊あるや」

ジャンプが都合よく2冊あったので2人は買いました。

銀時「いや、買って良かったわ。ところでオメエ名前なんて言うんだ？」

サムライ「私？私はサムライ・ザ・ハードって名前だけど」

銀時「え？リリ銀パーティで変なナース服の親せき！？」

サムライ「ナース・ザ・ハードね。ま、そうよ」

どうやら彼女はナース・ザ・ハードの仲間らしい。



サムライ「ワンピースはもう魚人島終了間近ねえ……」

銀時「つーか俺の場合変な奴に主役乗っ取られてんじゃねえか！」

ジャンプを読みながらこんな会話をする2人。

そんな事をしていると、

ドンッ！

銀時、サムライ「イテッ」

読みふけてぶつかってしまふ。

男「貴様ら、この俺にぶつかつといてなんもなしか？」

しかも超態度でかくて偉そうな男に。

その周りにボディガードっぽい人が10人。

銀時「あ？何がだよ？」

サムライ「っていうかあなた王様気分？古臭いのよ。まったく貴族面は自分が上だと思ひ込むからいやだわ」

銀時「あゝ、おれもそう思う。お偉いさんは権限利用してあれこれすんもんな」

サムライ「そうそう、ほんといやだわ貴族って」

そんな会話をしていると偉そうな男がわなわなと怒る。

男「貴様ら！！元とは言え時空管理局提督ザイド・レーグを怒らせる気が！！」

サムライ「あゝやだやだ。ああやってプライドの高い奴はキレやす

いのよねえ」

銀時「つーかお前が怒らせたんだろっが」

ザイドのことなど眼中にないような会話でいる2人。

本当に切れたザイドはどうするかと思っていると、

???「本当に管理局は醜い存在になり果てましたね…」

とある女性の声が聞こえた。

それと同時に肉を切る音が聞こえた。

住民「きゃあああああああああああああ!!!」

住民「うわあああああ!!!殺人だあああ!!!」

住民たちの悲鳴がこだまする。

一人のボディーガードが切り倒されており、切った犯人は黒いポニテールでなのはバリアジャケットを黒くした感じの女性だった。

ザイド「な、なんだ貴様!?!」

???「しぬ予定のあなたに名前は教えません。レイジングカオシツクダークネス」

真っ黒なレイジングハートを取り出して殺傷設定の魔力弾を発射する。

とっさに銀時とサムライは木刀と刀で自分に向かってきた魔力弾をすべて打ち落とす。

対してザイド以外ボディーガードは全員倒された。

女性はザイドに近づく。

ザイド「!?!?!?!ま、まさかお前は…管理局を裏切ったりエナカ





リエナが不意打ちに魔法を放つ。  
銀時は危うくあたりそうになる。

リエナ「管理局に関係するものはみんな死ね!!」  
銀時「なんでそうなるんだよ!!」

リエナは魔力弾を放つが、銀時がすべて打ち落とす。  
サムライは銀時を観察している。

サムライ（見極めさせてもらうよ…）

銀時「チツ！しゃあねえ！適当にぼこってさっさと終わらせるか！」  
リエナ「なめるなああ！」

リエナは大量の魔力弾を出す。  
銀時は素早い動きですべて打ち落とす。

リエナ「あなたがタダの人ならこの場で見逃してやったんだけど管理局に加担するなら話は別だ」

というとりエナはレイダーの先端に魔力をためた。

リエナ「ダークネスバスター！」

黒い魔力光が銀時に向かって放たれた。

銀時「ウオオオリアアアアアアアアアア!!!!」

銀時は臆せず木刀でリエナの砲撃をたたき割った。  
砲撃は真つ二つに割れて爆発した。

リエナ「わ、私の砲撃を!？」

銀時「どんな事情があるうが、これ以上血を流させねえよ」

銀時も本気になってくる。

リエナ「クツ！私は引かない！ライナを殺した奴らに復讐するの！  
そのためなら…この命なんていららない！」

覚悟があるように言うリエナ。

だが彼にとってそれはよくないこと。

銀時「…勝手にそう言うんじゃない」

銀時はギリイツと木刀を握りしめる。

銀時「どういう理由があるにしろ、自分の命を粗末テメーにあつかうんじ  
やねえよ」

リエナ「煩い！私はライナのためにイイイイイイい！！！！！！！！」

もはや暴走状態に近い。

リエナは魔力を溜めた。

銀時「…ありやあなのはのスターライトブレイカーに似てやがるな  
…」

銀時は目を細めて言う。

リエナ「ダークネスブレイカーー！！！」

真っ黒な魔砲撃が発射された。

銀時は構えて砲撃を叩き割ろうとした。

???「エツクスカリバー！！」

???「アウァロン全ては遠き理想郷」

と白い光が砲撃をかき消した。

犯人はネプテューヌと彼女を抱てきたビビだった。

ネプテューヌ「胸騒ぎがするなと思ってきたけど案の定だね！」

ビビ「ったくなんで私が…」

ネプテューヌとビビは降り立つ。

リエナ「誰が来ようが私は引かない！」

リエナは悪い状況にもかかわらず魔力弾を繰り出した。

ネプテューヌ「よくわかんないけど止めないと大変なことになるね。」

だったら、ソウルストーン解放！」

ネプテューヌはリリ銀パーティのおまけで手に入れたソウルストーンを発動する。

ネプテューヌ「リロード！シャウトモン！バリスタモン！」

するとソウルストーンから二体の生物が現れる。

あかいトカゲのようで右手に身長より高いマイクを持っている者。

カブトムシの様な角を持った青いロボット。

バリスタモン「ヘビースピーカー！」

バリスタモンの超音波攻撃が魔力弾をすべて撃ち落とした。

銀時「え？なにそのカブトムシロボットとあかいトカゲは？」

シャウトモン「誰がトカゲだ！！俺はシャウトモン！テメーのハートに刻んどきな！！」

シャウトモンが吠える。

銀時「いや、おれは心ハートよりも魂ソウルならいいぜ」

シャウトモン「そうか！ならテメーのソウルにも刻んどきな！」

リエナは魔力弾をうつが、2人はなんなく避けた。

シャウトモン「ソウルクラッシュャー！」

マイクから発する攻撃がリエナに向かうが、魔障壁で防がれた。

リエナ「おろかな」

シャウトモン「へ、残念だったな。それは囷だ」

あざ笑うリエナに笑みを浮かべるシャウトモン。

リエナはそこで気付くが、すでに遅し。

銀時「おりゃあああああああ！！！！」



バギャツ!!

リエナ「ぐああああ!!」

銀時の木刀で一撃を貰った。

シャウトモン「トドメだ!」

リエナ「クツ! (ごめんライナ…私もそっちに…)」

リエナは覚悟を決めて目を閉じた。

???「まって!」

シャウトモン「ぬおお!」

突然あらわれた少女にシャウトモンはギリギリで止まる。

少女は黒のストレートでバリアジャケットは映画なのはVerの黒タイプのような。

だが体が半透明であるが。

ネプテューヌ「あ、幽霊だ」

銀時「霊って言うな!! スタンドだ!!」

銀時は相変わらずスタンドと言い張る。

リエナ「ラ、ライナ? その姿…」

ライナ「えへへ、久しぶりって言った方がいいかな?」

ライナはリエナに向く。

ライナ「私、しんですからずっとお姉ちゃんのこと心配だったの…、

ずっとお姉ちゃんが心配で…」

リエナ「ライナ……」

ライナ「ストーカーされてないかパンツ盗まれてないか犯されてないか初恋してないか親父になつてないかあと……」

リエナ「変な部分まで心配されてるう！！！！？？」

リエナはシャウトした。

ライナ「でもよかった。お姉ちゃんが無事で…」

するとライナが消えかかる。

リエナ「ラ、ライナ!？」

シャウトモン「ありや成仏しようとしてるな」

リエナは驚き、シャウトモンがそれを見て言う。

ライナ「私は死んだ身、心おきなくお姉ちゃんから離れられるかな

…」

リエナ「そんな、せつかく会えたのに…またいなくなるのはいやあ  
！」

リエナはライナにしがみつく。

ライナ「けど本当は……私だってお姉ちゃんと一緒にいたい！」

ライナも抱きつく。

どンドン薄くなつてきているが…。

ネプテューヌ（何とかならないかな…）

ネプテューヌはそう考えていると、ソウルストーンが光り出す。

ネプテューヌ「なにこれ？」

シャウトモン「あ？・・・そういうことか」

ネプテューヌ「なにが？」

シャウトモン「ネプテューヌ、そのソウルストーンを使えばライナを助けられるかもしれねーぜ？」

ネプテューヌやりエナとライナも銀時達も驚いた。

ネプテューヌ「どうやって？」

シャウトモン「ソウルストーンを掲げてみる」

シャウトモンの言う通りにしてソウルストーンを掲げる。ソウルストーンはピカッと光り出し、ライナに当たると見る見るうちに体が実体化した。

ライナ「これは・・・」

シャウトモン「ソウルストーンは古の英霊たちの魂が宿った代物だよ。その中に幾多の英霊たちが宿ってんだぜ？」

ネプテューヌ「英霊？ってことはこんな？」

ネプテューヌはヘラクレスの絵を見せた。

シャウトモン「間違っちゃいないがまあそうだ。なんにしるソウルストーンの一員になったわけだ。自由に出入りもできるぜ」

ライナ「じゃあお姉ちゃんと一緒に？」

ネプテューヌ「そうなるかな？」

というわけで、リエナは復讐心が消え去り、仲間になった（公式上リエナは逮捕されたと表示した）。  
ソウルストーン技『ライナ・レイジングダーク』を手に入れた。

???

デニー「まさか死んだはずの妹が出るなんて予想だな。それにあれも……」

モニターを見てぼやくデニー。

デニー「こりゃどんな天変地異を出すのやら……」

銀八「教えて！」

全員「銀八先生!!!」

隆次「今日のアシスタントは俺だ」

ユリス「その妹のユリスです」

銀八「はいこのシスコンブラコン兄弟が…」

ドガバキドゴベキバキ!

銀八はボロ雑巾になった。

隆次「このアホは放っておくぞ。ではペンネーム『月光閃火』からいくぞ。』ども…月光閃火だ。」

しかし…またてんこ盛りにキャラが増えたな…(汗)。あとイシュタルは後で隅から隅まで愛でよう。

輝刃「…言い様によつては、かなりエロいな…(汗)。あ…質問…行くぞ?まずは俺からだ。」

1・真王に質問…というか要望だ。もっとレジィに活躍を与えてくれ。閃火がレジィの登場を待ち焦がれ過ぎて一回全身が炎を纏ってこんがり煤まみれになったんだ…(汗)。

アハハ…(汗)あの時はホントに熱かった…(苦笑)。次は俺からだ。

2・真王に質問…というか提案だが、管理局の脳みそ達ぶっ倒した後、その脳みそ達が粒子になってレジィの下にやって来て…その粒子が女の娘の姿になってレジィの助手として一緒に暮らす…なんて展開どうかな？

輝刃「なるほど…ある意味、原作崩壊と言えるだろうな…。イメージ的には…『闇統べる王』ロード・ディアーチエみたいな感じか？」

ああ…そのイメージだな…。つつーか、結構『闇統べる王』ロード・ディアーチエは俺の愛で対象ドンピシャだな『では作者にきこう』

真王「レジィはあんま出番ないですし、後断る」

隆次「決定事項かよ！」

真王「うん。『月光閃火』さん、廊下に立ってなさい」

ユリス「続いて、ペンネーム『なめ猫』さんです。『俺』流石ネプテュー又達。勝ってくれましたか」  
のら猫「おめでとうございますー」

ラムザ「それにしても、また仲間がたくさん増えたけど…」  
のら猫「うん、一部以外は絶対モブ脇役と同格になるわな」  
俺「後は、作者が気に入るかどうかによっても変わりますね」

質問

ネプ姉妹へ

人気投票2、3位おめでとう！感想は？



あ、あはははっ………っというか、出して下さったのですね、あの五人

神「だな………天音の描写がぶれてないのがなんともな」

まさかあんな出方をするとは………意外でした

神「だんな」

ミツキ「あゝあ、いいないなあ。リイーンさん、あんな面白いのはに出られて」

イットリ「ホンマやで。お前ばっかり楽しい思いしやがって……羨ましいぞコンチクショウ……！」

若武朗「まあまあ。リイーンさんは色々とお忙しいのですから、これぐらいの骨休めは大目に見て差し上げたらどうです？」

!!!!!!………???

神「うおわっ………？ お、オメエラ、何で来やがった……？」

若武朗「いやいや、何やら面白そうな所ですから、行ってみようぜ。と、イットリさんから誘われまして」

イットリ「せやせや………楽しい事は、みくんなで共有するもんやろが………な、マイハニー・ミツキちゃん………！」

ミツキ「はい　リイーンさんばかり、ズルいです………」



神「いや、俺は、その……………なあ？」

アナタは全面的に出ているので、呼ばれる事が多々あるかと思うのですが……………あなた達は、前回少し顔を出した程度じゃのいですか  
それでこのような場所に出られる訳ないじゃないですか

イットリ「ま、まあ……………」

若武朗「それは確かに……………」

ミツキ「言い返せない……………」

神「……………つかよ、挨拶しろよ」

若武朗「つと、そうですね。私としたことが……………では、ここは順序というわけで、まず最古参組のイットリさんからどうぞ」

イットリ「つと、マジか？ うっしゃ！！ オツス！！ 俺様の名はイットリ。“イットリ・ヴァルティット”様だ！！ 世界を砕く拳の異名を持つナイスガイだ！！ 夜露死苦うツ！！！！」

死語丸出しだな、イットリ……………

神「時代遅れが……………次、若武朗先生。頼むぜ」

若武朗「はい。ええ、初めまして。作者のリーンの前作から参りました。“土手来若武朗”と申します。昔も今も、教師を勤めておりまして、登場人物であるリーンの軍の教官をやらせていただいております」



神「いんや、なんも」

………と、もう結構書きましたし、今回はこの辺で失礼しましよ  
うか

では!! 次回も楽しみにしておりますので、執筆、頑張ってください!!  
失礼します!!!!

神「ばいばい!!」

イットリ&ミツキ「まったね」

若武朗「失礼致します」

さて、質問とがありますか？

神「えつと………特にねえな。お前等は？」

イットリ「んじゃ俺様から。“野郎共に聞く。話の中で、可愛いと思  
う女ベスト10を言ってくれ”。ナンパすっから」

ミツキ「もうイットリさんったら、私が居るのに　あとでお仕置きですね」

イットリ「ちょ、止めてえなあ!!!」　「冗談なのに!!!」

若武朗「冗談でも、妻の前で浮気発言はよくありませんよ」

変わらんなあ、コイツらは……………』ん、ベスト10でいうならどうか？」

- 1：レーティア
- 2：なのは
- 3：フェイト
- 4：サタン・ザ・ハード
- 5：チフユ
- 6：タバネ
- 7：ビビ
- 8：ヴィヴィオ
- 9：リル
- 10：ジャンヌ

真王「な感じだろう」

隆次「…若干あなたの好み人の様な気がする…」『リイン』よ。廊下に立て。次はペンネーム『ケン』からだ。『零斗』うおおオオオオオ!!!おめでとうう女神チーム!!!」

涙を滝のように流して喜んでいた。

ダイチ「どうしたんだよ!!!零斗さん!」

統夜「ネプテューヌ達が優勝したからだよ。ほら・・・黒神さんここではチーム・マイティアテムとして入ったのはいいけど・・・負けたじゃん？」

ダイチ「あゝ・・・そういう事・・・お前・・・真祖と魔人、墮天使のハーフなんだな」

統夜「本編で知るのはい遅いけどね・・・作者曰く『極悪的な強さを誇る』とか言ってたし」

ダイチ「へへ・・・完全化け物レベルじゃないか!」

そう言うな・・・ダイチよ・・・さて質問するか・・・

真王さんへ

好きなガンダムタイプってありますか？

自分はダブルオークアンタとストフリ、ダブルオー、サバーニャ、ハルードですが・・・

ネプテューヌへ

優勝出来て嬉しかったですか？

真撰組へ

貴方達はオカマツチヨハツスルを受けて気持ち良かったですか？是非いい答えを期待していますよ（黒笑）

以上です。

統夜「二位で良かった・・・」

龍華「そうですね。私は本編で出る予定なので・・・」

龍華は本編に出ますので期待？しててください。  
次回も楽しみにしています。』

真王「あっしガンダムは興味ないが、一応知ってる。ダブルオータ  
イプだな」

ネプテューヌ「うん、優勝できてうれしいよ！」

真王「それと彼らそれを思い出してトラウマ完成しちゃってるよ。  
『ケン』さん。廊下に立ってオカマツチヨにきをつけてください」

ユリス「（いやな予感しかしない…）次はペンネーム『鳴神 ソラ』  
さんよ。『マリオ』いや〜なかなかだったな」

ルイージ「ホントだね」

明久「おめでとうございますー！」

フォックス「さて、次はまたシリアスだな」

銀次「そうだね」

アーカード「ふむ・・・」

ネス「オリジナル女神さん達に質問！『内のキャラで興味ある人はいる？』」

ソニック「同じく質問『将来の夢はあるか？』」

リュカ「同じく質問です『ファルコン・ハートについてどう思いますか？』」

次回を待ってます！『じゃあまず順番にね』

チート・ザ・ハード「マリオですね。そしていつでも我が主の傍に赴きますが、彼女など興味ありませんが？」

ゴッド・ザ・ハード「銀次という小僧だ。それとズバリ我が宇宙最強の王となる！！後そいつなど知らん」

サタン・ザ・ハード「ん？冥王ちゃんかな？保育士になるのが夢だし、あの子も大変そうだね」

バーサーク・ザ・ハード「マリオダヨ！ソレニセカイノツヨイヤツヲサガスカラナ！アトソイツハアンマツヨクネエダロ？」

ジヤイアント・ザ・ハード「ソロだ。でっかい相手になれるからな。将来は……あんま決まってるないな。そいつはそいつの問題だろ？」

エレメント・ザ・ハード「アーカードさん。将来世界博士になるんだ。ご愁傷様です」

ドラゴン・ザ・ハード「興味ないな」

マッハ・ザ・ハード「ハリネズミのソニックだぜ？何時が大次元を突破できるようになりたいんだ！後そいつは知らん」

ファントム・ザ・ハード「ルイージホロ。時に決まってるホロ。あとその子かわいそうホロ？」

クイーン・ザ・ハード「アーカードね。私は女王様となるの！そしてあなたもその下僕に……」

バグ・ザ・ハード「オリマー、特に、ない、そいつ、知らない」

ナース・ザ・ハード「ピーチさんです。保育士になろうと思いますです」

シャドウ・ザ・ハード「……（フルフル）」

サムライ・ザ・ハード「ソニックかな？別に何も考えてねえよ。それと知らん」

ロリータ・ザ・ハード「ん？よく分かんないや」

ソニック・ザ・ハード「ぼくはプリンかな？世界歌手になることでご愁傷様です」

マゾチック・ザ・ハード「私アーカード、とくにないけどやられたい気分」

プラント・ザ・ハード「オリマー、花屋さん経営。どうでもいい」

エッチ・ザ・ハード「ピット君かな？主様にみをささげることです」



鳥女はどうでもいい」

ビースト・ザ・ハード「アイクだ。とくにないな。鳥を食うか」

真王「何気にファルコに対してひどいな。『鳴神ソラ』さん。廊下に立ってなさい」

ユリス「次です。ペンネーム『支配者』さん。『ネプテューヌチームの優勝ですか。おめでとうございます。』

またずいぶんとキャラが増えましたな……。またチートキャラでしょうか……。私も多いですけど、こっちは桁違いですな……。

質問です。

銀さんに質問。

1、

一番好きな女性は誰ですか？

2、もう脇役でよくありませんか？全然目立たなくなってきたし

神楽に質問

女神の中で”みつチャンミチミチゲロ吐いた”のギャグが一番似合  
うのは誰だと思いますか？

では「『」

銀時「いや決められねえよそんなもん。それから俺は不動の主人公だこの野郎!!」

神楽「ブランアル」

ブラン「よし死ねあばずれ」

真王「俺は知らんぞ。』支配者』さん、廊下に立ってなさい」

隆次「つぎは・・・ユリアというやつだな。じゃあな」

第百八訓：恨みを持つものはたいてい何か関わっている（後書き）

真王「今回はレオンとガレーナの同僚と師匠と会うことだ」

ユリス「次回『弟子が最強なら師匠は無敵』テイクオフです」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7600p/>

---

リリカル銀魂 Strikers ~ 銀女神鎮魂歌 ~

2011年10月28日07時20分発行